東方煩悩漢

タナボルタ

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

朝目覚めた八雲紫は体の不調を訴える。薬を求めて永遠亭に赴くのだが、それが後の悲劇（笑）の始まりだとは誰も気付くことが出来なかった……。

※１２月１１日にＲ―１５タグを追加しました。

※４月９日に残酷な描写タグを追加しました。

目次

プロローグ ―― 1
第一話『やはり俺の守備範囲は下がってきている』 ―― 29
第二話『横島君、踏んだり蹴ったり』 54
第三話『長かった一日が終わって』 70
第四話『幻想になった横島』 ―― 90
第五話『二つの不安と二つの恐怖』 118
第六話『おいでませ紅魔館』 ―― 147
第七話『横島君のお仕事――見習い執事編――』 ―― 176
第八話『宴会の準備――千里を走る、厄介な噂――』 ―― 202
第九話『紅魔館での宴会』 ―― 225
第十話『宴会終わって夜も更けて』 257
番外編・前編 ―― 303
番外編・中編 ―― 325
番外編・後編 ―― 344
第十一話『新しい日々の始まり』 378
第十二話『妹様と雨』 ―― 403
第十三話『フランちゃんと晴れ』

第十四話『世界の意思』――――424
第十五話『満月の夜』――――480
第十六話『小悪魔のドキドキデート』515
第十七話『贈り物』――――550
第十八話『組み手・横島対美鈴』600
第十九話『俺はロリコンじゃない』623
第二十話『きっと空を飛べるはず。多分。恐らく。』――――662
番外編――――716
第二十一話『横島、新たな目覚め……？』――――740
第二十二話『高島』――――770
第二十三話『必死な理由』――――800
第二十四話『慧音先生の家庭訪問』838
第二十五話『お前は、永遠の命を欲しいと思うか？』――――873
第二十六話『ココロの形』――――905
第二十七話『吸血』――――941
第二十八話『思い立ったが吉日』973
第二十九話『裏目』――――994

第三十話『永琳と高島』――――1052
第三十一話『兇気、襲来』――――1027
第三十二話『一人の人間の終わり』1073
第三十三話『横島忠夫は証明したい』1105
第三十四話『剣と拳』――――1132
第三十五話『いつかまた、竹林の中で』1165
第三十六話『ありがとう』――――1193
第三十七話『ミーハー恋心』――――1231
第三十八話『青天の霹靂』――――1249
第三十九話『はたては彼のファン』1272
第四十話『傍にいてほしい』――――1290
第四十一話『彼女の想い』――――1313
第四十二話『想いを伝えるために』1332
第四十三話『月明かりに照らされて』1352
第四十四話『お礼とお詫びを』――1376
第四十五話『見つけた』――――1391
第四十六話――――1412
第四十七話――――1431
第四十八話――――1450
第四十九話――――1465

第五十話 489
第五十一話 1506
第五十二話 1521
第五十三話 1537
第五十四話 1562
第五十五話 1583
第五十六話 1597
第五十七話 1624
第五十八話 1637
第五十九話 1670
第六十話 1689
第六十一話 1708
第六十二話 1731
第六十三話 1753
第六十四話 1778
第六十五話 1782
第六十六話 1842
第六十七話 1861
第六十八話 1886
第六十九話 1919
第七十話 1953
第七十一話 1984
第七十二話 2018
第七十三話 2049
第七十四話 2075
第七十五話 2103

第七十六話 ――― 243
第七十七話 ――― 123
第七十八話 ――― 97
第七十九話 ――― 236
第八十話 ――― 523
第八十一話 ――― 252
第八十二話 ――― 302
第八十三話 ――― 227
第八十四話 ――― 225
第八十五話 ――― 522
第八十六話 ――― 382
第八十七話 ――― 221
第八十八話 ――― 220
第八十九話『目的』 ――― 421
第九十話『それはとても我が儘で、利己的で、自己中心的で、残酷で、醜悪で、最低で、最悪な』 ――― 532
第九十一話『男の子なら』 ――― 128
2466
25102481

プロローグ

そこは少し奇妙な部屋だった。

部屋の広さは畳十畳程。部屋の中央には天井から吊された蚊帳。隅には和箪笥に押し入れ、枕元には行灯。そこは、今現在の若者からすれば如何にも古臭い、もっと言えば奇妙な部屋と断じられるだろう。

そこには電灯も無い。エアコンも無い。テレビも無ければラジオも無い。いや、そもそも電気すらこの部屋……この家には通っていないのだ。

今を生きる恵まれた若者には何も無いように色褪せて写り、遥か半世紀以上も昔から生きるご老人には……懐かしい思い出の日々が如く輝いて見えるかも知れない。

そんな部屋の中央に鎮座する蚊帳の中からうっすらと透けて見える、人一人分の膨らみを持った、いかにも上等な生地が使われているであろう布団が見える。

その布団にくるまっている人物は、もそもそと動き、安眠を約束するであろうその柔らかな布団からは想像も出来ないような苦しげな寝相である。

一体何度目の寝返りであろうか？　苦しげに魘されていた人物がついに目を覚ます。

その日の目覚めは最悪だった。

何やら体が嫌に重く、頭がズクズクと鈍痛を訴えかけてくる。
寝過ぎか？　はたまた風邪を引いたのだろうか。とにかく体調は絶賛大不調のようだ。
何やら目の下にくっきりと隈が現れ、その美しい容姿に影を差している。
だが、美しいとは言っても、それは成熟した女性の物ではない。未だ幼さを残す、十代前半の少女特有のあどけなさを含んだ物だ。普段はその年齢からかけ離れた見た目の幼さと、それからは想像も付かないような立ち居振る舞いからある種のカリスマ性を発揮しているのだが……今の健康状態ではそれも難しいようだ。

「……まさか、妖怪である私がここまで弱るなんて……」
彼女の口からぽつりと言葉が零れる。如何にも可愛らしく、またとても落ち着いたような響きを讃えているが、些かならず疲れたような声音となっている。
しかし、その零れた言葉の中に、聞き逃せない単語があった。
『妖怪』
それが彼女の種族だ。人間よりも遥かに強く、人間よりも遥かに長命で、人間よりも遥かに自由な存在。
彼女はその妖怪の中でも、飛び抜けて強大な力を有する存在。万能とも言える能力を

持ち、幾千もの年月を生きたが故の莫大な知識を誇り、強力な式を擁する『妖怪の賢者』

――八雲紫。

それが、彼女の名前。

紫は今、迷いの竹林の奥にある『永遠亭』という屋敷に来ている。

自らの体調不良に効く薬を求めてのことであるが、用事はそれだけではない。

――昨日の記憶が全く無いのだ。

何をしていたのか思い出そうとすると、ただでさえズクズクと響く頭痛が、更に激しいビートを刻みだす。まるで忌まわしい何かを思い出させまいとするかのように。

また、自分の式もそうだ。体調不良のこと、昨日のこと。それらを尋ねても痛ましげに目を逸らすか、「……大丈夫です。何もありませんでしたよ、何も……」と、意味ありげに呟くのだ。気にするなと言う方が無理というものである。

紫の式は『八雲藍』という九尾の狐であり、紫とはある程度の記憶の互換が出来る。なので紫は藍から記憶を得ようとしたのだが……そこで頭痛が激しくなり、頭を抱え込んでしまうまでになった。

それを見た藍はやはり、等と呟いていたが、紫にはさっぱりと分からない。

とにもかくにもまずは体調を万全にするべく永遠亭に向かうように勧めたのが、他な

らぬ藍なのだ。
　確かに頭痛も我慢の限界が近いし、もしかしたら永遠亭の主達は昨日の自分が何をしていたかを知っているかもしれない。
　いや、知っているのだろう。肝心なことは全く思い出せないが、それは確信を持って言える。
　痛む頭を押さえつつ、自らの能力、『境界を操る程度の能力』を以て、自宅から永遠亭の前までの空間を繋ぐ穴を開く。
　それは『スキマ』と呼ばれる、境界を操る八雲紫の基本的な移動手段だ。
　そのスキマは禍々しい雰囲気を放ち、そこから覗く物はギョロリと開いた夥しい数の目。視線は一定せず、絶えず瞳を揺らめかせている。
　ただでさえ禍々しいというのにそんな物まで見えているとなれば、自らの正気値がゴリゴリと削られるのであろうが、紫は何ら憚ることなく悠々とそのスキマに『飲み込まれて』いく。
　視覚的にはかなりのショッキングなシーンであるが。しかしこれは紫自身の能力だ、自らの毒で死ぬ生物がいないように、紫もまた自らの能力で自滅することはない。
　紫がスキマに入り、ほんの瞬きの時間の後。紫は永遠亭の前に居た。
　本来ならば『迷いの竹林』と呼ばれる鬱蒼とした竹林を抜けなければ辿り着けないの

だが、彼女の前ではそれは何の意味も為さない。

スキマとスキマを繋ぎ、いかなる距離をも無とすることができ、更にはありとあらゆる応用も可能な能力。つくづく反則じみた能力と言える。

そうやって辿り着いた永遠亭だが、あまり人の気配がしない。いつもならば部屋に引き籠もりがちな月のお姫様や、人に悪戯をしかける兎さん、その兎に翻弄されつつ薬師としての研鑽を積む少し不憫な兎さんやらが居るのだが……どうやら居ないようだ。

変わりに感じるのはたった一つの気配だけ。

永遠亭へとやって来た目的を果たせる相手の気配。

その相手も紫の気配を察したのか、紫が永遠亭に入る前にその姿を現した。

「珍しい……とまではいかないまでも、あまり顔を見せない貴女が来たということはよほど昨日のことが堪えたようね？　――八雲紫」

その者もまた、少女であった。

銀の長髪を三つ編みでまとめ、正面から中心に左右で色の別れた服を纏った、声音に深い理知と底知れぬ器を秘めた少女――

――彼女の名は、『八意永琳』という。

大空に座する月より来る賢人、『月の頭脳』と呼ばれる、真に永遠を生きる蓬莱人――

それが彼女だ。

「……やっぱり貴女は昨日私に何があったのか知っているのね？」
「何があったか……？　――なるほど、そういうことね……」
紫の台詞に違和感を覚えた永琳ではあったが、真相には簡単にたどり着けた。余りにも忌まわしい事件だったので記憶から追い出したのだろう。実際、紫は頭痛を抑える様にこめかみに指を当てている。紫の防衛本能……否、『乙女心』が思い出させまいと必死に抗っているのだろう。
「大体は理解したわ。それでどうしたいの？　思い出したいの？　それは貴女にとっては本当に、本っっっっっ当に思い出したくない記憶のはずよ？　それでも知りたいの？　貴女に永久に消えないトラウマを刻むことになるわよ？　それでも良いの？」
「……そこまでのモノなの……？」
何だか物凄い憐れみを湛えた瞳で矢継ぎ早に繰り出される質問に紫は思わず気勢を殺がれる。冷や汗混じりに返した問いには、真剣な表情で頷かれてしまった。
普段の紫ならばそんな程度で諦める筈もなく、相手を自らのペースに巻き込みながら解答を得るのだろうが、今は駄目だ。だって頭痛が酷いのだもの。永琳に何があったのかを聞こうとすると更に酷くなるのだもの。何となく吐き気を催すのだもの。何故だか涙も溢れそうになっているのだもの。……女の子だもの。
「……やめて……おくわ……」

ようやく絞り出せた声は、何だかとっても掠れていた。
「賢明な判断ね。……それはともかく、いつまでもこんな所で話しておくわけにもいかないわ。紫の体調はかなり悪いみたいだし、中に入りましょう。診察料は只にしてあげるわ」
「申し訳ないわね……」
永琳に促され永遠亭の診察室に向かう紫は、自らがらしくないと思える程に弱気になっていることを自覚していた。だが、今はそうすることでしか自己を保てないような気がするので、紫は深く考えないようにした。……頭痛が酷くなるからだ。
「さて、軽く診てみたけど原因はやっぱり心因性のものね。難しいだろうけど、なるべく思い出そうとしなければ特に問題はないわ」
「確かに難しいけど……ま、何とかやってみるわ。……気休めに栄養剤か何か貰えないかしら？　せっかく只なんだし」
「貴女ねぇ……。ん～……まぁ、いいわ。ちょっと待ってて」
診察から十数分後、原因を特定した永琳に少しだけいつもの調子を取り戻した紫は多少おどけた様子で薬を所望する。それに対して永琳は苦笑気味だったが、元より永琳に異存は無く、診察室にある棚から妖怪用の栄養剤を探す。
――それが、異世界の住人を巻き込んだ悲劇（笑）の始まりを告げるとも知らずに――

―

永琳が棚を物色すること十数秒、目的の物を探し当てた彼女はそれを紫へと手渡した。それはどこにでもある掌に収まる程度の大きさのビンに入った、透明な液体だった。ビンにはラベルが張ってあり、そこには『超力招来！　エイヨウザイ!!』と、かなりの達筆で書かれていた。ちなみに永琳の直筆である。

「へぇ、貴方のことだから、もっとこう……虹色をした粘性の高い、異臭を放つ危険薬品を持って（盛って）くるかと思ったけど――案外まともね」

「何ならお望みの物を用意しようかしら？」

さらりと毒づく紫に対し、永琳は必要以上に爽やかかつ大変な迫力を内包する笑みで言葉を返す。紫もだんだんと調子が戻ってきたようで、永琳としては微笑むべきか舌打ちをするべきか……。

永琳をそんな複雑な感情が支配する中、紫はビンの蓋を開け、中身を一気に喉に流し込んだ。

――それが、崩壊の始まりであった――

ここは古来より極東の島国、日本の何処かにある結界に覆われた土地、『幻想郷』――。

幻想郷の東の果てにある山。その頂に存在する神社、『博麗神社』の境内に、数多くの人影が見えた。否、それは人影と言うには余りにも異形であった。頭に大きな角を有する者。兎の耳を有する者。昆虫の触角を有する者。蝙蝠のような羽を有する者。宝石を散りばめたような羽を有する者。背中に氷の結晶を広げる者。傍らに半霊を浮かべる者。人形に話しかけている者。ごん太な注連縄を背負う者。鳴き声が『ちん○ん』の者。全身を白黒で包む者。惜しげもなく自らの脇を露出する者達など、バリエーションには事欠かない。

それは人間である。それは幽霊である。それは妖精である。それは妖怪である。それは悪魔である。それは神である――

――あらゆる種族が入り混じる、ここは不思議な土地『幻想郷』――

多くの者が集い、笑い合い、美味い飯を食い、美味い酒に酔う。それは宴会だ。ここ博麗神社で今現在行われているのもそうだ。だというのに、その場の雰囲気は異様であった。何か妙に湿っぽく、常なら辺りに響き渡る狂騒も鳴りを潜め、聞こえてくるの

は静かに酒を呷る音と、食物を咀嚼する音。それはまるで通夜の様な雰囲気といったところか。そんな場の空気に、紅白の脇を露出する特徴的な巫女服を着た少女は溜め息を吐いた。

「うっとーしい空気ねぇ……。これじゃ宴会になんないじゃない」

そう言って熱い緑茶を一啜りする彼女の名は博麗霊夢。この博麗神社を取り仕切る『博麗の巫女』だ。幻想郷に異変が起これば面倒臭がりながらも文字通り飛んでいき、これを解決する。そんな素敵な巫女さんも現在の空気を解決するのは難しいようだ。

「そう言うなって霊夢。お前だって皆のことは言えないだろ？」

「あー？　それはどーいう意味よ魔理沙」

不機嫌な霊夢に声を掛けたのは霊夢の友人で、白と黒の衣服に身を包んだ、如何にも『普通の魔法使い』霧雨魔理沙。彼女も霊夢同様、幻想郷に異変が起これば好奇心を満たすために首を突っ込み、そのついでに解決する。この場の雰囲気が異変と言えば異変だが、進んで解決する気はないようだ。寧ろ、彼女自身も皆と同じような気配を漂わせている。

「昨日の異変……。これだけでも翌日に宴会開くってのは結構キツいはずだぜ？　さらに皆はスキマの『アレ』を見ちまったんだ。こんな雰囲気になるのも仕方ねーって……。

――特にお前は原因の一つでもあるからな、霊夢」

「む……」

思わず口を噤み、魔理沙から目を逸らしてしまう。そう、霊夢が不機嫌な一番の理由。それは、他でもない自分が紫に対して行ってしまったことにまつわる後悔の念だ。それは決して故意ではないし、歴とした偶然なのだが、流石にそれだけで済ませる程に霊夢は薄情ではなかった。まだ成熟していないとはいえ、彼女もまた『乙女』であるのだから。

それに何より――

「何だかんだ言っても、お前と紫の奴は仲が良いからなぁ。あいつが居ないのが気に入らないんだろ。……普段は宴会に誘ってないみたいだけど」

「……！」

最後の言葉は聞こえなかったようだが、魔理沙の言葉は図星であった。今回の異変で紫にしてしまったこと。それを謝りたくて、普段宴会に呼ばない紫を連れてくるように紫の式である藍に頼んだのだが……彼女らは一向に姿を現さなかった。今この場に紫が居れば、ちゃんと彼女に謝り、茶化し、紫に弄られ暗い雰囲気も一掃出来たのかも知れないが、居ないのではどうしようもない。霊夢の機嫌は悪くなり、宴会の雰囲気も悪くなる。さながら負のスパイラルだ。

それを認めたくはなかったのか、霊夢は反論をしようとするが上手く言葉が出て来な

い。若干の苛立ちと後ろめたさ。そして照れが混ざり合ったせいであろう。
　そんなふうにまごついていると、空から霊夢達に声が掛かった。
「すまない、遅くなった」
「……藍？　『橙』（ちぇん）も一緒みたいだけど紫はどうしたのよ」
　上空から現れたのは九尾の狐にして八雲紫の『式』八雲藍と、藍の『式』である橙。その二人に皆も気付いたのか、周りが藍達に注目する。紫を伴っていない二人が珍しく、皆を代表して霊夢は疑問を問いただし、そして返ってきたのは予想外な言葉だった。
「ああ、紫様は来られない」
「……は？　それってやっぱりその～……怒ってる……？」
　流石の霊夢もばつが悪そうに目を泳がせて問うが、その表情を見た藍は微苦笑を浮かべる。
「いや、怒っていない。というより――怒ることは『絶対にない』だろうな」
「それは、どういう……？」
　溜め息と共に吐き出された言葉に、霊夢は問いを返すしか出来ない。頭の上には先程からクエスチョンマークが浮かんでばかりだ。そんな霊夢に対して藍は表情を改めると、ついに結論を語り出す。
「ああ、つまりだ。紫様は――覚えていないんだ。異変を含め、昨日一日の記憶を全

て、な」

「……。……？　覚えて、ない？」

　霊夢の疑問はもはや限界に近付いているようだ。首を傾げて目をまん丸と開き、口は半開き。出て来る言葉は気の抜けたような音。藍はそれにゆっくりと頷き、橙の頭を優しく撫でる。彼女の目に涙が溜まっていたからだ。

「ああ。紫様は昨日の記憶がない。今朝目覚めるのも、いつもよりずっと遅かった。それに目元には隈があり、頬も多少痩けていたように見える。更には酷い頭痛もあったようで、昨日のことを思い出そうとすると更に激しくなっていたようだった！　紫様には永遠亭に行くように勧めたが、やはり私も着いていけばよかったのだろうか!?　あぁぁああ、こんなことで紫様の美貌が霞んでしまうなんてえええ!!」

「ぐふぅっ」

「ら、藍しゃまあああああ!!」

「ちぇえええええん!!」

　紫の状況の説明のはずが、どうやら徐々にエキサイトしてきてしまったようだ。尻上がりに跳ね上がっていく勢いと悪意無き言葉のナイフは容赦なく霊夢の良心を刻んでゆく。それは霊夢も思わずよろめいてしまい、ＯＨ　ＮＯと懊悩して橙と泣き叫び合う藍に突っ込みを入れられない程であった。

「あのー、それで何故紫さんは昨日のことを覚えてないんでしょう……？」

　周りの者も目を覆うような光景に割って入ったのは、霊夢と対を成すような緑と白の脇を露出する巫女服に身を包んだ少女。昨日の異変で藍達と共に戦った者であり、その名は東風谷早苗。種族としては人間だが、半分は『新人の神様』である。一通り叫んだことで落ち着きを取り戻したのか、藍は咳払いしながらも推測混じりの理由を話す。

「ごほん。あー、つまりあれだ。昨日の異変はあれだっただろ？　な、その――ゴキ○リの『超』大量発生だっただろ？」

「ああ……そうですねぇ……」

「なんせ目の前の光景が山が二分にゴ○ブリ八分

　だったからなぁ……」

　異変を思い出し顔をしかめる早苗達。橙にいたってはそれを鮮明に思い出してしまったのか、口を押さえて吐きそうになっている。

「普段自分に弱点はないと公言して憚らない紫様の唯一絶対の弱点……。それが『○キブリ』だ。紫様は普段名前を呼ぶのも聞くのも穢らわしいと言って『這い寄る混沌』と呼んでいるからな。私もこの通りゴキブ○と口に出すときは検閲されてしまっている」

「急にメタいことを言い出したな……」

「屋敷で一匹見かけただけでも失神してしまいかねないというのに、昨日のあの量……。

更には『アレ』だ。紫様の乙女心が思い出すのを拒絶したのだろう……」

藍は遠くの空を見ながら涙を滲ませる。そんな彼女の姿に皆は倣い、同じように空を見る。それはさながら黙祷を捧げているようにも見えた。

「うっぷ……。思い出したら吐き気が……」

早苗や他の何人かが多少吐き気を催したようだ。この場に居るのは皆乙女。紫に同情の念を抱くのは当然だった。そんな中、霊夢は更に気落ちしたのか膝を抱えて座り込んでしまっており、何故か肩にはキノコが生えているような錯覚を覚える。今にも泣いてしまいそうな彼女を見た藍は霊夢の頭をそっと撫でる。

「なに、紫様は体調を崩されてはいるが、それがお前のせいなどとは思わないだろう。勿論私達も、この場の皆もそうは思っていない」

「でも……」

「紫様は何もかも忘れているんだ。お前が紫様にそんな態度を見せていたら、アレを思い出させてしまうかも知れない。だからお前が紫様に会ったら、何時ものように応対するんだな。……それが一番紫様のためになるはずだ」

頭から抹消してしまう程に忌まわしい記憶ならば、完全に忘れ去ってしまった方が良い。その方が建設的に生きられるし、何より霊夢にも良いだろう。それは詭弁かもしれないが、いつまでも忘れ去られたことで悩み続けるよりはマシなのかもしれない。藍の

励ましは霊夢にも届いたのか、彼女の口は少しばかり苦笑じみた形をとっていた。ちなみに魔理沙は後ろで「どーせ私は悪者だぜ……」と若干落ち込んでいた。藍の言葉に先程の霊夢への失言を思い出したのだ。

「……ん。とりあえず今度会ったらお酒でも振る舞うことにするわ」

「ふふっ。それは紫様も喜ぶだろうな」

辺りを和やかな空気が包みだす。ようやくに宴の空気が生まれたかと思えたのだが……

――それは、唐突にやって来た――

「……っ!?　な、何よ……これ……っ」

「んな……!!」

突如幻想郷全域に降りかかる不可視の強大な圧力。その威力は凄まじく、力の弱い妖精などは地面に叩きつけられ、他の人間や妖怪達もその場に縫い付けられてしまう。そして、自らに降りかかるその力の性質を理解する者が数名存在した。

「この……感覚は……妖気……!?　しかもこれは……!!」

圧倒的な妖気の圧力の最中、地に膝を付けず、未だその足で立つ事が出来ている者は

少ない。その者達の中でも、妖気の質に気付くことが出来たのは更に少ない。即ち、『友人』と『式』である。

「これは紫の妖気……！　でも、こんなのは異常だよ……っ」

紫の友人である『鬼』伊吹萃香は戦慄する。現在紫が発する妖気は自分なぞ歯牙にも掛けない程だ。余りの強大さに紫の式である藍は、供給される妖力の余りの量に胸を押さえてうずくまり、橙に至っては突然の圧力に耐えきれず気を失っている。また、もう一人の友人の西行寺幽々子は妖気にあてられた魂魄妖夢を支えている。その表情は紫に起こった異変に困惑し、動揺に染まっている。周りを見渡すと、藍が橙を胸に抱きながらとある方角を見ていた。

「紫様……っ。永遠亭で、一体何が……！」

その言葉に皆は藍が睨む方角を見る。すると、この距離から分かる程の光が、地から天へと向かって伸びている。

「おいおい、お前んとこの薬師はスキマ妖怪に何をしたんだよ輝夜ぁ!!」

「し、知らないわよそんなの!?」

「というか、あんなのが永遠亭で起こっているならお師匠様も危ないんじゃ……!!」

博麗神社を焦燥と混乱が包む。そんな中、霊夢の脳裏に博麗の巫女としての勘に触れるモノが過ぎる。その感覚に従うままに上空を見上げ、それを見た。

「ちょ、ちょっと……っ。嘘でしょ……!!」

　霊夢はそれを見た。博麗神社を起点とする、幻想郷を包む『博麗大結界』に生じる無数の罅を。

「れれれ霊夢さん、これはかなりまずいんじゃないですかこれ!!?」

　早苗は最早涙ぐみながら霊夢にしがみつく。このままでは幻想郷というモノが崩壊してしまう。そんな最悪な未来をつい想像してしまった霊夢はブンブンと頭を降り、現在この場に居る全員に声を掛ける。

「私は今から大結界を維持するのに全力を傾けるわ！　でも、この妖気が充満する状態じゃ私一人の力では無理がありすぎる……！　そんな訳で皆の力を貸してちょうだい!!　ちなみに拒否権はないし抵抗したらあとで身包み剥いだ後夢想天生喰らわせるんで、そこんとこよろしく!!」

　皆は霊夢の言葉に否やはなく、どこからかお祓い棒を取り出した霊夢に自らの力を注ぐ。霊夢は自らに集まる巨大な力を一つに束ね、結界を維持するために放出していく。それは現在の霊夢には荷が重い物だったのだが、霊夢以外にそんなことが出来るのは紫しか居らず、そもそも紫が原因なので結局は霊夢がやるしかない。

「ああーもう!!　後で覚えてなさいよ紫ーーー!!」

博麗神社の境内に、切羽詰まった霊夢の叫びが木霊した。

――崩壊。

それはいずれ訪れる結末。形ある物の運命と言ってもいい。中には例外もあるが、それは森羅万象全ての物に必ず訪れる。

今回崩壊するモノは一体何か。それは、博麗大結界か？　答えは否。結界は霊夢が無茶を承知で維持している。では幻想郷そのものか？　当然否だ。結界が壊れていない限り、幻想郷が壊れることは有り得ない。

では、一体何が崩壊したというのか。それは、実は形がある物ではなかったのだ。

そう、それは――。

「FOOOOOOOOOOOOOOOOOOOOOOOOOO!!!!!」

八雲紫というキャラクターの、大崩壊であった……。

「る？」

始めに出て来たのはそんな意味のない単語であった。月の頭脳たる八意永琳は考える。紫は一体何がどうなってこんなことになってしまったのか。紫から立ち上る妖気はまるで炎の柱のように永遠亭の屋根をぶち破り、周りに拡散する妖気は診察室を容易く崩壊させた。永琳などは何故か一切体勢を動かさず、まるでスライドするかのように壁に叩きつけられ……というかめり込んでいる。

「あぁぁぁぁあはははははははっ!!!　力が、力が、力がみみみみ漲るるるるるるぜぁぁぁぁぁぁぁ!!!　るるるるぇぇえいむううう！　れぇぇぇぇいいいいいむううううう!!!」

最早キャラクターがどうという問題ではない位に紫は壊れてきている。目は血走り呂律も回っていないし息は荒い。何故こうなった？　永琳は考える。自分が処方した栄養剤がおかしかったのか？　そんなはずはない。確かに紫に渡した栄養剤は妖怪用ではあるが、流石にこんな風な結果を呼び込むほど強力（狂力？）ではない。ならば一体何故……？

「……ん？」

気付けば顔のすぐ横に栄養剤のビンが突き刺さっている。こんなに頑丈なはずはないのだが……。永琳はめり込んだ壁から抜け出し、ビンを壁から引き抜く。ビンを見た永琳は「超力招来の文字がまずかったかしら……？」と中々にズレた感想を抱くが、ビンに張られたラベルに違和感を覚える。

「……ラベルが……二重に……？」

嫌な予感しかしない。永琳は未だかつてここまでの嫌な予感は終ぞ感じたことはなかった。それでも勇気を振り絞り、重なっているラベルの上を剥がすと……

『かかったな鈴仙（アホ）がっ!!　これは超超超強力な妖怪用精力剤ウサ！　一口飲むだけで爺さん妖怪もヌカロクは固いウサよ!!』

という文字が白地のラベルに書かれていた。それは悪戯好きな兎さんの筆跡と一致している……。永琳はしばらくそれを眺めていたが、やがて心静かに決心する。

（てゐが帰ってきたら……殺そう）

「うひぃっ!?」
「ちょっ、急にどうしたのよてゐ?」
「い、いや、何か急に背骨に直接液体窒素を流し込まれたみたいな寒気が……」
「なによそのおぞましい感覚!?」
「う〜〜。鈴仙、何か嫌な予感がするウサ……」
「嫌な予感って……っていうか動揺のあまり語尾がウサになってるわよ……」
この後、だべっていたので霊夢に滅茶苦茶怒られた。

永琳は考える。精力剤ということは本来なら紫は今それはもうたぎっているはずだ。だが、今の紫はそんな風には見えない。強すぎる薬は毒と同義であり、最早あれは完全に劇薬と言っても過言ではないだろう。ではそれを飲んで狂ってしまったのだろうか。というか何故妖力が爆発的に増大しているのか……。月の頭脳たる永琳は確信を持って真相を語る。
「毒が裏返った。それだけは確かなようね。強力過ぎる陽の薬と僅かばかりの陰の毒素に紫の体内の何か……。精力剤を飲んだことによって脳から分泌された脳内麻薬か……あるいは、普段抑えつけている霊夢への慕情が叶うであろう力を得たことによって

もたらされた多幸感。そしてその昂ぶりから形造られてしまった化学物質か……。あるいはそれら全てが紫の内部で出会ってしまい、化学反応を起こしスパーク……」

月の頭脳は錯乱している。まともな思考も出来ぬまま無意味な考えを脳内で巡らせていると、突然『パンッ』という軽い音が響いた。視線を紫に合わせてみると紫のこめかみ辺りから『紫汁ブッシャアアアア!!』と言わんばかりに血が噴き出し、間もなくパタリと床に倒れ伏した。

「――――……。はっ！　ち、ちょっと紫、大丈夫!?」

余りに混沌とした状況に思わず呆けてしまっていた永琳だが、正気を取り戻してからの処置は迅速だった。紫に応急の手当を施し、被害の少なかった部屋へ担いでいき、そこで本格的な治療を開始。血圧の急激な上昇に血管が耐えきれなかったようだが、幸いにも紫は無駄に強靭な肉体を持っていたし、永琳の無駄によく効く薬のお陰で、ものの数分で体は癒えた。

永琳は額の汗を拭い、重い息を吐く。これからのことを考えると頭が痛くなる。崩壊した永遠亭の片付け、紫の看病に何が起こったのかの説明。気が重くなるのは当然だ。とにもかくにも永琳はまずは気持ちを切り替え、てゐのお仕置き用の拷問器具を取りに行った。

「ま、これで一件落着よね」

そんな呟きを残した永琳は気付いていない。紫が無意識の内に蒔いた、悲劇（笑）の種に――――。

「はあ……っ、はあ……っ、はあ……っ――――。な、何とか……維持出来た……」

神社の境内で荒い息を吐く霊夢は、博麗大結界を何とか維持出来たことに安堵の表情を見せる。

「ああーーーっ！　もうべらぼうに疲れたわよこんちくしょーーーっ!!」

そう叫びながらも彼女は石畳に倒れ込む。心身共にボロボロだが、疲労と共に多少ながら充足感と罪悪感をも得ていた。結界が崩壊寸前までになり、それを維持するなど初めてのことだった。しかも、現在の自分の力量を超える作業をやり切れたのは、霊夢の自信にも繋がった。故に霊夢は思う。

（前に紫を呼び出す為に結界を弛めようとしたけど、こんな面倒臭いことになんのねー……。そりゃこっぴどく叱られるわけだわ）

未だ博麗の巫女としての自覚と責任は薄いようだが、今回の幻想郷の危機は霊夢の成長には繋がっただろう。周りを見渡せば、他の皆も力を限界近くまで使用したためにへたり込んでいる。くたくたに疲労し境内の石畳に寝転がる霊夢に、橙を抱えた藍が多少

ふらつきながらも話し掛けて来た。

「助かったよ、霊夢。紫様に何らかの異変が起こったようだから、私は気絶した橙を幽々子様に預けて永遠亭に向かう。ちゃんとした礼はまた後日にな」

「あー、気にしなくていいわよ別に。っていうか大丈夫なの？　あんたふらついてるけど……」

「なに、この位大したことは……!?」

藍は言葉を切り頭上を見上げる。霊夢もそれにつられ藍の視線を追うと、上空には紫のスキマがその姿を現していた。

「紫が来たの……？　それともまだなんかあんの……？」

更なる騒動の予感に逃げ出したくなる霊夢だが、スキマが開いてから時間が経っても、一向に何も起こらない。

「……？」

思わず藍や他の皆達と目を見合わせてしまう霊夢は、スキマを覗き込んで見る。すると、何やらスキマにいつも浮かんで見える目が、異様に血走っているように思える。しかも何だか全ての目が自分を見ているような……？

「うへぇ……。な、何よ……、やろうっての？　自慢じゃないけど私はもう動けないわよ!?」

スキマに対し、何か妙な啖呵と構えを見せる霊夢に場の雰囲気が軽くなるが、藍はとりあえずは危険はないと判断し、霊夢の手を取り立ち上がらせる。
「とにかくそこからは離れよう。このスキマも気にはなるが、まずは紫様の元に向かわなければ……。疲労困憊とはいえ、これだけの面子が居ればまた何かあっても大丈夫だとは思うが……」

「あー、そうね。今はとにかくお茶を飲みたい……」
その場を離れる霊夢達はへたり込んでいる魔理沙達の元へと向かう。橙を幽々子に預けた藍は永遠亭に飛び立とうと空を見上げる。だが、次の瞬間――

チュドガゴドゴンズガシャアアアアアン!!!

という何とも珍奇な轟音を立て、スキマから飛び出した何かが石畳へと突き刺さった。その衝撃は凄まじく、辺り一体に土煙を巻き起こし、霊夢などは転んで強かに尻を打ってしまう。
「な〝ーーーっ!?」

もうもうと立ち込める土煙の中、霊夢は尻をさすりながらヨロヨロと立ち上がる。
「何なのよ、もう！　紫の奴やっぱ怒ってんじゃないの!?」
流石にこんな風に殺傷力の高いお仕置きを紫が霊夢に施すことは有り得ないのだが、動転した霊夢にそれを気付けというのは酷な話か。霊夢は丁度近くに居た『天狗』の射命丸文に風をおこしてもらい、何が落ちてきたのかを確かめることにする。そして、土煙を取り払ったその場所に存在した物とは――。
「……」
「……」
「……」
――無言。皆その光景に言葉を出せないでいる。だってそうだろう？　余りにも異様過ぎたのだ。

頭部が完全に地面に突き刺さり、逆さまの体勢になっているのに、何故か背筋や手足をピーンと伸ばしている人間の男（と思われるモノ）が存在していたのだから……。
「な、なななな……何よコレーーッ!!!?」
ある種コメディ的な、あるいはスプラッター的な光景を前に霊夢が出来たことは、ただただ驚愕の叫びを上げることだけであった――。

紫のスキマを通り、幻想郷へと墜落した謎の男。彼はこの幻想郷から出ることは叶うのか。今、己の正義（笑）を懸け、男は悲劇（笑）に立ち向かう。

プロローグ
『困ったさん達の宴』
～了～

第一話『やはり俺の守備範囲は下がってきている』

全ては、とある休日に舞い込んできた一つの依頼から始まった。

「黒ずくめの格好をした悪霊……ツスか？」

ここは東京都内のとある自宅兼事務所の一室。そこには事務所所長である一人の女性と、アルバイトの少年が一人。この事務所に住まわせてもらっている三人の少女達が一堂に会していた。

「ええ。何でもとてつもなく素早く、遠距離からも攻撃してきて近接でも強い。更には自我が存在しないらしいのに何らかの系統じみた体術を使うんだとか。それで除霊しにいった何人もを返り討ちにした……」

まず始めに言葉を発したのは、ジージャンジーパンに身を包み、額にはトレードマークである赤いバンダナを巻いた事務所唯一の男性アルバイトの横島忠夫。彼は資料をペラペラと捲りながら、上司である女性、美神令子へと問いかける。

彼女は世界でも最高クラスの除霊師……ゴーストスイーパーの一人で、その報酬も世界最高というお金と金儲けと金勘定が大好きな女性だ。少し前はボディコンを着用していたが、最近はシックな服装を好み、横島からは「もったいない……」と嘆きの言葉

をいただいている。もちろん横島をシバいた。

彼の質問に答える美神は既に内容を暗記しているのか、資料を見ずに情報を噛み砕いて伝える。その内容に思わず「うへぇ」という呻きが漏れる。

「黒ずくめで素早くて遠距離も近接でも強い……。まるで忍者みたいでござるな」

「忍者かー。私も見たことはないから、もしそうだとしたら少し楽しみかも」

次に言葉を発したのは見た目が中学生位に見える、事務所内で最も幼い外見の二人の少女、犬塚シロとタマモである。

シロは横島の弟子で、彼を先生と呼び慕う人狼という妖怪だ。銀の長髪に頭頂から前髪等一部が赤く染まっており、更には片側を根元からバッサリと切った大胆なカットジーンズを履いているなど、中々にパンクな格好をしているのだが、本人は真面目で実直であり、人懐っこく甘えたがり、更には散歩と肉と横島のことが大好きな侍口調の女の子というかなり濃いキャラをしている。

対するタマモは九尾の狐の転生体で、普段は中学生位の外見の少女に変化している。服装はワイシャツにセーター、プリーツスカートと、どこかの学校の制服の様な格好が多い。彼女は金の長髪を九つの房で分け、その特徴的な髪型はナインテールと呼ばれているとかいないとか。好物は油揚げで、普段はクールに振る舞うがどこか天然の気があり、人間の創った娯楽品等に執着を見せることもある。

「うーん……自我の無い危険度Ａの悪霊ですけど、一般の人達に被害は及ばさないんですね……。これなら私の『ネクロマンサーの笛』でなんとかなるでしょうか……？」

最後に口を開いたのは、巫女装束を纏った少女、氷室キヌ。この『美神令子除霊事務所』にシロ・タマモと共に居候している『六道女学院』という未来のゴーストスイーパーを養成する学校に通う女子高生だ。事務所内の炊事洗濯清掃は全て彼女が行っており、美神も彼女を妹の様に可愛がっている。そんな彼女だが、実は三百年間幽霊をしていたこともあり、『死霊術師』（ネクロマンサー）としての希有な才能を持つ。愛称はおキヌちゃんである。

さて、おキヌの言うネクロマンサーの笛とは、その名の通り死霊術師が扱う笛のことであり、霊を意のままに操ったり、成仏させることが出来る。特におキヌは霊体であれば干渉可能という柔軟性を備えており、六道女学院での対抗戦ではキョンシーを奪い取ったり、霊波の触角を通して人間を操るといったことをしてのけた。であるならば、悪霊に対してこれ以上に有効な武器もあるまいが、美神はそれに懐疑的であった。

「おキヌちゃんの腕を疑うわけじゃないけど、恐らく難しいわね。人の言葉を解する位に自我が存在していれば有効だろうけど、この手のタイプは干渉するだけ無駄に終わるのが多いわねー。何せこいつほとんど『空っぽ』なくせに妙に賢いみたいだし」

「……どーいうことでござる？」

「さあ？」
「えーと……？」
　美神の言葉に三人の少女は頭を捻る。シロなどは特に考えずにタマモに聞くが、そのタマモもよく理解出来ておらず、おキヌも必死に考えを巡らせる。
　美神はその様子を意地悪げな笑みで眺めており、横島もまた、そんな美神を苦笑を以て眺めていた。しかし美神は横島の視線に気付き、矛先を横島に向ける。
「なーにニヤニヤしてんのよ。それより皆に説明してやんなさい。いくら横島君でもこの位なら分かるでしょ？」
　多少睨みつけられながら言われたのでは、横島には是非もない。たどたどしくではあるが、横島は説明の為に口を開く。
「えーと、つまり、相手にはこっちの言葉も何も認識することが出来ないんだよ。この手の悪霊は何か一つのことだけを残して、他の全てを失っていることが多いんだ」
　例えば『何かを守る』という意識だけが残ったとする。悪霊はそれを守る為にのみ行動し、それ以外の全てに無反応となる。そんな悪霊が害を為すのは、守る物が危険にさらされたとき。何者かが隔意を以て現れたとき。つまりは――。
「敵意とか悪意とか……。あと、同情とかもかな……？　あとおキヌちゃんみたいに霊に対する理解とかも……。あー、つまり、相手はこっちの意識に反応して襲い掛かって

くるんだよ。相手は剥き出しの霊体だからそういうのには敏感だし。何があるのかは知んねーけど……何らかの『意識を向ける』と危ない……って感じかな……？　一般人を襲わないのは霊力の違いだろうな……美神さんが賢いって言うくらいだし」

言葉に詰まりながらも説明し終えた横島は、美神に「こんなもんで合ってますよね……？」と視線で問いかける。それに対し、美神は「概ね合ってるし、及第点はあげる」と返す。横島も最近は知識を付けてきたようで、師匠の美神としては頭の中で金儲けの手段がいくつも生まれていく。美神の言葉に横島は調子に乗り、おキヌは我がことの様に喜び、シロは横島をおだてタマモは感心する。ただし――

「横島君は少し勘違いしてるわね」

横島の説明は、相手が『自我を失った悪霊』である場合は正解であるのだが、今回は多少的を外していたのだ。上げて落とす。今度は美神がニヤリと笑う。彼女は横島に対してサドッ気を発揮しているようだ。

「おキヌちゃんのネクロマンサーの力が通じないのは横島君も言った認識のこともあるけど、実際はもっとシンプルなものよ。最初から言っている通り、こいつにはそもそも『自我が存在しない』のよ。人の形をした、力と技術の化け物。――それが、こいつの正体よ」

その霊が生前どんな人物だったかは定かではない。だが、それが霊となったとき、そ

れには既に自我など存在しなかった。ただ、一人の人間の力と技術を受け継いだ霊力の塊。こういった霊は希に姿を現すようで、中には、霊力が尽きるその時まで誰にも知られずひっそりと存在を消失していく者も居るようだ。

「じゃあ、今回のも……」

「でしょうね。私も唐巣先生のとこで修行中に何回か見たから間違いないと思うわよ？」

おキヌの痛ましげな言葉に美神は気楽な調子で返す。あまり気負わせたくないからこその語調なのだが、おキヌの表情は暗いまま。おキヌは視線を横島に向けると、彼は鷹揚に頷いてみせた。

「自我が存在しないってんなら、その元々の奴は成仏しちゃったんじゃねーかな？　何かの偶然で形だけ残っちゃったってんなら俺らが祓っちゃえば良いわけだし……そんなに気にしない方がいいと思うよ？」

「……そうですね、私達で祓ってあげる方がその人のためですよね」

横島の言葉にアッサリと表情を明るくするおキヌ。横島の言葉は美神に違和感を覚えさせるのだが、それ以上に気になったのは、恋する乙女がお姉さんの言葉より好きな男の言葉で元気を取り戻したことだったりする。美神としては寂しい限りだが、横島が分かって『真逆』の推察を述べたことにより、苦笑を浮かべながらも愚痴は飲み込むこ

とにした。

「――さて、もう良い時間だし、そろそろ除霊に出発するわよ」

「え、今からっすか？　今からじゃ良いとこ夜で、悪けりゃどっか途中で泊まりになっちゃいますけど……」

現在時刻は午後十六時過ぎ。事務所から現場へは車で数時間という距離だ。明日は休日とは言え、強行軍は遠慮したい横島だったのだが、自分の発言でやる気を漲らせるおキヌやシロが隣に居るのだから抵抗は無駄なのである。

「はいはい、今回はおキヌちゃんは道具を使ってサポート、横島君とシロは前衛でタマモはおキヌちゃんの護衛ね。横島君とおキヌちゃん、準備お願いね」

「ういーす」

「はいっ」

美神の手をぱんぱんと鳴らしながらの発言に諦めたのか、横島は渋々と、おキヌは元気よく除霊道具を纏める作業に入る。今回は自分ではなくおキヌが荷物を担当することになるのだから、道具はいつもより少なく、必要最低限の物だけを厳選していくことになる。

美神は二人の様子を見ながら、先程の横島の言葉を思い返し、少し微笑む。しかし、それは微妙に歪んだ、苦笑の形を取っていた。

元々の存在が成仏している。確かにその可能性はあるだろう。だが、その確率は限りなく低い。だって大抵は、自我を失うほどの『何か』をされたかがほとんどなのだから

「荷物を纏め終わったらすぐに出ましょうか。横島君は荷物と一緒にトランクに入ってね♪」

「だろうと思ったよこんちくしょー!!」

美神は笑い、横島は泣く。それもいつもの光景だ。

「黒ずくめ……拙者は忍者を連想するでござるな」

道路を走る車の中、シロ達少女組は悪霊に対する印象を話し合っていた。ちなみに変化を解いたタマモが美神の膝の上、シロはおキヌの膝の上にいる。

「私は魔法使いとか？　人間の作った物語ではそーゆーのって黒いイメージあるし……」

「私は……ゴキ○リかな?」

おキヌの言葉に運転していた美神がビクリと体を震わせる。母親の説教と妹のぐずりとマルサよりも美神が苦手とするもの。それがゴ○ブリだ。言われてみれば、確かに悪霊の特徴は○キブリのそれによく似ている。黒い。早い。遠くから攻撃しても避け

られる。近くからでは中々的を絞れない。こっちを目掛けて飛んでくる。駄目だ。油で黒光りする体。止めろ。圧倒的な数。駄目だ、考えるな。深夜に台所で微かに聞こえる音。駄目だ駄目だ駄目だ。嗚呼、カレーの鍋に浮かんでいる黒く、触角の生えたナニかが見える――――

「美神さーーーん、前見てください前ーーー!!」

「うわあああああああ!?」

「ひえぇえぇえ!?」

(おがあぁあぁぁあああぁ!?)

あわや大惨事。ゴキブ○の姿が脳裏を過ぎりまくっていたせいで正気を失いかけていた美神は、カーブを曲がりきれずに危うくガードレールにぶつかりかけたところでおキヌの声によって意識を取り戻す。危うく自分が今回の悪霊と同じ様な自我の無い霊体になるところだ。美神は頭をプルプルと軽く降り、おキヌ達に謝りながらも会話に参加することにした。ちなみに、車のトランクからは何らかの雄叫びのような物が聞こえてくるが、それは全員に気付かれなかった。哀れ横島は四十のダメージを受け、頭部に大きなたんこぶを作った。

「えーと、私もシロと同じで忍者を連想するわね。うん、忍者。忍者しかないわよね、うん。黒いし早いし忍者よきっと。うん、忍者忍者」

美神は混乱している。普段の美神ならば「黒ずくめ？　ああ、きっと魔鈴の悪霊ね（笑）」くらいは言いそうな物であるが、とある油虫のおかげで美神の頭から魔鈴の姿はすっかりと消えていた。

美神が○キブリが嫌いなのを知らない獣娘二人は首を捻るばかりだが、おキヌは過去の騒動からそれを承知している。おキヌは苦笑しながらも美神に乗っかることにした。

「そういえば、私って忍者のことよく知らないんですよね。忍者ってどんな人達なんですか？」

それに答えるのは、最近自分と同じ口調の忍者が主人公のアニメを見て、忍者に興味を持ったシロだ。

「簡単に言えば、諜報、破壊、暗殺といった活動を仕事にしていた者のことでござる。どこかの領主に仕えている者達もいるでござるが、単なるゴロツキの集まりだったりとその形態は様々で、要は傭兵みたいなものでござろうか……？」

「へー……。ゴロツキ集団とかも居たんだ。じゃあ領主に忠誠を誓ってるのが漫画とかでも有名な伊賀とか甲賀忍者なの？」

「うーん……甲賀がそうで伊賀は傭兵……という感じでござるかな……」

シロはたどたどしく忍者について説明していく。忍者については様々な説があり、伊賀衆や甲賀衆といった実在した忍者集団を始め、侍や山伏、虚無僧が変化していった説、

伝説に存在する鬼が忍者の発祥とする説などを説明していった。

よく言われることの一つに忍者は黒装束を纏ってなどおらず、黒装束の忍者は江戸時代の歌舞伎において黒子の様に目に見えない存在として登場させたのが始まりという説がある。実際に存在した色は紺色や柿色などであったそうだ。

忍者談義やガールズトークに花を咲かせつつ、移動すること数時間。ついに美神達一行は現場に辿り着いた。そこは鬱蒼とした山間部のわりには道路が整備されている、脇道にそれてそれなりに走った場所に存在する開けた場所だった。本道からして車の通りはほとんど無く、この周辺は倒木と瓦礫の様な物が多少存在している。

「あー、面倒臭そうな場所っすね……」

「確かにね。おキヌちゃん、『見鬼くん』で辺りを探ってみて」

車から降りた美神達に、いつの間にかトランクから荷物と一緒に出て来ていた横島は話しかける。おキヌは美神に言われた通り荷物から霊体探知機『見鬼くん』を取り出す。その間横島がおキヌの前、シロとタマモが左右、美神が後方に位置し、おキヌを守る。

「……あっ」

ややあって、見鬼くんが反応した。見鬼くんが指し示す方角はおキヌの真正面。皆が警戒していると、それは確かに正面から現れた。甲高い音の様な声が聞こえる。

〈あああ……〉

それは黒かった。黒い装束を纏った、小柄な霊だった。上から下まで黒一色。それは正にイメージ通りの忍者だった。

「な、何が〝実際は黒装束を纏っていなかった〟や！　完全に真っ黒やないか！　中途半端な知識で書いとるからこーなるんや！」

横島の熱い叫びが木霊する。そんな彼を見た美神達は横島から数歩分ほど離れる。横島の頭上には突如発生した暗雲が立ち込めており、美神達が安全圏まで離れた所で稲妻が迸った。

「あ〟ぁ〟ーーーーーーお〟!!?」

天罰である。稲妻は見事横島に落ち、黒こげにした。

〈あ……あ……？〉

突然の天罰に自我が存在しないはずの霊はオロオロと狼狽えている。手を口元に持っていくなど、どこか可愛らしい動きだ。

「横島君のことはとにかく！　あんたにこのまま居座られたら困るのよねー。主に私のギャラ的に！　そんな訳であんたは退治してあげるから覚悟しなさい!!」

中々に自分勝手な理由をぶちまける美神だが、これは仕事なので間違ってはいない。いつの間にか復活した横島達従業員一同も、苦笑一つで臨戦態勢に入る。

〈あぁ……！〉

目敏く反応するのは忍者の霊。懐に手を入れ、何かを投擲してくる。四方に尖った板状の武器、四方手裏剣だ。

真っ直ぐに飛来するそれを美神達は散開してかわす。だが、その全ての手裏剣は途中で軌道を変え、おキヌへと殺到する。

「……っ!!」

本来運動神経が悪く、戦闘要員ではないおキヌにこれをかわすのは不可能だ。ならばどうするか。美神は『神通棍』に霊波を通す。

「横島君、お願い!!」

「うえ?　は〝ら〝ぁ〝っ!?」

答えは簡単だ。盾を用意すればいい。横島は美神に吹き飛ばされ、錐揉み回転をしながらとんでもない速度でおキヌの元へと（文字通り）飛んでいく。

「ほ〝あ〝あ〝あ〝あ〝あ〝あ〝あ〝あ〝っ!?」

「あああ!?　横島さはーーーーんっ!!」

全ての手裏剣は横島の頭部に突き刺さり、おキヌはそんな横島に叫びを上げるしかない。血がまるで噴水の様に『ぴゅー』っと噴き出している。

「何やってるでござるか美神殿ーーーーーー!!」

「だ、だってあの場合は仕方ないじゃない！　おキヌちゃんを守る為なんだからっ！」

「だからって横島先生を盾にする必要はないでござろうがー！　そもそも周りに倒木とか瓦礫とかいっぱいあるでござる!!」
「だって重いんだもん」
「そんな理由!?」
　横島を先生と慕うシロは当然美神に食ってかかる。そのまま口喧嘩に発展するのだが、今回はタイミングが悪すぎた。
「アンタら口喧嘩してないでこっちを手伝ってよーーー!!」
「あ」
　おキヌの次はタマモが狙われている。霊は手裏剣を用いずに純粋な体術でタマモを追い詰める。
「タマモ!!」
　その様を見たシロは人狼の瞬発力の全力で以て駆ける。それにほんの一瞬だけ気を取られた霊から僅かに距離を取るタマモだが、霊の懐から取り出した手裏剣がタマモを貫く方が遥かに速い。
〈……っ!?〉
　手裏剣がタマモに突き刺さった瞬間、タマモはニヤリと笑い、破裂して辺りに煙幕を

張る。タマモは霊の真横に存在し、それを確認したシロは、動きを止めた霊に全力の拳を腹に叩きつけ、森林へと吹き飛ばした。

「……変わり身の術でござるか？」

「これも私の幻術のちょっとした応用よ」

応用も何もない単なる幻術である。シロはタマモが無事で安堵の息を吐き、煙幕の先を見つめる。

「変わり身の術ということは、あそこにはタマモの格好をした丸太が転がって……」

そこに一陣の風が吹き、煙幕をたやすく消し去る。するとそこには、先程よりも突き刺さった手裏剣の数が多く、力無く地面に横たわった横島忠夫の姿が!!

「アイエエエ!?　先生!?　先生ナンデ!?」

その姿に横島リアリティショック（ＹＲＳ）を起こしたのか、シロが奇声を上げる。

「いやー、周りにこれといった物が無くてさ」

「だからって横島先生を盾にする必要はないでござろうがー!!　そもそも周りに倒木とか瓦礫とかいっぱいあるでござる!」

「だって重いんだもん」

「美神殿と同じ理由!?」

やはり発生する口喧嘩。その隙を霊が見逃す筈もなく、森の中から投擲した手裏剣と

共に突撃してくる。
「……っ!?　しま……っ」
　シロが反応出来た時にはもう遅く、手裏剣は既に目前まで迫って来ていた。咄嗟のことで反応しきれないタマモも、驚愕に目を見開く。だが、そんな二人を助ける者は存在する。
「おんどりゃーーーーーー!!」
　一瞬で全ての手裏剣を叩き落とす、霊波刀の閃き。それに脅威を感じた霊は軌道を無理矢理変え、距離を取る。そう、横島忠夫が復活したのだ。
「大丈夫か、二人とも?」
「は……はうぅ……先生」
「あー、うん。私達は大丈夫、ありがと横島」
　横島は二人にキリリとした表情で問い掛ける。アドレナリンが過剰に分泌されたのか、あれだけ派手だった出血は既に収まっている。手裏剣が刺さったままなのが非常にシュールだ。しかし、その表情は普段からの緩いものや煩悩にまみれた表情とは違い、非常に精悍で勇ましく見える。シロはそんなギャップにヤられてメロメロになってまともに対応出来ない。手裏剣が刺さったままなのに。そんなシロに若干引き気味のタマモが代わりに答える。そうしている間に美神とおキヌも合流した。

「なーんかおかしくないっすか、あいつ……。美神さんの言うように自我が無いようにはちょっと見えないんすけど……」

「……確かにね。となると私の見立て違いか、報告が間違っていたか……」

二人はボソボソと潜めた声で話し合う。横島は特に霊を注視するのだが、そこで気付く。覆面が破れ、素顔が露わになっているのだ。そしてその顔は――――！

「か、可愛い……だと!?　小柄小柄だと思ってたけど、まさか女の子だったんかー!?」

そう、覆面の下から見えた顔は間違いなく女の物。しかも見た目では十四～十五歳程の少女の物に見えた。更にはシロに吹き飛ばされた時に破れたのか、胸元が多少露出している。

「むうぅ……！　背はおキヌちゃんよりも低いが、乳はおキヌちゃんよりもデカい!!　これがトランジスタグラマーというやつか!!」

「横島さんっ!!!」

その失礼な発言におキヌは猛る。前よりも成長しているのだ。例えそれが雀の涙ほどでも。

「はっ!?　か、堪忍やー！　仕方なかったんやー！」

「いー加減にせんかー！」

おキヌの怒りに怯え、米搗きバッタの様に土下座をする横島を殴りつけて二人の仲裁

（？）をする美神。横島に対する怒りも奴に叩きつけてやろうと霊を見やり、それに霊は怯えたように半歩下がる。

「報告が間違っていようがもうどうでもいいわ。それならそれでやりようはあるしね……」

ちゃっかりと自分の責任は無かったことにする美神。

「分かってるわね、横島君」

「モチロンっすよ美神さん」

やりようとは一体何なのか。それは――

「「ごり押し戦法!!」」

同じタイミングで二人は駆ける。スピードは横島の方が早く、右手の霊波刀で忍者を斬りつける。

〈……っ!?〉

難なくそれを回避する霊だが、そこに美神が放った破魔札が飛来する。それを周囲の瓦礫を利用して何とか回避するが、着地点に横島が放った霊波の盾『サイキックソーサー』が迫る。

〈あああああ!!〉

懐から四方手裏剣とは別の棒状の武器、棒手裏剣をサイキックソーサーに投げつける

が、二つが接触した際にソーサーは霊的な爆発を起こし、霊を吹き飛ばす。吹き飛ばされた場所には――――！

「極楽へ――――!!」

「行きやがれぇえええ!!」

――後方から美神、前方から横島と、世界最強の二人が、それぞれの武器を携えて迫り、戦いの幕を閉じる。

「ふう……これで片付いたわね。皆、大丈夫？」

美神は二人のごり押し戦法に着いていけなかった三人に問い掛ける。三人は特に怪我もなく、皆無事なようだ。

「やりましたね、美神さん！」

そこにアドレナリンが収まったのか、頭部から『忠夫汁ブッシャアアアア！』と言わんばかりの血を噴き出す横島が現れた。輝かんばかりの笑顔なため、かなりのホラーである。

「……三人共、ヒーリングお願い」

美神の言葉に、三人はただ頷いた。

「うぅ……」

　横島は今大変なピンチを迎えている。それは何故か？

「ちゅっ……れろ……らいりょううでござるか……？」

「ん……ぺろ……ちゅるっ……いふぁふぁい……？」

「我慢はしないでくださいね……」

　ご覧の通りである。（笑）

　正面からはおキヌが。左右からはシロとタマモがヒーリングをしているのだが、色々とシチュエーションがまずかった。

　シロとタマモは犬神族なので、ヒーリングする場合は傷を舐めなければならない。そして横島の怪我は頭部に集中している。左右の耳から入ってくる傷を舐める水っぽい音と、舐めながら喋ることによりどことなく色っぽくなった声音のせいで、横島の心拍数は鰻登りだ。

　更にここにおキヌが混ざる。おキヌのヒーリングは正に『手当て』とも言うべき手をかざす方法なのだが、横島は胡座をかき、おキヌは膝立ちになっている。彼の視線の前にはおキヌの胸があるのだ。先程の霊よりは小ぶりだが、それでもしっかりとその膨ら

みを主張している。しかも慣れない戦い方で汗をかいたのか、彼女の体からは熱と、どこか甘い芳香が漂ってくる。最早横島の顔は正視に耐えられぬ程に緩みきり、それを知ってか知らずか三人は丹念にヒーリングを施す。

そんな様を見ていた美神は、自らに去来する業火の如き感情を隠した、必要以上に冷たい声で横島に言葉を呟く。

「横島君――あんた、ロリコンになっちゃったのね」

その時横島に電流走る――！

「な、ななな何を言ってんすか美神さん！　ど、どこが俺がロリコンだっていう証拠ですか!?」

横島は叫ぶ。自らの潔白を証明するために。だが、彼は気付いているのだろうか。彼は、横島忠夫は、何故か異様に動揺しているのだ。

「だって今めちゃくちゃ焦ってるし」

「うっ!?」

「さっきの見た目中学生位の霊も横島君の煩悩対象になってたじゃない」

「ぬっ!?」

「シロとタマモも見た目中学生よ？　なのに今も二人にヒーリングされて、酷い顔の緩みっぷりだったわよ？」

「はぐっ!?」

おキヌの存在をナチュラルに無視した美神の言葉のナイフは横島の心を刻んでいく。

どこか思い当たることがあるのか、横島（とおキヌ）は精神的ダメージを受ける。

「ほぉら……。どうなの……？　これでも自分がロリコンじゃないとでも……？」

美神の絶対零度の視線は横島を容赦なく貫く。その重圧はおキヌ達にまで及び、足を竦ませ、行動不能に陥らせた。そんなプレッシャーに何かを見た横島は鼻息荒く美神に突撃する。

「こんなに俺に対して絡んでくるということは……これは嫉妬？　つまり、〝私より年下の女の子じゃ味わえない、大人の女の魅力を味わわせてあ・げ・る♪〟ということなんやな!?　美っ神さーーーーーーん!!」

「んなわけあるかぁっ!!!」

「あ〟み〟は〟っ〟!?」

飛びかかってきた横島の鳩尾を、光速の拳が貫いた……。

「ひゅーっ、いや、ひゅーっ、まじっ、ひゅーっ、す。俺、ひゅーっ、ロリひゅーっコンひゅーじゃひゅーなひゅーいひゅー」

最早呼吸がおかしいというレベルではない横島の言葉がどうにも信じられない美神は、横島にいくつかの質問を投げかけることにした。

「ふーん……。例えば、シロやタマモに告白されたとしても、振っちゃうんだ……？」
「うえっ!?」
「私も!?」
突然の質問に驚く二人の少女。シロは動揺の声を挙げた後、チラチラと期待と不安を込めた瞳で横島を見る。対するタマモは、面倒なことに巻き込まれたという感情が面に出ているが、意識していないという訳でもないようで、若干目が泳いでいる。おキヌはわたわたと慌ててしまい、口を出すことが出来ないようだ。
「いや、それは――」
二人を横目で盗み見る。今の二人の表情は、普段見ている子供じみた幼けない物ではなく、横島を、男を意識した、女性を思わせる表情だ。それに横島の煩悩が反応し、頬は僅かながら赤く染まる。そして、横島は愕然とした。
（まさか……ワイの守備範囲が……下方修正されとるというのか……っ!?）
だが、まだ横島は諦めない。
「い、いや、確かにちょっと可愛いとか思ったけどワイはロリコンやない！　例えいっぱいの可愛い年下の女の子に囲まれたとしてもワイは靡いたりはせーへんでー!!」
自己弁護の為の雄叫びにシロは盛大に、タマモは多少顔をしかめる。「振るの？」と聞かれてこんな返しをされては仕方あるまい。寧ろシロなどは泣きださない辺り成長し

ていると言えなくもないのだろうか？　あるいは横島の趣味嗜好や失言に慣れてきているのかもしれない。

「あんたねぇ……」

一番長い付き合いの美神ですら頭痛を抑えるようにこめかみに指を当て、溜め息を吐く。

そして、この横島の発言が切欠だったのかは誰にも分からないが、別れは唐突にやって来た。

「ん？」

突如、横島の尻から地面の感触が消えた。「何じゃらほい？」と地面に目を向けてみると。

「……。……、え？」

そこには、やたらと血走った目が大量に存在している、暗い暗い裂け目のような『穴』が存在していた。

穴なのだから、後は当然落ちる。

「のわあああああ～～～～～……」

「よ、横島くーん!?」
「横島さーん!?」
「せ、先生ーっ!?」
「横島ー!?」
夜も深い山の上、皆の絶叫が木霊する。

かなりの高空に、彼女達の様子を盗み見ている者が存在した。そいつは舌打ちを一つすると、その場から一瞬で姿を消した。後に残ったのは、消失した空間を埋めるための、緩やかな風のみである。

第一話
『やはり俺の守備範囲は下がってきている』
～了～

第二話『横島君、踏んだり蹴ったり』

「のわあああああああ!!　な、何じゃあああああああ!!?」

現在、横島忠夫はどこまでも深く暗い穴に落ちている。周りに見えるのは闇と、嫌に血走った無数の『眼』。それは横島には触れることもなく、ただじっと見つめてくるのみだ。

「うひぃ……!?　も、文珠！　紋珠ーーー!!」

横島は穴から出るために自らの奥の手、美神から使用を制限されている『文珠』という霊能を発現しようとするのだが……。

「っ!?　文珠が……出ない!!?　あああ、何でこんな時にーーー!!?」

何故か発現しない。それどころか、栄光の手も使用することが出来ないことに気付く。慌てふためく横島を、周りの眼はただ静かに見つめ続ける。

「あああああ!?　美神さーーーん助けてえええええっ!!」

霊能が使えないのと、その視線の恐怖に耐え切れなかったのか、横島は既に物理的に遠くの存在になってしまった美神に対し、力いっぱい涙を噴き出しながら叫ぶ。その絶叫に呼応したのかは定かではないが、助けを求めた相手から声が返ってきた。

「横島君っ!!　これに掴まりなさーーーい!!」

その叫び声と共に飛来したのは呪縛ロープの先に拳大の石を括り付けた物だ。横島は美神の対応に感謝しつつそれを掴もうとしたのだが……。

「くぇっ!?　……っ!?　……、……っ、……っっっ!!!?」

あろうことか、それは横島の首に絡みつき、それはもう強烈に締まる。首が千切れないだけでも奇跡と言えようものだ。

案の定横島は苦しみの声を上げることさえ出来ない。

「よし、掛かった!」

美神はその様子を見てガッツポーズを取る。一歩間違えばとんでもないことになるのだが、そこはそれ、横島の頑丈さを信頼してのことだろう。

「横島さーん!　そのロープを伝って上ってきてくださーい!!」

おキヌは穴の中の横島に声の限りに叫ぶ。現在シロとタマモは美神と一緒に横島の体重を支え、少しずつロープを引き上げている。その度に横島の首にロープが食い込むのだが……それを知るのはロープを掛けた美神のみ。シロとタマモは美神の背後に居て見えなかったのだ。

「……、……!!　プハアアアッ!!」

横島は首のロープを何とか緩め、呼吸を確保する。穴の中とはいえ、その空気の旨さ

に涙がちょちょぎれる思いだ。

横島は美神に文句を言ってやろうかとも思ったが、今はそれよりも地上に上がるのが先決だ。横島はロープを右腕に緩く絡め、ロープをゆっくりと伝い上がっていく。

「ふう、ふう……。何か、妙な、感じが、するな……」

横島はロープを上りながら、自らの霊感に訴えかける『何か』を感じる。それは、敢えて例えるならば、巨大な力……と言ったところか。

横島の霊感を以てしても全容を計り知れない程の力。それも、一つではない。『下』と『上』と。

さながら横島は綱引きに懸けられているようなものだ。いや、どちらかと言えば大岡裂きか。しかし、横島は上を目指している。本来ならばこれ以上何もなければ更に下に落ちることもないのだが……。

もしかしたら、その日の横島は驚異的なまでに運が悪かったのか、はたまた運が良かったのか……。とにかく、彼にそれが起こってしまった。

「……ん？　何だ？」

遠くの方から音が聞こえる。何か甲高く、どこか聞き慣れた音だ。横島は辺りをキョロキョロと見回し、またそのために動きを止めてしまった。

――それが、致命的となった。

闇の先から来たる物。眩い程の光を放ち、甲高い音を響かせ走る物。それは――――！

長野電鉄木島線３５００系にとてもよく似た電車であった!!

「な、何でこんなトコに電車が……!?　ま〝ろ〝ん〝っ〝!!?」

〝プアーン〟という独特の音が響くと同時に、横島は電車に轢かれ、真っ逆様に落ちていった。当然ロープは千切れ、横島の体重を支えていた美神達三人は盛大に尻餅をついてしまう。

「……しまった、横島君っ!?」

美神達が穴を覗き見るが時既に遅く、横島はもう見えなくなっている。

そのことに絶句していると、今まで安定して存在していた穴は急に揺らぎ始め、その姿を消していく。

「んな!?　コラ待ちなさい!!　勝手に消えるな!!」

「よ、横島さん！　横島さーん!?」

美神達は必死に叫ぶが、それは無駄に終わる。やがて役目を終えたかのようにその穴は消失した。

「……せ、先生ーーーっ!!?　ど、どどどどーするでござる!?　どーするでござる!?」

「お、おおちおおおちおちおちつきなささささい。ま、ままだあわあわあわあわあわわわわ」

慌てふためくことしか出来ないシロとタマモ。シロは既に大泣き、タマモは普段のクールさが嘘のような姿だ。

おキヌも似たようなもので、もう意識を失う一歩手前といったところだ。そんな彼女達を見た美神は落ち着きを取り戻し、冷静に答えを導き出す。

「……あの穴は少なくとも私達にはどうすることも出来なかった。でも、だったら神魔族の力なら……」

その言葉を聞いたおキヌは正気を取り戻し、とある神様の姿を思い出す。

「そうだ……！　ヒャクメ様やジークさんなら、あの穴がどういったものか、横島さんがどこにいったのかが分かるかも!!」

おキヌの言葉に目に輝きが戻るシロ。タマモも何とか落ち着くことが出来た。それにより、美神とおキヌは互いに頷き合う。

「行くわよ、妙神山に！」

美神の力強い言葉に、皆もまた力強く頷いた。

「あああああああああああああ!?」

落ちる。墜ちる。堕ちていく。闇の中を落ちていく。

先程電車に轢かれたばかりだというのに、それを感じさせないかのように絶叫しながら落ちていく横島。彼の脳裏には、自分を引っ張り上げようとしていた巨大な力が、何故か人型になり、涙を流しながらこちらに敬礼しているようなビジョンが見える。

「あああ!?　何か不吉な幻覚があああああ!?」

彼の霊感に訴えかけるほどのものだったのだが、流石に今の状態では認識することが難しいようだ。

それから数秒、横島の頭上、穴の先に一筋の光が見えた。と同時に、視界の隅に『止まれ』の道路標識が見えた気がした。

「っ!?　何か止まれって標識が見えた気がするが、今の俺は急には止まれない！　この出口の光を目指して突き進むやーーーっ!!」

その叫びのせいか、横島の落ちるスピードが何となく上がった気がする。

そうして穴を抜け、光を全身に感じる横島の視界に広がったもの。それは、どこまでも広がる、広大な蒼穹――――！

ではなく。

果てしなく広がる、全ての生命体の母たる大海――！
でもなく。
地平線の遥かまで続く、緑を湛えた雄大な草原――！
なはずもなく。
彼の視界いっぱいに広がったのは、白く、均等に敷かれた、石畳だった。しかも目と鼻の先。

『この穴を
抜けた先には
石畳――』
彼の頭を過ぎったのは、そんな言葉。

チュドガゴドゴンズガシャアアアアアン!!!

という何とも珍奇な轟音をたてて頭から石畳にめり込んだ横島の意識は、いともあっさりと闇に飲まれていった。

博麗神社の境内は、異様な雰囲気に包まれている。

紫のスキマが開いたと思えば、男が猛スピードで墜落してきたのだ。しかも頭から石畳に突き刺さっている。そりゃこんな空気にもなる。しかし、いつまでもそのままではいられない。霊夢は何とか言葉を絞り出す。

「私の神社で人死にとか……ほんとやめてよ……」

その声は震え、霊夢の目にはじわりと涙が溜まる。普段は面倒くさがりで呑気な霊夢だが、彼女とて一人の少女。誰かを悼む心を持ち合わせているのだ。

「ただでさえ参拝客が滅茶苦茶少ないってのに……これじゃ誰も来なくなる……僅かなお賽銭も無くなっちゃう……」

しくしくと泣く霊夢。訂正しよう。彼女は意外と冷たい人間なのかもしれない。

そんな霊夢に内心ドン引きしていた早苗だったが、石畳に突き刺さった男を改めて見てみると、ちょっとした違和感を持った。

「あ、れ……？」

「あん？　どしたのよ早苗」
　不審に思った霊夢は早苗に声をかけるが、早苗の顔からはどんどんと血の気が引いていき、今ではすっかり青くなっていた。
「あの人（？）……動いてませんか……？」
　その言葉に、早苗に注目していた少女達は一斉に男を見る。すると、確かにピクピクと体が動いてみえる。
「何だ……？　昆虫みたいにまだ神経が通ってるのか……？」
　魔理沙は興味深そうな声を発し、男にそろそろと近づいていく。
「ち、ちょっと止めなさいよ魔理沙」
　そんな魔理沙に制止の声をかけるのは魔理沙と同じく魔法使いであり、人形を傍らに置いた少女、アリス・マーガトロイド。
　厳密に言えば彼女は人間ではなく、魔法使いという『人外の種族』であり、体の頑丈さも魔理沙以上なのだが、生来の性格から彼女は慎重を信条とし、『弾幕はブレイン』という、魔理沙の『弾幕はパワー』とは真逆の考えを持つ。
　アリスは魔理沙を制止しながらも彼女の後ろについていき、男の様子を窺う。どうやら魔理沙を盾にしているようだ。
　魔理沙が男に指を触れようとする。すると――。

「っ!?」

男の腕が大きく動き、石畳に力強く手をついた。

「な、何だぁ!?」

魔理沙とアリスはとっさに飛び退き、臨戦態勢を整える。

男は足をバタバタと動かし、やがてようやく重力に従ったのか、足で地面を踏みしめる。そして、首を石畳から抜こうともがく。

「……萃香、手伝ってやったら?」

「うえ〜……?」

よほどがっちりとめり込んでいるのか、一向に頭が抜ける様子はない。流石に見かねたのか、霊夢は近くに居た、いつも酒を呑んで酔っぱらっている『鬼』の少女、伊吹萃香に話しかける。

鬼とは幻想郷に於ける、最強の種族。特に萃香は『山の四天王』の一人であり、その豪腕は天蓋に映る月をも砕いたという。

怖いものなどないはずの鬼が嫌がるのは、単にビジュアル的な問題なのだろう。だって首が埋まってるのだもの。普通は嫌がる。

「まあ……仕方ないか」

萃香は溜め息混じりに男に近づき、「ほい」と軽く首根っこを引っ張る。たったそれだ

けで、完全に埋まっていた首はいともたやすく白日のもとに晒された。
「つっっあーーー、死ぬかと思った……」
男の第一声がそれである。当然普通なら死んでいる。あの速度なら人間でなくとも、妖怪ですら即死であろう。だというのに、その男はピンピンと……とまではいかないが、どうやら命に別状は無さそうだ。
その有り得ない生命力に、二人の少女は疑問を持つ。
『まさか、自分と同じなのか?』
結論を言えばそれは間違いである。だが、それを知るのはもう少し後だ。
周りの少女達は男を見る。頭からとめどなく血を流している。だが、それだけだ。死んではいない。
「うおっ?」
男は自分が注目されていることにようやく気付き、周囲を見回す。自分を囲んでいるのは、皆すこぶる付きの美少女達だ。当然彼なら煩悩が刺激されるのだが……。
(ぬおおー!? び、美少女がいっぱい!! ここは天国なんか!? いやでも生きとるし……ええんか!? ご褒美なんか!? だが……嗚呼しかし! ワイはロリコンやない! ここにいる女の子達は皆ワイより年下か同い年くらい! ワイがロリコンやないと証明するためにはもっとバインバインなお姉ぇーさまやないと!!)

中々に失礼なことを脳内でぶち上げる男、横島忠夫。そんなことを考えた天罰か否か、彼の頭から流れる血の勢いがいや増した。

「はうっ!?　……あーうー……」

今回は流石に堪えたのか、横島は呻きながらぺしゃりと石畳に倒れ伏せる。その様はどことなくマンガチックな可愛げのある雰囲気を放っていた。

「……と、とりあえず永遠亭に連れて行くわよ！　紫のことも気になるし、そのついでに治療させればいいし!!」

重傷者の治療をついでと言い切る霊夢に周りから乾いた笑いが漏れる。彼女らは知らないが、横島の上司の女性とどこか似ているのかも知れない。

「やれやれ……私が担いで行くか」

「ふ～む……」

「えっと……向こうに着いたら、ちゃんと治療しますから」

倒れている横島を何とか起こし、肩に担ぎ上げたのは藤原妹紅。ジロジロと横島を見ているのは蓬莱山輝夜。二人の体はとある特異な性質を持っており、横島も『それ』と同じなのか疑っての行動のようだ。

おずおずと横島に声をかけたのは『月の兎』鈴仙・優曇華院・イナバ。彼女は人見知りであるためか、本来は上司である輝夜の後ろに隠れている。横島が不気味という気持

ちは分かるが、応急手当てくらいはしてやった方がいい。
「んじゃ、私ら含めて何人で行くんだ？」
妹紅は周りの少女達に問いかける。結果、行くと答えたのは霊夢、魔理沙、藍、橙、文の五人であった。他は興味がないのか、巻き込まれたくないのか……。はたまた横島が不気味なのか。
「ふふふ……。さっきは怒涛の展開の連続で呆気にとられていましたが、これはスクープの匂いがしますね！　取材をさせていただくためにも同行しますよーっ！」
文々。新聞（ぶんぶんまるしんぶん）という新聞を発行している文は、メモとペンを握りしめ、久々のスクープの予感に燃えていた。流石に昨日の異変は乙女的に気にくわなかったらしい。
「最近何件かに契約切られたんだっけ……。アンタも大変だねぇ」
酒を呑みつつの萃香の言葉に、文はしくしくと涙を流す。
「はいはい、だべってないでさっさと行くぞ」
そういって妹紅は横島を担いだまま空に浮かぶ。他の少女達も同様だ。
やがて飛び立った少女達が見えなくなり、博麗神社に集まっていた少女達も、三々五々に散っていく。
そうして神社に静寂が戻り、境内に残ったのは五人の少女。蝙蝠の様な羽を背中に持

つ、幼い少女を中心とした一団だ。
「……珍しいわね。好奇心旺盛なレミィがああいった手合いに興味を示さないのは」
「あー？　いや、別にそういうワケでもないんだけどね、パチェ」
その少女に声をかけたのは、紫の衣服に身を包んだ魔法使いの少女、パチュリー・ノーレッジ。お互いのことをあだ名で呼べるのは、親友同士である彼女達だけだ。
「でも、本当にめずらしーよね。お姉様なられーむ達に着いていきそうだけど……。ねえ、めーりん」
おとがいに指を当てつつ発言するのは、フランドール・スカーレット。彼女の背中には煌びやかに輝く、宝石のような羽が存在する。彼女は自分に日傘を差す中華服の少女に問いかける。
「あ、はい。確かにそうですね。お嬢様なら面白がって着いていきそうですけど……。さっきからずっと後ろの方で見てるだけでしたよね？」
紅美鈴（ほん・めいりん）はフランの言葉に肯定を返す。そのついでに珍しく大人しくしていたお嬢様に疑問を持ったようだ。
「ああ……。ま、確かに着いていってもよかったけど……」
そう言ってその場から移動する。彼女に日傘を差しているメイド服の少女は、分かっていたかのように淀みなく歩調を合わせ、自らの主である彼女を太陽の光から守る。

そうしてたどり着いたのは、横島が埋まっていた石畳。当然そこには人の頭程の穴が空いており、その周りには未だ乾いていない血溜まりがあった。
少女はそれに指を這わせ、あろうことか、血のついた指を口内へと誘い、舐めとった。
「わっ、お嬢様ばっちいですよ！」
美鈴が慌てて制止するが、少女はすでに血を嚥下している。それを見たメイド服の少女は主に問いかける。
「どうでしたか？　お嬢様」
従者の問いに少女は答える。
「――ああ、気に入ったよ。これほどのは今までなかったな」
少女は口角を僅かに上げる。その軌跡は、美しい程の微笑を描き出している。
「ふふ……。これから先、面白いことが待っていそうだ――」
そう言って少女はメイドの少女と共に帰路につく。美鈴やフラン、パチュリーもそれに続いた。
「咲夜、紅魔館へ戻ったらお茶を用意してちょうだい」
「畏まりました、レミリアお嬢様」
主の要望にメイド服の少女、十六夜咲夜は笑顔を以て答える。それを見た彼女も、釣られるように笑顔を強くする。

妖怪の山の麓、霧の湖にある島に存在する悪魔の館『紅魔館』――。
その館の主であり、五百年を生きる吸血鬼の少女、レミリア・スカーレットは、幻想郷に墜落した男に待ち受ける『運命』を幻視し、おかしそうに、楽しそうに笑っている。

第二話
『横島君、踏んだり蹴ったり』
～了～

第三話『長かった一日が終わって』

逢魔が時にほど近い空。黒と朱の空の合間を、少女の一団が文字通り飛んでいる。目指す先は迷いの竹林。その中に存在する永遠亭だ。

藍の隣を飛んでいる霊夢は、藍が抱えている橙について質問を投げかける。

「今更だけどさ、アンタさっき橙は置いていくって言ってなかったっけ？」

「ん？　ああ、私も最初はそのつもりだったんだが……。あんなことが起こったからな。紫様に命の危険が無いのは伝わってくるんだが、橙も紫様の側に居たいだろうし、な。……というか置いていく方が心配になって……」

「ああ……。確かに……」

藍からの返答は実に理解出来るものだった。何だかんだ言っても藍は過保護なのだ。それは自らの主に対してもそうだし、橙に対しても変わらない。だからこそ彼女は心労を溜める一方なのだが……。彼女はどことなく、それすらも楽しんでいるような節が存在する。もしかしたら『マ』のつく人なのかも知れない。

一団の最前列を飛行する妹紅と輝夜。彼女達はお互いに横島を気にしながらも雑談を続けている。

「で、どうなんだ輝夜？　こいつの顔に覚えはあるか？」
「う～～ん……。多分だけど、無いと思う。私達は長いこと永遠亭に引きこもってたから、他の誰かと会うことも無かったし……。まあ、妹紅が帝から強奪したみたいにお爺さんとお婆さんに渡した蓬莱の薬を奪って飲んだっていうのなら、私が知らなくても当然なんだけど……」
　輝夜は自らを養ってくれた老夫婦を思い出したのか、表情が曇る。後で聞いた話だが、あの二人は何者かにより殺されたらしい。その犯人がこの男なのだとすれば、自分は迷わずこの男を殺すだろう。何度も何度も、殺して殺して殺し尽くす。自分が蓬莱人となったのを後悔させ、心も殺し、絶望すらも枯れ果てるまで、殺して殺して殺し尽くす。
「ま、この人が犯人だったらだけど……」
「あん……？　まあ見覚えがないならいいけど……。今思えば、こいつは『蓬莱人』ってわけじゃなさそうだな。私達やお前んとこの薬師みたいな感じはしないし……。妖怪でもないみたいだし、恐ろしく頑丈な人間……なんじゃないかなぁ、多分」
　流石の妹紅も自信はないらしい。確かに石畳に頭部が完全にめり込む程の勢いで墜落したというのに、本人は気を失う程度で済んでいるのでは、自分達と同じ『蓬莱人』であると疑うのも仕方がない。

蓬莱の薬を飲んだ者は蓬莱人と呼ばれる存在となる。それは所謂『不老不死』だ。肉体ではなく魂を主軸とし、如何なる場所にでも肉体を復活させることが出来るという。

今現在蓬莱人は幻想郷に三人が存在する。即ち藤原妹紅、蓬莱山輝夜、そして八意永琳である。その内妹紅と輝夜は過去のとある出来事から憎しみ、殺し殺され合う関係だったのだが、最近はその感情も昇華されたらしく、『仲良く喧嘩する（殺し合う）』仲となっている。語弊があるが、簡単に言えばお互いに多少デレたということだ。

「師匠なら何か解りますかね？」

「まぁ、解るでしょうね。なんてったって永琳だし」

「だろうなぁ」

そんな『喧嘩するほど仲が良い』を実践している二人に問いかけるてゐを背負った鈴仙は、妹紅に担がれている横島を今更ながらに観察していた。

（あ、もう血が止まってる……。本当に人間なのかしら……？）

鈴仙は横島の人外じみた回復力に舌を巻く。師匠なら面白がって解剖しようとするだろうなぁ……、なんて考えていたりもするようだ。そして、永琳のことを思い描いたせいか、鈴仙は何故か先程から背中にしがみついているてゐの様子を訝しく思う。

「……何かブルブル震えてるけど、何かあったの？　背骨に液体窒素を流し込まれたような、みたいなこと言ってたけど……。ていうか何で背中にしがみついているのよ？」

てゐは鈴仙の背中に埋めていた顔を上げ、顔をこちらに向けている鈴仙と目を合わせる。

「いや、何か分からないけどとてつもない悪寒が……。くそ、マジに震えてきやがったウサ……」

てゐは動揺のあまり語尾がウサになっている。普段の飄々とした姿からは想像が出来ない程の狼狽えっぷりだ。

流石に気になったのか、最後尾に付いていた文と魔理沙も横に並ぶ。

「アレだよ、もしかしたら永琳に悪戯したとか、薬を入れ替えたとかそんなんじゃねーのか？」

「そうですね、もしかしたら今回の原因もそれかも知れませんね。あははは」

魔理沙と文はそう冗談めかして笑う。だが、てゐはその発言にどこか心当たりがあるのも確かだった。

（まさか……。いやでもあの薬は鈴仙用の分かりやすい罠だったはずだし、何よりあのお師匠様が引っかかるわけないし……。ああ、でも天才すぎて一周回ってるところもあるしなぁ……）

ぐるぐると頭を過ぎるのは永琳が分かりやすい罠にハマった姿。不安もあるが、てゐはこのまま永遠亭に向かうことにした。ここで逃げては後でもっと『大変な目』に合う

……。そんな予感がしたのかもしれない。
　各々が雑談しながらも飛ぶこと更に十数分。ようやく迷いの竹林が見えてきた。
「うわぁ……」
「ふむ……。今回は道案内は必要ないな」
「あややや、丸見えですね」
　そう。文の言うとおり、永遠亭の姿が晒されている。
　普段ならば鬱蒼と茂った竹や、竹林を覆う霧のせいで、例え上空からでも永遠亭の姿を見ることは叶わない。だが、今は違う。永遠亭の周囲２０メートル程の竹は吹き飛び折れ曲がり、霧に至っては竹林から消え失せている。
　また、永遠亭の状態も酷いものだ。診察室の天井が紫の妖力の柱で吹き飛ばされたのか、破片が永遠亭全体に降り注ぎ、場所によっては完全に崩れてしまっている。それ以外でも被害を受けていない場所など無く、ほぼ全ての壁面には大きな罅が入っていた。
「あ、あわわわわ……！　し、師匠!?　師匠ーーー!!」
「わ、私のコレクションとか……大丈夫かなぁ……？」
　ボロボロの永遠亭を見た鈴仙は大慌てで飛んでいく。輝夜もここまでの惨状は想像していなかったのか、顔色を蒼白にしている。ただ、彼女の持つ神宝等は特別頑丈な部屋に置いてあるのが救いか。

「師匠ー！　大丈夫ですかー!?　師匠ー！」

鈴仙は声を張り上げ、てゐを半ば振り回しながら永琳を探す。その大声を聞いたからか、お目当ての人物はすぐに現れた。

「はいはい、私は無事よウドンゲ」

「師匠！　良かった、無事でしたか……」

永琳の普段と変わらぬ様子にホッと息を吐く鈴仙。その周りに他の者達も降り立った。

「突然大勢で押し掛けて申し訳ない。紫様の無事を確認しに来たんだ。それと急患を連れてきた。それで、紫様は無事なのだろうか？　いや無事なのは分かっているんだが、やはり不安でな。貴女の腕を疑っているわけではないのだが、これは仕方ないことだよな？　だから紫様は無事なのかどうかを確認したいんだ。どうなのだろうか。何があったのだろうか。紫様がこんな大変なことを起こすなんて……。一体何があったんだ？　見ろ、橙もこんなに震えてしまっている。紫様が無事かどうか心配なのだろう。ああ、私だって心配だ。で、紫様は無事なのか？」

「紫が心配なのは分かったから落ち着きなさいな、八雲藍」

「むぐぐぐぐっ!?　……ふぅ」

橙を抱きかかえて永琳に詰め寄る藍の顔に、永琳は何か液体の染み込んだ布を押し当

てた。それだけで藍は何かスッキリしたかの様に落ち着いた。一体如何なる薬を用いたのだろうか。

「それじゃ紫が休んでる部屋まで案内するわ。そこならその人の治療も出来るしね」

その言葉と共に永琳は屋敷の体裁を保っていない永遠亭へと歩き出す。鈴仙達は不安を顔に滲ませながらもついていく。

（ふふふ……逃がさないわよ、てゐ）

「ウサァッ!?　ま、また悪寒がぁ!!?」

「ちょ、耳元でうるさい！」

てゐの叫びが皆の不安を煽る。しかし、程なくして目的の部屋にたどり着き、その感情も紛れていった。

「輝夜、あなたの能力でこの部屋を『保たせて』ちょうだい。ウドンゲはもう一組布団を、てゐは皆の分の座布団でも用意して」

「はいはーい」

「了解です」

「わ、分かったよ」

鈴仙とてゐは部屋の押し入れから布団と座布団を出し、妹紅が横島を布団に寝かせた。てゐは一人一人に座布団を渡していく。そして輝夜は永琳に言われた通りに能力

を行使する。

彼女の能力は『永遠と須臾をあやつる程度の能力』である。永遠とは一切の変化を拒絶し、永遠に姿を変えることのない状態にする力。この力は蓬莱の薬を作るのにも使用されている。

対する須臾とは、人が認識することが出来ない程の一瞬を指す。乱暴に纏めてしまうならば、輝夜の能力とは時間を操ることとも言える。

「うーん……うーん……」

「凄い……私、寝込んでるやつが『うーん、うーん』って魘されてるの初めて見た」

「ああ、私もだぜ……」

「何に感動してるんですか、お二人共……」

霊夢と魔理沙のどこかズレた反応に、メモ帳にネタを書き込んでいる文が苦笑しつつ答える。

「紫さま……。藍さま、紫さまは大丈夫でしょうか……？」

「ああ、私はラインが繋がっているからな。紫様は大丈夫だ」

藍と橙はすぐさま紫の様子を確かめる。どうやら魘されている以外に目立った外傷は見当たらない。実は頭部からかなりの勢いで血を噴射したりしたのだが、もう既に治ってしまったようだ。紫の体が驚異的な回復力を持っていたのか、それとも永琳の薬

が効いたのか……。
「八雲紫が大丈夫なら、そろそろこいつの治療をしてほしいんだが……」
　妹紅は横島を指差し、永琳に目を向ける。この放置されっぷりは流石に哀れに思ったのだろう。
「ふむ。――でもその前に……これで良しっと♪」
　永琳は横島の頭部の傷をちらりと見て、その後すぐに行動に移る。
「……あの、お師匠様」
「何かしら、てゐ？」
「いや、何で私の手足を縛って……？」
　ただし、それはてゐの両手足を複雑に縛り付け、自由を奪うことだった。てゐの言葉に眉をピクリと動かし、懐から何かを取り出す。
「理由は『これ』よ」
「げえっ!?　そ、それは……！」
　永琳が取り出した物。それは、てゐが栄養剤とすり替えた精力剤のビンだった。それは紫が中身を飲み干したはずが、何故か半分近くまで液体が入っている。
「ま、まさかお師匠が引っかかった!?　分かりやすくラベルをズラして二重にしたり、下の文字が透けて見えるようにしてあったのに……!?」

「はいドーン」
「んむぐぅっ!?」
てゐ曰わく分かりやすい罠に引っかかった腹癒せか、永琳はそのビンをてゐの口に突っ込み、中身を無理やり飲ませる。
「あなたのせいで紫があんなことになったんだから、ちゃんとお仕置きはしないとね」
「う、ぅおぉぅ……!? か、体が熱い……! これは、キツいぃ……」
「あぁ……本当にてゐさんのせいだったんですねぇ」
てゐは手足を縛られていて動けず、モジモジと身じろぎすることしか出来ない。文はその様子をメモ帳に書き記しながら苦笑するしかない。
「はい、猿轡して押し入れにポイッと」
「ふむぅうう〜〜〜!」
てゐを押し入れに押し込めた永琳は『良い仕事をした』と言わんばかりにかいてもいない額の汗を拭う。拷問は皆がいないところで、ゆっくりと行うのだろう。今現在もかなりキツいようだが……それでもまだ足りない。
「ふ〜ん……。これが原因だったのね……」
輝夜は永琳からビンを受け取り、しげしげと眺める。
「ふむ。『ヌカロクは固いウサよ』か。ま、ヌカロク出来るんならそれはもうさぞかしカ

タいんでしょうね！」
　ぷふふーっと笑いを吹き出す輝夜に、鈴仙他の少女達は苦笑いだ。彼女程の美貌を持つ少女がこんな下品な下ネタを言うとは誰も思うまい。
「……」
「ん？　どうかしたの、妹紅」
　妹紅は先程の輝夜の下ネタにも動じずにいた。彼女は輝夜のビンを眺めている。そして、輝夜にこう問い掛けた。
「なあ……、ヌカロクって何だ？」
「えっ？　あんた千年以上生きてて知らないの？」
　そう、妹紅はその言葉を知らなかった。純粋無垢な視線が輝夜を射抜く。
（まさか千年生きててそういうのを全く知らずに過ごしてきたのかしら……。ああ、でも妹紅はずっと私に復讐することで頭がいっぱいだったみたいだし……。うーん、それにしてもこの純粋な視線……。イイなぁ、汚したくなるなぁ、じゅるり）
　中々に下品な発想をする輝夜姫。彼女は妹紅の手を取って歩き出す。
「私が教えてあげるわ。ここじゃなんだし、他の部屋に行きましょう」
「え、いや何でここじゃ駄目なんだよ？　ああ、分かったから引っ張るな」
　二人は連れ立って出て行った。

「教えてやるって……何する気なんだ、輝夜のやつ」
「そりゃあ……、ナニなんじゃない？」
部屋に残った少女達が若干顔を赤らめる。すると、少し遠くから妹紅の声が響いてきた。
「――――え、おい何で服脱いで……。ちょっ!?　バカやめろ何で私の服を脱がせようと……!?　あっ、や、やめ――――アッーーーー!!?」
「……」
「……」
少女達は沈黙するしかなかった。程なくして、『フジヤマヴォルケイノーーー!!』という叫びと、まさに火山の噴火の様な轟音が響き渡った。
「いやー、あっはっは。まいったわー、一回死んじゃったわー」
「お前は死なないだろうに……」
少ししてカラカラと笑う輝夜と、顔を真っ赤にした妹紅が戻ってきた。一体ナニがあったのか、妹紅の服は乱れ、胸を隠すように両手を置いている。
「はいはい、戻ってきたところ悪いけど、今からこの子の治療をするからね。どうやら頭だけじゃなくて全身に傷があるようだし、女の子には見せられないわよ」
手をパンパンと叩き永琳が号令をかける。その言葉に文と霊夢に魔理沙、藍と橙と妹

紅は部屋から出て行く。残ったのは治療をする永琳、助手（雑用）の鈴仙、暇つぶしに輝夜だ。

「あ、鈴仙は他の部屋からこの子が着れる服を探してきてくれる？　この子の服は血で汚れてるし、着替えさせないといけないから」

「はい、探してきます」

鈴仙が部屋から出ていく。それを横目に永琳はまず横島の頭部の傷を確かめる。

（……思った通り傷はほとんど塞がっている。服に付いた血の跡からしてかなりの出血のはずだけど……）

永琳は傷の処置をしながら考えを巡らせる。永琳からすれば簡単な処置とはいえ、そのスピードは驚異的だ。

「輝夜、この子の服を脱がせるからちょっと手伝ってちょうだい」

「りょうかーい」

こう見えても輝夜は力持ちだ。以前にも、皆に見せびらかすために『金閣寺の一枚天井』という巨大構造物を両手で持ち上げている。そんな怪力の持ち主である彼女にとって、見た目よりは重いとはいえ、横島程度の体重は有って無きが如しであった。

二人はひょいひょいと服を脱がしていく。横島はあっという間に下着を残して裸となった。

「ふむ。着痩せするタイプというか、思ったよりも筋肉質なのね」
「輝夜、傷口近くをつつかないの」
輝夜は筋肉の感触を確かめるように横島の体をつつく。ただし、その場所は永琳の言うとおりに傷口付近だ。輝夜がつつく度に横島から軽い呻きが漏れる。
「全身の傷も塞がってきている……。驚異的な回復力ね、本当に人間なのかしら」
（ああ、永琳が解剖したそうに彼を見ている）
横島の回復力に永琳のマッドな部分が反応したようだ。
「ん？　案外際どいところまで怪我してるわね」
「あ、本当だ。えいっ」
永琳がとある場所の傷を見つける。それを確認した輝夜が『治療するためだもの、仕方ないわ。私は悪くない』といった感じで下着を思い切りずらす。
「Ｏｈ……、Ｉ　ｗａｓ　ｖｅｒｙ　ｓｕｒｐｒｉｓｅｄ……」
「ちょっ、いきなりどうし……。Ｗｏｗ……、Ｔｈｉｓ　ｉｓ　ｖｅｒｙ　ｂｉｇ……」
一体ナニがどう『ｂｉｇ』なのか、それは彼女達にしか分からない。一つ言えることは、横島が意識を失っていることが幸運であるということだ。もし意識があったのなら、彼は新たな自分を発見していたのかもしれない。
「師匠、遅くなってすみません。無事なのは大きめの浴衣くらいしかありませんでした

……って、何かあったんですか？」
「いえ、何もないわよ？」
「ええ、その通りね」
　鈴仙が戻ってくる前に既に治療は完了していた。横島の回復力のお陰か、処置はすぐに終わったようだ。勿論下着もちゃんとはかせている。
　永琳は鈴仙と一緒に横島に浴衣を着せる。鈴仙は横島の体に多少顔を赤らめるが、その手は淀みなく動く。こういった場合は彼女の性格とは無関係に動けるらしい。
「よし……。これで紫もこの子も大丈夫ね。後は二人が目を覚ますのを待てばいいんだけど……」
　永琳は部屋を見渡す。いくら永遠の力でこの部屋を保っても、これでは精神衛生上良くはない。永遠亭の被害も馬鹿にならないし、これでは修復するより建て直した方が早いし、金銭的にも安くすむだろう。
「その場合はてゐの財産から資金繰りしましょうか……」
　押し入れからてゐの嘆きの声が聞こえてくるようだ。鈴仙はてゐに同情の念を抱いたが、これも自業自得。仕方のないことなのだ。
「……そういえば、私達今夜どこで寝るの？　被害が少ない部屋はここくらいだし、かと言ってここはかなり狭いし……」

そう。この部屋は狭い。元々ここは単なるデッドスペースだったのをリフォームした末に作られた部屋だ。それ故に横島と紫の二人のスペースくらいしかないほどに狭い。

「ねぇ、皆はこの後どうするの？　流石に今の永遠亭には泊まれないわよ？」

「ああ、私はもう帰るわよ。紫の無事も確認したし、異変の原因も分かったし。……まあ、紫の意識が戻ってないから帰るとも言うんだけど」

「私もだなー。これ以上ここに居ても面白いことは無さそうだし。輝夜のお宝を借りていこうかと思ったけど見つからないし」

「貸さないわよ」

輝夜の言葉に真っ先に反応したのは霊夢と魔理沙だった。

「私もお二方の意識が戻らないと取材は出来ませんしねぇ。他の方は先程済ませたのですが……」

「我々も戻るしかないな。本来なら側に居たいところだが、生憎私達では八意永琳の足を引っ張ることしか出来ない……」

「藍さま……」

「まぁ、私の家はすぐそこだし……」

それに他の皆も帰るようだ。輝夜はそれを聞き、妹紅に視線を合わせる。

「ねえ、妹紅」
「ん？」
「私達、泊めてくれない？」
　輝夜はそう要求した。永遠亭は既に崩壊寸前。永遠の力で保たせている部屋も狭く、怪我人を寝かせておくくらいのスペースしかない。ならば、輝夜が妹紅の家に泊めてほしいと言うのは、ある種必然であった。
「はぁ？　いや、そんなこといきなり言われても……。っていうか私『達』って……」
「それは勿論私と永琳と鈴仙だけれど」
　つまりてゐ以外の永遠亭メンバーを泊めろということらしい。これには妹紅も困惑する。
「あ～……。まぁ確かに永遠亭はズタボロだしなぁ……。とは言うが、私の家も相当狭いけど」
　妹紅は視界に広がる永遠亭を見やる。安全な場所など何一つ無い。あるのは廃墟にしか見えない無惨な爪痕のみだ。
「あ、私は紫達の様子を見てないといけないから、輝夜とウドンゲだけでも泊めてあげられないかしら？」
　永琳が律儀に挙手をしてから発言をする。

妹紅は考える。いきなり住んでいる家が崩壊したのだ。すぐに代わりの住居なぞ見つかるわけもない。今必要なのは最低限の安全性があり、比較的永遠亭に近い場所。

「となると私の家しかないか……。分かったよ、ウチに泊まればいいさ」

「おぉ！　ありがとうもこたんっ!!」

「もこたんは止めろ」

妹紅の両手を握り喜びを表す輝夜に皆は苦笑を浮かばせる。もうすっかり夜は更け、月が空にぼんやりと輝いている。

「あややや、もうこんな時間ですか。それでは私は帰りますね。お二人が目を覚ましたら教えてください、すぐに取材をしに伺いますので。それでは！」

文はそれだけ言うとかなりのスピードで空に躍り出た。もはや付近に姿は見えず、彼女の黒い翼は夜の闇に溶けて消えている。

「では我々も失礼しよう。八意永琳、紫様をくれぐれもよろしくお願いします」

「ええ、任せておきなさい」

「ふふ……。では、これで。行くぞ、橙」

「はい、藍さま。皆さん、さようなら」

藍と橙の二人も、夜の空を飛んでいく。橙は紫のことを気にしてか、何度も永遠亭を振り返っている。

「んじゃ、私達も帰りましょうか」
「そーだな。それじゃあな、皆。次に会うときは紫達も元気なことを祈ってるぜ」
「……紫が目を覚ましたら、神社に来るように言っといてね」
霊夢、魔理沙も帰路につく。霊夢は申し訳なさそうな表情を浮かべていたが、全ては紫が目を覚ましてからだ。それまで彼女の表情が晴れることはなさそうである。
そして残ったのは妹紅、輝夜、鈴仙の三人だ。
「あー、それじゃあ二人はこっちで預かるな」
「ええ、よろしく。二人共、あまり彼女に迷惑をかくないようにね」
「勿論です、師匠」
「はーい。ふふっ、お泊まりなんて初めてだから楽しみね♪」
若干緊張気味の鈴仙に対し、輝夜は如何にも楽しそうにしている。永琳も妹紅だから許可したのか、他の者ならば鈴仙を、ましてや大事な主である輝夜を預けたりはしないだろう。
永琳は遠ざかっていく三人に、微笑みつつ手を振っている。それに鈴仙は軽く、輝夜は思い切り手を振り返す。
「ふふふ……。さて、こっちの二人は、と」
永琳は横島と紫の額の汗を拭う。二人共顔色も回復し、もはや魘されてもいない。ど

うやら互いに飛び抜けた回復力の持ち主のようだ。
「私は楽出来るから良いけど……。――二人共解剖しちゃ駄目かしら……？」
駄目に決まっている。押し入れからそんな言葉が聞こえたような気がした。

迷いの竹林の奥地、永遠亭から離れること数メートルのところから覗く、夜の闇に紛れた視線。永琳はそれに気付かなかった。

――そして今、長い一日は終わりを告げ、夜は明ける――

「ん……。ぅあ……？　どこだ、ここ……」
スキマによって幻想郷に墜落した一人の少年、横島忠夫がついに目を覚ました。

第三話
『長かった一日が終わって』
～了～

第四話『幻想になった横島』

目覚めて初めに見た物は木組みの天井だった。

屋敷の主の趣味か、それとも大工の趣味なのか、それは竹をふんだんに使用した竿縁天井だ。平時ならば、それは天井板の美しい木目を鮮やかに飾る極上の額縁だったのであろうが、今は竹縁が所々で折れ、天井板は外れ落ち、無惨な姿を晒している。

また、天井だけでなく、壁にも亀裂が入っており、さながら廃墟一歩手前の和室といった風情だ。

「ん……。ぅあ……？　どこだ、ここ……」

当然、彼、横島忠夫にとってそこが見覚えのない部屋であるのは確かだ。横島は自分の服が浴衣になっているのを訝しんだが、それも数瞬。キョロキョロと辺りを見回し、隣に敷かれている布団に眠る自分とは色違いの浴衣を着た少女、八雲紫をその視界に捉えた。

「ん？　おお！　か、可愛い!!」

横島の煩悩センサーに早速の反応。だが、それには問題があった。

「可愛い……。確かに可愛いのだが……！　くっ、惜しい!!　あともう少し色々と育っ

ていれば飛びかかっても問題無かったのに……!!」

大問題である。

そんな横島が発する邪な気配に敏感に反応したのか、紫の体が無意識にビクッと跳ね上がった。ただし、意識を取り戻すほどの気配ではなかったようで、今は変わらず可愛らしい寝息をたてている。

「う～む、美少女の寝顔観察も良いのだが……。――あの押し入れ、何かすげえ気になるな……」

横島の視線の先にある押し入れ。何かそこから怪しげなオーラが発せられている気がする。それは何というか、ピンク色のオーラというか、妙な熱気と陰気を放っているというか。陰気というか淫気というか。

「しかし……。うーん、何か開けたら良い目を見れるような気もするし、逆に落ちるところまで落ちてしまう気もする……。いや、落ちるって何だ?」

横島は自分の霊感に引っかかる何かに首を捻る。考えても考えても答えが出ないので、その内横島は考えるのを止めた。

すると、どこからか足音が響いてくる。横島がその方向に振り向くと同時に、視線の先の襖がスッと開かれた。

「あら、目が覚めたのね」

涼やかな声を響かせるのは八意永琳。彼女も美少女なため、当然横島の煩悩センサーが反応してしまう。

（ぬおぉ!?　こ、この子もかなりの美少女やないか！　嗚呼、でも……やっぱり色々と足りん!!　チチとかシリとかフトモモとか!!　あと年齢とか!!!）

本人を前にして失礼なことを声に出さないようになったのは、彼にとって劇的な成長と言っても良いだろう。ただし、横島が考えていることには間違いがあるのだが……。

失礼な考え事をしているとはつゆ知らず、押し黙って自分の顔に見入る横島を不審に思ったのか、永琳は頬に手を当てて推測を口にする。

「……？　大丈夫？　やっぱり、どこか痛いところがあるのかしら……」

「うえっ？　えっと、どういうことでしょう……？」

どうやら横島は墜落した時の記憶が飛んでいるらしい。あれほど強かに頭を打てば、多少の記憶の混乱も仕方がないだろう。永琳は横島の治療中に輝夜から聞いた事の顛末を話してやった。

「……という訳で、貴方はこの屋敷、『永遠亭』に運ばれてきたの。ちなみに貴方の服は血まみれだったから、洗濯して今は乾くのを待ってるところ」

「あー……、そうだったんすか。確かにそんなことがあったよーな……。いやー、とにかくありがとうございます。怪我の治療どころか、服の洗濯までしてもらっちゃって

……」

頭を掻きながらも愛想良く笑顔を浮かべて礼を言う横島。永琳はその礼を受け取りながらも、彼の口調に違和感を持った。

「どうでもいいことなのだけど……、どうして敬語なのかしら？」

ほんの少しの疑問。普段なら永琳は子供扱いとまではいかずとも、やはり見た目相応の対応を受ける。永琳と初対面でありながら敬語で話されるのは、実はこれが初めてのことであった。

「え、あー……。そういや何でっすかね？　何となくですけどそうしなきゃいけないような気が……」

横島はまたも首を捻る。どうやら、横島は無意識の内に永琳が自分よりも上の存在だと感づいたのだろう。力でもそうだが、実は年齢でもそうだ。八意永琳――彼女は数億年を生きる、幻想郷一のお姉さんなのである。

「ふむ……。あ、そういえば自己紹介がまだだったわね。私は八意永琳。この永遠亭の薬師――分かりやすく言えばお医者さんかしら」

うっかりしてたわ、と遅れながらも自己紹介をする永琳は、どこかおキヌとはまた違う天然の気配を漂わせている。

「あ、永琳先生っすね。俺は横島忠夫。こう見えても資格持ちのゴーストスイーパーな

んすよ！」

　ふふんと胸を張り、得意満面で自己紹介をする横島。本来は未だ見習いの身なのだが、そこはそれ。美少女の前で見栄を張るのはいつものことだった。

　しかも彼の頭の中では「ええっ!?　ゴーストスイーパーだったんですか！　すごい、抱いて!!」と自分にしなだれかかる永琳を妄想している。それに対し自分が『ふふ……、いけないよお嬢さん。君にはまだ早いんだ。君が大きくなって、また僕と出会うのを楽しみにしているよ』と返すところを美化百二十パーセントでお送りしている。よくもまあ『色々足りない』などと考えられたものだ。

「……ゴースト、スイーパー？」

　横島のドヤ顔に対し、永琳は頭の上にクエスチョンマークを浮かべている。いや、言葉の意味は分かるのだ。ゴーストスイーパーというからには悪霊祓いや退魔師を指すのだろう。だが、資格持ちというのが分からない。自分達が引きこもっている間に、いつの間にかそのような制度が幻想郷に存在していたのだろうか？

「あ、あれ？　ゴーストスイーパー知らないんすか？　おっかしいな……。あんな事件もあったし、国家資格だし仕事のギャラも高額だしで世界的に有名な資格のはずなんだけど……」

　彼の後半の呟きが本当ならば、自分が知らないのは確かにおかしい。第一、妖怪の山

に存在する神社『守矢神社』の風祝（かぜほうり）にして現人神である東風谷早苗がその資格を持っていないのはおかしい。更に言えば、悪霊祓いや退魔師が国家資格として存在するのならば、あの二柱がこの幻想郷にやってくるのも変だ。彼女等程の神族ならば外の世界で信仰を得られないはずがない。

いよいよもって永琳の疑問は確信へと変わってくる。それについて横島に確認せんと声を出そうとしたとき、永琳の耳は遠くから永遠亭に向かってくる少女達の会話を捉えた。

「いやー、お泊まりってこんなに楽しいのねー♪　また妹紅の家に泊まらせてもらってもいいかしら？」

弾んだ調子で問いかける輝夜に対し、妹紅は顔を赤らめ、ジトッとした視線で睨みつけている。

「お前は二度とウチには泊めん……」

「ちょっ、あれ!?　私なんかおかしなことしちゃった!?」

「そりゃあんなことしたらそうなりますよ……」

妹紅の言葉にショックを受ける輝夜だが、妹紅と同じく赤ら顔の鈴仙からのダメ出しに更に表情を崩れさせる。

昨夜、輝夜のテンションはやけに高かった。本人達は否定するだろうが、生まれて初

めて友人の家に泊まることになったのだ。それが嬉しくてたまらなかったのだろう。
だが、彼女は少し調子に乗りすぎたのだ。皆で風呂に入るとき、妹紅に背中を流すと言って泡にまみれた自らの肢体を以て妹紅の体を洗おうとした。
寝る時にも布団が二組しかないからと、妹紅と一緒の布団に潜り込み、妹紅の寝巻きに手を突っ込んだり顔を埋めたりした。
そんな風なことを今まで繰り返していたのだ。妹紅が輝夜を出入り禁止にするのは当然と言えよう。
しかし、輝夜は輝夜で言い分があるようだ。
「そ、そんな……。ああすれば『色々と盛り上がって楽しい夜を過ごせる』って、前々からてゐに教わってたから恥ずかしいのを我慢して試したのに……」
「「またあいつか」」
妹紅と鈴仙の声が重なり、今ここにてゐの未来が決定した。
輝夜のことになると超人的な地獄耳となる永琳が、その会話を一言一句逃さずに拾ったのだ。
「……」
「うひぃっ!?」
突如として永琳から吹き上がる強烈な怒気。その重厚な圧力に横島は恐怖の呻きを

上げる。しかし、外の歩みに淀みはない。どうやら押し入れに向かって放たれているようだが、哀れなのは永琳と押し入れに挟まれた横島と紫である。

「お仕置きは十倍ね……」

「――ッ！　はっ!?　こ、ここは……!!?」

永琳の口から微かに拾えた声は、聞く者全てを凍らせるような、絶対的な何かがあった。それは今まで眠っていた紫を強制的に目覚めさせるほどだ。そして押し入れから迸るのは桃色オーラではなく、既に絶望のオーラへとその感情の色を変えている。何とも感情表現豊かな押し入れがあったものだ。

「――ん、あら？　目が覚めたのね、紫」

「え……。あ、え、ええ。お、おはよう……？」

紫は額に浮かんだ汗を拭いながら目覚めの挨拶をする。前髪の幾筋かが額や頬に張り付き、急に目覚めたせいか激しい動悸からくる上気した頬から匂い立つ見た目年齢不相応な色気は、横島の煩悩を激しく刺激する。

（くぅ……っ！　見た目年下やと言うのに……、何ちゅう色っぽさや!!）

このままでは横島の煩悩が炸裂してしまいそうだが、それよりも前に、襖が多少強い音を出して開かれた。

「ただいまー、永琳！」

輝夜姫一行の帰還である。

「っ!!?」

横島が輝夜を見た瞬間、彼はまるで雷に打たれたかのような衝撃を受けた。

（な、何やこの子!?　可愛い……なんて次元やないぞー!!?　見た目シロやタマモより多少年上くらいやのに……!?　よく見たら後ろの二人もかなりの美少女やし……！　ありがとう！　俺の人生にありがとー!!）

どうやら横島にとって、輝夜は煩悩よりもまず戸惑いと、何かに対する感謝の方が強くなるほどに美しかったらしい。

しかし、それは当然だ。何せ彼女はかぐや姫。生まれ変わったばかりのタマモと違い、完成された傾国傾城の美少女なのだから。

「あ、起きてたんだ。二人ともどう？　体に異常はないかしら」

「ええ、多分……」

「は、はいっ！　大丈夫です!!」

紫は胸を押さえつつ、横島は妙に上擦った声で返事をする。横島の様子は普通ならば変に映るのだろうが、こと輝夜が相手だとそうではなくなる。時の有力者達に求婚された輝夜の美貌は伊達ではないのだ。男が輝夜にこういった反応を示すのはもう見慣れた光景なのだろう。

「それじゃあ皆自己紹介してね。色々と長い付き合いになるかもしれないしね」

永琳が胸の前で両手をぱむと鳴らす。輝夜達は永琳の言葉に顔を見合わせるが、自分達では永琳の考えることをそう簡単に理解出来るとは思っていない。なので、その言葉に従うことにした。

「あ、最初は紫からお願いするわ」

「え？　ええ、別に良いけれど……」

紫は寝起き故か未だ頭が働かず、機敏な対応が出来ずにいた。そんな自分を他人に見られるのが恥ずかしいやら悔しいやらで眉を顰めるが、それすらも紫の美貌の引き立て役となる。横島はもはやいっぱいいっぱいだ。

「私は八雲紫。この幻想郷の創始者の一人よ」

「紫さんっすね。で、幻想郷……って何すか？」

永琳同様に紫に対しても砕けた敬語で応対する横島。まずは永琳も話していなかった幻想郷の説明を受けることになる。

「幻想郷とは、結界で覆われたこの土地のことよ。大した広さではないけれど、それでもそこそこの広さはあるわ」

横島は他にも日本のどこかの山奥に存在することや、妖怪や妖精、神や悪魔といった現代における『幻想の住人』が幻想郷に存在していることを聞く。

そこで横島は最初の違和感を得る。『現代における幻想の住人』？　確かに彼等は幻想の住人であるとは言える。だが、『現代』とはどういうことであろう。横島の周りには人ならざる者が大勢居る。それは世界に認知されている。

何せ魔神が人間界に侵攻してきたこともあったのだ。前言を撤回することになるが、もはや彼等は幻想とは言えないのではないか。

――何よりも。

「……」

「……どうかしたかしら？」

珍しく真面目に考え込んでいた横島だったが、紫の訝しげな声に考えのほとんどが霧散した。

「いやぁ、別になんともないっす」

なはは、と多少大袈裟に笑った横島は、軽く息を吐くとぼそぼそと何事かを呟く。

「結界に覆われた土地……。妖怪とかが住んでる……。人狼の里みたいなもんかな？……でも」

ほとんどは自分で噛み砕いて理解するための物だったようで紫は多少拍子抜けしたが、後に続いた言葉によって紫の余裕は粉々に吹き飛んだ。

「でも――神魔族に知り合いは多いけど、幻想郷なんてこと誰も教えてくれなかった

な……」

その言葉を聞いた紫は、目を見開いて永琳へと顔を向ける。永琳は真剣な眼差しを返したあと、ゆっくりと頷いてみせた。それを確認した紫は深刻な様子で俯きだした。

「あ、あれ？　どうかしました……？」

「……ああ、いえ。何でもないの。後はそっちの三人ね」

紫は誤魔化しつつ横島の意識を三人に向けさせる。紫は思考の直中へと没入することにした。

「えーっと、私は藤原妹紅。気を失ったあんたをここに運んできたのは私なんだよ」

「えぇっ!?　ちょ、大丈夫だったのか？　俺、結構重かったと思うんだけど……」

「ああ、大丈夫大丈夫。私はこう見えて健康マニアだから」

自らを運んできたという妹紅を横島は心配するが、妹紅は余り関係のなさそうな答えを返す。その表情は何でもなさそうな笑顔だ。

「うーん、何ともないならいいけど……。とりあえずありがとうな、えっと、妹紅……ちゃん？」

「あー……、どういたしまして。でも、ちゃん付けはやめて。呼び捨てでいいから」

横島の礼を受ける妹紅だが、ちゃん付けには苦笑を浮かべる。彼女はそのまま鈴仙を促した。

「私は鈴仙・優曇華院・イナバ……です」
　人見知りであり、人間嫌いである鈴仙は目線を逸らしつつ名乗る。それに対し横島は若干困り顔だ。
「えっと……、何て呼べばいいかな？」
　先程の失敗を活かしたのか、単に名前が長いからなのか、横島は彼女にお伺いを立てる。
「じゃあ……イナバで」
「ん。分かったよ、イナバちゃん」
　横島は鈴仙の様子から人見知りが激しい子であると判断し、優しげな笑顔と、柔らかい声音で了解する。一方鈴仙はちゃん付けが恥ずかしかったのか、顔を若干赤らめ、そっぽを向いた。
　永琳は紫が見ている側の表情を真顔に、輝夜達が見ている側の表情をデレデレの笑顔にするという神業を人知れず披露していた。鈴仙の様子が余りに微笑ましかったらしい。
　そして、三人娘の最後の一人に番が回ってきた。
「ついに私の番ね。私は蓬莱山輝夜。何と、あの『なよたけのかぐや姫』本人よ」
　ふふんっと胸を張って元気よく自己紹介をする輝夜。表情も『さあ驚け』とばかりに

得意顔だ。しかし、その表情はすぐに消え果てることとなる。

「あぁなーんだ、迦具夜様だったんすか！　いやー最初誰だか全然分かんなかったすよ！」

「――――え？」

そのたった一文字の言葉は、一体誰が口にしたのだろうか。

「神無や朧は元気にしてます？　あ、そうそう月警官のねーちゃん達も！　いや、それにしても……随分思い切ったイメージチェンジっすね？　メドーサに言われたこと気にしてたのかな……？」

笑顔で親しげに話しかける横島に対し、輝夜は困惑している。彼女は彼に覚えがない。だが、『彼は彼女を知っている』――――？

「ちょ、ちょっと待って！　ちょーっと待って!!」

輝夜は両手を突き出して横島を止める。横島はそれに対し素直に応じるが、きょとんとした表情を浮かべている。

「良い？　いくつか質問するわよ？　――――まず一つ。貴方の名前は？」

輝夜は真剣な表情で問う。

「いや、名前って……。横島っすよ、横島忠夫。まさか忘れたなんて言うんじゃ……」

横島は情けない表情を浮かべ、輝夜に問い返す。それに返す答えはこうだ。

「いえ、忘れたわけじゃないわ。――私は貴方の事を『知らない』の」

……『知らない』？

まさかこの人は自分の事を知らないとでも言うのか？

輝夜の言葉の意味を理解したとき、横島が感情を沸騰させた。

「な、何でじゃー!?　月に魔族が攻め込んできた時に一緒に戦った仲やないすか!!　あの戦いからまだ一年も経っとらんとゆーのにー!!　あれほどの八面六臂の大活躍を『知らない』とかあんまりやぁああーーー!!」

横島はうおおーんと大量の涙を噴出させながら叫ぶ。確かに横島は誰しも忘れられぬ大活躍を演じた。

メドーサとディープキスしたり、女性しか居ない月警官をナンパしたり、メドーサを腹を痛めて（主に美神のせい）出産（?）したり、メドーサのパンツをガン見したり、メドーサに蹴りを食らわせようとして、間違えて自分の○○○○が手痛いダメージを受けたり、メドーサの顔を自らの股間に押し付けたり、生身で大気圏に突入したり……。

これだけあれば忘れるどころか知らないはずはないはずなのだ。だが、輝夜の表情は真実味を帯びている。そして、輝夜には先程の横島の台詞に聞き捨てならない物があった。

「月に魔族が攻めてきた……?　それはもしかして吸血鬼かしら……?」

輝夜はなるべく落ち着いた様子で横島に問いかける。横島もそれを見て、多少は落ち着いたようだ。

「いえ、蠅男と蛇女っすけど……」

やはり、輝夜はそれを知らない。第一、輝夜は千年以上前からずっと地球に居たのだ。仮に横島の言っていることが本当なのだとしたら、月には自分以外の『かぐや姫』がいることになる。

だが、それは有り得ない。有り得ないはずだ。

輝夜は必死に考える。だが、冷静になろうとしても中々上手くはいかない。こんな時に落ち着いて対処するために輝夜が取る手段は一つ。

「……助けて、永琳」

宇宙一頼りになる自分の従者にブン投げることだ。

そんな輝夜の悪癖に永琳は苦笑を浮かべるが、可愛い主の頼みを断るわけにはいかない。

永琳は紫と視線を合わせる。

「……八意永琳」

すると、紫が永琳の名を呼んだ。

「何かしら、八雲紫」

互いに視線を外さぬまま、数秒が過ぎる。紫は一つ息を吸うと、おもむろに問いかける。

「彼がどうしてここにいるのか……出来るだけ詳しく話してもらえるかしら」

「……ええ。まず、私が渡した薬を飲んだのは覚えているかしら？」

こくりと頷く紫。それを見た永琳はそれからのことを話していく。途中で『化学反応』とか『スパーク』とか、永琳にしては異様に曖昧な言葉もあり、輝夜と鈴仙が大いに驚愕する場面があったのは甚だ余談である。

そして、最後に。

「そうしたら妹紅達が彼を担いで来てね。博麗神社に開いたスキマから落ちてきたそうよ」

全てを語り終えた永琳はそっと息を吐く。紫は目を閉じ、大きく息を吸ったあと、ゆっくりと吐いていく。

「……そう。そういうこと」

紫が目を開いた。妹紅達三人や横島は、紫と永琳から発せられる雰囲気に飲まれたのか、声を出せずにいる。

紫は横島を見る。

「博麗神社に行きましょう」

そう言った。それで、はっきりするのだと。

「スキマは開けるの？」

「……」

永琳の簡潔な問いに沈黙を以て返す。手を握り、開き、力の感触を確かめる。

「もう、二日～三日はやめておいた方が良さそうね。ここから、飛んで行きますわ」

最初は眉を顰めていたが、最後には軽く笑顔を見せる紫。だが、それは彼女らしくない強がりめいたものだった。

「さて、妹紅。私も手伝うし、また彼をお願いしてもいいかしら？」

「ん？　ああ、別にいいけど」

どうやら永琳は妹紅と二人で横島を持ち上げるようだ。

「あー……。よく分からんのだが、俺はどうすれば……？」

横島は妹紅に声を潜めて聞く。妹紅からの答えは『脇を持ってやるよ』というものだった。

紫一行は取る物も取りあえず空を飛んでいく。

「すげえ……マジで飛んでる」

「あんまり暴れるなよー？」

横島は羽根もなく、神魔族でもないのに空を飛ぶ一行に目を見開く。彼の周囲で空を

飛べるのは神魔族を除けば数少ない。これなら訓練すれば自分も空を飛べるのではないか？　横島は子供の頃の憧れを思い出した。

「あと少しで着くわ……。ちょうど下が人間の里よ」

紫のその言葉に、横島は視線を下方へと向ける。

大小様々な民家が並び、所々に店と思しき物もいくつかあった。だが、人の姿は殆どなく、今がまだ早朝と言える時間帯とはいえ、その様は異常と言える。

「なんか、こう……寂しい感じっすね？」

「立て続けに異変が起こったからね。まだ警戒しているのよ」

「異変……っすか」

それを最後に会話は途切れる。別に気まずくなったわけではないのだが、横島には何となく話題が見つからない。

そうこうしているうちに、視界の先に真新しく造営された神社が見えた。

「ここよ。ここが博麗神社」

紫は降り立って一言告げる。横島はキョロキョロと辺りを見渡し、自分が落ちてきた場所だと気付く。

彼の視線の先には、石畳に空いた頭一つ分の穴がある。それを見た横島のこめかみには汗が伝っている。

「さて、横島忠夫。あそこの鳥居を見て」
紫は人間の里の反対側に存在する鳥居を指差す。横島は鳥居の位置に違和感を持ったが、それも一瞬。これからどうするのか、視線で紫に問いかける。
「あの鳥居をくぐれるかしら」
「……？　くぐれば良いんすか？」
横島の問いに頷く紫。横島はしきりに頭を捻りながらも鳥居に向かう。
そして、鳥居をくぐろうと一歩踏み出した――
「いっ!?」
だが、くぐれなかった。
「えっ？　あ、あれ!?」
何か、不可視の壁に阻まれるかのように、横島の体は鳥居から先に進むことは出来ない。
妹紅達三人はそれを見て驚愕し、永琳は目を伏せ、納得を示す。
「やはり、そうなのね」
紫の声が横島に届く。
「どういうことなんすか、これ？　何か結界みたいなのがあるんですけど……」
横島は自身に訪れた事態が未だ分からずにいる。紫はそんな彼に、今現在の彼の状態

を語る。
「横島忠夫。貴方は――この幻想郷から出ることは叶わなくなりました」
「……。――え？」
――貴方は『ここ』とも、『外』とも違う、どこか別の世界から連れて来てしまった

幻と実体の境界。博麗大結界。幻想郷はこの二つの結界に覆われている。
それは幻想と現実を別つ物であり、例外を除いて『外』の者が幻想郷に入ることはない。
その例外とは偶然に偶然が重なる……。さながら『奇跡』のような物であったり、『神』のような超自然的な力、またはそれがその者の『運命』であったりする物だ。
そこにもう一つ、加わるモノがある。
それが、『八雲紫』――神隠しの主犯だ。
彼女は偶に外の世界から人を攫ってくる。それは外の世界で神隠しと呼ばれ、恐れられた。
神隠しに合った人間がその後どうなったのかは定かではないが……。それは、八雲紫の意志を以て行われたことだ。
――だからこそ、八雲紫は横島忠夫に頭を下げる。

『!?』

八雲紫を知る者は皆一様に驚いた。永琳もこれは予想には無かったのか、珍しく目を見開いている。

「申し訳ありません、横島忠夫。全ては私の責任です」

本来ならばいくら紫とはいえ『別の世界』に無理矢理スキマを開くのは不可能だ。月へ行くよりも遥かに長い準備期間がいるし、何より力が足りない。

それは、別の『世界そのもの』に喧嘩を売る行為にも等しいからなのだが……、何らかの要素で、爆発的に能力が上昇すれば。

奇跡のような偶然に偶然が重なり、神の如き力を以て、数奇な運命を持つ者が存在し、導かれるように世界と世界の境界にスキマが開いたならば。

その瞬間だけならば、不可能など無くなるのではないだろうか。

故に彼は博麗神社に墜落した。外の世界には知る者など誰一人いない、真の幻想に等しくなった彼は、幻想と現実の狭間に落ちたのだ。

だからこそ、八雲紫は横島忠夫に頭を下げる。

薬のせいとはいえ、自らの意志を無くし、力を暴走させ、あまつさえその被害者に対して知らぬ顔を決め込むことなどは。

――たった一人だけしか存在しない、一人一種族の妖怪『八雲紫』としてのプライ

ドがそれを許さなかった。

「……そうだったのね」

だから、と。輝夜は得心した。彼が自分を知っていたのは他でもない。彼が居た世界に存在していた『かぐや姫』だったのだ。

「……」

横島は紫の謝罪を静かに聞いている。彼の頭を巡るのは、美神を始めとする仲間達の姿だ。

幻想郷から出られない。元の世界に帰れない。

八雲紫を見る。彼女は横島の目から見て、本当に真摯に謝っているように思える。永琳達の反応からもそれが分かる。

だからこそ、横島に去来した感情は怒りではなく、どうしようもない悲しみであった。

「もう……会えない？」

横島の掠れた声に、紫は顔を上げる。

「もう……、皆に、会えない……？」

横島の目に止めどない涙が溢れる。

それを見た少女達は沈痛な表情を浮かべ、紫はまた謝罪の言葉を口にしようとする。

だが、それよりも早く、横島の言葉が紡がれた。

「もう……、美神さんのチチもシリもフトモモも拝むことが出来ない……？」
「申し訳――――ん？」
聞き間違いかな？　と思った紫は横島を見やる。
「もう美神さんの体を見ることが出来へんやなんて……！　おキヌちゃんや小竜姫様の慎ましやかながらも均整の取れた体を見られへんやなんてー!!　エミさんや冥子ちゃんやマリアやワルキューレやベスパや魔鈴さんや小鳩ちゃんや愛子や弓さんや一文字さん達と仲良く（意味深）しとらへんとゆーのにいいいい!!　あとシロとタマモとパピリオ！」
横島忠夫の、男の慟哭が木霊する。涙はブシャァアア！　と噴出している。
「あ、あれ？　横島ってそういうキャラだったのか……？」
「いや、錯乱して訳の分からないことを叫んでるだけかも……」
「いやいや、錯乱してるからこそ本音がだだ漏れになってるのかも……」
妹紅達は突然のことに困惑し、ひそひそと話し合っている。
「……。……。……」
紫に関してはもはや呼吸すら止まっている。ちなみにその後ろで永琳が笑いを堪えている。彼女は横島の為人を見抜いていたのか、もしくは怪しげな寝言を聞いていたのか、『そういう』性格であることは見抜いていたようだ。

「こうなったら……！」
「っ!?」
突然泣き止み、視線をキッと強くして紫を睨む横島。それは何だか無駄に格好良く見える。
「チチとかシリとかフトモモとか見た目年齢とか少々物足りないが、この責任は貴方の体で払っていただきますゆっかりさはーーーーーん!!」
「えええええっ!?　っていうか失礼なー!?」
大変失礼な事を叫びながら突如高く飛び上がり、綺麗な放物線を描きながら紫に対してダイブをする横島に、紫は驚きと抗議の声を上げる。
しかし、いつもは年寄り呼ばわりされることが多い彼女は、年少に見られたのが少し嬉しいようだ。
このままでは横島のダイブが決まり、十八才未満お断りなことになってしまう。（実は十八才未満は横島だけ）
しかし、彼のそういった行動は実らない運命にある。
「ううるっさいのよ朝っぱからーーー!!」
「こ〝ほ〝ぁ〝あ〝っ〝!?」
とある少女の雄叫びと共に飛来した陰陽太極図が描かれた、拳大の玉。それが横島の

顔面に突き刺さり、彼はまた綺麗な放物線を描きながら人間の里に続く階段の先へと落ちていく。

「あああああ～～～……」

「「よ、横島（さん）ーーー!?」」

三人娘の叫びが辺りに響く。その様子を見ていた、陰陽玉を放った少女、博麗霊夢は欠伸をしながら紫に問いかける。

「何かあったの？　うるさかったから取りあえず陰陽玉飛ばしちゃったけど……」

「……ちゃんと確認しなさいな」

紫は石畳にぺたんと座っている。横島の行動は思いの外驚いたようだ。

「ふふ……。流石の妖怪の賢者も、あれには驚いたようね」

「……」

「？」

永琳の言葉に顔を赤らめ目をそらす紫に、何も分かっていない霊夢。

「……えーっと、そのー、紫……？」

霊夢は取りあえず先日のこともあるので紫に声をかけるのだが、それを遮るように幾人かの足音が響く。

妹紅達が横島を救出に向かったのだが、それよりも早く横島は帰って来たのだ。

日傘をさしたメイドの少女の傍らに居る、小さな吸血鬼の主の肩に担がれて。
「……レミリア？　何か用でもあったの？」
「ん？　ああ、今日は霊夢じゃなくて、こっちの薬師達の方にね」
レミリアは肩に担いだ横島を妹紅達に渡す。彼は目を回し、またもや気絶している。
「……流石に哀れだな」
「まあ、自業自得だけどね……」
鈴仙は横島に少し引いているようだが、妹紅と輝夜は苦笑気味だ。
「それで、私達に何の用なのかしら」
かつての経験からか、永琳は警戒を滲ませる。それに対しレミリアは両手を上げ、敵対の意志は無い事を示す。
「なに、簡単なことだよ。昨夜コウモリを通して見たけど、あの屋敷はズタボロで、再建しなくちゃいけない」
「……まあ、そうね」
永琳の肯定にレミリアは満足そうに頷く。
「それで、何が言いたいのかしら」
先を促す永琳だが、その表情から半ば確信を持っていることが分かる。
レミリアはにっこりと笑い――

「永遠亭が再建されるまで、私の紅魔館に住まないか？」

――そう言った。

第四話

『幻想になった横島』

～了～

第五話『二つの不安と二つの恐怖』

「永遠亭が再建されるまで、私の紅魔館に住まないか？」
「……うーむ……」
レミリアの爆弾発言から数秒、永琳は悩んでいた。
確かに永遠亭を再建するまでの間の住居をどうするか、それは迷っていた。
妹紅の家では狭すぎるし、新しく家を探すにもそう簡単に見つかる訳もないだろう。
最悪何日かは野宿を覚悟しなければならない。
だが永琳はそんなことをする気はさらさらなかった。
野宿？　馬鹿を言うな。そんなことをすれば輝夜にどんな悪影響があるか分からない。体調を崩すかもしれない。風邪を引くかもしれない。
――考えただけで嫌になる。
永琳はいつそのこと、輝夜だけでも妹紅の家に預けようと考えていた。今でもたまに思い出したかのようにちょっとした小競り合い（殺し合い）を始めることもあるが、別に二人は心底憎み合っているわけでもない。
それは『あの時』を境に昇華してしまったようだし、これから先あんなことが幾度も

起きてはたまらない。出来るならば『仲良く喧嘩する関係』が良いのである。
だから今回が良い機会とばかりに輝夜達を妹紅の家に泊めさせてもらったのだ。
……どうやらある意味期待以上の結果だったようだが。
――しかし、しかしだ。
永琳は思った。
『あれ？　このままじゃ私だけ除け者……？』
輝夜、妹紅と同じ蓬莱人であり、数億年を生きる永琳。流石の彼女も一人だけ仲間外れになるのは嫌だった。
「……理由を聞いても良いかしら？」
本当なら「喜んで」と即答したいところだが、過去の襲撃やレミリアの性格からちょっとした不安を覚えた永琳は、如何にも訝しんでますといった表情でレミリアに問いかける。
「うん、あー……その、だな」
途端に視線を逸らし、言いよどむレミリア。余程言いにくい理由でも存在するのか、永琳は本格的に訝しみはじめる。
「あーっと……ちょっと、耳を貸してもらえる？」
レミリアは頬をポリポリと掻きながら、ちょいちょいと手招きをする。

「……？」

永琳は首を傾げながらもレミリアに歩み寄り、腰をかがめて耳をレミリアへと寄せた。

「実は……」

レミリアは声を潜め、こしょこしょと理由を語り始めた。

一方、輝夜達三人は目を回して気絶している横島を囲み、頭を悩ませていた。

「しかし、横島の奴……。女好きだったのかな？」

「まぁ衆道よりは健全よね」

「そういう問題ではないと思いますけど……」

妹紅は苦笑を浮かべ、輝夜は横島の台詞から男女関係が気になったのか、頻りにソワソワとしている。鈴仙は相変わらず引いているようだ。鈴仙の人間嫌いが男性嫌いになるのは近いのかもしれない。

「それにしても女好き……。なら、誰か膝枕でもしてあげれば起きるんじゃないかしら」

「膝枕ですか……？」

「膝枕、ねえ」

「膝枕ですと!?」

「「え？」」
「……あれ？」
突如がばぁっと上体を起こした横島に、三人は驚きの声を上げる。横島はと言うと、疑問の声を上げた後、何故かふるふると震えはじめる。一体どうしたのかと三人が訝しんでいると――
「あぁーーー!!　俺のアホーーーっ!!　もう少し気絶しとったら三人の内誰かが膝枕してくれたかもしれへんのにーーー!?　俺のバカッ！　バカッ!!　バカーーーッ!!!」
うおぉんと涙を撒き散らし、ガンガン石畳を殴りつける横島。
その姿に妹紅は呆れ、鈴仙はやはりドン引きし、輝夜はお腹を抱えて笑い転げている。どうやら彼の様子が輝夜のツボにはまったようだ。
「あっはっは！　貴方面白いわねー、気に入っちゃった。後で本当に膝枕してあげましょうか？」
輝夜は「んふふっ」と笑い、目を細め、唇をにんまりと歪める。更に指を唇に添え、小悪魔めいた表情でそんなことを言う。
輝夜から醸し出される色気に触発されたのか、横島は鼻息荒く輝夜に振り向いた。
「い、良いんすか!?　マジで良いんすか、輝夜様!!」
「うむ、様付けとは苦しゅうない。別に私以外でも良いのよ？　ここには妹紅も鈴仙も

いるしねー♪」
「え、私も？」
「わ、私もですかぁっ!?」
輝夜は妹紅と鈴仙の腕を抱き寄せ、横島に笑いかける。その屈託のない笑顔は実に美しく、横島の頬は徐々に赤く染まっていく。
だが、急に巻き込まれた二人の表情は輝夜とは逆に渋いものだ。鈴仙などあからさまに嫌がっている。それに対する妹紅だが、彼女の場合はまた違う理由が存在した。
「いや、私なんかに膝枕されたって横島は喜ばないだろ？　別に可愛いって訳でもないんだし」
「え？」
「ん？」
「……？」
その言葉に真っ先に反応したのが輝夜。以下鈴仙、横島の順である。
そう、妹紅は自分の容姿にイマイチ頓着がなかった。また、千年以上生きている彼女の、通常とは違う価値観からくるものなのかもしれない。
「いやいや、妹紅さん。貴方はけっこうな美少女だと思うんだけど……」
輝夜は妹紅に対して率直な意見を述べる。鈴仙も隣でうんうんと頷いている。

「そう言われてもな……。鈴仙は可愛いし、輝夜に至ってはアレだし……。二人と比べると私なんてさぁ……」

妹紅はどんどんと俯いていく。どうやら彼女は輝夜達にコンプレックスを抱いているようだ。

確かに輝夜は傾国の美少女だ。妹紅も、自分の父が輝夜に求婚したと聞いたときは、正直なところ「うわぁ……」と思ったものだが、その後彼女の姿を見て、父の気持ちが理解出来たのも確かだ。

復讐の対象に対して納得（それ）が出るというのは、妹紅にとっても驚きであっただろう。

そんな妹紅に対して、横島は何となく親近感を覚えていた。

理由は全く異なるが、彼も美形に対してコンプレックスを抱く身。

幼い頃から幼なじみの少年と容姿を比べられて育ってきている。

一度は離れたが、再会した時にはその幼なじみは今をときめく美形俳優として名を馳せていた。

同じ美形にコンプレックスを抱く者同士。もしかしたら二人の相性は良いのかもしれない。

「妹紅……。イナバちゃんは確かに可愛いよな。何というか守ってあげたくなるんだ

が、それと同時にいじりたくもなるというか、そんな雰囲気もあるし」

「ええっ!?」

突然誉められた鈴仙は驚きに顔を染める。それは「急に何言ってんのこの人?」といった表情であろうか。しかし後半の部分はいただけない。ある意味認めたくない自分の立場を一目で見抜かれたようなものだ。輝夜も「よく分かってるじゃない」とばかりに頷いている。

「輝夜様も凄いよな。一挙一動が様になってるし、どんな言動を取ってもそれが輝夜様の新しい魅力になるし……」

横島は腕を組み、短いながらも輝夜の行動を思い浮かべていた。

コロコロと表情を変え、そのどれもが彼女の美を引き立てる。それこそが傾国傾城の美少女たる輝夜の魅力のほんの一つなのであろう。横島は少しだけ、タマモのことを思い出した。彼女もかつては傾国の美女であったらしいからだ。

妹紅もそれには異論はない。寧ろ現実を突きつけられたようなものだ。彼女は目をそらし、拗ねたような表情を見せる。

「でも妹紅だって可愛いじゃん」

「……え」

思いもかけない言葉に妹紅は横島の顔を見上げる。

「いやー、何つーかさ。眉もキリッとしてて鼻筋も通ってて、かっこいいって感じなんだけどさ。ほら、さっき妹紅ちょっと拗ねたような顔したじゃんか。それがめっちゃくちゃ可愛くてなぁ……。何だろう、こう……そそると言うか……」

「ああ、分かる分かる……じゅるり」

「え……え、えっ？」

突然のべた褒めに妹紅はたじたじだ。輝夜も横島の意見に賛成なようで、今まで妹紅を可愛いと思った瞬間を反芻しているようだ。鈴仙は輝夜のよだれをそっと拭っている。

「い、いやでも……」

「うーん、これがギャップ萌えってやつなのかしら……。しおらしい妹紅って可愛らしいわ……。ちょっとお姉さんとイイコトしない……？」

横島曰わくキリッとした眉も、今は八の字を描き、頬どころか、耳や首まで真っ赤に染まっている。そんな可愛らしい様子を見せる妹紅が輝夜の琴線に触れたのか、彼女は手をわきわきと動かしながらにじり寄る。

「ちょ、な、何する気だ……！」

思わず自分の胸を抱えて後ずさる妹紅。それを見た横島は「二人に挟まれたいなぁ」という感想と共に、とあることに思い至る。

「ふむ。それにしても……」
横島は妹紅の胸をジーッと見つめる。妹紅はその意図に気付かないが、輝夜と鈴仙の二人は気付いた。横島は二人にも視線を注ぐ。
「……！」
「……ほっ」
鈴仙は自分の体を隠すように輝夜の後ろに隠れ、輝夜は頭と腰に手を当て、どこかとぼけたようなセクシーポーズを取る。
ここにきて、妹紅は横島の視線の意味にようやく気付いた。
「妹紅ってさ、スタイルは二人に完全に負けてるよな」
妹紅の燃える拳が横島の顔の中心に突き刺さった。
横島が吹き飛ばされ、妹紅が涙目になりつつ追撃を仕掛けようとしている様を、霊夢と紫は穏やかに談笑しつつ眺めていた。
霊夢が紫を気にかけ、素直な対応をしてくるなど今までにあっただろうか？　紫は度重なる不幸の中に、霊夢という幸福を感じる。横島への罪悪感と責任感を背負い、霊夢の気遣いを支えとする。彼を送り返す方法を模索する意志を強固にした。
「あら、随分と和んでいるのね」
紫が決意を新たにした横から、永琳の声が掛かる。隣にはふてくされたようなむくれ

顔のレミリアと、主とは正反対の笑顔を浮かべた咲夜が居た。咲夜はレミリアの可愛らしくむっすりとした表情がお気に召したのか、いつもよりも笑顔が深い。
「そっちの話も終わったの？　何かレミリアが不機嫌そうだけど……」
「ええ、私達は紅魔館でお世話になることにしたわ」
　霊夢の後半の質問はスルーする永琳。そこに触れられたくはなかったのか、レミリアの表情は少しだけ明るくなる。
「永遠亭再建はイナバ達に任せることになるから、少し長くなるだろうけどね」
「あんなポインポイン跳ねてる妖怪兎に任せんの？　大丈夫なのそれ」
　霊夢の頭に浮かぶのはキャーキャー言いながら跳ね回り、仕事もしないで遊び回っている兎の姿。可愛らしくはあるのだが、どう贔屓目に見ても大工の真似事など出来そうもない。
「大丈夫よ、本気を出せば人型になるから」
「そうなの!?」
　衝撃の事実が発覚した。だが、これで永遠亭再建の人材は揃った。資金はてゐの財産を切り崩せばいい。これで残った心配事は一つだけ。
「彼は、これからどうするのかしら」
　永琳の言葉に、皆の視線は横島の方へと向く。彼はうつ伏せに倒れ、背中には半泣き

になった妹紅が馬乗りになり彼の頭をポカスカと叩いている。「やめてー！」という声は聞こえてくるが、どうもあまり堪えた様子はない。寧ろ妹紅が背中に乗っかっているのが嬉しそうだ。妹紅は半泣きではあるのだが、二人共どことなく楽しそうにしている。端から見れば、仲の良い兄妹がじゃれ合っているようにも見える。

「……何かよく分かんないけど、えらい馴染んでるわね」

霊夢の言葉に、皆は一様に頷いた。霊夢は先程の紫との会話で横島がどういった立場にいるのかを聞いている。反面レミリア達はまだ知らないが、彼はこの幻想郷から出るどころか、自分が元居た世界に帰ることが出来ないのである。だというのにあれだけはっちゃけているということは、何か帰る為の秘策があるのか、それともうすっぱりと諦めたのか。もしくは――

「まさか、忘れてたりとか？」

「いえ、いくら何でもそれは……」

永琳の言葉に紫は苦笑混じりに返す。レミリアは置いてけぼりを食らっているので不満顔だ。咲夜は喜んでいるが。

「とりあえず、彼にこれからどうするか確認を取りましょう。まずは彼の意志を尊重しないと」

そう言って紫は横島の元へと歩いていく。他の皆もそれに続き、レミリア達も空気を

読んで後を追った。

「はいはい、そこまでにしておきなさい」

横島をポカスカ叩いている妹紅を止めたのは永琳だ。その顔は苦笑を浮かべ、微笑ましい気持ちを代弁しているかのように見えた。

「それで、横島君。貴方はこれからどうするの？　この幻想郷から出られないなら、身の振り方を考えないと」

永琳の尤もな意見に体を硬直させる横島。だが、その硬直は永琳の言葉の意味とは別のものだ。

「ああーーー!?　わ、忘れとったーーー!!」

頭を抱え絶叫する彼に、皆は「だあぁっ！」とずっこけた。まさかの予言的中である。

「何でそんな大事な事をポンポン忘れられるの……」

「仕方ないんやー！　美少女の膝枕の前には霞んでまうんやー！」

頭痛を堪えるようにこめかみを押さえた紫の問いにそう返す横島は、実はかなりの大物なのかも知れないと、月の頭脳は思った。

「はぁ……。それで、どうするの？」

深い深い溜め息を吐く紫の問いに、横島は軽く考えを巡らせる。

（……文珠なら何とかなるかな？　二文字までなら同時に使えるから……とりあえず

『帰』『還』を試してみるか。それで駄目なら修行か……？　やだなぁ……したくないなぁ……）

あまりやる気を感じられない思考だが、当の本人は至って真面目である。彼は自分の意識下にストックしてある文珠を確認する。

（ん……？　あれ、ストック無かったっけ？　まぁいいか、新しく作れば）

横島は軽く深呼吸し、精神を落ち着ける。

「今からちょっと帰れるか試してみます。まぁ、帰れなかったら帰れるようになるまで修行するしかないんすけどね……」

修行の部分だけ殊更嫌そうに発音する彼は、掌を上に向け、霊力を集中し始めた。

――そして、異変は起こった。

「……っ!?　んな……っ!!」

「――――っ!!?」

突如辺りに巻き起こる圧倒的な霊力の暴風。それは物理的な衝撃をも発生させ、博麗神社の境内に局地的な嵐を齎す。

その人間の領域を遥かに飛び越えた、余りにも暴力的な霊力の奔流に一番驚愕を示しているのは、何を隠そうこの現象の発生源である横島忠夫本人である。

「な、何だっ!?　この霊力量……！　いつもと違う……!!」

自らの体から迸る莫大な霊力に驚愕を浮かべ、何とかコントロールしようとするが、今の彼にはそれだけの技術が足りない。何せ、普段文珠を作る時の数倍……否、それ以上の霊力が渦巻いているのだ。その結果――

「ぬぉおおおーーー!?　と、飛んでけ！　飛んでけーーー!!」

境内で大爆発が起こる。その威力は凄まじく、文珠の様に全ての霊力が爆発したわけではないが、それでも境内全域に行き渡る大爆発であった。

横島がとっさにかなりの高さに霊力を放出し、霊夢と紫が結界を張らなければ、博麗神社すらも吹き飛んでいただろう。

「……っ、あんた、この神社を吹き飛ばす気!?」

「ち、違うんやー！　今のは何かの間違いなんやー!!」

霊夢は横島の襟首を掴み、前後にガクガクと揺らす。横島は大量の涙を噴出し、事故であることを主張する。

「落ち着きなさい、霊夢」

紫は霊夢の肩に手を置き、霊夢を落ち着かせる。そして、横島に今のは何だったのかを問いかけた。

「い、いや、その……。今のは俺の霊能を使おうとしたんすけど、何かこう、いつもより霊力が強すぎたっていうか……」

これには流石の横島もしどろもどろにしか話せない。彼の話を信じるならば、彼は突然以前よりも遥か高みにある霊力を手に入れたことになる。だからコントロールに失敗したのだと。

「だからあんな爆発が起こったっていうの……？」

霊夢は訝しげだ。それもそうであろう。霊力が突然爆発的に増大するなど有り得ない。霊力とは魂の力。いくら横島が石畳に突き刺さって死にかけることによって魂に負荷が掛かっても、あの霊力量にまで高まることは有り得ないはずなのだ。

しかし、それよりも重大な問題がある。

「霊力が全くコントロール出来ないってことは……まさかっ!?」

横島は右の掌に自らの防御の要『サイキックソーサー』を作ろうとする。だが、思ったように霊力が調整出来ず、大きさは一メートル以上にもなる巨大な盾が形作られた。しかも霊力は集中しておらず、所々にブレが生じている。

「……っ！　マジかよ……」

これには横島もショックを隠せない。彼にはまだ栄光の手という霊能があるが、このサイキックソーサーは彼が初めて覚えた霊能であり、栄光の手共々自信を持って扱える霊能だったのだ。それが、この体たらく……。

何らかの原因で霊力は遥かに増したが、ゴーストスイーパーとしては遥かにパワーダ

ウンをしたことになる。
「コントロールが上手くいかない……。文珠も使用出来ない……！　このままじゃ……!!」
　横島の体が恐怖に震える。自らを囲うのは、見た目よりも遥かに長い時を生きる人外の存在達。
「ちょっと、大丈夫……？」
　彼の様子が変わったのを感じた紫が横島の肩に触れようとするが、横島はバッと身を翻し、その手を避けた。
「近寄るなっ!!」
「――――っ!?」
　彼から発せられた信じられない言葉。それに射抜かれた紫はそれ以上動くことが出来なかった。
「他の皆もだ！　それ以上こっちに来るな!!」
　横島の目は、恐怖と警戒に染まっている。
「……っ」
　その場に居る人外の者は息を呑む。やはり、彼も我々のような存在は排除すべき対象なのだろう。今まで友好的に振る舞っていたのは、助けてもらった恩からか、それとも

油断させるためだったのか。
　理由はいくつか思いつくが、ここにきて敵対の意志を見せたのは、やはり自らの霊能が使用不可能だと悟ったからなのだろう。
　皆の心に暗澹たる感情が過ぎる。だが、それを受け入れられない者も居た。
「お、おい……横島」
　それは、藤原妹紅である。彼女は今日知り合ったばかりであるにも関わらず、彼に対して友情を感じていた。それも、長年一緒にいたかのような親しみを、だ。
「……来ないでくれ」
「……っ、ごめん……」
　しかし、横島から出されたのは拒絶の言葉だった。
　横島も自分と同じような友情を抱いてくれてはいなかったのか……？
　妹紅は力無く俯いてしまう。それを見た輝夜が感情を爆発させようとするのだが、それよりも前に、横島の言葉が紡がれる。
「それ以上近寄られたら……。近寄られたら……!!」
　ぶるぶると震える横島の体。彼は心からの恐怖を声に宿し、血を吐く様に絶叫する。
「それ以上近寄られたら……ワイがロリコンになってまうかも知れんやないかあああああーーー!!!!!」

横島の魂を揺さぶる絶叫。それが皆の心に染み渡ったとき、時は氷の様に凍りついた――。

「……。……ん？　えっと――――え？　ええ……？　あれ？」

妹紅、大混乱。いや、妹紅だけでなくその場の全員が混乱しているのだが、横島はそれを意に介さず妹紅を指差す。

「妹紅、美少女」

「うえっ？　えー……っと、あり、がとう……？」

横島の突然のほめ言葉に反応が遅れる妹紅。横島は妹紅だけでなく次々と指を差していく。

「輝夜様、美少女。イナバちゃん、美少女。永琳先生、美少女」

未だ混乱が解けていない三人だが、輝夜と永琳は少し気を良くしていた。

「紫さん、美少女。紅白の……巫女？　巫女さん？　美少女」

一瞬疑問に思いながらも霊夢を巫女と判断する横島。霊夢は「間違うことなき巫女よ」と言っている。対する紫は永琳達と同じく少し気を良くしていた。いつも年寄り扱いされるからであろう事が推測される。

「メイドさん、美少女。吸血鬼の女の子、美幼女」

「誰が幼女か」

横島は誰だか分からなかったが、この場に居るのだから関係者だろうと判断し、彼女達にも指を差す。それに対し咲夜は「初対面の者に指を差すとは失礼な」と気分を悪くしているが、レミリアは幼女扱いされたことを不満に思うと共に、自らを吸血鬼と看破した　彼に驚いていた。

外の世界にとって、吸血鬼とは最早伝説の存在となっているので、それも仕方がないことなのかもしれない。

横島は皆を美少女認定した後、じりじりと後ずさり、間合いを広げていく。とりあえず横島の言動の意味が分からない全員を代表し、輝夜が挙手をして質問を投げかけた。

「えーっと、皆が美少女だっていうのは分かったけど、それが何か問題でもあるの？」

「分からないんすか、輝夜様！」

「分かるわけないでしょ」

横島のあんまりな返答に輝夜はツッコミを返すしかない。横島は「良いですか？」と、指を立てて説明を始める。

「俺の周りに居るのはみーんな美少女。しかも見た目俺より多少年下か同い年くらい。ここまでは良いっすよね」

質問というよりは断定的に確認を取る横島に、皆は頷きを以て返す。ただ、妹紅と鈴仙は少し恥ずかしげだ。

「恐らく巫女さんとメイドさんを除いた皆は見た目以上の年だろう……。力の大きさから言って、百年以上……もしかしたら、千年とか生きている人も居るかもしれない」

その推察に皆は驚きを隠せない。単なる変な人かと思っていた男が、皆の力の強大さを見抜いていたのだ。これには紫と永琳も感心を示す。

「だからマズいんだ……！」

「……だから、何が？」

いまいち要領を得ない彼の答え。霊夢などはそろそろイラつき始め、腕を組んで横島を睨みつけ始める。

「つまりだ……」

ようやく核心に触れるのか、場の空気が変わる。誰かが息を呑む音が聞こえてきた。

「俺はロリコンじゃない。だが、これ以上皆みたいな美少女が近くに居たら、見た目ロリッぽいのに年齢が上ならギリギリセーフなんじゃないかなぁ……なんていう結論に行き着いてまうかもしれんやないか!!」

「……」

くわっ！　と目を見開いて叫ぶ横島への視線は、一様に冷たい。だが、横島のヒートアップはまだ止まらない。

「しかも、俺の霊力源は煩悩だ！　今、俺の霊力は何故か爆発的にパワーアップしている

……。それはもしかしたら、もしかしたら……!!」

語気が強くなるにつれて、彼の体の震えも強くなる。そして、その横島の言葉の意味に気づいたのは、紫と永琳だった。

「そういうことね……」

困ったような苦笑を浮かべ、納得を示す二人。だが他の者はまだ理解が追いつかず、首を傾げている。とりあえず永琳達は皆に説明をすることにした。

「彼の霊力源は煩悩……。彼の霊力は何故かパワーアップしている。しかもコントロールが効かない状態……」

「それはつまり、煩悩の方も強力になっているのではないか。自分は幼女趣味ではないが、コントロールが効かないのならば、もしかしたら手を出してしまうかもしれない……。彼が危惧しているのはそういうことですわ」

つまりそういうことだ。

『霊力が強いなら、煩悩も強くなったんじゃないか？　皆美少女だから襲っちゃうんじゃないか？』

たったこれだけのことを説明するのに、随分と回りくどいことをしたものである。

「いやぁ、妹紅達が近くにいるだけでも煩悩が刺激されてたからなぁ……」

何故か爽やかな笑みを浮かべ、遠くの空を見上げる横島。妹紅と鈴仙は思わず体を腕

で隠し、咲夜はレミリアの前に出る。
「ん、あれ？　近くに居るだけでそうなら、さっき私が上に乗ってたのって……」
それに気付いた妹紅の顔が朱に染まる。横島は鷹揚に頷く。
「ああ。俺はバインボインのお姉様が好みだからな。――妹紅のチチが小さめで助かった」
妹紅は横島を殴った。無表情でひたすら殴った。先程のようにポカスカとではなく、響き渡る効果音は「ボグゥッ！」や「ゴキャアッ！」や「バゴォッ！」といった、およそ彼女の細腕からは想像出来ないような鈍い音である。
たちまち横島は血溜まりに沈み込む。辺りを静寂が包み、何とも言えない空気が広がる。
永琳が咳払いを一つ。
「それで、彼をどうしようかしら。帰れないのならどこか住居を探してあげないと……」
「そうっすね。修行もしないといけないっすけど、流石にずっと野宿ってのは……」
「うわぁっ!?」
一瞬で再生した横島に悲鳴を上げる妹紅。本当に人間か疑わしいほどだ。
「……」
と、ここで今まで傍観者だったレミリアが前へ出る。

「よく分からないが、行く当てが無いのならそいつもウチで預かろうか？」
「っ!?」
　これには咲夜も表情を崩してしまう。声には出さないが、自らの主の正気を確かめたい気持ちでいっぱいだ。
「もちろん色々と仕事を手伝って貰ったりはしてもらうつもりだが……。ああ、何なら日雇いの扱いで給料も出そうか？」
　レミリアは咲夜の方をチラッと見る。その表情は崩れ、顔色も少々青い。レミリアは『やはり』と思った。結果的にそれは勘違いなのだが、それにレミリアは気付かない。レミリアの考えを読み取ったのは、レミリアと秘密のお話をした永琳だけであった。
「彼の住居は御阿礼の子に探してもらおうかと思っていたけれど……」
　紫は横島に対し、自分が何も出来ていないことに負い目を感じるが、横島はそもそも紫に対して悪感情など抱いてはいなかった。敵対しないかぎり、横島は美女美少女に弱いのである。
「そこまでしてもらって良いのかな？　……ところでお給料とはいかほどで……？」
　紫の考えていることなどまるで理解していない横島は、住み込みで雇うと言ってくれたレミリアに、揉み手をしながら近寄っていく。咲夜は気付かれないようにナイフをその手に持つ。

（あんなこと言っておきながら、自分から近づいてる……）

輝夜は横島にツッコミたかったが、話がややこしくなりそうなので止めた。そしてそれは皆もそうだった。

「ふむ……」

ここでレミリアに悪戯心が湧いた。どこまでの薄給に耐えられるか試そうと考えたのだ。

「そうだなぁ……。我が紅魔館にはこの咲夜しか人間が居らず、周りは強力な化け物ぞろい。仕事は館内の掃除や食事の用意などもしてもらうが、中は空間が外見以上に広がっている。正に激務と言ってもいいだろう。それを踏まえて……給料は、時給千円でどうだ？」

その言葉に皆は呆れ返る。あの紅魔館の掃除を含めた内容で時給千円は割に合わなさすぎる。レミリアは不自然なまでの笑顔を浮かべているので、これは横島に対して悪戯を仕掛けているのだろう。これは流石に断る。皆はそう考えたが、横島は一味違った。

「犬とお呼び下さい、お嬢様」

彼は即答で返した。皆は忘れていたが、そもそも横島は紅魔館の中の広さどころか、外面すらも知らないのだ。どれだけ広いのかを知らない横島は、多少軽い気持ちで了承

の意を示す。
「いや……うん、まあ良いんだけど。それじゃあ交渉成立……？」
「うっす、よろしくお願いしますお嬢様！」
　正直レミリアは複雑な思いでいっぱいだが、本人がやる気になっているので飲み込むことにした。彼が近くに居れば、少なくとも退屈することはないという期待もあった。
「……」
　咲夜も横島には複雑な感情を抱いているが、全ては主が決めたこと。不満と不安はあるが、自分が彼を抑えつければ何とかなるだろう、と結論付けた。
　そして、ここで永琳が横島に疑問を呈す。
「ところで横島君。貴方、ゴーストスイーパーっていう退魔師じゃなかったの？　彼女は吸血鬼だけど、それでも厄介になるのかしら？」
　その発言にまたも場の空気が変わる。妹紅は「また話をややこしくしやがって！」と不機嫌になるが、永琳としてはここで不安要素を消しておきたかった。後でいざこざがあった場合、どちらに転んだとしても傷跡が残る。自分でも厄介な事をしたと思うが、腹みは出しておかなければならない。
「そりゃもちろん！　住み込みで雇ってくれる上に時給は千円！　これはかなりの好待遇じゃないすか！」

違う、そうじゃない。永琳が言いたいのはそういうことではない。彼女はこめかみを押さえつつ、もう一度質問する。

「そうじゃなくて……、貴方は悪霊や妖怪を祓う職業に就いているんでしょう？　そんな貴方が吸血鬼の世話になっても良いの？」

「ああ、なるほど」

横島はようやく合点がいったらしい。彼はケロッとした顔で答えを返す。

「まぁ、別に良いんじゃないっすかね？　ゴーストスイーパーだからって妖怪や魔族と仲良くしちゃ駄目なんてことはありませんし……むしろ妖怪だろうが魔族だろうが、美女美少女ならウェルカムッて言うか……！」

最後の部分を特に強調する彼の目は、キラキラと純粋に輝いている。煩悩も純粋過ぎれば美しいということなのだろうか。

つまり、彼にとって、美人なら妖怪だとか魔族だとか、そういったしがらみなど存在しないということなのだろう。退魔師としてはその考えは間違っているのかも知れないが、ある意味人も妖怪も魔族も、全てを平等に考えているということなのだ。彼の言葉から察するに、『美女美少女かそれ以外か』という区分けはあるかも知れないが。

だとすれば、此処に居る皆は横島にとって、是非とも仲良くしたい存在であると言えるのではないだろうか。自分から近寄るなと言っておきながら、自分から近づいていく

という彼の言動は中々に前後不覚だが、それは彼の煩悩の成せる業なのだろう。びっくり箱のような物だと考えれば楽しみにすらなりそうだ。

「……貴方が居た世界は、皆同じ様な考えの人間が多かったのかしら？」

「いや、流石に俺みたいのは業界でも特殊というか、異端というか……。まぁ、身内は似たようなもんだったっすけどね」

少し寂しそうな笑顔を見せ、自分の世界に思いを馳せる。

――報酬さえ貰えれば神魔人妖関係無し、美女美少女ならば神魔人妖関係無し、戦えるのならば神魔人妖関係無し、美形の男ならば神魔人妖関係無し――

「ほんっと、似たようなもんだよなぁ……」

横島の最後の呟きは聞こえなかったが、彼のこういった価値観ならば問題は無いだろう。女性関係というある種さらに厄介な問題が出るかも知れないが……彼も男だ。潔く責任を全うしてもらうしかないであろう。

「ふむ……。これで話は終わりでいいな？　それでは紅魔館に向かうぞ」

レミリアは翼を広げ、空に舞い上がる。皆もそれに続くが、妹紅は空を飛べない横島の元に向かった。

「また運んでやるよ。私はスタイルが悪いから、お前も暴走の危険がなくて安心だろ？」

「すんまっせんした」

ギヌロという効果音で下から見上げるように睨みつける妹紅に、横島は謝るしかなかった。輝夜はそんな妹紅を微笑ましく見守っている。

（なんだかんだ言いながらも世話を焼くのね……）

あの妹紅が、随分と早く人間と打ち解けたものだ。鈴仙も珍しい物を見たかの様な顔をしている。

「んじゃ、行くぞ」

「ああ、よろしくな、妹紅」

妹紅達も空へと飛び上がり、準備は整った。

「行ってらー」

霊夢は気怠げに手を振り、紅魔館へと飛び去る皆に声を掛けた。やがて皆の姿が視界から完全に消え去った後、周囲を見渡し溜め息を吐いた。

「掃除……面倒だなぁ」

博麗神社の境内は、横島の霊力の爆発で悲惨な状況にあったのだった。

――空を行く横島は景色を堪能しつつ、そっと溜め息を吐いた。

（もう少しテンション上げとけば良かったかな……。帰れないかも、ってしか考えられねえわ）

特に会話が交わされることのない現在、彼の心の内は先程までとはまた別の、不安と恐怖で染め上げられていた。

第五話
『二つの不安と二つの恐怖』
～了～

第六話『おいでませ紅魔館』

空を行く横島達一行。今現在彼等の雰囲気は和やかなものだった。

数分前までは横島に不安と恐怖が宿っており、そういった感情に聡い紫や永琳は、積極的に横島に話しかけることで悪い雰囲気を払拭しようとした。

そこで大きな働きをしたのが、輝夜であった。

彼女は横島の世界について数多くの質問をした。元の世界にはもう帰れないと言われた横島にその質問は鬼門であり、紫や永琳のみならず、妹紅や鈴仙もハラハラとしたものだが、彼は意外にもその話題に乗ってきて、何でも聞くように言ってきた。

ゴーストスイーパーとしての仕事や事件、彼が通っていた学校のこと。輝夜が興味を示した女性関係等もだ。そこまで話している内に、妹紅の好奇心がムズムズと鎌首をもたげてくる。

「なぁ、横島。お前の家族ってどんな人達なんだ?」

気付けば言葉に出していた。妹紅が一番気になっていた彼の家族のこと。彼はその質問に腕を組み、うーんと首を傾げた後に、ぽつりと呟いた。

「なんというか……規格外、って感じだな」

「……規格外、というと？」

ただでさえ目の前の彼も規格外なのだ。その彼が言う規格外とは一体どんな物なのか、彼女達はちょっとした期待を募らせる。

「あーっと、まず第一に、会社とか株とかって分かるか？」

「あ～……、まぁ、それは何とか」

視線を逸らしつつ妹紅は言うが、幻想郷には会社が存在しないので、知っているだけでも凄いことではある。後で横島が聞いたところ、永遠亭で希に開催される『永琳先生のはちみつ授業』なる勉強会で学習したようだ。彼は何がどう『はちみつ』なのか非常に知りたがっていたのは甚だ余談である。

横島は知っているのなら話は早いと頷き、非常識な両親の事を語り始める。

「俺の親父は村枝商事っていう会社に勤めてたんだけど、派閥争い？　っつーのかな、それでナルニアっていうジャングルしかないような国に飛ばされたんだよ」

「ふんふん」

「一応支社長らしかったんだけどな、言っちまえば田舎だし、親父を飛ばした奴も安心つーか油断してたんだろうな。でも親父のやつ、そこでレアメタルの鉱山見つけたんだよ」

「あら、まあ」

ここまでで、少女達の反応は乏しい。確かに凄いことではあるが、規格外という程でもなく、言ってしまえば拍子抜けといったところか。多少がっかりとした空気が流れるのだが、話の本番はここからだった。

「んで、日本に一時帰ってきた時に本社の専務にそれの書類を拳で以て文字通り叩きつけて……」

「……ん？」

「あー、そういやナルニアでテロリスト集団と渡り合ったとか、壊滅させたとか……」

「……それはそれは」

「あと、霊能力者でもないのに気合いだけで悪霊を殴り飛ばしたりしてたな……」

「ええー……。本当に人間なんですか、それ」

「霊能力を持たない人間が悪霊を殴り飛ばすだなんて、こんなの普通じゃ考えられないわ」

長い時を生きてきた輝夜だが、流石にそんな人間は見たことがないらしい。妹紅は輝夜の言葉に頷き、鈴仙は本当に人間か疑っている。

横島は次いで更に非常識な母について話そうとしたが、視界の隅に映る白い靄を確認した。

「ん……？　霧が出てきたな」

「ええ、まずは紅魔館のある『霧の湖』に到着よ」
横島の声にレミリアが振り向き、尊大な微笑みを湛えて語りかける。
その表情と『吸血鬼』であるレミリアが語りかけてきたことから、横島はこの霧を発生させているのはレミリアだと判断する。そして、これほどの広範囲に力を行き渡らせ、涼しげな顔をしているレミリアの底知れぬ魔力に、戦慄に近い物を抱く。
結論から言えばそれは大きな勘違いであるのだが。
『霧の湖』に存在する霧は全て自然発生したものであるし、レミリアが涼しげな表情をしているのは、霧で日差しが翳り、実際に涼しくなったからに過ぎない。決してレミリアが紅魔館の防衛の為に発生させている訳ではないし、人を迷わせる為でもない。それは寧ろ妖精の仕業だったりする。
とにかく、横島はレミリアの力量や性格を勘違いして畏怖の念を抱き、そのレミリアが全幅の信頼をおく咲夜にも逆らわない方が良いと結論付けた。それが結果として横島にとって良い方向に進むのはまた後の話である。
「……それで、お母さんはどんな人だったの？　お父さんより凄いの？」
視界の悪い霧の中を進む途中、輝夜は中途半端なところで中断されていた横島の親についての話をねだりだした。随分と気になっていたようで、どことなくソワソワとしている。因みに妹紅もそうだったのだが、周りが何も言わないので何となく言い出しにく

い空気になっていたから話を切り出せないでいた。永遠亭のメンバー以外には、押しが弱いようである。

「あ、そうでしたね。えーっと、俺のお袋は親父の上司だったみたいなんすけど……。なんつーか、何をしても会社の利益になったらしいっす」

「何をしても……？」

よく分からない話に輝夜は首を捻る。妹紅もそうだが、他の面々は大体理解出来たようだ。

「何でも『村枝の紅ユリ』とかいうあだ名で呼ばれてて、村枝商事が世界的大企業になれたのはお袋のお陰とか何とか……」

「はー……、それは普通に凄いな」

妹紅は横島の母親の話に感嘆の声を出す。しかし、当然また斜め上を突き進む話が展開されるわけなのだが……。

「あと何かお袋が村枝の本社に訪れただけで株価が上がったりとか……」

「ん、んん……？」

「何かよく分からないんだが、何かの書類を……訂正？　したら利益が数十億円上がったとか……」

「数十億!?」

「それから、霊能力を持ってないのに気合いだけで俺の上司、世界でもトップクラスのゴーストスイーパーである美神さんと渡り合って空港……いや、巨大施設を破壊したり……」

「……横島さん、貴方本当に人間から産まれたんですか……？」

「俺も両親も人間だっての！　……多分」

最後には目を逸らしてしまう横島であった。

余談ではあるが、横島は幻想郷の住人に空港は分からないだろうと考え、巨大施設と言い直したが、それによって皆が抱いたイメージは、幻想郷など歯牙にも掛けないほどのＳＦチックな超巨大構造物を破壊する『おばさん達』である。美神は業界でトップクラスだと言うからにはそれなりに年齢を重ねていると思ったのだろう。確かに横島の母、百合子はおばさんと言って良い年齢だが、美神は未だ二十歳のうら若き乙女なのだ。この想像が本人に知られることがないのは、非常に喜ばしい限りである。

「さて、楽しい歓談もそこそこにしておこう。もうじき、霧を抜ける」

レミリアが発した言葉に、皆が前を見る。そこに一陣の風が吹き、薄くなっていた霧のベールを散らしていく。

まず目についたのは、未だ遠くながらも館の規模が分かる程の巨大さと、その館の色であった。

――紅。

屋根も壁も何もかもが紅に染まった巨大な洋館。それが紅魔館である。

「うっは、これはまたデカくて赤い……。いやこれは寧ろ『紅』いの方が似合う」

「ほう……？　若くしてそれが理解出来るとは素晴らしい。あれは赤より赤い『紅』だからな」

レミリアと横島はうんうんと頷いているが、端から聞いている他の者はチンプンカンプンだ。レミリアに仕える咲夜はすぐに理解出来たが、妹紅達三人には何が何だか分からない。紫と永琳は言葉のニュアンスで理解したが、何ともややこしい話である。

「何というか、目に痛い館だな」

「何を言うか、お前の名前にも『紅』の字が入っているというのに」

「いや、それは関係ないんじゃ……」

何故か妹紅の名前についての議論が始まり、横島はそれを苦笑しつつ眺めていたのだが、突如彼の額に稲妻のような閃光が『ピキィィン！』と走る。

「この感覚……まさか!?」

突然緊迫した空気を醸し出す横島の声を皮切りに、他の皆が臨戦態勢を整える。紫を始めとした少女達の感覚に触れる脅威は感じられないが、横島は霊能力者であり、怪異との戦いのエキスパートである。その彼の霊感は信用出来る。出来るのだが……。

「この感覚……間違いない！　近くに美少女がいる!!」
「……あん？」
彼が察知したのはまた別の存在であった。
「十三ある煩悩技（リビドーアーツ）の一つ、『心眼・横島アイ』!!」
説明しよう！『心眼・横島アイ』とは、彼が雑踏の中で美女美少女を見極めるために鍛えた眼力のことである！
「ふふ、見えすぎるぜ……！　俺様の眼力（インサイト）からは逃れられねぇ！」
彼は右手の人差し指と中指を鼻筋に沿わせたポーズを取っている。どことなく彼のキャラクターも変化しているようだが、周りからは大変に白けた視線を送られていることに気付いていない。横島アイの弱点とは、一点に集中するあまり、周りへの注意力が散漫になることである。
「……ちなみにどんな子なの？」
「えぇー、話を広げるんですか……？」
話を聞くのはやはり輝夜。鈴仙は随分と投げ遣りな感じに輝夜に問いかけるが、それが彼女の耳に入ることはない。
「んーと、緑のチャイナ服っぽいのを着てる女の子ですね。紅魔館の門柱に寄りかかって、腕を組んでます」

「ここからそこまで見えるのか？」

見えすぎるというのは伊達ではないようだ。妹紅の問いかけに横島は大きく頷く。

「ああ、よく見える。……それにしても、デカい。腕組みで強調されてるとはいえ、あれは中々の大きさ――あの、妹紅さん、指が食い込んでます」

「あ、？」

「いえ、何でもありません……」

妹紅に運んでもらっている横島は、脇に指がメリメリとめり込んでいるのを伝えるが、彼女の迫力に屈し、口を噤んでしまう。自分が気にしていることを何回も指摘されている妹紅としては、それ位我慢しろということなのだろう。例えイラついて渾身の力で指を食い込ませていたとしても。

だが、実際に横島とて余裕があるわけではない。妹紅の身長は横島から見て、頭一つ分程低い。ということは腕の長さもそれに比例するわけで、現在横島の背中から後頭部には、妹紅のお腹から胸の部分が当たっている。確かに妹紅は胸が小さめだが、全く膨らんでいないということではなく、輝夜や鈴仙には劣るが柔らかな曲線を描いた二つの丘が存在しているのだ。それが当初からぽよぽよと当たっているのだから、横島には堪らない。妹紅の見た目が自分よりも幼い物であるため、彼に取っては生殺しもいいところである。

「……それにしても、随分と気持ちよさそうに寝てるな、あのチャイナっぽい子」
　横島は何かを誤魔化すように話題を変えたが、それに真っ先に反応したのはレミリアに日傘を差している咲夜だった。
「ちょっと待ちなさい。寝ているのは門の前にいる緑色のチャイナ服を着た子なの？」
「え？　ええ、そうっすよ。それはもうすやすやと安らかに……」
「そう……。ふふふ、あれほど昼寝するなといったのに美鈴ったら……」
　余りにも急激に雰囲気が変化した咲夜に横島は多少驚くが、咲夜のセリフから彼女の失態であると判断し、同情する。かなりこっぴどく怒られそうだ。
　そして、そうこうするうちに紅魔館の門前までたどり着いた一行なのだが、一名が発する怒気がどんどん上がっていることに気付く。
「……ここまで来ても起きないとは」
　門柱に寄りかかって眠る少女、紅美鈴は未だすやすやと寝息を立てている。そんな彼女を見た咲夜はどこからともなくナイフを取り出すと、それを美鈴の額目掛けて投擲した。
「はうっ!?」
　狙い違わずナイフは美鈴の額に突き刺さり、哀れ彼女は地面に倒れ伏してしまう。
「ちょーっ!?　な、何やってんすか咲夜さーん!!?」

「仕事をせず、昼寝をしていた彼女が悪いのです」

慌てて問い詰める横島に、咲夜は何とも涼やかに言い放つ。こういった相手の反応は元居た世界で自分がよく味わっていたものだ。横島は文句もそこそこに美鈴へと駆け寄って抱き起こす。

「大丈夫か、大きな乳――じゃなくて、お嬢さん!!　ナイフが根元まで突き刺さってるけど傷は浅いぞーっ!!」

人それを致命傷と言う。

だが、美鈴は多少身じろぎした後、閉じていた目をすっと開いた。

「うーん、痛たた……って、えっ？　あ、あの、貴方は……？」

「俺は横島忠夫。今度紅魔館に雇われることになった人間だよ。……そんなことより、大丈夫か？　いくら妖怪とはいえ銀のナイフが刺さったらまずいんじゃないか？　血も大量に出てるし……」

「……え？」

美鈴は紅魔館に新しく人間が雇われることに驚くが、それと同時に妖怪である自分をここまで心配してくれる横島にも驚いた。

美鈴は少女の姿をしているが歴とした妖怪であり、肉体の強靭さは人間とは比ぶべくもない。だというのに、目の前の男はそれを知っていてもなお、自分を心配してくれて

いるのだ。
　美鈴は人間とも友好的であり、人間の里には友人も居る。中には彼女に武術の試合を申し込んでくる者も居り、人間と妖怪の共存に一役買っている。
　しかし、彼女が妖怪と知っている者は、美鈴が怪我をしてもそれを気にする者はあまりいない。特に親しい人物ならばその限りではないが、無意識下に存在する人間の妖怪に対する意識がそうさせているのだろう。
　彼女はそういったことに敏感であるが、特に気にする程でもないので頭の隅に追いやっていたが、今、初対面にもかかわらず自分を妖怪だと見抜いたうえで、自分を心配してきた男に出会ったのだ。割と長生きしている美鈴も、こういった人間と会ったのは初めてであった。
「え、あ、えっと……。はい、大丈夫……です。慣れてますから」
　横島は美鈴が額にナイフが刺さるのに慣れていることに驚愕する。ああ、やはり自分と似たような立場なのかと。美鈴は少々困惑しつつ、額に突き刺さったナイフをズボッと抜いた。その拍子に血が噴き出し、横島の顔に多少付着してしまう。
「あっ！　す、すいません！」
「ああ、大丈夫大丈夫。それよりもこれ貼っとくといいよ」
　そう言って横島が懐から取り出したのは、『永遠亭印の強力大判絆創膏。ナイフで刺

されてもこれでバッチリ！』と書かれた箱だった。横島は絆創膏を一枚箱から出し、美鈴の額の傷に優しく貼りつけた。血は既に止まっていたようだ。

「あ……」

「ん、これでOKっと。あんまり触れないようにな」

横島は最後に頬にかかっていた髪の毛をそっと撫で下ろした。

横島忠夫という男は、女の子に良いところを見せようとすると斜め上の行動を取り女の子から顰蹙を買うが、特に意識せずに行う場合は好意的に取られることが多い。

今回の行動も結果的には美鈴の髪を触ってしまってはいるが、彼の気遣いと、彼から感じる優しい気の波動で嫌悪感は湧かなかった。どちらかと言えば、彼女は多少の高揚を覚えたほどだ。

それを遠目で見ていた咲夜は驚愕した。

（まさか……私がナイフを持っていると気付いてあの絆創膏を……!?　横島忠夫……やはり、侮れないわね……）

何やら彼女も盛大な勘違いをしているようだ。

先程の行動は少し軽率だったかと横島は思ったが、どうやら嫌がってはいない様子。それを確信した横島は調子に乗って将来の為に美鈴に話しかけようとするのだが、その前に割り込んできた者がいた。

「随分と優しくしているのね？」
「それはもう！　美女美少女には優しくしないといけませんからね！」
「男らしいですわ。……それで、一体何が目的で？」
「そりゃあもちろん好感度が上がれば将来的にデートの一回や二回はしてくれると……はっ!?」
「なるほどね」
割と困ったさん、八雲紫である。
単純な横島は、問い掛けられるままに考えをペラペラと話してしまった。
「くっ……！　まさか、この俺が誘導尋問に引っ掛かるだなんて……！　これが、『妖怪の賢者』の知略……!!」
「いえ、こんなことでそんなことを言われても……。ところで、よく絆創膏なんて持ってたわね？」
「ああ、永遠亭の俺達が寝かされていた部屋に落ちてたのを拾っておいたんすよ、こんなこともあろうかと」
紫としては苦笑するほかない。どうやら本当に種族は関係ないようだ。紫は横島に抱き起こされている美鈴の手を取り立ち上がらせ、横島を紅魔館内に促す。
「ほら、あまり門前に居るわけにもいきませんわ。早く中へ入りましょう」

「え、あ、はい……。そうっすね」
「別にいいけど、なんであんたが仕切ってんのさ」
紅魔館の主を差し置いて、とレミリアは文句を言うが、その表情に不満はあまり無いようだ。門を開け、全員に手招きしてさっさと中に入っていく。
レミリアに皆が続き、横島も門の中へ入ったとき、横島は「そうだ」と言って美鈴に振り向いた。
「そういえばさ、名前聞いてなかったよな？　教えてくんない？」
「え、あ……」
言われて気付いたが、美鈴は名前を尋ねたというのに、自分は名乗っていなかったことを思い出す。礼を失したと自省しつつ、彼女は胸に手を当てて名前を告げた。
「私は紅美鈴。紅魔館の門番をしています」
「紅……美鈴、ね。そんじゃ、これからよろしくな。怪我してるんだから、あまり無茶なことはしないよーになー」
横島忠夫と名乗った男は、そう言って門の向こう側へ歩いていった。
門を閉じ、美鈴はまた門柱に背を預け、空を仰ぎ見る。昨日一昨日と立て続けに異変が起こった割に、空の機嫌は良く、青空が広がっている。
「……」

美鈴は絆創膏をコリコリと掻く。既に痛みもなく、傷も治っているので絆創膏を貼っておく必要はない。だが、美鈴はそれを剥がす気にはならなかった。

自分を介抱してくれた横島の顔を思い出す。彼は妖怪である自分を、本気で心配していたようだ。他の妖怪からすればなんて事はない事柄なのだろうが、美鈴は何故か微笑みが浮かんでくるのを止められなかった。

「……よしっ」

気合いを入れ直し、空に一言。

「今日は昼寝をせずに仕事を頑張りますか！」

何とも当たり前なことをおっしゃった。

所変わって紅魔館内。一行はゲストルームを目指して歩いている。横島は頻りに館内を見回し、中と外で広さがまるで違うことに首を傾げている。

「ふふ、言っただろう、激務だと。どうする？　今ならキャンセルも考えてやってもいいが……」

「い、いや大丈夫っすよお嬢様！　多分慣れれば大丈夫ですよ。だから最初辺りは優しくしてください！」

「了解了解。さて、咲夜。私はフランとパチェを連れてくるから、そこの大きめのゲスト

ルームに皆を招待してあげて」
　咲夜はレミリアの言葉に一つ頷き、皆を案内する。
「畏まりました、お嬢様。それでは皆さん、こちらです」
　レミリアは一行と別れ、廊下を進んでいく。横島達一行は咲夜の案内の下、ゲストルームに到着した。そこは三十畳程もある大きな部屋で、豪奢なシャンデリアや煌びやかな家具類、ドアを挟んで大きなバスルームもあるようだった。
「はぁー、凄いなこれは……」
「うわぁ、目がチカチカする」
「大丈夫ですか、姫様？」
　妹紅は普段縁の無い洋室に圧倒され、輝夜はシャンデリアをまともに見てしまい目をこすり、鈴仙はそんな輝夜を心配している。紫と永琳はそんな彼女らを微笑ましく見つめ、横島は部屋のあまりの高級感に気後れをしてしまっている。
　咲夜は腰に下げている懐中時計で時間を確認し、不敵な笑顔で横島に話しかけた。
「失礼ですが、横島様。先程の門番の返り血を含め、随分と汚れていらっしゃるようですね」
「あー、確かにそうっすね。すんません」
「いえいえ、お気になさらず。……お嬢様もまだ時間がかかりますし、入浴などはいかが

でしょうか？」

　咲夜の目に怪しい光が宿る。妙に改まった態度で怪しさ倍増だ。だが、横島はそれに気付かない。あからさまに怪しくても、相手が美女美少女ならば怪しみつつも喜んで突っ込んでいく横島に気付けというほうが無茶かもしれないが……。

「え、良いんすか？　まあ確かに風呂には入りたかったっすけど……」

（……その言葉を待っていました）

「畏まりました。……妖精メイド達！」

　咲夜が指をパチンと鳴らすと、幾人かの妖精メイドが部屋に入ってきた。見た目は十歳前後と言ったところだろうか、メイド服に着られている感じがあり、中々に可愛らしい。……可愛らしいのだが、ここで横島に極上の悪寒が背筋を駆け巡る。

「こちらの男性は横島忠夫様。今度紅魔館で働くようになったの。……でも、彼は今たくさん汚れているから、貴方達が綺麗にしてあげてくれるかしら？」

「～～～～～っっっ!?　さ、咲夜さん何を言って……!?」

「はーい」

「わかりましたー」

「がんばります……」

　咲夜の言葉に横島は悪寒の正体を悟り、驚愕に動揺しながらも抗議の声を上げるが、

それよりも早く妙に張り切った妖精メイド達が横島を取り囲んだ。
（速っ）（逃げっ）（回り込まれ）（抜け出せ）（無理）（捕まっ）
逃げようとする横島だが、何故だか異様な素早さを発揮する妖精メイド達に捕まり、胴上げの要領で運ばれてしまう。大ピンチに思考が加速して様々な言葉が頭を巡るが、そのどれもが無意味な物だった。
「や、やめろぉー！　離せ、人の心があるのならーーーっ!!」
「わたし妖精ですー」
「わたしもー」
「わたしも……」
「そうでしたねコンチクショー!!」
涙と叫びを轟かせ、横島はバスルームへと連行された。
他の皆は横島がバスルームに連行されるのを見守るしかなかった。
バスルームからはドタバタと音がし、横島の涙ぐんだ叫びが聞こえてくる。
『やめろー！　脱がせるなぁー!!』
『脱がなきゃはいれませんよー？』
『さっさと脱いでくださーい』
『ん、なかなかの筋肉……』

『いやぁぁあああーーーっ!?!?』

妖精は弱いはずなのにとんでもなくパワフルーーーっ!?

響きわたる声に何だかイケない場面を想像してしまう少女達だが、実際にイケない場面なので仕方がない。

『や、やめろ……っ！　来るな……！　オレのそばに近寄るなあーーーーーー!!!』

これもある意味断末魔の叫びなのだろうか。バスルームから横島の一切の声が消えてしまった。

何となくホラーな雰囲気も漂いはじめたのだが、永琳は咳払いをし、咲夜に問い掛ける。

「こほん。それで、何で横島君にあんなことを？」

咲夜も頬が赤く染まっているが、永琳の問いには確固たる意志を以て返答する。

「彼はあの時言ったわね。お嬢様を美幼女と言い、『ロリコンになってしまうかもしれない』と……」

「レミリアだけに言った訳じゃないけどね」

「だからこう考えたのよ。『小さい女の子にトラウマを刻まれれば、お嬢様や妹様を彼の毒牙から守れるのではないか』……と」

その言葉に皆は押し黙る。咲夜はその様子から、自分は間違っていないのだと考えた

が、実際は違った。
「あのー、咲夜さん？」
「何かしら、蓬莱山輝夜」
輝夜がこめかみを押さえつつ挙手をして咲夜に問う。
「これが切欠で横島さんがロリに目覚めたらどうするの？　小さな女の子に無理矢理服を脱がされ、全身を隅々まで洗われるとか目覚めてもおかしくないシチュエーションよ？　えっちな漫画本的に考えて」
その言葉に咲夜の時間が止まる。
（……輝夜、そういう漫画持ってるのかしら）
永琳の胸中は複雑なものと化しているが、逆に言えばある意味健全な証拠であるとも言える。とりあえず、今度永遠亭が再建されてしばらくしたら輝夜の部屋を漁って、机の上に置いてやろうと決めた。
「……」
咲夜の時間は未だに止まっている。輝夜も咲夜の目を見て、じっと佇んでいる。
「……」
「……」
「……」

「……」
「……」
「……あっ」
　咲夜、つい「やっちゃった」とばかりに声を出してしまう。
「おい……。今の『あっ』は何だ、『あっ』は」
「ほほほ、聞き間違いではないかしら」
「なら私の目を見て言えよ、えぇ、完璧で瀟洒なメイドさんよぉ？」
　思い切り目を逸らす……どころか、首や腰まで捻って明後日の方向を見る咲夜に、妹紅は容赦なく絡んでいく。いくらなんでもこんな形で友人となった変人が危険人物に進化するのはいただけない。
　喧々囂々と騒いでいると、ゲストルームの入り口が開き、妹のフランドールと親友のパチュリーを連れたレミリアが入ってきた。
「遅くなって悪いわね……って、何を争っているのかしら？」
「咲夜、けんか？」
「お嬢様、妹様、パチュリー様……」
　咲夜は入室した面々を見て、顔を強ばらせる。その様子をレミリアは不審に思い、永琳から聞くことにした。

「で、これは何の騒ぎなの、永琳」
「……ちょっとね。横島君をお風呂に案内したのよ。……妖精メイド達が」
「ふーん？　なら、もう少しかかりそうか……」
レミリアが顎に手を当て、待ち時間をどう過ごすか思案し始めたが、意外にも横島はすぐに部屋に戻ってきた。衣装を変えて、行きと同じように妖精メイド達に運ばれて。
「おわりましたー」
「きれいきれいです」
「……色々と役得」
横島は床にドサリと降ろされた。その服装は永琳が着替えさせた浴衣ではない。黒いジャケットにタイにベスト、白いシャツと手袋、ポケットチーフなどなど……いわゆる『執事服』を着用していた。
彼は体を横たわらせ、起きようとしない。目は死んだ魚の様に濁り、何か別次元のモノを見ているように感じられる。
「……ご苦労様。貴方達は戻っていいわよ」
「はーい」
「失礼しますー」
「またやらせてください……」

咲夜の言葉を受け、妖精メイド達は退室していった。廊下からは『大きかったねー』『うん、大きかったー』という声が聞こえてくるが、それは勘違いだと思いたい。

「……」

「……」

「……」

場を沈黙が支配する。横島が平常なら執事服なこともあり、先程までとは違う精悍さや大人っぽさを醸し出していたのだろうが、今の彼から醸し出されているのは腐臭や瘴気といった物だ。何やら呪詛のような物まで聞こえてきた。

とりあえず妹紅達三人娘は紫と永琳の方を見る。二人は頷き、横島の元に向かい、呪詛の内容を確認したり、目を覗き込んだりした。そして出した結論は……。

「「セーフよ」」

「「ほっ……」」

一安心。

永琳は懐に忍ばせていた気付け薬をハンカチに染み込ませ、横島の鼻に近づける。

「エンッ!!」

「お目覚め？」

横島はパッチリと目覚めたが、鼻を押さえドッタンバッタンと床を転げ回る。妹紅達

は永琳の所業にドン引きし、レミリア達は頭にクエスチョンマークを浮かべている。
「……そろそろ話をしたいんだけど、良い？」
「あっ、も、申し訳ありませんお嬢様。ほら、横島さん」
「うえっ？　あ、はいすんません」
　咲夜に促され、横島はピシッと姿勢を正す。表情もキリリと引き締め、服装と相まって出来る大人の男性といった風情だ。それを見た少女達は思い思いに感想を語り合う。
（真面目にしてれば結構いい感じなんじゃないか？）
（確かにそうだけど……。でも、普段が普段だし……姫様はどう思います？）
（私としてはそのギャップが面白いんだけど……）
　概ね好意的な感想を貰っている横島だが、頭は別のことを考えている。
　即ち、『さっきので時給が下がってなかったら良いなぁ』という暢気なものだ。
　と言うのも、この横島忠夫という少年、美神の元で働いていたときは昇給と減給を繰り返していたのだ。実力をつけ、知識を身につけては昇給し、色香に迷い、金に目が眩んで美神を裏切って失敗しては減給された。そして、最終的には２５５円に落ち着くのだ。
　それだけ失敗しても裏切ってもクビにならないのは、彼の霊能力がずば抜けて優れているのと、彼自身の優秀さ、そして安くこき使えることとお互いに存在する信頼感や姉

弟のような親愛からである。

一時お互いの関係があやふやな物になったこともあるが、とある事件を切欠に関係が微妙に変化したのだ。

向こうの世界には信頼と親愛と安心があった。だが、『こちら』は違う。幻想郷に墜落してすぐに職にありつけたのは良いが、元々横島はレミリアの気紛れによって雇われたと言ってもいい。ちょっとした失敗で減給や、最悪クビの可能性だってある。彼は最終的に物を言うのは金銭だということを美神の下で学んだ。

「ふむ、色々と契約に関しては後にしよう。まずは自己紹介よ、フラン」

「はーい！」

レミリアの隣にいた、金髪の少女『フランドール』が元気よく手を上げて返事をする。

「私はレミリアお姉様の妹のフランドール・スカーレット！　フランって呼んでね。よろしく、執事のお兄さん」

まさに天真爛漫といった笑顔で自己紹介をするフランに、横島もついつい頬が緩んでしまう。

「ああ。……じゃなかった。はい、よろしくお願いします。フラン様」

そう言って頭をすっと下げる。背筋もピンと伸ばしているので、中々に様になっている。

「次は私の親友の番ね」
「ん……。私はパチュリー・ノーレッジ。パチュリーでいいわ。普段は紅魔館の図書館に引きこもってる。……喘息持ちだから、私の周りで埃は立てないようにね」
「はい、了か……じゃなくて、畏まりましたパチュリー様」
次は全身を淡い紫の衣服に包んだ少女パチュリー。少々ふっくらとした少女で、体が弱いのだろう、その身からは余り気力を感じない。その表情は特に感情を表さず、入室当時から無表情のままだ。
ここでレミリアは横島の言葉遣いに苦笑を浮かべる。彼女は、正直に言えば余り畏まったような言葉遣いは好まない。出来れば適度に敬意を表すくらいでいい。
「という訳で、私達にそんな言葉遣いはしなくても良いわよ。適度に敬い、適度に砕けなさいな」
「うっす、了解っすお嬢様！　いやー、執事っぽい口調なんてなんも思いつかなくて困りましたよー。……っていうか、俺って執事なんすかね？」
「いきなり変わりすぎでしょう……」
咲夜はあまりの変わりっぷりに嘆息する。自分もそれほど畏まった口調ではないが、横島のはあまりに軽すぎる。
「ふふ。私が言い出したとはいえ、こうもあっさりだと逆に頼もしく思えるな……。そ

れはともかく、横島忠夫。お前には想像通り執事をやってもらう。咲夜の下について、仕事を教えてもらうといい。……ま、本来なら執事の方がメイドより立場は上なんだけど……細かい事はいいわ。とりあえず紅魔館の案内と、雇用契約とかを済ませましょうか。……そうそう、永琳達との話も、後でね」

そう言ってレミリアは身を翻し、永琳達の返事も聞かずにドアを開ける。側にはいつの間にか咲夜が控えている。レミリアは横島を横目に言葉を紡ぐ。

「どうした？　契約はまだだが、お前は私の執事なんだ。私の側に居なくてどうする？」

その言葉に横島は、目を丸くするが、レミリアの意図に気がつくと、しっかりと返事をする。

「はい！　お側に仕えさせていただきます、お嬢様！」

部屋から出て行くレミリアの表情は、楽しそうに微笑んでいる。

この日、吸血鬼の少女レミリア・スカーレットは『右腕』である十六夜咲夜の対となる『左腕』……横島忠夫を。

幻想郷に墜落した少年横島忠夫は多くの友人と就職先と、仕える主を手に入れた。

「そういえば、紅魔館に執事服なんてあったのね……」
「――――えっ？」

第六話
『おいでませ紅魔館』
～了～

第七話『横島君のお仕事――見習い執事編――』

一通り紅魔館内を案内された横島達は、またゲストルームに戻ってきていた。輝夜達は普段馴染みのない洋館に目を輝かせ、横島はこれからについて考え、若干不安になった。どういう訳か、広すぎるのだ。これはもう、誰かが空間を操っているとしか考えられないと結論付けた横島だが、それは正しい。

「さて、これが我が紅魔館だ。横島、お前はどんな感想を抱いた？」

「そうですね……。とにかく、べらぼうに広いっすね」

ニヤリとした笑みを浮かべていたレミリアだが、横島のその感想を聞き、ますます笑みが深くなる。

「ふふふ、そうだろうな。この館はただでさえ広いというのに、咲夜が能力で空間を歪め、更に拡大しているからな。生半可な広さじゃないぞ」

「能力……っすか？」

レミリアの言葉に横島は咲夜を見る。咲夜は目を閉じ、取り澄ました表情を浮かべている。

「咲夜の能力は『時間を操る程度の能力』という物で、時間と密接な関係にある空間すら

操れる便利な代物なのさ」

「……なるほど、それで」

そういえば、と彼の頭に浮かぶのは元の世界の師匠達。即ち、『竜神』小竜姫と『猿神』孫悟空だ。

小竜姫の切り札である『超加速』は、自分以外の全ての時間を遅らせるという韋駄天の奥義だ。それは言い換えるならば、自分と世界とで空間を異にする技なのではないだろうか。他にも、孫悟空が修行に使用する『加速空間』という物がある。それは通常とは流れる時間の速さが違う世界であり、そこで霊力の源である魂に多大な負荷を掛け、潜在能力を引き出させる……というもの。

かなり強引だが、どちらも時間と空間を操っていると言えるだろう。

（つまり、時間をある程度操れる奴は空間も操れる……ってことで良いのかな？　しっかしとんでもない能力だな。咲夜さん、本当に人間なのかな）

横島にだけは言われたくはないだろう。しかし咲夜の能力を以てしても心は読めない。彼が抱いた疑問は誰にも気付かれずに闇に葬られた。

「ふむ……。もうそろそろ昼時か」

驚く様子を見せず、逆に納得を示す横島にレミリアは多少拍子抜けするが、何せ彼は横島忠夫。もしかしたら似たような能力を持つ知り合いでもいるのかもしれない。そ

う考えたレミリアは、特に気にすることなく話題を変える。
「よし、咲夜は昼食の準備。横島は咲夜について行って仕事ぶりを見学しなさい。貴方には料理も覚えてもらうわよ」
「うえっ!?　はい、了解です。……ほとんど経験無いけど大丈夫かな?」
普段インスタント食品に頼っている横島は、当然料理などは作れない。作れるとしても、それは目玉焼きかゆで卵くらいだろう。
母や小竜姫、同僚のおキヌや高校の後輩でアパートの隣に住んでいる小鳩が料理をするところは何度も見ているが、経験が乏しいことには変わりない。
「フラン、何か食べたい物はある?」
「んーとね……。あ、オムライスが食べたい!」
レミリアの問いに両手を大きく広げて答えるフランは、満面の笑みを浮かべている。周りの皆も思わず頬が緩んでいる。その度合いが一番顕著なのは咲夜である。
「それじゃよろしくね。私達はグレート・ホールで待ってるから」
「畏まりました。では、少々お待ちください」
「あ、では失礼しまっす!」
横島は恭しく一礼をした咲夜に倣い、軽く礼をしたあと咲夜に付いて厨房に向かっ

た。
「……ところでお姉様」
「ん？　なに、フラン」
「執事のお兄さんのお名前は『横島』でいいの？」
「そうだけど……あれ？　自己紹介させてなかったっけ？」
「まだだよ？　お姉様が話をズンズン進めるし、案内中もお姉様喋りっぱなしだったし……。お兄さん、後ろでしょんぼりしてたよ？」
「あらら……」
フランの言葉にレミリアは掌で目を覆い、「やっちゃった」とばかりに息を吐いた。
所変わって厨房。咲夜は横島に調味料、肉類や魚、野菜に果物等の場所を教え、オムライスに必要な材料を次々と取り出していった。ちなみに二人共『ＰＩＹＯ　ＰＩＹＯ』という文字とひよこが描かれたお揃いのエプロンを着用している。横島はジャケットを脱いだシャツの上に、咲夜はメイド服の上に着ているのだが、エプロンの上に更にエプロンを付ける咲夜を、横島は微妙な目線で見ている。
「咲夜さん、ちょっと聞きたいことがあるんですけど……」
「あら、何かしら？」
自分が着用しているエプロンを見つつ質問をしてくる横島に、咲夜は何かエプロンに

ついて質問があるのだろうかと考える。もっとも、横島は気にはなっているが別にそれを聞きたいわけではない。

「さっきお嬢様がグレート・ホールで待ってるって言ってましたけど、それは何かなーって」

「ああ……なるほどね」

横島の質問に納得する。確かに、現代人なら興味を持って調べない限り知ることはないであろうことだ。彼が知らないのも無理はない。

「そうね……。簡単に言えばダイニングルームかしら……。まあ食堂っていう認識で良いはずよ。……お嬢様は『その方が格好いいから』という理由でグレート・ホールって呼んでるけれど……」

「はあ……そうだったんすね」

咲夜は横島の言葉に苦笑を浮かべるが、いつまでもそうしてはいられない。咲夜は横島に提案する。

「さて、せっかくだし、貴方にも手伝ってもらおうかしら」

「うぇー、まじっすか……。それで、何をすれば……？」

文句を言いつつもやる気を見せる横島に咲夜は苦笑を浮かべる。とりあえず料理初心者の鬼門であるタマネギのみじん切りをやらせてみようと彼女は決めた。中々にス

パルタだが、ちゃんと手順は説明するのでそれを聞いていれば大丈夫なはずだ。
「では、まずタマネギの皮を剥く。剥き終わったら二分〜三分程冷水にさらしましょうか」
「えーっと、これでタマネギの辛味が抜けるんでしたっけ?」
「ええ、そうよ」
横島はタマネギの皮をバリバリと剥き、氷水を張ったボウルに次々と入れていく。
「みじん切りの仕方は分かる?」
「えー……っと、半分に切って、根元を残して縦と横に切れ込みを入れていく……んでしたっけ?」
「あら、思ったより詳しいのね……?」
咲夜は横島が料理初心者であることから、「あれっすよ、とにかく細かく切ればいいんですよね?」という様な回答が返ってくると思っていたので、想像よりも遥かにしっかりとした答えに驚いた。それに横島は苦笑混じりに話す。
「まあ、人が料理してるところは結構見てますからね。……それに、料理番組をおかずに白飯食ったりとか……」
最後の方は若干涙声になっていた。それを聞いた咲夜は思ったよりも苦労していそうな横島に憐憫の情を催す。

「……さ、そろそろタマネギを切りましょうか」
「……そうっすね。まあ、初めてっすけど」
何か微妙な雰囲気になった二人は、タマネギをボウルから取り出し、みじん切りを開始する。
「まずは手本を見せるわね。……こんな風に切れ込みを入れて、後は端から刻んでいけばいいの」
咲夜は包丁を水で軽く濡らしたあと、全く淀みの無い包丁さばきでタマネギを細かくしていく。そのスピードはまさに目にも留まらぬ速さであり、玄人跣とはこのことかと思える。
横島もその技術に痛く感心していたが、よしと気合いを入れると、たどたどしいながらも、みじん切りに挑戦していった。
「……あら？」
と、ここで咲夜はあることに気付く。確かに横島は手付きはたどたどしいが、包丁を操る手に迷いはない。むしろ器用に扱っていると言えるだろう。その様は包丁に……、否、刃物に対する『慣れ』を感じさせる。少し気になった咲夜は、横島に聞いてみることにした。
「随分と刃物の扱いに慣れているのね？　それに、かなり器用みたいだし」

大きな好奇心と僅かな警戒を滲ませた言葉に横島は全く気付かず、タマネギをみじん切りにしながら言葉を返す。

「いやー、まだまだ小さい頃に親父におもちゃを強請ったんですけどね、何故か小さなナイフを渡されて、『それで作れ！』って満面の笑みで言われて……。後で親父はお袋にボコられてましたけど」

「それはまた……」

何とも予想外なことである。小さな子供にナイフを渡すのは、流石に怒られて当然ではあるが。

「それから、まあせっかく貰ったんだしってことで、親父と一緒に色々と作りましたよ。竹で作った水鉄砲、竹トンボ、竹ひご飛行機、鉛筆の端っこに飾り彫り……。夏休みの自由研究の宿題に、切り株で宇宙戦艦ヤ○トを作ったりもしましたね」

「へえ……。……え？　いや、えっと、え？　最後だけレベルがおかしくないかしら？」

「そうっすかね？　親父は消しゴムで精巧な千手観音像を作ったり、お袋は……ワイヤークラフトって言うんですかね？　めちゃくちゃ細い針金で十五ｃｍくらいの大阪城を作ってたりしましたし……」

「貴方達一家はどうなってるのよ……」

どうやら手先が器用なのは両親からの遺伝らしい。横島一家の非常識さを垣間見た

咲夜は、感心よりも驚愕や呆れといった感情の方が強い。だが、咲夜は同時にこうも思った。

（ほとんど料理の経験が無いわりには、それなりの速さでみじん切りが出来てるわね……。手先もかなり器用みたいだし、教えればすぐに戦力になりそうね）

まだみじん切りしか見ていないが、どうやら横島は咲夜のお眼鏡に叶ったらしい。彼はもう慣れてきたのか、次々とテンポ良くタマネギのみじん切りを量産し、その様子に咲夜はうんうんと頷いている。

そもそも、この紅魔館に優秀なメイドというのは咲夜と極々一握りの妖精メイドしかいない。紅魔館に数多く存在する妖精メイド達はとにかく要領が悪く、自分達の食事の用意や洗濯だけで一日が過ぎてしまう。更には自らの能力で紅魔館を広くしたせいで、時間を止めないと咲夜であっても掃除は終わらない。

そこに現れた横島という男。手先は器用で、教えればすぐに覚えてくれる。中々に優秀な人材だ。妖精メイドに優秀な者がいないというわけではないのだが、それでも今の横島にすら劣る程度の技量しかない。――ちなみに優秀な妖精メイドには、横島を風呂に連行してなんやかんやした三人も含まれている。

「……ふう、これでみじん切りは終了っすね」

「お疲れ様。多少大きいけど、初めてにしてはかなりの物よ」

どうやら及第点に達していたらしく、にこやかに誉める咲夜に対して横島は照れ笑いを浮かべる。

「ここからは流石に任せられないから、私が調理するところを見ていなさい」

「了解っす」

咲夜は料理の手順を説明しながらも手を動かし、横島はポケットから取り出したメモ帳にペンで書き込んでいく。

「……メモ帳なんか持ってたの？」

「いえ、何かこの執事服のポケットに入ってまして。……妖精の贈り物ってやつですかね」

「随分と夢の無い贈り物ね」

お互いに微笑みながらの談笑だが、当然二人共忙しなく手を動かしている。咲夜は横島がメモを取るスピードに合わせて調理をしているため、いつもより若干遅いのだが、非常にスムーズな動きのためそれを感じさせない。

「うーん、やっぱ卵の焼ける匂いは良いっすね……」

「そうよね、私も好きよ。……さて、後はこう手首をぽんぽんと叩いて……、はい出来上がり」

「おお！　いやー、旨そうだ！」

咲夜が掲げるフライパンには、湯気が立ち、ケチャップ特有の酸味を含んだ匂いと、一切の焦げ目もなく綺麗に焼けた玉子の香ばしくも優しい匂いを漂わせた、いかにも美味しそうなオムライスがあった。咲夜はそれを皿に移し、ケチャップをかけて最後の仕上げを施す。

「ま、今回は貴方に手順を覚えてもらうために簡単なのにしたんだけどね。……もっと本格的なのは仕込みに時間が掛かるし、まだ覚えられないだろうし」

「いやー、ははは……。精進します」

この横島という少年、自分がピンチに陥らねば行動をしないという悪癖がある。

自分が食べるなら多少不味かったり見た目が悪くても問題はないが、こと他人が絡むとその傾向が薄まるのだ。それは自分を良く見て貰いたいという感情も多分に含まれているが、実際のところ、彼は自分より年下や女性に甘いのだ。

紅魔館の執事という立場で食事の用意をすることになれば、それは雇い主のレミリアやその妹のフラン達、そして居候が決まった輝夜達も横島が作った料理を食べることになる。自分より年下（に見える）の女の子達に手料理を食べさせるのだ。美しく、健康的に育った少女達をモノにするという邪な将来の展望のために、美味しい料理を覚え、今の内に少女達の胃袋を掴むのも悪くはない。

ついでに言えば、そうしないと給料を貰えないしクビになって放逐されるかもしれな

い。

脳内でいかにも横島的な邪な思惑が駈け巡るが、珍しく顔には一切出さずにそれらしく話題を変える。ちょうど気になっていたこともあるのだ。

「よし、後は他の皆の分を……っていうか、このままじゃ冷めちゃうんじゃ……？」

「大丈夫よ。全員分あるから」

「え？　……ふおぉっ!?」

横島は先程完成したオムライスの隣のスペースに、いつの間にかズラッと並んでいるオムライス達に驚いた。どうやら咲夜が時間を止めて作ったようだ。

「ああ、そういや咲夜さんは時間を操れるんでしたっけ……」

「そうよ。このオムライス達の時間も止めてあるから、能力を解除するまで冷めることは絶対にないわ」

咲夜は少し誇らしげに胸を張り、横島の視線は少々慎ましやかながらも、しっかりと曲線を描く彼女のそこに吸い込まれるように集中するが、そこであることに思い至った。

「そういや、咲夜さんの能力が時間を操る能力なら、他の皆にも何か特別な能力があるんですかね？」

「ああ、それは――」

と、咲夜は途中で言葉を止める。多少考える仕草を見せた後、横島に向き直り、答える。

「本人達に聞いてみなさい。私が言うよりその方が良いでしょうし」

そう言った。横島は「そんなもんすかね？」と首を捻っている。

咲夜はオムライス達にクロッシュという釣り鐘型の銀の蓋を被せ、いつの間にか傍らに存在していた大きなキッチンワゴン二台に乗せていく。

それを見た横島もオムライスをワゴンに乗せていくが、そこで横島は今更ながらあることに気付いた。

「……あれ？　何か、随分とオムライスの数が多くないっすか？　十個以上ありますけど、確か食堂には十人も向かってないはずですけど……執事やメイドは主人と一緒に食べちゃダメなんすよね？」

横島は疑問を呈する。

「ああ、いいのよ。美鈴も来るし、小悪魔……パチュリー様の使い魔も来るだろうし。何より、今回は特別だろうしね」

「……？」

横島の疑問に咲夜は答えるが、横島はよく分かっていない。咲夜は苦笑を浮かべると、横島に声をかけ、共に食堂へと向かっていった。

進むこと数分。食堂まで着いた二人は扉を開け、中に入る。そこには大きな長方形のダイニングテーブルがあり、上座には華美な装飾を施された椅子にレミリアが座っていた。

側面には比較的シンプルながらも、下品にならない程度の装飾がなされた椅子があり、そこにフラン達や輝夜達と、昼食をとりに来た未だに絆創膏を付けている美鈴、赤い髪に本来耳があるべき場所にコウモリの羽のような物が生えた、魔族と思しき少女が座っていた。彼女が小悪魔（本名不詳）である。

（あの子がパチュリー様の使い魔、なのかな？　……うん、笑顔が可愛い）

咲夜はレミリア達に、横島は咲夜に倣い輝夜達に配膳をし、チラリと小悪魔を盗み見る。

魔力や格は大して高くはないが、咲夜ににこやかに笑いかける姿は非常に可愛らしい。何とも朗らかに笑う少女だ。

小悪魔を観察し終え、ワゴンに目を向ける横島はまた思う。

やはりオムライスの数が多いのだ。他にも誰か来るのかと咲夜に確認を取りに向かうが、そこでレミリアが横島に声をかける。

「それじゃ横島と咲夜も座りなさい。今回は一緒に食べましょう」

「え、でも使用人は主と一緒に食べちゃいけないんじゃ……？」

「あー？　いいのよ、そんな細かいことは。皆お腹空いてるんだからさっさとしなさい」
「は、はい……」
　レミリアの言葉に横島は咲夜と自分のオムライスをテーブルに置き、席に着く。咲夜はフランの隣、横島は紫の隣だ。すると、レミリアが手をパンパンと叩いた。
「はい、注目。あそこの男は、今日から執事として働くことになった横島忠夫よ。皆、こき使ってあげなさい。……ついでに言うと、そこに居る赤い髪のがパチェの使い魔である小悪魔よ。大好物は他人の色恋沙汰かしら」
「ふおぉっ!?」
「えっ!?」
「わーっ、お姉様いまさらー」
「うるさい」
　レミリアは横島を極々簡単に紹介し、横島と小悪魔はその内容に驚き、フランは姉の段取りの悪さに無邪気に辛辣な言葉を吐き、レミリアは「細かいことはいいんだよ」とばかりにフランを黙らせる。
　横島も最初は驚いていたが、皆から注目されているので、すっと立ち上がり自己紹介を始める。
「えーっと、今日から執事として働くことになった横島忠夫です。こういった仕事は初

めてなので拙いところはありますが、精一杯勤めさせていただきます。今更ですが、よろしくお願いいたします。……小悪魔ちゃんも、よろしく」

「あ、は、はいっ！　こちらこそよろしくお願いします！」

そう言ってお互いに頭を下げる。小悪魔は慌てて立ち上がったほどだ。周りからはパチパチと拍手の音が聞こえる。どうやら拍手をしているのはフラン、美鈴、輝夜の三人らしい。レミリアは「小中学生か、あんたらは」と呆れ顔だ。

「はい、それじゃ横島も小悪魔も座って……。そろそろいただきましょうか」

「わーい！」

レミリアの言葉にフランが歓声を挙げる。自分がリクエストした料理だからだろうか、その様はかなり嬉しそうだ。横島は彼女が吸血鬼ということを知っているが、レミリアは見かけ以上に精神が成熟しているのに対し、フランが見た目相応かそれ以上に幼く感じられる精神年齢に疑問を持つ。

（……ま、機会があれば聞いてみるか。――しかし、美味い。おキヌちゃんのとはまた違った、何というかこう……うん、アレだ。偉い人が凄いシェフに作らせたかのような美味さだ）

横島はレミリアの号令できちんと『いただきます』の挨拶をしつつ考える。流石にこの和やかな雰囲気でそういったことを聞くつもりは無いらしい。そして彼にグルメリ

ポートは出来ない。
「ん～～～っ！　すっごく美味しいよ、咲夜！」
「ありがとうございます、妹様。ですが私だけで作ったのではなく、彼にも手伝っていただきましたから」
「うえっ？」
　考えごとをしつつ、オムライスの上品な美味さに酔いしれていた横島は突然話題に上ったので驚いた。
「すごーい！　なにをやったの？　玉子でくるくるって包んだの？」
「なんでそこなのよ」
「いえ、タマネギのみじん切りだけですけど……」
「みじん切り出来るの!?　私なんか咲夜とめーりんに教わっても全然出来なかったのにーっ」
　フランは目を輝かせて横島とお喋りを交わす。天真爛漫で無邪気な彼女は姉のツッコミを華麗にスルーする。口の端にケチャップがついているのがポイントだ。咲夜はそれをナプキンでそっと拭う。
「フラン、食べながら喋るのは止めなさい。喋るのはちゃんと飲み込んでからよ」
「はーい。……むぐむぐ」

レミリアからの注意でフランは一旦横島との会話を止める。
レミリアも食事中の会話は咎めない辺り、マナーにうるさいという訳でもないのだろう。
フランはチラチラと横島を見ては何かを話そうとする。しかし話題が浮かばないのか、どうにも言葉にすることが出来ない。
そんな彼女の様子に横島は自然と微笑みを浮かべる。それは彼がシロやタマモ、パピリオを見るときに時折浮かべる物と同じ物だ。
それは微笑ましい光景を見るような、時に彼よりももっと年齢を重ねたような大人が見せるような笑顔。即ち、父性を含んだ笑顔である。
その笑顔を見たフランは何故だか分からないが、訳もなく笑顔を浮かべ、お互いにニコニコと微笑み合っている。それは何とも和やかな光景だが、横島の笑顔を見たのは何もフランだけではない。
(ちょっとちょっと、妹紅！　横島さんってもっと年齢重ねたら素敵なおじ様になりそうじゃない？　贅沢言うならもっと渋味というか苦味というか……)
(お前オジサン好きだったのか!?　だったら何で私の父を……いや、それはこの際どうでもいいや。気持ちも分からないでもないし。しかし、まあ……ああいうのは良いよな、大人って感じで)

（あんな表情出来たんですねぇ……。普段がアレだったからギャップが凄まじいですけど……）

輝夜達はいかにも少女らしい会話に花を咲かせている。その中で娘に『この際どうでもいい』と言われた彼女の父は、遠いお空の片隅で泣いているかもしれない。

（ほわー……）

（ふわー、大人っぽい……）

こちらは互いに赤い髪を持つ美鈴と小悪魔。美鈴は今朝見た彼の自分を本気で心配してくれた表情と今回の笑顔しか知らず、彼の悪い面を運良く（？）見ていないので、純粋に見惚れている。彼女は男性の容姿をそれほど気にしないというのもあるだろう。小悪魔は自分の方が遥かに年上だという事実を忘れているようだ。

（うーん、子供好きの男性って良いわよね……）

（何か、どれが彼の本性なのか分からないけどね……）

（アレかしら。ギャップ萌え？）

永琳と紫は率直な意見を述べる。妹紅をからかう姿や自分に飛びかかる姿、美鈴を『大きな乳』と呼んでいた姿とはギャップがありすぎる。それを提示した紫に永琳は『萌え要素』だと解釈した。月の頭脳は世俗に染まっている。

（何かフランがあっさり懐いてるわね……。私なんか陰で『あいつ』呼ばわりされてたの

に……）

（お、お嬢様……。お労しい……）

（無様ね）

かつての出来事を思い出し、少ししょぼくれるレミリアと、驚異的な勘で主が落ち込んだ理由を察した咲夜。そしてそんなレミリアを見たパチュリー。

一部以外和やかな雰囲気の昼食は平和に過ぎていった。

「……ふう、ご馳走様。さて横島。片付けに入る前に、この館について質問はあるかしら？　案内の時に色々説明はしたけど、完全じゃないしね」

落ち込んだせいか、食べ終わるのが一番遅かったレミリアが、他の皆の皿を集めていた横島に言う。問われた横島は少し考えたあと、恐る恐るといった様子で口を開く。

「えーっと、俺や輝夜様達は紅魔館のどの部屋で寝泊まりすればいいんでしょう？」

「あ、そういえば」

「……私も忘れてたわね」

横島だけでなく鈴仙や輝夜も忘れていたことが、各人がどの部屋で寝泊まりするかである。レミリアは咲夜に目配せすると、紅魔館の館内図を持ってこさせた。

「とりあえず、ここからここまでの部屋は誰も使ってなかったはずだから、そこを使うといい。それからここの大きめの部屋は永琳が使う方がいいだろう。色々と機材を持ち

込まないといけないだろうしね」
「あら、ありがとうねレミリア」
「気にするようなことじゃないわよ、元は私が言い出したことだしね」
　レミリアは館内図を指差し、輝夜達に使える部屋を教える。その際、永琳の使用する部屋は諸々の事情で大きな物を選ぶ。にこやかな二人は、何だか仲が良いように見え、輝夜や鈴仙に疑問を抱かせた。
「横島は……こっちの部屋で良いか？　こっちの方は妖精メイド達が集中してるから、それに合わせた方がこっちとしては楽だし」
「はい、大丈夫です。いやー、ありがとうございます。こんな大きな部屋を用意していただいちゃって！」
「……大、きい……？」
　レミリアはピンと来ないようだが、横島に指し示した部屋は大体二十畳程となっている。元居た世界で住んでいたアパートの四倍以上の広さであり、彼からすればとんでもないことだ。
　横島の様子を見た永琳は「うーん」と伸びをしたあと、レミリアに一旦永遠亭に戻ることを告げる。
「まあ無事な機材はあまり無いでしょうけど、探さないと分からないしね。……横島君

の服とか貴重品とか、持ってくるの忘れてたし」
「持って来てたんじゃないんすか!?」
月の頭脳はうっかりしている。鈴仙が最近うっかりが増えてきた永琳に不安げな視線を送る。
（疲れが溜まってるのかな……。それとも年齢による健忘症とか……）
「鈴仙は後でお仕置きね」
「――――っ!!」
鈴仙は悲しみに打ちひしがれた。
「機材運ぶなら手伝おうか？　あんた一人じゃ大変だろうし」
極力鈴仙は見ないようにして妹紅が提案する。何だかんだ永琳には世話になっているので、彼女の手伝いをするのに隔意は無い。
「……なら、お願いしようかしら。多分そこまで大変じゃないだろうし」
「なら俺も……」
「横島は執事の仕事を覚えなさい」
女二人では大変だろうと横島も声を掛けるが、それはレミリアによって遮られた。主の命に逆らう訳にもいかず、横島は申し訳なさそうにしている。ちなみに紫も自分が原因だからと手伝う様に言ったが、「貴方は病み上がりなんだから」と断られ、こちらも申

し訳なさそうに俯いている。最近活躍の無い自分に落ち込んでいるようだ。
「あ、師匠、私も一緒に……」
「ああ、貴方は輝夜と部屋割りを決めていなさい。二部屋程余分に」
「え？　それはどういう……」
「うふふ」

「え、ちょっと師匠ーっ!?」
永琳は婉然と微笑みを浮かべ、妹紅を引き摺ってドアに向かう。鈴仙の呼ぶ声は完全に無視し、妹紅の抗議も右から左だ。そこにレミリアから声が掛かる。
「今晩八雲紫の異変解決祝いの宴会するから、誰か誘って来なさい。昨日の今日でフラフラの奴もいるだろうけど、来る奴は来るだろうし」
その言葉に食堂内の全員がレミリアに注目するが、そんな視線はどこ吹く風。レミリアは優雅にいつの間にか咲夜が用意していた紅茶を飲んでいる。
（……どうでもいいけど、咲夜さんの行動って心臓に悪いな）
消えたり現れたり、まるでコマ送りのように行動する咲夜に横島は何となく胸を押さえてしまう。紅魔館の住人はもう慣れたものだが、横島のように今日知り合ったばかりでは仕方がないだろう。

「了解。それじゃ、行ってくるわ」
「ああ、行ってらっしゃい。……美鈴、永琳達を見送りなさい」
「あ、はい。では失礼します」
美鈴は横島と話をしようと機会を窺っていたのだが、それが叶う前に仕事を言いつけられてしまった。なら仕方ないとばかりに美鈴は永琳達を先導する。食堂から出る際に、横島に対しにっこりと笑みを浮かべ、軽く頭を下げるのも忘れない。それを見た横島もニカっと笑い返し、美鈴に軽く手を振った。どうやら横島は美鈴にウケが良いようだ。
それに気付いたのは主の親友に『大好物は他人の色恋沙汰』と紹介された小悪魔、そして楽しいことが大好きな輝夜姫であった。
(むふふ……。これは色々と楽しめそうね♪)
(ですよねですよね、輝夜さん!)
二人は無邪気に邪な笑顔を浮かべていた。
「それじゃ、横島は咲夜と一緒に昼食の片付け。それが終わったら人里に宴会の買い物でもしてきてもらおうかしら……。メニューは咲夜に任せるわ。さっき言った通り、横島をこき使ってやんなさい」
「かしこまりました。では、失礼いたします」

「失礼しまーっす」

咲夜はレミリアのティーセットを回収して恭しく一礼し、横島を伴って食堂を出る。

後に残ったのはガールズトークに花を咲かせる輝夜と小悪魔、フランと鈴仙に慰められ癒されている紫、静かに本を読み始めたパチュリー、そして頬杖をつき、それを眺めているレミリア。

（さて、急な宴会に何人来るかしらね……）

流石に現在の紅魔館メンバーだけという有り様は嫌だなあと、レミリアは内心ごちる。

門まで来た永琳達は美鈴に手を振って空を飛んでいき、美鈴は門番の仕事に戻る。

それなりのスピードで空を行く二人は、永遠亭についてあれこれと話し合っていた。

そして、その頃件の永遠亭では――

「コヒューー……コヒューー……」

「しっかりしてくださいてゐ様ぁーーー!?」

「誰かーーーっ！　早く鈴仙さんを……！　永琳様をぉぉーーーっ!!」

「あああああ!?　こ、呼吸がっ!?　脈がああああーーーっ!!?」

押し入れからてゐが救出されていた――!!

第七話

『横島君のお仕事――見習い執事編――』

～了

第八話『宴会の準備――千里を走る、厄介な噂――』

空を高速で移動する永琳と妹紅。二人は既に湖を通り抜け、人里にまで到達していた。

昼を過ぎた現在、今朝と比べると人は多いが、やはり普段の様子から考えると少なく思える。

「……やっぱり、あれだけの異変が続けばこうなるか」

「流石の人里の住人も大分堪えたようね」

幻想郷崩壊レベルの異変が二日続けて起これば、多くの逞しい人里の住人も塞ぎ込んでしまっている。むしろ今出歩いて談笑している人達の心境こそが謎である。

しかし、そうした人達を見るからこそ二人は思うのだ。

「……何となく、救われた気分だな」

「ええ。……本当に何となくだけどね」

少人数とは言え、彼等は笑いあっている。今塞ぎ込んでいる人達も、天の岩戸ではないが、彼等が居ればまた明るさを取り戻してくれるのではないだろうか。

永琳と妹紅には彼等に対して負う責任などは無い。ともすれば筋違いの感慨であるのだが、だからと言って知らんぷりを決め込むほど彼女達は冷たくもなかったようだ。

昔の彼女達を知る者が見たらどう思うのか……。喜ぶか、或いは呆れか失望か――

少なくとも、今の彼女達の傍らに在る者達にとっては、歓迎すべきことであることに間違いはない。

二人は何やら複雑な感情が去来する胸にむずがゆさを覚えながら、人里の上空を通過する。

さて。そんなこんなで二人は迷いの竹林に到着したわけなのだが。

「……」

「……」

二人は動かない。何だかこれ以上進みたくない。頭には『これ以上進むと面倒臭い思いをするぞ』という直感から来る警告が鳴り響いている。

吹き飛んだ竹は既に生え揃い、霧も竹林全体を覆っている。たった一晩で何もかも元通りだ。

故に二人は空からではなく徒歩で竹林を進む。とりあえず直感の警告は無視だ。永琳はこれ以上うっかりをするわけにはいかないのだ。

そうして辿り着いた永遠亭跡地。眼前に広がる光景は正に阿鼻叫喚の地獄絵図と言えるだろう。

曰わく――

「てゐ様あああああ!!　あああああ!!　うわあああああああああっ!!」

「目を……!　目を開けてくださいいいいーーーっ!!」

……とか。

「紫様あああああーーーっ!?　何処に行かれたのですかあああああ!!?　紫様あああああーーーーーー!!」

「藍様ーーー!!　ゆかっ、紫様はどこですかーーーー!?　紫様ーーーー!!」

とか。

「何で誰も居ないんですかっ!?　目を覚ましたら教えてくださいって言ったじゃないですか!?　夕刊に間に合わないじゃないですかぁっ!!?　やだーーーーーーー!!!」

とか。

「……」

「……」

二人は逃げ出したい気持ちでいっぱいだ。特に永琳は『藍と文のこと……忘れてた』という思考が頭を過ぎる。

いけない。私はこんなうっかりさんじゃない。それは紫の役目だ、と彼女は思う。――が、時既に遅し。現在、幻想郷一のうっかりさんは永琳と認知されている。

「……永琳」

「……ええ。分かってるわ」

二人は目を見合わせ頷き合うと、眼前の面倒臭い地獄に踏み出した。

紅魔館の厨房にて、横島は咲夜の指示の下皿洗いをしていた。

そのスピードはお世辞にも早いとは言えないが、丁寧に洗われた皿は光を反射し、綺麗に輝いている。

それを見た咲夜は嬉しそうに頷いている。

「中々ね。後は慣れていけばスピードも上がる。……やっぱり妖精の子達とは違うわね……」

咲夜の嫌にしみじみと発せられた言葉に、横島は疑問を持つ。

「妖精メイド達って、そんなに失敗とかするんすか？」

横島の頭には自分を綺麗にした妖精メイド三人組の姿。彼女達は横島から見てもかなり手際が良かったように思える。

「そうね……。勿論人に依るけど、一番ひどかったのはお皿を十枚洗わせたら三十枚割

られたわね」
「三倍!?」
「綺麗に洗えたからって喜んで、棚に突っ込んでぶちまけて……」
「おおう……。ま、まあ妖精達には大きすぎますしね……？」
確かに現在紅魔館で使用されている皿は全て人間用であり、人間と比べて小柄な体躯をしている妖精達には少々大きすぎる。
彼が顔も知らないその妖精を庇うのは子供好きの彼たる所以か、はたまた思い当たるような失敗の数々を思い出したのか。
苦笑いを浮かべる横島に咲夜も同じような笑みを浮かべ、彼女はこれからの予定を確認すべく横島に向き直る。
「お皿洗いも終わったし、この後は人里の方へ買い物に行きましょうか。貴方の生活用品も買いたいけど、多分宴会の料理の材料でいっぱいになるだろうから、それはまた今度で良いかしら」
確認ではなく断定的に話を進める咲夜だが、横島としても否やはない。寧ろ聞きたいことが出来た。
「それは良いんですけど、どうやって人里まで行くんです？　俺は空を飛べませんし……。まさか、咲夜さんが運んでくれるんすか？」

「それこそまさかよ。私達以外にも妖精メイドを何人か連れて行って、その子達に運んでもらうわ」

ちょっとした期待と共に鼻の下を伸ばす横島だが、対する咲夜は澄まし顔。そして、パチンと指を鳴らす。すぐさまその場に現れるのは――

「お呼びですかー？」

「はいはーい、お仕事ですかー？」

「……ふふふ、お久しぶり」

「ゲェーッ!?　こ、この三人組は……！」

そう、先程横島が思い浮かべた三人組の妖精メイド達である。

「え、ちょっと咲夜さん？　まさかこの三人に……？」

「ええ。そのまさか」

頭に疑問符を浮かべる三人組。横島としてはいくら三人とはいえ、妖精が人間を一人運ぶのは厳しいと考える。更に荷物も増えるのだから尚更だ。

そんな思いが顔に出ていたのか、咲夜は横島がそれを尋ねる前に答えを言う。

「この三人は紅魔館の妖精メイドの中でもとびきり優秀な子達なの。妖精としての力は『氷精』には敵わないけど、それ以外では勝っているわ。ちなみに三人共成人男性よりも力持ちよ」

「力持ちはやめてくださーい」
　横島は「氷精って何だろ?」と首を傾げているが、力持ちの部分でなるほどと頷いた。
それならば自分が力負けしても仕方ないだろうと。
　実際はまた異なる理由があるのだが、それは今は置いておく。
　咲夜は横島が考え事をしている間に、三人にこれからの仕事を説明していた。
　説明を終えた咲夜が三人を横島に向き直らせる。
「とりあえず自己紹介ね。この男性は執事として働くことになった横島忠夫」
「横島っす、よろしくー」
　ニカっと笑い、軽く頭を下げる。咲夜は一つ頷き、三人に顔を向ける。
「そしてこっちは……、手前から一号、二号、三号よ」
　咲夜は手前から順に番号を呼ぶ。
「……いや、咲夜さん。いくら何でもそれはちょっと……」
　横島はジトっとした目を咲夜に向ける。それを受けた咲夜は気まずそうに顔を背けるが、咲夜の隣にいる妖精メイド――一号と呼ばれた妖精――が元気よく挙手をしてから横島に話しかける。
「わたし達は紅魔館の妖精メイドでいちばんのふるかぶですからー。そのときにレミリアおじょうさまにあだ名をいただいたんですー」

「……それが、一号二号三号？」
「はいっ」
一切の屈託も無しに笑って頷く一号。寧ろそのあだ名を気に入っていそうな勢いである。
「こほん。ではあらためまして、私は一号です。いつもはメイド長である咲夜さんのお手伝いをしてますー。よろしくおねがいしますねー？」
一号が顔をにぱっと緩ませながら自己紹介をする。黒いセミロングの髪をポニーテールで纏めた、柔らかな笑みの似合う少女だ。次いで二号が一歩前に歩み出し、同じく自己紹介を始める。
「わたしは二号ですー。基本的にはめーりんさんのお手伝いをすることが多いですねー。庭のお手入れをがんばって、お花がいっぱいいっぱいなんですよー？」
茶色のロングヘアをツーテールで纏めた、快活な印象を抱かせる少女。少し吊り目がちだが、それが彼女の可愛らしさを際立たせている。
「……私は三号。近頃はパチュリー様のお側に仕えさせてもらっています。……暇な時に体を触らせてください」
「なんでさ」
最後に控えた三号も自己紹介を終えた。伸ばし放題の黒髪を緩い三つ編みで纏めた、

無表情とジトっとした目が特徴である。彼女は横島を洗ったり着替えさせた時のことを思い出したのか、若干鼻息が荒い。筋肉が好きなのだろうか。

一号は咲夜の手伝いが主な仕事であるためか手先が器用であり、二号は美鈴と庭の手入れをする影響で力が強く、三号はパチュリーの命で小悪魔と共に図書館の整理や本の修繕をするので、手先が器用で力も強い。もしかしたら、三号には二十六の秘密があるのかもしれない。

「さて、自己紹介も済んだし早速出掛けましょうか。貴方達は荷物を入れるバッグを持って来なさい。私達は先に門の所で待ってるから」

「はーい！」

「はやくはやく行きましょう」

「……ちょっと待っててくださいね」

妖精達は軽く頭を下げたあと、それぞれバッグを取りに戻る。

咲夜は横島を目線で促し、共に門へと向かっていった。

「うーん……。流石にこれは記事には出来ませんねぇ……」

永琳から紫と横島に関する詳細な話を聞き終えた文は、メモ帳を見返しながら言葉をこぼす。

眉は垂れ下がり、その小さな口から漏れ出るのは小さな溜め息ばかりである。
「そうしてくれると助かるわ。その代わり、てゐのことはいくらでも記事にしてくれて良いわよ?」
「それも遠慮します」
永琳の発言にぐったりと倒れているてゐがピクリと反応する。あの後、永琳に気付け薬を直接鼻にぶちまけられ七転八倒しながら覚醒したてゐであったが、鼻を焼き尽くすような熱と頭部が破裂したかのような衝撃を受けた異臭と胃の内容物どころか内臓全てを吐き出したくなるような吐き気を訴え、さらに永琳の絶妙な匙加減のお陰で気絶することも出来なかったてゐは最終的には身じろぎ一つ出来ずに倒れ伏すしかなかった。これで一切の後遺症がないとは永琳の言である。
文はそれを極力見ないようにして、夕刊のネタをどうしようかとどんよりと曇った表情で空を見上げた。
文の気分とは裏腹に雲一つ無い快晴である。余談だが、藍と橙は紫が紅魔館に居ると分かった瞬間、文顔負けの超スピードで紅魔館へ飛んでいき、文のプライドを痛く傷つけた。曇った表情の半分以上の理由を占めていそうだ。
「……あ、とりあえず永遠亭がしばらく休業することを書いておきましょうか?」
苦し紛れの文の提案に永琳はそれは名案とばかりに手をぽむと合わせる。

「お願い出来るかしら？　危険だから近付かない様にとも。これから私も色々と忙しくなりそうなのよ」

　文は頷き、永琳と詳細を詰めていく。記事の内容も固まり、夕刊を仕上げる為に飛び立とうとする文を引き止め、永琳はお願いごとをする。

「夕刊を配るついでに、今夜紅魔館で異変解決の宴会を開くことを皆に伝えてくれないかしら？　私達はちょっとやることがあって、手が離せないから」

「え？　……まあ、良いですけど。今度優先的にネタを回してくださいよ？」

「了解。交渉成立ね。……妹紅ーっ！　そっちはどうかしらーっ!?」

　永琳は頷くと廃墟と化した永遠亭を調査中の妹紅に問いかける。ややあって、妹紅が戻ってきたが、その両手にあるのは横島の服と貴重品のみ。

「ダメだな。私から見ても無事そうな機材はほとんど無かった。まあ、永琳が見ないと確かなことは分からないけど……」

「はぁ……。分かってはいたけど、面倒ね。……やっぱり鈴仙も連れてきて雑用を押し付けた方が良かったかしら……？」

「ツッコミがいない状態で輝夜の相手をする方があいつにはしんどいと思うが……」

　思わずこぼれた言葉に呆れた風に言い返され、永琳はそれもそうかと考えを改める。

「ふう。それじゃ、さっさとやる事やりますか。……貴方、イナバ達を集めてきてくれる

？」

永琳は軽く息を吐いた後、近くに居たイナバに竹林に生息するイナバ達を集めるように言う。……何ともややこしい事だが、当の本人達は慣れたもの。たった数分で全イナバが集まった。折角だからと、文はその珍しい光景を写真に収め、カリカリとメモを取っている。

そして永琳はイナバ達に『てゐの財産』を永遠亭の再建費用に充てることを伝え、「頑張って建て直してね」と熱心に『お願い』をした。

永遠亭最強の存在によるお願いは、イナバ達の顔色を無くし、全身が自らの意志に反してガタガタと震えてしまう程の形容し難い『何か』が秘められており、イナバ達は永琳のお願いを『快く』引き受けた――

「……そ、それじゃあ私は戻りますね。そろそろ記事を作成したいので。それでは！」

永琳の放つ『何か』に耐えられなかったのか、それとも単に巻き込まれたくなかっただけか、文は近年稀に見るスピードでその場から飛び去っていった。

妹紅はそれをどことなく羨ましそうに眺めた。流石の妹紅も今の永琳は怖いらしい。

ややあって目線を永琳に戻した時、彼女は既に再建に関する注意事項を言い終えており、現在はイナバ達から質問を受け付けていた。

イナバ達から寄せられるあらゆる疑問を淀みなく答えていく様は、彼女の叡智を証明

している。
　粗方の質問も出尽くし、そろそろ紅魔館に戻ろうかと思った時に、一人のイナバがそろそろと手を上げた。
「あら、何か分からないところがあった？」
「いえ、その……。質問じゃなくて、報告なんですけど……」
　イナバが齎したその報告に、永琳と妹紅は思わず目を見合わせた――

　人間の里、その端に、奇妙な一団の姿があった。それはメイド服を着た美少女一人、大きなリュックを背負った妖精が三人。そして執事服を着た少年が一人。
　咲夜率いる紅魔館の使用人達である。
　道を行き交う人々を避けつつ、田舎から出て来たおのぼりさんの様にキョロキョロと辺りを見渡す横島に、咲夜はキッと厳しい視線を投げかけ、紅魔館のメイド長として忠告をする。
「さて、横島さん。貴方は一般の人間ではなく、紅魔館の執事としてこの人里に来ているわ。貴方が何か問題を起こせば、それはお嬢様の恥になる……。分かるわね？　紅魔館の、お嬢様の執事として恥ずかしくない行動を心掛けなさい」

その真剣な言葉に横島は表情を引き締め、ゆっくりと頷く。

「うっす、分かってます。お嬢様は俺を拾ってくれて、宿と職を与えてくれたんすから……。お嬢様に恥は掻かせませんよ。――というわけでそこのおっ嬢さーーーんっ!! 僕と清らかな青春について色々と語り合いませんかーーーっ!!?」

彼は走った。自らが誇りを以て『恥ずかしくない』と言える行いをするために。彼の魂の平穏のために。幻想郷で目覚めてそんなに時間が経ってないのに、周りがロリィな美少女だらけ（に見える）状態でなんやかんやダメージを負った正義を持ち直すために。

「……ふっ」

ずどどどっ！　と土埃を上げながらナンパに走る横島の姿を見やり、何故かこみ上げた笑いを一つこぼして……。

咲夜は、まるで時間を止めたかのように女性に声をかけようとする横島の前に回り込むと――

「十六夜☆ブロウ!!!」

「ケ〃ハ〃ア〃ッ〃！〃？〃」

――腰の入った、強烈なボディブローをぶちかました。……ちなみに技名を考えたのは彼女の主であるレミリア・スカーレット……ではなかったりする。『レミリア・ストレッチ』を参考に、咲夜自身が名付けたようだ。

「ほほほ、嫌ですわ横島さん。今日は買い物の荷物持ちをしてくださる約束でしょう？」
「おぅうっ」
テキトーな理由を捏造し朗らかに微笑みつつ、咲夜は横島の腕を取り、捻って関節を極める。
横島に声をかけられた女性はポカンと口を開けていたが、やがて横島の隣に居るのが咲夜だと気付くと、戸惑いながらも声を出した。
「あ、貴方は紅魔館のメイド長の十六夜さん……？」
「え？　……あら、貴方は雑貨屋の店員さん」
今現在、咲夜は横島の関節をメキメキと締め上げている。こんな場面をいつまでも見せているわけにはいかないと、挨拶もそこそこにその場を辞した。……それが、間違いだった。
横島に声をかけられた女性、彼女は確かに横島にも驚いたが、何よりも一番の衝撃を受けたのは咲夜にだった。
――他の女をナンパ（？）した彼氏に嫉妬からか暴力を振るったが、やりすぎたと感じたのかすぐさま腕を抱き、体を擦り寄せ笑いかける。自分が挨拶をしても『二人の時間を優先』とばかりにそそくさとその場を後にした（ように見えた）。
それが意味するところはつまり……。

「十六夜さん、彼氏いたんだ……」

盛大な勘違いである。しかも間の悪いことに、呆然と立つ彼女を気にした友人の女性が話しかけてきた。

「ちょ、どうしたの雑貨屋の店員さん……？」

「え、あ、貴方は肉屋の店員さん。……いえその、さっき十六夜さんが彼氏とデートをしてて……」

「で、デートッ！　あの十六夜さんが!?　彼氏持ち!!?」

「うん……」

こうして、勘違いにより発生した噂は人里に蔓延していく。

人の噂も七十五日。噂が無くなるまで……先は、まだまだ長い。

「恥ずかしくない行動を心掛けろって言ったでしょう!!　何いきなり恥ずかしいことしてるの!!」

「堪忍やーっ！　仕方なかったんやーっ！　ロリっぽい子達に囲まれてたせいで我慢出来んかったんやーっ!!」

咲夜は横島を人気のない場所に連れ込み、プリプリと説教をしている。対する横島は

おろろーんと大量の涙を噴射し、恥も外聞もなく謝り倒している。ちなみに普段から全く我慢出来ていないのは公然の秘密だ。

その情けない姿は咲夜の怒りを呆れに変え、妖精三人組は面白そうに眺めている。咲夜は深い深い溜め息を吐くと、ぴっと人差し指を立てた。

「今回は大目に見るわ。でも、これ以上醜態を晒すなら……分かりますわね？」

「はい」

ニッコリと笑い、首筋に冷たくて尖っていて切れ味が凄く良さそうな銀の加工品を当てられては、即座に頷く他になかった。

結局お目付役として一号と三号が横島と手を繋ぎ、二号が横島に肩車の形で乗っかっている。咲夜は自分が発案したその姿を見て、微笑ましい気持ちになってしまい、柔らかく微笑んでしまった。

咲夜の噂に『既に三人の子持ち』という尾鰭がついたとかなんとか。

結局一行はその状態で色々と買い物をしていく。三人組のリュックがいっぱいになり、何とも重そうだ。それを見た横島は三人からリュックを預かることにする。

「いいんですかー？　三人分はかなりおもいですよー？」

「いーの、いーの。帰りは皆にもっと重たい思いをさせちゃうんだからさ。せめて今ぐらいは楽をしないと倒れちまうぞ？」

横島は空を飛べない。今重い荷物を持って体力を消費しては、三人掛かりとはいえ横島を運んで紅魔館まで帰るのは難しくなる。

それを負い目に感じた横島は、せめて今だけでもと荷物を持つ。それと一つ、試したいこともあったからだ。

横島は遠慮がちに問いかけてきた一号の頭を優しく撫で、ゆっくりと、ゆっくりと魂から霊力を抽出し、霊的中枢（チャクラ）を回す。

横島の体内に何故か存在する莫大な霊力を暴走させないよう、いつも以上に優しく、ゆっくりと全身に満たしていく。それはやがて彼の体を活性化させ、活力に充ちた体は普段以上の能力を発揮させる。最早彼には、荷物の重さなどほとんど感じていない。

（……良し、この位の出力なら暴走しねーな。後はこれから慣らしていかねーと……）

普段彼は暴走を意識せずに霊力を扱う。それはつまり大雑把ということでもあり、まともな修練を受けることがなかったから仕方のないことではあるのだが、霊力を扱うセンスと、収束という一芸に天賦の才を持つ彼にはそれでも問題はなかった。

しかし、今は違う。神社での一件もあり、自分でも総量を把握出来ない程の膨大な霊

力は、初めて彼に暴走の恐怖を植え付けた。……実際は近くに式神暴走娘が居たり、焦って文珠を暴発させたこともあるのだが、この時の彼は都合良く忘れている。

だから、優しく優しくという意識を込めてチャクラを回す。霊力とは魂の力であり、その者の放つ波動でもある。現在の彼をそういった事に敏感な者が見れば、非常に優しい、穏やかな霊波を放っていると感じるはずだ。そういった霊波は近くの者に感染し、気分を落ち着かせる。咲夜の機嫌がすぐに戻ったのも、無関係ではないだろう。

つまり、何が言いたいのかと言うと。

「……えへへへ～」

彼は、一号の頭を未だ撫でていたのだ。妖精である彼女にとって、とても心地良い波動を放ちながら。

見事にふにゃけた顔を披露する一号を訝しげに見ながら、横島と咲夜達一行は帰路に着く。一号と同じく顔をふにゃけさせた二号と、普段より顔が赤らんでいる三号に気付くこともなく。

妖精三人組は横島の霊波動を受けたせいか、妙に滾刺としており、三人掛かりとは言え荷物や横島の重さなど全く気にしていないかのようなスピードで紅魔館に戻ってこ

れた。

しかし、三人は横島から離れず、体をぺっとりと擦り寄せたまま。これには横島と咲夜も首を傾げるしかない。

「咲夜さん、俺何かやりましたっけ……？」

「いえ、何もしていないと思う……けど……？」

結局三人は紅魔館にあるパーティーホールの準備が終わるまで、横島から離れなかった。宴会の料理は全て咲夜と数人の妖精メイドに任せ、横島は力仕事が得意な妖精メイド達と共にパーティーホールの設営に入る。どうやら今回は立食形式のようだ。

何をどこに用意するか、それはどこにあるかなどは横島に張り付いた三人組に教えてもらい、作業を進めていく。しかし、如何に横島とは言え、三人をくっつけたままで作業をするのは苦戦を強いられ、またも霊力で身体能力を上げることにする。そのせいで更にくっつかれるとは気付かぬままに。

「……」

「……？」

横島達より一足早く帰ってきていた永琳と妹紅、てゐの三人だが、現在は多少緊張し

た雰囲気に包まれていた。

というのも、イナバからの報告を受けた永琳が、ずっと深刻な顔をして考え込んでいたからだ。

そのイナバの報告も要領を得ない物であり、曰わく「何か分からない妖怪が永遠亭に侵入しようとしていた」というもの。

何か分からないとは、見た者によって証言がマチマチだったからだ。「野犬のようだった」「蛇だった」「大きな鳥だった」等、枚挙に遑がない。

妹紅はその証言から単なる野生動物か何かかと思ったのだが、永琳は何か気になることがあったのか随分と真剣に話を聞いていた。

考え事をしつつ紅魔館まで戻り、美鈴と挨拶をしてゲストルームまで戻る。輝夜達は選んだ部屋を見に行っているようで、現在ゲストルームにいるのは永琳達三人だけ。何とも気まずい空気の中、妹紅は輝夜達が早く戻ってくるように願う。

結局輝夜達は数分後に戻ってきて、ソファでぐったりとしているてゐを甲斐甲斐しく看病し、永琳の顔をだらしなく緩ませることに成功する。その後皆で部屋を確認しに行き、仲良く談笑して宴会開始までの時間を過ごしていった。

そうして陽も完全に落ち、宵闇が辺りを支配する中、宴会に参加する者達が紅魔館に集まりだした。

やはり異変が立て続けに起こったせいか、最終的な人数は毎度の宴会に比べて少なく見える。それでも紅魔館、永遠亭の主要メンバーを加えれば三十人近い人数なのだから、驚きに値するだろう。

その者達は妖精メイドにパーティーホールまで案内され、ホール全体に広がる豪華な食事や酒に期待の眼差しを向ける。中には穏やかながらも優美さを感じさせる装飾に思わず唸りを上げる者もいる。各々好きなメンバーで固まって穏やかに談笑して始まりの時を待つ。

そんな緩やかな雰囲気の中、貧乏生活をしているとある巫女さんや、その巫女と仲が良い鬼さん等は涎を垂らさんばかりだ。

そんな風に飢えた者達が発する殺気というか鬼気というか、ともかくギラギラとした雰囲気を撒き散らしながら、まだかまだかとホール最奥の壇上を睨み付ける。

本来ならばまだ開始の時間ではなかったのだが、飢えた狼を放っておくのは危険と考えたのか、今回の宴会の幹事であるレミリアが咲夜と横島を伴い、壇上に上がる。

横島に対して訝しげな視線が集中するが、横島は涼しげな表情でそれをスルーする。内心美少女の注目の的なので喜びやら何やらが溢れ出さんばかりだが、そこは彼も男の

子。クールな装いで女の子達をドッカンドッカン言わせよう等と画策している。
　ホール中の視線が集中する中、レミリアが大きく息を吸い、言葉を発する。
「本日は忙しい中集まっていただき、感謝する。度重なる異変のせいか来られなかった者もいるようだが、その者達の分も皆には楽しんでいただきたい。……えーっと、いい加減皆お腹空いてるだろうし、もう挨拶はいいや。それじゃ皆グラスを取って」
　最初は澄ました顔で軽やかに少々尊大な挨拶が始まったが、腹を空かせた狼達の危険な視線の圧力に負けたのか視線どころか顔ごと背けてちゃっちゃと切り上げる。
　若干投げやりなレミリアの言葉だが、皆は気にせず妖精メイド達が配ったシャンパン入りのグラスを手に取り、合図を待つ。
「こほん……。それじゃ――乾杯!!」
「「乾杯!!」」
　今ここに、宴会が始まる。

第八話
『宴会の準備――千里を走る、厄介な噂――』
～了～

第九話『紅魔館での宴会』

「……なるほど、そういう経緯で紅魔館の執事になったわけですね」
「ああ、うん。まあな」
紅魔館で宴会が開始され十分程。横島は文に取材されており、彼女の勢いに若干圧されている。初めの頃は正に烏の濡れ羽色というべき髪と可愛らしい顔立ち、そしてミニスカートからすらりと伸びる白い太ももに目を奪われ、だらしなく鼻の下を伸ばしていたが、彼女が新聞記者であることを知ると、途端に顔を歪ませた。
彼は魔神アシュタロスとの一連の戦いでマスメディアの恐ろしさを身をもって味わっているため、文に苦手意識を持ったようだ。
実際には横島について記事にしない手筈となっているので、今回の取材はほぼ文の趣味であり、好奇心を満たすためのものであるので、横島が不安がることは無かったりするのだが、それを彼が知るはずもない。
警戒虚しく文の巧みな話術に嵌った彼は、既に元居た世界についても軽く話しており、後日独占取材の約束までも取り付けられている。

文は高速でメモを取り、何か横島の存在をぼかして記事に出来ないかと頭を捻る。その隙を丁度良く思ったレミリアが二人の間に割って入り、文に話を切り出す。
「取材中悪いが、横島を連れて行きたいんだが……構わないか？」
「え、俺をっすか？」
「ふむ……ついて行っても良いですか？」
何かネタになりそうな予感がしたのか、少しばかり目を輝かせて聞く文に、レミリアは少々思案する。だが、ついて来られても別段困るようなこともなく、気にする程でもないと考えたレミリアは「邪魔はしないでよ？」と、一応の念押しと共に同行を許可する。
「それで、何をするんです？　料理なら取ってきますけど……」
「あー？　違う違う。今からやるのはあんたの顔見せ。つまりは挨拶まわりよ」

「幽々子様、追加のお料理をお持ちしました」
「あら～。ありがとう、妖夢」
艶やかな着物を纏い、三角頭巾を模した帽子を被る『亡霊の姫君』西行寺幽々子。彼

女は自らの従者である魂魄妖夢から、皿に程々に盛られた料理を受け取った。

妖夢は半人半霊という種族であり、人の姿をした半人、白く大きな霊体の形をした半霊に別れて存在している。半人の方は銀の髪をボブカットにした凛々しい表情の似合う美しい少女であり、黒いリボンを付けている。背中には『楼観剣』という長刀を背負い、腰には『白楼剣』という刀を佩いている。

対する半霊は、上記の通り白く大きく、そして丸い。何ともシンプルな、正に幽霊らしい姿だ。

本来ならばその組み合わせは違和感を齎しそうな物なのだが、流石は『半人半霊』という種族と言うべきか、その姿を見ても違和感を生じさせず、それこそが自然なのだと素直に感じさせる。

そんな誰も彼もの目を引く妖夢を超える存在感を放つ者、それが彼女の傍らに居る西行寺幽々子だ。

何も威圧感があるわけではない。恐怖感をばらまいているのでもない。ただ、何となく気になってしまう。何となく視線が行ってしまう。そんな雰囲気を纏う少女だ。

そして、そのような雰囲気を纏うのは幽々子一人だけではない。この宴会に来ている中にも、更に数人存在する。

その中の一人が、ワインの入ったグラスを片手に近付いてきた。八雲紫である。

「貴女達も来ていたのね」
「あら、紫。良かった、元気そうじゃない。心配していたのよ～？」
「こんばんは、紫様。お元気そうで何よりです」
二人の挨拶に紫は苦笑を浮かべる。妖夢は純粋にそう思っているのだろうが、幽々子についてはそうではないだろう。明らかに分かって言っている。
「全く……。それでも貴女は私の親友なのかしら、幽々子」
「あら～、もちろんよ紫」
「……？」
妖夢は二人の言葉の意味が分からず、首を傾げている。幽々子にしてみれば、ここまで余裕の無い紫は一昨日の異変を除けば、いまだかつて見たことがない。とりあえず心配させた仕返しに皮肉を織り交ぜた挨拶をしたのだった。
「ところで、結局あの時何があったの？　貴女があんなことになるとは、ちょっと考えにくいけれど……？」
幽々子のその問いに、紫は顔を苦々しく歪める。目線を逸らし、言いにくそうにしていたが、やがて決心したのか幽々子と視線を合わせる。
「……恥を晒すことになるから、あまり言いたくはないんだけど、ね……」
そのあまりにも苦々しい表情に、自分はこのまま聞いていて良いのか迷う妖夢であっ

たが、込み上げてくる好奇心には抗えず、緊張しつつも紫の言葉を待つ。
「――てけれっつのぱー」
「ふんふん」
「……。……ん？」
「――はっぱふみふみ」
「あらあら……、そんなことが……？」
「待ってください」
妖夢が二人に待ったをかける。二人はまるで「どうしたの？」とでも言いたそうな表情で妖夢を見る。
「いえ、その……。今ので本当に分かったんですか、幽々子様……？」
「……妖夢は分からなかったのかしら……？」
「普通は分かりませんよ！　……ていうか何で困惑した表情をしてるんですか!?」
天才とは得てしてそういったものである。特に理論ではなく感覚で物事を捉えている人物は、それが顕著だ。普通の人間よりは長生きしているとはいえ、少々頭が堅く、柔軟性に欠ける妖夢は天然気味な幽々子の言動に振り回されることが多いようだ。
そんな妖夢を見て、幽々子は懐に入れていた扇子を取り出し、スッと広げ、口元を隠しつつ一言。

「まだまだ未熟ね、妖夢」
「いくら熟練した人と言えど、今のは分からないと思いますが……」
　幽々子の言葉に妖夢は反論する。それは至極当然な内容なのだが、幽々子と、ついでに紫は何故か不敵な笑みを浮かべている。
　そんな二人に疑問を持った妖夢だが、丁度紫達の背後に、横島と文を伴ったレミリアが歩み寄って来た。
「あんた達も、中々楽しんでいるようね」
「どもっす」
「あはは……相変わらずですねえ」
　レミリア達各々が会釈をし、話の輪に入る。視線は当然横島に集中し、横島は美少女の視線にある種の快感を感じはじめる。だが、こんなことで新たな扉を開くことはないと、頭を軽く振り、改めて自己紹介をしようとするのだが、それは紫に遮られた。
「横島さん、まずはこちらから。この子は……」
「え？　あ、はい。私は魂魄妖夢と申します。以後、お見知り置きを」
「ああ、妖夢ちゃんだね。俺は横島忠夫、よろしく」
　また自己紹介を遮られたので若干落ち込むが、まずは妖夢との自己紹介を済ませる。そして自分と紫の意味ありげな視線と、紫が手で示す幽々子の視線が絡み合い、彼は何

をするのか大凡のところを把握した。
「ふふ、私の番ね。私は――」
そして、幽々子がその小さな唇をそっと開く。
「――てけれっつのぱー」
「……ふむ」
「……は？」
「……え？」
「ちょ、何を……？」
レミリアと文は口をポカンと開け、妖夢は初対面の男性に先程自分が体験した訳の分からない言葉をかける。それに対し横島は思案顔だ。
「――はっぱふみふみ」
「……うーん」
最早周りの者を置き去りに、幽々子と横島は見つめ合う。皆は頭に疑問符がいっぱいだ。その後横島は数秒間程唸った後、徐に頷き、無駄に爽やかな（つまり胡散臭い）笑顔を浮かべ衝撃の発言をする。
「貴女が紫さんの親友の幽々子さんっすか。俺は紅魔館で執事として雇ってもらった横島忠夫っす。よろしくお願いしまっす！」

「はい、よろしくね～」
　にこやかに笑い合う二人。
「うえええええええ!!??」
　と、そこに妖夢の驚愕の悲鳴が轟いた。
「わ、分かったんですか!?　本当に分かったんですか今ので!?」
「お、おおぅ……っ!?」
　猛烈な勢いで横島に迫る妖夢。横島もこれは予想外だったらしく、勢いに押されるがままに後ずさっている。
　レミリアや文も目を見開いて驚いており、今の謎の言語についてお互いの考えを話し合ったりしている。
　そんな少々カオスな空気が立ち込める中、紫と幽々子の二人がゆっくりと妖夢に歩み寄り、肩をポンと叩く。
　妖夢は振り向く。そこに有ったのは――。
「……ふっ」
「み・じゅ・く♪」
「なんですかそのドヤ顔は……っ!?」
　非常に腹立たしい、これでもかという位に勝ち誇ったかのような表情をする二人で

あった。妖夢は既に半泣きである。

そんな光景を見た横島は良心が痛んだのか、頭をポリポリと掻きながら種明かしをする。

「えーっと、ごめんね妖夢ちゃん。実は、紫さん達の話が偶然耳に入ってただけなんだよ」

「え……？　ど、どういうことです……？」

つまり、こういうことだ。

横島は紫と幽々子の会話を美女美少女にのみ発揮される驚異的な聴覚で聞き取り、二人が親友であると知る。そして横島はこれまでの紫との会話と周りの紫に対する評価から、彼女が中々に厄介な性格であることに気付いた。

横島の推測通りなら、彼女の性格からして生真面目な人物はからかわれるであろうことは容易に推察される。そこに来ての意味深なアイコンタクトだ。紫と幽々子が真面目そうな妖夢をからかう目的で何かをしてくると瞬時に判断し、後はアドリブで乗り切る。幸い幽々子もノってくれた。

「偶然とはいえ、即興で……？」

妖夢は目をまん丸と開き、かなり驚いているようである。これにはレミリアと文も感心し、横島を見る目が少々変わった。

「妖夢、貴女を未熟と言った理由が分かったかしら」
「え……？」
　幽々子の言葉に、妖夢は顔を向ける。
「彼、横島さんは周りから得た情報を瞬時に整理し、まだ知り合って日が浅い紫や、初対面である私からの視線だけで私達の意図を察し、これだけのことをやって見せたわ。それには咄嗟の判断力や、頭の回転、何より柔軟な思考が必要になる……」
「……！」
　幽々子の真剣な言葉に妖夢は姿勢を正す。それは普段から幽々子に言われてきたことだが、今回のことでそれがやっと理解出来た。
「妖夢、もっと周りに目を向けなさい。何もいきなり出来るようになれとは言わないわ。少しずつ、少しずつ今の貴女の殻を破りなさい。そうすれば、今よりもっと大きくなれる」
「……はい、幽々子様！」
　妖夢は幽々子に力強く頷きを返す。そして横島に向き直り、頭を下げる。
「初対面である私に対し教えを授けていただき、深く感謝します横島さん！　ありがとうございます！」
「うえっ!?　えあ、うん、どう……いたし、まして？」

妖夢の感謝に横島はしどろもどろで返す。妖夢は実に晴れ晴れとした表情で横島を見ている。対する横島の表情は困惑に染まっている。

それも当然だろう。彼は別に妖夢に対して何かを伝えたかったわけではない。ただ、紫達に乗っかって真面目そうな女の子をからかっただけだ。向こうでよくやっていた、敵を罠に嵌めるための即興漫才を応用して。だというのに、当の本人は横島をキラキラとした、まるで尊敬に値する人物を見るかのような目で見詰めてくる。

(真っ直ぐってレベルじゃねーぞ、この子……！　この視線はどことなくシロを彷彿とさせるが、これじゃ扱い易いを超えてチョロい――――はっ！　だから、この二人に……っ！　そして、自分達の思惑に俺が乗っかると判断して……!!)

全ては、紫と幽々子の掌の上だった。妖夢も横島も、二人に遊ばれていただけなのだ――――!!

(これが……『妖怪の賢者』と、その親友……!!)

無駄にシリアスに驚愕する横島だが、紫達はニコニコとしている。

(妖夢は真面目すぎるからねえ。男性の知り合いもほぼ皆無だし、これで色々と成長してくれたらいいんだけど……)

(乗った私が言うのもなんだけど、これから先あの子が彼に恋愛感情を持ったらどうするの？　多分無いと思うけど)

（その時はその時よ。どんな結果であれ、良い経験になるわ。ま、もしそうなったとしても、妖夢を泣かせるようなら怒っちゃうけど……♪）

何とも分かりづらい愛情表現である。紫は苦笑を浮かべ、横島と他愛ない世間話に突入した妖夢に視線を向ける。方法は悪ふざけと似たような物だが、幽々子の言葉は真に彼女を思ってのもの。いつか妖夢は幽々子が胸を張って誇れる存在となれるのか――――。

「紫様、お料理をお持ちしました」

「お魚もいっぱいありましたよっ」

妖夢について思いを馳せていた紫だが、自らの式である藍達が料理を持ってきたことで、思考を中断した。

「あら、ありがとう。……そうそう、貴女達にも紹介しないとね」

「ああ、彼ですか？」

「執事さん……ですよね？」

紫は橙の頭を撫でつつ、二人の疑問に頷いて応える。

「横島君、ちょっと良いかしら？」

横島と談笑している妖夢には悪いが、時間をそれほど取るわけでもない。ここは我慢してもらおうと横島に声をかける。横島と妖夢は同時に紫に向き直り、側へと寄る。

「紫さん、何かありまし――ぐふぅっ!?」
「っ!?　よ、横島さん!?」
だが、紫の隣に居る藍が視界に入った瞬間、まるでボディブローを受けたかのように横島の体がくの次に曲がる。
「く……っ！　落ち着け、俺の煩悩よ……!!　ハシャぐんじゃあない……!!」
何か、溢れる力を抑え込むような台詞を呟きつつ、何故か右腕を押さえている。口の端からは何故か血が垂れており、それを男臭く拭う様はまるで熱血系の漫画のようだ。某吸血鬼はその血を見て、とある衝動が湧き上がったが、この場では問題がなかった。
横島は何回か深呼吸を繰り返し、多少は落ち着いたのか、にこやかに藍達に話しかける。
「いやー、すんません。君達があんまりにも可愛いんで、俺の中の怪物が暴れ出しちゃって！」
「は、はあ……」
藍は目をパチクリとさせており、橙は可愛いと言われたせいか顔が赤い。正直に言えば横島はほとんど橙のことは目に入っていなかったのだが、彼の感覚は橙を『可愛らしい』と捉えていたので、複数形で可愛いと言ったのだ。……本命には効果は無かったようだが。

でへでへと鼻の下を伸ばしている彼の姿を見て、妖夢の中の横島像に罅が入ったりもしたが、相手が藍では仕方がない。何せ彼女は世界に名高い『九尾の狐』、傾国傾城の美少女なのだ。

「それにしても……」

横島は自分の周りを見渡す。視界に入るのは美少女、美少女、美少女！

（モテない貧弱なぼーや代表だった俺の周りに、美少女がいっぱい！　これは人類にとっては小さな一歩だが、俺にとっては偉大な一歩……!!）

急に喜びに打ち震える横島に大半のメンバーはきょとんとした表情を浮かべるが、紫と幽々子、文の三人は理解したのか苦笑を浮かべている。最近苦笑を浮かべてばかりの紫は、変にクセになって皺にならないか心配なほどだ。

「うーん、皆美少女で幸せだなぁ……。ここに輝夜様が居たら大変なことになってたかもなぁ……」

「横島さん、呼んだー？」

「あ」

横島がぼそっと呟いた内容に返答する声が響く。声のした方を向くと、イカの丸焼きをはむはむと食んでいる輝夜が、いつものメンバーを引き連れてやって来た。ちなみにてゐはまだ本調子ではないのか、また鈴仙に背負ってもらっている。

「……」
「ん？　どうした、横島？」
途端に静かになった横島を訝しみ声をかける妹紅だが、横島から反応はない。輝夜と目を見合わせて更に声をかけようとしたのだが――――。
「FOOOOOOOOOOOOOOOOO!!!!」
横島の霊力が、爆発的に膨れ上がった。
「な、何だぁっ!!?」
その霊力に皆は驚愕し、その場に居なかった他の者も横島に注目する。巨大な霊力はまだ物理的な威力は伴っていないが、それも時間の問題に思える。
瞬間、妹紅の脳裏を過ぎるのは今朝の博麗神社での光景。もし今この場所であの時のような爆発が起こってしまったら……！　そう考えた妹紅は横島を羽交い締めにする。
「止めろ、横島！　それ以上霊力を高めるな!!」
必死に横島に呼び掛ける妹紅。しかし、彼を羽交い締めにすることによって、妹紅の慎ましくもしっかりとその大きさと柔らかさを主張する二つの丘は彼の背中に密着し、妹紅から仄かに薫る石鹸の匂いは彼の鼻腔をくすぐる。
――――結果的に、横島の霊力は更に強力になった。
「煩悩が高まる……、溢れる……!!　おおおおおおおおお!!!」

ついに横島を中心に風が起こり始める。それを感じた妹紅は更に体を押し付けて叫ぶ。

「止めろ、横島！　止めろおおおーーーっ!!」

妹紅の決死の叫びも虚しく、横島の霊力が極大にまで高まったその瞬間、ついに月の頭脳が動く――――!!

「横島君、これを見なさい!!」

永琳は懐から雑誌を取り出し、とある頁を開き、横島に突き付ける。

それを見た横島は、一瞬で煩悩を霧散させ――――。

「くぅほぉはぁぁっっっ!!!!」

「うわあああっ!?」

――――盛大に、吐血した。

「むぎゅっ!?」

妹紅も巻き込みバタンと倒れ、ビクビクと痙攣している。横島に圧し潰される形となった妹紅は何とか這い出し、またもや横島に必死に呼び掛ける。今度は先程とは真逆の意味だが。そこに輝夜と鈴仙、更には藍に橙、妖夢も加わっていたりする。

「……永琳、あんた何見せたの？」

執事として雇った横島の突然の奇行と惨劇の衝撃が抜け切らぬまま、レミリアは永琳

に問い掛ける。
「ああ……、これよ。こんなこともあろうかと、人里で用意しておいたの」
永琳が見せた物、それは『月刊・益荒男褌姿』という雑誌だった。ちなみに横島が見た頁には、明らかに人間を超越した筋量を誇る、解けた褌を右手で押さえ、何故か左手で胸を隠した、顔を赤らめ照れているスキンヘッドのおっさんが写っていた。
レミリアは吐き気を覚え、即刻目を逸らし、口元を押さえる。
「う、うう……」
「大丈夫か、横島!?」
苦しみの声を上げる横島を皆が心配して覗き込む。横島はうっすらと目を開き、言葉をつむぐ。
「し、死ぬ前に一度全裸美女で満員の日本武道館でもみくちゃにされながら『ジョ○ー・○・グ○ド』を歌ってみたかった……」
「……何の話だ!?」
「別に、哀別のチューでも、ええんやで……?」
そう言って横島は目を閉じ、期待に高鳴る胸を押さえ、唇を突き出す。それに応えたのは妹紅の燃える拳であった――。

「――で、結局何があったの？」

巻き込まれたくないのか、遠巻きに霊夢が質問する。それに対して永琳はヒラヒラと手を振った。

「大したことはないわ。輝夜と八雲藍を見た彼の若さが爆発しただけだから」

「ふーん。……最近の人里では滅多にないことだから、何か久しぶりね」

どうやら昔人里で頻繁に有ったことらしい。あまり想像したくない光景が繰り広げられていたようだ。

「……」

ドタバタと賑やかな横島の周囲、ちょっとアンニュイな気分に浸っているのは妖夢だ。初対面であるのに、自分に必要な物を教えてくれた（思い込み）人物が、何というか思った以上にスチャラカな人物であったからだ。

しかし、妖夢は思う。先程の強大な霊力。自分に見せてくれた柔軟な思考に対応。『能ある鷹は爪を隠す』という言葉もある。これが彼一流のスタイルなのだ、と。

妖夢が今の殻を破るのは、まだまだ遠い――。

「痛てて……、ちょっとした冗談だったのに……」

「悪かったって」

結局横島はその後ペコペコと謝り倒すことで許しを得た。彼からすれば、妹紅の攻撃

は美神のシバきに比べて格段に優しいため、ダメージが残ることはない。一応鈴仙に治療はしてもらったが。彼は服の埃を払い、スッと立ち上がると、藍と橙に対して謝罪をする。

「いや、すんません。自己紹介もしない内からお見苦しいところをお見せしちゃって……」

「あ、ああ、うん。気にしなくても良いよ。……こほん。では改めて、私は紫様の式、八雲藍だ。こっちは私の式の橙。これからよろしく頼む」

「橙です！　よろしくお願いします！」

「紅魔館の執事、横島忠夫っす。よろしくお願いしまっす！」

さっきのことは互いに忘れ、にこやかに挨拶をする三人。特に、横島の雰囲気はまた変わっていた。それは、何かを懐かしんでいるかのようなものだった。

（九尾の狐、か……。見た目の年齢はそう変わらないはずなのに、タマモとは段違いだな。あいつも成長したらこうなるんだろーか……）

実際には三日と経っていないのだが、幻想郷から出られないと聞かされたせいか、途端に郷愁に似た物を感じたのだろう。横島は軽く頭を振り、笑って橙との会話を盛り上げていく。

その横顔は、横島の怪我を治療した鈴仙に、不思議な感覚を残した。いつか、どこか

で見た顔だ、と。
「ところで、妖夢ちゃん。気になることがあるんだけど……」
「え？　はい、なんでしょうか？」
鈴仙が物思いに耽っている間に、話題は妖夢へと移っていたようだ。横島の問い掛けに、妖夢が答える。
「その、妖夢ちゃんの隣にいる霊体は何なんだ？　何か妖夢ちゃんと同じ霊波を放ってるみたいだけど……？」
「これは、私の半霊です」
妖夢は自分の種族、半人半霊について説明する。その内容に横島は感心しきりだ。元の世界では見たことも聞いたこともない種族。それは横島の好奇心を大いに刺激する。
「もし許してくれるなら……、半霊を触ってみても良い？」
「え、半霊を……ですか？」
「うん」
妖夢は少々考えるが、いきなり半霊を祓おうとはしないと判断し、「痛くしないでくださいね？」と許可を出した。それにより横島の煩悩が少し刺激された。
「んじゃ、お言葉に甘えて……」
横島は優しく霊力を練り、半霊に触れる。すると、妖夢が突然声を上げた。

「――ひゃっ!?」
「うえっ!?　あ、あれっ？　痛かった……？」
「い、いえ……そうじゃなくて……。だ、大丈夫です」
「そう、か……？」
横島は妖夢を気遣い、更に優しく、優しく霊力を練る。そうして半霊に触れ、妖夢がまた声を上げないのを確認し、ほっと息を吐きつつ今度は半霊の感触を堪能する。
「うーむ、これは……。掌に吸い付き、程良い弾力と見事な張り……。ビーズクッション……いや、低反発？　どっちも違うか。何にせよ、癖になりそうな感触だ……」
「そんなに凄いんですか？」
「ああ。枕とか、クッションにしたら気持ちいいだろうな……」
横島だけでなく、他の者も「横島が良いなら私達も良いだろう」と半霊に触れる。
半霊を触られている妖夢は特に何も言ってこないが、実は喋る余裕が無いだけだったりする。
「……っ。……んっ！　ふ……っ、ふぅ、ん……っ」
妖夢は口を押さえ、必死に声を出さないようにしている。
他の者が半霊に触れるのは問題無い。だが、横島が触れる時だけ、全身に甘い感覚が迸るのだ。それは全身を優しく撫であげられ、体の芯から、何か背徳感を刺激するよう

な快感。

妖夢は未知の感覚に恐れと興奮を覚えたが、そんな自分を恥とし、この感覚をねじ伏せようと耐えているのだが、全身を駆け巡る甘い雷は彼女の頭を痺れさせ、徐々に牙城を崩していく。

結果、妖夢は声を出すまいとするしかなくなっているのだ。

文はそんな妖夢を無遠慮に写真に撮りまくる。次々とアングルを変え、バシャバシャとそれはもう景気よく撮っていく。幸いにも妖夢は耐えることに必死で文に気付くことはなく、被写体の赤く紅潮した頬、熱っぽく、まだまだ未成熟ではあるが、色気を湛えた表情、快感に震える体を余すことなくフィルムに収める。

と、そこに影が差した。ぽんと肩を叩かれる。振り向いた先に居たのは、艶やかな着物を纏った、『死を操る程度の能力』を持った美少女だった。

「――文？」

「……これはこれは幽々子さん」

文の全身から冷や汗が流れ出る。彼女の能力を鑑みるに、今の状況は非常にマズい。カメラどころか自分の命のピンチだ。

幽々子は扇子を広げ、口元を隠し、ニッコリと微笑んだ。

「私にも写真を分けてちょうだいね？」

「勿論です！」

フィルムよ尽きよとばかりに撮影を再開する文。

「あーもう、妖夢が困ってるからそこまでにしときなさい横島。あと、お前もだ天狗」

「あやややや」

流石に見るに見兼ねたのか、こんな主にはなるまいと思ったのか、レミリアが割って入る。文も今回は悪ノリが過ぎたと思っていたのか、あっさりと従う。

「あー……、ごめんな妖夢ちゃん。そりゃ、半霊を弄り回されたら気分悪いよな」

「い、いえっ！　も、もも問題ありません！　またいつでもどうぞ!?」

妖夢はさっきまで全身（半霊）を撫で回していた横島の顔を見たせいか、呂律が回らず、若干自分でも理解し難い言葉を口に出してしまった。これはほぼ無意識的であったようだ。

（……癖になったらどうするの、幽々子？）

（それはそれで良い経験に……）

（なるわけないでしょうが）

最近、周りのツッコミに回ることが多くなった紫。今から胃が心配になってきた。

「ほら横島、次に行くぞ。相手はまだまだいるんだからな」

「うっす、了解っす！　んじゃ、藍さんに橙ちゃんに幽々子さんに妖夢ちゃん、また今度

なー」
「は、はい。またいずれ」
「お疲れ様でーす」
「程々にな」
「うふふ、またね」
挨拶を交わし、横島達はその場を後にする。妖夢は少しふらつきながらも喉の渇きを癒やすために水分を求めて歩き出す。幽々子もそれに付いて行き、料理の攻略にかかった。

「……ん？　あれは……」
「どうかした？」
次の人物の所へ向かう途中、横島は幼い少女達がパーティーホールから出ようとしているのを発見した。気になって近付いてみると、どうやら悪戯目的だったようだ。
「ここから中に入って探検すれば、お宝とか見つかるかも……」
「だ、駄目だよチルノちゃんっ。怒られちゃうよ？」
「そうだよ。せっかく紅魔館のパーティーに招待されたんだから、今日は大人しくして

ようよ」

館内の侵入を試みる『氷の妖精』チルノに、それを留める『大妖精』、そしてチルノを落ち着かせようとする『蛍の妖怪』リグル。その場にもう二人、『夜雀の妖怪』ミスティアと『宵闇の妖怪』ルーミアという少女達が居るのだが、ミスティアはハラハラと状況を見守っており、ルーミアは「そーなのかー」とどちらに同調しているのか分からない発言をしている。

「何言ってんのさ！　せっかく赤くて大きい家に入れたんだから、お宝を探さないと！　それであたいが最強であると証明しないと！」

「最早意味が分からないよ、チルノちゃん」

青と緑の妖精が元気よく言い争う中、横島はスタスタと歩み寄り、探検を提案していたチルノをひょいと猫のように摘み上げる。

「こーら、何をしようとしてるんだ？」

「んにゃ!?　は、離せー！」

チルノはバタバタと暴れ出すが、横島はそれを意にも介さない。念の為に霊力を纏っていたのが功を奏したようだ。

横島の姿を確認した他の四人は、顔を青ざめる。格好からして彼は紅魔館の関係者であり、もし館内に侵入しようとしていたのが館の主にバレたら……。そういった悪い想

像は、現実になることがある。
「何だ、お前達も来ていたのか」
「っ!!?　れ、れれれ、レミリア・スカーレット!!!?」
「あ、あわ、あわわわわわ……!?」
「や、やばいのかー……」
「ご、ごめんなさい！　だから命だけは……!!」
「あのー、私も居るんですよー?」
紅魔館の主にして、強大な力を誇る吸血鬼レミリアの登場は、チルノ以外の全員に絶大な恐怖を与えた。そんなに恐れているなら何故宴会に来たとツッコミたい横島だったが、やはり何かやましいことがあるからなのだろう。いつの間にか、チルノも暴れるのを止めている。
「あー……、余り羽目を外しすぎるなよ?　言いたくはないが、目に余るようなら帰ってもらうことになるし……」
「はいっ！　ごめんなさいっ！」
「あの、私も……」
レミリアの言葉に四人は必死に頷く。その様子にレミリアは若干気分が良くなったようだ。文は逆に落ち込んでいる。レミリアはニヤリと口角を上げ、横島に自己紹介を

促す。

「俺は紅魔館の執事の横島忠夫。あんまり悪戯しちゃダメだぞー？」

にこやかにしているが、それでも注意するのを忘れない。横島が放っている霊波のお陰か、皆も落ち着いたようだ。

そこで、気になることがある。

「……」

横島に摘み上げられているチルノが、横島の顔をじっと見詰めているのだ。

「……えっと？」

その視線に横島は困惑する。自分は何かをしたのだろうか、と。

事実、横島自身にとっては何でもないことだが、チルノにとっては驚愕に値することを行っていた。

現在の横島は妖精や力の弱い妖怪、霊体に作用する霊波を放っている。だが、『その程度のこと』はどうでもいい。

チルノが何よりも驚いたのは、自分に触れているのに、まるで何でもないかのようにしていることだった。

チルノは氷の妖精であり、その力は妖精の範疇を超え、そこらに存在する凡百の妖怪なら一蹴してしまうほどに規格外な力を誇る。それは触れた物を瞬時に凍り付かせ、例

え眠っていたとしても体から放出される冷気は簡単に人間に凍傷を負わせてしまう。
　自然の具現である妖精に対して大した効果は無いとはいえ、チルノに進んで触れる者も極僅かなのは仕方のないことであろう。
　では、この人間は？
「……あんた、あたいに触って大丈夫なの？」
「え？　……何が？」
　横島は首を傾げる。現在横島は霊気を纏っているのでチルノの力が及ばず、特に問題は見当たらない。とりあえず彼はチルノを下ろし、膝を曲げて目線を合わせて優しく頭を撫でる。
「どうした？　何かあったのか？」
　チルノの頭に触れる、横島の大きな手。それはチルノが今まで感じたことのない、『暖かさ』を伴っていた。
「……何でもない」
　チルノは小さな頭をプルプルと振り、その小さな胸を張って、ニッコリと自己紹介をした。
「あたいはチルノ！　幻想郷で最強の妖精なのよ！」
「ああ、君があの最強の妖精か。咲夜さんの言ってた通り、随分と力が強いな」

「分かるっ？　分かるっ？　やっぱりあたいは最強ね！」
「……チルノちゃん」
チルノがはしゃぐ姿を見る大妖精の胸に去来した感情。それは純粋な嫉妬であった。
自分の前では見せたことのない表情を簡単に引き出してみせた、横島という男。チルノの一番の親友である大妖精にとって、それは当然面白くないことであった。
だが、それを今ここで表してチルノの表情を曇らせるのはもっと我慢ならない。深呼吸を一つ、皆と一緒に名を名乗ることにした。
「私は大妖精です。……チルノちゃんとは、一番仲が良いです」
「そっか、よろしくな」
それでも、自己主張は忘れない。乙女心は複雑なのであった。
「私はミスティア・ローレライです。夜雀の妖怪で、普段は八ツ目鰻の屋台を出したりしています」
「八ツ目鰻かー。食ったことないな。今度寄らせてもらうよ」
「はい、お待ちしています」
ミスティアの隣に居たルーミアが、両手を広げて前に出る。
「私はルーミア。宵闇の妖怪。ところでこのポーズ、何に見える？」
「え？　えっと……グ○コ？」

「一粒三百メートルなのかー」
いつの間にか幻想入りしていたらしい。
ルーミアとの問答を笑って見ていたリグルが、最後に横島の前に出る。彼女の姿を見て、横島の動きが止まった。
「私はリグル・ナイトバグって言います。私は――」
「蛍……？」
リグルが種族を言う前に、横島が半ば無意識に声を出した。
「え、うん、そうだけど……。よく私が蛍の妖怪だって分かりましたね？」
「あ、ああ、いや……。知り合いに、似ていたからさ」
なははと笑って誤魔化している横島だが、その対応はレミリアに疑問を抱かせるには十分な態度だった。
「……」
今は、いい。この宴会の空気を壊すのは憚られる。尋ねるならば、この宴会が終わってからだ。
「蛍の妖怪か……。なら、砂糖水でも持ってこようか？」
「え、良いんですか？」
横島はレミリアに視線で問う。それにレミリアは頷くことで答えた。

「んじゃ、作って持ってくるよ。他の皆は何か要る？」
「じゃあ、あたいは黒くてシュワシュワするやつ！」
「私も、チルノちゃんと同じコーラで」
「私は熱い緑茶があれば……」
「生き血……は無いだろうから、トマトジュースで」
「吸血鬼か、お前は。……私は、ワインでよろしく」
「じゃあ、私もワインで」
横島は皆の注文を聞き、その場を離れる。後に残ったのは、横島が居なくなったことで恐怖感が蘇った四人と、自分の頭をさすっているチルノ、そして思案に耽るレミリアと、そんなレミリアを激写する文であった。

一旦パーティーホールから出て、近くに設置された簡易的な厨房で砂糖水を作る横島。その顔は、少々人に見せられない物になっている。
「……あいつは、このくらいが好みだったよな」
水に砂糖を混ぜ、ぽつりと呟く。瞬間、横島は愕然とし、大きく深い息を吐いた。
「重ねちゃ駄目だっつーのに……全く」

横島は両頬をパンと勢いよく叩く。ヒリヒリとした感覚に若干涙が出るが、そのお陰で表情は普段通りに戻った。

「さて、戻りますか」

他の皆の飲み物も用意した。力強い歩みでパーティーホールに戻り、レミリア達を目指す。

周りの喧騒は高らかに彼の体を突き抜けていく。宴会を楽しむ皆を見て、自然と頬が緩む。もう、先程のような雰囲気は霧散していた。

宴は、まだまだ終わらない。

第九話

『紅魔館での宴会』

～了～

第十話『宴会終わって夜も更けて』

横島達がチルノ達と別れ、次に向かった先には独特な雰囲気が流れていた。
何も険悪なムードという訳ではない。そこには三人の少女達が居り、それに対し、一部の者達がそれとなく耳をそばだてている。特に輝夜と小悪魔などは露骨に彼女達を気にしている。目は爛々と輝き、失礼ながら鼻息も少々荒い。そんなに気にするなら同じ輪に入ればいいのにと横島は考えるのだが、それをしないのには何か理由があるのだろうか。横島にはそれが何なのかは分からなかったのだが、他の者も彼女達と同じように遠巻きにしているだけだった。
「魔理沙、パチュリー。この料理が美味しかったわよ」
「……ふむ。流石は咲夜。良い仕事してるわね」
「おー、確かに美味いなコレ。アリス、もっと量はなかったのか？」
この雰囲気の出所である少女達とは、白黒の衣服に身を包んだ魔法使い、霧雨魔理沙。人形を側に置く魔法使い、アリス・マーガトロイド。そして、レミリアの親友にして、精霊魔法を使いこなすパチュリー・ノーレッジの魔法使い三人組だ。
（何だろ、この感じ）

横島は頭を捻る。この少女達が形成している雰囲気は、いつかどこかで感じたことがある物だ。特に悪い物という訳では無いのだが……。そんなことを考えている内に、レミリアが三人と挨拶を交わしている。

「談笑中に悪いな。少し良いか？」

「お？　レミリアじゃないか。どうかしたのか？」

「ああ、横島さんの紹介かしら？」

レミリアの意図を察したパチュリーが、視線をレミリアから横島へと向ける。それにつられて魔理沙とアリスも横島へと向き直る。

「そーゆーこと。ほら、横島？」

「うっす。今日から紅魔館の執事となった、横島忠夫っす。よろしくな」

レミリアに促され、にこやかに名乗る横島だが、魔理沙とアリスの表情は微妙に歪んでいた。

「ああ……。あんた、あの時墜落してきた奴か。……生きてたんだな。……本当に人間なんだよな？」

「それにしたって快復が速すぎるでしょ。やっぱり妖怪……？」

「俺は人間だっての！」

あの時の光景が二人の脳裏を過ぎる。あれを見た後なので彼女達の言うことも尤も

なのではあるが、流石にこれは些かならず礼を失している。横島が憤慨するのも致し方ないであろう。

「……ごめんなさい。流石に失礼が過ぎたわ」

「あー、確かにな。悪かったよ……」

「い、いやあの、別にそんなに気にしてないし謝られることじゃなくてその」

謝られたら謝られたでオロオロと戸惑う横島。彼の眼前に居る少女達は守備範囲に少々届いていないが、それでももう少し育っていたら（或いは自分がもう少し若かったら）是非とも口説きたくなる程には美少女だ。美女美少女に甘い彼としては、可愛らしい少女達の表情が曇るのは苦手らしい。

「よし！　じゃあこの話は終了だな。私は霧雨魔理沙。普通の魔法使いだ」

「切り替え早すぎでしょ……。ま、それはともかく。私はアリス・マーガトロイド。人形を使う都会派魔法使いよ」

「改めて……私はパチュリー・ノーレッジ。二人と同じく、魔法使いよ」

「……こっちには魔法使いって多いんだな」

都会派って何じゃいと思わないでもなかったが、とりあえずそれは気にしないことにしたらしい。それよりも、彼には驚くことがあったからだ。

「ん？　まあ、外の世界に魔法使いはいないだろうなぁ」

横島の口から漏れた疑問に魔理沙が答える。それは横島の現状を知らないことによる勘違いが生じていた。

「ああ、いや俺は……」

そう言いつつ、横目でレミリアを見やる。彼女は特に興味を示しておらず、いつの間にか取ってきていた咲夜自慢のローストビーフに舌鼓を打っていた。

「……？　どうしたの？」

「えーっと……」

アリスが首を傾げ、問いかける。彼女のまるで西洋人形の様な容姿に加え、身長の関係から上目使いの視線に晒されている横島は、無意識に高鳴る自分の鼓動に戸惑ってしまう。

幻想郷に墜落して少々の時間が経ったが、会う女の子全員が（見た目年下の）美少女なのは横島にとって幸運なのか、不幸なのか……。

そんなアリスの視線に負け、意味も無く目を泳がせると、自分達を遠巻きにしている紫と目が合った。

「……」

横島にウインクをしつつ口をパクパクと動かしている。彼はその可愛らしい姿に更に鼓動を早めてしまったが、彼女の言わんとしていることは理解出来た。横島は一つ頷

き、アリス達と向かい合う。
「実はだな、俺は――――」
そうして、彼は自分が異世界……平行世界と呼ばれる所から来たことを話した。
最初は胡散臭そうにしていた三人だったのだが、彼が紫から聞いた詳細を語るにつれて目が輝きだし、興奮を抑えていることが見て取れる。
「――――え」
「え？」
語り終えた直後、魔理沙の口から小さな声が聞こえた気がした。それを問い返そうとした瞬間、彼女達の感情が爆発した。
「……凄え！　凄え凄え凄え凄え凄え!!　何だよ、やっぱ存在するんじゃねーか!!」
「平行世界……！　まさかその住人とこうして話をする日が来るなんて……!!」
「本の中だけのことだと思っていたけれど……。正に事実は小説より奇なり……ね」
一見すると冷静に見えるパチュリーだが、よく見ると頬が紅潮し、鼻息が「むきゅー」と荒くなっている。そんな彼女達の様子が珍しいのか、文はまたも写真をバシャバシャと撮っている。レミリアもまた親友の珍しい姿に驚いたようだ。ちょうど肉を食べようとしたところなのか、口を大きく開けたままとなっている。
とりあえず傍らの二人を見ないことにして、手を取り合ったり抱き合ったりして興奮

を露わにする彼女達に、横島は首を捻る。何がそんなに嬉しいのか理解が及ばない横島だったのだが、日頃から時間移動やら文珠の不思議パワーやらを経験していた彼からすれば、それは仕方のないことなのかもしれない。

（――ん？　ああ、そうか）

きゃいきゃいと仲むつまじく喜び合う様をぼけっと眺めていた横島だったが、唐突にあることに思い至った。それは、彼女達が最初に醸し出していた雰囲気についてである。

（似てるんだ。美神さんと一緒に居る時の弓さんの感じに）

そう、三人が纏う雰囲気は、弓のそれに酷似していた。それは同性に対する恋愛感情ではない。三人に共通するもの。それは、憧れ――。

アリスは憧れている。『弾幕はパワー』という、自らが信条とする『弾幕はブレイン』とは正反対の考えを持つ霧雨魔理沙という少女に。

アリスは慎重だ。それ故に本気で物事に挑む事は稀であるし、好戦的な性格と言えど、『遊び』である弾幕ごっこにおいても強者に対し戦いに赴くことは少ない。

それはある種、物事を一歩引いた目線で眺めていることに通ずる。

だからこそ、彼女は魔理沙に憧れるのだ。

確かにひねくれているところもある。反りが合わないこともある。しかし、彼女の中

にある『それ』に気づいてからは。

愚直とも言える彼女の姿。自分では出来そうもない、物事を真っ直ぐに見つめ、あらゆる努力を厭わぬ心根に魅せられたあの時から。アリスは魔理沙に憧れていた――。

パチュリーは憧れている。西洋の東洋魔術師である自分に対し、東洋の西洋魔術師という、自分と正反対の霧雨魔理沙という少女に。

パチュリーは百年を生きる魔法使いだ。だというのに体は弱く、喘息により呪文の詠唱すらまともに出来ない。結果、彼女は知識を求め、知識を極め、知識が彼女のアイデンティティとなっていた。

本があれば幸せ。本のそばにあるものこそ自分。そう嘯いていた。だから彼女は長きに渡り、紅魔館に存在する図書館に引きこもっていた。

差し詰め彼女は籠の鳥といったところだろうか。自分の身一つ儘ならぬ生活。だからこそ、彼女は憧れたのだ。

あらゆる場所を行き交い、あらゆる人物と交流し、あらゆる触媒を見つけ出し――何物にも縛られず、自由に大空を進み行く。

パチュリーは、そんな魔理沙に憧れていた――。

魔理沙は憧れている。自分には無い物を持っている、二人の魔法使いに。

それはコンプレックスにも似た感情だったと記憶している。

初めて会った時からそうだった。まるで人形の様に可憐な容姿。思慮深く、冷静に物事を見れる客観性。突っ込んでいくことしか出来ない自分と違い、何と柔軟なことか。

それは、嫉妬に似た感情だったと記憶している。

自分とは正反対の女性らしい体付き。到底追いつけそうにない圧倒的な知識量。紅茶を片手に本を読む姿など、異常な程に様になっている。

差し詰め彼女は深窓の令嬢といったところか。泥臭く生きる自分とは、何もかも違って見える。

二人とは口論することもあった。二人とは戦うこともあった。その度に負の感情が募ることすらあった。

だが、二人と交流を深める度。親交を深める度。理解を深める度に、それは昇華され、やがては憧れとなった。

極論してしまえば、彼女達三人はある意味似たもの同士なのであろう。

互いが互いに憧れ、そうとは気付かずに日々出逢いを重ね、過ごしていく。

そんな憧れという感情を、横島は無意識に察知したのだろう。それは、横島が常に周囲に抱く感情とも無関係ではないのだから。

「なあなあ、あんた横島って言ったよな?!」

「あ、ああ。そうだけど……?」

魔理沙の勢いに横島はたじろいでしまう。彼女の目は星を散らさん程に眩い輝きを放っている。

「えーっとな！　えーっと……！　……っあー！　駄目だ、いざとなったら何も言葉が出てこない!!」

魔理沙は自分の金の髪をワシャワシャと掻き毟る。余程悔しいのだろう、それでも何かを言おうと口を動かしている。

「……そうだ！　横島、あんた私達の魔法の実験台になってくれよ！」

「断る！」

横島は今まで厄珍やドクターカオスの実験でひどい目に遭っているためか、一秒とからずに即答した。魔理沙が散々悩んで出した言葉がそれだったためか、アリスもそれを咎める。

「バカ、魔理沙！　言わなきゃ分からなかったのよ!?」

「っ!?　しまった……!!」

「うおーーーい!?　可愛い顔して結構腹黒いな君!?」

咎める内容が微妙にズレているのは置いておこう。その後三人は横島に対しひっきりなしに質問をぶつけていく。魔法使いだからか、彼女達の知識欲は旺盛で、魔理沙も先程のことはなかったかのように幾つも質問をする。

そうなると困るのは横島だ。元の世界の常識的な事柄なら問題はないのだが、魔法のことについて尋ねられても彼には答える術が無い。ここに魔鈴が居れば嬉々として（或いは鬼気として）魔法についての講釈を始めるのだろうが、ここは異世界で横島は非魔法使い。結果として彼女達の顔を少々曇らせることになってしまったのは、横島にとって痛恨の思いであろう。

その代わりとして彼がその目で見た、その身で体感した魔鈴の魔法を詳細に語っていく。中には彼女達も知らない様な魔法もあったようだ。だが世界は違えど同じ魔法使いだからか、即座に応用がききそうな魔法について意見を出し合い、ついには横島が置いてけぼりにされ、彼女達は何処かへと去ってしまった。

「……質問するだけ質問して、どっか行っちまったよ……」

「あはははは……、お疲れ様です」

「あ、終わった？」

どことなく寂しげな雰囲気を漂わせる横島の肩に手を置き、言葉をかけ慰める文と、好物の納豆を丼飯にかけてもりもり食べていたレミリア。ほっぺたについたご飯粒がチャームポイントだ。

「終わったんなら次行くわよ」

そう言ってスタスタと歩き行くレミリアに、横島が「うぇ～い」と気怠げな声を出し

ついて行く。文は苦笑一つ、その様を写真に収めることにした。

「うわぁ……」

それが次に辿り着いた場所での第一声である。

日本酒やワインの瓶の山、山、山！

その中心に鎮座し、やや不機嫌そうに只酒をかっくらうのは、頭に巨大な二つの角を生やした幼い少女。『鬼』の伊吹萃香である。

「これは……あの小さな体のどこにこんだけの酒が入ってんだ……？」

「ん～？」

思わず呟いた言葉に反応を返す萃香だが、多少きつく細められた目はトロンと潤い、頬は赤く染まっている。既に見た目から酒臭い様相となっているのだが、不思議と酒に呑まれているような感じはしない。これが真の酒豪というやつなのであろうか。

「おー、あの時の人間じゃないか。あれだけ血まみれだったのにもう快復してるとは、中々のもんだね」

「あーっと、そりゃどうも。俺は横島忠夫。執事としてここに雇われたんだ」

「……へえ？」

何か不思議だったのか、萃香はレミリアに目を向ける。レミリアは萃香から漂ってくる濃厚なアルコールの匂いに顔をしかめているが、目を背けようとはしていない。その様子に感じ入る物があったのか、萃香はそれ以上レミリアには視線を向けず、横島へと戻す。

「私は伊吹萃香。見ての通りの酒好きな鬼だよ」

「うん、そうだな」

若干ふらふらとしながらの挨拶に、横島は何度も頷く。というか挨拶直後には既に一升瓶をラッパ飲みしている。その姿は横島達に随伴している文に疑問を抱かせるには十分だった。

「どうしたんです？　そういう飲み方は萃香さんらしくありませんよ？」

「あー……」

（知り合いなの？）

（元上司です）

文の言葉を受けて、萃香はばつが悪そうに視線を逸らし、頭をポリポリと掻く。

「いやさ、昨日の宴会がなんやかんやでおしゃかになっただろう？　しかも前日にあんなこともあったし、霊夢とゆっくり呑もうとしてたんだがねぇ……」

「はあ……」

「まずは一献ってお約束をして返杯したら、霊夢の奴一気に飲み干して『肉が私を呼んでるわー!!』って突っ走っててさ……」
「あやややや……」
その時のことを思い出したのか、またプリプリと怒りだしている。ぶーと唇を突き出して癇癪を起こしている姿は、萃香自身の可愛らしい容姿もあってどこか微笑ましい。
「ほれほれ、そんな怒ってないで。酒なら付き合うよ……。――文ちゃんがな！」
「ちょぉおーーーい!?　横島さーーーん!!?」
「ほほう？」
ビシィッ！　と文を指差し、にこやかに告げる横島に文はキャラクターを崩壊させつつ突っ込む。萃香は獲物を見つけた捕食者のような目を文へと向ける。
「何だい何だい嫌なのかい？　つれないねぇまったく」
萃香はこれ見よがしに溜め息を吐く。その姿は微妙に胡散臭いが、真実そう思っているだろうことはすぐに分かる。
「嫌ってわけじゃないんですけど……。せっかくの取材のチャンスが……」
「あ、あーそれがあったか。正直忘れてた」
「横島さーん？　ちょっとひどくありませんかー？」
（……へえ。あの文がねえ……？）

文のジト目に笑ってごまかすしかない横島。萃香は文の様子に少々驚いている。『あの』天狗が人間とこんなにも簡単に打ち解けているとは……。

（それだけ興味をそそるのかね？　ま、何にせよこれからは酒の肴には困らなそうだ）

横島を細目で見やり、一升瓶を傾ける。喉が灼ける感覚に心が躍る。先程までより、よほど酒が旨い。

「ま、今回は見逃してあげるよ」

「え、本当ですか？」

「鬼、嘘つかない。ただし次は付き合いなよ？　その時は酒の肴もたんまりあるだろうし、ね」

そう言って片目を閉じる。萃香の意図を察した文は笑って了承と返す。

「はい。その時は楽しみましょう」

文は二人に放置され、若干しょぼくれた表情でレミリアの世話をする横島の姿を写真に撮る。何だかんだで、今日一日で男性の写真の割合が増えそうだ。

「もうそろそろ次行っていいかー？　多分次で最後だし」

「おー、行っといでー。文も横島もまたねー」

「ああ、萃香ちゃんもまたなー」

「それでは失礼します」

既に飲み干した一升瓶を振る萃香に苦笑を浮かべつつ横島は挨拶を返す。文は可愛らしい鬼の振る舞いを写真に収め、会釈で返した。レミリアはお腹が膨れたのか、さすさすとさすっている。

「それにしても次で最後ということは……。神族が最後って、大丈夫なんすかね？」

「……気付いてたのか？」

「……まあ、これだけバカ高い格なら嫌でも気付きますよ」

パーティーホールの中の気配。その中でも飛び抜けて強大な気配が二つ存在する。意図的に力を抑えている永琳や、弱体化している紫ではなく、それは力を抑えながらも、なお神々しい力を発している。

彼の感覚が正しければ、その存在の『格』は超上級……下手をすれば、最上級神族に連なるかもしれない。

「うへぇあ……。大丈夫かなー、怒んないかなー」

「あー？　あんた仮にも私の執事なんだからシャキッとしなさいよ」

「そうですよ横島さん。怒られたら怒られたでいいじゃないですか。少なくとも私は面白いですし」

「さっきの仕返しかよ……」

情けない顔でビビりまくる横島に対し、レミリアも文も涼しい顔をしている。あの神

様達は割と頻繁に宴会に顔を出すので、既に交流を得ているし、存外話の分かる二柱なのだ。

　横島を引きずりやって来た場所、そこは意外にも庶民的な空間だった。日本酒の一升瓶が二本～三本、焼き鳥の串が二十本程。他にも酒のつまみが多く存在している。どちらかと言えば、庶民的というよりはオヤジ臭いかもしれない。

「やっと来たか。私達を最後に回すとは、感心しないねぇ」

「いや、何。最初より最後の方が敬われてる感じがしないか？」

「あんたが言っても説得力は無いよー？」

　言葉のわりに仲が良さそうに話す神様達。一方は冠の様に頭部に注連縄を着け、背中には複数の紙垂を取り付けた極太な注連縄を背負った、横島と同年代かやや年下に見える美少女。

　一方はレミリアや萃香と同等に幼く見える、大きな目をあしらった市女笠、カエルが描かれた青と白を基調とした壺装束を纏っている美少女。

　一見すれば変わった格好をした少女達なのだが、彼女達が纏う神気がその判断を許さない。

（うっひぃ……。思ってたよりずっと強い神様じゃんか……）

　横島は緊張からか、口の中が乾き、喉を鳴らす。その音が思ったよりも大きかったの

か、眼前の二柱が横島に注目する。
「……っ！　よ、横島忠夫っす。紅魔館の執事として雇われました。よろしくお願いしまっす!!」
　そう言って勢いよく頭を下げる。彼にしては珍しい姿だ。もし目の前の二柱の内一方が小竜姫程の見た目年齢であれば飛びかかっていたのかもしれないが……。どうやら現在は煩悩よりも畏怖が勝っているらしい。
「あはは、そんなに緊張しなくてもいいよ？　何も取って食ったりはしないさ」
「そーそー。もっと砕けていこうよ、砕けてさ」
「うっす、了解っす！　いやー俺こう見えても霊能力者なもんで、お二人の格の高さにビビっちゃってビビっちゃって！」
「おおう……、めっちゃ砕けてるな」
　レミリアが二柱と普段通りに接しているため、横島も普段の姿を思い切り晒すことにしたようだ。これには二柱も驚いたようだが、別段不快に思うこともなかったようだ。
「まだ名乗ってなかったね。私は八坂神奈子。まあ簡単に言えば風神であり山の神……ってところかな」
「山の神……っすか」

「ん……、どうかしたかい？」
「いえ……、ちょっと知り合いを思い出したもので」
　横島の顔色が青くなる。それも仕方ないだろう。彼の知る山の神とは、元をただせば雪山で自分に迫り、友情という名の劣情を漲らせてきた男色家だったのだから。
「んじゃ、次は私の番だね。私は洩矢諏訪子。縄文時代から信仰されてきた神様って言えば分かるかな～？」
「縄文時代……？　……あの、まさか」
「んん～？」
　諏訪子はニヤニヤとしながら薄目で横島を見上げる。彼の記憶が確かならば、彼女はとんでもない存在だ。
「ミシャグジ様、でしょうか……？」
「正解～♪　ま、正しくは統括者プラス土着神の頂点って感じだけどね～」
「え!?　マジっすか？　めっちゃ凄いじゃないすか!!」
　彼女の言葉は横島に衝撃を齎す。とんでもない存在だとは分かっていたが、実際は更に上を行っていたようだ。
　――ミシャグジ様。日本古来から伝えられる祟り神であり、諏訪地方の祭神。自分の国が侵略をかけられた際にタケミナカタに敗北し、祭神を下ろされたという。

横島が知っていることから彼女がどれだけ有名で強力な神であるかが理解出来る。事実、発祥は未だに不明とされているが、その信仰は縄文時代から存在したとされており、それは世界最古級とも言われている神様なのだ。

「んっふふー、凄いでしょー？　崇め奉ってもいいんだよー？」

「へへー！　諏訪子様最高っす！　とんでもないっす！」

「んふふふふふ！」

「コントか」

確かに畏敬を禁じ得ない神様なのだろうが、横島とのやりとりを見ているとそうは思えないから理不尽である。

ぺったんこな胸を張り、得意気な顔をして偉ぶる姿は見た目年齢相応の少女にしか見えない。

横島も横島で、諏訪子の強大さを理解しているというのにその煽て方は漫才じみている。跪いて拝む姿は何となく時代劇のようだ。

二人のやりとりを見た神奈子は鋭く突っ込み、呆れかえる。更に得意になる諏訪子に軽くチョップをかまし、正気に戻させた。

「いやー、あはは。結構久しぶりに神様扱いされたからさー」

「……まあ、気持ちは分からないでもないが……」

笑う諏訪子に反省の様子はない。神奈子も特に言い含める気はなさそうだ。
「そういえばさっきは名前で呼んじゃってすんません、洩矢様」
横島は先程の煽ての際につい軽々しく名前を口にしたことを謝罪する。何せ相手は祟り神だ。日本の神々は基本祟るのだが、祟り神として有名な諏訪子に睨まれるのは今後の生活で多大なる負担になってしまう。だが、諏訪子はそれを笑って許した。
「気にすることはないよ。別に名前で呼んじゃっても良いよ？　私らってそこら辺は気にしないタチだし」
「そうなんすか？」
「ああ、何せ色々な呼び名があるくらいだしな。私も神奈子でいいぞ」
「……はい。よろしくお願いします神奈子様、諏訪子様」
神の呼び名と今回はまた別の話ではなかろうかと横島は思わないでもなかったが、本人が良いと言っているのだ。気にする方が失礼にあたるだろう。
文は横島と二柱の神様の様子を逐一写真に収めていたが、彼女等の話が一段落ついたところで疑問を出す。
「そういえば早苗さんはどうしたんです？　神社でお留守番でもしているんですか？」
「早苗かい？　早苗は霊夢と一緒に料理を取りに行ったけど……」
そう言って神奈子が視線を早苗が居るだろう場所に向ける。どうやらタイミングが

良かったらしく、霊夢を伴って戻ってきた。
「いやー、いつもの宴会と違ってお肉いっぱいで素晴らしいわー♪」
「いくら何でも取りすぎですよ、霊夢さん」
脇から聞こえてくる声に横島が反応する。声から言って同年代くらいであろうか。
彼が視線を早苗に移そうとする――刹那、神奈子の早苗に対してのみ発動する危機探知センサーが警鐘を鳴らす……！
そして横島と早苗の目が合った瞬間、神奈子は正に神速と言えるスピードで無意識的にその力を振るう。
「打ち砕け！　私のオンバシラ!!」
「お――き、や、あ、！、！、？、」
早苗は見た。自分と目が合った執事服を着た男性が、ごんぶとな御柱に圧し潰される様を。
「……え」
早苗の顔から色が抜けていく。周りもいきなりの事態に騒然となっている。そして、早苗が何か反応を起こす前に、神奈子に詰め寄る者が存在した。
「神ぁ奈子ーーー!?　あんた何やってんのさーーー!!」

「八坂神奈子ぉ!!　いきなり私の執事を殺すとはどういう了見だ貴様ァ!!」
突然の相方の凶行に諏訪子は驚き、レミリアは自分の物を奪われたことにより殺意と魔力を全開にする。
「い、いや、今のはその……!?」
実は神奈子も自らの無意識の行動に驚いていたのだが、それに対する言い訳をする間もなく、更に驚愕の出来事が発生する。
ゴトゴトと、御柱が揺れる。周囲の喧騒も収まり、それを注視する。
やがて、御柱が倒れた。
「あー……、死ぬかと思った」
そう言って横島は頭から血を流しながらも立ち上がった。まさに妖怪を超える生命力。本当に人間なのだろうか。
「生きてる!?」
「……あー、そういえば石畳に頭から突き刺さっても生きてたんだよな。これはある意味当然か……」
執事服についた床の破片や埃を払う横島を見ながら諏訪子は驚愕に叫び、レミリアは納得を示す。早苗は横島の生命力にドン引きだ。
「な、何で生きてるんですか……?」

「生きてちゃダメなの!?　……まあ、それはともかく。――慣れ、かな」

そう語る彼の目は遠くを見据えている。今彼が見ているモノは他でもない。自分と美神の心暖まるスキンシップ。……要するにシバきである。

「よくよく血を流すやつね……。結構な出血だけど、大丈夫なの?」

「まずは止血するわ、横島君」

「ああ、大丈夫っすよ永琳先生に今朝の巫女さん。もう血は止まってますから」

「もう!?」

「……えぇー」

にこやかな横島に早苗どころか会場中が引いたような気がした。寧ろ何故墜落したあと意識を失ったのだろうか。

しかしいつまでも顔面を血で化粧しているわけにもいかず、取りあえずは永琳が用意したタオルと妖精メイドが持ってきた蒸したおしぼりで丁寧に血を拭う。髪に付いた血も取り除き、血とおしぼりによって湿った髪は上げることで纏めておいた。

「おお……。何か執事っぽくなったな」

「え?　何がっすか、お嬢様」

「髪型だよ髪型。何か執事ってオールバックなイメージがあってさ」

「あー、分かる分かる」

レミリアの言葉に霊夢は頷く。そういったイメージがなかった横島はピンと来ないようだが、周りは違ったようだ。現在横島は真面目な表情をしているので、いつものギャグ顔のように正視に堪えないものではなく、髪型もあってか、非常に精悍な雰囲気を醸し出している。その変わりようは輝夜と小悪魔がキャーキャーと騒ぎ出す程であり、よく似合っていることが分かる。彼の幼なじみの銀一の様に二枚目という訳ではないが、普通に、真面目に、真剣な表情をしていれば人好きのする顔立ちということなのだろう。

「まあ、それはともかく。――神奈子様！」

「はい！」

周囲の視線の意味が全く持って理解出来なかった横島は咳払いをし、神奈子へと向き直る。あのまま放置されていた神奈子は咄嗟のことで直立の体勢を取る。

「何でいきなりあんなことを？　俺、何かやっちゃいましたかね……？」

「……いやー、そのだな」

頭を掻きつつの言葉に神奈子は詰まってしまう。不安げに揺れるその瞳を見た神奈子は、何故か横島に雨に濡れ、潤んだ瞳でこちらを見上げてくる子犬を幻視した。横島の理不尽な生命力に正気を失ってしまったのだろうか。

「その……横島が早苗を見た瞬間、こうしなきゃいけない気が……」

それが神奈子の主張だった。しどろもどろでややいつものような覇気がない。
「早苗……？」
「あ、私です……。東風谷早苗」
神奈子から聞いた名前におキヌの姉を思い浮かべた横島だったが、霊夢の後ろから名乗る早苗を見て、神奈子の判断が正しかったことを理解した。
（ああ、これはしゃーないわ。この子範囲内だわ）
横島の煩悩が燃え上がる。だが、彼は動かない。
（範囲内だが――まだ足りん。ここは一つ、神奈子様に……！）
何やら邪な気配が横島から立ち上る。
「ちなみに、神奈子様達と彼女の関係とは……？」
「早苗は私達の家族だよ。それに、現人神であり、私達の神社の風祝をやってる」
「おおぅ……、思ったより凄い子なんすね」
また目が合った瞬間、早苗は「ひっ」と呻き、霊夢の影に隠れる。これには流石の横島もショックを受ける。
「ふう……。まあ、今回は大事には至りませんでしたけど、あんまりこの……柱？　オンバシラでしたっけ？　振り回しちゃダメっすよ？　せっかく神奈子様可愛いのに損しちゃいますよ？」

「か、かわっ!?　私が……!?」
「え?　ええ、そうですけど……?」
何やら妙に慌てる神奈子。横島は不思議そうに眺めるが、その姿に彼は煩悩をくすぐられている。先程の姿とのギャップが良いのだろう。彼女の頬は赤く染まっている。
そんな神奈子を見た早苗は思う。
(ああ……。神奈子様って『可愛い』って言われ慣れてないんだっけ)
早苗は回想する。神奈子が諏訪子に守矢神社の格好良い担当だと言われた時のことを。
『早苗がウチの神社の可愛い担当なら、神奈子は格好良い担当だよね』
『急になんだ?　私がそれなら、諏訪子は何だって言うんだい?』
『私?　私はー……なんだろうね?　見えそうで見えないセクシー担当?』
『ブフゥッ!!』
壺装束のスカート状の部分をたくしあげ、ニーソックスとの間に存在する絶対領域を強調してみせた諏訪子だったが、その主張を聞いた神奈子が盛大に噴き出したことでこめかみに血管が浮き出ることになる。
『なーに笑ってるのかなー、神奈子ー?』
『くふっ、ふふふ……いや、すまん。まさかそのナリでそんなことを言うとは思わなくて

……ま、『可愛らしい』担当でいいんじゃないか？』
『ほほう……。ま、神奈子はそういうタイプじゃないよね。可愛い女の子は私と早苗に任せて、神奈子はいつも通り格好良い男……いや、女性をやってくれれば』
『……あ？』
『……ん？』
二人は同時にゆっくりと、ゆっくりと立ち上がる。そして各々鉄の輪とオンバシラを取り出し――
『オラオラオラオラオラオラオラオラオラオラ!!』
『無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄!!』
突き（ラッシュ）の速さ比べが始まったのだった。
（――今にして思えば、気にしてたんだ神奈子様）
男の言葉で照れる神奈子など珍しいどころの話ではない。男と話す機会など無かったにも等しいのだが、それを差し引いても彼女に抱いていたイメージからは遠かったのだろう。
「ま、まったく！　変なことを言うんじゃない!!」
その言葉と同時に、床から生えたオンバシラが横島の鳩尾に突き刺さり、体を宙へと跳ね上げる。

「こ゛ふ゛う゛っ゛！゛？゛　照れ隠しにオンバシラは止めて……!!」

結果的にはある意味神奈子にとってタイミングが良かった。横島はオンバシラで潰されたことを持ち出し、「こーなったらもー、神奈子様の体で責任を取ってもらいます！神様と人間の禁断の恋にぼかーもー!!」と飛びかかるつもりだったのだ。この神懸かり的な偶然は神奈子が神だからか、横島のギャグ体質が所以か。

「これ以上は流石に看過出来んぞ、八坂神奈子」

「う……、すまん。それから皆も、宴会の空気を壊してしまいすまなかった」

レミリアの言葉に神奈子は素直に謝罪をする。常ならば考えられないような光景なのだろうが、どちらに非があるかは一目瞭然だ。これには諏訪子も早苗も苦笑いするしかない。文も今回に関しては写真を撮っていない。

「ほれ、横島。大丈夫か？」

「うーっす、何とか……」

流石の横島もオンバシラ二連発はキツかったのか、声が震えている。だが、しっかりと両足で立っているので、そこまでのダメージではないのだろう。

「すまなかったな、横島。二度もオンバシラをぶつけるなど、私としたことが……」

「あはは……。いや、お気になさらず」

神奈子の謝罪を笑って許す横島。流石の彼も飛びかかろうとは思わないようだ。美

神と違い、神様の弱みに付け込む程肝が据わってはいないらしい。
「横島、挨拶まわりも終わったし、この後は自由にしていいぞ。幻想郷での宴会は初めてだからな、存分に楽しんでこい」
「え、良いんすか？」
「ああ。咲夜も側にいるしな」
「はい、こちらに」
「――――ふおぉっ!?」
すぐ後ろからの声に、横島は体を飛び上がらせて驚く。咲夜は澄ました表情でレミリアの側に侍り、紅茶の用意をしだす。
「咲夜はさっきまで宴会を楽しんでいたからな。次はお前の番だ」
「ここは私に任せて、行ってきなさい」
二人の言葉に最初は戸惑っていたが、最終的には二人の厚意を無碍にする訳にはいかないと思い至り、頷いた。
「それじゃあ行ってきます」
「ああ、また宴会が終わりの時に呼ぶよ」
そうして横島は宴の輪の中に入っていった。レミリアはそれを確認したあと、咲夜に一つの指示を出す。咲夜はそれに頷き、レミリアに淹れたての紅茶を差し出した。

――やがて宴会が終わり、横島は妖精メイドと共に会場の片付けを行っている。あれから極々平和に時が過ぎ、美味い料理に満足した横島は鼻歌混じりに作業をこなしている。だが、周りの妖精メイド達は忙しなく動き回っているのだが、どうにも要領が悪く片付けがスムーズには進まない。

そこに、咲夜が一号二号三号と共に現れた。

「横島さん、お嬢様がお呼びよ。ここは一号達に任せて行きましょう」

「お嬢様が？　……分かりました。それじゃ、お願いな」

すれ違いざまに三人の頭を撫で、咲夜についていく。撫でられた三人は鼻息荒く作業に没頭していった。

「お疲れ様です。どうかしたんですか？　……ん？　香水つけたんですか？」

「ああ、来たか横島。香水はあれだよ。……永琳に納豆臭いって言われて渡されてな……」

「おおぅ……。いやでも良い匂いですね、この香水」

「まあな……。それはともかく、ちょっと聞きたいことがあってな」

ゲストルームの前に立つレミリア。今レミリアからは柑橘系の匂いが漂っている。それが永琳から渡された香水なのだろう。しかし、彼女は表情に少々の陰りを見せている。永琳に言われたこともそうだが、どうやら聞いていいのか迷っているようだ。だが、ここでまごついていても仕方がない。意を決し、彼女は横島に問い掛ける。

「リグル・ナイトバグ。……あいつと会った時、ひどい顔をしていたが、何かあったのか？」

「――――！」

その言葉に横島は目を見開く。咲夜はそんな横島に疑問を抱くが、まだ主の言葉は終わっていない。

「妖怪だとか吸血鬼だとか気にしないお前にしては妙だと思ってな。……あ、別に話したくないならいいんだけど」

そう言ってはいるが、彼女の顔はそうは言っていない。「聞かせろ教えろ」と如実に物語っている。

「……」

横島は考え込んでいるが、彼に否やはない。確かに誰かに話すようなことでもないのだが、理由は別にあった。

（……違う世界だし、話しても良いのかな……？）

横島はそれを考えていた。

彼は『この話』に関して、相当なストレスを抱いている。元の世界において、近しい者は誰もそれに触れず、また関係者の全員が彼女の結末を知っているのだ。横島に配慮し、それを話題に出さないのも頷ける。

だが、彼はそれに無意識にだが不満を覚えていた。彼だって理解はしている。今更蒸し返すような話ではないし、話題に出したところで皆の顔が曇るだけだ。だから彼はそれを話さない。彼の理性が無意識に理解しているから。

けれど、彼は今思ってしまった。『話すのは構わない』と考えてしまった。彼の知らぬ間に蓄積されていったストレスに、心が傾きかけている。

だが、それに対する考えも過ぎる。『話した所でどうなるのか』と。

だが、一度思ってしまえばそれで十分だった。『話したい』という感情がムクムクと大きくなり、鎌首をもたげる。そこに、彼が抱えている精神的な負担の大きさが現れている。

それも当然だろう。いくら修羅場をくぐっているとはいっても、彼はまだ高校生。十七歳の少年なのだ。

「……駄目か？」

「――いえ、大丈夫ですよ」
結局、レミリアの確認が引き金となった。彼は話すことにしたのだ。
「何なら皆も呼びます？」
横島は冗談混じりにそう言った。それに対しレミリアはゲストルームのドアを開くことで答える。
「実は、皆居るんだよ。私が横島に話を聞くっていうのがバレちゃって……」
「あらら……」
そこには紅魔館・永遠亭の主要メンバーと、紫・藍・橙の三人が居た。
「何かリグルって子との面白い話が聞けるって本当なの？」
「リグル……。蛍の妖怪か」
輝く瞳で問いかけてくるのは輝夜だ。恐らく伝言ゲームのように途中で話が変わっていったのだろう。
「いえ……正直楽しんでもらえるような話ではないかと思うんすけど……」
「あ、そうなの？」
そこで横島は何故話をすることになったのか、理由を語る。それに幾人かは顔を見合わせるが、横島の話に興味が出てきたのだろう。彼の次の言葉を待っている。
横島は皆と同じように空いている椅子に腰掛け、どこから話すかを考える。

「……ま、順を追って話しますか」

そうして彼は語り出す。元の世界で大きな戦いがあったことを。魔神アシュタロスが人間界に侵攻したことを。その、一連の出来事を。

だが、詳しくは語らず、ぼかした内容の物もあった。それが、彼とルシオラとのことだ。

その時の横島にどういった心理が働いたのか自分では理解出来なかったようだが、彼はルシオラを含む三姉妹については詳細を語っていない。重要な部分は上手くぼかし、違和感なく話すことに成功している。――三人程に気付かれはしたが。

「……んで、戦いは終了。色々とあったけど、一件落着って感じっすかね」

そうして彼は語り終えた。リグルとの関連については話さざるを得ないため、そこはぼかしつつ語っておいた。とは言っても、「蛍の化身が俺を助けるために死んでしまった」といった具合だが。

「そっか……。そりゃ重ねちゃうわよね」

輝夜の言葉が部屋に浸透する。その場の雰囲気は良いとは言えない。フラン・美鈴・小悪魔・橙などは涙ぐんでいる。

それを見た横島に、今更ながらに後悔の念が過ぎる。やはり止めた方が良かったのだろうか。話したのは自分のエゴなのではないか。自らの欲求に従った結果がこれだ。

色々とネガティブな考えが脳裏に渦巻く。だが、それだけではないという感覚もあった。それが何かも理解出来ないのだが。

「その……悪かったよ。無理に聞き出して」

「いや、そんな！　……こっちこそすんません。その、こういう雰囲気になるのは予想がついてたのに……」

申し訳なさそうなレミリアに、横島の良心が軋みを上げる。もう、彼女を正視することも出来ない。目に見えて落ち込んでいく横島に、紫が声をかけた。

「でも、よく話してくれましたわ。貴方の様子から、今まで随分と溜め込んできたことが分かります……」

その言葉に横島は顔を上げる。何か、自分の状態が理解出来そうな気がしたから。

「話してみて、少しは楽になったでしょう？」

「――っ」

かちりと、嵌った気がした。

紫の言葉を反芻し、自分の心を理解した。瞬間、彼は愕然とした。

自分が話したかったのは。皆に語って聞かせたのは。他でもない、ただ自分が楽になりたいから。スッキリしたいから。――そんな気持ちから来たものだったのだ。

「……」

横島は俯いてしまう。まともに皆を見ることが出来ない。胸の中にはドロドロとした暗い感覚が広がっていく。それに、吐き気を覚えた。自分は一体何様のつもりなのだろうか。あまりにも自分勝手な理由で話さなくていいことを話し、皆にいらぬ気を使わせて。だからモテないんだ。唐変木。馬鹿。あんぽんたん。早漏野郎。インポテンツ。巨根。

「――という風に、貴方は考えているでしょうね」

「いえ、後半部分はあまり。……っていうか俺をそんな目で見てたんすか、永琳先生!?」

永琳のあまりにもあまりな感想はともかく、横島はようやく顔を上げた。目が合った永琳も、隣の紫も苦笑を浮かべている。

「でも前半部分は概ね合ってたんでしょう？　それは考えすぎよ」

「……いや、でも」

永琳の言葉に横島は反論しようとするが、他の皆が頷いているのを見て、言葉に詰まる。

「正直、今回悪いのは私達よ。こんな状態じゃ断るに断れないしね」

「……でも、俺が話すって決めたから」

「いや、それを言えば私が強制したからだろう。最初は渋ってたみたいだし、あれじゃ誰も断れん」

「……でも」

皆が横島のことを思い、言葉をかけてくれる。その優しさが彼には嬉しいのだが、同時に痛みを感じる。

そもそも彼は本来ならば物事に対して深く考えを介さない。それは彼の生い立ちからくる一種のドライさが関わってくるのだが、この事件に関しては話が別だ。ルシオラとの出逢いと別れは、彼に未だ癒えぬ深い傷を残した。

「……」

永琳は静かに彼を診る。息遣い、言葉、語調、話の組み立て、視線、瞳孔、表情、顔色、血色、脈拍、精神状態、心理状態――判断材料はまだ足りない。だが、今まで培った経験から横島に対するいくつもの推論を導き出す。それを脳内で纏め終えると、永琳は徐に立ち上がり、横島へと歩み寄る。

「貴方の気持ちは分かる……とは言わないわ。貴方が今抱いている気持ちは、貴方だけの物だから。……正直に言って。私達に話したことを、後悔してる？」

永琳の言葉に、横島は躊躇いつつも頷く。

「それは、皆に嫌な思いをさせたと思ったから？」

ゆっくりと頷く。

「そう……。でも、私は嬉しかったわよ？」

顔を上げる。側にいる永琳の顔は、優しい笑顔を浮かべている。
「……何でっすか？　俺達今日会ったばっかじゃないっすか」
「そうね。確かに私達の付き合いは今日一日だけよ。でも……」
永琳は何かを考えるかのようにおとがいに指を当て、部屋の天井を見上げる。
「ん～、何て言えばいいかしら。……強いて言えば、貴方の人柄かしら？」
「人柄……っすか？」
「ええ。貴方は今日目覚めたばかり。輝夜や妹紅ともそうだけど、貴方は私達と二言三言で打ち解け、するりと自然に内側に入ってきた。それは間違いなく貴方自身の性質が齎したことなの」
横島にはそれが分からない。彼には頓と理解出来ない。『自分以上に信じられないものなど無い』と思い込んでいる彼には、分からなかった。
「簡単に言えばね。私達は貴方に惹かれているの。貴方の『人とそれ以外』を分けない所に。明け透けなのもポイントかしらね？」
「……それだけ……？」
「あら、私達には結構重要なことなのよ？　長生きしてるってだけでそれなりに大変なこともあったりするんだから」
その言葉に紫とてゐがやけに感慨深く頷いている。

「だからかしら。私は貴方の事をもっと知りたかったし、何かを話してくれるって聞いた時は嬉しかった。そうすればもっと仲良くなれるしね。……まあ、貴方に辛い思いをさせてしまったのは誤算だったけど」

「っ！　そんなこと、ないっす……」

「……ありがとう。ほら、いつまでもそんなしょぼくれた顔してちゃ駄目よ？　男の子なんだもの、もっとシャキッとしないと！」

永琳は横島の背中をポンと叩く。未だ釈然としない思いは胸中に渦巻いているが、永琳の言葉に些か負担が消えたような気がする。この期に及んでまだそのような考えが浮かぶのかと、嫌な気分も去来する。

だが、永琳を見る。紫を見る。レミリアを見る。妹紅を、輝夜を、鈴仙を、フランを、美鈴を、室内の全員を見る。

（――そうか。皆、俺を心配してくれてたんだ）

横島が感じていた嫌な雰囲気。それは他でもない、『自分に対する思いやり』だったのだ。

彼は未だ理解出来ないだろう自らの精神状態が、それを拒んでいたのだ。

「……その」

横島が言いにくそうに口を開く。

「……ありがとう、ございます」
皆に対して、頭を下げた。嬉しい気持ちと、情けない気持ちがせめぎ合う。永琳が優しく頭を撫でている感触を、横島はただ感じていた。
「……永琳先生」
「何かしら？」
「こんなにも優しくしてくれるということはつまり、誘ってるんですね？」
「あら、どういうことかしら」
妹紅は呆れ、輝夜は目を輝かせ、鈴仙は救急箱を用意する。
「これはつまり、『後で私の部屋に来なさい。一晩中慰めてあ・げ・る（はぁと）ってことに違いない!!　永琳先生とのドキドキな一夜にぼかーもー!!!」
「あら、せっかちさん♪」
飛びかかってきた横島の顔に永琳は何かを吹き付ける。それだけで横島は床に倒れ伏し、軽い鼾をかいている。
「……さて、部屋に運ぶか」
「ああ、待って妹紅。私が運んで行くわ」
「……鈴仙が？」
横島を運び慣れてしまった妹紅が彼を担ぎ上げようとするが、鈴仙がそれに待ったを

かける。彼女はそのまま横島の腕に手をかけ、引き摺るように移動する。
「……何かあったの、鈴仙？」
「……何もないわよ、何も」
てゐの問い掛けに笑って答える鈴仙。しかし、その笑みは暗い色を含んでいた。それを見たてゐは鈴仙について行こうとしたが、止めることにした。今はそっとしておいた方が良いだろうと判断したからだ。
「それじゃ、行ってきます」
「ええ、行ってらっしゃい」
挨拶もそこそこに、鈴仙は意外にも力が強かったのか、するすると移動していった。
鈴仙を見送り、レミリアは解散するように告げる。
「……ところで、私の部屋はどこなの？」
「ああ、今日はとりあえず鈴仙と一緒の部屋で寝なさい」
てゐの疑問に永琳がニコヤカに答える。
「……明日からは？」
「勿論、私と同室よ♪」
「――――っ!!」
想像を絶する悲しみと絶望がてゐを襲った。

「妹紅も泊まってくんでしょ？　部屋取ってあるわよ？」
「おいおい、何勝手に……」
「あー、いいよ別に。永琳がそのために用意してたからな」
家主の許可が下りたからか、妹紅は溜め息を吐きつつも了承した。ちなみに紫も泊まることになっている。輝夜は「あ、そうなんだ。ふーん」といったリアクションを返し、紫の心に盛大な傷を付けることに成功していた。
そうしてフランは小悪魔、橙、輝夜、妹紅、てゐを引き連れて浴場に。レミリア、パチュリー、咲夜、美鈴はパーティーホールの片付けの進捗を確認しに部屋を出る。残ったのは永琳、紫、藍の三人だ。
「八意永琳」
「何かしら、紫」
「彼に何をしたの？」
紫の鋭い視線が永琳を射抜く。永琳は苦笑を一つ零し、両手を上げた。
「やっぱり貴女にはバレちゃったわね、八雲紫」
「永琳？」
紫の念押しに永琳は香水の小瓶を取り出す。
「素直になる薬をちょっと配合してあるの」

「……永琳」
「大丈夫よ。自白剤の類じゃないし、後遺症もない。さっき彼に吹き付けた薬と合わせて、明日はかなりスッキリと目覚めるはずよ」
小瓶を弄びながらの台詞に、紫は溜め息を吐く。変わらず視線は鋭いままだ。
「今回のような強引な手段は、今後止めていただきますわ。彼に危害を加えるならば、私が承知しない」
「……随分と彼を気にしているのね」
「当然ですわ」
睨み合うこと数秒。同時に軽く息を吐き、話題を変える。
「彼、どうだったの？」
紫の曖昧な質問に、永琳は明確に答える。
「横島君は、まともなメンタルケアを受けていないわね」
「……やっぱり、ね」
紫は椅子に深く腰掛け、大きく深く息を吐く。
「しかし、そんなことが有り得るのでしょうか？　彼は大きな役割を果たした英雄と言える存在ですし、更には彼と『蛍の化身』との本当の関係を鑑みても……」
「さあ、そこら辺はあちらを詳しく知らない私達では何とも言えないわね」

「……そうですわね」
「それに、何かもっと大きなことを話していない気がするわ。それが何か分からないと、本格的な対処は難しいかもね」
二人は永琳の言葉に黙して頷く。
「いずれにせよ、遅すぎるということはないわ。彼は強い子よ。しっかりとした芯がある。これから先、ゆっくりと処置をしていくわ。……急いては事を仕損じるからね」
「お願いするわね、永琳」
「ええ、任せなさい紫」
彼は知っているのだろうか。彼を思ってくれている人は、大勢居るのだ。彼を部屋へと運んだ人物、鈴仙もそうだ。
「……」
「う……ん」
鈴仙はベッドで眠る横島の頬をつついている。今まで通りの印象ならば、頬をつつく所か、部屋へ運びもしないはずだ。彼への印象が変わったのは、彼の話を聞いてから。自分でも簡単な物だと思わないでもないが、事実なのだから仕方がない。
（話を聞き始めた時は、横島さんは私と似てると思ったけど……、全然違う……）

彼は話の中で、自分は臆病だと言っていた。逃げたりもしたと言っていた。だが、真実はどうなのであろう？

彼は戦ったのだ。絶望的な力量差の相手と、怖がりながら、恐れながら、最後まで戦い抜いた。

結果、犠牲は出てしまったけれど、魔神とやらは彼に倒された。色んな助けがあったけれど、臆病で勇敢な人間に倒されたのだ。

（そう……。臆病なだけの私とは違う……）

彼の話を聞いて。彼が元居た世界の話を聞いて。思い至ったのだ。

あの時見た彼の顔。あの表情は他でもない。逃げ出して、二度と戻れない故郷を――月を見上げていた自分の表情に似ていたのだ、と。

（――なんて、烏滸がましい）

彼と私は違う。ただ臆病なだけの自分と、臆病だけど、勇敢でもある彼とでは。

（どうしたら……そんなに……）

鈴仙は横島の顔を覗き込み、考えに沈み込む。やがて数分が経ち、横島が寝返りを打ったところで立ち上がり、頭を振る。

「私は、貴方みたいに、なれるかしら……」

鈴仙はそっと呟き、部屋を出る。横島に対する印象は既に変わっていた。

鈴仙は、横島忠夫という少年を尊敬している――
彼はいつか気付くのだろうか。自分に対する、皆の想いに。

第十話
「宴会終わって夜も更けて」
～了～

番外編・前編

最近、妙な噂を耳にする。

何でも、ここ数日で人里に存在する全てのゴキブリが群れを成し、森や山の方へと移動したというのだ。

「まあ、私も一度見たことがあるのだが……」

月光に照らされた、黒光りするゴキブリ達の大移動。その時の光景を思い出し、独り言を呟いた少女は一つ身震いをする。

迂闊に思い浮かべる物ではない。お陰で全身に鳥肌がたっている。

「いかんいかん、今日は妹紅が遊びに来る日だというのに……」

こんな調子では、妹紅にいらぬ心配をかけてしまう。彼女はプルプルと頭を振り、忌まわしい映像を頭から叩き出す。

少女は手に持った様々な食材が入った袋に目を向け、夕飯の材料に不足が無いかを確かめる。吟味に吟味を重ねた新鮮な食材達。どうやら量も申し分ないようだ。

「……早く帰って、夕飯の支度をしよう」

最近独り言が多くなってきたことを気にしているのだが、ついつい口をついてしまう。「これだから一人暮らしは……」などと、またも声に出してしまう。

どうせなら、妹紅に同居を促してみようか？　頭に浮かんだ考えに苦笑をこぼす。不老不死だからと言って、まともな食事をしようとしない妹紅。最近はちゃんと食べているようだが、栄養のバランス等は考慮していないだろう。

やはり、何だかんだで断られるのオチだろうか。だが、言うのは只だ。いつも私に心配をかけるのだ、偶には私が彼女を困らせてもバチは当たらないだろう。

人里の大通りを、一人の少女が歩く。彼女は半妖の生まれであり、現在は人里にある寺子屋で教鞭を執っている。

若く美しく教養が深く、だが授業は分かりづらいし、宿題を忘れようものなら強烈な頭突きが待っている。

子供達に好かれ慕われ恐れられ、保護者や人里の大人達の覚えがめでたい皆の先生。

――彼女の名は上白沢慧音。藤原妹紅の、理解者の一人。

「……ん、もうこんな時間か」

壁に背を預け、本を読んでいた妹紅は外から入り込む光に朱が混じり始めたことに気

付く。

今日は慧音に夕飯をご馳走になる予定だ。彼女の料理は美味い。味覚が似ているのか、彼女が施す味付けは妹紅にとっても好みの物だ。

「さーて、今日のご馳走はなんだろなっと」

軽く体を伸ばし、身嗜みを整える。何となく気分を変えるために、髪型をポニーテールにしてみる。これだけで雰囲気ががらりと変わるのだから、長い髪とは不思議な物だ。

「……ま、自分の髪なんだけど」

特に苦労することなく纏め終え、戸締まりを確認し、宙に浮く。

空には赤く輝く夕日が見える。何気なく月の存在を確認しようとするが、その途中である事に思い至る。

「ああ、そういや今日は新月だっけ」

月を思い浮かべた妹紅だが、それは次の瞬間にはとあるお姫様と従者達へとすり替わる。

(そういえばあいつらって満月の日には餅を搗いてるみたいだけど、新月の日にも何かやってるのかな)

妹紅の言う餅搗きとは例月祭という行事の事であり、月の都から逃げ続けている輝

夜・永琳・鈴仙達が罪を償うために行っている。
　彼女はそういえばそんなことを言っていたな、というくらいにしか覚えていない。輝夜達が妹紅にそういった事を話すくらいに打ち解けているのを、慧音は知っているのだろうか。
「あいつらの餅って結構美味いんだよな……普通だけど。――ん？」
　他愛ない事を考えていた視界の端、森の片隅に何か黒い塊が通り過ぎたように見えた。改めて振り返るもそこには何も無く、ただ静寂が広がっているだけである。
「……気のせいか？　ま、野犬か何かだろ」
　結局、彼女はそれ以上気にも留めずに空を行く。既にお腹はぺこぺこだ。何せこの日の為に二日間何も食べていないのだ。
　――結果、妹紅はまず食事の前に慧音の頭突きと説教で胸をいっぱいにすることとなった。

　博麗の巫女、霊夢は今絶望に支配されている。
　たった数分前は友人達が訪ねて来たこともあり、表情には出さずとも喜びの感情が

あったのだが、それも今や消失した。

何故神は私に斯くも多くの苦難を与えるのか。私は貴方に対し、何か粗相を働いただろうか。霊夢は問い掛ける。だが、博麗神社に祀られている神が聞けば、恐らくはこう答えるだろう。「私の名前も知らないくせに何言ってんの?」と。

言わば、これは起こるべくして起こった悲劇なのだろう。慢性的に参拝客は来ない。突然の来訪者達。夕飯をたかる畜生共。即ち――

「……米が、尽きた――」

霊夢はその場で悲しみに打ちひしがれる。あれだけあった米が、米びつの中に存在していない。今月はご飯だけで食いつなぐつもりだったのに。大根飯とか。菜飯とか。焼きおにぎりとか。お粥とか。

「……何故そこまで困窮しているのかしら?」

訪ねて来た者の一人、八雲紫が頭痛を耐えているかの様な表情で尋ねる。

「……だって、参拝客、来ないもん……。お賽銭、無いんだもん……」

所々言葉が不自然に途切れる。泣いているのだろうか、その肩は震えている。

(……でも、お米だけで食いつなぐという程困ってるわけじゃないはずだけど……?)

そう、如何に博麗神社が辺鄙な場所にあり、妖怪が湧いて出てくるとはいえ、奉納品や紫達からの差し入れ等があるはず。特に紫は野菜だけでなく、魚や肉も渡している。

だというのに何故こんなことに……？

「皆……宴会で、ウチの食材、使うんだもん……。宴会の食材、持ってくる奴、少ないもん……」

「ああ……」

紫は全てを理解した。博麗神社で行われる宴会に出てくる料理、その食材はほぼ霊夢が備蓄していた物から出していたのだろう。

食材を持ってくる者……。確証は無いが、恐らくは妖夢に咲夜、アリスといったところだろうか。宴会では皆がよく食い、よく呑む。彼女達が多少の食材を持ってこようと、これでは確かに食材どころか米すら尽きてしまうだろう。

しくしくと泣いている霊夢をどうやって慰めようか悩む紫の横に、同じく霊夢を訪ねて来た魔理沙と萃香が紫に視線を一つ寄越す。

私達に任せろ。彼女達の目はそう言っていた。紫は躊躇いつつも自らの友人と、霊夢自身の友人に任せることにする。

紫は彼女達の目を見て、頷いた。二人も頷きを返す。

二人は霊夢の肩にそれぞれ手を置き、慰めの言葉をかける。

「米が無けりゃ、餅を食えばいいんだぜ？」

「お米が無ければ、純米酒を呑めばいいんだよ？」

「「ぶち殺すわよあんたら」」

いっそ清々しいまでに殺意を漲らせる、霊夢と紫の声が重なった。

「はぁ～……。暇だわぁ～」

蓬莱山輝夜は暇を持て余していた。ここ最近は異変もなく、患者もなく、遊びに訪れる者もいない。最近は妹紅と殺し合うこともないし、趣味の盆栽もとっくの前に枝を整えたばかり。大事なコレクションも、自慢する相手が居なければ整理する気も半減だ。

「ひーまーひーまー」

暇と口にしながら畳の上をゴロゴロと転がる。その姿は最近外から幻想入りしてきた、垂れたパンダを思い起こさせる。

引きこもっている時はこんな事はなかった。自由でないとはいえ、毎日をそれなりに楽しく過ごしていた。

輝夜が暇を持て余すのは、表に出てきてしまったからだろう。人との親交を羨ましがったとはいえ、彼女達は月からの追っ手に見つからぬように潜んでいたのだ。その追っ手が居ないと分かり、表に出て断絶されていた人との繋がりを得た。

それなりに楽しかった引きこもりの日々など途端に色褪せ、代わりに始まった日々は何物にも代え難い、宝石の如く煌めいている。

誰かと出会い、誰かと話し、誰かと友好を結び、誰かと喧嘩し、誰かと別れ、再会を約束する。

――それが堪らなく楽しく、また嬉しいのだ。

やはり自分には月での生活より、この穢れに満ちた地上での生活が性に合っている。永琳が付いてきてくれたのには感謝しかない。まあ、彼女を特に慕っていた月の姉妹には申し訳ない気持ちもあるが……、全ては永琳が決めたのだ。それは理解してもらうしかない。尤も――

「そんなに暇だ暇だと言っても、ここには貴女の娯楽になる物はないわよ輝夜」

その永琳にも、この如何ともしがたい退屈は払拭出来ないらしい。

「むぅ……」

輝夜は不機嫌そうに唇を尖らせ、うつ伏せにべしゃーっと垂れている。その表情とは裏腹に可愛らしい姿が永琳の心の琴線に触れたのか、最近魔法の森の入口にある道具屋で購入した写真機を取り出し、その姿をパシャリと写真に収める。

それが切っ掛けになったのかは分からないが、輝夜は「そうだ！」と言って体を起こし、鈴仙を呼ぶ。

「れーせーん！　聞こえるなら永琳の部屋まで来てちょうだーい！」

輝夜の顔は何とも微妙に歪んでいる。さながら面白いことを思いついた悪戯っ子といった風情だ。

それから数十秒、パタパタと足音がし、間もなく部屋の襖が開かれた。

「すいません姫様、遅くなりました。……それで、何かあったんですか？」

鈴仙の言葉に輝夜は胡散臭い笑みを浮かべながら、彼女の謝罪に「うんうん」と頷く。この時点で鈴仙の危機管理センサーがビンビンに反応しているわけだが、今更逃げられるわけがないので、内心で涙を流しながら覚悟を完了させる。

（――当方に受容の用意あり）

何だか悲壮感を漂わせる鈴仙。輝夜はいまだにニコニコ顔だ。

「私、思ったのよ」

「……何をです？」

輝夜は立ち上がり、後ろ手でゆっくりと鈴仙の背後に回る。鈴仙は警戒しているのか、身体を固くしている。永琳はまたとないシャッターチャンスの予感に写真機を構える。

「この部屋に娯楽が無いのなら、娯楽をこの部屋に持ってくれば良い……と！」

「……つまり」

輝夜の瞳が強く、怪しい輝きを放つ。
「そう！　今から貴女は私のオモチャなのよ!!」
そう言い放ち、鈴仙の服に自らの手を潜り込ませる。
「ひゃわぁっ!?　な、何するんですかぁ!!?」
鈴仙は体をよじり抵抗するが、輝夜はお構いなしに鈴仙の肢体をまさぐっていく。指がうねうねと蠢く様は少しホラーチックだ。
「やっ……！　ちょっ、姫様……!?」
「――――っ！　見切ったわ!!」
輝夜は類い希なる感覚を以て鈴仙の『弱点』を見抜く。輝夜の左手は鈴仙の左脇腹を、右手は右太ももの内側を優しくさする。
「ひやぁっ!?　ちょっ、駄目ですーっ!!」
「ふふふっ、くふふふふ！」
輝夜の突然の奇行に面食らった鈴仙はバランスを崩し、輝夜と共に倒れ込んでしまう。だが、輝夜は手を緩めず、倒れたことを利用して鈴仙に絡み付きつつ更にまさぐる。その手腕は実に鮮やかで、鈴仙はもう声を我慢することも出来ないくらいに追い詰められる。
「さあ、私の手によって悶えなさい！」

「――っ！　……、……っ！　……っ、く――!?」

輝夜は鈴仙のうなじに顔を埋め、彼女の匂いと柔らかさを堪能する。それが引き金となったのか、ついに鈴仙の心の堤防が決壊した。

「――あはははははっ!!　ちょっ、あは、あはははははは!!　や、やめ――!?　ひ、くふっ……!?」

部屋に響き渡る鈴仙の（はしたない）笑い声。それはかなり切羽詰まった、多少苦しげなものだ。

鈴仙は頬が紅潮し服も髪も乱れ、既にスカートからは下着が丸見えになっている。更には涙目になっているのもあり、輝夜から逃れようと身をよじる姿はある種、官能を刺激する様相を呈している。永琳はそれを思う様写真に撮る。バシャバシャとではなく、秒間十六回のスピードでシャッターを切っているため、『バシャー』と音が繋がっている。どうやら妖怪の山の河童に永琳のシャッタースピードに耐えられるよう改造してもらったようだ。

「――っ」

だが、ここで永琳は撮影を止め、窓から見える竹林を凝視する。その事に気付かない輝夜はいまだに鈴仙をくすぐっているが、永琳は気にせず輝夜に声を掛ける。

「輝夜、そこまでにしておきなさい。……今から、『あれ』を起動させるわ」

その言葉に輝夜は首を傾げる。
「あれって……『あれ』よね？　何でまた今時分に……？」
「――、――。……っ。……、……――。……？」
輝夜は永琳の言葉にくすぐる手を止め、息も絶え絶えではあるが鈴仙もようやく解放された。全身がビクビクと痙攣し、肌が余す所なく赤くなっている。彼女は数十秒を掛けてそれと喘ぐような呼吸から立ち直り、輝夜と同じく疑問を抱く。
「……強いて言うなら勘よ。とにかく、準備をお願い」
「……分かった。鈴仙、行くわよ」
「は、はい……」
ヨロヨロと立ち上がり、乱れた服を直しながら輝夜の後へと続く鈴仙。それを見送った永琳はもう一度窓の外を睨んだ後、部屋を後にする。

灯り一つないテラスにて、月の無い空をじっと見つめ、ワインを呷る。
大きな光の無い空に散らばるのは、とても多くの、小さな光。
ここ数年、新月の日にはこうして過ごしている。

……新月の日には『れみりゃ』という幼児と化すなんて根も葉もない噂を聞いたことがあるが、そんなことがあるわけない。……まあ、何回か酒を呑み過ぎてその夜の記憶が全く無かったりしたこともあったのだけど。

「だが……、ふふっ。こうしている私はさぞ大人っぽく見えていることだろう……」

そうして、ワインをまたグラスに注ぐ。

彼女の名はレミリア・スカーレット。この紅魔館の主。

――彼女は気付いていない。自分で『大人っぽく』と言ってしまうということは、無意識の内に普段の自分が子供っぽいと認めているということに。

「……お嬢様、もうそろそろ就寝のお時間です」

その声は突然背後から聞こえてきた。咲夜がわざわざ能力を使い、それを伝えに来たようだ。

レミリアは咲夜に倣い持ち始めた懐中時計を見やる。例え一切光の無い暗闇だとしても、彼女には何の問題も無い。吸血鬼は夜目も利く。

「……いや、まだ夜の九時なんだけど……」

「良い子はもう眠る時間ですよ?」

主の言葉にはっきりと答える従者。ちなみにだが、咲夜に悪気は一切無い。

レミリアは暫く咲夜の顔を（若干涙目で）睨んでいたが、諦めたのか深い深い溜め息

を吐き、席を立つ。
「はいはい、分かった分かっ――!?」
言葉の途中、突如感じた異常な気配を察知し、空を睨む。
「お嬢様、一体どうし――これは!?」
次の瞬間、幻想郷に存在する全ての力ある者が気付いた。
幻想郷全土に充満する敵意とも悪意とも呼べないような、稚拙な意識。
そして、月の無い空に鎮座する黒く、巨大な球体。
「何だ、あれは……?」
レミリアはその驚異的な視力を以て黒い球を観察する。そのレミリアの下にパチュリーが現れる。
「レミィ!」
「パチェ!　……貴女も気付いたの?」
レミリアは一瞬だけ球から視線を外し、パチュリーと言葉を交わす。
「あれだけの気配を撒き散らしているのだもの、当然よ。……それより、あれは一体何なのかしら?　見た目はさながら『黒い月』って感じだけど」
パチュリーの言葉にレミリアは眉間にシワを寄せる。あんな物を『月』と呼称するのに抵抗があるようだ。

レミリアが何とも言えない表情で発言に窮していると、その黒い月に変化が現れた。黒い月に纏わりつくように発生した黒い靄のような物。レミリアもパチュリーもそれをジッと見ていたのだが、突如背筋を走る悪寒に、考えるより先に感覚で判断を下す。

「パチュリー！　紅魔館全体に結界を張って!!」

「分かってる!!」

叫ぶレミリアに、パチュリーもまた叫んで返す。よほど余裕が無いのか、二人の表情は鬼気迫るものとなっている。程無くして紅魔館に結界を張り終えたパチュリーが空を睨む。

「……来るわよ……！」

靄が、動いた。

黒い月から離れ、まるでノイズの様な、嵐の様な耳障りな音を立てながら紅魔館に迫る。だが、それは結界によって阻まれ、紅魔館の敷地に入ることなく周りに漂うだけに留まる。その際に、ビチャビチャと生理的に不快な音を立てながら。

「お嬢様ー！　パチュリー様ー！」

「やっと来たわね、美鈴」

咲夜が靄を睨んでいると、背後から門番の声が聞こえてくる。彼女はかなりのスピードで走ってきており、物の数秒でテラスに辿り着いた。

「とりあえず簡単に聞きますけど、何がどうなってるんです？」
「分からん」
美鈴の質問にレミリアが即答した。本当に分からないのだから仕方がないが、それでも不安は募るというもの。
「……そうですか」
美鈴は不安げな表情で黒い月を見やる。先程から美鈴の探知能力に引っ掛かる物があるのだ。
それは、数えることが馬鹿らしく思える程に莫大な数の気配。彼女は『気を使う程度の能力』を持っており、自分だけでなく、他人の気も感じることが出来る。美鈴はレミリア達に自分の感覚が捉えたことを話す。
「……なるほどね」
返ってきたのは納得だった。レミリアは忌々しそうに黒い月と靄を睨む。
「私も今視認出来た。……あれは、虫の集合体だ」
その言葉は場に怖気を齎す。
「あの黒い月も、靄も、全部ですか……!?」
咲夜の問いにレミリアは頷く。今も鳴り響く耳障りな音は羽音、結界にぶつかる不快な音の正体は、奴らが潰れる音なのだろう。それは、今も止まらない。否、徐々にでは

あるが、どんどんと数が増えているようにも思える。
「……そういえば、人里でゴキブリが大移動したという噂が流れていました」
咲夜は人里での買い物の途中で聞いた噂を語る。その顔色は生理的嫌悪感からか青を通り越して既に白い。遠くから見える靄だけでも、恐らくは数千万単位で存在しているだろう。それを鑑みれば、黒い月を含めた総数は――。
「……考えたくないな。一体どうやってこれだけの規模に」
あれだけ巨大な黒い月を構成するのだ。この幻想郷で隠れる場所があるとも思えない。
レミリアは思考を巡らせるが、頭を振り、考えを改める。理由などは関係無い。奴らはこちらに攻撃してきたのだ。ならばこちらが取るべき手段は一つ。
「……あいつらを殲滅するわよ」
「え!?　ほ、本気ですか、お嬢様!?」
美鈴が叫ぶ。彼女は自らの能力で相手がどれだけの数を誇るかを感じ取ってしまっている。あのゴキブリ達を殲滅するのがどれほど無謀なことか、彼女はまざまざと思い知らされている。
「当然だ。奴らはこっちを攻撃してきている。……それに、このままでは幻想郷が奴らに覆い尽くされてしまう」

「うう……」

今度は美鈴も反論出来ない。向けた視線の先には、確かに黒い月から排出される靄は数を増し、幻想郷のあらゆる場所に向かっているのが見える。

――元々、選択の余地などなかったのだ。

「――、分かりました。行きましょう」

大きく深呼吸をし、覚悟を決める。美鈴だけでなく、他の者もそうだ。皆の顔を見たレミリアは一つ頷き、まずは咲夜に指示を出す。

「とりあえず、フランと小悪魔を呼んできてちょうだい。妖精メイド達は紅魔館の防衛を任せるとして……」

レミリアは周りを見渡し、結界に群がるゴキブリ達を見やる。どうやらただ数が多いだけで力は無いらしく、結界も微塵の揺らぎも見せない。とはいえ、鬱陶しいのも事実。

「……ふん。まずは私達で紅魔館の周りの奴らを片付けるわよ。最大戦力で一気に殲滅する……！」

皆は頷き、静かに力を高める。咲夜は姿を消し、フランと小悪魔の二人を呼びに行った。

しかし、ほんの数分で咲夜は二人を伴って現れる。どうやら二人もレミリアの下に向かって来ていたらしい。

「フラン、小悪魔。咲夜から話は聞いた？」
「うん、ちゃんと聞いたよ。……これ、全部が『あれ』なの……？」
「ひいいぃぃ……!?」
　フランは如何にも嫌そうな顔を、小悪魔に至っては涙目で露骨に怯えている。レミリアも二人の気持ちは理解出来るが、そういつまでもまごついてはいられない。
「そう、『それ』よ。とにかく、こいつらを全部やっちゃわないと幻想郷が無くなるかもしれない。それは嫌でしょ？」
　レミリアの言葉に二人は頷く。
「なら、やることは分かるわね？」
「うん！」
「……は、はい！」
　フランは元気よく、小悪魔は怯えながらも力強く頷いてくれた。
「んじゃ、さっさと行くわよ。このゴキブリが大量発生するっていう訳の分からない異変を解決しなきゃ」
　レミリアは言葉と同時に浮かび上がり、右手に強大な力が込められた魔力球を生み出す。彼女はパチュリーに視線をやると、パチュリーは頷くことでそれに応える。
「まず、私が道を作るわ」

レミリアは魔力球を握り締め、大きく振りかぶる。狙うは一点、最もゴキブリが多い場所。

パチュリーが張った結界は、侵入を拒む結界。『中から外に侵出する』分には、何の問題もありはしない――！

「――神槍『スピア・ザ・グングニル』!!!」

レミリアは魔力球を放つ。それはまるで音を置き去りにするような速さで突き進み、その形状を球体から、まるで槍の様な形へと変化させる。

突如飛来したそれにゴキブリ達は何の反応も出来ず、ただただその身を消滅させていく。

一切の手加減無く放たれた神槍は、黒い月より群がりたる数千数万の虫達を相手に減衰することなく突き破り、その余波で結界を覆う靄にすら巨大な穴を開けた。

「今よ！」

レミリアの号令に皆は飛ぶ。穴は徐々に塞がっていくが、彼女達が結界から出るのには障害とならなかった。

「……これはこれは」

空を飛び、結界から出て来たことで周りの様子も掴めてきた。幻想郷の至る所で戦闘が始まっている。特に異様なのは人里だ。そこには、何やら巨大な炎の壁の様な物が見

える。あれでゴキブリの侵入を防いでいるのだろう。
ゴキブリが辺りを覆っていく。これから先は余計なことを考えている余裕はなさそうだ。
「まるで悪夢の様な光景だな……。なら、悪夢には悪夢で対抗しようか」
レミリアのその言葉に、皆は弾幕でゴキブリ達を撃ち消しながら安全圏へと避難する。それを眺めたレミリアは口角を歪に吊り上げ『それ』を宣言する。
「魔符『全世界ナイトメア』アアァア!!」
レミリアを中心に放たれた幾つもの弾幕が、辺りに蔓延する靄を撃ち抜いていく。弾の一つ一つが数十、数百のゴキブリを消滅させていく様は、悪魔的というよりはいっそ神々しい。
ゴキブリ達の数は間違いなく減っている。だが、それでも全体から見ればまだまだ微々たるものだ。誤差と言ってもいいだろう。
この異変はまだ始まったばかり。開幕の一撃を誰が下したのかは知らないが、分かっていることはある。実にシンプルなことではあるが。
つまり、殺さなければ殺されるのだ。
首謀者が誰かは分からない。首謀者が居るのかも分からない。今出来ることは、目の前の虫達を殲滅することだけ。

月の無い空に浮かぶ黒い月。それは、何を意味するのだろうか。

番外編・前編
『新月の日の黒い月』
～了～

番外編・中編

幻想郷を襲う、ゴキブリの大量発生という異変。それは頭に『大』という文字を付けてもいい程の規模となっている。

突如新月の夜空に浮かび上がる黒い月。そこから発生する黒い靄。そして、それらを構成する天文学的な数のゴキブリ達。その総数は、世界人口など遥か後方に置いていく程にまで膨れ上がっている。

「魔符『スターダストレヴァリエ』!!」

魔理沙はゴキブリ達に、自らを象徴する星型の弾幕を宣言する。彼女の放つ流星はゴキブリ達を容易く引き裂き、消滅させていく。

「……ちぃっ!」

だが、足りない。例え弾幕の一つ一つがゴキブリ達を数十匹〜数百匹消し飛ばしたとしても、そんなものは全体から見れば単なる誤差でしかない。誤差に達するかも怪しいのだ。今必要なのは、全てを決する程の圧倒的な火力と言えるだろう。しかし、得意の魔砲を放とうにも、如何せん相手の数が多すぎる。

「のわっと!?」

自らに向かって飛来するゴキブリの群れをかわす。ひらりと身を翻し空へと飛翔しつつ弾幕を張り、思考を巡らせる。

――何故、『ゴキブリ』がこれほど自由に飛べるのかを。

「魔理沙！」

「おーい！」

「霊夢、萃香！　大丈……夫なのか、そいつは」

思案に耽りつつ博麗神社の上空に陣取る魔理沙の下に、紫を抱えた霊夢と、こんな状況でも相変わらず酒を呑む萃香が空を駆けて側に寄る。

「ちょっと分からないわね。あいつらを見た瞬間、こいつ真っ白になっちゃって……」

現在、霊夢の肩に担がれているのは八雲紫。群れをなすゴキブリ達を見た瞬間、精神的にも物理的にも真っ白になってしまったのだ。流石に見捨てはしなかったが、霊夢は迷惑そうに眉を顰めている。

「ま、気持ちは分かるけどね。私だってあんなのが居ちゃ気分良く酔えないし」

「その割にはよく呑むじゃないか」

萃香はゴキブリ達を忌々しそうに睨みつつも瓢箪を傾け、中の酒を呷る。彼女の言葉に魔理沙は首を捻るが、それに対する答えはこうだ。

「当然。酒でも呑まなきゃ、やってらんないよ」
「……そうだな、気持ちは分かるぜ」
弾幕は焼け石に水。普段何でも有りな反則スキマ妖怪はダウン。相手は生理的嫌悪感を催すゴキブリ達。これが一匹や二匹程度なら可愛げもあり、サンプルとして飼育するのも吝かでないのだが……。そうも言っていられない。
「せめて紫が戦力になってくれればねぇ……」
頼みの綱の紫は絶賛気絶中。とりあえず霊夢は紫の頬をぺちぺちと叩き、目を覚まさせようとする。その間魔理沙と萃香は霊夢達を守るため、弾幕を張って護衛に徹する。
だが、五分が経ち十分が過ぎ、それでも紫は目覚めない。霊夢は一向に起きない紫に腹が立ったのか、頬をぺちぺちどころかバチンバチンと叩いている。それでも紫が起きないために、ついに鬼は痺れを切らす。
「あぁあぁぁ、もう鬱陶しい!! こうなったら私が能力であいつらを萃めるから、魔理沙はマスタースパークで全部纏めて消し飛ばしちゃってよ!!」
「はあ!? ちょっと待て、そんな簡単に言うがな、あれだけの数を消し飛ばすのにどれだけチャージに時間が掛かるか……」
「萃まれーっ!!」
「ちょっとは聞けよ、私の話を!!」

萃香が自らの能力、『密と疎を操る程度の能力』を発動させ、自分達の眼前にゴキブリ達を萃めていく。最初は掌に収まるくらいの大きさだったのだが、それは見る見るうちに大きくなっていき、最終的には夜空に浮かぶ黒い月の様な物体に変貌していた。実際大きさは黒い月の十分の一にも満たないのだろうが、それの真正面に居る彼女達からすれば、球体と認識するよりも大きな壁と思った方がまだ現実的であった。

「……」

「……」

そうなってしまえば、彼女達に出来るのはただ呆然と目の前の『壁』を見つめるしかない。

萃香は瓢箪の中身を一気に呷り、頭をこつんと叩いて酒臭いままに宣った。

「ちょっと萃めすぎちゃったね。てへっ☆」

「ぶっ殺すぞてめぇえええええ!!?」

「何やってんの!?　人が関知しない間に何やってんの!!?」

魔理沙は涙目で萃香にツッコミを入れ、霊夢は思わぬ超展開に二人にツッコミを入れるが、それも致し方ないであろう。誰だってこうされれば正気を失おうというものだ。そして、その嘆きの叫びが呼び水となったのか、タイミング悪く紫が目を覚ます。

「う……ん、私は一体……――――え゛？」

そして眼前の光景を一目見た瞬間にまたも真っ白に漂白されてしまった。これには流石に誰も文句を言えない。そして目の前の壁がふるふると動き、黒い月の周りに漂う靄の様な物が出現し、彼女達を襲う。

「――――っ！」

魔理沙は頭を瞬時に切り替え靄を撃退しようとするが、瞬間、自分の後方に大量のスキマが開いた事を知覚する。

「――――幻巣『飛光虫ネスト』――――!!」

魔理沙のすぐ側を膨大な数のレーザーが通り過ぎ、靄を撃ち抜き消滅させる。ゆっくりと振り返ると、色を取り戻した紫が霊夢の前でどこからか取り出した扇で口元を隠し、嫣然と佇んでいる。

まさか紫はゴキブリを克服したのか!?　魔理沙はついつい希望に目を輝かせるが、彼女を更に上回る程爛々と目を輝かせる紫を訝しく思った。そういえば、紫の口元から何か空気が抜けるような音がする。

「――――ふ、ふふ、ふふふふっふふふ、ふひ、ふふふひひひふふふ……。ふへ、ふひひふふふふふふ、ふっ、んふふふふふふふふ」

（あ、ダメだわこれ）

既に紫の正気は失われていたらしい。目はぐるぐると、例えて言うなら狂々（ぐるぐ

る）と回っている。気のせいか、背後のスキマから覗く目も回っているような気がする。
　魔理沙は背筋を駆ける悪寒の命じるままに霊夢の側へと急ぐ。そして――
「……ネストネストネストネストネストネストネストネストネスト!!!　ネストネストネストネストネストネストネストネストネストネストッッッ!!!」
　紫のスキマから無秩序にレーザーがズビー、ズビーと放たれた。紫の目は完全にイっちゃっており、敵味方関係なしにレーザーが雨あられと襲い掛かる。
「ちょっ!?　紫やめ、待って待って待ってっ、て、あっ!?　うわあああああああ!!!」
　紫よりも前方に居た萃香はゴキブリ共々ネストの雨に晒され、必死に避けている。何回かレーザーが掠っており、何時ものような余裕も見えなくなっている。紫も紫で冷静さなどあるはずもないのだが、何故か霊夢と博麗神社の周囲にだけはレーザーを撃ち込まず、そこは流石と賞賛を送っても良いだろう。だが、それは逆に言えば霊夢と霊夢の側に居る魔理沙は自由を奪われたと言ってもいい。霊夢は未だネストを撃ち続ける紫を見つつ、大きな大きな溜め息を吐いた。
「どーしろってのよ、もう……」
「全くだぜ……」
　彼女達の耳に響くのは、紫の壊れたような笑い声と、萃香の悲鳴、そしてネストの発射音とゴキブリが消滅していく音である。ネストの連打で壁がゴリゴリと削れていく

のには流石と思うが、少々見るに耐えないし、聞くに耐えない。正直に言えば今すぐ耳と目を塞いで何もかも忘れて眠りにつきたい。だが、それをすれば待っているのは暗い未来だけだろう。……未来があるかは分からないが。

動きたくても動けない霊夢達。彼女達は次第に追い詰められていく。主に、味方のせいで――

「あはははひはひひはははははははひはははは!!　あはははははっ、ひはははははははひあはははははははひは!!!」

「ひぃぇえええーーー!?」

現在、人里はようやく混乱から抜け出し、落ち着きを見せていた。

怪我人や病人、老人に妊婦、幼い子供を連れた家族等は命蓮寺へ。それ以外の男性女性、体力に自信のある者達は命蓮寺の墓地の奥から入れる『夢殿大祀廟』に避難をさせた。幸いにもこの時大祀廟には力ある妖怪達や妖精達は居らず、その広さも相俟って避難にはもってこいの場所となっている。

人間達が避難している間、人里の防衛に当たっていたのは数人の少女達であった。

「……っ」

人里を守る炎の壁を形成しているのは藤原妹紅。彼女は全身から滝のように汗を流しているが、炎の壁を維持する為に震える体に鞭を打って力を放出し続ける。

上白沢慧音は人里の住人の為に、そして妹紅を守る為に奔走する。幸運と言うべきか、ゴキブリ達は人里に侵入することに頓着しておらず、ただ上空を漂っているだけに思われる。それでもかなりの数が炎によって焼かれているが、このゴキブリ達の目的が分からないというのは、精神的に来る物がある。

八坂神奈子は聖白蓮・豊聡耳神子らと共にゴキブリ達を迎撃している。流石に超人・聖人・神という超戦力のトリオは凄まじいものがあり、瞬く間に人里の周囲に漂うゴキブリ達の数を減じている。

「この分なら何とかなりそうかね？」

神奈子は涼しげに二人に問い掛ける。二人は頷き、意見を述べる。

「そうですね。もう少しで避難も完了するでしょうし、避難される方々の護衛には命蓮寺（うち）の者達や道士の方々が付いています。このまま何も無ければ問題はないでしょう」

白蓮の言葉に神子は頷く。確かにこのまま何も無いのであれば問題はない。防衛に関しては、だが。

神子は空を見上げ、黒い月を睨む。

（一体何者が、何の目的でこんなことを引き起こしたのか……）

神子の能力『十人の話を同時に聞く事が出来る程度の能力』でゴキブリの十欲を聞こうとしても、相手にそんな物は『存在しない』。話す間、考える間も彼女達はゴキブリ達を消滅させていく。

神奈子は自分と同じくゴキブリ達を容赦なく滅していく白蓮と神子に目をやる。二人から発せられる少々危うげな雰囲気を前に、彼女は意地悪く口元を歪めた。

「おやおや、お二人共随分と容赦がないね」

その言葉に二人は表情を「むっ」と歪め、神奈子に向き直る。神奈子はニヤニヤとした笑みを浮かべているが、それは嫌らしい類のものではなく、悪戯を企む幼子のように可愛らしさが滲んだものだ。

「……分かってて言っていますね？」

「全く、意地の悪いことだ……」

二人は同時に溜め息を吐く。それに対し神奈子はカラカラと笑い、「ごめんごめん」と謝った。彼女達の放つ空気を払拭しようとしたが、その目論みは失敗したらしい。

仏教にしろ道教にしろ、殺生は戒律によって禁じられている。例えそうでなくとも、

彼女達は殺生などしないと言える。だが、今回のこれはある意味虐殺と言ってもいいだろう。では、何故彼女達はこれほど容赦なくゴキブリ達を滅していくのか。

答えは簡単である。『生きていない』のだ。シンプルに『死んでいる』と言った方が分かりやすいか。

彼女達は黒い月から発生した靄を構成するゴキブリ達を見て、既にそれらが死んでいるのを見抜いていた。

では、何故美鈴が自らの能力を以てしてもそれを見抜けなかったのか。気とは生物ならば誰もが持っているもの。生きる為の活力。当然死者に気は宿らず、別の力が宿る。実際には、本当に単純なことなのだ。

ただ、黒い月の中心に居る『何か』が、自らの気を宿らせ操っているだけに過ぎない。ただ、あまりにもその規模が大きすぎて考慮しなかっただけなのだ。ただ、規模が大きいだけに大雑把にしか操れないのか、自由に空を飛んではいるが単調を通り越して無駄な動きしかない。

今も黒い月の内部では夥しい数のゴキブリが産まれながらに命を吸われ、その骸を『加工』され操られて幻想郷を覆わんとしている。それをこの三人は見抜いていた。

神子は未だ黒い月より湧き出る靄を睨む。

道教に限らず、中国には魂魄という概念がある。魂は精神を支える気、魄は肉体を支

える気というものだ。そして、魂魄を用いた術の中に、死体を利用するものがある。魂魄には三魂七魄の数があるとされ、その内魂が天に帰り、魄が肉体に残った物を『キョンシー』と呼ぶのだ。

事実、神子と予てから親交のある『邪仙』霍青娥は『宮古芳香』というキョンシーを操り、可愛がっている。お手軽にキョンシーとして復活させることが出来るほか、芳香の容姿も気に入っているのだ。また、時折生前の事を思い出したり、コントロールから外れてしまった時に起こす『生前の行動』が彼女には好ましかったのだろう。

この通り、魂魄というある種『生命そのもの』と言える物は死体と言えど生物全てに影響を及ぼす。然るに今回のこのゴキブリ達は。魂を吸われ、魄を奪われ、肉体という器を弄ばれているこの異変は――。

知らず、神子の奥歯からギシリと音がする。命を命と思わぬ所業に、深く、静かに怒りを募らせていく。

「他に気付いていそうなのは……亡霊のお姫様かな」

「迷いの竹林の方々もそうなのではないでしょうか？」

「確かに気付いてそうだねぇ」

もうじき避難が完了する。そうなれば次はこちらの番だ。このような事を仕出かした報いを与えねばならない。神子は心の裡で呟く。「待っていろ」と。

黒い月を睨む三人。次の瞬間目に映った物に、しばし目を瞬かせた。
黒い月から現れた何体もの人型の影が、東へと飛んでいったのだ。

幻想郷の東の果てである博麗神社。そこでは目を覆いたくなるような光景が繰り広げられていた。
「あーっはっはっはっはっは!!　あぁあはぁーはははははぁーはははぁっ!!」
「ゆか……っ!　も、やめ……!　ひぅ……っ!?」
狂乱しながらレーザーを放ち、味方に構わずゴキブリの壁を撃ち抜いている。萃香は紫のあまりの壊れ具合に正気を乱されたのか、気付いた時には弾幕の結界に囚われてしまっていた。そこからは悲惨なものである。萃香は能力を使う暇すら与えられず、必死に紫の弾幕を避けるのみ。既に限界も近く、涙目だ。
「がんばれー」
「負けんなー」
「薄情者ーーー!!　ひゃあぁ!?」
霊夢と魔理沙は安全圏からまるで心のこもっていない応援の言葉を投げかけるが、萃

香は彼女達に吠える事しか出来ない。
　萃香の命運もここで尽きるかと思われたが、天はまだ萃香を見捨ててはいなかった。
ここに、救援が現れる。
「紫様ぁぁあああーーーっ!!　ご無事ですかぁあああーーー!?!!」
「紫様ーーー!!」
「おふぅっ!?」
　雄叫びを上げながら紫に飛びついたのは、藍と橙だ。紫の顔は見た目年齢に比べ、かなり豊満な藍の胸に収まり、紫の少々大きめな胸には橙が顔を埋めている。
「紫様ぁ!!　紫様あああ!!」
「うぶ……っ!?　む、ぐ……!?」
　藍は紫の頭をガッチリとホールドし、強烈に胸に掻き抱いている。紫は必死にもがいて逃れようとしたがそれも出来ず、しばらくして全身の力が抜けた。ある意味首吊りである。
「あらあら、そんなに激しくしたら紫が死んじゃうわよ～?」
「幽々子様っ!?」
　そう言って藍から紫を剥ぎ取り、優しく抱きかかえたのは西行寺幽々子。目を回している紫の頭をよしよしと撫でている。

「幽々子様ー！」
「遅いわよ、妖夢」
　更に上空から現れたのは、幽々子にゴキブリ達の対処を押し付けられたために衣服が多少乱れてはいるが、未だ意気軒昂と言える白玉楼の庭師、妖夢だ。妖夢は幽々子を半目で睨むが、仕方ないとばかりに溜め息を吐き、気分を切り替えた。
「……紫様は大丈夫なんですか？」
　妖夢は少々怯えの混じった目で紫を見る。遠目とはいえ、先程までの暴れっぷりではそれも当然だろう。
「大丈夫よ、すぐに目が覚めるわ」
「そうだと良いのですが……」
　藍は幽々子と共に紫を抱き締める。今度は優しく、だ。
「はぁーーー……っ、はぁーーー……っ、はぁーーー……っ」
「これに懲りたら、今度からはちゃんと人の話を聞けよ？」
「ぜ、善処、する、よ……」
　息も絶え絶えに返答する萃香。多少ボロボロになった衣服が合わさり、周囲の涙を誘う。
「……う……ん」

「紫様っ!?」
「紫様……！」
藍と幽々子の胸の間で紫が身じろぎする。どうやらようやく目が覚めたようだ。
「……私は……？」
「大丈夫！　大丈夫ですよ紫様……！」
藍は紫を抱き締めながら事情を説明する。紫は色々と思い出して顔色を白くさせたが、左右から感じる温もりのお陰で正気を保てている。
「それより、申し訳ございません。ゴ○ブリ達に道を阻まれたとはいえ、救援が遅れてしまいました」
「気にしなくてもいいわ。私はこうして無事なんだし、後はこの異変を解決してからにしましょう」
「……はい」
紫達は改めて『壁』を見る。紫の暴走によって八割程が消失しており、その圧倒的な攻撃力を恐れたのか、周りのゴキブリ達も動きは無い。
「これを片付けた後は、黒い月か……。全く、気が滅入るぜ……」
魔理沙は手に持った『ミニ八卦炉』を玩びながら呟く。それに対しては霊夢が答えた。
「そりゃ皆同じでしょ？　さっさと解決して、さっさと寝たいわ、私は」

欠伸をしつつの霊夢の言葉に皆が同調する。一つ呼吸を置き、突撃せんとしたところで、中心から左右に『壁』が割れた。

「……っ!?」

出端を挫かれる形となったが、皆に油断は無い。――紫だけはガタガタと震えているが――ただ、壁が割れた先にいくつかの人型が見えた。

それは、黒と茶を混ぜたような色をしていた。頭部には人間と同じように目、耳、鼻、口があり、額からは触角が生え、髪と思しき物体は虫の閉じた羽を連想させる。体は甲虫のように体節で分けられ、それは人間の構造とよく似ていた。

目に入った瞬間、背筋に怖気が走る。そして、原因不明の強烈な嫌悪感も。

人型達が大きく口を開けた。

「っ!?」

「これは……!?」

左右の壁、周囲の靄、それらが強烈に圧縮され雫となり、人型達の口内へと導かれる。口内に達したそれを人型は何の躊躇もなく飲み干し、胃に溜まったガスを盛大に吐き出した。

「……暴食の末に隠しもせずにげっぷとは、随分と下品なことね……」

「暴食に関してはあんたが言うなって感じだけどね」

人型の行為に眉を顰める幽々子は、霊夢からのツッコミをさらりと流し、懐から扇を取り出す。

と、ここで人型が口を痙攣させる。否、それは痙攣ではなかった。『それ』は、産声を上げようとしていたのだ。

「……ぁ……オ……！」

一体だけではない。全ての人型が次々に口を開く。

「しン……ぉ……!!」
「か……ぉ……!!」
「し……ン……か……ヲ……!!」
「Ｓｉ……んか……ヲ……!!」
「しンカを……!!」
「シんかＷｏ……!!」
「しんＫａお……!!」
「シンカを……!!」
『シンカ……シンカ……シンカ……シンカ……シンカ……シンカを……!!』

――シンカをおおおおおおおおおおおおお――――!!!

人型が一斉に吠え、空気がビリビリと震える。意味の無いことを叫びながら、人型達は突進してくる。霊夢達は散開し、それぞれを迎え撃つ。

人型は見える範囲に十体程存在している。自分達は全部で八人。その内紫に藍と幽々子がくっついているので、厳しい戦いになりそうだと魔理沙は舌打ちを一つする。

だが、伊達に普段から反則じみた強さを誇る強大な妖怪達と弾幕ごっこをしていない。人型の攻撃を避けながら、彼我の力量の差を推し量る。

「へっ！　腕力は強そうだが、当たらなけりゃどうってことないぜ！」

魔理沙は箒を巧みに操り一定の距離を置きながら弾幕を張る。周りを見てみると皆も同じように戦っているようで、早々に方が付きそうだ。そう思っていたのだが……。

「うあああああっ!?」

「にゃーーーっ!?」

それぞれ別の方向から悲鳴が響く。その悲鳴を上げているのは――。

「妖夢っ!?」

「ちぇえええーーーん!?」

「え、ちょっ!?　二人共!?」

幽々子と藍は直ぐ様紫から離れ、それぞれの従者の下へと急行する。唐突に置いてけ

ぼりを食らった紫は二人を呼び止めようとするが、その時には既に二人は言葉で止まるような状態ではなかった。

「シィィアアアアアアアアア!!!」

「――――ひっ!?」

二人を呆然と見送ってしまった紫は、近付いてくる人型に気付かなかった。口から出るのは生理的嫌悪感と恐怖心からくる、引きつった呻きのみ。彼女の心に深く刻まれている絶対的な恐怖心は、それこそ彼女が思っている以上に深く、大きい。故に人型が振り上げる右腕に気付く事もなく、紫の目の前はどんどんと白く染まっていく。

それを止めようとしても、弱りきった心ではそれすら成すことは出来ず、紫の意識はそこで闇に呑まれていった。

番外編・中編

『黒い月より来たるモノ』

～了～

番外編・後編

本当に何てことのない理由だった。『それ』は、探し物を見つける為の手駒が欲しかった。だから、『それ』は山の中に居た一匹のゴキブリに力を与えた。
自らの『能力』を以て。

妖夢と人型は地面に降り立ち、戦っている。妖夢は一定の間合いを保ちながら刀を振るい、突っ込んでくる人型に弾幕を浴びせる。だが、人型の外殻は思いの外堅く、弾幕が効いている様子はない。
ならば、と妖夢は踵を強く踏み込み、爆発的な推進力を発揮して人型の眼前に高速で移動。上手く虚をつく事が出来た。妖夢はそのまますっと、人型の首を紙を断つ様に刎ねる。彼女の経験上、首を切断されて生きていた人間も、妖怪も居なかった。
それが、油断となった。

「――なっ!?」

残心を解いてはいなかったが、首を刎ねた人型がそのまま自分の腕を掴み、体を無理に引き寄せるなど考えられなかった。

「うあああああっ!?」

力任せに体を振り回され、地面に叩きつけられる。その衝撃に一瞬視界が白く染まり、肺の中の空気が一気に押し出される。

何故、と考える暇も無い。人型は首を失ったというのに未だ活動を続けており、妖夢を渾身の力で踏みつけようと足を上げている。

妖夢はそれを避けようとするが上手く体に力が入らず、動けない。妖夢の悲鳴を聞きつけた幽々子が助けに入ろうと必死に向かうが、幽々子自身のスピードでも、弾幕のスピードでも間に合いそうにない。

「妖夢ーーーっ!!!」

幽々子に出来たのは名前を叫ぶことだけだ。人型の足が振り下ろされ、妖夢の頭蓋を踏み砕かんとしたその瞬間。

「妖……っ!?」

幽々子の視界の隅に、赤い光が灯った。

「……っな!?」

それは刹那の間に空間を横断し、人型の体を飲み込んだ。強大な力の奔流が過ぎ去り、残った物は人型が軸にしていた左足だけだった。どうやら他の部分は全て消滅したらしい。

「今のは……『グングニル』……？」

「妖夢っ!!」

「ゆ、幽々子様!?」

妖夢は先程の赤い光の正体に考えを巡らせようとしたが、それは幽々子によって遮られた。幽々子は妖夢を抱き締め、しきりに体を触り、大事がないかの確認をする。

「どうやら間に合ったか」

幽々子の過保護ぶりに妖夢が辟易としてきた頃に、赤い槍が飛来した方角から声が届いた。蝙蝠の様な翼を広げたその姿は、容易に悪魔を想像させる。

「やはり貴女でしたか、レミリア・スカーレット。助かりました」

「私からもお礼を言うわ。ありがとう、レミリア」

「何、気にするな。見ていて気持ちのいいものでもなかったしな」

二人の感謝を軽く流し、レミリアは残った人型の左足を矯めつ眇めつ眺める。少々気になったのか、断面から垂れる血の匂いを嗅ぎ始める。しかし気に入らなかったようで、顔をしかめ、魔力球により左足も消滅させる。

「……それにしても、首を刎ねたのに何故人型は生きていたのでしょうか？」
「う～ん……。ゴキブリは首が取れても生きていられるって聞いたことはあるけど……」
妖夢と幽々子は人型の圧倒的な生命力に疑問を覚える。しかしレミリアは最早人型に興味を持っていないのか、小指の爪で耳孔をほじくっている。咲夜のお陰で綺麗であった。
『――――っ!?』
少々和んだ雰囲気の中、突如大地が震える様な重低音が数回響く。その方角に目をやると、何かが途轍もない勢いで空に吹き飛んでいくのが見えた。
「今のは、人型……？」
「ほう、中々やるもんじゃないか。ウチの門番も」
「え？」

時間を少しだけ巻き戻す。美鈴はレミリアからの指示に従い、先行して霊夢達の救援に向かっていた。

紅魔館周囲の靄は殲滅し終えたのだが、黒い月からは相変わらず靄が発生し、またも紅魔館を覆わんと迫る。レミリア達はうんざりとしながらも迎え撃とうとするが、突如靄の半分は進路を変え、猛烈な勢いで東へと流される。博麗神社に向かっていると、レミリアは何故か確信出来た。嫌な予感がしたレミリアは美鈴を先行させ、救援に向かわせる。

靄を追う美鈴だが、道中でもゴキブリ達の妨害に合い、時間を取られてしまう。空には黒い月の他に、もう一つ黒い球体が出来上がっていた。幸いと言うべきか否か博麗神社からは幾条も光芒が迸っており、ゴキブリ達を容易く消し去り、もう一つの球体も削っている。しかし、それも数分の間。博麗神社が目視出来る距離にまで近付いた時には球体は割れ、消失した。

「一体何が……？」

呟くのは疑問。今もそうだが、黒い月が現れてからこう考えなかった時はなかった。今回の異変は余りにも意図が読めない。美鈴は暫し熟考するが、結論は結局『分からない』であった。

「ま、私は頭脳労働担当ではなく肉体労働担当ですし？　別に頭が悪いってわけじゃありませんし？」

それは何に対する言い訳なのか、美鈴は明後日の方を向きブツブツと呟いている。気

付けば博麗神社は目と鼻の先にまで迫っている。
「にゃーーーっ!?」
そこで、幼い少女の悲鳴を聞いた。
（今のは確か、橙っていう子の……！）
美鈴は素早く周囲に目をやり、橙と人型の何かを発見する。その人型は倒れている橙に殴りかかろうとしており、左手を大きく振りかぶっていた。
人型は美鈴に気付かず、美鈴の方へと体を開いている。美鈴は意識を集中させる。
（最も『気』が集中しているのは……頭部、胸部、腹部……!!）
美鈴は腹をへこませながら大きく息を吸う。息を止め、吸った息を下腹部へと追いやり、押しつぶす。そして、下腹（へそ）のみを左右に引き伸ばす様に一気に収縮させ、息を漏らす。
「ふんっ！」
――爆発呼吸。
それと同時に足を強く踏み出す動作と沈気を協調させる。結果、強く踏み出した瞬間に大地を震わせた様な重低音が響く。
――震脚。
そこから地面を氷の上を滑走するかの様に移動し、瞬く間に人型との距離を『0』に

する。八極拳の歩法、活歩。

人型がようやく美鈴の存在に気付くが、もう遅い。美鈴は既に技を繰り出している。腕を左右に開き、身体を上下左右に伸長させ、掌底による打撃の瞬間に震脚。十字勁によって増幅された威力は腹部の『気の集中点』を容易く粉砕した。

――打開。

腹部を貫く衝撃に、人型は体をくの字に曲げさせられる。その瞬間には美鈴は身を回転させていた。肩と背中の大面積が震脚と同時に人型の胸部へと叩き込まれる。その衝撃も体を貫通し、胸部の『気の集中点』二つを貫いた。

――貼山靠。

二度の衝撃と三カ所の『気の集中点』の破壊により、人型は地面に前のめりに倒れようとする。それは自らの意志ではなく、『神経節』を壊されたからなのだが、美鈴は容赦をしない。倒れくる人型の顔面の中心に、縦拳を斜め上へと叩き込む。震脚とほぼ同時に放たれたそれは、足からの力を背中の筋肉で増幅し、全身の力を全くのロスもなく伝えきる。その威力は凄まじく、頭部を一瞬で破砕し残った体を暴風に晒される小枝の様に空へと吹き飛ばした。

――揚炮。

昆虫には、『神経節』という物が存在する。それは頭部、食道下、胸部、腹部の四つだ。

頭部神経節はそのまま脳と言える。各神経節は感覚情報処理や運動制御、記憶・学習の場として働き、脳が統合中枢として機能する。つまり、神経節とは体の各部に独立して存在する『脳の様な器官』なのだ。

ゴキブリを含む虫が首が取れても活動出来るのはこの神経節が存在するからであり、当然人型にもそれは存在していた。美鈴はそれを『気の集中点』として捉え、全てをピンポイントで破壊した。

流れる様に腹部、胸部、頭部を破壊した連続攻撃。これが美鈴の絶招の一つ、熾撃『大鵬墜撃拳』――――!!

美鈴は吐息と共に気を静め、ゆっくりと橙へと振り向く。

「大丈夫?」

柔らかく微笑み、橙に問い掛ける。それは橙の緊張を解し、安心を与えるものだった。

「はい、大丈――――」

ぶ、と答えようとしたその瞬間、美鈴の姿が掻き消える。

「橙に何をするか貴様ぁあーーーっ!!」

「ぶぇえーーーっ!?」

何故ならば空から物凄い勢いで繰り出された藍のドロップキックによって、吹き飛ばされたからだ。華麗に着地を決めた藍は吹き飛んだ美鈴を指差し、叫ぶ。

「貴様、紅美鈴!!　いくら橙が可愛いからといって、無体を働こうとは不届き千万!!　この私が塵も残さず消滅させてやる!!」

藍は何かを盛大に勘違いしていた。へたり込んでいた橙が、美鈴に襲われていたように見えたのだろうか。

「ち、違います!　違うんですよ藍様ーっ!」

「安心しなさい、橙。泣き寝入りなど、絶対にさせないからな」

「だから違うんですって!」

橙は藍に、美鈴に助けられたことを事細かに語った。話を聞くにつれて藍の顔色は青くなっていき、全てを聞き終えた後は全速力で倒れ伏す美鈴に駆け寄った。

「本当にすまんっ!　橙の命の恩人に何たる無礼を……!!」

「ふふ……、良いんですよ。所詮私はこういう役柄なんですよ……」

美鈴の双眸からは、熱い液体が止め処なく流れ出ていた。

何やかんやありまして、美鈴達の下には幽々子と妖夢、紅魔館のメンバーが集まった。

「しかし、私達より大分早く出たのに、ここに着いたのは私達と同じくらいだったんだな」

「普段昼寝ばかりしているから、体が鈍ったのではないでしょうか?」

紅魔の主従の言葉のナイフが美鈴の心を刻んでいく。先程とは別の涙が出そうだ。

そんな美鈴を哀れに思ったのか、小悪魔が少々引きつった顔で話題を変えようと口を開く。

「と、ところで他の皆さんは大丈夫なのでしょうか？　どうやら人型は結構強いみたいですし……」

何気なく放たれた小悪魔の言葉。だが、それに劇的な反応を示す者が二人存在した。

「あ゛」

二人の口から同時に漏れたのは、そんな単語。そこから先はとんでもない慌てぶりを披露し始める。

「あああ、紫様!?　紫様ーっ!!　な、何故、何故私は紫様を忘れて……っ!?」

「ゆ、ゆかゆゆ、ゆか、ゆか、ゆかり……!　ゆかり、ゆか、ゆゆゆか……っ!?」

「……早く助けに行きなさいよ」

途端に頭を抱えてカオスな混乱を撒き散らす二人だったが、パチュリーはただただ冷静に二人に突っ込んだ。「それもそうだ」とばかりにキッと紫が居るであろう空間を睨むと、そこから猛烈なスピードで鉄の塊が降ってきていた。

「どうおおおぅ!?」

少女にあるまじき叫びを上げながらそれを回避する乙女達。鉄塊はそのまま地面とぶつかり、轟音を立てる。藍と幽々子は見覚えのあるその鉄塊に、驚きの声を上げる。

「これは、紫様の電車……!?」
「というか、人型が思い切り轢かれてたわね」
電車の運転席正面の窓に、人型がへばり付く様な形で轢かれていた。当然今は原型のないミンチとなり果てているだろう。
皆はゆっくりと電車が降ってきた方向を見る。そこには、再び正気を失い、先程よりも狂った馬鹿笑いを響かせる幽鬼が居た。何か眼が『ビカー』と光っている。
『うわぁ……』
二人は呟いてそっと目を逸らす。それを見たパチュリーは二人の頭を叩き、「さっさと正気に戻しなさい」と促す。
藍と幽々子は折れそうになる心を必死に保ち、紫の下に飛ばんとする。……だが、紫の周囲にスキマが開き、そこから覗く『眼』が怪しく閃いた。
「皆逃げろーーーっ!!」
藍は橙を抱きかかえて猛ダッシュ。幽々子も妖夢を抱きかかえて猛ダッシュ。他の皆は二人の行動に呆気にとられ、初動が遅れてしまう。
……そして、再びのネストの雨。というより最早嵐である。
「うわあああああっ!?」
それは、今度こそ無秩序に降り注ぐ。宙に浮いていようと、地に足を付けていても、誰

彼構わず無遠慮に破壊の嵐が蹂躙する。
　魔理沙は自分の正面に居た人型がその光景を遮る壁となった為に、人型を撃ち抜いたレーザーに気付く事が出来ず、彼女が空を飛ぶ際に使用している箒を破損させてしまう。
「しまっ!?」
　バランスを崩し、体勢を立て直そうとするも全ては遅かった。既に眼前には無数の光芒が迫っている。それに飲み込まれようとした時、小さな救援が現れた。
「戦符『リトルレギオン』!!」
　背後から聞こえてきたのは少女と思われる者の声。武器を持った小さな人形達が、魔理沙に迫る光を弾く。魔理沙は驚くまま何者かに抱えられ、パチュリーがいつの間にか形成した結界の中へと連れて行かれた。
「ふう……。大丈夫だった、魔理沙?」
　魔理沙を助けた少女が問い掛ける。傍らには小さな人形達が浮かんでいた。
「ああ、助かったぜ。アリス」
　救援に現れたのは、魔理沙と同じ魔法使いアリス。話を聞くと、突如発生した異変を解決しようとしたが、自分一人ではどうにもならず魔理沙や霊夢の力を借りに来たらしい。

「多分、あの黒い月をどうにかすればいいと思うのだけど……」

三人の魔法使いは考える。どうすればあの黒い月を破壊出来るのか。一番確実なのは魔理沙のマスタースパークやレミリアのグングニルといった、大出力の攻撃で消滅させることだが、あれほど巨大な物を破壊するのにどれほどのエネルギーが必要なのか……。

懸案事項はそれだけではない。今も暴風雨の如く辺りを蹂躙している、スキマからの光のシャワー。パチュリーの結界も耐えるだけで精一杯であり、移動することもままならない。普段の紫ならば霊夢は無事なのだが、今は霊夢すら例外ではなくなっていた。

「ちょっ!?　紫、落ち着いて……！　きゃあああああっ!!?」

空中で人型と戦っていた霊夢は、横合いから閃光が走った瞬間、勘を頼りに地面へと急行する。振り返った時には人型は無数の光に貫かれ、僅かな残滓を宙にばらまくだけとなっていた。それを成した光が、自分にも迫る。

霊夢は何とか紫の正気を取り戻させようと光を避けつつ必死に呼び掛けるが、返ってくるのは馬鹿笑いとレーザーのみ。嫌らしいことにレーザーは霊夢の逃げ場を徐々に削っていく。

「こんの……!!」

今、霊夢はこの異変が起こって以来、初めて紫に本気の怒りを覚えた。ギリギリと奥

歯が鳴り、その顔が般若の様に歪んでいく。
「いつもは胡っ散臭い笑顔で偉そうなことをベラベラと喋る癖に、たかがゴキブリに対して泣くわ叫ぶわ気絶するわ暴走するわ……！　いいいいいい加減にしなさいよ紫ィィイィィーーーーー!!!」
――〝鬼〟が、吼える。瞬間、幻想郷に存在する全ての力有る者が戦慄いた。
霊夢は足下に陰陽玉を出現させ、そのしなやかな足を思い切り振り上げる。
「陰陽玉を……!!」
紫の姿を見据え、渾身の力を込めて、陰陽玉を蹴り飛ばす。
「食うらぁいなさぁあああぁぁぃ!!!」
それはまるで音の壁を突破したかの様な爆音と衝撃波を撒き散らし、恐ろしいまでの速度で紫に迫る。
――嗚呼、何故この時霊夢は足元を確認しなかったのであろうか。それをしてさえいれば、この悲劇は起こらなかったというのに。
「ん……？　霊夢、足元に陰陽玉が転がってるよ？」
「え？」
萃香の言葉に思わず足元を見る霊夢。なるほど、確かに陰陽玉は足元をコロコロと転がっている。では、霊夢は一体何を蹴ったのか。

「……っ!?」

萃香は見た。紫へ向かって突き進む物を。また、力有る者達も自らの恐怖を刺激する怒気が発せられる方角を無駄に良い視力で見た。

「紫ーー！　避けろっ！　避けるんだーーーっ!!」

「紫ーっ！　そこから逃げてーーーっ!!」

霊夢達は必死に叫ぶ。飛んでいった物を紫が見たら、それこそ今まで以上のトラウマを紫の心に刻みかねない。

紫の下に飛び行く物。それは、霊夢に蹴り飛ばされたことにより形がひしゃげていた。それには、虫の様な触角が生えていた。棚引く髪は、昆虫の羽を思わせる物だった。

――それは、妖夢が斬り落とした人型の首だった。

今までの紫に言葉は通じなかった。だが、一体どうしたことか。紫は、霊夢達の言葉に反応し、振り向いてしまった。

「――え？」

紫の眼に正気が戻る。だが、正気に戻らなかった方がどれだけ良かったか。

紫の眼前にはひしゃげた、片方の眼球が飛び出した人型ゴキブリの生首が映っていた。それだけではない。人型の首はまだ生きていたのか、紫を食わんと大口を開けていた。

何という運命の悪戯だろうか。

――紫と人型の首の唇が、深く深く重なり合ってしまっていた。互いに口が開いていたせいか、舌も絡んでいる。

「――――ッツッ!!?!?」

それを見た者全てに、全身を貫く様な衝撃が走る。だが、紫を襲う衝撃はそんな物ではなかった。

あまりの衝撃に、脳の思考力が加速。あらゆる思考が駆け巡り、浮かんでは消え、消えては浮かぶ。その弊害か、加速された意識はほんの一瞬の出来事を何秒にも、何分にも引き伸ばし、紫に極上の辛苦を与える。

――――これは何？　これは人型。その生首。それが何故飛んできたのかしら。そういえばほんの一瞬だけ霊夢の顔が見えたけれど、一体どうしたの？　酷く狼狽していた様だけど。ああ、そうそう。霊夢の足元に陰陽玉が転がっていましたわ。もしかして、陰陽玉と間違って生首を私に向かって蹴り飛ばしてしまったのかしら。……ああ、それでこんなにも顔がひしゃげて、眼球が飛び出しているのね。よりにもよってこんなにスプラッタにしちゃうなんて。うふふ、霊夢ったら意外に力も強いのね。もし霊夢に抱き締められたら、私の様なか弱い美少女は、忽ちまいってしまうかもしれませんわね。ああ、霊夢に組み敷かれ、唇を重ね合うのならば文句などは無かったというのに。こんな

のが相手だなんて。どうせ男性とするのなら、別の方としたかったですわね。別に格好良くなくてもいい。情けなくてもいい。強くなくてもいい。ただ私を受け入れ、欲し、求め、側に居てくれて、愛してくれる男性となら……。ふふふ、私もまだまだ夢見がちということなのかしら。そんな人、居るはずが無いというのに――。

紫の首は衝突した人型の勢いに負け、後ろへとはね飛ばされる。そのままの勢いでぐるんぐるんと周り、地面に墜落。……ぴくりとも動かない。

止まっていた周囲の時間が動き出し、霊夢の悲痛な叫びが木霊する。

「紫いいいいいいっ!!」

霊夢は紫に駆け寄り、その腕で抱き寄せる。

「ゆ、紫、ごめっ、ごめん！　私の、私のせいで……！」

霊夢の目には涙が浮かんでいた。同じ女として、あんな物と口付けを交わさせてしまったことに、強烈なまでの罪悪感が宿る。

紫はゆっくりと瞼を開く。霊夢の手を取り、時間をかけて微笑みを作る。唇が僅かに上下し、か細いながらも言葉を紡ぐ。

「私は、この幻想郷が、大好きでした……」

そして、紫はそれきり動かなくなる。

「ちょ……っ。紫、紫っ!?　いくら何でもそういうのは止めてほしいんだけど!?」

まるで辞世の様な言葉に霊夢はギョッとし、腕の中の紫を揺する。そんな霊夢の肩に魔理沙は手を置く。

「大丈夫。気を失っているだけだ」

「いや、でも……。大丈夫って……」

霊夢の顔がくしゃりと歪む。自分の行いのせいでこうなったのだ。無理もない。だが、ここで霊夢の下へと集まった皆は、口を開く。

「おのれ……、ゴキブリ共め!!」

「紫様を、こんな目に……!!」

「人型さえ現れなければ、こんなことには……」

皆、一様にゴキブリ達へと責任を転嫁させる。流石に今の霊夢を哀れに思ってのことなのだろう。藍と幽々子に至っては紫に縋りついて泣いていたが、それでも霊夢のせいではないと言ってくれる。皆に慰められ、霊夢は紫を抱えたまま立ち上がる。思っていたよりも、ずっと軽かった。

皆の優しさが霊夢には痛かったが、これは自分のせいなのだ。紫が起きたら誠心誠意謝ろう。出来る限り優しくしよう。その為にも今は、あの黒い月を消し去らねばならない。

「どうやったら、あれを攻略出来るかしら?」

霊夢の言葉に、皆は黒い月を見る。
「ここに来る途中で『グングニル』を試してみたが、完全に受けきられた」
レミリアは博麗神社に到達する前、黒い月に最大出力でグングニルを放ったのだが、月の周りの靄、そして月から『生まれ来る』幾千幾万のゴキブリの壁により、流石のグングニルも威力を保てず霧散してしまった。
「……フランの能力は？」
「対象が多すぎて……」
「そう……」
霊夢は二人の答えに深く思考を巡らせる。そこに、パチュリーが前に出る。
「さっき魔理沙とアリスと話したんだけど……地脈の力を使おうと思うの」
「地脈の力を？」
その場の全員がパチュリーに注目する。
「幻想郷に存在する地脈には、非常に強力な力が流れているの。それを抽出し、収束し、撃ち出せば……恐ろしい威力になる」
パチュリーは「むきゅー」と鼻息荒く語る。確かにパチュリーの言う様に撃ち出せれば問題は無いのだが……。
「どうやって抽出して、どうやって収束して、どうやって撃ち出すつもりだ？　それだけ

の無茶、私でも出来んぞ」

　否定的な意見を出すのは藍だ。如何に最強の妖怪の代名詞『九尾の狐』と言えど、地脈から莫大な力を抽出し、それを完全に収束し、ロス無く撃ち出すことなど不可能なのだ。そんなことをしようものなら、黒い月より先に自らの体が反作用で吹き飛んでしまう。それに対し、パチュリーはニヤリと笑う。

「何も一人だけでやらなくてもいいのよ」

「何？」

　パチュリーは両手を広げる。

「ここには、こんなに大勢居るのよ？　それを利用しない手はないわ」

　それは、藍にとっては盲点だった。いつも主に言われている通り、藍はやや思慮が浅い嫌いがある。今回も地脈に関して自分を中心に考え、それを口に出してしまった。これではまた、紫にお仕置きを受けるかも知れない。

「……では、どうするんだ？」

「まず、私が地脈を特定、その力を伊吹萃香に萃めてもらい、私が抽出」

　パチュリーは人差し指を立てる。次に、中指を立てた。

「次は抽出した力を計算に強い八雲藍とアリスが収束」

「……ふむ」

最後、薬指を立てる。
「そして、収束した力を魔理沙のミニ八卦炉を使って撃ち出す。……確か、霊夢も集めた力を撃ち出せるんだっけ？　なら霊夢も一緒に」
「いや、まあ出来ないことはないけど……」
パチュリーの言葉に霊夢は歯切れ悪く答える。いくら何でもぶっつけ本番で成功出来るとは思えなかったからだ。
「どうせやらなきゃ幻想郷が大変なんだ。だったらさっさとやっちまおうぜ」
魔理沙は不敵に笑い、霊夢の背中をぽんと叩く。魔理沙は普段危ない橋を渡ろうとはしない。だが、今回は違うようだ。
「ほれ、向こうもこっちに狙いを付けたみたいだぜ。ごちゃごちゃ言ってる暇はねーぜ！」
見れば、確かに靄がこちらに向かって来ている。中には何体かの人型が混ざっているようだ。それに対し、レミリアが前に出る。
「少々不満だが、露払いは任せておけ。その後はお前達に任せる」
レミリアはゆっくりと空へと浮かぶ。それに続き、フランや咲夜達幽々子と妖夢達も同じく浮かぶ。
「ついでにこの子達にも頑張ってもらおうか。妖鬼―疎―！」

萃香は自分の髪を抜き、息を吹きかけ小さな分身をいくつも作り出す。その分身達は萃香の「玉砕しておいで」との言葉にショックを受け、キーキーと文句を言っている。だが術者本人には逆らえないのか、涙を流しつつ靄へと向かって行った。

「……鬼だな」

「そうだけど？」

藍の皮肉にきょとんとした顔で返す萃香。その顔には何ら含む物が無く、素であることが分かる。そんな様子に幽々子はくすりと笑い、懐から扇を取り出し、広げて口元を隠す。

「さ、私達も行くわよ。まずは私が……」

幽々子は扇を靄へと向ける。彼女の周囲から、色鮮やかな蝶が数多出現する。

「さあ、お行きなさい。死蝶『華胥の永眠』……！」

幽々子から放たれた蝶は、羽ばたきながら靄へと急行する。ただの蝶と侮ってはいけない。それは幽々子の能力の化身。即ち、『死を操る程度の能力』の具現。蝶に触れた靄は片端から『消滅』していく。

（……やはり、この子達は）

その様から、幽々子は確信した。やはり、『純粋な生命』ではなかった。だが、思考に耽る暇は無い。靄を囮とし、人型が蝶の群れを突破してきた。それを睨み、幽々子は力

強く彼女達の名を呼ぶ。
「妖夢、橙！」
「はいっ!!」
「にゃっ！」
　橙が回転しながら人型に体当たりする。その人型を足場に次の人型へ。それを足場に次の人型へ。目にも留まらぬ猛スピードで繰り返し、人型を翻弄する。そして、人型が橙に気を取られた瞬間、斬撃が閃いた。
　それは橙を遥かに超えるスピードで人型を切り刻み、物言わぬ残骸へと変えていく。最後に人型の正中線を大上段から切り裂き、全ての神経節を断つ。
「人鬼『未来永劫斬』……!!」
　妖夢の周囲に人型の欠片が舞い落ちていく。その中、欠片を払い背後から妖夢に迫る影がある。人型の一体が拳を握り締め、渾身の突きを放とうとしていた。ただ、妖夢は一言告げる。
「流石ですね、美鈴さん」
　その言葉が切欠になったのか、人型の動きが止まる。体内に打ち込まれた衝撃が内部で増幅、やがてその体を内側から爆砕せしめ、また一つの骸を作った。それは、熾撃『大鵬墜撃拳』と同様、美鈴の絶招の一つ。

「華符『彩光蓮華掌』……。中国拳法っていうのは、本当に不思議よね」
「咲夜さんのナイフ術程ではありませんよ」
並んで現れたのは美鈴と咲夜。咲夜はナイフでジャグリングをしており、彼女に近付く人型や靄はいつの間にかナイフで滅多刺しにされている。能力で時間を操っているのだろうが、端から見れば悪夢以外の何物でもない。
「ではお嬢様方、どうぞ」
「ああ、任された」
二人の上空に陣取るのは二鬼の少女。暴力的なまでの魔力と存在感を撒き散らし、黒い月を睨む。
「せっかくだ、ど派手に決めようかフラン」
「うん、お姉様」
レミリアその手に魔力球を。フランはねじ曲がった杖を持つ。
「スピア・ザ……!!」
魔力球を握り潰し、強大な力を宿す槍と為す。
「禁忌……!!」
杖に炎を宿し、強大な力を宿す剣と為す。
吸血鬼の姉妹は同時に振りかぶり、力を解放する。

「グングニル!!!」
「レーヴァテイン!!!」

互いに神器の名を冠する力を撃ち放つ。それは点と線の軌道で黒い月に迫り、敵を滅ぼさんと唸りを上げて突き進む。だが、そうはさせじと黒い月の周囲に漂う靄が二つの神器に殺到する。それは触れた端から消滅していくが、黒い月より生み出される、無限とも思える靄の生成が殲滅を阻んだ。

黒い月内部より生み出されるゴキブリ達。その何割かを食らい、また生み出し、加工して靄を形成する。中心部に存在する数十、数百のゴキブリ達がそれを成している。その速度は人知を超越し、毎分数万匹と言ったところか。中でもそのサイクルの中、突然変異的に現れた人型は嬉しい誤算と言えよう。今までの自分達より強く、大きく、また知恵もある。

しかし、何も最初からその様な能力があったわけではない。かつて山の中で出会った、『男』から授けられたのだ。そのゴキブリは、新たな産声を上げた。

『男』の力によって遥か過去から停滞していた自分達の種族が、新たな道を歩く事が出来るようになったのだ。

『男』は約束してくれた。『探し物』を見つける事が出来れば、自分以外も『進化』させてくれると。

『私』は『彼』の役に立ちたい。この幻想郷を覆えば、探し物を見つけられるだろう。だから仲間を集めた。仲間と『力を合わせ』、新たな『種』を生み出し、宙を行く『巣』を作ったのだ。

巣の中で繁殖を繰り返す内、自分には無い新しい能力を持った者が生まれてきた。巣を守る靄も、人型も、新しい種族なのだ。生成の速度も上がり、あらゆる力も我らの『生命』には通じない。

進化だ。あの『男』が与えてくれた『進化』のお陰だ。だから役に立ちたい。新たな進化の為に、我ら種族の為に。それを邪魔する者は葬り去ろう。我らの仲間を殺し回る『奴ら』を倒そう。

奴らの力では我らには勝てない。事実、奴らが放った『槍』も、『剣』も、全てを受け止めたのだ。巣を守る『靄』は完全に消滅してしまったが、すぐに生み出せる。我らの『生命』と『進化』の前に、奴らは負けるのだ――。

「さあ、露払いは済んだな」

レミリア達は地面に降り立ち、背後を振り返る。その目線の先には、眩いばかりの光

を放つ球体が存在していた。萃香にパチュリー、藍にアリスは全身に汗を滲ませ、立っている。目線は言わずもがな、黒い月だ。

「おう、ご苦労さん」

魔理沙は地脈の力を集中させたミニ八卦炉を既に構えている。力は今にも弾けそうで、抑えることは想像を遥かに超えて難しい。

それでも、魔理沙は笑ってみせる。

「へへ、お前らに恨みは無いんだが……、あ、やっぱあったわ」

「あら、あんたもなの？」

魔理沙の言葉に、寄り添うように立つ霊夢が問い掛ける。

「おう。楽しみに取っておいた大福を食われた」

「私もおせんべいを食べられちゃったのよね」

二人は同時に噴き出した後、黒い月を睨む。

「ま、食いもんの恨みは恐ろしいってことだ」

「そーゆーこと！」

魔理沙の持つミニ八卦炉が、その機能を解放する。ついに火を吹く時が来たのだ。彼女の放つ魔砲、その名は――――!!

「ファイナル……!!　マスタースパアアーーーク!!!」

瞬間、光が爆ぜた。

魔理沙が撃ち出した魔砲は夜を終わらせ、昼と変わらぬ明るさを幻想郷に齎した。

黒い月を守る靄が存在しない今、その光は黒い月を飲み込まんと迫る。だが、ここで黒い月に異変が起こった。

「黒い月から……靄が!?」

黒い月内部より生み出される靄の速度が、この時に最高にまで早まった。その速度は黒い月を飲み込もうとする魔砲と拮抗し、逆に侵食してくる程に。それが、黒い月の中枢たる一匹のゴキブリには痛快だった。勝つのは自分達だと、そう思ったのだろう。確かにこのままなら魔理沙は負けるだろう。そう、魔理沙一人だけならば。

霊夢がゆっくりと浮かび上がり、魔理沙のすぐ上で停止する。霊夢の周囲には輝く七つの陰陽玉が浮かび、力の解放を今か今かと待ちわびている。

「……」

霊夢は目を瞑り、黒い月へと向かって手を伸ばす。そして、力を解放した。

それは魔砲に沿って進み、重なり、混ざり、極光となって突き進む。靄など歯牙にも掛けず、やがて極光は黒い月へと辿り着く。

――何だ、この光は。

瞬く間に黒い月の外殻を撃ち抜き、全てを飲み込み消滅させる極大の光。

――何だ、この光は!?

一匹のゴキブリは、進化した知能を以て光の正体を探る。だが、当然それが何かなど分かるはずもない。『それ』を完全に視界に収めた瞬間には、体も魂も何もかも、消滅していたのだから。

「……終わったか」

光は幻想郷中に満ち、今回の原因たる全てのゴキブリ達を消し去った。魔理沙は溜め息と同時に呟き、ミニ八卦炉を下ろす。見た目にもくたびれたそれは、しばらく使い物になりそうもない。近い内に製作者に見せなければならないだろう。

魔理沙が周りを見渡すと、皆が地面に座り込み、重い息を吐いていた。異変の規模が規模だけに、かなり疲弊しているようだ。

「……紫は大丈夫?」

霊夢は寝かされている紫を気に掛ける。それに藍は苦笑を浮かべ、「問題ない」と答えた。ついでに目を逸らし、「起きてからが怖いが」と心の中で呟く。霊夢は藍の内心には気付かず、ほっと息を吐いた。

辺りには和やかな雰囲気が流れ、暫し談笑していたが、流石にこれ以上は体に障ると判断したのだろう。藍は紫を横抱きに抱え、橙と共にその場を辞した。橙は本来紫達と同居してはいないのだが、紫のことが心配だったのだろう。

藍は最後に「また明日、会おう」と言って、空に消えていった。それを見た他の者達も同じく帰ることにする。その際、パチュリーが持病の喘息の発作が起こり、紅魔館や永遠亭よりも近い、魔理沙の家に緊急搬送された。パチュリーには魔理沙とアリスが付き、薬草にも詳しい二人が看病すればすぐに収まるだろうとの判断だ。

去りゆく魔理沙達を見送った後、レミリア達も帰路へと着く。途中で人里に寄り、異変解決の報告をしてくれるらしい。「風呂に入りたい」と言っていたことから、彼女も相当にくたびれた様だ。

幽々子と妖夢も既に空を飛んでいる。先程からしきりに幽々子の腹から異音が鳴り響き、妖夢が冷や汗を垂らしている。妖夢が休めるのはまだまだ先のことになりそうだ。

「……結局、今回の異変は何が目的だったのかしらね」

「さあね。私に分かるのは、今日の異変を思い出したら酒が不味くなるってことだけだよ」

そうして残った霊夢と萃香はしばらく空を見上げて話した後、軽く息を吐き、空を飛

んで博麗神社へと戻る。二人の頭には、否、先程まで一緒に戦っていた皆には、共通する思考があった。

「……早く、本物の満月が見たいわね」

「その時こそは、気持ち良く酔えそうだね」

光一つ届かぬ山の中腹。そこから全てを眺めていた『男』は溜め息を吐いた。『男』にとって、今日という日は厄日だったのだ。

何せ、相手に『探し物を手伝ってほしい』と頼んだのに、その相手は何故か『幻想郷に異変を齎した』のだ。彼からすればこれほど意味の分からない事態も無いであろう。

彼は空を見る。探し物に関係のありそうな人物達は結界内に引きこもっていたし、黒い月なんて物が現れる。

彼は獣より多少優れた頭で考える。探し物はどこにあるのか、どうやれば見つかるのか。

『男』はフルフルと首を振る。そのまま『鳥』の様な翼を広げ、『蛇』の様な尾を揺らし、『野犬』の様に遠吠えを上げ、夜の闇に消えていった。

数刻が経ち、夜が明けて。博麗神社には多くの者が集まっていた。それは昨日という日を戦って過ごした者達。そして、ある悲劇を目撃した者達だ。普段の霊夢なら追い返すのだろうが、彼女達の姿を見た霊夢は一つ頷き、皆で酒を呷り始める。その日の宴会は、今までにないくらい静かに始まりを告げた。

白蓮は朝の日差しの中写経をしつつ、昨夜行われた神子との会話を思い出す。彼女は言っていた。形だけになってしまうが、せめて葬儀は執り行う、と。白蓮もそれに頷き、骸は無いが墓を建てようと思っている。思い浮かぶのは、命を弄ばれた虫達。

因果は巡り、行いに応じた報いを受ける。あれを為した者に、また、彼らにあのような行いをした自分に、十王はどのような裁きを下すのか。

「……ふう」

白蓮は筆を置き、溜め息を吐く。今日これから神子や慧音と共に、人里の住人達の心

のケアを行うつもりだ。このように沈んだ顔では皆が更に不安に思ってしまう。
白蓮は伸びを一つ、立ち上がる。幸いにも今日の天気は快晴だ。昨日とは違い、今日という日は佳日であってほしいと願う。

だが、その思いは届かなかったのであろうか。
幻想郷と外の世界の狭間にある、とある屋敷。そこで一人の少女が目を覚ました。
「……まさか、妖怪である私がこんなに弱るなんて……」
そして、此処とは違う、どこか別の世界で。
「おー、今日は快晴ってやつか。最近雨ばっかだったからなぁ、何か久しぶりな感じだ」
ぺしゃんこに潰れた煎餅布団の上で、少年は窓の外を見ながら声を出す。そこから見えるのは雲一つ無い、抜けるような青空。最近は悪天候が続いたせいか、中々に眩しく見える。
「何か良いことが起こりそうだなー。可愛い女の子達と知り合えるとかだったらいいなー！」

心に浮かんだことを正直に口に出す少年は、朝から煩悩にまみれていた。
――それが、少年の望みとは少々外れるが、真実になるとも知らずに。
やがて、運命の時は訪れる。

番外編・後編
『運命の日』
～了～

第十一話『新しい日々の始まり』

横島忠夫の朝は早い。

彼の毎朝の起床時間は早朝五時。元の世界に於いて弟子の犬塚シロに毎朝散歩をねだられていたせいか、彼は自然とこの時間に目が覚める様になっていた。

「んぁ……」

まだ太陽が半分以上隠れている中、彼は窓から入り込む僅かな光の刺激を受け、瞼を開く。

「くぁ……。はぁ。またか、こいつら……」

欠伸をしつつ、ゆっくりと体を起こす。まず目に入ったのは、自分のベッドに潜り込み、腕や体に抱きついてきているパジャマ姿の妖精メイド達の姿だ。

それは横島が紅魔館の執事となった日の翌日から始まり、それから今日まで同じ顔は一つと無い。どうやら一晩交代制らしく、毎回違う妖精メイド達がベッドに潜り込み、誰かしらが横島のパジャマをよだれで汚している。

横島は溜め息を吐きつつもベッドから抜け出す。その際に妖精メイド達を起こさな

い様に注意を払いながら、絡み付いている彼女達の手足を優しく解く。

「まったく、腹出して寝てんじゃねーぞ……っと」

彼は妖精メイド達の寝相を正し、掛け布団を静かに掛けてやった。

唐突に始まった妖精メイド達のこの行動は、パチュリーが言うには「貴方の霊波動に、この子達が惹かれたようね」ということらしい。人外に好かれることは自覚していたが、霊力のパワーアップと同時にそれすらも強化されてしまったのだろうか。どうせならバインバインなお姉様に好かれたい。

「ふっ……」

考えていることはヨコシマなのだが、何故だか彼の表情は爽やかな笑みを浮かべている。思考と肉体が一致していないのは今までの経験故か。

横島は妖精メイド達の頭を優しく撫で、着替えを持って部屋の洗面所へと向かう。そのまま洗顔と歯磨きをし、パジャマから執事服へと着替える。

着替え終えた横島は極力音を立てないようにとりあえずの洗濯物を籠に入れて持ち、紅魔館共用の洗濯場へと移動する。

紅魔館の中庭に程近い場所にある共用洗濯場。夜の淀んだ空気と入れ替わり、清々しく澄んだ空気を堪能しながらの道程は、似合わないことに彼の楽しみの一つとなっていた。

「やっぱ夜の空気より朝の空気だな……。お嬢様が聞いたら怒りそうだけど」

程無く到着した横島は籠をその場に下ろし、洗濯物が風で飛ばないようにネットで蓋をする。一度風で飛ばされたのか、彼のワイシャツが一枚無くなった事があったからだ。

「さて、次はっと」

横島は軽く肩を回しながら紅魔館の正門を目指す。勿論紅魔館から出るのではなく、門番に用があるのだ。

横島が執事となった次の日の朝、自分がいつの間にか寝ていた事に困惑し、更に自分の体に何人かの妖精メイド達がくっついていたのを見て驚愕し、自分を全く信用していない彼はひどく狼狽した。

「ワイは……ワイはついに堕ちる所まで堕ちたというんか……!?　バインバインなお姉様やなく、こんなロリっ娘達と……!!?　初めてが複数人……!?　何で覚えとらんのや!?　いや、覚えとってもそれはそれで問題やけど!!」

頭を抱え、ぐねぐねと悶えている。輝夜や藍といった完成された傾国傾城の美女が、美女という名の年下美少女（見た目）だったのが原因なのか、彼の言葉は普段からは考えられない物となっている。

「うにゅ……」

「……！」

一通り悶えていると、彼に抱きついている妖精メイドの一人が少々変わった声を上げた。起こしてしまったのかと慌ててしまったが、どうやらただの寝言だったらしい。

「……いや、起こして現状について説明してもらった方がいいな。とりあえずこの中の誰かを起こして……」

丁度横島が右脇腹に抱きついている妖精メイドを起こそうとした時、部屋のドアがガチャリと音を立てて開いた。

「横島さ～ん、起きてませんよね～？」

ともすれば、聞き逃してしまいそうになるほどに小さく囁きながら室内に侵入してきたのは美鈴だった。声の調子が楽しげに弾んでいたので、寝起きにドッキリでも仕掛けようというのだろう。

横島は一瞬ビシリと固まった後、ゆっくりとドアの方を振り向いた。

「め、美鈴ちゃん……？」

「ああ、何だ起きてたんですね。それはそうと私もちゃん、付け、は……？」

前半はにこやかに笑顔を浮かべていた美鈴なのだが、後半になるにつれ笑顔は凍り、驚愕へと変化していく。

凍りついたかの様な空気が漂うこと数秒。美鈴は愛想良く「えへへ」と笑った後、身

を翻した。
「ごゆっくりぃ!!」
「待っ――――!?」
待っての一言すら言えない程のスピードで美鈴は部屋から逃げ出した。横島は体にくっついている妖精メイド達から瞬時に抜け出すと、美鈴の後を遮二無二追い掛ける。
「待って！　これは事故だ!!」
「事後!?　そんなのはあの状況から察してます!!」
横島の必死の言葉を微妙に聞き間違えながら疾走する美鈴。横島はそれにめげずに速度を上げ、美鈴と併走しながら説得を試みる。
「いやそうじゃない！　誤解……！　そう、全ては誤解なんだ！」
「あんな小さな娘達と五回もしたんですか!?　二号の言うとおり、とんだ暴れん棒将軍ですね!!」
「何の話だあああああーーーーー!!!?」
色々と思い出して泣きたくなる横島であった。
その後、結局すぐに美鈴は捕まり、横島の心の底からの言葉によって誤解は解けた。美鈴は胡散臭い笑顔で「信じていました」と宣ったが、横島からは絶対零度の眼差しを頂戴した。

……甚だどうでもいいことなのだが、二人は約一キロメートル程を全力で走り、息切れ一つ起こしていない。しかも大声で話しながら、である。美鈴はともかく、横島は本当に人間なのであろうか。

紆余曲折あったが誤解も解けたので、横島は美鈴が朝早く部屋に訪ねて来た理由を聞くことにした。

「んで？　こんな朝早くに何かあったの？」

「あー、それなんですけど……」

美鈴は頭を掻いたり視線を泳がせたりと、どうも落ち着かない様子だ。あーうーと唸り、天を仰いだりしていたが、やがて覚悟を決めたのかぼそぼそと話し始める。

「その……昨日の夜、色々と話を聞いちゃったじゃないですか」

「……ああ」

「あの時、横島さんは私達に対して嫌な思いをさせたって言ってましたけど、やっぱり自分の心の傷をさらけ出す方が辛いと思うんです」

「……」

美鈴は横島の目を真っ直ぐに見つめ、ゆっくりと語りかける。

「最初は、寝起きにちょっと驚かせてリフレッシュさせようかなーって思ってたんですけど……私の方が驚いちゃいましたし」

「リフレ……？」

この世に寝起きドッキリでリフレッシュ出来る人間が居るのかは定かではないが、少なくとも横島はリフレッシュ出来ない側の人間のようだ。

「だから、横島さん」

美鈴は眉をキリリと引き締め、横島に提案を持ちかける。

「これから、私と太極拳をしませんか？」

「……？」

思わず首を傾げてしまう横島。だが、それも仕方がないであろう。美鈴の話はそこに至るまでの過程がスポーンと抜けている。流石の彼も説明無しでは理解が追いつかないようだ。

そんな横島の表情を見て察したのか、美鈴は咳払いを一つし、先程の提案の補足をする。

「いえ、そのですね。やっぱり嫌なことがあった後だと、気持ちも沈んじゃいますよね？　私はそういう時は体を動かして憂鬱な気分を発散するんです。体を動かしている間は嫌な事は忘れられますし、体を動かした後には気分もスッキリ爽やかになるものです。特に今日みたいな晴れの日に運動するのは気持ちいいですし。だから、やりましょ？　私と一緒に太極拳」

美鈴は少々恥ずかしかったのか頬を赤らめ、まくしたてる様に早口で理由を話す。それでも最後に彼女は横島ににっこりと微笑んだ。

「……ああ、そうだな。やってみようかな」

「あはは、良かった。それじゃあ正門に行きましょう。私はいつもそこでやってますから」

「はいはい」

横島は苦笑しつつ美鈴に続く。それは美鈴のほっとした姿に加え、自分の精神状態も含んだ物だった。もしかしたら、紫や永琳の言っていた様に自分で思っていた以上に溜め込んでいたのかもしれない。それを察した彼女は、自分に対して気を使ってくれたのだろう。彼としては美鈴の気持ちに申し訳ない思いが湧き上がるが、それ以上に嬉しくもある。

「さ、早く行きますよ横島さん！」

「りょーかい、美鈴ちゃん」

「もう、ちゃん付けはいいですって」

何より、美鈴の笑顔を曇らせたくはない。彼女の笑顔は今日の天気と同じ。澄み渡る青空の様に人を朗らかにさせてくれる。それは、横島にとっても同じこと。いつの間にか、太陽は昇っていたのだ。

そして、その日より九日。横島が紅魔館の執事となって十日目の今日も、正門に居る美鈴を訪ねる。
横島の一日は太陽を拝むこと――美鈴と逢うことから始まる。

あれから約一時間程が経ち、妖精メイド達の起床時間となった。紅魔館に目をやれば、グループ分けされた妖精メイド達が慌ただしく仕事の準備をしている。
美鈴は門番の他に花畑の管理も任されている。「水やりは朝の内に行った方が良い」と、美鈴は横島と別れ、花畑に向かった。横島も咲夜と合流し、皆の朝食の準備にかかる時間帯であるのだが、横島は晴れ渡る空を見上げている。
「……」
横島は紅魔館の執事となってからの生活を思い起こしている。何度か失敗をしたが、同じ間違いは犯さないように注意し、立派に仕事をやり遂げている。レミリアが言っていた通り激務であったが、ゴーストスイーパー時代の理不尽な仕事内容に比べれば、この程度どうということはない。
上司である咲夜に指導され、期待され。パチュリーと互いの世界の技術を話し合い。

美鈴とは愚痴を交わしたり励ましあったり。小悪魔とは互いの苦労を労ったり。妖精メイド達と協力して仕事をこなし。フランと遊び、レミリアの命を奉ずる。

もしかしたら紅魔館の執事とは、彼にとって天職なのかもしれない。横島忠夫という男は強気な女性が好みである。そこに付け加えれば彼には丁稚根性が染み付いているので、彼女達に奉仕することに喜びを感じている可能性もある。更に彼はある種軽度のマゾヒストであるため、口では文句を言いつつも心にはまだ彼には理解出来ていない快感が去来する。……もし気付いてしまえば、新たな扉が開かれるであろう。

「……どうして」

ただ、彼には一つだけ許せない事柄があった。『それ』を看過出来ず感情が熱を持ち、悲鳴を上げる。彼の目からは、ぽろぽろと涙が零れていた。

横島は感情の命じるままに声を上げる。

「どうして紅魔館に住んでる女の子達は皆ロリっ娘ばっかりなんや……!!!」

――彼の涙は、何時しか赤黒く染まっていた。

そこに、数人の妖精メイドを引き連れた咲夜が現れる。

「……メイド長、また横島さんが血涙を流してますよ」

「ということは、そろそろ朝食の準備をしないといけないわね」

咲夜は妖精メイドの言葉に懐の懐中時計で時間を確認し、これからの仕事を組み立て

る。どうやらこの十日間の内に、すっかり日常の光景となったらしい。
「横島さーん、そろそろ朝食の準備に取りかかるわよー！」
「うっす！　今行きまーっす！」
咲夜の言葉に横島は笑顔で振り返る。何だかんだ言いつつも、紅魔館に存在する女の子達は皆将来が楽しみな美少女揃い。バインバインなお姉様が居ないのは残念ではあるが、横島は彼女達の未来という可能性を信じて働き続けるのだ。
最早血涙は無く、彼は笑顔を浮かべて仕事へと取りかかる。十日の内に、彼は仕事にやりがいを感じていた。

場所は移り、現在紅魔館の主要メンバーが集まっているのは館内のグレート・ホール、食堂だ。今日の朝食は輝夜がリクエストした和食。鮭の切り身の塩焼き、出汁巻き卵、豆腐とワカメの味噌汁、納豆、そして白ご飯。
紅魔館では基本的に食事は洋食に偏り、和食を食べることはあまり無い。洋食も嫌いではないのだが、輝夜は日々の食事に若干の物足りなさを感じた。それがご飯の有無であった。輝夜としては食事にご飯は付き物であり、偶に抜くのならまだいいが、全く無

いというのは少々抵抗がある。

そこで輝夜はおねだりをしたのだ。自らの美貌を理解している輝夜は『上目使い』で、『横島』の『両手』を『握り締めながら』おねだりをした。

『横島さん……。偶には、白いご飯が食べたいな……』

『ごぶぅっ』

横島は軽く吐血をし、咲夜にお伺いを立てる事を約束せざるを得なかった。そしてその意見は却下されることは無く、存外にすぐ通ることになった。どうやらレミリアが納豆を食べたかったらしい。

十日前の宴会で永琳に『納豆臭い』と言われたのが堪えていたようだが、結局食欲には勝てなかったらしい。しかもそれ以来考えることすら我慢していたのだから、今感じている納豆を食べるという喜びも一入だ。本人は澄ました顔をしているが、背中の羽はパタパタと揺れており、その感情を分かりやすく表現している。

他の皆にも好評であり、特に永遠亭メンバーが喜んでいた。そのまま和気藹々とした雰囲気に包まれている。そんな中、永琳は食事後すぐに席を立ち、「ちょっと急ぎの用事があるから」とそそくさとホールを出る。

輝夜は鈴仙に視線をやるが、鈴仙は首を横に振る。他の面々も首を傾げるが、永琳は薬師なのである。また何か変な薬を作ろうとしているだけなのかもしれない。

「……止めた方がいいんじゃ……？」
「……相手は永琳なのよ？」
「……」
永遠亭メンバーは不安を覚えるが、永琳とてそう何度もおかしな薬を作りはしないだろう。彼女達はそう願った。

永琳は自分の部屋に戻り、お茶を入れる。紅魔館では紅茶がほとんどのため、今用意しているのは日本茶だ。実際には望めば和食も日本茶も出してくれるのだが、彼女達は自分達が『お客さん』であると認識しているので、遠慮しているのだ。普段の姿からは考えられない謙虚さである。
永琳は自分ともう一人、二人分のお茶を用意し、空中へと声をかける。
「さて、貴女の分もお茶を淹れたから、そろそろ姿を見せたらどう？」
本来なら応える声などあるはずがない。しかし、永琳の言葉に対する応えはすぐに返ってきた。
「あら、やっぱりバレてましたわね」

永琳から離れること二メートル弱。その空間に『穴』が空いた。両端をリボンで結んだ様な穴、『スキマ』である。そこから現れたのは紫色のワンピースドレスを纏った少女、八雲紫。

紫は数日前に体調が完全に復調し、紅魔館を辞していた。その際、フランが若干寂しそうにしていた事実が紫の心に大切に刻まれている。

「あれだけ露骨に見られればね。……それで？　今日は何の用なの？」

「少し聞きたいことがあるの」

紫は永琳からお茶を受け取り、一口含む。永琳は紫の言葉を同じくお茶を飲みながら待つ。

「ほら、レミリアって困った人を進んで助ける様なタイプじゃないじゃない？　だから、貴女達や横島さんを紅魔館で受け入れたのは何故なのかしら……って、ね」

「ああ、それね」

永琳はお茶で唇を濡らして紫の問いに答える。

「簡単よ。紅魔館と永遠亭のメンバーの違いを考えればすぐに分かるわ」

「違い……？　ああ、そういうことね」

永琳の返答に紫も最初は思案に耽るが、すぐさま答えを導き出し、つまらなそうにスキマから取り出した扇で口元を隠す。

紅魔館メンバーと永遠亭メンバーの違い。ズバリ言えば各人の健康状態だ。

精神的に情緒不安定であり、引きこもりがちなフラン。同じく引きこもりがちであり、虚弱体質で喘息持ちのパチュリー。ワーカーホリックで休んでいる風にはとても見えない咲夜。一見健康な様に見えるが、何か病気を患っているのではないかと心配になるくらい昼寝をする美鈴。パチュリーにこき使われていつも疲れている小悪魔。

正直、健康と言えるのは主であるレミリアしか居ないのではなかろうか。

博麗神社に遊びに行ったりなど、周りに合わせる為に早寝早起きをし始め、咲夜をお陰で毎食栄養管理をしっかりとされた料理を食べ、弾幕ごっこなどでしっかりと体を動かし、パチュリーに呆れられないように図書館で勉学に励む。

レミリアは、吸血鬼にあるまじき健康的な毎日を過ごしている。

そう。主であるレミリア以外の不健康さは、幻想郷でも屈指。紅魔館とは、幻想郷に数ある陣営の中で最も不健康なグループなのだ。

「つまり貴女達永遠亭メンバーを招いたのは、自分達の健康管理をしてほしいから……ってことなのね」

「その通り。……中々可愛かったわよ？　内緒話をするみたいに話しかけてきた時は……」

そう言った永琳はその時のレミリアの様子を思い出したのか、微笑ましい気分に浸っ

ている。紫にはあまり想像出来ないような事であり、少々懐疑的である。
「じゃあ横島さんを雇ったのは、十六夜咲夜の負担を減らすためかしら」
「まあ、そうでしょうね。実際彼は凄く頑張ってるみたいよ？　咲夜も「仕事が多少楽になった」ってレミリアに話してたみたいだし」
「あら、彼女に認められるとは凄いですわね……」
紫は永琳の話を聞き、お茶を飲む。まったりとした雰囲気の中、部屋の外から横島と妖精メイドの叫び声が聞こえてきた。
「とおおおおりゃあああああーーーーーー!!」
「うりゃーー!」
「そりゃーー!」
ドタバタとした足音を響かせながら、部屋の前を通過する。何事かとドアの方に振り返った紫だが、今度は往復してきたのか、また同じ様に叫び声が響いた。
「……あれは何事？」
「何でも気合いを入れるためですって。確か、昔友達に借りたゲームがどうこうって言っていたわ」
「よく十六夜咲夜が許可しましたわね……？」
「信じられないことに、今までよりも効率が上がってるらしいのよ。横島君は「妖精とは

いえ『メイド』だもんな！」って、訳の分からないことを言っていたけど……」

流石の二人でも首を傾げるしかなかった。

「……それで？」

永琳は少々変になった雰囲気を誤魔化すためか、急に真面目な顔をして紫に問いかける。紫も「何が？」とは返さない。永琳に倣って真面目な表情を作る。今日永琳を訪ねた本題に入るつもりだ。

「貴女が初めて横島さんに出会った日から今日まで。ずっと疑問に思っていたことがあるの」

「……続けて」

「貴女は私の様に横島さんに対する負い目が無い。だというのに、貴女は横島さんに対して友好的すぎる」

それは紫だけでなく、永遠亭の皆も感じていたことだ。

確かにあの時永琳が言った様に横島の人柄もあるだろう。彼は人外に好かれやすいという性質を持っており、紫を含む幻想郷の皆と交流し、すぐに打ち解けることが出来た。事実この十日で彼は既に皆と違和感無く生活出来ている。

だが、永琳は違う。彼女は横島と話す前から、会った瞬間から彼に隔意を持っていなかった。

彼を移動させるのに率先して行動したのは永琳であるし、彼の女好きな性格を一番早く見抜いていたのも、彼の今後の身の振り方を真っ先に心配したのも、彼の人外に対する考え方を引き出したのも永琳だ。そして、横島が過去の心の傷を語った時。彼女は、真摯に横島へと向き合った。

今思えばあの時の永琳は、横島に対する距離が余りにも近すぎた。初対面であったことに疑いは無いが、まるで昔からの友人のようである。

「何か、彼について知っていたの？　貴女が見ず知らずの人間を輝夜に近付けるとは考えられないし……」

紫の言葉に、永琳は黙り込む。別に理由を話さないという意思表示ではなく、言葉を探しているのだ。

数分の時が経ち、永琳は残ったお茶を飲み干して紫に直る。

「あの時は、自分でもどうかしてたわね。あんな事があったから、ちょっと気が動転してたのかしら」

自嘲気味に語る永琳だが、声に迷いは無く、スラスラと言葉を紡いでいく。

「まあ、私の薬が原因の一つだから、負い目が全く無いって訳でもないのだけれど。……本当にね、何でもない理由なのよ。――ただ、懐かしい気持ちになったのよ」

「懐かしい……？」

永琳の声音と表情は、それが真実であると如実に語っている。紫は永琳の言葉を待った。

「昔、そうね……。千二百年～千三百年くらい前かしら？　輝夜は知らないことだけど、当時ちょっと困ったことがあってね。横島君は、その時に助けてくれた恩人に似てるのよ」

それは、永琳が月から輝夜の元へと訪れた辺りであろうか。紫は輝夜との逃亡生活での事と推察する。

「女好きな性格も、人外の存在でも、私の様な可愛い女の子なら気にしないところも……。まあ、容姿も似てるといえば、似てるかしら」

おとがいに指を当て、その人物を思い起こす永琳。紫は彼女の発言にツッコミを入れたかったが、やぶ蛇になりそうなので我慢した。代わりに純粋な疑問を投げかける。

「どんな人だったのかしら？　それくらいの時期なら、人外に対して理解があるのは怪しいけれど」

「彼は『人外』に対する組織の人間だったからね。色々と融通してもらったり、誤魔化したりしてもらったのよ」

「組織？」

「ええ。彼は陰陽寮っていう組織に所属していた、最高クラスの陰陽師。名前は――――

そうそう、確か『高島』と言ったわね」

人間の里に存在する寺子屋。その教師である上白沢慧音の家を、妹紅は訪ねていた。あの異変から約二週間。天狗の射命丸文から慧音は聖白蓮や豊聡耳神子、八坂神奈子らと共に里の人間達のメンタルケアに明け暮れていると聞き、陣中見舞いに訪れたのだ。

「いやー、慧音。しばらく見ない間に隈が凄いことになってるな……」

「ははは……。皆がひっきりなしに訪ねてくるんでな、余り寝ていないんだ」

そう言って慧音は妹紅が持ってきてくれた苺のショートケーキを一口食べる。紅魔館のメイド長十六夜咲夜謹製のケーキは、疲れた体に染み渡るのか慧音は至福の笑みを浮かべている。

「悪いな、役に立てなくて……。何だか私だけ楽しく過ごしているような」

「なに、気にすることはないさ。改善されてきてるとはいえ、妹紅は人見知りする質だからな。それに、そういう事は苦手だろう?」

それを言われれば妹紅は笑って誤魔化すしかない。目をそらしながら慧音が淹れてくれた熱いお茶を啜る。

「そういえば、妹紅の家は大丈夫だったのか？　永遠亭はほぼ全壊だったらしいが……紅魔館に住まわせてもらった方が良かったんじゃないか？」
「ああ、私の家は大丈夫だしな。永遠亭や紅魔館の連中は私も一緒に住めばいいとは言ってくれたけど、やっぱり住み慣れた家が一番だしな。ああいう所は住むよりも遊びに行ったり泊まりに行ったりする方が楽しめる。……自分の家の方が、ここにも近いしな」
「……そうか」
妹紅の言葉に、慧音の心には喜びの感情が溢れ出す。彼女の一番の理解者を自負する慧音としては、妹紅が自分を大切に思ってくれていることが純粋に嬉しく感じる。
「それにしても、向こうでは何かあったりしたのか？　紅魔館にはごく偶に催される宴会でしか行ったことがないからな」
その言葉を皮切りに、妹紅は紅魔館での宴会や、泊まった時の事を話し始める。それを妹紅がケーキと一緒に持ってきてくれた紅茶を飲みつつ聞いていたのだが、とある言葉を聞いた瞬間に噴き出してしまう。
「ぶふぉっ!!?」
「うわぁっ!?　ど、どうした慧音!?」
「げほっ、げほっ！　す、すまん妹紅。ちょっと、予想外な台詞が聞こえたから」

慧音の言葉に首を傾げる妹紅。とりあえず慧音の背中をさすり、先程の発言の意味を聞く。

「で、予想外な台詞って？」

「ああ……。紅魔館に新しく人間が雇われたんだって？」

「え？　うん。横島っていう『男』だけど」

「……そうか」

「慧音？　おーい」

途端に俯き、何やらブツブツと呟き出す慧音。妹紅には彼女が呟いている内容が聞こえないのか、不思議がっている。

（まさか、あの妹紅が男に関する事をこれほどまでに楽しげに話してくるとは……。私でさえ妹紅と打ち解けるのにかなりの年月が掛かったんだぞ？　それを僅かな時間で……。妹紅が言うには、横島という輩は女好きで軟派な性格らしい。そんな奴と妹紅が交友を持ったら、何か悪い影響があるのではないか？　いやいや待て待て。この私の考えは単なる憶測であり、偏見からくるものだということを留意せねば。だが、妹紅の話からではこれ以上の推測は出来ん。これはもう仕方ないか……）

慧音はガバッと顔を上げ、妹紅は突然の彼女の行動に体をビクリと揺らす。慧音は妹紅の肩に手を置き、こう宣言した。

「その横島という男、妹紅に相応しい男かどうか、私がこの目で見定めてやる！」
「……はあっ!?」
どうやら何かを盛大に勘違いしたようだ。それだけ妹紅が特定の男について話すのは珍しいことだったのであろう。
妙に張り切った様子の慧音は妹紅の言葉に耳を貸さず、「そうとなれば早く人里の皆に元気を取り戻してもらわんとな！」と、先程までの疲労が溜まった姿からは想像も出来ない程に溌剌とした様子で家を出て行った。
「ちょ、慧音!?　誤解!!　誤解なんだってーーー!!」
慧音は気付いていない。妹紅が誰かと打ち解けることが出来る様になったのは、紛れもなく慧音自身の功績であることに。
晴れ渡る空の下、沈んだ人間の里には妹紅の必死の叫びが木霊した。

第十一話
「新しい日々の始まり」
～了～

以下どうでもいいおまけ

幻想郷に存在する霧の湖!!　その奥に鎮座する紅い館には、数々の人外の存在が集っていた!!

「ちぇすとー!!　不動砂塵爆(きゅっとしてドカーン)!!」

破壊百段の異名を持つ悪魔の妹!　フランドール・スカーレット!!

「駄目ですよ、妹様!　そんなに散らかしちゃ!」

あらゆる中国拳法の達人!　紅美鈴!!

「小悪魔、その本を片付けた後はそこと向こうの棚を片付けてちょうだい。あと紅茶」

哲学する大図書館!　パチュリー・ノーレッジ!!

「は、はーい!　ちょっと待ってくださーい!!」

裏図書館の死神（?）!　小悪魔!!

「パチュリー様、紅茶は私がお淹れいたします。小悪魔、貴女は片付けを頑張ってね」

完璧と瀟洒の申し子!　十六夜咲夜!!

「あ〜ー、今日も紅魔館は平和ねー……」
　無敵お嬢様！　レミリア・スカーレット!!
　そして彼女達に従い、日々激務をこなす少年が居た！
「お嬢様ー！　頼まれてた仕事は終わりましたー！」
「じゃあアレとコレとソレを追加で」
「の〜ーーーぅ!?!!」
　史上最強の丁稚！　横島忠夫!!
　ここは幻想郷に存在する紅い洋館!!　人はこの館を悪魔の棲む家『紅魔館』と呼んだ!!

おまけ〜了〜

第十二話『妹様と雨』

紅魔館での執事生活を毎日面白おかしく過ごしている少年、横島忠夫。
だが彼は休憩時間になると、普段の様子からは想像が出来ない行動を取る。

「……」

彼が現在行っているのは霊力の操作。『サイキックソーサー』の生成である。彼からすればそれは初めての師匠とも言える存在から教わった『基礎中の基礎』なのだが、彼のそれは凡百の霊能者の物とは文字通り格が違う。

本来霊力とはその名が示す通り霊的な力の事であり、よほど強力に顕在化しなければ物理的な威力は発生しない。神魔と違い人間は肉体という『枷』が魂の力である霊力を阻害し、秘められた莫大な力を揮う事が出来ないのだ。人間という枠組みで本当の霊力を扱える存在、それは肉体という枷から解き放たれ、精神的なリミッターすら外れた『悪霊』だけなのである。

だというのに、彼が無造作に集めた霊力は高度に集束され、物理的な威力すら発揮している。それは彼の才能が集束に特化していたことに理由があった。

彼の霊能である『サイキックソーサー』、『栄光の手』、そして切り札である『文珠』。これらは全て霊力を一点に集束し、物質の領域にまで昇華させることによって発動する。初めての師匠の教えの賜物か、彼は発現した霊能を短い期間で使いこなすまでに成長した。

魂に刻まれた霊能。魂から抽出する霊力。そのバランスを最適化させる才能。それが、ゴーストスイーパーとしての横島忠夫を支えていた柱。

――だが、その柱に歪みが生じている。

「くっ……！」

彼の突き出された右の掌に生成された霊力の盾サイキックソーサー。その全長は一メートルを超え、安定せずに絶えずブレが発生している。

それは、彼が博麗神社で生成した時から変わらない。謎の霊力の爆発的増大という歪みの前に、彼の柱が揺らいでいる。

それは動揺を生み、動揺は焦りを生み出す。横島が休憩の度に現在の状況から脱しようとする所から、彼の焦りがどれほどの物かを物語っている。

「……くそっ！」

それも当然だろう。今まで扱えていた霊能がいきなり制御不能になり、元の世界へと帰還するための要である文珠はおろか、満足に集束も出来ない。紫が横島を元の世界へ

帰す為に尽力しているが、もし現在のまま元の世界へ帰ったら。ただ霊力だけが馬鹿高い、操作すら覚束無い状態で帰ってしまったら。

「殺される……！　美神さんに、殺される……!?」

ただでさえ既に二週間近く日にちが過ぎているのだ。もしかしたらもう駄目かもしれない。

「――次はイケメンに生まれたいな……」

「……どうしたんです？」

絶望にまみれた独り言に問いを返したのは美鈴であった。彼女の手にはタオルと冷たいお茶が入ったコップ。美鈴は横島に、まずコップを差し出した。

「あー、ありがとう美鈴」

「いえいえ、それとタオルもどうぞ」

横島はコップのお茶を一気に呷り、美鈴から受け取ったタオルで額に浮かんでいた汗を拭う。

「……大丈夫ですか？」

美鈴のその問いには答えられなかった。体力的には問題は無いが、精神的な面ではあまり大丈夫ではないことを自覚しているからだろう。

「あまり根を詰めては逆効果になります。今の横島さんの気はかなり乱れていますから

ね、焦るのは分かりますがちゃんと休んでください」
　美鈴に窘められた横島は、苦笑いをしつつ頭を掻く。彼女は見た目が横島よりも幼く見えるため、端から見れば年下の少女が年上の少年にお姉さんぶった振る舞いをしている様にも見える。それが横島には微笑ましかったのだが、心の奥底で無意識の内に僅かばかりの煩悩が揺り動いていた。少々癖になったのかもしれない。
「分かっちゃいるんだけどなー」
「まずは気を静めましょう。今のままでは気が逸るだけですから」
「そーだな……」
　横島は静かに深呼吸を始め、美鈴はそんな彼の気の流れを見る。実は気の流れ自体には問題は無いのだ。
「……そういや、美鈴って人の『気』とか、そういうのが見えるの？」
「ええ、見えますよ。私の能力は『気を使う程度の能力』ですから」
「……へぇー」
　美鈴から答えを貰った横島は、今までの美鈴の言動を回想する。妖精メイドをフォローしたり、咲夜を手伝ったり、小悪魔にマッサージを施したり、勿論横島自身も随分と美鈴に助けられている。彼はなるほどと頷いた。
「確かに美鈴って皆に気を使ってるよな。昼寝してる所も見るけど、皆の優しいお姉さ

んって感じなのか。……ちょっと天然なとこも可愛いし」

「……え、優しい？　いやお姉……？　というか可愛……っ!?」

横島の言葉に美鈴は顔を赤くする。実は紅魔館の中では男性と接する機会が一番多い彼女であるが、妖怪であるからか口説かれたことなどはあまり覚えがない。彼の言葉がナイスバディなお姉様に対する煩悩にまみれた台詞ではなく、心からの言葉をさらりと発したのも関係があるだろう。彼女には横島の笑顔が眩しく見えた。

「……って、あれ？」

多少混乱した美鈴だが、横島の言葉に少しばかりの違和感を覚えた。よくよく考えてみれば、彼は勘違いしているようだ。

「あの、私の『気を使う』はそっちじゃなくて『オーラ』とかそういうのなんですけど……」

「え？　あー、そうだったのか。……でも能力とかじゃなく皆に優しく出来るのはすげーよな。俺にはマネ出来ねーしさ」

「あう……。あ、ありがとうございます……」

横島の賛辞に美鈴は再び顔を赤くし、俯いた。実年齢の割に免疫が無いのか、鼓動も高鳴っている。

美鈴が照れて俯いている間、横島はぼうっと空を見上げていたのだが、何か思いついた様に美鈴へと顔を向ける。

「そういやレミリアお嬢様の王気（オーラ）も凄い物があるよな」
「え？　はい、確かにお嬢様の気（オーラ）は凄まじいですが……？」
美鈴は何となく話が噛み合っていない様な感覚を受け、首を傾げる。二人の間には割とどうでもいい溝も存在しているようだ。
美鈴が頭上にクエスチョンマークを浮かべて唸っていると、背後から人影が現れた。
「こんなところに居たのね、美鈴」
「あれ？　どう……したんですか、咲夜さんその怒気（オーラ）は」
やってきたのは何やら複数の妖精を引きずっている咲夜。彼女のこめかみには井桁の血管が浮き出ている。
「別に何でもないわよ？　ただ門番がどこかに行ったせいで悪戯好きな妖精三人組が紅魔館に侵入して洗濯物が台無しになったり掃除したばかりの部屋を汚されたりお嬢様と妹様にお出しする予定だったケーキを食べられたりしただけだからね……!!」
目の前の少女は鬼と化していた。美鈴は咲夜の言葉にビシリと固まり、全身から冷や汗を滝の様に流している。横島は美鈴と妖精達に憐れみの視線を送った後、静かに咲夜の後ろへと移動した。
「あの……美鈴は俺を心配しての行動だったので、多少は手加減を……」
横島はおずおずと咲夜に進言する。美鈴は横島に輝く視線を送るのだが……。

「――なにか？」
「……なんでもないっす」
その瞳は一瞬で光を失った。横島は咲夜の笑顔の圧力に耐えきれず、後ろを向いて耳を塞いでしゃがみこんだ。白々しくも「何も聞こえなーい」などとほざいている。
「さて、美鈴……？」
「ひいっ!?」
紅魔館全域に、美鈴の叫びが木霊した。
その間横島は何も見えない振り、聞こえない振りをしながら咲夜によってボロボロにされた三人組の妖精に応急の手当てを施す。話を聞いてみると、三人はそれぞれサニーミルク、ルナチャイルド、スターサファイアという名前らしい。
門番が居ないのをいいことに、紅魔館に侵入して悪戯三昧したそうだ。
「馬鹿だなぁ、お前ら」
横島はもはや憐れみすら感じられる口調で彼女達を貶すのだが、口とは裏腹に彼の手は優しさに満ちていた。彼から発せられる霊波動は妖精達を癒やし、心身共にリラックスさせていく。
手当てが終了する頃には、三人共また悪戯に精を出せる程に回復していた。
「ほら、今日は帰って休んどけ。また今度暇な時に遊んでやっから」

そう言って横島は一番近くに居たルナチャイルドの頭を撫でる。わしわしと多少強めに撫でられたルナチャイルドは、手の動きに合わせて頭が揺れてしまう。
「やーめーてー！」
「あっはっはっはっは」
ルナチャイルドはくしゃくしゃになった髪を押さえながら横島の手から逃れ、二人を連れて空へと飛び立った。
「バーカ、バァーカ！　そういうのはイケメンに限るんだ！」
「テメェ、言ってはならん事を……!!」
三妖精はその後もチラチラと横島へと振り返りながら空を飛んで行き、やがて姿を消した。その唐突な消失に横島は首を傾げたが、何らかの能力だろうと結論付ける。
「さて……」
大きく息を吸い、吐く。横島は意を決して咲夜達の方へと振り向いた。
そんな彼の目に飛び込んだ物。それは美鈴が横島へと尻を突き出す様に倒れ伏している光景だった。
「……」
美鈴は中国拳法を体得している関係から、その肢体はスポーティーに引き締まっている。だがそれはスレンダーという意味ではなく、『出る所は出て、引っ込む所は引っ込ん

でいる』という体型だ。

今は見えないが胸は大きく、つんと上を向いた釣り鐘型。ウエストは引き締まり、見事なくびれを形成している。お尻は小さいながらも布の上からでも分かる様な張りを持ち、触れれば何時までも飽きることはないであろう事が容易に想像出来る。スリットから覗く太腿も適度に肉厚で、張りと弾力のバランスが素晴らしい。

つまり何が言いたいのかというと、横島は自らの煩悩が『むらっ』と湧き上がるのを自覚した。しかし彼はそれを必死に否定する。『バインバインのお姉様』と一秒間に十回唱えた横島は何とか平静を取り戻し、今度は美鈴の治療を開始した。

横島はこの十日間、何かと生傷の絶えない美鈴や妖精メイド達の為に永琳から怪我の治療に関する知識を得ていた。その際に、彼は自らの霊波動が霊的存在に対してリラクゼーション効果を発揮する事を聞き、治療の時には使用する様にしている。ちなみに永琳の肩を揉む際に試しに使用して大絶賛を受けたのだが、横島はあらゆる意味で危険な事になったのでその時の記憶は封印している。どうやら『凄く』とろけたらしい。

「はうぅ……、ありがとうございます……」

「あー、うん。どういたしまして……」

双眸から涙を流す美鈴に良心が痛んだ横島だが、以前から聞きたいことがあったのを思い出し、丁度良いとばかりに二人に聞いてみることにする。

「ところで、二人に聞きたいことがあるんすけど」
「何です？」
「何か仕事で分からないことでもあったかしら？」
「いえ、実は――」
横島の質問に、二人は顔を見合わせた。

時は過ぎ去り夕食後。横島は小悪魔の手伝い……図書館の整理に駆り出された。
小悪魔が忙しなく動き回る中、パチュリーは優雅に読書と洒落込んでいる。動かない大図書館の面目躍如だ。
「小悪魔ちゃん、この本の山はあそこの空の棚に入れればいいのか？」
「はい、そうです。お願いしても大丈夫ですか？」
「おう、力仕事は任せろー」
横島とて体が弱いパチュリーに仕事をさせるつもりはないが、せめてもう少し離れた場所で寛いで欲しいと思っている。喘息持ちの彼女の前で埃を立てる事は許されないのだ。

「ん……しょ、っと」

小悪魔は背伸びをし、自分の身長では届かない場所に無理に本を入れようとしている。当然そんな体勢は長く続くわけがなく、バランスを崩した小悪魔は後ろへと倒れそうになる。

「あわわわわ……!?」

いつもならそこで転倒してしまうのだろうが、今は違う。ここには小悪魔と動かない大図書館の他に、もう一人存在した。

「おっと」

「ふえっ？」

倒れそうな小悪魔を受け止めたのは、言わずとしれた横島忠夫。小悪魔の肩に手をやり、もう片方の手には小悪魔が持っていた本が握られていた。

「よ、横島さん!?」

「大丈夫か？　……無理しなくても、言ってくれりゃ俺がやったんだけどな」

そう言って横島は本を棚に直す。その際、横島は多少前傾姿勢になったため、小悪魔の背に横島の体が密着することになる。

「はわ、わわわっ」

背中から伝わる男性の温もりに、小悪魔は体温が上がるのを自覚した。頬も真っ赤に

染まり、呂律も上手く回らない。
「しっかし、こんだけ広い図書館なんだから、小悪魔ちゃんも飛んだ方が楽だろーに」
横島は本を直すとすぐに次の作業に移行した。小悪魔は先程横島に片付けを頼んだ棚の方を見ると、本の山は既に綺麗に棚へと収まっていた。その凄まじい器用さに舌を巻きつつ、小悪魔は横島の言葉に答えることにする。
「それは……その、横島さんが居ますし……」
「え、俺？　俺が何？」
横島はきょとんとした顔で小悪魔に問いを返す。その顔は本当に気付いていないようで、彼女にはその表情が何か可愛らしく感じた。
「えっと、それはですね……」
色々な意味で頬を赤く染める小悪魔だが、ここでまごついたせいで、動かない大図書館が動くのを許してしまう。
「ふ……馬鹿ね、横島。飛んだらパンツが見えちゃうじゃないの、パンツが」
「パチュリー様!?」
「……おお！」
パチュリーの指摘に小悪魔は慌てふためき、横島は「なるほど」とばかりに手を鳴らす。

「もしかしたら凄い際どい下着なのかもね。『小悪魔』だけにね、『小悪魔』だけに」
「ほほう」
「っ!?」
パチュリーは恐ろしい程のドヤ顔を披露するが当然の様にスルーされ、不満げに「むきゅー」と息を吐いた。横島は無駄に真剣な表情で小悪魔を見つめ、小悪魔は持っていた本で体を隠す。横島はそんな小悪魔にゆっくりと近付いていく。
「あ、あのっ……、横島さん……?」
小悪魔は横島に気圧されるかの様に後ずさるが、すぐ後ろには本棚がある。ややあって小悪魔の背には本棚がぶつかり、横島との距離がまたも縮まった。
「むきゅー」
小悪魔は横島の表情を恐る恐る窺うが、横島の表情は真剣であり、彼女では彼の心理を読み取れない。横島の背後からパチュリーの少々荒い鼻息が聞こえてくるが、それも自らの高鳴る鼓動の前にかき消されていった。横島の手が、肩に置かれる。
「小悪魔ちゃん……」
「ひゃ、ひゃいっ!」
焦りと緊張から呂律が回らない。二人の視線は重なり、それは端から見れば恋人同士の距離に映る。だが、如何に二人の距離が近くても、心の距離はどうしようもない程に

離れていた。
「小悪魔ちゃん――あんまり、はしたないパンツは穿かないようにな」
「はい！　――はい？」
「むきゅ？」
　火照った体が一瞬で冷めるのを自覚する。彼は一体何を言っているのだろうか。しかし、どうやら彼にはまだ言い分があるようで。
「いや、確かに背伸びをしたいという気持ちは分かる。俺も中学生位の時にはえっちな本が欲しかったりしたからな」
（……それとこれとは話が別なのでは）
「確かに幼い体にえっちな下着というギャップは背徳感を煽り、年齢にそぐわない色気を纏うだろう。だが忘れちゃいけない。それが齎すのは下品さと隣り合わせな物だという事を」
　彼の的を射ている様でまるで見当外れな話はまだまだ続いていた。正直小悪魔には理解出来ない様な内容だったのだが、パチュリーは「勉強になるわね……」と理解を示している。話はそれからも続き、下品さと大胆さの境界だとか清純さと色気は共存出来るのかなどなど。
「……という訳で、『下品じゃない程度にセクシー』なのが最高だと思うんすよ！」

「そうね。私はちょっとくらい下品でも意中の相手を射止められるのなら良いんじゃないかって思っていたけれど、貴方の話を聞いて考えが変わったわ」
「分かってくれましたか、パチュリー様！」
「ええ、それほどまでに貴方の意見は素晴らしかった……！」
「……それじゃあ、私は向こうの方の片付けをしてきます」
まさかこんな話で二人が意気投合するとは思わなかったのだろう。小悪魔の視線は二人の熱にも負けない程に氷雪を纏っている。しかし、小悪魔としては機嫌が悪い訳ではなかった。確かにあの状態であんな話になり、二人がこんな風に盛り上がって自分を置き去りにしたことに不満はあるし、正直な所パチュリーに嫉妬を感じていない事もないのではあるが……。
「……ふふっ」
二人から見えない場所で小悪魔は微笑んでいた。いや、微笑むと言うよりはにやついている。
（あんな事になりましたが、憧れのシチュエーションを体験出来たのはラッキーでしたね。後で輝夜さん達に自慢しましょう……♪）
小悪魔は愛想が良く、永遠亭の面々とも既に友情を育んでいる。特に輝夜と馬が合うようで、暇な時にはガールズトークに花を咲かせている。憧れのシチュエーションと

は、どうやら後ろから支えられたり、本棚と挟まれたりといった状況の事を言っているようだ。

　完全に余談だが、横島忠夫という男は小悪魔にとってかなり『萌えポイント』が高い。自分との身長差・体格差、自分達に対する無自覚なタラシっぷり、仕事中のオールバック、美形過ぎないそこそこの容姿。実はスケベな所も小悪魔的には重要だったりする。彼女には『強く求められたい』という願望があるようだ。

　小悪魔が二人の視界から完全に消え、話も一段落ついた。横島は改めてパチュリーに向き直る。

「そんでパチュリー様。ちょっと聞きたい事があるんすけど」

「……？　何かしら。もしかして小悪魔には聞けないような事？」

「いえ、小悪魔ちゃんにも後で聞くんですけどね。咲夜さんや美鈴にも聞いたんすけど、パチュリー様は色々と客観的に見てそうですし」

「……ふむ」

　パチュリーは横島の言葉から聞きたい事を推理する。咲夜と美鈴、客観的というキーワードから『二つ』に絞る。

「それで、二人の内どちらの事を聞きたいのかしら？」

「……お見通しっすか」

パチュリーはふふんと胸を張る。美鈴にも負けない大きさの胸は衣服を持ち上げ、少々揺れた。どうやら上は着けていないらしい。横島はその見事な双丘に視線どころか顔面が吸い込まれそうになるが、何とか踏みとどまりパチュリーに疑問を投げかける。

パチュリーは横島の質問に「なるほど」と頷き、横島に自分なりの答えを返す。

「そうっすか……」

横島は腕を組み、うんうんと唸り始める。パチュリーはどこからか取り出したクッキーをかじりつつ、そんな横島を観察する。

(面倒見が良いというか、おせっかいというか……。まあ私は嫌いじゃないし、あの子も大丈夫でしょ)

パチュリーは咲夜手作りのクッキーの旨さに何度も頷き、満足げに「むきゅー」と鳴いた。

時刻は既に零時過ぎ。満月に程近い月夜、紅魔館の数少ない窓から夜空を眺める者が居た。悪魔の妹、フランである。

俄に曇り始めた空は月を隠し、月の柔らかな光を闇で覆い尽くす。曇りゆく空と同様に、フランの表情もまた暗い。何事か考え込んでいるのか、視線はずっと一点を見つめたままだ。そこに、誰かの足音が響く。

「……？」

「……あれ、妹様？　こんな時間にこんなとこでどうしたんです？」

「執事のおにーさん！」

通りかかったのは横島であった。フランは横島と分かると暗い表情を消し、パッと笑顔を浮かべた。

「おにーさんこそどうしたの？　人間が起きているには遅い時間だよ？」

「いやー、お嬢様に呼び出されまして。何でも大事な話があるから一人で来るようにって、咲夜さんから聞きまして」

「……お姉様が？　一体なんだろうねー？」

疑問と共に顔に表れたのは、先程同様の暗い表情。だがそれを瞬時に消し、またいつもの様に笑顔で話す。

「何でしょうねー？　ま、きっと悪いことじゃないとは思うんすけど。……それじゃ、お嬢様を待たせる訳にもいかないんで、失礼しますね」

「うん、引き止めてごめんなさい」

「いえいえ、んなことはないっすよ。妹様も早めに休んでくださいね。それじゃあおやすみなさいっす、妹様」
「はーい、おやすみなさーい！」
横島はフランに手を振り、その場を後にした。廊下を進み、やがて角を曲がって完全に姿が見えなくなると、フランは笑顔を消した。また窓から空を見上げる。
「……」
横島はそれを廊下の角から見ていた。彼は少しの間彼女を見守っていたが、やがて小さく溜め息を吐き、レミリアの部屋を目指す。

「遅かったな。何かあったのか？」
「途中で妹様にでくわしまして、ちょっと話し込んじゃいました。すんません」
「いや、別にいいさ。怒っているわけじゃないからな」
ここは紅魔館に存在する個室の中で『二番目』に大きい部屋。天蓋付きのベッドややけに豪奢な玉座としか言いようのない巨大な椅子など、部屋の主の趣味を大きく反映し

た個性的な部屋となっている。
　レミリアは玉座に着きワイン片手に足を組んでふんぞり返っている。本来なら小さな子供の王様ごっこにした見えないのだろうが、彼女の総身から発せられる王気（オーラ）がそれを否定している。
　レミリアはワインで唇を軽く濡らす。
「それで呼び出した理由だが……。どうやら、咲夜やパチェ達に色々と聞いて回っているらしいな？」
「……」
　目を細めての質問に、横島は苦笑を返す。悪いことをしたわけではないのだが、何となくばつが悪い。そんな彼の様子に、レミリアもつられて苦笑を漏らす。
「さっきも言った通り、別に怒っているわけじゃない。……お前が聞きたいこと、それは一体何だ？　内容までは聞かなかったんでな。どうせなら本人から聞こうと思って呼び出したのよ」
　そう言ってレミリアはワインを呷る。よく見れば玉座の隣には小さな机があり、その上にはワインの瓶が数本とつまみのチーズが置かれていた。彼との話も肴にするようだ。レミリアの瞳は好奇心に輝いている。
「……そんじゃ、遠慮なく聞きますけども」

「何だ？」

横島は軽く息を吸い、ゆっくりと息を吐く。そういった所作がレミリアの期待を膨らませ、気分を高揚させていく。

「聞きたいことっていうのは、妹様――フランちゃんについてっす」

「――ほう？」

レミリアの表情に真剣味が宿る。

フランが見つめる窓の外。ついに空からは雨の雫が降り注ぎ、大地を濡らしていく。

この雨は、朝を迎えても止まないであろう。

フランの瞳に、この空はどのように映っているのだろうか。

第十二話

『妹様と雨』

～了～

第十三話『フランちゃんと晴れ』

ある館に、孤独な少女が居た。
その少女は精神を少々病んでおり、情緒が不安定な為か館の外に出してもらえず、また自分でも外に出ようとはしなかった。
それは彼女の持つ『能力』のせいでもあり、当然彼女もそれは承知している。だからこそ出歩こうとしなかったとも言える。
『ありとあらゆる物を破壊する程度の能力』
それが、孤独な少女の持つ力――。

「……」
昨夜から降り出した雨は陽が昇って朝になっても止むことはなく、光を遮り、大地をまんべんなく濡らしている。

そんな憂鬱な空を窓から見上げるのは、執事服を着た少年。横島忠夫だ。

彼は昨日、紅魔館の住人達からとある少女の話を聞いていた。『悪魔の妹』フランドール・スカーレットについてである。

彼はフランにちょっとした違和感を抱いており、その事について皆から話を聞いたのだ。

そうして様々な事が分かった。そして、不用意に踏み込んではいけない事であることも理解したつもりだ。しかし、彼はどうしても気になってしまうのだ。

「……やっぱ、こんなに考え込むのは俺らしくないかなぁ」

自他共に認める女好きな彼。彼は美少女の笑顔が特に好きだ。泣き顔も好きではあるのだが、やはり可愛い女の子には笑っていてもらいたい。

だから、彼は真正面からぶつかってみることにした。元来小難しい事を考えるのは苦手であるし、彼はいつだって煩悩と直観と感情と本能に従って動いてきた。今回もいつも通り、自分らしく行動してみることにする。

「さて、行きますか」

彼は、フランが心から浮かべる笑顔を見てみたいのだ。

今横島が目指しているのは、紅魔館の地下にあるフランが長きに渡って引きこもっていた部屋……ではない。

長い廊下を歩き、ある意味では紅魔館の最奥とも言える場所。館内に存在する個室の中で、『一番』大きな部屋。そこが、現在のフランの私室である。

（何だかんだ言っても、お嬢様って結構いいお姉ちゃんしてるんだよな）

横島は苦笑を一つ浮かべるが、それもすぐに消えてしまう。ドアの前で深呼吸し、気分を落ち着かせる。何せ今から行うのはフランの心に土足で踏み込むかの様な事だ。あらゆる意味で横島の心身は緊張してしまう。

繰り返すこと十回。いつまで経っても緊張がほぐれる気がしない彼は、両頬をパンと叩き、無理やり気合いを入れる。

「……よし！」

頬は赤く腫れてそこがヒリヒリと痛み、目には涙が滲んでいる。何とも情けない姿だが、それでも先程までよりは大分緊張もましになった。横島はゆっくりとドアを四回ノックする。

「……はーい？」

返事はすぐに返ってきた。『いつも』とは違う、感情の起伏を感じさせない様な声音。

横島は咳払いを一つし、まずはドア越しに挨拶をする。
「おはようございます、妹様。横島っす」
「っ!?　お、お兄さん……!?　ど、どうしたの、急に……何かあったの?」
最初の声は先程と同じように平坦なものだった。だが、それも次の言葉までには、いつも通り明るさを感じさせるものになっていた。
ドアが開き、フランが顔を覗かせる。横島はもう一度「おはようございます」と挨拶をした。
「……おはよう、おにーさん!」
フランは最初戸惑ったようだが、やがてにっこりと笑い、横島に挨拶を返す。その笑顔を可愛らしく、天真爛漫といった風情だ。
「はい。実は、ちょっと妹様とお話がしたくて」
「お話……?　いいよ、ちょっと恥ずかしいけど、お部屋でお話しよっ」
「失礼しまっす」
ころころと笑って横島を部屋に招き入れるフラン。
言ってしまえば、横島は彼女のそんな笑顔があまり好きではない。
部屋の中は思っていたよりも殺風景だった。女の子らしい物はベッドの上にいくつかあるぬいぐるみ、小さな机の上にある手鏡ぐらいだろうか。その手鏡も特に装飾はな

く、シンプルな物だ。
　フランは机の近くにある椅子ではなくベッドに腰掛け、近くにあった茶色い熊のぬいぐるみを抱きかかえる。
「それで、フランと何をお話したいの？」
　今のフランの目は純粋に輝いている。横島との会話に期待しているのだろう。横島はフランに気取られぬ様に、深くゆっくりと深呼吸をする。鼓動が早くなり、胸が痛む。今から、この輝きを失わさせてしまうのだ。
「……紅魔館の皆から、妹様の事を聞いてみたんですよ」
「――――え？」
　最初は呆けたような表情。それが次第に困惑に変わり、最後には恐怖や怯えを孕んだ表情へと歪んでいく。
　横島は胸と胃がキリキリと痛む感覚を覚えるが、それを無視し、次の言葉を放つ。
「色々と聞きました。普段の様子、今までの生活、妹様が持つ能力の事も」
「……！！」
　フランが抱いた感情の表れか、体が小刻みに震え始める。ぬいぐるみをぎゅっと強く抱き締め、顔を俯かせている。
「ありとあらゆる物を破壊する程度の能力……。確か、物体の壊れやすい『目』を掌に移

動させて、握ることで壊すんでしたよね」

フランは横島の言葉を聞き、小さく、だがはっきりと頷いた。体の震えも徐々に止まり、顔を上げる。その表情は昨晩浮かべていたものと同じ、暗いものだった。

「……そうだよ。それが私の力なの。あの椅子を見て?」

感情の起伏を感じさせない、平坦な声。恐らくは、それこそが彼女本来のものなのだろう。横島はその声に従い、フランが指差した椅子を見る。

フランが、手を握り締めた。

「……!」

それと同時に粉々に椅子は破壊された。何の予備動作もない、横島の感覚ですら何も感知出来ない破壊の力。

「こんな風にね、手を『きゅっ』てしたらみんなドカーンってなっちゃうんだ。だから、私はずーっと地下室に居たの」

自分の掌をじっと見つめるフランの目は、先程よりもずっと暗い。意図して踏み込んだ横島としても、その目に吸い込まれてしまいそうになる。何かを超越した者の目とは、それだけで何らかの力を持っているものなのだ。

「地下室に居たら何も壊さないで済むしさ、誰も傷つかずに済むしさ、だったら私もその方が良いかなって」

それらは誰かに言われたことなのだろうか、普段とはイントネーションが違っていた。恐らくではあるが、きっと横島は知らない人物であろう。

「私は壊すしか出来ないんだもん。なら、どこかに引きこもってないと危ないから……」

その言葉は、諦観に満ちていた。『どうしようもない』『仕方のないことだ』……そう自分に言い聞かせてきたのだろう。

横島はそういった気持ちを理解しているつもりだ。自分にも、同じ様な経験はあるから。

「妹様……」

横島の頭に過ぎるのは後悔の念。分かっていたはずだと、どうして踏み込んだのかと、今更ながら押しつぶされそうになっている。

いつだってそうだ。彼は煩悩と直観と感情と本能に従って行動し、失敗しては泣きを見る。今回もそうだ。不用意に彼女の心に踏み入り、傷つけてしまった。

もっとやりようがあったのではないか、他に方法はなかったのか。渦巻くのはそんな疑問ばかりだ。

だが、彼はそうやってぶつかっていくことしか出来ない。彼は、他の方法を知らないから。相手を傷つけてしまう。それでも、迷いながらでも、全ての美女と美少女の為を思い、行動に移す。

――それが、彼が一番『自分らしい』と思える事だから。

「……」

横島は大きく、深く深呼吸をする。フランが不思議そうに眺めているが、彼は気にしない。やがて肚が据わったのか、フランと視線を合わせる。

「なあ、フランちゃん。これは俺の師匠の一人の受け売りなんだけどさ」

「え……？」

今までの彼と雰囲気が違ったせいか、フランは戸惑ってしまう。または、急に口調が変わったせいか。横島はやはりフランの様子を気にせずに続けることにする。

「勇気や愛や思いやりの無い力は滅びるんだそうだ」

「……」

その言葉に、フランは自らの掌を見つめる。その目は、自嘲に満ちていた。

「……私は壊すしか出来ないから、勇気も愛も思いやりも、きっと何も無い。お兄さんの師匠って人は、きっと私とは正反対な人なんだろうね……」

「ま、簡単に正気を失って修行場を完全に崩壊させちゃったりしてたけどな」

「うん……え？」

思わず頷いてしまったが、何やら聞き捨てならない台詞が聞こえた様な気がした。驚愕のままに横島をまじまじと見つめるフランを、やはり横島は気にせずに話を進める。

「確かに、勇気や愛や思いやりの籠もってない力は俺の師匠みたいに壊すしか出来ないかもしんないけどさ」
「う、うん……」
少々横島の師匠が気の毒に感じてきたフランではあるが、彼はそれに対する言及を許してくれそうにない。ひとまず相槌を打ち、話を続けてもらうことにした。
「ならさ、その力に勇気や愛や思いやりを込めるのは、何だと思う？」
「え？　えっと……」
フランは咄嗟には答えられなかった。彼女は横島が言うようなものとは無縁だと思い込んでいたから。
横島はフランの前に跪き、彼女の手を優しく握る。少々の驚きと戸惑いの視線が横島の視線と絡み、息が詰まる。
「力なんてものはさ、それ自体は良いも悪いも無いものなんだよ。要は使い方次第で決まるもんなんだけども……」
「……」
「フランちゃんの能力もな、それ自体には何の色も付いてないんだよ。無色の力に勇気や愛や思いやりとかっていう色を付けるのは、その力を使うフランちゃん自身なんだ」
「……私が？」

要領を得なかったのか、フランは首を傾げている。横島は説明が下手な自分に苦笑めいたものを浮かべるが、自分の言葉でフランを諭していく。

「さっきフランちゃんは自分には勇気も愛も思いやりも無いなんて言ってたけど、そんなことはないんだよ。それは俺でも分かってるつもりだ」

「でも、私は……」

「『でも』じゃないの」

横島の言葉に納得がいかなったのか、途中で言葉を遮ってしまう。だがそれも更に彼に遮られてしまい、口を出せなくなる。

「皆から話を聞いたって言ったろ？　普段のフランちゃんって、実は大人しくていつも落ち着いた感じなんだってな」

「……」

そう、フランは元来大人しい気性の持ち主であり、『普段』彼女が見せている溌剌とした明るい姿は取り繕ったものなのだ。それを見せるのは大多数の者達。本来の自分を見せるのは、実の姉であるレミリアのみ。だがそれも、久しくその顔を見せていない。

では、何故フランは普段の自分を取り繕う必要があったのか。

「フランちゃんはさ、怖かったんじゃないかな？　嫌われたり、怖がられたりするのが」

「……っ」

フランの顔色が変わる。図星だったのだろう。

誰だって、他人には良く見られたいものだ。そうすれば友人も得られるし、寂しさを覚えなくてもいい。特にフランは五百年近くも孤独に過ごしているのだ。得られた絆を失ってしまうかもしれないという恐怖は、彼女には耐え難いものなのだろう。

彼女の普段の姿は、ああ振る舞えば嫌われないで済むかもしれないという考えから齎されたものだった。事実、それは成功したと言っていい。妖精メイド達を参考にしたそれは、周囲の不興を買う様なものではなかったから。だから、横島は思うのだ。

「そうやってフランちゃんは怖がりながらでも、頑張ってきたんだよな。……それはさ、きっと凄い勇気が必要なことだと思うんだよ」

「……！」

そのフランの行動は横島も理解出来るし、それを謗るなど、彼には考えられなかった。むしろ尊敬していると言ってもいい。彼は煩悩が絡むと執着が強いが、それ以外では諦めたり身を引く事の方が遥かに多い。

もし横島がフランと同じ様な状況に陥った場合、フランの様に自分を変えようとせずに周りに当たり散らし、更に孤立化していたことだろう。だから横島はフランのその行動にどれだけの勇気が必要かが想像出来るし、それを成功させているフランを尊敬しているのだ。

そして、フランが周囲に嫌われたくないと思ったのは、その周りの皆が好きだからに他ならない。好きだから嫌われたくない。それは至極当然のことだ。

「さっきの話を聞く限り、フランちゃんは皆に迷惑を掛けない様に自分から引きこもったんだよな？　皆の事が好きだから、皆を傷付けたくないからって。なのに、自分は誰かに対する愛情を持ってないって言うのか？」

「あ……」

そう。フランはただ気付いていないだけなのだ。今までの人生のほとんどを孤独に過ごしたのではそれも仕方がないが、彼女の心に刻まれたトラウマが、彼女自身を大きく歪ませる原因の一つとなっている。

そして、気付いていないことはまだまだある。

「あの時……俺が元の世界の話をした時さ、俺を思って泣いてくれたんだろ？　フランちゃんは誰かを思いやる心をちゃんと持ってんだよ」

「――――っ！」

「それだけじゃねーさ。フランちゃんは妖精メイドの皆にも色々話しかけたり、手伝ったりしてたんだろ？　俺が執事になった日とかさ、フランちゃんが勇気を出して話しかけてきてくれたから今の俺達の関係があるんだ。……それを作ったのは、フランちゃんなんだよ」

「私……が……？」

フランの脳裏を過ぎるのは、今までの妖精メイド達との会話。確かに自分から話しかけてみた。それは羨ましかったからだ。

多くの友人と話し、遊び、働き、日々を忙しくも楽しげに過ごしている姿が、堪らなく羨ましかったからだ。

自分は彼女達に邪険にされないか？　邪魔にならないだろうか？　自分に付き合ってくれるだろうか？　疑問は尽きない。それでも、皆と同じ様に過ごしてみたかった。

怖かった。自分が受け入れられるか、ちゃんと返事を返してくれるのか、怖がられないだろうか……。考えれば考える程に胸は痛み、足は竦む。何日も、何日も悩んだ。

そこで、まずは一言だけの挨拶から始めてみることにした。ただ近づいて、「おはよう」と言ってみる。最初は相手も驚いたようだが、すぐに微笑んで「おはようございます、妹様！」と、挨拶を返してくれたのだ。

その時はすぐにその場から離れ、部屋へと戻った。自分には理解出来ない高揚と、何故か目から溢れる涙を誰にも知られたくなかったから。

その日から、彼女は笑顔の練習をした。「どうせ壊してしまうから」と、装飾も何も無い手鏡をレミリアに貰って、心に焼き付いたレミリアやメイド妖精達の笑顔を参考にして。

初めはやはり上手くいかなかった。笑顔は引きつり、話題も無く、毎度部屋で涙を流していた。それでも、諦めたりはしなかった。やがて自然と笑顔を作れる様になり、メイド妖精達の話にもついていける様になり。徐々にではあるが、それがフランの中に本物として根付いていった。

横島の言葉を聞いてかつての事を思い出し、どうしても気になる事が生まれた。衝撃に心が揺さぶられるなか、それでもフランは横島へと疑問を投げかける。

「どうして……」

「ん？」

「どうして、お兄さんはそこまで私の事を気にかけてくれるの……？」

フランの瞳は揺れている。今までこれほどまでに自分に踏み込んできた者を知らない動揺から、何か不安の様なものを覚えたようだ。正体不明の居心地の悪さ。それは、横島も抱いたことのある感情である。

横島は頭をポリポリと掻き、「ん～……」と唸る。どうやら言葉を探しているようだ。

「最初はさ、ちょっと気になった程度だったんだよ。皆に向ける笑顔と俺に向ける笑顔が違うからさ。……まあ、今まで女所帯の所に俺みたいな男が入ってきたら、そりゃまあ別物になるだろうけど」

「……」

「そう思ってたんだけど、何日も過ぎる内にどうやら違う事に気付いてさ。多分だけど、不安になったんだよな？　昔みたいに」
「……分かるんだね」
「まあな。人の顔色を伺うのは俺もよくやってることだしな」
彼の場合のそれはまた色々と意味合いが違うのであるが、フランがそれを知る由もない。逆に、不思議な親近感を覚えた。
「意外と分かるもんなんだぜ、本当の笑顔かどうかってのはさ。だからさ、見てみたくなったんだよな。フランちゃんの本当の笑顔を、真っ正面からさ」
そう言って笑う横島の顔に、フランに今まで覚えの無い感情の衝撃を味わった。思考は鈍り、何やら体の感覚はふわふわと頼りないものとなる。
何かを話さないといけない。そう思って声にした言葉は、自分が思っていた事とは違うもので。
「……お兄さんって、じこちゅーさんなんだね」
「うっ」
「自分が見たいからってさ、嫌な事を思い出させて、ぷらいべーとな事に首を突っ込んで」
「ぐっ……」

「……それじゃあ、モテないよ？」

「がはぁっ!!?　やはりワイの行動は空回りする運命なんか……？」

容赦のないフランの口撃に、横島はついに吐血をしてしまう。特に最後がキツかった。

しかし、フランはフランで焦っていた。こんな事が言いたいわけではなかった。胸に去来する、正体不明の感情を表す言葉を掛けたかったのだ。だが、口から出たのは横島を責めるものばかり。

フランは情けないやら泣きたいやらで、きつく目を閉じてしまう。

――そして、気付く。

自らの手を優しく、柔らかく包んでいる温もりに。

フランは目を開く。その温もりの正体は知っている。知っているはずなのだ。だというのに、それは今まで体験したことが無いかの様に熱を帯びている。掌と、胸と。

だが、その熱さは決して不快なものではなく、何物にも代え難いものに思える。気付けば、ぽつりと言葉を零していた。

「手……」

「え？」

「お兄さんの手、私の手と全然違うね」

「ん……？　そりゃ、俺は男だし、体もフランちゃんよりデカいしな」
「そうじゃなくて……」
　フランは横島の手を、自らの頬へと持っていく。頬へと触れる彼の手に、自分は何だか不釣り合いな気がして。
「大きくて、暖かくて――とっても、優しくて」
　それでも、その手の温もりに縋りたくて。フランは横島の手に頬を寄せる。姉と似ている様で違う温もりに、次第にその感情は増大し、頬だけでなく全身で感じたいと思うようになった。
「……ねぇ、お兄さん」
「ん、何？」
「ぎゅって、してほしいな」
「ぎゅっ、て……つまり、抱っこ？」
「うん。……ダメ？」
　不安に揺れる瞳で上目遣いに尋ねるフランに、横島は軽く頷いた。立ち上がり、ベッドに腰掛けているフランに覆い被さる様にその小さな体を優しく抱き締める。
「……こんな感じ？」
「ん……、もうちょっと強く」

「分かった」

フランの言葉に応える様に少しずつ力を強め、苦しくならない程度に強く抱き締める。フランはそれに満足そうに息を吐き、自らも横島の背に腕を回す。まだまだ小さなフランではその手は回しきれないが、彼の体の大きさがフランには心地よかった。大きく、暖かい彼の胸に顔を埋める。

どうすれば、この温もりをいつでも感じられるようになるのだろうか？

フランは考える。この温もりを離したくない。彼に側に居てほしい。ならば、それはどんな関係が望ましいのか。

執事では駄目だ。彼は姉であるレミリアの執事であり、フランの執事ではない。もっと、近い関係。側に居るのが当たり前で、それこそ家族の様な――――。

「……そうだ」

「ん？」

どうやら答えに行き着いた様だ。フランはもぞもぞと顔を動かし、横島の胸元から顔を見上げた。

「お兄さんのこと、お兄様って呼んでいい？」

「うぇっ？」

フランの突拍子もない言葉に、横島は驚いた。

彼女の考えはこうだ。

『お姉様と同じ様に、兄弟姉妹ならずっと一緒に居られる。だからお兄様と呼んで、兄になってもらおう』

フランの年齢からは考えられない様な思考だが、周囲の環境によって多くの事を学べなかった彼女には、それが最善の方法であると信じられた。横島に与えられた温もりも、彼へと芽生えた感情も、それを知らないが故の言葉だった。

「いや、流石にそれは……お嬢様に殺されるというか、咲夜さんに殺されるというか……」

「あー……」

フランは横島から返ってきた言葉に「確かに」と頷いてしまうが、それでも諦めきれるものではない。なので、妥協案を示す事にした。

「じゃあじゃあ、二人きりの時だけにするから。それならいいでしょ？」

その必死な様子に横島は圧されてしまう。少しばかり考え込んでしまうが、ここで断るのは可哀想に思えた。二人きりの時だけならば……と、承諾を返すことにする。

「あー、分かったよ。二人っきりの時だけな？」

「……！　うんっ！　これからもよろしくね、お兄様！」

横島の言葉に、フランは表情をパッと明るくして答える。それは、彼の前で初めて見

せた表情で……。
「……思った通りだったな」
「ん、何がなの？」
首を傾げるフランの頭を優しく撫で、横島も微笑んで告げる。
「いやさ、フランちゃんの笑顔は可愛いなーって」
「えう……っ!?」
今のフランにその笑顔と言葉は効果抜群の様で、顔を一瞬で真っ赤に染め、何も話せなくなった。あわあわと慌ててみせるフランだが、結局どうすることも出来ずにまたも横島の胸に顔を埋める事になる。
激しく高鳴る鼓動に、燃え上がる様に熱くなる頬。だが、フランはそれを不快に思わない。もっと、もっと感じていたいと思えてならない。
だが、今のフランに出来ることと言えばそれを横島に悟らせない様にしようということ。彼女にとって正体不明な感情であるが、何故だか恥ずかしいという感覚が湧き上がってきていた。
「……お兄様のお名前は『横島忠夫』だよね？」
「そうだけど……？」
ぼそぼそと呟く様なフランの声に、横島は訝しがる。それが自分に対する照れ隠しな

どとは夢にも思わないのだろう。
「横島お兄様……は、よそよそしいし。忠夫お兄様も言いにくいし……」
（言いにくいかな……）
　少しだけショックを受ける横島だったが、突如フランは顔を上げて彼の顔を見つめる。その勢いに少々体がビクついてしまった。
「あのね、『ただお兄様』はどうかなっ？」
　フランの瞳は輝いている。彼女の目が『これ以外に考えられない』と如実に語っている。
「……まあ、フランちゃんがそう呼びたいなら」
　何となく、いまいち釈然としない横島だったが、フランがそう呼びたいと言っているのだ。今更否定する要素など何も無い。
「えへへ、さっきも言ったけど……。よろしくね、ただお兄様」
　フランの笑顔は繕ったものではなく、横島の前でも本来の輝きを発揮している。以前までの笑顔が曇りだとすれば、今の笑顔は正に『晴れ』と言えるだろう。
　無邪気に澄み渡る青空の様に晴れた笑顔を浮かべ、フランは横島へと甘える様に頬を擦り寄せる。窓の無い部屋故に二人は気付いていないが、昨夜から降り続いていた雨はとうに止んでいる。

空と同様に、フランの心にも晴れ間が訪れたようだ。
「よっし、とりあえず今日はいっぱい遊ぼうか！」
「え、でもお仕事は？」
「いや、実は昨日お嬢様に話を聞きに行った時に『今日は休みにするから、フランちゃんと遊ぶように』みたいな事を言われて」
「……そうなんだ」
どうやら、レミリアにはこうなる事が予想出来ていた様だ。フランは今更ながらに姉の凄さを再認識する。
「……じゃあ、何でいつもお仕事の時に着てる服なの？」
「……これ以外にはパジャマしかないんだよ。元々着てた服はズタボロになったし、浴衣は永琳先生に返したし……」
横島の頬に、熱い雫が流れ落ちていた。フランはそっと視線を外す。
「そういえば、もうすぐ朝食の時間だし、そろそろ食堂に行こうか。その後で色々と遊ぼう」
「うん。色々教えてね、ただお兄様」
二人は連れだって歩き出す。部屋から出れば、互いの呼び方は普段通りに戻っていた。今までと異なるのはフランの表情。自然な、可愛らしい笑顔である。

フランと仲良く歩きつつ、横島は内心安堵の息を吐いていた。正直に言えば、ここまでスムーズに事が済むとは思っていなかったのだ。

皆から話を聞いた中で共通する事項はいくつもあったのだが、特に気を付ける様に言われたのがフランの精神状態だった。

長きに渡る孤独な生活と、持って生まれた能力。諸々の事象が重なって不安定となったフランの精神は、狂気を宿していると言っていい。

だが、今のフランにはその片鱗すら伺えない。その秘密は、レミリアの誘導とフランの行動にあった。

レミリアは永琳と出会う前からパチュリーの知恵を借りてフランのメンタルケアを長い間施しており、それによってフランの心には余裕が生まれるまでに回復していた。そしてその余裕がフランの孤独を埋める為の願望に繋がり、結果妖精メイド達との交流を持つに至る事となる。

フランの心は、既にかつてより遥かに安定している。それを成したのは、紛れもなく

レミリアのフランに対する愛情だ。

フランは、まだその事に気付けていない。また気付いたとしても、レミリアは知らない振りをするだろう。横島は何となくだが、今回フランと絆を深める事が出来たのは、レミリアのお陰だと察している。それは単なる勘であり確証などはないのだが、そう思った方が嬉しくなるので、そう思うことにした。

「……一応、お嬢様にお礼を言っておくかな？」

「どうかしたの？」

「いえ、何でも。……お嬢様も遊びに誘います？」

「……うん、そうする」

横島の提案に是と答えるフランも、レミリアに何かを感じているのかもしれない。いつかフランがそれに気付く日まで、レミリアもまた何も語らない。

「何して遊びましょうかねー？」

「皆で楽しく遊べるのがいいねー？」

二人は仲良く、楽しい遊びの時間を夢想する。勿論、その顔には笑顔を浮かべている。

今日は、快晴となりそうだ。

第十三話
『フランちゃんと晴れ』
～了～

すっかり陽も沈んで夜も更けて、フランはお気に入りの枕を持ってパジャマ姿でレミリアの部屋を訪れていた。
「しかし何年ぶりかしらね、フランが一緒に寝たいだなんて」
「うん、ちょっと思い出せないけど……たまには、いいよね？」
「ふふ、あんまり多いと姉離れ出来ないかもね？」
「そんなことないもーん」
レミリアとしては「いつでもウェルカム！」なのだが、そんな事はおくびにも出さな

い。姉としての意地がそこにはあった。
「さ、もう夜も遅いし早く寝るわよ。……吸血鬼としては間違ってる気がするけど」
「はーい。……お姉様、今更ー」
レミリアは部屋の明かりを消し、フランの待つベッドへと入る。途端、フランはレミリアに抱きつき、姉の腕を枕にし、小さな肩に顔を寄せる。
「ちょ、何？　寝づらいんだけど」
「えへへへ～」
レミリアの問いには答えず、ただ幸せそうに笑う。何を言っても無駄と理解したのか、レミリアは枕にされた手でフランの頭を優しく撫でる。そうして益々深まる妹の笑顔に、レミリアも同じく微笑んだ。
昼間に遊び過ぎたのか、ほどなくフランは眠りについた。その顔は久しく見ていないくらいに明るいものであり、今日という日が余程楽しかったのだろう。
「んん……、お姉……様……」
フランの寝言にレミリアは頬をだらしなく緩ませる。ここまで素直に甘えられたのは本当に久しぶりだった。可愛らしく擦り寄るフランの頭を、再度撫でる。すると、フランはまたも口をむにゃむにゃと動かし始めた。
「んふふ……ただお兄様ぁ……」

フランの口から出た言葉に、レミリアは少々驚いた。
「全く……どんな夢を見てるのかしらね」
そう言いつつ、安心を与える様にレミリアは最愛の妹の頬に口付ける。今度はフランの頬がだらしなく緩んだ。レミリアはフランを起こさないようにそっと身を離し、ベッドから出て部屋を後にする。
長い廊下を歩き、辿り着いたのは横島の部屋だ。レミリアは音を立てずに部屋へと入り、既に熟睡している彼の寝顔を拝見する。幸いな事に、メイド妖精は一人も居ない様だ。
「ふむ……中々可愛い寝顔じゃないか」
そう言ってレミリアは優しく微笑んだ。右手に極限までに凝縮させた魔力球を出現させ、握り潰し長大な槍と成す。それを高々と振り上げた。
「死ぃぃぃぃねぇえええええーーーーっ!!!」
「お止めくださいお嬢様あああああっ!!!」
「ふがっ!?　何っ!!?　もしかしてバインバインな美人のねーちゃんが夜這いをかけに来たんか!?」
突然の大声に有り得ない事を宣いながら飛び起きた横島が見た光景は、何か巨大な槍をこちらに向けて振り回すご主人様と、それを必死に止めている職場の先輩の姿だっ

た。寝起きにこれは流石にカオス過ぎるのか、横島でもまるで着いていけない。そもそも咲夜はどこに居たのだろうか。

「離しなさい咲夜!!　こいつ、『ただお兄様』！　『ただお兄様』よ!?　何でたった一日でそんな仲良くなってんのよ!!　私なんか影で『あいつ』呼ばわりされてたのにっっっ!!!」

「お気持ちは重々承知しています！　とにかく落ち着いて……っていうかまだ根に持ってたんですか!?」

「何かよー分からんが堪忍やー！　多分仕方なかった事なんやー!!」

ここで横島はミスを犯した。彼はレミリアが何か自分に対して怒っているのでとにかく謝ることにした。だがそれはタイミングを誤ったせいか、レミリアに盛大な勘違いをさせることになる。

「私がフランに『あいつ』呼ばわりされてたのが、仕方なかった事ですって……!!?」

「う〝ぇえっ!?」

「貴様っ！　そこに直りなさい!!　今宵のグングニルは血に飢えておるぁあああああ!!」

「アッー!?　嫌ぁあああああ!!?」

「お嬢様あああああ!!?」

こうして、紅魔館の夜はやかましく更けていくのだった。

第十四話『世界の意思』

青空が広がる中、太陽は頂点からやや傾き、多少柔らかくなった日差しは午後のゆったりとした時間に心地好い温もりを与えてくれている。
背後の館から聞こえてくる可愛らしくも猛々しい掃除の雄叫びを無視しつつ、テラスで優雅なティータイムを味わう少女は流れくる風に髪を揺らし、従者が淹れた紅茶を一口含んでぽつりと呟く。
「鬱陶しい天気ねぇ……。曇ってくれないかしら」
少女の発した台詞に周りの者は苦笑いを浮かべる。少女の名はレミリア。吸血鬼の少女は晴れが嫌いなようだ。ちなみに掃除の雄叫びはもう慣れてしまった。
「境界の力で何とかならないの、紫？」
レミリアは頬杖をつきながら、同じテーブルを囲む少女へと目を向ける。
「出来ない事はないけど、そんな事に能力は使いませんわよ、レミリア」
「ちぇっ」
唇をとがらせてぶーたれるレミリア同様に紅茶を啜りつつ答えるのは八雲紫。彼女

は横島の事もあり、頻繁に紅魔館を訪ねるようになっていた。
紫はカップから口を離し、吐息を一つ。空になったカップを数秒眺めた後、自分の給仕を担当している者に声を掛ける。
「横島君、おかわり貰えるかしら？」
「了解っす、紫さん」
紫の声に答えるのは紅魔館の『執事』横島。彼は紫のカップにおかわりの紅茶を注ごうとするが、そこで自らの失敗に気付く。
「あっ」
「ん……？　どうかしたのかしら」
「あー、いやその……。ちょっと、残りが一杯分もないみたいで……」
彼が持つ銀製のティーポットは随分と軽くなっていた。その横島の言葉にレミリアの給仕をしていたメイド長の目が光る。
「ちゃんと確認しないとダメでしょう。ポットには適量を入れたの？　少なすぎたんじゃないの？」
「うう、すんませーん……」
咲夜の叱責にしおしおと小さくなる横島。そんな横島に苦笑を浮かべつつ、紫は彼に助け船を出すことにした。

「まあまあ、咲夜もお説教はそこまでにして。横島君、出来れば淹れ直してきてもらってもいいかしら？」
「……ふう、仕方ないわね。紫もああ言ってるし、早く淹れ直してきなさい」
「うっす、では失礼しまっす」
横島はあからさまにほっと息を吐くと元気良く返事をして紫からカップを受け取り、一礼してテラスにほど近い簡易厨房へと歩き出した。その姿に咲夜は溜め息を吐き、紫はくすくすと笑っている。紫には横島の姿が微笑ましく映った様だ。
簡易厨房に着いた横島はまずやかんに水を入れ、火にかけて沸騰させる。五円玉程の大きさの泡がボコボコと出だしたら火を止め、まずは洗ったカップとポットにお湯を注ぎ、全体を温める。
次に横島はポットのお湯を捨て、ティースプーン一杯分の茶葉を入れ、勢いよく沸騰したてのお湯を入れる。そしてすぐに蓋を閉め、蒸らす。横島はカップに注いだお湯も捨て、そのままレミリア達の下へと戻る。
「すんません、お待たせしちゃって」
「気にしてませんわ」
横島の頭を下げながらの言葉に、紫は非常に大人びた微笑みで答え、横島の頬を朱に染める事に成功した。横島は少々照れながらもポットの蓋を開け、ティースプーンで軽

く混ぜる。
その後カップに茶漉しで茶殻を漉しながら、濃さが均一になるように回し注ぐ。これで紅茶の完成だ。
「では、どうぞ」
「ありがとう、横島君」
横島は淹れた紅茶をソーサーに置き、紫に一礼する。紫はゆっくりとした動作でカップを手に取り、口へと運ぶ。そのたおやかな動きに横島の鼻の下がだらしなく伸びるが、それを指摘する者はこの場には居なかった。
「……ふぅ」
紅茶を一口飲んだ紫の口から、吐息が漏れる。その稚い見た目に似合わぬ色気を含んだ仕草に、横島の煩悩が刺激されてしまう。
（いかん！　いかんぞーっ!?　紫さんは実年齢はともかく見た目はロリ！　わいはロリコンやない、わいはロリコンやない……）
端からみればそう気にする程の年齢差（見た目）ではないのだが、美神の言葉はまるで呪詛の様に横島の心を縛り付けているようだ。
「横島君も、紅茶を淹れるのが上手くなりましたわね。お茶だけじゃなく、他の家事も格段の進歩ですわ」

柔らかく微笑みながらの言葉。それだけで横島は先程考えていたことを頭からすぽんと放り出し、だらしのない笑顔を浮かべて照れる。

「そうっすか？　いやー、紫さんにそう言ってもらえると自信つきますよ！」

でれでれと鼻の下を伸ばし調子に乗る横島。だが、確かに彼の家事能力はこの二週間で驚異的な進歩を見せている。

彼は元々ものぐさであり料理や掃除などは寧ろ苦手な部類であった。しかし紅魔館の執事として雇われ、仕事を通して咲夜に教わる内に彼の生来の器用さと、「美少女達に良い所を見せたい」という煩悩が合致。結果、彼はかつてからは考えられない程の家事能力を手に入れた。

現在最も力を入れているのは料理であり、美少女達の胃袋を掴む為に日々精進し、メキメキと腕を上げている。咲夜や一号などに料理を教わり、今や彼の執事服に収まっていた『妖精のメモ帳』には、既に五十を超える料理のレシピが記されている。

……ただし完璧に調理出来るのは十分の一もなく、彼の得意料理は固ゆで卵、半熟ゆで卵、両面焼きの目玉焼き、片面焼きの目玉焼き、卵かけご飯である。実質三品であった。

そんな様で調子に乗るのは百年早いと思ったのか、咲夜が横島の淹れた紅茶を一目見てダメ出しをする。

「……まだまだ蒸らしが足りないわね」
「え？　蒸らし……っすか？」
　横島は咲夜の視線の先にあるティーポットを見やる。
「ええ。貴方がポットに入れた茶葉はかなり大きめのはずよ。違う？」
「確かに大きめの茶葉でしたけど……」
「やっぱりね。茶葉の蒸らし時間は、茶葉の大きさによって変わってくるの。この匂いの感じからして蒸らし時間は恐らく一分～二分といったところね。でもこの茶葉の大きさなら、ベストの蒸らし時間は四分。大きい茶葉程蒸らす時間は長くなるのよ」
　咲夜はポットの蓋を外し、茶葉を確認して横島に指摘する。横島はメモ帳を取り出し、その内容を記入していく。折しも始まった指導だが、面白くないのは紫だ。自分が美味しいと感じていた物に横からダメ出しされてはそれも当然といったところか。
「私は充分に美味しいと思うのだけれど……」
「まあ、貴女にはこの位で丁度良いのかもね」
「……どういう意味かしら、咲夜？」
「そのままの意味なのだけれど？　……紫」
　二人の間の空気が瞬く間に緊張していく。お互いに名前で呼び合う程には打ち解けている二人だが、何故か唐突にこのように喧嘩腰になる。レミリアなどは面白そうに見

物を決め込むのだが、たまらないのは横島と妖精メイド達だ。慌てて横島が二人の間に割って入る。

「ストップストップ！　美少女は仲良く、ねっ!?」

その必死な形相に咲夜は毒気を抜かれ、紫は美少女と呼ばれた事に気を良くし、引き下がる。レミリアは少々不満顔だが、迷惑を被るのはいつも末端の者なのだ。横島としては我慢をしてもらいたい。

「……そういえば、横島さんはそろそろ休憩の時間ね」

「あー、そういやそうっすね」

咲夜が懐から取り出した懐中時計を確認し、横島もそれを咲夜の肩から覗き込む。どうやらこういった事が自然と出来るくらいには二人の距離は近付いている様だ。

「後片付けは私がしておくから、横島さんは休憩に入ってもいいわよ」

「え、良いんすか?」

「そのくらい構わないわよ。これからいつも通り修行なんでしょう?」

「まあ、そうっすね」

「じゃ、行ってきなさい。多分、また美鈴が来るかもしれないし」

そう言って咲夜は本館の方を見る。すると、その言葉の通りに美鈴はやって来た。前回と違い、傍らにフランを連れて。フランを日差しから守る為にさした赤い日傘は美鈴

によく似合い、二人の可憐さを際立たせている。
「お兄さーん！」
「ああ、ちょっ、妹様！　そんなに走ったら灰になりますよー!?」
しかし横島の姿を見たフランは元気良く日傘から飛び出し、背中の羽からブスブスと黒煙を上らせながら彼へと走り寄る。美鈴はフランのいきなりの行動に反応出来ず、ここにレミリアによるお仕置きが決定された。
「お兄さん捕まえたー！」
フランは横島に勢いよく飛び付き、彼の腹部に顔を擦り寄せる。鳩尾を貫く思わぬ衝撃に苦悶の声を上げかけるが、それは何とか堪えることが出来た。
「うぶぅ……、妹様、飛び付くのは危ないっすよ？　特に俺が」
「私は大丈夫だよ？」
「俺が危ないんすよ？」
お互いに真顔な為に異様な程シュールな光景が広がっている。美鈴は少々躊躇ったが、このままでは吸血鬼であるフランが文字通りに灰になってしまう。言葉によるツッコミはしなかったが、日傘をさし、そっとフランを日差しから守る。
「お兄さんいつも修行してるんだよね？　私も見ていいかな？」
「構いませんけど……面白くはないっすよ？」

「大丈夫。お兄さんなら、ずっと見ていられるし……」
「はあ、そうっすか」
顔を赤らめ上目遣いのフランに、首を傾げて少々困惑気味に返事をする横島。彼はフランの言葉の意味が分からなかった様だが、近くから見ていた者はその意図に気付いた。
（妹様、もしかして……？）
言わずもがな、美鈴である。フランに芽生えている感情に気付いた様だ。
（そっか……妹様が……）
横島に笑いかけるフランを見る。その表情はいつも見ているものとは違っていて、美鈴は嬉しい様な、寂しい様な気持ちを味わっていた。
……しかし、胸底に生じた僅かな焦燥と、微かな痛みには気付けずにいた。
「危ないから離れててくださいよ？」
「はーい！」
どうやら美鈴が思考に耽っていた間に話はついた様だ。美鈴は「いけない」と頭を振り、横島から離れるフランを、今度は日差しから守る。
そうして、横島はいつも通り霊力の制御を試みる。

「あら、今日も今日とて横島君は修行してるのね」
「図った様なタイミングで現れるのね、永琳」
横島と入れ替わる様に姿を見せたのは永琳だった。彼女は空いている席に着き、咲夜にお茶とお茶菓子を要求する。
「時間が掛かってもいいから、美味しいのをお願いね」
「了解。では、一旦失礼致します」
咲夜は永琳の要求に一礼して答え、まるで一瞬で消えたかの様に姿を消す。時間を止めて移動したのだろう。レミリアも永琳に文句は言わず、咲夜にその行動を許している。レミリアは頬杖をつきながら、永琳に質問を投げかける。
「横島が言うには霊力が一気に強くなったらしいけど、何でだと思う?」
それは皆が抱えている疑問であった。彼の霊力量は最早人間を超越し、現人神である早苗すらも凌駕している。彼の力は、まさに異常と言える。そんな横島の霊力に対して、永琳と紫は一つの仮説を立てていた。
「……彼の話を聞く限り、元の世界では随分と多くの神魔族を体内に受け入れたみたいね」

「……それで？」
「韋駄天、百目の神、堕天した竜神」
「他にも竜神の息吹を注がれたり、竜神の装具の使用、加速空間での修行、人間同士の霊力の同期合体……」
二人はそこで一度言葉を切る。レミリアは自分の質問と返ってきた答えが噛み合わず、首を傾げている。二人は申し合わせたかの様に同時に語る。
「極め付けに、魔神の模倣」
永琳は横島から聞いた事実にただ溜め息を吐くばかりであった。彼という人間の頑丈さに興味が尽きない。
「横島君、何で生きてるのかしらね」
「言い過ぎと言えないところが辛いですわ」
紫も頭痛を耐えるかの様にこめかみを押さえている。レミリアはいまいち釈然とせず、とりあえず続きを促してみることにした。
「……それで？」
「普通魔神をトレースしたらそれだけで肉体は塩の柱になりそうなものだけど、彼は更に魔神の思考を読むなんてこともしてるしねぇ……」
「よく頭が物理的に破裂しませんでしたわね……。まあ、それだけ彼が人外の存在と相

性が良い証拠となりますわね」
「……相性でどうにかなるもんなの？」
「決定打とはいかないものの、重要な要素であることは間違いないわね」
永琳は楽しげな笑みを浮かべながら嬉々として語る。紫も同様だが、レミリアはそんな二人に冷めた視線を送る。
「あんたら、そのもったいぶって重要な部分を話さないのはやめてくれない？　そんなだから『胡散臭い』とか『信用ならない』とか言われるのよ？」
「……ごめんなさい」
レミリアの鋭いツッコミに二人が出来るのは、ただ謝ることだけであった。
（何か二人とも精神的に脆くなってるような……？）
しょんぼりとうなだれる二人にレミリアは疑問を抱くが、彼女は「まあ、そんな日もあるか」と納得する。とりあえずは話の核心を聞く事が最優先だ。
「んで、結局何で横島の霊力は強くなったのかいい加減答えなさいよ」
レミリアの催促に紫と永琳は一瞬目を見合わせる。永琳はレミリアに直り、人差し指を立てる。
「確証なんてまるでない、単なる仮説なのだけど……それでも良いのなら」
永琳の言葉にレミリアは無言で頷く。その表情は「早くしろ」と言わんばかりであり、

永琳達も余計な事は言わないことに決めた。
「まず、横島君が霊力を身に着けてから今日まで、まだ二年も経っていないのよ。更に家系も彼が知る限りでは何の変哲もない一般的なもの。前世は優秀な陰陽師だったらしいけど、その人は子孫を残せなかったそうよ」
「だというのに、彼は今も霊能者として驚異的な進化をし続けている。前世の影響を加味しても、これははっきりと異常な成長速度と言えますわ。そこで私達が思い至ったのが、神魔族を体内に受け入れたこと」
「……ふむ」
「本格的な検査をしなければ確証は得られないけど、横島君は受け入れた神魔族の力の一部を自らの物にしていると考えられるわ」
「……はあ？　んじゃ何、今の力が横島の本当の力だっての？」
永琳の言葉は、レミリアには到底信じられないことだった。神や悪魔の力の一部を奪う等、人間に出来るとは思えない。彼女は大口を開けて驚いた表情を二人に晒してしまったが、今更それを気にする様な間柄ではなかった。今は話の内容に集中する。
「韋駄天が体内に入った時、これは瀕死の重傷を治す為ね。韋駄天は横島君の傷を治しながら、強大な神通力を以て悪霊達と戦った」
――それにより、竜神『小竜姫』に素質を見込まれていた横島は莫大な霊力を操る

感覚を刷り込まれる。

「竜神の息吹により『心眼』というアイテムを手に入れ、霊力を扱う術を身に着ける」

――そして彼は霊能者としての覚醒を始めることとなる。

加速空間での修行により、魂の柔軟性が飛躍的に上昇。更に重傷を負い、百目の神が体内から治療。竜神の装具を身に着け、更に強大な霊力を揮う感覚が刻み込まれる。死にかけの堕天した竜神が体内で復活し、彼の魂に圧迫をかけ、より強靱な物へと昇華する。

そして彼は世界最高の霊能者と同等の霊力を手に入れ、同期合体が可能になる。しかし、彼の成長はそれだけに留まらない。

その最たる例が魔神の模倣である。いくら文珠を使用しているとはいえ、魔神の力とはただそれだけで制御出来る物ではない。

確かに文珠はあらゆる奇跡を起こすことが出来る。確かに横島の魂は霊能者の中でも屈指の柔軟性を誇るだろう。あらゆる要素により魔神は本来の力の十分の一、百分の一の力も発揮出来ていなかっただろう。

だが、魔神とはそこに『在る』だけで世界を侵す者。そんな不確定要素だけで魔神の力を模倣出来るなど、『有り得ない』のだ。

では何故彼が魔神の力を模倣出来、更に何の問題もなく魔神の力を使用出来たのか。

それは、今までの経験にある。
体内に神魔族という人間の枠に収まり切らない暴力的なまでの圧倒的な存在を受け入れ続けてきたのだ。それも、魂が人外の領域に傾かず、あくまでも『人間』のままで在り続けている。
元々人外と相性が良いというのもあるだろう。彼の魂が柔軟性に富むのもあるだろう。それらの要素と、経験から来る『慣れ』、そして知らず知らずの内に彼に刻み込まれた、言わば『神魔の領域』が彼を守ったのだ。
では、横島が手に入れた強大な霊力。これは何故元の世界で発揮されなかったのか。
「これも憶測だけど、恐らくは『宇宙意志』が関わっているはずよ」
「……宇宙意志？」
「ええ。横島君によると宇宙意志とは宇宙の修正力。正しい形にあろうとする力のことらしいですわ」
横島達が元の世界で魔神に勝利することが出来たのは、宇宙意志のおかげと言って良い。宇宙意志の介入が無ければ、今頃元の世界は綺麗さっぱり消え去っていたはずだ。
では、そもそも宇宙意志とは何なのか。紫と永琳は一つの推測を立てる。それは、神・魔・人・妖全ての存在が心の奥の奥で繋がっている巨大な意識。本来の物とは異なるが、これを便宜的に『集合的無意識』としよう。

集合的無意識は全ての存在と繋がっている。当然世界が消えればそこに存在する全ての存在が消滅し、同時に集合的無意識も消滅することになる。言わば集合的無意識とは全存在の防衛反応であり、それは全存在の価値観を以て発揮される。

「『世界を滅ぼされるわけにはいかない』。だから魔神の妨害をするっていう具合にね」

永琳の言葉にレミリアは疑惑の目を向ける。

「じゃあ、横島の場合は『人間がこれほどの霊力を持つわけがない』。だから本当の霊力を使わせない……っていうわけ？　それはあんまりにもあんまりだと思うけど」

「まあ、確かにそうよね。私達の中では『ご都合主義の神様』って感じの認識もあるけれど……」

「全ての存在の意志の集合体なら、それくらいは容易いでしょう……多分」

神魔は人間の力をあまりにも軽視し過ぎるきらいがある。横島達に最も近しい小竜姫にすらその傾向があるのだ。加えて、こちらの世界と違い元の世界は今も神魔が人間と共に在る世界なのだ。その影響は推して知るべし。

「なーんか、分かったような分からんような……」

「まあ私達もそんな感じだしねぇ……」

「もう少し情報が欲しいところですわね」

レミリアは既に頬杖を止め、体をテーブルにぺたっと張り付けている。だれたその姿

は非常に可愛らしく、紫達の目尻も自然と下がる。
「あ、そうだ」
と、ここでレミリアがパッと体を起こす。今までの話により、何事か思いついた様だ。
「横島がスキマの中で見た変な幻覚って、宇宙意志だったのかしら？」
「ああ、確か巨大な力のビジョンだったかしら？　流石に、単なる幻覚よ」
永琳はレミリアの考えを否定する。もしそれが宇宙意志なのだとしたら、横島は元の世界の全存在から『追放』されたということになる。
永琳はこの二週間横島の近くで過ごしてきた。だから分かる。彼は、非常に好ましい人物であると。
嫉妬もする。傲慢にもなる。大食であり、怠惰な時もあり、何かにつけて強欲で八つ当たりから憤怒する。そして何より色欲が強い。だが、優しく、思いやりがあり、他人の痛みを自分の痛みの様に感じられる人物だ。
その感情豊かな彼こそを『人間らしい人間』なのだと断言出来る。だから、彼が宇宙意志に世界から放逐されたというのは永琳は認められない。永琳は、横島の事をそれ程に思っている。
「……」
レミリアは単なる思い付きで言ったことだったのだが、紫は深く考え込んでしまう。

「どうかしたの、紫？　じっと黙り込んじゃって」
「……ええ、少し気になる事があって」
何かを深く思案する紫の顔は険しくなっている。一体どうしたことかと永琳達は首を傾げる。
少々緊張した空気の中、紫はぽつりと呟いた。
「……横島君が感じたという、こちらの世界とあちらの世界の引っ張り合い。本当に、『こちらの世界』が横島君を引っ張っていたのかしら」
「……なるほど、そういうことね」
その言葉を瞬時に飲み込めたのは、永琳だけであった。レミリアは頭上にクエスチョンマークを浮かべ、二人に問い掛ける。
「……どういうこと？」
レミリアの言葉に紫達はこくりと頷き、自らの仮説を説く。
「さっきも言ったように、宇宙意志とは世界の修正力。横島君がスキマに落ちて別の世界に行きかけた時、引っ張り上げようとしたのは間違いなくこれでしょう」
レミリアは頷く。宇宙意志とやらが本当に世界の修正力なら、別世界なんていう訳の分からないものと関わりたくはないだろう。
「では、横島君を『こちら』へ引っ張った力。これは一体何者が発していたのか。宇宙意

志という在り方からして、『あちら』の世界だけにしか存在しない力とは考えにくい。ならば、当然『こちら』の世界にも宇宙意志は存在するはず」

「……何となく、言いたいことは分かったわ」

そう、宇宙意志が世界の修正力だとするならば、今回の様に異世界の住人が現れる事など有り得ない。

ならば、宇宙意志は世界の修正力ではないのだろうか。

答えは否。宇宙意志とは間違いなく世界の修正力であり、世界の安定を望む意志である。ならば、『こちら』も『あちら』と同様に異世界との関わりなど無用のはず。

――『何か』が介入していたのだ。

安定を望む『世界の在り方』を『書き換える様な何か』が――

「のわあああああーーーーーーっ!!?」

「っ!?」

突如響き渡る爆音と悲鳴。その発生源の方に目をやれば、横島がうつぶせに倒れてプスプスと黒煙を上げていた。

「ああっ、お兄さーん!?」

「よ、横島さん大丈夫ですか!?」

倒れ伏す横島にフランと美鈴が急ぎ駆け寄る。その時には既に横島には傷一つ無く、すっと立ち上がっているのだから理不尽極まりない。

先程までの緊張した空気を一瞬で吹き飛ばされ、紫達には逆にだらけた空気が流れ始めた。

「本当にとんでもない回復力ね……。これも神魔族が体内から傷を治したりした影響なのかしら?」

「横島さんの話からすればあの回復力は遺伝らしいけれどね。はい、お茶」

永琳は咲夜から紅茶とお茶菓子を受け取る。どちらも良い香りがし、とても美味しそうだ。

「あら、ありがとう咲……咲夜!?」

「相変わらず神出鬼没ですわね……」

「紫に言われたくはないけれどね。中々にタイミングを掴み辛かったわ」

今まで出を伺っていたのだろうか。そう考えると咲夜のこれらの行動も可愛らしく思えてくる。

「んあー、何で上手くいかねーんだ?」

「気の流れは問題ないんですけどねえ……」

「あんまり無理しちゃだめだよ？」

横島達は揃って首を捻っている。何も問題はないはずなのに一向に霊力の制御が上手くいかない。

フランは横島の服の裾を握り、心配そうに横島を見上げている。横島はそれを受けて「大丈夫だいじょーぶ」とフランの頭を優しく撫でる。くすぐったそうに身をよじる彼女を見る美鈴は、どこか羨ましそうに見えた。

「横島君、上手くいかない時は一度何もかも忘れて、初心に戻ってみたらどうかしら」

ここで永琳から助言が入る。静かだが自信に溢れる年長者のそれに、横島も従うことにする。

「あんなんで上手くいくの？」

永琳の助言に懐疑的なのはレミリア。彼女の疑問に、永琳は自信を持って頷く。

「あまり難しく考え過ぎなければね。……さっき美鈴も言っていた様に、彼の霊気の流れには何の問題もないの。体もすこぶる健康だし、そうなると考えられる可能性は精神的なもの」

「今まで自在に扱えていた霊力が制御不能になれば、当然焦りますわ。今までの感覚で使おうとしても使えない。なら一度初心に戻り、新しい霊能として扱うようにすれば、格段にスムーズに扱える様になる……といったところかしら」

永琳の言葉を引き継ぎ、紫はレミリアに説明する。永琳は「概ねそんな感じね」と頷き、レミリアは「そんなもんかしら」と未だ釈然としない様子だ。

皆が見守る中、横島は霊力の輝きに包まれる。

「がんばれー、お兄さーん！」

「落ち着いていけば大丈夫ですよっ」

皆の応援の声が響く。横島は霊力の感触を確かめながら、深く深く思考に入る。

（……初心。初心か……）

思えば横島はいつも行き当たりばったりに戦いに巻き込まれている。

美神令子除霊事務所にアルバイトとして入って以来、激動の日々を過ごしている。

初めて霊能という物を身に付けた時、彼には『心眼』という心強い師匠が居た。

初めて自在に霊能を操れる様になった時、彼は命を懸けた戦いをしていた。

伝説の霊能を体現した時、彼の意識は自分には無かった。

（何で霊能を身に着けられた……？　どうやって霊能を身に着けたんだ……？）

横島の思考は更に深くなり、霊力の奔流も勢いを増していく。それは横島の心身に負荷を掛け始めた。

「……っ」

「横島さん!?」

「……これは、少しまずいかしら」

横島に焦りが生まれ、それが霊力の制御に乱れを呼んだ。今はまだ小さな揺らぎだが、このままでは博麗神社の時の様に、被害を齎すかも知れない。紫は永琳に視線を一つやる。もしもの時は境界の力で横島の霊力を抑えるつもりの様だ。

（……思い出せ。俺が初めて自力で霊能を扱えた時の事を。何だ？　何が原因だった？）

横島の額に冷や汗が浮かぶ。それは次第に数を増していき、彼の頬を濡らしていく。霊力の風音が鳴り響く中、それでもフラン達は横島にエールを送る。ほとんどが爆風でかき消されるが、それでも僅かに横島に届いた。

「……」

横島はフラン達を見る。懸命に自分を応援してくれている。

永琳達の方も見る。フラン達同様にこちらも応援してくれており、レミリアなどはブンブンと両手を振り、必死という言葉がよく似合う。

そんな彼女達の姿に、横島は何としても霊力の制御を成功させたいと思う。

――瞬間、霊力の奔流が僅かに和らいだ。

その感覚は横島の奥底まで到達し、ある一つの事実を思い出させた。

「……そうだ」

横島はぽつりと呟く。全て思い出せたのだ。

GS資格試験の時も、香港での戦いの時も、猿神との修行の時も、そして、『アシュタロス』との戦いの時も――

自分が最高の力を引き出せたのは、いつだってそうだった。

「みんな……女の子の為だったんだよな」

横島は左手を突き出す。その掌に、莫大な霊力が集中していく。横島は皆を見つめ、柔らかく微笑んだ。

(こんな美少女達が俺を応援してくれてんだぜ？　出来ない事なんかあるわきゃねーよな！)

一際大きく輝きを放つ横島の左手に、皆は目を眩ませた。やがて強烈な光は収まり、彼の掌にはキンキンと甲高い音を放つ、碧緑の小さな盾が収まっていた。

「ははっ、やっぱ俺って時々すげーじゃん……」

皆の視界が戻り、横島の掌に収まっている盾を認めた瞬間、喜びの声が響き渡った。

「いよっしゃーー！　サイキックソーサー完成じゃー!!」

「やったね、お兄さん!!」

左手の盾をブンブン振り回す横島に、フランが飛びつく。完全に安定した霊力の盾は暴走などするはずもなく、柔らかな光を放ちながら佇んでいる。

『サイキックソーサー・プラス』
正式名称『スペシャル・ファイヤー・サンダー・ヨコシマ・サイキック・ソーサー・プラズマ・ストライク』
それは従来の様な六角形ではなく、円形をしていた。表面も丸みを帯び、より盾らしくなったと言える。
霊力を極限まで圧縮すると球状になるが、これはその領域に一歩踏み込んだ霊能と言えるだろう。彼の切り札の様な全能に近いものではないが、更に強力になったこの盾は、彼と彼が守りたいと思う存在を守り通すことだろう。
「ふふふ……これならいける、いけるでぇー！　遂に俺の時代の到来やーーー!!　あ、妹様は危ないからちょっと離れてくださいね」
「？　はーい」
引っ付いていたフランを美鈴の元に返し、横島は更なる飛躍を遂げようとする。だが、調子に乗った者に成功など訪れるはずもなく。
「さあ現れろ！　ハンズオブグローおぎゃあっ!!?」
今の彼に栄光の手を発現出来るはずもなく、制御を失った霊力は横島の右半身を覆い尽くし、まるで化け物の様に膨れ上がった。
「ああっ!?　お兄様の右半身が霊力に覆われて化け物みたいになっちゃった!!?」

「そんな!?　横島さんの右半身が霊力で覆われて化け物みたいに――って、お兄様?」

美鈴がフランの言葉に気を取られている間に、横島はあっさりと気を失ってバタンと仰向けに倒れ込んでしまった。その音に正気に戻り、まずは横島の介抱をするべく視線を戻したのだが……。見てしまったのだ。

「わあぁ……」

「ちょ、うえぇっ!!?」

フランは興味深げな声を。美鈴は羞恥と驚愕の声をそれぞれ上げる。

横島の執事服は高級だが普通の生地を使った、普通の執事服だ。となれば当然霊的な処理などされておらず、高密度な霊力の前では無力である。

であれば。横島の強大な霊力に対し、無力の執事服はどうなったか。

――当然破れて丸見えである。

正中線を中心に、右半分が丸見えだ。勿論下も『ぼろん』である。

その様はフラン達だけでなくレミリア達も目撃しており、永琳などは「やっぱり凄いわねぇ……良いモン見たわぁ」と感嘆の息を漏らしている。レミリアも「うっひゃー……」と驚いているようだ。

そんな中、特に顕著に反応する乙女が一人。

「なん、えっ!?　ひや、うそ、ちょ……えええ!!?」

顔を真っ赤に染め、口元を両手で押さえて声を漏らす者。八雲紫である。そのテンパり具合を咲夜が冷静に分析する。

（意外にうぶなのかしら……？　案外乙女チックだったりするのかも）

盛大に狼狽する紫だが、視線は一カ所から動かない。それはそれはもう見事なガン見と言える。そんな紫が追い討ちの言葉を拾う。

「あの横島が随分と簡単に気絶したわね……昨夜ちょっとヤり過ぎたかしら」

「っ!!?」

紫の体がビクンと跳ねる。

「ああ、紅魔館全体に声が響いてたわねぇ。お盛んなのはいいけど、こっちの迷惑も考えてもらわないとねぇ」

レミリアは天然だが、永琳は明らかに分かって言っている。そのあからさま過ぎる程にあからさまなニヤニヤ笑いは、見る者を大変イラつかせる威力を秘めている。

そんな笑みにも現在の紫は気付けない。

（何を……そんな幼い体で一体ナニをしたの、レミリア!?）

紫が勘違いに気付き、顔から火を吹くまで……あと、数分。

「どうなることかと思ったけど、『世は並べて事もなし』ってね」

「いやいや、どこがよ。あれを見て何でそんな感想なのよ」

レミリアのツッコミも永琳には馬耳東風。横島が新たな力を身に着けた今日という日は、やはり何でもない日常の一幕なのであろう。

第十四話
『世界の意志』
～了～

第十五話『満月の夜』

横島が幻想郷に墜落して初めての満月の日の朝。ゲストルームの窓からぼうっと晴れ渡る空を見つめる幼い少女が居た。

頭に兎の耳を生やし、少し癖のある黒い髪を風になびかせる彼女の名は因幡てゐ。紅魔館でお世話になっている、永遠亭の住人の一人だ。

てゐの頬はやや紅潮し、目もとろんと潤っている。熱を持った頬を撫でる風が心地よく、彼女の心に芽吹いた感情と共に、心身を柔らかな感覚に浸らせてくれている。

静かに流れる時間の中、不意にてゐの兎の耳がぴくりと動く。ゲストルームに向かって来る足音を捉えたのだ。

「さて、お仕事お仕事」

向かって来た人物はそのままガチャリとドアを開け、入室してくる。それはメイド服を着た鈴仙であった。

「どうしたのさ鈴仙、そんな格好して？」

「あれ、てゐ？　ここ最近まるで姿を見なかったけど、どこで何してたのよ？」

てゐの質問に返ってきたのは、鈴仙の質問であった。確かにてゐは十日間以上皆に姿を見せていなかったので、それも仕方がないと言える。

「いやぁ、ちょっとその……お師匠様に色々と……」

てゐは視線どころか顔を大きく背けて小さな声で答える。彼女は額から冷や汗を流し、大きく動揺しているように見える。

「……何かされたの？　お仕置きとか、そういうの」

「何かって……」

何気ない鈴仙の質問だったが、それはてゐにとっては特大の地雷であった。突如としてゐの体は小刻みに震え始める。全身から冷や汗をだらだらと流し、目の焦点も合わなくなった。

「うぶっ!?　ぅおえっ、ぅおおうぇっ!?」

「ちょ、てゐ!?　しっかりしてー!!」

その場に膝をつき、盛大にえずき始めるてゐ。これには鈴仙も驚き、慌てて介抱を始める。何やらとんでもないトラウマを刻み込まれたようだ。

「はー……！　はー……！　はー……！」

「本当に大丈夫？　どこかで休んだ方がいいんじゃないの？　私の部屋のベッド貸すけど……」

「だ、大丈夫。大丈夫だよ。……ダメだダメだ、思い出すなら楽しい事。さっきの事を思い出せー……」

ふらふらと頭を揺らしながら、てゐはぶつぶつと何事か呟き始める。次いで自らの頬をむにむにと触り、しまいには怪しくにやけ始めた。その姿は傍目からは異常であり、鈴仙の目からも異常に見える。

「て……てゐ……？　本当にどうしたの……？」

「んー、いやなに、ちょっと執事さんに会った時の事を反芻してるんだよ」

「え……？　執事さんって、横島さん？　彼と何かあったの？」

（ん……？）

てゐの変調に横島が関わっていると知り、多少勢いが増す鈴仙。その事を少々訝るてゐだったが、実は誰かに話したくて仕方がなかったのか、途端にいつもの調子に戻る。

「んふふ、そうだね。まあ、鈴仙には話してあげようか」

何故か上から目線で膨らみの無い胸を張るてゐ。鈴仙はそんなてゐにイラッとしながらも、静かに彼女の話に耳を貸すのであった。

「いやー、今日の朝飯も旨かったなっと」
咲夜や妖精メイドの皆との朝食が済んだ後、横島は膨らんだ腹をさすりつつ永琳の部屋の掃除に向かっていた。
「しっかし、何で永琳先生は俺を名指ししたんだ？　厄介な機材が多いって話だし、咲夜さんの方が安全確実だと思うんだけどなぁ……？　聞いても答えてくんなかったし」
横島は独り言を呟き、首を傾げている。彼が朝食に入る前、主達の食事中に頼まれたのだ。その際に永琳は視線を逸らしていたので、また何かうっかりをやらかしたのかもしれない。
そうやって一人廊下を歩き、やがて永琳の部屋へと到着した。
「んじゃ、失礼しまーすっと」
横島は少々の不安と、多大な期待を抱いて入室した。上手くすれば永琳の下着を入手出来るかもしれない。（その後命の保障は出来ないが）
「んじゃまずは部屋の確に……ん？」
横島は室内の状況を確認しようとしたのだが、室内に何やら霊感に引っかかる気配を感知した。それは恐れや怯えといった感情を発しているものであり、彼は何らかの超感覚により、その気配の主は美少女だと確信。ちなみに彼の額には稲妻の様な閃光が迸っ

ていた。
「これは……助けを求める美少女の気配!?　待っててくださいお嬢さん！　今、貴女の横島忠夫が参ります!!」
何故永琳の部屋からそのような気配がするかなど、彼は欠片程も気にしない。おっ嬢さーーーん！　と叫びながら部屋を家捜しする彼の姿は、紛うこと無き変態のそれであった。
結果、対象はすぐに見つかった。否、『そこ』に居るであろう場所を見つけた。
――クローゼット。そこから夥しい程の昏いオーラが撒き散らされている。
（うわぁ……）
横島が思わず腰を引く程の圧倒的負のオーラ。どうやら彼の霊感は同時に二つの事を察知出来ないらしい。つまり、『美少女が助けを求めているよ！』という事を捉えても、『ただし凄く苦労するよ！』という事は捉えられないのだ。
しかし、だからと言って横島は諦めることをしない。ここ半月あまりナンパをしていない。バインバインの美女と出会っていない。――ぶっちゃけ色々と溜まっているのだ。
このクローゼットの中にバインバインの美女が居るかもしれない。シュレディンガーの猫だって箱を開けないと結果が分からないのだ。横島は自らの煩悩に忠実に従

う事にした。

「大丈夫ですかお嬢さん！　この横島忠夫が来たからにはもう大丈……夫……？」

クローゼットを開け放ち、精一杯笑顔を浮かべる横島であったが、そのクローゼットの中に居た者の姿を見て、みるみる内に勢いが減衰していった。

「……っ!?」

「……兎の耳？」

バインバインの美女など当然居ない。そこに居たのは、膝を抱えて俯く、頭部に兎の耳を生やした幼けない少女であった。

急に開いたクローゼットに彼女はがばっと顔を上げる。震える視線が横島を捉えた瞬間、彼女の感情が爆発した。

「ご……ごめんなさい！　ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい!!　私の……私のせいで……!!」

「ちょおーーー!?　何？　何が!?　何の話!?」

いきなり土下座して謝罪の言葉を叫ぶ少女。その声は精神的に追い詰められているせいか、痛々しいまでに掠れ、涙を含んでいる。

突然の事に激しく狼狽する横島であったが、今も謝り続ける少女の言葉と、永琳や紫から聞いていた『異変の発端』についての情報から、目の前に居る少女こそが自分が幻

想郷に墜落することになった原因だと推測する。
（確か、あの宴会の夜に俺の話を聞いてた子の一人だよな？　名前は……）
「もしかして……君が、『因幡てゐ』……ちゃん？」
「……っ」
横島の問い掛けに、少女は頷く事で答えた。
「……そうか」
てゐの事は紫達から聞いていた。当然言いたい事は山の様にあるし、それを弱みに『一発！』などと、最低な事も考えていた。しかし、目の前の少女を見ていると。怯え、震える少女を見ていると、そんな邪な願望は綺麗さっぱりと無くなってしまった。勿論てゐが想像以上に幼い見た目をしているという事もあるが、流石の横島も泣き濡れる少女に何かを出来る程腐ってはいなかった。
「……ふむ」
「っ」
吐息一つ、言葉一つにも敏感に反応し、ビクビクと震えるてゐ。そんな彼女に対して横島が取った行動は……。
「……えっ？」
――まず、優しく抱き締める事であった。

それは抱き締めるというよりも、もしくは抱き上げるという表現の方が近いかもしれない。自らの頭部に当たる胸の奥から、横島の力強い鼓動が伝わってくる。

突然の行動に戸惑うてゐだったが、それと同時に温かさ、安らぎといった感覚も覚えていた。それは横島がてゐを落ち着かせようと発した優しい霊波の影響もあるだろう。

「あー……、言いたい事は色々とあったんだけどさ。とりあえず、今は反省してるってことで良いんだよな？」

横島は腕の中のてゐにゆっくりと、強い刺激を与えないように優しく問い掛ける。てゐは始めこそ今の体勢に戸惑っていたがやがて収まり、おずおずと頷く事で答える。

この怯えよう、謝りようからそれは真実であると窺える。ならば今の横島には、もはやてゐを脅かすつもりはない。

「反省してるんならさ、もういいよ。俺はもう怒ってねーし、今後ああいう事をしなけりゃ、それで」

「で、でも、私のせいで執事さんは幻想郷に墜落しちゃったんだよ!?　元の世界に帰れなくなったんだよ!?」

横島の言葉にてゐは声を荒げて反論する。話に聞いていたのと、随分反応が違う様に思える。それほど追い詰められているのか、はたまた別の何かがあるのか。

「おいおい、まだ帰れないって決まったわけじゃねーんだって。紫さんも頑張ってくれ

てるし、俺だって切り札を『使えれば』帰れる様になるかもしんねーんだし」

「でも……、でも……！　私が、あんな事をしなければこんな事には……！」

やはりてゐは納得が出来ない。それも仕方のない事かもしれない。彼女は悪戯好きで知られているが、それは一応、全てが悪戯で済む範囲で抑えている。

今まで誰かを悪戯で死に至らしめる事はなかったし、何らかの障害が残る様な物もなかった。然るに今回の横島に降りかかった事態。これは、彼と、彼の周囲全ての人生を狂わせた事となる。

恐らくは、そこを永琳に突かれたのだろう。一体どのような仕置きを施されたは定かではないが、彼女の心身の磨耗具合がその苛烈さを物語っている。

「……まあ、責任は感じちゃうよな。でも、もう起こっちゃった事だしさ。これは受け売りだけど、『こうしなければ良かった』とか、『ああしておけば良かった』とか、そういう事はこれっきりにしようぜ？　これからは『今何が出来るのか』とか、『この先何をすればいいか』とか、そういう事を考えていった方が良いと思うんだよ」

横島の声音が変わる。それは今までの明るいものから、若干の昏さが滲んだ、静かに響き渡る様な声であった。

「……」

てゐは思わず横島と視線を交わす。優しさの中に潜む、どこか悲しげな色。自分を優しく抱き締める少年は、同じ事を言われた事があるのだろうか？　それは、もしかしたらあの夜に語っていた事が原因なのだろうか？

「ほら、顔が涙と鼻水でぐしゃぐしゃだぞー？」

「んむむっ」

結局、何かを言う前に機先を制されてしまった。横島はポケットから取り出したハンカチでてゐの顔を拭う。その後またてゐを優しく抱き締め、安らぎを与える様に、慈しむ様に、ゆっくりと頭を撫でる。

「ま、何とかなるからさ。あんまり気にしすぎない様にしてくれよ。俺は大丈夫だからさ」

「……」

てゐは不安げに横島を見上げる。てゐの視線を受けた横島も彼女の気持ちを理解しているのか、苦笑を浮かべている。

「ほらほら、そんな顔すんなって。せっかくの可愛い顔が台無しだぞー？　うりうり」

「んむむっ」

横島はむにむにとてゐの頬を揉む。ぷにっとした感触と強い弾力が手に気持ちいい。てゐも横島にされるがままになっているが、不思議と嫌悪感はなかった。むしろ、もっ

と触れてほしいとさえ思った程だ。
「うしっ、もう泣き止んだな」
「え？　あ……」
　横島の手がてゐから離れる。それに伴う強い喪失感に内心戸惑いつつ、てゐは既に立ち上がっている横島を見上げている。
「ほれ、いつまでも座り込んでないでさ」
　そう言って手を差し出す横島を、てゐは数瞬不思議そうに見た後、何故か込み上げてくる微笑みを隠さずに、横島の手を取って立ち上がった。
「ははは、偉い偉い」
「……子供扱いは止めてほしいね。これでも執事さんよりずっと年上だよ？」
「あ、やっぱりそうなのか？　でもまあいいじゃんか、そんな事は。俺は見た目を重要視してるから」
「……はっきり言うねえ」
　そうでもしなければ彼の中の正義が壊れてしまうのだろう。今の彼の笑顔は何か切羽詰まって見える。
「んじゃ、俺はそろそろ仕事に戻るけど、さっき言った事は忘れない様にな。俺の師匠の一人が『昔より今、今より未来』って言ってたし」

「……うん。覚えておくよ」
「そんじゃなー」
横島はてゐに手を振って部屋から出る。一人残されたてゐは横島と同じように手を振って見送った後、その手を自らの頬へと当てる。
「……」
何やら頬が熱い。鼓動も少々高鳴っているようだ。てゐは自分の身に表れた症状に多少の驚きを覚えるが、心の隅で納得もしていた。
「うん、仕方ない。この場合は仕方ないよね」
てゐは両頬をむにむにと触る。また彼に触れてほしい。今度は力強く、頬と言わず全身を貪る様に。
「んふふ……」
てゐの口端はだらしなく緩み、現在の心理状況を分かりやすく伝えている。どうやら、彼の事がいたく『気に入った』様だ。

部屋を出た横島は難しい顔をしていた。何てことのない理由なのだが、彼には重要な

事だった。
「今の俺の仕事は永琳先生の部屋の掃除だったんじゃねーか……。今更戻るのも何か気まずいし、もうちょっと時間を置くか……。怒られないかなぁ……」
横島はブツブツと独り言を呟きつつ廊下の先へ消えた。
そして、そんな彼を見つめる一つの影が有った。言わずもがな、永琳である。永琳はばふーと安堵の息を吐いた。
（良かった……。横島君はてゐを立ち直らせてくれたようね。いくら怯えてる姿が可愛いからって、ヤり過ぎちゃったからねえ……）
やはり永琳はついうっかりとヤり過ぎてしまったようだ。これでは鈴仙が言っていた事を否定出来ないだろう。
（それにしても、横島君……）
永琳は先程までの空気を払拭するかの様に腕を組み、深く思案する。覗き見ていた横島とてゐとの会話。そこから横島の精神状態をいくらか察したようだ。
（やはり心の深い所にまで根差しているようね……。徐々に良くなってはいるようだけれど……）
永琳はその場を後にする。横島の事は紫と相談することにし、まずはレミリアにてゐの部屋を用意してもらうことにしたようだ。

（それに……まさかてゐが横島君にねえ……。意外……でもないのかしら？　お互いに性欲凄そうだし）

永琳は色々と考える事が増えたようだ。

「とまあ、そんな事があってねぇ……」

てゐは赤く染まる頬を押さえ、「いやんいやん」と体を揺らしている。その様子はまさに『恋する乙女』といったところか。そんなてゐに鈴仙は微妙に表情を歪めている。

「何というか……、あんたって結構チョロかったのね」

「いや、あれは仕方ないんだよ。心身共に追い詰められてる時にあの温もりだよ？　あれは反則だよ、凶器だよ」

てゐは鈴仙に何故自分が横島に惹かれたかを語る。だが、その内容は鈴仙には容認出来なかった。

「……そんなので好きになるもんなの？　何というか、吊り橋効果みたいなもんじゃないの？」

（……ふむ？）

鈴仙はてゐが横島に惹かれたのはいわゆる『勘違い』なのではないか、と感じたようだ。だが、てゐからすればその事は織り込み済みであった。

「……どうも鈴仙は難しく考えすぎるきらいがあるようだね。好きだと思ったから好き、それで良いじゃんか」

「それは、簡単に考えすぎなんじゃないの？　お互いの事を殆ど何も知らないんだし……」

「良いんだよ、別に。小難しい理由が必要なのは相手を嫌う時だけだよ。誰かを好きになるのにあーだこーだ考えるのは、ちょっと違うと思うよ？」

「……うーん」

鈴仙は未だ納得出来ず、反論の言葉を探すが上手くいかないようで、唸るだけ。その様子に何かピンと来たのか、てゐは口角を釣り上げた嫌らしい笑みを浮かべ、鈴仙に問いを投げかける。

「なーんかさっきから噛みついてくるねぇ。もしかして、鈴仙も執事さんが好きなのかなぁー？」

「ううん、それは全くないけど」

（真顔で即否定した……！）

あまりの即答にてゐは少々驚くが、続く鈴仙の言葉には大いに興味を引かれる事にな

る。
「まあ、特別といえば……特別な感情は持ってるけどね」
「ほほう」
てゐはその特別な感情とやらを聞き出そうとしたが、鈴仙の表情を見て止めた。そこにあったのは、正と負の感情が入り混じったような、複雑なものであったからだ。どうやら鈴仙は、てゐが思っていた以上に横島に対して『特別』な感情を抱いているようである。
「……今回は聞かない事にするよ。お師匠様が私の部屋を用意してくれてるらしいからそろそろ行くけど、鈴仙はどうすんの？」
「あ、私はここの掃除をしにきたのよ。紅魔館に住まわせてもらう代わりに、仕事を手伝ってるの」
「ああ、だからメイド服なんだ。……それにしてもスカート短いね」
「……言わないでよ」
鈴仙に用意されたメイド服は、永琳お手製の逸品であり、そのスカートは膝上二十センチという超ミニスカートであった。永琳に着用した姿を見せた際には、永琳による永琳の為のメイド鈴仙撮影会が開催された。ちなみにお触りＯＫである。
「そんじゃ、私は行くね」

「ああ、うん。また昼食の時に」
　そして鈴仙はゲストルームの掃除にかかり、てゐは部屋を出る。が、てゐはドアを閉める前に鈴仙へと言葉を掛ける。
「ねえ鈴仙、人生なんてのはね、勘違いの連続だよ。人生だけじゃない。もしかしたら、この世の全てが勘違いで出来てるかもしれないんだ。私がここに居るのも、鈴仙がここに居るのも、全部勘違いからくるのかもしれない」
「……」
「人を好きになる。人を嫌いになる。それも全部勘違いかもしれない。でも、それでも私らは前に進んでくしかないんだからさ。例え勘違いでも、その時の感情に素直に従うのも大切だと思うよ。……ま、これは私の考え方だけどね」
　そうして、てゐはドアを閉め、永琳の下へと歩いていく。残された鈴仙はてゐの言葉を反芻し、ぽつりと呟く。
「何よ……、急に真面目になっちゃって……」
　鈴仙は何か思い当たる事があったのか、てゐの考えに異論を抱けなかった。自分より遥かに長く生きているてゐの言葉には、真理のような物を感じる。自分では到底持ち得ないような含蓄ある言葉。だが、彼女がそれに反感を覚えてしまうのも、若さ故の真理なのであろう。

「横島さん、今日がどういう日か知ってますか？」
「ん……？　何か特別な事でもあんの？」
　昼も大幅に過ぎた、夕方に程近い時間帯。横島は美鈴に差し入れを届に正門まで来ていた。簡易テーブルと椅子を用意し、美鈴にお茶とお茶菓子を振る舞う横島に唐突に投げかけられた質問。当然横島はその答えが分からずに、首を傾げている。
　そんな横島の様子が面白かったのか、美鈴は笑みを浮かべて答える。
「今日は満月。なんでも、永遠亭の方々が満月の日に例月祭っていうのを行っているらしいんですけど、それを今回は紅魔館で行うらしいんです」
「へぇ～。満月……、永遠亭の人達……、餅搗きとかすんのかな？」
　美鈴の言葉に連想ゲームで推測を立てる横島だったが、それは見事に当たっていた。
「流石ですね、当たってますよ横島さん。なんでも、月から逃げてきた永琳さん、輝夜さん、鈴仙さんが罪を償う為に薬草入りのお餅を搗くのだそうです」
「ふーん。……逃げた罪、ねえ」

横島は永琳達の罪とやらにも興味を持ったが、一番気になったのは他でもない。餅の事である。

（薬草入りかあ……。どんな感じなんだろ？　ヨモギとかそんな感じなのかな。頼んだら貰えるかな？　食ってみてーなー……）

横島にとって罪を犯したとか罪の償いだとかそんなものは二の次三の次。重要なのは美女美少女か否か、それだけである。何せ彼は食人鬼女（グーラー）とキスをしたこともあるのだ。常人とは倫理観や常識が大幅にずれていると言える。

「それから私達のお給料日でもありますね」

「マジで!?　今日だったのか」

次に美鈴から出た言葉で横島の興味は完全に傾いた。何せ彼は高額の給金（時給千円）目当てで紅魔館の執事となったのだ。この反応も致し方ないであろう。

（いくらくらいかなー、多分十五万は越えてるはずなんだよなー。何か気絶したり失敗したりもしてるから自信ねーけど……）

多大な期待と僅かな不安が心を過ぎる中、ふと気になる事が出来た。丁度良いので聞いてみる事にする。

「そーいや美鈴も時給制なの？　それとも月給制？」

「ああ、私は歩合制です」

美鈴の答えを聞いた横島は、彼女の肩をぽんぽんと叩き、生暖かい笑顔で労った。
「ちょ、やめてくださいよ！　そんな可哀想な人を見る様な目はしないでください！」
「うん、今度呑もう。大丈夫、ちゃんと奢るから。割り勘にはしないから」
「もぉー、やめてくださいってばー!!」
何だかんだで、二人の間には楽しげな雰囲気が流れているようである。

そして時間は流れて満月の浮かぶ夜。横島はレミリアに呼び出され、現在彼女の部屋に来ていた。部屋の内装と完全にミスマッチな玉座にふんぞり返るレミリアの側には澄まし顔の咲夜が控えており、何やらコメディチックな雰囲気を醸し出している。
「さて横島、今回呼び出したのは他でもない。給料を渡すためだ」
「っ！」
途端にそわそわと挙動不審になる横島に、レミリアも苦笑いを浮かべる。
「分かりやすい奴は嫌いじゃないが……紅魔館の執事として、もっと慎みを持ってもら

わないと困るわね」
「うう……すんませーん」
　今度は萎れる横島。その姿は何とも情けないものなのだが、レミリアはそれを存外気に入っていた。まるで弟を見る様な目で横島を見る。横島もそんなレミリアの視線をどこか気に入っている。お互いに新たな扉が開こうとしているのだろうか。
「まあいいわ。とりあえずこれが給料ね」
　レミリアは懐から取り出した給料袋を横島に投げよこす。緩やかな放物線を描いたそれは、綺麗に横島の手の中へと収まった。
「ありがとうございます、お嬢様！　……って、あれ？　何か分厚くないっすか……？」
「ん、そうか？」
　横島の手にある給料袋。それは彼が美神達と共にゴーストスイーパーを営んでいた時の報酬に比べれば遥かに薄っぺらいが、それでも彼が受け取る給料としては未だかつて体感したことが無い程の分厚さである。
「あの、今回の私めのお給料はいかほどで……？」
　横島は何故か異様に腰が引けており、冷や汗もダラダラとかいている。その様子にレミリアは若干引いているが、質問にはしっかりと答える。
「いかほどって、四十万ほどだけど……」

「ああ、なるほど四十万……四十万!!?　よんじうまんっ!!?」
「ひぃっ!?」
　レミリア達は恐怖に戦いた。何故なら横島の表情は見事に崩れていたからだ。顔中に血管が浮き上がり、目は血走り、鼻血を盛大に噴き出して歯を剥いている。そんな異様な形相を披露している横島なのだが、その顔からどうやってそんな声を出しているのかと疑問に思うほど冷静に質問する。
「いやいや、待ってください。時給千円じゃ半月で四十万になりませんよ?」
「あ、ああ、それはえっと……。時給千円×二十四時間×半月で……」
「にじうよじかんっっっ!!?」
　鼻に加えてこめかみと耳からも血が盛大に噴き出した。
「うわぁっ!?　ちょ、怖いからそれやめろぉっ!!」
　現在の横島は満月の夜の吸血鬼よりもずっと怖い。しかし顔面から血を噴き出し続ける横島も、美少女に怖いと言われれば（顔面も）冷静にならざるを得ない。
「ふぅー……。すんません、落ち着きました。しかし、何で二十四時間で計算してるんです?　住み込みとはいえ休憩とか風呂とか仕事以外の時間も結構ありますけど……」
「え?　住み込みのバイトって二十四時間で計算するんじゃなかったの?」
「え?」

「え？」

沈黙が場を支配する。この事に関して咲夜が言及していなかったのか気になったが、こめかみに汗を一筋垂らして目を背けていることから『知らなかった』のか『ついうっかり忘れていた』かのどちらかと推測出来る。

レミリアはしばし黙考し、答えが出たのか手をぽちんと合わせる。

「うん、いいのよ細かい事は！　横島だって給料多い方が嬉しいしね！」

出した答えとは勢いで誤魔化す事であった。横島とてレミリアの言葉通り確かに嬉しいのだが、ここでとある事実に思い至る。

「そういえば俺ってお休みも貰ってますし、気絶だ何だで働けていない時もありましたけど……」

「ん、ああそれね」

レミリアは腕を組み、今までの横島の働きぶりを回想する。

「横島は仕事覚えるのも早いし、妖精メイド達を上手く纏めてくれてるし、何だかんだで皆を気遣ってくれてるしね。……フランも世話になってるし。まあ今回は横島の頑張りを評価して、それから今後の期待も込めて少し色を付けたのよ」

視線を逸らし、少々照れくさそうにしていることから、どれが一番の理由かがよく解る。レミリアとしては別段気にする程でもない、言わば気紛れに近い気遣いだったのだ

が、横島にとってそれは、予想外の事態を招く事となる。
「え、ちょっ、今度は何よ……？」
「横島さん……？」
二人が横島を訝しげに、心配げに見る。横島は気付いていない。彼の双眸からは、涙が止め処なく溢れ出ていた。
「……あ、の」
声を出そうとしても上手く出ない。ここで横島はようやく自分が泣いている事に気付く。それからは酷いものだ。息を吸う度に息が詰まりそうになり、嗚咽が止みそうにない。
「お、おじょっ、おじょぶざばぁっ!!」
「ん、んん……？」
「ぼっ、ぼれ、ぼればんばびごごばで……!!」
「すまん、ここでは人間の言葉で話せ」
涙と鼻水にまみれた顔をそのままに、嗚咽でしゃくりあげながらの言葉はレミリアには解読出来そうもない。咲夜は二人の様子に苦笑しながらも、ハンカチを取り出し、横島の下へと歩み寄る。
「ほら、こんな事で泣いてちゃだらしがないわよ？　これで涙を拭きなさい」

「でぼ……！　ざぐやざんぼばんばぢがぼぼべべ……！」
「気にしなくてもいいわよ。こういうのは使うためにあるんだから」
（会話が成立してる……!?）
改めて自らの従者である咲夜の何でもあり具合に驚愕するレミリアであった。
流れ出る涙を必死に拭う横島だが、一向に止まる気配はない。幼少期の交友関係や両親、特に母親の躾の影響で女性からの承認欲求が極めて高い横島であるが、これほどストレートに自分を認められたのは非常に稀だと言える。
思えば、彼が知る限り自分が認められてきたと言えるのは、いつだって『自分』ではない。『自分』が創り出す『奇跡の具現』だったのだ。
その希少性、万能性、強力さから、創り出した『自分』の方がおまけ扱いされる場合もある。彼自身を直視し、彼自身を評価してくれる者は、彼の知り合いの中でもあまり覚えがない。
勿論それは彼が知らないだけであり勘違いでもあるのだが、照れくさいから、恥ずかしいからと、本人に伝えられなければ意味のないものとなってしまう。
そして、彼自身を認めてくれる女性として、彼の中に強烈に焼き付いているのは『ただ一人』のみ――――。
どんな言葉も、想いも、伝えなければ気付けないものなのだ。

ただし、横島の普段の言動が言動であるし、告白された直後に彼自らそれをぶち壊すという事もしているので、実は同情に値するのは横島ではなく周りの女性陣の方だったりする。

「まったく、早く泣き止まないと例月祭を見に行けなくなるわよ?」

そう言って咲夜は横島の頭を撫で、優しく微笑む。その微笑みに魅せられてか、徐々に横島も落ち着いてきた。

「ふむ……。何か色々とあったが、給料の話はこれで終わりだな。では、次だ」

「んえ?」

レミリアは玉座から下り立ち、横島へと牙を見せる様に笑いながら近寄って行く。その姿に横島の背筋に冷たい物が走る。

「あの日から今日まで、随分と待ったからな……。抑えておくのもそろそろ限界なんだ」

レミリアの瞳が妖しく光る。その光に射抜かれた横島は身震いを一つし、これから訪れるであろう未来に冷や汗をかく。

「あのー、お嬢様。まさかと思いますが……」

「そうだ、吸わせろ」

「ど、ストレートに即答!?」

にじり寄るレミリアから逃げようにもいつの間にか咲夜が彼の腕を極めているので

逃げられない。「無理矢理はイヤー!」と泣き叫ぶが、時既に遅し。レミリアは横島のタイとボタンを外し、胸元を露出させる。
「ほお……。中々に鍛えられているようだな」
「おっ、おじょお嬢様ぁっ!?」
レミリアの細く、しなやかな指が彼の胸板をくすぐる。胸元から微かに伝わるレミリアの体温と匂い、背後に感じる咲夜の温もりと香りに横島の精神が一気に追い詰められていく。
「ふふ……。まずは、消毒をしないとな……」
「うひぃ……!?」
首筋に感じる、熱く湿り気を帯びた舌の感触。熱く濡れた舌が首筋を這う度、水気を含んだ音が耳に響く度、否応なしに彼の性感が高められていく。しかし反対の耳にはレミリアの行為に興奮した咲夜の鼻息がうるさいくらいに響いており、それが横島の理性を保つ手伝いをしてくれている。
「う、あ……っ。何かどことなく懐かしい感覚……!」
咲夜に加え、彼の弟子やそのライバルのヒーリングを思い出したのか、何とか平静を保てているようだ。
「では、そろそろいただくか」

その言葉と同時に首筋にチクリとした感覚が走り、横島は慌ててレミリアに質問する。

「ちょ、お嬢様！　血を吸うって事は、俺を吸血鬼にするつもりなんすか!?」

「あー？　いや、ただ単に血を吸うだけだけど……」

「……そうなんすか？」

「うん」

返答はいともあっさりと返ってきた。レミリアに自分を吸血鬼にする意図がないと分かれば、彼には十分である。

「あー、分かりました。吸い過ぎないのであれば、どうぞ」

「……さっきまでみたいに抵抗しないのか？」

「いやー、ただ血を吸うだけなら別にいいかなーって……」

そう言ってなははと笑う横島は自然体だ。彼のことだ、本心からそう言っているに違いない。レミリアはそんな横島に驚いたが、彼は初めて会った時からそんな人間だった事を思い出し、笑った。

「では、遠慮なくいただこうか……。はぷっ」

「って、結構痛いっ!?」

鋭い牙が皮膚を貫くのだから当然である。そうして横島はレミリアに血を吸われ、例

月祭を見に行く時には少々貧血気味となっていた。

「吸い過ぎないでって言ったのに……」

「悪かったって。……小食なのに美味しいからってついつい吸い過ぎたわね。太らない様に気を付けないと……」

横島達は現在例月祭が行われている中庭に居る。そこには紅魔館、永遠亭のメンバーの他に妹紅、紫、藍、橙、幽々子、妖夢が居た。

幽々子は妖精メイド達が作る餅を片端から食べており、妖夢や藍は幽々子の食べる量を鑑みて妖精メイド達の手伝いに回っている。

永琳は自分達の為に餅を搗いてくれる妖精メイド達の姿に感動し、鈴仙、てゐ、紫を巻き込んで酒宴を開いている。輝夜はあくせく動き回る妖精メイド達を見て何やら癒されており、妹紅と一緒に普通の餅を食べていた。

「イナバ達も可愛いけど妖精メイドも可愛いわねー。永遠亭が再建したら何人か連れ帰っちゃダメかしら……？」

「どうなんだろうな？　ここは辞めるのもまた働くのも自由らしいし。意外と大丈夫なんじゃないか？」

輝夜の横で餅を頬張る妹紅だが、その視線はチラチラと横島に向いている。以前慧音に言われた事が切欠になり、横島を必要以上に意識してしまっているようだ。輝夜はそんな妹紅を微笑ましく見守っているが、何だかんだで仲の良い二人である。急に相方が奪われた様な、そんな不思議な感覚も味わっているのであった。

「レミリア様ー」

「ぺったんぺったん」

「フラン様ー」

「ぺったんぺったん」

妖精メイド達は普通に搗くのに飽きたのか、自分達の主の名前を呼びながら餅を搗き始めた。

「何か、そこはかとない悪意を感じるわね……」

「お兄さんは大きなおっぱいと小さなおっぱいだったらどっちが好き？」

「俺も男っすから大きなチチは大好きです。でもだからといって小さなチチが嫌いという訳ではありません。チチに貴賤無し。俺は大きくても小さくてもおっぱいそのものが大好きです。……妹様は今後の成長に期待っすね！」

「フランに妙な事を吹き込むな貴様ーっ!!」
「えぇんすぃっ!?」
まだまだ膨らみのない胸をむにむにと触りながら横島の好みを聞くフラン。それに対し煩悩まみれながらも美しいまでに純粋な瞳で邪な答えを返す横島。そして横島に対し素晴らしい延髄斬りを叩き込むレミリア。それはいつも通りの、和やかな風景である。
「妖夢さんー」
「ぺったんぺったん」
「てゐさんー」
「ぺったんぺったん」
「橙さんー」
「ぺったんぺったん」
「妹紅さんー」
「ぺったんぺったん」
「ああっ!?　妖夢もてゐも橙も気にしてないのに妹紅が体育座りをして膝に顔を埋めるほどに落ち込んでいる!?」
異様な程に説明じみた台詞を宣いながら輝夜は驚いた。どうやら輝夜が想像してい

た以上のコンプレックスだったようだ。そして、そんな妹紅に近付く影が一つ。
「妹紅……」
「え、よ、横島？」
言わずもがな横島である。そこ声に過剰に反応してしまいどもってしまう妹紅。彼の真剣な眼差しに、妹紅の胸は期せずして高鳴った。それを知ってか知らずか横島は妹紅の肩に手を置き、元気づける為に言葉を紡ぐ。
「大丈夫だ。――妹紅のチチにも需要はある……!!」
「……」
何とも力強いお言葉である。しかし妹紅の視線の熱は氷点下にまで下がり、彼女の胸の高鳴りは別の意味でマックスを迎えようとしている（主に怒りと羞恥によって）。何故こんな男を意識してしまっていたのだろうか。
「それは、慰めのつもりなのか……？」
「慰めなんかじゃない。これは事実なんだ。その証拠に俺は妹紅のチチを触りたいと思っている……！　何故チチに触りたいのかって？　そこにチチがあるからサ!!　という訳で我が手にチチシリフトモモをーーー!!」
「意味が分からんっ!!」
今日もまた、飛びかかる横島の顔面に妹紅の燃える拳が突き刺さり、遠くへと吹き飛

ばされるのであった……。
　煩悩を発散出来ない環境とは恐ろしいもの。横島忠夫、徐々にではあるが順調に正義が削れている――――。

「大丈夫ですか、横島さん？　……何かテンション高いですね」
「あ、小悪魔ちゃん。お疲れー。いや、ちょっとね」
　吹き飛ばされた先に居たのは小悪魔であり、彼女の手には自分の分と横島の分の餅が乗った皿があった。
　小悪魔は横島の隣に座り、餅を渡して一緒に食べる。しばらくの間、二人は穏やかな空気に包まれていた。小悪魔よりも大分早く餅を食べ終え、小悪魔も餅を食べ終えたのを確認してから横島は質問をする。
「小悪魔ちゃんってさ、パチュリー様の使い魔らしいけど休みとかってあるの？」
「ええ、ありますよ。基本的には『この日はお休みをください』ってパチュリー様に頼んで貰う形です。後はパチュリー様の気紛れとかでしょうか」
「あの人も案外アバウトなんだなー……」
　横島はレミリアとどこか似ているパチュリーの性質に苦笑を浮かべる。小悪魔はそ

んな横島に疑問を持ったようで、素直にそれを聞き出す事にした。
「でもどうしたんです、急に？　もしかして横島さん、パチュリー様に興味があるとか……!?」
「うん、どういう流れでそれに行き着くのかはよく分からんけども、興味はあるよ。それはともかく、ちょっと小悪魔ちゃんにお願いがあってさ」
「興味はあるんですね……。それはそうと、お願いですか？　私に出来る事なら……」
「ああ、良かった。断られたら困ってたとこだ」
朗らかに笑う横島に、小悪魔は目を惹かれる。男性にあまり免疫の無い小悪魔はそれだけで頬を僅かに染め上げる。脳内では少女漫画の様な甘酸っぱい光景が繰り広げられているのだが、次の横島の言葉でそれは一気に吹き飛ぶ事となる。
「今度人里で買い物をしに出掛けるんだけどさ、良かったら付き合ってくんないかな、ってさ」
「……え、それって――!?」
真っ白な頭の中、出て来た言葉はこれだった。
――デートのお誘い。
小悪魔はすぐさま頷き、来たる日に想いを馳せる。

「咲夜さんー」
「ぺったんこー」
「よし、その喧嘩買ってアゲル」
紅魔館に、最強の夜叉が降臨する――!!

第十五話
『満月の夜』
～了～

第十六話『小悪魔のドキドキデート』

満月の日から数日。昼というにはまだ早い時間に、横島は紅魔館の正門で美鈴や二号と談笑しつつ小悪魔が来るのを待っていた。

お互いに休みを合わせ、買い物に出掛ける日。つまりはデートの日である。横島はすっかりと着慣れた執事服にオールバックで、見る者には実年齢よりも大人っぽく、精悍な印象を与えている。

二号は横島に肩車されており、楽しげに体を揺らめかせている。

「おーい、あんまり揺らすと危ねーぞー?」

「大丈夫大丈夫ー」

横島の注意を聞き流し、相変わらずゆらゆらと揺れる。横島としてはたまったものではないが、元来彼は子供に優しい。二号の楽しそうな笑みを崩すのが忍びないのか、結局は溜め息を吐いて好きにさせる事にした。

(うーん……叱った方がいいのか?)

二号を叱るかどうかで悩む姿は、美鈴に横島を二号の兄か父に幻視させる。それがま

た、美鈴には面白い。
「ところで、横島さんは今日お休みですよね？　私としてはこうしてお話してるのも楽しいんですけど、どこかに遊びに行ったりはしないんですか？」
　横島の様子を微笑ましげに眺めていた美鈴だが、休日に正門というのに執事服を着ている横島に疑問を持つ。そして横島から返ってきた言葉は、美鈴にとって驚きの答えであった。
「ああ、待ち合わせしてるんだよ」
「待ち合わせ、ですか？　一体誰と……」
「横島さーん！　お待たせしましたー！」
「おっ？」
　美鈴の質問に横島が答えるより早く、その待ち合わせの相手が姿を現した。
「えっ……小悪魔？　それと一号に三号……」
　元気よく現れた小悪魔に美鈴は驚いた。彼女と手を繋いでいる一号と三号の姿もあるのだが、何よりも驚いたのは小悪魔の服装だ。
「おー、可愛らしい服だな。似合ってる似合ってる」
「えへへ……、ありがとうございます」
「……」

今日という日の為に準備をしてきたのか、小悪魔の服装はいつものフォーマルな物とは違っていた。

ネイビーのチェック柄のシャツに淡いグレーのワンピースを合わせた、カジュアルな物だ。そのゆったりとした服装は色彩の違いはあれど、彼女の主であるパチュリーを彷彿させる。

横島に服装を誉められた小悪魔は照れくさそうに笑い、頬を赤く染めている。その姿は素直に可愛らしく、美鈴も思わず羨んでしまう程だ。

「えっと、横島さん。これはもしかして……」

美鈴は待ち合わせ、お洒落をした女の子というキーワードから一つの答えを導き出す。その答えは、美鈴にとって『何となく』看過し難い物であり……。

「ああ、小悪魔ちゃんと買い物――」

「えへへ、実はデートなんですよ」

（……あ、あれ？）

横島の言葉は小悪魔に思い切り割り込まれた。彼女の表情を見る限りでは、そこに悪意は無く単純に浮かれているからだと分かる。では、何故小悪魔はこれほどまでに浮かれているのか。

（ふふふ、素敵な男性とのデート。こういうのにずっと憧れていたんですよね。また輝

夜さん達に報告する事が増えそうです）

　その答えは単純な物で、小悪魔は憧れのシチュエーションを前に興奮しているのだ。相手は紅魔館唯一の男性である横島。彼の言動は何故か小悪魔の心を魅了する事が多く、もはや小悪魔にとって横島忠夫という男性は『憧れの人』と言っても過言ではない。そんな男から買い物に付き合ってほしいと言われたのだ。小悪魔が浮かれるのも仕方がないと言える。

　しかしそんな小悪魔の傍らで、何故か分からないが荒ぶる心を抑えつける者が居た。

「……へぇ、デートですか。羨ましいですねぇ……」

「……っ!?」

　美鈴である。彼女は笑っている。それはもう美しいまでの笑顔なのだが、残念なことに目が笑っていなかった。おまけに視線の温度はどんどん下がり、もはや氷点下に近い。その視線の先は、言わずもがな横島だ。

（な、何やー!?　何で美鈴にこんな冷たい目で見られなあかんのやー!?）

　小悪魔は美鈴の変化に気付いていないが、流石に横島は気付いた。氷点下の視線が物理的に彼の体温を奪っているので当然であるが。

「え、えーっと……。美鈴さん……？」

「何ですか？」

「いや、あの、えっと……」

横島の全身に冷や汗が流れる。上手く言葉が出てこず、美鈴の視線は更に温度を下げるばかりだ。美鈴は狼狽える横島を眺めながら、両手をぱむと合わせ、提案をする。

「そうだ、最近組み手をしていないので腕が鈍っていないか心配なんですよね。今度組み手に付き合ってくださいよ」

「うえ、えっ!?」

「約束ですよ？　楽しみにしてますからねー」

「ちょっ、め、美鈴さーん!?」

にこにこと笑いながら一方的に約束を取り付けるその姿は、横島に一切の反論を許さぬ凄みがあった。美鈴の胸中には何やら燃える感情があり、それが美鈴を焚き付けているようだ。

「もうそろそろ出発しないと、帰りが遅くなるかもしれませんね」

「え？　あ、あーそうだな！　それじゃ出発しようか！　一号二号三号も行くぞー!?」

そんじゃ美鈴また後でー!」

「あ、待ってくださいよーっ。それじゃ美鈴さん、行ってきますね」

「行ってらっしゃい。……楽しんできてくださいね」

この場から逃げる為か、横島は小悪魔の言葉を受け、やけくそ気味に歩き出す。小悪

魔や一号達もそれについて行き、やがて姿が見えなくなった。
　横島達の姿を視認出来なくなってすぐ、美鈴は深い深い溜め息を吐いた。
「……何で、横島さんにあんなこと言っちゃったのかな」
　美鈴は横島に対して言った言葉に後悔していた。胸に渦巻く感情からこぼれた言葉。その攻撃的な内容に美鈴は自己嫌悪に陥っている。また、現在の美鈴にはその感情が何から来るのかが分からないのも自己嫌悪に拍車をかけている。
「うーん……。何かこう、胸が痛いというか、イライラするというか……」
　原因不明の不調に不快感と不安が募る。悩みに悩み、そして美鈴は一つの答えに辿り着く。
「まさか、これが――――更年期障害？」
　美鈴の脳裏に絶望が浮かぶ。ついでに額に冷や汗も浮かぶ。
「いや。いやいやいやいやいやいやいや。私はまだ若い。若いんですよ。そんな、更年期障害だなんてそんな事が……」
　妖怪である美鈴に更年期があるのかは定かではないが、見た目にも若い美鈴にそれが訪れるとは考えにくい。彼女の訴える不調の原因は横島や小悪魔に対する感情が関わっているのだが、美鈴にはまだそこまでの考えに至らないようだ。
「……後で永琳さんに相談しよう」

目に見える程に落ち込み、肩を落とす美鈴。その姿には普段からは考えられない程に哀愁を漂わせていた。
「でも組み手はしよう。うふふふふふ……」

「ところで横島さん、私に買い物を手伝ってほしいとの事ですが、何を買うんですか?」
「ん? あー……」
現在横島達は湖の上空を飛行中。当然横島は空を飛べないので一号達に運んで貰っている。横島は小悪魔の質問に恥ずかしげに頭を掻いている。
「いや、実は日頃色々と世話になってる皆にプレゼントでもしよーかなーってさ」
「……プレゼント、ですか?」
「あははっ、何つーの? 給料が思ってた以上に多くてさ。懐に余裕があると心にも余裕が出来るっつーか何つーか」
小悪魔に話す事で更に恥ずかしくなったのか、捲くし立てる様に話す横島。その姿は小悪魔からしても可愛らしく映り、小悪魔の頬に朱が混じる。小悪魔は思わず横島を微

笑ましく眺めてしまい、今度は横島の頬が赤く染まった。
（ん～、可愛いですね横島さん！　こういう表情になると年相応というか、ちょっと幼く見えますね。それに……）
　横島の新たな一面に心をときめかせる小悪魔だが、それに加えてもう一つ抱いた感情がある。
「横島さんは偉いですね。そうやって皆の事を考えて、皆の事を想って行動して……。中々出来る事じゃありませんよ？」
「ん……」
　小悪魔の言葉に横島は首を窄め、居心地悪そうにする。相変わらず褒められる事に慣れていないらしく、その様子に小悪魔はますます笑みを深くしていく。
「……何か、小悪魔ちゃんって年上っぽい感じがするな」
　ぽつりと、そんな言葉が横島から漏れる。その言葉に小悪魔はきょとんとした表情を浮かべるが、それはすぐに満面の笑みとなる。
「……ん、何だよ？」
　拗ねた様に唇を尖らせる横島と、そんな彼を優しく見つめる小悪魔。どちらが『上』かは一目瞭然だ。小悪魔は横島の唇に自らの人差し指を当てる。
「当然ですよ。だって私は、貴方より年上の『お姉さん』ですから♪」

「……っ」

その少女の大人びた笑顔に、少年の息が詰まる。

横島はギギギと錆びた扉の様な音を立て、ゆっくりと小悪魔とは逆に首を向ける。

（ぬあああああああ!?　小悪魔ちゃんはロリ！　小悪魔ちゃんはロリ！　小悪魔ちゃんはロリ！　そしてワイはロリコン!!　……違うっ!!!　ワイはロリコンやない!!　ロリコンやないんやあああああああ!!!）

心の中で絶叫を繰り返す。その叫びは何だか自分に言い聞かせている様で……。紫、永琳、神奈子、藍、輝夜、妹紅、美鈴など、彼のストライクゾーンを微妙に外した少女達との触れ合いにより、彼の好みに少しずつ変化が起こり始めたようだ。

小悪魔は懊悩する横島に一切気付く事なく、人里に着くまで横島の様子に首を傾げるばかりであった。

（なんで二人だけの世界に入ってるんでしょうねー）

（私たちもいるのに。私たちもいるのに）

（……所詮私達は単なる端役。脇役でしかないの。それでもこうやって横島さんに触れられるだけで、私は幸せ……。ああ、この三角筋と上腕二頭筋、上腕三頭筋の感触が……）

哀愁漂う妖精達が報われる日は、来るのだろうか。

そうして辿り着いた人里の入り口。そこから見える人里は、以前と比べて活気に満ちていた。人通りも激しく、子供達も元気に走り回っている。
「何か、随分と賑やかだな。前はかなり閑散としてたのに」
「多分ですけど、連続して発生した異変の反動じゃないでしょうか？　嫌な気分を吹き飛ばせーって感じで」
「あー……、それはあるかも。俺が元居た世界でもそういうのあったし」
ようやく平常心に戻ったのか、小悪魔と自然に言葉を交わす横島。両手と肩に陣取る一号達が居なければ、もう少し手間取ったかもしれないが。
「それで、何で私なんです？」
人里に入る前に、小悪魔は先程聞きそびれた答えを聞くことにした。
「あー、俺って女の子が何を贈られたら喜ぶか分かんないからさ。俺が知ってる中で、一番『女の子らしい』小悪魔ちゃんの意見を参考にしよーかなってさ」
「……嬉しいですけど、他の皆さんが聞いたら怒りますよ？」

「ははははは……。秘密にしてくれ、マジで」

横島は最悪の未来を幻視し、体を震わせる。小悪魔はそれを見てくすりと笑った。

「ああ、そうそう。日頃お世話になってる人にプレゼントって事だからさ。小悪魔ちゃんも遠慮なく欲しい物とか言ってくれよ？　勿論一号達もな。他の皆にはサプライズって感じで」

「え、私もですか？」

「わたしも？」

「わたしたちもですかー？」

「……太っ腹」

横島の言葉には皆驚いた様で、特に一号達は目をまん丸に見開いている。普段奉仕する事に慣れているせいか、こういった事はあまり経験が無いのだろう。

「……まあ、あんまり高価な物はちょっと無理かもしんねーけどさ」

皆から視線を逸らしつつ気まずそうにする横島。その様子から、かなりの人数にプレゼントを渡すのだろうと小悪魔は見抜く。

「せっかくですけど、私は大丈夫ですよ？　むしろ私の方が横島さんのお世話になってますし……」

「ん～、遠慮しないでいいんだけどな……。それを言うならお互い様だし」

遠慮しがちな小悪魔に優しげな笑みを浮かべる横島だが、小悪魔のややそわそわとした動きに疑問が浮かぶ。

「えっと、その……。プレゼントっていうなら、こうして横島さんとデート出来るのが……その、私にとって何よりのプレゼントと言うか……。えへへ」

両頬を手で押さえ、とろけた笑顔を浮かべる小悪魔を見た横島は一瞬で背後を向き、額に思い切り拳を打ちつけた。

（……危ない危ない。俺はロリコンじゃない。ＯＫ？　ＯＫ！）

自らの正義を守る為に自問自答を繰り返す。もはやそれは自己暗示に近い。

（それにしても小悪魔ちゃんって男が好みそうっつーか、男好きするっつーか……。はっ！　まさか、だから『小悪魔』なのか!?）

そして何やら大変失礼な事を考え始める。こういうところはまるで成長せず、元の世界の女性陣が見れば、怒るか呆れるかはたまた喜ぶか。とにかく、あまり良い事ではないだろう。

（うーん。そうだとしたら悪い男に騙されたりしちゃうんじゃないか、とか心配になってきたな。今日は俺がしっかり見とかないと）

横島は先程の失礼な考え前提で思考を巡らせる。それが間違っているかどうかは考慮しないようだ。

「うし、小悪魔ちゃん。今日は人通りが多いみたいだからはぐれない様に――――既に居ない……だと……!?」
「小悪魔さんはさっき『あ、あの服可愛い』って服屋さんにいきましたよ?」
「早速はぐれとるやないかい！　どの店だ?」
「あそこですよー」
「ああ本当だ。おーい、小悪魔ちゃーん!」
普段ならば絶対にしないだろう失敗をする小悪魔。やはり傍目には冷静に見えても、実際は相当に浮かれている様だ。

「全く……はぐれたら危ないってのに」
「ごめんなさい……」
「ああ、すぐに見つかったから良いけどさ。今度からは気を付けてな?」
「はい……」
しょんぼりとうなだれる小悪魔に、横島は苦笑を浮かべる。先程までお姉さんぶっていた姿からは想像もつかない様な状態だ。

「で、何か良い服があったの？　やっぱ俺としては何かを贈りたいんだけど……」
「このストールが可愛いと思ったんですけど、思ったよりも高くて……。さすがにねだれませんよ」
　小悪魔が手に取ったのは淡い色合いのストール。小悪魔が身に着ければ似合う事は間違いなさそうだが、小悪魔の言うとおりに確かに少々高価ではある。
「このくらいなら大丈夫だけど……」
「ダメですよ。横島さんは皆の分も買うんですから。私一人にこんなに使ってちゃすぐにお財布が空ですよ？」
「……」
　どうやら小悪魔は少々頑なになっているらしい。今は何を言っても無駄だと判断した横島は、傍らに居る一号達へと話を振る。
「……一号達も何か欲しい物があれば言えよ？」
　その言葉を聞いた瞬間、三人の目が怪しく光った。
「わたしは、ほしい物じゃなくてしてほしいことがありますー」
　一番始めに手を上げたのは一号だ。ポニーテールを軽やかに揺らしながら、はいはいと自己主張する。
「妖精って物欲が少ないのかね……？　それはともかく、何をしてほしいんだ？」

「えっとですねー、後ろからぎゅっと抱きしめつつ『あーん』でご飯を食べさせてほしいですー」

「お、おう……、そうか」

一号に抱いていた印象よりもずっと大人びた要求に少々面食らうが、横島は「背伸びをしたい年頃なんだな」と解釈した。実際は一号の方が遥かに年上であるのだが。

「はいはーい！　次はわたしですよー！」

今度は二号が両手を上げてアピールする。ぴょんぴょんと跳ね、その度に躍動するツーテールが　可愛らしい。

「わたしはですね、寝るときに『うでまくら』をしながら色々なお話をしてほしいです！」

「あー、なるほど」

（この二人は甘えたい盛りなのかね？）

見た目年齢を重視する横島は二人の要求を「誰かに甘えたいのだろう」と解釈し、それが好意から来る要求であるとは考えもしなかった。いや、恐らくは『甘えてくるくらいには好かれている』程度には考えてはいるだろうが、それでもまだまだ壁は厚い。二人に言える事は、「もう少し頑張りましょう」と言ったところか。

「……最後は私」

三号がにゅるんと横島の隣に移動する。緩い三つ編みの髪が蠢動している様で、可愛

い顔に似合わず不気味な雰囲気を放っている。
「何だか物凄く嫌な予感がするが、男は度胸！　何でも言ってみろ……！」
「……『一緒にお風呂に入る』で」
「お〝き〟や〝あ〟！〝？〟」
三号の要求にかつての恐怖をフラッシュバックする。よほど強烈なトラウマとなっているのか、仰け反った頭は綺麗なアーチを描き、地面に突き刺さる。その様は異様に美しく、ある種のアートの様だ。
「変更は？」
「……無しで」
「変なことすんなよ？」
「……触りたい」
「直球すぎる!?」
前の二人に比べ、よりアダルトな要求をする三号。彼女だけは横島に警戒されているが、三号はそんな怯える横島も好きだったりする。彼女に言える事は「やりすぎ注意」だろうか。
「しっかしお前らといい他の妖精メイドといい、こっちの妖精ってのは物欲が乏しいのか？　他の妖精メイドにそれとなく欲しい物はないか聞いてみたら一号達と同じ様な

答えばっかだったし」

横島はこちらと元の世界の妖精の違いに首を捻る。……ある意味三号はよく似てると言えなくもないが、元の世界の『鈴女』はより欲望が深かった様に思える。

「どんな内容だったんですか？」

「あー、『ご飯作ってー』、『一緒に寝てー』、『髪の毛洗ってー』とかそんな感じ」

「うーん、コメントに困りますね」

横島から聞く妖精メイド達のリクエストに小悪魔は苦笑を浮かべる。そんな彼女に、横島は手を差し伸べる。

「そろそろ他の店にも行ってみようぜ。今度ははぐれない様に、手でも繋ぎながらさ」

その言葉を聞いた瞬間、小悪魔の顔は一瞬で朱に染まる。横島の顔と手を何度も交互に見て、やがて消え入りそうな声でぽつりと呟いた。

「あの……恥ずかしい、ので。……これで、お願いします」

そう言って小悪魔は横島の袖をつまんだ。その姿に横島は微笑みを浮かべ、元気よく音頭をとる。

「んじゃ、買い物改めデート開始といきますか」

執事、妖精メイド達、顔を真っ赤にして俯きにやけた顔を隠す小悪魔という奇妙な一行は人里を進み行く。

「うーん……」
「どうしたんです？」
「いや、お嬢様の好みそうなのって何かなーと」
横島達一行は現在雑貨屋を物色している。今はレミリアへのプレゼントを見繕っている様で、横島はレミリアの好みについて考えを巡らせている。
「お嬢様は案外女の子らしい趣味もありますよ？　色んなぬいぐるみをコレクションしたりとかもしてます」
「そうなの？　何回かお嬢様の部屋に入る機会があったけど、そんなのあったかな……？」
「それはほら、お嬢様って見栄っ張りですから……」
「ああ……普段はどっかに隠してんだな」
ここで小悪魔から有力な情報を手に入れた。横島は小悪魔を連れてきた事に間違い

はなかったことを確認し、頷いている。
「んー……、どうせなら妹様とペアのぬいぐるみとかにしようかな。何か良いのがあればいいんだけど……」
キョロキョロと視線を動かしぬいぐるみを探すが、彼が捉えたのはまた別のものだった。
「ん？　あれは……」
「どうかしました？」
横島の視線の先を小悪魔も追う。そこに存在したのは西洋人形の様な、可憐な容姿を持つ魔法使いだった。
「やっぱりアリスちゃんか。久しぶり」
「え？　――あら、横島さんに小悪魔じゃない。妖精メイド達も、お久しぶりね」
横島の声にアリスは振り向く。お互い意外な場所で出会い、挨拶もそこそこに話が盛り上がる。こうした世間話は切り上げ時に迷うものだが、横島はとある事を思い立ち、アリスにそれをお願いする。
「アリスちゃんって人形を作るのが得意なんだよな？　ちょっとお願いがあるんだけど……良いかな？」
「まあ、内容によるけど……？」

「ああ、難しい事じゃないんだよ。実は――――」

横島はアリスに『お願い』の内容を説明し、アリスはそのお願いを承諾する。

「それくらいなら二時間もあれば作れるわ。丁度材料もいっぱい買ったところだし」

アリスは手に提げている大きな袋を見せる。これだけあれば、確かに横島の頼み通りに作れるだろう。

「本当か！　いやー、助かったよ。そうだ、何か欲しい物やしてほしい事はないか？　出来る限りお礼はするぜ」

「ああ、それなら……」

アリスはおとがいに指を当て、しばし考える。やがて答えが出たのか横島に向き直り。

「貴方の髪の毛と血液をくれないかしら？」

そう、輝かんばかりの笑顔で宣った。

「……」

「……」

横島と小悪魔達は一切表情を変えることなく、微笑みを浮かべたままススーっと後ろへとスライドしていく。

「待って！　引かないで！　別に怪しげな魔法に使うわけじゃないから！」

必死に追いすがるアリスの姿に、横島はとりあえず話だけでも聞いてみる事にする。
「ほら、平行世界の人間に出会ったのは初めてだから、こっちの世界の人間と何かが違うのかとか気になってね。永琳やパチュリーも調べてるんでしょうけど、私は西洋魔法的なアプローチというか……」
つまりは好奇心を抑えられないということだ。アリスの目は純粋な輝きを見せており、妙な考えを持ち合わせてはいない様に思える。結局横島は了承する事にした。
「まあ、変な事に使わないのならいいや。今血を取るのか？」
「いえ、さすがに今は器具を持ってないからね。そうね、とりあえず……色々と準備もあるから、三時間後にあそこの茶店に集合ってことで」
アリスが指差すのはこぢんまりとした、だが品の良い店構えの茶店。どうやらよもぎ餅が名物らしく、それを買って帰る人も多い。
「今が十一時だから、十四時だな。了解」
そうして挨拶もそこそこにアリスと別れる。次の店に行こうと外に出ると、何やら道の真ん中に人集りが出来ていた。
「何でしょう、何かあったんですかね？」
「んー。いや、違うな。この霊波は……」
人集りの最奥から感じる霊波。それは彼に覚えがあるものだった。何かが人集りか

ら飛び立ち、彼らの頭上に何らかの紙を撒いていく。それは号外だった。
「号外、号外ですよー！　また山の麓で動物の変死体が出ましたー！」
「あ、彼女は……」
　黒い羽を広げ、空から号外をばらまくのは天狗の少女、文だった。
「おーい、文ちゃーん！」
「ん？　あややや、これはこれは横島さん。お久しぶりです」
　文は一瞬で横島達の眼前に移動し、ふわりと着地した。そのスピードは動体視力に優れる横島ですら追えない速さであり、改めて彼に天狗という妖怪の強大さを思い知らせる。
「小悪魔さん達もお久しぶりです。あ、号外をどうぞ」
「ありがとうございます。……パーティーの日以来ですね。お久しぶりです」
　小悪魔は文と挨拶を交わした後、受け取った号外が横島にも読める様に身を寄せる。その様子に文は目をキラリと輝かせ、自分も横島へと擦り寄る。
「おやおや？　もしかしてデートですか？　デートですよね？　どういう経緯でそうなったのか教えてくださいよー」
「ああもう、まとわりつくなっての。また今度な、今度」
「今じゃなかったら意味がないじゃないですかー」

（記事の内容……五日前の日付になってますけどね）

唇を尖らせてぶーたれる文に、心の中でツッコミを入れる小悪魔は苦笑を浮かべている。どうやら文はフットワークは軽いが、筆は重いらしい。

「それはそうと横島さん。ここで会ったのも何かの縁。この縁をもっと深める為にも、私の『文々。新聞』……ご購読していただけませんか？」

「ん？　ああ、いいよ」

「ええ、分かってます。もちろん横島さんに損はさせませんよ。うちは他と比べて月々の購読料も安めですし、更に洗剤やお米券も月に一回――」

「……いや、だから購読するって。幻想郷の情報は必要だし」

「……マジですか？　マジですね？　契約してくれるんですね!?　ひゃっほう!!」

文は横島の了解を聞き漏らしたのか断られる事を前提に話していたのか契約のメリットを語っていくが、再度の了解に目を見開き、今や全身で喜びを表現している。小悪魔はそんな文を微笑ましげに眺め、心の中でツッコミを入れる。

（紅魔館と契約してるので、横島さん個人で契約する必要はないんですけど……）

そう思うなら止めてやればいいのだが、小悪魔は横島が紅魔館が文と契約している事を知っていると勘違いしていたため、何か思惑あっての事だろうと考えた。

実際は文の『この縁を深める為にも』という言葉に反応したから、という事実は知ら

ない方がいいだろう。
「あー、でもとりあえずはひと月だけな。いつ元の世界に帰れるか分からないから、短めの方がいいだろうし」
「あやや、それもそうですね」
（……）
横島の言葉に小悪魔は胸を締め付けられる。ここは横島の世界ではなく、自分達にとっての異世界が彼の帰るべき場所なのだ。分かってはいたが、それでもその事実を突きつけられると彼女には辛い。
「それでは明日から、という事で」
「おう、よろしく。……ところで、ちょっと聞きたい事があるんだけど」
「なんですか？」
「今色々と買い物中なんだけどさ、この辺で品揃えが豊富な店ってなるとどこになるかな？　文ちゃんはよく人里に顔を出してるみたいだからそういうの詳しそうだし、知ってたら教えてほしいんだけど」
「そうですねぇ……」
文は腕を組み、うんうんと唸り考えを巡らせる。やがていい店を思い出したのか、ぽんと手を叩く。

「そうそう、今日は彼女が露店を出す日でした」
「彼女……？」
「ついて来てください。きっと良い物が見つかりますよ」
自信満々な文の様子に横島達は顔を見合わせるが、情報通である文の言葉に間違いはないだろう。多大な期待と少しの不安を抱え、文の後について行く。
たどり着いたのは大通り。その一画には露店を囲む人集り。横島は「またか」と思わないでもなかったが、それはその店が流行っている証拠。文に続き、人垣を掻き分けて前に出る。
「にとりー、お客さん連れてきたわよー」
「ん？　おー、文じゃん。お客さんって隣の盟友？　文が盟友を連れてくるって珍しいね。何々、どういう関係なのさ？　もしかして恋人？　違うよねぇ。あ、盟友の恋人は隣の小悪魔かな？　……って小悪魔!?　恋人居たの!?　って、あーそうだ、自己紹介がまだだったね。私は河城にとり。よろしくね、盟友！」
「……お、おう。俺は横島忠夫。よろしく」
そこに居たのは白いブラウスに水色の上着、裾に大量のポケットが付いた濃い青色のスカートを着用した妖怪の少女。人懐っこい笑顔を浮かべ、矢継ぎ早に言葉を出し最後には驚き叫び、その後何事もないかの様に自己紹介を始める姿は、他の皆にも言える事

だが妖怪らしくない。そして忙しない。
（盟友……って、何で？）
（それはほら、河童と人間は昔から……ね？）
（ね？　って目を逸らしながら言われても……。というかあの子河童なのか）
こそこそと内緒話をする横島と文を余所に、にとりと小悪魔の会話は盛り上がっている。周りからの注目の一切をスルーしながら、横島はにとりが広げている商品を見る。
そこにあるのはそれぞれがどの様な事に使えばいいのか分からない物ばかり。どうやら店が繁盛していたのではなく、物珍しさ、怖いもの見たさで人が集まったのだろう。
「うーん……一体何に使うんだ、これ？」
横島が手に取ったのは木製の球体に十字のトゲが大量に付いた物。持ちにくさに加え重さは一キロ程もあり、何に使うのかさっぱり分からない。
「ああ、それ？　それはこうやって壁に投げると……」
横からひょいと顔を出したにとりは横島が持つ球体を近くの民家の壁に投げつける。すると球体はどういう原理か垂直の壁をコロコロと転がり上り、やがて屋根瓦にぶつかり、地面に落ちた。
「すげえ！　すげえ、けど……何の役に立つんだ？」
「え？　何の役にも立たないよ？」

「……えぇー」

ならば何故売り物として並べているのか疑問を抱く横島だが、玩具としては中々に面白そうだ。これもそういう物なのだろうと好意的に解釈する。

「……何か、おすすめとかある？」

「おすすめかい？　ふふふ、いいのがあるよ！」

よほど自信があるのか、にとりは胸を張って得意げになる。そして服にいくつか付いている小さなポケットから、明らかに収まりきるはずがない大きさの機械を取り出してみせる。

「電動式送風髪乾かし機～！」

（……こっちの世界にも彼は存在するのか……？）

ある種の様式美が炸裂する中、どこからともなく鳴り響く軽快な音楽と共に取り出されたのは、『外』の世界で言うところのヘアドライヤーであった。このシチュエーション、横島は悪乗りを開始する。

「これは、ドライヤーですね。でも電動式って言う割にはコードもプラグもありませんけど……？」

「心配ご無用！　ほらここ、持ち手の底の部分に小さなハンドルが付いてるでしょ？これを大体百回くらい回せば、三日間はノンストップで使えます！」

「えっ、本当ですか!?　それは凄いですね!!」
「更に更に、本体横のつまみで強風・弱風、温風・冷風の切り替えも可能！　しかも完全防水で水回りでの使用も大丈夫！　しかも充電具合を表示するメーターもあって分かりやすい！」
「うわぁー、凄い！　でもこれだけ高機能だと、値段もお高いんでしょう?」
「心配ありません！　この電動式送風髪乾かし機、今回に限りもう一つお付けして一九八〇〇円！　一九八〇〇円での御奉仕です！」
「安い！　これはもう買うしかありません！」
　突如始まった大仰な寸劇に小悪魔達含め、周囲全てが沈黙する。満足気に笑う横島とにとりは見つめ合った。二人が無意識の内に取っていた行動は『握手』であった。周りの客はほったらかしだが、無言の販売促進の詩があった。奇妙な友情があった――――。
「電動式送風髪乾かし機、買うよ……！」
「毎度あり……！」
　周囲の人々には何故だか二人が輝いて見える。文が二人をフラッシュを焚いて撮りまくっているので当然であるが、二人を囲む人々はそれに気付かず、二人の神々しさに拍手を贈る。きっと皆自分が何をしているか分かっていない。

「……む～」

カオス極まりない空間の中、頬をむくれさせて不満気な声を漏らす少女が居た。小悪魔である。

（私をほったらかしで、他の女の子と……）

横島とデートが出来るだけで、とは言ったものの、やはりそれとこれとは別問題である。せっかく憧れの男性からデートに誘われたのだから、最後までエスコートしてほしいと思うのは当然の事であろう。

小悪魔は胸に湧き上がる嫉妬の念、まだまだ可愛らしいそのヤキモチは、小悪魔に横島とにとりの間に割って入らせる。

「髪を乾かすだけの機械って、必要なんですか？」

「んむ？」

にとりは小悪魔の様子がいつもと違う事に気付く。「何かやっちゃったかな？」と首を傾げるが、その不機嫌の矛先が横島に向いている事を感じ、彼女の気持ちを察した。

「いやー、ドライヤーは必要だぜ？　気持ちいいし。……って、そうか。『ここ』じゃこういうのは珍しいのか。使えば良い物だって分かると思うんだけどな」

対する横島は小悪魔の様子に気付いていない。にとりは横島の鈍さに苦笑を浮かべつつ、小悪魔の援護に回る事にした。

「なら小悪魔がお風呂に入った後でさ、横島さんが小悪魔の髪を乾かしてあげればいいじゃん。使い方は知ってるみたいだしさ」
「え、ええっ？」
「おー、なるほど」
　にとりの言葉に小悪魔は驚きを、横島は納得を示す。
「くくく、確かに言って分からないなら、体に覚え込ませるしかないよなぁ……」
「ふふふ、そうだねぇ。案外ハマっちゃうかもしれないしねぇ……」
「ちょっ、何か不安を煽る様な事は言わないでくださいよ!?」
　ニヤニヤと嫌らしい笑みを浮かべる二人に、小悪魔は腰が引ける。その姿に横島達は満足顔だ。
「冗談だよ、冗談。ま、気持ちいいのは本当だしな。俺も優しくするからさ、一回くらい試してみても損はないって」
「……横島さんが、そこまで言うなら」
　小悪魔は先の言葉のせいで気勢を削がれていたのか、随分としおらしい。
（優しくするからさ……優しくするからさ……優しくするからさ……。はふぅ）
　まあ、頭の中はピンク色だったようだが。
「んじゃこれ、取り扱い説明書と三十年間有効の保証書ね」

「三十年!?」
「あー、盟友には長いかもねー」
　結局小悪魔はその後ふわふわとした意識の中で、横島とのデートを楽しむ事になる。意識がはっきりとしてきたのは昼食を食べる為に店に入り注文まで済ませた後で、横島も一号達も荷物が増えていた。文の姿は見えず、いつの間にか別れていたらしい。
「ごめんなさい横島さん、三号ちゃん達も。私だけ荷物を持ってもらっちゃって……」
「あー、気にしなくていいって。小悪魔ちゃんは普段忙しく動きまくってるし、ボーっとしちゃうこともあるよ」
「わたし達はだいじょうぶですよー?」
「元気元気ー!」
「……もーまんたい」
　小悪魔は横島達の答えに、ようやく笑顔を見せる。それを見た横島はうんうんと頷いた後、文からもらった号外に改めて目を通す。
「……山の麓で内臓を丸ごとくり抜かれ、血液を全て抜かれた熊や猪の死体が見つかった、か。まんま宇宙人のキャトルミューティレーションだな」
「キャト……何です、それ?」
「んー、確か宇宙人が動物の生態を調べたり、実験した結果とかだったかな?　実際は単

に獣の捕食の痕だったり、血は重力で流れて土に吸収されたから、とか現実はそんな感じ」

「地味に夢のない話なんですねぇ……。まあ、妖怪がいっぱい存在する幻想郷ではさして珍しい事でもないので、すぐに風化しちゃうでしょうね」

「やっぱそういう妖怪もいるんだなー」

横島は号外をたたみ、持ってきたカバンへとしまう。既に興味はもうすぐやってくる焼き肉定食に移っており、「早くご飯来ないかなぁ、焼き肉には白い飯だろうが」と、まだ何も来ていないのにご飯が無い事に対して愚痴を言っている。

「気が早すぎですよ」

「いやー、だって腹減っちゃってさ」

照れ笑いを浮かべる横島に、自然と小悪魔の頬が緩む。それから程無くして注文した料理が揃い、昼食が開始された。横島が焼き肉定食、小悪魔は焼き鮭定食、一号は肉野菜炒め定食、二号は茄子と挽き肉の甘辛炒め定食、三号は豚肉の生姜焼き定食と、小悪魔以外見事なまでの肉率だ。

「皆ガッツリいきますねー」

「体が資本だしな。それにこっちに来てから食生活は圧倒的によくなってんだよなー。その分、ちょっと太ってきたかもだけど。ちょっと服がキツいんだよね」

「そうなんですかー？」
「たぷたぷ？　たぷたぷ？」
二号が横島の腹を触る。しかし腹が出ている様子もなく、逆に引き締まっている。
「……太ったんじゃなくて、しっかりとした筋肉がついてきた。今までみたいに痩せてたから透けて見えていた筋肉じゃなくて、ギッチリと詰まった、本物の筋肉……」
三号が恍惚の表情で横島の腕に擦り寄る。
「……ああ、この尺側手根屈筋と長掌筋の感触が……」
「何だそのマニアックな筋肉……!?」
以前の様なカップめんばかりの食生活ではなく、紅魔館で執事になったことで咲夜の栄養たっぷりな料理を毎日食べることにより、横島は真に健康な肉体を手に入れつつある。貧弱なぼーやなどと言われていた時代からは考えられない筋肉の成長に、横島は柄にもなく嬉しくなる。
「筋肉が付くのって、嬉しいんですか？」
「まあ、俺だって男だしな。やっぱり無いよりはある程度ガッシリしてた方が見栄えも良いだろうしその方がナンパもげふんげふん」
「……出来ればもう少ししっかりと筋肉を」
三号は未だ横島の腕にくっついており、小悪魔はそれを羨ましく感じる。そちらに意

識を取られていたので小悪魔はちょっとしたミスをするのだが、今回はそれが好機となった。

「お……？　小悪魔ちゃん」

「え？　あ、はい。何でしょう横島さん」

少々体をびくつかせる小悪魔を不思議に思いながらも、小悪魔の顔へと手を伸ばす。やがて横島の指は小悪魔の唇端に触れ、優しく拭う。

「ご飯粒、付いてた」

「え、あっ、す、すいませ――――!?」

横島に恥ずかしいところを見られ、それだけでも顔から火が出そうだと言うのに、彼女が瞳に捉えた光景は、とんでもないインパクトを彼女に与えた。

――――小悪魔の唇に付着していたご飯粒を、そのまま口に含んだのだ。

「……!?　……、……っ!!　……っっっ!!?」

「……ん？　どしたの」

小悪魔は顔を真っ赤にし、口をパクパクと開いている。横島は特に何の意識もしていないが、これはやたらと人の顔を舐めてくる弟子が影響しており、そういった関係には感覚がおかしくなっているからである。

「――――ふうっ」

「うえ〝っ!?　ちょっ、小悪魔ちゃーん!!?」

小悪魔は羞恥が限界に達したのか、目をぐるぐると回して気絶してしまった。慌てふためく横島達や従業員達をよそに、小悪魔は気絶しながらもどこか嬉しそうな顔をしていたそうな。

（ああ……、流石です、横島さん……）

一体何がどう流石なのか、答えは小悪魔しか知らない。

第十六話

『小悪魔のドキドキデート』

～了～

第十七話『贈り物』

横島と小悪魔がデートに出かけた日の午後、紅魔館のゲストルームでは紫と永琳がすっかりと恒例になったお茶会を開いていた。今回は紅茶と洋菓子ではなく緑茶と和菓子を用意しており、非常にまったりとした空気が流れている。

「……今日はメイド妖精達がおとなしいみたいだけど、何かあったの？　横島君がいないことと関係があるのかしら？」

熱い緑茶を一口啜り、紫が永琳に問う。永琳は咲夜手作りの羊羹を一口含み、上品な甘みとなめらかな舌触りを堪能してから答える。

「んー、横島君が小悪魔とデートに出かけてね。そのせいで張り合いがないんじゃない？」

「あら、横島君と小悪魔が？」

永琳の答えには紫も驚いたようだ。相手が小悪魔というのもそうであるし、メイド妖精達にそこまで気に入られているというのも驚きだ。

「横島君と小悪魔ってそこまで仲が良かったのね。私は普段のやりとりから藤原妹紅と

一番仲が良いと思っていたけれど」
「ああ、確かにそうかもね。会ってすぐに打ち解けていたし、この前輝夜が『妹紅を取られたー』って言って拗ねていたし。……あとぱっと思いつくのは美鈴とフランかしら？　普段からよく一緒にいるみたいだしね」
　紫と永琳が横島に関する話に花を咲かせるなか、ゲストルームの扉がガチャリと開いた。覗いたのは白く、ふわふわの兎の耳。入室してきたのはてゐであった。
「お、やっぱりお師匠様と八雲紫だ。こんなとこで何やってんの？」
「ただのお茶会よ。それより、部屋に入るならちゃんとノックをしてからにしなさい」
「はーい、ごめんなさーい」
　永琳の注意にてゐは本当に分かっているのか怪しい返事をする。そのまま紫達のテーブルにつき、楽しげな表情を浮かべる。
「んふふ、執事さんの話なら私も混ぜてもらわないとね」
「はいはい」
　兎の耳は伊達ではないのか、紫達の話の内容を把握していたようだ。永琳は兎の耳をピコピコと前後に動かすてゐに苦笑しつつ、てゐの分のお茶と羊羹をどこからか取り出した。
「それで、横島君と小悪魔についてだけれど」

「あー、今日はデートなんだってね。小悪魔が羨ましいよ」
「あら、もしかしてあなたも『そう』だったの？」
「この間ちょっとしたことがあってね」
　紫の問いにも臆さず答えるてゐの笑顔は、普段浮かべている笑顔とはまた違った魅力があった。赤くなった両頬に手を当て、体を『いやんいやん』とくねらせている。
「いやー、どのくらいぶりかはちょっと分かんないけど、やっぱり恋愛は良いね。心身ともに若返っちゃうよ」
「心はともかく、体がそれ以上若返ったら横島君に相手されないわよ？」
　てゐの言葉に二人は苦笑を浮かべるしかない。もっとも、実際に若返るのなら、二人共肖りたいのだろうが。
「……ところで、てゐにも理想のデートとかそういうのはあったりするの？　何となく賭場辺りが思い浮かんだけど」
　ほどよく温まった空気の中で、永琳は空気が冷たくなりそうなことを言う。
「……お師匠様の中で、私はどんなイメージなのさ」
「あら、改めて教えてほしいのかしら……？」
　永琳はてゐの言葉に『笑み』を浮かべる。その『笑み』は、てゐの心に深く刻まれているもので……。

てゐの体がガタガタと震えだす。どうやらトラウマを刺激されたようだ。
「イエ……ケッコウデス……」
「永琳……あなた……」
てゐの目が死んだ魚のようになり、紫の視線の温度が冷たくなる。流石の永琳もその視線には耐え難いのか、咳払いを一つし、話を戻す。
「それで、てゐの理想のデートってどんな感じなのかしら？」
「……お師匠様って、意外とこういう話好きなんだね」
今まで永琳に抱いていたイメージと違ったのか、てゐは少々意外そうに納得する。それに対する永琳の反応はこうだった。
「それはそうよ。私だって若く、可憐な美少女なのよ？　男性との素敵なデートだって夢想するわ」
「永琳……あなた……」
今度は別の意味で紫の視線が辛くなった。永琳は変わらず澄まし顔をしているが、よく見るとこめかみに一筋の汗が流れている。永琳は視線でてゐに促すが、そのてゐからは生暖かい目で見られており、まるで「仕方ないなあ」と言っているかのようだ。
「そだね、とりあえずベタなやりとりはしてみたいかな？『ごめん、待った？』『ううん、今来たところ』みたいなね」

「ふんふん」
　永琳は本当にこういう話が好きなようで、その目は輝きを増している。紫も冷静に振る舞ってはいるがやはり興味はあるようで、心なしかてゐの話に集中しているようである。
「あとはまあ、行きたい所に行ってやりたいことをやるって感じかな？　そうだね、まずはやっぱり――――ホテルだね」
「待ちなさい」
「ん？」
　てゐの発した言葉に即座に反応したのは紫であった。
「何でいきなりホテルなの。もっと健全な考えはないのかしら？」
「んー？　いや、ちょっと勘違いしてるね。何もいきなりご休憩ってわけじゃないんだよ？」
「……そうなの？」
　てゐの為人を知っている紫は訝しげにてゐを見やる。そしてててゐは、そんな期待を裏切らない。
「うん。やっぱりそういうのはもっと時間をかけないとね。つまり――――ご宿泊だよ」

「待ちなさい」
「……？」
「そんなさも不思議そうな顔をしないでくれるかしら……」
やはりてゐの頭の中はピンク色であった。紫は頭痛がしてきたのかこめかみを押さえ、深い深い溜め息を吐く。
「はあ……。一体どこから突っ込めばいいのかしら……」
「どこから突っ込むだなんて、そんないやらしい……。最初はやっぱりスタンダードに――」
「そういう意味で言ったんじゃありませんわ……！」
てゐの少々下品な返しに紫は顔をほのかに赤く染め、強い口調で否定する。元々紫は性的な冗談が好きではない。そういった『行為』もみだりにするものではないと考えているし、そういった『話』も慎むべきだと考えている。
だが、目の前の二人はそうではない。勿論常識的な貞操観念は持っているし、誰彼なしにというわけでもない。――しかし、八雲紫が顔を赤らめて困ったふうに怒っているのだ。二人は『もっと紫を困らせたい』という願望で一致していた。
「ところで横島君って最近たくましくなってきたわよね」
「え？　……ええ、そうね。確かに体つきも少しガッシリとしてきたように思うけれど」

永琳は話題を変え、横島の名前を出す。紫はこれ幸いとその話題に乗る。しかし、それこそが罠だったのだ。

「筋肉とかもけっこうあるっぽいしねー。二の腕とか中々固かったよ。……カタいといえば、下の方はどうなのかなー？」

「……!?」

てゐの言葉に、紫の頭に『あの日』の事がフラッシュバックする。あの時、横島の執事服が右半分なくなって『ぼろん』した時のことを。

紫の顔が瞬時に真っ赤に染まる。あれのインパクトは凄まじく、今も紫の脳裏に焼き付いてしまっている。

「うーん、カタさはちょっと分からないけど大きさならかなりのモノだったわよ？　平常時であれなら、いざという時にかなり期待が出来る――――」

平然と際どい話を展開していく二人に、紫は二の句が継げないでいる。このまま直接的な話に進んでいくのかと思われたが、突如ゲストルームの扉が開け放たれた。

「そこまでよ!!」

「っ!?」

「貴女は――!!」

「パチュリー・ノーレッジ!?」

現れたのはパチュリーであった。
「このお話はあくまで十五禁。それ以上は十八禁になってしまうわ。そろそろ自重しなさい」
「ちぇー」
「そういうことなら仕方ないわね……」
「……えぇー」
永琳とてゐの二人が状況に対応しているなか、紫は少々混乱してしまっている。オロオロと三人に視線を送るが、当の三人は既に別の話をしていた。
「ところでパチュリーは何しに来たの？　さっきの注意だけ？」
「ああそうそう、忘れるところだったわ。美鈴からの報告でね、まだ距離はあるけど横島と小悪魔達が帰ってきたみたいなのよ。それもかなりの大荷物を抱えているらしいわ」
「あら、もう帰ってきたの？　てっきり夜遅くか朝帰りだと思っていたけれど……。まだ夕方よ？」
永琳はゲストルームに存在する窓の外に目を向ける。空は朱に染まり始め、色彩の断層を形成していた。
「まあいいんじゃない？　それよりどうする？　面白そうだしお出迎えしよっか？」
「……そうね。その『大荷物』っていうのも気になるし」

「それじゃあ行きましょうか」
　三人はぞろぞろと連れ立って部屋を出て行った。紫はしばらく動けずにいたが、また深い溜め息を一つ吐いたあと、三人の後を追った。

　紅魔館の正門前に、赤く染まる空から数人の人影が舞い降りる。言わずもがな、巨大な荷物を背負った横島達だ。
　横島は顔を赤らめてぼーっとしている小悪魔の手を引き、ゆっくりと歩き出す。
「ふぃー、ただいまっと。小悪魔ちゃんも一号達も、今日はありがとな。荷物重かったろ？」
「だいじょーぶですよー」
「元気元気ー！」
「……後でマッサージを希望しようかな？」
　横島の周りを囲む一号達も巨大な荷物を背負っており、随分と重そうに見える。しか

しそう見えるだけであり、当の本人達は実に溌剌としている。唯一くたびれたようなことを言う三号も、ニヤリとした笑みを浮かべているので実際には問題ないようだ。

この場で問題があるのはただ一人。先ほどから黙っている小悪魔である。

「……」

実は飯屋で気を失った後に色々とあったのだ。

目を覚ましたら横島から膝枕をされていたり、「熱があるのではないか?」と横島から互いの額をくっつけられたり、それでまたふらついた小悪魔を介抱出来る場所まで運ぶのに『お姫様抱っこ』をされたりと、それはもう色々とあった。

お陰で小悪魔の乙女回路はギュンギュンと回りっぱなしでショート寸前だ。その影響か小悪魔は途中からただうめくのみになり、今ではされるがままの状態になっている。

「ほら、小悪魔ちゃん。もうすぐ紅魔館の正門だぞー?」

「……ぁぃ」

横島の言葉にもひどくか細い声で答える。これには横島も苦笑を浮かべるしかない。返事はするが内容を理解しているのかどうかはひどく曖昧だ。ここまで来ると横島にも悪戯心が湧き上がる。

「……今の状態なら、チューしてもバレないんじゃねーかな」

「ちゅー？」
「ちゅー！」
「……ちゅう」
「ち、ちちちゅーですか!?」
「あ、起きた」
「……はっ!?」
　横島がボソッと呟いた台詞に小悪魔は劇的な反応を示す。そして寝起きのように働かない頭の中、とある言葉が何度もリフレインする。
（ああっ!?　よく覚えてませんけどまだぼーっとしてたら横島さんからち、ちちち、ちゅーされてたかもしれないのに!?）
　何だか横島のような考えだが、彼女は『魔族』である。きっと人間よりも煩悩が強いのだろう。
「ほら、もう紅魔館は目の前だぞー？　……あ、美鈴ただいまー」
「はい、お帰りなさい皆さん。案外早かったですね？」
　紅魔館の正門に着き、横島に続いて美鈴と挨拶を交わす一行。小悪魔の様子がおかしかったから、というのは言わない方がいいだろう。
「……それにしてもすごい荷物ですね。どれか持ちますよ？」

「あ、じゃあ小悪魔ちゃんの頼むよ。いいよな、お前ら?」
「はーい」
一号達にも否やはなく、美鈴は小悪魔から荷物を預かる。横島達が持っていた荷物に比べると小さめだが、女の子には少々辛い重量となっていた。
これより重いであろう荷物を背負った一号達は未だ元気溌剌であり、彼女達の身体能力が妖精の埒外であることをまざまざと思い起こさせる。
「そんじゃ、美鈴も中に入ろうぜ。皆にちょっとした話というか何というかがあるし」
「……?　はあ、分かりました」
美鈴は横島の言葉に首を傾げながらも従うことにする。このままた一人門番を務めるのは寂しいし。何だかもう少し横島の隣に居たいし。何だか良い予感がするし。頭の中でいくつもの言い訳を作り、自らを正当化する。その結果がどうなるのかは、まだ分からない。
とにもかくにも一行は連れ立って紅魔館へと入っていった。
「ただいまーっす!」
「はいおかえり、横島」
「ってお嬢様!　……っていうか皆!?」
紅魔館へと戻った横島達を待っていたのは、紅魔館と永遠亭の主要メンバーと紫で

あった。
「どうしたんです、皆揃って……？」
「いやー、横島さん達が大荷物を背負ってるって聞いて、これはおみやげがあるかなーって」
横島の問いに答えたのは輝夜だった。笑みを浮かべるその姿に、卑しさは全く感じられない。これも傾国傾城たる所以だろう。
「それで、おみやげは、あるのかなぁ？」
輝夜は横島に擦り寄り、彼の胸板を指でくすぐる。上目使いで鼻にかかった甘ったるい声なのも重要だ。
「もー、やめてくださいよ。ドキドキしちゃうじゃないっすかー」
台詞だけならば冷静なのだが、表情は明らかに崩れている。目は垂れ、鼻の下は伸び、口がだらしなく緩んでいる。脳内では「はーん!!　かーいーなー!　良い匂いだなー!!」という言葉が大音響で鳴り響く。
顔には出るが、口に出さなくなった辺りは成長したと言えるだろうか。……何となく、数人からの視線が鋭くなった気がする。
「えー、こほん。実はおみやげというか何というか……」
その視線に気付いたかは定かではないが、横島は咳払いをし、姿勢を正す。輝夜は首

を傾げながらも空気を読んで横島から離れた。
横島達は背負った巨大な荷物を下ろし、彼は更に咳払いを一つ。
「えっと、皆にはお世話になってますし、俺なりの感謝の印というかプレゼントっつーか……」
目を逸らし、頬を掻き、照れくさそうに言う横島の言葉に、皆が目を丸くする。
「……プレゼント？　私達に？」
まず聞いたのはレミリアだ。横島はレミリアの問いに大仰に頷き、彼女の前に跪きその手を取る。
「そうです！　特にお嬢様にはめちゃくちゃ感謝してるんすよ！　あの時お嬢様が俺を雇ってくれたから、今もこうして生きていられるんですし……!!」
「あ、ああ……そう」
横島の勢いにレミリアは引き気味だ。というか顔のせいだった。目は血走り、涙は溢れ、鼻水は流れている。その様は小さな子供の心に確実にトラウマを刻みつけられそうなほどに怖い。
「という訳で、まずお嬢様と妹様へのプレゼントっすね」
横島は一瞬で元の顔へと戻り、自らが背負っていたリュックサックへと手を伸ばす。
（……相変わらず気持ちの切り替えの早いやつ）

レミリアは横島へと呆れにも近い感想を抱いた。しかしその表情は微かに微笑んでおり、横島に対して『それ』だけではない感情を抱いているだろうことが見て取れる。
「はい、これっす！　開けてみてください！」
横島が差し出したのは、レミリア達姉妹の身長の半分はあろうかという巨大な包み。一体どのようにしてリュックサックに入れていたのか、包みには皺一つなく綺麗なままだ。
レミリアは大いにツッコミたかったが、そうもいかない。フランの目が輝いているのだ。そわそわちらちらとレミリアを窺っているのだ。レミリアはフランに微笑みかける。
「それじゃあ開けてみましょうか、フラン」
「うん、お姉様！」
満面の笑みで包みを開け始めるフランと、そんなフランを優しげに見つめながら自らも包みを開けるレミリア。笑みの形はそれぞれ違うが、その可愛らしさはよく似ている。
「あれ、これって……お姉様？」
「これは、フランのぬいぐるみ……？」
彼女達に贈られた物。それはレミリアにはフランの、フランにはレミリアのぬいぐる

みだった。三頭身程の可愛らしくデフォルメされたぬいぐるみは、柔らかな微笑みを浮かべている。

「……これ、どうしたの？」

フランが驚きに染まったままの顔で横島に問う。

「いやー、買い物の途中でアリスちゃんに会いましてね。制作を依頼したんすよ。流石と言うべきか、ほんの二時間～三時間程でご覧のクオリティーです」

「……確かに、よく出来てる。とてもそんな短い時間で作られたとは思えないほど……」

レミリアはぬいぐるみを抱え上げ、しげしげと眺める。縫い目が一切見当たらないとは、どのような技術を用いているのか。

「それから『生地が余った』とかで、他の皆の掌サイズのぬいぐるみもありますね」

横島が二つ目の包みを取り出し、二人に渡す。中には紅魔館の主要メンバーのぬいぐるみ。そしてレミリアの包みには『手乗りれみりあ』、フランの包みには『手乗りふらん』というタグが付いたぬいぐるみが入っていた。

「これなら大きいぬいぐるみも寂しくないっすね、多分」

横島はうんうんと頷いている。レミリアはアリスの技術に感嘆の息を吐き、フランはぬいぐるみをぎゅっと抱き締めている。その顔は緩んでおり、『大きいぬいぐるみも寂しくない』というところが気に入ったようだ。

「後はお二人の洋服っすね。ペアルックにしてみました」
「え、まだあるの？」
横島は二人に最後の包みを渡す。レミリアも流石に恐縮気味だ。
包みから出てきたのは赤を基調とした洋服。基本的な部分は同じだが、レミリアのはフードが付いており、下はスカート。フランのは別に帽子が用意してあり、下は半ズボンタイプだ。
「妹様は最近活発になってきてるんで動きやすさがどうこうって感じなんすけどねー、スカートの方が動きやすかったりするんすかねー？」
横島は今更ながらに疑問を抱いたようだ。もはや手遅れであることは気にしていないらしい。

レミリアは横島の様子に呆れを抱くが、それ以上に感謝の念が強い。ここ数年、こういった形で感謝を示された事に覚えがないので尚更だ。
「……こんなに貰っちゃってもいいのかな？」
フランがぽつりと呟く。彼女の瞳は不安に揺れており、横島を見つめる表情は弱々しい。
自分は横島に対し何もしていない。迷惑をかけているだけだ、という意識が未だ残っ

ているようだ。そんなフランに横島は身を屈め、目線を合わせる。
「そりゃ当然っすよ。俺が妹様にプレゼントを贈りたいから色々用意してきた訳ですし。むしろこっちが、何か迷惑をかけているような……」
「そ、そんなことないよ!?　でもその、えっと……」
フランは言葉に詰まり、口をぱくぱくと開く。言いたいことを上手く言葉に出来ないようだ。何とか言葉を出そうと頑張っているが、それよりも早くレミリアが口を出す。
「フラン。自分のことばかりじゃなく、相手のことも考えなさい」
「え……」
フランの頭に血が上る。その言葉はフランには予想外だった。フランはちゃんと横島のことを考えている。だからそれに反論しようとしたのだが、やはりレミリアの方が早かった。
「大方『自分は何もしてない』とか、『自分は横島に迷惑かけてる』とか考えていたんじゃないの？　それが自分を中心に考えているっていうの」
「そんなこと……」
「あるでしょ？　ダメな部分で横島と似てんだから……」
「ふぐっ」
「……似てる？」

横島は宴会の夜を思い出しダメージを受け、フランはきょとんとした表情で首を傾げる。

「そ。相手を気遣っているようで、実際は自分が沈み込んでいるってところとか」

「んむむ……」

レミリアはフランの小さな鼻をつんつんとつつき、反論を物理的に封じる。妹を諭そうとするその姿は非常に様になっていた。

「横島は何て言ってた？　自分が贈りたいからって言ってたでしょ。贈り物ってのはね、贈る方も貰う方もまず気持ちを大事にするものなの。……まあ確かに一度にたくさん貰ったら恐縮しちゃったり引いたりすることもあるけど……」

「ごふっ……！」

「プレゼントを貰う側が固辞しちゃったら、贈る側に立つ瀬がないでしょ？」

「……あ」

フランは目を見開く。レミリアの言うことも最もだと感じたからだ。確かに自分は横島に対し失礼な態度を取っていたと、すんなり受け止めることが出来る。横島が吐血したが誰も気にしていない。

「ま、これが組織だったり面倒な立場だったりしたら別だけど……それは今はいいわ」

フランのレミリアを見る目が輝きを増す。姉が自分よりも随分と先を進んでいるこ

とを思い知り、また、それが嬉しく感じられるのだ。
「それに、昔から言うでしょう？　――――こういうのは貰える内が華だって」
「……ん？」
「クリスマスのプレゼント然り、お正月のお年玉然り、貰える内に貰っておかないと損じゃないの。くれるっていうんだから遠慮なく受け取っておけばいいの」
　フランのレミリアを見る目が急に残念なものになった。口からは長い長い溜め息が漏れる。
「……あれ？　何か変なこと言った？」
「ううん、やっぱりお姉様はお姉様だって安心出来た」
「……何か、馬鹿にされてる気がする」
　レミリアは釈然としない表情を浮かべているが、フランとしては最後まで格好良く決めてほしかったのだろう。期待していた分そのガッカリ具合も凄まじいが、よくよく考えてみればレミリアの言葉は真実だ。
「……うん、そうだよね」
　フランはぬいぐるみと洋服をぎゅっと、しかし優しく抱き締める。そして笑顔を浮かべ、横島へと向き直った。
「あの、私……大事にするね。ぬいぐるみも、お洋服も」

「ええ、大事に使ってやってくださいな」
フランの言葉に横島も笑顔で応える。その笑顔は、フランが大好きなもので。
「……ありがとう、ただお兄様」
恥ずかしげに、呟くようにお礼を言う。しかし、その言葉は空気を読んで静かにしていた皆には丸聞こえだった。
「……ただお兄様？」
「……あっ」
誰かの呟きが響き、フランが「やっちゃった！」とばかりに声を出す。周りはざわつき、そこかしこから「ただお兄様……」「ただお兄様……」と聞こえてくる。何となく横島の顔色が悪い。
「……こほん」
フランは咳払いを一つ。
「ありがとう、ただお兄様！」
「開き直った!?」
やけくそ気味に大声でお礼を言い直したのだった。ちなみに周りの意見としては「まあ横島だし」というものと、「まあフランちゃんだし」というもので気にされていなかったりする。

そして、最後に。

「お嬢様、これで最後です」

「って、まだあったの？」

「いやー、やっぱり吸血鬼たるお嬢様にはこれかな、と」

そう言って横島はタイを外し、ジャケットとシャツのボタンを外す。首筋と最近厚くなってきた胸板をワイルドに露出させ、レミリアの足下に跪く。目線を逸らし、頬を染め、体を震わせながら呟いた。

「……ど、どうぞ」

――――何よりも早く、咲夜のナイフが横島の額に深々と突き刺さった。

「き、や、お、お、お、ー、ー、ー、っ、！、！、？、」

「何かしら？　『プレゼントは私』的な何かなのかしら？　お嬢様方にそんなことをさせると思ったのかしら？　そんな羨ましいことをこの私がさせると思ったのかしら……!?」

横島の額から物凄い勢いで血が噴出している。そんな横島に対して周りの反応はと言えば、彼の逞しい胸板に夢中だったり、首筋から胸、そして腹に垂れる血にエロスを感じたり、鎖骨から大胸筋にかけてのラインに「むきゅー」と興奮していたりと様々であった。

「何するんすか咲夜さん！　俺がお嬢様に対してそんなことするわけないでしょ!?　血ですよ血！　吸血鬼に自分から血を献上するって、何かこう……あれでしょ!?」

横島は必死に誤解を解かんとする。咲夜は柔らかな微笑みを浮かべ、横島の肩に手を置いた。

「私は最初から信じていたわ、横島さん」

「嘘吐けぇ！」

それはもう凄まじい程に白々しかった。あまりの白々しさに流石の横島も怒りが湧いてくる。せめてものお詫びにと咲夜は横島の血を拭うが、血が垂れた場所が場所なだけに横島の煩悩を大いに刺激する。横島の怒りはいとも容易く消えるのであった。

「……もう、吸ってもいいかしら？」

「ええ、どうぞお嬢様」

（何で俺じゃなく咲夜さんが答えんだろ）

遠慮がちに問うレミリアに咲夜が笑顔で答える。横島はそれに疑問を持つが、レミリアがいつの間にか首筋に噛みついていたので、もうどうでもよくなった。

「……いっ」

首筋に走る鋭い痛みに思わず声が漏れる。レミリアも気をつけてくれているのだが、こればかりはどうしようもない。

「ん……、ちゅっ、んん、ふ……」
「う……、あ」
辺りにレミリアが血を吸う音と舐める音が響く。横島も痛みを堪えるためか小さく声や息を漏らしており、それがどこか淫靡な雰囲気を醸し出している。
「ひゃ～……」
「むきゅー……！」
周囲の反応は様々で、雰囲気に当てられて頬を染めて目を逸らす者。目を手で覆い隠し……指の隙間からガン見している者。鼻息荒く大興奮している者（最大派閥）などだ。
フランは横島達の様子を物欲しそうに見ていたが、それに気付いたレミリアが注意を促す。
「……フラン、あなたは人を吸血鬼化させずに血を吸うのはまだ無理でしょう？　横島の血を吸いたいのなら、もう少し吸血鬼としての力を扱えるようになってからよ」
「はーい……」
（……いや、まあいいんだけどさ。何で血を吸うこと前提で話が進んでるんだろーか……）
空気を読んで口には出さないが、姉妹の会話につっこみたい横島であった。
「……っぷはー！　あー、やっぱり横島の血は美味しいわね」

「うーん、嬉しいような全然嬉しくないような、微妙な感じっすね」
　レミリアは口元をハンカチで綺麗に拭い、横島は傷跡をさする。すでに傷は塞がっているのだが、どうにも違和感が絶えない。
「これで私とフランの分は終わったし、次の人にプレゼントを渡さないとね。順番的にはパチェかしら？」
　レミリアはパチュリーを指差し、横島に確認する。横島は目線で他の皆にそれでいいかを問い、皆は頷くことで了承した。
「んじゃ次はパチュリー様っすね。パチュリー様は活動的で露出度の高いセクシーな服に憧れていると聞きましたんで、そんな感じの洋服を選んできました……こんな感じっすね」
「何でそれを知ってるのかが気になるけど、これは……良いわね」
　横島がパチュリーのために選んだ服、それは白のチューブトップにデニムパンツ。他にもホットパンツや膝丈のワンピースなどもあった。
「何かこう……私が着るとちょっとマニアックな感じになりそうだけど、冒険してみたって良いわよね……？」
「オシャレは冒険してこそらしいっすからね。自分の物にしちゃいましょう」

パチュリーは横島と固く握手を交わす。どうやら彼女の趣味にも合っていたようだ。
「それにしても人里に洋服なんて売ってたのね。あそこの人ってほとんど和服とかだし」
「最近流行ってるみたいっすよ？　結構店もありましたし」
「ふーん……」
パチュリーは横島から贈られた服を見ながら考えに耽る。横島はそれを疑問に思ったが、パチュリーに渡す物は渡したので次に移ることにした。
「それじゃ次は咲夜さんっす」
一号達のリュックを漁りつつ咲夜に目を向ける。対する咲夜は少々苦笑いを浮かべていた。
「さっきのことがあるから、ちょっと受け取りにくいわね」
咲夜は誤解から横島にナイフをぶっ刺したのを気にしているようだが、横島はそれをからからと笑って許す。
「いやー、俺も普段が普段っすからね。別に気にするほどのことじゃないっすよ。……っと、あったあった」
そうして横島が取り出したのは何か今までとは重さが違う包み。金属製の甲高い音や、中が詰まった石のような重い音も混じっている。

「まずはこの砥石とまな板。河童のにとりちゃん製作の逸品で、この砥石で包丁を研げば本来以上の切れ味を持たせ、このまな板はその切れ味を物ともせずに受け止めます。更には水洗いで雑菌の九割九分を流せるとか」
「……それが本当なら、素晴らしいわね」
　今までのプレゼントとは違い、随分と所帯染みた物だ。だが、咲夜の表情は曇るどころか輝きを増している。砥石の大きさに重さ、まな板の素材や厚み、感触などを具に調べている。しかし、咲夜の感動はまだ終わらない。
「それからこちらもにとりちゃんの製作で、『圧力鍋』ってやつです」
「……圧力鍋？」
　聞き慣れない言葉に咲夜は首を傾げる。外の世界ではもはや一般的な物なのだが、言ってしまえば閉鎖的な幻想郷では仕方のないことだ。
「ええ、何でも圧力を調整することで調理にかかる時間を短縮出来る、とか何とか。にとりちゃんが言うには三分の一程度にまで抑えられるそうで」
「何……ですって……!?」
　咲夜の体が雷に打たれたような衝撃が走る。少々オーバーに過ぎるが、それほど驚いているということだろう。
「これが取扱説明書っすね。詳しいことはこれに載ってますし、最後の頁は三十年間の

保証書にもなってますんで」

横島が説明書を渡すと、咲夜は一心不乱に読み耽る。その瞳は爛々と輝いており、もしかしたら今まで能力を使ってまで短縮していた時間を、労せず使う事が出来るかもしれないという希望に満ち溢れている。

一通り読み終えた咲夜は横島に向き直り、彼を力強く抱き締めた。

「お、おおぉおぉ!?」

「ありがとう……！　ありがとう、横島さん！　大事に、本当に大事に使わせてもらうわ……!!」

まさかの結果に横島は煩悩が沸き立つよりも早く混乱する。仕事について横島が考えていたよりも、咲夜は毎日大変な思いをしていたようだ。……ある意味、自業自得ではあるのだが。

「……あ、はい。そうしてください。それからこれ、髪留めのリボンです。良かったらこれもどうぞ」

横島は咲夜に赤い、一対のリボンを手渡す。それは咲夜の髪に映えるだろうと選んだ物だ。

咲夜は横島から身を離して今自分が付けているリボンを外し、横島から贈られたリボンと替える。銀の髪に赤のリボンは、互いに調和しあい、美しさを増している。

「……似合うかしら？」
「おぉー！　良いっすよー、可愛いっす！」
「そ、そうかしら」
真っ直ぐな横島の言葉に、さしもの咲夜も照れたようだ。頬が朱に染まっている。普段自分のオシャレなどは二の次にしている分、こういうことでは褒められなれていないのだ。
「いよし！　この勢いに乗って次は美鈴だな！」
男性に褒められて照れる咲夜というレアな光景を完全に流し、横島は美鈴の荷物をリュックサックから取り出す。
咲夜は横島の様子に笑顔を浮かべている。それの意味するところは「仕方ないなあ、この子は」という、まるで弟か何かを見るかのようなものだった。
一方いつの間にかカメラを握り締めている永琳は悔しげに顔を歪めている。
「あともう一押しあれば、あの子のデレた表情を写真に収められたかもしれないのに……！」
「あはは……、何度もシャッターを切ってたじゃないですか……」
妙なことで悔しがる師匠に、弟子である鈴仙はいつも通りに引き気味だ。何とも欲深い永琳をレミリアの視線が貫く。

「ハッ……！　れ、レミリア!?」
「永琳……」
二人の距離が近付いていく。そして限りなくゼロに近付いたところで、レミリアは永琳に手を向ける。
「後で私にも写真を一枚」
「了解よ！」
レミリアの人差し指はピーンと伸び、「一枚よこせ」と如実に語っていた。
「はい、美鈴これ」
「わ、私にもくださるんですか……？」
横島達は周りの喧騒などまるで意に介さずに話を進める。美鈴は横島から手渡された包みに驚いているようだ。
「そりゃ当然だろ？　美鈴は俺に色々気を使ってくれてるし、美鈴が居なかったらここまで元気に過ごせてるか分かんねーくらいだしさ。美鈴にもたくさん感謝してんだよ」
「そ、そんな……」
横島の照れたような笑みと言葉に、美鈴は頬が熱くなってきたことを自覚する。さぞや赤くなっていることだろう。
一体どんなプレゼントなのか美鈴も気になっているのだが、横島の表情はどこかばつ

が悪そうな物に変化していることの方が気になった。
「あの、どうかしたんですか？」
「ん、あー、いや……」
露骨に目を逸らし、頭をボリボリと掻く。何かまずいことでもあったのかと考えたが、言いづらそうにしながらも横島が答えてくれた。
「いや実はさ、美鈴にも洋服を選んだんだけどな？　何というか『これは美鈴に似合いそう』とかじゃなくて、『これを美鈴に着てほしいな』みたいな感じで選んじゃってさ。何か俺の趣味を押し付けることになるんじゃないかなーって……」
「そんな、気にされるようなことじゃないですよ」
横島は自分の趣味を優先したように思い、ばつが悪かったようだ。だが、当然美鈴はそのようなことを気にするような性分ではなく、自分に対して洋服を贈ってくれるその気持ちこそをありがたいと思っている。
「横島さんの気持ち、凄く嬉しいです……。本当にありがとうございます。大切にしますね」
「……ああ」
二人の間に何やら良い雰囲気が流れるのだが、そこに一人のお姫様が忍び寄る。
「ふふふ、めーりん……？」

「えっ、何ですか、輝夜さん……？」
美鈴の背後から近付いた輝夜は、美鈴の耳元でぼそぼそと話し出す。
「横島さんの言った言葉を要約すると……」
「要約、すると……？」
「……〝お前の全てを、俺色に染め上げたい〟――――!!」
「え……、ええっ!?」
それはもはや要約ではなく曲解である。しかし正常な判断能力など完全に失われた美鈴は、顔を真っ赤に染めて頭から湯気を出して狼狽えるのみ。
周りの皆は美鈴の突然の変化に疑問を抱くのみである。
「あの、美鈴……？」
「ひゃ、ひゃい！　な、何でしょう横島さん!?」
横島に話しかけられただけで過剰に反応してしまう美鈴に、輝夜は内心で腹を抱えて笑っている。まさかここまで見事に術中に嵌るとは思わない。
「あー、いや。また今度でいいからさ、出来れば美鈴がその服を着てるところを見たいなーって」
「……それって」
美鈴に冷静な判断力が戻りかける。しかし輝夜は未だ美鈴の側に引っ付いたままだ。

またも囁き戦法が炸裂する。
「……〝その時こそ、お前は俺の女（モノ）だ〟――――！」
「……っ!!?」
まるで少女漫画の俺様系男子のような台詞である。史実からすれば輝夜はそういった男を嫌いそうなものだが、『それはそれ、これはこれ』なのか、もしくは『二次元ならば許す』の精神なのかもしれない。
「……あの、美鈴さん?」
「ふぁい、そっ、そその時は頑張ります!?」
「ぷふぅっ！」
輝夜は美鈴の言葉に噴き出してしまう。一体何を頑張るのか、想像が絶えない。そんな美鈴の台詞だが、一方では妙な勘違いをさせていた。
（……その服を着るのは、頑張らないといけないほど嫌なのか……？　あれー!?　今朝といい今といい、俺美鈴に何かしたっけ!?）
生来のネガティブさからくる勘違いではあるのだが、美鈴にとって嫌な形であると言えよう。
（あ、あれ?）

その空気を敏感に感じ取ったのもまた輝夜であった。ちょっとした冗談で始めたことだったのだが、今回は少々やりすぎたようだ。

「ど、どんな服か楽しみよねー、美鈴？」

「うえっ？　あ、えーと、そうですね……」

何とか空気を戻そうと美鈴に話をふる。美鈴は初めこそ戸惑ったが、すぐに冷静さを取り戻すことが出来た。美鈴は包みをぎゅっと抱き締める。

「……横島さんが選んでくれたんですから、きっと素敵なお洋服ですよ」

赤らんだ頬と若干潤んだ上目使いというコンボを横島に叩き込む。これを受けた横島はただ照れを笑って誤魔化すしかなかった。

（……ふう、何とかなった）

額の汗を拭って輝夜は一息吐く。慣れないことはするものじゃないと思い知ったようだ。

「それじゃ輝夜様、これをどうぞ」

そんな輝夜に横島が包みを差し出した。

「え、私もいいの……？」

「ええ、もちろんっす」

横島が差し出す包みを受け取る。今までに比べれば包みは随分と小さいが、プレゼン

トの価値は大きさで決まるものではない。それを知る輝夜は自分にもプレゼントを贈る横島にこそ驚いた。
「開けてみてください」
「う、うん……あ、これ」
包みに入っていた物、それは品の良い彫りがなされた柘植の櫛であった。
「うわぁ、凄く上品な装飾ね。主張し過ぎず、綺麗に纏まってる……。うん、これは良い物だわ」
「ふうー……。いやー、輝夜様の趣味に合うか、ちょっと不安だったんすよー」
輝夜は櫛を様々な角度でシャンデリアに透かせたりして眺めている。見れば見るほどに目の輝きが増し、相当に気に入っている様子であるのが見て取れる。
「あ、それからこれが櫛のお手入れ用の椿油と刷毛です。あと髪用の香油ですね。柑橘系の匂いですけど、大丈夫ですかね？」
「ありがとー。丁度新しい櫛が欲しかったところなの。香油も柑橘系の香りは好きだし、全然大丈夫。大事に使わせてもらうわね」
柘植の櫛は長く使えば使うほどに髪に美しさを与えてくれる。蓬莱人である輝夜が使うのに、これほど適した櫛もないだろう。尤も、それを横島が知っているかは話が別だが。

「ふう、良かった。そんじゃ、永琳先生。これをどうぞ」
「あら……これはこれは」
横島は永琳へと歩み寄り、他の人には見えないように包みを開ける。中を覗いた永琳は感嘆の息を吐く。
「へえ……。あ、これってここがこうなってるのね」
「そうっす。それからここの部分をこうすると……」
「キャー♪　良いわよ良いわよー！　私達は本物を知ってるけど、こういう方面の物も良いわよねえ」
「ホントそうっすよね。流石日本というか何というか……。幻想郷にもこっちの趣味の人間が居るもんなんすね」
漏れ伝わる言葉からは全容が把握出来ない。しかし、二人の表情を見れば何となく分かる気がするのだ。
二人の目は欲望に染まり、口元に浮かぶ笑みは何というか溢れんばかりの煩悩に満ち満ちている。それはもう『汚い』とか『邪悪な』とかが頭に付きそうな笑みであった。
当然周りはドン引き状態だが、一人だけそれだけでは済まない者がいた。
「……」
鈴仙である。彼女だけは胸を貫く嫌な予感に諦観を抱いていた。曰わく、「また何か

私が被害を被るんだろうなあ」だとか。
「ありがとう横島君！　有効に活用させてもらうわ」
「いえいえ、俺の方こそこんな喜んでもらえるとは思いませんでしたよ！」
がっちりと握手を交わす二人を見ないふりしつつ、鈴仙は重い重い溜め息を吐いた。
「……それはそうと、これは別に用意したブローチっす。こいつもどうぞ」
「あら、可愛いデザイン。……うん、綺麗」
そのブローチは白を基調としており、銀の縁に青い花がデザインされていた。シンプルながらも飽きがこないデザインである。
永琳は早速ブローチを襟に付けてみる。
「こういうのって今まで付けたことがなかったから、これで合ってるのかしら……？」
「はい、合ってますよ。永琳先生の雰囲気ともマッチしてます」
「そう？　ふふ、ありがとう。大切にするわね」
永琳はブローチを優しく撫で、横島に笑いかける。横島も笑顔で返しており、二人とも先程の恐ろしい笑顔を浮かべていたのが信じられないほどの爽やかさだ。
鈴仙はそんな二人を引きながらも見ていたのだが、いつの間にか二人が自分をじっと見ていることに気付き、体をびくつかせる。
「な、何ですか、二人して……？」

「次は鈴仙かなぁと」
「次はイナバちゃんかなぁと」
二人の声が綺麗にハモる。僅かな間に随分と仲が良くなっているのも驚きだが、やはり一番は自分にもプレゼントがあったことだ。
「私にも、あるんだ……？」
「そりゃね。いつも傷の手当てをしてくれるし、怪我の応急処置の仕方とかも教えてもらってるしな」
（……やっぱり、けっこう律儀な人なんだ）
鈴仙は横島が些細なことでも感謝の気持ちを忘れないことに感心を示す。勿論横島がこういったことをするのは美女美少女だけであり、男相手には礼を言うことすら珍しい。
元の世界の親友である雪之丞やピート、タイガーならば別だろうが、それ以外に関しては推して知るべし、である。
「そんじゃこれ。見た瞬間イナバちゃんにプレゼントしようってビビッときたんだよなー」
「……何だろ、開けてもいい？」
「おう」

鈴仙は包みをガサガサと開ける。
「……これって」
中に入っていたのはハンドクリーム、爪切り、爪ヤスリ、ブラシ、オイルなど、指や爪の手入れに必要な物が揃っていた。どれも鈴仙が集めようかと考えていた物であり、驚いてしまう。
「頭の傷の治療とかしてもらってる時に気付いたんだけどさ、イナバちゃんの手や指って凄い綺麗なんだよな。俺ってよく怪我するし、その治療のせいでイナバちゃんの指がこう……俺の母親みたいになるのは忍びないし」
「……どんな例えなの。いや、言いたいことは分かるけど」
もしこの場に母が居たならば、横島は一体どのような目に遭うだろうか。横島は何か背筋に悪寒が走るのを感じたが、今はどうでもいいだろう。重要なのは鈴仙の反応だ。
「……」
鈴仙は包みの中をじっと見つめている。それはいいのだが、他に何の反応も示さないのが横島には不安だった。
「……あの、イナバちゃん。いらなかった、かな……？」
その不安が頂点に達したのか、横島は鈴仙に恐る恐る問い掛ける。確かに沈黙は不安を煽るが、実際には横島の考え過ぎである。

「あっ、違うの！　別にいらないからじっと見てたわけじゃなくって……！　その、嬉しかったからで……」

横島に誤解させてしまったせいか、鈴仙はしどろもどろに釈明する。杞憂だったことに横島はほっと溜め息を吐く。

「ふう、勘違いで良かった……」

「えっと、ごめんなさい。私、本当にこういうのが欲しかったから……。ありがとう、横島さん」

「……っ！　ど、どーいたしまして」

鈴仙は心からの笑みを横島へと向けた。それはとても綺麗なもので、横島の呼吸を一瞬止めるほどであった。

これから徐々に関係が変わっていきそうな二人を、てゐは静かに観察している。

（執事さんはいつも通りだけど、鈴仙はまた何か違う感じだね。それにしても執事さんに対する態度がコロコロ変わるというか……。何というか、めんどくさい子だね、鈴仙は！）

抱いた感想は何ともざっくりとしていた。しかも彼女は誰かに話しても同意を得られるだろうと確信している。

「……これで全員分かな？」

全員にプレゼントを渡し終えたと考えたてゐは伸びをして固くなっていた体を解し、そのまま部屋に戻ろうとする。だが、それを引き止める者が存在した。
「ちょい待ち。紫さんもてゐちゃんもストップストップ」
「え、私……っていうか紫まで？」
「……何かしら、横島君？」
「いや、何かしらって……」
横島は二人の表情を見やる。真っ直ぐな、嘘偽りのない表情をしている。どうやら本当に分からないようだ。横島は包みを二つ取り出す。
「二人にもプレゼントあるんすけど」
「えっ!?」
「わ、私達にも……？」
それは予想外だったのか、二人は大いに驚く。
「いやでも私達の場合は……」
「貴方に迷惑しか掛けていませんわよ……？」
「んー？　いや、んなこたないけど」
両者の間にはかなり深い認識の違いがあるようだ。
「だって私が悪戯したから……」

「私が暴走したから……」

二人は自分達のせいで横島がこちらの世界に墜落してきたことを言っている。下手をすれば横島は死んでいたし、もしかしたら二度と元の世界に帰れないかもしれないのだ。謝罪を受け入れ、こうして普通に接してくれていることでさえ奇跡と言っても良いほどである。

しかし、横島にとってそれはあまり重要なことではない。

「それは二人とも謝ってくれたし、十分に反省してるから別にいいんだけどさ。前も言ったけど帰れないって決まったわけでもないし」

「……」

あまりにもあっけらかんと話す横島に二人は開いた口が塞がらない。それを良いことに横島は言葉を続けていく。

「これは前に永琳先生から聞いたんだけどさ、紫さんって普段あまり表に出てこないんですよね？　それが俺の為に色々動いてくれて、親身にしてくれて。こうしていつも俺の様子を見にきてくれてますし」

「……」

「てゐちゃんも、あれから俺や妖精メイド達の手伝いをしてくれてるしな。最近は悪戯も減ってるって聞くし、相談にものってくれるしな」

「……」

やはり二人は言葉もない。自分達の行動の被害者に対して出来るだけのことをしていたのだが、当の本人がそれに深い感謝を抱いているとは考えていなかった。

横島は照れくさそうに頬を掻き、二人から目を逸らしながら最後の理由を語る。

「後は、ほら。ベタだけどさ、俺が皆と会えたのは言っちゃえば二人のおかげだし……とか思うんだけど、どしたの二人共」

視線を二人に戻した時、二人は目を覆い悶えていた。

「ごめんなさい……。もう少し、もう少しだけ待って」

「ごめんね、今色んな意味で執事さんを直視出来ない……」

横島の言葉に色々な感情が暴れているようだ。嬉しくもあり、情けなくもあり、悲しくもあり、救われたようでもある。

二人は今の感覚を今後忘れないであろう。

「……よく分からんけど、プレゼントは受け取ってもらえます……？」

横島は二人に包みを差し出す。二人は顔を見合わせ頷き合ったあと、少々震える手で横島から包みを受け取った。

「……ありがとう、横島君」

「執事さん、ありがとうね」

「……おう！」

横島は満面の笑みで二人を迎えた。その笑顔は二人にとって眩しく、また痛いものになってしまっているが、同時に胸を暖かくしてくれるものでもある。

紫とてゐは横島の笑顔を受け、ぎこちなくではあるが笑顔を返すことが出来たのであった。

「そういえばさ」

話が一段落し、皆が横島からのプレゼントを眺める中、フランがぽつりと呟く。

「どうかしたの、フラン？」

隣にいたレミリアがフランに問い掛ける。フランはおとがいに指を当て、「んー」と考えるように唸った後に言葉を繋げた。

「えっとね、ただお兄様って私だけじゃなくお姉様にもぬいぐるみをプレゼントしてた

けどね？　何でお姉様がぬいぐるみ好きなのを知ってるのかなって。……あれだけたくさんのぬいぐるみ、普段のお姉様しか知らないなら贈らないだろうし」
「……言われてみれば確かに」
女の子とはいえ、全てが全てぬいぐるみ好きとは限らない。なのにあれだけ大量のぬいぐるみを贈るということは、対象がぬいぐるみ好きなのを知っている証明だ。
レミリアは視線で横島に問い掛ける。
「え？　小悪魔ちゃんが教えてくれましたけど？」
「ちょっ!?」
「……ほほう？」
レミリアの強い視線が小悪魔を貫く。突然の事態に小悪魔は誤魔化すことも出来ずにただ慌てるしかない。しかも、小悪魔の受難はこれだけでは収まらない。
「じゃあ私がセクシーな洋服に憧れてるのを知ってたのも……？」
「ええ、それも小悪魔ちゃんから」
「……へえ？」
「あ、あわ、あわわわわ……!?」
レミリアに加え、パチュリーの視線も追加される。二人の視線は既に視線というよりビームと化しており、ビカビカと輝きを放っている。

（……あれ？　もしかしてこれ言っちゃダメだった感じ……？）

横島も成長しているようで成長していない。失言癖も治りきってはいなかったのだろう。

「よし、決めた。小悪魔、あんた今から明日の朝まで美鈴の代わりに門番でもやってなさい」

「ええーっ!?」

「乙女の秘密をバラした罰。潔く受けなさい、小悪魔」

「うう、そんなぁ……」

とんとん拍子に話が進み、ここに小悪魔へのお仕置きが決定した。これも自業自得ではあるのだが、バレた理由が理由なだけに理不尽な印象は拭えない。

「そんじゃ私達は戻るけど、ちゃんと門番やってなさいよ」

「後で差し入れ持っていくから、元気出してね」

「あはは……。それじゃあ、私の代わりにお願いしますね」

皆は小悪魔に一言声を掛け、去っていった。小悪魔は床に跪き、自らの行いを省みる。

「うう……、ああいうのってやっぱり自分に返ってくるものなんですね……」

横島は小悪魔の様子を冷や汗をかきながら見ていた。悪気は無かったとはいえ、罪悪感が押し寄せてくる。横島はこのあとの過ごし方を今決定した。

「この時期、夜は冷え込むんですけどね……」
　無意識に呟いた言葉。誰の返事も想定していなかったそれに、傍らから言葉が返ってくる。
「――――じゃあ、これが早速役に立つかな？」
「……え？」
　言葉と同時、小悪魔の肩に掛かる優しい温もり。
「え？　あ、これって……！」
　自らの肩に掛かっていた物。それは人里で見つけた、淡い色合いのストールであった。
「こ、これ、いつの間に……!?」
「そりゃあ小悪魔ちゃんがぼーっとしてる間に」
「あ……！」
　こうして言われてみれば、確かに帰り際に洋服屋に寄ったような覚えがある。
「え、でも……。横島さんと一緒にいれただけでって……」
「あー、うん。それなんだけどさ」
　横島は小悪魔の言葉に俯き、頭を掻く。それは小悪魔に対して謝意を抱いている証であった。

「何だかんだでさ、デートって感じだったのに終始他の女の子達とも絡んでたしさ。あんまり小悪魔ちゃんと話も出来てなかったし……」

「……」

それは確かに気にしていたことだった。その後に『色々と』あったから特に気にしないでいたが、横島はそうではなかったようだ。

「そのお詫び……ってわけじゃないんだけどさ。純粋に小悪魔ちゃんに似合うと思ったし、ちょっと押し付けるような形になっちゃったけど……」

「そっ、そんなことありませんよ！　そんなこと……！」

小悪魔は横島の言葉を否定する。押し付けではないと。胸に去来する思いのままに否定する。

「……そっか、ありがと。あ、そうだ。このまま二人で門番しよっか。小悪魔ちゃんのお仕置きって俺のせいだしさ」

さも今思い付きましたというような口振りに、自分自身に苦笑が漏れる。

「そんな、これは私のせいですし、そこまですることは……」

「いーのいーの」

横島は小悪魔の言葉を途中で遮り、頭に優しく手を乗せる。

「俺は今日は休暇だし、休暇の過ごし方は自分で決めるし。ほら、昼間はダメだったけど

さ、せめて今からでも小悪魔ちゃんと色々と話したくてさ。……今度はちゃんと、二人っきりで」

「……！」

横島の言葉に思考が揺れる。頭では遠慮した方がいいと思っているのだが、言葉がまるで出てこない。

迷っている小悪魔を導くように、横島が手を差し出す。

「デートの代わりに門番ってのは格好つかないけどさ。――――ほら、行こうぜ」

差し出される横島の手。昼間のデートの光景が蘇る。

あの時は握れなかった、その手を。

「――――はい、横島さん」

今は、笑顔と共に握り締める。

（こういうのは、ちょっと卑怯だと思うんですよ。……横島さん）

握った手から伝わる温もりに、胸が暖かくなる。そこから溢れ出す想いを自覚し、小悪魔は頬を染める。

それは、小悪魔の『恋』が始まった瞬間。

第十七話

『贈り物』

～了～

第十八話『組み手・横島対美鈴』

さて、横島が皆にプレゼントを贈った日の次の朝。紅魔館の中庭はある種異様な熱気に包まれていた。

それは紅魔館唯一の男性から贈り物を貰ったからか？　違う。そうではないのだ。

答えはもっと物騒で、紅魔館の住人が好みそうなものだった。

「さぁー、いきますよ横島さんっ!!　しっかりと相手をしてもらいますからねーっ!!」

「――――はあぁぁぁぁぁ……」

目が爛々と輝き血色豊かでやる気満々な美鈴と、死んだ魚のような目をして深い深い溜め息を吐く横島との対比が、見る者の笑いを誘う。

そう、これは美鈴が一方的に約束を取り付けた組み手である。

ゴーストスイーパーという仕事をしていた横島は徹夜など慣れっこではあるのだが、彼は元々組み手や試合、修行などという行為は大の苦手である。

そんな彼が爽やかな朝っぱらから武闘派美少女と組み手をしなければならないのだ。

憂鬱な気分になるのも仕方がないと言える。

「ただお兄様ー！　頑張れー！」
「美鈴ー、適当にやっちゃいなさーい」
対極なのは美鈴と横島だけでなく、応援の側にも存在した。両手を振って大声で横島を応援するフランと、気怠そうに片手をぷらぷらと振って美鈴に声をかけるレミリアである。
横長の大きなテーブルと椅子をわざわざ中庭にまで持ってきて応援席としている。紅魔館と永遠亭の主要メンバーはこれに着席し、妖精メイド達は立ち見となっている。
しかし、テーブルに着くメンバーの中で、普段紅魔館では見慣れない人物達がいた。
「さて、ついに始まりました執事さん対美鈴の組み手。実況を務めますは私因幡てゐ、解説は白玉楼の剣術指南役、魂魄妖夢さんが務めます」
「……はぁ」
何故か組み手の解説をやらされる妖夢と、いつもの通りお茶会をしている紫と永琳に混ざっている幽々子だ。
どうやら幽々子が紫から二人の組み手について聞いたようで、横島の実力に興味を示した妖夢を連れて来たらしい。
妖夢も初めは興味津々といった様子だったのだが、あれよあれよという間に解説役を押し付けられ、一人静かに観賞することが出来なくなった為に溜め息を吐いている。

「はいはい、溜め息もそこそこにして。今回の組み手ですが、執事さんと美鈴、妖夢さんはどう見ます？」
「……いや、どうって言われても」
　既に実況になりきっているてゐに妖夢は二の句が継げない。幽々子の方を見てもお茶菓子を食べながらニコニコとこちらを見ているだけ。周りに目をやっても総じて目を逸らされた。この場に味方はいないのである。
「……美鈴さんの方はやる気が漲っていますが、横島さんの方は逆に萎縮しています。このままではやはり美鈴さんの方が有利でしょう」
「なるほど。やはり気の持ちようが重要であるということでしょうか？」
「そうですね。思考と気力は一致しますから、やはり気が充実している方がより高度なパフォーマンスを発揮出来ます。……勿論例外もあるでしょうが、横島さんはそういったタイプではないでしょうし」
「執事さんのテンションが鍵、ということでしょうか。美鈴がジワジワと間合いを詰めています。そろそろこの組み手の火蓋が切られそうです……！」
　妖夢は軽く頭を振ったあと、仕方なしに解説を始めることにする。根が真面目な妖夢は真剣に二人を分析し、意見を述べる。こういったことが出来るようになった辺り、頑固なところが和らいできたようだ。

（むむ。横島さんにあまりやる気が見られませんね。……まあ、私が無理矢理取り付けた約束なので当然でしょうけど）

横島の一挙手一投足に神経を傾けながら、美鈴は横島を観察する。思考の内容はネガティブなものになってしまったが、それでも美鈴の気力は萎えない。

（……しかし油断は出来ません。やっぱりこういうのは全力を尽くしてこそですからね！）

「……っ？」

横島の背筋に何故か悪寒が走る。これから何か起こるのか不安に思う前に、まばたきを一つ。

「はっ!!」

「――――んなっ!?」

その正に一瞬の隙に、美鈴は既に間合いを詰めていた。

――――形意拳・跳歩崩拳!!

絶対に避けられないであろうタイミングで迫る右の崩拳。弾丸の如き速度で迫り来るその拳を、横島は――――。

「のひょぉっ!?」

「……っ!?」

奇声を上げ、大袈裟に、簡単に躱してみせた。
『おぉー!!』
一瞬の攻防。それを認識出来たギャラリー達は感嘆の声を上げ、認識出来なかったギャラリー（妖精メイド）達はよく分からないが周りに倣ってとりあえず声を上げる。
「びびった……！　マジでびびった……！」
「……」
荒い息を吐き、胸を押さえてほんの一瞬の隙を突いた美鈴への驚きを鎮めようとする横島と、突き出した拳をそのままに、自らが繰り出した技を簡単に避けた横島を見開いた目で見つめる美鈴。より驚愕が大きいのは、どちらであろうか。
「いやー、今の一瞬の攻防！　美鈴の突きが決まるかと思われたのですが、執事さんが避けてみせましたね！」
「ええ。私もあのタイミングなら決まると思ったのですが、まさか避けるとは……」
実況席からてゐの興奮したような声と、妖夢の驚きに呆けたような声が響く。他の『見えた』ギャラリー達も同様の意見のようで、横島に対する賛辞や美鈴に対する叱咤激励も聞こえてくる。
その中で妖夢の目は次第に輝きが増していき、頬も感情の高ぶりからか紅潮する。
美鈴は再び横島との間合いを詰め、フェイントを織り交ぜながら連撃を入れる。だが

横島にはそれでも通じなかった。

横島はそのフェイントに引っかかりながらも迫り来る拳や肘を避け、弾き、逸らし、受け止める。全ての攻撃を防いでいるのだ。

「おぉーっと！　執事さん、美鈴の連続攻撃を物ともせずに避けまくるー!!　でも、しかしこれは……!?」

てゐの実況にも力が入る。だが、後半には何か戸惑いの色も混じっていた。

「のほっ!?　ぅひいっ!?　ちょあっ!!　のひゃぁっ!?　いやあぁぁぁ!?」

横島は避ける。奇声を上げて避け続ける。その姿は正に必死であり、涙どころか鼻水も溢れている。

全てが大袈裟で無駄な動きで無茶苦茶であり、おおよそ人間の動きとは思えない。言ってしまえばその無様というかみっともないというか、とにかく見苦しいものであった。もう酷いというより惨い。

「これはひどい……！　執事さん、何だかとってもひどい動きだー!!　どうせ避けるならもっとカッコ良く避けてよー!!」

「ほっとけー!!　……にょわぁっ!?　かすった!?　今かすった!!」

実況のてゐも横島の動きは良い物とは思えなかった。見ている者全てがてゐと意見を一致させるだろうが、ここには例外が存在していた。

妖夢と、美鈴である。

「いやー、妖夢さん。執事さんのあの動き、どう思われます？」

てゐは先程から黙っている妖夢に意見を求める。自分からすれば横島の動きは無様な物にしか見えなく、他の意見が聞きたかったからだ。そしてその期待は実ることとなる。

「……はい。確かに見た目はひどいですが、私としましては『素晴らしい』というのが正直なところです」

「……素晴らしい、ですか？」

「ええ。聞くところによると横島さんは特定の武術を修めているわけではありません。しかし、彼はあの美鈴さんの攻撃を全て避けています。これだけで、横島さんの天才が分かるというものです」

「天才、ですか」

妖夢の言葉はてゐには予想外に過ぎた。確かに美鈴の攻撃を未だ避け続けているのは素直に凄いが、それだけで天才と呼べるものなのだろうか。

「……では、執事さんのどういったところに天才性があるのでしょうか？」

「まずは動体視力と反射神経ですね。手加減しているとは言え、美鈴さんの攻撃を瞬時に見切り、躱す。これは人間が行うのは至難の業です」

「確かに、美鈴の攻撃は妖怪の私から見てもとんでもないです」
「しかも美鈴さんは中国拳法の達人。その功夫は人間が到達出来るレベルを超えています。つまり横島さんの身体能力は、霊力でのブーストを加味しても、人間の領域を超越しているんです……！」
妖夢の解説に周囲から感嘆の声が上がる。特に横島に懐いている妖精メイド達の反応は顕著だった。やんややんやと横島に喝采を送っている。
「妖夢さんは先程『まずは』と仰っていましたが、他にもまだ要因があるのでしょうか？」
てゐは冷静に妖夢へと解説を請う。妖夢は一つ頷いたあと、語り始める。
「これは以前の宴会の時に聞いた話です。横島さんはゴーストスイーパーという悪霊祓いの職業に就いていたそうなのですが、敵対する悪霊や悪魔はやはり狡く、卑怯な者が多かったようです」
「まさに『悪』と言ったところですね」
妖夢の言葉に相槌を打ってゐの背後から『お前が言うな』という声が聞こえてくる。当然てゐはそれを無視しているのだが、妖夢もそれを完全にスルーして続きを話し始める。やはりどんどんとテンションが上がってきているようだ。
「悪霊は時に数に任せて強襲してきたり、前後左右上下、あらゆる角度から襲い掛かる。ゴーストスイーパーはそれらに対抗するために、常に意識の網を広げているのだとか」

「意識の網、ですか」
「横島さん曰わく『ただ単に全方位に注意を向けてるだけだけど』とのことですが、当然その一言で済む領域ではありません」
「……確かにそうですね。命懸けの戦いの中で前だけでなく、後ろや、まして上下を気にするというのは……」
「難しいどころではありません。しかも横島さんは霊力を扱えるようになってまだ一年も経っていないそうなのです。即ち全くの素人の状態で命懸けの戦場に立ち、これまで生き抜いてきたのです！　霊能に覚醒するまでにいくつの死地をくぐり抜けてきたのか、また霊能に覚醒してからもどれだけの死地を乗り越えてきたのか……！　美鈴さんの攻撃を躱せるのは彼に天賦の才があるからだけではありません！　そういった莫大な経験値があるからこそ、全方位に注意を向けられるほどの集中力を身に付け、美鈴さんの攻撃を培った経験則によって躱せているのです……!!」
　妖夢は目をキラキラと輝かせながら熱く語っている。瞳に映っているのは横島に対する尊敬の念か。その勢いはてゐが驚くほどである。
「な、なるほど。つまり執事さんは……」
「それだけではありません！」
「まだあるの!?」

てゐも思わず突っ込んでしまう。もはや妖夢のテンションはマックス状態であった。

「美鈴さんの攻撃を見切る動体視力、咄嗟の行動にも反応できる反射神経、攻撃を予測する経験則、フェイントにかかっても瞬時に持ち直す身体能力、どんな攻撃も躱す柔軟性、如何に無茶な体勢であっても瞬時に立て直すバランス感覚、そしてそれらを可能にする莫大な霊力によるブーストと霊力を練るスピード！　これらが一体となってあの横島さんの異常な回避・防御術を構成しているのです……!!」

はあはあと息を切らせつつようやく語り終える妖夢。もはや完全にキャラクターが崩壊しているが、妖夢自身がそれに気付くことはない。横島の尋常ならざる身体能力に痛く興奮しているようだ。

「……ああ、はい。長々とありがとうございます。……簡単に言えば、執事さんは天才でしかも努力してるってことで良いんですかね？」

「……まあ、そうですね。はい。こほん」

てゐの少々引きながらの質問に、妖夢は咳き込みながらも答える。一度に話しすぎたようで、喉が軽く痛みを発している。

てゐは妖夢が語ったことを反芻したが、とあることに気が付いた。

「……あれ？　何か妖夢さんの説明を聞いてると、執事さんが凄いのって避けたりとか逃げたりだけのような……」

「……そうですけど？」

　疑問には肯定が返ってきた。

「……私は気にしませんけど、逃げることの天才って格好悪く感じますね。今も避けてばかり……というか本当に当たりませんね」

「確かに一般的に良いイメージではありませんね。ですが防御というのはとても重要なものです。流派によっては攻撃よりも防御を重点的に教えるものもありますから……。……でも、やっぱり妙ですね」

　妖夢は顎に手を当てて未だ美鈴の攻撃を躱し続ける横島を食い入るように見詰める。今までと違った様子にてゐも興味を示した。

「何か、おかしな点でも？」

「……いえ、先程は横島さんを褒めちぎりましたが、流石にここまで来ると天才どうこうというよりはもはや異常です。もはや未来予知でもしているかのような……一体どうしてこんなことが……？」

　その違和感に最も早く気付いていたのは、言わずもがな美鈴だ。美鈴は横島との間合いを離し、構えを緩める。

「ふう……。まさか、今まで一回もクリーンヒット出来ないとは思いませんでしたよ。横島さんは回避や防御に関しては本当に天才と言っても過言ではありませんね」

「んー……。あんまり格好良いとは、言えないけどさ。……今も野次が飛んでるし」

横島は周りから聞こえてくる野次に涙を『るー』と流す。やれ『攻撃しろ』、『逃げるな』、『格好良いところを見せろ』……などなど。ほとんどは妖精メイド達だが、中にはレミリアや鈴仙が言っていたりする。

こういうときに率先して横島を野次りそうなのは、最近打ち解けてきてお互いに言動に遠慮が無くなってきたパチュリーなのだが、彼女は何故か机に突っ伏し、死んだ魚のような目で横島達を眺めているだけである。

落ち込む横島に、美鈴は苦笑を浮かべた。彼女も妖夢と同様の意見を抱いている。

「まあ、良いじゃないですか。私は素直に尊敬していますよ？　確かに見た目は格好悪いですが、その域に至るまでにどれほど苦労したのか、私には想像もつきませんし」

「いやー、ははは！　俺も結構苦労してるしなー！」

美鈴に褒められた横島は得意げになる。美鈴は横島のこういった子供っぽさが気に入っている。何とも可愛らしく映るのだ。

でも、と。美鈴は前置きをする。

「何で私に攻撃してこないんです？　結構わざと隙を作ったりもしてたんですけど」

美鈴の意見は尤もだった。横島は避けるばかりで攻撃をしない。むしろ攻撃する気がないと言ってもいいだろう。それはギャラリーの皆も気になっていたことだった。

「んー……。まあ、避けるので精一杯だったとか、攻撃したらカウンターが来るんだろうなーとか、理由は結構あるけど……？」

「……一番の理由は何なんです？」

それは気まぐれの問い。理由がいくつかあるのなら、最たる理由は何だろうかという程度の問いだった。

横島は頭をボリボリと掻きながら、言いにくそうにしながらも答える。

「何つーか、その……。怒られそうだけどさ、当然だけど美鈴って女の子だし。敵対してるならあんまり気にしねーけど、普段仲良くしてもらってるからどーしても……」

しどろもどろの回答は『女の子だから』という至極単純なものだった。ギャラリー達はそんな理由なのかと拍子抜けしたが、横島と対峙している美鈴はその限りではなかった。

（……こんな風に女の子扱いされたのはどのくらいぶりでしょうかね……？　人里の武道家の皆さんは「闘うからには女子供とて容赦はせん！」とか、「妖怪相手に手加減なぞするものか！」とか、そんなのばかりでしたからね……）

武芸に生きる女性ならば「ふざけるな」と激昂しそうなものだが、遥か長きを生きる美鈴は逆に、懐かしくもある新鮮な喜びを覚えていた。それともう一つ。

（うん、やっぱり私は横島さんが言うとおり『女の子』……若いんですよ。更年期障害な

んかじゃありませんね……！）

その喜びはどこか明後日の方向を向いていた。未だに気にしていたらしい。

「……組み手なんですから、気にしなくても良いんですけどね？」

「いや、それはほら、今の俺はまだ霊力の扱いも不安定だから危ないし……」

悪戯っぽく笑う美鈴に、横島は両手をパタパタと振る。彼自身は攻撃しないことが失礼に当たると理解している。それが後ろめたさに繋がっているのだろう。

「あはは。それじゃ、もう一つ質問良いですか？」

「ぇあ、あー、うん。良いけど」

美鈴は人差し指をピッと立てる。

「いくら横島さんが回避と防御に秀でていても、これほど完璧に私の攻撃を防ぎ切れるとは思えません。何か、理由があったりするんですか？」

美鈴と妖夢が抱いた疑問の核心部分。それは、いかなる理由なのだろうか。

「えーっと、俺って毎朝美鈴と太極拳やってるじゃんか。そん時に美鈴をじーっと見てたからさ。それで次の動きが何となく読めるようになったというか……」

瞬間、中庭が凍りついた。突然の事態に横島が狼狽するが、それは瑣末事でしかない。

『いやいやいやいや』

中庭のギャラリーが同じ動作で一斉に突っ込んだ。

「たった数日で動きが読めるようになるわけないでしょー!」
「吐くならもっとましな嘘にしなさいよ……」
「いくら何でもそれはないですよー」
「なるほど、つまり……見取り稽古ですね!」
「それはちょっと違くない?」
　非難囂々だった。横島としては本当のことなのだからどうしようもないのだが……。
やはり、現実味はない。
「……じーっと見てたって、主にどんなところを……?」
「いやー、美鈴ってチャイナドレスだから体のラインが強調されてるじゃん? チャイナドレスの締め付けに負けずに張り出したチチとかピッチリとしたラインから浮かび上がる腰とかシリとかスリットから覗くフトモモとか――――はっ!?」
　それはもう見事なまでの自爆であった。鼻の下を伸ばしただらしのない顔での煩悩丸出しな着眼点の語り。気付いたところでもう遅い。周りからの視線は一部を除き氷点下だ。
「執事さん、ここでまさかの変・態・発・言!!　ここまでくると逆に男らしい!!　執事さーん、後で私の体も隅々まで見て良いよーっ!!」
「てゐー!　あんた恋は盲目にも程があるでしょー!!」

「……ただお兄様、やっぱりおっぱいおっきい方が良いのかな……？」

「フラン、気にするところはそこじゃないでしょう……？」

横島のこの発言で中庭はカオスに包まれたと言ってもいいだろう。

てゐが本能のままに叫び、鈴仙がそれを叱り飛ばし、フランが自らの平たい胸を気にし、レミリアがそれに「何でやねん」と突っ込む。

永琳と幽々子は「やっぱり男の子ねぇ」と余裕の笑みだ。隣の紫は頭を抱えているが。

当の美鈴は顔を赤くして両手で体を隠すように抱いている。その仕草が横島の煩悩を掻き立てることには気付いていない。

（やっぱり気のせいじゃなかったんですね……いや、まあガン見でしたけど。本当は気付いてましたけども。何というか横島さんに見られるのは構わないというか、むしろ横島さんに見られるのは気持ちいい……いやいやいや私はノーマル。私はノーマルなんですよ）

美鈴は何事か考えて頭をブンブンと振っている。何か気付いてはいけないことに気付いてしまいそうだ。

「……ふう」

美鈴は深呼吸を行い、心を鎮める。先程の思考は全て頭から放り出した。美鈴はそろそろ決着をつけるために再び構える。

「横島さん、次の一撃で勝負を決めましょう。私の攻撃が当たれば私の勝ち。避けられたら横島さんの勝ち、という感じで」
「……ああ、手っ取り早くそれでいこうか」
美鈴の言葉に横島はキリッとした表情で答える。そこだけ見れば何とも格好良いのだが、少し目線を下げれば思い切り腰が引けているのが分かる。実に締まらない男だ。
「妖夢さん、この決着方法だと今までの攻防から横島さんが俄然有利に思えますが……」
「ええ、そうですね。でもそれは美鈴さんも分かっているはずです。何か、必勝の策があるのでしょうか……？」
妖夢の言葉に周囲が静まり返る。ギャラリーは固唾を呑んで横島達に注目する。
「……」
「……」
互いに数秒の沈黙。そこに緩やかな風が吹き、ついに美鈴が動く。
「――――っ!!」
「おおっ!!」
美鈴はチャイナドレスの前垂れをゆっくりと持ち上げる。次第に露わになっていく美鈴の美脚。やがて前垂れはスラッとしていながらも適度な脂肪と筋肉によりムッチリとした太腿まで捲り上がり、その奥に淡いピンク色をしたシルク生地の何かが見えた

ような気がする。

横島はその何かを捉えようと食い入るように美鈴の局部周辺を見る。

――――当然、それは罠だった。

「あっ」

気が付いた時にはもう遅い。美鈴は既に眼前にまで迫っており、拳は顔面の中心にめり込んでいた。

「――――撃符『大鵬拳』!!」

「あじゃぱーーーー!?」

哀れ横島は虹色の『気』を纏った揚炮に吹き飛ばされ、やがて顔面から地面へと墜落した。

――――辺りを静寂が包む。それも数秒、静けさを切り裂くようにてゐの声が響く。

「き、き、決まったー!! 紅美鈴、何と執事さんにパンツを見せて生じた隙に拳を叩き込むという二重にいやらしい戦法で勝利ーーっ!!」

「……っ、……っ!?」

てゐは興奮気味に捲くし立てるが、妖夢は顔を真っ赤にして声も出せないでいる。

ギャラリーに背を向けている美鈴も実は顔が真っ赤だ。それは横島に自ら下着を晒したことによる羞恥と、そこから派生した高揚によって、である。

（……何か、何か何か何というか……！　ああっ、これは駄目です！　何か癖になりそうです……っ!!）

美鈴は頭からプシューっと蒸気を発する。これ以後、美鈴はまるで小悪魔（比喩的表現）のようになり横島の前では若干露出度が上がり、また無防備な姿も多く晒すようになる。……すでに胸に去来する高揚感と官能を刺激するかのような快感の虜になっていたのだった。

そんな美鈴の熱を一気に冷ます出来事がすぐそこに。

「えー、とりあえずレミリアさん。美鈴さんに何か一言どうぞ」

「美鈴はこの後の昼食とおやつは抜き」

「えええっ!?」

ぐりんと音がしそうなほど勢い良く振り返る美鈴だが、彼女を迎えたのは烈火の如き怒りを内包した視線を向けるレミリアであった。

「あんなことしたんだから当然でしょうが。それにこれでも十分に優しいくらいよ？　とにかく今後ああいうのは禁止。……まったく、フランの教育に悪い……！」

「うう……今日のおやつは咲夜さんの特製ケーキだったのに……くすん」

自業自得である。ぷりぷりと怒っているレミリアが美鈴を睨んでいると、フランが何やら考え込んだ様子で近寄って来た。

「ねえ、お姉様……」
「ん、何、フラン？」
「私のパンツを見たら、ただお兄様喜ぶかな……？」
美鈴の呼吸が停止した。
「……あんなこと言い出しちゃったでしょうが!!　とりあえずアンタは後で私の部屋に来なさい!!　良いわね!?」
「ひぇえぇ!?　ごめんなさいごめんなさいごめんなさいーっ!!?」
「ごめんなさいじゃなくて来るのかどうか答えろっつってんのよ私は!!」
「はいっ!!　伺わせていただきますぅっ!!」
烈火どころか業火の如き勢いで哮るレミリアに、美鈴は何度も土下座をするしかない。しかし何気に夕飯は食べられるので、レミリアも多少冷静さを保てているようだ。本当に極々僅かなものであろうが。
そんな喧騒を尻目に、鈴仙は救急箱を持って横島の元へと向かった。
「……大丈夫、横島さん？」
「あ〜、大丈夫ー……」
倒れ伏す横島の隣にしゃがみ込み、横島の様子を窺う。鼻血はダバダバと出ているが、見た感じ骨に異常はなさそうだ。……その点が異常であるが。

「……イナバちゃんは、しゃがまない方が良いと思うぞ」
「え、何で？」
鈴仙は傍らに置いた救急箱を開け、治療の準備を始める。そこに横島から声をかけられ、疑問から手を止める。
「何でって、そりゃ勿論短いスカートからパンツが丸見え……」
瞬間、鈴仙の指先から発射された数十の弾幕が横島を撃ち抜き、完全に気絶させた。
鈴仙はプンスカと憤慨し、横島をそのまま放置する。
横島は気付かなかったが、今日の鈴仙の手指は横島から贈られた様々な道具によって、今まで以上に綺麗に手入れされていた。

結局横島は数分で目を覚まし、傷も完全に消えていた。相変わらず人間離れした男である。
昼食を取ったあと横島はレミリアから咲夜と一号達と共に夕食のバーベキューの買い出しに向かうように指示される。
その際妹紅から炭を貰ってくることと、可能ならば彼女もバーベキューに誘うよう

に、とも仰せつかった。

第十八話
『組み手・横島対美鈴』
～了～

～おまけ～
「ところでパチェ？」
「……何、レミィ」
「何でずっと机に突っ伏してんの？」
「……私、昨日横島から服を貰ったじゃない？」
「あー、何だっけ。マニアックな服だっけ？」

「セクシーな服よ。そこは間違えないで。……んで、今日早速着てみようとしたんだけど……」
「……あー、うん。なるほど」
「マニアックな感じになるだけなら良かったのに……！　ひと月前なら確実に大丈夫だったのに……！」
「うんうん、なるほど。ところで小悪魔は？」
「ちょっとは慰めて!?　……罰の門番が終わった後で仮眠しに行ったから、まだ寝てるんじゃない？」
「……もう少し寝かせといてやろうかしら」
「……ダイエット、しなきゃいけないのかしら……」

～了～

第十九話『俺はロリコンじゃない』

現在横島は咲夜や一号達と共に人里へバーベキューの買い出しに来ているのだが、一行を包む空気が妙にギクシャクとしている。

別に皆の仲が悪いというわけではない。むしろこのメンバーはよく仕事を共にすることが多く、最も連携の取れたチームと言えるだろう。

では、何故妙な雰囲気が漂っているのか。その原因は咲夜にあった。

「あらー、メイド長さん。今日も旦那さんとお子さん達が一緒で羨ましいわー」

「うふふ、いやですわ肉屋の店員さんったら。横島さんは旦那ではありませんし、私にはまだ子供はいませんわ」

「あら、そうだったかしら？　でもいつも仲が良さそうねー」

「うふふふ」

咲夜は肉屋の店員の女性とにこやかに談笑している。それ自体は別段おかしくはないのだが、話の内容と咲夜のリアクションに問題があった。

「……おかしい」

「おかしいですねー」
「おかしいですー」
「……ちょっと不気味」
　咲夜はニコニコと笑顔を浮かべている。普段他人に見せる余所行きの笑顔とは違う、心の底から浮かべているであろう笑顔だ。それはもう周りに花が咲き乱れているかと見紛うばかりの笑顔であった。相手の勘違いもあらあらうふふと否定しているし、いつもとは何かが違う。
「……何であんな上機嫌なんだ？　何かあったんかね？」
　横島は咲夜の様子を訝しく思うばかりだが、一号達には思い当たる節が存在していた。
（横島さんのプレゼントですよねー？）
（多分それだと思うー）
（……砥石とまな板と鍋……だったっけ？）
　一号達が思い至ったのは横島が前日にプレゼントした調理器具。彼女達は昨夜、キッチンで圧力鍋を弄りながら「うふふふ……」と不気味な笑みを漏らす咲夜を目撃している。その強烈なインパクトのおかげで、今も目を瞑れば瞼の裏にその時の光景が映し出される。

（……こわかったよね）
（うん、こわい）
（新手の妖怪かと……）

三号の頭の中では、その時の咲夜は人の形をしていなかった事になっている。咲夜が知ればナイフが飛んでくるであろうが、浮かれきっている咲夜が一号達の内緒話に気付くことはない。

そして、横島や一号達も気付いていない。この買い物中、何度も咲夜のたおやかな指が横島から贈られたリボンに触れていたことに。

おかしな空気のまま買い物を終えた一行は、そのままの足で迷いの竹林の入り口に来た。横島は自身の身長の倍にまで膨らんだリュックを背負っており、ここに辿り着くまでに数々の奇異の視線をいただいた。

「咲夜さん、何もここまで買わなくてもよかったんじゃ……」

これには横島も恥ずかしかったのか、咲夜に対して文句を言う。だが、返ってきたのは否定の言葉だった。

「これでいいのよ。確かにいつもなら買いすぎなんだけど……今日は暴食亡霊がいるから特別なの」

「暴食……って、幽々子さんっすか？」

「ええ、その通り」

咲夜の言葉に横島は首を傾げる。前回の宴会以来会っていなかったため、彼女に対するイメージは『少しおっとりとした女の子』といった程度のものだ。

あの宴会で知り合った少女達の中では、印象が薄くても仕方がないと言えるだろう。

「まあ、これだけ買えばさすがに大丈夫だろうけれど。……それより、妹紅から炭を貰わないとね」

咲夜は話を切り上げ、迷いの竹林へと歩を進めた。横島達もそれに続き、竹林へと入る。

それから歩くこと数分。ここで横島の頭に疑問が浮かぶ。

「……当然と言えば当然なんすけど、何かおんなじような景色ばっかっすね。妹紅の家ってどこらへんなんです？」

「知らないわよ？」

「えぇっ!?」

横島の疑問に軽く答えた咲夜は横島の驚きの声にも怯まず、そのまま歩き続ける。咲夜の返しに数秒間硬直した横島だったが、我を取り戻すと咲夜を慌てて追いかける。

「い、いや知らないって……！　ここ迷いの竹林なんでしょ？　道も知らずに歩いたら遭難しちゃうんじゃ……！」

「大丈夫よ。多分、もうそろそろだから」

「え……？」

咲夜は澄まし顔で答え、横島を困惑させる。その冷静さが横島は信じられなかったのだが、そこで一号達も一切冷静さを失っていないことに気付く。

その冷静さの要因が何なのかは、すぐさま理解することとなる。

「――こんな竹林に、何か用かい？」

横島達の横合いから声が響く。程無くして現れたのは、目的の人物である妹紅であった。

「……妹紅？」

「あれ、横島？　……と、メイド達か。何してるんだ、こんな所で」

（私達がおまけ扱い……!?）

横島のキャラの濃さに埋もれる咲夜達メイド勢が人知れずショックを受ける中、横島

はバーベキュー用の炭を分けてもらいに来た事を告げる。妹紅は納得し、横島達を自宅へと案内する。

「それにしても、妹紅って迷いの竹林の案内なんかしてたんだな」

「ああ、輝夜達が隠れるのを止めた辺りから急に人が増えてな。やっぱりちゃんと目的地に辿り着けない奴がいっぱい居るんだよ。それで……まあ、それからだな」

「ほほう、中々かっこいいじゃん。案内と言えば、名所案内とかはしないのか？　こちら右手に見えますのは竹林、左手に見えますのは竹林でございますー、みたいな」

「あははっ、どこが名所なのよ」

横島と妹紅は談笑しつつ楽しげに歩いているが、おまけ扱いをされたと感じている咲夜達は何となく面白くない思いを味わっていた。

（くっ……、お嬢様のおまけ扱いなら何もおかしくはないけれど）

見習い執事に存在感で劣っているのが悔しいらしい。しかしそれが咲夜達の優秀さの証でもあるのが悩みどころだ。

「しかし、随分と買い込んだな。これだけ全部食べきれるのか？」

「何か幽々子さんがいるから大丈夫だとか何とか」

「ああ……うん、納得」

妹紅も幽々子の食欲は知っているようだ。横島達が買い込んだ食材の量を見て、しき

りに頷いている。
そうこうしている間に一行は妹紅の家に到着し、ひとまず荷物を下ろす。
「何ならウチで少し休んでいくか？」
「嬉しい申し出だけど、気持ちだけもらっておくわ。……幽々子が紅魔館の食料を根こそぎつまみ食いしていないとも限らないしね」
「……いや、さすがにそれはないと思うけど。多分」
妹紅も言い切ることが出来なかった。人里で幽々子に関する色々な噂を耳にしているのだろう。
「……そんなに食うのか、あの人」
横島は食材がパンパンに詰まったリュックを見上げ、意外な事実に衝撃を受けていた。自分もよく食べる方であるが、どうやら彼女はそんな次元の話ではないらしい。
「私も実際に見たわけじゃないけどな。……っと、炭はこれだけあれば十分かな？」
話している間に妹紅は束ねた炭を用意していた。燃料炭として木炭を、消臭等の生活補助用に竹炭をそれぞれ炭俵に詰め、運んできたのだ。
「ええ、ありがとう。これはお代ね」
「毎度ー」
妹紅は咲夜から代金を受け取り、もんぺのポケットへと入れる。その様は如何にも不

用心であり、横島はそんな彼女に苦笑を浮かべている。
「今夜のバーベキュー、良かったら貴方も来てちょうだい。輝夜も寂しがってるようだしね」
「あいつがそういう玉か？　……まあ、紅魔館の食事は美味しいし、用事が済んだら行かせてもらうよ」
妹紅はこの後友人と会うらしく、その友人は何かと忙しい日々を送っているらしいのだが、一応誘ってみるようだ。
咲夜達は帰り支度を整え、横島に比べ荷物の少ない一号達が炭を分担して運ぶ。炭の重さなど彼女達には微々たるものでしかない。
そのまま別れの挨拶を済ませ帰路に着こうとする咲夜達に少しだけ時間を貰い、妹紅へと駆け寄る。その様は視覚的に山が動いているようであり、横島が背負ったリュックの威容を際立たせている。
「妹紅、これ受け取ってくれ」
「え？　……何、これ？」
横島は懐から明らかに収まっているはずがないサイズの包みを取り出し、妹紅に手渡す。妹紅は非常識な現象に少々驚き、反応が鈍くなってしまう。だが、次の横島の言葉でさらに乱れてしまうのだが。

「妹紅には前から世話になりっぱなしだからさ。そのお詫びとお礼ってことで、俺からプレゼント」

「……え」

妹紅は横島から受け取った包みをまじまじと見つめる。懐に入れられていた包みは人肌の温もりとなっているが、妹紅はそれを感じ取る余裕さえない。

――――男性からの、生まれて初めてのプレゼントだ。

勿論親兄弟から贈り物をされたことはあるだろうが、今回とは意味合いが違う。

「えっ……と、良いのか……？」

「ああ。受け取ってくれたら俺も嬉しい」

妹紅のおずおずとした問い掛けに、横島はさっぱりと笑って答える。妹紅はしばらく包みを眺めた後、それを胸へと抱え込む。

「あ、ありがと……」

「おう。んじゃ、俺ももう行くからなー」

そうして横島は手を振りつつその場を後にし、咲夜達と合流する。

一人残った妹紅は横島達が空へと飛んでいくのを見送り、ややあってから家へと戻った。

「……慧音んとこで開けてみよう」

妹紅はこの後会う友人、慧音の元で横島から贈られた包みを開けるようだ。妹紅は自分の世間知らずを知っている。もし贈られた物が自分の知らない物であった場合を考え、最初から知識人である慧音の知恵を借りる算段らしい。

……そこで妹紅は特大の衝撃を受けるのだが、それに気付けというのは無理な話であった。

紅魔館の中庭に喧騒が宿る。

そこには紅魔館・永遠亭の主要メンバーと紫が主の八雲一家、そして白玉楼の二人も存在している。

妖夢は紅魔館の主たるレミリアに何度も頭を下げ、恐縮しきった様子を見せている。

「本当にすみません。朝昼だけでなく、夕食にまでお邪魔してしまって……」

「ああ、そんなに気にしなくてもいいわ。こういうのは人数が居た方が楽しめるらしいしね。食材も大量に用意してあるし、遠慮することはないわ」

レミリアはぷらぷらと手を振って妖夢の謝辞を「必要ない」と払う。レミリアは本当に気にしていないのだが、妖夢としてはそういうわけにもいかない。

何せ、白玉楼のお姫様が朝昼に食べた量が膨大な物だったからだ。紅魔館で備蓄していた食料は今日だけで半分ほどにまで激減した。朝昼のたった二回の食事で、である。

その様は妖夢の食欲など塵のように吹き飛ばし、逆に彼女の胃にキリキリとした痛みを与えていた。

胃痛自体は永琳のおかげですっかりと消え去ったが、精神的なストレスやら疲労やらはそのまま残っている。

このまま放っておけば倒れるかも知れないと判断したレミリアはやや考えた後、妖夢に言葉をかける。

「まあ、うちは小食の者が多く、買ってくる食料はほぼ備蓄に回るからな。それ自体は良いことでもあるんだが、最近は食料庫も圧迫気味だったんだよ。幽々子の食事量は渡りに船だったし、咲夜も美味しそうに量を食べてくれる幽々子には『作り甲斐がある』と喜んでいたしな」

「レミリアさん……」

「まあ、なんだ。……お前はそれを気にしてほとんど食べることが出来なかったようだし、今回はしっかりと食べておいた方がいいぞ。いきなり食べるのがキツいならスープ

とかの胃に優しい料理も作れるし、何ならタッパーでも用意して持って帰ってもらってもいいしな」

「れ、レミリアさん……!!」

レミリアの気遣いに、色々な意味で涙が止まらない妖夢であった。

そんな妖夢を見つめる数人の少女達が居る。口元を丁寧に拭い、白玉楼のお姫様たる幽々子は口を開く。

「妖夢は何故ああもレミリアに謝っているのかしら。私には分からないわ」

「幽々子……」

自らの行状など省みることなく澄まし顔でそう宣う幽々子に、親友である紫はもはや頭を抱えるしかない。

「いくら何でも食べ過ぎよ。少しは遠慮をしなさいな」

「あらー、何を言っているのかしら？　レミリアは『遠慮をすることはない』と言っていたわ。相手の厚意を無碍にするのは、愚かな事ではなくて？」

「相手の厚意云々の前に自重しなさいと言っているの。第一レミリアの言葉は妖夢に対してであって、貴方に対してじゃないでしょうに」

「ふふふ、実は昼間の内にレミリアから言質を取ってあるのよ。だから何も恐れるものはないわ」

「こんな時だけ行動が速いんだから……！」

食する事に関しては素早い動きを発揮する幽々子は、既にレミリアから了承を貰っていたのだ。幽々子の周りには肉と野菜が山と積まれているが、その攻略も近い。

「藍様、お魚のホイル焼き美味しいですよ！」

「良かったな、橙。私の厚揚げのステーキも美味しいぞー？」

紫は背後であはは、うふふと笑い合う二人が羨ましくなった。

「横島さん、ホイル焼き出来たわよー！」

「うっす！　パチュリー様に持ってきます！」

「一号、こっちのお肉を妹様に！」

「はーい！」

皆がバーベキューを楽しむ中、咲夜達メイドと横島は忙しく中庭を動き回っていた。

調理を担当する咲夜は勿論、主に配膳を担当する横島と一号達は特に忙しく、一息入れる暇もない。何せとんでもなく食べる者が居るのだ。バーベキューに於ける食べる

スピードや配膳のタイミング等を考えれば、手を休める事は出来ない。
しかし、それでも咲夜と横島は何とか時間配分をやりくりし、妖精メイドに休憩の時間を割り当てる。ここにきて横島の『人を使う才能』が顕著に表れてきたようだ。
「うふふ、頑張ってるわねー」
「あれ、幽々子さん？」
そんな横島達の前に現れたのは空になった皿を手に持った幽々子であった。
「あっと、気が付かずすんません。すぐに追加の料理を用意しますんで！」
空の皿を認めた横島はすぐさま料理を追加しようとするが、幽々子はそれをやんわりと止めた。
「今はいいわ。あんまり行き過ぎると皆の分も無くなるし、横島さん達が休憩出来なくなってしまうもの。」
幽々子は扇で口元を隠す。
「……何か、気を使わせちゃったみたいで。すんません」
「うふふ、良いのよ。パーティーやバーベキューは皆で楽しんでこそだもの。私一人だけ楽しんでちゃ意味がないわ」
幽々子は元来『和』を大切にする。紫の前では嘯いていたが、何も本気で食い尽くそうというわけではなかったのだ。尤も、紫もそれが分かっていたからキツく言い含めは

しなかったのだが、やはり食べ過ぎは食べ過ぎである。
「それはそうと、ほら。新しいお客さんよ」
「え？　……あ、本当だ」
幽々子が空の一角を指し示す。確かにそこには人の影が存在していた。白の長髪をポニーテールにした、細身の少女。新しい客とは妹紅であった。
妹紅は中庭に降り立ち、そのままキョロキョロと辺りを見回す。招待してくれたレミリアを探しての事だろうが、それにしては少々挙動不審が過ぎる。
「……」
やや俯き加減で口元を隠し、そわそわと辺りの様子を窺っている。付近の妖精メイド達はそれを訝しがりながらも妹紅をレミリアの元へと案内する。
「お嬢様、もこうさんが来られました」
「えっと、今日はその、誘ってくれてありがとう……」
「ええ、楽しんでいってちょうだい。……一人という事は、友人は用事かな？」
「ああ、うん。何か、人里の寄り合いとかがあるらしくて……」
「……？　そうか」
レミリアと目を合わさず、しきりに何かを気にして視線が泳ぐ。そんな常ならぬ妹紅の態度にレミリアは首を傾げるが、その原因はすぐ近くへとやって来ていた。

「おーっす、妹紅ー」
「――っ!?」
横島が背後から声を掛ける。すると、妹紅は大袈裟に体をびくつかせ、慌てて振り返る。
「よ、よよよ横島!?」
「え、ああ、そうだけど。……何かあった？」
「い、イヤ別に何でもない何でもない！」
横島の問い掛けにブンブンと首を振って否定する妹紅だが、その姿に説得力などは皆無だった。妹紅の過剰なまでのオーバーリアクションに横島は疑問を抱くが、そのリアクションのおかげで横島はあることに気付いた。
「あれ？　妹紅、この髪……」
「……っ!!」
横島は失礼だと理解しつつも、目の前で揺れる妹紅の髪に触れる。それはいつもとは違い、サラサラと細かく分かれて指からこぼれ落ちていく。
「……ぁぅ」
妹紅の口から呻きが漏れる。普段自分の長髪に頓着しない妹紅が、きちんと手入れをしてきたのだ。その事実に横島は嬉しくなった。

「そうかそうか、早速使ってくれたんだな」
髪を弄りながらうんうんと頷く横島に、妹紅の顔は赤みを帯びていく。レミリアは女の髪に無遠慮に触れる横島を注意しようと思ったのだが、妹紅の反応が反応なだけに口を出さずにいた。主な理由は「何か面白そう」ではあるが。
「その、せっかく貰ったんだから使ってみようと慧音に教わって……」
「あー、噂の学校……寺子屋の先生か。その先生は用事？」
「……うん」
「……」
「……」
会話が続かない。何やら妙な雰囲気が漂っている妹紅に横島は困惑しきりだが、しおらしい様子を見せる妹紅に対し、いつもとは違った魅力を感じているのも確かだ。
次第に二人は周囲の注目を浴びていくのだが、当事者たる二人はそれに気付かない。
「えー……っと、さっきから口元隠してるけど、どうかしたのか？　怪我とかしちゃったか？」
「あ、いやこれは……っ！」
横島の問い掛けにまたも慌てた様子を見せる妹紅。だが妹紅は俯いて何事かを考えると、意を決したのかゆるゆると口元を隠していた手を下げる。

「――――……っ!!」

それは横島に衝撃を与えた。

それは普通ならばほんの些細な変化なのだが、目の当たりにした横島は一瞬頭が真っ白になるほどの物だったのだ。

――――妹紅の唇が、淡い桃色に染まっている。

さらさらと風に揺れる髪が照明の光を反射し、甘く潤み、どこか蕩けたような瞳が横島を上目遣いに見つめている。その姿は幻想的なまでに神々しく見える。

「……」

横島は妹紅の可憐な姿に言葉を失い、見蕩れてしまう。

妹紅にいかなる心境の変化があったのか、髪の手入れをしたり口紅を塗ったりなど、その答えは数時間前に遡る。

横島達が妹紅宅から帰ってすぐ、妹紅は横島からのプレゼントの包みと小さな竹炭が入った包みを持って慧音宅を訪ねていた。

「おーい、慧音ー。来たよー」

玄関から中へと声を掛けて少し、中からぱたぱたと玄関へ向かってくる足音が聞こえてくる。ややあって開き戸が開き、慧音が顔を出した。

「お待たせ、いらっしゃい妹紅」

「お邪魔しまーす」

毎度の挨拶を交わし、慧音宅へと上がる。勝手知ったる慧音の家、というわけで一直線に居間へと向かう。これはいつものことなので慧音も気にしていない。

「はい、いつもの竹炭」

「ありがとう。竹炭を入れて炊いたご飯の味を知ってから、これが無いとどうもな……」

「そう言ってくれると嬉しいけどね」

普段通りの何気ない会話。だが妹紅は早口気味で、体をそわそわと揺らしている。相談したいことがあるが、どうにも切り出せない。そんな所だろうと慧音は当たりをつける。そして、相談の内容も察していた。

「……あー、妹紅。その包みはどうしたんだ？　竹炭とは違うようだが」

「……これ？　これはえーっと、その、えっと……」

妹紅が切り出しにくいようなので慧音が問うたのだが、妹紅の返答は要領を得なく、尻すぼみになっていく。それで、慧音はおおよその事を理解した。

「……『横島』絡みか？」
「うえっ!?」
　溜め息混じりの慧音の言葉に、妹紅は過剰に反応する。頬が赤く染まり、視線も泳ぐ。
「……ふう。大方、今までのお詫びとかお礼とかで横島からプレゼントを貰ったが、自分では使い方等が分からない物の可能性がある為に、私を頼ろうとしたけれど何て言えばいいか分からない……といったところか？」
「……まさにその通りでございます」
　慧音の呆れたような語調での指摘に、妹紅は熱を持った顔を両手で覆い、掠れるような声で肯定する。
（……ま、実際は初めての男からのプレゼントで舞い上がってる状態なんだろうが、気付いてはいないだろうなぁ。妹紅だし）
　妹紅の可愛らしい様子に慧音は頭を掻き、これほどまでに妹紅の心を掻き乱す横島に感心と嫉妬を覚えた。慧音は荒れ始める心を熱い緑茶を飲む事で落ち着けつつ、ひとまず妹紅に包みを開けるように提案する。
「それで、中身は何なんだ？　その包みの状態からしてさっき言った通りまだ開けてないんだろう？」
「あ、そ、そうだな、うん。開けてみよう……って、あーーーっ!?　破れたーーーっ

!!」

その提案に頷く妹紅だが、羞恥から来る焦りによって呂律が回らず包みも綺麗に開けられず。これには慧音も苦笑い。

それでも何とか中身を取り出して卓袱台に広げる。そして横島からのプレゼントの内容に慧音は感嘆の息を吐き、妹紅は驚きの声を漏らした。

「これは……櫛？」

「……柘植の櫛だな。これは長く使えば髪をより綺麗にしてくれる、中々に高級な櫛だ。飾りも主張し過ぎず、品のある装飾だ。……ちゃんと手入れ用の椿油や刷毛もあるし、香油もある。何より意外にセンスが良いんだな」

慧音の説明に妹紅は「へー」と感心しきりだ。櫛を矯めつ眇めつし、自分の髪へと通してみる。

「どれどれ……」

髪を綺麗にしてくれるという言葉が気になったようで、その表情は期待に染まっている。しかし、その表情は途中で曇ることとなる。

「……」

髪が絡まり、途中で櫛が止まる。無理に動かせば髪がブチッと切れ、櫛の歯が折れそうになる。

「どうせ私の髪なんて……」
　妹紅は絡んだ櫛をそのままに悲しみに打ちひしがれた。その様は頭に櫛が刺さっているようにも見えるので、珍妙この上ない。それを見た慧音は深い溜め息を吐く。
「あのなぁ、妹紅。お前、普段から炭を触った後ろくな手入れをしていないだろう。よく見たら今も炭で汚れているし、そんな状態じゃ櫛が通るわけがないだろうに」
「うぐぅ……っ！」
　痛い所を突かれた妹紅はぐうの音も出ない。もはや全身を襲う虚無感に畳にうつ伏せになるのみだ。
　妹紅の反応に慧音は少し言い過ぎたかと反省するが、同じ女として今の妹紅の状態は見逃せない。ひとまずは櫛を活躍させる為、妹紅を綺麗にする為に風呂を沸かすことにする。
「風呂を沸かしてくるから少し待っててくれ。この際全身綺麗になった方がいいだろうしな」
「私は汚れてなーい……」
「汚れてるから風呂を沸かすんだ」
「……ぐすん」
　全ては妹紅を思うが故である。慧音は心を鬼にしてその場から離れた。

「……」

慧音が風呂場へと消えてから数分。いい加減ふてくされるのにも飽きた妹紅はのっそりと上体を起こす。

「ごめんなー、上手く使ってやれなくて」

櫛をつつきながら独り言を言う。相当に参っているようだ。

その後誤って破ってしまった包みを綺麗に畳もうとした所で、まだ中に何かが入っていることに気が付いた。

「ん？　これは……何だ？」

入っていたのは小指程の大きさの小さな筒状の物。蓋を外してみれば、淡い桃色の紅が見える。

「口紅……かな？」

妹紅が口紅を珍しそうに観察すること更に数分。慧音が居間に戻ってきた。

「妹紅、そろそろ風呂が沸いて……どうした？」

何かを弄る妹紅に慧音が首を傾げる。

「ああ、プレゼントがまだ包みに入ってたみたいでさ。これ、口紅みたいなんだけど……」

「何……だと……!?」

あっけらかんとした妹紅の言葉と裏腹に、慧音は驚愕の声を上げる。そのまま難しい顔で何事かを考え始め、その様子は妹紅の不安を大いに煽った。
「……どうかした？」
「ああ、いや……。横島は、随分と妹紅が気に入っているんだな、とな」
「え、ええっ!?　そ、それはどういうこと!?」
慧音の呟くような言葉に妹紅は顔を赤くして驚愕する。突然『横島に気に入られている』と言われて混乱しているようだ。
「ああ、妹紅は知らないのか。……男性が女性に口紅を贈る理由とはな……その、『少しずつ返してほしい』ということなんだ」
「……？」
妹紅は慧音の言葉の意味が分からずに疑問符を浮かべる。慧音はやや唸った後、少々の恥ずかしさを抱えつつ、今度はもう少し直線的に説明する。
「えーっと、聞いた話では『少しずつ返してくれよ、俺の唇に』……という感じだったかな」
「つまり……」
妹紅は息を飲む。
「自分では口紅を塗れないから、女性に贈って塗ってもらう……？」

「違うっ！　どんな解釈だそれは!?」

妹紅のトンチンカンな答えに慧音は思わず頭突きを食らわせそうになる。だが、何とか平静を取り戻し、女性としての機微に疎い妹紅の為に羞恥をかなぐり捨てて直球勝負を挑む。

「自分に返してほしいとはだな、つまりはその口紅を塗ってキスしてくれということだ!!」

「……キ、ス？」

妹紅が間の抜けた声を出す。

「そう！　キス！　接吻！　口付け！　ちゅー!!　言い方は様々だがそういうことだ!!　つまり！　男性が女性に口紅を贈るということはだな、それだけその相手を好いているということの証明になるんだ!!」

「……え」

慧音の怒濤の説明に思考が追いつかず、妹紅から漏れるのは言葉にもならない呻きのみ。しかし、徐々に慧音の言葉が脳に浸透してやがて理解に至った時、一瞬にして妹紅の全身は赤に染まった。

「――――え、えええええええええええっ!!?」

抑えきれないほどに、感情が爆発する。

「よ、よよよよ横島が、わ、わた私に!!?」

両手をブンブンと振り、全身で動揺を表す。その顔は比喩抜きで火が出そうであり、目などは完全にぐるぐると回っている。やがて妹紅は畳に倒れ込み、座布団を顔に押さえつけて足をバタバタと振って畳を蹴っている。

「うおぉおぉぉ……！　ぬあああぁぁ……！」

（女の子としてその呻き声はどうなんだ、妹紅……）

あまりの動揺に痴態を晒している妹紅を生暖かい視線で見守る慧音だが、その妹紅の動揺っぷりに些か疑問を抱く。

「……なあ、妹紅」

「……なに？」

多少は冷静さが戻ってきたのか、たっぷりとした間はあったがちゃんと反応を返す妹紅。慧音は今なら答えられるかと、先程浮かんだ疑問を口に出す。

「その、横島に『そう』思われているというのは、どうなんだ？　嫌だったりするのか？」

「……」

慧音は横島が妹紅に『キスしてくれ』と思っていると決めつけているが、未だ彼女は横島に会ったことがない。横島という人間に誤解が生じるのは仕方がないが、これは慧音も冷静さを失っていると解釈が出来るだろう。

妹紅は慧音の問いに目を閉じ、暫く考え込む。やがて考えが纏まったのか、ゆっくりと目を開き、答えを返す。

「嫌……ってことはない、かな」

「……ほう？」

その答えは慧音も予想してはいた。慧音は視線で続きを促し、黙して待つ。

「その、何というか……真っ先に浮かんできたのは『恥ずかしい』っていうか、『照れ』というか……」

顔に押し付けていた座布団を今度は頭に被り、もごもごと口ごもりながらも自らの考えを話す。

「私だってそういうのには興味あるし、輝夜から借りた小説とか漫画の影響で憧れとかはあるからさ……。ちょっと横島との、き、キス、を想像してみたら、何かめちゃくちゃ恥ずかしくて……！」

またも妹紅は悶え始める。その様子は年頃の女の子らしくもあり、それ以上に幼い女の子のようにも見える。

「……あ、でも」

「ん？」

妹紅の様子から横島への感情を考察していた慧音だが、妹紅が突然冷静に上げた声に

反応する。
「何か横島って、雰囲気とかムードとか一切読まずに鼻息荒く唇を突き出して『ぐおー！』って迫ってきそうな感じがするな。……それは流石に嫌、かな」
「ああ、うん。それは嫌だな」
慧音は顔も知らない横島が妹紅に「ぐおー！」と迫り、顔面に燃える拳を叩き込まれる映像を容易に想像出来た。しかし、この妹紅の言葉で更に疑問が生まれる。
「……ちゃんとムードを読んで優しくリードしてくれたりするのなら、横島とキスしてもいいのか？」
「……えっと……」
妹紅は再び目を閉じて考え込む。ややあって目を開いた妹紅は真剣な眼差しで慧音を見る。
「――――そいつは本当に横島なのかな？」
「いや、私に聞かれても……」
普段横島が妹紅にどう思われているかが滲み出る言葉であった。
それはともかく置いておいて、妹紅は慧音の言葉通りの横島を思い浮かべる。
優しい笑みを浮かべ、甘い言葉を囁き、ゆっくりと、しかし力強く肩を抱き寄せる。次第に近付く二人の顔。やがて互いの唇は重なり合って――――。

「うわあああああああああああああ!!!　恥ずかしいっ!!　恥ずかしいいいいいいーーーーっ!!」

今度は両手で顔を隠し、どったんばったんと悶え始める。慧音はその様子を見て、大凡の見当をつけた。

(……少なからず惹かれてはいる、のか。まあ妹紅は男性に対する免疫が極端に低いみたいだから、男性と親しくなればずっと友人関係を貫くか、こんな風に一気に傾くかだと思ってはいたが……恋愛感情かどうかはまだ微妙だな。まあ、どちらにせよ好意は抱いているのだろうが)

慧音は妹紅の心中を冷静に分析する。このままいくと案外コロッと落ちてしまいそうだ。

こんな状態の妹紅に決断を迫るのは気が引けるが、あと数時間もしない内に人里の寄り合いが始まる。ここはさっさと話を進めようと慧音は決めた。

「で、どうする?」

「どうするってなにが?　なにがっ?」

妹紅はガバッと起き上がり即座に反応を返す。もはや余裕など一切なく、あらゆることに敏感になっているようだ。

「口紅だ。……塗るのか?」

「……っ!!」

慧音の言葉に息が詰まり、動きが止まる。もう顔の熱はこれ以上上がらないと思っていたが、まだまだ上限には達していなかったようだ。

「……」

「……」

妹紅は言葉を探し、口をぱくぱくと動かすが、どうにも見つからない。慧音は急かしたい衝動を抑え、妹紅からの返答を待つ。

「……バーベキュー」

「うん？」

「……紅魔館での、バーベキューに誘われててさ」

「……ああ、うん」

一瞬何のことかと思ったが、話は繋がっていた。慧音は続きを待つ。

「その、口紅、付けていかないと、横島に失礼なんじゃないかな……とか、思ったり」

「……そうか」

「……あの、ほら！　案外慧音が言ったような意味を知らなかったりするかもしれないしさ！　だから、えっと……その……」

尻すぼみに小さくなる声と比例するように、視線はどんどんと下を向く。その姿はま

さしく『可憐な美少女』だ。

「口紅にも、興味あるし。ちょっと、付けてみたくはあるし……」

「……分かった」

もう十分だった。恋愛感情が有るにせよ無いにせよ、彼女は口紅を付けたいと思っている。その結果がどうなるか自分では想像がつかないが、慧音はせめて良い方向に転がるように妹紅をサポートすることを決める。

(……やはり近い内に会ってみないとな)

思わず苦笑が漏れた慧音を訝しがる妹紅だが、慧音はそれを気にせず立ち上がる。

「とりあえず風呂に入ってこい。この後バーベキューに誘われているのなら、身嗜みはきちんと整えないとな。……その方が横島も喜ぶだろう」

「っ!?」

戯れの言葉にも過剰に反応する妹紅が嫌に可愛らしい。妹紅の方がずっと年上だが、時たま彼女のことをまるで妹のように思ってしまう。

「妹紅は髪の手入れも口紅の付け方も知らないだろうからな。私がしてあげるよ」

「……」

妹紅は慧音の言葉に少々不機嫌そうに表情を歪めるが、それも一瞬のこと。慧音の言葉は真実であり、妹紅は元々慧音を頼って来たのだ。

それでも妹紅は納得がいかない、というような表情を作り、視線を逸らしたまま素直に「お願いします」と頭を下げた。
「あ、ちなみに私は今日寄り合いがあってバーベキューには参加出来ないから」
「この状況で私を一人にするのかっ!?」

――――そして、現在へと至る。
「……そっか、口紅も付けてきたんだ」
「……っ。うん、まあ、せっかく横島からプレゼントされたんだし、さ」
横島の言葉を受けて、妹紅は唇へと指を這わせる。その様子は妹紅の見た目年齢に似合わぬ色気を発揮させており、横島に『妹紅も女の子なのだ』と強烈に意識させることに成功していた。
横島は煩悩と関係なく高鳴る鼓動に戸惑いを隠せずにいるが、もっと戸惑っているのはギャラリーと化している他の皆だった。
（よ、横島さんが妹紅に口紅を贈った……っ!?）
（横島さーん……。でも妹紅さん可愛い……。ああ、何か複雑な気分です……。私も横

島さんとあんな雰囲気になりたい……）
（……私も囲ってもらおうかなー。執事さんなら十人や二十人なら楽勝だろうし）
（いやいやどういうことよそれ）
（ところで横島さんは口紅を贈る意味って知ってるのかしら……？）
周りが少々ざわつくが、当事者達は自分のことに精一杯で気付かない。十数秒程動きのない二人だったが、ここで妹紅が行動に出る。
「……その、口紅、を……」
「……ん？」
「男が、女の子に口紅を贈る意味って……」
途切れ途切れながらも、妹紅は横島へと言葉を紡ぐ。その内容に周りの乙女達はボルテージをギュンギュンと上げていく。
（聞くの!?　聞いちゃうの!?）
（ああ、何か凄い妹紅が可愛い……!!　でも何か、凄い複雑……!!）
（輝夜、ここ最近妹紅と仲が良いものねぇ）
（えっと、えっと……見てて、良いんでしょうか……？）
（しっかりと目に焼き付けておきなさい、妖夢。……これはいい肴になるわよ）
（幽々子……）

皆がごくりと生唾を飲み込む。周囲の視線を独り占めしていることに気付かぬまま、横島が口を開く。

「化粧品店のおばちゃんが言ってたけど、『少しずつ返してくれ』……だったっけ」

「……っ!!」

横島の口から出た言葉に、妹紅の肩が大きく跳ねる。周囲の驚愕のリアクションを見せていた。

（知ってた!?　知ってたの!?）

（これは……このままやっちゃう流れ!?）

（妹紅から切り出したってことは、つまり妹紅って……!?）

（むきゅーっ!!）

ギャラリーのボルテージは最高潮に高まる。期待と嫉妬とが渦巻く中庭に異様な熱が籠もっていくが、未だ冷静さを保っている数人があることに気付く。

（ん……？）

横島の表情が、少々困惑に歪んでいるのだ。

横島のメンタルケアを施している永琳や、現在横島の為にあらゆる行動を起こしている紫、知り合って間もない幽々子、横島に恋心を抱きつつも莫大な人生経験から客観的

な視野の広さを持ってゐなどは気付いた。

――――「あ、実はこいつ意味も何も知らねーんだな……」ということに。

思えば横島はナンパをする際、いつも体一つでぶつかっていく。予備知識などは全く仕入れず、下手くそな口説き文句を煩悩に歪んだ顔でぶち込んでいくのだ。

その様は中々に酷いものであり、対象の女性のことなど全く考えていない。ナンパをする対象は無意識の内に気が弱い女性などを除いているが、そもそも煩悩が先行しているのでその気遣いも無意味な物。

今回のように女性にプレゼントを渡す、という行為もあまり経験がないのだ。その割に女性に喜ばれる物を選べたのは、偏に元の世界での雇い主である美神とその仲間達のお陰だろう。

美神とそのライバル達はゴーストスイーパーとして超一流だが、その彼女達が持つ衣服やアクセサリー、食器などの家財道具までもが超一流の物で構成されている。

普段からそういった物を当たり前に見ていた横島は知らず知らずの内に目とセンスが鍛えられていたというわけだ。

だが、横島はそれに気付いておらず、どういったプレゼントが喜ばれるか、また贈るプレゼントにはどんな意味があるのかなどは一切調べない為、今回のようなケースに繋がったのだろう。

だからこそ横島は妹紅の言葉と、化粧品店のおばちゃんの言葉の意味が分からずに困惑しているのだ。

勿論それが妹紅に伝わるわけがなく、妹紅は破れそうなまでに高鳴る胸の鼓動を感じながら横島の言葉の続きを待つ。いい加減何かを言わないと、と横島が口を開けた瞬間、突如として悲鳴が上がった。

「ひゃあああああーーーー!?」

「――っ!?」

皆が一斉に悲鳴の方へ向く。そこにはバーベキューグリルから巨大な火柱が上がり、驚いた妖精メイド数人が尻餅をついていた。

どうやら横島と妹紅に注目し過ぎた結果、肉の脂が炭に引火して巨大な火柱を形成したことに気付くことが出来なかったったようだ。幸い火はすぐに消し止められ、妖精メイド達にも怪我はなかった。

元々の原因である妖精メイドは咲夜にキツいお叱りを受けたが、大事には至らなかったことで無事を喜ばれる。その妖精メイドはそんな咲夜に痛く感動したようだ。

「……ま、大事にならなくて良かった良かった」

「ああ、そうだな……」

横島と妹紅は妖精メイドが無事だったことに安堵し、大きく息を吐く。結局二人の間

に流れていた甘い雰囲気は先程のハプニングで霧散してしまい、横島は駄目になってしまったバーベキューグリルの片付けに向かうこととなる。

妹紅は妖精メイドから貰った皿に肉と野菜を乗せ、静かに食べ始めた。

（……いや、別に私は何とも思ってないし？　別に残念とか惜しかったとか、そんなのもないし？　横島は何で私に口紅を贈ったんだろうとか疑問もないし？　あのまま行ったら横島とキスしてたのかなとか考えてもないし？　そもそも私に横島がキスするのかどうかは分かんないわけだし？　まあ横島なら別に嫌じゃないわけだけど……）

声には出さず、肉を食べながら口の中だけで言葉にする愚痴の山。それは現在妹紅が攻略している肉と野菜の山と同じくらいに大きく、険しい。

何だかんだで不満もあったらしく、やけ食いも兼ねているようだ。周囲の妖精メイド達はそんな妹紅を涙ながらに見守っている。……後日、妹紅は体重計に乗った時に特大の恐怖を感じることとなるが、元々妹紅は身長の割には痩せ過ぎている。多少増えたところで乙女心以外に問題はない。

一方、横島は横島でもんもんとした気分を抱えていた。

先程までの妹紅の様子、表情、場の雰囲気。今思い出すだけでも心がむず痒い感覚に襲われる。

風に揺れ、光に透ける髪。朱を帯びた頬に甘く潤んだ瞳。何より目を引いたのは、淡

い桃色を纏った小振りな唇。
　妹紅のことは前々から美少女だと思ってはいたが、ほんの少しのお洒落であまで印象が変わるとは思わなかった。
「……可愛かったな」
　ぽつりと出た呟き。それが今の横島の心境を表している。
「いやいや、いかんいかん」
　俺はロリコンじゃないと頭をプルプルと振る。しかし脳裏にちらつくのは先程の妹紅。
　それだけではない。妹紅と共に脳裏を過ぎるのは、この幻想郷で知り合った少女達。
「……皆、可愛いよなぁ……」
　それが、答えなのだ。横島は幻想郷で知り合った少女達に惹かれ始めている。その事実に横島は気付いていない。否、それを『認めたくない』のだ。
　だからこそ『俺はロリコンじゃない』と頑なに言い続ける。彼にとって年下という庇護の対象に、煩悩を向けない為に。
　では、横島に惹かれている少女達はどうか。その多くは横島を『そういう』対象であると見ているだろう。知識や自覚がなくても、抱いた想いは一途な物だ。
　横島は自分を偽り続けることが出来るのか。少女達は想いを叶えることが出来るの

か。

とりあえず、横島は平静を取り戻す為に『俺はロリコンじゃない』と唱え続ける。

第十九話

『俺はロリコンじゃない』

～了～

第二十話『きっと空を飛べるはず。多分。恐らく。』

パチュリー・ノーレッジの朝は遅い。
朝早くから仕事のある咲夜達メイドや美鈴は当然だが、レミリア、フランの二人も吸血鬼ではあるが朝には強い。
レミリアの場合は周りに合わせる為に早寝早起きを心掛け、フランは夜に活動するのが自分一人なのは寂しいと、生活サイクルを改めた。
それに比べてパチュリーは夜更かしをして本を読んでいることが多く、当然朝にちゃんと起きられない日々が続く。
特に最近は横島の体を調べたり、横島から聞いた『向こうの世界』の魔法の再現、更には紫からの依頼で平行世界についての調査などで深夜遅くまで起きていることもざらだ。
パチュリーの使い魔である小悪魔も主に付き合い、ここ最近は寝不足の日々が続いている。
健康的な生活を送り始めた紅魔館の中で、尚も不健康な日々を邁進する二人に、永琳

の雷が落ちる日は近い。

「ん……」

ベッドの上で少女から吐息に近い声が漏れる。覚醒が近いのだ。

何度か寝返りを打ち、そのまま微睡みの中を漂っていたかったようだが、不意に顔に差した陽射しのせいで意識が完全に覚醒してしまう。

「……ふあぁ、んぅ」

のっそりと上体を起こし、欠伸を一つ。そのまま窓に目をやれば、太陽は燦々と部屋を明るく照らしている。

「……いつもより、大分早く目が覚めたわね」

太陽の位置から現在の時刻を割り出した少女は、着崩れた寝巻きのネグリジェを直しつつ、ベッドから下りる。

こうして、パチュリーはいつもとは少し違う朝を迎えた。

パチュリーは部屋の隅にあるクローゼットからいつも着用している服を取り出す。

パチュリーは衣服に対してあまり関心がない。勿論服の数はそれなりにあるのだが、彼女はついつい着慣れた物を選んでしまう。ちゃんと魔法で清潔にしているし、補強もしているので新品のように綺麗でありながら、着古した服のように体に馴染む。その特殊な感覚が好きなのだ。

パチュリーはその服を近くの椅子にかけ、先程直したネグリジェを脱ぐ。
（……別に直さなくても良かったかしら）
少々回転が鈍くなっている頭でそう考えるが、無意識の行動故に思考が挟まる余地がなかった。
「……」
パチュリーの裸体が晒される。彼女は小柄でありながらも肉感的な魅力に溢れ、ややふっくらとした柔らかな線を描く肢体は、見る物の目を惹き付けるであろう色香を放っている。
少々ぷっくりと出てしまっている腹をさする。永琳達が紅魔館に住んで以来、不健康な体質が改善されてきた為か、食欲が増進されている。
パチュリーは運動が大の苦手であるので普段は屋内に引きこもっているし、運動しないで食べるだけなのでは当然太る。
では食べずにいれば良いという風に思い、捨食の魔法も用意しようとしたところで迷いが生まれ、結局流れた。
――――だって咲夜のご飯は美味しいんだもの。
心の中で誰に言うでもない言い訳を呟きながら、いつもの服を手に、今度は横島から贈られた服を見る。

現在絶賛筆筒の肥やしとなっているこれらのセクシーな洋服だが、パチュリーはこれらを見る度に溜め息が出てしまう。

それは「着たい」とか「ひと月前なら」などといった念が込められており、もし聞く者が居れば、その者は心から重苦しい気分に溺れることになるだろう。

まあ、簡単に言えば太ってしまったのだ。

別段見苦しいわけでもないし、彼女の身長から割り出されるベストな体重より多少重い程度だったのだが、このまま行けば不味いことに変わりはない。昨日もバーベキューということで、ついつい食べ過ぎてしまったのだ。

「……こっちも、育ってはいるんだけどねぇ」

パチュリーは腹から手を離し、今度は胸を持ち上げる。特に下着も付けず、だというのに形が崩れることもなく、つんと上を向いた綺麗な釣り鐘形をしている。

手にずっしりとした重みと、指が沈み込んでいくような柔らかさを感じる。しかし柔らかいだけでなく、内側から反発するかのような張りもあり、大きさに至っては紅魔館の中では一二を争う。羨望の眼差しを受けたのも百や二百ではきかない。……特に親友とメイド長からの視線が凄い。

「こっちは大丈夫よね……？」

次に手が触れたのは臀部と太腿。パチュリーはさすさすと手を動かし感触などを確

かめるが、勿論大丈夫ではなかった。
　そもそもパンツが少しキツい。痛みを感じるほどではないが、それでも締め付けられ、盛り上がった部分が少々目立つ。
「……」
　その部分を指でつつき、その感触に溜め息が出る。だがそれが良い、という人も居るのだろうが、生憎とパチュリーは贅肉がお嫌いであった。そもそも太ったのは本人であるし。
「はぁ……。ちゃっちゃと着替えよう」
　せっかく珍しく早起き出来たというのに、朝から憂鬱になってしまった。早起きは三文の徳というが、これではまるで反対だ。
　パチュリーは椅子にかけた服を手に取りそれに着替えようとしたが、部屋のドアからノックの音が響き、動きを止めた。ゆっくりトン、トン、トン、トンと四回のノック。咲夜が起こしに来たのかと思い、着替え中だと声を出そうとした瞬間、ガチャリという音と共に扉は開いた。
「失礼しまーす。パチュリー様、朝飯の時間っすよー……って、――――え？」
「……」
　入室してきたのは咲夜ではなく横島。横島はパチュリーを見て固まっている。パ

チュリーも同様に固まってしまい、動けずにいた。

横島はパチュリーの姿に驚き、混乱の直中に居る。だというのにぐちゃぐちゃな思考とは無関係に視線は動き、パチュリーの裸体に注目してしまう。

やや丸みを帯びた、全てが柔らかそうな肢体。少々余り気味の贅肉が只ならぬ色気を醸し出し、否応無しに横島の煩悩を高ぶらせる。

「あ……っ」

そして横島の視線が小柄な体躯に似合わぬ豊満なバストと、その先端にある桜色の突起に集中した時、ついに限界が来たのか、横島の鼻から鮮血が溢れ出た。

「――――!!」

瞬間、二人の感情は同時に爆発する。パチュリーは羞恥から手に持った服で体を隠し、横島は煩悩に染まった理性と煩悩そのものと言っても過言ではない本能でもってパチュリーに飛びかかる――――!!　……その刹那、体を隠している側とは反対の手が目に入り、瞬時に冷静さを取り戻した。

「パッチュリー様あああああ!!　……あの、その手に燃える火球は何でございましょうか……？」

パチュリーの手にはメラメラと……ゴウンゴウンと唸りを上げながら膨張していく炎の塊が存在した。その輝きは、まるで星々を照らす太陽のようで。

投げかけた質問には一切答えず、ただパチュリーの魔力に比例して巨大化していく。
「……あの、流石にそれは俺だけじゃなく紅魔館もヤバいんじゃ……」
既に横島は涙目であり、腰が思い切り引けてプルプルと震えている。そんな彼にパチュリーはようやく口を開いた。
「……大丈夫よ。今アンタ以外の周りの物全てに耐火魔法を掛けたから」
「俺以外!?　俺は!?　肝心の俺は!?」
横島の目から涙が迸る。パチュリーはにっこりと笑った。
「煉獄っていうのはね？　罪を火で浄める場所のことなのよ？」
「の〝お〟お〟お〟お〟ーーーーーーう〟!!!?」
それはもはや、死刑宣告に近いものだった。――――つまり、今ここが煉獄（そう）であると。
パチュリーは両手を広げ、炎の魔力を爆発させる。
「日符『ロイヤルフレア』!!!」
「り、両手を広げたら色々と丸見え――――あ〟あ〟ーーーーーーー!!!!?」
太陽の爆発が如き爆炎が迸り、紅魔館を激震させる。パチュリーの魔法によって周囲は火に焼けることもなく無事だったが、その衝撃は凄まじい。
いつもとは違う朝。パチュリーは色々と損をし、横島は久々に『炎の目』を見た。

「な、何事ですかー!?」

開けっ放しだったドアから妖精メイドの一人が入ってくる。そこで彼女が見た物は、何やらいい感じに焦げている横島と、腕を組んでぷんすかと怒っているいつもの格好をしたパチュリーだった。既に着替えは終わったらしい。

「……一体何が？」

極力横島を視界に収めないようにしつつパチュリーに訊ねると、彼女は一言でこう返した。

「お仕置きよ」

「……横島さん、あまりパチュリー様を困らせないようにしてくださいねー？」

「……少しは心配して」

妖精メイドは部屋を出て、集まって来ていた他の妖精メイド達に事情を説明し、その場を離れる。その際「横島さんがお仕置きされてた」「なーんだ」「心配して損したー」という言葉が聞こえてきたのは、横島にとって聞き間違いだと思いたい。妖精メイド達は横島の回復力のデタラメっぷりをいつも間近で見ているので、もはや心配するだけ無駄と感じているようだ。

「くっそー、あいつらめ。しばらく『なでなで』は無しだ」

横島は薄情な妖精メイド達への愚痴を言いつつ、徐に立ち上がる。自らだけでなく、

何気に執事服まで完全にリカバリーしている。だんだんと持ち主に似てきたようだ。
「……あれを食らってもうピンピンしてるんだから、本当理不尽よね。これで蓬莱人じゃないんだから、世界は謎で満ちてるわ」
パチュリーは怒りの形相から呆れの表情へと変わる。その際に思わず呟いた言葉は横島にも聞こえ、彼に疑問を抱かせた。
「ほーらいびとっすか？　何です、その……何となく美味そうなの。肉まんですか？」
「肉まん……？　いえ、蓬莱人っていうのは『蓬莱の薬』を飲んで不老不死になった存在のことよ」
「不老不死……！　やっぱこっちにもそういうのは居るんすね」
パチュリーの説明に横島はしきりに頷く。頭に浮かぶのは、ドクターカオスという千年を生きる錬金術師。尤も、彼の場合は不老でも不死でもない不完全なものなのではあるが。
「こっちにも、ということはそっちの世界にも存在するのね……！　出来れば詳しい話を……おととっ」
「パチュリー様!?」
横島の話に食い付きを見せたパチュリーだったが、突如体をふらつかせ、ぺたんと床に座り込んでしまう。それを見た横島はすぐさま駆けつけ、パチュリーの容態を確認す

る。

「大丈夫っすか!?　何か体におかしな所はないっすか!?」

「あー、大丈夫大丈夫」

横島はパチュリーを支えるように片腕で肩と背中を抱く。予想外にガッシリとした感触にパチュリーは少々横島を意識してしまうが、それをおくびにも出さず、パタパタと両手を振って誤解をとく。

「起き抜けに魔力を使いすぎたからね。ちょっとした立ち眩みみたいな物よ。特に心配はいらないわ」

「……なら、良いんすけど。どうします?　念の為、このままお休みしますか?」

「んー、別に深刻な物でもないし、大丈夫よ。食欲もあるし、とりあえず罰も兼ねて食堂まで運んでもらおうかしら」

どうやら本当に問題はないらしく、ニヤリとした笑みを浮かべながら食堂まで運ぶように要求する。

横島はパチュリーに対して苦笑を浮かべるが、結局は「りょーかいっす」と承諾し、背負おうとする。しかし、それはパチュリーから却下されてしまった。

「あ、おんぶじゃなくてお姫様抱っこね。私ってノーブラ派だから、おんぶだと色々アレだし」

両手でバツを作り、お姫様抱っこを要求するパチュリーだが、横島はというとその後の言葉によって先程の光景を反芻し始め、その顔をだらしなく歪ませる。

「……」

「いひゃいいひゃい!?　ひょ、はひゅりーはまひゃめてっ!?」

パチュリーは横島が何を思い返しているのかを察して顔を赤く染め、己が全力を以て横島の頬を抓る。彼女の握力は存外強く、横島はすぐに涙目となった。

「まったく……！　部屋に勝手に入ったり無遠慮に人の裸を思い返したり、親しき仲にも礼儀ありって言葉を知らないの？」

「すんませーん……」

頬を赤く染めたパチュリーが、全く別の意味で頬を赤く染めた横島を叱る。その様はどことなく姉弟のようにも見える。

パチュリーは未だ機嫌が直らないが、いつまでもこうしていては仕方ないと大きく息を吐く。そして「んっ」と言って、横島に対して両手を向ける。

「……？　えっと、何です、パチュリー様？」

「……いや、だから食堂まで運びなさいって。朝食の時間なんでしょ？」

「あ、あー。すっかり忘れてました」

横島はぽんと手を打ち鳴らす。そしてパチュリーを抱え上げようと改めてその姿を

見るのだが、上目使いに両手を伸ばしているその姿は非常に可愛らしい。それはまるで、兄に抱っこをねだる妹のように見えて微笑ましかった。

「……何よ?」

「いえ、別に。んじゃ、持ち上げますよー?」

そう言うと横島はパチュリーの返事も待たず、肩と膝裏に手をやり、『ひょい』と抱き上げる。

「む、むきゅっ!?」

「なるべくゆっくり行きますけど、気分が悪くなったりしたら言って下さいねー」

そして横島は歩き出す。ゆっくりと上下に揺れ、しかし不安定ではないという矛盾を感じながらパチュリーは唸る。

「むむむ……。これは……!」

気分が悪くなるなど、それどころではなかった。むしろ心地がよい。ゆらゆらと揺れる体は、まるで揺り籠に揺られているようで。

(お姫様抱っこって不安定だと思ってたけど、結構安定してる……?)

お姫様抱っこは、何も両腕だけで抱えているわけではない。抱える対象の重心を自らに寄せ、腕というよりはむしろ『腰』で抱えていると言ってもいい。更に重心が抱える側に傾くということは、より相手の胸に密着するということでもある。

パチュリーは横島の逞しい腕、胸部、そして温もりに少々鼓動が早くなるのを自覚した。

（これは……！　さすが女子の憧れと言われるだけあるわ……！）

想像以上の感覚にパチュリーは「むきゅー」と息を吐く。色々と考えに耽る彼女と同様に、実は横島も色々と思考が加速していた。

（あったかいなー!!　やーらかいなー!!　えー匂いやなー!!!　普段あまり表情を変えることの無いパチュリー様が、まるで借りてきた猫のように大人しく、そして照れたよーな表情を見せている!!　あああ、かーいーなーーーー!!!）

相変わらず煩悩にまみれた思考様式だが、無意識の内に口走っていたかつてよりは成長しているのだ。例え、その顔がだらしなく緩んでいても。

「……その、重くない？」

「んぇ？　いえ、別に。どうしたんです？　太ったんすか？」

「……だからアンタは礼儀を知れと……!!」

そうしてまたも横島の頬を抓る。見ようによっては恋人同士がいちゃついているようにしか見えないが、二人の雰囲気はそういった物ではなく、本人達も全くそんな気は無かったのであった。

「パチュリー様遅いねー」
「横島さんもねー」
食堂の扉の前、待機している妖精メイド達は雑談に花を咲かせている。
それはいつも通りの光景であり、誰もそれを咎めない。流石に食堂の中では妖精メイド達も大人しいが、変わりに主人達が騒々しく過ごしていることもある。
とにかく、退屈を紛らわせることに忙しい妖精メイド達は、こういった場合は話の方向を色恋へと向ける。
「実はパチュリー様と横島さんがくっついてたりしてねー」
「うわあ、『なんてこった』な事態だよそれ」
この紅魔館の中に於いて、横島の人気はかなりの物がある。……まあ、紅魔館には男性が横島しか居ないのも関係はあるが、特に重要視されているのは『なでなで』であった。
彼が纏うオーラによって齎される癒やしの波動は妖精達には効果覿面であり、暇が出

来れば「撫でれ」とばかりに頭を擦り付けてくる者も居る。
そんな技能を持つ横島が、もし誰かに独占されてしまったら、自分達が『なでなで』される機会が無くなってしまうのではないかと妖精メイド達は危惧している。
何ともエゴイズムに溢れているが、妖精メイド達にとって、横島とはそれだけ多大な影響を与える存在なのだ。
もしそんな存在が、誰かを抱えてやって来たら。しかもそれが『お姫様抱っこ』だったら。
「お待たせー。ドア、開けて」
「あ、パチュリー様お待ちしてまし――――なんてこったぁっ!?」
妖精メイド達が受けた衝撃は、如何ばかりか。

「パチェ、遅いわね」
「お腹空いたー……」
壁に掛けられた時計を見て呟くレミリアの横で、フランが空腹からテーブルに突っ伏している。『食事は皆が揃ってから』というルールが設けられている紅魔館では、しばし

ばこういった光景が見られる。
「横島さんが燃やされたとは聞いたけど……他にも何かあったのかしら？」
「パチュリーは体が弱いんだろ？　昨日のバーベキューではしゃぎすぎてたり、さっきの力の爆発とかで体調を崩したんじゃ……」
輝夜の疑問に返したのは妹紅。昨晩は紅魔館に泊まり、色々と眠れぬ夜を過ごしたのか、目元にはうっすらと隈が出来ている。最近は慧音の説教によってちゃんと寝ていたのだが、また悪い癖が出てくるかもしれない。
ちなみに幽々子と妖夢も泊まり、食堂に集まっている。幽々子は空腹なのか大人しくしており、妖夢は幽々子が食べ過ぎないように祈りを捧げている。これ以上紅魔館に迷惑を掛けたくない一心からの行動だ。……祈る時点で、諦めているのかも知れないが。
そんな中でそろそろ待つのも限界に達したのか、レミリアが咲夜に確認に行かせようかと決めた瞬間、食堂のドアが開き、そこからパチュリーの声が響いた。
「ごめん、待たせちゃったわね」
「遅いわよ、パチェ。何かあったのかと――――なんてこったぁっ!?」
パチュリーの姿を認めた瞬間、レミリアは叫ぶ。それだけではない。現在食堂の内外から「なんてこった……」「なんてこった……」と、いくつもの呟きが聞こえてくる。
現在この場を支配している雰囲気はカオスの域に突入し、当事者たる横島達は狼狽え

るばかりだ。
（良いなぁ、パチュリー様……）
（うーん、私も後で執事さんに抱っこをねだってみようかな？）
（あ、私もそうしよーっと。ただお兄様なら二人でも三人でも大丈夫だよね）
主の衝撃的な姿を、小悪魔は指を銜えて羨ましそうにしている。実は彼女もお姫様抱っこをされているのだが、意識が朦朧としていたせいかそのことを覚えていない。何とも残念なことだが、今の小悪魔にはパチュリーとは他に、気になることがあった。
横島達に向かう興味と同時に、もう一人にも興味が集中している。
その対象とは、妹紅だ。
昨夜のバーベキューに於いて、妹紅は横島から贈られた口紅を付けて来た。彼女の様子からそれがどういう意味を持つかを知っていると察した周囲は、妹紅はもうそういうことなのだろうと認識した。
実際にはまだそこまでに至ってはいないのだが、あんな雰囲気を撒き散らされては皆が誤解するのも致し方ないところ。
そういった理由で注目を集めていた妹紅だが、別段嫉妬を露にすることもなく、何か感じ入るかのように頷いている。
（輝夜から借りた漫画で見たことあるけど、これが実際のお姫様抱っこか……。女子の

憧れって言われてるのが何となく分かるような……）

横島達を見る妹紅の目が若干キラキラと光を放っている。輝夜から色々と漫画を借りている影響か、それとも横島という男性と親密になったからか、今まで隠れていた少女らしい夢見がちな部分が表出しているようだ。

（ところで妹紅、あれを見てこう、嫉妬みたいな気持ちがあったりする？）

（え、何で？）

（……んー、何でもない）

（……？）

輝夜は問いに対する返答で、妹紅が横島に対して恋心を抱いていないのだと判断した。もしかしたら気付いていないだけかもしれないが、どちらにせよ横島との親交は妹紅にとって良い経験になりそうだ。

少々寂しい気持ちもあるか、輝夜は妹紅がどう横島と関わっていくか、見守ることにする。

（……近くで引っ掻き回す方が面白いかしら）

輝夜は娯楽に飢えているようだ。

そんなこんなで皆が衝撃を受けている最中、横島はパチュリーを席へと運び、咲夜と同様に定位置へと着く。

そのまま食事は開始されたのだが、その雰囲気は何か形容し難い物だった。
「……あの、横島さん」
「ん……？」
背後から横島の服の裾をちょいと引っ張る者が居た。振り返って見てみれば、そこには横島を見上げる一号の姿。
「おねがいがあるんです」

「ほれ、あーん」
「あー、んっ。んふふふ～」
ここは妖精メイド用の食堂。ここでは妖精メイド達がローテーションで食事を取ったりなど、休憩の時に使う場所だ。普段咲夜や横島もここで主人達より後に食事を取るのに使用しており、様々な小物が置かれていることもあって居心地の良い空間なのだが、現在は異様な雰囲気で満たされていた。
「ちゃんと噛んでから飲み込めよー？」

「はーい」

理由は至って簡単だ。横島が一号を横抱きで膝に抱え、あーんで食事を食べさせている。つまりはそういうことだった。

横島は一号に食べさせながら、時折頭を優しく撫でたりもしている。その感触に一号は骨からぐにゃぐにゃに溶け、ふにゃふにゃにとろけた笑顔で横島に甘え倒している。

それを見せつけられた他の妖精メイド達は、羨ましいやら妬ましいやらで異様なオーラを噴出しているのだ。

そんな状況にも咲夜は苦笑を浮かべるばかり。むしろ微笑ましいと言えるだけの余裕を持っていた。

「しっかし、朝食だとすぐに終わっちゃうな。これは元々一号へのプレゼントなんだし、今日のおやつと昼食夕食もこうやって食べさせてやろうか？」

「え!?　い、いいんですかっ!?」

「おう。まあ、一号さえ良ければな」

「お、おねがいします!!」

横島の提案に一号は食い付いた。その浮かれっぷりは傍目からでも幸せ一杯といった風情だ。

「ずるーい！」

「えこひいきー！」
「私もー！」
しかし、当然周りからの不満は出てきてしまう。それに対して横島は困り気に返すのみだ。
「んなこと言ったってお前ら具体的な要求してこなかったじゃん。頭撫でろとか飯作れとか、ほとんどそんなんばっかだったろ？」
「う～……」
横島からの指摘に妖精メイド達は唸ることしか出来ない。確かに自分達がもっと直接的な要求をしておけば良かったのだが、それでも羨ましい物は羨ましい。
そんな妖精メイド達に味方をしたのは、彼女達を纏めるメイド長、咲夜だ。
「はいはい、皆そこまでにしなさい。横島さんも、あまり意地悪を言わないの」
「メイド長～……」
「いや、意地悪っつーか……」
妖精メイド達は泣きそうな表情で咲夜を見つめ、横島はばつが悪そうに言いよどむ。
「だったらこうしましょう。ちゃんと仕事が出来たり、何か良いことが出来たらご褒美として横島さんがご飯をあーんで食べさせる」
「えー？」

咲夜の提案に横島は「何でそうなるんだ?」と首を傾げるが、妖精メイド達は目を輝かせ始める。

「勿論ケンカしたり誰かの足を引っ張ったりは禁止。あくまでもいつも通りに仕事をして、その中で頑張った子にご褒美をあげる。分かった?」

「はーい!」

横島を放って話はどんどん進む。咲夜がこう言っている以上、この話は決定だ。『紅魔館真のトップ』と妖精メイド達に言われている咲夜の決定は、レミリアでも覆すのは難しい。

「あー……、まあいいか。咲夜さん、それには一号達も含まれるんすよね?」

「ええ、当然よ。またあーんをしてもらいたいなら、頑張ってお仕事しなさい」

「はいっ!」

一号含め、妖精メイド達の声が重なる。皆やる気に満ち溢れ、仕事に対するモチベーションが上がっているのが分かる。これによって、横島は咲夜の狙いが分かった。

(これでこいつらは真面目に仕事するようになるんかな?)

妖精は飽きっぽく、紅魔館では仕事を辞めるのも自由だ。そんな形態を執っている為、今まで負担の全ては咲夜にのしかかっていた。だが、今回こうやって『ご褒美』を用意することで人員の削減を防ぎ、やる気へと繋げたのだろう。

横島は苦笑を浮かべる。
（ま、皆がやる気になるってんなら止めることもないか。咲夜さんも今まで大変だったろーし）
腕にすっぽりと収まっている一号を見やる。
先程は真剣な表情をしていたが、今ではまたも骨抜きになったかのようにふやけた笑みを浮かべている。
横島はそんな一号を一つ撫で、ある決意を抱いた。
（皆が頑張るってんなら、俺も頑張んないとな）
横島は午後に訪ねてくる予定の、紫を思い浮かべた。

「――――♪」
八雲紫は鼻歌を歌いつつ、日傘を差して空を飛んでいた。見るからに上機嫌と分かるその様子は、最近では珍しい姿だ。

珍しいと言えば、彼女の現在の服装もそうだ。お気に入りである紫色のワンピースドレスや、中華風の服ではない。

紫色を基調としたワンピースドレスという点では同じだが、コルセットにスカートの裾から覗くパニエ、タイツやセパレートになっている袖、更には手袋など、所々に白をあしらい、またリボンには赤を使用している。

それは紫の美しさではなく、彼女が持つ『幼さ』、『可愛らしさ』を強調した物だ。

しかし、上機嫌である理由は何もいつもと服装が違うからではない。

横島から贈られた『プレゼント』が、思った以上にこの服に似合っていたのだ。

それは、紫が差している『日傘』である。

全体的に白を基調とし、レースフリルをあしらい、縁に紫を配している。持ち手の部分はやや前衛的に曲がっているが、その曲線は全体の調和を乱す物ではなく、地味ながらも可愛らしい印象を持たせることに成功していた。

紫は横島からのプレゼントと自分の服が、一つのセットであるかのように嵌まっているのが嬉しかったのだ。

「……着いた、と」

紫は鼻歌を止め、空中に制止する。彼女がやって来たのは当然紅魔館だ。いつもならスキマによる移動で済ませているのだが、せっかくプレゼントされた日傘があるのだか

ら、それを使いたかったのだ。
以前レミリアから「お前ならいつでも、どこからでもウチに上がってきていいぞ」と言われた紫は遠慮無しにそのまま敷地内へと移動する。
まさかレミリアからここまでの信頼を寄せられるとは思っていなかった為、最近の紫は紅魔館で過ごす時間が癒やしへと変わっていた。
正門から本館への道の途中に降り立った紫は、日傘を差したまま本館へと向かう。何やら正門の方が騒がしく思えたが、今の紫は気にも留めない。
紫は今日のコーディネートに対して、横島からの感想を聞いてみたかった。

紅魔館の正門にて、小さな影が五つ存在していた。
いずれも幼い容姿をした少女であり、正門に向かう一人を残りの四人が押し止めているようだった。
「チルノちゃん、やめようよー……」
「そうだよ、いくらこの前パーティーに誘われたからって、また中に入れてくれるとは限

らないんだよ？」

緑色の髪をし、羽根を生やした少女と、こちらも緑色の髪をした、マントを羽織り、頭に触角を生やした少女が青色の髪と、氷の羽根を生やした少女を説得している。

前者は大妖精とリグル。後者はチルノだ。後方にはミスティアとルーミアが呆れるようにチルノを見ており、既に説得は諦めている。

「もー、大ちゃんもリグルも、行ってみないと分かんないじゃんか。もしかしたらアタイ達は歓迎されるかもしれないし」

「何でそんな根拠の無い自信に満ち溢れているのかな、チルノは？」

「だってアタイは最強だもの！　当たって砕けなきゃ！」

「砕けたら意味がないし、そもそもそれじゃ最強じゃないよチルノちゃん」

二人の言葉も何のその。チルノはいつも通り我が道を往く。

「でも本当に大丈夫なの？　門番の人は素手で分厚い鉄板に穴を開けるって聞いたことがあるけど……」

「そーなのかー？　私達の体じゃ、貫通しちゃう……？」

人里に流れる噂の内容に、ミスティア達は震え上がる。彼女達は妖怪の中でも力は弱い。鉄をぶち抜く拳などを食らえば、即死は免れないだろう。やはり噂話とは背鰭尾鰭が付くものだ。

「大丈夫！　アタイの腹筋は固いから！」
「……ぷにぷにだよ、チルノちゃん」
ぺちーんと自らの腹を叩くチルノに、大妖精は疲れ果てたかのようにうなだれてしまう。いつも通りと言えばいつも通りの光景なのだが、今回はそれがまずかった。
チルノは大妖精とリグルをすり抜け、正門へと一直線に向かう。
「あ、ちょ、チルノちゃんっ!?」
「あわわっ、チルノ、待ってー!?」
皆が止めるがもう遅い。チルノは既に正門に立つ門番たる少女、美鈴の前へと躍り出ていた。
「たのもー!!」
「……ん？　あら、あなたは……」
「こんにちは！　アタイはチルノ！」
「はい、こんにちは。私はこの紅魔館の門番を務める紅美鈴です。……この前のパーティー以来かな？　今日はどうしたの？」
大妖精達が追い付いた時には既にチルノが名乗りを上げた後であった。
美鈴はチルノと目線を合わせる為に屈み、にこやかに応対していたのだが、大妖精達にはその様子が「ワレ、紅魔館にカチコミ掛けてくるとはええ度胸やないかい！　ただ

で帰れる思うなよゴラァッ!?」とガン付けしているようにしか見えなかった。思い込みとはかくも恐ろしい物である。

「アタイ達をこーま館に入れてください！」

「紅魔館に？」

「わ、私達まで!?」

チルノは元気いっぱいに挙手をし、自分達を紅魔館に入れてほしいと要求する。巻き込まれた形の大妖精達は顔が真っ青に染まる。

「ふむ……」

美鈴はチルノの要求を聞き、顎に手を当てて考え込む。その時にチルノの背に隠れるように密集している大妖精達に目をやると、「ひっ!?」という小さい悲鳴と共に顔を隠された。美鈴の心に小さくない傷が出来る。

「ん～……二号？」

「はーい！」

「っ!?」

美鈴が背後に向かって声を掛ける。すると門柱から二号がひょっこりと顔を出し、元気よく返事をした。

「お嬢様に確認してきてくれる？」

「りょーかいですっ！」
二号はビシッと敬礼を決め、本館に居るレミリアの下へと飛んでいく。
その後、美鈴が大妖精達にビクビクと怯えられながらも挨拶を済ませてすぐに二号が戻ってきた。
「随分早かったけど、どうだったの？」
「かまわない、だそうです」
「なるほど。それならば……」
二号からの報告に、美鈴は門を開く。チルノは目をキラキラと輝かせていたが、大妖精達は信じられないとばかりに目を見開いている。
「――――ようこそ、紅魔館へ。貴方達を歓迎致します」
美鈴はチルノ達へ頭を下げる。大妖精達は最早パニックに近い。しかし、それでもチルノは物怖じしない。
「おじゃましまーす！」
「あ、ち、チルノちゃん待ってー！　置いていかないでー!?」
チルノはずんずんと歩を進め、大妖精達は慌ててチルノの後を追う。美鈴は彼女達の姿を見て、紅魔館が周りにどう思われているかを知り、少し憂鬱になった。
とにもかくにも、チルノ達は前庭を抜け、本館へと入る。

「おじゃましまーす……」

流石のチルノも少し緊張しているのか、扉を開けつつの声には少々張りがない。扉を開いたその先、ロビーと言えるその場所に、何故かフランと咲夜、そして永琳を傍らに置いて玉座にふんぞり返るレミリアが居た。

「で、出たー!?」

「命だけは!?　命だけはーっ!!?」

そして大妖精達は大パニックである。そこまで恐れるなら何故ここまで付いて来たのか、チルノには分からなかった。

「……別に取って食ったりはしないって」

レミリアは呆れたように声を出す。これで相手がノリの良い人物なら「ぎゃおー!食べちゃうぞー!」とはっちゃけるのも有りなのだが、目の前の少女達にやった場合、大惨事になりかねない。

「――――ようこそ、紅魔館へ。お前達を歓迎しよう」

レミリアは気を取り直して王気（オーラ）たっぷりにチルノ達を迎える。台詞こそ美鈴とほぼ同じであったが、彼女達が受ける威圧感はそれこそ段違いだ。

「あ、ありがとうございますぅ……」

目に涙が溜まりつつある大妖精が礼を言い、それに倣って他の四人も礼を言う。それ

を受け満足気に頷いたレミリアは、まずは改めて自己紹介をする。
「既に知っているだろうが、私はレミリア・スカーレット。この紅魔館の主だ。隣に居るのは妹のフラン……フランドール・スカーレット。それから私の従者の十六夜咲夜、客分の八意永琳だ」
　レミリアの紹介にそれぞれが頭を下げる。大妖精達は恐縮しきりで狼狽えてばかりだが、チルノだけは元気によろしくと挨拶を返していた。
「ははは、元気の良いことだ。……フラン」
「う、うん」
　レミリアに促され、フランはチルノ達に歩み寄る。大妖精達四人はレミリアに匹敵するであろう力を持つフランに怯えるように体を竦ませるが、チルノは「どうしたのかな？」と首を傾げるだけだ。
「え……っと、ね。私、フランドールっていうの。……チルノ、だったよね？」
「フランドー……フランね。うん、アタイはチルノ！　最強の妖精なのよ！」
　フランはもじもじとチルノに話し掛け、チルノは元気いっぱいに返答する。見た目といい、何かと対照的な二人だ。
「えっと……、その……」
「？　……うん」

「あ、の……」

フランは何かを言いよどむばかりで言葉が出ない。遂にはチルノの不思議そうな視線に負け、フランはレミリアに視線で助けを要求する。だが、レミリアの目は「頑張りなさい」と如実に告げていた。

そもそも何故チルノ達は紅魔館に入ることが許されたのか。フランは何を言いたいのか。全ての答えは数日前のレミリアと永琳の会話にあった。

「フランちゃん、かなり精神が安定してきたわ」

「……そうなの？」

いつものお茶会にて、レミリアは永琳からフランの精神状態について聞かされていた。

「ええ。妖精メイド達との触れ合いや、横島君との出会いも良い影響を及ぼしてくれたようね。……勿論、妹思いのお姉ちゃんの頑張りが一番でしょうけどね？」

「……ふん」

レミリアは顔を赤く染めてそっぽを向く。その非常に微笑ましい姿に永琳は頬が緩むばかりだ。

「まあ、これからは少しずつ外に慣らしていかないと。いつまでも引き籠もってばかりじゃ駄目だしね」

「ふむ……。となると、精神年齢が近い友達が外に居れば良かったんだけど……」

レミリアは外に慣らす方法について考える。外に友人が居れば自然と外出するようになるだろうが、フランの周りに居る人物達はそのほとんどがレミリアの関係者だ。一番近いのは霊夢や魔理沙だが、レミリアは正直この二人はフランに悪い影響しか与えないのではないか、と危惧している。

「妖精メイド達はここに住んでるし、イナバ達は迷いの竹林に居るし……」

永琳も誰か都合の良い人物が居ないか考えるが、思い付く者は皆無。永遠亭自体長い間引き籠もっていたので、その弊害が現れた形だ。

「……あ、あいつらが居たな」

ぽつりと、レミリアが呟く。

「誰か居たの？」

「ええ。この前のパーティーの出席者。確かチルノとか大妖精とか言ってた」

レミリアはチルノ達を思い浮かべる。彼女達は霧の湖周辺に住んでいるらしく、見た

目年齢も精神年齢もフランと似たような物だ。
「なら、近い内に招待する？　別に急がなくても大丈夫と言えば大丈夫だけど」
「……いや、あいつらが訪ねてきたら、その時に入れてやろうかな。紅魔館を探検したがってたみたいだし、そろそろ忍び込もうとでもしてくるんじゃないか？」
永琳の提案にレミリアはあまり乗り気ではない様子。永琳は一呼吸置いた後、ズバリ聞いてみた。
「で、本音は？」
「私自らあいつらを招待するのは何かやだ」
何ともどうしようもない理由であった。

そして今日、レミリアが睨んだ通りにチルノ達はやって来た。忍び込もうとせずに、真正面から「紅魔館に入れてほしい」と言ってきたのは予想外であり、だからこそレミリアのチルノに対する心証は良い。フランに対して物怖じしないのも高得点だ。
（……案外大物かもな、あいつ。もしくはただ単にバカなのか）
レミリアはフランの助けを求める視線をスルーし、チルノに注目している。そして皆

の関心を受けるチルノは、ここで驚きの行動に出た。
「……フラン」
「え、な、何？」
チルノはゆっくりとした動作で両手を上げる。その手は流れるように前進し、フランの胸へと着地した。ついでに指がむにむにと動いている。
「――――……」
「ひぃっ!!?」
レミリアから爆発的に殺気と魔力が湧き上がり、それを敏感に察知した大妖精達四人が悲鳴を上げる。その怯えようは今にも失神してしまいそうな程だ。
フランはチルノの行動に驚き、動けずにいた。もしかしてこれは挨拶の一つなのだろうかなどと、益体もないことを考える。
やがてチルノはフランの胸から手を離し、今度は自分の胸に触れる。レミリアは非常にクールな頭の中で、一つのことを決定した。
――――次の言動次第ではチルノを消し飛ばそう、と。
皆が見守る中、チルノは大きく頷き、フランの両手を取った。
「アタイ達は親友だよ、フラン！」
キラキラとした目がフランを見つめる。

「――――う、うん！　私達は親友だよ、チルノ！」

何だかよく分からないが、『親友』というフレーズに反射的に応えてしまうフラン。今ここに、二人は親友関係となったのだった。

チルノはフランと手を繋いだままに大妖精達の下へと駆け寄り、そのまま交流を開始した。大妖精達がフランに自己紹介をしている。どうやらレミリアが怖すぎた為に、やや内向的なフランは姉と違って怖くないのだと認識したようだ。

「……永琳？」

「何かしら」

殺気も魔力も霧散させ、レミリアは隣に居る永琳に問い掛ける。

「……喜んで良いのかしら？」

「……うーん。まあ、良いんじゃないかしら？　形はどうあれ友達は五人出来たわけだし」

「……うーん」

この出会いが良い物かで悩むレミリアの下に、フランが駆け寄ってくる。

「あのね、お姉様。私これから皆に紅魔館を案内してくるね？」

「え、ああ、うん。構わないわよ。……お前達！」

「はいっ!?」

笑顔で報告するフランに、考え事のせいかレミリアは少々反応が遅れてしまうが何とか了承する。しかしそれだけに留める訳にはいかず、レミリアはチルノ達に声を掛ける。

「紅魔館を回るのは良いが、あまりハシャぎすぎないようにな。フランに迷惑を掛けることも許さんぞ」

「は、はいぃ！」

レミリアからの注意に大妖精達は竦み上がる。それを見たフランは少々ご立腹だ。

「もー、大妖精達が怖がってるからやめて！　……大丈夫だからね？　お姉様にいじめられないように、私が守ってあげるから」

「ふ、フラン……！」

この時のフランは、まるで天使のように見えたという。レミリアとフラン、無意識の飴と鞭によって大妖精達の中でフランの株が急上昇したのだった。

フランはチルノ達を連れ、紅魔館の案内に赴いた。その笑顔は眩しく、レミリアに見せる物や横島に見せる物ともまた違う笑顔だった。

レミリアはフランの笑顔を思い起こしながら、隣の永琳へと声を掛ける。

「……永琳？」

「何かしら」

「実は私、友人って胸を張って言えるのはパチェしか居ないのよね」
「……私は貴女のこと、大切な友人と思っているわよ？」
「……ありがと」
友人に囲まれるフランを見て、喜ぶと同時に寂しさが過ぎったようだ。
どうか長続きしてほしい。レミリアはそう思わずにはいられなかった。

フランとチルノ達が紅魔館を探検している頃、紫は中庭で横島を見つけた。丁度休憩中らしく、横島は笑顔で紫に歩み寄る。
「こんちはっす、紫さん！　日傘、使ってくれてるんすね」
「こんにちは。ええ、時間が掛かったけれどようやくこの日傘に合う服が見つかってね。……似合うかしら？」
紫は柔らかな笑みを浮かべ、スカートの裾を持ち上げる。その可憐な姿に横島は顔をだらしなく歪めるばかりだ。
「ええ、似合ってますよ！　何つーか、いつもの紫さんは綺麗とか美人って感じっすけ

ど、今は可愛いとか、お人形さんみたいっつーか……。とにかく可愛いっすよ！」
「ふふ、ありがとう」
横島の上手くはないが、心からの賛辞に紫は頬を染める。可愛いと言われたい相手にそう言われることは、紫の心を暖かくする。
その後しばらく世間話をした後、横島は紫に対してあるお願い事をする。
「あの、紫さんに頼みたいことがあるんですけど」
「私に？」
「はい。……俺に、空の飛び方を教えてほしいんですよ」
横島のお願いに紫は目を丸くする。
「空の飛び方……。確かに教えてあげられるけど、どうして私に？」
紫は真っ先に疑問に思ったことを聞いてみる。その質問に横島は不思議そうな顔をしつつも、簡潔に答える。
「え？　いや、紫さんはこういうのを教えるのが上手そうだなーってイメージがあって。紫さん、頼りになるし」
「――――!!」
その答えに、紫の体に電流が走る。
そうだ。何故紅魔館で過ごす時間が癒しの時間だと感じていたのか。答えはこれ

だったのだ。

紫は普段から『胡散臭い』『信頼どころか信用も出来ない』『お茶飲んだらさっさと帰れ』などと言われている。ところが、目の前に居る男はどうだ？

自らの失敗によって彼をこの世界に引き込んでしまった。彼はそんな自分を許し、あまつさえ純粋に信頼し、笑顔を向けてくれる。

紅魔館での時間だけが癒しなのではない。横島忠夫と過ごす時間が、八雲紫の癒しの時間へとなっていたのだ。

「……どうかしました？」

「いえ、何でもありませんわ。……空の飛び方でしたわね？」

訝しげな視線を送る横島に一つ微笑み返しつつ、紫は確認をする。

「では、横島君はどうすれば空を飛べるようになると思う？」

「え……？」

紫の問いに横島は考え込む。

「そりゃやっぱり全身から霊波とかを放出して……ブワーっと？」

「確かにそういうイメージはありますわね。でも違います」

横島の答えに紫は左右の人差し指でばつを作る。横島はならばと、知り合いのロボッ

ト少女を参考にする。
「じゃあ、足の裏からジェット噴射みたいな感じで？」
「足の裏だけだとバランスが取れないと思いますけど……それも違います」
横島は目を閉じて考え込む。言われてみれば、知り合いの神魔族は全身から霊波を放出していなかった。では一体どうやって飛んでいるのだろう。
紫は「むむむ」と考え込む横島を、微笑ましく見守っている。しかし横島の休憩時間はどんどん過ぎていく。紫はここらでヒントを出すことにした。
「……横島君、サイキックソーサーは出せるかしら？」
「うえ？　はい、出せますけど……」
紫に言われ、横島は左手にサイキックソーサー・プラスを無造作に作り出す。強化されたことにより丸みを帯びた円形の盾は、掌の数センチメートル上に浮かんでいる。
「あら、もうそんなにスムーズに出せるようになったのね」
「ええ、一度作り出せたら後はすぐでしたね。この上のもあともう少しって感じなんすけど……。それで、サイキックソーサーがどうしたんすか？」
横島は紫の意図が読めなかった。紫は横島のサイキックソーサーを指差す。
「そのサイキックソーサーが、空を飛ぶ為のヒントです」
「ええ……？　これが？」

横島は自らが生み出したサイキックソーサーを見やる。

何の変哲もない、いつも通りに作り出したサイキックソーサーだ。変わったところと言えば、強化されて円形になったぐらいである。

いくら見てもやはり何か関係がありそうには見えない。サイキックソーサーはいつも通り、掌から浮いている。

「……待てよ？　浮かん……でる、よな」

横島は何かに気付き、紫は笑みをより一層深くした。

「……」

横島の頭にいくつものピースが揃っていく。そしてそれが一つの形を形成しようとした時、横合いから声が掛かった。

「ただお兄様ー!!」

「っ！　フランちゃん……？」

本館の方を見てみると、フランが以前パーティーで見た少女達を連れてこちらへと駆け寄ってくるのが見えた。集中が途切れたせいか横島の手からサイキックソーサーは消失し、頭に浮かんできていた一つの形もそれを成す前に霧散してしまった。

紫はそれを察知したのか、額に手を当て「あちゃー」という表情をしている。服装の影響か、今日の紫は幼い仕草が多いようだ。

「えへへ、お兄様、私友達がいっぱい出来たんだよ」
「おー、そうなのか！　良かったじゃん」
　笑顔で報告してくるフランに、横島も笑顔で返す。くしゃくしゃと頭を撫でられ、くすぐったそうにするも、フランはそれを嬉しそうに享受する。
「皆、久しぶりだな。そっか、皆フランちゃんと友達になったんだな」
　横島はフランから手を離し、チルノ達に向き直る。フランは物足りなさそうな顔をするが、それも一瞬。フランは横島にチルノ達のことを聞く。
「ただお兄様、皆のこと知ってるの？」
「ああ、前のパーティーの時に。……チルノちゃんに大妖精ちゃんに、ルーミアちゃんにミスティアちゃん、そんで……リグルちゃんだよな。いらっしゃい、紅魔館へようこそ……ってな」
　話について行けず、置いてきぼりにされていたチルノ達は、おどけたように歓迎する横島とそれぞれ挨拶を交わす。
「いやー、ごめんなミスティアちゃん。屋台に行くって言ったときながらまだ行けてなくて。昼間の買い物とかで人里にはよく行ってるんだけど、見つかんなくてさ」
「あ、私の屋台は夜に営業してますから仕方ないですよー」
「この前の砂糖水、美味しかったです。砂糖水作るの上手なんですね！」

「ん、いやー、砂糖がかなり上物だったみたいだし、それが一番の理由だと思うけどなー」
「ちょっと体が大きくなった……？　太ったのかー？　ちょっと美味しそう……」
「おい、止めろ。太ったんじゃなくて筋肉が付いたみたいだな。……それにしてもルーミアちゃんとフランちゃん、ちょっと似てる……？」
「そーなのかー？」
「そうなのかな？」
横島はフラン達と世間話に興じる。大妖精は内向的な性格の為かあまり積極的に横島と話さないが、彼女には気になることがあった。こういう時に真っ先に元気よく話をしそうなチルノが、頭を捻ってうんうんと唸っているのだ。その様子は横島も気になっていたのか、チルノにどうしたのかと聞き出す。
「……大丈夫か？　チルノちゃん、何かあったのか？」
「んー……」
チルノは目を瞑って考え込んでいたが、やがて目を開き、横島に問い掛ける。
「何かおにーさんって、リグルと話す時に変な感じがするんだけど」
「――――……！」
そのチルノの言葉は、それを聞いた横島と紫に多大な衝撃を与えた。
「え、そうかな……？　普通だったと思うけど……？」

リグルは先程の横島との会話を思い出す。特に変わった様子もなく、ごく自然な物だったように思えるのだが、チルノはそうではないようだ。言葉に表すことは出来ないようだが、それでも違和感を覚えるらしい。

「……あー、うん。なるほどなぁ……」

リグルとは逆に、横島はチルノの言葉に納得していた。リグルは横島を見やる。

「いや、実はさ。リグルちゃんって俺の死んだ知り合いにちょっと似てるんだよね」

「え……」

その声は誰の物だったのか。その場が静寂に包まれる。

「重ねないように重ねないようにって意識してたんだけど、それが悪かったのかね？……ごめんな、リグルちゃんも良い気分にゃならないよな」

「そ、そんなことないですよ！　その、そういうのは仕方ないと思いますし、私も気にしませんし……」

「そっか……。ありがとな？」

横島はリグルに謝罪し、リグルも慌てるが悪感情などは抱いていない。むしろどんな所が似ているのか、少し気になったぐらいだ。

「あの……」

「ん？」

裾を引っ張られる感覚に下を向くと、チルノが申し訳なさそうに俯き加減で横島の服の裾をつまんでいた。

「えっと、あの……ごめんなさい」

チルノは横島に頭を下げる。その様子は普段いつも側にいる大妖精が見たことも無い程に萎縮している。それを見た大妖精の胸に、チクリとした痛みが走る。

パーティーの時。いつか、遠い過去に触れたかもしれない温もりを、チルノは失うのを恐れている。だからこそチルノは素直に謝ったのだ。

そんなチルノの頭を、横島は優しく撫でる。その感触に驚いたチルノは顔を上げ、横島を見る。

「まあ、知らなかったんだからしょうがないって。あんな気にしすぎないでもいいし、ちゃんと謝れたんだからそれで良いよ」

「……」

自らの頭を撫でる、優しい温もり。それは抗い難く、チルノはその温もりに身を任せる。リグル達は見たことがないチルノの姿に、ただ驚いている。

そして、それは紫もだ。ただし、チルノに対してではなく、横島に対して。

紫は愕然とした様子で横島を見ている。横島の『それ』に気付けたのは永きに渡って人間と触れ合ってきたからなのか、それとも『境界を操る能力』を持っているからか。

紫はひとまず気を落ち着かせ、気持ちを切り替える。今は良い。永琳と毎回確認しあっているが、横島は非常に『安定』しているのだ。ケアとて一瞬で終わるわけではない。原因の一端に気付けたのだ。ゆっくりと、確実にケアを施す。紫は改めて決意し、また横島を見る。

「ねえ、ただお兄様。結局紫と何をしてたの？」

その言葉に紫はフランを見る。今更ながらに何か邪魔をしてしまったのではないかと気になったようだ。

「あー、空の飛び方を教わってたんだよ」

「空の飛び方？」

横島の言葉にフランは首を傾げる。リグル達も話に混ざり、手本として実際に浮かんだりしているが、どうも上手く説明が出来ないようで、頭を捻っている。

「アタイに任せて！」

そこでズイと出てきたのはチルノだ。その顔は自信に満ちており、皆の期待を一身に受ける。

「空の飛び方はね。――――シュイーンってした後にぶわっとして、グンってやったあとギューンってすれば大丈夫!!」

――――その場の全員が、首を傾げた。

ある意味期待通りの結果に大妖精は苦笑を浮かべる。リグルが「擬音語ばかりで分からない」と言えば、チルノは「ぎお……何が？」と返す。ただ横島だけは真剣に考えてくれているようだ。

「あの、横島さん。あまり本気で考えなくても……」

大妖精は横島にそう言うが、横島はポンと手を鳴らす。

「つまり……、こーいうことかぁあああああ!!」

横島が気合いを入れて霊力を身に纏った直後、横島の体は地面から数十センチメートルほど浮かび上がる。

「浮いたあああああああ!!?」

横島とチルノ以外の言葉が重なった。

「まっ、いや、えーっ!?」

「なん、何で浮かべるんです!?」

「チルノの説明で分かったのかー!?」

「擬音語ばかりだったのに!?」

「ただお兄様凄い！」

「やっぱりアタイの説明は最強ね！」

「わ、私の立場が……!?」

中庭はカオスに包まれる。大妖精達は混乱し、フランは横島を賞賛し、チルノは自らの最強を誇示し、紫は地面に手と膝をついて打ち拉がれる。

横島は数十秒程浮かんでいたが、集中が途切れ、地面に着地する。

「ふーっ。慣れてないせいかかなりしんどいな。これも修行が必要か……」

横島は額に浮かび上がった汗をハンカチで拭い、息を整える。紫はそんな横島によろよろとよろけながらも質問をする。

「ど、どうやって浮かべたの……？　彼女の説明で分かったの……？」

「あー、まあそうっすね」

横島が肯定したことで紫に更なる精神的ダメージが入る。しかし横島はそれに気付かず、何故浮かべたのか説明を始めた。

「えっとですね、まずチャクラをシュイーンと回して霊力を全身にぶわっと広げる。そんで全身に浸透した霊力を『体ごと』グンと持ち上げて……って感じっすね。流石に初めてでギューンは無理でした」

横島は自分の説明にうんうんと頷いている。チルノの説明を理解しきった横島に、周りは感心するやら呆れるやらといった様子だ。

「そ、そうなの……」

「まあ、紫さんのヒントが無かったら理解出来なかったでしょうけどね。……っていう

か紫さん、服が汚れてますよ？　どうしたんすか？　せっかくの可愛い服なのに……」

横島は紫の服に付いた汚れを払い落としていく。その際の紫を持ち上げる発言と気遣いの言葉によって、紫は先程のダメージが癒えていくようだった。

「とりあえず霊力は重力の干渉を受けないみたいっすね。それでサイキックソーサーも浮かんでるみたいですし」

「その通りですわ。空を飛ぶのに必要なのは、霊力の放出ではなく、維持と制御。……体に浸透させた霊力を体ごと持ち上げるのは、中々に大変でしょう？」

「いやー、ほんと難しいっすよ。とりあえず第一の目標は、あの木の枝にまで浮かぶことっすね」

横島はアシュタロスとの最終決戦を思い出す。究極の魔体が放った、島を消し飛ばし、尚も衰えず進む霊波砲。あれは地球の丸みを計算に入れず、宇宙に飛び出したと言われていた。

そう、重力に関しては最初から考慮されていなかった。もし重力の干渉があったのならば、あの霊波砲は威力が減衰するまでずっと地球を回り続けていただろう。

美神との同基合体もそうだ。あれは『美神が飛んでいたから』『同基合体したから』飛べたのだと思い込んでいた。実際は合体による今よりも遥かに強大な霊波を無意識的にコントロールしていたのだろう。

横島は近くにあった木を見上げる。一番低い位置にある枝でも、五メートルの高さはありそうだ。たかが地面から僅かに、しかも数十秒だけしか浮かべない自分には、まだまだ遥かな目標と言える。

「それにしても……。チルノちゃんって、結構頭が良かったりするんすかね？」

「……どうしてそう思うの？」

横島の言葉に紫は疑問を浮かべる。妖精は基本的に頭が悪いのは、横島も知っているからだ。

「いや、擬音語ばっかりでしたけど、理解出来ればかなり的確な説明でしたし。……リグルちゃんに対しての俺の対応も、皆気付かなかったのにチルノちゃんだけが気付いてましたし……」

「……確かに、そうですわね」

紫は横島の言葉になるほどと頷く。妖精とは自然の端末。意志を持ち、具現化された自然そのものだ。特に強力な力を持った妖精であるチルノは、もしかしたら本質を見抜く特別な才能があるのかもしれない。

「おにーさんおにーさん！　あの木の枝まで浮かぶのが目標なんでしょ？」

「ん？　ああ、そうだけど」

横島と紫がチルノについて話していると、そのチルノが話しかけてきた。

「アタイぐらいになったらね、それぐらいもう簡単に出来るのよ！」
お手本を見せてあげる！　と張り切るチルノ。
ギュンっと飛び上がったチルノは。
「ぎゃぴぃっ!?」
その勢いのままドゴォッ！　と枝に頭をぶつけ。
「ぎゃふんっ!?」
そのまま地面にベシャアッ！　と顔面から着地し。
「にゅおおおお……!?」
ぶつけた頭を押さえ、じたばたとのた打ち回る。
「ち、チルノー!?」
「大丈夫なのかー!?」
「あ、アタイに一体何が……？　まさか、何らかのスペカ攻撃を受けている……!?」
「ただ単に枝に頭をぶつけただけだよチルノちゃん！」
横島は沈黙している。紫も同様だ。
「紫さん」
「何かしら」
「俺の考え過ぎですかね？」

「そうですわね……」
横島達はチルノに対する認識を改めて、とりあえず手当てを開始する。
ぷっくりと腫れたたんこぶが、プリティーと言えばプリティーだった。

第二十話
『きっと空を飛べるはず。多分。恐らく。』
～了～

「ねえ、レミィ？」
「何よ、パチェ？」
「横島がさ、私の裸を見て鼻血を出したんだけどね？」

「へえ……。横島はそんなに私のグングニルの錆になりたいのかしら？」
「落ち着いて。それで何だけど、私って見た目何歳に見える？」
「んー？　見た目なら、十三……か、十四歳くらいじゃないかしら？」
「そのくらいよね。横島は、そんな私の裸を見て、鼻血を出した……。これはつまり……」
「……いやいや、まさかそんな」
「……私の考え過ぎよね？」
「きっとそう。多分色々と溜まってるからだと思うけど」
「……やりたい盛りにここの環境は辛いわよね」

おまけ

～了～

番外編

明け方に程近い夜の道路を、法定速度をぶっちぎって美神達が乗ったシェルビー・コブラが疾走する。当然後ろからはパトカーが警告を発しながら追い掛けてきており、助手席に座るおキヌは涙目となっている。

「ひーん、どうするんですか美神さーん!?」

おキヌは美神に非難がましい目を向け、警察への対応をどうするのかを問う。

「大丈夫よ、悪霊の除霊中だったってことにするから！」

美神はパトカーのサイレンの音や、風に負けないように少々大きめの声で答える。美神の膝の上に居る狐の姿のタマモは、胡散臭そうに美神を見上げている。

「いくら何でも、それは無理なんじゃないの？　悪霊なんてそう都合良く出てくるもんじゃないし……」

タマモは鼻をすんすんとひくつかせる。臭いで周囲に悪霊の気配がないかを探っているようだ。

「タマモ……、何の為にアンタが居ると思ってんの？」

「え、私？」

美神の言葉は予想外だったのか、タマモは戸惑いの声を上げる。おキヌの膝の上に居る狼の姿のシロも首を傾げている。

「まさか……、幻術ですか?」

美神の意図に気付けたのは、やはり付き合いの長いおキヌであった。半ば確信を得ている外れていてほしい予想を、美神に対してぶつけてみる。

「当然！　タマモの幻術で凶悪な悪霊の姿を後ろの奴らに見せて、私がそれを退治したように見せる！　完璧な作戦だわ！　唐巣先生の話を聞いてて良かった！」

「やっぱりですか!?」

「私、そんなことをする為にお世話になってるんじゃないんだけど!?」

「誤魔化す為にはそれしかないのでござろーか……」

師匠である唐巣から聞いた母の過去を元にした美神の作戦に、それぞれが反応を示す。

おキヌは予想が当たった事に頭を抱え、タマモは美神に示された役割に悲鳴を上げる。何気に現代の常識が身に付いてきたのか、自らの立場を客観的に見れるようになっている。

唯一理解を示しているような発言をしているシロだが、それは理解と言うより、どちらかと言えば諦念に近い呟きのように聞こえる。シロも美神と横島の影響により、多少

は擦れてきたようだ。
結局美神の作戦に対する対案は出ず、都内の事務所に近い場所で作戦は決行された。
追ってきた警察も除霊に必要な行為だったのだと納得（洗脳）させられ、簡単な問答を行ってすぐに帰っていく。これは心霊現象に対するゴーストスイーパーの除霊に関して、法律がまだ曖昧にしか制定されていないからであった。
それを見送るおキヌとシロの視線は、実に痛ましそうだったという。
警察とのやりとりを終えた美神達はコブラをガレージに停め、事務所に入り最低限の荷物を用意して再びガレージへと戻る。
おキヌはコブラの助手席に用意した荷物を置くのだが、そこに美神が待ったを掛ける。
「おキヌちゃん、妙神山にはコブラでは行かないわよ。こっちよ、こっち」
美神が指差す方向、そこにはまるで大型のオートバイのような形状をした魔法の箒、『カオスフライヤーⅡ号』があった。
「何時間も掛けて山を登るのは避けたいしね。空から直接向かうわよ」
そう言う美神はごく少ない荷物をポーチに入れ、腰に下げている。確かに余計な時間の浪費は遠慮したい。
「シロ、タマモ。悪いけど、アンタ達は動物の状態で布で私達の体に固定するわ。人型だ

と定員オーバーだし、留守番はしたくないんでしょ？」
「当然でござる！　横島先生の危機に、じっとしていられないでござるよ！」
「一人だけ置いていかれるのは嫌だしね。……何だかんだで横島には世話になってるし、私も行くわ」
二人の言葉に頷いた美神は大きめの布を用意する。運転を担当する美神がタマモを体の前に、大型犬に近い体躯を持つシロを背負う形でおキヌに固定する。
「重たいだろうけど、我慢してね」
「申し訳ないでござる、おキヌ殿」
「ううん、大丈夫だよシロちゃん。……美神さん、行きましょう」
美神に倣い少量の荷物をポーチに入れ、美神を促す。美神も頷き、二人はカオスフライヤーⅡ号に跨がる。ガレージのシャッターがゆっくりと上がっていく。
「それじゃ、行ってくるわ。お留守番お願いね、人工幽霊一号」
「――――お任せください、オーナー」
美神の言葉に、事務所に宿った霊的存在『渋鯖人工幽霊一号』が答える。
「それじゃ、妙神山に向けて発進！」
ガレージから飛び出したカオスフライヤーⅡ号は、風を切るような速さで空を行く。
それを見守るのは人工幽霊一号ただ一人ではない。

朝日は既に、顔を出していた。

日本のどこかに存在する霊能力者の修行場『妙神山』。
その門に取り付けられている鬼の顔、『鬼門』の二人は暇を持て余していた。
「……なあ、左の」
「……何だ、右の」
「……暇だの」
「……その話は何回目だろーか」
もはや数え切れぬ程に繰り返されているらしい。その原因は霊能力者として優秀な者達が、美神達を除いてとんと現れなくなったからだ。
偶にやって来る霊能力者は修行場に辿り着いた時点で完全に疲れきっており、鬼門達に軽くあしらわれる。ちゃんと体力を回復させてから臨む者も居るには居るが、それでも秒殺される程度の腕前でしかない。
妙神山修行場は世界でも有数の修行場の一つ。当然鬼門も修行場の門番としては優秀であり、彼等を突破出来るのは一流の証拠となる。

そんな一流が、自らの生死を賭けて修行をする場なのだ。鬼門からすれば、登山程度でコンディションを崩すような輩ははっきりと言って未熟者であると認識している。

――――しかし。

「……ん？　左の、あれは……？」

右の鬼門が目線で空の一画を示す。目線を追った左の鬼門が見たものは、太陽の光を反射し、キラキラと輝いている飛行物体だ。

「何だ、あれはもしやゆーふぉーとかいうやつではないか？」

「おお！　未確認飛行物体というやつだな、左の」

鬼門達がどこで知ったのかは定かではないが、徐々に現代の知識を吸収しているらしい。

鬼門達が見守る中、謎の飛行物体はぐんぐんと近づき、やがてその全貌を明らかにする。

「――――やっっっと着いたーーーー!!!」

鬼門達の眼前で停止する飛行物体。それは妙な外観の魔法の箒であり、それに跨がっていたのは鬼門達とも親交がある存在、美神令子達であった。

「おお、美神か！　久しいな」

「アンタ達もね、鬼門」

暇を持て余していた二人には嬉しい来客だ。例え美神がすぐに修行場の中に入ったとしても、自分達の上司である小竜姫に話を聞くことが出来る。何より美神が来るということは騒がしくなるということが、過去のデータから立証されている。

とある存在が現在妙神山に居ないのも、美神の来訪を喜ぶ理由だろう。

「お二人とも、お久しぶりです」

「おお、おキヌか。お前も来ていたのだな」

「実に久しぶりの来客だ。……ん？　どうやら、見慣れない者達が居るようだが。珍しいな、人狼に妖狐か」

鬼門は美神達との挨拶を済ませ、彼女達の胸や背中に固定されているシロとタマモに気付く。どうやら二人が妖怪であることも見破っているようだ。

長年門番をしていた経験が活きているのだろう。もしかしたら過去に人狼や妖狐といった犬神族が修行に訪れていたのかもしれない。

「案外聡いわね……。それより、私達を中に入れてくれない？　小竜姫に緊急の用事があるのよ」

「ふむ……」

不安げな表情をしているおキヌ達を代表し、美神が要件を告げる。美神の言葉に考えること数秒。鬼門は一つ頷くと、美神に声を掛ける。

「本来なら美神以外の者には我らの試しを受けてもらうところだが、今回は緊急の用事とのこと。分かった、入るが良い」

そう言って、門を開いた。途端に美神達の表情は明るくなる。それを見た鬼門達は、やはりと内心で呟いた。鬼門達は正確に読み取っていたのだ。普段通り冷静に振る舞っている、美神の内心の焦りを。

「サンキュー！　お礼に今度お酒をたんまり持ってくるわ！」

「ぬ!?　う、うむ。楽しみにしておく……」

口々に礼を言い、足早に門をくぐり抜けていく美神達を見送る鬼門達だが、彼等は美神の言葉に強い衝撃を受けていた。

あの美神が、自分達に礼を言い、あまつさえ酒を持ってくるという。

「……なあ、右の」

「……何だ、左の」

一流を超えた一流、美神令子。

「……一体何があったのか……？」

「……うーむ……」

その彼女がこれほどまでに精神を乱される程の緊急事態とは、どういうものなのか。

鬼門達はただただ首を傾げるのみであった。

美神達が門をくぐってしばらく、修行場の戸の前に立った美神はそれを開けようと戸に手をかけようとする。だが、それよりも早く戸は開き、中から修行場の管理人が現れた。

「おはようございます。お久しぶりですね美神さん、おキヌちゃん。……どうやら初めましての方も居るようですが、今日はどういったご用件でしょうか？」

凛としたたたずまいに全身から漲る竜気、神としての秘めたる、圧倒的な威圧感。一分の隙もない、シロやタマモがそう本能的に感じてしまうほどの存在。

それは武神にして竜神。『人間界』に存在する中では、最高に近い力を誇る神族。――

――小竜姫である。

「小竜姫！」

「小竜姫様！」

美神とおキヌは声を上げる。小竜姫はそれに微笑みを浮かべているが、やがて首を傾げたあとにキョロキョロと辺りを見回し始める。

「……どうしたのよ？」

「いえ、いつもなら横島さんが『神と人間の禁断の愛にぼかぁもうっ！』とか言いながら飛びかかってくるので……」

小竜姫は横島が飛びかかってこないことに疑問を覚えている。神がそうなるほどにまで飛びかかる横島という存在に、美神達は頭が痛む思いだが、今日はその横島に関して力を借りに来たのだ。そのことを思い出したおキヌは小竜姫に縋りつく。

「し、小竜姫様！　横島さんが……横島さんが大変なんです!!」

目に涙を浮かべ、必死に小竜姫へと訴える。その尋常ならざる様子に、小竜姫は顔をキリリと引き締め、美神に詳しい話を聞く。

その前にとシロとタマモは人型を取り、小竜姫と挨拶を交わす。二人共に恐縮しきった様子だが、小竜姫を見る目は強い。

美神から詳しい説明を受けた小竜姫は深く考え込む。

（……結果的に、あの子が魔界に行っていて助かりましたね。こんなことが知れたら、また修行場が全壊していたかもしれません）

小竜姫はその光景を思い浮かべ、顔を歪める。その様子を不安げに見ていたシロとタマモの頭を優しく撫で、小竜姫は柔らかく微笑んだ。

「大丈夫ですよ。横島さんはきっと無事です。今までどんなに絶望的な状況でも生還してきたのだから、今回も大丈夫です」

「し、しかし……」

「横島さんを信じてください。彼のことだから、きっと今頃『あー、死ぬかと思った』って言いながらピンピンとしていますよ」

尚も不安が募るシロに、小竜姫はそう語る。それは易々と思い浮かぶ、楽観的な想像だ。だが、それは確かに有り得ることである。通常ならば考えられないことなのだが、これも全ては横島だからか。

「私の友人に物事の調査が得意な者が居ます。現在妙神山には居ませんが、呼べば数分としない内に現れるでしょう」

その言葉にシロとタマモの表情が明るくなる。タマモはあまり表情を出さないようにしているが、小竜姫にはそれもお見通しだったようだ。

対照的に表情が優れないのは美神だ。小竜姫の言う友人に色々と振り回されたことのある彼女は、今回のことで役に立つのかどうか懐疑的だった。そんな美神をおキヌはとりなしているが、そんなことをするおキヌも多少はそう思っているのかもしれない。

「どうせならジークを呼んだ方が……」

「ま、まーまー。ヒャクメ様でも大丈夫ですよ、きっと」

小竜姫は後ろから聞こえてくる二人の会話には苦笑を浮かべるしかない。何故なら小竜姫自身もそう思っているからだったりする。

「では、ヒャクメを呼んできますね。美神さん達は居住区の居間で待っていてください。大丈夫、あの子だってやれば出来る子です。真面目にやれば大丈夫ですよ、きっと」

半ば自分に言い聞かせるように呟きながら小竜姫はその場を後にする。美神達は小竜姫を見送り、言われた通りに居住区の居間で待つ。そこには小さめのちゃぶ台と何枚かの座布団があり、彼女達はそこに腰を下ろした。

「……」

沈黙が場を支配している。普段元気が有り余っているシロには辛い状態だが、流石に今は騒ぐ気になれないのか、膝を抱えて大人しくしている。

沈黙が続く中、おキヌはその静けさに違和感を覚えた。いくら何でも、人の気配が無さ過ぎると。

「あれ……？」

「どうしたの、おキヌちゃん？」

美神はおキヌに問い掛ける。

「いえ、確か妙神山にはパピリオちゃんが居るはずですよね……？　そのわりには静か過ぎるような……」

「……そういえば」

おキヌの言葉に美神は頷く。彼女は見た目も性格も遊びたい盛りの幼い少女のそれ

と同じ。ここまで静かなのは考えにくいし、霊気を探ってみても彼女の巨大な魔力は感じられない。

「……誰？　そのパピリオって」

美神達の話に聞き慣れない名前が出たことで、タマモの興味を引いたようだ。見ればタマモだけでなく、シロも美神達を見ている。

美神とおキヌは思わず目を合わせたが、同時に頷くと美神が説明を始める。

「パピリオっていうのは、ここで預かってもらってる横島君の妹みたいな子よ」

「先生の妹、でござるか……？　妹御がおられたとは、初耳でござる」

「いや、今の口振りだと本当の妹ってわけじゃなさそうだけど。そんな子もいたんだ」

「……まあ、話すとかなり長くなるし、今は勘弁してね。何なら横島君が帰ってきてから話してもらえばいいし」

美神の言葉に二人は頷く。その光景を思い浮かべ、ぎこちなくだが笑みも浮かぶ。

「それにしても遅いわね。何やってんのかしら、小竜姫は」

「まあまあ、まだ二十分も経ってませんしそんなにカリカリしなくても――――」

――――瞬間、悲鳴が響いた。

「ひゃーーーー!?」

「っ!?」

悲鳴に反応し、美神達は立ち上がる。その声は待ち人であるヒャクメの声に酷似していたからだ。

「行くわよ！」

「はいっ！」

美神の号令に皆は頷く。居間を飛び出して悲鳴が聞こえた場所へと走る。先頭を行くのは犬神族の二人だ。

「ここでござるー！」

シロは襖を開け放つ。神族の家での振る舞いではないが、緊急事態なので許してはもらえるだろう。

そして、そこで見たものは。

「んなっ!?」

「ひ、ヒャクメ様!?」

目をぐるぐると回して倒れ伏しているヒャクメと、そのヒャクメの様子に泡を食う小竜姫だった。

そこは光に包まれた空間だった。
一体どこから光が放たれているのか、あるいは空間そのものが輝いているのか。とにかくそこは光に満ち、形ある物の輪郭を浮き彫りにする。
「……」
輝く空間の中央に、巨大な構造物があった。それは遠目には何やら茸のような形をしており、柄の部分はパイプオルガンのような構造をしている。そこには空間にも負けず光り輝く男が佇んでいた。
その背後、男と同様に輝きを放つ存在が現れた。
「――――ただいま、っと」
「ああ、お帰りなさい」
二人は挨拶を交わす。二人の語調には差異があり、後から現れた男の声は沈んでいた。
「その様子では、やはり間に合わなかったようですね」
「ああ……。ワシが駆け付けた時には『落ちて』いきよったとこでな。思わず涙ながらに敬礼してもうたわ」
冗談めかして語る男だが、それは言葉だけだった。彼から滲み出る気配は重く、語らずとも暗澹たる心情を表している。

「……ふう。まさか、こんなことになるとは思いませんでしたね、サっちゃん」
「流石になぁ。やっぱ、ことの発端はこれやろか、キーやん？」
サっちゃんと呼ばれた男、魔界の最高指導者は眼前の巨大構造物を見上げる。神界の最高指導者、キーやんもそれに続いた。
「劣化品とは言うても、やっぱ使うべきやなかったかな。この――宇宙処理装置（コスモ・プロセッサ）は……」
二人は無言で宇宙処理装置を見つめる。
二人……否、神界と魔界が宇宙処理装置を劣化品とはいえ組み直したのには、ごく単純な理由があった。
人間界に干渉可能なレベルの『神魔族デタント推進派』が、アシュタロスとの戦いで極端に減少したからだ。
人間界に干渉出来る神魔族は殆どが下級に属している。中には小竜姫や斉天大聖といった例外も存在するが、大きすぎる力によって宇宙のバランスを壊さないようにする為に配慮されているのだ。
しかしそれもアシュタロスとの戦いの後から激変。人間に祝福を与えるべき神族も、人間に適度な刺激を与える魔族も、人間界から姿を消してしまっているのが現状だ。
勿論全てが滅ぼされたというわけではない。寝返ったわけでもない。問題は、人間界

の方にあったのだ。

アシュタロスとの戦いは色々な者達に色々な傷を付けた。魔神という訳の分からない存在の恐怖。魔神という訳の分からない力の恐怖。

しかし、それ以上に顕著なのが神族への不信だ。

あの戦いの中、人々は口々に叫んだ。「神は我等を見捨てたのか」「これが神の意志なのか」と。神族への信仰が弱りだしたのだ。

これにより神魔族間のパワーバランスに変化が生じている。魔神と呼ばれ、魔界の六人の実力者に数えられるアシュタロスを失った『今』の魔界と同程度の力関係になるまでに信仰は低下しているのだ。妙神山で保護観察処分を受けているはずのパピリオがいないのも、これが理由である。

これを好機と見たのは神族のデタント反対派だ。人間の信仰の低下は魔族のせいであり、今こそ奴らを滅ぼすべきであると声高に叫ぶ。

当然それはすげなく却下されたのだが、次に標的とされたのは人間であった。

特にアシュタロスと戦ったゴーストスイーパーを例に出し、『金や煩悩にまみれた者達が魔族と心を通わせたのが間違いなのだ』『このように人間は簡単に邪悪に染まる。このままでは魔族の力ばかりが強くなる』と言って憚らない。

こういったものは唾棄すべき意見であるのだが、賛同する者が一定数存在するのもま

た事実だ。

特に今回の戦いで主流派であるデタント推進派の力は弱まっている。その焦りから一部の者達が目を付けたのが、宇宙処理装置であった。

完全に破棄される予定であったそれを回収し、徹底的に精査して様々な条件付けを施し、干渉出来るのは神魔族にとってはほんの些細な因果律。ただし、その範囲は人間界全土だ。それを以て人間達を導く……。はっきりと言えば、穴ばかりが目立つ。

しかし、宇宙処理装置の威力を知っている者からすれば、それこそ些細な問題だった。結局の所はデタント反対派の中の中立寄りの勢力が推進派に流れ、反対派が押さえ込まれる形で案が採用された。

宇宙処理装置の使用を強硬に反対していた神魔の最高指導部も、結局は折れたのだ。宇宙処理装置を使用出来るのは最高指導部だけ。それが決め手だった。

現在反対派は息を潜めている。今すぐどうこうしようという動きは無いようだ。それが百年保つか、千年保つか。これらのことを知るのは神魔族の上層部のみ。一介の調査官では知る由もないことだ。

「ワシらが宇宙処理装置で行ったんは、人間にささやかな幸福を与えること」

「今の駐留神族では、とてもまかないきれませんからね」

サっちゃんの言葉にキーやんが相槌を打つ。

「特にあの坊主……横島忠夫にはどえらい迷惑かけてもたからな」
「ええ……。だからこそ、宇宙処理装置の出番だったのですが……」
キーやんは表情に陰を湛える。今の人間界では、横島は良くも悪くも有名だ。
前者は高校生の少年でありながら単身敵地にスパイとして潜り込み、アシュタロスと最後まで戦い続けた英雄の一人として。
後者はゴーストスイーパーでありながら世界を裏切ってアシュタロス側に付いた、人類の裏切り者として。
当然横島のことは敵地から帰還した時から活躍を報じ、彼が英雄的偉業を成し遂げたことを広く流布している。
だが、彼がスパイ中に襲撃した人間の中に奈室安美恵やクワガタ投手といった著名人が混ざっていたのが不味かった。
奈室やクワガタは横島を擁護し、恨むどころか逆に尊敬しているとさえ言ってくれた。だが、ごく一部の『熱心なファン』はそれを『無理矢理言わされている』と感じたのだ。
横島は気付いていないが、彼は密かに警察やオカルトGメンに守られている。何度か襲撃も合ったようなのだが、いずれも未然に防ぐことが出来た。神魔の最高指導部はこれを重く見ていた。

今回の戦い、突き詰めれば悪いのはアシュタロスと、アシュタロスを止められなかった神魔族である。

大した力を持たないはずの人間、ゴーストスイーパー達が不甲斐ない自分達の尻拭いをしてくれたのだ。

特に、横島忠夫。彼の顛末を知る最高指導部はこれ以上彼に辛い思いをさせたくはなかった。だからこそ、宇宙処理装置を使って彼に『幸福の加護』を与えようとしたのだが……。

「まさか、『落ちて』いくとは思いませんでしたよ」

「……まるで、『こっちの世界』では幸せになれへんみたいな感じやな」

「思い当たる節はありますね……」

サっちゃんの憮然とした言葉に、キーやんは頷く。「劣化品だから、というのも否めませんが」とも呟いた。

「エネルギー源の『感情の結晶』の方はどうやったん？」

「何も問題はなし。本体含め、呪的トラップの痕跡もありませんでした」

感情の結晶。それは劣化版宇宙処理装置のエネルギー源だ。

世界中に散らばる悪霊の、『悪意』を抜き取り、浄化して純粋な感情エネルギーへと変えた代物である。純正の『魂の結晶』と比べれば出力は数段落ち、これも最高指導部が

使用を決定した決め手の一つでもある。
　本来悪意を抜かれた悪意は成仏して輪廻の輪に戻るのだが、いくつかの悪霊は成仏せず、心に刻まれた行動を繰り返す存在と化した。それはまるで『技術の化け物』に酷似しており、美神達が戦った忍者の悪霊もこれに当たる。宇宙のバランスを取るため、宇宙意志が介入したのだろうというのが最高指導部の予測だ。
「まあ、『落ちて』いったわけやからこの世界よりは神魔の支配率は低いやろうし、何よりワシが全力で祝福したから、幸運には恵まれるはずやけど……むしろ死者の蘇生とか極端な願い以外は叶うんちゃうか？」
「あの一瞬でよく出来ましたね。それならば少しは安心出来ます。向こうの世界の支配率が低いなら、この世界の私達の力は絶大な威力を発揮しますからね」
　神魔の支配率とは、言い換えれば信仰の度合いだ。この世界は神魔が人と共に在る世界であり、当然それに比例して信仰も厚い。現在は信仰が薄れていってはいても、未だに支配率は高いとも言える。
　逆に水が低きに流れるように、信仰が薄まれば支配率も下がる。
　横島忠夫という少年は神魔を知っているが、信仰はしていない。
　世界の『隙間』に飲まれた時、『落ちて』いったのはそういうわけだ。
「捕捉は出来てるんか？」

「一応……ですね。手出しが出来ない状況ですが」
「支配率が低いとはいえ、別の世界やからなぁ……。その分ワシの祝福は格段に効果を発揮するやろうけど……」
「そういった世界の場合、何らかの形で我々の世界より突出した何かがありますからね。ひとまずは今回の原因を調べないといけませんし、しばらくは様子見となりますか……」
キーやんの言葉が示す通り、今出来ることはそれしかない。神魔の最高指導者とはいえ、出来ることにも限りがある。それを痛いほどに理解している二人は溜め息を吐いた。
「……まあ、そういうことです。分かりましたか――――ヒャクメ？」
――――!?
この空間を覗いていた何者かの気配が、途端に大きく揺らぐ。
「アシュタロスとの戦いの功績があるから今回は大目に見たるけど、次やった時にはワシらが直々にお仕置きしたるからな。気ーつけなあかんでー？」
――――ひゃーーーー!?
キーやんに続いたサっちゃんは、この空間を覗いているヒャクメにちょっとした魔力をぶつける。それだけでヒャクメは気を失ったようだ。

「……まさか、覗かれるとは思わんかったな」
「ええ。彼女の能力を甘く見ていたようです」
目を回したヒャクメの様子に、二人の顔に苦笑が浮かぶ。困った部下だが、少し気分が軽くなった。
「横島忠夫……、彼はデタントの象徴とも言えます。私達としても、彼にこんな形で死んでほしくはありません」
「いつ頃になるかは分からんけど、必ず助けたるさかい、もうちょっと待っとってや」
キーやんとサっちゃんは横島を助けることを誓う。
人間を助ける為に神魔が手を取り合う。これもデタントの一つの形なのだろう。

ちなみに最高指導者達の会話を盗み見していたことがバレたヒャクメは、小竜姫によって未だかつてない、聖書級崩壊（ハルマゲドン）と錯覚せんばかりのお仕置きを受けた。

番外編

『神魔の裏事情』

～了～

第二十一話『横島、新たな目覚め……?』

暗い闇の中に、横島は居た。

まるで深い水底のような、暗く冷たい闇。

それは正しく暗闇だった。

だが、そんな空間にありながら、横島からは滾る煩悩と、そして悲しみと喜びの霊波が迸っている。

「うはははははは!!　極楽じゃーーーーーー!!」

横島は『彼女』の体を抱き締め、胸に顔を埋める。その双眸からは涙が溢れ、或いはそれを見せたくないのかもしれない。

「あったかいなー!　やーらかいなー!!　いーにおいだなー!!!」

「やん♪　もう、ヨコシマったら!」

彼は今この時が夢であると理解している。所謂明晰夢というやつだ。だからこそ、彼はもう逢うことが出来ない『彼女』と触れ合えている。

「ルシオラ……、ルシオラぁ……!」

横島は何度も最愛の彼女の名を口にする。そのたびに彼女は横島の頭を撫で、口付け

を落としていく。互いにその感覚に震える程に感動し、横島は彼女に存分に甘え倒し、ルシオラは彼を存分に甘やかす。

それは、二人だけの楽園だった。

他に誰も居ない、暗い闇の底。存在しないはずの『お邪魔虫』は、唐突にその姿を現した。

「――――その子だけじゃなくて、私のことも構ってほしいんだけどなー、横島君？」

現れた者。それは衣服とは言い難い程に布地面積が小さい服を着た、美神令子だった。穴とか食い込みとかが凄い服に、美神のグラマラスなボディが映える。

「勿論っすよ、美っ神さーーーーーーん!!」

「きゃあ♪」

「ちょ、ヨコシマぁ!?」

そんな格好の美神に誘惑されたのだから、横島が抗えるわけもなく。横島はあっさりとルシオラから離れ、美神へと抱き付いた。パチュリーには下品じゃない程度にセクシーなのが最高だと語っていたが、下品なまでにセクシーなのも好きなようだ。

「うはははは!!　チチー!!　シリー!!　フトモモー!!!」

横島はこれでもかと言わんばかりに美神の肢体に頬擦りをする。普段ならとんでもない折檻が待っているのだろうが、ここは夢の中だ。美神は嫌な顔一つせずに横島の行

為を受け止めている。
「こんな時にまでお前って奴は……!」
そんな横島を見て、情けないやら悔しいやらで奥歯を噛み締めるルシオラだが、むしろあの美神に誘惑されて靡かない横島は横島ではない。そう考えを改めて何とか平静を取り戻す。
「はい、横島君。美味しいバナナよ。あーんして?」
「はあーん!!」
しかし、ルシオラとしてはやはり面白くない。何だかよく分からない内に甘い空間を展開する二人に嫉妬の炎を背負いながら、ルシオラは横島達へと歩み寄る。
いつの間にかルシオラの服装は、美神と同じく露出度の極めて高い物となっており、手には皿に盛られたさくらんぼが乗っていた。
「ほ、ほーら、ヨコシマ。こっちのさくらんぼも美味しいわよー?　あーん、して……?」
ルシオラはおずおずと横島に手のさくらんぼを近付ける。
「おお、ルシオラ!　あー……ん、む!」
「あん♪　もう、そこはさくらんぼじゃないでしょっ?」
「へぶうっ!!?」
横島はルシオラが手に持ったさくらんぼではなく、胸の先っぽのさくらんぼを口に含

んだのであった。

そのせいでバチコーン！　と強烈なビンタを食らって首がゴキンッ！　と一八〇度捻転してしまったが、そんな程度で横島の煩悩は抑えられない。

「きやっ」

「よ、ヨコシマ？」

横島は二人をギュッと抱き締める。彼はいつの間にかド派手で悪趣味な装飾の玉座に腰掛けており、ルシオラと美神はそれぞれ横島にもたれ掛かる形となっている。

「ふ、ふひ、ふひひひひひ……」

横島の口から怪しげな笑いが漏れ、ついでに鼻からは鼻血がどっぱどっぱと溢れている。ルシオラは愛する彼の狂態にドン引きだが、美神はごろにゃんと彼の胸に擦り付いている。

その感触が引き金となったのか、横島は叫んだ。同時に煩悩パワーが空間を満たしていく。

「フハハハハハ!!　皆まとめてワイのモンじゃーーーーーーー!!!」

「ちょ、ええっ!?　な、何これ……!!?」

驚くルシオラが目にした物。それは自分達の周囲を覆い尽くす、自分達と同じ格好をした女性達だった。

「横島さん。フルーツも良いですけど、私達の料理も食べてください」
「おー!　おキヌちゃんに小鳩ちゃんに魔鈴さん!!」
そこには家庭的ながらも色鮮やかな料理が盛られた皿を持った、美しい女性達が居た。
「食べてばかりではいけませんよ?　適度に体を動かしませんと」
「おっほう……!　小竜姫様にワルキューレにベスパ!」
反対側からの声に視線をやると、そこにはスポーティーに引き締まった肢体を持つ美女達が居た。
「こういうのも青春よね、横島君!」
「勿論だぜ、愛子にマリアにヒャクメ!」
友達としての気安さの中に、熱い想いを秘めた美女達が居た。
他にも美衣が、グーラーが、メドーサが、迦具夜姫が、神無が、朧が、九能市が、ありとあらゆる美女達が居た。
「極楽や……!!　楽園や……!!」
横島は感激に打ち震える。視界の隅のシロとタマモとパピリオはなるべく見ないようにしながら。
右を見ても美女。左を見ても美女。前を見ても美女。後ろを見ても美女。周り全て

が美女。自分以外全てが美女。その全てが横島に熱い視線を送っている。
横島の理想郷がそこにはあった。
「うはははははははー!!　余は満足じゃーーーーーーー!!!」
煩悩に顔を歪め、横島は叫ぶ。
――その叫びを皮切りに、横島の周囲から一切の美女達が消えた。
「――あれ?」
静寂が横島を包む。
「ルシオラ?　ルシオラー?　美神さーん?」
先程まで存在した女性達を探す横島だが、ここには誰も居ない。
右を見ても誰も居ない。左を見ても誰も居ない。前を見ても誰も居ない。後ろを見ても誰も居ない。周りのどこにも誰も居ない。
――自分以外、誰も居ない。
それを認識した途端、横島の心を強烈なまでの孤独感が襲う。
「う……っ!　ふぐっ、う……っ、ううぅ……!!」
横島は止め処なく涙を流し、嗚咽する。ただ感情のままに、心のままに叫びを上げる。
「何でやーーーーーーー!?　夢ならもーちょっとワイに都合のえーようになってともえーやないかー!!　それともあれか!?　余は満足じゃとか言っちまったからか!?　あああ

そうやとしたらワイのアホー!!　もっとルシオラにえっちいことしとくんやった!!
大人の階段を上っとけば良かったー――――っ!!!」
うおォンと泣き叫ぶ横島は突っ込み所が満載な台詞を口にする。だが、今現在ここには彼以外誰も居ない。「せやけどそれはただの夢や」と突っ込んでくれる人は居ないのだ。
「……はっ！　まさか……!?」
ここで横島は何かに気付く。注目したのは先程のルシオラだ。
「まさか、ルシオラが持っとったさくらんぼはこの結果を暗に示しとったんか……!?　ワイにはチェリーがお似合いやとゆーことなんかー!?」
導き出した答えに横島は頭を抱える。本当に頭を抱えたいのはルシオラなのだろうが、残念ながら現在ここには横島のみ。当然他に誰も突っ込みは居ない……はずなのだが。
「――――そんなことはありませんわ」
唐突に響いたその声に、横島は誰が現れたのかを確認せずに飛びかかった。
「どこのどなたかは存じませんが、ここで会ったのも何かの縁!!　俺と熱い一夜を過ごしませんかー!?」
煩悩のジェット噴射で突如現れた『女性』に抱き付く横島。……それが、彼にとって

の間違いだとは気付かずに。

「……こんな私でも良いのなら、喜んでお受けします。……横島君」

「……」

横島の全身から冷や汗が噴き出す。その声、その口調。その持ち主が誰なのか、分かってしまったのだ。

横島は『女性』の胸に埋めていた顔をゆっくりと上げる。やがて視界に入った『女性』の顔は、横島の予想通りの人物だった。

幼い容貌ながらも遥か悠久を生きる、妖怪の賢者。八雲紫であった。

「……っ!?!!」

横島は紫から抱き付いた時と同じスピードで離れる。紫の格好が先程まで存在していた女性達と同じ物であったためか、見た目年齢が下の紫に対して煩悩が疼いてしまったからだ。

その勢いのせいか、紫は悲しげな表情を浮かべている。

「ゆ、ゆゆゆ、紫さん!?　紫さんが、何で……!?」

その質問はどういった意味だったのか。何故ここに居るのか、先程の言葉の真意か、その両方か、はたまた別の意味か。

「……私が居ては、駄目なのかしら……？」

紫の瞳が不安げに揺れる。それは横島に罪悪感を抱かせるのに十分な威力を持っていた。

「い、いやぁ！　んなこたないっすよ！　これは俺の夢だし、紫さん程の美少女ならむしろウェルカムっていうか！　俺はロリコンじゃないけど！」

もはや聞き飽きた感のある台詞をしっかりと主張しつつ、横島は紫を立てる。直後、背中に重みを感じた。

「紫が良いのなら、私が居ても良いわよね？」

突然発生した重さと柔らかな感触、そして甘い匂いと声に振り向けば、背には永琳が負ぶさっていた。

「え、永琳先生!?」

「はーい、その通り。で、どうなの？　居ても良いのよね？」

「ももも勿論です！　っていうかおっぱいが背中いや耳に息あああ……!?」

永琳は横島の耳に甘く息を吹きかけ、了承を得た。背中の感触から永琳もまた紫と同じ格好をしているだろうことが分かる。

「じゃあ私達も良いわよねー？」

「今度は誰!?」

横合いから聞こえてくる声にそちらを向けば、そこに居たのは紫達と同じ服装をした

輝夜、妹紅、鈴仙。その三人も永琳のように横島へと擦り寄ってくる。
「ほぁあ……！　さ、三人とも、っていうか皆その格好は一体どうして……!?」
横島はとりあえず一番気になることを聞く。これは横島の夢なのだから既に答えは出ているような物だが、一応聞いてみるようだ。
「それは、ほら。男の人ってこういうのが好きだっていうし……」
「横島が着てほしいって言うなら、私は、いつでも……、その……」
疑問に答えたのは鈴仙と妹紅だった。顔を赤く染め、視線を逸らしながらのその台詞に、横島の煩悩は否応なしに高まってしまう。
「だから、私達も着てきたのよ」
「……!?　ぱ、パチュリー様に咲夜さんに美鈴に小悪魔ちゃんまで……!?」
またも横合いから聞こえてきた声の方を向けば、そこにはパチュリーを筆頭に紅魔館の見た目年齢の比較的高いメンバーが居た。横島の煩悩が更に高まる。
周りを見回せば、いつの間に現れたのか文が、早苗が、神奈子が、幽々子が、藍が、横島の煩悩を刺激出来る者達が居た。
皆横島に触れ、恍惚の表情を見せる。横島はそんな彼女達に全身を刺激されながらも、「俺はロリコンじゃない」とお決まりのフレーズを唱えて耐える。その割に表情が崩れまくっているのはご愛嬌。

だがそれも長くは続かず、横島の煩悩はより膨れ上がっていく。何とか自らが煩悩を感じていることを必死に否定しようとしているが、このままでは行き場を失った煩悩がパンクをしてしまう。それを感じ取ったのか、横島にとっての救世主が再びその姿を現す。

「ヨコシマ……」

「る、ルシオラ……!」

ルシオラは笑顔だった。何となくこめかみや頬がピクピクと引き攣っているような気がするが、とにかくルシオラは笑顔だった。

横島は綺麗なはずのルシオラの笑顔に妙な迫力を感じ取るも、今自分が置かれている環境の方が不味いと考え、ルシオラに助けを請う。

「る、ルシオラ……!　た、助け……!?」

「ヨコシマ」

駄目だった。横島の言葉は途中で遮られ、ルシオラはにこやかに追い討ちをかける。

「お前と出会った時――私は生まれて一年も経ってなかったのよ?」

「今かよ!!　今このタイミングでそれを言うのかよルシオラーーーーーー!!!」

横島は頭を抱えて叫ぶ。どうやら横島の中の倫理観や正義に盛大な傷を付けることに成功したようだ。

そして横島の周りに居た女性陣は更に包囲を狭め、体の至る所に彼女達の手が伸びている。

「あ、ああー!?　いやあああー!!?」

まるで絹を裂くような叫びを上げる横島だが、それが女性陣のボルテージを上げていく。

「横島君」

「横島ぁ」

「横島さぁん」

周囲から響く、甘さを含んだ声。横島はそれに屈しないように踏ん張っているのだが、そこにルシオラから声が掛かる。

「ヨコシマ……頑張って！」

それは、ロリに堕ちまいとする横島に対する純粋な応援――などではなかった。

彼女の瞳が如実に語っている。振り向くなと。躊躇うなと。

「何を頑張れって言うんやあああああ!?」

ルシオラは何故かガッツポーズをしている。バチーンとウインクも決めた。

「あ、ああ!?　ワイは……、ワイは……!!」

世界に届けとばかりに、横島は叫ぶ。

「ワイはロリコンやないんやーーーーーーー!!!」

そして、夢の世界は光に包まれる。

「ワイはロリコンやないんかーーーーーーー!!?」

朝、いつもより遅く目を覚ました横島は覚醒と同時に何やら怪しげな叫びを上げていた。

どうやら夢の最後の叫びとシンクロしているようだが、寝ぼけてしまったのか一文字だけ変わってしまっている。

たった一文字変わるだけで正反対の内容になってしまうとは、日本語とは面白いものである。

「いやー、本当面白いよなーはははは……――なわけあるかいボケー!!?」

横島は比喩表現無しに火を噴いた。

(さっきの……、さっきの夢は何やったんや……?　あのルシオラも一体どういうことなんや……?)

一度思い切り悪態をついたせいか、横島はある程度冷静さを取り戻していた。

考えるのは先程の夢のこと。夢で見た物は全て覚えているし、あれが夢の内容を自分の思い通りに出来ると言われている明晰夢であったことも承知している。

だからこそ不思議なのだ。

（途中までは良い夢やったんやけどなー。まあ、後半が悪夢ってわけやないけど、思い通りやったってわけでもないし……）

横島は色々と考えを巡らせるが答えは出ない。今度永琳に夢について聞いてみようかと考え、シーツに手をつこうとする。

「……ん？」

手に触れた感触は、シーツではなかった。スベスベとしていながらも張りと弾力に富んだ、温かい感触。どことなく覚えがあるその小高い山の感触に、こめかみから一筋の冷や汗が流れ落ちる。

「……」

彼の霊感が告げている。決してそちらを見るなと。見たら不味いと。だが、今の横島にその霊感に従う程の思考は残っていなかった。

「んぅ……、あ……。ふ、ん……」

横島の手が無意識に、しかしその山の柔らかさを堪能するために優しく動いている。その動きに合わせ聞こえてくる、若干の痛みと甘さを滲ませた吐息混じりの声。

それらが合わさってしまった結果、横島はゆっくりと己の手が触れている『何か』を確認する。

視線の先、映ったそれは。

「――――……!!!」

たまたま大きめのパジャマを着た妖精メイドが、たまたま横島のベッドに潜り込んできており、たまたま胸元のボタンが外れて露出した胸に、横島の手がたまたま触れてしまっていた光景だった。ちなみに手は相変わらず胸を揉んでいる。

そう、無意識的に胸を揉んでいること以外は全て偶然であり、普段の横島であったならば「今後の成長に期待だな」と言って、特に平静さを失うことはないだろう。

だが、横島は先程の夢の影響によって幾分か気が逸っていた。加えて現在のシチュエーションに職場環境、生活環境のせいで溜まりに溜まった彼のリビドー。

――――横島は、ついに妖精メイド相手に邪な気持ちを抱いてしまった。

それを認識した瞬間、横島の中で何かが切れる音がした。

「横島さんおそいねー」

「ねー」

現在の時刻は朝の六時半頃。横島の普段の起床時間から一時間以上も経っており、いつも無駄に元気な姿を見せている彼に咲夜が何かあったのではないかと心配になったことから、妖精メイドを向かわせた。

ほどなく妖精メイド達は横島の部屋に到着し、咲夜から預かったマスターキーで鍵を開けようとしたのだが、それよりも早くドアが内側から破壊された。

「ひゃーーーーーー!?」

妖精メイド達は驚き、尻餅をついてしまう。一体何があったのかと部屋の入口を見れば、何やら酷く憔悴した姿の横島が丸太を抱えて姿を現した。どうやらその丸太でドアを粉砕したらしい。

「ねーちゃん……、ねーちゃんはどこや……。もう禁欲なんて止めてやる……。ねーちゃんを、ねーちゃんをよこせ……!」

ふらふらとしながらも、やけにギラギラと光を放つ瞳に理性の色は乏しい。妖精メイド達はまるでライバルの階級が自分よりも下だったが為に限界を超えた減量をしているボクサーのような横島の姿を見て、慌てて駆け寄った。

「ど、どうしたんですか横島さん!?」

「なにかあったんですかー!?」

横島は妖精メイド達の言葉には答えない。ただうわごとのように「バインバイン……ねーちゃん……バインバイン……」と繰り返している。

「一体何があったの、貴女達!?」

妖精メイド達の叫び声が聞こえたのか、咲夜がその場に現れた。

それだけではない。パチュリーを始め、美鈴、小悪魔、永琳、輝夜、鈴仙、妹紅、紫という横島の煩悩を刺激出来るメンバーが何故か都合良く（悪く）現れたのだ。ついでにレミリア達ロリ組も。

「……」

横島はそこに集まったメンバーに、ゆっくりと視線を向ける。横島は妙に無表情であり、その様は皆にちょっとした、ある種の恐怖を感じさせた。眼前の光景と夢の光景が重なっていく。

「ふ、ふふふ……。ふふふふはははははは……!!　はははははははははははは!!」

突如、横島は右手で顔を覆い、高笑いを始める。相変わらず視線は咲夜達を向いており、一層の恐怖感を煽る。

「そうだ……。皆こう見えて人間の俺なんかよりずっと年上なんだよな……」

横島が呟いた予想外の言葉に幾人かは危機感を覚え（性的な意味で）、幾人かは目を輝かせる（性的な意味で）。

「年下のガキに子供扱いされるとか、屈辱を感じてたんだろうなぁ。俺は今まで本当に失礼なことをしてたんだろうなぁ。それもこれもロリはあかんっていう世間一般の考えがあかんねやろなぁ。そういった価値観の押し付けやら何やらが間違った、もしくは偏った認識を植え付けて自由な恋愛とか付き合いとかが出来んよーになって……」

横島はぶつぶつと呟きながら咲夜達にゆっくりと歩み寄っていく。その様子に気圧されたのか、皆は横島の寄った分下がってしまう。

「そうだ、どこもおかしくない。俺が皆に惹かれたのは皆がロリだったからか？　違う、皆がいい娘達ばかりだからだ。たまたま惹かれたのが見た目ロリっ子だっただけ！　そうだ！　間違っているのは俺じゃない、世間の方だ!!」

そして再び高笑い。そんな横島を皆は困惑の眼差しで見ているが、幾人かは痛ましげに眺めていた。

「横島……。ついに弾けちゃったか……」

「そりゃ四六時中女の子に囲まれてたら溜まる一方だろうしねぇ……。皆人間じゃないから匂いにも敏感だし……」

「煩悩の発散が出来ない、と……。やっぱりやりたい盛りにここの環境は辛いか……。それにしてもあの丸太、吸血鬼であるこの私に異様なプレッシャーを掛けてきてるわね……」

レミリアとパチュリーは達観した様子を見せている。今後妖精メイド達に自重を促すかを検討し始める。丸太を気にしながら。

「――――という訳で!!」

「っ!?」

一体何がどういう訳なのかは定かではないが、横島はやたらと光輝く視線を咲夜達に向ける。

「新たな扉を開いた俺に死角無し!!　皆、俺と一緒に今日はノンストップ・ランデブー!!」

「どういうことーーーーーーー!!?」

横島は意味不明なことを叫びながら丸太を放り出し咲夜達に飛びかかる。半分の者は突然の展開に混乱しており何も出来ない。代わりに正気を保っていた咲夜が横島を迎撃しようとナイフを取り出すが、それは紫と永琳によって遮られる。

「二人共……!?」

「おお!　紫さーーーーん!!　永琳先生ーーーー!!」

紫と永琳は皆より一歩前に出る。

「永琳なら、横島さんがどんな非常識な動きをしても対応出来る!」

「さらに紫のスキマを使えば、横島の異次元の動きも封殺出来る!　攻守において完璧

だ！」

何故か輝夜と妹紅が代表して解説をする。本来ならば二人の言うように横島は何も出来ないのだろう。だが――。

「――あれ？」

横島は戸惑ったような声を上げた。周りの皆もそうだ。しかし、それも仕方がないだろう。何故なら横島は二人に撃墜されずに、優しく、抱き留められているのだから。

「こんなになるまで我慢して……。辛かったわね」

「でも、もう大丈夫です。何も心配することはありませんわ」

横島の左右の耳に、小さな、しかしはっきりと聞き取れる声で二人は甘く囁く。

「私達なら大丈夫だから、ね？」

「横島君が望むのなら、だけど……もし、そうであるなら」

――今夜、部屋に行くわ。

「――っ!?」

二人の言葉を理解した途端、横島は二人から猛烈な勢いで身を離す。

「い、いや、俺は別に……！　そんなつもりでなくて、いや、その気やったけど！　皆可

愛いし、俺はそうじゃない、いやちがくて、違う、俺は本気……!?」

横島はしどろもどろになりながら話すが、もはや意味の分からないものとなっている。言っていることが見事に『バラバラ』だ。やがて横島はぶるぶると体を震えさせたかと思うと、両目から滝のように涙を流して走り去っていった。

「違うんや～～～～～!!　ワイはロリコンやないんや～～～～～!!」

その後ろ姿を見送る皆の視線はやはり困惑に満ちていた。

「……結局、何だったのかしら?」

鈴仙の言葉に返せる者は誰もいない。

「しかし、さっきの二人は見事だったな。敢えてノってみるとは思わなかった」

「あ、確かに」

話題は紫達の行動、そして横島の反応へと移った。

「それにしても横島の奴も厄介な反応をするわね。自分から突っ込んできて受け入れられたら逃げ出すとか……」

パチュリーは呆れたように感想を述べる。実際横島に特別な感情があるわけではないが、女としてはやってられないのだろう。

「でも、これではっきりしたことがあるね」

てゐがにんまりと笑いながら会話に入る。皆はてゐに催促の視線を送り、続きを促

す。

「間違いないね。執事さんは……童貞だよ。じゅるり」

てゐはよだれを拭いながら断言した。

「え、普段あれだけねーちゃんねーちゃん言っておきながら？」

「だからこそだよ。私の調べでは執事さんの好みはナイスバディで気の強い、守銭奴でSっ気がありつつも子供っぽいところもある意地っ張りで我が儘なお姉さん。更に執事さんにはちょっとしたマゾっ気があるみたいだからね。普段の言動はともかく、無意識下ではリードされたいとか思ってるんじゃないかな？」

「てゐ……、あんた……」

一体いつの間にそれほどまでに詳細に好みを調べたのか、戦慄する鈴仙。

「更に執事さんが一瞬だけ見せたあの『表情』……！　あれはいざえっちなことが出来ると分かって、でもそれに対する期待よりも初めてという不安の方が大きくなってしまって怯えてしまった表情だよ……!!　良いねえ執事さんじゅるり！　今晩あたり本当に誘ってみようかなぁじゅるり！」

「……ああ、うん。女の子がそんなによだれを垂らすのはどうかと思うわよ、てゐ？」

鈴仙は本格的にてゐが怖くなったのか、少々虚ろな目でてゐを諭す。

皆の目は盛り上がるてゐに向いていたので、誰も気が付かなかった。紫と永琳が、酷

く深刻な表情を浮かべていたことに。
「永琳……」
「ええ……」
二人は頷き合う。あの時横島が見せた、一瞬の怯え。それはてゐが語る理由では、断じてない。
性行為に関することであることは確か。では一体何が彼に怯えを抱かせたか。女性？　性行為そのもの？　自らの体？　血筋？　受精？　産まれ来る子供？
判断材料はまだまだ乏しい。だが、彼女達にも分かったことはある。今回のこととは無関係かもしれないが、彼の根に関わること。
「横島君のあの様子……」
「……元の世界でメンタルケアを『されなかった』のではなく、ケアが『出来なかった』のかもしれないわね」
二人は横島について、更なる予想を組み立てていく。それらは半ば確信へと変わっていったが、横島が戻ってきたことにより思考を中断した。
「あ、横島さんが帰ってきた」
「うわ、凄いしょんぼりとしてとぼとぼ歩いてる」
「執事さん……可愛いなぁ！　ほんともうたまんないよ!!　優しく手解きをしてあげた

い!!」

「てゐ、あんた……」

横島はやや猫背気味に、涙の跡を隠さずに帰ってきた。そのままレミリアの下まで行くと、手に持っていた新聞を渡す。

「これ、今日の朝刊っす……」

「あ、ああ、うん。ありがとう」

横島はそのまま緩慢な動作で粉砕したドアの修理にかかる。彼の背中から迸る哀愁に、皆は痛ましげな視線を送る。

「……」

特に真剣な眼差しを送っていたのは妹紅だった。妹紅は先程の横島について考えている。

即ち、「どうていって何だろう?」と。

(どうてい……。てゐや鈴仙の話からすれば、それは何か横島にとって不都合な物らしい)

知らないということは、不幸なことだ。

(もし私が横島の『どうてい』とやらをどうにか出来るんなら、手伝ってやりたいもんだけどなぁ。色々プレゼントしてもらったし。お礼のお礼ってのも変な感じだけど、私も

何だかんだで世話になってるしなぁ）

知らないとは、本当に不幸なことなのだ。妹紅は後に恥ずかしい思いをするのだが、それはまだ未来の話し。

「こ、これは……!?」

その時、レミリアの声が響いた。皆は何事かと一斉にレミリアを見る。レミリアは新聞を見て、わなわなと身を震わせている。

「ちょ、どうしたのレミリア？　……って、これ……！」

輝夜はレミリアが見ている新聞、『文々。新聞』を覗き見る。その一面記事にはこんな見出しがあった。

『一体何があった!?　荒れ果てた博麗神社!!』

そこは朝であっても薄暗く、そこには数え切れない程の茸が生息しており、その茸が魔力を高めるとして魔法使いが住んでいる。

そこは魔法の森。その森の入り口に、一つの店があった。そこでは魔法の道具、普通の道具、冥界の道具、そして外の道具と、あらゆる道具が集まる店。

名を『香霖堂』という。

その香霖堂の生活スペースで何やら作業をしている男性が居る。店の主、森近霖之助だ。

「……ふう。やっと直ったか」

霖之助は修理に使っていた道具を片付け、完全に修理を終えたその道具を手の中で弄ぶ。

それは小さいながらも山一つを焼き払える大火力を引き出せる魔理沙に贈った彼の自信作、ミニ八卦炉だった。

霖之助はミニ八卦炉を手に香霖堂の商業スペースに移動する。依頼された修理も終わったことだし、後は魔理沙が取りに来るのを気長に待つだけだったのだが、相手は予想以上にせっかちだったようだ。

「よう、香霖。お邪魔してるぜ」

「魔理沙、来てたのか」

片手を上げて霖之助に挨拶をしたのは白黒の服を着た魔法使いの少女、霧雨魔理沙。霖之助は魔理沙と古い付き合いであり、今更勝手に店に入ってきていたぐらいでは文句

も出ない。諦めたとも言えるが。

しかし、そんな霖之助も魔理沙がその手に持っている物を見ては文句も言いたくなる。

「また勝手にコーラを飲んでるのか。いい加減商品を勝手に消費するのは止めてくれないか?」

「良いじゃんか。減るもんじゃないんだし」

「君が飲めば飲んだ分だけ量が減るし、何より僕の儲けが減る。減ってばかりじゃないか」

「量はともかく儲けは変わんねーだろ? そもそも客なんてほとんど居ないも同然なんだし」

ああ言えばこう言う。結局霖之助の儲けは減っているのだが、これ以上言ったところで何も変わらないだろう。霖之助は溜め息を一つ吐き、魔理沙にミニ八卦炉を手渡した。

「ほら、これ。修理するのも大変だったんだ、もう無茶な使い方はしないでくれよ?」

「おー、サンキュー。無茶な使い方って言うけどさ、あの時はああするしかなかったんだから仕様がないじゃないか」

魔理沙はミニ八卦炉を懐に入れつつ、唇をとがらせて文句を言う。しかしそれは霖之

助には通じなかった。

「あのな、魔理沙。君はこの幻想郷の地脈の力を撃ち出したんだぞ？　そもそも地脈というのは大地に流れる気の通り道のことを言うんだが、これは現在外の世界ではあまり浸透していなく、或いは廃れてきている概念だという。つまりはそれだけこちらの影響が強いということだ。更に言えば地脈には別の呼び名があり、それを龍脈という。この幻想郷の最高神は何か知っているか？　そう、龍神だ。龍神と龍脈、僕はこの二つが何か関わりがあると考えているんだ。そもそも龍神が現れたのは……」

霖之助は両手を広げ、魔理沙に対して蘊蓄と推論を話す。もはやその目には魔理沙は映っておらず、どちらかと言えば普段から考察していたことを聞いてもらいたかったのかもしれない。

霖之助は気分が乗ってきたのか魔理沙に背を向け、大演説を続けている。普段の姿からは想像がつかない熱の入りようだが、それに応えられる者は居ないのだ。

「分かったかい？　分かったら今後無茶なことはしないように。それからミニ八卦炉の修理代を……」

霖之助が振り向いた時、もはや店内には彼一人しか居なかった。魔理沙が居た名残は、空になったコーラの瓶だけである。

「……」

そろそろ本気で怒った方が良いのだろうか。そんなことを今更ながら考える霖之助は、魔理沙には甘いようだ。

「相変わらずだなあ、香霖は」

魔理沙は炭酸でやや膨れた腹をさすりつつ箒で空を飛んでいる。

「ミニ八卦炉も帰ってきたし、この後はどうしようかな」

魔理沙はひっくり返ったり回転したりしながら頭を捻る。特に意味は無いのだが、良い考えが浮かぶのかもしれない。

「うーん、そうだな。最近顔を見てないし――霊夢のとこにでも行ってみるか」

魔理沙は進路を変更し、一路博麗神社へと向かう。

『横島、新たな目覚め……?』

〉
了
〉

第二十二話『高島』

穏やかな朝という時間、その静けさを物ともせずに空を飛び、博麗神社へと向かういくつもの影があった。

それは悪魔の館、紅魔館から飛立った者達であり、その内訳はレミリア、咲夜、紫、横島と一号達三人の妖精メイド。

最初横島はそのまま執事の仕事を続けようと思っていたのだが、何故か博麗神社のことがやけに気に掛かり、結局はついて行くことにしたのだった。恐らく、霊感が働いたのだろう。

一号達は未だ空を飛べない横島の付き添いとして、いつも通りに彼を抱えて飛んでいる。

「ごめんなー、いっつも重たい思いさせちまって」

横島は申し訳なさそうに一号達へと謝罪をする。だがそれは、彼女達にとっては何の痛痒も感じないことなのだ。

「私達もいっつも言ってますけど、ぜんぜん大丈夫ですよー？」

「気にしない気にしなーい」
「……それに、これは役得でもあるし」
一号と二号は笑顔で横島に答えるが、三号は少し違った。現在、一号と二号は両腕を抱え、三号は彼を後ろから抱きかかえる形で空を飛んでいる。三号は横島の頭に顔を埋め、その匂いを堪能しているのだ。
「あー、三号ずるいー」
「私もー」
三号の行動を見た一号と二号は同じように横島の体に顔を埋め、胸一杯に横島の匂いを嗅ぐ。
「ちょ、お前らやめろって……！」
横島はくすぐったいのか体を捩る。しかし一号達はその反応が面白かったのか、更に強く体を寄せた。
「そこまでにしておきなさいな」
紫が三人を窘める。三人がふざけていたせいで、レミリア達はずっと先の空を行っているのだ。
「あまりふざけてばかりじゃダメよ？　特に横島君はまだ満足に飛べないし、誤って落としてしまったら大惨事になるわ」

「ごめんなさい……」
　一号達は素直に謝る。その時、視界の先に博麗神社が見えてきた。
「あ、見えてきた……、ん?」
　横島は未だ遠い博麗神社と共に、視界の隅に人里を認める。そして、またもや霊感が鎌首を擡げるのを感じた。
「……紫さん、先に行っててもらえますか?」
「え?　別に構わないけれど……。何かありました?」
「いや、大したことじゃないんすけど……、ちょっと霊感が働きまして」
　そう言って横島は曖昧に笑った。ゴーストスイーパーとしての彼の直感、霊感は侮りがたい。今回も何らかの危機を察知したのであろう。
「……貴方達だけで大丈夫なの?」
「ええ、多分問題ないっす」
　紫の問いに横島は頷く。彼がそう断言しているのだ、本当に大丈夫なのだろう。紫は横島に一つ頷いた。
「では、私も先に行きます。貴方達もあまり遅れないようにね」
「了解っす。……皆、一度人里の方に向かってくれ」
　横島達は進路を変更し、人里へと向かう。紫は横島達が人里で何をするのか気になっ

たが、それも一瞬のこと。関心の全てはすぐさま霊夢へと向かう。
「……無事なのは、分かっているのだけれど」
紫は首を振り、速度を上げて博麗神社へと急ぐ。

「それで、ここでなにをするんですかー？」
一号は横島を見上げ、問い掛ける。横島は「ん～……」と唸り、曖昧に答える。
「あー、食料調達……かなぁ」
「食料……ごはんですか？」
横島の答えに一号達は首を傾げる。答えた横島ですらよく分からないという表情をしているのだ。一号達に理由を察せというのも酷な話であろう。
「それで、なんでごはんがいるの？」
二号の問いに、たっぷり十秒程空を見上げた横島は自信無さげに答える。
「……勘、かな？」

一方、博麗神社に到着したレミリア達は絶句していた。石畳は罅割れ、至る所雑草が生え、場所によっては穴があいたり捲れて吹き飛んでいる所もある。
「これは、一体……」
咲夜その惨状に息を飲む。辺りを見回すが、いっそ無事な部分を見つける方が難しい。
「……」
レミリアは何か思うところがあるのか、その光景をじっと見つめている。それから数分が経ち、紫が到着する。
「お待たせ」
「ん、ああ……」
レミリアは紫に頓着せず、変わらず荒れ果てた境内を見つめる。紫もレミリアの態度を気にせず、彼女に倣い境内を見る。
「……」
ここで、紫に変化が表れる。こめかみから一筋の冷や汗が流れたと思ったら、それは

ダラダラと流れ落ちていき、瞬く間に全身を濡らしていた。
「ちょ、どうしたの？」
「……、えっと」
その分かりやすい変化からして紫が関わっていることが理解できる。そういえば、石畳にある穴はかなり見覚えがある。しかし、レミリアが答えに辿り着く前に、この荒れ果てた神社の巫女が現れた。
「……誰？　参拝客？　……素敵なお賽銭箱は向こうよ……？」
まずオーラが違った。まるで覇気がなく、声には張りがない。次に表情が無い。もはや仮面の付喪神の方がよほど愛想がいい。そして眼だ。濁っている。澱んでいる。一切の光を放つことなく、見た者を取り込んでしまいそうだと錯覚する程には昏い。
「れ、霊夢!?　ちょ、大丈夫なの!!?」
その変わりぶりにレミリアも冷静ではいられなかったのか、霊夢へと駆け寄る。咲夜も後に続くが、不思議と紫はその場に佇むだけである。しかしレミリア達は気付くことなく、力無く力こぶを作る霊夢に懸かりっきりだ。
「……あー、レミリア？　大丈夫大丈夫。私はこんなに元気ー、いっぱいよー……」
「むしろいっぱいいっぱいでしょーが!!　とにかく何があったのかを説明――――？」
ふと、霊夢の視線が一点に集中する。何かと思い視線を追えば、そこに居たのは大き

な荷物を背負う横島と、それを支えて空を飛ぶ一号達。そして途中で出くわしたのか、箒に跨った魔理沙であった。
「ふ、ふふふふふふふ……」
「れ、霊夢……？」
突如として怪しい笑い声を上げる霊夢。眼には異様な輝きが宿り、瘴気が体から噴出する。
「れ、霊夢さーん……？」
そして、霊夢から霊波を伴う輝きが放たれる。
「ちょっ!?」
「――――霊符『夢想封印』!!!」

「しかし、久しぶりだな。魔理沙ちゃんは元気にしてた？」
「おー、いつも健康的に不健康だぜ。それより私のことは呼び捨てで頼む。何かちゃん付けってこそばゆくてこそばゆくて……」
「ははは、了解」

魔理沙とは人里で偶然に出会った。霊夢に久しぶりに会うからと、酒を調達していたようだ。年齢的に外の世界ならばありえないことだが、幻想郷では割と良く見られる光景である。

「そういや、そっちは紫と一緒だったんだろ？　ならスキマで移動したらもっと早く行動できたろーに」

「あー、紫さん、俺を気にしてくれてるみたいでさ。また何かあったらいけないからってスキマは使わなかったんだよ。……ま、そのかわりお嬢様にはあんまり良い顔はされなかったけどな」

「……ふーん」

魔理沙は納得したように頷く。それと同時に、横島に対する認識を改めていた。彼は『あの』紫に慮られ、『あの』レミリアに非効率を許されている。余程気に入られているのだろう。自分ではとてもこうはいかない。

「横島って結構……ん？　何だ？」

魔理沙の視界の先、博麗神社にて突如霊波を伴う輝きが発せられる。それは記憶にあるものよりは劣るが、魔理沙にはその光景に見覚えがあった。

「おいおいおい、マジか!?　こりゃ霊夢の……!!」

「な、なんじゃーーーー!?!!」

迫りくるはいくつもの光輝く霊力の球体。それは全てが横島を標的にしているのか、まっすぐに飛来する。その速度は中々のもので、瞬く間に彼我の距離が縮まっていく。
「き、緊急回避ーーーーーーーー!!?」
「は、はいーーーーーーー!!?」
咄嗟に口から出た指示を忠実に守った一号達は、何とか初撃を回避することに成功した。だが、光弾はなおも迫る。横島は右掌に霊力を集中させ、霊気の盾を作り出す。
「スペシャル・ファイヤー・サンダー・ヨコシマ・サイキック・ソーサー・プラズマ・ストライク……!!　略してサイキックソーサー・プラス!!」
横島から放たれた半球状の盾はそのまま光弾に命中し、爆発。それは残る全ての光弾をも飲み込んだ。
「うげ、こっちも色んな意味でマジか……!?」
魔理沙は横島が無造作に作った盾の威力に驚愕する。普段よりかなり弱々しいとはいえ、彼が吹き飛ばしたのは霊夢の切り札の一つである。そのやけに長い技名や威力に魔理沙は納得する。
「レミリアが気に入るわけだぜ……」
それは若干の勘違いが混ざっていたが。
「防ぎやがったわねーーーーーーー!!!?」

神社から怒りの咆哮が木霊する。それにはおどろおどろしいまでの怨念が感じられた。霊夢の瞳が更に怪しい光を放つ。

「しかし、そう簡単には逃がさないわ!!　喰らいなさい、夢想天――――」

「おやめなさいな」

「あふん」

霊夢は紫に延髄を扇で『トスッ』と打たれ、あっさりと気絶した。

「で、何であんなことをしたの?」

現在霊夢は皆に囲まれて正座をしている。霊夢を問い詰める紫の視線は少々強い。いかなお気に入りの霊夢とはいえ、今回のことは看過出来ないのだろう。

「だって、そいつが……!!」

「え、お、俺……?」

霊夢は横島をギンと睨み付ける。身に覚えの無い横島はうろたえてばかりだ。

「……横島さんが何かしたの?」

横島が霊夢に対して何かをしでかすとは思えない咲夜が霊夢に問う。霊夢はその質問に涙目になりながら答えた。

「だって、あいつが墜落して石畳に大穴が空くし、次に来たときには霊気の爆発で境内は滅茶苦茶になるしーーーー!!」

「……ああ、何か見覚えがあると思ったらそれか。スッキリした」

「こっちは踏んだり蹴ったりよー!!　こういうときに頼りになる萃香はどっかに遊びに行ったまま帰ってこないし、業者を呼ぼうにも妖怪がどーたら安全がどーたらで滅茶苦茶吹っかけられるし、自分でやろうにも技術もなければ道具もお金もないしーーーー!!　うわあああああああああん!!!」

レミリアの言葉に何かが切れたのか、霊夢は大泣きしてしまう。それにより紫は説教をすることが出来ず、横島は霊夢に対して精一杯の土下座をしていた。

霊夢が泣き止み場が落ち着いた頃、霊夢の腹から少々大きな音が鳴る。見れば彼女は顔を赤く染めており、空腹からくるものだと分かる。

「巫女さん、腹減ったの？」

「……るっさいわね。ここ最近まともに食事が出来てないんだからしょうがないでしょーが」

横島のデリカシー皆無な発言に霊夢はまた機嫌が悪くなるのだが、次の横島の行動でそんなものは吹き飛んでしまった。

「いやー、俺の霊感も馬鹿にならねーな」

そう言って横島は背負っていた荷物を降ろし、中身を晒す。そこにあったのは米・肉・魚・野菜・塩・砂糖・醤油・味噌……色々な食材と調味料が大量に入っていた。

「こ、これは……？」

霊夢は食材から目を離さずに問い掛ける。よだれも垂らしているが、誰も突っ込みはしなかった。

「ああ、何となく買ってきた方がいいかなーと思ってさ。とりあえずは迷惑料としてお納めください」

横島はその大量の食材をズイと霊夢に差し出した。横島には存外に浪費家な一面もあるようで、普段の彼ならば自分の煩悩を満たす物品を買っていそうなものではあるのだが、大人の本を買おうにも煩悩を発散することが出来ない紅魔館の生活では、余計にフラストレーションが溜まってしまう。

そういう訳で横島は自分の為にお金を使うことが少なくなっている。悲しきは女性（ロリ）に囲まれた生活。横島は順調に崖から転がり堕ちている。

「良いの？　返さないわよ!?　全部もらっちゃうわよ!!?」

「良いんだってば」

霊夢の様子に横島は苦笑しきりだ。

「そんじゃ、俺は境内の掃除をしてくるから」

横島はよいしょと立ち上がる。
「え？　い、良いの？」
「まあ、元はといえば俺のせいだしな。道具は無いけど、まぁ何とかしてみるよ」
霊夢に手をひらひらと振りつつ、横島はその場を離れる。レミリアは横島を見て一つ頷き、咲夜に命令をする。
「咲夜、霊夢に食事を作ってやんなさい。最近まともに食べてないって言ってたから、胃に優しいのをね」
「かしこまりました、お嬢様」
「!?」
霊夢はよほど驚いたのか、かなりの勢いでレミリアへと振り向く。
「私の執事が原因だからな、これくらいはするさ。ただし食材はあれを使うが」
レミリアが指を差すのは横島が用意した大量の食材達。もちろん霊夢に否やは無い。霊夢は首をぶんぶんと縦に振った。
「ふう……」
皆の輪から抜け出た横島は安堵の溜め息を吐いていた。
（危ねえ危ねえ。あのままあの場に居たら俺の中の『野生』が解き放たれていたとこだった）

現在の横島はある意味非常に危険な状態だった。それこそかつて言ったように、『ロリコンになってしまう』かもしれない程に。まあ、今の横島は二歩～三歩手前といったところか。なので早急にあの場から離れる必要があったのだ。

「さって、まずは何をしよーかね」

しかし、横島の思惑がどうであれ、そう上手くいくことなど滅多に無い。

「私も手伝うわ、横島君」

「――――え？」

横島が振り返った先、立っているのは紫だった。

「この博麗神社の惨状は横島君だけのせいじゃなく、私のせいでもあるから……。私も、一緒に良いかしら……？」

「……はぁい、よろしくおねがいしまぁす」

横島が涙目になったのは、気のせいではない。

「――――満腹だわぁ……」

霊夢は神社の生活スペースの縁側で食後のお茶を飲み、満足げに息を吐く。心なしか肌のつやも良くなったようだ。

「今なら何でもしてあげられる気分だわ……」
「ん？　今何でもするって言ったよな？」
「お嬢様、落ち着きますよう」
　レミリア達が暇を持て余して戯れ始めた頃、横島が戻ってきた。
「戻りましたー」
　横島は額の汗を拭い、爽やかな笑みを浮かべている。体を動かしたせいか、堕ちようとした煩悩が紛れたのかもしれない。
「もう終わったの？」
　霊夢がひょいと境内を見れば、それはもう完全に綺麗になっていた。
「ちょ、ど、どうやったの!?」
「あー、紫さんが道具を出してくれてさ。俺って昔土建屋でバイトしたこともあったから、それで。まあ、ほとんど紫さんがスキマを使って何やかんやしてくれて……」
　横島が言った土建屋のアルバイトとは、とある理由で全壊した妙神山修行場の建て直しのことである。当時生活が苦しかった横島は、生活費を稼ぐために残ったのだ。そのときの経験が活き、紫のスキマと合わさり驚異的なスピードで処置を終えた。相変わらず変なところで規格外な男である。
「いやー、たまにはこういうのも良いもんすね。今度道具を買い揃えてみよーかな」

昔から手先が器用で色々な工作をしていたことから、横島は何かを作成したり整えたりすることが好きなのだろう。彼の表情は年齢よりも幼く、可愛らしく見える。
「そういうことなら良い店を知ってるぜ。今度案内してやろうか？」
「お、マジで？　お願いしよーかな」
「おう、任せとけ」
横島に提案したのは魔理沙だ。彼女には彼女の思惑があってのことだ。
（平行世界の住人である横島を紹介すれば、香霖の機嫌も直るだろ）
その思惑は非常に情けないものであった。
「紫も、ありがとうね。やっぱり最後に頼れるのは紫だったんだわ……！」
「うふふ、そんなことはないのだけれどね」
紫は霊夢に感謝されてご満悦だ。笑顔もいつもより輝いている。霊夢に握られた手がとても嬉しい。
「んー、今なら異変の二つや三つは解決出来そうにまで気力が高まってるわー」
霊夢は冗談交じりにそう言ったのだが、それを耳聡く魔理沙が聞きつけた。
「それなら今起こってる異変を片付けようぜ」
「今起こってる異変……？」
霊夢は鸚鵡返しに魔理沙に聞き返す。魔理沙は「おう」と頷いた。

「野生動物の変死体が、大量に見つかってるんだよ」
　魔理沙の口から、血腥い言葉が躍り出た。

「で？　詳しく聞いてなかったけど、どういう異変なの？」
「概要を聞かずに引き受けるのはどうなんだろうなぁ……？　ま、それはともかく。基本的には動物……熊や猪、牛とかの内臓が全部刳り抜かれて、血液も全部抜かれてる変死体が最近数多く見つかってるんだ」
　現在霊夢は魔理沙と共に暗い山道を歩いている。久しぶりに満足に食事を取ることが出来た霊夢は、特に考えることもなく即座に了解した。紫やレミリアには呆れられたが、満腹のせいで頭が働かなかったのだろう。
　しかし今はそれなりに時間が経ったことにより、頭の回転が速くなっている。霊夢は昼に聞きそびれた異変の概要を聞くことにしたのだ。
「ふむ……。聞く限りではそこまで珍しいことでもないわね。そこらへんの妖怪の仕業なんじゃないの？」

霊夢は最も可能性が高い推測を立てる。だが、魔理沙はそれを首を振って否定した。
「それならある意味まだ楽だったんだがな。目撃情報もいくつかあるんだが、こいつが厄介なんだ」
「……どんなのよ？」
「曰く、『野犬のようだった』『蛇だった』『大きな鳥だった』『人間だった』……。まるっきり統一性が無いんだよな」
「……」
魔理沙の答えに霊夢は暫し黙考する。魔理沙の言う証言に合致する相手は存在する。しかし、それは到底信じられないことだ。
「まさかとは思うけど、命蓮寺のぬえじゃないでしょうね？」
「ああ、違う」
魔理沙は完全に否定した。
「私も最初はぬえの正体不明の種が関係してるのかと思って命蓮寺に行って確かめたんだよ。どうやらここ最近あいつは本当に大人しくしてたようでな。それは白蓮も保証してる」
「ふーん。白蓮が言うなら間違いない、か……」
「ま、今のあいつが白蓮に迷惑を掛けるような真似はしないだろう」

「それもそうか」
　それを境に霊夢達は黙々と山道を進む。だが、途中で霊夢が今までとは違った道を進み始めた。
「おいおい、急にどうした？　何か見つけたのか？」
「別にー？　ただ何か真っ直ぐ歩くのも飽きちゃってさ」
　霊夢はそう言いながらもずんずんと先を歩く。魔理沙はそんな霊夢を呆れるように見ていたが、やがてやれやれと首を振り、霊夢の跡に続く。
　そうして歩くこと数分、前方に開けた空間が見え、そこから何かを咀嚼するような音が聞こえてくる。
「まさか……！」
「霊夢の気まぐれも馬鹿にしたもんじゃねーな!!」
　魔理沙は手に持っていた箒に跨り、高速で目の前の空間に躍り出る。そこは広場のようになっており、中心の部分には『人間の男』と思しき存在が猪の腹に噛り付いていた。
「っ!!」
　『男』が振り向く。何か被り物をしているのか、判別出来るのは口元だけであり、その口元は猪の血や肉片で赤黒く染まっている。
「今時スプラッタホラーは流行らねーぜ!!」

魔理沙は生理的嫌悪感を押さえ付け、『男』に突撃する。牽制にいくつかの弾幕を張り、本命の一撃の為に魔力を練り、高めていく。

それに気付いた『男』は息を大きく吸い込んだ。

「何をする気か知らねーが、もう遅いぜ!!　魔符『スターダスト』――――」

魔理沙が魔法を行使するよりも早く、『男』が動く。

「――――ウオオオオオオオオオオン!!!」

それは、遠吠えだった。古来より、『犬』の鳴き声には破魔の力が宿るという。それは悪霊や妖怪、果ては魔族にも通用する可能性がある、強力な武器だ。そしてそれは『魔』に属する力全てに影響を及ぼす。即ち――――。

「んなっ!?!!」

魔理沙が放つはずだった魔法、それを構成する魔力を根こそぎ消散せしめる威力を持っていた。

魔理沙は未だかつて経験したことの無い事態に硬直してしまう。そしてそれを見逃す『男』ではない。『男』の左手の爪が鋭く伸び、まるで『猛禽』のように変化する。『男』は猛然と振りかぶり、魔理沙の腹を抉ろうと迫る。

しかし、それが決まることはない」

「なるほど。遠吠えで魔理沙の魔力を強制的に散らしたのね」

背後から聞こえた声に『男』は思わず振り向いてしまう。しかしそこにあったのは何枚もの霊符だ。

「でも、私の力は散らせないわよ!!」

またも声の聞こえた方へと向き直るが、やはりそこにあるのは力ある霊符のみ。

気付けば『男』は霊符の結界とも言うべき檻に囚われている。魔理沙も『男』が声に惑わされている間に脱出を完了させている。

「今の私はまさに絶・好・調!!!　最初っから大盤振る舞いでやってやるわーーーー!!!!」

それは霊夢が超高速で移動し、霊符による檻で対象を封じ込め、討滅する。

霊夢の切り札の一つ――!!

「――神霊『夢想封印　瞬　』!!!」

全ての霊符が『男』の元へと殺到する。逃げ場などどこにも無い、完全な死地。霊夢と魔理沙は勝利を確信した。

『男』が、右手の人差し指と中指を伸ばし、剣指を作る。そして、意識の糸を『全ての

霊符』へと向ける。『男』は『術』を行使する。
「――――急々如律令!!　霊符の力を散らしめよ!!」

瞬間、全ての霊符が『男』に届く前に効力を失い、その場で破裂した。
「そんなっ!!?」
霊夢は目の前の光景が到底信じられない。あれだけの数の霊符を無効化するなど、常識の埒外だ。霊夢の思考はそこで停止してしまい、『男』の次の行動への対処が遅れてしまう。
「霊夢!!」
「っ!?」
気付けば、『男』の両手には強力な霊気が宿っている。霊夢は咄嗟に防御の体制をとるが、それは杞憂に終わる。
『男』はその両手を強く打ち鳴らし、強烈な閃光と破裂音を響かせた。
「うわっ!?」
「きゃっ!?」

それは視覚と聴覚だけでなく、霊感も狂わせるものだ。二人は暫く力の全てを防御に回したが、攻撃は一切来なかった。やがて目と耳が元に戻った頃、二人の周りには静寂だけが残っていた。

「……逃げた、のか？」

「……どうだろ」

魔理沙の言葉に霊夢は悔しそうに返す。状況だけをみれば、自分達は相手に見逃してもらった形だ。それは魔理沙も理解している。

だが、今の彼女はそんなことに構っていられない事情があったのだ。

あの閃光が迸ったほんの一瞬。彼女は確かに見た。年齢は倍以上も違うだろうが、あの顔は確かに覚えがある。

「……横島に、似てたな」

「……」

霊夢も否定しない。しかし、今の彼女にはそれに構っていられない事情が出来た。

「あの執事……、横島って名前だったんだ……」

「……今かよ!!!　今気にするとこはそこなのかよ!!!!」

何だかどっと疲れた魔理沙であった。

「あれ？　何やってんです、輝夜様に永琳先生」
「んー？　盆栽の手入れ」
　横島達が居るのは紅魔館の中庭の一角。誰かがごそごそと何かをしているのが気になった横島が見に来たところ、その人物達は輝夜と永琳だったのだ。
「盆栽っすか？」
「あら、これでも中々馬鹿に出来ないものなのよ？」
　胡散臭げな横島の言葉に輝夜は軽く答える。永い時を生きる彼女にとって、長く楽しめる盆栽は相性が良いのだろう。
「ほら見てよ、この優曇華。結構立派になったと思わない？」
「優曇華……、え、イナバちゃんの盆栽っすか？」
「え？」
「え？」
　二人はどこかが食い違っている。そこに永琳が助け船を出した。
「優曇華は実際に存在する植物のことよ。まあ、確かにウドンゲの名前の由来でもある

けれど……。仏教の経典に書かれてたり、身近なところでは輝夜が言い寄ってくる男に出した難題の一つ、『蓬莱の玉の枝』が成長する前のものなの」

永琳の説明に横島は感心したように何度も頷く。

「ほえー、これがあのやたらと鬼畜な難題に関係してるんすか。そう言われると何か凄そうに見えますね……」

「むー、何か思ってたリアクションと違ーう」

横島の反応が不満なのか、輝夜は唇を突き出して文句をたれる。永琳からすればお宝ショットだ。勿論神速でカメラのシャッターを切っている。

「あ、難題と言えば」

横島が手をぽんと打ち鳴らす。

「もし俺が輝夜様に交際を申し込んだら、どんな難題を出します？」

横島はさらりと危険なことを言い出した。彼からすれば純粋な興味なのだろうが、ここにはお姫様第一主義の永琳が居る。彼女の目が少し危ない光を湛え始める。

「うーん、そうね……」

永琳が醸し出す不穏な空気に気付かない輝夜は何事も無いように考える。

「あ、そうだ」

やがて考えが纏まったのだろう。輝夜は『笑顔』で答える。

「私の探してる人を連れてくること、かな？」
「……っ!!」
それは確かに笑顔だった。笑顔ではあったのだが、何かが違った。その不思議な圧力と異様な重圧は先程永琳から放たれていた空気など歯牙にも掛けない。横島は思わず一歩下がってしまう。
「あら、一体どうしたのかしら？」
そこに、軽やかな声が響く。声のした方を見れば、そこには紫が静かに佇んでいた。
「あ、ゆ、紫さん」
横島は輝夜の雰囲気に当てられたのか、どもってしまう。紫はそんな彼を落ち着かせるように柔らかく微笑み、背伸びをして彼の頭を撫でる。
「ん……」
横島も抵抗はしなかった。それだけ体が強張っていたのである。
「こんな所で何をしていたのかしら？　盆栽の鑑賞会？」
「まあ、そんなところね。貴女こそどうしたの？　私達に何か用でもあるの？」
紫と永琳はおかしくなった空気を戻すために努めて明るく会話をする。そのおかげで先程のような重い雰囲気は無くなった。
「そうそう、横島君に用があったの」

「え、俺っすか？」

紫の言葉に横島は少々驚いた。また何か気になることでもあるのだろうか。

「ええ。今日博麗神社に行くまですっかり忘れていたのだけれど、横島君は自分で元の世界に帰る当てがあるのよね？　今更だけど、それを教えてくれないかなって」

「あ、そういえば私も完全に忘れてたわ」

紫が恥ずかしそうに笑い、永琳が手をぽんと鳴らす。二人ともうっかりとしていたようだ。

それに対する横島は悩んでいた。自らの雇い主である美神からみだりに公言しないように言い含められているからだ。紫は彼の悩む様子に少し残念そうな表情を浮かべる。

「話せないようなら……」

「いや、大丈夫っすよ」

横島の腹は決まった。

「第一、紫さん達には随分とお世話になってますからね。話すのくらいはどってこと無いっす」

横島の言葉に紫は笑顔を浮かべた。横島のまっすぐな気持ちが心地よい。

「それに、こっちの世界にもあるかもしれませんしね」

「……？」

横島がぼそりと呟いた言葉に紫達は首を傾げる。その口ぶりからすると、何らかのアイテムを指しているだろうことが分かる。

「それで、帰る方法っすけど。――――文珠っていう道具を使うんです」

「文珠……ですって!?」

横島の言葉に紫が驚愕を示す。それほどのインパクトがあったのだ。

「その反応からすると、こっちにもあるんすか？」

「ええ。私も昔に一度だけしか見たことが無いけれど……。横島君はその文珠を持っているの？」

「いえ、俺は文珠を作ることが出来るんです。俺の霊能の集大成っすね」

「文珠を、作る……!?!!」

紫は驚愕しか表すことが出来ない。その能力の強力さ、異常性、全てが彼女を以ってしても計り知れない領域にある。

「……」

だが、その紫よりも遥かに深く驚いている者が居た。

（まさか……）

あの時、彼女はその『男』をあまり覚えていないふりをしていた。自らがその『男』に

抱いていた感情を紫に知られたくないがために。
だが、彼女はその『男』を忘れたことなどはなかった。自分達の恩人、そしてかつての思い人だったが故に。
永琳は『男』の姿を思い出す。光り輝く珠で、妖魔を撃退した『男』のことを――――。
（高島、さん……？）
永琳の心は、千々に乱れる。

「ぎいいい、あぁぐあ……!!!　が、あああああ……!!!」
鬱蒼と茂る木々の下、暗い山中で悶え苦しむ『男』の姿がある。それは霊夢達の前から姿を消した、あの『男』だった。
「あの、小娘、どもがあぁぁ……!!!」
『男』は力を揮う度に『人の部分』が失われていく。それは生の代償である。永き時を生きる為の、おぞましい行為からくる因果応報の苦しみ。

『男』はそれを解消するためにある物を探している。それは、かつてその身に宿っていた力。

「――――文珠が、文珠さえあれば……!!」

その『男』、かつて『高島』と呼ばれていた者に宿っていた、神の奇跡の具現。

遥か古よりの妄執が、この幻想郷に流れ着いている。

第二十二話

『高島』

～了～

第二十三話『必死な理由』

横島が博麗神社を訪ねてから、また幾日かが過ぎた。
特に語ることもないような穏やかな日々が通り過ぎ、彼もまた穏やかに毎日を過ごしている。
ただ、一つだけ気になることというのもあるにはあった。それは新月の日、紅魔館を含めた幻想郷全てが何かに警戒をしているように思えたことだ。
それについて横島は永琳に話を聞いてみた。曰く、前の新月の日に異変が起こったとのこと。横島は幻想郷では度々異変が起こると聞いていたし、なにより元居た世界からして異変が起こりっぱなしだったのだ。特に何も無かったのなら、横島の心に残ることなくその話は風化していった。
しかし新月がまた巡ってきたということは、即ち横島が幻想郷に墜落して一ヶ月が経ったということなのであるが、彼がそれを意識しているかはかなり怪しい。
いや、彼自身焦りを感じていないわけではないのだが、それよりも深刻な危機が目の前に迫っているが故にそれに意識を割けないでいるのだ。

「うんうん。大分様になってきましたね、横島さん」
「そ、そうか？　自分ではあんまり分かんねーけど……」
横島は既に日課となっている美鈴との太極拳の套路をこなしている。指導者が優秀なおかげか、彼の武術における成長のスピードは目を見張るものがあった。ほんの一ヶ月で型が様になるなど、普通では考えられない。これは横島が武術においても非凡な才能を持っているから……では、なかったりする。
「あ、でももう少し脇を締めた方が良いですね」
「……っ!!」
美鈴が背後から横島の体勢を整える。……その際に美鈴の豊かな胸が微かに横島の背中に触れる。
「もっと背筋を伸ばして、腰を落として下さい」
美鈴が横島の腰に触れる。……先程よりも強く密着し、美鈴の柔らかな双丘が面白いように形を変える。
「うん、良いですね。カッコいいですよ」
美鈴が上目遣いに微笑む。……その頬は横島に密着していたからか桜色に染まり、尋常でない可憐さを生み出している。
「……キツイなぁ」

「確かにこの体勢はしんどいですが、そうでないと鍛錬になりませんしね。頑張ってください」
「……ああ、そうだな」
何か二人の間にはとてつもない溝があるようだ。
（うふふ、これなら大丈夫そうですね……）
美鈴は横島から見えないようにほくそ笑む。どうやら横島に内緒で何やら怪しげな計画を立てているようだ。
「横島さん、咲夜さんの許可は取ってありますので、午後はちょっと私に付き合ってください」
「え？　……ああ、了解」
横島は美鈴の様子を訝しんだが、既に美鈴は咲夜の了承を得ているのだ。それはつまりレミリアも承知であるということ。ここは素直に頷いた方が良いだろうと結論付けた。
「んふふ、今から午後が楽しみですねー」
「俺はちょっと不安だけどなー」
横島にとって、その日の午後は本当に大変なことになるのであるが、それに彼が気付けるはずもなかった。彼の霊感は、こういう時だけ非常に鈍くなるのだから。

そして午後。中庭にて横島はまたしても見物人に囲まれていた。と言っても今回は以前のように美鈴と組み手をするわけではない。それを皆知っているわけなのだが、要するに皆暇なのである。横島としては見世物状態なので堪ったものではないだろう。

「それで、何故私がここに居るのでしょうか?」

疲れたように息を吐き、隣に居る美鈴に問いかけるのは妖夢だ。対する美鈴は元気一杯であり、キラキラと覇気を撒き散らせている。その様子が妖夢には何だか腹立たしかった。

「ふふふ、今回妖夢さんに来てもらったのは他でもありません。ズバリ横島さんに関することです!」

「……」

美鈴はビシッ! と横島を指差す。ギャラリーはノリが良く、ここで『おおー!』と歓声を上げる。横島は嫌な予感が一杯で非常に嫌そうな顔だ。

「……それで、横島さんがどうされたんです?」

妖夢は意識を切り替えて（諦めて）美鈴に尋ねる。何だかんだで横島のことは気に

なっているし、ここまで巻き込まれてしまったのなら、自分から突っ込んでいった方が有意義な時間を過ごせるかもしれない。妖夢の思考はやはり諦めの方が強かった。

「まずは妖夢さんに見てもらいたいんです。……横島さん、私と毎朝一緒にやっている太極拳の型を一人でやってみてください」

「うん？　……まあ、良いけど」

横島は美鈴の言葉に首を傾げながらも言われた通りにする。彼の心境も妖夢と一緒で諦めが強い。

妖夢は横島の動きを見る内に目を見開いていき、やがて真剣に見つめだす。横島は二本の腕、二本の脚、胴体、目をそれぞれ別々にゆっくりと動かしている。それは拙い部分も多々あったが、ひどく緩やかで流麗であり、ちゃんと型として成立している。

「……これは簡化２４式太極拳という、健康法で有名なものです。覚えやすく、短時間で演舞出来るように纏められているのが特徴なのですが……」

美鈴はそこで区切り、ちらりと妖夢を見やる。彼女は相変わらず真剣な目で横島を見ており、その瞳には強い光が宿っている。

「横島さんが私からこれを学びだしたのは、ほんの一月ほど前のことなんですよ」

「――――!!」

美鈴は更なる爆弾を落とした。一瞬、妖夢の目に昏い光が灯るが、それはすでに純粋

な輝きの前に打ち消されていた。

「……横島さんはまだ武術に必要な体が出来ていません。確かによく鍛えられていますが、まだまだの部分もある。所々体幹がぶれるのはそのせいでしょう……。しかし、それを抜きにしても……!!」

「この成長具合はまさに驚異的、ですね」

美鈴の相槌に妖夢は頷きを返す。

「やはり横島さんは凄い人だったのですね……!!」

妖夢の瞳が光り輝く。先ほどは嫉妬の念が彼女にも宿ったのだが、それも一瞬のこと。何とも人が良いが、それも妖夢の美点である。特に彼女は今、ある夢想を描いている。

――――もし、横島に自らの剣術を仕込むことができるならば。

妖夢の背筋にゾクゾクとした刺激が走る。そう、妖夢は白玉楼の庭師であると同時に幽々子の剣術指南役。指導者でもあるのだ。目の前に存在する逸材に、自らの剣を教え込みたい。それは酷く魅力的に思えた。

「横島さんは、剣術の才もありそうですねー？」

妖夢はあくまでもさりげなくを装ってそう口にした。

「んー、そうなんかなぁ？　元の世界では霊波刀ってのを使ってはいたけど……」

「霊波刀……ですか？」
「ああ。その名の通り霊波で出来た刀のことでさ、霊気の集束に特化してる俺の主要武器ってとこだな」
　横島の言葉に妖夢の目がますます輝きを増す。どんどん自分にとって有力な材料が出てくるのだから、それも仕方の無いことである。
「あの、もし差し障りが無いのであれば見せて欲しいのですが……」
「ん？　ん～～～～……」
　横島は妖夢の言葉に演舞も中断し、考え込む。手を開いては閉じを繰り返し、調子を確かめている。
「あ、無理にとは言いませんので……」
「んー、いや。とりあえず一回やってみるか。俺も確かめたかったし」
　横島は妖夢の様子に決心を固める。何より妖夢の様な美少女が見たがっているのだ。ならばやってみせるのが男というもの。気になることもあるのだし。
「でも今の俺は力を上手く扱えないからさ、あんまり期待はしないでね」
「いえ、そんな……！　私の方こそ催促をしてしまって……！」
　横島の態度に妖夢は恐縮してしまう。そんな妖夢に横島は苦笑し、そのまま精神集中に入る。

「……」

その雰囲気はまさに張り詰めた弦のようで。それにあてられたのか、ワイワイと騒いでいたギャラリーも静かに様子を見守る。

「……!!」

そして、横島を中心に膨大な霊力が渦を巻く。

「……!? こ、これは……!!」

それは妖夢にとって予想外の出力であった。強い強いとは思っていたが、この力は完全に人間の領域を超越してしまっている。それ程の領域に彼が居るとは考えてもいなかったのだ。

「……行くぞ、っと」

その言葉を皮切りに、迸っていた霊力が一点へと集束していく。即ち、横島の右手に。

「凄い……!! これ程の霊力を自在に操るなんて……!!」

妖夢は横島の霊力を操作する技術に感動を覚える。自分も霊力の扱いは上手い方だと自負していたが、それは自惚れだったのだと思い知る。だがしかし、それでも。

「あ、これは……」

隣で美鈴が声を上げる。何だろうと思った瞬間、それは起こった。

「妖夢さん、こっち!」

「え？」

――――爆発!!!!

「きゃあああああああ!!?」

凄まじい光と爆音が辺りを蹂躙する。幸いそれは物理的な被害は出さなかったが、霊的な感覚は完全に狂わされている。その初めての感覚に妖夢は何とも言えない気持ちの悪さを覚えた。

「……ごめん、やっぱしくった」

やがて、今ももうもうと煙を上げる爆心地から表れた横島が謝罪した。少し涙ぐんでいるようだ。……しかし、こうなることをどこか知っていたかのような、微妙な言い回しである。

「やっぱ今のままじゃ無理っぽい。もう少し修行しないと駄目だな」

「そ、そうですか……。何か、すみません……」

「妖夢ちゃんは悪くないって。美鈴も大丈夫か？」

「はい、私の方は大丈夫です。でも、妖夢さんが……」

美鈴の言葉に横島は改めて妖夢を見やる。するとなるほど、さっきは気付かなかったが、確かに少々顔色が悪くなっている。

「あ、もしかして半霊が今の爆発でダメージを負っちゃったのか!?」

「え、いえそういうわけでは」
「と、とりあえず永琳先生直伝のヒーリングをするから、もうちょっと我慢しててくれ！」
「いえ、そうではなくて……」
「行くぞ……!!」
「――――ッ!!?」

それからの数分間は妖夢にとって甘い地獄であった。永琳直伝のヒーリングとは、リラクゼーション効果のある霊波動の強化版。その効能は凄まじく、妖夢はヒーリングによる快感どころか、もはや性感すら覚えてしまう程に強力だ。横島達ゴーストスイーパーの霊波は霊体・妖怪を始めとした霊的存在に特に強力に作用する。妖夢は半分は人間だが、もう半分は幽霊だ。

結局横島がヒーリングを終える頃には全身を赤く染め、息は荒く、瞳は潤み、見た目年齢とは不釣合いな程の色香を纏ってしまうことと相成った。

「これで大丈夫とは思うけど……。まだ、キツイか？　もう少し続けようか？」
「い、いえ！　もう全然大丈夫ですから……!!」

流石にこれ以上はまずいと判断した妖夢は、横島の申し出を断った。「まだまだ修行が足りません」とぶつぶつ呟いている。妖夢はどこからか木刀を取り出し、ふらふらと

その場から離れる。
「ちょ、どこ行くんだ?」
「ちょっと、色々と発散してきます……」
「だ、大丈夫か……?」
「はい、少しだけここを離れますね」
妖夢は少々おぼつかない足取りで中庭の隅へと向かった。そこで素振りをするようだ。
「妖夢ちゃん、大丈夫かな……?」
「……」
一連の流れを間近で見ていた美鈴は横島の傍へと歩き、少し強めにその頬を抓った。
「いひゃひゃひゃ!!?　ちょ、ひゃにひゅんだよ!!?」
「知りません」
「はあ!?」
依然抓る力は変わらず。美鈴は妖夢に恥ずかしい思いをさせた横島への折檻を、ついでに胸に湧き上がるもやもやをピンチ力（抓む力）に変えて八つ当たりをする。
妖夢が帰って来るまでの間、その光景は変わらなかった。

それから十数分が経ち、妖夢が戻ってくる。その表情は心なしか明るい。横島のヒーリングの影響か、普段以上のパフォーマンスを発揮出来たようだ。

「お待たせいたしました」

妖夢は二人にぺこりと頭を下げる。二人は「そんな畏まらないでも」と苦笑気味だ。

三人は少々閑談した後、再度横島の剣術の才能について話し出す。

「とりあえず思うままにこの木刀を振るってみてください」

妖夢はそう言って横島に先程まで使っていた木刀を差し出した。木刀を受け取った横島は「思うままつってもなぁ……」とぶつぶつと呟いていたが、妖夢達から距離を取り、言われた通りに振り回す。

「ふむ……」

妖夢と美鈴は横島の動きを冷静に観察する。

「やはり何らかの流派に属しているわけではなさそうですね」

「ええ。本当にただ力任せに振り回しているだけのようです。……しかし、あの剣はそれだけでない、何か強かさのような物を感じます。恐らくは、あれが横島さんの言う霊波刀を使うときの動きなのでしょう」

妖夢の言葉に美鈴は頷く。妖夢は横島の動きを見ながら、もし彼に対し指導をするならどういった物が良いかを思案する。あの動きを矯正するのは骨が折れそうだが、同時に自分も良い修行となるだろう。何せあの動きは横島が生き残る為に、それこそ必死になって見につけた『技術の結晶』なのだ。自らが学ぶことも大いにあるだろう。

「……」

ふと、妖夢が苦笑を浮かべる。何を勝手にその気になっているのやら、と自分に呆れたようだ。気が逸りすぎている自分に修行不足を痛感してしまう。

だが、次に横島が取った行動で、是が非でも彼に剣術を修めてもらいたいと思うようになる。

「……う～む」

横島が突然うなり声を上げ、考え込んでしまったのだ。かと思えば木刀を正眼に構え、何度も振り続ける。

「？」

妖夢も美鈴も頭に疑問符を浮かべたが、それは徐々に驚愕に塗り潰されることになる。

――――剣閃が一振りごとに洗練されていくのだ。

それはもはや力任せではなく、たゆまぬ修練により得られるはずの太刀筋。

今、横島は師匠の一人を思い返している。彼女に直接師事されたわけではないのだが、彼女が剣を振るう姿は目に焼きついている。

それはただただ美しく、神懸り的という言葉はまさに彼女の為にあるように思える。

武神にして竜神。音に聞こえた神剣使い。妙神山管理人・小竜姫。

横島は小竜姫を思い浮かべているのだ。

（思い出せ……。小竜姫様が剣を振ってたところを……）

横島は目を瞑り、暗闇の視界の中、鮮明に小竜姫を描き出す。それは本物と寸分の狂いもなく、女性にのみ発揮される彼の尋常でない記憶力だからこそ出来る技だ。

横島はその小竜姫の動きをトレースし、現実へと昇華させていく。だが、それだけではない。

横島の全身から霊気が放出される。それはつまり、煩悩が刺激されているということだ。

（思い出せ……！　小竜姫様を、小竜姫様の全てを……!!）

横島はその類稀なる煩悩を以って小竜姫のイメージをより完璧にする。

――思い出せ、小竜姫様の匂いを。汗の匂いが混ざりながらも、いつまでも嗅いでいたくなるような小竜姫様の香りを!!　服からチラチラとその存在を主張する腋を!!　剣を振り上げるときに筋肉と連動してツンと上を向き、剣を振り下ろしたときに両

腕に圧迫されて谷間を深くするチチを!!　垂れることなく持ち上がり、動きに合わせて躍動するシリを!!!　激しい動きを支え、より強靭な行動を発揮する為に鍛えられながらも、柔らかさと弾力を残し、適度に脂肪を乗せた、キュッと引き締まったフトモモを――――!!!!!!!!」

「――――!!」

最後に振り下ろされた一刀は、まだまだ未熟ながらもまさに小竜姫の再現だった。横島はフッと笑みを浮かべ、突然ガクリと地面に膝を着く。

「ど、どうしたんですか横島さん!?」

美鈴が横島に駆け寄る。肩を抱かれた横島は、涙ぐみながらも何とか答える。

「何か、全身のいたるところがめっちゃ痛い……」

「あー、なるほど。横島さんはさっきみたいに剣を振ったことはあまりなさそうですし、多分普段使っていない筋肉を痛めてしまったのだと思います」

「おおう、そういうこともあるのか……。まぁ、小竜姫様の動きだしなぁ……」

横島は小竜姫の動きを再現したことにより、ある種の筋肉痛になってしまったようだ。全身が痛むことは痛むが、何も生活に支障は無く、執事としての仕事にも影響は無さそうだ。横島はゆっくりと立ち上がり、木刀を返そうと妖夢の方を見やる。

「……？」

すると、妖夢は俯き、体を震わせていた。横島はそれを疑問に思ったが、美鈴はその限りではなかった。何せ剣術の素人があれ程までに洗練された剣を見せたのだ。自らを未熟と断じながらも十分に達人と言える実力を持つ妖夢からすれば、思うところもあるだろう。美鈴ですら先程の横島には多少ではあるが昏い感情を抱いたのだ。

美鈴のその考えは間違ってはいない。……ある程度は、だが。

「妖夢ちゃん、どうかしたのか？」

横島は妖夢の様子を訝しがり、心配そうに歩を進める。程なく目の前にまで辿り着いた横島は、妖夢の肩に手を触れようとしたのだが、その手を妖夢に両手でがっしりと掴まれた。

「横島さん……」

「お、おう。どうしたの？」

「わ、私の……。私の……！」

妖夢は横島をくわっと見開いた目で捉え、その言葉を口にした。

「私の、弟子になってください!!」

「――――る？」

まさかの弟子の誘いであった。

「横島さんには才能があるんです！　これを伸ばさないわけにはいきません！　さ、も

う一度構えてください。まず、刀の持ち方ですが……」
「ちょ、ちょっとー？　妖夢ちゃーん？」
「柄尻を左手の小指・薬指・親指で包むようにですね……」
　妖夢は横島の言葉を聞かずに、勝手に指導を始める。ごくごく基本的な部分からとはいえ、横島は面食らってしまい、まともに相手をすることが出来ない。それほどに今の妖夢は暴走しているのだ。
　そして、そこに割り込む一つの影。
「ちょちょちょ、ちょーーーーーっと待ってください!!」
　美鈴だ。二人の間にダッシュで割り込み、妖夢の額を手で押さえている。何となく二人の距離を離したくなったらしい。
「横島さんの返事も聞かずにいきなり指導を始めるのは良くないと私は思います！　そもそも、横島さんは私の!!　この私の弟子なんです!!　師匠である私を差し置いて横島さんを弟子にしようだなんて、そうは問屋が卸しませんよ!!」
「くっ……!?　確かに、それは礼を失していました」
「……いつから俺は美鈴の弟子になったんだろーか？」
　何か釈然としない思いが横島の胸中を過ぎるが、美鈴が弟子だと言うのだからきっと自分は美鈴の弟子なんだろうと無理矢理納得する。元の世界でも横島はいつのまにか

小竜姫の弟子ということにされていたし、美少女の師匠が増えることは横島にとっても歓迎すべきことではある。美鈴達の方も話が纏まってきたようだ。

「正直なところ、妖夢さんが横島さんの師匠の一人になるのは構いません。でもそうなると、他にも色んな武術を教え込みたくもなってきましたね」

「そうですね。とりあえず私の知り合いに空手の達人とムエタイの達人、柔術の達人が居ますので、その人達も……」

「たとえ連載されていた雑誌が一緒でもそれ以上はいけないーーーーーー!!」

横島は謎の危機感を覚えたが、何とか二人の暴走を食い止めることが出来た。

そして、何故か錘の付いた木刀を振ることになってしまった。

「……いや、マジで何で?」

「この振り棒をすることで、剣を扱う体を作るのです。私も幼い頃はこうして鍛えましたね……」

「んー、そっちじゃなくて何でその振り棒? をすることになったのかを答えてほしかったなー。ま、良いけどさ」

横島はもう早々に諦めモードだ。大人しく妖夢が言うように木刀を前後に振る。本来なら始めのうちは錘は二キログラム程度の物を使用するはずだったのだが、美鈴がそれでは軽すぎるとして、いきなり十倍の二十キログラムの錘を使用することとなった。

霊力を纏った横島にとってはあって無きが如くだが、それでも疲労は蓄積されていく。

「うーん、思ったよりもしんどいかな……？」

次第に額に汗が滲んでくる。そんな横島を見ていた美鈴は何を思ったのか、応援を始める。

「横島さーん！　頑張ってくださーい!!」

美鈴は横島を応援しながらピョンピョンと飛び跳ねる。その姿はまるでチアガールのようで、非常に可愛らしい。横島もついつい視線が美鈴へと向いてしまう。

さて、ここで美鈴の服装についてお話しよう。美鈴はとある時期から横島に対して無防備な所を晒すようになった。今は秋も深まってきており、気温もそれなりに低い。だというのに美鈴は露出度の高い服を着ていた。

見た目は普段着ている中華服に近いのだが、ノースリーブの脇からちらちらと見えるブラジャーの紐。生地が薄いのか、よく見れば形が分かるへそ。太腿がほとんど露わになるまでに入れられた深いスリット。そんな状態で美鈴はピョンピョンと飛び跳ねているのだ。

ぶっちゃければ、横島の位置からは色んな物が見えてしまっている。

「――ふっ」

横島はとても爽やかな笑みを浮かべた。彼の中で驚異的な煩悩が渦巻き始める。―

――しかし。

「あああああああああああああああああああ!!!」

横島は突如吼えた。それと同時に爆発的に振り棒の速度が上がる。横島は、抗っているのだ。

「よ、横島さん!?　い、いけません！　振り棒はただがむしゃらにするものでは……!!」

突然の変化に妖夢は面食らう。しかしそれも一瞬のこと。すぐに静止させようと声を上げるのだが、それは美鈴に止められた。

「美鈴さん!?」

美鈴はゆっくりと首を横に振る。

「私も以前言ったんです。ただがむしゃらに行うのではダメなのだと。でも、横島さんはこう返したんです。……『俺はこうしないと自分を超えられない。自分を超えるには、こうするしかない』……と」

「……!!」

「横島さんがどんな自分を超え、どんな自分になりたいのかは私には分かりません。でも、思ったんです。横島さんが言った、横島さんを超えた横島さんを見たい、と。……勿論本当に危ないときは止めています。でも、それ以外のときは応援してあげてください。横島さんもそれを望んでいるのだと思います……」

「……はい」

何やら二人は盛り上がっているが、横島はそれを気にしている余裕はなかった。ちらりと妖夢を見る。

「が、がんばれっ、がんばれっ」

一体何がどうなってそうなったのか、妖夢は顔を赤らめながらも美鈴と同じように応援していた。……控えめながらも、飛び跳ねることによって上着がめくれ、可愛らしいへそがちらちらと覗く。スカートもめくれ上がり、健康的な太腿が露わになる。

「あ〟あ〟あ〟あ〟あ〟あ〟あ〟あ〟あ〟あ〟!!!」

結果、横島は血涙まで流し始めた。

一連の流れを見ているギャラリーは、皆一様に横島に同情の視線を送っている。横島の血涙の意味が理解出来たからだ。

「横島……、哀れな奴……」

本来、横島は鍛錬だとか修行だとかは嫌いである。痛いのも辛いのも嫌いだし、毎日続けるようなしんどいことも嫌いだ。

だが、横島はこの世界に来て自分の置かれた状況を認識して以来、毎日欠かさず霊力の修行をしている。毎度毎度強すぎる力に苦戦し、時には体に傷を負おうとも努力を重ねてきた。

それは、霊力の制御を完璧にするため。自らの切り札、文珠を創り出すため。文珠を用い、元の世界に帰るため。そして、あと一つ――――。

横島は美鈴に拳法を学んでいる。それこそ元の世界の皆が見れば、本当に横島本人なのかと疑う程に熱心に打ち込んでいる。それは、偏に自分に打ち勝つために。皆に煩悩を向けないために――――。

つまり、だ。横島は見た目年齢が下の者に手を出さないようにするために、煩悩を運動で発散することにした。だが、横島が誇る煩悩を発散するとなれば、それは生半可なことでは効果は発揮されない。だから彼はがむしゃらなのだ。汗を流し涙を流し、時には血反吐を吐き、血涙を流しながら体を痛めつける。

横島が自らの煩悩を発散させる。それほどまでに過酷な修行を行っているのだ。武術の腕も加速度的に上がろうと言うものである。

煩悩を皆に向けない。それを成せれば、自らが『ロリ』という魔道外道に堕ちずにいられる。皆も安全安心だ。……こんな横島をどう思うかは人によるが、情けないとは言って欲しくないものである。

体力も消耗してきた頃、横島は目を瞑れば美鈴達の姿に惑わされることが無くなると

ようやく気付き、振り棒を終えた。
　しかし、何故か拳法も元の世界の師匠を再現することになってしまった。美鈴曰く「妖夢さんの剣術ばっかりずるいじゃないですか」とのことらしい。
「拳法……。師匠の再現……」
　横島は考える。拳法を操り、尚且つ自分の師匠と呼べる存在のことを。
「……猿じじい？　いやでも流石にアレは無理だしなぁ……。となると、あいつか」
　流石の横島でも、文珠なしでは斉天大聖孫悟空の模倣は不可能であった。そこで思いついたのは自分のライバルであり、親友の伊達雪之丞。
「……」
　横島は目を瞑り、静かに構えを取る。そして、雪之丞の一挙手一投足を鮮明に思い浮かべる。
（思い出せ……!!　雪之丞を、雪之丞の全てを……!!）
　――むさ苦しく暑苦しく汗臭い雪之丞の臭い!!　時々ピクピクと動かして「お前にこれが出来るか?」とでも言いたげなドヤ顔でアピールしてくる大胸筋!!　ピシャンピシャンと叩き、その強靭さに思わず恍惚の笑みを浮かべていたこともある存在を強烈に誇示してくる腹直筋!!!　銭湯などでたまたま目の前に現れやがった、不快なまでに引き締まり、無駄に男らしさを撒き散らす大殿筋――!!!!

「おぼろろろろろろろろ」
「わーーーーーー!!?」
「きゃーーーーーー!!?」
横島は吐いた。胸を焼くような不快感に涙を流しながら、胃の中の物を全て吐き出した。何で雪之丞のことなんか鮮明に思い出さにゃならんのか。覚えていろ、帰ったら絶対にぶん殴る。横島は決意した。
「す、すいません！　さっき体力をかなり消耗していたのに無理をさせてしまって……!!」
「あ〜、いやいや。大丈夫だから。むしろ吐いた分だけすっきりしてるから。……こっちこそ、吐いた物の処理をさせちゃってごめん……」
「いえ、そんな」
「謝られるようなことではありませんよ」
「……何てええ子らなんや……！」
横島の言葉通り、吐瀉物は美鈴達が嫌な顔一つせずに処理をした。その様は横島に感涙を流させるだけの威力があったようだ。
「とりあえず今日はここまでにしておきましょうか」
「そうですね。私も幽々子様の夕飯の仕込がありますし……」

どうやら本日はここでお開きとなるようだ。二人とも横島の体調を慮ってくれたらしい。横島の中で二人の高感度が上昇していく。

「横島さん、あまり無理をしてはいけませんよ？」

妖夢の言葉に横島は本当に理解しているのか、曖昧に頷く。それだけ彼が感動しているということなのだが、傍目からは分かりにくい。妖夢も横島は大丈夫なのか心配が募るが、ここには永琳もいるのだ。恐らくは大丈夫であろう。

「それでは私は戻ります。今日はありがとうございました」

「ああ、こっちこそな。気を付けて帰るんだぞー」

「はい。……では、これから週に三日はこちらに来ますので」

「……はい」

横島の執事生活に、新たに剣術修行が加わった。

そうして妖夢はレミリア達にも挨拶をし、白玉楼へと帰っていった。横島も執事の仕事に戻ろうとしたが、レミリアに呼び止められ、何故か哀れみたっぷりの視線で日頃の労をねぎらわれた。

「え……っと？」

それはレミリアだけでなく、パチュリー、咲夜、小悪魔、紫、輝夜、永琳、鈴仙……。てゐは何故か永琳の腕の中で顔を蒼白にして意識を失っているが、皆がとても優しく接

してくれている。……大半が横島の煩悩に理解のある者達であり、先程の光景はそれだけ哀れだったのだろう。

「何かよく分かりませんが、ありがとうございます」

照れたように微笑む横島に、何とも言えない空気の沈黙が圧し掛かった。

その日の夜。執事の仕事を終えた横島は考え事をしながら自室への廊下を歩いていた。内容は自身の霊能である『栄光の手』について。

（今日のことではっきりと分かった。このままじゃ、栄光の手を制御するのは無理だ）

横島は考える。以前もう少しで制御出来ると考えていたのだが、その『もう少し』が問題だった。それは現在の横島の力量では届かず、しかし決して不可能な領域でもない。チラチラと尻尾を見せては隠れてしまう、野性の獣のように横島の焦燥を煽る。

（コントロールはそんな得意じゃねーんだよな……。霊力を押さえ込みながら手に集束、それを維持しつつ必要に応じて形も変える……。今の霊力量で？）

現在の横島の霊力量は膨大だ。有り体に言ってしまえば、それこそ『神魔級』である。突然それほどの霊力量を得た横島は、当然その全てを扱いきれない。更に言えば、横島

は自分のことを全く信用していない。自分の力量に見切りをつけるのも早かった。
（俺の霊力が神魔級なら、神魔の力を頼ってみよーかな？）
横島の得意技に他力本願がある。このとき横島の脳裏に浮かんでいたのは、彼のライバルである雪之丞。そして彼の代名詞である『魔装術』だ。
（パチュリー様や魔理沙にアリスちゃんの三人に研究してもらおうかな？　小悪魔ちゃんとか契約してくんねーかな。契約者が友好的なら制御も楽だろーし）
横島は安易な思いつきで思考を巡らせる。魔装術に対する勘違いも多分にある。しかし、それは現在の横島の状態を鑑みれば、最善とは言えずとも正解の一つであることに違いはないのだ。たとえ間違った部分を含めても、だ。
このまま修行という形を取っていれば、いつかは制御出来るかもしれない。だがそれは数年程度では済むまい。文珠を製作し、元の世界に帰れるようになるまでになることを考えれば、誰かの力を借りたくもなるというもの。
――横島は気付いていない。いや、気付いていてそれを考えないようにしているのかもしれない。
ゴーストスイーパーを代表とする霊能力者の力は、本人の『精神状態』が大きく関係することに。ならば、かつて神魔級の力を扱ったこともある横島が、元の世界に帰れるようになるために力の制御をしようとし、今尚失敗を続ける理由とは――。

「……横島さん」
「ん？」
横島は背後から声を掛けられ、振り返る。だが視界の中には何も居ない。次に視線をわずかに下げると、そこにあったのは伸ばし放題のゆるい三つ編み。三号が横島を見上げていた。
「お、三号か。どーした？」
横島は三号の頭を優しく撫でながら問い掛ける。三号はその感触を一頻り堪能した後、か細い声で呟く。
「……一緒にお風呂」
「ん？　……あー、そういやまだだったな」
三号の言葉に横島は約束を思い出す。何だかんだで流れてしまっていたが、それは元々プレゼントの代わりに三号が要求したもの。忘れてしまうなど、かなり失礼なことをしてしまっていた。
「ごめんな、今までほったらかしにしちまってて。……部屋、来るか？」
横島は三号に謝罪をし、約束を果たすために部屋に誘う。当然三号に否やは無く、嬉々として横島の後について行った。

「ほれ、ばんざーい」
「……ん」
　横島の自室、その洗面所。横島は三号が服を脱ぐのを手伝っている。今まで待たされたから、とは三号の意見だ。横島も負い目からそれを了承し、存分に甘やかすつもりである。
　横島は三号の服を全て脱がせた後、自分も服を脱ぎ、三号と共に浴室へと入る。三号は横島の筋肉を見てうんうんと頷いている。また少し彼女の理想に近づいてきたようだ。
「んーじゃまずは髪から洗うからな」
「……ん」
　三号の髪にゆっくりとお湯を掛ける。お湯の刺激に三号は体をプルプルと震わせるが、次第にそれも収まり、弛緩していく。
「本当なら色々するんだろうけど、俺ってシャンプーとリンスくらいしか知らないからさ。それでも良いか？」
「……うん。私も全然興味ないし」
「そーなのか？　せっかくこんなに長い髪なのに」

「……三つ編みの感触が好きだから」
「……ふーん？」
微妙に噛み合っているのか噛み合っていないのか分からない会話が続く。それでもその雰囲気は悪くなく、お互いにリラックスしている様子だ。
「お湯掛けるぞー」
横島はシャンプーの泡を洗い流す。次に洗面器にお湯を入れ、そこにリンスを溶き混ぜる。
「確かこうするんだったかなっと」
横島はそれを三号の髪に丁寧につける。三号は目に泡が入るでもないのに、キュッと目を瞑っていた。
「またお湯掛けるぞー」
横島はリンスを丁寧に洗い流す。伸ばし放題とはいえ、三号の髪は触り心地が良い。自分のせいで三号の髪を傷めたくはなかった。
「……次は背中」
「へいへい」
横島は三号の要求に苦笑しつつ、ボディタオルにボディソープを付け、泡立てる。
「んじゃいくぞー？」

横島はそっと優しく、三号の背中に触れる。
「……っ！」
「痛かったりくすぐったかったら言えよ？」
そう言う横島の手つきは非常に優しかった。三号はその心地よさに目を瞑り、何も言わずにされるがまま。そうなると当然素早く洗い終えることとなる。
「背中終わったぞー？」
「……じゃあ前も」
「流石にそれは自分でやりなさい」
「……残念」
三号は特に残念がっている様子もなく、淡々と体を洗い始める。横島も洗髪をし始め、三号が体を洗い終える頃には同じく体も洗い終えていた。
「……早い」
「男はこんなもんじゃねーか？」
横島は元の世界で友人達と銭湯に行ったときのことを思い出す。皆確かに自分と同じくらいのスピードだった。……余計なモノまで思い出し横島の気分が悪くなってしまう。未だ昼間のことが尾を引いているのだろう。
「……それじゃ、お風呂に」

「はいよ、お姫様」
両手を横島の首に絡める三号を、横島はお姫様抱っこで抱き上げ、そのまま湯船へと入る。お互いに肩まで浸かり、同時に息を吐く。
「……気持ちいい」
「だなぁ……」
二人をまったりとした空気が包む。三号は横島の首元に顔を埋め、横島もそれを受け入れる。お互いに言葉は無いが、その沈黙もまた風情があった。

「ほれ、ちゃんと髪を乾かさねーとダメだぞ」
「……めんどくさい」
「風邪引くぞ……」
横島は三号の髪をタオルで揉むように拭いて水気を取る。
「取り出したるは電動式送風髪乾かし機～ってな」
横島はどこからか人里でにとりから買い取った髪乾かし機……ドライヤーを取り出していた。スイッチを入れ、三号の髪に温風を当てる。長い髪が放射状に舞った。
「……おぉう、これは……」

三号は未知の感覚に一瞬身構えるが、髪に触れる横島の手と温風の暖かさに妙な声を上げてしまう。全体的に半乾きになったら今度は冷風。またも違う感覚に三号は驚くが、温まった髪と頭に冷たい風が気持ちいい。それだけでなく、横島は櫛で髪を梳いていく。三号にとって櫛が髪を通る感触も中々に新鮮だった。

「……ふわぁ」

「ははは、眠たそうだな」

横島は三号の髪を乾かし終わり彼女の手を引いて洗面所から出る。視線の先、自分のベッドの上にはまた別の人物が居た。

「……お待たせ」

「全然まってないよー？」

パジャマ姿に着替えた妖精メイド、二号だ。

「……なるほど、二号もまだだったよな」

「そーいうことー」

二号はベッドから降り、横島に抱きつく。気持ちよさそうに頭をぐりぐりと擦り付けるのだが、身長の関係でその場所はみぞおち付近になってしまう。我慢出来ない程ではないが、多少息が詰まる。

「……それじゃ、私は自分の部屋に戻るから」

「大丈夫か？　ちょっとふらふらしてっけど」
「ここで休ませてもらったほうが良いよー？」
二号が横島の了解もなしに言うが、横島も最初からそのつもりだった。いつも何人もの妖精メイドがくっついてくるのだ。今更一人増えようが何の問題もない。だが、三号はそれをやんわりと断った。
「……ううん。二号の邪魔は出来ないし。部屋もここから近いから、大丈夫」
三号はそれだけ言うと出口へと向かう。ドアを開け横島達に振り向き、一言。
「……おやすみなさい」
そう言って三号は部屋を後にした。残された横島達は顔を見合わせる。
「気をつかってくれたのかなー？」
「まぁ、そうだろうな。……んじゃ、どうする？　もう寝るか？」
横島の言葉に二号はしばし考える。せっかくだから少し夜更かしがしたい。そう思い、二号は横島に話をねだる。
「横島さんの世界のお話を聞かせてください」
「ん？　んー、そうだなぁ」
横島はそれを聞き、一体どんな話をすれば良いのか迷ってしまう。何せ元の世界は幻想郷以上にカオスな世界だったのだ。話のネタはありすぎるほどにあり、逆に困ってし

まう。だから、横島はとりあえず自分の初仕事、鬼塚蓄三郎という悪霊の退治に関して話し始めるのだった。……妙に横島自身の行動が美化されているのはご愛嬌、ということで。

「……んー」

話し始めて一時間と少し。傍らから聞こえた小さな唸り声の主を見てみれば、二号はこっくりこっくりと船を漕いでいた。妖精メイドは早寝早起きの者が多い。二号もその一人であり、今の時間に起きているのは辛いものがあるのだろう。しかし二号は頭をプルプルと振り、無理に眠気を吹き飛ばそうとする。

「あらら。時間も遅いし、もう寝ようか」

「むー……。まだ、おはなし、するぅ……」

二号は頭を横島の胸に擦り付ける。他の妖精メイド達も気を使ったのか、二人きりにしてくれている。それに感謝し、もっと甘えたく思っているのだが、どうにも眠気の方は振り払えそうに無い。

残念な気持ちを抱く二号に気付いたのか、横島は二号の頭を撫で、そっと諭す。

「ほら、無理して夜更かしして明日に響いたらどうするんだ？　そんなんじゃ怪我しち

まうかもよ?」
「でもぉ……」
「何も今回だけって訳じゃねーんだしさ、また次にいっぱい話せばいいんだし」
「……また一緒に寝てくれるの?」
二号は横島を期待の篭った視線で見る。横島はゆっくり頷く。
「お前が嫌じゃなけりゃな」
「……じゃあ、今日はもう寝るー」
「ん。よしよし」
「……えへへ」
二号は体全体で横島に抱きついた。腕と脚を横島に目一杯絡ませ、頭は横島の腕の上に。
(……逆に寝づらくないんだろーか?)
無粋なことを考える横島だが、それを口に出すことは無かった。もし口に出していたらポカポカと殴られていたことだろう。横島の口から出たものは、また別のものだった。
「――――……」
それは子守唄だった。

元の世界でおキヌから教えてもらった、綺麗な歌だ。
横島は小さな声で、優しく、優しく歌い上げる。次第に二号の体からは力が抜けていき、やがて可愛らしい寝息が聞こえてきた。
「……」
横島は二号を起こさぬよう、気をつけながら窓の外を見る。その身のほとんどを隠し、空に亀裂を思わせる曲線として姿を見せる月だったが、それでもその月は綺麗だと思わせる魅力があった。
その月を見て、横島は物思いに耽る。
（……何で、皆は俺をロリコンにしようとするんだろう）
その内容は非常に狂っていたが。
（美鈴といい妖夢ちゃんといい、何なんだろうか。誘ってるんだろうか。男は常に切羽詰ってるよーなもんだというのに。ムラムラするじゃねーか。……まあ、二号と三号は大丈夫だったけど。あと五歳程年取ってたら分かんねーけど）
ちょっと最低な部分が思考に混ざってきた。横島は少し長めに寝たほうが良いのかもしれない。というか煩悩が発散し切れていない。
だが、横島は月を見上げてニヒルに笑う。自分は勝つ。勝ってみせる。そのために横島は誓いを立てる。

（絶対、ロリの魅力に負けたりしない……!!）

――――訂正しよう。横島は誓いではなく、フラグを立てた。

第二十三話

『必死な理由』

～了～

第二十四話『慧音先生の家庭訪問』

秋も深まってきた幻想郷のとある日。一人の少女が人里から霧の湖を目指して空を進んでいた。

腰まで届く、青のメッシュが入った銀の長髪。赤いリボンを付けた帽子。胸元が大きく開いた、上下一体の青い服。人里に存在する寺子屋の教師、上白沢慧音だ。その手には人里で買った土産の饅頭が入った袋がある。

「ふう……。ようやく時間が取れた。皆が頼ってくれるのは嬉しいが、こうまで忙しくなると少々考え物だな……」

慧音は疲れたように息を吐き、愚痴を零す。いや、実際に疲れているのだ。およそ一月前に起こった二つの大異変（ゴ○ブリ異変・大結界の亀裂）のせいで、人里の住民は長らく平時とは違った顔を見せていた。

死人こそ出なかったものの、二つの異変は分かりやすく幻想郷の最後を連想させる物であったため、多くの者がこれからの幻想郷での生活に不安を抱いたのだ。またそれとは反対に、あれだけの異変が起こったのにそれをわずかな時間で治めた、博麗の巫女を

始めとする秩序を重んじる者達の活躍を見た住民達は『彼女達がいれば安心だ』との思いを抱いている。

この両極端な考えを持つ住民達は普段は変わりなく生活しているのだが、時折互いの考え方の差によって言い争いが起こり、多くの人を巻き込んだ喧嘩にまで発展することがある。そうしてそれを鎮圧するのに駆り出されるのが人里でも有数の人格者達。例えばそれは命蓮寺の聖白蓮であったり、寺子屋の慧音であったりするわけだ。……時々妖怪の山から現れた八坂神奈子が説教をしたり、同じく妖怪の山から現れた『仙人』である茨華仙が説教をしたり、どこからか現れた豊総耳神子が説教をしたり、これまたどこからか現れた『闇魔』である四季映姫・ヤマザナドゥが説教をしたりといったことがあるようだ。中には六人全員に一度に説教を食らったものもいるという。

そうした説教の効果もあり、以前から住民から頼られていた慧音は更に頼られることとなる。連日に及ぶ住民達の相談で慧音はプライベートな時間を中々取ることが出来ず、最近になってようやく人里も本来の姿を完全に取り戻すことが出来た。……彼女達の属する宗教に対する信仰が膨れ上がったのは余談である。

「本当に里の皆ときたら……。こちらの予定もあるというのにそれを考えず……。おっと、いかん。これだから一人暮らしは……」

慧音はぶつぶつと独り言を言っていたが、途中でそれに気付き、口をへの字に結んで

黙り込む。人里の住民達に対する陰口を叩いてしまったのも原因の一つだろう。慧音の生真面目さが窺える。

「……っと、ようやく着いたか」

慧音が空から見下ろす先、そこにあるのは霧が立ち込める湖。そしてその霧の向こう、島の部分に存在する紅い館、紅魔館。それを見つめる慧音の視線は鋭い。慧音は使命感に燃えていた。

（ようやくここに来ることが出来た……。さあ、待っていろ横島忠夫！　お前が妹紅に相応しいかどうか、この私が確かめてやる!!　……まずは紅魔館での仕事ぶりや収入、対人関係など、勤務態度と素行調査からだ!!）

慧音は実に生真面目で現実的であった。

第二十四話

『慧音先生の家庭訪問』

「さて、正式なアポは取っていないのだが、入れてくれるのだろうか……？」
休暇が取れたことで喜び勇んで紅魔館に来たのはいいが、慧音は妹紅に『近いうちに訪ねる』と言伝を頼んだだけであり、いつに訪れるのかは伝えていなかった。人里で予想以上に時間を取られたからか、慧音にしては珍しいミスである。
「まあ、ここで悩んでいても仕方がないか。駄目なら駄目でまた出直すとしよう」
慧音は考えを纏めると正門の門柱の前、丁度美鈴の正面へと降り立った。
「おや、こんにちは。お久しぶりですね」
「ああ。久しぶりだな、美鈴。レミリアは元気にしているか？」
「はい、いつも元気いっぱいです」
互いに挨拶を交わし、ちょっとした世間話をする。美鈴は以前人里によく出向いていたので、慧音とは顔見知りであり、お互いの人柄から友好な関係を築けていた。
「さて、妹紅さんからお話は伺っています。紅魔館にようこそ、慧音さん」
「すまないな、正式なアポも無しに。……ところで、ちょっと聞きたいことがあるんだが……」
「……何です？」
「ここで執事として働いている、横島という男についてなんだが……」

「横島さん……ですか？」
　美鈴は首を傾げている。
「ああ。あのレミリアが咲夜以外の人間を雇ったと聞いたからな。少し気になって」
「なるほど……」
　美鈴は慧音の言葉に頷いている。これは横島のことを聞き出すために、それらしい話題を出したに過ぎない。しかし特におかしな理由でもなく、またお人好しな嫌いのある美鈴は疑うことなく横島について話していく。
「いやー、凄い人ですよ横島さんは。優しいし面白いし、仕事も出来るし細かい気配りも出来ますし。武術の才能もありますし、ちゃんと日々の努力も欠かしませんし」
「……それはまた凄いな。それほどの人物だったのか、横島という男は……？」
　慧音は横島をべた褒めする美鈴に少々の驚きを抱く。妹紅もそうだったのだが、彼に対する評価がかなり高い。慧音の中で横島という人間のイメージが偏った物へとなっていく。しかし、どんな人間でも悪い部分は必ず存在するものだ。慧音は主にそこを聞き出したい。
「ふーむ、あのレミリアに気に入られるだけはあるということか。やはり横島も咲夜と同じように完璧で瀟洒だったりするのか？」
「うーん、流石にそこまではいきませんよ。横島さんにも困った部分はありますしね」

「ほほう？」

慧音の目に怪しい光が灯る。それを待っていたのだ。

「何と言いますか、ちょっと助平なところがあるんですよねぇ」

「……まぁ、男だしなあ」

（妹紅もそう言っていた。横島への評価が高い二人がそう言うなら、この情報は真実だろう。では、その度合いはどうだ……？）

「皆の、その、下着がチラッと見えたときとかは必ず反応してますし、私のときも食い入るように見てきましたし……」

「……ほほう」

慧音は横島の所業に少々の怒りを滲ませる。同じ女性としてそういったことは看過出来ないのだ。横島は妹紅から話を聞く限り思春期真っ盛りの、少年と言ってもいい年齢だ。その年頃ならばある程度仕方がないこととは言え、やはり気分が良いものではない。……もっとも、美鈴の場合自分から見せ付けたのであり、それを慧音が知ればまた違った反応があったかも知れない。恐らく頭突きは免れない。

「でも反応してしまう自分に自己嫌悪してると言うか、『俺はロリコンじゃないー！』って感じで。ちょっと失礼しちゃいますよね。あ、ロリコンっていうのは幼い女の子が好きな人のことだそうです」

「……ん？　それはどういうことだ？　皆の方がずっと年上のはずだが」
　慧音は美鈴の言葉に疑問を持つ。横島は皆が人間ではないことを承知で紅魔館の執事になったはずだ。ならば何故そのような言葉が出るのだろうか。
「あー、横島さんって見た目が自分より下だとその相手を子供扱いするみたいで。私は見た目年齢が近いほうなのであまり気にしませんが、お嬢様やパチュリー様はそれに時々腹を立てているみたいで」
「ふーん……？　今考えてみれば、妖怪とは言え幼い者に反応するのはちょっと不味いか？　横島は外の世界の退魔師だったと聞くし、そこらへんはここと外の常識の違いか……？」
　幻想郷では年の差カップルなどはそこまで珍しいものでもない。それは幻想郷が出来た当時の日本の習慣や風習が未だに残っているからであり、閉鎖的な幻想郷では仕方の無いことだと言える。慧音も外の世界のことは詳しい方ではなく、恋愛や結婚観などは幻想郷に住む他の人間達とあまり変わらない。
「でも何て言うんでしょうねー。横島さんのそういうところって、ちょっと可愛く見えるんですよね。背伸びをしてるように見えちゃって」
「……ん、んん？」
「ちょっとエッチなところもそれだけ自分を熱心に見てくれている証というか、必死に

我慢している姿が凄く良いというか……」
「お、おーい……？」
「皆をそういう目で見ないように見ないようにってしてるのに結局そういう目で見ちゃって、『俺はー』って悩んでいるところも可愛いなーって、こうギュッとしてあげたくなるんですよ」
「……そ、そうか。興味深い話だが、そろそろレミリアに挨拶に行っても良いだろうか？　自分から聞かせてもらっておいてなんだが、あまり待たせてしまってもいけないし……」
　慧音は目を逸らしながら言葉を搾り出した。美鈴の惚気（？）に耐えられなかったのではない。このまま聞いていれば思わず突っ込んでしまいそうだったからだ。――――『あんたベタ惚れやないかい』と。
「あ、っと。すいません、何か夢中になっちゃって。普段はこうじゃないんですけどねー。何故か横島さんが絡むとついつい……」
「……ああ、なるほど」
「……？　何がなるほどなんです？」
「いや、気にしないでくれ。ちょっと、な」
「はあ……？　分かりました。それじゃあお入りください。正面玄関に妖精メイドが居

るはずですので、案内はその子に」
「ん？　いつもの……二号、だったか？　あの子はいないのか？」
「二号は一号達と横島さんとで人里に買い物に行ってますよ」
「おや、件の横島と入れ違いになってしまったか」
　慧音はそのまま美鈴と挨拶を交わし、紅魔館へ足を踏み入れる。正面玄関への道すがら、慧音は先程の美鈴の様子を思い浮かべる。
（……どうやら、横島は思っていた以上に女誑しのようだな。いや、それだけ魅力的な人物という可能性もあるが……）
　美鈴の言葉、表情。それらから連想出来るのは、美鈴が横島に惹かれているということ。これに関しては慧音はどうこう言うつもりはない。恋愛は自由であるし、何より多くの者を惹きつける人物だというのなら、妹紅に相応しいと言える。それが、悪意の無い行動の結果ならば。
（……いかんな。どうも悪い方に悪い方に考えてしまう。――――この私が嫉妬とは）
　慧音は横島に嫉妬している。横島に対してネガティブなことばかりを考えるのはそのためだと慧音は自己を分析する。事実、それは確かなことなのだろう。慧音は妹紅の一番の理解者だと自負している。長い間彼女の傍に居り、互いに無上の信頼を置いてきた。そこに現れたのが横島であり、彼は自分が見たことの無い表情を妹紅から引き出し

た。そして、一番重要なこと。

（……もし本当にそうなら、どうか幸せになってほしいものだが）

慧音の懸念。それは横島が人間であることだ。人と人外の寿命の差など、考えるまでもない。特に妹紅は蓬莱人だ。一瞬と永遠では、もはや笑ってしまいたくなる。願わくば、妹紅と共に永遠を。そう考える慧音は、考えてしまった慧音は深い自己嫌悪に陥った。

「……はぁ。私も、中々ひどいことを考えるものだ」

――妹紅は、それを望まないだろうに。

慧音が深い溜め息を吐き、視線を上げると正面玄関はもう目の前だった。慧音は軽く深呼吸をして意識を切り替える。表情を元に戻した慧音は、ドアに付いているドアノッカーを鳴らした。

ややあって、ドアの向こうから『はーい』という間延びした声が聞こえてくる。

「どちらさまですかー？」

ドアを開いた妖精メイドは元気良く来訪者に問い掛けた。

「私は上白沢という者だが……」

「あ、あなたがけーねさんですね。お話はうかがっています。どうぞお入りください」

「ああ、失礼するよ」

妖精メイドは慧音の言葉を遮ってしまうが、慧音はそれに苦笑を浮かべつつも妖精メイドの言葉に従う。そそっかしいところもあるが、これはこれで可愛いものだ。
「とりあえず、レミリアの下に案内してもらえるかな？」
「はい、お任せください」
挨拶もそこそこに二人は歩き出す。しかし、それに待ったをかける人物が現れる。
「あら、お嬢様の所へなら、私が案内するわよ？」
「うひぇ!?」
その人物は、あたかも最初からそこに居たかのように存在した。それは完璧で瀟洒なメイド、咲夜だ。
「また、心臓に悪い登場の仕方をするな……咲夜」
「ふふ、お久しぶり」
澄ました笑顔を浮かべる咲夜に慧音は驚き、呆れる。彼女は時折妙な悪戯を仕掛けてくる。大抵は先ほどのように能力を使って突然現れるというものだが、能力が能力だけに予想が困難なのが恨めしい。
「さ、慧音は私が案内するから貴女は仕事に戻っていいわよ」
「はーい。それでは失礼しますー」
妖精メイドは深々とお辞儀をし、元の仕事に戻っていった。慧音の意思などは完全に

無視されているが、この方が効率が良いため仕方が無い。慧音は軽く溜め息を吐いた。
「あら、溜め息を吐くと幸せが逃げるわよ?」
「誰のせいだ。……まあ、いいか。これは土産のお饅頭。それで、レミリアの所に案内をお願いしても良いだろうか?」
「あら、ご丁寧にどうも。……お嬢様は大図書館に居られます。どうぞこちらへ」
慧音の言葉に咲夜は恭しく頭を下げ、先導する。

「しかし……紅魔館も変わったな」
「あら、そうかしら?」
咲夜の先導で図書館に向かう途中、慧音は変わり果てた紅魔館の様子に首を傾げていた。
「何というか……随分と騒がしくなったな」
「……」
慧音の言葉に咲夜は苦笑い。今もそこかしこから妖精メイド達の雄雄しくも可愛らしい叫び声が聞こえてくる。

「おりゃあああああ～～～～～!!」
「とりゃあああああ～～～～～!!」
「何か微妙に間の抜けた感じだけど……。レミリアは何も言わないのか？」
「まあ、これのおかげで仕事の効率が上がってるからね。多少は大目に見るって言っていたわ」
「そうか……。叫んだ方が気合が入るのだろうか……？」
「さあ、それは何とも……」
その後も二人は他愛の無い会話を交わしながら図書館へと向かうのだが、その途中にある部屋から、尋常でない叫び声が聞こえてきた。
「アッーーーーーー!?　ちょ、やめてーーーーーー!?」
「な、何だ!?」
「あー……」
ドア越しに聞こえてくる絹を引き裂くような悲鳴。それに驚いた慧音は何があったのかとその部屋に入ろうとする。だが、それを止める者が居た。悲鳴を聞いても冷静だった咲夜だ。
「お、おい、何故止めるんだ!?　今の悲鳴は尋常じゃなかったぞ!!」
「うん。貴女の言いたいことも分かるわ。でもね、これは割と日常茶飯事なの」

「なに……？」

咲夜の発言に慧音は唖然とする。そんな慧音を無視し、咲夜は聞き耳を立てるように言った。慧音は冷静さを欠いたままだったが、それでも咲夜の言うとおりにする。勿論、本当に危険そうなら乱入するつもりだ。

「……!!」

「――――!?」

ドアに耳をくっつけてみると、何か言い争うような会話が聞こえる。

「てゐ、何故この薬を持ち出したのか、理由を聞かせてもらおうかしら」

とある部屋の中、何かとても硬くてギザギザした座布団の上に正座したてゐを、腕を組んで仁王立ちした永琳が見下ろしている。永琳が片手に持っている何かの薬の小瓶。中にはいくつかの錠剤があり、そのラベルにはハートの中に髑髏をあしらった絵が描かれていた。

「……えっと。最近、執事さんには疲れが溜まってるように思えて。ちょっとでも強力そうなのが必要かなって。……まぁ、違う方も元気になればチャンスもあるかもしれない、っていうのもあったけどさ」

「まあ、確かに貴女のように性的魅力の乏しい体では、横島君はその気にならないでしょうね」

「師匠、いくら何でもひどくない？」

永琳の言葉のナイフにてゐの心は傷つけられる。だが、永琳の瞳に宿る冷たい炎はてゐの文句程度ではこ揺るぎもしない。

「さて、貴女が持ち出したこの薬。これは確かに人間用だけど、その効果は妖怪用に近い。たったの一錠で三日三晩は繋がり続けられるような代物だからね。……まだ、懲りてなかったのかしら？　こんな強力な薬を使おうだなんてね……!?」

「ひぃ……っ!?　い、いや、ちょっと待って!!　私もそんな強力な物だとは知らなかったんだって!!　ちゃんと普通の精力剤の棚から取ったんだよー!?」

永琳がてゐに向かってほぼ全力のプレッシャーを放つ。てゐは一瞬意識が飛びかけたが、強烈なプレッシャーが気絶することすら許さない。てゐはがたがたと震えながらも必死に弁解を試みる。一応てゐが言っていることは真実だ。しかし何故いかにも怪しい髑髏マークの物を持ち出したのか。

「はあ……。別に薬に頼らなくても良いでしょうに。もうちょっとプラトニックに進展させようとは思わないの？」

永琳は溜め息混じりに問いを投げかける。それに対してゐは視線を逸らし、「……執事さんの童貞って、美味しそうじゃない？」と答えた。

「アウトね」

永琳はどこからか注射器を取り出した。それには既に何らかの薬品が入っており、マーブル調の色彩が命の危険を連想させる。
「待って!?　待って待って!!?　お願い待って!!!」
「待つ理由が無いわ。大人しく注射されなさい」
てゐは何とか永琳の手を止める。しかし存外に永琳の力は強く、ともすれば押し切られそうだ。てゐは生命の危機に思ったことを全てぶちまける。
「い、良いじゃないかー!!　執事さんとの初めての濃厚な（ピー）を夢見たってさー!!　執事さんの（ピー）を（ピー）してあげたりとか、そのまま（ピー）させてあげたり、逆に執事さんに（ピー）してもらったりとか、（ピー）を（ピー）して（ピー）から（ピー）とか、女の子ならそのくらい普通でしょー!!?」
てゐは必死なあまり願望が駄々漏れになってしまっている。好きな相手と結ばれたいと思うのは当然ではあるが、てゐは普通と言うにはレベルが少々高すぎた。
「ちょちょちょちょちょちょ!!?　強い強い強い!!　力強い!!!?」
永琳が持つ注射器はてゐの抵抗など無いかのように迫る。もはやゼロ距離であり、てゐの顔は恐怖に歪む。
「怖いかしら」
「そりゃ怖いよ!!」

「やめてほしいかしら」
「やめてほしいやめてほしい!!」
　永琳の問い掛けにてゐは必死に頷く。いつものように回らない口に、本気の焦りが窺える。その必死さは永琳にも伝わったようで、永琳は一つ頷いた。
「――――駄目よ」
「そ、そんなぁっ!!?」
　現実は非情であった。永琳の力が更に強くなる。既に針先はてゐの皮膚に触れている。
「う、うわ、ちょっ!?　やめてとめてやめてとめてやめてぇ!!」
　てゐの抵抗も空しく、針は皮膚を貫き、静脈へと薬剤を投与した。
「とめった!!」
　注射の痛みと絶望により、てゐは叫びを上げる。そして投与された薬剤は瞬く間に全身を駆け巡り、その威力を発揮する。
「う、うう……っ!?」
　てゐは胸を押さえる。何か心臓の鼓動がやけに耳につく。まるで、今にも破裂しそうで――――。
「ばっう!!　か……が……!?」

てゐは胸を衝く未知の感覚にがくがくと震える。明らかに何かがおかしい。体内で感じる鼓動も、際限なくその速度を上げていきそうだと錯覚してしまう。
「な、に……これ……!?」
「それは私がかつて究明した新秘薬『激振剤』よ。最初は恋のときめきを再現する薬を作ろうとしてたんだけど、何か強力になりすぎちゃって」
息も絶え絶えなてゐの問いに、永琳は何でもないかのように答える。
「乙女チックなようでマッドだった……!? あ、ああ、やばい！　何がやばいって死にそうにやばい!!　何か凄くやばい!!」
「やばいしか言ってないわよ?」
「いいから早く、解毒剤かなんかを……!!　本当にやばいから……!?」
胸を押さえてびくびくと震えるてゐが永琳に助けを乞う。しかし、永琳はゆっくりと首を振る。
「激振剤を解く薬は存在しないわ。別に死にはしないわよ。ただ死にそうになるくらい苦しいだけ。諦めて我慢してなさい」
「そ、そんな……!?」
告げられた言葉にてゐは愕然とする。こんな苦しみをまだ味わわねばならないのか。てゐの過去に負ったとあるトラウマが刺激される。

「こ、こんなことで……！　こんなことで死んでたまるかー!!　私はまだ執事さんと（ピー）してないんだー!!」

てゐのお下品な叫びに呼応し、彼女の体から力が溢れ出る。それは何か横島の煩悩の光によく似ていた。

「……！　それよ、てゐ!!　その横島君と（ピー）したいという執着が秘薬を封じる強烈なパワーを生むかもしれないわ!!　さあ、秘薬を破ってみせなさい!!」

「う、ううううおおおおおおおおおおおお!!!」

「気力よ!!　気力で秘薬の効果を防いでみせなさい!!」

二人は妙な方向へと、際限なくヒートアップしていった。

「……」

慧音は耳をドアからそっと離す。慧音は数秒間目を閉じて深呼吸をし、決意を固める。彼女は目をカッと見開いた。

「……そっとしておこう！」

「賢明な判断ね」

慧音の決断に、咲夜は真顔で頷いた。三日に一回はこんなことが起こるのである。放っておいた方が精神衛生的にも良いだろう。ただ、今回の永琳のお仕置きの苛烈さには少々引いたが、ある種納得もしていた。

（精力剤での失敗でなければ、ここまではいかなかったんでしょうね。……てゐが舞い上がる気持ちも、分からないでもないけど）

咲夜は横島に今晩てゐを慰撫するように頼むことを決めた。

慧音達が永琳達が盛り上がっていた部屋から更に歩くこと数分。二人はようやく大図書館に到着した。慧音はキョロキョロと大図書館内部を見回し、その規模に驚きを隠せずにいる。

「でかいとは聞いていたが、まさかここまでとは……」

「あまり周りを気にしてると、転ぶかもしれないわよ？」

咲夜の言葉に慧音は佇まいを正すが、それも一瞬。慧音は興味に負けてやはり周りを見てしまう。咲夜はそんな慧音に苦笑しきりだ。

だが、それもここまで。二人はついにこの館の主の下にまで辿り着いたのだ。

「――――あら、随分と時間が掛かったわね、咲夜」
　声の主は視線を寄越さず、紅茶を片手に本を読んでいた。一見行儀の悪いその姿だが、それは何か、その少女の放つオーラのような物により見る者に美しさすら感じさせる程の魅力があった。
「途中、ちょっとしたことがありまして。……お客様をお連れしました」
　そう言って咲夜は一歩分道を空ける。慧音はそこを通り、レミリアへと歩み寄った。
「こうして会うのは随分と久しぶりか。今回は正式なアポも無しに訪ねてしまってすまなかったな、レミリア」
「ああ、気にすることはないわ。妹紅から話は聞いてたし、何より最近はそういうのを気にするのも馬鹿らしくなったのよね」
　慧音の言葉にレミリアはようやく視線を寄越し、ぷるぷると首を振る。
「そうなのか？」
「ええ。フランのお友達連中が時々訪ねてくるようになってね。いちいちアポを取ってたら面倒くさいことこの上ないし。……何より、あいつらにそれだけの頭がない」
「……随分な物言いだが、そうか。あの子にも友達が出来たのか」
　何でもないことのように語ったレミリアだが、その裏に確かに存在する喜びを、慧音は見抜いていた。フランのことも姿は幾度か見ているがその内情を噂程度には知って

いたため、現状がレミリアにとってどれほど喜ばしいことか想像はつく。故に自然とその頬は緩んでいた。

レミリアは慧音の表情に少々居心地が悪くなったが、何かに気付くとその視線を慧音の背後へと向けた。

「噂をすれば、だな。フランがこっちに来た」

その言葉に慧音が振り向けば、そこには両手にたくさんの本を抱えたフランがパタパタと小走りで向かってきていた。

「あれ、お客様？　私フランドール！　よろしくね！」

フランはにっこりと笑みを浮かべ、元気良く慧音に挨拶をする。慧音もフランにつられ、更に笑みを深くし、挨拶を返す。

「私は上白沢慧音。……実は何回か会っているんだが、これからよろしく」

「ええ!?　あ、あれ!?」

フランは初対面だと思っていたのだが、どうやらそうではなかったらしい。あわあわと慌てふためく姿は慧音の笑みを更に深くした。

「ご、ごめんなさい。私、全然覚えてなくて……」

「いやいや、会ったことがあると言っても、実際は宴会などで挨拶を少し交わした程度だからな。覚えてなくても無理はないさ」

上目遣いに謝るフランを慰めながら、頭を撫でる。少々癖があるが、その髪は中々に綺麗に整えられていた。

「あら、珍しいお客さんが居るのね」

和やかな雰囲気を醸し出していた慧音達の背後から、更に声が掛かる。皆が振り向けば、そこに居たのは薄い紫色の衣服を纏った魔法使いと、その使い魔だった。

「今日は千客万来ね」

「少なくとも私はお客じゃないけどね」

「私もいますよー」

パチュリーと小悪魔、この大図書館の真の主と言える二人。その二人は慧音と挨拶を交わし、レミリアの向かいの席へと腰を下ろす。

「アンタ達も座ったら？」

「……そうするか」

慧音とフランはレミリアの言葉に頷き、腰を落ち着ける。すると咲夜がいつの間にか用意した紅茶を差し出してきた。見れば他の皆にも行き渡っている。相変わらず心臓に悪いメイドだ。

慧音は次々とタイミング良く現れる紅魔館の住人達に驚いたが、同時にこれをチャンスと見ていた。

（さて、これだけの面子が揃っているんだ。横島の更なる情報を得るためにも慎重にいかねば……）

気分はスパイといったところか。慧音は如何に話題を繰り出すか思考を巡らせる。しかし、慧音が口を開く前にレミリアが問い掛けてきた。

「ところで、今日はどうしたんだ？　何か緊急の用事があったようにも見えないが」

来た。慧音はこれ幸いと居住まいを正す。

「ああ。今回は謝罪と感謝とを、な。二度も宴会に誘ってくれたにもかかわらず、まともな連絡も無しに来れず仕舞いですまなかった。人里の方がごたごたしていて、時間が取れなかったんだ」

「ま、あんだけの異変があればねぇ。特にいらないけれど、謝罪は受け取っておくわ」

レミリアはクスクスと苦笑している。「律儀なことだ」と口には出さず、心の中で呟いた。

「それから、妹紅が随分とこっちで世話になっているようみたいで。本来私が口を出すべきことでも無いんだが、それでもありがとうと言わせてもらうよ」

慧音は頭を下げた。慧音の言うとおり、彼女が礼を言うことでは無いのだが、それでも慧音はレミリア達に感謝しているのだ。あまり社交的ではない妹紅が、誰かのところに遊びに行き、時には泊り込む。自分以外でそういった相手を見つけたと聞いたときに

は、不覚にも涙が出る思いだったのだ。
　妹紅には「慧音は私のお母さんか」と呆れられたものだが、その時の心境に偽りは無い。そして、今レミリア達に感謝しているという気持ちも嘘ではないのだ。
「ふむ。そこまで感謝されると居心地が悪くなるわね……。あんまり気にしすぎるとハゲるわよ？」
「それは勘弁願いたいな。では、このことは今のので終わりにしよう」
　慧音はレミリアの気遣いに感謝しつつ、紅茶を啜る。咲夜の紅茶は慧音の緊張を和らげてくれた。
「……妹紅はこっちで何か問題とかを起こしてはいない、よな？」
　慧音はまず妹紅のことを聞いてみることにした。気になっていることは気になっているし、何かあるようなら久々に説教をしに行かなくてはならない。
「アンタは妹紅の母親か……。いや、あいつは特に問題になるようなことは起こしてないわよ。時々、輝夜と喧嘩するくらいか」
「……喧嘩してるのか？」
「輝夜が嫌いな野菜を妹紅の皿に入れたりとかでね。あと風呂で輝夜に悪戯されたとか何とか」
「……喧嘩？」

慧音は首を捻った。とりあえず今度妹紅に詳しい話を聞くこととする。
「妖精メイド達を構ってくれたりするし、暇な時には横島……新しく雇った執事の手伝いもしてくれるしな」
「っ！　そうなのか……？」
レミリアの言葉にピクリと反応を示す。レミリアは一つ頷き、紅茶を口に含み、唇を湿らせる。
「横島の仕事量は咲夜程ではないが、それでも膨大でね。皆の洗濯物を運ぶとか、簡単だけど妖精メイドでは時間が掛かる仕事とかを手伝ってくれるのよ。こっちとしては客にそういうことをさせるわけにはいかないんだけど、本人が楽しそうだしね」
「……そうなのか」
意外、と言えば意外だった。慧音は妹紅の家に何度も行っているが、彼女の特殊な生活ぶりから『生活感』というものがあまり感じられなかった。妹紅の変わりに掃除や洗濯をしてやるのもしばしばだ。そんな妹紅が率先して紅魔館の家事を手伝っているというのは、驚きに値する。
「これも横島の影響かな？」
「……何？」
何やら聞き捨てならないことが聞こえた。一体誰の影響を受けたというのか？

「いや、ああ見えて妹紅はおしゃべりな性質のようでな。横島と色々と駄弁っている時に如何に掃除やら洗濯やらが大変かを聞かされていたみたいなのよ」
「愚痴を聞かされていた、と？」
「いや、世間話の範疇だろう。その時に妹紅が『自分もそういうのが苦手で、いつも慧音に迷惑を掛けている』と話していたみたいでな。それで横島がちょっとくらいなら教えてやれると先生役を買って出たみたいだ」
「な、なるほど」
妹紅が横島に家事を教わっている理由に胸が熱くなる。自然と頬が緩んでくるが、それも仕方がないだろう。
……そこまでであれば、この笑顔が凍らずに済んだのだが。
「妹紅も何だかんだと横島と二人の時間を楽しんでいるようだしな」
「……ゑ」
慧音の表情が凍りつく。凍りついたまま吐息のような言葉を発するのは非常に不気味な光景だ。フランと小悪魔が体をビクリと震わせてしまっている。
「妹紅は案外不器用なのか失敗することも多いみたいなんだが、それを横島が手取り足取り根気良く教えているみたいでな。妹紅は距離の近さに頬を赤らめながらも、その表情には笑みが浮かんでいて……」

「マジでか」

「マジでよ。……横島もそんな妹紅の反応に色々と戸惑ったりもしてるけど、基本的にはまだ仲の良い友人の域を出ていないわね。アンタが心配しているような展開は今のところは無し。横島もちょっと助平なところはあるけど、好意に値する人間ね。仕事良し。収入良し。人格も……まあ良し。個人的にはそれなりに優良物件だと思うから、妹紅とくっついたって問題は無いんじゃない？」

そこまで言ってレミリアは紅茶を啜る。慧音は彼女の言葉を聞き、心底から安堵する。凍っていた表情が元に戻り、大きな息を吐いた。

「そうか。それはなによ……り？」

ふと、慧音は言葉に詰まる。今、何かがおかしくなかったか？

違和感が命じるままに顔を上げてレミリアを見る。すると彼女はとても偉そうな感じに椅子にふんぞり返り、その顔を『ドヤァ……』と歪めていた。フランや小悪魔は何のことか分からなかったようだが、よくよく見ればパチュリーもニヤニヤと笑っているし、咲夜も澄ました顔をしていながらも口角は微妙に上がっている。

つまりはそういうことだ。

（全て、見透かされていた……!?）

失態らしい失態は犯していないはず。どうしてバレてしまったのか、慧音は理解が追

いつかない。
「な、何で……？」
　結果、彼女から出たのは純粋な疑問の声だった。レミリアはそれを待っていたのか、指をピッと立て、解説していく。
「なに、アンタ達二人の性格が分かれば簡単なことよ。さっき私は妹紅をおしゃべりだと言ったわよね？　つまり妹紅の性格についてはこっちで把握済み。何せ時間は結構あったからね、アンタのことも色々と聞いてる。それを考えれば、アンタがこっちに来た時に妹紅お気に入りの横島について色々探りを入れてくるだろうと予想出来る……。図星だったみたいね？」
「……」
　ぐうの音も出ないとはこのことか。慧音は沈黙し、視線を逸らすことで肯定の意を示した。
「ふわあ……。わ、私には全然分かりませんでした。お嬢様凄いです！」
「ふふふ、安楽椅子探偵レミリアと呼んで」
「それは違うでしょ」
　小悪魔は純粋にレミリアを尊敬し、レミリアは調子に乗り、パチュリーは突っ込みを入れる。非常に居心地が悪くなる慧音であったが、そんな彼女の肌がピリピリとした魔

力の波動を感知した。

「……」

フランである。彼女は慧音を半目で睨み付け、むっすりとした表情を隠そうともしない。今、フランは非常に不機嫌になっていた。

「……フラン？」

急に不機嫌になった妹を訝しむレミリア。フランはふいと慧音から視線を外し、棘のある言葉を呟く。

「……こそこそと嗅ぎまわって、そういうのっていやらしいよね」

「む……っ」

フランの言葉に慧音は何も言い返せない。フランの突然の変わりように驚いたというのもあるが、痛いところを突かれたからだ。慧音はそれを受け止めるが、反論は別の所から出てきた。

「ちょっとちょっとフラン、根暗で引きこもりな本性が出てきてるわよ？　いつも被ってる猫はどうしたのよ」

「ねく……!?　べ、別に猫被ってないもん！　普段のが普通だもん！」

「さぁて、それはどうかしらねぇ？」

「むむむ……!!　お姉様だってただお兄様とかチルノ達の前では変にカッコつけた話し

方してるくせにー!!　あれ全然似合ってないよ!!」
「何ですってぇ!?」
「何さー!!?」
「ひえぇっ!?　お、お二人ともー!!?」
　突如として始まってしまった姉妹喧嘩。周りの者は完全に置いてけぼりになり、姉妹がポカスカと争う姿を見ているしかない。……割って入れば、恐らく骨の数本は物理的に折れるだろうから。
「……なあ」
「何？」
「フランは横島のこと……」
「ぞっこんみたいよ？　そこでオロオロしてる小悪魔もだけどね」
「そう、なのか……」
　慧音はパチュリーにフランの気持ちを聞き、同じく小悪魔の気持ちを知ることが出来た。何人もの少女が惹かれる横島とはどんな人物なのか、より興味がわいてくる。
「あのね、フラン。アンタ横島に似たようなことをされたことがあったでしょーが!!」
「ううう!?　そ、それは……!!」
「横島だから～とかそんなのは無し!!　言っとくけど、そういうのは駄目なのよ!?　私

は分かっててやってるから良いけど、無意識にそういう風に考えるのは危険なんだから!!」

「……!!」

「いや、何でそんな衝撃を受けてるの。それからレミィも無茶苦茶言わないの」

フランの気勢が削がれた瞬間を見計らい、パチュリーは何とか仲裁に入る。姉妹は肩で息をしながら、お互いに謝り合っている。慧音はフランへと歩み寄り、頭を下げた。

「すまなかった。ああいうことはもうしないよ」

「あ……うん。私も、えっと……ごめんなさい」

慧音はフランに謝り、フランは慧音に謝った。仲直りはこうして成功した。

「本当なら横島に謝るべきなんだろうが、な」

「別に良いんじゃない？　ぶっちゃけこっちだけの話だし。あいつも戸惑うだろうしね」

レミリアは手をプラプラと振り、この話はここまでと区切りを入れる。咲夜はその隙に皆のカップに紅茶のおかわりを注ぎ、大図書館では珍しい、客を交えてのお茶会が開始された。話題は勿論、横島についてである。聞きたいなら聞かせてやろうとレミリアが話題を振ったのだ。

和気藹々とした空気の中で、レミリアはふともう一人の客を思い浮かべる。

（あいつもこっちに来ればいいのに……。皆に遠慮をしてるのか、それともまだ紫の奴と話し込んでるのかしら？）

紅魔館のゲストルーム。そこでは紫が一人の少女とお茶を飲んでいた。紫の対面に座るその少女は、普段自分が飲んでいる紅茶とは味わいが違うことに感動し、何度も頷きながらも余韻を楽しむ。

「……こちらのお茶は美味しいですね。普段飲んでいる物とは大違いです」

「そっちでは茶葉の栽培は中々難しいでしょうしね。あの異変から条約は緩くなったとはいえ、そういった物を持ち込もうにも、環境が環境だしね」

少女は紫の言葉に頷きを返す。彼女が普段住んでいる場所は、緑を育てるに適していないのだ。

「貴女には感謝しています、八雲紫。私がこうしてここに来るのに、色々と骨を折っていただいたようで……」

「気にしないで。それより、ごめんなさいね。私の個人的な頼みを聞いてもらうために、

貴女をこっちに連れて来たりして」

目を伏せ、紫は少女に申し訳なさそうに謝る。しかし眼前の少女は笑みを浮かべ、首をゆっくりと横に振った。

「それこそ気にしないでください。私も趣味で書いている小説が詰まってしまったので、気分転換がしたかったんですよ。久しぶりの本物の太陽と美味しい紅茶で、すっかりリフレッシュ出来ました」

にこやかに語る少女に、紫は救われた気持ちになる。何せ、彼女はその能力故に表に出ることが酷く辛いのだ。にも関わらず、彼女はこうしてこちらに来てくれた。紫は何も言わず、紅茶を一口啜る。

「それに、貴女の話を聞いて、少し興味を持ちましたから。『彼』のこと、本当に大切に思っているんですね。それが伝わってきますよ」

「……少し、恥ずかしいわね。とにかく、その時が来たらお願いね。貴女の『能力』、頼らせてもらうわ。――――古明地さとり」

「ええ。任せてください」

幻想郷の遥か地下、地底に存在する旧地獄。そこには怨霊も恐れ怯む少女が住んでいる。『心を読む程度の能力』を持った、さとり妖怪。地霊殿の主、古明地さとり。

さとりは目を閉じて地上の紅茶の芳醇な味わいを堪能しつつも、自らに存在する器

官、『第三の目（サードアイ）』によって、絶えず紫を見つめていた。

第二十四話
『慧音先生の家庭訪問』
～了～

第二十五話『お前は、永遠の命を欲しいと思うか?』

「うっし、これで買い物は終了だな」
「それじゃ、早く帰りましょー」
横島と一号達は人里での買い物を手早く済ませ、紅魔館へと帰ろうとしている。横島としてはもう少し人里でゆっくりとしていても良いのだが、何故か一号達は急いで帰ろうとしている。
「おいおい、そんなに急かすなって。何かあったのか?」
横島は一号達の様子が少し気になり、聞いてみることにした。一号達は妙にそわそわとしている。
「……今日は滅多にこっちに出てこないお客さんが来る予定だから。……きっとおやつも豪華」
「ああ、なるほどね」
三号の回答に横島は苦笑した。三号は他の妖精メイドに比べて少々大人びた所があるのだが、興奮気味に豪華なおやつを夢想している姿は見た目相応の幼い少女そのものだった。

（これで俺よりずっと年上だっつーんだからなぁ。……紅魔館の妖精メイドが全員そうだとは思えねーよな）

横島忠夫、こう見えて紅魔館で二番目に若い存在である。

「早く帰りましょーよー！　早く早くー！」

二号が横島の手を取り、ぐいぐいと引っ張る。進行方向に目を向けずにいるものだから、二号は自分の背後に存在した通行人に気が付かなかった。だが、間一髪気付いた横島が二号を引き寄せることで事なきを得る。

「こらこら、ちゃんと前を見なきゃ駄目だろー?」

「ごめんなさーい……」

「そっちの子もごめ――――あれ?」

横島は二号を軽く叱り、二号とぶつかりそうになった少女に謝ろうと向き直ったのだが、そこにはすでに誰も居なかった。

「どうしたんですかー?」

「ん、いや。二号とぶつかりそうになった子に謝ろうと思ったんだけど……」

「……近くには誰も居ない」

横島達の周りには誰も居なかった。人通りがあるのは確かだが、横島達とぶつかりそうになるほど近くには誰も居ない。

「あれー、おっかしーな。もう行っちゃったのかな？」

横島は首を捻る。見間違いということはないだろう。何せその相手は中々に派手な色調の服装をしており、何より守備範囲外ではあるが、実に将来が楽しみになるほどの美少女だったのだ。

「……その人が居ないなら、もう帰りましょうよー」

「んー……そうだな、帰るか」

横島はもう一度周りを見回し、ぶつかりそうになった少女が居ないことを確認し、一号の言葉に従うことにした。

一号達が横島の体にくっつき、横島は霊力を操作して浮かぶことに集中する。

「んじゃ、戻りますか」

「はーい！」

横島の言葉をきっかけに一団は空を飛び、紅魔館への帰路に着く。横島は人里の様子を空から眺めながら、先程ぶつかりかけた少女のことを思い浮かべていた。――――何やら、霊感が疼くのだ。

（やっぱ見間違えじゃないと思うんだけどなぁ……。黒い帽子に緑色の髪、黄色い服なんていう派手な格好だったんだしなぁ……）

横島は何故そこまで自分がその少女を気にするのかに気付けていない。いや、気付け

るはずも無いのだ。彼は先の霊感の疼きを忘れてしまった。完全に、無意識の内に。
――それは、そう遠くない未来に、重大な決断を強いられる切っ掛けとなる。

第二十五話
『お前は、永遠の命を欲しいと思うか?』

「ふぃー、到着っと」
人里への買出しを終え、紅魔館へと戻ってきた横島達。横島は額に浮かんだ汗をハンカチで拭い、少々荒くなった息をゆっくりと整える。
「浮かぶだけとは言え、やっぱりまだしんどいですか?」
疲れが見える横島を心配したのか、一号が尋ねる。見れば、二号や三号も心配そうな表情を浮かべていた。
「ま、まだまだ精進が足りんってこったな。浮かぶのは結構慣れてきたけど、飛ぶのはま

だ難しいな。……早く自力で飛べるようになりたいもんだけど」

横島は近頃、空を飛ぶための訓練に重きを置いていた。まずは感覚を掴むために、買出しの際には霊力をコントロールして浮かぶことにした。一号達はそんな横島をしっかりと支え、補助をしつつ前進させる。最初の頃はすぐに集中が切れていつも通りに一号達に運んでもらっていたのだが、横島はほんの一週間程で人里までの距離ならば浮かんでいられるようになった。一号達の補助があるとは言え、これは驚くべき進歩であろう。

「あんまり無理しちゃダメですよー？」

「……最近疲れが溜まってるっぽい」

とは言え、元々霊力のコントロールが不得手な横島は無駄に力を入れすぎる嫌いがあり、それが原因で精神的な疲労が溜まってきている。一号達はそれを危惧していた。

「ああ、分かってるって。咲夜さんからも言われてるし、しばらくは買出し班から外れるみたいだしな。……これからは料理とか裁縫とかを重点的に鍛えるらしい」

一号達の言葉に頷き、これからの予定を話す。咲夜曰く「裁縫は即戦力になりそう」とのことだが、横島としては不安しかない。何せ彼がまともに縫えるのは雑巾くらいなのだ。咲夜が望むレベルの裁縫技術など、今の自分は有していない。

「咲夜さんのことだから、お嬢様や妹様の服とか、全部手作りなんじゃないかなー」

「それは……どうなんでしょうね?」
　横島がぽつりと呟いた言葉に、一号は首を捻る。咲夜の補佐をしている一号も、それについては知らないらしい。
「あ、見つけた!　おーい、横島さーん!」
「あん?」
　横島が一号達と雑談をしながら買出しの荷物を運んでいると、一人の妖精メイドが手を振りながら小走りに向かってくる。
「どした、そんな急いで?」
　ふうふうと息を整える妖精メイドの背中をさすってやりつつ、横島は問うた。妖精メイドは背中を優しくさする感触に頬を緩めながら、横島に報告をする。
「お嬢様が大図書館でお待ちです。何でもお客様がいらっしゃるとか……」
「そっか、知らせてくれてありがとな」
　横島は妖精メイドの頭を撫でると、一号達に荷物を任せて大図書館へと向かう。勿論その際に一号達の頭を撫でることも忘れずにいる。横島は妖精メイドへの対応が体に刷り込まれているのだった。
「……」
　一号達は撫でられた頭を一つさすると、ふんすと鼻息荒く仕事へと戻っていった。

「さて、一体誰が来たのかなっと」

横島は独り言を呟きながら大図書館の扉を開ける。レミリアがどこに居るのかは聞くのを忘れていたが、横島は「お嬢様のことだから」と、大図書館の中心部に居るだろうと当たりをつける。そうして向かった先には、やはりレミリアと他数人が居た。

「お嬢様、お待たせして申し訳ありません」

横島はレミリアに頭を下げる。客人が居るということもあり、その言葉は丁寧なものとなっていた。それは客人に悪印象を抱かせないようにするためと、客人が女性だったがために好印象を抱かせようと画策したからである。

「ああ、おかえり。別に気にしなくていいわよ、アンタも帰ってきたばっかだし――」

「ただお兄様おかえりなさーい!!」

「おふぅっ!!?」

「――ちょっとこら、フラン!?」

「よ、横島さん大丈夫ですか!?」

レミリアが頭を下げる横島に言葉を掛けるが、フランがそれを遮って横島に突撃。強烈な衝撃に横島は吹き飛ばされ、レミリアは奔放なフランを叱る。そして吹き飛んだ横

島を小悪魔が助け起こす。一連の流れはすでに日常茶飯事と化していた。咲夜も澄まし顔で平然としており、パチュリーは「毎回大変ね」と言って新しい本を取りに行く程には馴染んでいる。

「……妹紅が言ってた通り、人外に対して害意を持っていないんだな」

小悪魔に助け起こされ、彼女の頭を撫でながら感謝を告げる横島の姿を見て、慧音はぽつりと呟く。胸に張り付いたフランも頭を撫でてやっているその表情には、人好きするような笑顔が浮かんでいた。

「フラン、これで何度目か忘れたけど、アンタの力で飛びつくのは危険だっつってんでしょうが」

「でも、ただお兄様は毎回受け止めてくれるよ?」

「思いっきり吹き飛ばしといて、そーいうこと言うの……」

フランの返答に頭が痛くなるレミリアであった。その場はとりあえず横島の取り成しで収まった。レミリアは空気を変えるために咳払いを一つし、慧音へと向き直る。

「あーっと、色々あって紹介が遅れたけど、彼女が客人の上白沢慧音よ」

「はじめまして。人里で寺子屋の教師を務めている上白沢慧音だ。よろしく」

「ああ、君……じゃなくて、貴女が。妹紅から話はよく聞いてます。俺……じゃない。私は紅魔館の執事の横島忠夫です。こちらこそ、よろしくお願いいたします」

横島は妹紅から聞いていた慧音の印象から、いつもの砕けた言葉遣いはまずいと判断した。そうして彼の口から出てきた言葉は慣れていないのが丸分かりであり、慧音も思わず苦笑してしまった。

「ふふ……。いや、失礼。言葉遣いは普段通りで構わないぞ？　私もこんなだからな、お互い様ということで」

「あー……了解っす。とりあえず、慧音先生って呼ばせてもらいますね」

横島は慧音の申し出をありがたく受け入れた。正直、先程のような言葉遣いは違和感しかなく、彼の腕には鳥肌が立っていたほどだ。砕けた敬語なのは教師に対する苦手意識からだろう。

「それじゃ早速なんですが、慧音先生に聞きたいことがあるんすよ」

「聞きたいこと？　……ああ、何でも聞いてくれ」

互いに席に着いたところで、横島から慧音に話しかけてきた。慧音は少々驚いたが、逆に好都合でもある。質問の内容如何によっては彼の性格などが分かるからだ。慧音は少しの笑みを浮かべて了承した。

（うおー!!　可愛いやないかい!!　あともうちょっと育っとったら……!!　もうちょっと育っとったらーーーー!!!）

横島は内に煮えたぎる煩悩を表には全く出さずに「じゃあ遠慮なく」と笑顔を浮かべ

た。余談だが、とあるゲストルームにおいて心を読める少女が何故か紅茶を噴き出すという珍事が起こったらしい。曰く、「恐ろしいほどに強烈な意思だった」とのこと。

「慧音先生の知り合いに、俺よりも見た目と実年齢が年上で美人のナイスバディなお姉様が居たら紹介して欲しい……」

「はいはい、自分から好感度を下げるようなことをしないの」

「いひゃひゃひゃひゃ!!?」

外面は取り繕えても、所詮横島は横島だった。真剣な表情から紡ぎ出された言葉は煩悩に塗れており、純粋なまでに輝きを放つ瞳の色はピンク色をしていた。当然周りは横島の愚行を阻止するべく行動を起こす。今回横島を止めたのは新しい本を取ってきたパチュリーであった。

「パチュリー様、何かある度にほっぺた抓るのやめてくださいよ!」

横島はヒリヒリと痛みを訴える頬をさすり、涙目になりながらもパチュリーに抗議をする。パチュリーはそんな横島を見て、背筋に走るゾクゾクとした異様な感覚を自覚する。それは、癖になりそうな程の快感に似た何か。否。初めて頬を抓り、彼の涙目を見たときから、既に癖になっているのかも知れない。

「そういうことをされたくなければ普段からもっと落ち着きなさい。少なくとも初対面でするような質問じゃないでしょうに」

「いやいや、初対面だからこそあの質問をしたわけで……」

胸に宿る妙な感覚に多少戸惑いつつもパチュリーは横島にいつも通りに対応する。置いてけぼりにされ、その様を見ているしかない慧音にレミリアが苦笑を浮かべながらも横島の弁護をする。

「悪いわね。まあ、あいつもあいつで大変なのよ。四六時中妖精メイドに付きまとわれて、発散することもままならないんだ」

「あー……。思春期の盛りにそれは辛いだろうなぁ……」

レミリアの言葉の意味を正しく理解した慧音は顔を赤く染め、納得を示す。先程の質問で多少下がった横島への印象は、そういった状態でも周囲の少女たちへ手を出さないということを知り、回復していた。しかし、やはり初対面の女性にするような質問ではないために良い印象では決してないのだが。

「えっと、横島？」

「あ、はいはい。すんません、何か色々と焦っちゃって」

「いや、まあ、気にしなくてもいいさ。それより色々と聞きたいことがあるんだが、良いか？」

慧音は改めて横島へと話しかける。横島は多少追い詰められているような表情で謝罪をし、慧音に同情の念を抱かせていた。慧音とて横島よりはずっと年上だ。彼の年齢

で今の状況に追いやられる辛さは、その聡明な頭脳で容易に想像出来た。
　それはさて置き慧音は横島に数々の質問を寄越す。それは趣味・特技に始まり、幻想郷にやってきた経緯や紅魔館の執事になった理由など。いくつかは既に妹紅から聞いていたが、やはり本人から聞いた方が何かと分かりやすい。横島は特に隠そうともせず、質問に次々と答えていく。
「それじゃ次の質問はね～、ただお兄様の好きな食べ物が知りたいなー」
「そうっすねー。大抵の物は好きっすけど、特に好きなのはハンバーグっすかね」
　ここで活躍したのがフランだ。彼女は慧音の質問に便乗し、自分から様々な質問を投げかけている。フランの価値観ではこそこそと嗅ぎまわるのは駄目だが、真正面から攻めるのはOKらしい。
　慧音と横島達がにぎやかに過ごしている中、そんな彼らを覗き見ている者達が居た。
「にしししし、これは面白い場面に出くわしたわね……♪」
「おい、何で隠れる必要があるんだよ……?」
　輝夜と妹紅、蓬莱人の二人である。たまには静かに読書をしようと大図書館に赴いたのだが、ちょうど横島達が話しているところを見かけたのだ。
「とにかく静かに。私達が聞きにくいようなことでも、あの子なら無邪気な感じで聞きだしてくれるかもしれないじゃない」

「そんな理由かよ……、まあいいけど。しかし慧音の奴、ここに来るならそう言ってくれれば良かったのに」
「きっと言えないような理由があったのよ、きっと」
「言えない理由ねぇ……？」
妹紅は輝夜が掲げた隠れる理由に呆れるように溜め息を吐くが、そこはそれ。自分も気になることであるためにそれに従うことにした。二人とも好奇心という欲には弱いのだろう。
「えっと、それじゃ次はー……」
フランの声が響く。その声はどこか躊躇っているようにも聞こえる。輝夜達は話を止め、聞くことに集中する。
「えっと、ただお兄様の好きな女の子はどういう子なのかを教えて欲しいなー……？」
フランは指をもじもじと弄び、頬を赤らめ、上目遣いで横島に問う。その姿は非常に可愛らしく、レミリアや咲夜、小悪魔に輝夜の心が一瞬にて撃ち抜かれた。横島もまたフランのいじらしい姿に動揺を隠せない。
「なにあの子、お持ち帰りしたい」
「おいやめろ、紅魔館と戦争する気か」
（フランには後でお小遣いをあげよう）

「お、おう……。ん～、しかし、好みの女の子か……」
　横島は胸に去来する未知の感情に戸惑いつつも、フランの問いにあった好みの女性を思い浮かべる。
「んー……」
　横島の脳内にありとあらゆる女性が現れては消えていく。しかし、言われてパッと思いつくのは決まって一つのタイプ。彼の好みは非常に分かりやすかった。
「妹紅妹紅、横島さんのタイプの女の子ってどんな子だと思う?」
「ん?　あー……、てゐが気の強い女がタイプだとか言ってなかったっけ?」
「そうだったっけ?　……じゃあ私らで考えたら妹紅の方がタイプってことかな?」
「うえ?　……いや、私って気強いか?」
「……え?」
「……」
　妹紅は輝夜の「何言ってんだこいつ?」という視線を受け、落ち込んでしまう。自分が輝夜よりも横島のタイプの女性に近いことにほんの少しの喜びが過ぎるが、それにはまだ気付かない。そうこうしている間に横島がフランの問いに答えた。
「……ん。気の強い女の子、かな?」
「……そうなんだ」

横島はフランを見ながら答える。フランはその答えに俯いてしまう。自分はお世辞にも気が強いという性格ではなかったから。レミリアには強がって見せたが、彼女の本質は『強さ』ではないのだ。横島は何の気なしに答えたのだが、それによってフランが落ち込んだのを見て、困惑する。

「ふーむ、少し意外だな。横島は何と言うか、押せ押せな感じというか。大人しめな子が好みだと思っていたが……」

少し重くなった空気を変えたのは慧音だった。横島に対する印象から彼の好みのタイプを推測していたのだが、それは外れていたようだった。

「いや、まあ大人しい子がタイプじゃないってわけでもないんすけどね。ただ何というか、こう憧れるっていうか……」

「ほう……」

遠くを見て語る横島は誰かを思い出しているのか、どこか懐かしそうに目を細めている。その様子を見て、慧音は横島に対する印象を更に改めた。

（気の強い女性に憧れるということは、横島本人はその逆だということか？　自分に自信がない。コンプレックスを持っている……？　妹紅は横島には卑屈なところがあると言っていたが、傍から見ている分にはまだ分からんな）

慧音は少々考え込み、方針を決める。少し踏み込んでみることにした。

「しかし妖精メイドにかなりの人気があるようだし、やっぱり人間の女性にも人気があったのか?　例えば気の強い恋人がいたとか……」

「……!!」

慧音が何気なく聞いた事柄は、横島に多大なるショックを与えた。それは、ゲストルームに居る心を読む能力を持った少女が思わず紅茶を噴き出し、目の前の少女にぶっかけてしまったほどに強烈な思念だった。

「どーせ……!!　どーせ俺なんて……!!　ちくしょーーーー!!　そんなに俺は不細工か……!!　美形め!!!　美形めーーーー!!!　糞親父め……!!!　そして西条めえええええーーーーー!!!」

「え、ちょ、ええぇ……?　西条って、誰……?」

急に泣き出し、どこからか酒を取り出して呷りだす横島に慧音は困惑するしかない。横島の嫉妬による昏い情念はそれだけで人を呪い殺せるほどにまで高まっており、とある地底の橋姫の力が急激に膨れ上がったほどだ。恐るべきはモテない（と思い込んでいる）男の嫉妬心か。

「横島って別に不細工じゃないわよね?」

「私もそう思うけど……。その糞親父と西条とやらが、横島よりよっぽどモテてたんじゃない?」

（横島さんの笑顔は素敵だと思います……）
（ただお兄様、かっこいいと思うけど……）
レミリアとパチュリーは横島の容姿を悪くないと評し、小悪魔とフランは心の中で横島の容姿を褒める。本来なら口に出してしまいたいのだが、レミリア達はともかく、慧音の前でそれを言うことは躊躇われた。それは男性に好意を抱いていることを知られるのが少々恥ずかしいという微妙な乙女心のせいだった。
「ま、まあ落ち着け。えーっと、ほら！　こっちに気になる女の子とかいないのか？　お近づきになりたい子とか……」
慧音は男泣きする横島にいたたまれなくなったのか、話を強引に変える。内容自体は女の子に関することであるし、これならば横島も乗ってくるだろう。結果としては何とか思い通りになったのだが、何やらフランや小悪魔の視線が痛い。性格的にも肉体的にも横島の好みから外れているのが原因だろう。
「んー、皆可愛いから将来的には皆まとめて俺のもんじゃーとかそういう……」
「よし分かった。頭突きを食らえ」
横島は慧音の頭突きによって椅子から転げ落ちた。レミリアとパチュリーは「仕方ないなぁ」とでも言いたげな顔で横島を助け起こす。レミリアが右頬を、パチュリーが左頬を力いっぱい抓んで。

「あああああああ!!?」

頬を基点に持ち上げられた横島は痛みに悲鳴を上げるが、それを助ける者は一人もいなかった。普段なら割って入りそうなフランと小悪魔は横島の「俺のもん」発言に正気を失っていたから。

「……私らも入ってんのかな?」

「入ってるんじゃない?　まあ私の場合は難題をクリアしてもらわないと無理だけど」

横島達の話を盗み聞きしている妹紅達も、俺のもん発言に少なからず動揺した。輝夜はそういったことを言われ慣れているのか余裕綽々だが、免疫のない妹紅は顔を赤くしている。しかし直接言われたわけではないせいか、輝夜の言葉に反応出来るくらいの冷静さは残っていた。

「……難題?　あいつに出したのか?」

それは少し意外だったのか、妹紅は輝夜に問う。

「ええ。もし自分が交際を申し込んだらどんな難題を出すのかって聞かれてね」

「ふーん。それで、どんな難題なんだ?」

輝夜の難題は理不尽なことで有名だ。輝夜が横島にどんな無理を吹っかけたのか、興味が湧いてくる。

「簡単なことよ。――私の探している人を連れてくること。それだけよ」

輝夜は何でもないように答えた。だが、それに妹紅は大きく目を見開き、やがて深い溜め息を吐く。

「なるほど。そりゃまさに無理難題だな」

妹紅の言葉に輝夜は苦笑を返す。輝夜が横島に出した難題は、出した本人すら決して達成出来ないだろうことを理解している。達成出来る可能性はゼロではない。だが、限りなくゼロに近いのだ。特に、この幻想郷では。

「……ま、ここは幻想郷だからな。もしかしたら、あいつがひょっこり見つけてくるかもよ？」

「……本当にそうなったら、永琳も連れて横島さんに嫁ごうかしら。ついでに鈴仙とてゐも一緒に」

「……おいおい」

妹紅は輝夜の口ぶりに苦笑を浮かべる。輝夜は難題を達成することは不可能だと確信しているのだろう。妹紅には輝夜が男を弄ぶ悪女に見えた。

妹紅は輝夜の探している人物を知っている。勿論それは顔を見知っているということではなく、輝夜からその人物が何をしたのかを聞いたのだ。

結果、妹紅が得たのは理解と共感。何てことはない。結局、二人は似た者同士だったというわけだ。

妹紅達は視線を横島達に戻す。慧音が仁王立ちで横島に説教をし、横島は怒れる慧音に土下座をしている。レミリアとパチュリーは横島の尻を執拗なまでに蹴り、フランと小悪魔は少々はしたないまでににやけながらキャーキャーと語り合っている。慧音は横島を叱ってはいるが、そこに嫌悪という感情は見えなかった。横島の性質がそうさせるのか、楽しそうな雰囲気すら感じる。

その様を見て、二人は同時に吹き出した。

「もう慧音が馴染んでる」

「相変わらず溶け込むのが上手いわね、横島さんは」

性格的に相性が悪いと思っていたが、こうして見ている限りそれもなさそうだ。輝夜は思う。

「……真面目な学級委員長と、不良少年とか、それに近い感じかしら。中々萌えるじゃないの」

永遠の姫は俗世に染まっている。

「ふう、まったく……。男たる者、もう少し節度というものをだな……」

「すんませーん」

土下座を止めさせた慧音は新しく入れられた紅茶を飲みつつ、未だぶつぶつと横島に説教をする。横島は情けない顔で謝っているが、まだまだ終わりそうにない。慧音の説

教は長いのだ。しかし、そこに咲夜が割り込んでくる。
「もうそこまでにしておいてあげたら？　冗談の一言でこれはいささかやりすぎよ」
「むう……。それも、そうだな」
慧音は咲夜の言葉に頷いた。何かいつもよりも執着が強い気がするのは、横島への嫉妬故か。そこで慧音は思う。結局横島は妹紅のことをどう思っているのだろうかと。
「……」
しかし、それを一体どうやって切り出したものか。慧音は考える。何か、彼の考え方からそういった話に持っていけないものか……。
「――――そういえば」
唐突に慧音は思い至った。ここに来るまでに一度は考えていたことだ。それを聞くのもいいだろう、と。しかし。
「……？」
慧音はちらりとフランを見る。これを聞くのは彼女の前では中々に酷なことだ。彼女に席を外してもらおうにも、彼女自身に一度苦言を受けている。暫しの間悩んだが、慧音は聞くことにした。いずれは確認しなければならないことだからだ。慧音はまず疑問の一つを口にする。
「横島は……」

「はい?」
「横島は、妖怪達も恋愛対象に含んでいるようだが、相手との寿命の差はどうするんだ?」
　瞬間、空気が変わる。
「……寿命っすか」
　いくら人間離れしている横島でも、結局のところ彼は紛れもない人間。妖怪と比べてその一生は一瞬だ。横島は天を仰ぐ。
「んー……、正直、あまり考えたことはなかったっすね……」
　彼から出た言葉は能天気な響きさえあった。レミリアからはあからさまなほどに大きな溜め息を吐かれる。
「ま、アンタらしいっちゃらしいけど。……吸血鬼にしちゃえば問題解決じゃない?」
　とりあえず横島の寿命の解決策を一つ提示する。周りはなるほどと頷いたり、魔法使いにすることで寿命を無くすという案も出している。
「ははは……」
　それに対し横島は苦笑いを浮かべるのみ。慧音は皆の様子に疑問を持っていたのだが、それよりも横島の方が気になった。
「なあ、横島」

「何すか？」
「お前は、『永遠の命』を欲しいと思うか？」
「……」
沈黙。それは慧音の質問がおかしなものだったからではない。横島の雰囲気が、変わったからだ。
「……？」
何が変わったのかは分からないが、何かが異質なことだけはその場の皆には理解出来る。しかし、どう変わったのかを真に理解出来るのは、今はこの場にいない少女のみ。
「――――!?」
ゲストルームにて紫と談笑していた少女、さとりは弾かれたように立ち上がった。彼女が目を向けるのは部屋の壁。否、そのずっと向こうにある大図書館。
「これは……」
さとりは驚愕する。まさかこんな状態の心があるのかと。それでいて、常人のように安定していることに。さとりは紫に視線を送る。心の表層しか覗けない自分ですらはっきりと分かる異常性。紫の手助けで遠く離れた少年の心を感じることが出来ているが、その原因までは読み取れない。
「後で、彼に時間を取ってもらうわ」

「……はい」

紫の言葉を聞き、さとりは深く息を吐いてソファーに腰を沈める。どうやら、思っていた以上に大変な息抜きになりそうだ。さとりは少しぬるくなった紅茶を啜る。その際に紫がさとりに対して警戒するようなそぶりを見せたのは、仕方の無いことだろう。

慧音は横島の言葉を待つ。彼は目を瞑り、何か考えを纏めているように思える。

「永遠の命。ずっと若い体。女の子ナンパし放題で遊び放題！　ま、ロマンではありますよねー」

彼の言葉はふざけたものであったが、彼はふざけてなどいない。事実、彼が発する雰囲気は非常にまともなものだった。

「たしかにそういうのに憧れたこともありますね。……でも、俺は永遠ってものに良い印象を持ってないんすよ」

横島の口元は皮肉気に歪んでいた。

「お嬢様達には話しましたけど、俺が元居た世界では、魔神の一人が人間界に攻めてきたんすよ。アシュタロスって奴です」

横島の言葉に驚愕を示し、慧音はレミリア達を見る。彼女達は神妙に頷き、それが事

実であることを肯定する。その様から、何らかの手段によって横島の話に対する確証を得たのだろう。慧音は横島の話に集中する。

「そいつの目的は二つありましてね。一つは今の世界を滅ぼして新しい世界を作ること」

何とも壮大な話だ。慧音は我知らず唾を飲み込んだ。

「……もう一つは、自分が完全に死ぬこと」

「……な、に？」

慧音は目を大きく見開いた。魔神の一柱が死ぬことを望むとは、一体どういうわけか。

「俺の世界では、神魔族がデタントの状態にありましてね。互いに小競り合いはしていたみたいっすけど、基本的にはこう、仲良くしてたみたいで」

「……デタント。緊張緩和、というやつか」

慧音の言葉に横島は頷いた。

「んで、アシュタロスは魔界でもトップクラスに強い奴でしてね。神魔のバランスが崩れたらマズイってんで、一部の強力な神魔族は死んでも強制的に生き帰させられるんですよ。記憶もそのままで」

「な……」

「あいつは『魂の牢獄』って呼んでたみたいっすね。あいつは魔族だから、最終的には必ず負けないといけない戦いを何度も強いられて、何回死んでも生き返って、また負けて死んでも何回も生き返って」

それは、何と言う地獄だろうか。慧音は沈痛な面持ちで俯いた。その地獄に、覚えがあったから。

「……」

横島の話に衝撃を受けたのは、慧音だけではなかった。その場の、全員だった。以前話した時には語らなかった、魔神の侵攻の真実。なるほど、その理由は理解出来た。

「……ほんの少し、妹紅に似ているな」

慧音が呟いた言葉に、空気が重くなる。妹紅は不老不死の蓬莱人。その魔神のように、幾度と無く死を望んだこともあるだろう。もしかしたら、今もそうかも知れない。

「……?」

非常に重たい空気が支配する中、その理由がまるで理解出来ていない人物が一人だけ存在した。

「一体、今の話のどこに妹紅と似た要素が……?」

「――――は?」

横島の台詞に、始めに反応を返せたのは誰だったか。

「……いや、妹紅は蓬莱人なんだぞ？　その魔神と同じように考えることもあるかもしれないじゃないか」

慧音は横島に言葉を濁しつつもそう言った。その言葉が意味することに、横島は衝撃を受ける。

「なにーーーー!?　妹紅は蓬莱人だったのかーーーーーーー!!?」

「って、気付いてなかったのかーーーー!!」

だあぁっ!!　と皆が盛大にずっこける。それは妹紅達も例外ではなかった。

「いやー、人間にしてはやたら長生きしてるっぽいとか、あと色々気になるところもあったけど、まさか蓬莱人だったとは……」

「……そういえばこいつ、蓬莱人のこと私が教えるまで知らなかったのよね……」

何か感心している横島を見て、パチュリーが頭痛に耐えるかのように額を押さえながら呟いた。

「あ、ちょっと待ってくださいよ。だとしたら、妹紅もいわゆる月人ってやつっすか?」

「ん?　いや、妹紅は純粋な地球の人間だが……、何故だ?」

「あー、何か永琳先生や輝夜様と、こう何というか……。そう、存在?　が似てるというか……。そうか、あの二人も蓬莱人だったんすね」

うんうんと納得する横島に、慧音は感心を覚える。何だかんだ情けない部分ばかりが

目立っているが、その観察眼は中々のものであるようだ。では、何故妹紅が魔神と似ていないと思うのだろう。

「妹紅なんすけど、あいつ、めちゃくちゃ可愛く笑うんすよ」

「……ん?」

横島は唐突にそう言った。惚気かとも思ったが、どうやらそうではないらしい。彼は柔らかく微笑みつつも、真剣な光を瞳に湛えている。

「妹紅が美味い飯を食べてる時とか、妖精メイドを構ってやってる時とか、掃除や洗濯を上手く出来た時とか。あいつ、笑うですよ。そりゃもう、嬉しそうっつーか、楽しそうっつーか」

「……」

「そりゃ俺は妹紅がどれだけ生きてて、どれだけしんどい思いをしてきたのかは知りませんけどね? 俺なんて二十年も生きてない若造ですし。でも、俺は今の妹紅なら知ってます。些細なことでも笑って、喜んで。食事を抜いたり寝なかったりもしてたりしますけど、妹紅はそれも全部ひっくるめて今を楽しく生きてると思うんすよ。アシュタロスみたいに死にたいなんて思ってたら、あんなに生き生きと笑えないんじゃないっすかね?」

「――――!!」

慧音は頭を鈍器で殴られたかのような衝撃を受けた。

妹紅のことを思い返してみる。確かに自分は幻想郷において誰よりも妹紅のことを知っているだろう。だが、それによって妹紅に対する認識が誤っていたのではないか？

確かに妹紅はよく笑っている。慧音はそれを何度も見ている。しかし、それは本当に妹紅の笑顔を見ていたと言えるのだろうか。

妹紅は輝夜への復讐のために蓬莱の薬を奪い、蓬莱人となった。それからおよそ千年もの間、輝夜に復讐するためだけに日々を過ごしてきた。時には人と寄り添い、裏切られ、それでも人と共にあり、やがてこの幻想郷へと幻想入りした。慧音はその辺りの詳細を聞いたことはなかったが、おおよそどんなことがあったかは推察出来ていた。

――――それが、認識を誤らせていたのではないか？

慧音は思う。確かに妹紅は頻繁に食事を抜いたり、あまりちゃんとした睡眠を取らないことがある。慧音はそれを、自分には訪れない死を少しでも身近に感じようとしているのだと思っていた。

だが、もしそれが違っていたのだとしたら。歪んでいるが、それらは生の実感を得るための行為なのだとしたら。彼女の笑顔の意味はまるで違ってくるのではないだろうか。

妹紅の笑顔。本当に眩しい、心からの笑顔。そこに、死を望む陰鬱さは、存在しない。

「……よく気付けたものだ。いや、知らなかったからこそ、なのかな」
　改めて考えてみれば、横島の言うとおりに思える。妹紅について知っているからこそ誤った認識を抱き、知らなかったからこそ正しい認識を抱けた。
「なあ、横島」
「何です?」
「お前は、『永遠の命』を欲しいと思うか?」
　それは先程と同じ問い。横島は「んー……」と考え込む。
「……俺自体は、あんまり妖怪になるとか、魔族になるとかに忌避感は無いんすよ」
　彼の脳裏に浮かぶ、あまりにも短い時を駆け抜けた少女。いつか言った、『俺は俺らしく』。たとえ心がバラバラであっても、いつだって彼の中心に在り続ける少女への誓い。
　横島は自らの胸に手を添える。
「……」
「でも……。でも、俺は今ちょっとした問題を抱えてますから。それに、何て言えば良いかな……。上手く言えないんすけど、俺はこのままの方が俺らしくいられると思うんですよ。だから、永遠の命は、いらない……っすかね」
「――――そうか」
　横島の答えを聞いた慧音は、薄く微笑んだ。慧音は脳裏に、とある未来を幻視する。

――――こいつなら、良いのかもな。

横島を見る目を眩しそうに細め、慧音は心の中で呟いた。

「横、島……」

そして、慧音と同じことを考える者が存在した。

（妹紅……）

輝夜だ。妹紅の隣にいる彼女は妹紅の表情を盗み見る。妹紅は、今自分がどのような表情をしているか気付いていないだろう。自分の歪みを捉え、それでもそれを受け入れる。無意識に胸を押さえる彼女は、胸を焦がす熱に浮かされた、女の顔をしていた。

……少しだけ、妹紅を羨ましく思う。ここまで誰かのことを理解出来る者など、稀だろう。

「横島さんへの難題。もっと、簡単なのでも良かったかな……？」

我知らず呟いた言葉は、誰にも聞かれることなく大図書館に溶けていった。

その後、横島達と慧音は穏やかに時間を過ごす。永遠の命をいらないと言った横島に対し、フランと小悪魔の二人はあからさまに落ち込んだ。逃れられぬこととは言え、別れは必ずやってくる。愛する者と出来れば共に永遠を生きたいと思うのは、罪ではないだろう。

出逢いがあるからこそ別れがあり、別れがあるからこそ出逢いは尊いのだ。

横島は落ち込んだ二人に笑いかける。色んな話題をふり、時にはスキンシップを交え、二人にいつもの元気を取り戻そうと。レミリアもパチュリーも、咲夜もそうだ。

その甲斐あって、二人にもぎこちなくだが笑顔が戻る。二人は精一杯の笑顔で言った。

「もしもの時は、むりやり長生きしてもらいます!!」

鼻息荒い二人の言葉に、周りは笑う。強がりで浮かべたものだろうと、二人の笑顔にはそれだけの力があったから。

だから、横島も笑った。突如走った霊感。それに意識を向けないように――――。

第二十五話

『お前は、永遠の命を欲しいと思うか?』

～了～

第二十六話『ココロの形』

陽もやや傾いてきた夕刻。慧音との大図書館での歓談は未だ続いていた。レミリアとパチュリー、咲夜が横島の恥ずかしい失敗などを語り、横島の羞恥心を煽る。特にパチュリーが率先して話し、横島を悶えさせていた。それを眺めているパチュリーの肌はどんどんと艶を増していき、表情は色気を帯びていく。どうやら厄介な扉を開いたようだ。

そんないつもの様子とは明らかに違うパチュリーに親友のレミリアだけでなく他の者も戸惑っているが、それでも一番動揺しているのは横島だった。いや、それに関してはパチュリーは関係していないのだが。

「……あれ？　ただお兄様、どうかした？」

「ああ、いえ。何でもないっすよ、フラン様」

「あの、何かあったらちゃんと言ってくださいね、横島さん」

「……うん。分かってるよ、小悪魔ちゃん」

横島が動揺している理由。それはフランと小悪魔の行動にあった。

現在フランは横島の膝の上に座っており、時折体を横島に擦り付けている。小悪魔は横島の隣の席に腰を下ろしているのだが、その距離は肩が触れそうなほどに近い。最初は肩が触れると体を少し跳ねさせるほどに緊張していたのだが、今では横島の手を握り、指を絡めたりなど大胆な行動をしてくるようになった。

これには本人達の前で「ワイはロリコンやない!!」と言って憚らない横島も心を揺さぶられる。

（何なのだ、これは！　どうすればいいのだ!?）

この心の声で、彼がどれほど動揺しているかが分かっていただけたと思う。いつもなら動揺したときには関西弁が出てくるのだが、今はそれすらも通り越してやたらとシリアスな言葉遣いとなっている。もはや彼にいつもの余裕は無く、二人の少女の行動にただただ翻弄されている。流石に、ここまで露骨に行動に起こされては、横島もとある事実に気付かざるを得なかった。

フラン達がこのような行動に出た理由は、いたってシンプルなもの。『横島が寿命で死ぬ前に沢山ラブラブしたい』というもの。何せ二人は魔族であり、人間とは寿命の桁が違いすぎる。二人としては横島を人外にして寿命を延ばしたいのだが、思い人である横島はそれを望んでいない。

ならば、どうするか。

「ただお兄様、このクッキー美味しいよ？　お兄様も食べてみて？」
「あ、ああ、はい。いただきます」
「はい、あーん」
「うえっ!?」
「それではこちらもどうぞ、横島さん」
「ふおぉあ!?」
　全力を以っていちゃいちゃする。それが二人が出した結論だった。そうやって横島が自分達に靡けば、寿命を延ばしたくなるかもしれないという打算も無きにしも非ず。横島が他に恋人を作ったり、元の世界に帰ったりということを最初から度外視しているが、それには彼女達なりの考えがあった。
「……モテモテね、横島」
　レミリアはフラン達の様子を見て溜め息と共にそう呟いた。それには横島に対する少しの嫉妬も混じっていたが、それよりも寂しさの方が強い。言わば娘を嫁に出す父親のような心境だろうか。
　レミリアとしてはフランが横島に好意を抱いていることに文句は無い。何しろ彼はフランの恩人であり、自分も彼には恩と好意を抱いている。その内容はフランとは別のものだが、好いているということには違いは無い。しかしフランとそういう仲になるの

なら、寿命は延ばしてほしい。だが横島の意見も尊重したい。
　レミリアは咲夜と同様、横島のことを甚く気に入っていた。
「……ん？」
　レミリアは紅茶を一啜りする。そこで、ソーサーの横に小さく折り畳まれた紙切れがあることに気付いた。それにはデカデカとやけに丸い文字で『ゆかり』と書いてあり、レミリアは何とも言いがたい微妙な気分になった。
「……ふむ」
　レミリアは紙切れを開き、内容を読む。そこには『横島君と一緒にゲストルームにまで来て』とだけ書かれていた。
「……」
　レミリアはフランの邪魔をしたくないのだが、何となく横島を連れて行った方がいいかという思いが頭を過ぎる。別にフランが自分以外にくっついているのが気に入らない訳ではない。出来ればその笑顔を自分にも向けて欲しいとも思っていない。とにかく、レミリアは泣く泣くフランの邪魔をすることにした。
「……フラン、お楽しみのところ申し訳ないんだけど、急用が出来たから横島を連れて行くわ」
「えぇーーーー!?　そんなのやだ!!」

「やだじゃないの、やだじゃ。大事な用なんだから、我慢しなさい」
「む～～～……」
「……フラン様、まだまだチャンスはありますから」
レミリアの言葉に反発するフランだったが、結局は小悪魔の説得に折れた。去り行く横島の後ろ姿を指をくわえて見つめる様は動物的な可愛さを連想させる。それを慰めるのは小悪魔だ。
慧音は一連の流れを眺めていたのだが、どうにも疑問が膨れ上がっていく。
「なあ、フランと小悪魔。二人に質問があるんだが……」
それは抑えきれず、ついには二人に対する質問として口に出していた。
「なぁに？」
「何ですか、慧音さん？」
揃って首を傾げる姿は良く似ている。何故互いに平然としていられるのか、それが慧音には分からない。
「二人とも、横島のことを好き……なんだろう？」
「……っ!?」
二人の反応は劇的だった。一瞬で顔を真っ赤に染め、視線が右へ左へと移動し、最終的には同時に頷いた。そのあまりにも分かりやすい反応は、皆に生暖かい目で見られる

ほどだ。

「……言わば二人は恋敵なわけだが、それについて思うところは無いのか？」

慧音の疑問は尤もだ。男一人に対し、女は二人。本来なら男を巡って骨肉の争いが繰り広げられるのだろう。事実、人里でもそういった事件はいくつか存在した。それを鑑み、慧音は当然この二人も横島を取り合うことになるのだと思っている。思っているのだが……。

「？」

「……あはははは」

フランは先程と同じく首を傾げ、小悪魔は苦笑いを浮かべていた。

（……んんんんんん？）

その様子を見て慧音は何か自分が的外れなことを言ったのではないかという錯覚に陥ってしまう。

「あの、慧音さん」

「……あ、ああ。何だ？」

慧音は少々呆然としてしまったのか、反応が遅れてしまう。小悪魔は慧音の様子に申し訳なさそうにしていたのだが、慧音の疑問には答えなければいけないだろう。

「えっとですね。慧音さんの言うことも尤もだと思うんです。確かに私達は恋敵、本当

なら横島さんを取り合うんでしょうけど……私達は、魔族ですから。そういうことはあまり気にしないんですよ」

「……」

「あ、勿論そういうのに凄く厳しい魔族の方もいますよ？　ですが、私は数多く存在する低級魔族の『小悪魔』であり、フラン様は同族をたくさん作り出せるけれど、個体数の少ない吸血鬼ですから。そういうことに特別な意識は持ってないんですよ」

小悪魔のたどたどしい説明を聞き、慧音は得心が行く。

（……なるほど、種族としての性質か。しかし、それでは……）

小悪魔のような低級魔族はそれこそ有り余るほどに存在する。それは自分達という種が弱者であるが故に多くの子を産み、血を絶やさない為に。フラン達吸血鬼の場合は圧倒的強者であるが故にその絶対数が少なく、増えづらい為に多くの血を残そうとする。そういった場合、心身共に健康で霊力も強く、精力旺盛な男性が望ましい。横島はその条件に見事に合致する。フランと小悪魔の遺伝子……霊基構造にも、それが刻み込まれている。それを鑑みて今回の場合、本来ならば強者特有のプライドが低級な魔族との馴れ合いなど認めないのであろうが、フランにはそれが無い。勿論、小悪魔にも圧倒的強者たるフランへの忌避感などは皆無だ。

慧音が小悪魔の話を聞き、抱いた一つの心配事。それは次の言葉で吹き飛ぶこととな

る。

「お嫁さんがいっぱいで、しかも魔族とかなら横島さんも長生きしたくなるかもしれませんし。それに、私はフラン様のことも横島さんと同じくらい大好きですから」

何の屈託も無く飛び出た言葉に、慧音だけでなくフランも驚いた。

「そ、そーなの、小悪魔……？」

「はい。勿論ですよ、フラン様！　……恋愛的な意味では、ありませんよ？」

心底から驚いたという顔をして尋ねるフランに、小悪魔は即答を返す。ちょっとした注釈も加えたが。

「フラン様は昔から私達の前でもあまり笑顔を見せない方でしたけど、レミリア様と横島さんのおかげで、最近は凄く可愛らしく笑ってくださるようになりましたから。妖精メイド達をお手本に他人との交流を計ったり、何回も失敗して、それでもそれを飲み込んで前に進んで行って……。そんな姿を見ているうちに、私はフラン様を尊敬するようになったんです」

「……」

小悪魔の語る内容に、フランは脳の処理が追いつかない。それでも彼女の頬は赤く染まり、何か喋ろうにも言葉が出てこないのか、ただ口をあうあうと開閉させるだけの結果となった。

「横島さんと出会ってからは、それがもっと顕著になりましたし、フラン様が輝いて見えるようになりました。フラン様が横島さんを好きなんだと気付いたとき、私は嬉しくなったんです。私が好きな人を、フラン様も好きになってくれたんだ、って。……もしかしたら、私の方が後かもしれませんけどね」

「小悪、魔……」

「だから、えーっと……。その、私はフラン様が大好きなんですよ！」

「最後は勢いだけじゃないの……」

照れ臭そうに話す小悪魔は、自分の内心を上手く言葉に出来ず、最後は鼻息荒くフランへの好意をはっきりと示した。それはパチュリーには少々呆れられたが、それでもその不器用ながらも真っ直ぐな気持ちは、フランへと届いた。

「……」

フランは小悪魔の言葉に応えたい。だが、何と言えばいいのかが分からない。目を閉じて深呼吸をする。繰り返し行い、高揚していた気分も幾分か落ち着いてくる。

フランはゆっくりと目を開け、小悪魔を真っ直ぐに見つめ返す。彼女の第一声は――。

「小悪魔が言ってくれたこと、その、すっごく嬉しかった」

「フラン様……！」

小悪魔の顔がパッと輝きを増す。
「――――でも、こんな人前で言うようなことじゃないよね？」
「……」
小悪魔の呼吸が止まり、一瞬で顔色が真っ青になった。
「私が気にしてることを遠まわしに言ってさ、結局最後はよく分かんない感じになってるしさ」
「す、すすすみませんすみません!?」
まさに天国から地獄。フランは拗ねたように唇を尖らせ、いかにも不機嫌ですというアピールをする。小悪魔はもう謝ることしか出来ない。フランの口端が柔らかく弧を描いていることを、頭を下げている小悪魔には気付けなかった。
「……小悪魔って、ただお兄様に似てるのかもね」
「すみませんすみませ――え？」
小悪魔は気付いてくれていたのだ。変わろうと足掻いていた自分の心。そして、変わっていくことが出来た自分の心を。
「えへへ。私も小悪魔のこと好きだよ？」
「え!?　ほ、本当ですか!?」
「うん！　今までよりもずっと好きになったかも」

「そうなんですか？　……なんだか良く分からないですけど、良かったです！」

小悪魔は大きく息を吐き、あからさまにほっとしている。小悪魔もフラン同様気が強い方ではない。フランは小悪魔が自分に似ているかもしれないと思っていたが、思い人である横島にも似ていると感じ始めていた。

「小悪魔のこと、今度からお姉様って呼んでみようかなぁ？」

「えええ!?　そそそそんな恐れ多い!!　何よりレミリア様に殺されちゃいますよー!!?」

「むむむ……。だったら、『お姉ちゃん』はどうかな？」

「お、お姉ちゃん……ですか？」

「うん。――小悪魔お姉ちゃん！」

「――――!!!!」

その時小悪魔に電流走る。胸を貫く衝撃。痛みにも似た、快感ともつかない不思議な感覚が全身を駆け巡る。

「あああああ……!!　ふ、フラン様可愛いですー!!　可愛すぎますよー!!」

「うわっぷ!?」

小悪魔がフランを抱きしめる。小悪魔はただ可愛い可愛いと連呼し、フランも痛いと文句を言いながらもその顔は嬉しそうに緩んでいる。横島の件に対し二人に言葉はいらない。周りのことなどそっちのけで盛り上がっていた。

「……結局、どういうことなんだ？」

　慧音がぽつりと呟いてしまうのも無理はないだろう。二人の話は二人の中で完結している。それは良い。だが、それを強制的に聞かされて、しかも良いところで自分達には分からないようなことにされてはたまらない。

「ふむ。私が要約しましょうか」

「……ああ、頼む」

　名乗りを上げたのは今居るメンバーの中で、最もフラン達との付き合いが長いパチュリーだ。彼女は紅茶を一口啜り、唇を濡らしてから結論を述べる。

「簡単に言えば……『横島とイチャつきたい』……かしら」

「それは要約しすぎだ」

　慧音の容赦の無いツッコミに少々残念そうな表情を浮かべる。小さく溜め息を吐くと、今度こそ真面目に話し始めた。

「小悪魔が最初らへんに『取り合いとかそういうのは気にしない』って言ってたでしょ？　それがそのまま答えなのよ。妹様も小悪魔も横島が好き。だから二人とも横島と付き合いたい。種族的にも男に嫁が何人かいても特におかしいことではない。人間の常識なんて適用されないしね。……なら、二人が同時に横島と結ばれても良いじゃない。美鈴とか、もっと増えるかもしれないけど」

パチュリーの言葉に慧音は唸る。言われてみればそうなのだ。二人は人間ではなく魔族であり、その常識なども人間とは違うだろう。常識について違いを語り合えばどれだけの時間が掛かるか分かったものではないが、少なくとも恋愛観についての違いは多少理解した。横島さえそれに納得が出来れば二人は晴れて横島と恋仲になり、皆は幸せになるだろう。……レミリアの手によって付き合った日が横島の命日になるかも知れないが。

「うー……ん」

慧音は腕を組んで目を閉じ、顔を天井へと向ける。彼女は悩む。本人達がそれで良いと言うならそれで良いのだろう。教師として言いたいことが無いでは無いが、まあ納得も出来なくはない。問題なのは慧音が最も気にしている人物のことだ。

「……妹紅のこと？」

「……ああ」

パチュリーが横でキャイキャイとはしゃぐフラン達を気にしてか、小声で聞いてくる。それに慧音も同様に小声で返す。

慧音は妹紅が横島に惚れ込んでいると思い込んでいる。彼女は蓬莱人ではあるが、人間だ。当然常識なども人間のもの。なので思い人である横島に恋人が複数出来る場合、妹紅がそれを看過出来るとは思えない。最悪の場合刃傷沙汰にまで発展するかもしれ

ない。慧音は顔が青くなることを抑えられなかった。
慧音が望むのは妹紅の幸せである。失恋も良い経験になるという考えも理解はしているが、それでも妹紅には好きな人と結ばれてほしい。
慧音は唸る。どうにかして妹紅が横島と幸せになるように、様々な道を模索する。
……慧音は思い込みが激しく、頭が固い。故に失念していた。妹紅が平安時代の生まれであるということを――――。

第二十六話
『ココロの形』

ゲストルームに向かうレミリアと横島の間に会話は無い。彼らの間に存在するのは気まずげな沈黙だけだった。とは言っても、そのような空気を感じているのは横島だけであり、レミリアはただ単に、先程から何度も話しかけようとしながらも話しかけてこ

ない横島が決意を固めるのを待っているだけなのである。
もうすぐゲストルームに着くだろう。その段階に来て、横島はようやく決心した。
「あの～、お嬢様……？　つかぬ事をお聞きしてもよろしいでしょーか……？」
「んー？　良いわよ、言ってみなさい」
緊張しきりの横島と違い、レミリアはあくまでも自然体だ。横島にはそれが燃え滾る怒りを押し殺しているようにしか見えない。知らず、横島の喉が鳴った。
「あの、もしかしてなんすけど……。フラン様と小悪魔ちゃんって、俺に惚れてたりとかそういう……？」
「まったく……。何を言っているんだ、お前は」
「なはは、そうっすよね！　俺が二人に惚れられるとか、そんなわけ――――」
「あの二人の態度を見ればお前にぞっこんなのは丸分かりだろうに。気付くのが遅すぎるわよ」
「……やっぱり、そうなんすか？」
横島はレミリアの言葉にふざけるのを止め、真剣に返す。横島に去来した感情は、まず喜びだった。彼女達は見た目が幼いとはいえ、それでも頗る付きの美少女達だ。そんな彼女達に惚れられていると知ったのだ。嬉しくないわけがない。だがそれと同じくらい、否、それを超える疑問と戸惑いも沸々と湧き上がって来る。

「あの二人が俺に……？　ついに俺にもモテ期が来たのか？　俺の時代が来たのか……!?　……いやいや待て待て。俺だぞ？　貧弱なボーヤだの不細工だの言われ続けてきた俺なんだぞ？　本当に好かれてるのか？　まさか勘違いなんてことは……」

横島は腕を組んで何事かぶつぶつと呟き始める。横島は何故自分が二人に好かれているのかがとんと理解出来ず、ちょっとした混乱状態に陥ったらしい。普段の横島ならば美少女に好かれていると分かった時点でその対象に飛び掛っているのだろうが、いかんせんその対象の見た目が幼すぎた。加えて、横島はコンプレックスの塊だ。あの二人に懐かれているとは思っていたが、それが色恋にまで達する感情だとは露にも思っていなかったのだ。

横島のその卑屈な態度は既にレミリアも見慣れた物なのだが、それでも今回は看過出来ない。レミリアは横島の頭に軽く拳骨を落とした。

「あのね、アンタがコンプレックスの塊なのは今までの言動から理解してるけど、だからってあの子達の気持ちまで疑うのはやめなさい。あの子達は本気でアンタのことが好きなんだから。……それは私が保証してあげる」

「……」

横島は殴られた頭をさすりながら、レミリアの言葉を聞いた。ぐうの音も出ないとはこのことだろう。自分のことばかり考えて、二人の気持ちを勝手に偽物にしてしまうと

ころだった。

「……そう、っすね。こんな考えは二人にも失礼ですよね。すんませんでした」

だから、横島は素直に頭を下げる。表情からは、真剣に反省したのだということが察せられる。レミリアは下げられた横島の頭を今度は優しく撫で、「行くわよ」と言って先を歩き出す。横島はレミリアが自分から三歩分進んでから歩き出し、もう一度、小さく頭を下げた。

（横島の奴、あれだけ仕事で優秀なところを見せてるのに、何でこんなコンプレックスの塊になったのかしら。一体どんな幼少期を過ごしてきたのか、興味が湧いてきたわね）

レミリアは横島の様子を気配で察しつつ、彼のコンプレックスについて考える。恐らく人格の構成される幼少期に何かしらがあったのだろうが、今はそれも置いておく。レミリアが見つめる先、そこにあるのはゲストルームの扉だ。ここを開ければ、そこに居るのは紫ともう一人。いや、永琳あたりが嗅ぎつけてくるかもしれない。

ノックを四回。いつものレミリアならノックなどせずに勝手に入室するところだ。だが、今回は何となくノックをして、相手の返答を待つ。中々に新鮮な気持ちだ。

「はーい？」

「レミリアよ。横島を連れてきたわ。……入っても良いかしら？」

「ええ、勿論よ」

レミリアは横島をちらりと見る。本来ならばこれは横島の仕事だろう。だが、これもこれで悪くない。気分は出来の悪い弟の世話をするお姉さんだ。
「入るわよ」
「うっす」
横島に一言声を掛け、レミリアは扉を開いた。
「いらっしゃい、二人とも」
そこに居たのは紫と永琳、そして横島にとって見覚えの無い少女が一人。
（ん？　あの子が一号達が言ってた珍しいお客さんか？　ふむ……文句なしの美少女だ。もっと成長したらデートしたい）
横島は早速邪なことを考える。その思考スピードはほんの一秒にも満たない非常に短い速度で展開された。そしてそれをおくびにも出さずまず挨拶をしようとするのだが、それは件の少女に遮られてしまった。
「デート、ですか。こう見えても私は貴方よりもずっと年上ですので、デートが出来るようになる頃にはお爺さんになっているかもしれませんよ？」
「あ、やっぱそうなんだ。……あれ？」
横島は今の会話に首を傾げる。はたして自分は今声に出していただろうか？
「いえ、声には出していませんよ」

「ああ、そうか。良かった……ん？」

ここに来てようやく横島は気付いた。かつて、同じようなことを経験したことがある。そう、それは――――。

「あら、以前にも似たような経験が？　……なるほど、神族の方とお知り合いなんですね。しかも、随分と親しく思えます」

「ああ、なるほど。それが君の『能力』ってやつか」

横島は苦笑を覚える。声に出さずとも会話が成立している。ここが幻想郷ということを考えれば、それは相手が持つ能力なのだろう。その少女は横島の眼前まで歩み寄り、ぺこりと頭を下げた。

「はじめまして。私は古明地さとりと申します。お察しの通り、私の能力は『心を読む程度の能力』です」

さとりは横島の目を真っ直ぐに見つめてくる。それは横島の心を読んでいるからなのだろうか。少々眠たそうにも見えるその半目には不思議な力を感じてしまう。横島にはその視線が何だかくすぐったかった。

「えっと、俺……いえ、私は紅魔館で執事をしてる横島忠夫と言います。えー、以後、よろしくお願いいたします」

さとりは横島の言葉に驚いたのか、さとりはその半目をまん丸と見開いている。それ

を見た横島は「あ、こういう顔も可愛いかも」などと考えていた。
「……やはり、不思議な方ですね」
「ん？」
さとりはぽつりと何事かを呟くが、それは横島には聞き取れなかった。さとりは一つ咳払いをし、気分を切り替える。
「いえ、何でもありません。それより、私には敬語を使わなくても大丈夫ですよ。苦手なのは伝わりましたから」
「あはは、何かごめんね」
横島は頭を掻き、照れ臭そうに笑っている。そこで場が落ち着いたのを見計らい、紫が話しに入ってきた。
「横島君が色んな神族と知り合いなのは聞いていたけれど、心を読む神族とも知り合いだったの？」
その質問は他の皆も気になっていたことのようで、興味深そうに耳を傾けている。
「ええ。ヒャクメっていう奴なんすけどね、そいつは好奇心の塊みたいな奴で。いつも色んな人の心を読んでたりするらしいっす。……俺の師匠の一人と親友らしいんすけど、その人はいっつもからかわれてるんすよねー。恥ずかしい過去も知られたとか何とか……。まあ、そのせいでいつも過激なお仕置きをされてるみたいですが」

「……何というか、はた迷惑な神族ね」
「というか、本当にそいつらは親友なのか？」
横島からのヒャクメの情報に、皆は容赦なくツッコミを入れる。横島もそれは疑問に思っていたことではあるので、乾いた笑いを浮かべることしか出来なかった。
「いや、でもあいつの『心眼』は凄いんすよ？　心を読むだけじゃなく、専用の装置に接続すれば世界中のどこでも『見る』ことも出来るらしいですし、師匠が掛けた封印を解析して簡単に解いたり、その気になれば相手の前世も見れたりするんですから」
「それは……確かに凄いわね……」
横島の言葉に対する反応は、永琳が思わず漏らした言葉が物語っている。そのヒャクメという神族の能力は、やはり横島と同様に常識の埒外にあるようだ。
さとりは我知らず大きな溜め息を吐き、少し沈んだような声を出す。
「そこまで見えてしまうなら……そういう性格になっても仕方ないのでしょうね……」
その言葉は思った以上に皆に響き、沈黙を齎した。さとりもヒャクメには劣るが『見る』ことに特化した能力の持ち主だ。当然、その能力を持っているが故の苦労は数多く経験している。さとりは遠くの世界に存在するヒャクメに、親近感を抱いていた。そして、自分以上に身が、心が切り裂かれるような経験をしてきたのだろうと、同情を。
「ところで横島さん」

「……んあ？　あっ、えーっと、何かな、さとりちゃん？」

急に雰囲気を変えて横島の名を呼ぶさとりに横島は困惑してしまう。さとりとしては自分のせいで沈んでしまった雰囲気を元に戻そうとした結果なのだが、能力も相まって彼女は元来人付き合いが苦手であり、空気を読むということにも慣れていない。相手の心は読めても、何故相手がそう思い至るかがよく分からない。そんな彼女は横島の様子に首を傾げつつも思ったことをそのままに口にする。

「私は横島さんの心を読んでいるのですが、それについて何か思うところはないのでしょうか？」

横島はそのストレートすぎる言葉に少々戸惑ってしまう。その瞬間にさとりがピクリと反応するが、ただそれだけだ。彼女は横島の言葉を待っている。

「んー……。まあ、ヒャクメで慣れてるしなぁ。あんまりプライベートなことまで突っ込んで見ようとしなければ別に構わないというか……」

横島は顎に手を当てて考え込む。さとりは横島の言葉に嘘が無いことを読み、また目を大きく見開いている。心を読まれることに寛容など、非常に珍しい人間だ。

「あー、でも……」

「ん……？　――――!?」

何が起こったのか、横島の言葉に首を傾げたさとりの頬が、一瞬で真っ赤に染まる。

第三の目（サードアイ）もくわっと見開かれており、若干だが血走っているその様は完全にホラーだ。

皆が驚く中、横島が頭を抱えて叫びだす。

「考えたらいかんと分かっているのに……!!　分かっているのにーーーーーっっっ!!!!

心を読まれているというシチュエーションのせいでついついヨコシマなことを考えてしまうーーーー!!?　い、イヤーーーーーー!!!?　さとりちゃんが見とるのに、さとりちゃんが見とるのにワイって奴はーーーーーー!!!!」

さとりと横島を除き、皆は盛大にずっこけた。まさか割とシリアスな空気の中で横島がここまでアホなことを仕出かすとは思わなかったのだろう。横島を甘く見すぎである。今さとりが見てしまっているのは数多の美女の裸体。裸体！　裸体!!　それはさとりが思わず羨望を抱いてしまうほどに美しい女性達ばかりだったそうな。

「ああーーーー!?　そんな目で見んといてっ!!　そんな目で見んといてーーーーーー!!!?」

無様に悶える横島をさとりは普段よりも更に細めた目で見つめている。それは恐らく睨んでいるのであろうが、彼女の纏う雰囲気が険悪さを霧散させ、逆に可愛らしさを強調している。

「……ん?」

と、そこでさとりははたと気付く。何かおかしくないか、と。

「……これは……テリブル……応用……いける……？」

さとりは急に難しい顔で何かを呟き始める。やがてその表情は何かを決意したかのように引き締められ、むんと鼻息荒く横島に向き直る。

「横島さん、こちらを向いてください」

「ワイって奴は、ワイって奴はーーーー!!　……え、なに、さとりちゃん」

横島はさとりの声に導かれ、ひょいと彼女の方を見る。その瞬間、強い光が横島の顔に向かって照射された。

「想起『リビドースーヴニール』――――」

「――――!?」

突然のさとりの行動に皆は動けない。横島を害する気は無いことは容易に想像がつく。これは相手のトラウマを抉るようなものではない。彼女、さとりは今、何と言った？　リビドースーヴニールと言ったのか？　性衝動の思い出？　皆はさとりが何をしたいのかがさっぱり分からなかった。

「……」

横島は強い光、何と言うかこう、ピンク色の光を照射された瞬間から、頭を過ぎるには全裸の美女美少女だけになっていた。自分の状態を疑問に思うのに加え、さとりが心を読んでいるのにこんなことばかり考えている自分に嫌気がさしてくる。少しだけ涙

目になったのは仕方がないことだろう。

――――しかし。

「……ふふっ」

笑い声が聞こえてきた。それは横島の真正面に存在する少女から発せられたものだ。

「ふふっ、ふふふふふ」

さとりは笑っていた。ころころと、鈴が鳴るような声で笑っている。それは微笑ましいものを見たかのような笑みだった。

「さ、さとりちゃん……？」

「あ、その、ごめんなさい」

さとりは横島に名を呼ばれたことではっとし、咳払いをした。だが、それでもその表情は笑みを浮かべており、その可憐な姿に横島は否応なく目を惹きつけられる。

「笑うつもりはなかったんです。ただ、横島さんが――――あまりにも可愛らしくて」

「――――」

!!!!!!!!!?

それは、ある意味でこの日最大の爆弾だったかもしれない。レミリアが、紫が、永琳が、物凄い顔でさとりを見ている。

「いえ、横島さんはとてもえっちな方だと聞いてましたので。煩悩を力にする、とも。確かに女の人の、その、は、裸を思い浮かべていたりもしましたけれど。それ以上が出てこなかったんですね。なので、試しに横島さんのそういった部分を見てみたんです。……結果は、横島さんも知っての通りですよ」

「うむむ……」

横島は唸ることしか出来ない。プライベートなところはあまり見ないようにとは言ったが、切っ掛けはどうあれ、そういったことを思い浮かべてしまったのは自分だ。普段から煩悩で失敗している身としては強く言い返せないでいる。

「ふふ、横島さんって、意外と純情なんですね。上司の下着姿で完全に正気を失って言いなりになっちゃうなんて……」

「い、いやーーーーーーー!?　ワイの黒歴史がーーーーーーー!?」

「一時的に成長した弟子のふとももで鼻血を出したり……」

「ああーーーーー!?　やめてーーーーーーー!?　ああ、でも……でも……!!　さとりちゃんにワイの恥ずかしい所を見られるなんて――――これはこれで……!!!」

「おちつけ」

さとりに無邪気に責められ、新たな扉を開きそうになっていた横島だったが、レミリアの激しいツッコミ（拳骨）によって何とか正気を取り戻した。さとりは横島がレミリ

アに殴られた箇所を慈愛の表情で撫でている。そうするとおかしなもので、横島は大人しく、さとりにされるがままになっていた。照れ臭そうにしているが満更でもなさそうであり、頬も赤く染まっている。チラチラとさとりの表情を窺ってはその度にさとりに微笑まれ、撃沈されている。

（何か、妙な雰囲気になってるわね、永琳？）

（今まで彼の周りに居なかったタイプの女の子だからじゃない？）

（まあ、アイツの煩悩を可愛らしいとかで済ますのはいなかっただろうなぁ）

（何というか……甘えさせてくれるお姉さんって感じかしら？　こういうのもおねショタっていうのかしら……！　精神的おねショタって感じかしら……!!）

（永琳……あなた……）

さとりと横島の間に入れず、内緒話で盛り上がるのは置いていかれた者たち。いや、盛り上がっているのは一人だけなのだが。月の頭脳は俗世に染まっている。

「ん……？」

レミリアは視界の隅に入った据え置き型の大きな時計――ホールクロックを見やる。現在の時刻は午後五時と少し。咲夜が横島や妖精メイド達と共に夕食の仕込をしている時間だ。

レミリアはこれ幸いにと横島に声を掛ける。

「仲良くしてるところを悪いけど、横島は咲夜と合流して夕食の準備をしてちょうだい。こっちに遊びに来てる慧音と、もちろんさとりの分もちゃんと用意すんのよ」
「あ……っと、了解っす。そんじゃあさとりちゃん、また」
「はい。お仕事、頑張ってくださいね」
二人は互いに手を振り、横島はレミリア達に頭を下げ、退室する。

その瞬間、空気ががらりと変わる。
「さとり――――読めたの？」
「……はい」
紫の確認に、さとりは沈痛そうに頷きを返す。
「私が彼に光を当てた時に浮かび上がった、いくつもの記憶の中から、知ることが出来ました」
そうして、さとりは語る。横島の心が、何故あのような状態になっているのか、その詳細を。それは、横島忠夫という少年が抱える、最大級のトラウマ――――。
「……」
沈黙が場を支配する。さとりが語り終えてから、既に数分が経過している。皆に共通

しているのは、顰められた表情だ。

「……ふう」

紫が大きく息を吐く。それはどうにもならないイラつきを吐き出す為の行為だ。その成果は得られなかったが。

「なるほどね。そんな理由があったのなら、あの光で思い浮かぶはずだわ」

永琳は顎に手を当て、低く重たい声を出す。そして、こうも思った。彼が飛び掛ってきたのを受け止めたあの時、彼に宿った恐怖はそれが原因か、と。

「……ちっ」

レミリアは苛立たしげに舌打ちをした後、ガリガリと頭を掻く。さとりから話を聞き、それがどうしようもないことだと理解は出来た。自分でもどうにかすることは出来ない。だが、どうにかならなかったのかとも思う。理解は出来ても、納得は出来なかった。

「彼の心……そして、霊基構造は」

さとりがぽつりと呟く。それは小さい声ながらも部屋に響き、皆の視線を集めることに成功した。

「彼の心と霊基構造は、言わば割れたガラスを無理矢理接着剤でくっつけたようなものです。だから動揺したときに言動が全くバラバラになったりするのでしょう」

「……」

さとりは事前に紫の心を読ませてもらい、横島の今までの行動などを教えてもらっていた。レミリア達もさとりが言うことに覚えがあったために沈黙を貫く。

「……では、何故彼はあれほど不安定な状態であるのに、あれほど安定しているのでしょうか。何故、今もこうして生きていられるのでしょうか。二人は存在自体が異なるはずです。それが、何故ああも……」

その問いに答えられる者は、ここには存在しなかった。しかし、全員の頭に浮かぶ、一人の人物。もしかしたら、それは。

「陳腐な言葉になってしまうけれど、やっぱりこう考えた方が素敵よね。これは、貴女の愛が齎した奇跡……なのかもね。――ルシオラさん」

紫の言葉が部屋に広がり、消える。ふと窓の外を見れば、世界は赤く染まっており、黄昏時の訪れを告げていた。

夕飯時は特に問題もなく過ぎていった。紫も永琳もレミリアも語り合ったことは顔には出さず、いつも通り横島と接している。ただ、慧音は皆と食事を共にしたのだが、さ

とりはゲストルームで一人食事を取った。「私が居ては皆さんも迷惑でしょう」とは本人の弁だが、それを横島は残念そうな表情を浮かべるだけで止めはしなかった。さとりの方がしんどい思いをするのだと気付いたからだ。それを読んださとりは横島の頬を撫で、柔らかく微笑みを浮かべたのだった。

「ふっふっふっふっふ」

怪しげな笑い声を出して廊下を忍び足で移動するのは、ニンジン柄のパジャマを手に持ったてゐだ。彼女が目指しているのはずばり横島の部屋。今夜こそ執事さんの童貞を頂くのだ、と燃えている。

彼女が持つパジャマ、そして今は持っていないが枕とタオルと大きなニンジンのぬいぐるみ。それは横島から贈られた、ニンジン柄のお泊りセット。露骨に子供扱いされているのは気に食わないが、それでも思い人からの贈り物だ。機嫌が悪かったのはほんの最初だけ。今では全てがお気に入りだ。

「執事さーん、今貴方のてゐが参りますよー……」

てゐはよだれを垂らしつつ、目を怪しげに光らせて歩を進める。何故彼女がここまで

彼と関係を持とうとするのか。それは簡単だ。まず自らの欲を満たす為。そして何より、横島を癒す為だ。

てゐはその長い命の中で、粘膜接触、つまりは性交渉によって安らぎが得られることを知っていた。そして横島が抱える傷。それが自分ではどうしようもないものであろうことも予想がついていた。そんな彼女が愛する横島に対して取れる手段は余りにも少ない。そこで考え付いたのが、自らの体を使うことだった。

正直な話、てゐは自分と横島が結ばれなくても構わないと思っている。ただ、横島を癒す一助となれれば、それは身を貫く程の幸せを感じられるのではないか。例え他の誰かと彼が結ばれても、彼が幸せならばそれがてゐの幸せなのだ。……そして、横島を時々貸してもらえるのなら言うことはもう何も無い。愛人という立場でも何も問題は無い。

てゐは永きを生きている内に、考え方がずれていったようだ。そしてそんなてゐは今。

「はあああああああうううううぅぅ～～～～～～……」

「よーーーしよしよしよし。かゆいとこはあるかー？」

「だいじょうぶ～～～～」

横島に、思い切り癒されていた。

事の発端は夕食の片付けの時。咲夜にてゐを慰撫するように頼まれたからだ。横島はそれを了承し、仕事が終わった後で部屋に待機。やがてゐが訪ねてきたら、彼女を捕獲。そして全力での甘やかしが開始された。

現在横島とてゐは一緒に風呂に入っており、横島はてゐの髪を洗ってやっている。耳に水が入らないように洗うのは中々に骨が折れたようだが、その甲斐あってゐはぐにゃぐにゃに蕩けている。その状態では体を洗うのも大変だろうと、横島がてゐの体も綺麗に洗い始めた。てゐにとって、思わぬご褒美である。

「あったかいね～～～～」

「ああ、確かに良い湯だよなー」

「そうじゃなくて、執事さんの体がだよー?」

「……こういう所で、そういうことは言っちゃダメだと思うぞ? いやマジで」

横島は浸かった湯船の温度以外の要因で顔を赤くした。てゐはしてやったりとほくそ笑んでおり、横島の言葉を気にした様子はない。

その後、横島ははしゃぎ過ぎて少々のぼせ気味になったてゐをお姫様抱っこで運んだり、横島の手ずから着替えさせたり、ドライヤーで髪をかわかしてやったりと、本気で甘やかしている。これにはてゐもご満悦。時々「ハッ」として表情を引き締めるが、それもほんの数秒間。てゐは本来の目的を忘れ、横島の温もりにただただ溺れていく。お

休みのキスもねだり、額にしてもらった。
　かつてゐは心身共に追い詰められている時にあの温もりは反則だと、凶器だと言った。それは今現在も味わっている。てゐは今日も今日とて追い詰められていたのだった。

第二十六話
『ココロの形』
～了～

以下、本編とは関係の無いおまけ

～パチュリーの場合～
「なあ、パチュリー」
「何、慧音？」

「お前は横島をどう思っているんだ？」
「いじめたい」
「……ん？」
「いじめたい」
「いじ……そ、そうか」
「いじめて涙目にしたい」
「分かったから」
「今からちょっと涙目にしてくる。大丈夫よ、鞭だけじゃなく飴もあげてくるから」
「……すまん、横島。強く生きてくれ……」

～フランと小悪魔の場合～
「なあ、お前達」
「何、けーね？」
「何でしょうか？」
「もし、だな。お前達以外にも横島と恋人になりたいという女性が現れたらどうするんだ？」

「うーん……私は別に何も」
「やっぱり、横島さんを長生きさせるための協力を要請しますね」
「……そう、なのか」
「あ、でもそうなるとその人は将来的に私のお姉様か妹になるんだよね？　家族が増えるよ！」
「やりましたね、フラン様！」
（……何だろう、急に二人の会話を止めたくなった）

おまけ
～了～

第二十七話『吸血』

横島がてゐを徹底的に甘やかした夜が明け、朝が来た。横島はいつも通りの時間に目が覚め、体を起こす。いや、起こそうにも起こせなかった。

傍らに感じる暖かさと柔らかさ、重さ。てゐが腕を抱き枕にしていたのだ。

「……」

横島はてゐの姿を認めた後、無言でてゐの頭を優しく撫でる。てゐは頭部から生えているふわふわの兎の耳をピクピクと動かし、更に腕をきつく抱きしめていた。よく見ればパジャマの袖の部分を甘噛みしている。

それを見た横島は困ったような笑みを浮かべるが、彼はこれでも一月以上妖精メイド達に似たようなことをされているのだ。こういったことに対する対処法は既に見につけている。

「……ふぅ」

瞬間、全身の力を抜いて腕をてゐの拘束から解き放った。あまりに急激な脱力に、腕を押さえ込む力が追いつかなかったのである。更にそれだけでは終わらない。横島は

腕を抜いた時に、代わりにシーツをてゐの手に掴ませたのだ。今てゐは幸せそうな顔をしてシーツをもぐもぐと噛んでいる。対象物が入れ替わったことにはまるで気付いていない。

　これほどまでの高等技術を習得出来たのが妖精メイドの抱き枕から逃れる為であるとは、驚けばよいのか呆れればよいのか悩むところである。しかし、横島らしいと言われれば、納得出来るのではあるまいか。

「……」

　横島はもう一度てゐの頭を撫で、洗顔と歯磨きを終えてパジャマから執事服に着替えた後、いつも通りにとりあえずの洗濯物を持って共用洗濯場へと向かう。

　こうしていつも通りな様でいつも通りでない朝を迎えた横島は、この後にどうしようもない程の苦悩が待ち受けていることなど、当然知る由も無かったのだ。

第二十七話

『吸血』

紅魔館の正門前。そこでは二人の少女が一人の少年に武術の指導をしていた。銀髪で二振りの刀を持った少女。赤の長髪で華人服のようなチャイナドレスを着た少女。そして執事服を身に纏い、何やら表情を盛大に歪ませている少年。即ち妖夢、美鈴、横島である。

「はい、良いですよー。そうやって私の『気』を循環させてください」

「……」

美鈴は横島の体の一部に触れながら横島に指示を出す。横島は美鈴から体内に流し込まれた『気』を体内で循環させ、より高めるという修行を行っている。横目でその様子を眺めている妖夢は頬を少々赤く染め、横島の心情を察して同情の笑みを浮かべている。

「そうですそうです。良いですね、ちゃんと第一から第七まで行き渡ってます」

「……」

美鈴も平気というわけではない。彼女の頬も、否、顔全体が赤く染まっており、興奮の為かうっすらと汗ばんで息も多少荒い。そんな状態で横島の耳に囁くように声を掛けている。それは単純に姿勢の問題なのだが……横島としては色々な意味でたまらな

い。

それもそのはず。美鈴が触れているのは第七チャクラが存在する頭頂部。そして第一チャクラが存在する会陰……性器と肛門の間の部分である。横島は健康すぎる程に健康な青少年だ。そんな彼がナイスバディな美少女にそんな場所を触られて、正気を保っていられるわけがない。

――だが、彼は必死に耐えている。血涙を流し、唇を噛み切りながらも必死に耐える。全ては自分がロリコンという名の外道に堕ちない為に。……彼のこめかみから勢い良く鮮血が迸った。しかしそれが良い方向に働いたのか、思考に靄がかかったような状態になり、だんだんと耐えるのが楽になってくる。それは単なる貧血なのだが、今の横島にはどうでもよかった。

では、何故こんなことになったのか。理由はごくごく単純なことだ。最初と最後のチャクラに触れていた方が、何かあった時に対処しやすいからである。気を自由に操れる者にとって、これが一番安全であり確実だ。だからこそ美鈴は横島の頭頂部と会陰をがっちりと掴んでいる。

デメリットとしては触れる場所が触れる場所なだけに下手な者が同様の方法を取れば羞恥心を煽り、失敗を誘発すること。しかし美鈴は超一流と言っても過言ではない程の達人だ。確かに恥ずかしくはあるが、それでも気の操作を失敗するほどではない。

……では、横島はどうか。

「……」

横島は終始無言で気を循環させている。それは、それだけ集中している証であり、美鈴や妖夢達といった達人級の面々には劣るものの、それでもそれに迫る程の力量を身につけたから――――では、断じてない。否、集中しているといえば集中している。スポーツにおける『ゾーン』にも近い程の超集中状態だ。そのような状態で彼が考えることは、一体どのようなものなのだろうか？

（はぁぁ～～～～ん!!!　美鈴が!!　美鈴の手が!!!　俺のあんな場所に触れちゃってるよ～～～～～!!!?　あああああ、美鈴の手があったかい!!!　やーらかいいいいいい!!!

ああああ、これはもしかしてそーいうことなのか!?　手を出して良いのか!?!?『いけないな、美鈴。こんなことをしていては……』『ご、ごめんなさい！　でも、少しでも貴方に触れていたくて……』『ふふ、いけない子猫ちゃんだ。こんなことをしなくても、君は俺の大切な人だというのに……』『まあ、何て優しい男性なの！　素敵、抱いて!!』『うははははは!!　今夜は寝かさへんでーーーーーー!!!』とかそーいう感じーーーーーー!!!?

モテてるのか!?　やはりモテ期到来か!?　これがモテ期なのかーーーーーー!!!?）

……横島の考えることなどこんなものである。まあこの状態の横島は自らの驚異的な能力を無意識の内に発揮出来るので、悪いことではないはずだ。しかし、思考がこの

ような方向に流れるのも仕方がないことである。横島は今まで女性にモテず、女性に蔑まれながら過ごしてきた。それは横島自身の言動や強いコンプレックスによる思い込みも関係しているが、今回は割愛する。重要なのは横島が見た目年齢が近いとはいえ、年下に見える美鈴に半ば本気で手を出していいのか悩んでいることだ。

昨日までとは明らかに考え方が変化しているが、これはフランと小悪魔の気持ちを知ったことが関係している。

前述したが、横島はモテない青春を送っていた。彼の普段からの言動のせいもあるが、彼に好意を抱いている女性達は彼に対して一定以上のアプローチをしてこない。フランや小悪魔も直接『好きだ』と告白したわけではないが、それでも彼女達のアプローチには横島が二人の自分に対する好意を悟る程のものがあった。……逆を言えば、あれだけのことをしなければ彼には人の好意を感じ取れない、ということでもあるのだが。

恋愛に疎く、モテることに不慣れな横島はフラン達の好意に戸惑っている。勿論彼女達の気持ちが疎ましいということは全くない。全身に電流のように衝撃が走る程には嬉しさが募る。だが、問題はアプローチの仕方にあったのだ。

横島は他人に思われている程女性に慣れていない。何せ女性の下着姿で完全に正気が失われ、怒りを抱いても『ほっぺにチュー』で誤魔化されるくらいだ。小悪魔に指を絡められ、フランに全身を擦り付けられ。妖精メイド達もたまに同じようなことをして

くるのだが、フラン達とは何かが違うように感じるのだ。それもあってか、横島の中ではどれだけのスキンシップがそういうことなのかが分かりかねていた。

そして、今回の美鈴との『修行』である。横島は美鈴が自分に対して好意を持っているからこんな修行をしだしたのかと考えてしまう。その一方でこれは単なる修行だ、美鈴も恥ずかしそうにしてはいるが普段とそう変わらないじゃないか、とも考える。まさか美人局……!?　ということも一瞬だけだが考えてしまった。非常に失礼なことであるが、これが疑心、暗鬼を生ずということなのだろう。

やがて最後まで耐え切った横島が顔面から血をダラダラと流しながら、爽やかな笑顔で仕事へと戻っていった。足が産まれ立ての小鹿のように震えていたが、誰もそれに関して言及しなかった。いつものことだからである。

横島が館に入り完全に姿が見えなくなると、美鈴が頭から蒸気を噴出し、物凄い速さで地面へと倒れこんだ。

「あああああああ……!!　いくら、いくら修行とはいえ私は横島さんに何てことを……!!!!」

美鈴は真っ赤に染まった顔を両手で覆い隠し、ぐねぐねと悶え始めた。それを見る妖夢は乾いた笑みを浮かべている。

「大丈夫でしょうか!?　私、引かれてたりしないですよね!!?　はしたない女の子だと思

われてませんよね!!?」

「お、おおお落ち着いてください美鈴さん!?」

妖夢は突如ノーモーションで『バウンッ!』と起き上がり詰め寄ってくる美鈴に驚愕しながらも何とか落ち着くように諭す。その甲斐あってか美鈴は深呼吸を繰り返し、多少の落ち着きは取り戻した。まだまだ顔が赤いことから、少しの刺激で先ほどのような暴走状態に陥りそうであるのが妖夢には不安だったが。

「ふぅ……。で、どうでしょうか？　横島さん、私のこと嫌いになってたりしませんよね？」

「それは大丈夫だと思いますけど……」

美鈴の縋り付いてくるような視線と不安たっぷりな声音に、妖夢は美鈴の抱く気持ちを理解していた。美鈴本人がそれを自覚しているのかは定かではないが、傍から見る限りでは随分と分かりやすい。

「でもでも、なんかこう何かを耐えるような顔をしてましたし……。私に触れられたのが嫌だったのでは……」

美鈴は随分と後ろ向きな考え方をする。横島に対し、無意識に後ろめたい気持ちを抱いたのが関係しているのだろう。しゃがみ込み、頭を抱えて懊悩している。妖夢はここで下手なことを言っても負のスパイラルが生じるだけだと考えたが、元より自分は口が

上手くない。だから見たままずばりを言うしかないと小さく溜め息を吐いた。
「横島さんは嫌がっていたのではなく、理性を保つのに必死だったように見えましたが……」
妖夢の言葉に美鈴は動きを止める。その顔は青を通り越して白くなっていた。
「つまりそれは怒りを抑えるのに必死だったと……」
「何でそうなるんですか。違いますよ、美鈴さんに煩悩のまま襲い掛からないようにするためですよ。……多分」
「――――る？」
余りにネガティブな発言を繰り返す美鈴に妖夢が辛抱堪りかねたのか、呆れたように息を吐きながらきっぱりと言い放つ。言葉の最後に多少の自信の無さが滲んでいるが、ほぼ間違いないだろうことだ。それを聞いた美鈴は間の抜けた声を出し、固まった。直後、瞬時に頭が沸騰したのか顔が爆発したかのように赤く染まり、頭頂部から湯気が噴き出した。
「え、えええええぇ!?　つ、つつつまり、横島さんが、私のことをそういう風に見た……ってことですか!?」
「ええ。まあ、あんな状態になったらそれはそうですよ」
「あ、あわわわわわわ!?　どどどどうしましょう!?　私、心の準備がまだ全然ーーーー

!!?」

美鈴は真っ赤になった顔を両手で押さえ、キャーキャーと悶え始める。そんな彼女の姿と漏れ出る言葉から、本当に自覚が無いのだろうかと妖夢は疑いを持つ。好意を持っているのは確かだろう。何せさっきまでの横島との修行ははっきり言って居心地が悪かった。美鈴がその大きな胸を横島の背中にむぎゅっと押し付け、右手を頭に、左手を会陰に。更に耳元で囁くように指示を出していたのだ。堅物の妖夢ですらバカップルの特殊なプレイにしか見えなかった。知らない人にあれは修行を行っていると聞かせれば、「痴漢の修行かな?」と思ってしまうことだろう。

「あのー美鈴さん。ちょっとお聞きしたいことがですね」

「あわわわわっ、えーとえーと、こういう時は落ち着いて素数を数えて――って、はい?」

「……お聞きしたいことがありましてですね」

「は、はい。何でしょう」

美鈴は何度も深呼吸をして落ち着きを取り戻そうとする。その甲斐あってか顔の赤みは引いてきた。それを見る妖夢は美鈴の慌てふためく姿に多少のショックを受けている。普段の落ち着いたお姉さんのような姿に、妖夢は憧れを抱いていたのだ。しかし、何も失望したり嫌いになったというわけではない。ただ普段とのギャップが強すぎて心の整理が追いついていないのだ。

「単刀直入にお聞きします。美鈴さんは横島さんのことが好きなんですか？」

「――――……え」

妖夢の言葉は美鈴には予想外に過ぎた。横島のことが好きかどうか。妖夢はそれを聞いている。単純に好きか、ではない。横島のことを一人の男性として好きなのかを聞いているのだ。

「え……と、それは……」

上手く言葉に出来ない。それどころか思考も上手く回らない。頭の中が急にぐちゃぐちゃになり、意味のあることを考えられなくなった。

美鈴の顔が徐々に赤く染まる。上手く言葉に出来ない。思考も回らない。だからこそ理解出来た。自らが横島に抱く気持ち。その存在に。

「わた、しは……」

頭に浮かんでくるのは横島の無邪気な笑顔。レミリアやパチュリーに弄られて涙を浮かべている顔。フランや妖精メイド達に見せる、父性を湛えた顔。過去の傷を曝け出し浮かべた、憂いを帯びた顔。――――怪我をした自分を、心配そうに覗き込む顔。

思えば、美鈴は横島の色々な顔を見ている。そして、それらが決して色褪せることなく、その当時の色を鮮烈に保っていることに気付いた。

――――ここまで来れば、流石の美鈴も完全に自覚出来た。横島のことを思うと、心

の底から湧き上がって来る想いがある。
「私は――」
妖夢を見つめ返す美鈴の瞳。そこには一つの確固たる想いが宿っていた。

そして、そんな美鈴を見つめる者達が存在した。紅魔館のとある部屋から、遥か正門の美鈴を見つめる四つの瞳。その持ち主達はまるで天使と見紛うばかりの笑みを湛えていた。
――フランと、小悪魔である。

「さて、横島君の相談事って何だと思う？」
永琳は自分が淹れた紅茶を一つ啜り、同じテーブルを囲む二人に語りかけた。
「あの様子からだと、簡単に割り出せるわね」
「心を読むまでもありませんでしたね。……ところで私もご一緒してよろしいのでしょうか？」
紫とさとりが永琳に返答する。ここはゲストルーム。紫と永琳のいつものお茶会に

さとりが混ざった形で開催されている。ちなみに横島から相談があると言われたのは紫と永琳だけであり、さとりは含まれていない。

「ま、別に構わないでしょう。むしろ貴女が居た方が良いかもしれないじゃない」

「可能性の話じゃないですか……」

さとりは永琳の楽観的な言葉に溜め息を吐く。紫もさとりと同じことを思っているのだが、それでもさとりが居た方が良いと考えている。それが誰の為になるのかを考えての行動であるか、さとりはそれを読み取ったので強く口には出せない。

事の始まりは昼食の時間。横島の様子が明らかにおかしかったのだ。

何事かを真剣に考え込んでいるように見え、かと思えば急に壁にガンガンと頭突きをし始め、頭から血を噴き出したまま料理の配膳をしようとしたり、いきなり床に倒れ伏して悶え始めたりなど……。その時の横島はいつもに増して余計におかしかった。特にフランや小悪魔、美鈴に対して露骨にギクシャクとした対応をしている。……余談だが妹紅も横島に対してかなり挙動不審になっていたのだが、横島のインパクトの方が強かったのでそれに気付いた者は少なかった。

昼食後、横島は食堂でゆったりとお茶を楽しんでいた紫と永琳の二人に「相談に乗ってほしい」と頼んだのだ。その時の横島は明らかに憔悴しており、一目で精神的に追い詰められていることが分かる。一体昨夜から今の時間までで何があったというのか。

紫達が横島の様子を思い返していると、ドアから控えめなノックが四回響く。
「横島っす。入っても大丈夫っすかね？」
「あら、来たわね。入ってもいいわよー」
疲れたような声音の横島の声に、永琳が応える。やがてゆっくりと入ってきた横島は紫と永琳の存在を認め、そしてさとりが居ることに驚いた。
「あれ、さとりちゃんも？」
「すいません。私も遠慮したほうが良いと思ったのですが……」
ちらりと永琳の方を見てそういうさとりの顔は、申し訳なさとそれ以外の感情で歪んでいた。
「……結局ここにいる時点で私も私ですね。すみません、大事な相談だというのに」
さとりは横島に頭を下げる。彼女は既に横島の相談の内容を把握していた。それだけ横島は今回のことを重く考えているのだ。もっとも、横島の事情を鑑みればそれは当然なのだが。
「いや、謝るこっちゃないと思うけど。さとりちゃんには全部筒抜けだろーしさ。それにほら、三人寄れば文殊の知恵って言うし。そうなると慧音先生もいてくれた方が良かったかな？　でも昨日晩飯後に帰っちゃったし」
横島はさとりの謝罪を受けておどけて返す。しかしすぐに話が横に逸れ、ぶつぶつと

呟き始めた。本当に気にしていないようで、さとりとしてはありがたかったが。

「それで、横島君の相談したいことっていうのは何なのかしら？」

放置していては話が進まないと判断した永琳が横島に問う。すると横島は途端にくしゃりと顔を歪めた。今にも泣きそうなその顔は、情けないという感想を抱かせるには十分であった。

「……実はですね」

横島は何故か紫達三人の前に正座をして話し始める。彼からすれば後ろめたい感覚があったからなのだろう。まるで罪を告解をしているようにも見える。

そうして話された内容は、やはり紫達の予想通りではあった。フランと小悪魔の気持ちを知り彼女達との距離感が掴めなくなり、美鈴との修行による接触により自分は彼女にも好かれているのか、という疑問を持ち。そしてフラン達を過剰に意識してしまったことで、彼女達に煩悩を抱いてしまう。

「このままじゃ……このままじゃ本当に皆に手を出しちゃうかも知れないんすよー!!俺は、俺はどうしたらいいのかーーーー!!?」

双眸からとめどなく涙を噴出させながら横島は叫ぶ。その姿はとても情けないものであり、内容もそうなのだが、それも彼が抱えている問題を考えれば非常に重いものとなる。事実、横島の事情を知っている紫達は沈痛な表情を浮かべている。

「……確かに、難しい問題よね」

永琳が息を長く吐いて発言する。今までの彼女ならばこういう場合には横島をからかったりなどしてその反応を楽しんだりするのだが、事情を知った今となってはそれも出来ない。むしろ知らなかったとはいえ、今までの横島への対応を反省したくらいだ。

「レミリアも、少しタイミングが悪かったわね……」

永琳がぼそりと呟く。レミリアは横島の事情を知る前にフラン達の気持ちを教えてしまった。あらかじめ事情を知っていれば、レミリアも教えはしなかっただろう。それほどまでに横島の抱える問題はデリケートなものだ。

「……？」

皆が真剣に横島のことを考えてくれている中で、横島本人は違和感を覚えていた。いつもならこういった話の時にはもっと明るい雰囲気が流れていたはずだ。だというのに、今回の空気は重すぎるほどに重い。真剣に相談があると言ったからだろうか？　だとしても疑問は残る。永琳は何と言っていた？『難しい問題』と言っていた。普段なら『皆貴方より年上よ』と言って、こちらの精神にダメージを与えてくるはず。

「……」

横島は考える。何気なく視線を動かすと、非常に辛そうな顔をしている紫とさとりの姿が見えた。

（……ああ、そういうことか）

横島が心中で納得すると、さとりの体がびくりと跳ねた。

「あ、あの、横島さん……」

さとりの視線が揺れる。横島の最大のトラウマを覗き見、それを他者へ伝えたことを申し訳なく思っているのだ。これには流石の横島も顔をしかめ、機嫌を悪くする。誰だって多くの人に知られたくないことを抱えている。それを数人とはいえ言いふらされれば怒りを感じようというものだ。

「……はぁ。いや、まあいいよ。紫さん達にはいつか話そうと思ってたしな」

しかし、横島はお人好しが過ぎた。既にさとりを許し、笑みさえ浮かべている。彼は敵対する女性には顔面に蹴りを叩き込もうとするくらいには厳しいが、身内となると涙一つでそれまでの行動をチャラにするほどに甘くなる。

「……本当に、ごめんなさい」

「……ん」

横島はさとりの謝罪を受け取った。横島はさとりに苦笑を浮かべている。そこに紫と永琳も入ってきた。

「私達からも謝らせて。元はと言えば私達が画策したことだから。……本当なら真っ先に謝らないといけないのに。ごめんなさい、横島君」

「本当に、貴方には迷惑を掛けてばかりね。失敗を繰り返している私には貴方に許してもらう資格もないだろうけれど、それでも謝らせてほしいの。……本当に、申し訳ありませんでした」

「ちょちょちょ、重く考えすぎっすよ紫さん!?」

土下座せんばかりに頭を下げる紫に横島は慌ててしまう。横島が幻想郷に墜落してしまう原因の一つである紫には、今回のことは堪りかねたのだろう。今までの横島との交流から少々軽く考えてしまっていたが、その実真相は強烈なまでに悪辣だったのだ。

「えーっと、ほら！　紫さんにはいつもお世話になってますし、もう済んだことなんすからこれで終わりにしましょうよ、ね!?　俺も話す手間が省けたと思うようにしますし!!」

横島はうなだれる紫を何とか励まそうとする。横島の優しさが身に沁みる紫だが、同時にそれが痛くもあった。しかし横島の必死な姿に紫もこのままではいけないと思う。紫は横島に数秒ほど抱きついたあと離れた。

（今、何で抱きついてきたの……!?）

横島は紫の行動に胸がドキドキであった。トラウマを覗き見られたことはもう既に本格的に気にしていないらしい。

「さて、横島君との仲直りが終わったところでそろそろこれからについて話しましょう

か」

永琳は手を打ち鳴らしながら場を纏めだす。横島にとってはそのさっぱりとした対応が何よりありがたかった。

「と言っても……何をどうするんです？」

横島が首を傾げる。横島には皆に今後どういった距離感でいればいいのかも分からないのだ。

「対症療法でしかないけど、私に良い考えがあるわ」

そう言って永琳が右手の人差し指をピッと立てる。

「何となく不安な台詞だけど、何をするつもりなの？」

紫が永琳に問う。永琳は一つ頷くと徐に口を開いた。

「簡単なことよ。――レミリアに、血を吸ってもらうの」

「お嬢様に……？」

横島の頭には疑問符がいっぱいだ。レミリアに血を吸われることで、一体何が変わるというのだろうか。しかし、それを理解できていないのは横島だけであった。

「……確かにそれなら大丈夫かもしれないけど、それでも問題があるでしょう？　私は反対よ」

「私は何とも言えませんが……やはり安全策を取った方が良いのでは？」

紫は反対、さとりは消極的反対といった意見を返す。しかしその内容は意図して横島に知らせないようにぼかしている為、横島にはやはり何が何だか分からない。
「それで、何でお嬢様に血を吸われたらいいんすか？」
「それは……」
横島の質問に紫は何とか誤魔化そうとする。だが、それは一歩遅かった。
「知らない？　吸血行為はセックスの隠喩でもあるのよ？」
「――永琳!!」
紫は永琳の言葉に声を荒げてしまう。横島の抱えるトラウマにとって、その言葉は出してはいけないものだ。紫の思考が瞬時に沸騰する。だが、自体は紫の予想を超えた事態を招くことになる。
「セ……ッ!!!」
「――ひぃっ!!?」
横島は永琳の言葉に反応し、こめかみから恐ろしい勢いで血液を噴出させた。紫や永琳達にしてみればそれは見慣れた光景だったのだが、当然知り合ったばかりのさとりはそうではない。結果としてさとりが「ち、血が!!　血がーーーー!!?」と錯乱するはめになってしまう。ちなみに現在は横島のこめかみを必死に押さえている。戦闘が得意ではないとはいえ、人間以上の力を持つ妖怪であるさとりに全力で頭を掴まれているの

だ。その苦痛は筆舌に尽くしがたい。
「ごめんなさい、ごめんなさい横島さん!!」
「大丈夫……大丈夫だから……」
（セックスの隠喩って言っただけでここまでの過剰反応とは……。さとりの言うように、本当に意外と純情なのかしら？）
横島は特に何もしていないのにグロッキー状態となっていた。倒れ付す横島に謝り続けるさとりの姿は傍から見ればシュールに映る。見慣れている永琳は別のことを考えていたが。
「……それで、吸血がそういうことの隠喩だってのは分かりましたけど、それで何とかなるんすか？　結局はただの例えじゃないっすか」
横島の言うことも尤もだ。例えはあくまでも例え。それが実際に効果を及ぼすことは無い。だが、その前提はひっくり返る。
「確かに例えは例えよ。でも、横島君にも覚えはあるんじゃない？　レミリアに血を吸われた後、妙にすっきりとした気分になったことが」
永琳の言葉に横島は過去を回想する。
「……言われてみれば、そんな気もするような……。そんな効果があるんすか？」
「そこまで劇的なものじゃないけどね」

永琳には頷かれたが、それでも納得はいかない。そんな様子を見て取った永琳が、更に言葉を続ける。

「よく考えてみて？　横島君が幻想郷に墜落して既に一ヶ月以上が過ぎているのよ？　その間横島君は一回も処理をしていない。思春期の男の子である横島君の性欲は言うに及ばず。自分はロリコンじゃないと言ってはいても、それでも溜まるものは溜まっていくわ。しかも周りには自分を好意的に見てくれる美少女がいっぱい。――――さて、どうして横島君はこんなにも耐えることが出来ているのかしら」

横島は永琳の言葉に深く考え込む。今のところ横島はレミリアに二回血を吸われた事がある。一回目の時は給料のことで舞い上がっていた為に妹紅に飛び掛ったりもしたが、今のようにどうしようもなくなるほど思いつめることはなかった。二回目も同様だ。その後夢の影響で一時暴走したりもしたが、今ほど切羽詰っていたわけではない。

「……それが、血を吸われたおかげ？」

横島としては半信半疑といったところ。しかし今まで耐えることが出来た理由としては一番信憑性が高いように思える。一度そう思うと不思議なもので、血を吸われれば煩悩を抑えることが出来るのだと思えてくる。

「……言われてみれば何かそんな気がしてきましたね」

横島は神妙な顔つきでそう言った。それに永琳はうんうんと何度も頷き、紫はそんな

永琳を軽く睨んでいる。
「ん？　と、いうことは……」
ここで横島があることに気付く。思い返すのはイタリアに存在する吸血鬼達の生活する島、ブラドー島でのこと。あの時横島は吸血鬼と化した美神のライバル、小笠原エミに噛まれて吸血鬼となった。だが、そんなことは横島が思い出したある出来事の前には霞んでしまっていた。
脳内で展開されるあの時の光景。それは、親友であるピートとその父、ブラドー伯爵の対決。ピートは皆を助ける為、支配秩序の崩壊を狙った。吸血鬼は血を吸うことで対象を支配する。噛まれた者は、噛んだ吸血鬼に絶対の服従を強いられる。だが、支配者である吸血鬼が他の吸血鬼に噛まれてしまえば、その支配が崩壊し、相手を支配していた魔力が消滅してしまう。これが支配秩序の崩壊であり、横島もそれで吸血鬼から人間へと戻ることが出来た。
――――そして横島は思い至る。永琳の話を聞き、あの時のことを改めて思い返す。あの時互いに噛み付き合っていたピートとブラドー伯爵。あれはつまり、親子での超濃厚なホモセッ――――
「うおぇっ!?　うぶぅぇえええええ!!!」
「横島さん!?　それ以上考えてはダメです!!」

横島は以前の反省を活かし、ポケットから取り出したエチケット袋に胃の中の物を吐き出した。横島の目から涙が零れ落ちる。美少女達の前で嘔吐するのは二回目である。ちくしょう。何故俺ばかりがこんな目に合わなければならないんだ。覚えていろ、ピート。戻ったら絶対にボコボコにしてやる。主に顔面を。横島は決意を新たにした。

「大丈夫、大丈夫ですよ。全部吐き出してしまいましょう。我慢しても苦しいだけですよ」

「ううっ、くぅぅう、うううううぅぅぅ……!!」

「よしよし……」

色々な意味で涙が止まらない横島の背中を、さとりが優しく撫でる。その暖かな感触に横島の心が癒されていく。

「何かしら。こう、私の立場を奪われたような……」

（紫ってそんな立場だったかしら……？）

二人を眺めることしか出来ない紫は、謎の焦燥感を募らせている。

その後、何やかんや落ち着いた横島は何故かさとりに頭を撫でられる。撫でることに慣れている横島も撫でられることには慣れていない。結果、顔を赤くして拗ねたようにそっぽを向いているのだが、それを見る三人の感想は以下の通りだった。

（可愛い）

（可愛い）
（可愛い）
妙なところで趣味の合う三人だった。
「んで、いい加減話を戻しますけど、俺はお嬢様に血を吸われれば良いんすよね？」
生暖かい視線に耐え切れなくなったのか、横島は永琳に確認を取る。それに対して永琳は頷きを返した。
「良いの、横島君？　それは……」
「……ええ。紫さんの言いたいことは分かってます。確かに……心情的にはちょっとキツイっすけど、それでもここでやっとかないともっとひどいことになるかもですしね」
横島は紫の言葉を遮って自分の考えを吐露する。それを聞いた紫は何かを言おうと口を開くが、思い直したのか大きく息を吐くだけに留まった。
「……レミリアには私達から伝えておくわ。とりあえず、夕食後にレミリアの部屋で良いわよね？」
「ええ。それが一番分かりやすいですし」
紫の言葉に横島が頷く。そしてその後は横島は午後の仕事時間へと入り、部屋を後にした。
「……やっぱり、性急すぎるんじゃないかしら？」

「そういう貴方は少し過保護気味なんじゃない？」
　紫と永琳の間にピリピリとした空気が漂う。互いが睨むように見詰め合う中、片方が唐突に大きく息を吐いた。先に折れたのは、紫である。
「横島君の様子からして、根が深いトラウマであることは事実。下手をすれば爆発するかもしれないわよ？」
「けど、横島君には自分からそれに立ち向かっていったわ。なら、私達はサポートしてあげないとね」
「……それは詭弁でしょうに」
　永琳の前提が違う言葉に紫は深く深く溜め息を吐く。紫とて横島なら大丈夫だと信じている。だが、それでも心配なものは心配だ。結局、紫に出来ることは横島の無事を祈るだけだった。

　時間は流れて夕食後。横島はレミリアの私室を目指して歩を進めている。あの後横島は胸の内を吐き出したのが功を奏したのか、最近では類を見ないほどに仕事を上手くこなすことが出来た。そういったこともあって初めの頃は鼻歌を歌いながら廊下を進んでいたのだが、それも次第に鳴りを潜めていった。

「……」

横島の鼓動が早くなっていく。どうやら緊張してきたようだ。横島は頭をぷるぷると振り、ついに辿り着いたレミリアの部屋の扉を見やる。横島は生唾をごくりと飲み込み、ノックをした。

「……お嬢様、横島っす」

「――ああ、入っていいぞ」

横島の言葉に即座に返答があった。横島はそれに少々驚いたが、大きく息を吸うと意を決してドアを開く。

「失礼します」

随分と久しぶりに入ったその部屋は、巨大な玉座に天蓋付きのベッド、良く見ればそこかしこにぬいぐるみがあり、相変わらず個性的という形容がよく似合うものだった。ちなみにベッドの枕元には以前横島がプレゼントしたぬいぐるみ達が鎮座している。抱きしめながら寝ているのだろうか。

「話は紫達から聞いている。血を吸ってほしいんだって？」

「……そうっす」

ドアの前で何故か仁王立ちしていたレミリアが口角をニヤリと持ち上げて笑う。まさかとは思うが、横島が来るまでずっとそのまま待っていたのだろうか。それを思うと

その自信に満ち溢れた立ち姿が可愛らしく見え、横島は少々脱力してしまう。
「そうかそうか。私に血を献上する。良い心がけだな、気に入った。……あ、この椅子に座って」
「あ、はい。……こんな椅子も持ってたんすね」
レミリアは部屋の奥から木製の背もたれの無い丸椅子――ウッドスツールを持ってきて、そこに横島を座らせる。部屋の雰囲気とまるでマッチしないその姿は、恐らく手に入れてから使う機会がなかったのだと窺える。
「よいしょ……っと」
「……っ!?」
レミリアは座らせた横島の足の上に、真正面から座る。レミリアは自らの足を横島の腰に、腕を首に絡ませる。丁度横島の首元にレミリアの顔が埋まる。
「ちょ、お、お嬢様!?」
「んー、ちょっとはしたない格好だけど、今回は咲夜もいないし別に良いわよね。さて、それじゃあいつも通り消毒からだ」
横島の戸惑う声も華麗にスルーし、レミリアは横島の首に舌を這わせる。
確かにレミリアは紫達から横島の血を吸うように聞かされていた。しかし、聞かされたのはそれだけだった。紫と永琳はレミリアの性格を鑑み、詳しい内容を告げずにおい

たのだ。吸血がセックスの隠喩云々などレミリアに話せば、横島がどのような目に合うかが容易に想像出来る。だからレミリアには詳細を伝えなかった。

だが、問題は別の所で発生した。

「……うっ、うう、ぐっぅぅぅぅぅ……!!」

突然、横島がぼろぼろと涙を流し始めたのだ。

「ちょ、ちょっと、急にどうした――――ん?」

いきなりのことに横島の首元から埋めていた顔を上げ、彼の顔を覗き込む。横島は何やら顔を赤く染めて何かに耐える様に固く目を閉じていた。それだけならば何があったのかは分からなかったのだが、その原因たるものはレミリアにもすぐに理解が及んだ。否、強制的に理解させられたといったところか。

「……」

レミリアの腹が、何かに押されている。それは煮えたぎるほどの熱を持ち、レミリアの柔らかい腹を硬く、強く押し返す。横島の意思を外れ、彼の分身たるモノがその存在を大きく主張していたのだ。

「……あれほど自分はロリコンじゃないと言っていたくせに、これはどういうつもりなんだ……?」

レミリアは上目遣いで横島の顔を見上げる。横島はその目をうっすらと開き、レミリ

アの目を見返す。そのせいか、流れる涙の量が増えてしまう。
「〜〜〜〜〜っ！　だって、だってだってだってぇ……!!」
　横島の声は様々な感情に彩られ、掠れてしまっていた。横島の頭の中では、永琳の言葉が止め処なくリフレインしていた。つまり、『吸血はセックスの隠喩』である。
　吸血鬼は血を吸うことで仲間を増やす。親となる者が子を作る行為である。そのことが横島の脳内にこびりついてしまっていた。そのような状態で、レミリアとあんな体勢になってしまったのだ。今回のことは仕方がないことと言える。だが、彼はついに見た目の幼い少女に完全に反応してしまった。横島の心はあらゆる意味で軋みを上げる。
「――ふふっ」
　それを救ったのは、目の前の少女だった。レミリアは横島の眼から未だ流れ落ちる涙をその舌で舐め取った。
「お前は結構泣き虫なんだな。あまり泣いてばかりだと男が下がるが……今の私は気分が良いから許してやろう」
「ん……うえ？」
　横島はレミリアの言葉が信じられず、間の抜けた声を出す。一体この状況の何が彼女の機嫌を良くしたのか。
「何でって顔をしてるな。……一つ聞くが、パチェの裸を見てもこうはならなかったん

だろう？」

レミリアの言葉に横島は暫し目を見開いたあと、頷いた。

「ははは、そーかそーか。パチェからそういったことを聞いてなかったからやっぱりだ。……ついでに合点もいった。血を吸ってほしいというのもこれが関係しているんだろう？」

レミリアがそう言って下腹を横島自身に押し付ける。予想外の刺激に横島はびくりと跳ね、呻きを漏らしてしまう。

「まったく、紫達も最初から全てを話していれば良かったものを。そうすればお前も泣くことはなかったかもしれないのにな」

「……お嬢、様」

「とりあえずの事情は理解したし、これ以上このままでいるのもお前が辛いだろうしな。……吸わせてもらうぞ？　優しく、ゆっくりと吸ってやるから、そのまま身を委ねていろ」

レミリアは横島の首をぺろりと一つ舐め、牙を突きたてた。

「う……っ、く」

横島の体が痛みに跳ねる。レミリアは首に回した腕の力を強くし、横島が逃げられないように押さえる。少しずつ、少しずつ血液を嚥下していくうちに、横島の体から力が

抜けていくのが伝わってくる。レミリアは首に回していた手を解き、背中へと回す。すると横島も痛みを我慢する為か、同じようにレミリアの背に腕を回し、抱きしめてきた。

「……ふっ」

始めは驚いたレミリアも、すぐに柔らかな笑みを浮かべて血を吸うことに集中する。その際に片手を横島の頭に持っていき、優しく撫でる。

その姿は、睦み合う恋人同士の様にも見える。窓のない部屋。重なる二つの影は、暫くの間離れることはなかった。

第二十七話

『吸血』

～了～

第二十八話『思い立ったが吉日』

慧音とさとりが紅魔館を訪れてから、また幾日が過ぎた。昼を過ぎた現在の時刻は午後の三時と半。咲夜特製のおやつを食べ終えて鼻歌を口ずさみながら廊下を歩くのは、紅魔館の門番である紅美鈴。彼女はある人物に相談を持ちかけようと、その人物の部屋に向かっている。というのも、彼女もまたある少女達から相談を受け、衝撃を受けたからだ。その人物達にも、その内容にも。

「……まさか、妹様と小悪魔ちゃんがあんなことを言い出すとは……」

美鈴は相談された内容を思い返す。『何とかしてただお兄様を長生きさせたい』『だから色々と協力してほしい』……フランは簡潔にそう言っていた。その後の小悪魔の説明によって詳しい内容を知れたわけなのだが、美鈴には戸惑いの感情が強かった。

何せ自分の感情を理解した矢先のことである。これから横島に対してどのようなアプローチを仕掛けようかと、迷っていたときにこれだ。恐らく、あの二人には全てを見透かされているのだと美鈴は考える。二人が浮かべていた笑顔はとても印象的だった。

しかし、戸惑ったのはそれではない。美鈴自身、フラン達の誘いに関しては特に反論

も異論も無い。何せ彼女も妖怪だ。力のある者、魅力ある者がハーレムを築いているのを今までの長い生の中でいくつも目にしてきている。ましてや人間よりもいっそ獣に近い価値観すらも有している妖怪達は、それを当たり前のように考えている者も多い。その中でも幻想郷に住まう妖怪達の価値観は人間寄りだが、だからと言って人間のルールに縛られることはない。ちゃんと管理が出来るならばお好きにどうぞ、と言ったところだ。

問題は長生きについてだ。フラン達の様子から、それは単に普通の人間よりも長く生きて欲しい、ということではないことは確かだ。――妖怪化。あるいは魔族化。フラン達は横島をそういった人から外れた存在にしたいと考えているようだった。

「流石にマズイですよねぇ……」

思わず唸ってしまう。先程までの楽しい気分はどこかへと消えてしまった。美鈴は横島が人外となるのを忌避しているわけではない。むしろ横島が望むのなら、進んでその道を模索したいぐらいだ。だが、横島はそれを望んでおらず、人間としての生を全うしたいと考えているらしい。加えて、ここは幻想郷だ。様々な偶然が重なったとはいえ、今や横島は幻想郷の住人だ。しかも、元の世界に帰れる可能性が限りなく低い。

重ねて言うが、ここは幻想郷だ。そこに住む人間が人外になるなどと、そんなことは博麗の巫女が許さない――。

「むむむ……。本当にどうしたものか……」

美鈴はうんうんと唸り、首をぐるぐると回す。こうすれば何か良いアイディアが浮かぶのではと考えた故の行動だが、その様は非常に不気味である。しかし、そんな何かしらのクスリがキマっているかのような美鈴に近付く少女が居た。

「ちょっとちょっと、私の部屋の前で変なことするのはやめてよ、美鈴」

焦っているような、呆れているような声音で美鈴に声を掛けたのは、膝上２０センチという超ミニスカートのメイド服を着用した鈴仙であった。

「あ、鈴仙さん」

「あ、じゃないわよ。こんなところで何してるのよ？」

間の抜けた表情で自らの名前を呼んだ美鈴に、鈴仙はツッコミを返す。美鈴は後頭部をカリカリと掻き、照れたように笑みを浮かべる。

「やはは、実は相談に乗ってもらおうかと思いまして……」

「相談……？　私に？」

意外と言えば意外であった。お互い上司の無茶振りに苦労するという共通点があるおかげで仲が良い方の二人だが、こんな風に相談があると言われたのは初めてだった。

「んー……どんなことなの？」

鈴仙は疑問をそのまま口に出す。それに対して美鈴は少し言いにくそうにして、視線

を逸らしながら答えた。
「横島さんのことに関して、です」

第二十八話
『思い立ったが吉日』

「……なるほどね。フランや小悪魔がそんなことを……」
「はい」
　現在二人は部屋に備え付けられている対面式のソファに腰かけている。美鈴が鈴仙に詳細を語ってたっぷり数十秒。鈴仙は溜め息混じりにそう呟いた。フラン達が横島に特別な想いを抱いていることは知っていたが、まさかそれほどまでの物とは思っていなかったのだろう。少々深刻な表情を浮かべている。
「……正直なところ、私にはどうすることも出来ないわね。せっかく相談してくれたの

に、役に立てそうもないわ。ごめんなさい」
「ああ、いえ、そんな。頭を上げてください」
鈴仙はそう言って美鈴に頭を下げる。実際、鈴仙ではどうすることも出来ないのは確かだ。美鈴とて、それは分かっているはず。だと言うのに、何故このようなことを持ち出してきたのか。沈黙が場を支配する。このままでは気まずい時間がただ過ぎてゆくだけだ。、鈴仙はとりあえず一つの話題を提供してみる。
「……それにしても、フランも変わったわね。あの子が誰かを好きになるなんて、未だにちょっと信じられないわ」
その話題とはフランのこと。鈴仙は以前のフランのことを知っている。かつての月侵攻用ロケット完成パーティーの際には、地下に迷い込んだ時にはてゐ共々散々驚かされたものだ。鈴仙のフランに対する印象はその時点で固まっていた。故に、紅魔館に住むようになった今はフランのひととなりに些かならず驚いている。
「妹様だって女の子なんですから。それは当たり前のことですよ」
鈴仙の言葉に美鈴はそう返す。鈴仙は暫し唸ったが、やがて「それもそうか」と納得に至った。
美鈴は思い返す。フランが皆に馴染もうと努力していたときのことを。いつも遠くから仲睦まじい様子の妖精メイド達を眺めていた頃を。その頃を思えば、なるほど、確

かにフランは変わったと言えるだろう。変化が顕著に表れたのは、やはり横島が紅魔館に来てからだろうか。

例えば妖精メイド達がヨーヨーで遊んでいた時だ。妖精メイド達が輪になって楽しそうにはしゃいでいる中、フランはそれを羨ましそうに眺めていた。その頃のフランは妖精メイド達と話すことは何でもないことになっていた。だが、玩具で遊んでいるとなると話は別だ。彼女の力、そして能力は妖精メイド達の玩具など塵のように簡単に壊してしまえる。

無論フランにそれらを壊す気は毛頭無い。だが、万が一を考えると一歩を踏み出せなかったのである。

そんな時に現れたのが横島だった。

「お？　皆何やってんだー？」

「あ、横島さんだ」

横島はあっという間に妖精メイド達の輪に入っていった。その自然な様に、フランはどれだけの嫉妬を覚えたことか。自分より遥かに新参者の少年が、皆と笑い合い、遊んでいる。その光景を見るフランの頬は、見事に膨らんでいった。

しかし、そこで転機が訪れる。

「おーい、妹様もやりましょうよー！」

「――――え？」

横島が手を振り、自分を誘ってきたのだ。これには咄嗟の対応が出来ず、呼ばれるままになってしまう。気が付けば横島が自分の手を握り、妖精メイドの輪の中へと連れて来てくれていた。フランは皆に囲まれ、慌ててしまう。

「妹様もやりましょー」

「え、えぇ……？」

「居たならお声を掛けて下されば良かったですのにー」

「いや、ちょ……」

「よーし、お前ら！　横島先生のヨーヨー講座を始めるぞー!!」

「はーい!!」

「……えぇー」

全てが強引に進んでいった。フランは流されるままにヨーヨー講座なるものを受ける。言われたまま、流されるままにヨーヨーの練習をするフラン。最初の頃は壊さないように、おっかなびっくりヨーヨーを扱っていた。彼女のヨーヨー暦は無いに等しい。当然失敗ばかりだ。だが妖精メイド達が次々と技（トリック）を決めていく姿を見ると、次第に対抗心が湧いてきて扱いが大胆になってくる。熱中してきた頃には自らが考えていたことなど、頭の中からすっぽりと抜けていた。あれほど気にしていた、自ら

の能力すらも、だ。
　それほどまでにフランは熱中していた。ただ、妖精メイド達と遊ぶ。それだけの行為に。
「……」
　横島はその光景を目を細めて眺めていた。恐らくは、この頃からフランに対して違和感を持っていたのだろう。横島は大きく息を吸い込むと、手をパンパンと2回打ち鳴らした。
「うっし！　それじゃ、俺が今から皆に頂点を極めた技（トリック）を見せてやろう」
「……頂点？」
　横島の言葉に大多数が首を傾げる。それを見た横島の反応は、ただにんまりと笑うだけだ。
「ふっふっふ。何せ俺は子供時代、3年連続日本チャンピオンに輝いたスピナーだからな!!」
「えええええぇーーーー!!?」
　妖精メイド達の悲鳴のような歓声が上がる。妖精メイド達素人からすれば、日本チャンピオンなど憧れの存在以外の何者でもない。横島は時折こういった子供染みた自慢をする。それが横島らしいと言えるのだが、そもそも横島はまだ子供。こういった自慢

が似合う年頃ではないが、それでも似合ってしまうのはご愛嬌といったところか。

皆は目を輝かせ、日本一の演技を今か今かと待っている。横島は皆を一瞥し、大きく頷く。最後にフランを見つめ、彼はニカッと笑った。

「――――!?」

フランに正体不明の衝撃が走る。胸が高鳴り、頬が熱くなる。その頃のフランに芽生えた感情が何か、それは理解出来ていなかっただろう。ただ、フランの胸中に何かが焼きついたことは確かだった。

「さ、いくぜ!!」

横島がそう宣言し、軽やかな手つきで演技をスタートする。横島の手からヨーヨーが離れておよそ0．5秒。横島は既に1つの技（トリック）を完成させていた。

それは『ストリングスプレイ』と呼ばれるヨーヨーを空回り（スリープ）させたまま、糸の部分であやとりのようなことをしたり、糸の部分にヨーヨーを乗せたりなど、糸の部分を活用する種類の技（トリック）。今横島が完成させたのは、糸の部分を蜘蛛の巣に、ヨーヨー本体を蜘蛛の子に見立てた物。その名は――――!!

「ストリングプレイスパイダーベイビー!!」

ヨーヨー日本チャンピオンの演技は、とても爽やかなドヤ顔から始まりを告げた。

例えば妖精メイド達がけん玉で遊んでいた時も。この時フランはヨーヨーの時の経験を活かし、自然と皆に混ざることが出来た。そうして楽しくけん玉で遊んでいる中、1人の妖精メイドが横島を連れてきたのだ。

「お？　今度はけん玉か。懐かしいな」

「……お兄さん、けん玉も得意だったりするの？」

横島を連れてきた妖精メイドが、物凄く期待した眼差しで横島を見ている。その様子から、フランは横島がヨーヨーと同じく、けん玉もかなりの力量を誇っているのではと思い至った。

「ん？　ええ、何せ俺は子供時代、3年連続で日本チャンピオンになってますから」

「ヨーヨーだけじゃなく、けん玉まで!?」

この発言に妖精メイド達が沸いた。目の前に居る執事は、ヨーヨーだけでなくけん玉でも自分達を更なる高みへと誘ってくれる存在なのだ。妖精達は単純である。かつて日本の頂点に立ったと聞いただけで目がハートマークへと変貌している。あまりのチョロさに横島も苦笑いを浮かべるしかない。

横島はどこからともなくけん玉を取り出すと、今度はけん玉についての授業を始める。

「いいかー？　まずはけん玉の各部位の名称。それからメンテの仕方について説明するぞー」

「はーい!!」

横島は皆がちゃんと着いてこれるようにゆっくりとした口調で話し出す。フランも横島の話をメモを取りつつ真剣に聞き、まずはけん玉に関する知識を深めた。

そしてけん玉のことを知れば知るほど、かつてチャンピオンの座に着いた者の演技を見たくなる。それは妖精メイド達も同様で、既に何人かの妖精メイドが横島に演技をねだっていた。それに対し横島は「しょうがねーなー」と言いながら上着を脱ぎ捨てる。やる気満々な姿から、1番チョロいのは彼なのかも知れない。

「んじゃ、早速いくぜーー!」

そう宣言したと同時、横島の両手がぶれる。恐るべきスピードで形作られるそれは、もはや芸術（アート）だ。けん玉の中心たる『けん』が踊り、『玉』が軽やかに舞う。やがて玉とけんを繋ぐ糸が模様を描き、玉がけんに収まった。その姿が現れるまで1秒未満。糸を蜘蛛の巣に、けんと玉を蜘蛛の子に見立てた絶技――――!!

「ストリングプレイスパイダーベイビー!!」

けん玉日本チャンピオンの演技は、またも爽やか過ぎるドヤ顔から始まった。

次にベーゴマで遊んでいたとき。

「ベーゴマか……。何かレトロな物ばっかりだな。……まぁ、俺はベーゴマでも3年連続日本チャンピオンだったけど」

「やっぱりそうだったんだ!?」

これはフラン達が想像していた通りだった。もはや何でもありな感じが否めない。横島という人間の手先の器用さは計り知れない物がある。

ちなみに横島はヨーヨー・けん玉・ベーゴマだけでなく、ミニ四駆・カラオケ・カードゲーム・メンコ等々、数多くの遊びで頂点を極めている。遊びの天才は伊達ではない。『浪速のペガサス』の異名は今も伝えられており、ホビー界では生ける伝説となっているのだ。

そんな彼がベーゴマでまず始めに披露した技は、ベーゴマ本体を紐に引っ掛け、紐で蜘蛛の巣を、回転するベーゴマ本体を蜘蛛の子に見立てた超大技、『ストリングプレイスパイダーベイビー』であった。その時の横島の表情は、やっぱり爽やか過ぎるドヤ顔であったらしい。

「――何てことがありましてね？　妹様を気遣いながらフォローとかもしてたみたいなんですよ。そういうところも格好いいと私は思うんですけど、個人的には皆と玩具で遊

んでいるっていうのが意外とポイントが高くてですね。やっぱり横島さんの魅力の1つに『子供っぽいところ』が含まれると思うんですよ！　一緒に鍛錬をしている時の緊張した面持ちも良いんですが、こう、何と言うか。年相応の表情を見せてくれているのがそういう瞬間だと思うんですね。凄く良い笑顔なんですよ。あんな顔を見ちゃったらもう、横島さんが可愛く感じてきちゃってですね――」

「うん……うん……うん……そうね……」

美鈴は思い返すだけでは満足出来ず、いつのまにか鈴仙に色々と語っていた。尽きることのないマシンガントーク。それに相槌を返す鈴仙は、一見朗らかに笑みを浮かべているように見える。だが、ここで彼女のこめかみに注目してみよう。そこには幾筋もの血管が浮かび上がり、井桁が形成されているではないか。まず間違いなく、お冠である。

（こんにゃろう……さては相談はついでで、本当は惚気たいだけだったのね……!!）

心の中で暴言を吐く鈴仙は随分とアクティブに思える。横島を前にした時と比べると落差が激しいが、これは何も横島のことが嫌いだからではない。いや、苦手意識は持っているのだが。彼女は未だ横島と上手く打ち解けられず、彼の前では素の自分を出せないでいるのだ。

「はあ……。何というか、美鈴に対する今までのイメージが崩れちゃったわ……」

鈴仙は片手で目を覆い、溜め息を吐いた。それに対する美鈴は「あはは」と笑い、視

線を逸らすことで誤魔化した。鈴仙が軽く睨んできているので誤魔化せてはいないだろうが。

「……それで、横島さんのことはどうするの？　寿命のことはともかく、告白とかするの？」

腕を組み、ソファの背もたれに体を預ける鈴仙の言葉に、美鈴は瞬時に顔を赤くした。だが彼女は鈴仙の目をしっかりと見つつ、強く、深く頷いた。

「最近妹様や小悪魔ちゃんとも色々話し合ってるんですよ。人里に行った時にいわゆる女性誌なんかを買ったりして、その内容を横島さんと私達に脳内で置き換えたりして……」

「……そ、そう。案外乙女チックというか、何というか」

「妹様も徐々に変わってきましたね。女性誌に『まずは外堀を埋めていこう』とか、『ただ直球でいくだけでは男は落ちない』とか書かれていたんですけど、それを見て『私もそういうことをしなきゃお兄様は落とせないのかな？』とか、『お姉様の言うとおり、分かってやれば問題はないのかな？』とか言っていましたしね」

「……ふーん？」

美鈴はフラン達との近況を話していく。それは先程の惚気と同様に中々に饒舌だったのだが、鈴仙にはその姿が先程とはまるで違うことを見抜かれていた。

「美鈴さ、さっきあれだけ力強く頷いていたのに、何で告白のことから話を逸らしてるの？」

「――――……」

美鈴は笑顔のまま一切の動きを止めた。そうして沈黙が場を支配して数十秒あまり。

美鈴がぷるぷると震え始める。

「……だっ」

「だっ？」

「だって！　告白なんてどうすればいいか分かんないんですよー!!　だからこうやって相談しに来たんじゃないですかー!!」

「あんた最初っからヘタレてたの!?　って、ちょっ、こら！　離れなさい！」

美鈴が涙目になり鈴仙へと縋り付く。鈴仙は何とか美鈴を引き離したいのだが、今現在の二人は腕力の差が大きすぎる。結果、鈴仙は美鈴に絡まれて数時間も『相談』を受けるはめになったのだった。

時は夕暮れ。レミリアの部屋からゲストルームへと続く廊下を、レミリアとパチュリーが歩く。実は数時間前にレミリアの部屋でちょっとした騒動があり、それにパチュ

リーが苦情を言いに行くということがあったのだ。
　今夜は満月。横島達の給料日である。それに関する騒動があった。
「あれだけ滅茶苦茶になった部屋を簡単に元通りにするなんて、横島の技術もかなり凄い物があるわよね」
「私達みたいな能力だとか魔法じゃなくて、単純な器用さだものね。……ふふ、やはりこの私の従者に相応しい……」
　廊下の長さに対して少なすぎる窓から差し込んでくる赤い日差しを、レミリアは親友を盾にして防ぎながら他愛も無い雑談に興じる。そんな親友を横目で見つつ、パチュリーはレミリアに気なっていたことを訊ねる。
「ところでレミィ？　小悪魔を含め、貴女の妹や従者達が横島にメロメロにされているわけだけど、この状況をどう思う？」
　パチュリーの問いにレミリアの表情が変わる。それは怒りによってではなく、どちらかと言えば拗ねているかのような表情だ。
「……まあ、小悪魔や美鈴、妖精メイド達は別にいいのよ。ただ、フランにそういうのはまだ早いとか思ったり……いや別にダメだってんじゃないんだけどね？」
「ふむ……」
　レミリアは少々声を潜め、ぶつぶつと呟く。その内容を聞いたパチュリーは、余計な

部分を省き、要約する。

「つまり、姉離れが嫌だ、と」

「ちがっ……わ、ないのかしら……？」

パチュリーの言葉を咄嗟に否定しようとするレミリアだったが、途中でその勢いをなくし、しりすぼみになる。長い間姉らしいことをしてやれなかったため、レミリアはフランに甘いところがある。もしかしたら、姉と妹という関係に何かしらの固定観念を持っているのかもしれない。

「……もうちょっとフランが大人になれば、構わないんだけどね。……まあ、他人はともかくフランに対して横島は手放しにオススメ出来る相手ではないけれど」

「まあ、確かにね。恐ろしいまでの煩悩の持ち主だし。……ま、何とか自制は出来るようだし良いんじゃない？　それに優しいところもあるしちゃんと気も使える。仕事も優秀で霊力も莫大、収入も良し。顔もそこそこだし最近は家事の腕も上がってきて……」

「……」

二人の間に沈黙が舞い降りる。

「……横島って、実は優良物件……？」

「うーん……」

二人は真剣に考え始める。まず第一に彼の煩悩を許容出来るかどうか。それが最初

にして最大の難関だ。
　と、ここでレミリアがパチュリーの横顔を見る。するとレミリアの頬が徐々に吊り上がり、ニヤニヤとした表情になった。
「ところでパチェは横島についてどう思ってるの？　何か特別な物はあったりしないの？」
「私？　……まだこれといった物はないわね」
　パチュリーの返答にレミリアの笑みがますます深まる。
「ふーん？『まだ』ってことは、これから横島に特別な想いを抱くことがあるかもしれない、と？」
　レミリアは嫌らしい顔でパチュリーに問う。思うのは先程の仕返し。全く持って逆恨みなわけであるのだが、こんなことは二人の間では日常茶飯事だ。パチュリーはレミリアをちらりと見やり、ごくあっさりと答えを返す。
「ええ、そうね。もしかしたらいつか本気になっちゃうかもね」
「――……は？」
　レミリアはパチュリーの答えに間の抜けた顔で間の抜けた声を出し、ついつい歩みを止めてしまった。
「……どうしたの、レミィ？」

「いや、どーしたって……否定しないの？」

レミリアは目をしばたたかせ、そう問うた。

「まあね。何だかんだ言って、横島はこの紅魔館唯一の男性よ。私だって彼に対して意識している部分はあるもの。……裸も見られちゃったし、ね」

そう言ったパチュリーの頬は朱を帯びていた。レミリアには何故パチュリーの頬が赤く染まっているのかは判断がつかない。1つ思ったことは、横島は存外に女誑しなのではないか、という疑惑だけだった。

「あら、噂をすればなんとやら。あんな所に横島が」

「え……？」

レミリアはパチュリーの言葉に咄嗟に反応出来なかった。レミリアは辺りをキョロキョロと見回したが、横島の姿を確認出来ない。一体どこにいるのかと、ふと窓の外を見やると、窓から見える紅魔館が誇る時計塔、その巨大な文字盤の前に横島ともう1人が座っていた。

「あれは横島と……妹紅？」

「あら、本当。何やってるのかしら」

見れば、二人は何事か語らっているように見える。人間を遥かに超えた聴力を持つ吸血鬼でも、流石に二人の会話までは聞こえない。

「それにしても、横島はどうやってあそこまで上ったのかしら？　妹紅に運んでもらった？」

「いや、横島はいつも時計塔の近くにある木の下で空を飛ぶ練習をしてたから、その関係じゃないか？　どうせ変なことを考えてて、気が付いたらあんな所まで浮かんでいて降りられなくなった……とか、そんなんじゃない？」

「……ありうるわね」

レミリアの言葉にパチュリーは頷きを返す。レミリアは腕を組み、俯き加減になって落ち込む。ああいうところがなければフランを応援するのに、と。思わず深い溜め息が出てしまう。

だが、そんな憂鬱な気分を吹き飛ばすような事件が起こった。

「――ファッ!!?」

突如、隣に佇む自らの親友が奇声を上げたのだ。レミリアは思わず体をびくりと跳ねさせ、驚いてしまう。

「ちょ、急に変な声を出してどうし――ファッ!!?」

レミリアはパチュリーに視線をやり、そのまま流れるようにその視線を横島達に向け……驚きから自らも奇声を発してしまった。

レミリア達の視線の先。そこに広がった光景は、妹紅が横島に覆いかぶさるようにし

て、自らの唇を横島の唇に押し当てているところだったのだから。

第二十八話

『思い立ったが吉日』

～了～

第二十九話『裏目』

慧音とさとりが紅魔館を訪れてから数日。満月の日の朝。紅魔館のとある一室へと続く廊下を、ふわふわの兎の耳を生やした、幼い少女が歩いている。

彼女の名はてゐ。紅魔館の執事、横島に恋する少女だ。今、彼女の瞳にはある決意の炎が燃え盛っていた。

「執事さん、待っててね……」

そう、彼女は決意したのだ。横島に告白することを。

今の今までどうしても決心がつかなかったのだが、横島の周りの環境を見て早い方が良いと判断したのだ。

「ま、独り占めしよーってんじゃないんだけどねー」

てゐは独り言を呟きながら目的地へと歩を進める。彼女の口ぶりから横島にいの一番に告白をして、独占しようという気はないことが窺える。彼女が告白を決意したのは、最近の横島に変化が見られたからだ。

最近の横島は特定の人物達を意識している。それがフランと小悪魔だ。どうも二人

の気持ちを知り、それから彼女達に対する態度が変化してきたようだ。他にも、つい先日レミリアの部屋から妙にすっきりした様子の横島が出てきたという報告もある。

これらの情報から、てゐはある一つの結論に達する。

――――横島が、ロリに傾倒しだしたのだ……と。

日頃自分はロリコンじゃないと言っている横島だが、彼だって健康的過ぎる程に健康的な少年だ。さほど変わらない年齢（見た目）の美少女達に好意をぶつけられれば、例え自分の好みの年齢（見た目）から外れていても、どうしても意識をしてしまう。特に彼は日頃の言動のせいでモテない青春を送ってきている。こんなチャンスは滅多にない。誰かに取られる前に受け入れてしまった方が良いのではないか……。そんな考えが頭をちらついても無理はない。

だからこそ彼は紫達に相談を持ちかけたのだ。このままでは煩悩が暴走してしまう、と。

それを知ってか知らずか、てゐは好機と判断し行動へと移す。何事も早い方が良い。鉄は熱いうちに打てと言うし、今のうちに横島に想いを告げておけば、彼の中で何かと特別な立ち位置になれるかも知れない。

てゐは横島に何人もの女が出来るのは構わないが、どうせなら自分が正妻ポジションにつきたいと考えている。永い付き合いになるかもしれないのだ。一番近くで愛する

者を見ていたいと思うのは、ごく自然なことだろう。
「……さて、着いた」
てゐがその歩みを止める。どうやら目的地に到着したようなのだが、彼女の表情には濃い緊張の色が見て取れる。横島に告白をするということに、それだけのプレッシャーを感じているのだろうか。
――そうではない。そうではないのだ。
今てゐが立っているのは横島の部屋の前ではない。そもそも今彼は元気に執事業をこなしている。この部屋は何の変哲もない、ただのゲストルーム。そう、永琳が入り浸っているゲストルームだ。
ここに来たのは他でもない。永琳に横島への告白の許可を貰いに来たのだ。
てゐの頬に冷や汗が伝う。てゐはそれを乱暴にハンカチで拭うと、にやり、と不敵に微笑んで見せた。
「……行こう」
てゐはドアレバーに手を掛ける。目を閉じ、数回深呼吸した後、一息にドアを開け放った。

第二十九話

『裏目』

――――まるで、自分の周囲のみ重力が数倍になったかのように錯覚してしまうほどの重圧。全身から冷や汗を流し、てゐはその重圧にひたすら耐える。彼女にそれ程までの重圧を掛ける存在。それは言わずもがな永琳だ。彼女はてゐを見つめている。否、もはや睨みつけていると言ってもいいだろう。少なくともてゐにはそのように感じられる。

「……てゐ、もう一度言ってくれるかしら？」

それはいつもと変わらないはずの声音。だが、今のてゐには何故だかとても恐ろしく聞こえてしまう。てゐはカラカラに乾いた喉に何とか唾を飲み込むことで、かろうじて発声を可能にした。

「……えっと、執事さんに、いっぱい迷惑を掛けて、いるけれど。私は、その。執事さんのことが、好きになったので、どうか、告白、の、許可を、いただけたら……と」

乾燥しきった喉では声を出すのも困難になる。しかし、てゐはつっかえながらも、しっかりと永琳の目を見据えて言い切った。尋常ではない緊張がてゐを襲う。彼女の

言葉を聞いた永琳は何の反応も示さない。時間だけが過ぎてゆく。どれだけの時間が経ったのか、少なくともてゐには数時間とも思える時間の流れの果てで、永琳がてゐに問いを投げかけた。

「……本気なのね？」

それは、てゐの意思の確認。てゐは襲い来るプレッシャーをはねのけ、しっかりと頷いた。

「……」

「……」

二人の間に沈黙が舞い降りる。だが、そこで永琳が、ふ、と微笑んだ。それにより、てゐを襲っていたプレッシャーが跡形もなく消失する。

「本気なら、私から言うことは何もないわ。告白が成功するように祈っててあげる……頑張りなさい」

ひどく優しい声色で、永琳はそう言った。瞬間、てゐの口から吐き出されたのは、特大の溜め息だった。

「……人がせっかく応援してあげているのに、その態度は何なのかしら？」

「あー、いや、違うんだよ。物凄く緊張してたから、それでつい……」

「緊張って、私に告白するわけじゃないんだから、どうして緊張なんかするのよ」

てゐの物言いに、永琳は口を尖らせて文句を言う。だが、文句を言いたいのはてゐの方だった。

「だってさ、私は執事さんに取り返しのつかないことをしちゃったわけだし。それを理解して告白しようってんだから怒られるのは覚悟してたんだよ。それが結局なんにもなかったから、ほっとして……」

「……いや、流石に人の好いた惚れたに口出しはしないわよ？　そういうのは当人達の問題だし、二人が納得するのならそれが一番なんだし……私からの許可なんて必要ないでしょうに」

「えぇーっ!?　あー、もう、緊張して損したー。だったらあんな極大のプレッシャーを掛けないでほしいよ」

「……？　プレッシャー？」

ぶちぶちと文句を言い始めるてゐに、永琳が疑問の声を上げる。てゐが感じていたプレッシャーについてだ。

「プレッシャーって、私にそんなのを感じてたの？」

「感じてたのって……。あんなにぐわーっ！　って重圧を掛けてきてたじゃない」

「……いえ、そんなことはしていないけれど……？」

「え……？」

再び二人に沈黙が舞い降りる。不思議そうにしている永琳に、嘘を吐いている様子は一切見られない。長い付き合いだ。それくらいのことは分かる。

と、いうことは。

「……私の、思い込み？」

てゐが小首を傾げる。一体永琳にどのような印象を持っていればそのような現象が起こりうるのか。永琳の目が徐々に細められていく。

「あ、あー!!　こうしちゃいられないなー!!　思い立ったが吉日って言うし、私は執事さんの所へ行って来るよー!!」

永琳の機嫌が急降下したことを長年の経験から察したてゐは、わざとらしく大声を発して席を立ち、脱兎の如く部屋から逃走を試みる。それに慌てたのは永琳だ。

「あ、待ちなさいてゐ!!」

永琳がてゐに向かって手を伸ばす。だがてゐはそれを体を深く沈めることで回避した。その際、急激に体を動かしたせいか、てゐは眩暈を覚える。しかしてゐはそれを無視して部屋を飛び出した。目指すは横島が居るであろう中庭だ。

てゐは走る。愛しの横島の元へとひた走る。てゐの心情を表しているのか、未だかつて感じたことがないほどに軽やかに、飛ぶように走ることが出来た。

――見つけた！

程なくしてておは中庭に辿り着き、横島の姿を認めた。ておは彼の元へと駆け寄り、その勢いに任せて飛びついた。横島はておの行動に驚きつつもしっかりと受け止め、ておを軽く抱きとめる。

――あのね、私、執事さんに伝えたいことが……。

ておは息切れを起こしながらも必死に横島へと想いを伝えようとする。だが、横島はそれをさせなかった。

――あ……。

横島が、ておを強く抱きしめたのだ。まるで、言葉は不要だと言わんばかりに。思わず横島の顔を見上げたておの頬を、横島が優しく撫でる。その感触に目を細めていると、横島がておの顎に手をやり、そのままくいと持ち上げた。

ておが驚きと喜びに驚く暇もなく、横島の顔は、唇はその距離を縮めてゆく。ておはその短くも長い二人の距離にもどかしさを感じ、しかしその距離を埋めるという行為に歓喜を募らせる。

近付く横島に合わせ、ておはそっと目を閉じる。思わず、目の端から涙が零れる。

――執事さん。私、執事さんのことが――

数瞬後、ておは極大の幸福感と共に思考を真白に染める。暖かな温もりに包まれ、ておの意識は急速に失われていった。

「……だから待ちなさいって言ったのに」

片手で顔を押さえ、深い溜め息を吐くのは永琳だ。彼女の眼前に広がる光景。それはてゐがやたらと幸せそうな表情でゲストルームの絨毯に倒れこんでいる姿だ。極度の緊張からの開放による意識と体の緩み、そして急激な運動による血圧の変動にてゐの体が耐え切れず、てゐは永琳の手を避けた段階で失神していたのだ。

「むにゃむにゃ、もう飲めない……」

「……全く、世話の焼ける子ね」

幸せそうな顔で寝言を言うてゐに、永琳は苦笑を浮かべる。普段の言動とは裏腹に、その寝言はまるで子供のようだ。

「うぅ……ん、執事さんの牛乳（ミルク）で、私の胃（ナカ）は、いっぱいだよぉ……。これ以上、飲まされたら、吐き出（溢れ）しちゃう……」

「……健全な夢、よね……？」

やはりてゐはてゐでしかないのであろうか。永琳は痛む頭でそんなことを思った。

さて、そんなてゐの思い人である横島が現在何をしているのかというと、レミリアの

部屋で大絶賛そわそわとしていた。本日は給料日であるし、またつい先日レミリアにすっきりとさせてもらった部屋だ。彼が意識してしまうのも無理はない。

そんな横島を生暖かい視線で見つめるのは彼の主であるレミリア。やや嫉妬を瞳に滲ませているのがメイド長の咲夜だ。

「相変わらず分かりやすい奴だな……。もっと慎みを持ちなさいって前にも言ったでしょ？」

「すんませーん、貧乏人の性なんです……」

横島は幻想郷に来るまでの極貧生活を思い出し、滂沱の如く涙を流す。紅魔館で執事をしてからは高給取りとなったはずだが、今回でもまだ二回目の給料日なのだ。横島が未だ貧乏時代を引きずっていても仕方がない。

「さて、これが今回の給料よ。受け取りなさい」

レミリアがどこからか取り出した茶封筒を咲夜に渡し、横島へと届けさせる。横島は喜色満面といった風情で何故か恭しくそれを受け取った。単純計算で前回の倍近くはあろうかというその分厚い茶封筒を恍惚の眼差しで見つめ、横島はレミリアに感謝を述べる。

「ありがとうございます、お嬢様!!　これからも頑張ります!!」

覇気が漲る横島の声にレミリアはうんうんと頷く。ここまで喜んでもらえるならば、

給料に色をつけた甲斐があったというものだ。
「……ちなみに、今回はおいくらほどで……？」
　横島が異常に腰を低くし、給料の額を尋ねる。失礼なのは承知の上だが、給料としてこれほどまでに分厚い茶封筒は未だかつて受け取ったことがない。可能ならば確認をしておきたいのだろう。
「こら、そういうのは卑しいわよ」
「あー、いいよいいよ別に。減るもんじゃないしね」
　横島を咎める咲夜をレミリアが止める。横島は首をすくめ、恐縮している。レミリアはそんな横島に苦笑を浮かべつつ、指折りで計算をする。
「まず１０００×２４で２４０００円。それが３０日で７２万円。でも切りが良くないし前回半月で４０万だったし、今回から時給制はやめたのよ。とりあえず今回からアンタの給料は毎月１００万にしといたから」
「――――る？」
　何でもないかのように告げたレミリアに、横島の思考が追いつかなかった。はて、今彼女は月に何万円の給料を支払うと言ったのか。
「ん？　聞こえなかった？　月１００万って言ったんだけど」
　月１００万。横島の頭の中でその言葉が何度も何度もリフレインする。月１００万。

俺が働いて、月１００万。俺が、１００万、貰える……？

　すでに横島にまともな思考を出来るほどの余裕はなかった。月１００万。その圧倒的なインパクトが横島の意識を遠くへと追いやってしまう。

　レミリア達は急に静かになった横島をいぶかしみつつも、前回のような顔面崩壊が起こるのではないかと少々警戒している。しかしその兆しは一向に表れない。ならばまた泣くのか、とも思ったのだが、どうやらそれもないようだ。

　純粋に嬉しさの余り現実感が湧かないのか、それとも、もしかしたら失神してしまったのだろうか。咲夜は苦笑を浮かべて横島の顔を覗き込み、そして硬直した。

「……？　咲夜、どうかした？」

　レミリアが声を掛けるが、咲夜はそれに応えない。それどころか、横島の口元に耳を持っていったり、首筋に指を当てたり。その不審な行動にレミリアの不安が広がっていく。

「まさか……」

「……はい。呼吸、脈拍共に停止。――――死んでいます」

　たっぷり数秒間、世界が凍った。その凍った世界を溶かしたのは、レミリアの怒号。

「アホかーーーーーーーー!!!!!!　たかが１００万もらったくらいでショック死するなーーーーーー!!!!!!」

レミリアは一瞬で横島の懐へと入り込み、そのままの勢いでいくつもの残像が出来るほどの速さで往復ビンタを食らわせる。見る見るうちに腫れ上がっていく横島の頬。それを止めたのは未だ冷静さを失っていなかった咲夜。

「いけませんお嬢様！　こういう場合には速やかな処置が必要です。とりあえずはまず心臓マッサージを――」

「任せなさい!!」

レミリアは咲夜の言葉を聞くや否や横島から大きく距離を取った。咲夜はレミリアの行動を疑問に思うが、まさか助走をつけて殴る気なのではないかと思い至る。だが、現実はもう少し斜め上を行っていた。

「必殺『ハートブレイク』――――!!!」

レミリアは右手に生み出した魔力球を握りつぶし強力な槍へと変化させ、それを思い切り横島へと投げつけたのだ!!

その槍は狙い通りに横島の胸部を直撃し、そのまま横島もろとも壁へと突き刺さる。幸い人体を貫通することはなかったが、横島の服は胸部を中心にジャケットやシャツといった上の部分が消滅。下も所々にほつれや破れが散見される。おまけに彼が叩きつけられた壁はクレーター状に大きく陥没し、その威力の程を知らせている。

横島は壁からズルズルと力なく滑り落ち、やがて床へと倒れこんだ。

「……」

咲夜はあまりのことに声も出ない。だがそれも数瞬のこと。咲夜はすぐさまレミリアへと詰め寄る。

「何やってるんですかお嬢様……!!　何やってるんですかお嬢様ーーーー!!!!」

「いや、その……心臓マッサージ……」

「じゃあ何で『必殺』なんです!?　何で『ハートブレイク』なんです!?」

「いや、だってグングニルだと横島が消し飛んじゃうし……」

「何でスペルカードを使う前提なんですか!?」

咲夜がレミリアを怒鳴る。非常に珍しい光景だ。普段見ることのない咲夜の姿にレミリアはしどろもどろになり、ろくな対応が出来ていない。レミリアはレミリアで横島がショック死したことに動揺していたようだ。

そしてそれは咲夜にも言える。こんなお馬鹿なことで自分の負担を減じてくれる存在を亡くしてしまうのは勘弁願いたいのだろう。それに、咲夜も何だかんだで横島のことは気に入っている。仲の良い人物がこんな死に方をしてしまっては泣くに泣けない。

そんな珍しい光景を終わりに導いたのは、倒れ付した横島の口から漏れた、声とも言えない僅かな呼吸音。

「横島さん!?」

「生き返ったのか!?　……やっぱり私のハートブレイクが功を奏したんだな、うん」
　咲夜はレミリアと共に横島へと駆け寄り、状態を見る。流石に死んでいたところにあれだけの威力の攻撃を受けたせいで、所々に小さな傷が出来ている。逆を言えば例え死んでいてもあの攻撃でその程度の怪我しかしなかったわけなのだが……。
「見た所自発呼吸は出来ていますね。とりあえず永琳を呼んで傷の手当を……」
「分かった。咲夜は永琳を呼んできて。私は人工呼吸をしておくから」
「え!?　いえ、横島さんは自発呼吸出来ていますから……」
「咲夜!!　……事は一刻を争うようなことなのかもしれないのよ?」
　レミリアは咲夜に言い聞かせるように強い口調を使う。その間にも横島の頭を自らの膝の上に乗せているレミリアに対し、咲夜は戸惑いを隠せない。
　その体勢では横島の口に自分の口が届かないのではないかとか、気道の確保が出来ていないとか、そもそも自発呼吸をしているのに人工呼吸をするのは危険だとか、何故お嬢様自らとか、突っ込みたい部分が多いせいだ。
　それでもレミリアは真剣な顔で咲夜に語りかける。このままでは横島がまた死んでしまう、と。
「ほら、見てみろ。こんなにも血色がわる――」
「……お嬢様?　どうかされまし――」

咲夜へと言葉を掛けながら横島の顔を見るレミリアだったが、何かに気付いたように押し黙る。それを不審に思った咲夜が横島の顔を見ると、その理由が理解出来た。

「……」

「……」

横島が目を閉じて思い切り唇を突き出している。いつにまにか手を胸の前で組み、何やら落ち着かなさそうに、あるいはナニかを期待しているかのように足がもじもじと動いている。体から溢れる霊力も強まってきているし、その姿はまさに煩悩少年の面目躍如と言った所か。

「……」

「……」

レミリア達から濃密な怒気、殺気が溢れ出る。それに敏感に反応した横島の体がびくりと跳ねる。咲夜は横島に馬乗りになり、その手に銀のナイフを取った。

「どうやら横島さんは私のナイフに口付けをしてほしいみたいね……？」

その言葉で横島の体がガクガクと震える。だが彼は目を開けない。今目を開けたら何か怖いモノを見てしまいそうだからだ。それでも首は全力で横に振っておく。せめてもの抵抗なのだが、それもレミリアに頭を掴まれることで終わりを告げた。

横島はこのまま儚い命を散らせてしまうのだろうか。だが、天は彼を見放してはいな

かった。突如部屋のドアが乱暴に開かれたのだ。
「さっきからうるさいわよ!!　ドタバタドタバタと、一体何を……して……」
「……パチェ？」
突然の乱入者はパチュリーだった。あまりにうるさいレミリア達に注意をしに来たのだが、その叱責はしりすぼみに消えていく。
一体どうしたのかと訝しんだレミリアがパチュリーへと声を掛けようとするが、それよりも前にパチュリーの悲鳴にも近い声が遮った。
「れ、レミィと咲夜が横島をナイフで脅して3（ピー）に持ち込もうとしている――――!!?」
「違あああああぁぁぁぁぁうっ!!?」
「誤解ですパチュリー様ーーーー!!!?」
状況証拠は完璧だ。傷だらけの上に衣服をずたぼろにされた横島に咲夜がナイフを片手に馬乗りになり、レミリアが横島の体を押さえつけている。パチュリーの灰色の脳みそは瞬時に答えを導き出し、その余りにも余りな真実に驚愕を露にする。
その後、何やかんやとともめにもめた一同だったが、横島からの証言もあり、何やかんやで誤解は解けた。ぼろぼろになった執事服や部屋の壁は横島と咲夜を中心にパチュリーが魔法で手伝い、一時間も掛からずに修復を終える。そして横島達はその場であっ

たことを全てなかったことにし、何やかんやでそれぞれの持ち場へと帰っていった。

今まで、横島は夕暮れ時に紅魔館の時計塔の近くにある木の下で飛行の修行をしていた。修行したての頃は木の枝に触れることすら覚束なかったのだが、浮かぶことに慣れてからは格段の進歩を見せていた。現在では木よりも高く浮かぶことも容易になっているのだ。

そうすると次に目標となるのは、木よりも遥かに高さがある時計塔。今の横島の目標は一号達の補助なしに、この時計塔の周りを１０周することだ。勿論、ある程度の高度を保ちつつ。

「さて、今回の目標は……？」

そう言って横島は懐から奇妙な球体を時計塔の壁に投げつける。それは木製の玉に十字の棘が大量についた物。かつて小悪魔とのデートの時ににとりの露天で見つけた物だ。にとりはこれを何の役にも立たないと言っていたが、こうして横島の修行の役に立てている。

壁にぶつかった球体はそのまま壁を垂直に登ってゆき、ある部分にぶつかり、落下した。ある程度の段差ならば問題なく進んでいけるのだが、流石に文字盤に程近い場所ま

で登っていけば勢いも減衰する。今回の目標は、文字盤だ。
「うっへ、かなり高いな。今の俺なら大丈夫だと思うけど……」
　横島は落ちてきた球体を懐に直し、霊力を集中して浮かび始める。
「それにしても、何であの形で壁を登っていけるのかね。強力なダウンフォースでも発生してんのかな？」
　横島は実にミニ四駆のチャンピオンらしい考察を展開する。それが誤りなのは理解しているが、それでもある種の説得力は存在しているのが不思議だ。
　馬鹿なことを考えつつも修行は順調だ。加減速に前後左右への移動、回転。様々な慣らしをしながら横島はどんどんと高度をあげてゆく。そして、数分後には文字盤の高さまで危なげなく到達した。
「うしっ、上出来上出来」
　横島はこの成果に満足し、休憩のために文字盤の前の返しに腰を落ち着ける。真正面、とはいかないが、赤く沈んでゆく夕日を視界に納めることが出来るその場所。この時より、この場所は横島のお気に入りの場所となったのだ。
　じっと夕日を見続ける横島。どれくらいの時間が経ったのかは分からないが、時間を忘れさせるまでにこの場所から見る夕日は綺麗だった。
　こうして夕日を見ていると、横島は望郷の念にかられる。今の自分ではどうしようも

ないことは理解しているが、だからこそ思いは募っていく。

「……これがホームシックってやつなのかね？　寂しいっちゃ寂しいけど……」

横島は頬杖をついて考えに耽る。思考を巡らせるのは元の世界のこと。彼は確かに自分の元居た世界に帰りたいと思っている。それは真実だ。

だが、それと同時に沸きあがる感情もある。その正体に今の横島は気付いていないが、それは決して気持ちのいいモノではないだろうということ位は理解出来ている。

「……はぁ」

横島は思わず溜め息を吐いた。もしかしたら、正体不明のこの感情が栄光の手や文珠を創れない原因なのかとさえ思う。

普段なら溜め息にのせることのない、暗く、澱んだ感情。誰にも聞かれることはないと思っていたそれが、横合いからの声に勘違いだと気付かされた。

「――なんだ、随分と辛気臭い溜め息吐いてるな」

「うえっ？」

声が聞こえた先に目をやると、そこには不思議そうな顔をした妹紅が立っていた。

「あ、妹紅。いやなんつーか……」

「んー？　……まあいいや。言いにくいこともあるだろうし。ここ、座っていい？」

「あ、ああ」

妹紅は横島の隣に腰を下ろす。そこで、横島に少々戸惑いが発生する。妹紅との距離が近いのだ。今も肩先が少し触れている。だというのに、妹紅は離れようとしない。どころか、逆に横島の肩に自らの体重を預けている。視線は夕日に向かい、しかし意識は横島に向かい。

妹紅の髪から香る甘い匂い、伝わる体温と柔らかさが横島の煩悩を揺さぶる。

「も、妹紅？　き、今日は一体どうしたんだ？　なんというかいつもと感じが違うけど……」

横島は何とか冷静さを保とうと妹紅との会話に集中しようとする。妹紅は夕日に向けていた視線を一瞬横島へとやり、その後軽く俯いた。たったそれだけだというのに、横島には妹紅から何やら只ならぬ色気にも似たものを感じている。

「今日は、さ。ちょっと聞きたいことと言いたいことがあって」

「……何だよ？」

普段と違い、しおらしい表情を見せる妹紅のギャップに横島は冷静さを欠いていく。ようやく搾り出せた言葉は妙にぶっきらぼうなものになっていた。

「それじゃ、まずは聞きたいことなんだけどさ」

妹紅はまた夕日を見つめる。赤く照らされたその顔に、僅かに朱が混じっていることを横島は気付けない。

「横島ってさ、今誰か好きな女の子とかいるのか？」
「……!?」
その質問は、横島にとっては予想外だった。妹紅は女の子だ。そういったことにも興味があって当然だろう。ましてや千年以上色恋に触れてこなかったというのだ。身近な男性である横島に、そういうことを聞くことだってあるだろう。他愛の無い話。ただの世間話の範疇だ。
だが、妹紅から発せられる雰囲気と真剣な声音が、それを否定している。
「……いると言えばいるし、いないと言えばいない」
「……曖昧だな」
結果、横島が搾り出せたのははっきりとしない回答。しかし嘘は言っていないのだ。彼には愛する者が存在し、しかしその愛する者はすでに存在していないのだから。
妹紅は横島の様子の変化に気付く。夕日を見つめる彼の瞳に寂しさや悲しみ、後悔というような、何か暗さを孕んだようなものを感じたのだ。
「まあ、今はそんな感じだけどさ！　これから先は俺にとってきっと素敵なことが起こると思うんだよ！　ほら、何つーの？　今の俺ってモテ期に入ってるってゆーかさ。皆ちょっとロリっ子だけど、将来的にはまとめて俺の物にしてみせるっつーか!?　なははは!!」

横島は自らが発した暗いオーラを払拭しようと努めて明るい声を出す。発言の内容もいかにも横島らしいと言えるようなものだ。取り繕った、というわけではないのだが、本心からの言葉のはずなのに、その言葉はどこか白々しさのような物が含まれていた。

「最近ではハーレム……って言うんだっけ？　輝夜が男のロマンって言ってたけど」

「そうそう！　今の俺なら可能なんじゃないかなーってさ」

心なしか、妹紅の横島を見る目が険しくなったように見える。横島としては冷や汗が止まらないが、先程のような暗い雰囲気ではないのだ。多少印象が悪くなろうが、その方がまだマシだと考える。

だが、妹紅は横島に向かって微笑んだ。

「じゃあそのハーレムに入れる女の子にさ。――私も含めてくれてるのか？」

「――――え？」

妹紅の言葉に、一瞬息が詰まる。妹紅の言葉の意味が理解出来なかったのだ。

その様子を見て何か勘違いしたのか、妹紅は悲しげに目を伏せる。

「私のこと、嫌いだったりする？」

「ん、んなわけねーって!!　妹紅は可愛いし、こっちから土下座してでも入ってもらいたいくらい……って何を言ってんだ俺は!?」

咄嗟に妹紅の言葉を否定し、偽らざる本音をぽろっとこぼしてしまう横島。頭を抱えて悶えるその姿に妹紅は苦笑を浮かべ、先程とは様子を一変させた悪戯な雰囲気を纏い、問いを重ねる。

「じゃあさ。……私のこと、好き、だったりする？」

「――――!!」

ここに来て、横島の心臓が早鐘を鳴らす。妹紅の顔を見れば、その表情はどこか意地悪く微笑んでいるように見える。しかし、その瞳には真剣さも見て取れる。横島は我知らず、吸い込まれるように妹紅から目を離せなくなる。

「……好き、じゃない？」

「……えっと、その……」

二人を包む雰囲気はすでに変化している。横島にはこれに覚えがあった。思い出されるのは彼女との日々。その時の感情がまざまざと思い出され、横島は無意識に口を開いた。

「……好きだ」

横島は思わず口を押さえる。彼の思考は一気に膨大な数の言葉に埋め尽くされる。それは大半が意味の無い物であるが、それは横島から咄嗟の判断を鈍らせるという効果を発揮する。何を言ったのか、何故言ったのか、ぐるぐると思考のループは止まらない。

「……そっか」

妹紅がぽつりと呟く。彼女はいつの間にか膝立ちになり、横島の肩に手を置いていた。横島がそれに気付き、自らの肩を見やる。

「だったら……両思いだな」

「え――――ん!?」

横島が何かを言う前に、その唇は妹紅の唇によって塞がれた。

傍から見れば、慣れていないのが良く分かるだろう。首を傾けずに勢いよく押し付けたため、唇だけでなく鼻同士も真正面からくっついている。目は堅くぎゅっと閉じられ、体はぷるぷると小刻みに震えている。この時、横島は自分に掛かる妹紅の重さに床に片手をつき、もう片方は無意識に妹紅のお尻に這わせてしまっていたのだが、それにすら気付いていない程に余裕がない。

そうしたままでたっぷりと十数秒間、二人は繋がったままでいた。やがてどちらからともなく唇が離れると、妹紅がゆっくりと口を開く。

「……実はさ、横島が慧音と図書館で会ってた時に、話を聞いちゃってさ」

「……」

「その、私のことについてとか話してたろ？　それで、何と言うか……私のこと、こんなにも理解してくれてるんだ、って思ってさ」

妹紅はたどたどしくも自らの思いを言葉にする。

妹紅は自らの価値観が人から大きくずれてしまっていることを理解している。それについて何かを思うことは今までありはしなかった。誰かに理解されずとも、自らがそれを認識し、肯定することで安定を保っていたからだ。

そうして永い永い時を生き、こんな自分を心配してくれる親友とも出会えた。決して自ら表に出さない、誰かに理解されない自分。恐らくは誰かに聞いたりなど、そういったこともなかったろうに。それでも、自分の胸の奥を理解し、飲み込み、可愛い女の子として扱ってくれている。

「横島は色々とひどい部分も……その、けっこうあるけど。気が付いたらさ。いつの間にか、そんな横島のことが好きになってたんだ」

妹紅は唇を指でなぞり、視線を逸らしながらも芽生えた想いを告白する。横島は、ここでようやく妹紅の唇にかつて自分が贈った口紅が塗られていることに気が付いた。

横島の胸に、不意に強い喜びが宿る。

「私は蓬莱人で横島は普通の人間だから、一緒にいられる時間は凄く短いんだろうけど……だからこそ、一分でも一秒でも長くそばにいたいんだ」

「……妹、紅」

妹紅が横島の目をじっと見つめる。横島はその真っ直ぐな瞳に何故か罪悪感を覚え

てしまう。その変化に気付いたのか、妹紅はすっと立ち上がり、少しだけ距離を取った。
「いきなりだったから横島も混乱してるだろうし、ちゃんとした答えはまた近いうちに聞かせてくれると嬉しい、かな。とにかく、私は本気だから。お嫁さんの一人になりたいと思ってる」
妹紅のストレートな物言いに、横島の頬が紅潮する。夕日に照らされた赤い世界でも、その朱色は鮮烈だった。そしてそれは横島だけでなく、妹紅も。
「それじゃあ私はもう行くから。……あ、最後に一つ」
「……？」
空へと浮かび上がり、横島へ首だけを向ける。妹紅は指で唇をなぞり、悪戯っぽく笑みを浮かべた。
「またさっきみたいに口紅を返しに来るからさ、受け入れてくれると嬉しいな」
「……うぇえ!?」
「あはは、それじゃ！」
最後に笑って爆弾を落として妹紅は飛び去っていった。真っ赤になった顔を両手で押さえ、猛スピードで空を行く姿から、相当に無理をしていたことが窺える。
横島はそんな妹紅を見送った後、数分間固まっていた。やがて妹紅と同じように顔を押さえた後、彼は全力でのた打ち回る。

「あああああああああ!!?　ほあああああああああああ!!??　俺は……!!　俺は一体どうしたらあああああ!!!?」

横島の思考が加速する。自分の気持ちや妹紅のこと。フランや小悪魔、他にも自分に好意を向けてくる少女達について。

「というか何で妹紅はハーレム肯定派なんや!?　小悪魔ちゃんですらデートの時に他の女の子とばっかり話してたら機嫌が悪く……ってそりゃ一対一のデートなら当たり前か!!　じゃあ複数人でのデートならその限りじゃないのか!!?　でもあの時一号達も一緒にいたし……!?　分からん……!!　まるで分からん!!　親父、西条、ピート、銀ちゃん!!　俺にモテ男の知識を授けてくれーーーーーー!!!」

横島は混乱からか自分でも訳の分からないことを叫んでいる。告白したりされたりした後の姿ではないが、横島は昔からこういった面がある。これも彼と結ばれるには乗り越えなければいけない部分なのだろう。その分、一度懐に入ればとことんまでに愛されるのだろうが。

ところで、横島は一つ忘れていることがある。横島は今全力でのた打ち回っているが、ここは元々時計塔の文字盤の前面にある返しの部分。その幅は非常に狭い。

ということは、だ。

「あ」

不意になくなった、時計塔に使われている石材の感触。目を開いて見て見れば、そこは何もない空間。それを認識した瞬間、横島は真っ逆さまに落ちていく。

「ノオオオオオオオオーーーーーーー!!!?」

落ちている最中だというのに、横島は余裕たっぷりに頭を抱えてみせる。そんなことをしている間に地面はぐんぐん迫ってくる。だが、横島は慌てない。目を瞑り、冷静に霊力を全身に漲らせる。

「ふふふ……前までの俺ならこのまま地面に叩きつけられていただろうが、今の俺は違う！　空に浮かぶことを習得した俺ならば大丈夫だ!!　さぁ、浮けえええぇーーーー!!!」

横島はカッと目を見開き、霊力の操作を開始する。

横島が目を開けた瞬間に見た景色。それは自分から数センチ程も離れていない地面。当然霊力の操作など間に合う筈もなく、横島はまたも頭から地面に突き刺さった。

暗い闇の中に横島は居た。

まるで深い水底のような、暗く冷たい闇。それはまさしく暗闇だった。

自己の意識も曖昧なその世界。不意に、横島は自分の目の前に誰かが居るような感触

を覚えた。

――――？

「……、――――……。――――……」

誰かが何かを語りかけてきている。横島はそれを認識出来ない。視界の端に光が見える。もしこれが夢だというのなら、恐らく目覚めが近いのだろう。

「――――……。――――」

誰かが、恐らくは自分の手を握ってきたのだろう。誰と分からないというのに、横島はそれに忌避や嫌悪を感じなかった。むしろ、懐かしいような、愛おしいような感覚が宿る。

光が周りを覆っていく。どうやら意識が覚醒するらしい。誰かが嬉しそうに笑ったような気がする。それと同時に、寂しそうな気配も。

最後の瞬間、誰かの輪郭が見えた気がした。それは、もう逢えない誰か。横島が愛した、かけがえのない誰か――――。

「――――っ!?」

横島が目を覚ます。上体を起こして周りを見れば、そこは時計塔の前。夕日がまだ沈

みきっていないことから、落ちてからそう時間は経っていないことが分かる。
横島は執事服の汚れを落とすことなく立ち上がり、きゅっといつの間にか握り締めていたいくつかの球体に視線をやる。
「……やっぱり、さっきのはルシオラだったのか？　だとしたら……どうなってんだ？」
手の中で球体が接触し、からからと音を立てる。
横島は夕日を見つめ、手の中の宝玉、『文珠』を強く握り締めた。

第二十九話
『裏目』
～了～

「――――!?」

妖怪の山中腹、一人の『男』が食事の手を止め、空を仰ぎ見る。その行動に意味はない。ただ、彼は何かを感知したときにそうする癖があったのだ。それはまるで臭いを探る『犬』のような物に近い。

事実、『男』は遥か遠くに発生した神の奇跡の具現を嗅ぎつけた。

ざわり、と。『男』の雰囲気が一変する。

「ははは……はははは!! あはははははははははは!!!」

『男』は狂ったように笑い出した。鮮血が滴り落ちる口から唾を飛ばし、鮮血にまみれた両手を振り乱しながら。

「ついに……!! ついに見つけたぞ!! はははははははははは!!!」

喜色満面。そういうには『男』の笑みは禍々しい。体から迸る何かがそれを助長している。それは霊力とも魔力とも妖力とも言えない何か。似ている物があるとすれば、それは或いは――。

「これで、取り戻すことが出来る……全てを元通りに……!!」

『男』は動物より多少優れた頭で、かつてのことを思い出す。文珠の威力、万能さ。その全てを。

『男』は鮮明に思い出せる。何せ過去にその威力を食らったことがある。その出鱈目さを思い知らされたことがある。

『男』――かつて『高島』と呼ばれていた男は、食い散らかした妖怪をそのままに山の中へと消えた。

全てを元通りに。かつての体を取り戻す為に。

『彼』は、『自分』が本当に探していたモノを忘れ去っていた――。

第三十話『永琳と高島』

それは、いつもと変わらぬ夕暮れ時のはずだった。永琳が紫と共にゲストルームで何かを話すでもなく、お茶を飲む。そんな静かな時間に、普段とは少々違った事態が舞い込んできたのだ。

トントントン、と控えめなノック。ドアの向こうから聞こえてくる声は紅魔館唯一の男性、横島の物。2人は入室の許可を出し、横島を部屋に入れた。その時の横島の顔は、何やら深刻そうな、複雑そうな物であり、永琳達は彼にまた何かあったのではないかと危惧の念を抱く。

横島は始め少々話し辛そうにしていたが、やがて意を決したのか、いつになく真剣な表情で切り出した。

「ついさっき、文珠を生成出来ました」

「――――!!」

その言葉は、2人にとてつもない衝撃を齎す。それも当然だ。文珠とは紫ですら一度しか見たことがないような代物なのだ。話には聞いていたが、まさか本当に創れると

は、と思ってしまっても仕方がない。
　横島は紫達に先頃生成された文珠を見せる。横島の掌の上で翠(みどり)に淡く輝くその珠は、まさに莫大な霊力の結晶体。その輝きに、紫は目を奪われる。
「……すごく、綺麗ね。こうやって実物を見るのは、どれくらいぶりかしら……」
　紫の声に熱が篭る。文珠はその特性故に変幻自在の『威力』をこそ重要視されてしまうが、その実宝石のように鑑賞に耐える美しさをも有しているのだ。
　紫も宝石は嫌いではない。美しい物を見て、それにうっとりとした視線を向けても何ら不思議なことはない。綺麗な宝石に心を奪われる、美しい少女。何とも絵になる光景だろう。
「……それにしても、どうしてそんなに複雑そうな顔をしているの？　文珠が生成出来たという事は、つまり元の世界に帰れる可能性が高まったということよね？」
　紫は横島に当然の質問をぶつける。それを受けた横島だが、やはり表情は暗い。俯いたその顔には、強い疑問が浮かんでいた。
「……実は俺、まだ文珠を生成出来るほどに自分の霊力を使いこなせていないんすよ」
「……どういうこと？」
　紫は横島の言葉に何か不穏な物を感じてしまう。事実、横島はその表情を先程よりも更に複雑な物へと変えていた。

「……」
「……？」
だが、ここで紫は横島の雰囲気が微妙におかしなことに気付く。それは危機感を煽る様な物ではなく。横島と交流を重ねた紫はまた何かくだらないことなのだろうかと勘繰ってしまう。
「あー……何が切っ掛けになったのかが分からないので、今日一日の事を話しますね」
「……ええ、お願い」
そうして横島は語りだす。内容は本当に大した物ではなかったのだが、それも彼が1つの事柄について話し始めた時から変わり始めた。
そう、妹紅との一件である。始めは冷静にうんうんと頷いていた紫だが、横島が妹紅との間にあったことを話し出すと、今までの姿から想像が出来ないほどにその瞳が輝きだしたのだ。
いくらえっちな事にあまり免疫がない紫とて、そこは女の子。あまりいきすぎた物はダメだが、こういった健全（？）な恋愛話は大好物なのだ。
だが、そうして甘い話に浸ったのも一瞬だ。紫は次の瞬間には難しい顔になった。
「……何が切っ掛けはまだ分からないけれど、少し難しいことになったわね」
紫の言葉に横島はゆっくりと頷いた。2人が懸念しているのは、簡単なこと。即ち、

世界についてだ。
　横島は元の世界に帰ろうと霊力を使いこなす為の修行を行っているし、紫も自らの能力で横島が帰還する為の方法を探っている。それに対し、妹紅は当然この『幻想郷』が存在する世界の人間だ。
　横島も紫も考えていないわけではなかった。だが横島はともかく、紫が想定していた以上に早く表面化しただけなのだ。
「……こうしていざ直面してみると、すんげー大変なことなんだなって実感してますよ」
　横島は若干の胃痛を感じているのか、腹をさする。
　時間を置き、誰かに話すことによって冷静さを取り戻すことが出来たのか、横島は自分がどういう立場に居るのかを強烈に思い知った。
「……」
　紫は横島に何も言わない。もしかしたら何も言えないのかも知れないが、それを横島が知ることは出来ない。
　横島は『異世界人』。いつかは元の世界に帰るのだ。そしてその日は、文珠が生成されたことによってぐっと近付いてきたと言える。未だ検証は済んでいないが、帰ることが出来るのであれば。
「……もういっその事、こっちに骨を埋める事も考えといた方が良いっすかね？」

そして横島がどこか作ったような笑顔でそう言った。紫は顔には出さなかったが、心の中では驚きと、そして納得を抱いていた。このタイミングでそう言った横島に。横島が無意識にどう思っているかが理解出来たが為に。

「……焦って答えを出しちゃダメよ？　ちゃんと考えて考えて、それから答えをださなくちゃ」

「……分かってはいるんすけどね……」

横島は力のない声で返す。モテ期だなんだと騒いでいても、本当の彼は小心者。色々な不安やらで弱気になってきているようだ。そして、理由はそれだけではない。

「妹紅は横島君が元の世界に帰りたがっていることを知っているのかしら？」

「あー、知ってるはずですよ。普段から言ってることですしね」

紫は分かりきったことを何となしに呟く。横島がそれに答えを返すが、紫はそれに反応を示さない。紫が考えているのは一連の流れについて。

「……まあ、今は置いておきましょうか。理由は想像がつくし……」

結局、紫は静観を決め込むこととした。大事なことではあるが、今最も重要なのは横島が元の世界に帰れるかどうかだ。

紫は横島が何故あのようなことを言ったのかが理解できている。妹紅と同じ女の子として、彼のそういった考えは好意に値するが、それでも紫は横島の為に行動したいと

考える。
　妹紅には……他の者達にも申し訳ないとは思うが、紫は横島を元の世界に帰してあげたいのだ。
「とりあえず今ある文珠は6つですね。そこで、紫さんには文珠を2つ預けておきます」
「え、私に……？」
　紫は横島の言葉に驚きを隠せないでいる。文珠といえば超がつくほどの希少霊具だ。しかもそれを2つも預けるという。
「流石に今の状態で『帰還』を試そうとは思えないんすよ。なので、とりあえず紫さんに文珠を預けて色々調べてもらおうかなーって」
　横島は笑いながら頭を掻いている。特に何でも無さそうにしているのは信頼の証だろうか、紫にはそれが嬉しく思えると同時に困惑もしてしまう。何やら想像以上に横島に信頼されているようで、今までの自分の扱いからは考えられない。
「……その期待に応えられるかは分からないけれど、精一杯やってみるわ」
　紫が出せたのは、そんな台詞だけだった。横島は「そんなに気負わなくても……」などと言っているが、6つしかない文珠の内2つを預けるという意味をもう少し理解した方がいいだろう。
「それじゃ俺は夕飯の仕込みに入りますね。今日はビーフシチューっすよ！」

「あら、それは横島君の苦手なタマネギがいっぱい入ってそうね」

紫の言葉に横島が嫌そうな声を上げるが、紫に頭を撫でられたことで鼻の下を伸ばしながら部屋を出て行った。彼も色々と考えているのであろうが、こうして煩悩に素直な反応を隠せないのは良いことなのか悪いことなのか。

紫も横島に続き部屋を後にする。横島は自分のことで手一杯だったようで気付かなかったようだが、様子のおかしい永琳をちらりと見る。紫はそれが何に起因するかに気付き、そしてどのようなことを考えているかも凡そ察しがついていた。

第三十話
『永琳と高島』

一人となった部屋で、永琳は紅茶を飲みながら考えを巡らせている。と言ってもそのほとんどが意味のないものであり、実際は何も考えてなどいないに等しい状態となって

いる。
「……ふう」
溜め息を1つ。永琳は部屋に備え付けのロングソファーを見る。
「晩御飯まで、少しお昼寝しちゃおうかしら」
今はお昼じゃないけれど、なんて呟きながら永琳はソファーに寝転がる。紅魔館のインテリアはどれも一級品だ。当然今永琳が横になっているソファーも。
永琳は思っていたよりも精神的な負担が大きかったのか、はたまたソファーがふかふかだったためか、あっさりと夢の世界へと旅立っていった。

眼前に広がるのは血に塗れた仲間達の姿。およそ千年前、自分が殺した仲間達だ。まだ辛うじて息がある者もいるのか、か細い呼吸音も聞こえてくる。だが、それもあと数分もしない内に消えるだろう。特に興味も惹かれなかった永琳は、その場をゆっくりと後にした。
随分と懐かしい光景。それが永琳の抱いた感想だった。どうやら明晰夢というやつらしい。永琳ははっきりとした意識を持ちながら夢を見ている。
これは輝夜と共に生きることを選び、自分と共に来た月の使者達を皆殺しにした時の光景だ。場面が飛び飛びになっているが、間違いはない。

永琳はこの後輝夜と共に都から遠く離れた地に居を移す。鬱蒼とした竹やぶで出来た天然の迷路。数百年後に幻想郷へと流れ着く前の迷いの竹林、高草郡。人も滅多に来ることがないそこは隠れるのに絶好の場所だ。

それから1年余り。今までこつこつと住居を建てたり輝夜と遊んだりしていたのだが、ここ数日は竹林の様子が明らかにおかしかった。

何者かが竹林に足を踏み入れている。当時はまだてゐと出会ってもおらず、また永遠亭も完成していなかったので人間に見つかるまで歴史が進まない仕掛けも無く。永琳は『見つからないなら良し。見つかったら口を封じよう』と軽く考えてその者が居るであろう場所の近くへと移動した。

この時点ですでに殺る気満々といった感じだが、この当時の永琳は輝夜以外に興味を持っていなかった。それが下賤な地上人なら尚のこと。

――だが、その油断とも言える傲慢さが後の事態を招いたのだ。

「……どうやらこっちに来るようね」

永琳の視界の奥。雑草を掻き分けて進み来る人影が見える。それは狩衣を着た男性のようだ。

狩衣とは当時の貴族達が狩りを行う時に着ていた物。麻布で出来た素朴な代物であり、動きやすい服装だ。よって普通ならその男は何か獣を狩りに竹林へと入ってきたの

であろうと推測される。
だが、永琳はその推測を即座に捨てた。
男の体から、膨大な霊力が放射されたからである。
男はその後一直線に永琳の元へと向かってきている。どうやら発見されたらしい。
その霊力の質、量、そして永琳を発見するほどの探知力。永琳はその男を自分達を追ってきた陰陽師であると判断する。
「……」
永琳は動かない。何か特別な事情があったわけではない。ただ相手の顔くらいは見ておこうと思っただけだ。普段ならば絶対にしない無駄な行為。それは輝夜の好奇心が伝染したのか、彼女の霊感が働いた為か。
「――――!!」
ついに男の姿を完全に捉える。彼我の距離はおよそ１０メートル程。永琳が１つまばたきをする。
「っ!!?」
目を開けた時には、男はすぐ目の前にまで迫ってきていた。
永琳の頭を驚愕が支配する。だがそれでも思考とは別に体は動く。男を迎撃しようと腕が動く。しかし男の方が動きが速く、ギリギリで間に合いそうに無い。

そして、永琳に生涯で最大級の衝撃が襲い掛かる。
「産まれる前から愛してました～～～～～!!」
「え――キャアアアアアアアッ!?!!」
それはこの世に生を受けて数億年で初めての出来事だった。
目を血走らせ、鼻息が荒い男が尻からのジェット噴射によって一瞬で距離を詰め、挙句の果てには訳の分からないことを叫びながら自分を押し倒してきたのだから。
「こんな所でこんな美少女と出会えるなんて!! これは普段から上司の嫌味にも負けずに日夜頑張っている俺への仏様からの贈り物に違いない!! ありがとう仏様!! 運命の出会いにぼかーもー!!!」
「いやあああああ!? 何っ!? 何なの!!?」
予想だにしていなかった突然の貞操の危機に、永琳は叫びを上げる。その当時の映像を見ている今の永琳は「私も若かったのね……」とまるで他人事のように呟いている。永琳の年齢からすれば千年などほんの誤差でしかないのだが、気分の問題らしい。
「あったかいなーやーらかいなーいーにおいだなー!! 俺が求めていたのはこれなんやー!!」
「ちょ、ちょっと貴方、いい加減にやめ……!!」
男は何事かを叫びながら永琳の胸に顔をぐりぐりと押し付ける。当然そんなことを

されている永琳は抵抗をするのだが……。
「ぐおおーーーーーーー!!　今のワイは狼なんやー!!　ちょっとやそっとじゃ止まらへんでーーーーーー!!」
　何やら本格的に男は危険な様であった。永琳の目が細められる。
「分かったわ。ちょっとやそっとじゃなければいいのね？」
「――――え？」
――間――
「……さて、落ち着いてもらえたかしら？」
「はぃ……すみませんでした……」
　一仕事終えたとばかりに額の汗を拭う永琳の足元には、血塗れのズタボロとなった男の姿があった。
「堪忍やー!!　仕方なかったんやー!!　数日間ここで迷ってたから飢えとったんやー!!」
「だからって許されるとお思いかしら？」
　ペコペコと土下座をする男の頭を踏みつける永琳の姿は何故だかとても様になっている。男も思わず恍惚の表情を浮かべてしまう程だ。
　それから永琳は男を縛り上げ、命が惜しくば情報を寄越せと要求する。男の名前、仕

事、何故ここに来たか。他にもいくつかあったのだが、特に重要な物はそのくらいだ。

「俺は高島っていいます！　都で陰陽寮の陰陽師やってます！　ここへ来たのはクソ上司が都の平和の為に調べてこいって言ったからです!!」

「……随分と正直に話すのね」

「そりゃまあ俺はウンコ食ったら死なずにすむって言われたら食っちゃう派ですし」

「……」

「ああ!?　距離を取らないでー!!」

男――高島の発言に永琳は思わず引いてしまう。今の永琳もその姿に苦笑を浮かべる。

永琳は高島からさらに情報を引き出す。どうやら自分達を追ってきたわけではないようだが、それでも陰陽寮所属の陰陽師となれば色々と情報を持っているだろう。永琳は高島に取引を持ちかける。

「ふむ……高島さん、とりあえず貴方を殺しはしないわ」

「ホントっすか!?　いやー助かった……」

「そのかわり条件があります。貴方には都から色々と情報を持ってきてもらいます」

これが、永琳と高島の関係の始まりだった。

高島は妙に永琳に従順な態度を見せ、ひと月に一度は必ず永琳の元へと顔を出す。そ

の際には様々なプレゼントを持ってきては永琳へと貢ぎ、関心を得ようとしている。
　時が経つにつれ、永琳の目には高島に犬の耳やしっぽが生えているように見えてきた。
　永琳は答えを知りつつも聞いてみた。「何故こんなにもしてくれるのか」と。高島は鼻息荒く「そりゃもちろんこーやって色々と贈ってたら好感度が上がってその内ムフフな展開になるんじゃないかと――――はっ!?」と答えた。……その回答は永琳の想定を色々な意味で超えていた。ここまでストレートに性欲をぶつけられたのは初めてである。
　とりあえず、高島は軽めのお仕置きを受けたのだった。
　そうやって高島との微妙な関係が続いて2年余り。何だかんだで永琳は高島との時間を楽しみにしていた。彼との会話は純粋に楽しく、彼が齎す情報も身を隠す上で貴重な物だ。期せずして『良い雰囲気』になったこともあった。この段階にもなると永琳は高島に自分がどういう存在か、何故情報を欲しがっているのかを話してある。半ば予想はしていたが、それでも自分に対する態度が変わらなかったことにより、永琳の中で高島の好感度は上がっていった。
　――私って案外チョロいのかしら?
　夢でとは言え、過去の自分を見ている現在の永琳は少し困り顔だ。永琳は高島の悪い

部分をこれでもかと言うほどに知っている。だというのに高島との時間を過ごす彼女は笑顔を浮かべている。これでは過去の自分をチョロいと思ってしまっても無理はない。もっとも、永琳が高島を異性として意識し始めたのには切っ掛けがあるのだが。

――あら？

『その時』のことを思い返していたら、ちょうどその場面が展開されているようだ。竹林に満ちる強大な妖気。それは月人である永琳ですら手強いと感じるほどの波動。それの持ち主は巨大な獣だった。

「何だ、こいつ……？」

高島は額に滲む冷や汗を拭いながらその獣を観察する。見た目ならば大きな熊というのが1番しっくりとくる。だが、その背には『鳥のような翼』が生えていた。その尾は『蛇の様』だった。鳴き声はまるで『野犬の様』である。よくよく見れば、他にも体のいたるところにあらゆる動物の特徴が見える。

高島は気付いた。目の前の妖怪と思しき獣を生み出したのが何なのかを。気付いてしまったのだ。

永琳が前に出る。高島ではその妖怪を無事に祓うことが出来ないと思ってのことだ。しかし、その高島が永琳を背に庇う。

「……どういうつもり？」

「あいつは俺がやります」
　高島がいつになく真剣な表情で言う。その顔には決意がありありと浮かんでいた。
永琳の目が軽く見開かれる。
「勝てない……とまでは言わないけれど、相当厳しいわよ？」
「ええ、分かってます。それでも……」
　高島はそこでちらりと永琳に振り返る。
「やっぱり、好きな女の子の前ではカッコつけたいじゃないっすか」
　――～～～～～～～～～～～～～～～～っっっ!!!
　現在の永琳が声にならない叫びを上げて身悶える。イメージ映像としては枕に顔を押し付けて、足をバタバタとさせている感じだ。
　高島はダラダラと冷や汗を流している。浮かべた笑みは引きつっている。相手に恐怖している。しかし、それでも、永琳には、その時の高島が最高に格好良く見えたのだ。
　――そうそう、この時から高島さんを意識しだしたのよねー。我ながらチョロいわー。
　当時の気持ちを思い出したのか、永琳は頬を赤くしてほぅと息を吐く。過去の永琳は高島の言葉に暫し呆然としていたが、やがて微笑を浮かべると「それじゃ、たくさん格好良い所を見せてね」と送り出した。

高島は永琳に1つ頷くと、妖怪に向かって突撃する。
「うおおおおおおお!!」
高島が霊力を練り上げて右手に集中する。霊力は凝縮し、霊気の篭手を生み出した。
「食うらえええええぇぇぇっ!!」
高島による渾身の拳が妖怪に迫る!
▽妖怪は　口から炎を吐いた!
「あんぎゃあああああ!?　あづっ、あづづづづ!!?　五行相克・水克火!!　水克火ーーーー!!?」
高島は全身を焼く炎を陰陽術でなんとか相克した。水でぬかるんだ地面をごろごろと転がったせいか、全身が泥だらけである。しかし、高島はその程度ではめげない。
「な、中々やるじゃねーか……。だが、こんな程度で俺を倒せると思うな!!」
高島が再び霊力の篭手を形成し、突撃する!
▽妖怪の　往復ビンタ!
「あぶっ!?　あぶぶぶぶぶぶっ!!?」
高島はビターンと地面に叩きつけられた。両頬が約2倍に膨れ上がり、頬袋がパンパンのリスを彷彿とさせる。痛みのせいで涙が溢れてくるが、それでも高島は諦めない。
「まだ、やるかい……？　俺は、元気いっぱいだぜ……？」

ふらふらと立ち上がった高島は妖怪に対してファイティングポーズをとる。次の瞬間には妖怪のアッパーカットで吹き飛んだ。

「あじゃぱーーーー!?」

高島は頭から地面に墜落した。倒れた姿はヒドイもので、永琳の方へ尻を突き出したような格好だ。しかも狩衣が燃えたせいか、下に着けていた褌が丸見えの状態で。

「……格好悪い」

それが偽らざる永琳の気持ちであった。だがそれも当然である。格好良い所を見せると言ってこのざまなのだ。普通ならば百年の恋も冷めるだろう。

そう、普通ならば。

――ああ、やっぱり高島さんは可愛いわね……。

生憎と永琳は普通ではなかった。いわゆるダメ男好きと言うべきか。高島のダメな部分を知る度に、その部分も含めて全てを支配してしまいたい欲求に駆られるのだ。

マゾ気質を備える高島には、案外お似合いかもしれない。

「ふ……ふふふふふふふふふ……」

永琳が高島の無様な格好に人知れず恍惚の表情を浮かべていると、高島が壊れたかのような笑い声をもらし始めた。何やら暗いオーラも纏っている。その怪しげな雰囲気に永琳ですら一歩下がった。

「おのれ、この腐れ妖怪め……！　テメーのせいで永琳さんに『格好悪い』って言われちまったじゃねーか!!　上手くいけば永琳さんの前でカッコいーとこ見せて俺に惚れた永琳さんを布団に誘って朝まで仲良く（意味深）することが出来たかもしれんとゆーのにー!!」

「……えぇー」

どうやら先程の呟きが高島に聞こえていたようだ。口からは都合の良い妄想が駄々漏れになり、血涙を流している。煩悩に歪んだ酷い顔だ。しかし、そのお陰か彼の霊力は爆発的に膨れ上がった。

高島が右手に形成していた篭手を解除する。

「これだけは使いたくなかったが、もう知らん。一瞬でぶっ飛ばしてやるぜ!!」

突如、高島の強力な霊気が一点に集中した。それは先程の篭手などよりも遥かに凝縮されていく。ただただ一点に。渦を巻き、それは形作られる。

妖怪が吼えながら高島に襲い掛かる。離れた間合いも一気に詰め、その手に伸びる強靭な爪を振るおうと。

それは本能的な恐怖からくる行動だったのだ。妖怪は逃げることも出来た。だが、それは彼の低い知能が選ばせなかった。故に、彼は滅んでしまうのだ。

「せめて苦しまないように……なんて言うと思ったか!!　木っ端微塵になりやが

れえええええええええ!!!!」

高島は掌に生成された球体を妖怪に投げつける。それは翡翠のような、美しい珠に見えた。しかし、その珠に内蔵されている霊力は、永琳ですら恐ろしいと思えるほどに莫大だ。

珠の表面に文字が見える。刻まれていたのは『爆』という文字。

――瞬間、珠が破裂し、内部の莫大な霊気が霊的・物理的な爆発を起こす。

その爆発は強力であり、それを懐で受けた妖怪は体の前面が消失。余波は竹林にも及び、竹は倒れ、地面は抉れ、高島は爆発に巻き込まれて黒こげの状態で永琳の足元にまで吹き飛んでいる。白目をむき、舌が口内からでろりとはみ出し、褌が完全に消え去っていた。

「……中々の大きさね」

それが何に対する言及かは高島は知る由もない。

高島はその妖怪の死体を陰陽寮へと持ち帰った。何か、その妖怪に思う所があったらしい。一応名目として、竹林に筍を取りに来た少女（永琳）を襲った妖怪を倒した、ということにするそうだ。

その後、都から陰陽師が高島と共に派遣されてきた。その内のかなり身なりの良い長髪の男が高島に何かとつっかかっていたのが印象的だった。聞こえてきたところによ

ると、名前は西郷と言い、高島の上司らしい。
西郷は永琳と挨拶を交わし、その後一足先に都へと帰っていった。その際に何事かを高島に耳打ちしていたのを、永琳は見逃さなかった。少し目が輝く。
「……こほん。もしかして、彼が前に言っていた『クソ上司』なの？」
「いやあ、あいつは違いますよ。まあ、気にいらねー奴ではありますけどね。……もっと上っす。西郷の奴は陰陽博士っつー役職で、クソなのは陰陽頭（おんようのかみ）って奴ですよ」
「……それは大変ね」
何かを思い出したのか、高島は顔を盛大にしかめる。その後頭をぼりぼりと掻き、永琳に真剣な表情を見せる。
「……どうしたの？」
「あー……西郷が情報を持ってきてくれたんすけどね。その……竹取の爺さんと婆さんが殺されたらしいっす」
「――――……!!」
永琳の目が見開かれる。空気が一瞬でピリピリと張り詰めた物に変わる。
「……すんません、西郷にはバレてたみたいっす。俺が色々と探ってたこととか、永琳さん達のこととか」
高島はすでに覚悟を決めた顔をしている。ガタガタと震え、思い切り腰が引けている

が、それでも逃げようとはしていない。永琳は高島をどうこうする気はないのだが、最初が最初だけにこの反応も仕方がないだろう。

　とりあえず、誤解はすぐに解いておいた。

「西郷さんについても、恐らく大丈夫だとは思うわ。高島さんがこうしてこっちに来ることが出来ている時点で私達をどうこうしようとしているわけではなさそうだし。さっきの様子だと、高島さんに陰ながら協力しているようにも感じられるわ」

「……そうなんすか？」

「何の根拠もない単なる勘でしかないけれど。こう見えて長生きしているのよ。お姉さんの言葉を信じなさい」

「……分かりました。亀の甲より年の」

　高島は血煙に沈んだ。

「……」

　永琳は考える。竹取の老夫婦が殺された。この2人は地上における輝夜の育ての親だ。互いに打算はあったが、それでも輝夜と老夫婦は絆を育んでいた。寿命で死ぬのはいい。人間と違う時間を生きているのだ。それは最初から織り込み済みだ。だが、今回は別だ。

「あの2人が住んでいた家はどうだった？」

「え？　……西郷が言うにはかなり荒らされてたそうです。多分夜盗の仕業だって言ってましたが」
「そう……」
永琳は確信を深める。これはもう確定と言ってもいいだろう。永琳の勘がそう告げている。
犯人は、老夫婦に渡した蓬莱の薬が目当てだったのだ。ではそれを知っているのは何者か。
「……」
思い当たる人物は存在しない。一体どこから蓬莱の薬のことを知ったのか。
「永琳さん……？」
高島の声がすぐ傍で聞こえる。ふと見れば高島が傷も無く立ち上がっていた。とんでもない回復力である。
「俺もそろそろ戻りますね。ちょっと調べたいことも出来ましたし」
「あ、そうなの？　やっぱりあの妖怪について？」
「……ええ」
「……？」
いつもと違う高島の様子に永琳は首を傾げる。何か、少し機嫌が悪そうにも見える。

永琳はそれを見て何を思ったのか、高島の頭を撫でる。
「……なんすか？」
「いや、何か怖い顔をしていたからね」
「むぅ……どうせ撫でるなら別の頭を……」
袴の帯を緩めようとする高島の頭に、永琳のアイアンクローが炸裂した。
――してあげれば良かったのかしらね？
現在の永琳がその光景を複雑な表情で見ている。だが、今そんなことを思ってもどうしようもないのだ。何せ、これが高島との最後の思い出なのだから。
目の前の光景が薄れていく。これは夢なのだ。映像が完全に消えれば、きっと目が覚めるのだろう。ぼんやりと映る映像には、西郷が過去の自分に高島からの手紙を渡している場面が展開されている。しかし、それもすぐに消えた。
目の前は、完全に真っ暗だ。
「……」
目を開く。そこはいつものゲストルームだ。寝起きで鈍い頭を軽く振る。出てきたのは溜め息だ。
「……さっきの横島君の影響かしら。今のは良い夢だったのか、悪い夢だったのか。高島さんの夢だから良い夢だと思うのだけど……」

今は亡き想い人の夢だ。良い夢であるに決まっている……と言い切れないのが辛いところだ。と言うのも、なにやら霊感が騒ぐ。何か、嫌な予感がする。

「……色々と気になるわね」

永琳は思考を巡らせる。横島が文珠を生成出来た理由。さっきの夢。他にも様々なことを。

「……」

その後永琳は鈴仙が呼びに来るまでずっと思索に耽っていた。気がついた時には、鈴仙の体をこれでもかと言うほどにいぢくり回していた事はどうでもいい余談である。

第三十話

『永琳と高島』

～了～

第三十一話『兇気、襲来』

妹紅が横島に告白したその日。妹紅は紅魔館のとある部屋に拘束されていた。両手両足を縛られ、床に転がされている。

「……」

妹紅は酷く憮然とした顔をしている。それも仕方がないだろう。横島にあんなことをして逃げ出したというのに、気が付いたらこの状態なのだ。

しかし、こんなことをしでかした人物には簡単に思い至った。和風に改装された部屋の内装、自分の意識が及ばないであろう能力。

「……輝夜か」

「だ～いせいか～い!!」

ぽつりと呟いた妹紅の背後から、間延びした能天気な声が響いた。それは紛れも無く蓬莱山輝夜の声だ。

「何のつもりだよ。流石にここまでされるようなことはしてないはずだぞ?」

妹紅は身を起こしながら輝夜にそう文句を言う。相手が相手だけに言うだけ無駄だ

と理解してはいるが、それでもこのような理不尽な目に遭わされているのだ。せめて理由くらいは知りたくなるものである。

だが、妹紅に返ってきたのは、輝夜のそれはそれはもうイヤラシイ笑顔だった。

「ふふふ……。妹紅……？　貴女、中々やるじゃないの……」

「……な、何が……？」

妹紅の総身に悪寒が走る。今の輝夜から発せられる禍々しいまでのオーラは、妹紅に色んな意味で身の危険を感じさせる程の物だ。

知らず、妹紅は喉を鳴らす。

「さっき、横島さんと『ちゅー』してたでしょ！」

「――――ん、なぁっ!?」

妹紅の顔が一瞬にして深紅に染まる。それだけでなく、今にも全身から火を吹きそうなほどに熱が宿る。

「な、何で、それを……っ!!?」

「え？　何でって……」

輝夜の予想外の言葉に心の底から驚愕した妹紅が何とか搾り出した言葉に、輝夜はきょとんとした様子を見せる。じっと観察してみても妹紅に虚勢を張っている様子は無い。そこから導き出される結論は1つ。

「妹紅、もしかして気付いてなかったの？　時計塔なんて目立つ所であんなことしてたんだから、あれを見た人はけっこう多いはずよ？」

ビシリ、と。妹紅が石のように固まった。さらにプルプルと震え始める。

「うおおおお……！　おおおおおお……!!？」

そして今度はぐねぐねと悶え始める。

「うん。恥ずかしいのは分かるけど、その悶え方は女の子としてどうかと思うわよ？」

妹紅に一定の理解を示している輝夜だが、その表情はとても楽しそうに歪んでいる。事実、輝夜はここ数１０年……下手をすれば１００年単位で１番楽しんでいるかもしれないのだが。

「それでー？　何がどうしてああなったのか、聞かせなさいよー」

輝夜は瞳をキラキラと輝かせながら妹紅に強請る。

「な、何でそんなことまで教えなくちゃいけないんだ……！」

「教えてくれないと夕飯の時にこのまま皆の所に連行するわよ？」

「……それだけは勘弁して……!!」

こうして妹紅は輝夜に屈服した。弱みを握られ、強請られたわけではない。無邪気（？）な少女のお強請りに負けたのだ。

第三十一話
『兇気、襲来』

翌日。横島は痛んだ胃を気にしつつ仕事に励んでいた。昨夜の夕食時は横島にとって、酷いものだった。何か、皆から注視されているような気がしたからだ。

何か失敗をやらかしたわけではない。だが、一部の者から好奇の眼差しに晒されているような、そんな感覚。別段嫌な気配というわけではないのだが、面白くないというのも事実だ。何より、このままではまた妙な扉を開きかねない。横島はそんな余裕なのか追い詰められているのか分からない感覚を持て余している。

「……」

「……」

横島は各人が静かに食事をとっている中、一番強烈な視線を送ってくる輝夜に目を向ける。

返ってきたのは沈黙だ。だが、ただの沈黙ではない。明らかに目が笑っている。それもニヤニヤとだ。しかし、流石は傾国の美少。そんな表情も何故か美しく見える。

ただ、横島は冷や汗を流していたが。

（……もしかして、バレてんだろーか）

横島は輝夜の視線の意味をそう解釈した。こういう場合、そのほとんどが弱気な男の思い込みによる被害妄想だったりするのだが、流石は霊能力者と言うべきか。その予想は当たっていた。

しかし、前述した通り横島は案外気が弱い男だ。既に妹紅とのことは紅魔館中に知れ渡り、それにより皆が自分に注目しているのではないかと思い込んでしまう。

（ぬあああ……!?　何か、皆の視線が痛いよーな気がする!!　特に美鈴とか小悪魔ちゃんとかフランちゃんとかてゐちゃんとか……!!　そういえば妖精メイド達の視線も何か怖いよーな気がああああ……!!）

横島は疑心暗鬼になり、悪い方に悪い方に物事を考えていく。そのほとんどが思い込みなのだが、それに横島が気付くことはなかった。それどころか、何故か妙な罪悪感まで胸に突き刺さってきたのだ。

横島は胃に痛みを覚え、腹をさする。心因性の胃潰瘍になる日も、近いかもしれない。

ちなみにこの時妹紅は輝夜の部屋で夕食をとっていた。皆の前に顔を出すのが恥ず

かしいからだ。とある事情で顔が緩んでしまうのを知られたくないという理由もある。

夕食後、妹紅は輝夜と徹夜のガールズトークをすることとなる。その際に輝夜オススメのちょっと過激な少女漫画を読まされることになる。その結果は……『勉強になった』ということにしておこう。

そうして時が経ち、妹紅は輝夜の手引きにより人知れず帰っていった。その際に輝夜から「これでもっとお勉強しなさい！」と、少し過激な少女漫画が大量に入った袋を手渡される。そのずっしりとした重みに少し気圧されるが、正直に言えば妹紅は興味津々だった。こういった娯楽に触れることは今まで無かったことであるし、何より明確に好きな男が出来たのだ。漫画とはいえ、勉強になることは違いない。

「……ふっ」

輝夜が妹紅に気付かれぬように邪悪な笑みを浮かべてさえいなければ。

そうして午後。妹紅は慧音の家に居た。寺子屋も終わり、ゆったりと翌日の授業の内容を考えていたところに、妹紅が何やら漫画が大量に入った袋を下げてやって来たのだ。

慧音は妹紅を家に入れ、共にお茶を飲んでいる。慧音から見て、妹紅は非常に落ち着

きがなく、今もずっとそわそわと体を揺らしている。何か話したい事があり、それでも言い辛いのか。はたまた何か後ろ暗い事があったのか。とにかく、慧音は話を聞いてみることにした。

「……で、何かあったのか？　随分と落ち着きがないが」

「うぇ!?　あ、あー、いやえっとその……！」

ふむ、と慧音は片眉を上げる。妹紅の顔は真っ赤に染まり、今にも湯気を出しそうなほどに茹だっている。視線も色々な方向に泳いでいることだし、これは尋常な事ではない。

「……横島、か？」

「――――!?!!」

ボンッ！　という爆発音の後に妹紅の頭から湯気が昇る。ここまで分かりやすいリアクションもないだろう。慧音は思わず生暖かい視線を妹紅に向けてしまう。

「……～～～～～っ!!」

慧音の視線に耐え切れなくなったのか、妹紅は顔を押さえて畳に倒れ込み、悶え始める。相変わらず酷い恥ずかしがり方だな、と慧音は思った。

「……いや、慧音にはちゃんと話しておこうと思ってたんだけどね」

「なら早くちゃんと座れ。髪や服がぐしゃぐしゃになるぞ」

慧音の言葉に妹紅はのそのそと起き上がる。そして億劫そうに髪を手櫛で整えると、こほんと咳払いを1つ。

「……えー、と。実は――」

妹紅は昨日の出来事を慧音に話し始めた。最初はうんうんと頷きながら話を聞いていた慧音だったが、話しが進んでいくごとにどんどんと俯いていく。その様子は妹紅をして恐怖を覚えさせる程の物だった。

そして妹紅は核心に触れる。横島とキスをし、想いを伝えたことを。

「――妹紅!!」

「はいっ!!?」

慧音は妹紅の肩をガシッと掴んだ。それに妹紅は驚き、素っ頓狂な声を上げてしまう。力強く肩を掴んでいる慧音の手はやがてプルプルと震え、それに比例するかのように妹紅の心拍数が上がってゆく。ほんの一瞬のはずなのに、あまりにも長く感じてしまうこの数秒。妹紅が極度の緊張からか、生唾を飲み込む。それが切っ掛けとなったのか、慧音がついに口を開いた。

「――よくやった!!」

「……はぇ?」

その言葉はあまりに予想外だったのか、妹紅がまたもおかしな声を上げる。

「あの人見知りでまともな知り合いが私と永遠亭の数人だけだったお前が、まさか男に対してそこまでのことが出来るようになるとは……!!　私は嬉しいぞ、妹紅!!」

「……」

慧音の物言いに妹紅は引きつった笑みを浮かべる。事実だけに反論し辛いのがもどかしい。とはいえ、自分の1番の親友が喜んでくれているのだ。妹紅はこの祝福を素直に受け取ることにした。

慧音は妹紅の話でテンションが上がり、過去の偉人達がどのような恋愛をしてきたかを熱く語り始めた。慧音の豊富な語彙力を駆使した長い話は絶え間なく続き、妹紅の精神をすり減らしてゆく。そうして慧音の話は幻想郷についてまで及び、ここ数十年男が徐々に減ってきているという、人口問題に対する言及にまで発展していた。妹紅からすれば色んな意味で「知らんがな」といった内容になっている。

こういう時の慧音を相手するのは非常に面倒だ。妹紅もわざとらしく咳払いをして気を引こうとしたり、しきりに時間を気にする仕草を見せるようにする。話に夢中になっている慧音がそれに気付くかは運次第なのだが、今回は気付いてくれた。

「――っと、すまないな。ついつい夢中になってしまった」

「あー、うん。大丈夫大丈夫。でも、結構話し込んでたけど、時間は大丈夫？」

妹紅に問われた慧音は時計を確認する。すると、午後の3時をとっくに過ぎていた。

これはいかんと慧音は焦りを見せる。
「しまった、もうすぐ約束の時間になってしまう」
「誰か訪ねてくるの？」
「ああ。今日は阿求が来るんだ」
「へー、あの子が」
阿求とは、１０００年以上続く家系の稗田家当主、９代目阿礼乙女『稗田阿求（ひえだのあきゅう）』のことである。見た目は１０歳そこそこの少女だが、実際には約１２００年前から転生を続けている存在だ。
稗田家には『御阿礼（みあれ）の子』と呼ばれる子供が数十年～百数十年単位で生まれ、稗田家に代々伝わる『幻想郷縁起』という書物を編纂している。阿求はその９代目というわけだ。
慧音との関係についてだが、慧音が寺子屋の授業で使う資料などはその大半が稗田家が纏めてきた物であり、頻繁に顔を合わせることから２人の仲もそれなりに良いものとなっている。特に２人とも知識が深く、話しが長くなりやすいという共通点もあったので、それが友好に一役買ったのだろう。
「うーん、あの子何となく苦手なんだよな……」
「ん？　そうだったのか？」

「うん。嫌いってわけじゃないんだけど……」
　妹紅は首を捻り、うーんと唸る。それは無意識からくる苦手意識……というよりも、ある種の遠慮なのかもしれない。何せ『御阿礼の子』は３０年程しか生きられないからだ。何故そうなのかは判明していない。だが、代々短命の御阿礼の子である阿求に対し、永遠の命を持つ蓬莱人の妹紅がどう対応していいか分からない、というのも仕方がないことではある。
「とりあえず私は帰るよ。何というか、今日は早めに休みたい」
「ああ、分かった。ちゃんと布団で休むんだぞ」
「はーい。それじゃ、また」
　妹紅は慧音の言葉に手をひらひらと振りながら答えた。その態度に慧音は多少不安になったが、今の妹紅には横島という想い人がいるのだ。そうそうだらしのない格好は見せないだろう。
「……ん？」
　妹紅が帰り、部屋の片づけをしていると、大きな袋がそのまま置いてけぼりになっているのを発見した。
「妹紅の奴、忘れていったのか。……最後辺りは落ち着いていたようだが、実際はまだまだ正気じゃなかったのかな？」

慧音は重い袋を取って考える。今すぐこれを届けてやるか、それともまた翌日にするか。慧音は数秒迷ったが、また翌日に届けることにした。忘れ物に気付いたら自分から取りに来るかもしれない。今回は阿求との約束を優先し、慧音は袋を隅に寄せた。

「……あ、慧音の家に漫画忘れてきちゃったか」

妹紅は迷いの竹林にある自宅への道の途中、慧音の家に漫画を忘れてきてしまった事に気付く。「バレたら確実に怒るだろうなぁ」と呟きながら道を進むが、それは結果的には都合が良かった。

「……で？　さっきから私の後をつけてきてるのは誰だ？」

全身に霊力を漲らせ、妹紅は振り返った。風に揺られ、さわさわと音を立てる竹林。その一画に、いつの間にか『男』が立っていた。

『男』は猫背がちで完全に俯いており、その顔を妹紅に見せてはいない。妹紅が視覚で読み取れるのは『男』の衣服が平安時代によく見た狩衣と呼ばれる物に酷似していること。背格好が横島と同じくらいだということ。

（ま、私に男の知り合いはほとんどいないからなぁ……）

こんな状況でも浮かんでくるのは横島の事。妹紅は改めて自分が如何に横島に惹かれているのかを思い、苦笑する。

しかし、妹紅のそんな思考も驚愕に染まることとなる。

「――――!?」

『男』が顔を上げた。ただそれだけの事で妹紅は驚愕を露にする。それは『男』の顔つきが横島に酷似していたからだ。見た目の年齢だけなら倍以上か。横島が老ければこういう顔つきになるだろうと思われる人相だ。

その『男』の目が妹紅を真正面から捉える。そのがらんどうのような、それでいて異様な程に粘着質な印象を与える不快な瞳に、妹紅は心の底から嫌悪を覚えた。

「おいおい……横島に似た顔でそういう目はやめてくれよな……」

妹紅は思わず愚痴を呟いてしまう。一瞬横島が『男』と同じ目をしている所を想像してしまったのだ。それは色々な意味でゾクゾクとする妄想ではあったが、この場においては関係がない。

『男』の表情が変化する。首を傾げ、何やら訝しげに妹紅を見つめる。それは、何かを思い出そうとしているように見えた。

「――――まぁ、いいか」

『男』が口を開く。酷くゆったりとした口調で、感情の起伏が感じられない。『男』は

『蛇』のように長い舌で舌なめずりをする。
「お前は、美味そうだ」
その時、初めて『男』の目に色が宿る。それは抑え様ともしない、純然たる欲。食欲だ。
「……ちっ、話しを聞きそうにないな、こいつは」
妹紅は臨戦態勢に入る。目の前の『男』の正体も何も分からないし、姿が横島に似ているのも気になる。だが、だからと言って穏便に済ませようと言う気は妹紅にはなかった。何せ相手は自分を食らうつもりなのだ。そんな奴とまともに語り合う気は起きない。何より、妹紅はこれから始まるだろう戦いが、弾幕ごっこではないことを直観していた。
「――ウウォオオオオオオオオオオン!!!」
『男』が雄叫びを上げながら突進してくる。そのスピードは驚異的であり、瞬きの速さで彼我の間合いを詰める。だが、妹紅はそれを確認すると同時に後退。何とか間合いを維持しようとする。
「食らえ!!」
妹紅はもんぺのポケットから取り出した10枚程の御札を『男』へと投げつける。ただ愚直に突進してくる『男』には対抗の手段が無いと思われた。だが、それは誤りであ

る。
「急々如律令!!　霊符の力を散らしめよ!!」
「なっ!?」
妹紅の放った御札が、『男』が腕を振るっただけで無効化された。『男』はそのままの勢いで両手からいくつもの霊波弾を放つ。
(私の札が……!?　いや、札に込められた霊力を散らされたのか!　これは、たしか平安の……!!)
妹紅は驚きつつも思考を考察に割く。こういった戦闘において、最も大切なのは冷静さを失わないことだ。妹紅は激しやすい心を何とか落ち着かせ、『男』の攻撃に対処する。そうして観察している内、『男』に異変が起こる。
「……グゥゥウウウアアアア!!　ぎいいいあああああ!!!」
『男』が苦しみに満ちた叫びを上げる。それと同時、『男』の右腕が変化を始めた。太い枯れ木が折れた様な音を何度も響かせ、硬い繊維が千切れる様な音を何度も響かせ、分厚い風船が破裂する様な音を何度も響かせ、『男』の腕は大きな『獣』の物へと姿を変えていた。
「何だ、こいつ……!?」
妹紅は知らぬことだが、『男』は人間の力を使えば使う程に人間の部分を失ってゆく。

最早『彼』には人らしい心もほとんど残っていない。狂おしい程に求めた『彼女』の事も、こんな『体』になってまで求めた物の事も、そのほとんどの記憶を失っている。

最早その身に宿るのは妄執のみ。やがては全てを失い、正真正銘の化け物と化すのだろう。

「あああああああああああっっっ!!!　あああああ〝あ〝あ〝あ〝あ〝!!!!」

『男』の腕が更に変化していく。

それは、まるで木の根の様に広がっていく。いくつにも枝分かれし、その範囲を広げていく。やがてそれは『男』の前面を覆う程にまで成長していった。

妹紅はどんな攻撃にも対応出来る様に更に全身に霊力を漲らせ、防御を固める。そして『男』の腕が変化した木の根の様な物を注視した。

――――注視してしまったのだ。

「――――ひっ!!!?」

瞬間、妹紅に襲い掛かるのは圧倒的な生理的嫌悪感。それは魂をも竦ませる程のおぞましい物だ。妹紅はそれの正体を看破する事は出来なかった。だが、それでも心に掛かった負担は膨大な物である。結果、妹紅は恐怖に囚われ、『男』の事を一瞬忘れてしまった。

「い〝あ〝あ〝あ〝あああああ!!」

「あ――――っ」

すぐ近くから聞こえてきた咆哮により、妹紅は正気を取り戻す。だが、全ては遅かった。妹紅は全身を襲う圧倒的な衝撃に吹き飛ばされ、その意識を一瞬の内に刈り取られたのだから。

『男』は荒い息を吐きながら、今しがた吹き飛ばした妹紅に近付いていく。強力な霊波弾によって吹き飛ばされた妹紅は数本の木々をなぎ倒す程の勢いで強かに全身を打っていたのだが、それでも命だけは何とか取り留めていた。恐らくは強力な霊力を纏っていたのが功を奏したのだろう。だが、それも時間の問題だ。

妹紅の手足の骨は折れ、内臓を損傷したのか口からは血を流している。蓬莱人であり、自己治癒能力が高い妹紅でも、このままでは死は免れない。

何より、ここには『男』が居るのだ。

「……」

『男』は妹紅を乱暴に仰向けにさせ、服を破り捨てる。そうして妹紅の腹を露出させた『男』は荒い息をそのままに、不気味な笑みを浮かべた。ご馳走を前にした顔だ。『男』の歯が鋭くなっていき、やがて牙となる。『男』は涎を垂らし腸（はらわた）を食する為に、妹紅の腹に

食らい付く。

「ヨコシマ・キーーーーーーーーーーーーーーック!!!!!」

「――――っっっ?!!!」

だが、それは1人の少年に防がれた。顔面に思い切り強烈な飛び蹴りを食らった男は、もんどりを打って吹き飛ばされる。少年はそれを確認もせず、妹紅に必死に声を掛ける。

「おい、妹紅!! 大丈夫か、おい……!?」

執事服を纏った、人間としては規格外の霊力を持つ少年。横島だ。横島は妹紅の怪我の状態を見て、絶句する。明らかに致命傷だ。普通の人間ならば即死しているだろう。それほどの大怪我だ。

妹紅は蓬莱人だ。例えこの怪我で死んでもまた新たに肉体を復活させ、生き返る事が出来る。それは横島も知っている。知っているのだ。

――――だが。だが、である。

「今すぐ、治してやるからな……!!」

横島は何の躊躇いも無く文珠を取り出し、それに『癒』と念を込め、発動した。その効力は凄まじく、妹紅が負った傷を一瞬で癒した。その効果に横島も驚くが、これは却って好都合。横島は文珠をもう1つ取り出し、今度は『護』と念を込めて発動した。妹紅を護る結界である。

「は、はははははは……!!」

背後から『男』の笑い声が響く。『男』は完全に曲がってしまった鼻をそのままに、狂喜の笑いを上げている。

「見つけた……!!　ついに……ついについについについについについについについに!!　ついに、見つけたぁ!!」

『男』から強大な霊波が迸る。それは、人間の物ではない。妖怪の物でもなく、そして魔族の物でもない。

――――例えるならば、それは神族の放つ物に似ていた。

『男』は全身に霊力を漲らせ、横島へと飛び掛る。

「それを……!!　『文珠』を寄越せえええええええ!!!!」

『男』の爪が横島へと伸びる。しかし――――。

「っっっ!!?」

『男』は横島から振り向き様に拳を顔面に叩き込まれ、またも吹き飛んでしまう。

「……テメーが誰かは知らねーけどな」

横島の全身に、まるで炎の様に霊力が揺らめきだす。

「テメーが何で文珠を欲しがってるかも知んねーけどな……」

それは、横島の憤怒の霊気。

「俺の妹紅にこんなマネして、ただで済むと思ってんじゃねーだろうな……!!」

横島の体に、限界以上の霊力が迸る。

『男』は横島の逆鱗（トラウマ）に触れていた。横島の前で、女の子を、殺そうとしたのだ。

横島の脳裏にあの時の光景がフラッシュバックする。ルシオラか、世界か。

『男』が立ち上がる。その表情は横島と同じく憤怒に染まっている。

横島はきつく拳を握り締め、『男』に大きく気を吐いた。

「このＧＳ（ゴーストスイーパー）横島忠夫が、テメーを地獄に叩き堕としてやるぜ!!」

横島が『男』――――かつて『高島』と呼ばれていた男へと拳を繰り出した。

第三十一話
『兇気、襲来』
～了～

第三十二話『一人の人間の終わり』

妖怪の山、山腹のとある洞窟の前。そこを目掛けて1つの黒い影が空から落ちる。
それは黒翼を広げた鴉天狗の少女。射命丸文だ。
文は翼をはためかせて速度を殺し、ゆっくりと地表へと降り立つ。文はキョロキョロと辺りを見回し、自分を呼び出した人物の姿を探す。
夕霧だろうか、辺りには白い霧が立ち込める。人を探しているというのに視界が悪くなった事に少々眉間に皺を寄せてしまう文だが、空間から響いてくる声によって、その表情は驚きへと変えられる。
「――――そんなに皺を寄せてると、それが癖になっちゃうよ？」
驚く文を尻目に、霧は萃まり、その密度を増してゆく。やがてそれは、歪な人型を取った。頭部に捩れた角が生えた、幼い少女の姿をした鬼。伊吹萃香である。
「やふー。久しぶりだね、文」
そう言って、萃香はいつも提げている瓢箪から酒を呷った。文からは溜め息が出てしまう。

「はい、お久しぶりです萃香さん。ですが、そんな事を言っている場合ではありませんよ？　霊夢さんが『肝心な時にあいつはいない！』ってカンカンでしたよ？」
「うへぇ……そいつは勘弁願いたいねぇ……」
　少しおどけたような文の言葉に、今度は萃香から溜め息がこぼれてしまう。それを見て文の溜飲が下がったのか、1つ咳払いをすると、今度は真面目な調子で話し始めた。
「それで、一体どうしたんですか？　何も言わずに3週間以上も姿を消すなんて、最近ではなかった事ですよね？」
　萃香は文の言葉を受け、またも瓢箪を呷った後、いつになく真剣な表情で頷いた。
「うん、ちょっと色々あってね。最近人里でも騒ぎになっている異変を調べていたんだよ」
「異変……それは、獣達が血液や内臓を抜き取られて殺されているという異変の事ですか？」
　文の問いに、萃香はゆっくりと頷いた。彼女は瓢箪を弄びながら、姿を消していた時の事を語り始める。
「ちょーっと目立ちすぎてたからね。一体どんな奴がこんなことを仕出かしたのかを確かめてやろうと思って、霧になって探ってたんだよ。いやー、最初は真面目にやってたんだけど、どうにも集中が続かなくてね。お酒を呑みながらブラブラうろついて、気付

いたらもう１０何日も経ってて」
「……萃香さん、昔からそうでしたよね」
　文は昔を思い出したのか、げんなりとした表情になる。あまり思い出したくない類の記憶なのだろう。文は萃香に目線で続きを促し、萃香は１つ頷くと続きを話し始めた。
「んで、元凶は一応見つけることは出来たんだよ」
「え!?　ほ、本当ですかっ!?」
　萃香の言葉に文は身を乗り出す。手にはネタ帳とペンを持ち、話を聞く準備は完了だ。
「それで、一体どんな奴が犯人だったんです!?」
　文は鼻息荒く萃香に詰め寄る。その目はギラギラと輝き、傍目にも危険な雰囲気を醸している。萃香はそれに臆することなく、簡潔に答えた。
「――――よく分からなかった」
「何ですかそれっっっ!?」
　文はまるで水泳の飛び込みのように頭から地面へとずっこける。ただその場で倒れただけだというのに何メートルもの距離を滑り、頭から摩擦による煙を出している。一体どのように慣性が働いたのかは分からないが、つまりは色々な意味でそれだけの勢いだったということなのだろう。

「文も結構力が付いたんだね」
「そんなこたぁどーでもいいんですよ!!　それより、よく分からなかったってどういうことなんですか!?　犯人は見つけたんですよね!?　種族は!?　外見的特徴は!?　何も分からなかったんですか!?」
　かつての姿からは想像出来ないような剣幕で文は萃香に迫る。これには流石の萃香も面食らってしまう。かつての力関係からは考えられないことだが、これは良い傾向でもある。対等に酒を呑める仲というのは良いものだ。萃香は文を宥めながら、いつか彼女がそうなってくれることを願う。
「さて、詳しく言うとだね。姿は人型だったんだよ。人型の男。ほら、紅魔館の執事の横島いるでしょ？　あいつに似てたね」
「横島さんに、ですか……？」
「うん、そう。横島が老けたらああなるだろうな、って感じの見た目。種族は……本当に分からないね。とにかく人間ではないし、妖怪でも魔族でもなさそうだった」
　頤（おとがい）に指を当て、萃香は1つ1つを思い出しながら犯人について語る。文もメモを取りながら一体どの様な存在なのかを考えているようだ。
「……しいて言えば、神族に近い……かな？　洩矢諏訪子とか、あれに近い、かな」
「諏訪子さんに……？」

「うん。ん～～～、何て言えば良いか分かんないんだけどね。何となく、そんな感じがしたような……」
「……では、神族なのでしょうか」
「……いや、それは違うと思う」
文の予想を萃香は否定した。
「本当に何て言えばいいのか……。とにかく、あいつは神族じゃないね。近くはあると思うけど……それに、もう1人良く似たのがいたような……いや、2人……？　あー、何か難しいこと考えてたらイライラしてきた」
苛立ちに任せて頭をガシガシと掻き毟る萃香の姿に、文は思わず引きつった笑みを浮かべてしまう。これは相当に頭に来ているようだ。
「あー、そうそう。仮に犯人を見つけても単独で退治しようとかは止めといた方がいいよ」
「え……？」
文は萃香の物言いに違和感を覚えた。そうして文は気付く。先程萃香は『10何日』と言っていた。見つけてから今日に至るまでまだあ10日以上残っているだろう。では、その間は何をしていたのか？
空白の日数。未だ正体が分からぬ犯人。萃香の『単独では挑むな』という言葉。そし

て、未だに続いている異変――――。
　全てが頭の中で1つに繋がり、文は愕然とした。
「まさか、萃香さん……!?」
「……」
　文の言葉に、萃香はゆっくりと頷いた。
「正直――――死ぬかと思ったよ」
「……!!」
　文にとっての絶対的な強者、萃香から発せられたその言葉に、文は雷に打たれたかの様な錯覚を覚えた。それだけの衝撃が今の短い言葉にはあったのだ。
　言葉を失い立ち尽くす文を尻目に、萃香は瓢箪の酒を呷る。そして何かに気付き、顔を空へと向ける。
「……一雨来そうだね」
　そう呟いて、萃香はまた酒を呷った。

第三十二話

横島は目の前の敵を睨みつける。彼の全身には制御しきれない程の霊力が充溢し、余剰分の霊気が炎の様に揺らめくオーラとして彼の体から噴き出している。怒りにより、繊細な制御が出来ていないのだ。

しかし、横島は安堵もしている。輝夜の用事が無ければ横島はここに居らず、妹紅は目の前の『男』の餌食になっていたかもしれない。特に紅魔館から人里まで運んでくれた一号達にも感謝の念を抱く。それにしても、ただ輝夜が妹紅に渡し忘れていた漫画の最新巻を届けるというだけのはずだったのに、とんだ事態になったものだ。……ちなみに、その最新巻は横島が妹紅の危機を察知した時に放り出されている。

「……？」

『男』は自分を睨みつけてくる横島を見て首を傾げる。いつか、どこかで見たことがある気がする。目の前の少年に、『男』はそういった感想を抱いた。しかし、だからと言っ

てそれが『彼』に影響することは無い。大切な物を忘れ去っている『彼』は、自らの欲に従って行動するのみだ。

「お前の文珠を寄越せ」

『男』の両手が変化する。身の毛もよだつ様な異音を響かせ、その腕は猛禽の脚の如く変化した。

「腸も食ってやろう」

『男』は体勢を低く、横島へと突進した。その速度はまさに獣が如く。『男』は横島の臓物を抉り出さんと腕を突き出した。

「――ふんっ!!」

「――っがあぁっ!!?」

竹林に重い踏み込み、爆発呼吸、打撃音、苦悶の声が響く。腹に攻撃を食らい、吹き飛ばされるのは両手を変化させた『男』。横島がこれを一瞬で成したのだ。

『男』の一撃を左手でわざと受ける。その際の衝撃と同等の力でマイナス方向に受ける事により、威力を吸収、ゼロにする。――化勁。

相手の威力を吸収し、更にその威力を自らの力へと蓄える。――蓄勁。

そして、横島は爆発呼吸と共に震脚し、右肘を跳ね上げる様に突き出し、『男』の胸部を強かに打ち抜いた。沈墜勁、十字勁からなる全身の力の全てを微量のロスもなく伝え

きったその一撃は、『男』を軽々と吹き飛ばしたのである。——発勁。

２０年も生きていない横島だが、その一撃は彼の生涯に於いても、今後繰り出せるか分からない程の物だった。横島にとっての地獄の修行は、その実力に確実に根付いてきているようだ。

「……どうだ？」

横島は警戒を怠ることなく霊力を全身に漲らせたまま倒れ伏した敵を見据え続ける。すると、『男』は少々ふらつきながらもその足で、すぐさま立って見せた。胸部……心臓の辺りが陥没しているが、それを気にした様子はない。

「……ま、そうこなくっちゃな。てめーは散々ボッコボコにしてからぶっ殺してやる……!!」

憎悪の表情で横島はそう言った。普段の彼には到底似合わない物言いだ。それだけに彼の怒りの凄まじさが見て取れる。それは彼の霊力にも大きな影響を齎した。

今の横島が纏う霊波は強大だ。しかし、それ故に集束がまるで出来ておらず、ただ全身を霊波が覆っているだけに過ぎない。横島にもその自覚はあった。だが、それでも彼は構わなかった。いや、構うことが出来ないと言った方が良いか。横島は冷静さを失ってしまっている。それでも物事を考える事は出来ているが、通常のそれとは比べるべくもない。今の状態では、サイキックソーサー・プラスも作れはしないだろう。

「ま、それでも戦いようはあるけどな」

『男』は思い切り息を吸い込むと、長く長く息を吐いた。そして、今度は背中から翼を生やし、2度3度と羽ばたく。最後に思い切り翼を振って強い風を起こし、犬の様な遠吠えを上げながら突進する。

「ウオオオオオオオオオンッッッ!!!」

「うるっせーんだよ、怪奇動物人間!!　……ってゆーか羽生やしといて飛ばねーのかよ!?」

横島のツッコミも意に介さず、『男』は矢継ぎ早に攻撃を仕掛ける。それは何の統制もされていない、滅茶苦茶で単純な軌道だ。だが、それを補って余りある程の速度で繰り出されている。それはまさに打撃の速射砲と言えるだろう。

しかし、横島も只者ではない。その人間の領域を超越した動体視力と反射神経で、全ての攻撃を払い、かわし、捌き、受ける。

すると、不思議な光景が浮かび上がってきた。

攻撃を受けている横島ではなく、攻撃を仕掛けている『男』の方が傷を負っているのだ。

「ぐ、うううぅ……!?」

『男』の体にピリピリと痺れる様な、焼ける様な痛みが襲う。事実、その部分は焼け、

爛れていっているのだ。莫大な、横島の霊力で以って。

それは、横島の体から溢れ出す霊波。それが『男』の肉体を焼いているのだ。

この戦法はとある人物を参考にして横島が即興で編み出した物。かつてのGS（ゴーストスイーパー）資格試験、その実技試験で戦った相手『陰念』の魔装術がそのモデルだ。彼の操る魔装術は不完全な物で、霊波を余り集束出来ていない。だが、不安定が故に直接触れていない相手にも、近寄りさえすれば余剰霊波で間接的な攻撃が出来ていた。

そして、今の横島と陰念では力量が違いすぎる。だからこそ、横島は『男』に対してダメージを与える事が出来ているのだ。

「真面目に修行さえしてりゃ、あいつもかなり強くなれたんだろーけどな。陰……いん……インなんとかさんも」

横島が1度戦っただけの、しかも男の事をいつまでも覚えているわけがなかった。だが全てを忘れ去られているわけではないので、そこだけが救いか。……逆に残酷かもしれないが。

「ぐるぅあああああああ!!!」

これでは埒が開かないと考えたのか、『男』は前のめりに吶喊する。猛禽の爪を振りかざし、突進してくる『男』に、横島は口角を吊り上げる。

「がああああああああ!!!」

「へっ……見せてやる、横島の拳を!!」

横島の燃え盛る様な霊波が、右拳に集中する。繊細なコントロールの出来ないそれは栄光の手や文珠の様に実体化する事はないが、それでもそこに込められた霊力は尋常ではない。それはまさに灼熱の一撃だ。

「バーニングファイヤー――――」

横島は『男』の攻撃を左手で流し、右足を半歩踏み込み、右の縦拳を突き出した。

「――――パァァァーーーーンチッ!!!」

「――――ッッッ!!!?」

ヒットしたのは体勢の関係で先程陥没させた胸部、心臓付近。カウンターで繰り出された横島の半歩崩拳は見事『男』の体に突き刺さり、その衝撃を貫通させた。『男』の体が横島の拳を支えにがくんと沈む。

その光景に横島は自分の勝利を確信した。それにより、横島の顔には嗜虐的な笑みが浮かぶ。このままボコボコにしてぶっ殺してやる――――脳裏に危険な思考が過ぎる。

――――だが。

「……?」

横島は気付いた。手応えがおかしい事に。

横島の拳が突き刺さったままの『男』の胸部から、ピキピキと何かが弾ける様な音が

する。それは、骨が折れた音ではない。強いて言えば、それは卵の殻が割れる様な音だった。

そして、その音はどんどん大きくなってゆき、やがてガラスが割れたかの様な音を立て、『男』の胸部が弾けた。

「っんな!?」

『男』はその反動で身を仰け反らす。そうなった事により、横島には弾けた胸部の中身が晒された。

「……!?」

横島は驚愕した。『男』の弾けた胸部に収まっていたのは、本来そこに在るべき物ではなかったからだ。それは、心臓の代わりにそこに存在した。

「……あれは、たしか輝夜様の……?」

見覚えのあるそれに、横島が呆然と呟いた直後。

「――――ぎいいいいいいいいいあああああああああああああああ!!!!」

『男』の翼が変質した。

「んなっ!?　何だぁ!?」

横島は『男』の変化に慌てて距離を取る。『男』の翼は羽根の1枚1枚が異様に伸び、枝分かれしていき、まるで植物の根の様な形態を取った。それは根の成長を早送りの映

像で見ている様で、最早太陽の光すら遮るほどにまで大きく、広く根を伸ばしていく。
「まさか、羽はこれのためか……!?　何か厄介な能力とかがあんじゃねーだろーな……!!」
横島は根を警戒しつつ霊力を練る。怒りや焦りの感情を制御仕切れていないのでその速度は普段よりも遅い。横島は舌打ちをし、それでも何とか防御を固める。
「――――――オオンッッッ!!!!」
「……っ!!」
『男』の雄叫びは人間の可聴域を超えていたのか、横島には咆哮の余韻しか聞き取れなかった。だが、それでも大音波の衝撃はビリビリと伝わってくる。霊力を纏った横島の鼓膜を痛める程ではなかったが、反射的に耳を塞ぎたくなる。横島はそれを何とか我慢し、『男』の出方を窺う。
先程までとは違い、静寂が場を支配する。じりじりと互いが間合いを詰める中、突如として草木を掻き分けて1つの影が姿を現した。
「――!?」
横島は突然の闖入者に意識を取られる。それは少女だった。彼女の眼はどこか虚ろであり、正気でない事が予想された。何故こんな場所に――!?　そう考える暇も無い。視界の端に捉えていた『男』。その表情が喜色に歪んだからだ。そう、『男』はこの時を

待っていたのだ。

「なっ!?」

『根』が少女へと伸びる。『男』はもう少女しか目に入っていないかのように横島へと隙を晒す。それは決定的なまでに致命的な隙。その隙を突くために、横島は足に霊力を込め、地を蹴った。

「――え?」

少女の呆けた様な声が聞こえる。『根』は、少女の眼前にまで迫っていた。

その日、人狼の少女『今泉影狼』は言い知れぬ嫌な予感に苛まれていた。昨夜夜更かしをしたせいか、目が覚めたのは正午も近い時間帯。朝食と昼食を兼ねた食事をとった後、彼女はのんびりと午後を過ごしていたのだが、時間が経つにつれ、布に染みが広がっていく様に言いようの無い不安が膨れ上がっていった。

妖怪の中でも彼女は弱小の部類に入る。それでも今まで大きな怪我も無く過ごせてきたのは種族に備わる危機感知の鋭さだ。臆病な彼女は危機から遠ざかる事で平穏を過ごしてきた。だが、今回は臆病な彼女の性質が危機を招く事となる。

「っ!?」

突如彼女の住む迷いの竹林に充満する強大な霊力。それは2つあり、片方は覚えがある物だ。ここ最近は感じなかった、藤原妹紅の本気の霊波。以前は永遠亭の蓬莱山輝夜とのケンカが頻繁にあったのである意味慣れ親しんだ物。しかし、問題はもう1つの方だ。それを知覚した瞬間、影狼は凄まじい嫌悪感と吐き気に襲われた。まるで、皮膚の下を無数の虫が這っているかの様なおぞましい霊波の感触。

それは影狼の『超感覚』が捉えた何者かの霊波。影狼は思わず胃の中の物を吐き出してしまう。何度も何度も咳き込みながら、胃の内容物を吐き終えた後、次に襲ってきたのは体の芯からくる震えであった。

怖い。怖い。怖い。怖い。怖い！　暫く恐怖に震え続けた影狼は、震える足に無理矢理活を入れるとそのまま家を飛び出した。一刻も早くこの迷いの竹林から抜け出したいのだ。目指す場所は人間の里に住む友人、ろくろ首の妖怪である『赤蛮奇』の下。

震える足ではいつもの様に動けず、何度もこけそうになってしまう。それでも竹林からの脱出を目指していると、そこである事に気付いた。竹林が余りにも静か過ぎるのだ。そういえばいつも竹林を跳ね回っている妖怪兎の姿も見えない。それほどまでに、今の竹林が異常な状態だということだ。

「――――っ!?!!」

妹紅の霊波が消えた。だが、あのおぞましい霊波は未だ健在である。まさか、とも

思ったが、彼女の超感覚はそれが事実である事を捉えてしまっている。

影狼は今にも叫びだしたい気持ちでいっぱいになった。だがそんな事をすれば、あの霊波の持ち主に気付かれてしまうかもしれない。再び影狼の体に震えがくる。どうすればいいか分からなくなった時、またも突然に強大な霊波が出現した。

目まぐるしく推移している竹林の状況に、影狼はしばし呆然となる。だがすぐに気を取り直すと、竹林の出口へと向かって走りだした。

今出せる全力で地を駆ける。影狼はただひたすらに出口を目指して走った。そうだ、こっちに行こう。足がもつれるも、何とか立て直す。こっちに行けばいいような気がする。少々大きな石に足を取られ、転んでしまった。こっちに向かおう。痛みも我慢し、必死に走る。ここを抜ければ、そこがゴールだ。影狼は草木を掻き分け、そこへ飛び出した。

「……あれ？」

影狼の前に広がる光景。それは竹林の出口でも何でもない。1人の少年が、あのおぞましい霊波の持ち主であろう『男』と睨み合っている姿。何故だ、自分は竹林から抜け出る道を進んでいたはず……!!

ここは出口ではない。その受け入れがたい現実に影狼の思考は真っ白に染まった。そう、影狼は出口までの道を進んでいたのではない。ここに来るように誘導されていた

のだ。

『男』が横島に吹き飛ばされて立ち上がった際、『彼』は空気と共にある物を排出していた。それはフェロモン！　蟻がフェロモンを用いて食物までの道を示す様に、『男』は背から生やした翼でフェロモンを竹林に撒き散らし、自らに向かってくるように仕向けていたのだ。

無味無臭のフェロモンは影狼の超感覚を以ってしても防げず、その影響は横島にも及んでいる。彼が不自然なまでに逃げの一手を打たないのはその為だ。

「――え？」

影狼は呆けた様な声を出した。気付けば目の前におぞましい霊波を纏った『木の根』の様な物が迫っている。影狼は理解した。自分はここで死ぬのだと。死を前にしたからと言って、それでどうするというわけでもない。思考は相変わらず働かず、ただ『死』という現実を認識しているだけ。

影狼はただ呆然と死を待つのみだった。

――だが。

「――っ!?」

突然横合いから体に衝撃が走り、影狼は吹き飛ばされた。体に走る痛みに咳き込み、何があったのかと先程まで自分がいたであろう場所を見る。そこには、左足に大きな傷

を作った、執事服の少年の姿があった。
「痛っっつうぅぅ……!!」
少年は止め処なく血が流れる左足を押さえていた。その近くの地面に突き刺さっているのは、先端に血が付着した『根』の様な物。間違いなく、影狼を狙って放たれた物だ。
そう、影狼はその少年に庇われたのだ。
「ちょ、だ、大丈夫なの……!?」
影狼は自分を庇った少年……横島の下へと駆け寄る。だが、それを好機と見た『男』が更に多量の『根』を放ってきたのだ。
「ひっ!?」
その光景に影狼は小さく叫びを上げる。しかし、そうはさせじと横島が影狼の前に躍り出た。
「おんどりゃーーーーー!!」
横島は霊波を纏った両手で全ての『根』を弾く。幸い『根』の攻撃スピードはそう大したものでもなく、何とか耐えている。
「そこの女の子！　ちょっとの間目を瞑っててくれ!!」
「え、ええっ!?　な、何で……!?」

「いいから!!」
「は、はいぃ!!」
　横島は影狼に目を瞑るように言うが、ただでさえ恐怖に呑まれている影狼にその注文は受け入れがたかった。だが、横島は強い口調でそれを押し切る。影狼が目を瞑った事を確認すると、横島は莫大な霊力を両手に集中させ、思い切り手を打ち鳴らした。
「サイキック猫だまし!!」
　瞬間、溢れるのは視界を焼く強烈な閃光。それをまともに見てしまった『男』は両目を押さえて悶え苦しんでいる。それを確認した横島は手に文珠を1つ取り出し、それに『護』の念を込めた。
「こいつはあらゆる危険から君を護ってくれる！　これ持って早くここから逃げろ!!」
「え……!?」
　横島は文珠を影狼へと手渡した。突然淡く輝く宝石の様な物を渡された影狼は戸惑うが、その宝石を見ていると何か不思議な安心感を齎してくれる。影狼はそれが直感的に横島の言うとおりの代物なのだと理解した。だが、それならば。
「で、でも君の方こそ酷い怪我を……!!」
「俺の事はいいから!!　さっさとしねーとあいつが回復しちまう!!」
　影狼は自分よりも怪我を負っている横島がそれを持っているべきだと主張したが、横

島はそれを却下した。今はとにかく時間が惜しい。影狼には早くここから逃げてもらわないと、負担が大きくなってしまうのだ。

「でも!!」

「死にてーのか!!!」

「……っ!?」

横島を心配し、未だ逃げようとしない影狼に、横島は本気で怒鳴る。影狼はそのことに体をびくりと震わせた。

「俺なら大丈夫だから、早く逃げてくれ。この状態で君を守りながらじゃ、どっちも殺されちまう」

「……」

横島は影狼に言い聞かせる様に優しい声音でそう言った。影狼は俯き、体を震わせる。自分は、何も出来ない。

「……分かり、ました」

やがて出たのは、掠れた様な声。影狼は横島に背を向け、走り去る。その背中に声が掛けられた。

「こっちを見ずに、そのまま逃げるんだぞー!!　また縁があったらデートしようぜー!!」

命が懸かった状況だというのに、その声は明るさを含んだ物だった。思わず横島を振

り返る。目に映ったのは、夥しい数の『根』に飲み込まれゆく横島。
「……っ!!」
それでも、影狼は走り続けた。あの少年は自分を助けてくれたのだ。ならば、彼が助けてくれた命を無駄にするわけにはいかない。
「……くっ、ううぅぅ……!!」
視界がぼやける。影狼は泣いていた。自らの弱さに、何も出来ない自分に絶望し、涙を流した。彼女は泣きながら竹林を脱出する。
早く、赤蛮奇に会いたい。少年の救出を手伝ってほしい。影狼は人里への道を全力で走っていった。

「……また、勝手に体が動いちまったな」
完全に周囲を『根』で覆われてしまった横島は溜め息を吐いた。横島は当初影狼を助ける気はなかった。そのまま『男』に攻撃を仕掛けるつもりだったのだ。だが、気が付けば自分はあの少女を突き飛ばし、せっかくのチャンスを逃してしまった。かつての事を思い出し、苦笑を浮かべてしまう。
「ま、この方が俺らしい……かな?」

苦笑を消した横島は眼前の『男』を睨む。『男』は笑っていた。

やはり、思った通りだった。それが『男』の抱いた感想だ。『男』は横島の妹紅に対する行いから、こうなるであろう事を予想していたのだ。僅かばかりの『人』としての知能。ここに来て悪知恵が働いたようだ。

「さて、どーすっか……」

横島はこの状況を切り抜ける為の策を考える。と言っても、彼に浮かぶのは目の前の『男』をぶちのめせばいいという様な事ばかり。多少冷静さを取り戻した様だが、それでもフェロモンの影響下からは逃れられていない。痛む足を気にしつつ、霊力を更に練り上げようとした瞬間、それは発動した。

「……っっっ!!!」

横島に襲い掛かる圧倒的な不快感、嫌悪感。それは横島の動きを制限し、魂をも竦ませる。突然の事に硬直する横島だが、彼は気付いた。この金縛りにも似た現象の出所に。

「……な……あ……!?」

横島はそれを見た。そして気付き、怖気に囚われる。『根』の正体、それは無数の動物の『腕』だったのだ。羽根の1枚1枚が動物の腕に変化し、指にあたる部分がまた動物の腕に変化し、また指の部分が腕に変化し……。そうして出来上がったのが今周りを取

り囲む『根』の様な物。その節々……関節から光が覗く。
　――それは、眼球だった。
　ありとあらゆる動物の眼。それが関節から覗いている。人は見られるという行為に萎縮する。体を縛り付けている何か。それは邪視と言っても過言ではない程の負の力を纏った視線で見られる事によって発生する物だったのだ。
　……そして。
「――しまっ!?」
　正気を取り戻した時にはもう遅い。横島の眼前には『男』がいて、その猛禽の爪が腹部に迫っていたのだ。
「ぐうっ、がっ、あああああああ!!?」
　腹に突き刺さる鋭い爪。それによる激痛に横島は叫びを上げた。逃げようとしても体が動かない。いつの間にか『根』に囚われている。腹に溜まった血が口から溢れ、声が思うように出なくなる。
「あ……っ、ぎ……ひっ!?!!」
　ばつん、と。まるでブレーカーが落ちたかの様に下半身の感覚が無くなった。脳を痛みが支配する中、見れば『男』の腕は肘辺りまで自分の腹に埋まっている。内臓ごと背骨を砕き、貫通したのだ。

「……っ!!　――……っ」

横島の意識が遠のいていく。視界も白く染まってゆき、どんどんと何も考えられなくなっていく。

――ダメ、だ……意識を、保た……ない、と……。

『男』が腕を引き抜く。『男』の腕で塞がっていた穴が開き、そこから鮮血が溢れ出した。『男』はその血を全身に浴びる。『男』の顔が狂気に歪んだ。

「あぁはははははははははははははははは!!!」

『男』の哄笑が響く。その馬鹿にうるさい笑いを横島は間近で聞いているわけだが、反応を示さない。否、示せない。

「これで――せる！　あの――を！　文――があれば――を取り戻――!!」

横島は消え行く意識の中で、それを聞いた。『男』が取り戻そうとする物を。確かに聞いた。

――意識を……保た……ない、と……保た……保……――――。

横島の意識は、完全に断たれた。その様子を見ていた『男』は、横島を地面に横たわらせる。そして、主菜（メイン）の前にまずは前菜（オードブル）だと、『男』は横島の血や肉片が付着した腕に舌を這わせた。

血を舐め取る度に、肉片を食む度に、『男』は幸福感に満たされる。充分に満足した『男』は、ついにごちそうに齧り付く。自らの目的、横島の手の中で輝く文珠に気付かぬままに――。

ぽたり。ぽたり。

妹紅の頬を水滴が何度も打つ。その勢いは増していき、それはやがて彼女の全身を濡らすまでに降り注ぐ。彼女の周囲に張られていた結界はその効力を失っていた。

「ん……んぅ……？」

妹紅が意識を取り戻した。そのまま数秒、自分は何故竹林で雨に打たれているかを考える。

「――そうだ、あいつ!!　……って、あれは……!?」

『男』の存在を思い出した妹紅はすぐさま立ち上がり、周りを警戒する。雨の周囲を見渡す中、何か妙な物を発見した。『根』の様な物で構成された球体。それは間違いなくあの時目にした物だ。

「……っ」

妹紅はあの時の事を思い出し、思わず身震いしてしまう。だが、妹紅は情報を収集しようとその球体を眺めた。すると、『根』の隙間から中が透けて見えた。そこには地面に這いつくばって何かをしている『男』の姿も見える。

「何だ……？　あれは……何かを食ってる、のか……？」

『男』が何かを咀嚼する音が聞こえてくる。妹紅は食われているそれを見た。そして――。

「――――え」

妹紅の視界が、真っ赤に染まった。

「横島!!　横島ぁっ!!!」

妹紅は横島に食いついている『男』を周りの『根』ごと焼き払った。妹紅の炎は周囲数１０メートルの木々を一瞬で炭化させる程のものだったが、横島にはその炎の影響は

一切無い。『男』もその炎に体の何割かを焼かれたのだが、それでも死には至らず姿を消した。

妹紅は横島の体を見る。腹に開いた大穴。滅茶苦茶に食い荒らされた内臓器官。そこから導き出される結果は、1つだけだ。

「横島……横島あぁぁぁ……」

妹紅の双眸から、止め処なく雫が溢れ出る。何故横島が竹林に居たのかは分からない。何故こんなことになってしまったのかも分からない。ただ分かるのは、横島が、自分の愛する者が殺されたという事だけ。それが、妹紅の心を締め付ける。

妹紅はただ暴れだす感情のままに、哭き声を上げた。

「――――あああああああああああああああああああああああああ!!!!」

横島に縋り付き、妹紅はただただ涙を流す。彼女の叫びは竹林に消え、残らない。

だが、反応する者ならばそこに居た。

「――……？」

それを、確かに妹紅は聞いた。横島の口から漏れる、何かの音。

「……まさか」

妹紅は横島の口元に耳を当てる。すると聞こえてくるのは消えそうなほどにまでか細い呼吸の音。妹紅が目を見開く。

「生き……てる……!?」

そう、横島は生きていたのだ。腹に大穴が空こうと、内臓を食い散らかされても、まだ生きていたのだ。

「でも、一体どうやって……!?」

霊力が強いと言っても横島はただの人間だ。こんな状態で生きていられる筈が無い。何故、と考えていると、握られていた横島の手から、淡く輝く宝石の様な物が転がった。

「これは……『保』……?」

その宝石には文字が刻まれていた。その文字は『保』。それを見た瞬間、妹紅はある考えにたどり着いた。

「まさか、これが横島の命を保っているのか……!!?」

普通ならば一笑に付す様な考えだが、妹紅にはそれこそが真実なのだという予感があった。いや、真実がどうであろうとどうでもいい。重要なのは横島が生きているということだ。

「早く横島を医者の……永琳の所へ連れて行かないと……!!」

妹紅は一刻も早く横島を永琳の所へ連れて行こうと、横島の体を抱き上げようとす

る。今の状態がどれだけ続くかは分からない。故に妹紅は行動を起こす。
しかし、それは最悪のタイミングでやってきた。
「――あぁぁっ!?」
ピシリ、と。文珠に皹が入る。妹紅はそれを見て極大の恐怖を味わった。これが完全に割れてしまえば、横島は今度こそ完全に死んでしまうだろう。
――どうする!?　どうするどうするどうするどうする!?　どうすれば横島を助けられる!!?　どうすればいい!!?
目まぐるしく回転する思考、だがそれは空回りするだけで横島を助けられる案は浮かばない。そうしている間にも文珠の皹は広がっている。
「嫌だ……!!　死んじゃ嫌だぁ……!!」
妹紅は嫌々と首を振り、横島に懇願する。それが無意味な事だと理解してはいるが、それでも妹紅には縋るしかなかった。
どうして横島がこんな目に合うのだと。どうして横島なのかと。妹紅は運命を呪う。
どうして、永遠の命を持つ自分ではないのかと――――。
「……」

――妹紅はそれに気付いた。そして、実行に移す。これは許される事ではない。私は、彼の思いを踏みにじる事をするのだ。

それでも。それでも……!!

そして、文珠は砕け散った。

「横島さーん!!　どこですかー!?」

雨が降る竹林の中を一号達が進む。彼女達は横島を一先ず人里に送り届けた後、2人の邪魔になってはいけないからと頬を膨らませながらも付いていくのを遠慮したのだ。

横島の帰りを人里の茶店で団子を食べつつ待っていたのだが、突如として竹林で巨大な爆炎が噴き上がったのが見えた。一号達は横島に何かがあったのかと突然の事態に混乱する人里の人達を尻目に、竹林へと急いだ。

「……2人とも、あそこー」

三号が竹林の一角を指差す。そこは炭化した木々が辺りに横たわった、異様な場所だ。その中心部分、そこには何か人影の様な物が見える。

「横島さん!?　おーい、横島さーん!!」
二号を先頭に、三人はその場へと急行した。そして、そこで見たものは。
「……っ!?　こ、これは……!!?」
全身を自らの血で染めた横島と、横島と同じく全身を血で染めた、妹紅の姿だった。
妹紅は意識の無いまま、何事かを呟いていた。何度も何度も、『ごめんなさい』と――。

第三十二話
『一人の人間の終わり』
～了～

第三十三話『横島忠夫は証明したい』

――雨が降っていた。

天から落ち来る雫は地を濡らし、穢れを洗い流す。それは自然が齎す恵みと言える。

だが、そんな雨も、時には牙を剥く。

雨は生物から温もりを奪い、河川を氾濫させ、容赦なく数多の命を奪う。それは自然が齎す脅威だ。

「横島さん!!　妹紅さん!!」

迷いの竹林の中程。周囲数十メートルの木々が炭化している場所があった。そこの中心、2人の少年少女が血まみれで倒れている。1人は執事服を着た少年、横島。もう1人は白い長髪を持つ妹紅。2人は駆けつけた妖精メイドに抱き起こされる。そして、妖精メイド達は2人の怪我がどういった物かを理解した。

「……!?」

腹を剖り抜かれている。妹紅は大丈夫だった。抉れているといってもほんの一部分。蓬莱人である妹紅ならば、近いうちに全快するであろう傷だ。しかし、横島の傷は絶望

的だった。重要な内臓器官は粗方損傷を受けており、無事な部分が見つからない程だ。

「……横島、さん……」

横島を抱えている一号の目から、涙が溢れ出す。それは妹紅を抱える二号も同じだ。自らが好意を持っている者達がこうも無惨な死に方をしているのだ。２人はどうすることも出来ない現実に、ただ涙を流すだけだった。

「……」

そして、三号も同様だった。一号と二号は既に誰憚る事もなく大声を上げて泣いている。三号も目に涙を溜め、横島達を見ている。その姿をずっと、まるで目に焼きつけ、忘れない様にする為に。

――情報を、集めないと。

三号を冷静たらしめていたのはその考えからだった。横島達から少し離れた地面に何かを引きずった様な後が竹林の奥へと続いている。恐らく、こんな真似をした憎き相手は未だ生きているのだろう。このようなことを仕出かした者を見つける為に。その者に自分が行った事を身をもって分からせてやる為に。三号は横島達の姿を刻み付ける。

「……？」

そして、そんな三号だからこそ気付くことが出来た。

「……一号、横島さんを離して!!」

三号は一号から横島を奪い、地面へと寝かせる。一号は三号の突然の暴挙に泡を食う。

「さ、三号!?　いきなり何を……!?」

「……ごめん、少し静かにして……!!」

静かな、しかし強い三号の言葉に一号は気圧される。辺りに響くのは雨の音と、一号と二号のしゃくりあげる様な泣き声。そんな中、三号はしっかりとそれを聞き取った。

「……呼吸を、してる……」

「え……?」

三号の呟きに二号が疑問の声を上げた。

「……横島さん、呼吸をしてるの……!!」

信じられない様な三号の言葉。二号が弾かれる様に横島の口元に耳を寄せる。そして、二号もそれを感じ取れた。

「あ、ああ……!!　横島さん、息してる……息してるよぉ……!!」

横島は今も生きている。それを理解した二号の瞳からまたも涙が溢れる。一号も二号に続き、耳を横島の口元へとやっていた。そして三号は先程までの自分を恥じていた。一体、どうして気付かなかったのか。横島の腹の傷。それがどんどんと塞がってき

ていることに。

「……とにかく、急いで紅魔館に戻って永琳先生に診てもらわないと。今はまだ大丈夫でも、いつ死んでもおかしくない状態には変わりないんだし……」

「う、うん！　わかった!!」

一号と二号が横島を、三号が妹紅を担いで空を飛ぶ。ここから紅魔館までそれなりに時間が掛かる。三号はその間に2人の……特に横島の容態が急変しない事を願った。

第三十三話

『横島忠夫は証明したい』

一号達は紅魔館へと到着し、門番である美鈴に緊急の報を告げる。横島と妹紅が何者かの手によって重傷を負った……その事実が紅魔館に特大の衝撃を齎した。

美鈴はすぐに一号達を永琳の部屋へと向かわせる。その際に横島達の事を知った妖精メイド達が心配して群がってくるというアクシデントが発生してしまったが、美鈴が妖精メイド達を一喝。多少の騒動はあったが、何とか速やかに移動することが出来た。

「永琳さん、美鈴です!!　中に入れてください!!」

永琳の部屋へとたどり着いた美鈴がドアを激しくノックする。するとドアはするりと開き、美鈴達を迎え入れた。

「待っていたわ、美鈴。一号達は2人を台に乗せて。……これから私は2人の治療に入る。その間に美鈴は一号達から話を聞いてちょうだい。それから、今こっちに向かってる皆への説明もお願い」

永琳は騒ぎを聞きつけていたのだろう。永琳は手術着に着替えていて、部屋の中には既に手術に使うのであろう様々な器具が置かれており、鈴仙、てゐ、そして輝夜の姿もあった。

永琳は美鈴へと矢継ぎ早に指示を出す。永琳の弟子である鈴仙とてゐはともかく、輝夜が居るのは何故か。美鈴はそれが気になったが、それは今聞くことではない。美鈴は永琳達に頭を下げた後、一号達と連れ立って部屋を出た。

美鈴が退室した直後、目の前の空間にスキマが出来、数人の少女が姿を現した。

「美鈴!!　横島君達の容態はどうなの!?」

スキマから現れた少女の1人、紫が叫ぶ様に美鈴に問う。同じくスキマから現れたレミリア、フラン、パチュリー、咲夜、小悪魔も美鈴に視線で問う。フランや小悪魔等は既にぼろぼろと大粒の涙を流している。

美鈴と一号達は紫達へと自分が知る限りの情報を話す。とは言っても4人は医療に関しては素人に近い。そこから齎される情報等はたかが知れている。結局は、永琳達の報告を待つしかないのだ。

「――それじゃあ、始めるわよ。輝夜、まずは横島君の方に結界を展開して」

「うん」

緊迫した空気が流れる部屋の中、永琳はまず普通の人間である横島から処置を開始する為に輝夜に結界を展開するように言った。それは輝夜の能力を応用した、特殊な結界。結界内部を無菌状態にし、永遠と須臾の能力で結界内部の時間を隔離。そうすることによって患者の負担を軽減する……それがこの結界の効力だ。

「……まさか」

手術を開始してわずか数十秒。永琳が信じられない物を見たかの様に声を漏らす。

――否。それは予想がついていた。いくら規格外のタフネスを持つ横島とはいえ、普通の人間であるならばこの状態で生きていられる筈が無い。ましてや、今も傷はひとりで

に塞がってきているのだ。そこから得られる答えは1つだけ。

「……妹紅」

永琳は痛ましげな眼で深く眠っている妹紅を見やる。彼女の傷も、横島と同じく腹。ここまで揃えば充分だろう。

「横島君を生かす為に、自分の内臓器官を食べさせたのね……」

蓬莱人になる為には、2通りの方法がある。1つは永琳達がそうであるように、蓬莱の薬を飲んで蓬莱人になるという方法。もう1つが、蓬莱人の生き肝を食すること。蓬莱の薬は肝に溜まる性質を持っており、それを食べた者は同じく蓬莱人になるという。妹紅は瀕死の横島に対し、それを行ったのだ。

「……」

永琳が何らかの処置をするまでもなく、傷はどんどんと塞がっていく。その様子を永琳はただ暗澹たる思いで見つめるしかなかった。

「あの、師匠。これはやっぱり……」

同じく手術着を着た鈴仙が永琳に問う。目の前に広がる光景に、答えを分かっていながらも聞くしかなかったのだ。

「……ええ。貴女の思っている通り。横島君は、蓬莱人になってしまっているわ」

「……やっぱり、そうですか」

鈴仙は横島を見やる。思い出すのは数日前の小悪魔との会話。横島が話していたという、その思い。そして、それを裏切らざるを得なかった妹紅。

――どうして、2人がこんなことに。

鈴仙は理不尽を嘆き、強く奥歯を噛み締めた。既に、横島の傷は跡形もなくなっていた。それこそが、横島が純粋な人間でなくなったことの証と言えよう。

永琳は横島の傷の治るスピードが自分達よりも圧倒的に速いことを確認し、横島への処置を何もせずままに終える。1度結界を霧散させ、今度は妹紅の方に結界を展開してもらう。

蓬莱人である妹紅も常人より傷の治りは速いが、それでも横島程に異常な速度ではない。こちらは処置をした方がより安全に快復してくれるだろう。

「……執事さん」

輝夜の傍らにいるてゐは、横島に降りかかった不幸に深い後悔を抱いていた。自らの能力、『人間を幸運にする程度の能力』を使っていればこんなことにはならなかったのではないか、と。それはもしかしたらの話しであるし、今となってはもうどうしようもないことだ。それはてゐも理解している。それでも、『もし』を考えると心が音を立てて軋んでいく。いつの間にか、てゐの双眸からは涙が溢れていた。

輝夜は静かに涙を流すてゐの頭をゆっくりと撫でる。輝夜はてゐに掛ける言葉が見

つからない。ただこうして頭を撫でてやることしか出来ない自分に歯噛みする。
皆が横島を思い、心を痛めている。既に傷が塞がった横島は、その意識を深い深い闇の底へと落としていった。

深い深い水底のように、一切の光も差し込まない世界。それは深淵の闇。横島の意識は、その闇の中を漂っていた。
――……。
闇は横島を覆い、その心に安らぎを齎している。まるで微睡(まどろ)みの中にいるような、ふわふわとした感覚が横島を包む。闇は、まるで揺り籠のようだ。
ゆらゆらと、まるで水面に浮かぶ木の葉のように安らかな揺らぎの中、横島の意識は何者かの『声』を聞いていた。
――……。
それはまるで遥か遠い残響のように耳朶(じだ)に触れる。そこに込められた感情に、横島の心は震えだす。
――……。
それに込められた意思。感情。それら全てが横島には愛おしく感じられた。それら

全てが横島の胸を締め付ける。

それは、1人の少女の切なる願い。横島への計り知れぬ愛と、計り知れぬ罪の想い。裏切ってごめんなさいと、何度も何度も語りかける。生きていて欲しいと、幾度も幾度も語りかける。

――……ああ、分かってる。

それらの全てを、横島は飲み込んだ。彼の目の前に光が差す。そこに存在したのは、かつて失った、今も愛する少女。

――ヨコシマ。

少女が横島の名を呼ぶ。彼女が浮かべているのは笑顔。それは、とても嬉しそうな、とても寂しそうな、とても誇らしそうな、とても悲しそうな……。様々な感情を内包している。それは光り輝く正の感情だけではない。むしろ、昏い負の感情の方が強いだろう。

ああ、それでも。――ただ、彼女は1人の男の為に笑ってくれているのだ。

――ヨコシマ。

彼の眼に涙が浮かぶ。彼女には幾度も見せてきた、情けない姿。だが彼女はいつだってそれを許してくれた。愛する男が、いつだって挫けずに立ち上がると信じているから。

「――お前は、いつだってこんな俺を応援してくれるよな」

横島が俯き、ぽつりと言葉を零す。少女は横島の元へと移動すると、その手を取り、自分の胸元へと引き寄せた。少女の体温が横島へと伝わり、それが彼の力となっていく。

「お前の期待に応えられるかは分かんねーけどさ、俺は俺なりに頑張ってみるよ。……ありがとな」

横島は少女の眼を真っ直ぐに見つめる。その表情は、見事に歪んでいる。目の前の少女のように、泣いて、笑って。

「……ありがとう。行って来るよ――ルシオラ」

「……ええ。いってらっしゃい――ヨコシマ」

横島はルシオラから背を向け、真っ直ぐに歩いていく。何度も振り返ろうとする葛藤が見られるが、それでも振り返らずに。

「私は、いつだってお前と共にあるわ。――頑張ってね、ヨコシマ」

その言葉を最後に、少女――ルシオラの姿は消えた。横島はそれを察知し、眼を閉じる。しかしそれも数瞬、横島はカッと眼を開き、今度こそしっかりと歩を進める。

全ては、決着をつける為に。横島の意識は緩やかに闇から抜け出した。

横島達が永琳の部屋に運ばれて僅か数十分後。部屋から永琳達が姿を現す。彼女達の表情は一様に沈んでおり、それは皆に最悪の予想を抱かせた。

「永琳、横島君達は……」

緊張した空気の中、紫が代表して永琳に問う。永琳は一瞬だけ眼を瞑り、息を大きく吸い込んだ。これから話す内容は、特に紫にとってとても許容出来ないことだ。それでも永琳は説明をしなければならない。

「まず結果だけを言うと、2人とも大丈夫よ。死ぬことはないわ」

「そうなんですか!?　……よかった……よかったですぅ……!!」

永琳の言葉に小悪魔や美鈴は涙を浮かべて安堵した。他の面々もそうだ。皆がほっとしたように息を吐く。ただ1人を除いて。

「……永琳」

「……何かしら、紫」

紫だけは違う。何かを堪えるように、掠れた声で永琳に問う。

「つまりは、そういうことなのね？」

「……ええ」

紫の顔が歪む。2人の会話に着いていけない皆は、何かあるのかと不安を抱いた。

「皆にも教えておかなくちゃいけないわよね……」

永琳は酷く言い辛そうに眼を伏せる。それでも永琳は皆と眼を合わせ、事情を説明する。

「横島君のことだけれど……彼は、蓬莱人になってしまったわ」

――――え？

気の抜けた様な声が響いた。それは信じられない事実を聞いた為だ。

「な、何で……」

永琳に疑問の声が上がる。それは皆の総意だろう。冷静な判断が難しく、答えに辿りつけていないのだ。

「……横島君と妹紅の傷の具合から見て、恐らく彼は内臓を食べられたの。そんな瀕死の重傷を負った横島君を助ける為に、妹紅が自分の……蓬莱人の生き肝を食べさせたみたいね」

「――――!?」

!!」

それは皆に驚愕を齎した。横島が助かったのは素直に喜べる事だ。だが、何もこのような展開は望んではいなかった。特に横島の寿命を延ばそうと考えていた小悪魔にとっては、一言ではとても言い表すことが出来ない感情が渦巻く。

小悪魔の歯がカチカチと音を鳴らし、不意に体から力が抜ける。横島の思い、小悪魔の思いの両方を知っているパチュリーと咲夜は、小悪魔が倒れてしまわないようにその体を支える。

「……横島達をヤった相手は、一体何者なんだろうな。一対一か二対一かは知らないが、妹紅もボロボロだったんだろう？」

小悪魔の様子を見たレミリアは話題の転換を試みる。一号達が話したのは竹林の一部が炭化していたこと。横島だけでなく、妹紅にもかなりの怪我を負ったと思しき痕跡があったこと。そして、犯人がそこから逃げおおせたであろうことだ。

「ええ。衣服の状態から推察するとね。……その割にはお腹以外に傷が無かったのが気にかかるけれど、まあそれはいいわ」

永琳も話題の転換に乗った。彼女は今憤りを感じている。横島の蓬莱人化について、もっと詳しく説明せねばならないだろう。それでも、彼女は私情を挟みたくなった。

「それで犯人についてだけど……皆は『文々。新聞』の内容を覚えているかしら？　熊や猪の内臓がくりぬかれて、血を全て抜かれていたという記事よ」

「あ……はい、覚えています。横島さんが、宇宙人のキャトルミューティレーションみたいだって言ってました」

永琳の問いに答えたのは小悪魔だった。それは横島とデートに出かけた時の号外と

同じ内容であり、その後の騒動と共に覚えていたのだ。
小悪魔の言葉に皆はハッとする。噂となっていた異変と、今回の事。偶然にしては似すぎている。十中八九、犯人はそいつだろう。それが分かったのならば話は早い。
「……」
紫の体から、濃密な殺気と妖気が漏れる。それは物理的な干渉を引き起こし、紅魔館の窓ガラスに無数の皹を作った。その圧力は永琳、レミリア以外の者に強烈な負荷を掛け、皆は全身にじっとりとした汗をかき、体を濡らす。
「……行くのか？」
「……ええ」
レミリアと交わされる短い言葉。かつて言った事を紫は実践する。——彼に危害を加えるならば、私が承知しない。それが紫の決意……誓いとも言える言葉だ。
皆から背を向け、紫はスキマを開く。目指すは迷いの竹林。スキマに一歩を踏み出そうとした彼女に、レミリアが声を掛けた。
「どうせなら、私も一緒に連れて行ってくれない？」
その言葉はざわめきを生んだ。紫は振り返り、目を見開いてレミリアに問うた。
「……本気なの、レミリア？　私が向かうのは竹林。今は、雨が降っているのよ？」
吸血鬼は流水を渡れない。雨も流れる水であり、吸血鬼は歩くことも出来ないのだ。

それでもレミリアは一緒に行くと言っている。
「分かってるわよ、そんなこと。雨は吸血鬼の弱点の1つ。……でもね？」
レミリアはおどけたように語る。しかしそれもそこまでだ。彼女の波動は、既に変化している。
「横島は私の執事。私の物をこんな風にされて、そのまま後は誰かに任せっきりなんて……そんなこと、許せるはずがないでしょう……!!」
レミリアは怒りに震えている。彼女が開放した魔力は紅魔館の窓ガラスを容易く吹き飛ばした。紫と同様に横島を思い、怒りを抱いている。
紫とレミリアは暫しの間互いの眼を見ていたが、やがて紫がレミリアにゆっくりと頷き、同行を了承した。言って聞く相手ではない。何より、横島を思っての行動を否定したくなかったのだ。
そして、レミリアは永琳へと視線を向ける。永琳は当然とばかりに頷いた。「私も行く」と、その眼が如実に語っている。
3人がスキマに向き直ったとき、その声は唐突に響いた。
「――――それじゃ、俺も連れてってくれませんかね？」
皆は一瞬だけその動きを止め、次に弾かれたように声の発生源を見た。そこは永琳の部屋の中。皆の視線の先、その両足でしっかりと立っている病衣を着た横島の姿があっ

た。

「よ、横島君!?」

永琳が驚きの声を上げる。既に傷が完治しているとはいえ、意識が戻るのはもっと後のことだというのが永琳の診たてだった。いや、驚愕したのは永琳だけではない。他の皆もそうだ。

「よ、横島さん!!　もう大丈夫なんですか!?　体におかしなところはありませんか!?」

小悪魔が横島へと縋り付く。横島は小悪魔を受け止め、その頭を撫でながらあやす様に言う。

「ああ。何か体の調子が良くてな。まあ、強いて言えば……しばらく、肉は食いたくないかな。おえっぷ」

何かを思い出したのか、横島は口を押さえて吐き気を我慢している。その言葉のニュアンスから、永琳は横島に疑問を抱いた。

「横島君、貴方もしかして……」

「……あー、はい。自分の体の事は、何となく理解出来てます」

横島の言葉に沈黙が下りる。皆痛ましげに横島を見やるが、横島は居心地がわるそうに苦笑すると、今度は紫達へと向き合った。

「紫さん、あいつのとこに行くなら、俺も連れてってください」

「……横島君、本気なの？　貴方はさっきまで……」

横島の要求に、紫は是を返すことが出来ない。それも当然だ。横島は先程までとっくに死んでいてもおかしくない程の重傷を負っており、更には今から向かう先は横島を生きたまま食らった者のところだ。横島の精神がどのようなダメージを負っているのかも判断がつかないし、ここで彼を連れて行くのはレミリアの事を鑑みてもリスクが高すぎる。

紫が横島に否を返そうとした、その瞬間。とある少女が横島に掴みかかった。

「ふざけないでよっ!!!」

それは、鈴仙である。横島の胸ぐらを掴み、横島へと感情を爆発させた。

「横島さんはさっきまで死に掛けていたのよ!?　殺されかけたんでしょ!?　状況から考えると生きたまま内臓を食べられるなんておぞましいやり方で!!　いくら傷が完治したからって、それで後遺症がないとは限らないの!!　特に横島さんの場合は精神的なものもある!!　こうしていられるだけでも奇跡なのよ!?」

「……イナバ、ちゃん」

横島は鈴仙に圧倒される。それだけの正当性、思いが横島を責め立てる。皆もそうだ。鈴仙がこれほどまでに感情を露にするのを見たことがなかった。

「貴方が向かうことなんてないでしょう!?　貴方が血まみれで帰ってきて、皆がどれだ

け心を痛めたと思ってるの!?　また、皆にそれを味わわせるの……!?」

「……!!」

鈴仙の言葉が横島に突き刺さる。彼女は知らず涙を流す。それは間違いなく横島を思っての涙だ。

「貴方を想っている子はたくさんいるの……!!　てゐも、妹紅も、フランも小悪魔も美鈴も!!　あの子達に、何度もあんな思いをさせないでよぉ……!!」

鈴仙は先程からとは打って変わって力なく横島の胸元に顔を埋めた。横島はそれにどうすることも出来ない。鈴仙の言葉の正しさを痛感しているからだ。横島の胸を締め付ける鈴仙の姿に、横島はぽつりぽつりと自らの心情を吐露していった。

「……そう、だな。イナバちゃんの言う通りだよな。俺は自分のことばっかで、皆の事を考えてなかった」

横島が苦しみを抑える様に目を瞑る。浮かび上がるのはこれまでの幻想郷での日々。

「お嬢様は、幻想郷に墜落して何の身寄りもない俺を助けてくれた。永琳先生はいつも俺の怪我の治療をしてくれる。紫さんは滅多に姿を現さないはずなのに、いつも俺の為に動いてくれてる……」

それは、ある種の告解なのかもしれない。コンプレックスの塊である横島は、いつも彼女達に何らかの罪悪感を覚えていたのではないか。

「パチュリー様も、咲夜さんもそうだ。輝夜様もイナバちゃんも。妖精メイドの皆も。俺のことを思ってくれてる。頼ってくれて、心配してくれて、褒めてくれて、叱ってくれて……」

それはお門違いの何物でもないだろう。彼が抱いていた感情、その中身。だからこそ、これは。

「妹紅やフランちゃん達。小悪魔ちゃんも、てゐちゃんも……美鈴も。こんな俺を、好いてくれた。……だから、俺は証明したかったんだ」

その言葉に鈴仙は顔を上げる。横島は未だ眼を閉じていた。彼に渦巻く感情、かつての想いを反芻するかのように。

「俺は、皆の見る目が確かだったって事を、証明したかったんだ。こんな俺を傍に置いてくれる、こんな俺を思ってくれる……!!　こんな俺を、好きだって言ってくれる、皆の……!!」

鈴仙は横島が抱いていた皆への思いを初めて知った。その思いは確かに本物だろう。横島は彼女達の事を本当に大切に思っている。それは自分勝手なまでに、過剰なまでに、傲慢なまでに――――思いに、応えようとしている。しかし、それでは余りにも……。

「……怖くないの？」

「え……？」

鈴仙がぽつりと呟いた。

「怖くないの？　相手は貴方を殺そうとした……ううん、本当なら殺した相手なのよ？　横島さんは……どうして、そんな相手に立ち向かえるの……？」

鈴仙は思う。それでは、余りに自分を蔑ろにしすぎではないのか、と。

「……いや、怖いよ。正直今にもチビりそうだし、泣きたいぐらいだし……」

「だったら、どうして……!?」

鈴仙はそこが理解出来なかった。怖いのなら、恐ろしいのなら、何故彼は逃げないのだろうか。あの時に聞いた話でもそうだ。彼は自分を怖がりだと言う。臆病だと言う。それでも彼は逃げない。それは、一体何故なのか。……臆病なだけの自分との、違いは。

「……正直に言えばさ、きっと軽蔑されるというか、そんな風になっちゃうんだろうけど……俺はさ、馬鹿だから。こういう時にカッコいい事を言えたらいいんだろうけど……」

横島が情けない笑みを浮かべる。それは、いつも通りの表情だ。それを見た鈴仙は、奇妙な感覚に囚われる。

「――――女の子の前ではさ、カッコいいところを見せたいじゃんか」

「――――は？」

照れた様子の横島の言葉に、鈴仙はただ声にならない声を出した。
「いつだって俺はそうだったんだよ。俺は元の世界でとんでもない事件に巻き込まれても、結局は女の子にカッコいいとこを見せたいとか、美女美少女のためーとか、そんな理由で頑張ってたんだよ」
鈴仙はこの横島の告白で自分の思い違いに気付いた。横島は自分を蔑ろにして誰かの……紫やレミリア達の思いに応えようとしていたのではない。むしろ、自らの煩悩に忠実に突き進むことが、結果的に皆の思いに応えることになっていたのではないか、と。
それに気付いた鈴仙の顔には、何故か笑みが浮かんでいた。
「あはは、あはははははははは」
「ん？　はは、はははははは」
鈴仙はどこか引きつったかのような笑い声を上げ、横島もそれに釣られて笑い声を上げる。しかし、鈴仙の右手はゆっくりと振りかぶられていった。
「あはははは――ふんっ!!」
「はははははは――はびゃぁっ!?」
鈴仙の鋭いビンタが横島を襲った。
「……ごめんなさい、つい思わず……」
「いや、やっぱり俺が悪いし……イナバちゃんは悪くないよ。今のは仕方ない」

鈴仙のビンタに一時場が騒然となったが、横島は気にせずに流したことでその空気は悪い方に流れることはなかった。鈴仙の気持ちにも共感できる所があったのだろう。

少々空気は壊れてしまったが、それでも鈴仙は横島に問う。

「……泣きそうなくらい怖いんでしょ？　確かに貴方は襲われたけれど、他の誰かに任せる事だって出来る。横島さんがやらなくちゃいけないことじゃないはずなのよ？」

「……」

鈴仙の言葉に横島は真剣な表情になる。暗く、どこか自嘲めいた物を覗かせるその表情は、ある種歪んでいるとも言える。

「……これは、俺の我が儘なんだ。あいつは、俺の妹紅を食おうとしたんだ。怖いからって、ブルってるからって、他の誰かにやらせたくねーんだ……!!」

「横島さん……」

横島の言葉は確かに我が儘だ。他にもっと確実な方法がある以上、それは間違っているとも言えるだろう。だが、それでもそれは男の言葉である。納得してはいけない。してはいけないのだが……鈴仙は少しだけ横島を信じてみる事にした。

「……負けちゃダメよ？」

「イナバちゃん……？」

横島は鈴仙に聞き返す。

「……何を言っても引き下がらないだろうし。それなら私も行くわ。ここで待ってずっと心配してるのも嫌だし」
「……イナバちゃん」
「ただし、負けないでよ。私だって、横島さんが血だらけで運び込まれた時は本当にびっくりしたんだから。それに……カッコいいところ、見せてくれるんでしょ？」
　上目遣いの最後の言葉に、横島は顔を赤くしつつも頷いた。
　こうして、横島は鈴仙の了解を取る事が出来た。それを見ていた他の皆は少々複雑ながらも、ほっとした表情を見せる。横島の『俺の妹紅』という発言にまで気が回った者はほとんどいなかったが、それに気付いていたレミリアは苦い笑みを浮かべている。
「……横島なら妹紅だけでなく、何だかんだでフランや美鈴、小悪魔も受け入れてくれるかな。せっかくならフランが横島の1番最初の恋人に――――？」
　レミリアは横島とフランが交際することを認めたようだ。先程の横島の言葉に何かしら感じ入るものがあったのかも知れない。そうしてレミリアが夢想に思考を割いたところで、違和感に襲われる。
「……」
　レミリアは周りを見回す。やはりそうだ。違和感などではなかったのだ……!!
「ちょっと待ちなさい……!!」

「お嬢様……？」
「――――フランはどこにいるの……!?」

レミリアの言葉に弾かれたように皆が辺りを見るが、どこにもフランの姿が見られない。レミリアの脳裏に最悪の想像が過ぎる。
「まさか、あの子――――!?」

雨が降りしきる迷いの竹林の奥の奥。開けた場所に『男』は腰を下ろしていた。片翼と片腕を失くした『男』は、苦しげに息を吐いている。
『男』は自らの失敗を嘆いていた。ようやく捜し求めていた文珠を見つけたというのに、食欲に負けて文珠の存在を忘れ、挙句の果てには炎に焼かれてあの場を退散。おまけに片腕も失ってしまう。再生させるのは容易いが、それには獣の命を食らうだけでは駄目だ。

――人間。あるいは妖怪や魔族。神族でもいい。とにかく人型のモノを食らう必要がある。先程の男は内臓しか食わなかった。やはり、ベースとなる腕を食らわなければ。

「――――見つけた」

不気味な空気が充満する雨の竹林に、場違いなまでに可憐な声が響く。『男』が眼を向ければ、そこにいたのは魔族と思しき少女。影が差し込んでいるせいで、姿のほとんどが見えない。

「最初はどこにいるのか分からなかったけど、匂いを辿れば案外何とかなるものなんだね。雨の中でも居場所が分かったもの」

少女はゆっくりと歩みを進める。その顔はまだ見えない。だが、声の調子からして彼女は笑っているようだ。

「あなたから、プンプンと匂うんだ。――――ただお兄様の、血の匂いが」

ようやくその全貌が見えるところまで来た。雨に打たれている体からは、煙が噴き出しているようだ。紅い輝きを放つ瞳がゆらゆらと燃えている。

突如、少女の体から凄まじいまでの魔力が迸る。それは彼女を打つ雨粒を蒸発させ、その肌に触れることも出来なくなる。

「あなたには能力なんて使ってあげない。私の手で嬲って、嬲って、嬲って嬲って嬲って

嬲って嬲って嬲って嬲って嬲って――――殺してあげる!!!」

少女――フランは狂気に満ち満ちた笑みを浮かべ、眼前の敵へと飛び出した。

『男』はフランの強大な魔力に曝されても小揺るぎもせず、ただ兇気に満ち満ちた笑みを浮かべるのだった。

曰く――――『餌』が来た、という笑みを。

第三十三話

『横島忠夫は証明したい』

～了～

第三十四話『剣と拳』

大粒の雨が竹林を濡らす。地面は所々に水溜りを作り、ぬかるんだ土は『男』の体重に合わせて沈み、そこに存在していた証を強烈に残す。

『男』は雨に打たれながら己の過去を思い返していた。いや、彼は思い返していると言えるのだろうか。思考には多くのノイズが走り、あまり意味のある内容を脳内で展開出来ていない。それは、いっそ哀れみすら誘うような支離滅裂さだった。

それは簡単な仕事のはずだった。初めて地上に降りてきたとき、『男』は「何と穢れに満ちた場所なのか」という感想を抱いた。

空気は澱み、木々は枯れ落ち、動物は老いさらばえ、やがて死ぬ。それも全て地上に住まう人間や妖怪といった者共のせいだ。当時の上司――はて、私に上司などいたのだろうか？　――から聞いた話では、かつての地上もこれほどまでに穢れてはいなかったらしい。つくづく地上とは下賤な者共が多いのだろう。罪人には相応しい場所と言える――罪人とは何だ？　私は一体何をしに地上へと降りたのだったか――。

呼吸をするのが辛い。まるで穢れが体を無理に作り変えていくようで。そんなこと、私には耐えられなかった――何故耐えられないのだったか――。醜く老いた人間――

彼らが彼女を保護して……彼ら、とは、彼女とは誰だ？　――を見るのが辛い。
地上にいることが辛く、一刻も早く帰ることばかりを考えていた――どこへ？　――。ピーピー。
おかしい。いや、おかしくない。やはり私の記憶はどんどんと失われているようだ。
――記憶？　――。そもそも俺は都で……違う。何だ？　わんわん。そうだ、俺はあそこから降りてきて――それはどこだ？　――私は何を考えている？　にゃー。
私の名前は何だったか。私の性別は――俺は男だろ？　――。趣味嗜好は。カァー。何を職業としていたのだったか。配偶者はいたのだったか――綺麗な嫁さん欲しいなぁ――。嫁……妻？　番（つがい）？　私はそれを求めていたのか？　――あの人が欲しい――。がるるる。
私は何を求めていたのだったか。何かを手に入れたかった。それは何だ？
何かを失った。それを取り戻すために何かが欲しかったのだ。それは何だ？
それさえ手に入れられれば、こんな穢れに満ちた体からおさらば出来る……私はそれを求めていたのか？
あれは何と言ったか。くぅーん。そうだ、先程食べた人間の男。それが持っていた物だ――文珠？　――。
そうだ、文珠だ。文珠が欲しいのだ。文珠があれば、何もかもが元通りだ――何がだ

ろうか――。

　文珠があれば取り戻せるはずなのだ。だから欲しがった。だから穢れに満ちていたとはいえ、この体を奪って――この体は元々私の物ではなかったのか？　――。そうだ、私は文珠が欲しかったのだ。

　いやまて。なにかがおかしい。モーモー。ぶーぶー。私は文珠が欲しかったのか？　文珠だけが欲しかったのか？　シャー。ピヨピヨ。コンコンコン。

　わんわんにゃ―にゃーぶーぶーカァー。そうだ、違う。ぐるるるコンコン。もっとほしかったものがいたのだ。くぅーん？

　あれはなんだったか。

　まるくて、おおきくて、あたたかい――。

　――あれは、月か。

　月の光。背負って。影を作って。私を。私に？　……私達に？

　美しかった。そうだ、美しかったのだ。誰よりも、何よりも。だから、彼女が欲しかった――それは誰だ？　――

「……」

『男』は溜め息を吐いて頭を振り、それ以上の回顧を止める。思考が纏まらない。今日と言う日は、彼にとって色々と疲労を呼び込んだ。先程人間を一人頂いたとはいえ、その後の戦闘と回復にエネルギーを使いすぎている。

今現在、『男』は両腕と片翼、片目を喪失している。翼も目も再生は容易だ。それなりの数を貪って来たから。だが、腕はそうはいかない。人間の持つ腕の器用さは動物とは比べ物にならないものがある。

「まぁ、それもお前を食えば解決する話なのだが……」

『男』が見下ろした視線の先、ぬかるんだ地面に力なく倒れ伏し、雨に打たれている少女がいた。悪魔の妹、フランである。

フランは力なく地面に横たわっており、全身には軽くない傷を負っていた。普段ならば吸血鬼の再生能力で治る程度のものなのだが、今のフランは絶えず雨に打たれている。雨……流水は吸血鬼の天敵だ。雨はフランから力を奪い、その命までも奪おうとしている。

「……ぅ」

もはやまともに声を出すことも出来ないのか、フランが上げた呻き声は酷く小さなものだった。瞳は何も映さず、虚ろとなっている。

――――負けた。フランは自分を見下ろしている『男』を殺し、大好きなお兄様の仇

を討つ事は出来なかったのだ。

確かに片目を抉った。確かに残った腕を千切り、砕いた。だが、それでも『男』を斃す事は出来なかった。雨によりフランが弱体化していたのも要因の一つだが、決定打となったのは植物の根のような外見の翼だった。翼が齎す金縛り。フランはそれを突破することが出来なかったのである。

「……っ」

今にも沸騰してしまいそうな怒りと悔しさが思考を染める。ただただ己を打ち負かした『男』が憎らしい。脳裏を過ぎるのは様々なこと。

何故こいつは体を色々と変化させることが出来るのか。こいつは妖怪なのか。何故妹紅とお兄様があんなことにならなければいけなかったのか。そもそも、何故こいつの顔はお兄様に似ているのか。

色々な考えが浮かんでは消えていくが、そのどれもに答えは出ない。そして、もうその思考も巡ることは無くなるのだろう。『男』がゆっくりと近付いてきたのだ。

ぬかるんだ地面のせいで粘着質な足音を響かせながら、『男』がフランのすぐ横に迫る。フランの脳裏に横島の笑顔が過ぎる。出逢った時の優しい笑顔。少し経った後の困った様な笑顔。それから後の、暖かい笑顔。それが、自分の見る最期の光景だとしたら。

――――それは、とても幸せなことだ。フランは心からそう断じた。

例え幻でも、例え己が生み出した妄想でも、愛する者の笑顔を見ながらの死は、フランに『幸福』という感情を抱かせていた。横島と出会い、凍りついた心を溶かされたフランもまだまだネガティブな所は直っていない。彼女の心は未だ闇が深い。己の死を悼み、泣いて見送られるよりも、フランは笑って見送って欲しいのだ。

それは彼女が抱える歪みと言える。死に際には泣き顔よりも笑顔が見たい。そう言う者も確かにいるだろう。だが、フランは自分の死に心から笑っていて欲しいのだ。それが、フランの抱える狂気の一つ。

「……ぁ」

フランの服が引き裂かれる。『男』は自らの牙でフランの服を噛み千切ったのだ。破れた衣服から覗く、幼い子供特有の少々膨らんだ腹。『男』は横島と同様にフランの内臓を食おうとしている。フランは服を引き裂かれた衝撃で正気を取り戻し、そう認識した。

どうせなら、最期まで幸せな夢に浸っていたかった。だが、目が覚めてしまったのでは仕方がない。愛する男と同じ死に方が出来る。そう考えれば、これはこれで幸せな死に方の様な気がしてくる。……そう考えてしまう自分は、やはり狂っているのだろう。

フランはぼんやりとした思考の中、ぽつりとこぼした。

『男』の熱い息が腹にかかる。その不快な感覚にフランの背筋に怖気が走る。今頃『男』は大口を開けているのだろう。これから訪れるであろう未来を思うと、自然と涙が零れてくる。胸に去来するのは後悔だ。

どうして正気に戻ってしまったのだろうか。どうして最期に見る景色が、ぬかるんだ地面とそれに降り注ぐ雨なのだろうか。どうして、大好きな人達の笑顔ではないのだろうか。自分には、そんなちっぽけな夢を見ることさえ許されないのだろうか。ならば、通じなくてもいい。叶わなくてもいい。ただ、言葉にすることぐらいは許されるだろう。

――――ああ、どうか、最期に一目だけでも。

「――――あいたいよぉ……お兄様ぁ……」

腹に、ぷつりと何かが刺さる感覚があった。

「天丼上等ォォォオオオオオオオオオ――――――――――――――!!!!!!」

「ゴッッッ!?　ツガ、バァァァァァァァァッッッ!!!?」

瞬間、『男』が引き絞られた弓の様な勢いで吹き飛んだ。何かが猛烈なスピードでぶつかったようだ。フランは目をパチパチと瞬かせ、呆けた様に口を大きく開けてしまった。驚いたのは『男』が吹っ飛んだ事だけではない。直前に聞こえた声。自分を庇う様に立つ、大きな背中。

「ふう……間に合って良かった。つーか、俺が一番速かったのか」

安心したような男性の声。それは、先程まで戦っていた『男』と似ているようで、全く違っていた。そうだ。目の前の男とあの『男』はまるで似ていない。外見だけではない、明確な違いをフランは心に刻み込んだ。

何故生きているのか。生きていたとしても、どうやってこの短時間に傷を癒したのか。疑問点を挙げればいくらでも出てくるが、今はそんな瑣末な事よりも、ただただ目の前の現実を受け入れよう。

自分にこの様な気持ちを抱かせてくれた存在。自分にとって、どこまでも特別な存

在。

　それが何かを認識出来た瞬間、またもフランの双眸から涙が零れ落ちる。見たかった物が見れた。逢いたかった人と逢えた。フランは、心から湧き上がる愛おしさのままに、万感の想いを込めてその人の名前を呼んだ。

「ただ、お兄様……」

「おう。――――助けに来たぜ、フランちゃん」

　フランに振り向いて、優しく暖かい笑顔を浮かべた横島忠夫がそこにいた。

第三十四話

『剣と拳』

「大丈夫か、フランちゃん」

「お兄様ぁ……！」

横島は『男』を警戒しつつフランを抱き起こし、永琳直伝のヒーリングを開始する。しかし、永琳からは「中々筋がいい」と言われてはいるが、所詮はまだまだ修行中の身。全身に大怪我を負っているのに加え、雨によって弱体化しているフランの傷を癒すのは横島にはまだ無理な事であった。

横島は思わず舌打ちしてしまいそうになるのを我慢すると、フランの小さな体を優しく、しかししっかりと抱きしめてやった。横島のヒーリングは体に密着している面積で強さが変わる。フランの涙でくしゃくしゃになった顔が、ヒーリングによって徐々に和らいでいった。

それを見た横島は顔から険を取ったのだが、『男』が立ち上がる気配を感じ、またも顔に険が入る。

「がぁ……!?　何故、何故お前が生きている……!?」

『男』は口から大量の血を流しながらも叫ぶ。『男』の脳内には疑問が溢れていた。何故この男がまだ生きているのか。確かに内臓を食らったはずだ。それならば、何故この男がここにいる!?

『男』の疑問には答えず、横島は『男』を睨みつけながらフランの治療を最優先にする。現在フランに意識はない。怪我による消耗と横島に逢えた喜び、ヒーリングが齎す多幸感に緊張の糸が切れたようだ。呼吸は安定している。出来ることならこのまま治療に

専念していたいが、そうもいかないだろう。
「……そうか、文珠か？　そうだ。お前は文珠を持っていた。持っていたんだ。ならば、これくらいはおかしくない」
『男』はそう結論付けた。確かに文珠ならばそれも可能かもしれない。だが、それは不可能な事である。
「残念だったな。俺が生きてるのは文珠のお陰ってわけじゃねーんだよ」
「……何？」
横島の言葉に『男』は動きを止める。予想外の言葉だった為に、固まってしまったのだ。『男』は考える。文珠ではないのなら、一体何故目の前の男が生きているのか。
微動だにせず思考に耽る『男』を横島は鼻で笑う。
「はっ！　テメー、自分で言った事も覚えてねーんだな」
その言葉に反応し、『男』は横島へと意識を向ける。一体何の事だ。『男』の視線はそう語っている。
「本当に覚えてねーんだな。……俺の腹をぶち抜いた後の事だよ」
「……お前の、腹を……」
『男』の脳裏にその時の光景が甦る。あの時の自分は何と口走ったのか……。やがて『男』はそれに思い至り、驚愕を顔に貼り付けた。

「まさか……」
「そう。そのまさかだ」
『男』の動きが完全に停止した。横島としては願ったり叶ったりの展開だ。『男』が何か奇行に走るたびにフランへの治療に使える時間が増える。尤も、横島のヒーリングでは焼け石に水が良いところだが。
「ふ……ふふ……」
『男』の口から空気が漏れる。やがてそれは勢いを増してゆき、ついには爆音を響かせる。それは哄笑だ。
喜色満面。『男』の表情を言い表すならばこれが一番適しているだろう。事実『男』は狂喜している。それもそうだ。何せ相手は自分が欲しい物を両方持っているのだから。
「そうか、貴様――蓬莱人だったか!!」
「……正確には、あの後蓬莱人になった、だけどな」
『男』の喜び様に横島はうんざりとしながら訂正を加える。自分にそっくりの容姿の笑い顔がここまで醜く歪んでいると、何故だか気分が大いに沈んでゆく。傍から見れば自分もあのような顔で笑っていたのだろうか。
「それはどうでもいいことだ……!! 今貴様を食らえば、私は蓬莱人の体を取り戻すことが出来る!!」

『男』の言葉に横島は「やはり」とばかりに頷いた。

以前妹紅や永琳達が蓬莱人だと知った後、横島は暇な時間に永琳に蓬莱人の概要を聞いていた。曰く、変化を拒絶する体。不老不死。蓬莱の薬の効果が肝に溜まり、それを食らえば蓬莱人となる。様々な事を教えてもらった。それは特に理由のない、強いて言えば単なる好奇心での質問だ。横島がそれを覚えていたことが、今現在起こっている異変の正体を突き止めることに繋がったのである。

『男』があの時恐らく――さっきもだろうが――無意識で口走った言葉はこうだ。

――これで取り戻せる！　あの体を！　文珠があれば蓬莱人の体を取り戻せる!!

横島は薄れゆく意識の中ではっきりとそう聞いたのだ。ピースが揃えば後は簡単だ。『男』はかつて蓬莱人であったが、何らかの事情により蓬莱人でなくなる。『男』はかつての体を取り戻すべく文珠を探しながら生物……動物や人間、妖怪の腸（はらわた）を食らってきたのだろう。多分に推測は混ざっているが、そう間違った推理でもないはずだ。

永琳から聞いた話では、彼女は今までに五回しか蓬莱の薬を作っていないという。一つは月の嫦娥という女性に。一つは輝夜に、一つは永琳が自ら服用。一つは当時の帝に渡し、紆余曲折あって妹紅が服用。最後の一つは輝夜を育ててくれた老夫婦に口止め料として渡したそうだ。

しかし、老夫婦は蓬莱の薬を飲まず、何者かに殺害された。今横島の前に存在する

『男』は、かつて蓬莱人だったという。

――――つまり、こいつが犯人だった……ってこったろーな。

横島は最後にそう締めくくり、巡らせていた思考を止めた。彼がそれに気付いた所で、今のこの状況が変わるわけでもない。それに、『男』が笑うのを止め、横島に対し前傾姿勢を取っていた。いつの間にか、『男』の無くなった腕が生えている。しかしそれはどこから見ても人間の物ではない。まるで猛禽の様な――あるいは四足獣の様な――非常に強靭で、しなやかそうな脚(うで)。

「カッツッ!!!」

『男』が爆発的な速度で横島へと迫る。その速度、威力は尋常ならざるものであり、受ければ命は容易く狩り取られるだろう。だが、横島の意識は『男』に向いていなかった。

横島はフランの傷を見る。軽くない傷が全身に及んでいる。それは勿論顔にもだ。フランの頬に走る深い切り傷。それは人間ならば一生物の傷だ。いびつに歪んだ線が幾筋も走っている。下手をすれば縫合などが上手くいかず、あるいはその部分が化膿して最終的には死に至るかも知れないほどに酷い傷だ。

横島の脳裏にあの時の妹紅の姿が過ぎる。手足が拉(ひしゃ)げ、口から血を流していた姿。フランを見る。恐らくは自分の仇を取ろうとしてくれたのだろう。こんな雨の日に、彼女は単身『男』に戦いを挑んだ。

横島は自らの感情に怒りと吐き気を覚える。フランの事を、愛おしく思ってしまったからだ。

瀕死の重傷を負った自分の為に、彼女は自らの身を考慮せず戦った。その結果がこの姿。自分の為に、こうまでして戦ってくれた。そんなフランを愛おしく感じた。そう、感じてしまったのだ。

横島の胸中に様々な感情が渦を巻く。どうしてこんなになるまで戦ったのか。自分にここまでしてもらえるほどの価値があるのか。それほどまでに自分の事を想ってくれていたのか。自分はその想いに報いる事が出来るのか。

――報いてみせる。

自分に対する嫌悪、怒り。フランに対する悲しみ、愛(かな)しみ。そしてそれらを受け止め、束ね、なお超える程の決意。それが、横島を次なる位階(ステージ)へと昇らせた。

閃光が走る。それは横島の右腕から。手指から肘までを覆う翡翠の霊波。指と爪が一体化し、鋭い刃物の様な印象を抱かせる巨大な指に。前腕は所々が物質化した亀裂の入った霊波の装甲に覆われており、亀裂からは横島の霊波が揺らめく炎の様に噴き出ている。その装甲のせいか、横島の右手は一回りほど肥大化しているように見える。

それは横島が手に入れた新たな『栄光の手(ハンズオブグローリー)』――『栄光の手(ハンズオブグローリー)・プラス』

『男』が横島の問合いに入る。『男』も横島も、互いに横島の変化には気付いていない。

二人が攻撃を繰り出そうとした瞬間、それは現れた。
「華符ッ!!!」
ズンッ、という重音が響く。二人の間に一瞬で割り込んだ人影は、『男』の豪腕による一撃を容易くいなし、腹部に掌底を叩き込んだ。
「ゴッ!?　……グ、ガアァッ!!?」
腹部に走った強烈な衝撃に『男』は踏鞴(たたら)を踏んだ。次の瞬間、虹色の光を纏った気が『男』の体内で爆発。『男』を空へと吹き飛ばす。
「――『彩光蓮華掌』……!!」
突然の事態に横島は呆然としてしまう。今自分達を守るように『男』に立ち向かったのは、こちらの世界で出会った、武術の師匠の一人。その背中を見つつ、横島は驚きに声を震わせた。
「め、美鈴……!?」
「はい、私ですよ」
横島に名を呼ばれた美鈴はにこやか笑みを湛え、振り向く。横島が抱えたフランを見て、深く、重い怒気を発するが、それも一瞬のこと。美鈴は吹き飛んだ『男』を目で追い、言葉を繋げる。
「……そして、当然私だけではありません」

『男』は自分が何故吹き飛んでいるのかが理解出来なかった。ただ掌底を腹に食らっただけのはず。だというのに、この内側から体を蹂躙されたような感覚は何なのだ!?
今の一撃は不味い。あのような攻撃を何度も食らえば、この体の核を壊されかねない……!!
「オオォッ!!」
『男』は空中で何とか体勢を立て直し、失った片翼を再生させ、滞空する。キッと地上を睨みつける。警戒すべきは先程割り込んできた女。まずはそいつを殺――――『男』の眼前に、否、周囲を囲む様に、突然大量のナイフが出現した。そして、いつの間にか背後に存在していた何者かの気配。
「――――『咲夜(わたし)の世界』――――」
『男』の耳元で、囁くように告げられた宣言。それが切っ掛けかは不明だが、ナイフは自分へと猛烈なスピードで迫ってくる。
「お――――オオオアァッ!!?」
咄嗟に腕と翼を薙いだことによって、ほとんどのナイフは弾くことが出来た。だが、やはり全てのナイフを迎撃することは不可能であり、数本のナイフが深々と突き刺さる。『男』は次から次へと降りかかる不可思議な現象に思考を千々に乱され、浮くことすらままならなくなった。

「材料は貴方に刺さった鉄製のナイフと、周囲の土……」

何が起こったのかと考える隙も無い。地上に墜落した『男』の足元に現れるのは魔法陣。それも、何故か見覚えがある要素を含んでいる。

――陰陽道？　いや、それとはまた別の……大陸の――何のことだ？

乱れた思考が動きを阻害し、本能を抑制する。『男』は魔法陣に反応し、姿を変えゆく鉄（ナイフ）と土を前に、何もすることが出来なかった。

「土金符『エメラルドメガリス』!!」

それを唱えたのは魔法使いだ。彼女が創り出した魔法陣の中で鉄と土は錬成され、新たな物質へと姿を変える。それは新たな法則。五行の法則――五行相生・土生金――を元に、彼女が創り出した和洋折衷（ハイブリッド）の魔法。

「ぎっ、ぎぃぃぁあああぁあぁぁッツツ!?!!」

それは翡翠色の柱。『男』に刺さっていたナイフがそれに変化し、『男』の体を抉り、突き破り、引き千切り、蹂躙する。『男』はまるで杭に貫かれ、その死体を晒されているようだ。

『男』の体を蹂躙し尽くした柱が、魔法陣と共に消滅する。片腕と両足がぼとぼとと落ちる。そして体が地面へと沈もうとする刹那、新たな影が『男』の首を片手で掴み、万力の様に締め付けながら軽々と持ち上げる。

「妹紅……横島……そしてフラン。――随分と私の身内が世話になったようだな……？」

それは吸血鬼。それはツェペシュの幼き末裔。紅魔館の主――。

横島は眼前の人物の名を呼ぶ。

「咲夜さん……」

咲夜は両手に四本ずつナイフを持ち、『男』を睨んでいる。

「パチュリー様……」

パチュリーは魔導書を片手に『男』を睨んでいる。

「お嬢様……!!」

レミリアは『男』の首を締め上げ、声を……いや、音すらも出させない。雨に濡れて弱体化しているはずだが、まるでそれを感じさせないほどに圧倒的な魔力を全身に漲らせている。

『男』の首がメキメキと鈍い音を発しながら絞られていく。呻く事も出来ない『男』は残った腕でレミリアの手を外そうとするのだが、その時、『男』の口端から血が流れ、レミリアの手に零れ落ちた。レミリアはそれをちらりと見やり、極低温の声で宣言した。

「紅魔『スカーレットデビル』!!」

レミリアの体から極大の光が爆ぜる。それは巨大な紅い十字架となり、空を衝き抜

け、完全に雨雲を消し去った。それにより太陽の光がレミリアを差し、その体を焦がし、気化させていく。だがレミリアはそれを全く意に介さない。優秀なメイドが日傘を差してくれるからだ。

レミリアは最早上半身だけになってしまった『男』を地面に叩きつけ、殺意を漲らせた瞳で吐き捨てる様に言う。

「貴様の汚らしい血で私の体を汚すなよ」

レミリアの圧倒的な力に、横島は何も言えない。自分よりずっと強いだろうとは思っていたが、まさかここまでとは思っていなかった。間違いなく、自分が元居た世界の上級神魔族に匹敵する力である。

横島が呆然とレミリアの背中を眺めていると、不意に自分の視界に影が差した。いつの間に来ていたのか、傍らに日傘を差した鈴仙と小悪魔がいた。

「思ってたよりめちゃくちゃなことになったわね……」

「妹様は大丈夫ですか、横島さん……？」

「イナバちゃん、小悪魔ちゃん」

鈴仙は日傘を数本地面に固定し、小悪魔と共に横島からフランを抱き上げ、地面に敷いたレジャーシートの上に寝かせる。そうして二人がかりで治療を開始。横島はその姿にほっと息を吐いた。その顔はまだまだ険しさを残しているが、それでも柔和な印象

を受ける笑みが浮かんでいる。
　鈴仙はフランの治療をしつつ横島の顔を見やり、聞くべきかどうか少々悩んだが、気になっていた事を口に出した。
「……他の人にやらせたくないって言ってたけど、良かったの？　横島さん、どうやったかは知らないけどレミリアでも追いつけない様なとんでもないスピードでここまで来たのに。……皆、思いっきり手出してるけど」
　それは小悪魔も気になっていた。ちらりと横島の顔を見れば、彼は何やら神妙な面持ちとなっている。
「……いや、いいんだよ。何つーか、驚きで頭が冷えたっつーか」
　横島は頭をぽりぽりと掻く。今度は何か恥じ入った様な表情へと変わっている。
「あのままやりあってたら同じ轍を踏んでたかも知んねーし、何よりフランちゃんがいるってのにな……。何か、らしくなく攻撃的になってたわ」
　横島はフランを見る。鈴仙達によって治療が施され始めたといっても、その姿はまだまだ痛々しい。ぎしり、と横島の奥歯が鳴る。鈴仙は横島が冷静な思考を取っていることに少し驚いた。
「……そうだよな。俺一人じゃなくて、皆を頼ればよかったんだよ」
　そうして横島は穏やかな表情でレミリア達を見る。その姿は横島の目にとても頼も

しく映る。

「……そうだ。俺一人じゃ無理でも、俺より強い皆に囲んでもらってフクロにして、ズタズタのボコボコにしちまえばよかったんだよな。これが俺達の……仲間の力。結束の力か……!!」

横島はレミリア達を眩しそうに、尊い物を拝むかのように目を細めて見ている。それはとってもイイ表情なのだが、言っている内容が微妙すぎた。元軍人である鈴仙は納得する部分ではあるのだが、もう少し言い方に気を付けてほしいと漏らす。何だかとっても釈然としない。

後日、二人は少年漫画のバトルシーンを読むたびに何だか微妙な気分に陥ってしまうのだが、それはまだ誰も知らないことである……。

「それからもう一つ」

「え、何？」

横島は鈴仙の問い掛けに横島は首を傾げる。

「その右手、どうしたの……？」

「右手……？」

鈴仙の言葉に横島は訝しみつつも右手を眼前に掲げる。そこには翡翠色の霊力の篭手で包まれ、碧緑の霊波を揺らめかせる、一回り大きくなった右手があった。

「何じゃこりゃーーーーーーーーー!!?」
「えええーーーーーーーー!!?」
「気付いてなかったの!!?」
　横島のボケた言動に鈴仙と小悪魔は『ガビーン』とばかりに驚く。まさか今の今まで気付いていないとは思わなかった。
「な、何だろうこれっ!?　変な病気!?　違うよねっ!!?」
「す、少なくとも病気ではないと思いますけどー!?」
「ええい、あんたは本当にいい加減にしなさいよもー!!」
　他の皆がシリアスに決めている中、頭が冷えて心に余裕が出来た横島は、息抜きとばかりに大真面目にボケをかましてしまうのだった。

「ぁ……、ッ……!?」
　『男』は自らに刻まれた、ありえない程の傷に呻く。このままでは不味い!!　逃げるためにも、まずは全員の動きを止めなければならない!!
　『男』は残る自我を振り絞り、両翼を再生。同時に全ての関節から邪視を発動、金縛り

を掛ける。だが――。

「……え」

瞬間、『男』を囲んだのは無数の眼差し。暗く、光の無い空間に幾多の視線の光が彼を貫く。それは、奇しくも『男』が行おうとしていたことに似ていた。

「幻巣『飛光虫ネスト』――!!」

その言葉は厳かな響きを湛え、『男』の聴覚を刺激した。空間に満ちる全ての眼から、光の線が『男』に殺到する。対する『男』は何も出来ない。ただ、無数の線に体を焼かれるのみ。

横島達の目の前で『男』が黒い穴へと飲み込まれた。それは紫の能力。恐らくあのスキマの中で、『男』は何らかの攻撃を受けているのだろう。

その様子を呆然と眺める横島の背後に、複数の気配が生じる。振り返ってみれば、そこにはスキマから出る紫、永琳、輝夜、てゐの姿があった。

「遅れてしまってごめんなさいね」

言葉は軽く、しかし真剣な表情で謝罪する紫。他の皆もそれぞれに謝意を表すが、彼女らはすぐ別の物に気を取られた。どちゃりとどこか湿った音を立て、『男』がスキマから地面に排出されたのだ。

「うそ……」

「執事さん、そっくり……!?」

輝夜とてゐの驚きの声が聞こえる。紫も声に出してはいないが、眼を大きく見開いていることからその驚愕の程は知れる。だが、横島が最も気になったのは永琳だ。

彼女の顔から、一切の表情が消えている。まるで人形の様な、能面の様な様相を呈する彼女に、横島の霊感が何か得体の知れないモノを感知する。

それが何かは分からない。今は既にその感覚は消失し、自分以外は誰も気付いてはいなさそうだ。気のせいか。どこか遠い意識が導き出した答えに縋りたくなる。だが、彼の霊感はまたも何かを訴えかけてくる。それが、何かは分からない。分からないまま……横島は、永琳と輝夜に向き直った。

「永琳先生、輝夜様。少し、伝えないといけないことがあります」

横島の言葉に輝夜と、そして永琳が真っ直ぐに見つめ返す。横島の額に冷や汗が流れる。横島は一度深く深呼吸をし、先程自分が推察した事について話し始めた。

「――という訳っす。多分、そう間違ってはいないと思うんすけど……」

横島がそう話しを締め括る。そこで、横島はようやく体が無意識に震えているのを自覚した。何故震えているのか、その原因ははっきりとしている。目の前の存在が怖いのだ。

「……」

永琳、そして輝夜。二人の体から迸る何か。それが横島には恐ろしかった。しかも、それは横島しか感じ取れていないらしい。他の者は何ともなさそうなのに、自分だけが小刻みに震えている。横島は無性に泣き出したくなった。

「……そう、そうだったのね」

表情の無い永琳が呟く。その視線は『男』の元へ。そこで、永琳の片眉がぴくりと跳ねた。それに目敏く気付いた横島が永琳と同じく視線を『男』へと向ける。そこにあったのは予想を超えた光景だった。

「あ、あああああっ、あああああああああああああ〝あ〟あ〝あ〟あ〝!!!!!」

『男』の姿が変わっていく。腕が生え、足が生え。それだけならまだ理解出来る。だが、今度はそれで収まることはなかった。腕が変質し、足が変質し、胴が変質し、翼が変質し、そして頭部が変質した。

その姿はまるで大きな熊の様だった。だがその背には鳥の様な翼が生え、尾は蛇の様で、呻く様に鳴いている声は野犬の様である。よく見て見れば、その体のいたる所に様々な動物の要素が見える。

その『獣』は、およそ千二百年前に永琳と高島の前に現れた『獣』と同じ姿だった。

「何だ、ありゃ……!?」

横島の声に反応したのか、『獣』が咆哮を上げる。それは空気を震わせ、体に振動を伝

えてくるほどの大音量。その大声に、一番の隙を曝したのはパチュリーだった。
「っ!?」
パチュリーが気付いた時には既に『獣』は間合いの中。その太く強靭な腕を振りかぶっている。
「パチェ!?」
レミリアがパチュリーの元へと急ぐが、その腕はもう振り下ろされている。『獣』の一撃がパチュリーを押し潰す……そうなる前に、活歩で一瞬の間に割り込んだ美鈴が攻撃を逸らし、カウンターの肘を叩き込んでいた。
「ぐ、ううぅ……!?」
だが、堅い。そのカウンターは美鈴の全力を以って打ち込まれたものだ。彼女の全力は分厚い鉄の板すらも容易く貫通する。だというのに、その渾身の肘は『獣』を押し戻すことは出来たが、さしたるダメージを与える事は出来ていなかった。
『獣』は美鈴を睨む。邪魔をするならば、諸共にその命を散らそうと再び踏み込む。
「二人から離れろ、ケダモノがぁッ!!」
しかし、今度はレミリアの爪が『獣』の顔面に入り、体を弾き飛ばす。この攻撃は通ったのか、『獣』は数メートル押し戻され、その頬には深い切り傷が出来、血がダラダラと流れる。

レミリアは舌打ちをする。手が痺れているからだ。全力の一撃。通常ならば今の一撃で相手の頭部がどこかへ吹き飛んでいるのだが、これはつまり相手が尋常の存在ではないという何よりの証拠だろう。傷ももう塞がってしまった。

レミリアは再び舌打ちをする。今の攻撃で打撃よりも斬撃の方が効果があると分かったのに、自分達の中でそれを行えるのが自分の爪しかなかったからだ。

咲夜のナイフでは明らかに力不足。パチュリーの魔法に純粋な斬撃はない。何より先程の攻防で彼女の呼吸はかなり乱れている。それだけ致命的に追い詰められたのだろう。美鈴には感謝しかない。

どうするか。レミリアはそれを考えながら『獣』の周囲を超高速で動き回りながら攻撃を仕掛ける。やはり打撃はあまり効果が無く、魔力による弾幕も同様。爪による斬撃は有効。分かったことを咲夜に伝える。

咲夜はレミリアの意図を察し、時を止めて移動。横島達の所へと一瞬でたどり着く。

「咲夜さん！」

「話は後よ。あのケダモノについてお嬢様が調べてくれたから、何か対策を考えないといけないの」

咲夜は手短に『獣』に効きそうな攻撃手段を伝える。それを聞いた皆は一様に難しい顔をした。あの『獣』を斬る事が出来る者。それは魂魄妖夢を措いて他に居ない。なら

ば紫のスキマで妖夢を連れて来ればいいと意見が出たのだが、それを紫は難しいと言う。

「妖夢が今どこにいるのかが分からなければ、すぐに連れて来る事は出来ないわ。あの子だって四六時中同じ場所に居るわけじゃないもの。ある程度の目星はつくけれど、探し回っている時間は……」

紫が焦ったように早口で話す。そうしながらも視線は自ら生み出したいくつものスキマを覗いている。妖夢が居そうな場所をスキマで見ているのであろう。だが、彼女の様子から分かるようにそれらの場所に妖夢は居ない様だ。

ならばどうする。先程の様に多人数で強力な術で以って一斉攻撃をしかけるか、だが『獣』のスピードは図体に反比例して驚異的なものだ。そう簡単には当たらない。そして、攻撃が外れれば隙を曝すのは自分達だ。

いっその事紫が『獣』をスキマの中に閉じ込めてしまおうか、などという意見を出す。最悪の場合はそれも覚悟しなければならない。『獣』はそれだけの相手だ。あのレミリアですら徐々に追い詰められていく。

焦りだけが空間を満たす。そんな中、横島が声を上げた。

「俺がやります」

「この……!!」

レミリアは渾身の力で『獣』を殴りつける。爪は余りに酷使しすぎたせいか、ボロボロに砕けてしまった。爪の間からは血が流れ、殴る間に皮膚も破れていき、その拳を赤く染め上げている。レミリアと同じく美鈴も浸透勁を中心に攻撃を加えているが、内臓器官まで変質しているのか、効果は薄い。

グングニルを放とうにもそんな隙はない。美鈴が時間を稼ごうにも一人では相手を出来ない。どうすればいい……!! レミリア達が心中で毒づく。

二人が繰り出す打撃。それが三桁にも達しようとしたその時、突如背後から感じる恐ろしいまでに研ぎ澄まされた霊波。

二人はそれに何かを感じたのか、瞬時に『獣』から距離を取る。次の瞬間、右腕に物質化した霊波の篭手を纏った横島が『獣』へと突っ込んだ。

「なっ――!?」

「横島さん!?」

レミリア達は驚愕する。何故横島が来たのか。予想していなかったこととはいえ、何故横島の動きが見えなかったのか。横島を止めようにももう遅い。横島は既に『獣』の間合いの中であるし、自分達は既に『獣』の間合いから離れてしまったのだから。

「横島ぁっ!?」
「横島さぁんっ!?」
二人が声を張り上げる。逃げろと、死ぬなと。確かに今の横島は蓬莱人と化している。だが、それが何だというのか。大切な者が蹂躙される光景など、誰が好き好んで見たいものか。だと言うのに、目の前の現実は止まらない。自分達はこのまま横島がまたも殺される光景を見なければならないのか――。
――だが、目の前の光景は誰もが予想していなかった物へと姿を変えた。
横島が右腕を高く掲げる。手首から先の篭手の形状が変化。それは翡翠の輝きを放つ霊波の刀身へと切り替わる。
横島の意識は深く深く己の底へ。初めての弟子だと、彼女が少々はしゃぎながら自分に技を見せてくれたあの時を思い返す。
その時の彼女の動き、その全てを。魂魄妖夢の斬撃を、ここに再現する――――!!
「断命剣……!!」
右腕――霊波刀を大上段に構えた横島は、裂帛の気合と共にその名を宣言する!!
「――『瞑想斬』!!!」
瞬間、閃きが走る。横島の霊波刀は誰もが気付かぬ内に振り下ろされ、数瞬の余韻が静寂に残る。

「グ……ォ」

『獣』が呻く。踏鞴を踏み、数歩後ろへと下がる。そして――。

「グゥウォアアアアァァ!!?」

『獣』の胴が、正中線上に裂けた。噴き上がる血液に、ようやく皆が横島が『獣』の肉を割いたのだと理解した。だが、まだだ。

爆発呼吸と共に震脚。重々しい音が響き、地の力が一切のロス無く集約されてゆく。霊波刀は既に拳へと戻り、装甲の亀裂から溢れる霊波は全て拳ただ一点に集中。繰り出すはかつてその身に受けた美鈴の必殺の一撃。目指すは一点、裂けた胴から覗く心臓の代わりに核として存在しているのだろう優曇華の木!!

「撃符!!」

横島の拳が優曇華の木に突き刺さる。渾身の発勁。翡翠の霊波が爆発するかの様にその威力を遺憾なく発揮する。

「――『大鵬拳』ッ!!!」

その宣言と共に、衝撃が『獣』の体を突き抜ける。それは『獣』の体を吹き飛ばし、優曇華の木を完全に打ち砕いた。

『獣』はそのまま勢いのままに地を転がり、やがてうつ伏せの体勢で動きを止めた。『獣』はピクリとも動かない。

「……終わった、のか？」

横島の隣まで来たレミリアがぽつりと呟く。その姿は中々に痛々しく、衣服はぼろぼろになっている。横島はレミリアの問いには答えない。否、答えられない。彼の霊感はまだ警鐘を鳴らしていたからだ。

「……今度は何だ？」

最早死んだと思われた『獣』だが、またもその姿が変容していく。不愉快な、生理的嫌悪感を催す音を立て、『獣』だったモノは姿を変えた。

その姿は――――。

第三十四話

『剣と拳』

～了～

第三十五話『いつかまた、竹林の中で』

――何故、こんなことになってしまったのだろうか。

沈み行く太陽に照らされた『男』の頭の中は疑問で埋まっていた。不愉快な音を立てて変質していく我が身を感じながら、『男』は尽きることのない疑問に答えを求め続ける。

核となっていた優曇華の木が消滅し、体が人に有らざる形へと変わっていく。否、それは、元に戻っていくと言った方が良いのか。『男』はそのことに気付いてはいなかったが、それが『男』の本来の姿となっていたのだ。

「……何だ、ありゃぁ……」

掠れた様な、呆然とした声が横島から漏れる。その言葉は、変質を終えた『男』の姿への感想だ。その姿は今まで『男』が繰り出したどんな物とも違っていた。それほどまでに異様な物だ。

しかし、共通点が無いわけではない。無いわけではないのだが……それは、余りにも範囲が大きすぎるもの。即ち、辛うじて生物であろうということが分かるぐらいだ。

――おおおおぉ……ん。おおおおおぉ……ん。

それから音が響いている。それは呻き声の様な、どこか別の空で鳴り響いている遠雷の様な、くぐもった重音。それは聞く者に悲哀を抱かせる様な音。その場の皆は沈痛な面持ちとなる。そして原因は不明だが、烈火の如く胸に怒りが沸いてくる。

一言でその物体を言い表すならば、それは醜悪な肉塊だった。

もはや人の形はしておらず、歪ながらも丸みを帯びた肉の塊。筋肉なのか脂肪なのかは不明だが、時折蠕動し、見る者の嫌悪感を煽る。

ぴくり、ぴくりと動くたび、その身の色が変わっていく。薄い桃色から赤、白、青と。それは生物が持つであろうありとあらゆる肌色を有していた。

「……境界が無くなっている」

ぽつりと紫が呟いた。それにつられ、皆が一様に紫へと視線を向ける。

「恐らく、あの男は今まで様々な人間や動物、妖怪の命を取り込んできたはず。だからあの男は自分の腕を人の物から動物の物に変えたり、翼を生やすことが出来た」

『男』にとって、『命を奪う』とはそういうことだったのだろう。『男』は蓬莱人の体を取り戻すべく、獲物達の腸（はらわた）を食らってきた。今にも尽きようとする命を永らえる為に、その身を食らい尽くしてきた。

その中で、ついでとばかりに腕も一緒に食べたことがあった。脚も一緒に食べたこと

があった。翼も一緒に食べたことがあった。時には体ごと全て平らげたことさえもあった。

それからだ。自分の体を思う通りに変化させることが出来るようになったのは。それが自らの思惑通りだったとはいえ、自らの体がそうなってしまったのには言いようもない感情が募ってしまったが。

「……その取り込んできた命の境界線が消失してしまっている。あれは、言わば今まで食らってきた物の融合体よ。あの男の中の何かがそうならないように防いでいたのだろうけど、それがなくなって、隔たりが消えてしまったのよ。……あれが、本来の姿ということになるわね」

紫の言葉に皆は眉を顰めた。あの姿は自らの行いが巡り巡って帰って来たもの。因果応報のその結果。それは、『男』の醜い心の顕れなのである。

――どこだ。どこで間違ったのだ……!!

肉塊と成り果てた『男』は叫びを上げながら過去を思い返す。あの日――心臓を射抜かれたあの日から。『男』はただ一つの物だけを追い求めてきたというのに。

――ひと……つ……?

第三十五話
『いつかまた、竹林の中で』

肉塊にいくつもの亀裂が走る。それは口だ。大小様々な、様々な生物の口。肉塊の表面に口が現れ、その端からは血液と思しき液体が流れ落ちていく。その口が徐々に開き、その中の物を晒す。

口の中にあった物。それは眼球だった。口と同じく、様々な生物の眼球。それは光を完全に失っている。口の中にそれがあった故に、『男』の叫びはくぐもり、口端から血を流していたのだ。

話すことの出来ない口。光を映さぬ眼。

誰にも届かぬ叫び――未だ開放されぬ命達の悲鳴。口端から流れる血――蹂躙された命達の血涙。

肉塊から流れるそれらは、『男』に食われた者達が流す命そのものだったのだ。

「……ふん、胸糞が悪い。今すぐこの世から完全に消滅させてやろう」

全身に魔力を滾らせ、レミリアが一歩前に出る。手には極大の魔力を圧縮して作られた球体があり、それは真実肉塊を滅ぼせる威力を内包しているだろうことが見て取れる。

だが、レミリアが事を成す前に、レミリアの肩に手を置いてそれを遮る者が存在した。

「――……ッツッ!!?」

瞬間、レミリアをして背筋に怖気が走る。それはほんの一瞬のこと。だが、一瞬とはいえレミリアは恐怖に囚われたことになる。それをしたのは一人の少女。――八意永琳だ。

「ごめんなさいね、レミリア。でも、ここは私達に譲ってほしいのよ」

静かに語る声はどこまでも冷静だ。どこまでも冷たく、静かで、そして周囲を圧する何かがある。レミリアはそれに当てられたのだ。否、レミリアだけではない。その場にいるほとんどの者は永琳と、そして輝夜が発する形容し難い強烈なプレッシャーに全身を冷や汗で濡らしている。冷静さを失っていないのは、それこそレミリアと紫くらいのものだ。

「……分かった。ここは譲ろう」

レミリアは永琳に道を譲る様に一歩分移動する。その横を通り、永琳と輝夜が肉塊へゆっくりと歩み寄っていく。

――分からない。解らない。判らない。わからない。

『男』の中の命達もようやく死が訪れると悟ったからか、それとも境界が無くなったことで思考すらも出来なくなったのか、もはや『男』の思考に他の命の思念が混ざることはなかった。

『男』は数十年、あるいは数百年振りにクリアな意識の中で必死に思考を巡らせる。

自分はどこで、何を間違ったのか。それに対する答えは『わからない』。どれだけ考えても、どれだけ頭を回転させても。『男』には何がどこで間違っているのかがわからない。それどころか、自分が間違っているのかすらわからない。

――こんなはずではなかった。私は文珠を手に入れたかった。そうすれば蓬莱人の体を取り戻せると思った。そして、そうすればあの方を――、……？

『男』の動きが止まる。今、自分の脳裏を掠めたのは何だったのか。あの方……あの方とは何だ？　その疑問により、『男』の思考に空白が出来る。何か大切なことを忘れている様な気がする。

『男』が思考のループに入る。『男』には気付けなかった。既に永琳と輝夜による仕込みが終了していることに。

――……？

幾許かの時間を掛け、『男』はようやく気付いた。自らの周囲を、暗闇が覆っていることに。陽が沈んだ？　夜が来た？　それはまだのはずだ。沈み始めてはいたが、つい先程までまだ陽は空に存在していたはずだ。これほど早く陽が沈むなど、ありえないはずだ。

おかしいのはそれだけではない。音だ。周りから一切の音が消えてしまった。風の音も、揺れる草花の音も、竹林内の動物達の呼吸音すらも聞こえない。自らの呼吸も、鼓動も、静寂の音すら響かない、真に無音の世界。

突然無音無明の世界に叩き落された『男』は、混乱の只中にいた。

『男』は肉塊と化し、まともに動かない体で何とか周囲の様子を探る。そうやって数分の時間を掛けて自分の背後に視線をやれば、暗い闇の空間の中に、二つの亀裂を認めることが出来た。

『男』はその亀裂を見て、月を連想した。それは弧を描いていたが故に。だが、月は二つと存在しない。では、あれは何なのだろうか。

――ッ!!?

『男』が亀裂を呆と眺めていると、途端に体に激痛が走った。その痛みの出所、かつて腕があったであろう場所には、光り輝く矢が突き刺さっていた。刺さった矢の向きから

射られた方向を割り出し、そこへと視線を向ける。そこには、いつの間にか存在していた淡い天頂の光に照らされた、二人の少女がいた。

「……まさか、本当に見つかるとは思っていなかったのよ。あれから千年以上経ってるわけだし、ここは幻想郷だからね」

二人の内、長い黒髪の少女が辛うじて聞き取れる声で呟く。その少女の周囲には五つの輝く物体が浮かんでいた。それは彼女が持つ神宝。

――即ち、龍の頸の玉、仏の御石の鉢、火鼠の皮衣、燕の子安貝、そして蓬莱の玉の枝。

その五つの神宝の中でも、一際光り輝いているのが蓬莱の玉の枝だ。これは本来月の都にしか存在しない植物であり、地上に蔓延る穢れを栄養として成長し、美しい七色の実を付けた物。

穢れがほとんど存在しない月の都では、この『木』は穢れ探知機として育てられており、穢れを栄養として成長するこの木は穢れの度合いを測るのに重宝されている。

その蓬莱の玉の枝の前身は優曇華の木。『男』が失った心臓の代わりとして核にしていた木だ。輝夜の蓬莱の玉の枝が、『男』が内包する圧倒的な穢れに反応しているのである。

「でも、貴方はここに現れた。私の……私達の前に……」

天頂の光が強くなっていく。その光に目が眩んだ『男』は一度視線を少女達から外す。目が光に慣れ、視線を戻すと、先程までよく見えなかった少女達の顔が鮮明に見えるようになっていた。

果たして、二人のその顔は。

――ドクン、と。もはや存在しない心臓が大きく跳ねた気がした。

それを皮切りに『男』の脳裏に様々な記憶がフラッシュバックする。

あの方によって心臓を貫かれる。始めはまるで理解が及ばなかった。何故、あの方が私を……？　胸に走る激痛に言葉も出ない。そのまま力なく倒れ伏す『男』が見たものは、一人の少女に仲間が皆殺しにされていく光景だった。

あの方が裏切った。その答えに行き着くのは簡単だった。あの方は姫を何よりも大切にしていたからだ。何よりも眼前の光景がその事実を如実に証明している。

次々と、次々と倒れ伏していく同僚達。既に『男』は動けない。出来たことと言えば、自分達を皆殺しにした上司の姿を見つめるだけ。その少女が『男』を振り返ったが、そのまま踵を返し、闇の中へと消えていった。

『男』の脳裏にはその時の光景が刻まれていた。淡く輝く月を背景に、長い銀の髪を三

つ編みにしたその姿。それを見た『男』は――。

――射抜かれ、使い物にならなくなった心臓を抜き取り、地上の穢れの強さを調べる為に持ち込んでいた優曇華の木を突き入れた。

優曇華の木が変質していく。『男』が持っていた能力は、幻想郷風に言えば『あらゆる物を成長させる程度の能力』と言ったところか。

知能を持った生物にはほとんど効果の無い、自分自身あまり使えない能力だと思っていたのだが、死に瀕したせいか、『男』の能力は強力になっていた。それこそ、対象を進化へと導く程に。

『男』の体内に優曇華の根が張られていく。それは『男』に発生した穢れを吸収し、それを栄養へと変え、生命を維持するほどのエネルギーを抽出する。

だが、足りない。『男』の中に発生した程度の穢れでは、目の前の死を跳ね除けることなど出来ない。

――嫌だ。『男』はここで死にたくはなかった。しかし、どう足掻いても今の自分では死を免れない。ならば、どうするか。答えは決まっている。

――もっと、穢れに満ちてしまえばいい。

幸い、ここには死が満ちている。死とは穢れだ。穢れとはこの身の栄養だ。

『男』は、穢れに囚われてしまったかつての同僚達を、食らい始めた――。

……記憶にノイズが走る。

蓬莱の薬。その在り処を知ったのはつい最近のことだった。あの姫は都にいる帝とやらと、自分を匿ってくれていた老夫婦に蓬莱の薬を渡したらしい。尤も、帝はあの姫がいない世界で永遠を生きたくはないなどと言って、薬を燃やしてしまったそうだが。

『男』はその思考が理解出来なかった。一度死に臨んだ『男』からすれば、こうして生きることが出来ることが嬉しくてたまらない。それに、ついに欲しい物も手に入れることが出来た。

『男』は満足そうに血で汚れた口元を拭う。『男』は薬の入った甕を手に、満腹となって少々膨れた腹をさする。『男』の足元には腹を刳り貫かれた、老いた夫婦の死体が転がっていた。

物は試しと腸（はらわた）だけを食してみたが、どうやら穢れは肝に溜まるらしい。老いとは穢れだ。穢れとはこの身の栄養だ。『男』は穢れに満ちた腸が大の好物となった。

――そうして、ここに新たな蓬莱人が誕生したのだ。

『男』は、徐々に目的を見失いつつある。

……記憶にノイズが走る。

それはありえないことだった。

蓬莱人となった『男』は各地を渡り、穢れに満ちた生物……人間を食らってきた。蓬莱人となったその身にもはや穢れを取り込む必要など無いはずなのだが、身体の核となっている優曇華の木は体内で発生する程度の穢れでは維持が出来ないのだ。

もはや優曇華の木は肉体ではなく、魂と癒着している。だから『男』は穢れた人間を食らい、穢れを取り込み続けた。

それはありえないことだった。

一度死に臨んだとはいえ、『男』は月の民だ。不老不死となった蓬莱人だ。その『男』が――ただ一人の男に追い詰められるなど、それはありえないことだ。

「テメーのその身体、肉体が主ではなく、魂が主となってんだろ？　魂とは永遠不滅の存在。魂が肉体を取り込み、肉体と言う枷から解き放たれた存在……蓬莱人ってのは、そういう物らしいな」

その男は満身創痍だった。頭から、腹から、全身の至る所から血を流し、それでも尚霊波の篭手を具現化し、『男』を追い詰めていく。その男には予感があったのだ。この『男』を野放しにしては、自らの愛する女（ひと）に災いが訪れるだろうと。

だから必死に食らいついた。いくら傷を負おうと、いくら血を流そうと、全てはただ彼女と過ごす退廃的な生活の為に。男――高島はその時を待っていた。

「薄汚い下賤な地上人の分際でぇ……!!」

「ハツ、今のテメーの方がよっぽど薄汚れてんだろーがよ」

『男』の言葉に高島は即座に挑発で返す。『男』は高い自尊心を持っている。月の民特有の選民意識と、追い詰められていたことによる焦り、そして格下と見ていた相手に虚仮にされたことによる怒りにより、『男』の堪忍袋の緒はあっさりと切れた。

「貴い様ぁぁあああああああ!!!」

激昂してただ真っ直ぐに向かってくる『男』の姿に、高島は思わず笑ってしまう。こうも上手くいくとは恐らく神でさえも予想できまい。沸点が低すぎる相手というのも滑稽なものだ。

高島は手の中に自らの霊気で創った宝珠を忍ばせる。その数は四。既に文字も刻まれている。後は、タイミングだ。

「死いいいいいいねぇえええええええええええ!!!」

視野狭窄に陥った『男』は、高島の策に気付けない。高島は『男』の攻撃を紙一重で掻い潜り、すれ違い様に宝珠を叩き付けた。

「……っ!?」

『男』の動きが止まる。その顔には驚愕が満ちている。歯がカチカチと鳴り、全身も激しく震えだした。

「……何をした……!?」

高島はその言葉に答えず、霊波の篭手を刀状へと変化させる。その刃は半ば物質化しており、高島の比類なき才の程を窺わせる。

「私の身体に何をしたァッ!!」

『男』が憤怒の表情で高島へと振り返る。それと同時、高島も『男』へと振り返る。そこに違いがあるとすれば、どちらが狩る者で、狩られる者かが決定したこと。

「別に。大したことはしてねーよ」

高島は思い切り霊波刀を振り抜いた。腕に走る肉と骨を断ち切った感触。高島の視線の先、『男』の頭部がくるくると宙を舞っていた。

「俺の文珠で――テメーを蓬莱人じゃなくしただけだ」

静かに語りかけるように、何でもないことのように、高島は『男』へと解説をしてやった。ドスッ、という音を立て『男』の首は地面へと落ち、その勢いのままに地を転がっていく。その表情は、酷く醜い驚愕に彩られていた。

「肉体と魂の主従が逆転しているのなら、それを戻してやればいい。文珠と、大陸の……道教だったっけか、あれの知識が無けりゃ無理だったろうけどな」

冥土の土産とばかりに高島は『男』の死体にタネを明かす。聞いているかは定かではないが、さしたる意味も無い。ここに勝敗は決したのだ。

身体はボロボロ、霊力も枯渇。しかし、それでも高島はこうして立っている。勝敗は決したのだ。

――――『男』の身体から、禍々しい霊波が噴出する。

「何っ!?」

それは『男』の身体から溢れ、やがて周囲を覆い尽くす闇となる。

それは穢れ。それは『男』が現在まで取り込んできた、動物の、人の、妖怪の、全ての穢れの集合体。

「こいつ……まさか、悪霊化しやがったのか!?」

その圧倒的な邪気。圧倒的な霊波。禍々しく、強大な気配。それは人が到達出来る領域を遥かに超えた次元――神の領域。

高島は動けない。その身は闇に囚われ、自由を奪われた。目の前に存在する祟り神級の悪霊に対抗する術など、もはや残されていなかった。

――勝敗は決した。狩る者と狩られる者は決まっていたのだ。『男』は怨嗟の唸りを上げ、自らの永遠の生を奪った高島の身体を手に入れんと迫る。

「――永琳さん」

悪霊と化した『男』に飲み込まれる直前に零れた声は、愛する人の名前であった。

……記憶にノイズが走る。

「よくも……!!　よくも私の高島を……!!」

目の前の中性的な容姿をした少年――陰陽頭（おんようのかみ）――が憤怒を宿した眼で『男』を睨む。

高島の身体を奪い、復活を果たした『男』はその視線を無いも同然に受け流し、周囲を探っている。

彼等が相対しているのは陰陽寮でのとある一室。そこはある程度以上の役職の者しか知らぬ、極秘の研究室だ。

それは名付けるならば蠱毒の部屋といったところか。様々な毒虫や動物、果ては人間に妖怪等、あらゆる生物を使って呪いを創り出す部屋。現在の陰陽頭はここの事を初めて知ったようだったが、そこらへんの事情は『男』にとってはどうでもよい事だ。

『男』の目的は、高島が葬った最強の呪的生物。巨大な熊の様な『獣』だ。高島の記憶

によればあれは陰陽寮が創った可能性が高いらしく、それを探す為に『男』は陰陽寮へと入り込んだのだ。

何せ蠱毒によって創り出された獣だ。それが内包する穢れは今まで食らったことが無いほどの美味であろうことが推測される。

「――!!　――、――――ッ!?」

それにしても喧しい。『男』は思わず耳を塞ぎたくなった。ここに来るまで誰も自分の正体に気付く事は無かったのだが、この少年には一目で看破された。それに関しては感心を覚えたが、その後がいけない。ただひたすらにこちらを罵倒し、喧しく騒ぎ立てるだけ。『男』は高島の記憶によって少年の大凡の力量は把握出来ているのだが、これではそれを八割も発揮出来ないだろう。そもそも、何故この少年はこれほどに怒っているのか……。

『男』の鼻がとある匂いを察知する。

「……ああ、なるほど。この男と番になりたかったのか」

陰陽頭から匂ったそれに気付いた『男』が呟いた瞬間、陰陽頭の理性が切れた。

……記憶にノイズが走る。

千年の間、あらゆる穢れを食らってきた。その度にその身に内包される穢れが強まり、元の存在から外れていった。

あの日、死から逃れる為に穢れを生んだその身は、寿命という死に囚われた。そしてそれから逃れる為に蓬莱の薬を欲した。

死から逃れるには、死を受け入れねばならない。ようやく手に入れた蓬莱人の体も、すぐさま失ってしまった。高島の身体を奪ったはいいが、魂に癒着した優曇華の木は高島の身体でもその存在を主張してくる。

老いとは穢れだ。死とは穢れだ。――そして、穢れとはその身の栄養だ。生きるために、死を受け入れねばならない。

何故、そうまでして生を欲した？　何故、そうまでして永遠を欲した？『私』は、一体何を欲していたのだ？

目の前の少女、銀の長髪を三つ編みにした、赤と青の服を着た少女。月に似た光に照らされた、その姿はまるで、あの時のあの方の様で――。

「――わ、たし……は……」

あの時の光景が甦る。月を背に、月に照らされ、私達を殺したあの時に。

「わた、しは……わたし、は、ただ……」

ああ、そうだ。あの時の貴女は、月の姫よりも、他の誰よりも――。

「――ただ、×様と、永遠を過ごしたかった……」

――ただただ純粋に、何よりも、美しいと思ったのだ――。

『男』は永琳にその腕らしき部分を伸ばす。触れようと思っての行動ではない。それはまるで太陽を求めるかの様に。そうやって差し出されている手を、永琳は――。

「……ぅ〝あ〟あ〝あぁぁっ!!?」

輝く矢で、射抜いた。

「……私が永遠を共に過ごしたいと思った男性は、後にも先にもただ一人だけ。それは、断じて貴方ではない」

また一矢、また一矢と『男』の身体を矢が貫いていく。その度に『男』の身体が激痛に跳ね、蠢き、今にも意識が断絶しそうになる。だと言うのに、一向に死が迫る気配がまるでない。ただ『男』は射られ、痛みに悶えるのみだ。

どういうことなのか、『男』には理解が及ばない。視線は空間を彷徨い、やがてある少女に向いた。その少女は嗤っている。

「この結界は、私の能力を応用して作られた空間。内部と外部の時間を切り離し、須臾の

時を永遠に、永遠の時を須臾にする」

　少女が『男』に手を翳す。すると、数え切れぬ程の弾幕が『男』を撃ち貫いた。しかし、やはり死は迫らない。

「貴方は、私達の大切な人の命を奪った。だから、私は貴方を殺し尽くす。何度も何度も、貴方の心も精神も魂も殺して、絶望すらも枯れ果てるまで、殺して殺して殺し尽くしてあげる」

　二人の顔には笑みが浮かんでいる。それはまるで亀裂の様な、恐ろしくも美しい笑み。『男』は何も出来ず、永遠と須臾の間、ただそれを眺めるしかない。

　暗い闇の中に浮かぶ、二つの血に映える三日月を――――。

　眼前の黒い結界が消失する。その場に存在したのは永琳と輝夜の二人のみ。それが意味するのは一つだ。

「……終わった、のか？」

　レミリアが二人に問う。それは皆が抱えている疑問。それに対する返答は、永琳の無言の首肯であった。

明らかに普段と違う様子に、鈴仙も戸惑ってしまう。永琳から漂うのは遣る瀬無さや諦観、そして迷いといった感情だ。他の誰も気付くことはなかったのだが、横島だけはそれの原因に気付くことが出来た。

「……あれは」

横島の霊感が察知したのは、永琳の視線の先に存在する、最早消滅寸前の魂。永遠不滅の魂の消滅とは、即ち存在の書き換えによる完全な自己の崩壊。自らを存在していると認識出来ない場合、魂は死んでしまう。

その魂は、『男』の中で穢れに汚染されすぎたのだ。

「……」

「ちょ、横島さん？」

横島は無言で永琳の元へと歩を進める。彼の胸に宿るのは確かな確信。その魂を一目見て、そうなのだと自然に理解出来た。

やがて、横島は永琳の隣へと並ぶ。眼前の魂はやはり今にも消えてしまいそうで。横島には永琳の迷いが解るような気がした。彼女の迷いとは、恐らくこの魂が消滅する前に自らの手で輪廻の輪に還すかどうか。それによって疲弊しきったこの魂が消滅してしまわないか、といったところだろう。

彼女が発する遣る瀬無さは、どうやってもこの魂を救う方法が存在しないこと。そし

て諦観は結末が容易に想像出来るからだ。
　――永琳に出来る事と言えば、この魂を殺してやる事くらいだ。
　永琳もそれが解っている。どうしようもなく理解出来てしまっている。だが、それでもやはり彼女は考える。この魂を……『高島』を救う方法を探す。

　それは、まるであの時のようで。

「――横島君、何を……!?」
　横島は徐に高島の魂を栄光の手を解除した右手で掴んだ。永琳から、そしてそれを見ていた皆から驚きの声が上がる。しかし、横島はそれを聞かない。意に介さない。
　隣の永琳が静止するよりも早く、横島は高島の魂を自らの胸に押し込んだ。
「ぐぅぅ……か、はぁぁぁ〝……!?」
「横島君!?　貴方一体何をして……!?」
　がくりと地面に膝を突き、苦しみ始める横島に永琳は戸惑いの声を上げる。永琳は横島の苦しみように容態を確認しようとしゃがみ込み、横島の身体に手を触れる。
「え……?」
　すると、横島がその手を優しく握り返してきた。一体どうしたのかと一瞬動きを止め

る永琳だったが、彼から零れた言葉に思考すら白く染められる。
「――永琳さん」
永琳の胸が跳ねる。その、呼び方。横島の物とは少々違うイントネーション。
彼は永琳に笑顔を見せる。横島の物とは少々違う、今も鮮烈に記憶に焼きついている、あの笑顔。
「また、竹林のあの場所で逢いましょう――」
それは、彼が別れ際にいつも言っていた言葉。あの最後の手紙にも締めに用いられていた言葉。自然と、永琳の口からその名が紡がれる。
「――高島、さん……」
永琳に名を呼ばれ、『高島』は満足気な笑みを浮かべた。『彼』の身体が発光する。もう、お別れの時間だ。
高島の魂は横島の身体から抜け、輝きを放ちながら天へと昇っていった。……輪廻の輪へと、還る事が出来たのである。
永琳は呆けた様な顔でそれを見ていることしか出来なかった。ゆっくりと横島の元へと視線を戻せば、彼は少し苦しげな顔で、それでも申し訳無さそうに苦笑を浮かべていた。
「……どう、して」

永琳から零れる要領を得ない言葉。それでも横島は彼女が何を言いたいかを理解し、一つずつ話していく。

「永琳さんの顔を見た時、何をやろうとしてたのかが解った様な気がして。……だから、それをさせない為に」

横島が顔を俯かせる。

「誰がそれをやるべきなのか、なんて聞かれたら、それは永琳さんなのかも知れませんけれど。……それでも、永琳さんにはあんな思いをしてほしくなかったんです」

そこで、ようやく合点がいった。確かに、あの時と状況が似ていただろうと言うことに。しかし、それでもまだ疑問は残っている。

「何故、高島さんを憑依させる事が出来たの……？　あの状態じゃ、そもそも表に出ることも出来ずに貴方の魂に食われるだけのはず……」

今の横島と高島の魂では、もはや強さの格が違っている。神魔級の霊力を持つ横島の魂と消滅寸前の高島の魂では、比べるべくもなく横島の方が強い。それでも高島の魂が横島の魂に押し潰されなかったのには、ある理由が存在した。

「それは……高島は、俺と同じだからです」

「え……？」

「いや、より正確に言うなら、俺の前世と同じ……ですかね」

その言葉を聞き、徐々にだが永琳の顔に理解の色が浮かぶ。今の様な状態でも瞬時に答えを導き出すその姿に、横島は尊敬の念を抱く。

「俺の前世は平安時代に陰陽寮に所属していた陰陽師。『高島』って名前でした」

「……じゃあ、貴方は」

「ええ。多分ですけど、『向こう』の高島と『こっち』の高島は、平行世界の同一人物……って感じでしょうね」

横島は『こちら』の高島の魂を一目見た瞬間からそれが解った。あれは、自分と同じだと。だからだろうか、高島の魂を救う方法も理解出来たのだ。

高島の魂を自らに憑依させ、自らの魂の力を以って高島の魂を癒す。

他の者では不可能だっただろう。もし横島が蓬莱人以外の人外の存在だったならば、横島が経験した通り霊基構造を譲り渡せば何とか助ける事が出来たかも知れない。しかしそれはもしもの話であるし、あそこまで壊れかけた魂を癒すとなれば、それこそ横島自身が危険に陥るかも知れない。

だから、横島が取れたのは最善の策だったのだ。霊力とは魂の力。同一の存在だったからこそ起きた、一種の『同期合体』とも言える作用が発生した。それは高島の魂を活性化させ、穢れを祓い、輪廻の輪へと還れる程にまで活力を得る事が出来たのである。

「……」

永琳は高島が消えた、空を見上げる。陽もその姿のほとんどを隠し、竹林は夜を迎えようとしている。辺りが闇に包まれようとする中、永琳は一滴だけ涙を流す。

眼を閉じ、瞼の裏に甦る高島との思い出をより心に深く刻み、飲み込んでいく。やがて眼を開けた永琳に飛び込んできたのは、夜の空を彩る満天の星と、淡い輝きで夜の竹林を照らす月。

もう、永琳の瞳に涙はない。永琳は微笑を浮かべると、心の中で『彼』に言葉を贈る。

――ずっと待っているわ。千年でも、一万年でも、ずっと貴方の事を。だから、また逢う事が出来たら、その時は……。

それが永琳の、高島への愛の告白であった。

永琳は一つ深呼吸をすると、横島へと目線を合わせ、「ありがとう」と感謝を贈る。横島はそれに頷きを返し、永琳の肩へと手を置いた。

「戻りましょうか、皆のとこに」

「そうね。……輝夜、行きましょう」

「……うん」

そうして三人はレミリア達の所へと戻る。途中から話に付いて行けていない皆は少し困惑している様子。

「えーっと……何かよく分かりませんけど、これで一件落着なんですか？」

鈴仙は永琳へと疑問を投げるが、その永琳は少々困った顔をする。まだ全てが終わったわけではないからだ。

「……あいつ、どうなるかな」

「あいつ……？　……あっ！」

横島の言葉に鈴仙は思い至る。確かに、一件落着とは言い難い。

「……とにかく、紅魔館へと帰ろうか。フランのちゃんとした治療もそっちの事も、全ては帰ってからにしよう」

レミリアの言葉に皆は一も二も無く頷いた。紫が紅魔館へのスキマを開き、順番に入っていく。

横島はちらりと輝夜を見て、彼女の様子に苦いものを飲み込んだ。まだまだ、一件落着には至らない。

第三十五話

『いつかまた、竹林の中で』

～了～

紅魔館の永琳の部屋。今そこには誰もいない。
意識を失い、治療の後にベッドで寝かされていたはずの妹紅の姿も消えている。
その部屋の窓は大きく開け放たれており、ベッドから窓まで、血が滴ったかの様な跡が残っていた。

第三十六話『ありがとう』

紅魔館、正門前。そこに、空間の亀裂が現れる。まるで空に開いた黒い穴。それは紫のスキマだ。スキマからは紫を始め、レミリア達も姿を現す。皆の表情は一人を除いて明るいとは言えないが、どこか安堵した様な柔らかさは存在した。

「あ〜〜〜、これで厄介な奴もくたばったし、ようやくゆっくり出来そうね」

レミリアが首をゴキゴキと鳴らしながらそう言った。幼い容姿からは想像出来ない親父臭いその仕草に、皆は苦笑を浮かべる。だが、レミリアがそうする気持ちもよく分かる。あの『男』はかなりしぶとく、皆を窮地に陥れた。今回本気で全力を尽くしたレミリアや横島達は、かなり身体に疲労が溜まっただろう。

「永琳、あとでマッサージお願いしていいかしら？」

「ふふ、了解。任せておいて」

永琳はレミリアの要求に機嫌良く頷く。胸に燻っていた蟠りが解け、少々テンションが上がっているらしい。実にニコニコとした笑みを浮かべている。その笑顔は見た目の年齢と非常にマッチしており、見る者に可憐な印象を与えている。

それに対し、一人表情が優れない者がいる。いや、優れないというよりは呆とした様

な、少し感情が読めない表情だ。それは蓬莱山輝夜の表情である。

「……」

　無論、永琳がそれに気付いていないわけがない。むしろ輝夜がそうなっている理由にも見当は付いている。それでも自分からは手を貸すことはない。輝夜が自分で考え、悩んで、それでも答えが出せず、相談を持ちかけてきた時に手を貸してやればいい。それまでは精々悩んでもらおう。それが、輝夜の成長にも繋がる事を信じて。

「さーて、まずはフランの治療。パチェと美鈴も一応診てもらった方がいいかな？　それから横島と妹紅の事もあるし……。永琳と鈴仙は大変そうね」

「ま、何とかなるわよ。それより……何だか、紅魔館の中が騒がしいわね」

　その言葉に皆が紅魔館を仰ぎ見る。なるほど、確かに紅魔館から妖精メイド達が騒ぐ声が聞こえてくる。その様子にレミリアの機嫌が急降下する。

「私達が大変な目に遭ってきたってのに、遊んでいるとはいいご身分だな……」

「ま、まーまー落ち着いてお嬢様。それに、何だか遊んでいるって雰囲気でもありませんよ？　これはむしろ……」

　美鈴が剣呑な雰囲気を纏い始めたレミリアを何とか宥めようとする。美鈴は館の中から多くの者が焦ったかの様な気を発している事に気が付いたのだ。一体、自分達が留守にしていた間に何があったのか。それを確かめてからの方がいいだろう。

美鈴の言葉に落ち着きを取り戻したレミリア。すると、紅魔館の扉が開き、一人の妖精メイドが慌てた様子で飛び出してきた。
「みみみ皆さん!!　良かった、帰られたんですね!!　こっちでは大変な事が起こってしまっててんやわんやだったんですよー!!」
「ちょちょちょ、何よそんなに慌てて」
妖精メイドがレミリアの元へと駆け寄り、そのままの勢いで捲し立てる。その勢いは中々の物であり、あのレミリアでさえもタジタジになるほどだ。それを見かねた咲夜がレミリアと妖精メイドの間に割って入る。
「落ち着きなさい。大変な事って何があったの？　ちゃんと説明しなさい」
「あっ……すみません、お嬢様。咲夜さんも失礼しました。……実は、妹紅さんの事なのですが……」
「妹紅に何かあったのか？」
妖精メイドは何とか落ち着きを取り戻し、一言謝罪をしてから何があったのかを説明する。それによると妹紅に何か異変が起こったようだ。
「妹紅さんが……妹紅さんが、紅魔館から行方を晦ませたんです!!」
「何ですって……!?」
妖精メイドの言葉に皆にざわめきが走る。横島、永琳、鈴仙は特に驚いている。永琳

と鈴仙は直接処置を行ったから知っている。妹紅がいくら蓬莱人で常人よりも傷の治りが早いとはいえ、あの傷はほんの一時間～二時間で完治するような傷ではない。まさか、一度死んで復活（リザレクション）した？　……情報が少な過ぎる。とにかく詳しく話を聞くしかないだろう。

「どういうこと？　詳しく話してくれる？」

「は、はい。お嬢様方が紫さんのスキマを通って妹様を助けに行った後、皆で分担を決めて割れた窓ガラスの掃除をしていたんです。それで妹紅さんが眠っている永琳さんの部屋も含めて掃除をやり終えたんですけど……最後に皆で見落としが無いか確認の為に見回ってみたら、妹紅さんの姿がなくて。ベッドから窓まで、血が滴った様な跡がありました。館中を探しましたけど見つからず、これはどこかへ抜け出されたのでは、と……」

妖精メイドは顔を伏せ、申し訳無さそうに説明を終えた。話を聞く限り、やはり妹紅の怪我は完治していないようだ。妹紅が怪我を押して向かった先、そこは一体どこなのだろうか。

「もしかして、入れ違いになったんじゃないか？　妹紅ならもう一度あの『男』の下へと向かいそうだけど……」

レミリアは妖精メイドの頭を軽く撫でながら自らの考えを述べる。あまり気にしす

ぎない様にという配慮のようだ。皆はレミリアの考えに賛同する。彼女の性格を鑑みれば、ありえない事ではない。皆は紫に目をやり、紫もそれに頷く。再び竹林へのスキマを開こうというのだ。

皆が妹紅の居場所は竹林だと考える。しかし、ただ二人だけ違う考えの者がいた。

「……すんません、竹林じゃないと思います」

一人は横島だ。彼はどこか遠くの空を見ながらその考えを否定する。横島に皆の視線が集中するが、彼はそれを意に介していない。

「じゃあ、一体どこにいるって言うの？　というか、何でそれが分かるの？」

鈴仙が懐疑的な視線で横島に問う。だが、何やら横島の様子がおかしい。何か、戸惑いをその瞳に宿している。彼はまるで頭痛を抑えるかのように頭に手をやり、搾り出す様に声を出した。

「分かんねー。分かんねーけど、何となく分かるような気がする……」

「……？　それってどういう……」

「――すんません。俺、行ってきます!!」

そう言うと横島は皆の制止の声も振り切り走り出した。どこへ行くと聞いても分からない。だというのに場所は何となく分かるような気がする。横島の言っている事はメチャクチャだ。走り出した横島を止めようと美鈴が追いかけようとするが、そこで、

思いがけない光景が目に飛び込んできた。
「え――？」
　横島の姿がない。あの一瞬でどこへ消えたのか。左右を見てもいない。後ろにも当然いるわけがない。ならば、どこに？　美鈴がそこでようやく気付く。視線をやや上方へと向けると、そこには猛スピードで飛行する横島の姿があった。
「と、飛んでる!?」
「あいつ、いつの間に……!?」
　これは他の皆も驚いたようだ。だが、驚いたからといってそのままにしておくわけにもいかない。美鈴や咲夜が横島を追いかけようと地を蹴ろうとしたその瞬間、待ったの声が掛かった。
「ちょっと待って、皆」
　声の主に注目が集まる。その主は輝夜だった。
「私が追いかけるわ。何というか、その方がいいような気がするの。……それに、心当たりもあるし」
「……何だと？」
　妹紅が向かったのは竹林ではないと感じていたもう一人は輝夜だったのだ。輝夜は横島の姿を見ながら宙に浮く。

「私が横島さんを追いかけるから、皆は紅魔館で待っていて。すぐに……か、どうかは分からないけれど、必ず妹紅を連れて帰ってくるから」

輝夜はそれだけ言うと横島を追い、彼女もかなりの速度で空を飛んでいった。有無を言わさぬ展開に皆は戸惑うが、それでも最後には納得をするしかない。自分達の中で、妹紅の事をよく理解出来ているのは誰か。そう考えれば、横島と輝夜の二人が真っ先に思いつく。ここは、あの二人を信じて待っている他はなさそうだ。

「まったく……激動の一日だな」

レミリアの溜め息交じりの言葉が、陽が落ち、夜となった紅魔館に響いた。

第三十六話
『ありがとう』

人里にある寺子屋、その近くにある民家に上白沢慧音は住んでいた。既に陽も落ち、夜と言ってもよい時間。慧音は夕食の準備を進めていた。何やらまた竹林の方で何事か起こったらしいが、そこには白蓮や神子といった自分等より遥かに力ある存在が向

かったらしい。前回のゴキブリ異変や大結界の亀裂の時に皆に頼られたせいか、率先して異変の解決に乗り出したらしい。……後日、実は完全に出遅れていた事が分かった二人は、互いに顔を見合わせ「解決していて良かった」と安堵の息を漏らしたという。

鼻歌混じりに下ごしらえを済ませていく慧音。今日は客人も居るのでいつもより量は多少多めだが、それでも彼女は頻繁に妹紅の分も作っていたので慣れている。

「……そういえば最近妹紅にご飯を作ってないな。横島に教わって多少なりとも料理を覚えたらしいが……」

思い浮かべるのは材料を切って焼くくらいしか出来なかった妹紅の料理。千年以上そういった食生活をしてきただろうから特に不満も無かったのだろう。それが最近になって料理を覚え始めたということはつまり……。

「ふう。愛されているなぁ、横島の奴」

思わず溜め息を吐いてしまう。自分がどれだけ言っても覚えようとしなかったのに、横島と出会って料理を覚えるとは、慧音はそれがかなり悔しかった。

「――ッ!!　――音っ!!」

「……ん？　この声は……」

玄関の方から聞こえてくる声。これは間違いなく妹紅の物だ。だが、どうやらかなり様子がおかしい。声はそこまで大きくはないのだが、とても必死な物を感じる。また何

かあったのだろうか？　まだ火を使っていなくて良かった。慧音は調理を中断し、早足で玄関へと急ぐ。

「慧音っ！　慧音ぇっ!!　居ないのか!?」

「こらこら、あまり騒がしくしないでくれ妹紅――!?」

らしくなく玄関引戸をガンガンと戸を叩く妹紅に、慧音は少々険が混ざった声で返す。異変が立て続けに起こっている中で、近所の迷惑になるような行為は控えて欲しいのだ。

そうして慧音が戸を開く。そして彼女の目に飛び込んできた光景は、彼女を絶句させるに足る衝撃を持っていた。

「慧音……！　良かった、居てくれた……!!」

「お、おいちょっと待て!!　何だ、どうしたんだその怪我は!?」

慧音を訪ねてきた妹紅の姿は、見るも無惨な物だった。腹からは衣服が赤黒く濡れそぼる程に血を流し、その傷は内臓にまで達しているのか、時々咳き込む様に吐血している。傷が完治する前にここまで飛んできた事の影響だろうか、傷が完全に開いてしまったようだ。

妹紅は驚く慧音に縋り付き、自らの傷など微塵も意に介さず声を発した。

「お願いだ、慧音!!　横島を……!!　横島を、元に戻してくれ!!　頼む!!」

妹紅は頭を三和土に擦り付け、土下座する様に慧音に懇願する。
「も、妹紅……!?　やめろ、どうしたんだ!?　横島に何があったんだ?　ゆっくりでいいから、ちゃんと訳を話してくれ」
慧音は血で汚れる事を厭わず、妹紅を抱き起こして落ち着かせる様に柔らかな声音で理由を問う。妹紅は失血で下がった体温に慧音の温もりを強く感じたからか、その瞳からぼろぼろと大粒の涙を流していく。
「よ、横島が……死んじゃう、くらいの、怪我をして……!!」
「何……!?」
やがて妹紅がしゃくりあげながらゆっくりと事情を話していく。横島が瀕死の重傷を負ったらしいが、それにはこの妹紅の怪我が関係するのだろうか。もしかしたら、竹林で起こったという異変も何か関係があるのかも知れない。慧音は無言で続きを促す。
語られたのは、決して起こってほしくなかったこと。
「だから、だから、私は……!!　横島に、死んでほしく、なかったから……!!　私は、私の……蓬莱人の生き肝を……!!」
「――!?」
!!」
慧音の呼吸が止まってしまう。今、何と言った?　横島に、自分の生き肝を食べさせたと言ったのか……?　ならば、横島は――!?

慧音の様子に、妹紅の目からは更に涙が溢れる。しかし彼女にそれを止める術は無い。今の妹紅に出来ることは、ただ慧音に縋る事だけだった。

「私に出来る事なら、何でもするから……!!　だから、頼むよ!!　横島を、横島を、元の人間に戻して……!!」

心を絞りきるかの様な、悲痛な懇願。それは、長い付き合いである慧音でも未だかつて見たことが無い。正直に言ってしまえば、慧音は横島に嫉妬している。自分は妹紅と親しくなるのに随分掛かったというのに、彼はあっさりと親密な関係になったからだ。

慧音は横島に嫉妬している。ああ、それは認めよう。だが、今この時においてそれは無関係だ。横島は慧音にとっても掛け替えの無い存在となっている。それは偏に妹紅の想い人であり、また、自らも妹紅の伴侶として相応しいと認めた存在だからだ。

――だからこそ、慧音は自らの唇を噛み切ってしまった。

「――――無理だ……」

「――――え」

本当に小さい、それこそ本当に搾り出すかの様な小さな慧音の声。だが、妹紅にはその声が何よりも大きな衝撃と共に脳を揺さぶった様に感じられた。

「なん……なん、て、いったの……？」

妹紅の表情が呆けた様な、何の色も感じさせない様な物へと変わる。それを間近で見

た慧音は、血を吐くように、今度はより大きな声で断言する。
「私の能力では、無理なんだ……!!」
　慧音の能力は『歴史を食べる程度の能力』。これは簡単に言えばある出来事を『無かったこと』にする能力だ。それは、現実に影響を及ぼす事から神の如き能力だと思われるかも知れない。だが、厳密にはそう強力な能力でもないのだ。
　例えば古代の中国が国のトップが入れ替わる度に前代の歴史書を焼き捨てていた様に、『そんな歴史はなかったのだ』と広めるようなものなのだ。当然当時の事を知っている者にはそんなものが通用するはずも無く、永い時を生きる妖怪を始めとした人外の存在には通じず、人間にもかつて何があったのかを知っている者には『無かったこと』にされても、『実はこうだった』という認識の食い違いを自覚する。慧音の能力は、『その歴史がこうだった』という認識が無い者にしか通じない。完全に『無かったこと』にする事など、出来はしないのだ。
「それじゃあ、私は……ただ、横島の気持ちを裏切って……!!」
「……っ！　知っていたのか……」
　妹紅が呆然と呟いた言葉に、あの日の光景が甦る。
　――上手く言えないんすけど、俺はこのままの方が俺らしくいられると思うんですよ。だから、永遠の命は、いらない……っすかね。

あの時の横島の言葉を、妹紅はどこかで知ったのだろう。だからこそ、妹紅はここまで追い詰められている。横島が蓬莱人になったという歴史を『無かったこと』にしてもらう為に、妹紅は慧音を訪ねてきたのだ。

「……っ」

最早身動ぎひとつせずにただぽろぽろと涙を流し続ける妹紅を見ているのが辛い。だが、だがしかしだ。慧音は奥歯をぐっと噛み締める。それではいけないのだ。慧音は、今から妹紅の心を更に痛めつける決心をする。このような能力を持っている自分が言える様な事ではないのかも知れないが、だからこそ自分が言わなければならないような気がして。

「妹――」

「貴女はそこで何をしているのですか、妹紅さん」

慧音が妹紅に語りかけようとしたその瞬間、幼い少女の声がそれを遮った。いつの間にそこに立っていたのだろうか。土間前の廊下に、客として招かれていた阿求がそこにいた。

「阿求……？」

「……妹紅さん。私は横島さんという方に会った事はありませんし、私が言う様な事ではないことも重々承知しています。……それでも、貴女には言わなければなりません。

貴女は、そこで何をしているのですか？」

　戸惑う様な声を出した妹紅に対し、阿求は毅然とした態度で言い放つ。その内容に慧音は少々驚いた。自分が言おうと思っていた事と同じだからだ。阿求はじっと、妹紅を見つめている。

「私は……慧音に……」

　妹紅は阿求の視線に耐えられず、俯いてぼそぼそと呟く。それは自分の行いを恥じている様に見えた。きっと、妹紅も無意識下では理解しているのだろう。阿求は二人の普段の様子を見た事が無い。彼女が持つ情報は全ては慧音から聞かされたものだけだ。それだけでも二人の……妹紅の気持ちは痛いほどに理解出来る。否、想像か。ともかく、阿求は妹紅にこんな事をしている場合ではない事を伝えたい。例え、自分が嫌われようとも、だ。

「……妹紅さんが今するべき事はこんな事じゃないはずです。一度起こってしまった事は無かったことには出来ない。理由はどうあれ、妹紅さんは横島さんを蓬莱人にしてしまった」

「……っ!!」

　妹紅は阿求の言葉に反論はせず、黙って歯を食いしばっている。痛くないはずがない。抉られたくない場所のはずだ。それでも、妹紅はただ耐えるしかない。

「妹紅さんは……妹紅さんは、愛する人の命を、捻じ曲げてしまった」

阿求の瞳に涙が溜まっていく。こんな事を好き好んで言いたくはない。妹紅の心を傷つける度、自分の心にも傷を負っていく。

「――ならば、何故妹紅さんは横島さんの命を背負おうとしないんですか……？」

「――……!!」

妹紅の瞳が大きく見開かれ、ついに阿求へと視線を合わせる。阿求が泣いている。それをさせたのは誰だ？　……自分だ。

「妹紅さんは横島さんを蓬莱人にした。それは、横島さんの命を奪ったといっても過言ではありません。命は、終わりがあるからこそ命足りえると、私は考えています。……だからこそ、妹紅さんは背負わなければいけないんです……！　横島さんの命と、それを奪った責任を……!!」

その言葉を境に、阿求は涙を堪えられずに膝を着き、泣き始めてしまう。慧音が妹紅から離れ、阿求を抱きしめる。彼女の目にも涙が光った様な気がした。

痛かったはずだ。抉りたくなかったはずだ。人を傷つけるという事は、こんなにも自らを傷つけることなのだ。……妹紅は胸が締め付けられるような痛みを覚えた。

――痛い。

慧音に全てを無かったことにしてもらおうとして。阿求に叱られて。阿求を大泣き

させてしまって。こんな、小さな女の子に、あんな嫌な役をさせてしまった。
妹紅は情けなさからまた涙が溢れ出そうになる。だが、目を強く瞑り、それを押さえ込む。
――私は何をしているんだ……？
親友に迷惑を掛け、小さな子供に諭され。こんなに情けないことはない。
――命と、責任を、背負う……。
妹紅は未だ泣き止まぬ阿求を見る。彼女は御阿礼の子。彼女は一つの魂が転生を繰り返し、代々幻想郷縁起を編纂している。御阿礼の子は代々三十年も生きられず、その人生のほとんどを幻想郷縁起の編纂に費やす。阿求もそうだ。産まれて既に十年以上が経ち、そのほとんどの時間を捧げてきている。それが役目だからだ。
いくら一つの魂が転生を繰り返しているとはいえ、その全てが同じ人格を有していたわけではない。それぞれに違った心を持った、少年少女達だった。そう、同一の魂の転生体でも、同一人物ではないのだ。
他にしたいこと、学びたいことなどいくらでもあるだろう。繰り返すが、御阿礼の子は三十年も生きられないのだ。好きな事を好きなだけしてみたいだろう。素敵な男性と恋をしてみたいだろう。
ただ一人の女性として、家庭を持ち、子を生したいはずだ。孫の顔を見たいはずだ。

――ただ、普通の女の子として生きたいはずだ。

だが、それでも阿求は御阿礼の子の九代目としての生を全うする。それは御阿礼の子だからではない。それが役目だからではない。

――自分以外の、九人の自分の命と、責任を背負っているが故に。

「阿求……」

妹紅はゆっくりとだが阿求に歩み寄り、その小さな身体を優しく抱きしめた。本当に、小さい。妹紅の心に、決意の火が灯る。

「ごめん……私のせいで、こんなにも傷つけちゃって……」

「……」

阿求は自分が血で汚れようとも気にせず、妹紅に強く抱きついた。妹紅の言葉を、首をふるふると振ることで否定しながら。

「阿求……私は……、――っ!?」

妹紅が阿求に自らが抱いた決意を語ろうとした瞬間、妹紅が何かに気付き、外から何やら重い物が墜落したかの様な音が響いた。

「なっ、今度は何だ……?」

慧音が驚きつつも戸を開ける。開いた視界の向こう、そこには腹を押さえた横島の姿があった。

「横島……!?」

彼の他に誰の姿も見えない。一体どうやってここまで来たのか。疑問が浮かんでくるが、どうやら今はそれどころではないようだ。横島の様子がどこかおかしいのである。

「……妹紅……」

横島は慧音に目もくれず、妹紅の姿に言葉を失う。腹部を汚す赤黒い血の跡。よく見れば口からも血が吐き出された様な跡がある。こうして間近で見ることにより、横島は自覚した。

妹紅がこうなってしまったのは、自分のせいであると。

――ヨコシマ……。

彼女の姿がフラッシュバックする。彼女は霊基構造が崩壊していく自分の為に、自らの魂を分け与え、そして死んでいった。全ては自分が弱かったからだ。

妹紅は文珠の効力で何とか生きながらえる事が出来た自分を助ける為に、自らの内臓器官を食わせてくれた。今もその傷は治っておらず、その身を鮮血で染めている。全ては自分が弱かったからだ。

強くなれたと思っていた。今度こそ守れるのだと思っていた。そんなものは幻想だ。俺は、あの時から一つも成長していない……!!

「妹紅……!!」

横島の脇腹から血が滲む。その場所は、かつてルシオラの妹であるベスパに撃ち抜かれた場所だ。それはトラウマの象徴。蓬莱人とは肉体ではなく魂が主軸となった存在。取り分け横島の魂は複雑なものだ。トラウマを刺激された影響により、それを象徴する傷が甦ったのだ。

「横島、大丈夫なのか……？」

妹紅は横島の平常とは明らかに違い過ぎる様子に戸惑いながらも彼へと駆け寄る。脇腹から流れる血は止まらない。それは魂そのものが流す、涙のように思えた。

「……俺が、弱かったから……」

「え……」

「俺が、少しも成長なんかしてないから……!!　また、好きな女の子をこんな目に……!!」

横島は両目を押さえて這い蹲る。妹紅は横島の過去の全てを知らない。彼の口から漏れた言葉だけでは全容を知れない。しかし、そのはずだというのに、妹紅には横島の過去に何があったのか、ぼんやりとだが伝わってきた。

強大な存在との絶望的な戦い。愛する者を助ける為に死に瀕し、逆に愛する者の命と引き換えにその命を救われた。結局、彼女を救うことは出来なかった。

伝わる。伝わる。彼の感情が、想いが。妹紅に対する悲しみ、苦しみ、後悔、諦念、罪悪感。どうして俺の為に、どうして妹紅がこんな目に。

どうして伝わってくるのかは分からない。分からないが……妹紅の胸に、ぽつりと浮かんでくる感情があった。それは、『幸福』だった。

横島はこんなにも自分を想ってくれている。私が傷ついたことに、私が苦しんだことに、私が悲しんだことに……。そして、それらの根底にある、確かな愛を、妹紅は感じる事が出来た。

「横島……」

再度思う。自分は何をしているのか、と。愛する者が苦しんでいる。愛する者が悲しんでいる。ならば、自分は何をするべきなのか。

妹紅は阿求をちらりと見やる。突如現れた横島とその様子に随分と驚いたのか、泣き止んで事態の推移を静かに見守っていた。その姿に内心小さな笑みを浮かべる。あの子の様に、自分も思いを伝えよう。

妹紅はあやす様に横島の背に手を当てる。

――これは、自分のせいなのだと自覚しながら。

「横島。そのままでいい。ただ、聞いていてくれればいい」

妹紅は一度目を瞑り、大きく深呼吸をする。

「……私は、永遠の命はいらないっていう、お前の気持ちを知っていたんだよ。その方が自分らしいからって、そう言った時の横島を見てさ、いつの間にか好きになってた……っていうのは、前にも言ってたっけ？　……私は知ってたんだよ。その気持ちを。でも、私は横島を蓬莱人にした。お前の気持ちを裏切って、お前を『永遠』に縛り付けた」

横島は動かない。それでも構わず妹紅は独白を続ける。ゆっくりと、ゆっくりと自分の気持ちを確かめながら。

「お前が『あいつ』に食われてるところを見て、頭が真っ白になった。お前の、血まみれの姿を見て、死んじゃったって思ったら、自分も死んじゃいそうなくらいに胸が痛くなって……それでも、横島は生きていてくれた」

妹紅の表情がどんどんと翳っていく。これから話すことは最低の極み。決して許されないであろうことだ。それでも妹紅は語る事を止めない。横島の想いと、阿求の思いに報いるために。

「それでも横島はすぐに死んでしまいそうで……。私は……私は、死んでほしくなかったから、生きていてほしかったから……一緒にいてほしかったから、お前から死を奪ったんだ……!!」

それは、一体どこまで利己的な想いなのかと妹紅は思う。ただ自分が嫌だったから、

だから横島を蓬莱人にした。ただ、自分の傍に居てほしいというだけの理由で。

妹紅は唇を噛む。妹紅は身体を震わせながらも、何とか言葉を紡ごうとするが、上手く呼吸が整わない。ゆっくりと、大きく深呼吸をする。横島に、自分の想いを伝える為の言葉を探しながら。

「……？」

不意に、横島の意識に何らかの感情の波が揺らめく。それはまるで自分の感情ではなく、誰か他人の感情のように横島に対する数多の想い。それは、自分が妹紅に対して現在抱いている感情によく似ていて――。

「……」

横島がゆっくりと顔を上げる。彼は血涙を流していた。自分の弱さのせいでかつての恋人と同じ事をさせてしまったことに対して、悲嘆にくれ、自らに失望し、絶望に堕ちた。それと同じ性質のものが、外から入り込んでくる。

横島は、何となくだが理解出来た。

「妹紅……」

この感情は、妹紅のものであると。

横島は史上初めての蓬莱人の生き肝を食して蓬莱人となった人間だ。それ故に、誰もその事実を知る者はいなかった。親とも言える蓬莱人と、その生き肝を食して変化し

た、子とも言える蓬莱人。その二者間に、特別な経路（パス）が通るという事を。
その経路を通して、互いの想いが伝わってくる。互いが互いに、利己的なまでに相手を愛している。
愛する者に死んでほしくないと望むのは間違っているのか。／間違いなんかじゃない。
愛する者に生きていてほしいと願うのはおかしい事なのか。／おかしくなんかない。
愛する者と一緒にいたいと思うのはいけないことなのか。／誰しもが思うことだ。
愛する者と、永遠に。／それは、誰もが抱く幻想（ゆめ）だ。
横島も、妹紅も。それは同じだ。しかし、彼らの特殊な事情がそれを阻む。永遠でなければ不幸というわけではない。それは二人も嫌と言うほど理解している。しかし、だからこそ、二人は永遠に一緒にいたいと思ってしまった。
「……妹紅は、裏切ってなんかねーよ」
それはむしろ自分の方だと横島は自嘲する。横島は妹紅の目を真正面から見据える。妹紅は自分と横島の間で起こった謎の感情の交感に多少の戸惑いがあったようだが、それでも横島の視線を受け止める。
「妹紅。俺は、さ。妹紅が好きだ」
「……うん。私も、横島が好き」

それは、或いは儀式のようなもの。
「妹紅一人じゃなくて、色んな女の子に惹かれてる」
「うん、知ってる」
「皆が傍に居てくれるなら、永遠だって悪くないんじゃないかと思うようになった」
「……私はお前の傍にいるよ。お前が嫌だって言うまで。それこそ永遠に」
「あんなこと言っておいて、速攻で意見を変える様な男だけど……」
「私も、人の事は言えないかな」
「……バカでスケベで、煩悩まみれで弱っちいこんな俺だけど――――ずっと、一緒にいてほしい」
「……自分の事しか考えてないない様な、こんな私で良いのなら――――ずっと、一緒にいさせてほしい」
言葉と同時、二人はどちらともなく自然に互いを抱きしめあった。互いの耳元で、互いを傷つけるであろう言葉を囁く。
「妹紅、俺を助けてくれてありがとう」
「横島、永遠を選んでくれてありがとう」
二人の唇が歪む。それは、苦笑の形をしていて。二人とも、とてもよく似た顔をしていた。

二人の仲の蟠りはそう簡単に消えることはない。いくら互いの想いが伝わったとはいえ、それですぐに納得出来る様な事柄ではない。だからこそ時間を掛け、言葉を尽くし、時にぶつかり合いながらも折り合いを付けていくしかない。

言葉にしてこそ伝わる事も存在する。容易な事ではないだろうが、それでもやはり二人ならば大丈夫なのだろう。これから先、二人には永い永い時間があるのだから。

数分後。

「ぬおおおおおお……!!」

「ぬあああああああ……!!」

横島と妹紅の二人は揃って悶えていた。人前で色々とやらかした事が今になって効いてきたらしい。それを見つめる慧音は「相変わらず女の子らしくない声だなぁ」などとどうでもいい事を考えている。

そんな二人を見るのに飽きてきたので、慧音は門の隙間からこちらを覗いている少女に声を掛けることにした。

「輝夜、そんな所で見てないで入ってきたらどうだ?」

声を掛けられた輝夜は頭をぽりぽりと掻きながら、照れ臭そうに笑いながら慧音の言葉に従う。輝夜の姿を見た横島達はようやく悶えるのを止め、いつから見ていたのかと疑問に思う。

「いやー、何というか。実は横島さんと同じくらいには到着してたんだけどね？　なんか訳分かんない内に二人が訳分かんない事になって訳分かんない事を言いながら訳分かんない内に解決したっぽい雰囲気になったから、出るタイミングを掴めなくて……」

輝夜の言葉に横島達は視線を逸らす。確かに傍から見ていた者達には二人に何があったのかは理解が出来ないだろう。何せ当の本人達にもあの現象が何なのか理解出来ていないのだ。それを他人に解れというのも無理というもの。

「それにしても、これから大変そうね。横島さんの事もあるし、妹紅も色々キツそうだし。……はぁ、こっちもこっちでアンニュイなのに」

「……？　何かあったんすか、輝夜様？」

深い溜め息を吐く輝夜の様子に、横島が疑問を持つ。今の輝夜から感じられる雰囲気は、どちらかといえば虚無的な物だ。

「うーん、そうね……。何というか、昔からの目的を果たす事が出来たんだけど、そのせいで胸にぽっかりと穴が空いた様な感じなのよね」

「……それって、まさか『あいつ』が……？」

「……？」

どうやら妹紅は輝夜の言葉に思い当たる物があるらしい。横島にはそれが何か想像することも出来ないが、とにかく輝夜を元気付けようと声を掛ける。

「んー、俺にはよく分かりませんけど、穴が空いたのなら他の何かで埋めちゃったらどうです？　俺に出来る限りの事で協力させてもらいますし、永琳先生に相談したり、何だったら妹紅だっているわけですし」

「え、私も？」

「いや、だって何だかんだ言ってるみたいだけど二人って仲良いじゃん。たまに知らないところでケンカしてるらしいけど、少なくとも俺は見たことないし」

それは横島にとって何でもない言葉だった。だが、その何でもない事を、輝夜は思いつけなかった。穴が空いたのなら埋めればいい。なるほど、確かにその通りだ。当たり前の事すぎて考慮もしていなかった。自然と、小さな笑みが浮かんでくる。

「そうね、埋める物を探すのもこれからの楽しみになるかしら？」

「いつでも頼ってくださいよ？　何だったら輝夜様の精神的な穴も肉体的な穴もこの俺が埋めて差し上げ――」

「子供の前で何を言っている貴様ーーーーーー!!」

「エ〝ト〝モ〝ン〝ッ!!?」

輝夜に対して最低な下ネタ発言をぶち込む横島に、後ろから飛んできた慧音がスーパーな頭突きをかます。横島は謎の言葉を吐きながらもんどりうって吹き飛んだ。輝夜はその様に笑い転げ、妹紅は横島を助け起こす。何か普段よりも顔が近い。
「あはははは！　……ま、横島さんなら考えてあげてもいいけどねー？」
「なん……だと……!?」
そして投下される輝夜の爆弾。慧音はやけにリアルな表情となって、愕然と言葉を発した。そんな事をしている内に輝夜は妹紅と同様に横島に寄り添い、彼の胸に『の』の字を書く。
「横島さんは私の難題をクリアしたしー？　このまま頑張っていけば、私もゲット出来るかもねー？」
「ほあああああ!?　いつ!?　いつ俺は輝夜様の難題をクリアしとったんやー!!?」
「……本当に『あれ』がそうだったのか。ほら横島、訳は後で説明してやるから落ち着けって」
その場は何ともカオスな様相を呈してきた。思わず阿求がメモ帳を手にするくらいには空気も弛緩している。慧音は横島の成し遂げた偉業に戦慄を覚えつつ、結局輝夜が出した難題が如何なる物なのか興味が湧いてきた。
「横島さんってヌカロク出来そうでポイント高いのよね」

「ヌカローーーーーッ!!?」
「今度は輝夜から下ネタだと……!?」
「……慧音、阿求。ヌカロクって何?」
「うえええええ!?」
「ふえぇえええ!?」
輝夜のからかい混じりの言葉が横島の理性を襲い、妹紅の純真度百パーセントな疑問が慧音と阿求の羞恥心を襲う。
異変が解決した日とはまるで思えない程の馬鹿馬鹿しい騒々しさに、横島、妹紅、輝夜の頬が緩む。
三人が抱く問題が解決したわけではないけれど、それでも一区切りがついたのは確かだ。今はただ、この時を楽しんでいてもいいだろう。
これも、異変解決の宴というわけだ。
「横島、私にヌカロクが何かを教えてくれ」
「任せろっ!!」
「何で服を脱ぐっ!!?」
「よーし、ヤっちゃえ横島さーん!!」
こうして夜は更けていく。この宴という名の騒ぎは、三人が慧音に頭突きを食らうま

で続いたのだった。

第三十六話
『ありがとう』
～了～

第三十七話『ミーハー恋心』

月が空に浮かび、その柔らかな色を夜の闇に照らし出している現在、横島と妹紅は慧音の家からの帰途についている。と言っても、二人は道を進んでいるのではなく、寄り添いながら空を飛んでいるのだが。

まだ飛ぶことに慣れていない横島を妹紅が支える形で飛んでいる。そうなると当然二人の身体は密着しているわけで、妹紅の小さくともちゃんと存在を主張している胸が横島に当たり、横島としてはとても喜ばしい状態となっている。

鼻の下を伸ばしに伸ばした間抜けな顔となっているのだが、妹紅にはそれが何故か嬉しく思えた。

――私にくっつかれて、喜ぶんだな……。

妹紅は自分の体型にコンプレックスを抱いている。何せ自分のライバルは傾国傾城の美少女である輝夜。彼女はその容姿に負けないほどに素晴らしいプロポーションの持ち主だ。見た目の年齢と身長・体重、果ては腕や脚の長さまでもが計算しつくされた黄金比の様に完璧な体型の持ち主。それに対して妹紅はつるーんぺたーんすとーんで

ある。膨らみはあるが誤差の様なものだ。これでコンプレックスを抱かないわけがない。

だからこそ妹紅は自分の様な貧相な体でも、横島が喜んでくれていることを嬉しく思う。思わず頬が緩んできてしまう。実は初対面の時にもわりと喜ばれていたのだが、そのことを妹紅はすっかりと忘れている。

「……どうかしたか、妹紅？」

「うぇっ!?」

急に横島が顔を引き締め、真剣な様子で問い掛けてきた。挙動不審気味な妹紅の様子が気になったようだ。妹紅は慌てて「何でもない」と取り繕う。

「……何かあったら言えよ？　ただでさえ今も支えてもらってんだし」

「このくらいなら大丈夫だって。それより、横島って空を飛べるようになってたんだな。ちょっと驚いたよ」

妹紅の言葉に横島は曖昧に笑う。横島は今まで空を飛べなかった。だと言うのに急に空を飛べるようになったのは、蓬莱人になったからである。

蓬莱人とは肉体ではなく魂を主とした存在。当然肉体と言う枷は取り払われており、訓練さえすればありのままの魂の力を引き出すことが出来るようになるのだ。

横島は蓬莱人となる前から、知識はともかくとして能力は一人前の霊能力者だった。

霊力とは魂の力。ならば、横島が今までよりもスムーズに力を扱えるようになったのは自明の理と言えるだろう。

「……まあ努力の結果かな。それよりもうすぐ霧の湖だけど、このまま進んでいけばいいのか？　いつもは一号達に運んでもらってたから、ちゃんとした抜け方を知らねーんだよ。さっき紅魔館から人里まで飛んだ時はまっすぐ進んだら抜けたけど……」

紅魔館の周辺に存在する湖にはいつも霧が立ち込めている。その原因は定かではないが、横島はレミリアが紅魔館を隠すために、吸血鬼としての能力か魔法かで霧を生み出していると考えている。もちろんそんなことはないのだが。

横島の言葉に妹紅はきょとんとした顔を浮かべ、次にはくすくすと笑い出した。

「……何だよ？」

「いや、悪い悪い。でも、私が普段何をしているかを忘れてないか？　私は『案内人』だぞ？」

妹紅はそう言って横島に微笑みかける。その様は非常に可愛らしく、横島の胸をときめかせるのには充分だったのだが、そこで横島は冷静に言い返した。

「……いや、お前は迷いの竹林の案内人であって、霧の湖の案内人じゃねーじゃん」

「……そうだけど。いやそうだけどさ、もっと何かあるじゃん。せっかく私がこう、何と言うか、ああ言ったわけじゃんか。だったらもっと何かこう……何かあるだろ？」

どうやら頼られたり褒められたりしたかったらしい。『好き合ってるわけなんだし、何か甘い言葉を』と横島に求めることは酷なのだろうか。妹紅は頬を赤く染め、ふてくされた様な声を出しながら軽く横島の頬を抓る。その肌は意外とスベスベで、弾力にも富んでいた。咲夜の料理と美鈴達との修行、そして漲る霊力のおかげである。

「……あ、何だかんだ言ってる内に紅魔館が見えた」

「え？　あ、本当だ。案内人ってすげーな。実は妹紅の能力って『他人を目的地に案内する程度の能力』とかなんじゃ」

「そろそろ怒るぞー？」

横島を支える妹紅の腕の締め付けがどんどんと強くなる。それは結果的により強く密着するということなので、横島としては願ったり叶ったりなのだが。

「あ、美鈴がこっちに気付いたみたい」

妹紅の言葉に久々の心眼・横島アイを発動。月の光が分厚い雲によって遮られているせいで見えにくいが、確かに門番として門の前にいた美鈴がこっちに手を振り、同じく門番をしていた二号に何らかの指示を与えている。恐らくはレミリア達を呼びに行かせたのだろう。……二号が館内に戻って約十秒、皆がぞろぞろと玄関から飛び出してきた。玄関ホールで待機していたのだろうか。横島は苦笑を浮かべる。

「前も思ったけど、よくそこまで見えるよな」

呆れと感心をふんだんにミックスした声が妹紅から漏れる。妹紅の目をしても美鈴が居ることしか分からなかった。横島の煩悩のなせる業には脱帽だ。いつかはこの煩悩を真っ向から受け止めなければならないことを考えてみれば、不安やら恐ろしいやら。ちょっと嬉しいやら。……妹紅は性知識に疎いのでキス以上の行為についてどれだけの知識があるのかは疑問だが。

そうこう考えているうちに二人は地面へと降り立ち、紅魔館へと急ぐ。横島は有無を言わさず飛び出してきたので早足気味だ。妹紅は黙って紅魔館を飛び出してきたので皆と顔を合わせるのが少々怖いが、そういったことはさっさと済ませようとこちらも早足になる。

「横島さーん!!　妹紅さーん!!」

美鈴が手を振り、大きな声で呼びかけてくる。横島と妹紅は一瞬顔を見合わせ、同時に微笑を浮かべると、美鈴にならい皆に大きく手を振った。

「おーい、皆ー!!」

横島達は走る速度を上げ、皆の下へと急ぐ。

第三十七話
『ミーハー恋心』

――……？

何だろうか。何かがおかしい気がする。横島はそんな疑問を抱いていた。何せ自分達が近付くにつれ、皆は顔を引きつらせるのだ。一体どうしたというのだろうか。

「……ひぃっ!?」

その叫びを上げたのは誰だったのか。雲に遮られていた月の光が横島達に降り注いだ途端、混乱の宴が始まった。

「――――スプラッターーーーーーーーッッッ!!!?」

美鈴と小悪魔が抱き合い、恐怖に涙を噴出しながらそう叫んだ。その悲鳴に横島と妹紅は即座に臨戦態勢へと移行する。

「スプラッタ!?　まさか、ゾンビかなんかでも出たのか!?」

「気をつけろよ、横島!!」

二人は素早い動きで皆に合流せんと周囲を警戒しながら移動する。今度は一号達と

思しき悲鳴が聞こえた。
「くっ、一体何がいるってんだ!?」
横島はとてもシリアスな調子でそう毒づく。二人は未だ気付かない。
「あ、あの、お二人とも……？」
「美鈴!!　皆は一体どうしたってんだ!?」
「ひいぃっ!?」
勇気を振り絞って話しかけてきた美鈴に、横島が必死な形相で現状を問う。それに対し美鈴は怯えるばかりだ。
「何だ!?　どうしてそんなに怖がってるんだ!?　まるで血まみれの男に迫られてるみたいじゃねーか!!」
「お、おおちおち、落ち着いてください～～～っ!!?」
「落ち着くのは美鈴の方だろ!?　さあ、一体何にそんなに怯えてんのか話すんだ!!」
「へぅっ、えうううぅぅぅ……!!!?」
「ええい……!!　こっちは一体何があったのかと聞いとるんじゃあああああっ!!!」
「ひえええぇっ!!?」
「落ち着け」
「あふん」

要領の得ない美鈴に横島が怒りの炎を巻き上げながら迫る。美鈴は恐怖に涙を流していたが、レミリアが割って入り横島にげんこつを落としたことで事態は終息したのだった。

――間――。

「で、何でそんなに怯えてんの？」

横島は頭頂部にでっかいたんこぶを乗せて美鈴に問うた。妹紅はそのたんこぶを優しく撫で、痛みを和らげようとしている。その姿は美鈴にとってとても羨ましいはずなのだが、とある要因が全てを台無しにしていた。

さて、ここで横島達の現在の姿についておさらいしてみよう。

横島は両目から血の涙を流した痕があり、トラウマの傷が開いたことによって脇腹を中心に衣服を血で赤黒く染めている。

妹紅は吐血をしたせいで口の周りが血で汚れ、その吐血と腹の傷が開いたことによりこれまた衣服を血で赤黒く染めている。

二人ともどう贔屓目に見ても完全なるスプラッタホラーの被害者である。

「あー……」

「あー、て。気付いてなかったのか？」

横島の納得するような声にレミリアは呆れた視線を向ける。

「いや、慧音先生と阿求ちゃんは必死に『風呂に入っていけ』って言ってたんすけど、こういうことだったんすね」

「……だって、横島ってよく出血してるし……」

横島の言はともかく、妹紅の言には中々の説得力があった。流血が似合う男、横島。水ではなく血が滴っているのは悲しむべきことなのか。

「ところで……」

と、ここで永琳が声を上げる。皆は永琳に目をやり、次の言葉を待つ。

「何で輝夜は隠れているの？」

そう言った永琳が指差す先、そこには木の陰から身を隠す様に横島達の様子を窺う輝夜の姿があった。

「あっ」

横島と妹紅からそんな声が漏れる。まるで輝夜の存在を今の今まで忘れていたかのような反応だ。というか確実に忘れていた。二人はこめかみから汗を一筋垂らし、視線をさっと逸らす。

「……やっぱり忘れてたんだ」

本来なら聞こえるはずがないくらいに小さくぽそりとした声が二人の良心を抉る。結果、二人は視線を合わせたかと思うと輝夜の元へと走り、それはもう見事な土下座を披露した。

紅魔館正門での喧騒から数十分後、皆はグレート・ホール――食堂に集まり、それぞれ自由に過ごしていた。

この場にいないのは永琳、鈴仙、フラン、妹紅、そして横島の五人。フランは未だ意識は戻っておらず、自分の部屋で寝かされている。吸血鬼の再生能力は確かなもので、しばらく安静にしていればすぐに回復するだろう。

横島と妹紅はそれぞれ永琳と鈴仙に診察を受けている。二人とも傷が開いていたのだ。蓬莱人とはいえ適切な処置は必要だろう。

「……戻ったようだな」

まったりとした空気が流れること約一時間。フラン以外の四人は食堂へと戻ってきた。

「どうだった？」

「皆特に心配はいらないわ。しばらく安静にしていたらすぐ回復するわよ」

「そうか……ならいい」

レミリアはほっと一息吐き、横島達に着席を促す。皆がここに集まっていた理由の一つが無事に済んだ。では、次だ。

「それで？　結局『アイツ』は何者だったんだ？　お前は何か知ってそうだが……」

その一言で空気が変わった。今回の異変の犯人である『男』は、何やら永琳達と因縁がありそうだった。

「……」

永琳は暫し目を瞑り、頭の中で考えを整理する。結局、出された答えは今までと変わらなかった。

「あれが何者かは私にも分からないわ。私の本名を知っていたから月人であることだけは確かだけれど……」

現在あの『男』について分かっていることは、月人であること、竹取の老夫婦を殺害し、蓬莱の薬を服用し蓬莱人になったこと、何らかの理由で蓬莱人ではなくなったこと、文珠を求めていたこと、高島の身体を乗っ取ったこと。重要なのは大体この五つだ。

『男』が月人であり、竹取の老夫婦及び高島の命を奪っていることから永琳とほぼ同時期に地上へやって来たことが窺える。この時永琳が真っ先に除外した可能性は皆殺しにした月の使者が生きていた可能性。

永琳はあの時、使者達の頭部か、心臓を確実に射抜いていった。いくら月人が地上の人間や妖怪と次元違いの力量を持っていたとしても、彼らは生物なのだ。生命活動において重要な役割を担っている脳や心臓を破壊されて、生きていられるはずがない。

それらを踏まえて考えられるのは、月から新たに使者が送られてきた可能性。何せ月の頭脳とまで言われた程の存在が使者を皆殺しにし、月の姫と共に逃亡を図ったのだ。それらに対する調査隊が送られてくるのは当然と言えるだろう。永琳が高島から得ていた情報にこれらのことも含まれている。

しかし、ここで問題になってくるのが月人の性格だ。

月人は地上の人間を下賤な存在として完全に見下している。地上は月の都の一部と言って憚らず、監獄のような所と断じている。更には自分達月の民が地上へ争いを齎し、文明を発展させている。

かと思えば、月人は地上の人間達を恐れてもいる。数十年前に発見された量子論を始め、現在の地上の民達の科学力の発展には月の都のトップである『月夜見（ツクヨミ）』をも驚愕させたらしい。自分達が発展させたと嘯いておきながら、地上の民が月の都へといつか辿り着いてしまうのではないかと恐れているのである。

まあ、主な要因は科学力ではなく『穢れ』を持ち込まれることに関してなのだが……。もしかしたら、これは危険とされる動植物をガラス越しやテレビといった映像を介して

見る事は許容出来るが、実際にそれらと同じ空間内にいることは許容出来ないということなのかも知れない。

では、そんな潔癖症でプライドの高い月人が長時間地上へと滞在出来るのか。または頻繁に地上へとやって来れるのか。結論から言えば、これは出来てしまうのだ。

事実輝夜が地上で生活をしていた際には月からの監視員が彼女を見張っており、竹取の老夫婦に対して光る竹に黄金を入れておくことで輝夜の世話の報酬を何度も払っている。更に前述の永琳達の調査・捜索に加え、仕事か遊びかは不明だが玉兎達も頻繁に地上へと訪れていることを示唆する会話をしていたこともある。

それに何よりも、かつての永琳の教え子であり、現月の使者のリーダーである綿月姉妹が『Q（急に八意様に会いたくなったので）Y A』という理由で幻想郷にやって来たりするのだ。これには流石の永琳も苦笑い。まあ、永琳にしてみれば未だ自分を慕ってくれている二人のことが可愛くて仕方がないようなのだが……今はそれは置いておこう。

大分話が逸れていってしまったが、結局の所あの月人が何者だったのかは分からない……というのが結論だ。永琳達は上手く隠れることが出来た。否、上手く隠れすぎてしまったといったところか。情報を仕入れるならば高島に動いてもらうだけでなく、自分でも動くべきだったのかも知れない。

そう語った永琳にレミリアは難しい顔をしたが、すぐに大きく息を吐いて表情を緩めた。

「ま、アンタでも分からないんじゃ私達が考えても無駄か。何かスッキリしないけど、もう一応の解決はしたんだし、安楽椅子探偵レミリアの活躍の機会はないか」

「安楽椅子探偵を勘違いしてない？」

レミリアの言葉に永琳が苦笑を浮かべる。それを機に皆の空気が弛緩していくのが感じ取れる。なので、永琳はせっかくなので先程から気になっていることについて横島に尋ねてみることにした。

「ところでぇ、永琳、とっても気になることがあるのぉ～」

――それは、その場に居たほとんどの者に怖気を走らせた。

猫なで声を発しながら一人称を『永琳』と自分の名前にし、くねくねと身を捩じらせながらの言葉。言うまでもなくただただ不気味であった。横島は全身から冷や汗を流しつつ「……何でしょう？」と応える。思い切り思い当たることがある故の反応だ。

「えっと～、どうして～、横島君はそんなにも輝夜にベタベタと引っ付いているのかしらぁ～……!!?」

圧倒的なまでのプレッシャーが横島を襲う。永琳の質問は皆も気になってはいたことだった。横島が空いている席――輝夜の右隣に座ると、輝夜が横島の左腕を抱き込ん

だのだ。あまりにも自然な動きだったので、当初は皆気にも留めなかったのだが、レミリアと永琳が話している間に段々と気になってきたらしい。

それに対して横島の右隣に座った妹紅は輝夜に怒るでもなく、やや羨ましそうに輝夜を見つめるだけだった。互いに好き合っていると判明したとはいえ、人前で自分から横島に引っ付いたりくっついたりとかはまだ恥ずかしい。妹紅に取れた行動は、横島の膝に置かれた右手に自らの左手を重ねることくらいだった。

「ほら、どうしたの横島君？　私は、『どうして？』って聞いているのよ？」

答えない横島に永琳の威圧が強くなる。両隣の二人はどことなく幸せそうな顔をしているが、横島はそうはいかない。とんでもない緊張感の中、心臓が限界近くまでその鼓動を早めているというのに何故かどんどんと顔から色が抜け落ちていく。最早青を通り越して白い。

流石にそんな状況を哀れに思ったのか、レミリアが割って入る。

「待て待て永琳。あれはどう見ても輝夜の方が……」

「何かしら、レミリア？」

「……いえ、何でもありません」

レミリアはあっさりと屈した。幻想郷でもトップクラスの実力を持つレミリアでもあれはダメだ。とても怖い。永琳は凄く綺麗な笑顔だったというのに、何故だか体の震

える。横島などはもう気絶してしまった。その口からは何やら魂が抜けているようにも見える。……魂が主となっている蓬莱人の魂が抜けるというのもおかしな話なのだが、そうなっているのだから仕方がない。相変わらず何とも器用な男である。

「まあまあ永琳、落ち着いて。レミリアが言った通り、これは私の方がくっついてるんだから」

輝夜が横島の腕に頬擦りをしながらそう言った。途端に収まる永琳のプレッシャーに、周りの皆はほっと息を吐く。

「それで？　どうしてそんなにも横島君にくっついてるの？」

永琳が両手で頬杖をつき、不貞腐れたように言う。対する輝夜は少々考え込むと、あっけらかんと理由を述べていった。

「んー、横島さんは私の難題を偶然とはいえちゃんとクリアしたわけだしね。横島さんがこのまま頑張っていけば私を娶ることも充分有りえる話だし？　そのための餌というか何と言うか。私も横島さんは嫌いじゃないしね」

「むむむ……」

永琳は輝夜の言葉に思わず唸る。彼女の口ぶりからすれば、横島の妻となっても良いと言っているのと同義。輝夜自身がそれを望んでいるのなら否定するわけにもいかな

い。

　他の皆は輝夜の発言に驚いていた。横島がいつの間にか輝夜に難題を出されているのもそうだが、それをクリアしたこと、そして輝夜が横島を憎からず思っていることに。それが本当に恋心かはまだ分からないが、少なくとも将来一緒になっても良いくらいには考えているらしい。

　横島に好意を抱いているメンバーに少なくない動揺が走る。相手は傾国傾城。勝ち目は薄い。

「この場合妹紅が正妻で私が妾になるのかしら？」

「ん？　……いや、それはお前が正妻になるんじゃないの？　あー、でも横島なら家柄とか頭の良さとかは考えないかな。こいつは一号二号とかは気にしなさそうだし」

「あー、それもそうか」

　――ぶふぅっ!!

　輝夜と妹紅の話を聞いた皆が噴き出した。いつの間にか妹紅が横島の妻扱いをされている!?　一体妹紅を追っていった先で何があったのか。

「ももも妹紅さんっ！　よ、横島さんのお嫁さんになってたんですか!?」

「うえっ？　いや、それはまだだけど……」

「まだってことはこの先執事さんのお嫁さんに!?」

「ま、まあ、いつかは……」
「というか輝夜さんまでお嫁さんってどういうことなんです!?　妹紅さんはハーレムとかそういうのは容認派だったんですか!?」
「ん、んん……？　ハーレムも何も、男は妻を何人娶ってもいいはずだろ？　むしろどれだけの女を養えるかが重要なわけで……」
「そういえば妹紅さんは平安時代の人でした……!!」
「よしっ!!　これで私も執事さんのお嫁さんになれる!!」
　それはカオスであった。小悪魔とてゐが妹紅から話を聞いているのだが、妹紅は平安時代の価値観そのままに天然ボケを発動。それによりハーレム賛成派の小悪魔とてゐは喜びの声を上げている。小悪魔はパチュリーが呆れたような目をしていることにも気付けていない。
　さて、妹紅の言葉に喜ぶ小悪魔とてゐだが、逆に複雑な表情を見せる者も存在した。美鈴である。美鈴の様子がどこかおかしいことに気付いた鈴仙は、美鈴にどうしたのかを聞くことにした。
「ちょっと美鈴、複雑そうな顔してどうしたのよ？」
「あ、鈴仙さん……」
　美鈴にはいつもの覇気がなく、何か思い悩んでいるようだ。美鈴は鈴仙が以前にも相

談に乗ってくれたこともあり、今回もぽつぽつと話していく。

「いえ、大したことじゃないんですけどね。私もハーレムとかそういうのは管理出来るのなら好きにすればいいと思っていた口なんですが……いざ自分がそういった立場に近くなると、何か複雑で……」

「あー……」

鈴仙は納得した。確かに当事者となってしまっては色々と気が引けたり、考え込んでしまうこともあるだろう。鈴仙にとって横島はあくまでも友人である。それくらいには彼に対して好意を持っている。スケベなところもあるが、仕事はきちんとこなすし、優しく思いやりもある。コンプレックスの塊な部分が如何ともし難いが、最近では美鈴と輝夜やてゐ、妹紅が横島を好きなのならば応援はしようと思えるくらいに信頼を抱けている。

今回のことも美鈴が本気で横島のことを好いているのを鈴仙は知っている。どうにか応援をしたいところだが、あまり答えを出すのを急かすのも問題だ。鈴仙にとって恋愛関係の相談事など専門外以外の何物でもない。それが正しい助言なのかは分からないが、鈴仙は発破をかけるに留めておく。

「……何というか、私は今好きな人がいないから何とも言えないけど……黙ったままとか、自分の気持ちに背くようなことはしない方がいいと思う。こういうことは経験がな

いから月並みなことしか言えないけど、ちゃんと考えて、後悔のないようにね？」
「鈴仙さん……」
美鈴は自分の相談に真摯に応えてくれる鈴仙に深い感謝を抱く。前回の相談の時も嫌な顔はしていたが、根気よく自分の話を聞いてくれていた。美鈴は鈴仙と友人になれたことを永琳と紫、レミリアに感謝するのだった。
「あ、でもあんまり考え過ぎてるとどんどん後回しになっちゃうかも……」
「ううっ!?」
「今は身内で済んでるけど、横島さんも空を飛べるようになって行動範囲も広がるだろうから、もしかしたら人里とかでぽっと出の女の子に先を越されるかも……」
「はうぅっ!!」
それは鈴仙の無意識による攻撃だった。美鈴は以前自分の恋心を更年期障害だと勘違いしたことがある。そんな彼女にとって、先を越されるというのは我慢ならない物がある。自分はまだ若いという誇りの為に。
異変が解決した夜。紅魔館はいつもの平穏を取り戻すことが出来ていた。

翌日の昼前。妖怪の山のとある場所で射命丸文はピリピリとした雰囲気を撒き散らしていた。その理由は動物達の内臓が刳り貫かれるという異変を警戒しているため。

文は幻想郷最強の種族（仮）の天狗の一員であり、その中でもトップクラスの実力を誇っている。しかし、相手はあの鬼の萃香をも打倒する怪物だ。警戒に警戒を重ねてもまだ足りないかも知れない。

文は険悪とも言える雰囲気を纏ったまま、茶屋に入る。文の姿を見た天狗達は皆一様に頬を引きつらせ、徐々に喧騒も収まっていった。

文は一先ずお茶と団子を注文。待っている間に今後の予定を考える。萃香すら倒すような相手をどうやって倒すか。これに対し文は即座に答えを出す。

「……よし、強い人を片っ端から誘って、数の力で制圧しよう」

要するに袋叩きにしようというわけである。少々短絡的だが、これは理に適っている。どれだけ単体が強くとも、結局は数の前には屈するしかないからだ。尤も、例えば月人のように次元違いの存在が相手だった場合は話が別だが……。

「何をイライラとしているんですか、文さん？」

「ん？　……げぇっ、椛（もみじ）!?」

「げぇ、とは何ですか」

近寄りがたい雰囲気の文に話しかけた者、それは白狼天狗の犬走椛（いぬばしりもみじ）。河童のにとり

同様地位を越えた友人関係ではあるのだが、文はこの椛を少し苦手としていた。
「全く、ただでさえ最近物騒だというのに、憩いの場で物騒な雰囲気を撒き散らすのはやめてくださいよ」
「悪かったわよ。……ところで、椛がこんな時間にこういう場所にいるなんて珍しいけど、何かあったの？」
そう、椛は真面目で融通が利かないことで有名である。上司である文に振り回されることもあるので性格は軟化していってはいるのだが、それでも折り合いは悪いらしい。文のような鴉天狗を軽視していることも関係はあるのだろうが、今現在はそれ程でもないようだ。文との付き合いでどんどんと悪い部分も伝染している。
「いえ、ちょっと信じがたい光景を目の当たりにしたもので、疲れてるのかと思って……」
「信じがたい光景……？　なんですかそれ!?　ちょっと詳しく聞かせてくださいよ!!」
椛の言葉に文は瞳をキラキラと輝かせながらメモを取り出す。すっかりと取材モードのスイッチが入ったのか、口調も余所行き用の敬語に変化する。椛はこの状態の文に何度となく振り回されているので勘弁願いたかったが、せっかく話を聞いてくれるようなので話すことにした。
「私の能力で見張りをしていたんですけど、たまたまはたてさんが能力圏内に入ってき

ましてね」
「あの引きこもりのはたてが？　……それで？」
「ええ、珍しいなーと思ってついつい姿を追ってしまったんですけど、何か、念写をしてはにやにやと笑っていたんです」
「それは、中々に不気味ですね……。それで、一体何が映っていたのかは分かりますか？」
　文の握るペンに熱が篭っていく。椛も少々溜めを作り、何だかんだでノリがいい。
「見てしまったんですよ。はたてさんが、男の写真を見てにやついていたところを……!!」
「な、何ですってーーーーーーー!?!!」
　大きな声では言わず、文にだけ聞こえるような声で衝撃の事実を話す。その効果は抜群であり、文はメモを取ることすらせずに驚きに固まっている。
「……はっ!?　そ、それはマジなんですか!?」
「ええ、マジもマジ。大マジです。私も能力のおかげでその写真を見ることが出来ましたからね。……悪いとは思いましたが」
「さすが『千里先まで見通す程度の能力』の持ち主ですね!!　それで、その男性はどんな方だったんですっ？」

心なしか二人の目が輝いている。こういった恋愛話が好きなのか、声の調子も普段より高めだ。

「画面が小さかったので詳細な表情までは見えませんでしたが、外見的な特徴は覚えてますよ。短めの髪を総髪にして、外の世界の洋服でしょうか？　黒を基調とした衣服に身を包んでいましたね」

「なるほどなるほど！　総髪（オールバック）で黒い洋服を着た男性ですね！　……ん？　オールバックに……黒い、洋服……？」

メモを取る文の動きが止まる。何か、つい最近そんな服装の人を見たような……？

取り合えずお伺いを立ててみることにする。

「他に何か特徴は？」

「……そういえばその方の周りに、西洋の給仕服を着た妖精が映ってましたね」

「あ、これ確定ですね」

射命丸文、思わぬところで身内限定のスクープをゲットする。彼が現在お世話になっているところは強者揃いだ。異変解決も含め、近いうちに顔を出そうと決める。

「もちろんはたても連れてね!!」

「……急にどうしたんです？」

急に席を立って気炎を吐く文に、椛は不思議そうな顔をするのだった。

第三十七話
『ミーハー恋心』
～了～

おまけ
今明かされる、萃香敗北の軌跡!!
萃香「あ、何か怪しい奴がいる。霧になって近付いちゃえ」
『男』「何だこの霧、邪魔だな。散らそう」
萃香「ぐわあああああ!!　体が散らされるうううう!!」
萃香「……死ぬかと思ったよ」
文「やべえよやべえよ……」
※大体こんな感じです※

おまけ～了～

第三十八話『青天の霹靂』

文達が話していた時より、時間は少々巻き戻る。

『男』の異変が解決した日の翌日、時刻は午前の8時。その時間に、1人の男が目を覚ました。

紅魔館の執事、横島忠夫である。

普段の彼からすれば、それは余りにも遅過ぎる起床だ。しかし、これにはちゃんとした理由がある。

横島は自らの主、レミリアから2日程休みを言い渡されたのだ。

横島は『男』との戦いで瀕死の重傷を負い、挙句蓬莱人へとその身を変化させた。身体のダメージは蓬莱人の特性故にすぐ治ったが、それでも精神的な疲労は色濃く残る。

だからレミリアは横島に休養を取らせたのだ。その時の横島の目に涙が溜まっていたのは、気のせいではあるまい。

「ん……」

声にもならぬ吐息が漏れた。目覚めた横島がまず最初に感じたのは、身体の重み。そ

れは精神から来る重みでも、肉体のダメージから来る重みでもない。何かが上に乗っている、物理的な重みだ。

「……やっぱりこいつらか」

視線を自分の身体へと移す。まず目に入ったのは、自らの身体の上ですやすやと寝息を立てる三号の姿。その後右腕と左腕に目をやれば、腕に抱きつくように――というよりは巻きつくように寝ている一号と二号の姿。感触からすれば、脚にも誰かが抱きついているようだ。

「ふうー……」

横島は大きく深呼吸をし、全身の霊力を活性化させる。そのまま霊力を身体の表面に纏う。これにより、横島は霊力による膜を形成した。この膜の効果により、横島と一号達の間にごく僅かな隙間が出来た。

「――ふっ」

その隙を見逃す横島ではない。横島は一瞬の内に脱力し――〝にゅるん〟と、まるで軟体動物のようにベッドから抜け出した。相も変わらず人間離れした男である。

その後横島は伸びをして身体の凝りをほぐし、カーテンを開けて朝の陽光を部屋に取り込んだ。

「おー、いい天気だ。昨日の雨が嘘みたいだな」

爽やかな朝の日差しを浴び、横島の身体が徐々に覚醒していく。そしてその陽光は未だ眠っている一号達の意識も覚醒へと導いた。

「……あれ、よこしまさん……？」

「お、目が覚めたか？」

横島は眠そうに目を擦る一号の頭を撫でる。わしゃわしゃという、その少し強い感触が一号の眠気を体外へと押しやった。

「あ……おはようございます横島さん。もう身体のほうは大丈夫なんですか？」

「おう、へーきへーき。たっぷりと寝たし、暴れたりとかしなきゃ問題ねーよ」

一号の問いにそう返した横島は、また一号の頭を撫でる。心配してくれたのが嬉しかったのだろう。一号もご満悦だ。

横島達がそうして和んでいると、他の3人も目を覚まし、もぞもぞとベッドから這い出てくる。

「んー……」

「おはようございますー……」

「執事さん、身体は大丈夫なの……？」

眠そうにしながらも二号と三号が横島へと頭を擦り付ける。これは妖精メイド達の中で流行っている行為で、ようは「頭を撫でろ」という意味だ。横島は少々呆れた顔を

しつつも2人の要望に応えてやり、多少荒っぽく撫でてやる。哀れ2人の頭が揺れ動き、髪は起き抜けというのを差し引いてもボサボサとなってしまった。

「お、脚にくっついてたのはてゐちゃんだったのか。身体は問題ないよ。特にしんどいってのもないしな」

「……ん、それなら良かったよ」

横島の返答に納得したのか、てゐは二号達に倣うように横島へと頭を擦り付ける。これには横島も苦笑を浮かべ、てゐの頭を撫でてやった。二号達とは撫でる強さが違ったので、二号達に贔屓だ何だと騒がれたのは止めてほしかったが。

「……」

そんな二号達に絡まれている横島を、てゐは神妙な表情で見つめる。てゐが横島のベッドに潜り込んだのにはある思惑があったのだ。

それは、横島に自分の能力を浸透させること。てゐの能力は『人間を幸運にする程度の能力』だ。横島が重傷を負った時に自らの能力を使っていれば、と考えたのを実行に移したのである。

そうして深夜にベッドに潜り込み、横島の身体に抱きついて能力を行使。これで彼は幸運に恵まれるはずだ……と思ったのだが、どうにも妙な感覚に囚われる。

それはてゐにも上手く言葉に出来ないような感覚だ。ほんの僅かな、ともすれば全く

気付かなくてもおかしくはないような、些細な違和感。

そう、それはまるで大き過ぎるが故に相手の存在に気付かないような。自分の能力なぞ歯牙にもかけないほど強力な存在に祝福されているような、そんな感覚。

てゐはその感覚に数分程悩まされたが、それでも横島に自らの能力を発動した。彼には自分が幸運を授けるのだと、巨大な何かに宣言するかのように。自らの愛する者の、助けとなるために。

「ま、何かの足しにはなるでしょ。継続は力なりってね」

てゐは自らの能力の出力の弱さに溜め息を吐きたくなるが、それでも前向きに考えることにする。毎日同じようにすれば塵も積もって山になるだろう、と。

「さて、朝飯の時間まであと少しだし、とっとと用意して食堂に向かおうぜ」

「はーい！」

横島の音頭に皆が元気良く返事をする。洗顔、歯磨き、着替え。それらを済ませた一行は、一塊となって食堂へと向かった。ちなみに横島の服装は紫が用意してくれたTシャツとジーパン。髪も最近では珍しく下ろしているので、いつもの大人びた雰囲気ではなく年齢相応の外見となっている。そんないつもとは違った魅力を放つ横島が隣にいるのだから、一号達はるんるん気分で鼻歌なぞ歌っている。

――食堂にて横島に負担をかけたとして、咲夜から大目玉を食らうとも知らずに。

第三十八話
『青天の霹靂』

食堂に着いた横島は食堂の雰囲気……というか、紅魔館そのものに漂う雰囲気に冷や汗を流していた。

――っべー、何だよこの雰囲気。まじ、っべーわ。

余りの動揺に言葉使いが乱れている。それもそうだろう。食堂に着くまでに、横島は妖精メイドの何割かに何かを期待するような目で見られた。

それはやたらと熱が篭っていたというか、想いが篭っていたというか……。今もそんな目で見られている。しかも妖精メイドだけでなく、小悪魔やてゐ、そして他の者達よりは格段に劣るが美鈴にも。ちなみにだがフランはまだ意識が戻っておらず、妹紅はすやすやとおやすみ中である。

理由が分からない横島は気分を変えるためにとある場所を見る。そこは食堂の隅。その場所には頭に特大のたんこぶを乗せた一号達が折り重なるように倒れていた。

咲夜によるお仕置きの結果である。既に完治しているとはいえ、昨夜とんでもない重傷を負った横島に対して負担をかけた事を咎められ、げんこつを受けたのだ。

横島の視線に釣られたてゐが一号達を見て、頬を引きつらせる。今回は理由が理由だけに見逃されたが、一歩間違えれば自分もああいう目に遭っていたのだ。しかも咲夜ではなく永琳の手によって。もしかしたら冗談抜きで命拾いしたのかも知れない。

さて、朝食はそのまま恙無く終了し、一応はまったりとした空気が流れている。だが、良く見ると横島の様子がおかしい。注意して観察してみれば、彼は紫と永琳にアイコンタクトを試みているようだ。

当の紫達は勿論横島の視線に気付いている。気付いているのだが、横島の慣れていないサインの出し方が面白くて、少しの間だけ静観しようとしているのだ。

横島は妖精メイド達に絡まれつつも、時折紫達をチラチラと見ながら〝パチーン〟とウインクを決めている。その様が面白いのだ。

横島は紫達が気付いているのに動いてくれないことに気付いているので、少々焦って若干涙目になってきた。パチュリーはそんな横島を眺めて頬を紅潮させ、「むきゅー」と鼻息を荒くしている。

「あー、横島？　後で話があるからいつものゲストルームに来なさい。皆もそろそろ仕事に戻るように」

さて、そんな横島の様子を見かねて助け舟を出すのはこの方、レミリアお嬢様だ。横島がレミリアに抱く感情が感謝や尊敬、それに類する物から崇拝に変わるのは、そう遠い未来ではないのかも知れない。

「何だ、つまらないの」

「永琳……まあ、私も人の事は言えませんけれど」

いつもなら不満そうに呟く永琳を咎める紫だが、今回はそうもいかない。永琳と一緒に横島を苛めたのは自分である。しかし、紫はパチュリーが横島を苛めたいと言った気持ちが分かるような気がした。彼の涙目は可愛い。これは是非とも旧地獄に住んでいる友人、さとりにも見せてあげたい。紫は密かに横島の泣き顔にはまりつつあった。

一方その頃の地霊殿。趣味の小説を執筆していたさとりは何故だか急に頭に〝ピキュリリリリンッ！〟と飛び込んできた謎の映像を見て、一切の動きを止めた。数秒……あるいは数分間が経ち、さとりは頬に手を当てて、熱が篭ったように呟く。

「……可愛い、ですね」

ほぅ……と息を吐くさとり。彼女の肌は、心なしか先程までより艶めいているようだった。

所変わってゲストルーム。そこには横島とレミリア、咲夜。紫と永琳。そして何故かパチュリーがいた。
「何でパチェまで？」
「暇つぶしに」
何とも単純明快な理由であった。それを聞いて横島が数少ない窓の向こうを見つめる。彼の心とは裏腹に快晴だ。
「それで、一体どうしたの？　紫達に下手糞なウインクまでして」
「あー……簡単に言えば、いつも通り相談事、っすね」
レミリアの問いに、横島は視線を逸らして答えた。それを見て、紫と永琳がピクリと反応する。どうやらたったあれだけの仕草で大体の見当を付けたようだ。
「相談事ね……。それはともかく、妹紅と恋人同士になったんですって？　おめでとう、横島君」
「ああ、そういえばそうだったな。おめでとう」
「いやぁーそんな！　うは、うははっ!!」
永琳は一先ず話題を逸らし、横島と妹紅の関係が進展したことを祝福する。永琳に倣

い他の皆も祝いの言葉を贈り、それを受けた横島は大変照れ臭そうに頭をガシガシと掻き、妙な笑い声を上げている。このように妹紅の事を考えるだけで心がどうしようもないほどに熱を帯びるのだ。彼女以来の感覚に、横島も浮き足立っているのかも知れない。

「――で、その妹紅に関して何か後ろ暗い感情があるのかしら？」

「――ッ」

ピシリ、と。永琳の言葉を受けて横島が石化した。レミリアとパチュリーは単純に興味深そうに、紫と咲夜はそんな横島を冷ややかな目で見つめる。

「それで、どういうことなの？　妹紅のことが好きじゃない、ってわけじゃないんでしょ？」

「そ、そりゃー勿論っすよ！　俺はアイツのことが好きっすから！　……はっ!?」

横島は全てを言い終えてから気付いた。皆がニヤついているのである。全ては横島をからかうための布石だったのだ。

「あああああああ!!?」

横島は真っ赤になった顔を両手で隠して床をゴロゴロと転がる。その様は非常に楽しいものだったのだが、パチュリーが「埃を立てるな！」と横島を魔法陣から射出した鎖で拘束。椅子に雁字搦めで縛りつけた。両手も後ろ手に縛られているので顔も隠せ

ない。

「それでー？　妹紅の何が不満なの？」

再度の永琳の問い。横島は暫くの間口を開閉したりしてもごもごとしていたが、やがて覚悟を決めたのか、ゆっくりと話し始めた。

「いや、妹紅に不満がある訳じゃないんすよ。何つーかですね。妹紅って何か知らないんすけど、ハーレム容認派みたいでして」

「ああ、彼女は一夫多妻制だった平安時代の人間だからね」

「え!?　平安時代ってそうだったんすか!?」

現代日本の結婚制度は一夫一婦制が法的に定められている。妻が2人以上存在すると重婚とみなされ、違法となってしまうわけだ。だが、平安時代では一夫多妻であることが一般的であり、男は妻を何人娶っても良いとされていたのだ。

より多くの女性を養うこと。それが当時のステータスだったのである。

しかし正妻は1人だけであとは妾。妹紅と輝夜が話していた知性や家柄で正妻が決まるのだ。そして全員が一緒に住むわけではなく、夫が妻のもとへと赴く〝通い婚〟が主流だった。

「――という訳で、現代と平安時代では結婚観そのものが違ったの。もっと細かいルールもあったのだけれど、今回は省きましょう」

「ほぇー、なるほど。さすが紫さん。物知りっすね」
「ふふ、ありがとう」
　紫が平安時代の結婚について皆に説明をする。横島はどことなく馬鹿にしたような物言いをしているが、彼は紫に本気の賛辞を贈っている。紫もそれを理解しているのでにこやかに感謝を述べるのだった。
「んーで、話を戻しますけども。その、妹紅とそういう関係になったばっかなんすけど、他にもその……かなり気になる子がいまして……」
「ああ、なるほどね」
　特定の女の子と恋人関係になったというのに、他の女の子にも惹かれていたら、それは後ろ暗いなんてものではないだろう。いくら妹紅がそういうのに寛容な価値観を持ち、横島がハーレム願望を持っているとはいえ、いざ本当に別の女の子にも手を出すとなると、非常に重い罪悪感を抱いたようだ。
「あー、妹紅が気にしなくても、お前の方がかなり気にしているわけか。何というか、かなり意外だな」
「そうね。横島のことだから、皆まとめてワイのもんやー、とか言って一気に食い散らかすと思ってたんだけど……」
「分かってはいましたけど酷くないっすか……」

レミリアとパチュリーの言葉に横島はるーるーと涙を流す。自分でも理解はしているのでダメージは少ないが、それでも傷は受けるのだ。

「それで、気になる子っていうのは誰のことなの？　やっぱり、順当にいって輝夜かしら？」

「美鈴じゃないの？　普段から仲が良いし、本命ってことで」

「じゃあ私は大穴で鈴仙で」

「それじゃあ私は小悪魔で」

「皆さんノリノリですね……」

皆がそれぞれ予想を立てている様を、咲夜は冷や汗混じりに見つめる。皆が互いの名前を出さないのは、もし当たっていた場合、色々と困ってしまうからだろうか。咲夜としては案外レミリアがそうなのではないかと思っている。まあ、当たっていた場合には冷静さをかなぐり捨ててしまうかもしれないが、誰かを想うことに罪は無いだろう。

咲夜もそれは理解している。理解しているがそれを飲み込めるかは別問題だ。なので、自分の予想が当たっているか横目に横島を観察してみると、何やら面白いことになっている。全身を冷や汗で濡らしているのだ。もしかしたらこれは当たりだろうか？

「どうしたの、横島さん？」

「うえっ!?」

　咲夜は少々大きめの声で横島に話しかける。その声に横島はびくりと身体を震わせ、予想を言い合って楽しんでいた他のメンバーも横島に注目することとなる。

「あら、これはもしかして……」

　永琳が横島の様子を見て、もしや自分達が出した予想の中に答えが出ていたのではないかと思う。それは皆も同じだったのか、皆の表情が瞬間的にニヤニヤとしたものに変わる。

「で？　誰なのよ、言ってみなさいよ」

　レミリアが横島を肘でつつきながら催促をする。その表情は実に楽しそうだ。横島はそんなレミリアの顔を真っ直ぐに見ることが出来ない。彼はレミリアにも後ろ暗い感情があるのだ。横島は思わず両手で顔を押さえてしまう。

「――ちゃん、です」

「んー？」

　覚悟を決めたのかは定かではないが、横島は搾り出すようにその相手の名前を出す。上手く聞き取れなかったレミリアはより顔を近づける。そして、その名前を聞いた。

「気になってるのは……フランちゃんなんです」

「――」

先程よりも大きな横島の声。それはその場にいた者達の鼓膜を震わせ、まるで時間が止まってしまったかのような錯覚を抱かせた。

「――――えええぇぇ!?」

皆の悲鳴のような声が部屋中に響く。

「横島君、ついにそっちに目覚めたのね!!」

「あれほど自分はロリコンじゃないって言っていたのに……2人の間に何があったのか、気になりますわね」

「私の予想も、けっこう好い線を行っていたのね……」

「……というかいつの間に私の拘束を外したのよ!? さりげなく物理法則を無視しないでくれる!?」

皆が口々に驚愕の声を上げる。それもそうだろう。紫の言うように、横島は自分はロリコンではないと頑なに主張していた。そしてそれが真実であることも皆は知っている。少なくともフランくらいの見た目年齢の少女を恋愛対象として見たり、性的興奮を覚えたりはしていなかった。

となれば、自分達が知らない間に2人に何かがあったと考えるのは自然なことだ。それが一体どんなことなのか気になるのは当然のこと。しかし、今はそれよりも気になることがある。

レミリアだ。ご存知の通り彼女はフランの姉であり、妹を大切に想っている。フランに仇なす者がいるのなら、レミリアはその者を生かしてはおかないだろう。横島が全身を濡らす程に冷や汗をかいていたのはそのためだ。

自分は一体どんな仕打ちを受けるのか……それを考えると震えが来る。横島と他の皆はレミリアに注目する。――しかし。

「……ふむ。そうか、フランのことが気になるのか」

レミリア、意外にもこれを冷静に受け止める。これには皆も拍子抜けだ。横島は恐る恐る彼女に意見を聞く。

「あ、あの～……。俺に対して何かお仕置きはないのでしょーか……？」

「あー？」

その横島の言葉にレミリアは「何言ってんだこいつ」といった表情を浮かべる。

「いや、別にアンタがフランに恋愛感情を持ったくらいでそんなことはしないわよ。第一フランはアンタに惚れてんのよ？　アンタがフランの気持ちを踏みにじったりとかそういうことでもしない限り、私は応援するわよ？　……アンタのことは信頼してるしね」

何とも大人な意見を言ってくださった。レミリアのフランに対する愛情の程が窺える。そして、横島への信頼もだ。

フランは元々情緒不安定であったため、かつてのままだったならばレミリアもこれを良しとはしなかっただろう。だが、現在のフランはレミリアと横島の尽力で格段に安定している。

横島ならば、良いだろう。それがレミリアの結論だった。

「お嬢様……!!」

その自分に対する多大な信頼に、横島は感動する。横島は涙を浮かべ、俯いてしまう。巨大な感動と、それと同じくらいの申し訳なさでまともに顔を見れないのだ。

レミリアの顔を見れないのは横島だけではなかった。他の皆も同様にレミリアから視線を逸らしている。彼女の言葉を聞き、何だか無性に自分が恥ずかしくなったのだ。咲夜は「これが天使……」などとわけの分からないことを呟いている。

「まあ、あれよ。私は2人の仲を……3人？　3人の仲を応援してるからさ。私に遠慮せずにフランに気持ちを言ってやってよ」

「お嬢様……」

レミリアは横島の肩をポンと叩く。まるで彼女の気持ちが伝わってくるかのような、暖かさが宿ったその手。横島はその手を認識しながら、血を吐くような思いで自らの更なる心情を吐露する。

「お嬢様……俺は、迷ってるんすよ。確かに俺はフランちゃんのことが気になってます

し、フランちゃんが俺のことを……好きだってことも知ってます。でも、それでフランちゃんの気持ちを受け入れていいものかどうか……」
「ほう……？」
　ミシリ、と。横島は自分の肩の骨が軋みを上げる音が聞こえた。
「あんなことを言っておきながら、フランを受け入れないと……？」
　横島は冷や汗が止まらない。相変わらず肩には激痛が走っている。爪が皮膚に食い込んで……というか、突き破っている気がする。でも恐怖でそこを見るのが怖い。もしかしたら既に肩そのものが握りつぶされ、千切れ飛んでいるかもしれないからだ。
「まずは理由を言ってみろ。何を迷うことがあるんだ？　あんまりふざけてるとグングニるわよ？　思いっきりグングニるわよ？」
　横島の恐怖が加速した。横島の肩を掴むレミリアの手に、誰かの手が触れた。咲夜が割って入ってきたのだ。助けが来たのだろうか？
「お嬢様、まずは理由を聞いてみましょう。グングニるのはその後でもいいはずです」
「……そうね。グングニるのは理由を聞いてからにしようか」
「グングニるの前提で話を進めるのは止めてくれませんかねぇ……」
「ていうかグングニるって何よ……」
　グングニ・る【グングニる】

［動ラ五詞］
神槍『スピア・ザ・グングニル』を相手に投げつけること。また、神槍『スピア・ザ・グングニル』を相手に突き刺すこと。
類語↓ドリる
「それで、何で迷ってんのよ？」
不機嫌さを隠そうともしないレミリアに、横島は罪悪感が募る。だが、これだけはどうしても必要なことなのだ。どうしても、言っておかなければいけないことなのだ。
「……フランちゃんって、見た目１０歳くらいですよね」
「あん？　……そうね」
「……フランちゃんが気になるっていうのは、つまり俺の守備範囲がそれだけ下方向に拡大しているということ」
横島のその言葉に、部屋が異様な雰囲気に包まれる。誰かが喉を鳴らす音が聞こえた。何故か皆に緊張が走っているのだ。
「そんな状態でフランちゃんを受け入れたら……受け入れたら……他ならぬ俺の手によって、妖精メイド達を含む紅魔館の住人全てに貞操の危機が訪れてまうやないですかあああああぁぁぁぁーーーーー!!!!!」
――ガラタアアアアンツ!!!!!

横島の魂の叫びに呼応するかのように、突如空から雷光が迸った。
窓の外を見れば、いつの間にか空には分厚い雷雲が立ち込めている――ように見えた。ほんの一瞬だけ。
「ＯＨ……」
「……確かに、とんでもない問題ではあるなぁ、これは……」
「ええ、流石に……ねぇ」
横島が話した理由。それに皆は納得を示した。彼女達は横島が妹紅に飛び掛ったり紫や永琳に飛び掛ったりしたところを見ている。それが紅魔館の住人全てに行われるとなると……。
「あー……躊躇する気持ちは分かるなぁ。これはちょっと、ね」
「ですよね!?　考えてもみてくださいよ!!　例えば俺がお嬢様に血を吸われている時に、その時の体勢を利用してお嬢様の身体をまさぐったりとか!!」
「……ほほう？」
「永琳先生をマッサージしている時に『おーっと手が滑ったー!!』なんつってそのチチを揉んだり!!」
「……へぇ？」
「パチュリー様の本を取ってくるついでにパチュリー様の耳元で官能小説の内容を囁き

続けたり!!」
「むきゅう……」
「咲夜さんに料理とか教えてもらいながら油とかでヌルヌルの手でシリやフトモモを触りまくるかも知れないんすよ!?!!」
「なるほどね。それはそれとして、貴方は私のナイフを食らいなさい」
「ありがとうございまアゞアゞァーーーーーっ!!?」
横島はちょっぴり漏れ出した煩悩のままにあるかもしれない可能性を挙げていく。皆はそんな横島に女としての危機感を抱きながらも、それ以上に「しょうがない奴だな」といった呆れた視線を送る。咲夜はその視線と共にナイフを3本程プレゼントしたが。
横島は頭部にナイフが突き刺さりながらも咲夜に感謝する。それは頭に煩悩と共に上りすぎた血を抜くことが出来たからで、決して咲夜にナイフで刺されたことが嬉しいわけではない。決して咲夜にナイフで刺されたことが嬉しいわけではないのだ。
「……横島君の言い分も分かるけれど、それでフランの気持ちを受け入れない、と言うのもねぇ……」
事の重大さを理解しつつも、紫はフランのことを考えて溜め息を吐く。振られる理由がこんなのでは、自分だったら相手をスキマ送りにして何かを施してしまうだろうと思い至る。フランはそんなことをしないだろうが……あるいは、また地下に引きこもって

しまうだろう。
　横島も迷っている、自分たちに相談する、ということからフランに対する想いは受け入れる側に比重が置かれているのだろう。問題は、受け入れた後の自分の振る舞いというわけだ。何とも、何とも妙な話である。
「……取り合えず、一度フランに会ってから決めたらどうかしら？」
　一先ず問題を先送りにし、パチュリーが提案する。
「永琳の見立てでは、フランは午後には目を覚ますんでしょ？　だったらその後のフランのお世話を横島に任せて。……休養中の横島には悪いけどね」
「ああ、いえそんな。……でも、良いんですかね？　俺がそんな……」
　パチュリーの言葉に横島は恐縮する。レミリアに目をやれば、彼女は「うーん」と唸りながら思案中のようだ。それから数秒、ゆっくりと目を開けたレミリアは横島に向き直り、彼に頼みごとをする。
「悪いけど、パチェの言う通りフランのお世話をしてもらうわ。『アイツ』との事であの子も色々とアンタに話したい事もあるかもしれないしね」
「……そうっすね。『あのヤロー』との事に関しては、俺もフランちゃんに話したいことがありますしね」
　果たして、レミリアはその事を知っていたのだろうか。ともかく、横島はフランと一

度話をしようと心に決める。そう考えるだけで彼の心は熱を持つようになっているのだが、彼はその事に気付いているのかどうか。

恋人となった妹紅の事を考えるのと同様に、フランの事を考えるだけでそうなるということは、つまりはもう答えなどとっくに出ているのだということに。

第三十八話

『青天の霹靂』

～了～

第三十九話『はたては彼のファン』

その日、〝姫海棠（ひめかいどう）はたて〟は朝早くから妖怪の山のあらゆる場所に出現した。彼女は引きこもりなのだと周りから認識されている。そんな彼女が鼻歌交じりに山の中を徘徊し、にこにこと笑いながら写真を撮りまくる姿はいっそ不気味であった。

現在の時刻は昼過ぎ。これまでノンストップである。

彼女、姫海棠はたては美少女である。少々癖のある茶色のロングヘアーを紫色のリボンでツインテールにし、襟に紫のフリルが付いた薄いピンク色の短袖ブラウスに黒のスクエアタイ、黒と紫の市松模様が描かれた短めのスカート、そして黒のハイソックスを着用している。有り体に言ってしまえば、外の世界での〝今時の女の子〟、といったところか。

腰にはカメラを入れるための茶色く小さなポーチを着けている。

彼女が使うカメラは文が使うようなカメラではなく、その形状は外の世界で言う所の折り畳み式のガラパゴスケータイ、通称ガラケー（携帯電話）に酷似している。

このカメラは河童製であり、完全防水。また、はたての能力、『念写をする程度の能力』

の特化した作りになっているようだ。

「出ろ～、出ろ～……!!」

さて、そんな彼女が今妖怪の山のどこかにある小川の縁にある大きな岩に腰掛け、カメラを何かに祈るように……いや、念じるように頭上へと掲げる。どうやら念写を行っているようだ。

――カシャリッ、とカメラから音が鳴る。どうやら念写自体は終えたようだ。問題は自らが求める写真を撮れているかなのだが……。

「あ……っ!!」

はたての表情がパァっと明るくなる。お目当ての写真を撮れたようだ。彼女は少々はしたなく顔を歪めながら、軽く口笛などを吹いて撮った写真を吟味する。

「んっふふー、いい感じいい感じー。これでまたコレクションが増えた……♪」

写真を保存してご満悦のはたて。そんな彼女の背後に、何者かの影が迫る。

「……ん?」

背後の森からガサガサと音がする。一体何だろうかとそちらを向けば、その瞬間に音は止んだ。はたては首を傾げつつも気を取り直し、もう一度念写をしようと集中すると、またも背後からガサガサと音がする。

「……何よ、もー」

集中が阻害されて不機嫌になり、念写に回すはずだった妖力を手に集める。先ほどの音は明らかに自然に発生した音ではない。何者かが自分を狙っている。はたてはそう直感した。もしや、最近噂になっている異変の主か。はたての警戒レベルが上がっていく。

今度は音が止まない。はたてが真っ直ぐに見据える場所、そこから何者かの影が浮かび上がる。そいつは真っ直ぐに歩いてくる。はたては緊張からこめかみに一筋の汗を流す。やがて現れたのは……。

「……どうも、はたてさん。お久しぶりです」

「……あんた、椛？」

それは彼女の友人の一人、犬走椛だった。彼女は珍しくこんな時間に武装もしており、何故かやや申し訳無さそうにはたてを見ている。

「何だ、警戒して損したー。それにしても、何かあったの？　あんたが仕事さぼってこんなとこに来るとは思えないし……」

「ええ、その。何というか……すいません」

「へ？」

椛の突然の謝罪。意味が分からず首を傾げていると、ふと自分に影が差したように視界が暗くなった。曇ってきたのかな？　と視線を空へとやってみれば、

「わっっっ!!!!」
「ひゃあああぁぁぁぁーーーーー!!!?」
文の顔がドアップで目に飛び込んできた。しかも鼓膜が破れるのではないかという大声付き。哀れはたては文の仕掛けた悪戯で心底驚き、絹を引き裂くような悲鳴を上げてしまうのであった。

第三十九話
『はたては彼のファン』

「あやややや……」
「……も～、何なのよぉ～」
はたてが泣きそうな声で文に文句を言う。それもそうだろう。彼女は小川の縁にある岩に座っていたのだ。そこを思い切り驚かされれば、言わずもがなというわけだ。
「うう、全身びしょびしょじゃないのー……」
はたては川に転落した。幸いと言っていいのかは微妙だが、小川自体の深さなどは大

したことなく、精々が立っていれば膝まで浸かるくらい。まあ、はたてはそこに転がり落ちてしまったのだから全身が濡れてしまったのだが。

「ごめんごめん、まさかそこまで驚くとは思わなくて……」

「あんなの本気で驚くに決まってんでしょうがー!!　下着までびっちょりよ、どうしてくれんのー!!」

「ふむ……全身濡れ透けのはたて……。これは売れる!!」

「ちょ!?　こら、撮るなーっ!!?」

　文ははたてにごく軽い謝罪を済ませると遠慮呵責無しにはたてのあられもない姿を激写し始めた。しかも明らかに販売目的であり、あまりにもあまりな文の振る舞いに椛の目がどんどんと細められていく。しかし彼女はそれを止めようとはしない。何故ならばこれがいつもの光景だからだ。

　文がからかい、はたてが怒り、椛が深刻にならない程度の領域で止める。もう何度これを繰り返したことか。おかげで椛は性格から徐々に固さが取れていったのだが、その分文やはたての種族である鴉天狗を若干軽視するようになってしまった。これは完全に上司である文達のせいであるのだが、当の本人達はそれに気付かずもっと敬えと言う。椛が思わず鼻で笑ってしまったのも無理はないだろう。

「もー!!　いい加減にしないと本気で怒るわよーっ!!」

「いいじゃないの減るもんじゃないんだし!!」
「私の濡れ透け姿の希少性が減っちゃうでしょうがー!!」
「……はいはい、もうそろそろ馬鹿な争いはやめてください。特に文さん、これ以上無体を働くなら天魔様に言いつけますよ」
と、ここで椛がようやく仲裁に入る。この時椛が出した〝天魔〟とは文達天狗の頭領。そして妖怪の山のトップである鬼神の名代として妖怪の山を取り仕切っている存在だ。
文も実力は天狗の中でも最上級とはいえ、天狗社会は縦社会。しかも実力で決定するのではなく種族で決定するのだ。彼女の階級は精々が上級の中でも中間程度。最上位に位置する天魔に告げ口をされては、どうなってしまうか分からない。
「このケチ！　椛!!　犬ー!!!」
「誰が犬ですか!!」
文は椛を大声で罵りながらも潔くカメラを差し出す。誰だって上司から怒られるのは怖いのだ。椛は慣れた手つきでカメラのフィルムを巻き戻さずに取り出した。それはもう盛大にびろーんとフィルムが伸びている。陽の光を浴びたフィルムは使い物にならない。これではたても安心だろう。
「まったく……はたてさん、立てますか？」

「ああ、うん。ありがと、椛」

はたては椛が差し出した手を握り、立ち上がる。服も髪も、余す所なく完全に水浸しだ。妖怪とはいえ、このままでは風邪を引かないとも言い切れない。

「うぅー、寒い。一旦家に帰ったほうがいいかなー。お風呂入ろう……」

「ごめんね、さすがに調子に乗りすぎたわ。ま、それはそれとしてはたてが知りたがっているであろう情報をあげるから、ついて行ってもいい？」

「あんたって奴は……。家についてくるのは構わないけど……私が知りたがってる情報……？」

はたては文の言葉に首を傾げる。これといって思い当たることはない。いや、あるにはあるのだが、それを文が知っているわけがない。何せあのことは誰にも話していないのだ。ならば、文の言う自分が知りたがっている情報とは……。

「紅魔館……執事……念写……」

「さあ早く行きましょう我が家に。歓迎するわよ、盛大にねー!!」

はたては先ほどまでとは打って変わって元気が漲っている。いや、元気と言うよりは興奮していると言うべきか。文に耳元で囁かれた彼女の頬は赤く染まっている。それはあの人について知れる喜びからくるものなのか、それとも文に色々と見透かされている焦りからくるものなのか。

「……何を言ったんです？」
「あんたの知りたいこと教えるよー、って」
「……なるほど」
　椛は得心したようで、はたてを生暖かい目で見る。何とも微笑ましいことだ、と椛は内心で呟く。彼女ははたてが異性と恋仲になったなどという話は聞いたことがない。勿論自分が知らないだけであるという可能性もあるにはあるが、それならば文が一応は友人である自分に教えてくれるはずだ。今までも色恋の話はしたことがあるし、２人の性格を考えても自分に嘘を吐く理由はないはずだ。
　――もしかして、初恋？
　ふと思う。はたては引きこもりだ。自分や文と比べて人付き合いが少なく、また交友関係も相応に狭いだろう。ならば、今までろくに恋も知らずに生きていてもおかしくはない。
　椛はある種自分好みの設定をはたてに付け加えていく。確かにはたては引きこもりだが、ちゃんと仕事はこなしているし、寄り合いや会合などにもきちんと出席している。ビジネスライクな付き合いが多いことは否定できないが、それでもちゃんと人付き合いは出来ているのだ。
　椛が思うに〝引きこもり〟という言葉のイメージが悪いせいだろう。彼女が家にこ

もりがちなのは、新聞を作るにあたって念写という能力を使用しているからだ。その場にいなくても現場の写真が撮れるその力は、彼女に足を使って取材するという方法を取らせなかった。

正直な話、「この面倒臭がりやが」と思わないでもない椛だが、自分だって千里眼という能力を持っているのだ。はたての気持ちも少しは分かる。

だからこそ椛にとって文よりもはたての方が友人としての比重が大きい。突拍子のない話を振ってきたり、自分を物理的に振り回したりしてくる文よりは、引きこもりでも面倒臭がりやでも、まだ大人しいはたての方が気が合うのだ。

しかし、椛はその認識が甘かったことを痛感することになる。

はたての家に着き、自室に通されてまずはお茶を一杯。「私はお風呂に入ってくるから、暇つぶしにでもこれを見てて」と渡された3冊の本。それはアルバムだ。

「……」

「……」

自分はおろか、あの文ですら冷や汗を流し沈黙している。むしろドン引きというか、若干の恐怖すら味わっている。

それもそうだろう。目の前のアルバムは一冊１００頁はあろうかという分厚さを誇っており、それにはあの男の人の写真がギッシリと詰め込まれていたのだ。それも3

冊全てに。

　椛は引きつる顔を無理矢理意識せずに問い掛ける。

「……あの、文さん？」

「……何かしら、椛」

「この男の人、幻想郷に来てから、ふた月と経ってないんですよね……？」

「ええ、そうだけど……」

　再び沈黙が場を支配する。しかし、よくよく気がつけば何かがカタカタと音を鳴らしている。その発生源を見れば、湯飲みが振動していたのだ。いや、湯飲みだけではない。ちゃぶ台もだ。地震でも来たのかと思ったが、何のことはない。震えていたのは湯飲みでもちゃぶ台でもなく、自分の身体だったのだ。

「……それでは私はこの辺で」

「待ちなさい」

　恐怖に負けて明後日の方向を見ながらお暇しようとした椛の手を、文ががっしりと掴む。そこには〝絶対に逃がさない〟という意思がはっきりと表れていた。

「ちょっと、離してくださいよ!!　いくらなんでも今回は怖くて付き合いきれませんって!!」

「私だって怖いのよ!!　でもはたてに情報を教えてあげるって約束しちゃったんだから

逃げるわけにもいかないし、だったら道連れは居た方がいいし!!」
「何でこういう時にそんな友情を発揮するんですか!?　あと友情を発揮するなら私にも『ここは私に任せて逃げろ』くらい言ってくださいよ!!」
「じゃあ上司命令ですー!!　このまま大人しく私と運命を共にしなさいな!!」
「汚いな!!　さすが鴉天狗汚い!!」
　２人は小さな声で叫びながら言い争う。互いが必死になって何とか相手をやり込めようとするのだが、そんな事をしていたせいで風呂からはたてが帰って来てしまった。その速さはまさに烏の行水と言えるだろう。
「何やってんのー、２人とも?」
「ひえぇっ!?」
「い、いやー、何でも!!　何でもないわよ!?」
「……そう?　それじゃさー、早速この人のことなんだけどねー?」
「あ、ああ、はい。そうですね」
　ひとまず文は彼――横島――が異世界の住人であるということは話さず、当たり障りのない部分のみを教えていく。紫と永琳（てゐ）のミスにより幻想郷へ墜落したことや、紅魔館での立ち位置、更には周りの女の子との距離感までも。
「――とまあ、こんな感じね。横島さんについての情報は以上よ」

「なるほどなるほど……横島さんっていうんだ。ありがとね、文。これで念写の精度も上がるってもんだわー」

「ああ、うん。念写、念写ね……」

はたての言葉に文は「まだ念写するの!?」と戦慄する。ちらりとアルバムに目をやれば、椛が目を通している最中だった。文が説明している間暇だったのか、それとも現実から目を背けているのか、椛は文達の方を一切見ずに黙々と頁を捲る。

「ところで、あの写真の量は……」

若干の恐怖が宿った目で文ははたてに問う。はたては照れ臭そうに頭を掻き、視線を逸らしながら何故あれだけ膨大な数の念写を行ったのかを明かす。

「いやー、最初は今話題の異変の念写をしてたんだけどね、出てくるのはグロ画像ばっかでさー。気分転換に〝何か面白いもの〟って念じながらね念写してみたのよ。そしたらあの横島さんが写ってね？　何というか、その時の写真がいい感じだったからさー、ついつい何度か念写しちゃってね。それからはずっと横島さんのこと考えるようになっちゃって、気が付いたらもうずーっと念写してて……」

「それで、あの量……」

理由は思ったよりも可愛らしいものだったのだが、いくらなんでもこれは撮りすぎではないだろうか。はたて様子を見る限り、本人もやり過ぎたとは思っているようだが、

未だに念写を続けているようであり、これが今後改善されるとは思えない。
　文が友人の所業に戸惑っていると、そこでぽつりと椛が呟いた。
「……私は、はたてさんの気持ち、分かりますね」
「え、」
「本当!?」
　文は信じられないとばかりに首をぐりんと回転させ椛に振り返り、はたてはキラキラとした目で椛を見つめる。
「私も千里眼なんて能力を持ってますからね、かなり昔のことですが、いけないこととは理解していても、気になる男性のことをじっと観察……いえ、見てしまっていましたし」
「あー……」
　なるほど、と文は頷いた。確かに千里眼を持っていたら自分も気になる彼を観察してしまうかも知れない。それを考えるとはたてのことも理解出来る。量が量だけにドン引きしてしまったが、念写出来るなら自分もしているだろう。
　視界にははたてと椛が互いの能力について語り合っている姿が映っている。珍しく椛も楽しそうで、無理矢理に椛を連れてきた甲斐があったというものだ。
「……あんた達の気持ちは分かったけど、だからってやり過ぎはいけないのよ？　これ完全に横島さんのプライベートが丸裸になってるからね？」

「……ぜ、善処するわ」

とりあえず理解はしたが納得は出来ぬとばかりに文は突っ込んだ。はたては視線を逸らしながらだがちゃんと返事をしたので今回はここまでとしよう。自分はちゃんと止めたのだし、これが横島に露呈したとしても、自分は彼と彼の周りの人物にそこまで咎められないだろう。そう思うと途端に気が楽になってきた。

「それで、はたてのお気に入りの一枚はどんな感じの写真なの？」

思わずそんなことを聞いていた。はたては待ってましたと言わんばかりに大きく頷き、棚からまたも分厚いアルバムを取り出した。

「……まだ、あったの？」

「うん。こっちはお気に入りの写真を入れてるんだー。それで、1番のお気に入りはこれねー」

ドン引きする文に気付かず、はたては一枚の写真を指差す。その写真は、横島が紅魔館の妖精メイドを膝枕し、優しげな笑顔で頭を撫でてやっている写真だった。

「おぉー、これは確かにいい感じの写真ね」

「そうですね。この方の優しさが伝わってくるようです」

「へへー、そうでしょ。これが初めての横島さんの写真なのよねー。まだ成人してないらしいけど、これだけ大人っぽい笑顔を浮かべるのは素敵だわー」

　はたてはにこにことしながら写真について話していく。こうやってお気に入りの写真を見ていくと文や椛も色々と気になってくるようで、先ほどまでの恐怖やら戸惑いやらをすぽーんとどこかに放り出して写真談義を始めてしまった。
「あやや、これは何ともセクシーな……」
「うむむ、中々に鍛えられてますね。欲を言えばもっと筋肉を付けた方が魅力的ですが……」
「何言ってんのよー、このくらいが1番良いんじゃないの。一見ほっそりしているようで、実は筋肉質っていうのが良いの。筋肉モリモリなんて暑苦しいだけじゃないの」
　美鈴との鍛錬の後だろうか、上半身裸に水を被って汗を洗い落とす横島の写真についての語り。どうやらはたては細身が好みで、椛は筋肉質なのが好みのようだ。
「これは……顔面が崩壊してるわね……」
「まあ何というか、これもお気に入りなんですか？」
「え？　女の子に鼻を伸ばしてるところって可愛くない？」
「嫉妬心とかは無いんですか……？」
「それはそれ、これはこれよ」
　次の写真は何故か露出の多い美鈴の姿に横島が鼻の下を伸ばしているところ。はたてには可愛く見えるようだが、これは流石に椛には伝わらなかったらしい。そしてそれ

とは別に自らの薄めの胸に手を当てているあたり、一応は巨乳の美鈴とそれにデレデレしている横島に嫉妬心を持っているようではある。

その後も女3人寄れば姦しいの言葉通りにキャイキャイと写真ではしゃぐ3人だったが、ふと文が時計を見れば、既に夕刻と言ってもいい時間。ここで文は2人に提案をする。

「ねえ、2人とも。今から横島さんに会いに行かない?」

「え?」

「えええっ!?」

その提案に2人は驚きを隠せない。特にはたては思い切り驚いている。

「実は紅魔館に用があってね。いい機会だから2人も一緒にどう?」

「私は別に構いませんけど……」

椛ははたてに視線をやる。彼女は何やら困惑しているようだ。いきなり行っても大丈夫なのか、こんな時間に失礼ではないか、などと頬を赤く染めて呟いている。

そんなはたての姿に文は「おやおやこれは」と内心でニヤニヤと笑う。文は紅魔館と新聞の定期購読の契約をしているし、それは横島とも同様だ。なので、彼女にとって紅魔館は馴染みの場所であるし、意外と良好な関係も築けている。このくらいは問題ではないのだ。

「大丈夫、私は紅魔館のみんなと仲良くさせてもらってるし、横島さんとも定期的に会う関係だから」

「――え」

ここで文ははたてをその気にさせるべく爆弾を落とす。定期的に新聞を届けに行っているのだから当然のことなのだが、はたてはそれを知らない。横島の情報を教える際にもこのことは伝えなかった。

「私と椛は行くけど、はたてはどうする？　このまま家で休んでる？」

「私も行く」

はたては文の問いに即答した。何やら鼻息を荒くし、気合を入れている。

これは面白そうなものが拝めそうだ。文はニタリと粘着質な笑みを浮かべた。隣の椛はドン引きである。

「それじゃ紅魔館に行きましょうか。ふんふふーん、今日の紅魔館の晩御飯は何だろなー♪」

「……文さん、それが目的だったりしませんよね？」

こうして3人は空を飛び、紅魔館を目指す。そこで何が待っているのか、文は面白いことが起こるように念じる。この願いが叶うかどうかは、誰も知る由も無い。

第三十九話
『はたては彼のファン』
～了～

第四十話『傍にいてほしい』

暗闇の海のような世界の中を己は漂っている。
その場所は酷く冷たく、身体は何かに縛られているように身動き一つ取る事が出来ない。
何故自分がここに居るのか、この場は一体どこなのか。そも自分は生きているのか、それすらも分からない。
暗闇は容易く心を蝕む。それは不安に、やがては恐怖に。感情を一つのものへと塗り替えていく。
――こわい。
心を占める、強烈な感情。それは恐怖だ。この暗い闇の世界は、彼女の記憶を揺り起こし、トラウマを刺激する。
この闇はかつての自分がいた世界。孤独と恐怖に囚われた、進んでその身を浸した世界。自分は、かつての自分に戻ろうとしているのだろうか？
――こわい。

またあの時の自分に戻るのが怖い。かつては今のように自分自身が幸せだと、恵まれていると思ってはいなかった。だからこそ自分から暗い地下へと閉じ込めることが出来た。

では、今は？　今はあの時のように閉じこもりたいとは思わない。思えない。今の自分には無くしたくないものがたくさんある。今の自分がかつての自分に戻るということは、全てを捨てることと同義なのだ。

自分を大切に思ってくれているあの人達と離れるのはいやだ。幸せを手に入れたからこそ、それを失うのがたまらなく怖い。

――たすけて。

声が声にならない世界で、彼女は〝たすけて〟と叫んだ。光の無い世界で自らを照らす光を求め、ただがむしゃらに身体を動かそうとする。しかし身体を縛る闇は強固で、身動ぎ一つすら叶わない。

――たすけて。たすけて。たすけて。

助けを呼ぶことしか出来ない。ここから助け出してほしい。この暗い世界から連れ出してほしい。彼女は叫ぶ。

だが、それと同時に頭に疑問が過ぎる。

『こんな自分を、一体誰が助けてくれるのだろう』、と――。

そんなことを考えたくない。しかし、不安は膨れ上がる。自分は、周りの人達に迷惑しか掛けていないのだ。

能力のことも。地下に篭ったことも。不安定な心も。あの『男』との戦いも……。自分は迷惑を掛けて、色んなものを与えられてばかりで。誰かに、何かを返したことが一度でもあっただろうか？

――何も、ない。

自分はいつも助けられてばかりだ。彼女の心を闇が侵食していく。不安は恐怖に、恐怖は絶望に。その姿を変え、彼女の心身を支配していく。

いつしか彼女は、それを受け入れ始めた。彼女は元々、皆の笑顔をこそ望んでいたのだ。それが、例え自らの死で以って浮かべられるものでも。だから、いい。そう思い始めた。

――……。

頬に、何かが流れる。それは水の雫だ。どうしてこんなところに？　一瞬の間だけ疑問に思う。しかし、それは考えるまでもないこと。泣いているのだ。他ならぬ自分が。どうして、とは考えない。これも分かりきっている。

――いやだ。こわい。もどりたくない。

彼女の心が叫ぶ。あの頃に戻るのは嫌だ。あの頃の暗く、狭い世界に戻るのは嫌だ。

皆には笑ってほしい。そして、出来るなら自分もその輪の中で、皆と一緒に笑い合いたい。

それは彼女の中に芽生えた、強烈なまでの願望。これほど激しい感情を発露させるのは、初めてと言ってもいい。あの時でさえこれほどの衝動はなかった。ただ助かりたいと叫ぶしかない自分に吐き気がする。

――たすけて。

それでも。

――たすけて……！

ああ、それでも。

――たすけて!!　――お姉様!!　ただお兄様!!

愛する者達に、助けてほしいと願うのは、間違いなのだろうか――？

世界に光が差す。彼女の体を縛り付けていた闇が消え去り、優しく暖かい光が彼女を包む。

頬に、何かが触れた気がした。それは、とても大好きで、彼女が求めてならない温もり。誰かが名前を呼び、笑いかけてくれた気がした――。

第四十話
『傍にいてほしい』

光が瞼を貫通する。強く、しかし優しい光。その光に徐々に意識を揺り起こされ、フランはゆっくりと眠りから目覚めた。
「……起きた？」
「気分はどうだ、フランちゃん？」
すぐ横合いからかけられる男女の声。それはフランが最も頼り、愛する者達の声。未だはっきりと覚醒してしない目をその方向に向ければ、そこには大好きなお姉様とお兄様の姿があった。
「……2人とも、おはよう」
フランの口から出たのは、何故だかその言葉だった。それを聞いたお姉様――レミリアはがっくりと脱力し、お兄様――横島は苦笑を浮かべる。
「おう、おはよーさん。何つーか、案外元気そうだな」

「はいはい、おはよう。……まったく、魘されてるから大丈夫なのかと思えば、まさか目覚めて第一声がそれとはね。ある意味フランらしいと言えばらしいけど……」

レミリアは呆れたような、それでも未だ心配が滲む表情でフランに挨拶を返し、頬を撫でる。横島はそんなレミリアを含め、苦笑を浮かべたままフランの頭を撫でる。

「あ……」

頬に触れる、小さく暖かい手。頭に触れる、大きく暖かい手。その優しい感触に、フランは先程夢に見た冷たい闇の世界のことを思い出す。闇に呑まれようとしていた自分に触れた何か。そしてあの世界を照らした光は、もしかしたらこの2人だったのかも知れない。

そう考えると、フランの目からは大粒の涙がぽろぽろと零れ落ちた。

「ちょ、ふ、フランちゃん!?」

「ちょっと、どうしたのフラン!?　……横島!!　アンタ、フランに何をしたの!?」

「何で俺ーーーッ!!?」

急に泣き出したフランに横島は慌て、レミリアはとりあえず横島のせいにし、顔面を思い切り引っ叩く。首が１８０度回転するくらいの強烈なビンタだったが、横島からすればそのくらいのものは慣れたものだ。精々膝から崩れ落ちて、フランが寝ているベッドの上に上体が力なく倒れ伏してしまう程度のものでしかない。

「ち、違うのお姉様。怖い夢を見たから、２人の手の感触に安心しちゃって……」
「何だ、そうだったの……ごめん横島」
　フランは慌てて涙を流した理由を話し、横島の潔白を証明する。レミリアはその理由に頷き、横島に謝りながら彼の頭を撫でる。横島はそれに震える右手を上げることで応え、数秒もしない内に立ち直った。
「それにしても、怖い夢ねぇ。あの『男』の夢でも見たの？」
「ナチュラルに傷を抉りにいきますね、お嬢様……」
「夢の内容が分からないと慰めようもないでしょうが」
「あー……まあ、そう、かなぁ……」
　自分達に触れて安心して泣いてしまうほど怖い夢を見たフランに対し、レミリアは直球でその内容を尋ねた。横島はその行動を非難するが、レミリアに言いくるめられる。釈然としない横島であったが、レミリアは自分の意見を曲げないだろう。ここは大人しくレミリアとフランのやりとりを聞くことにした。
「それで、どう？　話せる？」
「う、うん。えっと……」
　そうしてフランは夢の内容を話し始めた。レミリアも横島も横槍を入れず、最初から最後まで静かに聞き終える。

空気が重い。フランは困惑する。何故、目の前の優しい2人がこんなにも怖く見えてしまうのか。

「え……？」

レミリアがゆっくりとフランの頬へと両手を伸ばす。困惑するフランをよそに、レミリアは優しく、優しく彼女の頬に触れる。そして――。

「ッ!!?　いひゃひゃひゃひゃひゃっっっ!!?」

その両手で柔らかな頬を、思い切り左右に引っ張った。フランは抵抗しようとレミリアの手を掴むが、一向に力が緩む気配はなく。

フランの両目から、痛みによって涙が零れていく。フランは思い知った。レミリアは、本気で怒っている。

「フラン？　お姉ちゃん、本気で怒るわよ……？」

「もうほほっへる……!!」

フランはレミリアの怒気に当てられ、身体が萎縮する。レミリアに、家族に本気で怒られるのがこんなに怖いのだと、フランは初めて知った。

そして、もう1つ。

「フランちゃん……」

「ほ、ほにいひゃま……」

横島はフランの額の前に右手を翳す。中指を曲げて親指で抑えた形……つまりはデコピンの形だ。その中指には今にも弾け飛びそうな程にまで力が込められており、ただ見ているだけでも只ならぬ威力を発揮しそうなのが感じられる。

「ほに――」

フランが思わず口を開く。それが引き金となった。

「――ッ!!!?」

気が付けばフランは弾かれたように天井を見上げていた。さっきまでレミリアと横島を見ていたはずなのに、今は何故だか上を向いている。何故上を向いているのか？その疑問が脳裏を掠めた瞬間――痛みがフランを襲った。

「痛いいっっっ～～～～～～……!!!?」

フランは額と頬に走る激痛を自覚し、目に涙を溜めてベッドの上でもがく。レミリアは本気で頬を抓んでいたのだが、横島のデコピンの威力によって強制的に放されたのである。この威力にはレミリアも驚いた。彼女には珍しく呆けたような顔で横島を振り返る。これが、かつて〝デコピン忠ちゃん〟と呼ばれていた男の、本気の一撃である。

「ううぅ……」

やがて痛みも収まってきたのか、フランが身を起こし、横島を見上げる。横島は自分を見つめるレミリアには目もくれず、ただフランだけをじっと見ていた。その横島の雰

囲気に圧され、息を呑む。しかし黙っていても始まらないとフランが横島に話しかけようとするが、またも機先を制された。

「え……？」

横島がベッドに身を乗り出し、フランを強く強く抱き締めたのである。

「あ、あの……ただお兄様……？」

「……」

横島は何も答えない。ただフランの首筋に顔を押し付け、動こうとしない。フランは顔に血が集まってくるのを自覚した。今はさぞ真っ赤に染まっていることだろう。

横島の行動に驚いたのはレミリアも同様だが、彼女は空気を呼んで黙っている。フランを叱るという衝動もぐっと堪え、この後の展開に少しドキドキとしながら、彼女は空気と同化する。

「フランちゃん……」

「は、はいっ！」

不意に、横島がフランの名を呼ぶ。いきなりのことに慌て、フランは上ずった声で返事をしてしまう。そのことに恥ずかしさを覚えるフランだが、横島はそれを意に介さず、フランに語りかける。

「本当はさ、言いたいこととかいっぱいあったんだけど……さっきのことで全部吹っ飛

んだ。だから、結論から先に言わせてもらうけど……」
「う、うん……」
フランは身を硬くする。何を言われるのか。もしかしたら叱られるのか。叱られるとしたら、いったい何を？
フランには分からないことだらけだ。しかし、少なくとも横島が何を言うのかはすぐに分かる。そしてそれが、想像の埒外であったということも。
「フランちゃん……俺は、フランちゃんのことが――好きだ」
「――……」
何を言われたのか、フランには分からなかった。フランの頭がそれを理解するのに数秒が掛かる。やがて横島に言われたことの意味を理解し、始めに浮かんできたものは困惑だった。
ただお兄様が？　自分を？　どうして？　浮かんでは消えていく疑問。それが脳内を駆け巡り、フランは反応を返せない。しかし、横島はそれを気にするでもなく、フランに自分の気持ちを伝えていく。
「昔の自分に戻るとかさ、ぶっちゃけ俺は昔のフランちゃんは知らないから置いとくけども……誰が助けてくれるのかって？　周りにいっぱいいるじゃんか。お嬢様とか咲夜さんとか、パチュリー様とか小悪魔ちゃんとか美鈴とか、メイド妖精達、永琳先生

達やチルノ達……俺だってそうだ。皆フランちゃんを助けるに決まってるじゃんか」

「……」

「自分が死んだら笑ってくれるとかどうとか、馬鹿かよ。泣くに決まってるじゃんか。少なくとも俺は思いっきり泣く。フランちゃんがいなくなったら、俺は凄く悲しいし、寂しい。好きな女の子がいなくなったら、俺は泣くよ。当たり前だろ」

横島の言葉にフランは何も言えない。彼の声はどんどんと湿り気を帯びていく。彼の身体は震えていく。感情の高ぶりに比例して霊力が高まり、フランを抱き締める力が一層強くなる。

「もう、そんなこと、言わないでくれよ……好きな子がいなくなるなんて、もう嫌なんだよ……。一緒にいてほしいんだ……離れたくないんだ……！　ずっと傍にいてほしいんだよぉ……!!」

「……お兄、様……」

それは、あの時に聞かせてくれた傷跡なのだろう。フランは理解した。かつて自分のせいで死なせてしまった蛍の化身とは、彼が愛した存在なのだと。

フランは横島を抱き返す。強く強く、自分の存在を主張するように。

「ごめん、なさい……ごめんなさい、ただお兄様……」

フランの目から涙が零れていく。横島が、どれだけ自分を想ってくれているのか、そ

れを強く実感出来たから。
　彼の言葉に、抱き締める力に、霊力と共に想いが宿る。霊的存在でもある吸血鬼（フラン）は、その想いを直に受け止める。その想いは彼女の心を満たし、癒し、なおも広がり続ける。
　横島は、確かにフランを愛しているのだ。
「フラン」
「あっ、お姉様……」
　レミリアは割り込むならここしかないと判断し、フランの頬を優しく抓む。そのまま柔らかい感触をむにむにと堪能しながら、レミリアも自分の思いを聞かせる。
「アンタが死んだりしたら、私だって悲しいし、泣くことになる。笑えるわけないでしょうが。アンタは私が守ってあげるわよ。お姉ちゃんは妹を守る為に早く生まれるわけだしね」
　レミリアはそう言って少しだけ強くフランの頬をつねる。フランはその手に、その言葉に無上の安心感を得た。いつも守ってくれた、大好きな姉。フランは彼女の凄さを痛感する。それと同時、彼女の思いも伝わってきた。レミリアも、確かに自分を愛してくれているのだ。
「お姉様……ただお兄様……」
　フランは2人の名前を呼ぶ。横島はフランの首筋から顔を離し、涙でボロボロになっ

た顔を見せてくれる。レミリアは横島の涙を乱暴に拭いながら、少し困ったような微笑を見せてくれる。

2人とも、自分の為に泣いたり笑ったりしてくれた。それが、とても嬉しい。

「ありがとう、2人とも」

今の自分は、綺麗に笑えているだろうか？

止め処なく流れる涙で歪む視界の先、大好きな2人を見ながら、フランは満面の笑みを浮かべて思う。

昔の自分に戻りたくない。自分は死にたくない。大好きな人達と、ずっと一緒にいたい。

小さな胸に溢れる喜びを表すために、フランは2人に飛びついた。

「えへへへへへへ～」

「またえらい緩んでるわね……」

レミリアの言葉が示す通り、フランの顔はだらしのない笑みに緩んでいた。彼女が抱き締め、身体を擦り付けているのは横島の身体。愛する人と両思いになることが出来たのだ。少しくらい緩くてもいいだろう。

「めっちゃくすぐったい……」
　すりすりとじゃれ付かれている横島は、若干恍惚とした表情を浮かべながらもくすぐったがっている。レミリアはそんな横島の頬をつねり、表情を元に戻そうとしている。
「ところでお兄様」
「ん？」
「私に言いたいことって、結局なんだったの？」
「ああ……」
　フランは横島に言われたことを思い出し、それを尋ねた。横島もそれを思い出し、頭をポリポリと掻く。
「まあ、俺が言えたことじゃないんだけどな。俺のためとは言っても、大怪我をするようなことをしないでほしい……ってな」
「本当に他人のこと言えないね」
「……お、おう」
　フランのぐさりとくる言葉に、横島は視線を逸らす。フランはそんな横島を楽しそうに見つめ、1番気になっていることを尋ねる。
「それじゃあ、私のどこが好きになったの？」

「んん……？」

フランの顔が赤く染まる。やや恥ずかしそうに、それでも何としても聞きたい、という思いを上目使いに込めて横島を見つめる。そんなフランに横島は煩悩を刺激されてしまい、霊力が少し漏れる。それをフランが察知し、彼女の笑みが深まる。

「あぁー……っと、何だ。フランちゃんは可愛いし、優しいし、可愛いし、ネガティブなとこもあるけどそ―ゆーとこも可愛いし……まあ、あとフランちゃん可愛いし」

「……えぅ」

「なんつったら良いのか、妹紅もそうだけど、こう、しっかりとした理由が出てこないんだよな。切っ掛けはフランちゃんが俺のために『あのヤロー』と戦ってくれたことだと思う。……いや、自覚したってのが近いかな……？　こんなになるまで戦ってくれたのかとか、それだけ俺のことを想ってくれてるのかとか……」

横島がぶつぶつと語る内容に、フランは顔を真っ赤にする。これほど可愛いを連呼されたのは初めての経験だった。ネガティブな部分を可愛いと言われるのもそうだ。その後に続いた言葉も、ふわふわとした意識でしか聞くことが出来なかった。今更ながら恥ずかしくなって横島の胸に顔を埋めてしまう。鼻孔に広がる横島の匂い。少しずつだが落ち着きを取り戻したきた。

「っと、そうだ！　フランちゃん、俺の血を吸ってみねーか？」

「えっ？」
　唐突に横島がそんなことを言い出した。
「フランちゃんまだ体調良くなさそうだからさ、俺の血を吸えば回復するかもよ？」
　横島が自分の体調を心配してくれている。それだけでフランの胸は喜びが広がるが、それ以上に横島に対して困惑する。
「で、でも私が血を吸ったらお兄様が吸血鬼に……」
「ああ、それは大丈夫。永琳先生に色々と聞いたんだけど、蓬莱人は吸血鬼にはならないそうだから」
「そうなんだ。じゃあ私が血を吸っても大丈夫――ほーらいぴと？　ただお兄様が？」
　横島の何でもないような返答を聞いて危うく流してしまうところだったが、フランは衝撃的な言葉を聞いた。横島は、蓬莱人である、と。
「……あ、そういやまだ言ってなかったな」
　そんな間の抜けた台詞を皮切りに、横島は自分が蓬莱人となった経緯をフランに話す。それと同時に、自分が現在愛している相手はフランだけではなく、妹紅もそうであるということも。これからも増えていくかもしれないことを。
「……そうだったんだ」
　ぽつりと呟く。フランは横島の寿命を延ばそうと考えていた。それが思わぬ形で

叶ってしまった。フランの胸に去来するのはいかなる感情か。少なくとも喜びや嬉しさではない。言葉では言い表せられないような、ドロドロとした感情。知らず、フランの身体が震える。

「ま、これで妹紅とフランちゃんとずっと一緒にいられるから結果オーライだな」

「え……ふがっ？」

思いもしなかった言葉が出てくる。フランは横島の顔に視線を戻すが、その瞬間に鼻を摘まれた。その際に変な声を出してしまい、少々恥ずかしさがこみ上げる。

「普通の人間のままの方が俺らしいって言ったけどさ。こうなっちまったんだから仕方ねーって。むしろ妹紅とフランちゃんと、可愛い女の子とずーっとイチャつけるんだから切り替えていかねーとな」

「でも……」

「俺はこうなったことに後悔はしてねーぜ。そりゃさ、俺はまだまだガキだから人よりも長く生きるってのがどんだけしんどいのかは分からねーけど……」

横島がそこで言葉を切る。フランの鼻から手を離し、微笑みを浮かべる。

「一緒にいてくれるんだろ？」

そう聞いてきた。フランは一瞬呆けた後、大きく頷いた。横島は笑顔を浮かべ、嬉しそうにフランの頭を撫でる。

フランは何となく気付いた。横島は本当に、誰かに傍にいてほしいのだと。好きな人に、愛する人に、傍にいてほしいのだと。ならば、自分は彼の傍にいよう。1秒でも長く、彼と共に。

「んで、どうする？　血、吸ってみる？」

「……うん」

横島は着用しているTシャツの首元を広げ、フランに晒す。フランは横島の顔を見つめ、その後首筋に噛み付いた。

「……」

「んっ……む……」

フランの牙の感触に横島の顔が歪む。フランは何度も何度も横島の首に牙を突きたて、横島の味に酔いしれる。

「……なあ、フランちゃん」

「……んむっ？」

「……甘噛みじゃあ血は吸えないんじゃないか？」

「……あむあむ」

フランの牙は何故か皮膚を貫通せず、甘噛みを繰り返す。そのくすぐったい感触と皮膚に少しだけ触れる舌がもたらす性感に、横島の顔が煩悩で歪みそうになる。というか

歪んでいた。

「……だって、いざ血を吸うとなるとただお兄様に怪我させなくちゃいけないし、それにあんまり大きく口を開けるのも恥ずかしいし……」

それが理由だった。横島は何とも困ったような表情を浮かべ、フランの頭を撫でる。そのまま数秒考えた後、ズボンのポケットからある物を取り出す。

「それは……咲夜のナイフ？」

「そ。大きく口を開けたくないなら、これで指先にでも傷を付けりゃいいかなって」

「でも……良いの？」

「いーのいーの。これもフランちゃんの為だ。……痛っ、と。はい、フランちゃん」

横島は何故か持っていた咲夜のナイフで左の人差し指に切り傷を付ける。そう簡単に治らないようにかなり深く切ったせいで、横島の顔は痛みで情けなく歪み、目には涙が溜まっている。フランは「だから言ったのに」というような顔で横島を見て、しかし自分の為にここまでしてくれる横島に更なる愛しさと申し訳なさを感じつつ、差し出された指を咥えた。

「んっ、ちゅ……む……」

「……」

部屋にフランが横島の血を吸う音が響く。傷を小さな舌先がなぞるたびに鋭い痛み

が走るが、それよりも気になることが横島には存在した。

――あああああああああああっ!!!?　何か、何か物凄くイケナイことをしている気分になるううううううぅぅぅっ!!!?　何でや!?　ワイはただ血を吸わせる為に指をフランちゃんに咥えさせてるだけなのに……ってそれしかねーじゃねーかアホか俺はああああああああ!!!?

「ふぅ……ん、ちゅる……う、ん……」

――やめてえええええええ!!?　悩ましげな吐息をやめてえええええええ!!?　傷を舐めないで音を立てないでえええええええ!!?

どんどんと高まり溢れ出す煩悩。それがフランにも色々と影響を与えているのだが、それに横島が気付くはずもなく。

「……いつ頃止めたらいいのかな……」

2人の様子に何だかもじもじと、もぞもぞと身体を揺らす空気なレミリアが呟く。

結局、レミリアは2人を止めることなく、フランは傷が完全に塞がるまでの数分間横島の血を吸い続けた。横島は色々な意味でいっぱいいっぱいとなり、次にフランに血を吸わせる時は他の方法を考えようと心に決めた。

ちなみにだが、吸血鬼姉妹は横島の煩悩の煽りを受けて色々と昂ってしまい、その後久しぶりに姉妹での弾幕ごっこで身体の熱を発散したようだ。

第四十話
『傍にいてほしい』
～了～

「ねえねえお兄様、妹紅と恋人になったんだよね？」
「え、今更聞くの？　……そう、だけど」
「それで、その……私とも恋人同士なんだよね？」
「……おう、俺はフランちゃんとも恋人同士だ」
「……えへ、えへへへへへ」
「……よしよし」
「これでただお兄様も〝ろりこん〟さんだねっ！」
「――……ごふっ!!」
「あ、あれ？　お兄様？　お兄様ーっ!?」

――ああ、美神さん。俺は、貴女の言った通りになっちゃったようです……。

横島の脳裏に親指を立てて笑みを浮かべる美神の姿が見える。美神はその手で首を掻き切る動作をした後、中指を立てて消えていった……。

――ああ、美神さん。ルシオラ、俺は……。

脳裏に浮かぶルシオラは、困ったような、それでも嬉しそうな笑みを浮かべていた――。

第四十一話『彼女の想い』

互いの気持ちが分かり、ついに恋人同士となった横島とフラン。その2人は、現在中庭にて各々の時間を過ごしていた。横島は美鈴と妖夢に型を見てもらい、フランは妹紅と共に地面に座って横島を見守っている。

「……そうですか。そんなことが……」

「はい。あれほどまでに怒ったお嬢様は久しぶりに見ましたね……」

美鈴と妖夢は横島の動きを見ながら『男』との戦いについて話していた。そのような異変があったことを妖夢は知らなかった。過ぎたこととはいえ、彼女の胸に罪悪感がこみ上げてくる。

「すみません、駆けつけられなくて。その時、私は幽々子様と一緒に冥界を散歩していたのです……」

「そんなに気にしないでくださいよ。妖夢さんは何も悪くないじゃありませんか」

「そうかも知れませんが……やはり皆さんや弟子の危急の時にただ遊んでいたというのは……」

申し訳無さそうに畏まる妖夢に美鈴はただ苦笑を浮かべるしかない。どこまでも真

面目で責任感の強い様は尊敬に値するが、やはり融通が利かないというか、頭が固いというか。しかし、美鈴はそんな妖夢が好きだった。

「とにかく、この話はここまでにしましょう。……横島さんの動きを見て、何か気付くことはありませんか？」

「……そうですね。横島さんの……」

未だ納得は出来ないのだろうが、それでも妖夢は頷く。そして横島を見ること暫し。妖夢は気付く。

「これは……霊気の流れが、格段に滑らかになっていますね」

「ええ。もしかしたらですが、これも蓬莱人になったことが関係しているのでしょう」

蓬莱人とは肉体ではなく魂が主軸の存在。霊気とは魂の力だ。枷となる肉体を持ったまま、完全なる魂の力を操れる蓬莱人は、特に何かを意識せずとも霊気の操作が向上する。否、あるいはこれこそが人間が元々持っていたコントロールなのかもしれない。

「……言われてみたら、横島の霊気の流れって結構綺麗なんだなー……」

「分かるの、妹紅？」

「ああ、私だって一応霊能力者だしな」

美鈴の言葉に、妹紅が自分の感想を述べる。彼女の膝にはフランが収まっており、今まであまり接点のなかった2人の仲睦まじい様子に妖夢は驚きを隠せない。

「……失礼ですが、お2人は仲が良かったんでしたっけ？」
「んんー、何というか……」
「えへへー、さっき仲良しになったんだー」
妖夢の質問に妹紅は苦笑気味に、フランは満面の笑みで答えた。
2人の仲が良くなった理由。それは横島に他ならない。彼は妹紅の恋人であり、そしてフランとも恋人となった。はじめ2人が顔を合わせたとき、横島は2人に対する罪悪感で胃に激痛が走り、思い切り吐きそうになった。普段から「美女美少女はみんなワイのもんやー!!」と叫んでいる彼ではあったが、本当に複数人の美少女が自分のものとなったとき、彼は色々な感情に押し潰されそうになった。
どちらも自分よりも外見年齢が低い女の子。つまりはロリの範疇である。更にフランは自分が仕えているレミリアお嬢様の妹だ。そのお嬢様の前で告白をしておいて今更だが、それでも彼はレミリアに崇拝に近い感情を持ち始めている。そのレミリアの妹と恋仲に、というのは葛藤があったのだろう。その葛藤もレミリア本人に「細かいことは気にするな」と言われ、横島も「そうっすよね！　むしろそーゆー身分違いの愛とかって燃えますもんね!!　ついでに言えば2人ともハーレム容認派ですし!!」と他の懸念事項と一緒に一瞬でぶん投げてしまったが。
ちなみに「ロリはいいのか？」と聞かれた際には虚ろな瞳で虚空に向かって「うへ……

うへへへ……」と笑い始めたことにより、触れないこととなった。彼が血の涙を流していたのは、きっと気のせいではないだろう。

さて、そんな妹紅とフランの邂逅だが、意外と2人は冷静だった。2人は横島から話を聞き、それを即座に受け入れた。何せ2人とも元々ハーレム容認派である。彼が選んだ相手に不満はない。妹紅は以前からフランのことを可愛い女の子と思っていたし、フランもフランで妹紅のことを気にしていた。

その理由を聞いた際、フランは自分と妹紅は似ていると言った。曰く、「だって、2人とも〝妹〟で〝紅〟だし」。その場にいた横島、レミリアはそろって首を傾げた。が、妹紅は違った。

「うん、そうだな！」

妹紅は良い顔でそう言った。頭上に巨大な疑問符を浮かべながら。

良く分からなかったが、とりあえず肯定しておくことにしたらしい。それが功を奏したのか、フランは妹紅に飛びつき、ごろごろと甘えだした。それを見たレミリアが妹紅に嫉妬の視線をよこしたのは余談である。

「なるほど、そうなんですか……」

話は逸れてしまったが、2人を前にしている妖夢は正直に言って気が気でない。というのも、隣に佇む美鈴の存在だ。

「……」

彼女は妹紅とフランを羨ましそうに、指を咥えて眺めている。横島が妹紅、そしてフランと恋人同士となったことは既に紅魔館の中に知れ渡っている。

横島を狙う女の子は案外多い。妖精メイド達の何人かがそうであるし、小悪魔やてゐ、そして美鈴がそうだ。あとは例外として輝夜、といったところか。これだけの人数がいるのである。てゐと小悪魔、そして輝夜は機会を虎視眈々と狙っている。元々小悪魔はフランと組んで横島を（色々な意味で）堕とそうとしていたのだし、てゐは彼の愛人さんになろうとしていた。輝夜の場合は少々特殊だが、彼を自分に相応しい存在にしようと考えている。

しかし、てゐと小悪魔に関しては現在自重しているようだ。横島が蓬莱人となって日が経っていないというのもあるし、彼も色々と混乱してしまうかもしれない。彼女達は彼女達なりに負い目を感じているようだ。それははっきりと言ってしまえばお門違いの感情であるし自分達でも理解はしているのだが、それでも納得がいかないらしい。なので、今は妹紅とフランが横島とイチャついている姿を眺め、それを頭の中で自分に置き換えて我慢をしているようだ。

……さっさと告白しろというのが周りの感想だったりする。

「……美鈴さん、貴女もそろそろ……」

「え、なんですかようむさんすみませんきこえませんでしたー」
「……ああ、いえ。何でもありませんよ」
横島の周囲が刻々と変化していっている中、美鈴は思い切り取り残されていた。ヘタレているのだから仕方がない。妖夢の彼女を見る目も、だんだんと生暖かくなってきていた。その視線に耐え切れず、思わず目を逸らす美鈴。彼女はこの後で思い知ることになる。以前鈴仙が言っていたことが、現実に起こってしまうかも知れないということを。

第四十一話
『彼女の想い』

「そういえばさ、お兄様ってお姉様よりも速く動けるって本当なの？」
そのフランの質問に、皆の視線が改めて横島へと集中する。その視線に横島は動きを

止め、「うーん」と唸る。
「正直、あの時はそういうこと気にしてなかったからなー。俺がお嬢様よりも速かったって言われても……」
横島は当時のことをあまり覚えていないようだ。そうなると、この中で横島と一緒にその場にいたのは1人だけ。今度は美鈴へと視線が集中する。美鈴はその視線に動じることなく、ゆっくりと頷いた。
「はい、確かにあの時の横島さんはお嬢様よりも速かったです」
「……マジかー」
まるで他人事のような横島の台詞に、周りから苦笑が漏れる。
「一体、どうやってそれほどの速度を出せたんですか？」
「どうやってって言われてもなぁ……」
妖夢の問いに横島は頭を掻く。どう説明をしたら良いか、言葉にするのが難しいようだ。
「なんつーか、こう……えーっとだな、まず霊力を体にだな……」
しどろもどろになりながらも説明を試みる横島だが、やはり言葉にするのが難しく、思ったように解説することが出来ない。それを見かねた妹紅が「とりあえず一回やってみたら？」と提案した。下手な説明をされるよりは一度見たほうが理解も早いだろうと

横島がそれを承諾。そうして実演することとなった。

「ふぅー……」

横島は呼吸を整え、霊力を全身に回す。その回転はやがて速度を増していき、充分に高まったところで、それは発動した。

「――ふっ!!」

爆発呼吸と共に震脚。それは美鈴が得意とする八極拳の歩法、活歩と同じ動き。しかし、横島のそれには変化があった。妖夢から教え込まれた、剣術の踏み込みに近いものへと変化している。それだけではない。下半身だけでなく、上半身の動きにも変化があった。

――中国拳法と剣術、二つが混ざった特異な動き。本来ならば噛み合うことのないそれらが、横島の神がかり的なバランス感覚の元で融合し、一つの形を得た。

「――っ!?」

瞬間、横島はその場にいた全員の視界から消え失せた。霊力による爆発的な推進力もあったのだろう、彼が存在していた場所には濃密な霊力の残滓が漂っている。

横島はどこに――？　皆はまず横島が向いていた方向を見やる。

「――――っ!!?」

皆は見た。横島が地面に顔面からダイブし、ゾリゾリと音を立てながら数十メートル

も地面を滑っていく様を……!!

「……」

やがて地面との摩擦が移動の速度から出る勢いに勝って速度が落ち、ゆっくりと止まった。横島はしばらく顔面を基点に逆立ちの状態だったが、数秒後には力なくうつ伏せに倒れ伏した……。

「……」

誰も声が出ない。ただ呆然と大口を開けるのみである。そうしてたっぷりと数秒。真っ先に正気に戻ったのはやはりと言うべきか、あの2人だった。

「よ、横島ーーーーーーっ!!?」

「お、お兄様ーーーーーーっ!!?」

そう、妹紅とフランである。2人は横島へと駆け寄り、彼を助け起こす。幸い怪我は顔面にちょっとした擦り傷が出来ていた程度であった。相変わらず頑丈な男である。しかし、妹紅達にとって横島が怪我をしたのに代わりはなく、少々取り乱してしまった。

「大丈夫か、横島!?」

「お兄様っ!?」

フランにいたっては涙さえも浮かべ、横島へと縋りつく。どうやら2人は横島が怪我をすることに、軽いトラウマを持ったようである。

「お、俺は、大丈夫だ……」
「横島！」
「お兄様……！」
　横島が傷む顔面をおして無事を告げる。流石にその声は痛みに揺らいでいたが、２人が安心するには充分だったようだ。そんな２人の様子を見て、横島はにんまりとした笑みを浮かべる。
「……ほっぺにちゅーしてくれたら、すぐ元気になるかも」
「分かった！」
「まかせて！」
　２人は躊躇うことなく横島の頬に「むちゅー」と唇を押し付けた。２人とも必死なのか、顔が赤く染まっている。そして数秒後、２人は頬から唇を離し、横島に元気が出たかを確認する。
「……あー、うん。何ていうか、そのー……ちょっとした冗談のつもりだったんだけど……」
「ふぇ？」
「……んなっ!?」
　まさか本当にキスをしてくれるとは思っていなかった横島は、かなり照れた様子で２

人にそう言った。その言葉にフランは疑問符を浮かべ、妹紅は先ほどとは別の感情で頬を真っ赤に染める。

「お前って奴は本当にもおー!!」

「いだだだだっ!? ちょ、ごめん! ごめんってー!」

妹紅はいつかのように横島の背中に馬乗りになって頭をぽかすかと殴り、横島は頭を両手で庇う。何というか本当にもうただのバカップルの様相を呈している。

「……失敗したとはいえ、横島さんは私にも認識出来ない速さを出した。恐らくは中国拳法と剣術の組み合わせ。それを横島さんが纏め、編み出した移動法……。ほんの一瞬でしたが、足に霊力が集中していましたね。やはりこの部分が鍵でしょうか……」

妖夢は横島達のやりとりを頬を赤らめながらも見物しつつ、先ほどの横島の特異な移動術の考察をしていた。それは何も妖夢が真面目だからとか、それだけが理由ではない。ちらりと隣に視線をやる。

「……うぅ～……!!」

美鈴が涙目で唸っている。それだけでなく、小さな声で「私も横島さんにああいうことしてみたい……」などと呟いている。妖夢は大きな溜め息を吐き、さっさと告白しろ、改めてそう思った。

そうやってなんやかんやと平和な時間を過ごし、時間は夕刻を越えて夜にさしかかった頃、紅魔館へと客がやってきた。
「みなさーん、お客さまですよー!!」
本館の方から聞こえてくる妖精メイドの声。そちらに目をやれば、妖精メイドがレミリアと共に数人の少女を連れ歩いていた。
「あややや、何やら楽しそうですねー」
「本物？　ねえあの人本物？」
「はいはい、本物でしょうから落ち着いてくださいよ」
「うおーい、フランー!!」
お客というのは文、はたて、椛、そしてチルノの4人だった。チルノはフランの元へと駆け出し、互いに手を取り合って挨拶を交わしている。
「久しぶり、文ちゃん。そっちは友達の子達？　……そういやチルノと文ちゃんってのも珍しい組み合わせだよな」
「いやー、お久しぶりですね横島さん。チルノとはたまにお話する仲ですよ。と言っても、紅魔館に新聞を配りに来る関係上、あまり時間が合わなかったりもするんですけどね。……それはともかく、清く正しい射命丸がお供を連れてきましたよー」
「誰がお供ですか」

「……」

早速横島の元へと集った3人。周りに更に美少女が増えたことにより、横島の機嫌は良くなっており、その笑顔は輝かんばかりだ。その笑顔を見て、2名ほどくらくらと来ている者がいるのだが……それを彼が知ることはない。

「こほん。……私は〝白狼天狗〟の犬走椛です。文さんとの関係は仕事の上司と部下、兼友人といったところでしょうか。よろしくお願いいたします」

「ああ。俺は紅魔館の執事の横島忠夫。よろしくー」

椛は行儀良くぺこりと頭を下げ、横島も言葉は軽いが同じように頭を下げる。ピシリと決まったその動きは、執事という役職に恥じないものとなってきている。これも咲夜の教育の賜物だろう。

続いて文と椛が下がり、はたてに視線を送る。しかしはたてはそれに気付かず、じっと横島の顔を見つめ続けている。

「……えー、っと？」

「……」

「――――ッ!!」

赤らんだ顔で横島の顔を見続けるはたてに横島は戸惑い、その様子を見ていた美鈴は乙女の勘によって大体のことを理解した。衝撃を受ける美鈴には誰も気付かず、はたて

の様子を見かねた文が彼女に早く自己紹介するように耳打ちする。
「はたて、自己紹介自己紹介」
「あっ!!　ああ、そう、そうだったー。……あ、あの、私は姫海棠はたて……です。文とは同僚で、一応友達……です。よ、よろしくお願い、します……」
「ん、はたてちゃんだな。よろしく」
「……っ!!」
　人見知りということも関係しているのだろうが、はたては少々詰まりながらも挨拶を交わす。対する横島はにこやかに微笑みながら返したのだが、それによってはたては頬が真っ赤に染まる。はたてにとって、直に見る横島の笑顔はそれほどまでに強烈なものなのだ。
「……はたてちゃん？　大丈夫か？」
「はっ、はひ!!　だだ大丈夫ですっ!!」
「いや、とてもそうは見えんが……」
　ここにきて、ようやく皆にも理解が及んできた。はたてのあの態度。どうやらはたては横島のことを以前から知っていて、また何らかの想いを抱いているのだろうと。
　ちなみに横島はまるで気付いていない。彼からしてみれば、顔を真っ赤にした女の子がぼーっとしたり慌てたりしているのだ。彼が鈍感なことを差し引いても、これでは分

からなくても無理はないと言える。
「熱とかあるんじゃないか……？　もしそうならあまり無理せずに、寝ていた方がいいと思うけど……」
「えうっ、あの、違っ……」
「ああ、いえいえ違うんですよ横島さん。はたてはね、横島さんのファンなんですよ」
「ちょ、文あんた……!!」
その言葉に皆は納得した。しかし、よく考えてみれば彼女の能力は念写である。恐らくは念写をした際に横島の写真が撮れたのだろう。先ほどぼーっと横島を見つめていたのは、憧れの存在が目の前にいることに感動していたからというわけだ。
「……ファン？　……俺の？」
「ええ、実はそうなんですよー」
「うわぁ……よくもまあ悪びれずに……」
文の所業にドン引きする椛だが、彼女も文を止める気は毛頭無い。先ほど極上の恐怖を（無意識に）味わわせてくれたのだ。これは彼女なりの意趣返し。ついでにもしこのまま上手くいってはたてに彼氏が出来れば、引きこもりも治るだろうというお節介な思いもあったりする。はたてがそれを知れば怒るか感謝するのか、微妙なところである。
「俺に、ファン……!!　美少女の、ファン……!!　これは人類にとっては小さな一歩だ

が、俺にとっては大きな一歩……!!」
「あ、あの、横島さん……？」
「うわぁ……」
　自分にファンがいると知って一瞬ふらついてしまった横島だが、次の瞬間には日本の国旗を付けた棒を地面に突き立て、寄せ来る感動に身を震わせている。そんな横島に文と椛は引き気味だ。しかし、これも仕方のないことなのだ。横島の幼馴染に銀一という男がいる。彼は全国でも有名なアイドルとなっており、横島の同僚のおキヌも彼のファンなのだ。自分とは違って美形で、自分とは違って女にモテて、自分とは違って――。横島は嫉妬心が強い。そんな彼が銀一と同じようにファンがいると分かったのだ。これは、彼にとって中々の大事件である。
　横島ははたての手を優しく、しかししっかりと握る。
「はたてちゃん……」
「ふえっ!?　は、はいっ!!」
「――ありがとう……!!」
　横島から出た言葉は感謝だった。彼は心からの感動をそのままに、はたてへの感謝を述べる。真摯なその眼差しははたての心にクリーンヒットし、ただでさえ赤い彼女の頬を更に赤くする。もはや〝紅い〟と言っても良いぐらいであり、レミリアが少しだけ反

応した。

それはさて置き、感動する横島を見てショックを受ける者がいる。それは美鈴だ。はたての手を握る横島の姿に、つい先日の鈴仙の言葉が甦る。

――でもあんまり考え過ぎてるとどんどん後回しになっちゃうかも……。

――もしかしたら人里とかでぽっと出の女の子に先を越されるかも……。

あの時の鈴仙の言葉が現実になろうとしている。それが美鈴にある未来図を想像させた。それは、横島が色んな女の子とイチャイチャしている中、自分はそれを外からただ眺めているだけ、というもの。

嫌だ、そんな風にはなりたくない!!　私も横島さんとイチャコラしたい!!　ついに美鈴の胸にも決意という名の火が灯る。彼女は横島とイチャコラする未来のために、行動を起こす――!!

「Ｈｅｌｐ　ｍｅ,（たすけてれいせんさあああああん）ＲＥＩＳＥＮＮＮＮＮ!!」

美鈴は自分１人では勇気が出ないので、鈴仙に助けを乞いに走った――!!

「……どうしたんだろ、美鈴」
「さあ……」
皆は何か変なものを見るような目で走り去る美鈴を見送った。誰もが美鈴の行動に疑問を持ったのだが、唯一妖夢だけは違った。
「……まあ、前進した……んですかね……？」
首を傾げざるを得ない妖夢であった。

第四十一話
『彼女の想い』
～了～

「……」

彼女は紅魔館に遊びに来る時は、ずっと横島を見ていた。
横島が妹紅と話していた時も。フランと話している時も。他の誰かと話している時も。ずっと、彼を見ていた。
彼の手は暖かい。とても冷たい自分の身体を、暖かさで、優しさで満たしてくれる。
「……」
――羨ましい。
いつも彼と一緒にいるみんなが羨ましい。
――どうして、自分の傍には居てくれないんだろう？
その時、彼女の心に芽吹いた1つの思い。
それが開花するかは……開花してしまうかは、誰にも分からない。

第四十二話『想いを伝えるために』

夕暮れの紅い光がが差し込むゲストルームで、永琳が一人紅茶を飲んでいた。元々彼女は煎茶や緑茶が好みだったのだが、咲夜が淹れる紅茶の味を覚えてからは紅茶も嗜むようになった。

永琳は紅茶にはミルクも砂糖も入れる。ぽとりぽとりと、角砂糖を三つ。永琳は甘い紅茶が好きだ。特に、色々と考え事をした後に飲む甘い紅茶は格別である。

「……ふぅ」

紅茶を含んだ一口永琳の口から、小さな溜め息が漏れる。それは好物であるはずの甘い紅茶を飲んだ後だというには、少々重苦しい感情がこもっていた。

永琳はその柳眉を顰め、数時間前の出来事について思い悩んでいたのだ。

「――あら、今日は珍しく紅茶なのね」

「ここ最近は紅茶にもハマっているの。……というか、貴女は知っているでしょう、紫」

「ふふ、そうでしたわね」

一人きりの空間に突如として割り込んできた声。永琳の前に〝スキマ〟が開き、その

中から一人の少女がゆっくりと姿を現した。八雲紫である。

紫はスキマから取り出した椅子に座り、これまたスキマから取り出したティーカップに永琳特製の紅茶を注ぎ、優雅に飲みだした。その紫の行動に対し、永琳は何も言わない。予想していたことであるし、何より自分も同じようなことを何度も行っている。互いに遠慮のない付き合いになってきたようだ。

「……咲夜に迫る美味しさね。流石だわ」

「天才ですから」

永琳はお茶を淹れたりすることが得意である。それこそ、ほんの短時間で本職に追いつき、追い越せるようになるくらいには。

暫くの間、二人は紅茶を飲みながらゆったりとした時間を過ごしていた。しかし、それも夕日が完全に沈もうとした時まで。紫は永琳に問い掛ける。

「……何を考えていたの？」

その簡潔な問いに、永琳は簡潔に答える。

「さっきのことよ」

永琳の答えに紫は頷いた。それしか考えられないから。何故なら、紫もその場にいたのだ。紫は答えを知っていながら問い掛けた。

「……」

再び二人の間に沈黙が降りる。永琳は紅茶を一口飲む。ミルクも砂糖も入れた。ぽとりぽとりと、角砂糖を三つ。だと言うのに、この紅茶はとても苦い。――彼女の心境が、そう感じさせるのだ。

「……あの時の横島君」

「……」

「やっぱり、あの子は……――」

数時間前。横島は永琳と共にこのゲストルームでお茶をしていた。横島が色々と教えて欲しいことがあると、永琳を誘ったのだ。それに便乗して付いてきたのが、どこからか話を聞いていた紫。横島としては永琳だけでなく紫もいてくれた方が心強かったので、紫の同席に賛同した。

横島の教えて欲しいこと。それは妹紅や輝夜、永琳、そして自らもが変質した存在、〝蓬莱人〟についてだ。横島が知る蓬莱人の知識はあまりにも少な過ぎる。精々が不老不死であり、蓬莱人の生き肝を食せば、同じく蓬莱人となれることくらい。そこで蓬莱の薬の製作者にして蓬莱人である永琳に、色々と教えてもらおうと考えたのだ。

これは永琳も考えていたことだったので渡りに船だった。永琳は横島へと蓬莱人の知識を授けてゆく。ただし、横島は永琳が知る限りでも初めて蓬莱人の生き肝を食して蓬莱人となった人間だ。従来の通り蓬莱の薬を飲んで変質した蓬莱人との間に違いが

存在するのかは、詳しく調べてみないと分からない。……ただ、永琳の勘ではほぼ違いなどは存在しないが。

――それじゃあ最後に。

永琳はあの時の横島を思い出す。無意識的に、脇腹（トラウマの傷）を押さえていた、横島の姿を。

――蓬莱人は……。

――蓬莱人は、子供を作れますか……？

横島のその質問に対する答えは、一つだけだった。ある程度の融通は利くとはいえ、蓬莱人とは変化を拒絶する。であれば、男にしろ女にしろ、蓬莱人が子供を作ることは不可能だ。

――そう……っすか。

脇腹から血が滲み、心の傷がジクジクと痛みを訴える。その時の横島の表情（かお）、感情、そして涙……。

「――横島君……」

思わず、永琳は横島の名を呟く。その声に込められていた感情は、哀れみか、それとも――。

第四十二話
『想いを伝えるために』

「鈴仙さあああああああんっ!!!」
美鈴は鈴仙の名を叫びながら、紅魔館の廊下をひた走る。その姿は普段の美鈴からは想像もつかないものであり、すれ違った妖精メイド達は何事かと目を丸くしている。尤も、美鈴がこうした姿を見せるのは二回目であるのだが。
そうして走ること数分、美鈴は目的地へと到着した。そこは鈴仙の部屋。
「鈴仙さん鈴仙さん鈴仙さん鈴仙さん鈴仙さあああああん!!!」
そしてそのまま大声で名前を連呼しながらドンドンとドアを強くノックする。はっ

きり言って迷惑極まりない。そんなことをされてはたまったものではなく、丁度部屋で休んでいた鈴仙は泡を食ったように飛び出してきた。
「ちょ、ちょっと何っ!?　何かあったの!!?」
「鈴仙さあああああああん!!　助けてっ!!　助けてくださいいいいいいい!!」
慌てて飛び出した鈴仙に縋りつく美鈴。その尋常ではない様子に鈴仙は一気に気を引き締める。美鈴の肩に手を置き、目線を合わせて問いただす。
「落ち着いて！　何があったの？　まずは理由を話して――」
「助けてください……っ!!　私だけじゃ、何も考え付かなくて……!!」
「いや、だから何があったのかを――」
「私に出来る事なら何でもしますから、助けてください!!　頼れるのは鈴仙さんだけなんですぅ……っ!!」
「だからまず何があったのか――」
「Ｈｅｌｐ　ｍｅ，ＲＥＩＳＥＮＮＮＮＮ!!」
「あーーーーーもうっ、うるさあああぁぁぁーーーーーい!!!」
割とマジで遠慮のないゲンコツが美鈴を襲った――。

――間――。

「で？　結局何があったのよ？」

現在、美鈴は頭頂部にでっかいたんこぶをこさえ、正座をしている。鈴仙はそんな美鈴の前に椅子を用意して腕を組み足を組み座っている。美鈴からは位置の関係上鈴仙の下着が丸見えであり、同性ながらもついついそこに目が行ってしまっていた。

「あの、鈴仙さんパンツ丸見え――」

「今はどうでもいいからさっさと何があったのかを説明しなさい」

「あっ、はい」

今の鈴仙には逆らいがたい何かがある。美鈴は鈴仙の迫力に圧されるままに、何があったのか身振り手振りを交えながら懇切丁寧に説明していく。

「……つまり、天狗三人が紅魔館にやってきて、その中の一人が横島さんのファンで、横島さんも満更では無さそうで、以前私が言った〝ぽっと出の女の子に先を越される〟とかが現実味を帯びてきて、横島さんと恋人になるという決心を固めたけれど何をどうしたらいいのかが分からなくて私を頼ってきたのね？」

「その通りです……」

鈴仙は思わず天を仰いだ。正直な話自分でどうにかしろと言いたい。しかし、美鈴は鈴仙にとって得がたい友人だ。以前から相談に乗っていた事柄でもあるし、何よりついに美鈴が告白を決意したのだ。ここは溢れそうになる溜め息を飲み込み、友人の背中を押してやろうではないか。

「そうね……ただでさえ横島さんには妹紅とフランっていう恋人がいるんだし、やっぱり悠長に構えるよりは早めにバシッと決めたほうがいいと思うわ。後でどこかに呼び出して、そこで想いを伝えれば……」

「うーん……でも……」

「ん……？　何か気になることでもあるの？」

鈴仙のアドバイスに美鈴は煮え切らない態度を取る。それが気になった鈴仙は疑問でもあるのかと思ったのだが……。

「いやー、何というか……告白するより、告白されたいなー、って思いまして……」

「……」

鈴仙のこめかみに、井桁が浮かぶ。

「昔からの憧れなんですよねぇ……。素敵な男性に呼び出されて、ムード満天な状況での男性からの告白……」

「……へぇ、そう。……今まで長生きして一度もなかったんだ。そんなだから先を越さ

れるのよ？」

「ぎゃふん」

　鈴仙はいい年こいて夢見がちな乙女のようなことをのたまう美鈴に対し、辛辣な言葉を投げかける。既に鈴仙のこめかみには井桁がいくつも形成されている。しかし誤解のないように述べておくが、美鈴は少女である。何百年と生きてはいるが、美鈴は紛うことなき少女なのだ。

「そんなに告白されたいのなら色仕掛けでもしてみたら？　師匠が言ってたけど、男の子は女の子がちょっと露出を増やしたり、ちょっとボディタッチをしたら簡単にメロメロになるって言ってたし」

　鈴仙は少々投げやりになってきたのか、そんなことを言う。美鈴はその言葉を受けて俯いてしまい、体も小刻みに震えだしてしまう。言い過ぎたのか、と鈴仙が思った瞬間、美鈴がガバっと上体を起こした。

「やりました……やったんですよ、必死に!!　その結果がこれなんですよ!!」

「……!?」

　突然の叫びに鈴仙の身体がびくりと跳ねる。

「横島さんの前で露出度高めの服を着て無防備な私を演出して、型の稽古にかこつけて露骨なボディタッチを増やして、今はこうして鈴仙さんに泣きついている!!」

「あんた……そんなことしてたんだ……」

意外と積極的にアピールを繰り返していたという事実に、鈴仙は少しだけ美鈴を見直した。しかし、とも思う。そこまでやって気持ちに気付いてもらえないというならば、最早残された道は二つしかない。まず、一つ目から言ってやるべきか。

「これ以上何をどうしろって言うんです!? 何をしろって言うんですか!!?」

「さっさと告白しなさいよ」

鈴仙はばっさりと切り捨てた。

「そうやって正論ばかり並べる鈴仙さんはキライです!!」

「何だと?」

またもや鈴仙のこめかみにビキビキと井桁が浮かぶ。しかし、鈴仙は一度大きく息を吐き、何とか冷静さを取り戻す。何せ、美鈴がここまで感情を昂らせているのを初めて見る。それだけ横島が美鈴の中で重要な位置にいるのだろうが……。

「はぁ……。美鈴、さっきも言ったけどそんな調子だから先を越されていくのよ?」

「うぅ……!!」

「確かに美鈴の今までのアピールが実を結んでないのには同情するけど、やっぱり気持ちを言葉にして伝えた方がいいと私は思うのよ」

鈴仙の真摯な言葉に美鈴も冷静さを取り戻してきたのか、黙って話を聞いている。

「このままじゃ、自分の気持ちを伝えられない、どんどんと先を越されていく……。仕舞いには横島さんへの感情が裏返って、嫌いになってしまうかもしれない。……もしくは、そうなる前に諦めてしまうとかね」

「そ、そんなぁ……!?」

美鈴は鈴仙が語る〝もしかしたら〟に愕然とし、泣きが入った情けない声を出す。鈴仙の言葉は確定ではないが、それでもその〝もしかしたら〟は現実味を帯びてきている。美鈴の頭の中で、それらが容易に想像出来てしまったことが根拠と言えるかもしれない。

「私は美鈴のことを応援してるし、二人に結ばれて欲しいと思ってるの。だから今まで相談に乗ってきたんだけど……肝心の貴女がそれじゃあ、そんな気も失せてくるわ」

「……」

美鈴は鈴仙の言葉に打ちのめされる。彼女の言っていることは正しい。正しいからこそ、美鈴の心に突き刺さる。胸に走る痛み、それは鈴仙にこんなことを言わせてしまっている罪悪感、そして自分への嫌悪感。

「いい加減はっきりと決めましょう。横島さんが好きなんでしょ?」

「……はい」

鈴仙の問いにゆっくりとだが、しっかりと頷く。

「告白する？　現状維持をして、どんどんと先を越されていく？　それとも、諦める？」

挑発するような鈴仙の言葉。はっきりと現実を突きつけてくる彼女に、美鈴は一度深呼吸をする。

胸に手を当て、自らの心を再度確かめる。あの時に宿った火は、未だ消えずにちゃんと胸の中で燃えている。

「……私は、横島さんに告白します。ちゃんと、言葉にして」

「……ん。そっか」

美鈴から発せられる、力強い言葉。それは真実彼女の心がこもった言葉だ。鈴仙はその言葉が持つ力と想いを受け止め、満足気に頷いた。

鈴仙は椅子の背もたれに身体を預け、大きく息を吐く。美鈴を思ってあえて厳しい言葉を選んでいたのだが、それが彼女の精神をすり減らしていた。必要なことではあったのかもしれないが、鈴仙としてはもう少し控えめな方が良かったのではなかったかと今更ながらに思う。

「……ごめんね。嫌なことばっか言っちゃって」

「い、いえそんなっ！　私がいつまでもうだうだと言っているのが悪かったんですし……！」

改めて鈴仙は美鈴に頭を下げた。美鈴はそんな鈴仙に慌ててしまうが、こうしないと

鈴仙の気が済まなかったのだ。

「……しかし、美鈴が告白を決意してくれたのは良いんだけど……正直、怖かったりする？」

弛緩していく空気の中、不意に鈴仙は美鈴にそう問い掛けた。それに対する美鈴の答えは肯定。見るからに身体が震えている。

「や、やっぱり、いざ決意をしてみても……よよよ横島さんにこ、断られたら、とか考えると……!!」

「……横島さんなら美鈴を振らないと思うけどねぇ……」

横島の性格を把握している者なら誰もがそう言うだろう。美鈴は美少女だ。それも、紅魔館の中では横島と見た目年齢が最も近く、抜群のプロポーションを誇っている。今の横島は妹紅に加え、フランという見た目十歳程度の少女と恋仲になったのだ。そんな彼が、美鈴の告白を撥ね付けるわけがない。

「ま、それでもこういうのは仕方ないものよね……」

しかし、それを分かっていても告白とは勇気がいるもの。告白に必要な勇気は武術を極めても身に付かず、妖怪と戦うことでも手に入らない。美鈴は武術と違い、恋愛に関しては達人ではなかったのだ。

鈴仙は震える美鈴に最後の手助けを提案する。

「貴女が少しでも告白しやすくなるように、ちょっとだけお手伝いをしてあげる」
「え……？」
そう言って美鈴の目を覗き込む鈴仙の目は、赤く赤く、妖しげに光り輝いていた。

「いやー、まさかあの異変の犯人が既に退治されているとは、流石に驚きましたよ」
「ああ、妹紅や横島にも被害が出たからな。紅魔館と永遠亭のフルメンバーで一気に潰したんだよ。……詳しい話を聞きたいのなら、永琳に聞くといい」
「了解です」
陽も落ちた現在、皆はちょっとした雑談をしながらゲストルームを目指していた。落ち着いて話をするにはもってこいの場所であるし、そこには永琳が入り浸っているからだ。
レミリアと文が先行し、その後ろを何故か大人しいチルノを背負い、フランをお姫様抱っこしている横島、その隣でチルノとフランの羽根に興味を示し、色々といじくりまわしている妹紅が続く。
「お兄様、二人も抱えて重くないの？」

「全然大丈夫。むしろ二人はちょっと軽過ぎる方じゃないか？　ちゃんとご飯食べなきゃ駄目だぞ？」
「……横島はあれか？　今流行のぽっちゃり系とかが好きなのか？」
「みんな痩せすぎだから心配なんだよ」
妹紅にしろフランにしろ、紅魔館の何人かは小食の者が多いようだ。レミリアもそうであるし、咲夜や小悪魔もスタイルなどを気にして多くを食べようとしない。
横島としては元の世界で皆がしっかりと食べていたこともあり、ちゃんと食べている方が好ましいのだろう。
「……もっと話さないんですか？」
「……い、いざ本物を前にすると、き、緊張しちゃって……!!」
横島達の後ろに続くのは椛とはたて。椛は昼間あれだけ色々と語っておきながらも横島とあまり会話しようとしないはたてに疑問を抱き、はたては緊張のせいで話せないと弱気に答える。これには椛も呆れ顔だ。これでは一体何のために紅魔館までやってきたのか分からない。
横島ははたてをチラチラ見たりと何かと気にしているのだが、それにはたてが過剰に反応してしまい、まともな会話にならないのである。はたてはとりあえずは同じ空間にいることから慣れようと考えているのだが、この調子ではどれだけの時間が掛かるのや

ら。

ちなみに妖夢は幽々子の夕飯を作りに白玉楼へと帰った。横島の体のことも報告せねばならないし、何かと気苦労が絶えないだろう。

「……ところでただお兄様、めーりんの事をどう思う？」

「え、何そのいきなりな質問」

会話が途切れた一瞬、そこにフランが横島に唐突な質問をした。横島は少々困惑しているが、フランとしては美鈴への援護射撃のつもりである。元々フランは小悪魔と共に美鈴へと横島の寿命を延ばすための協力を要請していた。自分達が関与せず思わぬ形でそれが叶ってしまったが、フランにとって美鈴は同盟仲間。同じく同盟仲間の小悪魔は現在自重しているようだが、ここで横島の美鈴への感情を調査しておこうというのだ。

「好き？　嫌い？」

「そりゃー美鈴は好きっすけど……？」

「そっかー、そうなんだー……!!」

「……何か嬉しそうっすね」

フランはとりあえず好きか嫌いかの二択で聞いてみる。横島の性格からして余程のことがない限り嫌いなどと言うはずはないのだが、それでも横島が美鈴に対して好意を

抱いていると知ったフランは大喜びである。反面、横島の頭には疑問しかないのだが。
「どういうところが好きなの？」
「どういう……んー、そうだなぁ……」
フランの問いに横島は暫し天井を見て考え込む。とは言っても、出てくる答えは横島らしいものなのだが。
「そりゃまあ美鈴って可愛いし、良い体してるし、優しくてみんなに気を使えて頼れるお姉さんって感じだし、最近は露出度も増えてきたし、色々と教えるのも上手だし、良いチチしてるし、柔らかくて良い匂いだし、ボディタッチ多いし、可愛いし……」
思いつくままに美鈴の好きなところを挙げていく横島に、何人かは「流石だな」と頷いている。椛などは横島に対する視線がきつくなったが、はたては「本当に女好きなんだー……！」と何故か感動していた。
「んで、それがどうかしたの？」
「ううん、別にー」
フランは横島の問いを何かを含んだ笑顔で流す。だが、横島は意外と頭が回る。このタイミングで好きか嫌いか、そしてどんなところが好きかを聞かれれば、そこにどういった意図が含まれているかは想像がつく。
――もしかして美鈴って俺に惚れとったんか？

横島がそう考えるのは当然と言えるだろう。実際に事実であるのだし。

「……ん？」

もうそろそろゲストルームに着こうかというところで、廊下の先から〝ドドドドド……!!〟と何かが走っているような音が聞こえてきた。何かとそちらに目をやれば、猛スピードで走ってくるのは噂の美鈴。そして彼女に手を掴まれ、引き摺られるように連れられているのは鈴仙だ。

「見つけた!!」

「きゃあああああああっ!?」

美鈴が叫び、その場で急停止する。鈴仙はその制動に対応出来ず、すぽーんと美鈴の手から抜けて超特急で転がっていった。

「い、イナバちゃーん!?」

自分達の脇を転がり抜けていく鈴仙を目で追ってしまう横島だが、それがいけなかった。

「美鈴、一体何を――」

美鈴の突然の凶行を咎めようと視線を戻した時には、横島の目の前に美鈴がたまたま着用していた左手の手袋が迫ってきていた。

一瞬後、とても小気味良い着弾音と共に横島がチルノ、フランと共に吹っ飛ぶ。

「おあーーーーーーーー!!?」
「おおおおおおっ!!?」
「ひえええええっ!!?」
美鈴が全力投球した手袋の威力はとんでもなく、横島は鈴仙同様にかなりの勢いで転がっていく。フランとチルノは何とか咄嗟に自分から離すことに成功し、フランはレミリアが、チルノは妹紅がそれぞれ受け止めることに成功した。
「め、美鈴!?　あんた一体何を……!?」
驚きのままにレミリアが美鈴に問う。レミリアだけではなく、他の皆も一様に驚愕に染まった表情をしている。
「ふ、ふふ、ふふふふふふふふふ……」
「……っ!?」
俯いた美鈴から、狂ったような笑い声が漏れる。それは何とも人の不安感を誘うような声であり、美鈴の様子が尋常ではないことを如実に教えてくれる。
「うぐぅ……一体何が……」
横島は涙を目に浮かべ、強打した鼻を押さえながらも上体を起こす。それに反応したのか、美鈴もまたガバっと顔を上げる。
「――横島さんっ!!」

「は、はいっ!?」

美鈴が遠く、横島へと叫ぶ。彼女の目はまるで漫画の様にぐるぐると回っており、とても正気ではない。しかも、まるで狂気に囚われているように赤く染まっている。

美鈴は横島をビシっと指差し、叫ぶ。

「横島さん、貴方に決闘を申し込みますっ!!!」

「え……」

何故か、皆の耳朶に横島の呆けた声が響いた。

「えええええぇぇぇっ!!?」

そして横島だけでなく、皆の声が一つとなり、紅魔館中に響き渡った。

第四十二話

『想いを伝えるために』

～了～

第四十三話『月明かりに照らされて』

陽も完全に落ち、夜の帳が下りた紅魔館の中庭に、多くの人影が存在した。
そのほとんどが紅魔館の妖精メイド達であり、これから始まるある種の見世物に対し、個々人が期待を込めて騒ぎの中心にいる二人を眺めている。
妖精メイド達とは逆に気の毒そうな目でその二人を見つめる者達も存在した。レミリアを筆頭とする紅魔館の首脳陣、そして永琳を筆頭とする永遠亭の首脳陣だ。さらにここに妹紅と天狗三人娘が加わる。ちなみにだがチルノは話の展開についてこれていない。
中庭の一画には長机と椅子が置かれており、そこにはてゐと椛、文、はたてが着席している。机の端には実況席と書かれた札が置かれており、そういったディティールに拘るてゐには苦笑が送られている。
ざわめきが中庭を支配する中、てゐは机に置かれているマイクを握り、静かながらも熱のこもった声で語り始める。
「さあ、〝紅魔館の執事〟横島忠夫と、〝紅魔館の門番〟紅美鈴による決闘が、ここ紅魔

館の中庭にて行われようとしています。実況は私因幡てゐ、解説は犬走椛さんが務めます。椛さん、よろしくお願いします」

「……ああ、はい。了解しました」

てゐの言葉に、椛は何かを諦めたかのような虚無的な微笑みを浮かべて頷いた。この辺りの順応力は前回解説を務めた妖夢よりも上だが、最終的に妖夢はてゐも驚くほどに順応していたのだ。これからもっと経験を積めば、恐らくどんなことでもアルカイックスマイルで受け入れる聖人のようになれるだろう。もちろんそれが幸せとは限らないが。

「中庭の中心にいる二人はまさに対極。男と女、静と動、やる気無しとやる気有り。一体どのような戦いになるのか、興味が尽きないところです」

「そうですね。やる気などの精神的な違いは戦闘力に直結するのですが、聞けば横島さんは前回も特にやる気のない状態で美鈴さんの猛攻を凌いだとのこと。恐らくですが、今回は美鈴さんが狂気に囚われていることが勝敗に響くのではないかと思われます」

「なるほど。やはりあの状態……いわば暴走状態では真の実力は発揮出来ないと？」

「その通りです。真の実力とは完全なる理性の元に発揮されるもの。狂気に囚われていてはただ本能のままに突っ込むだけですからね。それでは猪も同然です」

椛の言葉にてゐは頷く。てゐは視線を横島達に向け、彼等の様子を確認するのだが、

何やら面白いことになっていた。
「横島さん!!　さあ、ファイトしましょう!!　私と、私とファイトしましょうよ……!!」
「……」
「さあ、ファイトしましょう横島さん!!　ファイトしましょう!!　私とぉぉお!!」
瞳……どころか、眼球そのものが赤い光を放ち、髪の一部が逆立っている美鈴の姿はどこからどう見てもバーサーカーだ。そんな美鈴を死んだ魚のような目で見つめる横島という対比は、シュールを超えてもはやギャグの領域にまで高まっている。
「……とりあえず、お師匠様、一言どうぞ」
「鈴仙は後でお仕置きね」
「――――ツッツ!!!」
永琳の言葉に、鈴仙は深い絶望に包まれる。美鈴がああなってしまった原因であるので、もう諦めてもらうしかない。絶望に打ちひしがれる鈴仙を見て周りの者が朗らかに笑う中、それを知ってか知らずか横島達は互いに構えを取る。二人から発せられる雰囲気に、妖精メイド達のざわめきが止む。

第四十三話
『月明かりに照らされて』

「……」

二人が構えを取り十秒、二十秒……。皆が固唾を呑んで見守る中、てゐが持っていたマイクが卓上スタンドに触れ、音を立てる。それが切っ掛けとなった。

「ファイトしましょおおおおっ!!」

「まだ言ってんのか……!!」

美鈴の活歩から繰り出される瞬間移動と見紛わんばかりの一撃。理性を失っているとはいえ……否、理性を失っているからこそ計り知れない威力を持っているその拳を、横島は真正面から受け止めて見せた。美鈴の一撃の威力を吸収し、自らの威力に転化するその技術――化勁を、横島は成功させたのだ。

「執事さん、美鈴の強烈な威力を持った拳を難なく受け止めたあぁぁ!!　前回では避けるしかなかった美鈴の拳!!　しかし男子三日会わざれば刮目して見よ!!　これが、これが今の執事さんの実力だぁぁぁあ!!」

てゐの実況に歓声が上がる。瞬間、まるで分裂したかのように美鈴の腕が走る！　五条十条と風を切り裂く美鈴の掌、拳、肘。しかし横島はそれらを全て弾き、逸らし、受け止める。かつての横島の醜態を知っている者達からすれば、今の横島は本物の横島なのかを調べたくなるほどに何もかもが違っている。

「執事さんに迫る美鈴の拳の速射砲!!　しかし、執事さんはそれをかわし続けるーーーー!!」

「……驚きですね、まさか彼にこれほどの格闘技術があったとは。彼が武術を始めて長いんですか？」

「いえ、執事さんが武術を習いだしたのは大体ひと月半ほど前のことですね」

「ひ、ひと月半ですか……!?　そんな馬鹿な……」

　椛とて剣術を修めている者。横島の技術の高さを見て、恐らくは十年単位で修行していたのだろうと思っていたのだが、実際は信じられないほどにまで短期間で得たものだったのだ。

「一体何をすればひと月半であれほどの強さを……？」

「えっと、詳しくは第十一話と第十八話と第二十三話を参照してほしいんだけど……まあ、簡単に言いますと。執事さんは煩悩が凄い。禁欲のせいで見た目が幼い妖精メイド達に襲い掛かってしまうかもしれない。そうだ、武術に打ち込んで煩悩を発散しよう

……そして今に至ります」

「そんな馬鹿な……!!」

やはり横島を余り知らない者が信じることは難しいようだ。ちなみにはたては素直に感心し、文は高速でメモを取りながら写真を撮りまくっている。

椛の疑問をよそに、横島と美鈴の戦いは更にヒートアップしていく。正気を失っているとは思えない程の攻撃を繰り出している美鈴だが、その攻撃は非常に単調だ。フェイントも何もない、真っ直ぐな攻撃。ついに、横島の反撃が始まる。

「――――ッ!!」

ここだ、と判断した。横島は美鈴の右の拳を右の掌で跳ね上げ内側に弾き、身を屈めて左半身を美鈴の懐へ潜り込ませる。そして肩と背中という大面積を使い、強烈な靠撃を叩き込む!!

――太極拳・野馬分鬣(イェマフェンゾン)!!

「……ッ!!」

美鈴はその一撃に数メートル程吹き飛ばされ、観客達は思わぬ展開に大いに沸いた。

「執事さんの何だか良く分からない攻撃が美鈴にヒットしーーー!!　しかし美鈴も然る者、瞬時に体勢を立て直して再び執事さんに向かっていくーーー!!」

「今のは素晴らしい反撃でした。どうやら相手の懐に潜り込んで体当たりを食らわせる

技のようですが、かなり洗練されています。手足の動作と身体の向きが同時に変わっていく……中々面白い武術ですね」

「ねー、執事さん凄いよね。ね、ね？」

「何でアンタがそんな嬉しそうなのよ、てゐ……」

　椛の解説にレミリア達を含めた観客も同意する。先ほどの横島のカウンター攻撃は確かに洗練されていた。ここに妖夢がいれば、手放しで褒め称えるだろう。これにはちゃんとした理由があるのだ。

　そもそも横島は靠撃そのものが初めから上手かった。美鈴もこの才能に喜び、長所を伸ばす修行を横島に課していく。では、何故靠撃が得意だったのか。

　――簡単な話だ。靠撃を美鈴に当てれば、彼女の豊満なチチが！　乳房が!!　おっぱいが!!!　肩と背中という大面積に強かに触れるからだ!!!!!　……所詮横島とはそういう男である。

　いつもならば靠撃を当てるたびに横島の顔はだらしなく歪んでいた。今回も歪んでいる。歪んでいるのだが……何かがおかしかった。

「……ぅ～～」

「ん？　どうしたチルノ、そんなにそわそわして」

　今まで静かに横島達の戦いを見学していたチルノだが、何やら挙動不審気味に体を揺

らしている。彼女の隣で観戦していたレミリアが何があったのか聞き出すのだが、どうにも要領を得ない。

「ん～、何かお兄さんを見てると体がチクチクするっていうか、どんよりしてくるというか……」

「なに……？」

チルノの言葉に視線を横島へと戻す。相変わらず横島は美鈴の攻撃をかわしながら、隙あらば負けじと攻撃を繰り出していく。

「……いや待て、横島が美鈴を攻撃しているだと？」

「あ」

レミリアが気付いた事実に、周囲の皆が声を上げた。以前美鈴と組み手をした時には〝女の子だから〟という理由で一切の攻撃をしなかった横島だが、今回はそういった素振りを見せず、美鈴に攻撃を加えている。クリーンヒットは先ほどの野馬分鬣のみであるし、積極的な攻撃ではなく狙っているのも腕や足といった人体の末端部分なのだが、それでも横島が美鈴に攻撃を加えている姿には違和感があった。

「……そういえば、横島の霊波がいつもより攻撃的だな。言われるまで気付けなかった」

「うん。それに、お兄様の雰囲気がいつもより怖い……というよりは、重いかも」

更に加えられる横島の情報。どうやら横島も普段通りというわけではないようで、妹

紅とフランが感じ取ったものを言葉にする。そこから分析できるのは、横島が怒っている……ということだろうか。

「いや、怒ってる、ではなく……。怒ってはいるのか？　でも、それ以上に、何だろ……落胆、かな？　落ち込んでるのか？」

横島とラインが繋がっている妹紅は横島の思いを感じ取れるのだが、互いが互いを思っている時の様にダイレクトに伝わってこず、表層の部分のみしか読み取れない。怒りや落胆、それ以外の感情が混ざり合い、余計に複雑にしている。

「……それにしても良く分かったな。横島が普段と違うことに」

「んんー……なんか見てるともやもやして……」

チルノは未だに体を揺らしている。どうやら相当に居心地が悪いようだ。そんなチルノを見て、レミリアは不審に思う。

――こいつ、本当に妖精か？

妖精とは自然の化身。顕在化した世界の触覚だ。頭の出来は良いとはお世辞にも言えないが、妖精は時に人を惑わせ、時に人を導く存在。

では、チルノはどうか。妖精の中でも別格の力を誇るはずの大妖精を遥か後方に追いやるほどの強大な力に加え、自分達が気付かなかった横島の感情の機微を誰よりも早く捉え、ついでに霊波の操作にも詳しいときている。

一つ一つは特に問題はない。どれもが妖精の特徴に当てはまるだろう。だが、レミリアはチルノに違和感を抱く。

「……」

しかしレミリアはそれをおくびにも出さず、チルノの頭をぐわしと掴み、そのままや乱暴に撫でる。

「んんっ、なにすんのさ？」

「いやなに、中々凄い奴だと思ってな。これからもフランをよろしく頼む」

「……？　うん、分かった」

チルノはレミリアの言葉を疑うことなく頷き、されるがままになる。レミリアの手がチルノの冷気に晒されるが、レミリアは上級の力を持つ悪魔にして吸血鬼。その程度の冷気は何の意味も持たない。

「……チルノって凄い奴だったんだな。私なんて言われるまで全然気付かなかったのに……これでも彼女なのに……ラインが繋がってるのに……」

「……私と違ってチルノってお兄様のことが良く分かってるんだね……。私だって恋人のはずなのに……」

横島の変化に気付くことが出来なかった妹紅とフランが、膝を抱えて落ち込んでしまった。二人からはどんよりとしたオーラが漂い、その一画だけ別世界のように重い雰

囲気を纏っている。早速妹紅には輝夜が、フランには小悪魔が慰めに走ることとなった。

「……!!　くっそ……!!」

観客達が繰り広げる寸劇を知らぬ横島は、苛立ち混じりに吐き捨てる。美鈴は相変わらず苛烈な攻撃を繰り出し、その一撃一撃が横島の心に波を立てる。

横島は怒り、落胆、疑問、それぞれが入り混じった感情に翻弄されていた。

何故自分に決闘を申し込んできたのか。何故これほどまでに重い一撃を放ってくるのか。何故これほどまでに攻め立てられねばならないのか。美鈴は、自分に何を望んでいたのか。

正直な話、横島は調子に乗っていたと言える。妹紅とフランと特別な関係になり、更に小悪魔やてゐ、妖精メイド達といった女の子から向けられる好意に、横島は知らずの内に根拠のない全能感に浸っていた。そして、美鈴も自分に特別な感情を抱いているのだろうと考えていたのだ。

その矢先に正気を失っているらしい美鈴から決闘を挑まれ、苛烈な攻撃に晒され、それが今現在も続いている。

正気を失っているとはいえ、何故決闘を挑んできたのか。美鈴は普段から自分と戦いたがっていたのは知っている。しかし、それでも。何故ここまで強烈な攻撃を打ち込ん

でくるのか。

攻撃を弾くたびにビリビリと痺れが走り、攻撃を避けるたびに空気を切り裂く音が鳴り響き、攻撃を受け止めるたびに骨が軋みを上げる。

――横島は思う。美鈴は、もしかしたら自分を嫌っていたのではないか？　と。そう考えてしまうほどに、美鈴の攻撃は容赦がないものだった。

横島は自分勝手に〝期待させやがって〟と怒りを抱く。怒りを覚え、〝何でここまでされなくちゃいけないんだ〟と疑問を抱く。そして、〝俺と同じ気持ちだと思ったのに〟と、落胆する。

「――――え？」

横島の思考に、一瞬の空白が出来る。

「横島さあああぁぁぁん!!」

「のわあああああっ!!?」

その一瞬の隙を突き、美鈴が横島に強烈な拳を叩き込む。間一髪防御は間に合ったが、威力を殺しきれず、そのまま思い切り吹き飛ばされる。

夜の空、地面、観客達と目まぐるしく視界が移ろう中、横島の思考は先ほどのことで

埋め尽くされていた。

無意識に考えていたこと。当然とばかりに思っていたこと。だからこそ、怒り、落胆した。自分と同じ気持ちだと思っていた。

――つまりだ。

美鈴が自分に惚れているのではなく、自分が、美鈴に惚れているのだ。

「……」

それを理解すると共に、胸の中で渦巻いていた様々な感情が鳴りを潜める。納得できた。だから、自分はああまでおかしくなっていたのだ。

改めて美鈴を見る。目は赤く光り、髪の一部は逆立ち、狂気に囚われて訳の分からない事を口走っているその姿は、正直百年の恋でも冷めてしまいそうな姿だ。

――それでも。それでも横島には、横島にとっては、そんな彼女が愛しく見えた。

「……しかし、どうしたらいいんだこれ。そもそも何を以ってこの決闘は終了すんだよ」

頭の冷えた横島は美鈴の動きに注意しながら考えを巡らせる。何とかして美鈴を正気に戻す手段はないものか。どうしたらこの決闘を終わらせることが出来るのか。横島には皆目見当がつかない。

美鈴に攻撃を加えて気絶させるのは却下だ。幾度も攻撃を加えておいて今更ではあるが、やはり好きな女の子を攻撃するのは嫌だ。では美鈴の攻撃を素直に食らってしま

うのがよいか？　これも却下だ。今の美鈴の攻撃をまともに受ければ、死んでしまうかもしれない。蓬莱人ではあるが、死の感覚を受けるのは嫌だ。

「……本当どうしよ」

横島がどうにか穏便に事を済ませられないか考えているのと、美鈴の体が小刻みに震えだした。

「……うして……」

「……何だ？」

それは小さな声だったが、やがて声量を増していき、ついには叫びとなって横島へと叩きつけられる。

「どうして!!　私の気持ちを受けてもらえないんですかあああぁぁぁ!!」

「……ん？」

どういうことだろう、と横島が首を傾げる。ちなみに観客の皆も同じように首を傾げていた。

「私は……!　こんなにも……!!　横島さんへの想いを拳に込めているのにっ!!!」

美鈴は叫ぶ。どうやら美鈴の一撃一撃が重いのは、横島への想いを込めているからしい。

美鈴の言葉を訳せば、つまりは大人しく私の攻撃を食らいなさいということなのだろ

うか。横島としてはご免被りたいところである。
「もういいです!!　直接言葉にしてあげましょう!!　横島さんはそのままで聞いてください!!」
「え、あ、はい」
虹色のオーラを全身から発する美鈴の迫力に圧されたのか、横島は素直に構えを解き、聞きの体勢に入る。美鈴はオーラこそ荒々しいが、先ほどまでのように正気を失っているような雰囲気ではなく、もしかしたら狂気が抜けたのかもしれない。
「横島さん……私は洒落た言い回しとか、奥ゆかしい言い方とかは出来ない女です。ですから、こんな言い方しか出来ません……」
突如始まった美鈴の告白（？）に実況も解説も仕事を忘れ、食い入るように二人を見つめる。観客達もここは空気を読み、固唾を呑んで静かに見守る。
……そして、その時は訪れた。
「私は……」
美鈴が瞬間移動したかのように横島の間合いに滑り込む。――活歩。
「へ？」
「私は!!」
爆発呼吸と共に震脚、十字勁によって威力を増した掌底が横島の鳩尾に叩き込まれる

!!　――打開。
「ぐぶぇっ!!?」
油断しきっていたところに入った強烈な一撃は、横島の意識を闇の中へと容易く追いやるほどの威力を持っている。しかし、横島の意識は未だ絶えず。
「貴方のことが!!!」
美鈴は勢いを殺さず、自らの身体を回転させて肩と背中という大面積を横島の胸へと叩きつける!!　――貼山靠。
「あ……が……!!?」
威力が完全に横島の身体を貫通し、彼が倒れるよりも先に美鈴の拳が唸りを上げて顔面へと迫る。視界の全てを美鈴の縦拳が覆い尽くす前に見えた美鈴の瞳は、未だ赤い光りを放っていたのだ。
――まだ、正気に戻ってなかったの……?
警戒を解いたことを後悔する間もなく、横島の顔面に美鈴の拳が叩き込まれ、彼の体を軽々と大空へと吹き飛ばす!!!　――揚炮。
「――大・好き・ですッッッ!!!!」
「うっぎゃあああああああああああああ!!!!?」
横島は美鈴の絶招の一つ〝熾撃『大鵬墜撃拳』〟によって意識ごと吹き飛ばされ、頭

から中庭に着地することとなった。
　静寂が中庭を支配する。皆色んな意味で開いた口が塞がらないようだ。そんな異様な雰囲気の中、残心を解いた美鈴は横島へと向き直る。
「横島さん、私の気持ちを受け止めて――――死んでる」
　死んではいない。ぴくりとも動かないが死んではいない。顔にトーンが貼られていないので死んではいないのだ。
　力なく倒れ伏す横島に狂気が段々と抜けてきた美鈴が駆け寄り、抱き起こす。
「誰が……一体誰がこんな酷いことを……!?」
「お前だ」
　上手く事情を読み取れない美鈴の頭に、レミリアの〝ツッコミグングニル〟がぶっ刺さる。
「あふん」
　美鈴は横島と折り重なるように倒れ伏した。横島の頭部は美鈴の豊満な胸に押し潰され、このままでは呼吸困難に陥ってしまうだろう。しかし、横島の表情は嬉しそうだった（周りからは見えないが）。好きな女の子の、しかも巨乳に押し潰されているのだ。顔が綻ぶのも仕方がないだろう。何せ横島は健全な男の子なのだから。

「……」

二人が倒れ伏しても、尚沈黙は続く。しかし、てゐだけは己の職務を全うしようとマイクを強く握り締める。

マイクを通してカタリと音が鳴り、皆が徐々に正気を取り戻していく。それを確認したてゐは大きく息を吸い、決闘の終了を宣言する。

「決まったーーーーーー!!　執事さん対美鈴!!　この決闘を制したのは――――レミリアお嬢様だあああぁぁぁーーーーーーー!!!」

「えええええぇぇぇーーーーーーー!?」

てゐの言葉に椛は驚くが、他の皆は何ら疑問に思うことなくレミリアを称えている。いつの間にか流れが変わっていたらしく、まるでその為の右手と言わんばかりに拳を振り上げている。その姿は中々に神々しかった。

「意外な結果に終わった決闘でしたが、彼等の熱い戦い、そして決着。これらは皆さんの心に永遠に刻まれることでしょう。椛さん、今回はありがとうございました」

「ええ……!?　いや、良いんですかアレで!?」

「皆様、願わくば第三回目でまたお会いしましょう。実況は私因幡てゐ、解説は犬走椛さんでお送りいたしました」

「ちょっと皆さんスルースキル高過ぎませんか!?」

てゐの言葉を皮切りに、皆が撤収作業に入る。ちなみにだが横島は妹紅とフランが、美鈴は永琳と鈴仙が永琳の部屋へと運んでいった。

月の光が室内を淡く照らす深夜。美鈴はふと目を覚ました。

「あれ、ここは……」

未だ眠気が宿った目で周りを見れば、そこは見知らぬ部屋の中。はて、自分は一体何故こんなところで寝ていたのだろうか。

上手く回らない頭で考えを巡らせるが、一向に答えは出てこない。それどころか眠気が意識を侵略してくる始末。そうして少々頭がふらついてきた時に、美鈴へと何者かが声を掛けてきた。

「目が覚めたのか？」

「うひぇ!?」

一瞬で目が冴える。その声の持ち主は自分の隣のベッドに寝転がっていた。その声の主とは、もちろん横島である。

「よ、横島さん!?　い、一体どうして横島さんが――」
「静かに。今はもう夜の二時過ぎてんだ。あんまり大声は出さないようにな」
「……!!」
横島の言葉に徐々に記憶が甦ってくる。鈴仙に相談しに行ったこと。狂気の瞳の能力で正気を失ったこと、横島に決闘を申し込んだこと、そして、横島へと自分の想いを（文字通り）叩き付けたこと――。
「……!!」
暗闇の中、美鈴の顔が赤く染まる。幸い明かりがないお陰で横島にばれることはないが、それでも恥ずかしいものは恥ずかしい。
――どうして正気を失っていた時の記憶があるの!?　こういうのって覚えていないものじゃないの!?
美鈴は顔を押さえて身悶えする。羞恥やら罪悪感やら何やらで、胸が張り裂けてしまいそうだ。隣のベッドでそれを眺めている横島は美鈴の姿に苦笑を浮かべる。
「お互い今日は大変だったな。もう身体は大丈夫なのか？」
「は、はい！　大丈夫です！」
美鈴は声を掛けられて身体を震わせる。声も上ずり、どもり気味だ。そんな美鈴の様子を見ない振りをし、横島は美鈴へと爆弾を投げる。

「なあ美鈴。あの時の言葉なんだけどさ」
「……っ!!」
横島の言葉に、美鈴の身体が硬直する。
「……本気、ってことで良いんだよな？」
言いながら、横島は自分が寝ていたベッドから降り、美鈴のベッドへと腰を下ろす。
隣に座られた美鈴は身を硬くするが、それも一瞬のこと。数秒の間を置き、美鈴は恥ずかしそうに小さく頷いた。
「……私は、横島さんが、好きです。いつの間にか、好きになってたんです」
「……」
美鈴は横島に自らの想いを、狂気によってではなく、ちゃんと正気のまま言葉にする。
今まで様々な葛藤があったのだろう。美鈴は体を震わせ、弱々しく俯いていく。
「私、三人目でもいいから横島さんの恋人になりたくて、でも一人じゃ勇気が出ないから鈴仙さんに相談して……そしたらあんなことになって……」
「あー……」
横島は目を赤く光らせ、髪を一部逆立たせた美鈴の姿を思い返す。何であんなことになったのだろうか、疑問は尽きない。
「……でも、ご迷惑でしたら、全然、その……えっと……」

美鈴の言葉が尻窄みに小さくなっていく。〝断ってくれていい〟と言いたいようだが、それを言葉に出来ない。言葉にしたら、自分は泣いてしまうだろうから。これ以上、好きな人に迷惑を掛けたくないのだ。

「……美鈴」

「……はい」

横島に名前を呼ばれ、美鈴は顔を上げる。

「――――？」

横島に向き直った瞬間、視界には彼の顔しか映らなかった。暗闇が支配する部屋の中でも、淡い月の光がその暗闇を和らげる。視界にはいっぱいになった横島の顔。そして、自らの唇に触れている、横島の唇。

「――――!?」

キスをされた。

気付いた時には既に横島は離れており、唇に微かなキスの余韻が残っているのみ。美鈴は信じられないとばかりに唇を押さえ、混乱が支配するままに横島を見る。

「俺も……」

横島が真っ直ぐに美鈴を見据え、口を開く。

「俺も、美鈴が好きだ」

「……!!」

美鈴の胸を、生涯初めての衝撃が襲う。今まで感じたことがないほどの、大きな大きな衝撃が。

知らず、美鈴の頬を涙が伝う。それは嬉し涙。横島は申し訳無さそうに美鈴の涙を拭い、優しく抱き締める。横島が齎す温もりは、美鈴に安らぎを与えてくれる。

「……ごめんな、美鈴一人だけを選べなくて」

横島から出た言葉は謝罪。美鈴は横島の腕の中で首を横に振り、気にしていないことを伝える。横島は妹紅、フラン、そして美鈴に罪悪感を抱きつつも、それでも傲慢に彼女達を自らのものであると心に刻む。

「……こんな俺で良ければ、傍にいてほしい」

「……はい。これからもずっと、傍にいさせてくださいね、横島さん……!!」

月明かりが照らす室内。二つの影はもう一度だけ重なり合い、やがてまた二つに戻る。美鈴は横島の腕の中で安らぎに包まれたまま眠りに落ち、横島はそんな美鈴をベッドに横たえさせ、自らはしばらく美鈴の寝顔を観賞したあとで自分のベッドに戻る。

「明日目が覚めたら、理不尽な理由で攻撃しちゃったことを謝んねーとな」

美鈴を見ながらそう呟いた横島も、やがて睡魔に負けて眠りに着く。

二人の顔は安らぎに包まれている。

月はそんな二人を淡く、優しく照らし続ける。
それはまるで、二人を祝福しているかのように――。

第四十三話
『月明かりに照らされて』
～了～

第四十四話『お礼とお詫びを』

部屋の中に、眩い朝の日差しが差し込んでくる。瞼を透過する光が美鈴の意識を刺激し、彼女を眠りの淵から呼び覚ます。

「……」

うっすらと目を開ければ、映りこむのは知っているようで知らない天井。何故ならば美鈴が目を覚ましたのは自分の部屋ではなく、永琳の部屋だからだ。

美鈴は身を起こし、しばらく呆けたように天井を見つめ、やがて俯き瞳を閉じる。

「……えへへ」

ふと、笑いが込み上げてきた。今彼女がいるのは夢の世界ではない。もちろん妄想の世界でもない、ちゃんとした現実だ。それを認識して、だからこそ絶えず笑みがこぼれる。

「えへ、えへへへ……」

にやけが収まらない。緩みきった頬を両手で押さえ、身体をいやんいやんと左右へ振り、それでも尚収まらないこの感情。

――それは歓喜。

昨夜、ついに愛する男性へと想いを伝え、それを受け入れてもらえた。今の所その男性には他に二人の恋人が存在し、かつ自分が恋人三号であるという中々に倒錯した状態であるのだが、今の美鈴はそんなことはどうでもよかった。

今の美鈴は幸せいっぱい夢いっぱい。恋人二号である自らが仕える主、レミリアの妹であるフランは前々から可愛いと思っていたし、そもそも本人同士の仲も良好だ。恋人一号である妹紅とは今までそれほどの親交はなかったのだが、ここ最近彼女はよく紅魔館へと遊びに来るので以前よりは親しくなった。少々癖はあるが人柄も問題なく、好ましい人物であることに間違いはない。きっとより良い関係を築いていけるだろう。

実際はそこまで簡単な話ではないだろうが、やはり今の美鈴は気にしない。意外とお気楽な性格をしている彼女のことだ。今までが何とかなっていたのだし、これからもきっと何とかなるだろうと考えているに違いない。

「……はっ!!」

と、ここで美鈴がようやく気付く。今自分がいる部屋は永琳の部屋であり、自室ではない。この部屋で寝かされていたの人物は、もう一人いたのだ。ということはつまり、先ほどの一人悶えていた恥ずかしい姿をばっちりと見られていたのかも知れないということ。

美鈴は慌ててもう一人の人物――昨夜晴れて恋人となった、横島忠夫が寝ていた隣のベッドへと向き直る。

「――!?」

そこに横島はいた。しかも既に起きていた。しかし、彼は美鈴の方を見ていなかった。何故ならば彼は、ベッドの上で跪き、シーツに自らの頭を擦り付けていたから――!!　要するに、土下座である。

「すんまっせんしたぁっ!!」

「え、えぇー……?」

第四十四話

『お礼とお詫びを』

「すんまっせんしたぁっ!!」

「もうやめてくださいってば!!」

あれから数分。相変わらず横島は土下座しているし、美鈴は何故彼に土下座されているのかが分かっていない。このままでは埒が開かない。美鈴は横島のベッドへと移り、頭を下げ続けている彼の背中に胸を押し付け、耳元で吐息交じりの声で何故土下座するのかを問い質した。

「あああああ、決闘をしかけてきたのは俺のことが嫌いなんじゃないのかと思って、それで何かこう裏切られたような気持ちになって、それで八つ当たりというか何かそんなんで攻撃しちゃいましたあああああああ……!!」

横島は耳と背中に全神経を集中させ、顔を盛大に崩壊させつつそう答えた。その答えに美鈴は疑問を持つ。

「いえ、暴走していたとは言え、決闘を申し込んだのは私なんですから攻撃なんて別に気にすることは……」

「でも理不尽な理由だったし、女の子に怪我でもさせたらと思うとおっぱいが背中、いや耳に息あああ……!?」

それは、実に横島らしい理由だった。敵を相手する時には容赦などしない彼ではあるが、基本的に彼は女の子には優しい。例え本人が気にしていなくても、罪悪感を抱いてしまう。これが男相手ならばネチネチと追撃する所だが、美鈴は美少女でしかも自分の

恋人となった存在だ。彼が抱く罪悪感は相当なものなのだろう。最後に煩悩が少し漏れているのも彼らしいと言える。

美鈴は横島の背に抱きつき、先程よりも強く自分の胸を押し付ける。その感触に横島の体がびくりと震えるが、美鈴はそれを気にせず彼へと圧し掛かる。

「……!?」

美鈴は嬉しかった。自分をそこまで気にかけてくれることが。横島のネガティブな部分には戸惑いもあるが、それはそれだけ自分を大切に想ってくれているという証拠でもある。だから美鈴の機嫌は良くなる一方だ。それに比例して直接的な接触が更に増え、ある意味で横島を追い詰めていくのだが……それに美鈴は気付かない。否、気付かないふりをしているのだろうか。

美鈴は、横島との肌の触れ合いが好きであるが故に。

そして、やはり気付けないのだろう。自分勝手な考えからの自業自得であったとはいえ、横島が女の子に対して手を上げることが、どれだけ彼の負担になるのか。

気付けないのだろう。例え、横島本人であっても。

時は流れて朝食の時間。横島の隣にはニコニコと笑顔な美鈴が座っており、彼女から巻き散らされる幸せオーラで「何かあったんだな」というのが周囲にバレバレとなっていた。今回対面に座っているフランは嬉しそうにしている美鈴を見て自らも嬉しそうにしており、その隣に座っている妹紅も、美鈴と横島に何があったのか大体のところを察した。上機嫌な美鈴に対して柔らかな笑みを浮かべている辺り、妹紅といいフランといい、やはりというか何というか、自分以外に恋人が出来ることに対してあまり忌避感を持っていないようだ。

文化の違いと言えばそれまでだが、それでは面白くない人物がいる。例えば紅魔館の魔法使いとか、昨日は紅魔館に泊まった天狗の新聞記者とか。それはそれで悪趣味ではあるのだが。しかし、だからと言ってすぐさま行動には移さないようだ。互いに色々と気になる者がいることであるし、そちらの問題が片付いてから盛大にからかうことにする。

「そういえば横島。アンタは今日どうすんの?」

「え、何すか急に?」

「いや、ただ気になっただけ」

レミリアの問いに何かあるのかと思ったが、どうやら単純に話の種がなかっただけらしく、レミリアの目にも態度にも大した興味は宿っていない。

レミリアに聞かれて横島は改めて今日一日の過ごし方を考える。レミリアと永琳からはしばらく仕事を休んだ方が良いと言われているので基本は暇だ。同じく毎日の鍛錬も控えたほうが良いと言われているのだが……横島は鍛錬を自らの安全装置の一つとしているので、止めるわけにはいかない。昨日の決闘もある意味では役に立っていた。

「……慧音先生や阿求ちゃんにお礼とお詫びの品でも持っていこうかな。けっこう迷惑かけちゃったし。……そのついでに人里に遊びに行ってみようかな」

横島が出したのは慧音達に会いに行くというもの。彼は慧音達に迷惑をかけた分、何かお礼をしたいと考えたようだ。女の子には律儀になる横島。早速何が喜ばれるのか考えを巡らせる。

「……なら私もついて行っていいか？　私もあの二人には迷惑かけちゃったし」

ここで横島に同行の許可を求めたのは妹紅だ。妹紅はあの時の自分の事を思い返すと、今でもとても恥ずかしい気持ちでいっぱいになる。二人とも自分の為に随分と骨を折ってくれた。自分も横島同様に二人に何かを贈りたいと考えたのだ。横島はそれを承諾し、人里へと向かうのはこれで二人。

気になるのは妹紅と同じく横島の恋人であるフランと美鈴。二人とも何かを期待するかのような眼差しを横島へと送っている。フランはキラキラと輝く瞳で。美鈴は何

か熱が宿ったような瞳で。
「……フランちゃんと美鈴も一緒に行く？」
「行くーー！」
「えへへ、よろしくお願いしますね」
二人とも笑顔で即答してくださった。フランはともかく美鈴は門番の仕事があるはずだが、流石のレミリアも今回は空気を読んでそれを許可する。これで横島とその恋人達が人里に出かけることが決まった。
いくつもの生暖かい視線が横島達に集中する中、パチュリーは隣に座る小悪魔の顔を見る。実に羨ましそうな表情だ。
「……あなたはついていかなくていいの？」
気付けば口に出していた。小悪魔はパチュリーの言葉に少々驚いたようだが、小さく苦笑を浮かべるとその笑みと同じくらい小さな声で呟いた。
「……今日中に終わらせたい仕事がありますので」
「……そう」
パチュリーは片目を閉じ、小さく溜め息を吐く。どうやら遠慮をしているようだ。恐らく何か負い目のようなものも感じてしまっているのだろう。パチュリーからすれば何をやっているのか、という話なのだが、当の本人からすればそれは重要なことなのだ

ろう。変にこじれずに解決してほしいとは思うが……もっと気にかけてやった方が良いか。

　とにかくパチュリーは今は小悪魔の意思を尊重する。もしこじれたら……その時は強引な手を使おう。パチュリーはこういった面倒ごとが苦手なのだ。

「……横島さん、三人の女の子と付き合ってるんだ」

　感心したように呟くのは横島のファンであるはたて。多淫の妖怪だと言われる天狗である彼女も、特に恋人の数に疑問は抱いていない様子。文はそんなはたてを横目に見つつ、これではたてにもチャンスが来たのかとほっと息を吐く。何だかんだ言っても文にとってはたては友人。その恋路が上手く行くのならそれは喜ばしいことだ。横島の幻想郷での女性関係について取材する間もなく一気に進展しているのが悔しいところではあるが、言ってしまえばもう今更なことである。

　逆に横島に対して厳しい目を向けるのは椛。彼女もはたての恋を応援していたので、横島が三人の女の子と付き合い、デレデレしている様を見て少々機嫌が悪くなっているようだ。もちろん本人達が納得している様子であり、幸せそうなので自分が口を出すようなことではないと理解はしているのだが、はたての友人としては複雑な心境だ。

「ところで、はたてはついていかないの？」

「ええ？　いや、やっぱり邪魔をするのは悪いし……」

「そうですね。別に今日じゃなくてもいいでしょう。機会はいくらでもあることですし」

天狗三人はそれぞれ考えることは様々だが、それでも仲睦まじく話しながら朝食を頂いている。ちなみにだが朝食のメニューはパンとスープにスクランブルエッグ、ソーセージとサラダ。和食が中心の天狗社会では珍しい食事であり、その未知の味と食感に三人の耳は絶えず上機嫌にぴこぴこと動いていた。

「横島君、人里に行くのなら私のスキマで送ってあげるわ」

優雅に紅茶を飲む紫からの言葉に、横島は感謝を示した。以前は横島に対してスキマを使うのを躊躇していた紫だが、既に『男』との戦いの際にスキマを使用している。横島も特に気にしていない様だし、これからは有効に使っていこうというのだ。

それに、確認したいこともあるのだし。

「そんじゃ、午後から人里に向かうかな。昼食は食べてから行くか、それとも向こうで食べるか……」

味で言えば当然紅魔館の方が断然良いし、その方がお金もかからない。しかし向こうでは紅魔館では食べられない食事もあるだろうし、せっかくこの四人で出かけるのだ。ちょっとしたデート気分を味わっても良いだろう。

「うん、遊びに行くのはついで。ついでに遊びに行くんだ。あくまでもついでに」

本来の目的は慧音と阿求へのお礼である。決してそちらの方がついでというわけではないのだ。……説得力については聞かない方が良いだろう。
そんなわけで、食事は人里で取ることにしたのであった。

ここは人里。その中でも少々入り組んだ所にある、小さな家。そこには二人の妖怪が存在し、片方は今も布団の中で眠り続け、もう片方は眠っている妖怪の寝顔を見ている。
「……まだ疲れは取れない、か」
小さく呟くのは赤と黒を基調とした衣服に身を包んだ妖怪の少女〝赤蛮奇〟。赤蛮奇は眠る少女〝今泉影狼〟の髪を優しく指で梳きながら、そっと溜め息を吐く。
今から数日前のあの日、ここ赤蛮奇の家に影狼が涙を流しながら訪ねてきた。酷く憔悴した様子で最初は何を言っているのかまるで分からなかったが、何やら命の危機に直面したことだけは伝わってきた。赤蛮奇は興奮状態にある影狼を落ち着かせようとしたのだがまるで効果がなく、やがて影狼は電池が切れたかのように急に倒れ伏した。それはただ眠っただけだったのだが、そうと分かるまで生きた心地はしなかったというのが正直な感想である。

数時間後に目覚めた時には多少は落ち着いていたが、それでもやはり取り乱していたのだが、今度は何があったのかを聞き出すことには成功した。どうやら人間に危ない所を助けてもらい、しかしそのせいで恩人が死ぬかもしれないらしい。

今すぐ助けに行こうとする影狼だが、あれから既に数時間経っている。それを告げると彼女は涙を流し、悲嘆に暮れてしまった。人間に対してそこまで友好的でもなかった彼女が、こうまで気にするとは思っていなかった。それほどに衝撃的な出来事だったのだろう。

次の日、影狼と赤蛮奇は連れ立って竹林に〝恩人〟を探しに赴いた。赤蛮奇の予想では……というより、普通に考えれば生きているはずがない。何かとんでもない奇跡でも起こらない限り、その〝恩人〟は殺されてしまっているはずだ。

影狼は竹林に着くと迷いなく〝恩人〟の匂いを探る。雨でぬかるんだ地面で服が汚れるのも厭わず、人狼としての感覚の全てを使って。雨で匂いが流れたのか、芳しい結果は一向に得られない。それでも探しに探して、ついに見つけたもの。

それは炭化した竹林の一画。その中心にある、不自然に綺麗なまま残っている地面。そして、そこにうっすらと残っていた〝恩人〟の血の匂い。

「……」

良く見れば、地面には内臓と思しき肉片もいくらか散らばっていた。それを発見した

時の影狼の様子は、正直言って見ていられなかった。
　赤蛮奇は項垂れる影狼の肩に手をやり、抱きかかえるようにして家へと戻った。それから影狼は自己嫌悪に陥ったのか、私のせいだと呟き続ける。赤蛮奇にはかける言葉が見つからない。それは、今もだ。
「影狼……」
　赤蛮奇は眠る友人が目を覚ますまで、優しく髪を梳き続ける。友人を助けてくれた〝恩人〟に感謝しつつ、友人をこんな状態にしてしまった原因でもあると、少しの怨みも抱いて。

第四十四話
『お礼とお詫びを』
〜了〜

レミリア「このまま順調に行けば、フランは横島のお嫁さんか……」
レミリア「横島フランドール？　フランドール横島？」
レミリア「……違うわね。横島を婿養子にすればいいのよ」
レミリア「つまり――タダオ・スカーレット」
レミリア「……イイじゃないの」
レミリア「美鈴も横島のお嫁さんになるんだったら、やっぱり美鈴もスカーレット姓に――!?」
レミリア「待ちなさい。美鈴の苗字は紅（ホン）。紅とはスカーレット……!!」
レミリア「つまり――紅（スカーレット）美鈴……!!　メイリン・スカーレット……!!」
レミリア「……ふふっ、これは運命だったのかしらね」
レミリア「そして妹紅……モコウ・スカーレット」
レミリア「妹……そして紅……」
レミリア「妹で紅。つまりは――フラン……!!」
レミリア「妹紅は、私の妹（フラン）でもあったのね――」
小悪魔「あの、お嬢様……？　太陽に向かって微笑んでますけど、体から煙が出てますよ……？」

パチュリー「ほっときなさい。今のレミィはバカなことしか考えてないわ」
咲夜「お嬢様……」

第四十五話『見つけた』

さて、陽も空の頂点に昇り、その熱と輝きを容赦なく地上に降り注ぐ時間帯。
横島達四人とチルノや文達天狗三人組は紅魔館の正門の前に集合し、ちょっとした雑談で盛り上がっていた。
例えばフランが差している日傘のこと、文やはたてのカメラについてや椛の剣術について、チルノに簡単なクイズを出してみたりと各々が楽しんでいる。
「お待たせー」
そこに背後から声が掛かった。正門の内側から声を掛けたのは妹と同じく日傘を差したレミリア。その後ろには咲夜に紫、永琳もいる。四人は美鈴の代わりに門番を務める二号に小門を開いてもらい、そこから横島達へと合流する。
「何やってたんです？」
「これよ、これ」
横島の問いに答えるのはやはりレミリア。彼女は顎で自らの背後を示し、咲夜に注目を集める。咲夜は主人のその仕草を合図に前へと歩き、手に持った二つの小さな箱を横

島へと手渡した。
「お土産のケーキよ。それぞれの箱に二つずつ入っているわ。もちろんケーキと合う茶葉も選んであります」
「あっと、すんません。任せっきりになっちゃって」
横島は差し出された箱を恐縮しながら受け取る。その姿に咲夜は苦笑を浮かべるが、執事としての自覚が出来てきたのかとも思う。まるで大人が子供に対するような感想だが、精神的な年齢という意味では大差はないと思われる。
「あなたはまだケーキを作れないでしょう？　そもそもこういうのは私の仕事なんだから、そう気にしなくても大丈夫よ」
澄ました顔でそう告げる咲夜に横島は「うっす」と短く答えた。
ケーキを渡し終えた咲夜はすっと後ろに下がり、レミリアの背後へと佇む。その姿は相変わらず様になっており、その在り方に椛は感嘆の息を漏らす。普段妖怪の山に引きこもっているせいか、レミリアと咲夜の主従関係には大いに興味があるようだ。
椛は階級の低い下っ端哨戒天狗。上司への媚びへつらいの研究には余念がない。
……階級社会とはとても厳しいのだ。
「それじゃあスキマを開くわね。人里の中でスキマが現れたら混乱が起きるかも知れないし、出口は人里から少し外れた小道にしておくわね」

「ありがとうございます、紫さん」

礼を述べる横島ににっこりと微笑み、紫はスキマを開く。相変わらずスキマの内部は眼がギョロギョロと蠢いており、何度見ても慣れないその光景に横島は精神的に半歩下がってしまう。

横島はもう一度紫の方を盗み見し、彼女の柔らかな微笑みで心を癒しつつ一歩を踏み出した。

「んじゃ、行ってきます」

「ん、行ってらっしゃい」

そうして横島は妹紅達と共にスキマの中へと消えた。それを各々見送ったあと、それぞれが思い思いに午後からの時間を過ごす。

例えば椛は咲夜と侍従についての話をするために共に紅魔館へと入り、文とはたては良い機会とばかりに妖精メイドに普段の紅魔館の様子、そして横島が紅魔館に来たことでどんな影響があったのかの取材を敢行する。最大の敵は妖精メイドの語彙力と、自分達の翻訳力だ。

そして意外な組み合わせ。レミリアと、チルノ。

「……」

「……ふう、そう寂しそうな顔をするな」

スキマが消えたあともその場所をじっと見つめ続けていたチルノ。その戸惑いを含みつつも悲しげな、そして寂しげな横顔を見たレミリアは、チルノの頭に自分の手を乗せ、わしわしと強めに撫でる。

「せっかくだ。お前のお友達連中を連れてくるといい。おやつの時間には咲夜特製のケーキと紅茶を用意するし。何なら夕飯も食べていってもいいぞ？」

「いいのっ!?」

「ああ、構わん」

レミリアの提案にチルノは急激に元気を取り戻し、鼻息が荒くなる。前回のパーティに招かれて以来、チルノ達は咲夜の作るお菓子と料理のファンになっていたのだ。

チルノ達は紅魔館に遊びに来るたびにおやつをご馳走になっている。最も頻度が高いのはチルノであり、他の者はあまり訪れようとしない。その理由は大妖精達が未だにレミリアのことを恐れているからなのだが、それに関してはレミリアは狙って怖がらせていたりする。

大妖精やリグル達という弱い妖怪達に嘗められるのも癪であるし、自分達の威を勝手に借りられるのも気に入らない。

それで勝手に自爆するのならそれでもいいが、それはフランが望まないだろう。

そんなわけでレミリアはフランをダシに使っているのだ。『フランの友達だからある

程度は許すが、あまり調子に乗っていると……』という具合である。
「そんじゃみんなを誘ってくるね！」
「ああ、行って来い」
「また後でねー!!」
挨拶もそこそこにチルノは〝バビューン〟という効果音と共に飛んでいった。その速度は本来妖精には出せないほどの猛スピードだったのだが、これもチルノが妖精の域を軽々と超える規格外の存在だからか、それとも単純に咲夜のおやつと晩ご飯の誘惑に取り憑かれているからなのか。……チルノならば後者だろうか。
「……ふう」
レミリアは軽く息を吐く。頭の中ではどうやって大妖精達を怖がらせようかと様々な案が浮かんでは消えていく。いつしか口元には邪悪な笑みが張り付き、発せられるオーラも黒々とした如何にも悪役然としたものになっている。
ナニをしてやろうか、とレミリアが手を顎に持っていった時、レミリアは自分に起きていた異変にようやく気が付いた。
「――冷たっ」
驚いて手を見ると、そこには表面がいくらか凍りつき、薄い氷の膜が張ってあった。
――私の魔力を抜いた……？

レミリアは普段から魔力を纏い、ちょっとした危険から身を守れるほどの魔法障壁を展開している。当然それは気候や寒暖による影響も受け付けず、吸血鬼の弱点である日光や流水などにも効果を発揮する。

その強度は特別強いとは言えないが、それでもチルノが発生させる冷気などは寄せ付けないくらいにはある。しかし、チルノが無意識に発生させていた冷気がその障壁を抜いたのだ。

「……へえ」

レミリアは凍った手をあっさりと回復させ、邪悪な笑みを引っ込めて代わりに楽しそうな笑みを浮かべた。

もしかしたら、新しく遊び相手が出来るかも知れない。レミリアは期待に胸が膨らんだ。

変わっていつもの紫と永琳の二人組み。紫は何やら眼を閉じて集中し、永琳はその様子を何も言わず、じっと見つめている。

それから数分、ようやく紫は深い息を吐くと同時に眼を開いた。その眼には何かを掴んだという確かな光が宿っている。

「……どうだった？」

「ええ――確認したわ」

永琳の問いに紫は短く答える。彼女の顔には笑みが浮かんでいた。そして、それは答えを聞いた永琳にも広がる。

「そう。やっぱりてゐの言っていたことは本当だったのね」

「ええ。横島君に私達では及びも付かない高次の存在が加護を与えているのは確かみたいよ。といっても、それは細い細い糸のような物だけれどね」

紫はてゐから横島を取り巻く何らかの強大な力を感知したことを聞いていた。だからそれを確認するためにスキマで送ることにしたのだ。

その結果はてゐの報告通り。確かに高次の存在の力を確認した。通常の空間では欠片も気付けないその力だが、スキマという空間を通すと、ごく僅かであるが確かに力を感じる事が出来る。

これは横島がスキマを通って元の世界から幻想郷へと墜落したことが関係しているのだろう。また、てゐにのみその力を感知することが出来たのは、横島へと働きかけている力が〝加護〟〝祝福〟もっと単純に〝幸運〟を授けることに特化したものだからだろう。

同じように幸運を授けることが出来るてゐだからこそ気付くことが出来たのだ。

「……これで、横島君を元の世界へ還すことが出来るかも知れないわ――」

紫は力強く手を握り締める。それはようやく掴んだ手がかりを逃さないために。掴んだ糸を離さないために。この糸を辿っていけば、横島の元の世界に繋がっていると信じて。

「……まあ、先は長いんだけど」

掴んだ糸は細い。それこそカンダタが掴んだ蜘蛛の糸のように。それはこの世界と横島の世界の距離を想像させるには充分なものだった。

神魔の支配力が酷く弱いこの世界と、神魔が未だ健在で支配力も強大な横島の世界。一体どれほど隔絶しているというのか。それを考えるとこのことをみだりに横島へ伝えるのは躊躇われる。それに――。

「……それに、横島君は喜ぶのかしら……？」

ぼそりと呟いた言葉は風に消え、永琳以外には届かない。永琳は眼を細め、青い空を仰いだ。

「……ままならないものね」

第四十五話
『見つけた』

人里から少々離れた小道、その空間に亀裂が走り、数人の男女が現れた。言うまでもなく横島達だ。

「んー、人里に来るのは随分と久しぶりですねー」

美鈴は大きな胸を揺らしながら伸びをし、体のコリをほぐす。特に長時間固まっていたわけではないのだが、気分的なものなのだろう。横島と妹紅は美鈴の揺れる胸に釘付けになり、フランは「おっきい……」と羨ましそうに呟いている。

「昔はよく人里に来てたんだっけ？」

フランと同様に羨ましそうに、そして何よりも妬ましそうに顔を歪めながらもそう質問をする妹紅。美鈴はそれに気付かず肩や腕もほぐし、その度に強調されたり形を変えたりする胸を張って答える。

「ええ。昔はよく買い物に来たり試合をしたりしてましたね。まあ昔ってほど前でもな

いですけど。最近は妖精メイド達や横島さんが買い物に行ってくれたりしてくれますので、あまりこっちに来ることもなかったんですよねー」

ちょっともったいなかったかな？　と美鈴はしめる。なるほど、と横島と妹紅は揺れる胸に合わせて頷いた。いくらなんでもそろそろ気付いたほうがいいと思うが、美鈴の性格上それは仕方のないことなのかもしれない。

「ねえねえ、早く人里に入ろうよ！　ほら、ただお兄様も!!」

「ちょっとちょっとフランちゃん、引っ張んなって……」

この四人の中で唯一人里に来たことがない……というか遠出をしたことがないフランは溢れる期待に頬を綻ばせ、横島の腕を引いて小走りに人里へと向かう。普段人見知りで引っ込み思案なフランだが、初めての遠出と横島とのデートに興奮し、純粋にはしゃいでいる。

その様は大変可愛らしく微笑ましいのだが、興奮のせいか力加減を誤っており、掴んだ横島の腕から『メリッ』『ゴリッ』『ミチミチッ』という異音が鳴り響いている。

横島は明るい笑顔を浮かべるフランに絆され、何とかこの笑顔を曇らせないように頑張っているのだが、もうそろそろ彼の涙腺も限界だった。もう少しで肉とか骨とかもぶっ千切れたり砕け散ったりしてしまうだろう。

「はいはい、はしゃぐ気持ちは分かるがもう少し落ち着きなさい。横島の手が紫色に変

色してるぞ？」

「えっ？　……キャアア!?　ごめんなさいお兄様ーッ!!?」

そうなる前に止めてくれたのは妹紅だった。今はフランの手にやんわりと自分の手を重ね、嗜めるように叱っている。さすがはこの中でぶっちぎりの年長者といったところか。……その割りに世間知らずで経験不足なのは考慮しない方向で。

「どうせならフランが腕を掴むんじゃなくて、横島に手を握ってもらったらどうだ？　それならさっきみたいなことにはならないだろ……多分」

最後に小声で不吉なことを付け加えていたが、フランはその魅力的な内容に眼を輝かせる。その視線を受けた横島はケーキを妹紅に預かってもらい、フランの手を優しく握る。途端に笑みが深まるフランに、妹紅も美鈴も同じく笑顔を浮かべる。

こうなると妹紅や美鈴も横島と手を繋ぎたいところだが、生憎と横島の手は二本しかなく、余っているのは一本だけ。しかし二人ともこれを鮮やかにスルー。

今回は初めての外出であるフランを横島に任せようというのだ。もし何か起こったとしても横島が手を繋いでいれば暴走はすまい。少し不安がないこともないが、最近は本当に精神が安定している。こうして手を繋いでいる限り、フランは可愛らしい女の子のままでいられるだろう。……横島に何かあったりしなければ、だが。

「もうちょっとで人里の入り口……ねえねえお兄様、人里にはどんなお店が――？」

人里を囲う様に存在している柵。それを抜ければついに人里だ。フランは逸る気持ちを抑えながら横島へと質問を投げかけるのだが、隣を見ても誰もいない。
「あ、あれ!?　ただお兄様!?」
「ふおおっ!?」
「き、消えたっ!?」
どうやら妹紅や美鈴にも察知出来なかったらしい。三人の背筋に冷たいモノが走るが、人里の中からとある叫びが聞こえてきた。「おっ姉さーーーーーんっ!!」と……。
「あ、あの一瞬であんなところまで!?」
「まずい、早く横島を止めないと……!!」
まさしく神速と言える速さで好みのお姉さんのところにすっ飛んでいった横島。早く彼の行動を止めないと紅魔館の評判が斜め下なことになってしまう。恐怖の対象と言えばレミリアにとっては聞こえはいいだろうが、その実『女性に飛び掛る執事を雇っている恐怖の館』という嫌な恐怖の対象だ。そうなる前に何とかして止めねばならない。
「私に任せてください！　こんなこともあろうかと、咲夜さんに対処法を聞いています!!」
妹紅達にそう言って美鈴は先行していった。嫉妬のパワーも関係しているのか、その

スピードは横島よりも速い。身内ならまだしも、名も知らぬ女性に手を出すのは許しがたいらしい。何ともよく分からない基準である。

「ぬおおお!!　そこのお姉さーーーーーん!!　俺と〝外見年齢の差はどこまでが許容範囲なのか〟について静か且つムーディーな場所で二人きりで語り合いませんかーーーーーー!?!!」

それは本当に口説き文句なのだろうか。何だかとっても切羽詰ったような声でナンパ（？）をしてくる横島の姿に、声を掛けられた人里に存在する雑貨屋『横流し』の店員（二二歳・女性）は驚きに眼を見開いた。

店員のお姉さんの前に、突如人影が現れる。それは長く赤い髪を棚引かせた、少女の姿をしていた。少女は一歩を力強く踏み出すと、拳を矢のような速度で繰り出し、横島へと命中させた。

「咲夜さん直伝!!　十六夜☆ブロウッ!!!」

「ホ。ンゞケ　ンゞッゞ!!?」

十六夜☆ブロウと言ってはいるが、それはどこからどう見ても形意拳の崩拳だった。横島の腹に深々と突き刺さったそれは、横島を軽々と吹き飛ばして地面へと熱烈なキスをさせる。その威力は咲夜の十六夜☆ブロウの二倍！　いや十倍はある!!

まるでボイルドしたたまごのような話だが、格闘の素人の咲夜と達人の美鈴ではそも

そも威力の桁が違う。更に付け加えれば、咲夜は非力な人間だが、美鈴は強力な妖怪である。その膂力の差は言わずもがな。むしろ美鈴が手加減をしているからこそ十倍程度の威力で収まっているのだ。もし美鈴が本気を出していれば、横島の体は拳を受けたところを中心に大穴が空き、真っ二つに裂けていただろう。

美鈴は横島が動きを止めたのを確認した後に残心を解く。店員のお姉さんへと振り向き、頭を下げて今回のことを謝罪した。

「どうもうちの横島さんが失礼しました。なんというかこう、色々と追い詰められていたようでして……」

「は、はあ……いえ、それは構わないのですが……」

店員のお姉さんは吹っ飛んで行った横島の事を思い出した。以前横島が咲夜と共に人里へと来た時に女性をナンパ（？）したのだが、その時の女性こそがこの雑貨屋『横流し』の店員（二二歳・女性）なのである。

店員のお姉さんが少々呆けていると、横島の元へ二人の少女が駆け寄ってきた。その内の一人はこの人里では知らぬ者はいないと言っても過言ではない少女、藤原妹紅。もう一人は始めて見る顔だが、美鈴と妹紅に劣らぬ美少女だ。

その二人が横島を抱き起こしたり、名前を呼んだりしている。しかも、そこには並々ならぬ想いが窺える。

――この時、店員のお姉さんに電流走る。

先ほどの横島の口説き文句（？）、美鈴の拳に込められた何らかの熱、現れた二人の少女、そして三人が横島へと寄せる想い――!!

店員のお姉さんは、大凡のことを察した。察してしまったのだ。

「全くもう、私達がいるとゆーのに……」

「なるほどなるほど、やっぱりそういうことなのね紅（ホン）さん」

その言葉に美鈴の肩が跳ねる。ちらりとお姉さんの顔を盗み見てみれば、好奇心いっぱいに輝く笑みを浮かべている。

「い、いやあのこれは……」

「大丈夫、何となくだけど分かってるわ。大方藤原さんや紅さん、そしてあの金髪の子と執事の……横島さんだっけ？　その横島さんと恋人とかそういう仲になったんだけど、横島さんは見た目の年齢とかを気にする人で、好き同士ではあるのに良心の呵責やら罪悪感やら本来感じなくてもいい罪の意識に囚われてしまっていて、それから何とか逃れたくて今回のような行動に走ってしまったのね？」

「本当に大体のところは理解してた!?」

恐るべきお姉さんの理解力。お姉さんはうんうんと頷き、ここにはいないとある少女達を思い浮かべていた。

――なるほどね、十六夜さんと一号ちゃん達も苦労するわけだ、これじゃ。

咲夜に関する誤解は未だ解けていなかった。むしろ今回のことで余計に誤解は深まったと言えるだろう。即ち、紅魔館の女性陣は一人の男性にメロメロである――と。

知らないところで巻き込まれるレミリアとパチュリー、そして咲夜が不憫でならない。

「あ、あはははは、それじゃあ私達は色々と用事がありますので――!!　失礼します!!」

「え、ちょっと……もう行っちゃった」

引き止める間もなく美鈴達は風の速さで去っていってしまった。もっと聞きたいことがあったのに残念に思うお姉さん。しかし、こんなことでお姉さんはめげたりしない。とりあえずは今回得た情報を仲良しの肉屋の店員さん（三一歳・女性）へと流すのであった。

「ここまで来れば大丈夫ですね……さて、横島さん？」

逃げて隠れて人気のない道の隅。美鈴はそこで一息吐き、横島へと説教をする。

「私が何を言いたいのか、分かりますか……？」

一文字一文字に強烈なまでの力が宿っている。思わず横島は唾を飲み込み、恐る恐る口を開く。

「……美鈴達がいるのに、他の女の人に声をかけました。……フランちゃんの手も離しちゃったし」

正座をし、どんどんと小さくなっていく。彼も一応は反省をしているみたいだ。その姿に美鈴は大きく息を吐く。それに過剰に反応して体をびくりと跳ねさせるのは何故か妹紅とフラン。ここまで怒っている美鈴は見たことがないのだろう。

美鈴は正座をしている横島の前にしゃがみ込み、視線を合わせる。彼の眼を十秒ほど見つめた後、もう一度息を吐いて横島の両頬を引っ張った。

「次に同じことをしたら威力が倍になりますよ」

「肝に銘じます」

「よろしい。それじゃあお昼ご飯を食べに行きましょうか」

美鈴が立ち上がり、明るい声で提案をする。妹紅とフランはほっと息を吐き、体から力を抜いた。横島以上に緊張していたらしく。冷や汗までかいている。

「何で二人が俺以上にまいってんだよ」

「だってめーりんがあんな風に怒ったところって見たことないし……」

「あれだな、美人が怒ると怖いってやつだな」

「えへへ、いやあそんな美人だなんてえへへ」

妹紅の言葉に照れる美鈴だが、それは怖いと言われていることに気が付いていない証

拠でもある。こういうところも美鈴の長所の一つではないだろうか。
「んーじゃ、適当に店に入るか。お金はけっこう持ってきたからある程度高級な店でも任せとけよー」
「え、出してくれるのか？」
「そりゃーな。やっぱりほら、彼氏としては出さないとかっこつかないじゃんか」
少々照れながらの横島の発言。妹紅と美鈴の頬が赤く染まる。〝彼氏〟。何と甘美な言葉か。愛する男が自分の恋人であるという証。そしてそれを言ったのは他ならぬ横島なのだ。自然と頬が緩んでくる。
「それじゃご飯行こう？　何がいいかな？」
フランが上機嫌に横島の手を取って催促する。横島は照れつつも妹紅と美鈴に目配せし、食事が出来る店を探しに歩く。
「みんなは何が食べたい？」
「んー、紅魔館では食べられない料理があればいいんですけどねー」
「私は特に思いつかないけど……横島は？」
「俺は肉以外なら何でもいいや」
「……本当、ごめん……」
店を探す最中、妹紅の地雷をマッハで踏み抜く横島の姿が確認された。

「ほら、ちゃんと食事はとらないと駄目だ」

「……」

昼も過ぎ、料理店から人がまばらになってきた頃、二人の少女がなにか食事をとろうと大通りを歩いていた。片やろくろ首の赤蛮奇。片や人狼の今泉影狼だ。

影狼が目覚めた後、赤蛮奇は影狼を食事へと誘った。影狼は食欲がないと断ったのだが、彼女は〝化け物〟に襲われて命からがら逃げてからまともな食事をとっていない。これでは近く倒れてしまうと考えた赤蛮奇が無理矢理に連れ出したのだ。

影狼の気持ちも分かる。だからと言って、このままでいいはずがない。何よりこれで影狼が体を壊せば、〝恩人〟が影狼を助けた意味がない。

赤蛮奇は心を鬼にして、影狼に嫌われても彼女を立ち上がらせようとしている。影狼も赤蛮奇が自分のために厳しく接しているのを理解している。その気持ちは嬉しく思う。嬉しく思っているが……それでも、やはり今は遠慮したかった。

「……もうすぐ店に着く。そこは私のおすすめだ。安いし早い。味もそこそこだ」

聞いてはいないだろうが、それでも赤蛮奇は影狼に話しかける。相変わらず影狼は俯

いたまま。表情は窺い知れないが、きっと暗く沈んでいるのだろう。
——まさか、ここまで根が深いとはね。
知らず、赤蛮奇は空を仰ぐ。自分達の心の模様とは裏腹に青く晴れ渡っている。中々に憎たらしい。そよそよと髪を流す風も、今は忌々しいくらいだ。
「……ん？」
気が付けば、影狼が歩みを止めている。何か信じられないような、愕然とした表情を浮かべていた。
「影狼、どうし……」
どうした、と言葉に出す前に、影狼は走り出した。赤蛮奇を置き去りに、一心不乱に。
「おい、影狼!?」
遅れて赤蛮奇も走り出す。
人の間を走りぬけ、ただまっすぐ、その場所へ。影狼は走っていく。走って走って走って——そして、彼を見つけた。
「————」
目の前には、自分をきょとんとした眼で見つめる彼の姿。あの時と変わらず……いや、あの時と比べて穏和な表情で。
涙が溢れる。生きていた。生きていてくれた。ぽろぽろと、涙が溢れて止まらない。

「――見つけた……」

人狼の女の子は、助けてくれた人間の男の子を見つけることが出来ました。

第四十五話

『見つけた』

～了～

第四十六話

昼食を求め人里内を歩き回る横島達。しかし、一行は何やら困惑しているのが見て取れる。

彼等には数多くの視線が集中している。それこそ人里の全ての者達が横島達に注目していると錯覚する程にだ。

それも当然だろう。何せ横島達一行はこの人里内において、とても有名な存在だからだ。

まず人里では知らぬ者はいないと思われる妹紅。彼女は寺子屋の先生である慧音の友人であり、迷いの竹林の案内人としても知られている。先のゴキブリが大量発生した異変での活躍とその容姿から、爆発的にファンが増えたということを慧音が酒の席で愚痴っていたそうだ。

次に一時期人里の格闘家達に有名だった美鈴。その卓越した技量と抜群のプロポーション、端麗な容姿に朗らかな人柄など、ある意味憧れの女の子だと言える存在だった。しかしその格闘家達は美鈴に勝つことが出来ない不甲斐なさから、あるいは女性蔑視、

そして美鈴が妖怪であることから想いを告げることをしなかった。
そして最後の一人であるフラン。彼女は人里で有名であるということはないのだが、日傘を差した、深窓の令嬢を思わせる儚げな雰囲気、それと反する屈託のない笑顔。どこか気品を感じさせるその立ち居振る舞い。容姿も非常に整っているところから注目を集めているのだ。
さて、そんな美少女達が一人の男と共に人里を歩いていればどうなるだろうか？
それは考えるまでもなく、注目の的になるというものだ。しかもその一人の男とは、やはり人里で有名な紅魔館の執事だったのだから。
横島忠夫。人里内での彼に関する噂はおかしなものが多い。
曰く、紅魔館のメイド長である十六夜咲夜の恋人である。
曰く、咲夜との間に三人の娘がいる。
曰く、彼は人間ではなく、どんな傷も一瞬で治る妖怪である。
曰く、彼は女好きであり、いつも一緒にいる妖精メイド三人組は彼の愛人である。
曰く、紅魔館は彼のハーレムである……などなど。
他はともかく、最後の一つはレミリアやパチュリーが人里を滅ぼす切っ掛けになりかねないようなものであり、里の者達も本当にそうであるとは思っていない。
しかし、誰にだって、どんな人間にだって看過出来ないことはある。

――つまり、『なぜアイツばかり美少女に囲まれているんだ』……ということだ。要は醜い嫉妬である。

それ故に人里内での横島の評判はあまり良くはない。と言っても、それはほとんどの場合が男衆の評判だ。

では、女性からの評判はどうなのかと言えば。

ほとんどの場合が咲夜の恋人という噂が信じられており、彼の人柄もある程度好意的に解釈されていた。

これについては咲夜の言動が主な原因であり、横島自身はほぼ関わっていない。いや、関わっていないと言えば語弊があるかも知れないが。

とある時期、咲夜は里の人間が驚くくらいに上機嫌だったことがある。人間嫌いである咲夜が、にこやかに里の人間に対応していたのだ。

それは横島からプレゼントをもらった時期。そして、真新しいリボンに手を触れ、柔らかな笑みを浮かべていた時期でもある。

そんな咲夜を見た里の人達は新しく来たという執事との間に何かあったのだろうと誤解し、ついうっかり『横島からプレゼントを貰った』と零してしまった咲夜の証言を元に、二人は〝何だかんだ上手くいっているカップル〟として認識されるに至った。咲夜としてはいい迷惑である。

他にも妖精メイド達と接する姿が微笑ましかったり、咲夜と共に妖精メイド達を嗜める姿が様になっていたところも要因となっているのだろう。

そんな男が、咲夜ではない他の女の子たちと仲睦まじげに人里を歩いているのだ。良くも悪くも注目を集めてしまうのは当然である。

「……何か居心地悪いな。早くどこかのお店に入ろうか？」

所在なさげに提案する妹紅の言に一も二もなく賛同し、近くにあった『うどん屋』へと入る。横島としては周囲の男達からの嫉妬の視線に優越感やら何やらを感じていたのだが、それは女の子達よりも優先するべきことではないため、大人しく従った。

店に入られては周囲にいた者達も散り散りに去っていく。中には同じように店に入っていった者もいたが、ほとんどの者はそれぞれの生活へと戻っていった。

今日は風が強い。

ここ最近は雨も多かったので、もしかしたら台風が来るかもしれない。

今も少々強い風が吹いている。その風が、とある少女を立ち直らせる切っ掛けになるとは、誰が想像出来ただろうか。

第四十六話
『人里での再会』

「ここはシンプルにきつねうどんにしようかな……」
「うどんって色んな種類があるんだねー。……ところでお兄様、きつねうどんって狐のお肉が入ってるんじゃないの？　今のお兄様は食べられないんじゃ……」
　これは何を頼もうか迷っていた時のやりとりだ。これに対して横島はきつねうどんがどういったものかを説明する。それを見ていた周りの者達は、一行がどういった関係なのかをおおよそ察した。（誤解したとも言う）
　世間知らずのお嬢様であるフランが見聞を広めるために御付の執事である横島、護衛役の美鈴、そして案内役の妹紅と共に人里へやって来たのだと。
　フランと美鈴と妹紅の横島への態度やら何やらは一切見ぬ振りをし、自分達にとって都合の良い解釈をした結果、そういった答えが導き出されたらしい。傍から見ればそれほど間違っていないのは賞賛すべきことなのだろうか。
　とにかく、答えを得た者達は今までのような探るような視線を送るのは止め、今度は

暖かい視線を送ることにした。突然変化した視線の温度にフラン達は訝るばかり。

結果、昼食は変な空気のまま過ぎていってしまった。味は良かっただけに残念でならない。

「何か変な人達がいっぱいいたね」

「そうだなー。まあ、仕方ないことなんだろーけどさ」

「んー、そうですよねえ……」

横島と美鈴の言葉にフランと妹紅は首を傾げる。自分達が注目されていた理由が分からないようだ。

横島はモテない男としての観点から、美鈴は周囲の者達が放つ〝気〟を感じ取って理解していた。不思議がる二人にお茶を濁しつつ、横島達は慧音の家へと歩を進める。

強い風が吹き抜ける。

「凄い風だねー」

「最近天気悪かったしな、こりゃ台風が来たりして……ああ、フランちゃんちょっと」

「ふえっ？」

会話中、横島がフランの肩を抱き、自分の方へと抱き寄せた。いきなりのことにフランは戸惑いの声を上げたが、二歩〜三歩ほど歩くと横島はフランの体を離し、フランに注意する。

「前から人来てたぞ？　ちゃんと前見て歩こうな」
「え？　う、うん。ごめんなさい……」
　横島の注意にフランは戸惑ったが、それでもとりあえず謝っておいた。フランはしきりに首を傾げ、何故注意されたのかを必死に考える。
　疑問に思ったのは妹紅や美鈴も同様だ。彼女達は、フランにぶつかりそうになった人など見ていないのだ。
「……もしかして幽霊？」
「それだと私達が気付かないのは考えにくいですけど……」
　フラン達の背後でひそひそと話し合う妹紅と美鈴。やはり誰かがぶつかりそうになったところは見ていない。横島の勘違いなのだろうか、と考え始めた時、今度は背後から何者かが走って近付いてくるのを察知した。
「今度は何だ？　今度こそ幽霊か？」
「何で幽霊にこだわってるんですか」
　妹紅の言葉に苦笑しつつ、背後へと振り返る。そうして眼に入ってきたのは、長い黒髪の人狼と思しき少女が駆け寄ってくる場面。真っ直ぐ、こちらを目指している。美鈴は妹紅と共にその少女を警戒するが、ここで妹紅が疑問を口にした。
「……あれ、確かあの子は……」

知り合いなのか、と妹紅に問いただそうとしたが、それよりも早く少女が自分達の目の前で立ち止まった。荒い息を吐き、見つめる先には横島の背中。ことここに至って、横島はようやくその少女の存在に気付いた。

「――ッ」

少女の心臓が高鳴る。本来ならばいるはずがない……生きているはずがない存在を前に、少女は極限の緊張を強いられる。

横島が少女の方へと振り向く。ほんの一瞬のはずなのに、その一瞬が何秒間にも、何分間にも感じられる。

やがて完全に振り向き、横島は少女と眼が合った。その少女は横島の記憶にも新しい、あの時に出会った女の子。

「あれ？　君はあの時竹林にいた……」

「――――ッ!!」

それは、あの時自分のせいで失われたと思っていた人の声。人狼である自分が聞き間違えるはずがない。風によって運ばれてきた匂いも、あの人と同じものだ。

「――見つけた……」

涙を流し、少女はそう口にした。自分を助けてくれた〝恩人〟を、自分が見捨ててしまったその人を、見つけることが出来た。

　しかし訪れるのはカオスである。
「よよよ横島さんっ!?　この女の子に一体ナニをしたんですかっ!?　駆け寄って涙ながらに『ミツケタ……』とかとんでもない恨みを買ってるじゃないですか!?」
「な、何もしてない!!　俺は何もやっとらんぞーーーーーー!?　こ、これは誤解や!!　冤罪なんやーーー!!　弁護士を呼んでくれーーーーーー!!」
　美鈴に胸倉を掴まれ、ガックンガックンと揺さぶられる横島。両目からブシャーっと涙を噴出する姿は非常に情けない。しかしどこかエネルギッシュな姿でもあり、原理は不明だが見る者の安心を誘う。
「……ううう、うえええええええんっ!!　ぐすっ、ふえええええぇぇぇぇんっ!!」
「ちょ、どどどうしたの……!?」
　突如大声を上げて泣き出す少女に妹紅は大いに戸惑う。おかしい、この子はこんな性格ではなかったはずだ。知ってしまっているが故に妹紅の戸惑いは大きく、慰めることもしないでおろおろとしてしまい、何も出来ない。そして大泣きした少女を見た美鈴が

余計にヒートアップするという悪循環に突入する。

ちなみに少女が大泣きしたのは横島がとっても元気そうで安心したからである。人間、緊張の糸やら何やらが切れたら大爆発しちゃったりするよね。

それからどうでもいいことだが、周囲にはやっぱり野次馬連中が存在している。しかし皆は一行からかなりの距離を取っており、彼等が何らかの害を被ることはないだろう。横島達が色々しているのが害だと言われれば何も言い返せないが。

「と、とりあえずちょっと待って!!」

「あ、横島さんっ!?」

横島は何とか美鈴の魔の手（握力二トン超）から逃れつつ、カクンカクンと独りでに動いてしまう首を気にしつつも未だ泣き止まない少女の下へと歩み寄る。

「どうしたんだ？　何でそんなに泣いてるんだ？」

「ひぐっ、だっ、て、だってえぇぇ……!!」

話が通じないわけではないが、今は話が出来る状態ではない。どうしたもんか、と横島が思案に暮れていると、またもや何者かが走って近付いてくる気配を感じた。

「またかよ……今度こそ幽霊だろうな……？」

「だから何でそんなに幽霊にこだわってるんです……？」

野次馬達よりも更に向こう、遠くから走ってくるその姿。足はそれほど速くはないよ

うだが、そんなことよりも警戒すべきことがある。
赤と黒を纏ったその人物はどうやら妖怪の少女のようだが、人狼の少女と明確に違っている部分がある。
それは――。
「貴様あああぁっ!!　よくも影狼を泣かせたなあああぁぁぁぁ!!!」
明確な、敵意を持っていることだ。
「あいつは……！」
どうやら妹紅は赤と黒の少女にも覚えがあるようだ。何やら人狼の少女――影狼のことで激昂している。話は出来なさそうな雰囲気に妹紅は一つ舌打ちをする。
「影狼から離れろおおおお!!!」
少女は突き出した両手からいくつもの弾幕を放つ。野次馬はそれに慌てふためき、一斉に避難していった。
妹紅、美鈴、フランは一瞬で弾幕の射線から逃れたが、横島はそうはしなかった。自分が避けれれば、少女が放った弾幕が影狼に当たるからである。
影狼は未だ状況を理解出来ておらず、弾幕を放った少女に驚きと戸惑いの眼を向けている。このまま迷っている暇はない。横島が選択したのはごく単純なことだった。
「あだだだだだだっ!!?」

「――っ!!?」

影狼を抱き締め、自らの体を盾にすることで弾幕から守ることだ。一発一発の威力は低いが、それでも弾幕は弾幕。何発か受けることによって、横島の背には傷が出来、鮮血が溢れる。

「よこ――――……ッッッ!!!」

その〝血〟を見た瞬間、少女達の視界が真紅に染まった。

「待っていろ影狼、今助けて――……っ!!?」

――瞬間、呼吸が止まる。

全身を貫く濃密な……否、言葉では言い表すことが出来ないほどの殺気、殺意。手足なぞは麻痺しており、既に立つこともままならず、気が付いた時には地面へと倒れ伏していた。

一体何が、などと考えるまでもない。見上げる先に存在する三人の少女。それが、赤と黒の少女――赤蛮奇を縛る〝何か〟を発しているのだ。

「……っ!!」

赤蛮奇は眼前の少女達に見覚えがある。

一人は紅魔館の門番である紅美鈴。噂によれば厚さ二メートルの鉄板に素手で大穴を空けることが出来るほどの武術の達人であり、彼女の苗字が紅なのは、彼女の髪が赤

いのは、かつて屠ってきた武術家の返り血で染まった為だとか何とか。
　一人は紅魔館の主、レミリア・スカーレットによく似た少女。七色に輝く翼が生えているということは、あれが噂の〝悪魔の妹〟なのだろう。白目と黒目が反転し、金色に光る瞳がとっても幻想的。噂によればありとあらゆる物を破壊することが可能であり、その気になれば山やら谷やら、国すらもキュッとしてドカーンだとかどうとか。
　最後の一人は言うまでもない。藤原妹紅だ。噂によれば千年以上も昔、当時最強を極めていた妖怪一億を率いた〝妖怪の賢者〟八雲紫が月へと侵攻し、返り討ちにあってただ一人だけ帰って来た。月の戦力はたったの一人。月人と呼ばれる存在が億を越える妖怪を殲滅したのだ。
　そして、妹紅はそんな月人とまともに殺し合うことが出来るほどの力を持っているという――。
　全体的に尾ひれ背びれが付きまくった噂であるが、大抵の場合噂とはそんなものであるし、今更それが嘘だったと知ったところでどうでも良いことだ。
　何せ、赤蛮奇は確実なる死を幻視してしまった。もはや何かを考えることも難しい。体の芯から来る震えに抗えず、彼女はただ断罪の時を待つばかり。
　しかし、それに割り込む者が一人。
「ストップストーーーーーップ!!　美少女は仲良く!!　な!?　なっ!!?」

そう、横島だ。横島は赤蛮奇を背に庇い、必死に妹紅達を説得する。もはや土下座せんばかりの勢いだ。

「この子もきっと悪気があったわけじゃないって!!　影狼を泣かせたなとか、影狼から離れろとか言ってたし、俺があの子を泣かせちゃったのがいけないんだって!!」

確かにその通りではあるだろう。しかし、人里内で無闇に弾幕を撃ち、あまつさえ横島に血を流させた赤蛮奇に対しての怒りはそう簡単には静まらない。

一向に治まる気配のない三人の怒りのオーラに涙目になってしまう横島だが、そこに援軍が現れる。

「あ、あの……すみませんでしたっ!!　私が泣いてしまったことでこれほどの騒ぎになってしまったんです!!　こ、殺すのなら、あの子じゃなくて私を――!!」

「何言ってんだ!?　せっかく助かった命を投げ捨てるんじゃないっ!!　病に冒された人も言ってたぞ!!『命は投げ捨てるものではない』って!!」

「で、でも……!!　でもぉぉ……!?」

「大丈夫だって!!　ああ見えて妹紅達は優しい女の子だから!!　今は怒ってるけどきっと許してくれるから!!」

チラリと妹紅達を盗み見る。

「……」

怒りの炎、未だ止まず。ついつい冷や汗が噴き出てしまう。
数秒の沈黙の後、横島は最終手段に訴えた。
「……後で、出来る限り皆の言うことを何でも聞くから、どうか勘弁してやってくんないかなー、なんて……」
「横島がそこまで言うなら仕方ないな」
「そうですね。他ならぬ横島さんの頼みですしね」
「今回はお兄様に免じて許してあげるけど、次はないからね？」
怒りの炎、鎮火。
三人からはまるで横島のような煩悩オーラが溢れている。これも横島の恋人になったせいなのだろうか。しかしそれぞれのオーラは横島とは比べるべくもなく薄い。これからの成長に期待、といったところである。
「……」
赤蛮奇は呆けた様に影狼と安堵の息を吐きつつ抱き合っている横島を見上げる。何故自分を助けたのだろうか。里の中で弾幕を撃ち、怪我をさせたというのに。何故、自分を……？
――この男……聖者か……!!?
赤蛮奇は圧倒的な死の恐怖から開放され、残念な子になっていた。

「――へっくしょい!!」
「どしたの、風邪？」
「あー、いや、誰かが私の噂でもしてるんじゃないですかねぇ？」
その日その時、人里のどこかで肩に掌サイズの女の子を乗せた天邪鬼の少女が、盛大なくしゃみをしていた姿が確認されたという。

「……さて、人がまた集まってきたな」
「まあ、これだけの騒ぎになればなあ」
横島の呟きに妹紅が続く。一応解決したとはいえ周囲からの視線は恐怖や非難に満ちている。横島は考えを巡らせるが……上手い考えは思いつかない。
「とりあえず……慧音先生の家に逃げるか」
ぼそりと呟いたのは逃げの一手。妹紅達に視線で問えば、即座に首肯を返される。妹紅は影狼を肩に担ぎ、美鈴が赤蛮奇を背負う。
「……あの、これは一体……」
「ごめん、舌噛まないように気を付けてな」

「え？　――えええええええええっ!!?」

横島達は、全力で走り出した。

彼等が本気を出せば普通の人間である里の者達では追いきれない。逃走はいとも簡単に達成できた。あとは慧音の家まで走り、以前のお礼と今回の後始末をお願いするだけだ。

……明らかに災難続きな慧音に幸あれ。

「あ、そうそう。お前にはちゃんとお仕置きするからな」

「えええぇぇっ!!?」

「そうですね。せめてそれくらいはしませんと」

「クスクスクス……壊さないように気を付けなきゃ……」

「おいおい、ちょっと皆落ち着けって……。さっきのでこの話は終わったはずだろ？」

お仕置きを持ちかける妹紅に賛同する美鈴にフラン。それに反対する横島に、赤蛮奇の好感度は鰻登りだ。

「やはり……聖者……!!」

赤蛮奇は今もなお残念な雰囲気を纏っている。彼女が正気に戻るのは、いつになるのか……？

第四十六話
『人里での再会』
～了～

「――へっくしょい!!　……あ、ー、もしかしたら本当に風邪かな」
「大丈夫か？　何なら私が治してやろうか？　私が毎晩布団の中でぎゅっと抱き締めてやれば、風邪なんていちころだぞー？」
　屈託のない笑顔を浮かべる小人の少女の台詞に、天邪鬼の少女の胸が高鳴る。
「……ははは、いやですねぇ。さっきも言いましたが、誰かが噂してるだけですよ。それより、姫も気を付けたほうがいいですよ？　今日は風が強い。風が強い日には風邪を引くと言いますしねぇ」
「んー？　ならさ、私が風邪を引いたら看病してくれる？」

「いやですよ」
「そうかー……」
「まあ、でも……」
「……？」
「看病はしませんが、風邪を奪いになら、行ってもいいですけどねぇ、姫様？」
薄く笑って流し目を送る天邪鬼に、小人の少女の胸が高鳴る。
人里では、ごく稀に小人と天邪鬼の二人が仲睦まじげに過ごしているのが見られるという噂が流れている。

第四十七話

影狼と赤蛮奇を抱えた横島達一行が民家の屋根や塀を越えて進むこと数分、あれから特に何の障害も無く横島達は目的地、慧音の家へと到着した。

ここに来たのはつい先日であるのに、何故だか随分と間が空いてしまったような錯覚に囚われる。横島はそんな不思議な感覚を抱きながらも戸を叩き、中へと声を掛ける。

「すんませーん、慧音先生はいらっしゃいますかー？」

普段よりも少し大きく、よく通る声。ちゃんと声が届いたのか、数秒後には中からやや遠い声で「はーい」と返事が聞こえてきた。

パタパタと足音が聞こえ、程なくして戸が開かれる。

「はい、どちら様――と、横島……？」

「ども、慧音先生」

突然の来訪に驚いたのか、慧音は横島の顔を見るなり動きを止めた。その間に横島と他の皆に挨拶をされてすぐさま返していたのは流石だが。

「あー……。とりあえず中に入ってくれ。また中々に面倒なことがあったようだから

な」

そう言った慧音の視線は横島が未だ担いでいる影狼と、美鈴が担いでいる赤蛮奇に注がれている。

「あの……そろそろ、下ろしてください……」

影狼が消え入りそうな声で恥ずかしそうにそう呟いているのだが、横島はこういった肝心なときにその言葉を聞き逃す。

ちなみにどのように影狼を担いでいるのかというと、まあ簡単に言えば〝米俵〟といったところか。これはこれで乙女のロマンらしい。（小悪魔的には）

結局影狼は慧音宅の居間に腰を落ち着けるまで担がれたままだったという――。

第四十七話

『彼を知りたい』

「――――で、何やかんやありましてここまでやって来たわけっす」
「ああ……うん、なるほど。何というか、本当に巻きこまれ体質なんだな、横島は」
慧音に事情を説明し終えた横島に、慧音から同情的な視線が送られる。それに対して横島が出来る事と言えばただ苦笑いを浮かべることのみだ。
「それにしても……そうか、あの時にそんなことが……」
慧音の眼がどこか遠くを見るかのように細められる。
慧音が見ているのはあの時の景色だ。陽も落ちた夜、妹紅が血まみれでやって来た時のこと。
「……」
視線をちらりと横島と妹紅の方へとやると、隣同士に座っていた2人は「あの時は大変だったよなー」などと、どこか他人事のように話している。……あくまでも表面上は、だが。
妹紅の視線は宙を彷徨い、そわそわと体の落ち着きも無くなっている。やはりまだ吹っ切れてはいないようだ。……それも当然だが。
しかし、それを察知したかは定かではないが、横島が妹紅の手を握り、笑いかけることで落ち着きを取り戻させた。変わりに別の意味で妹紅の落ち着きが無くなったが。
どうやら2人の仲は良好であり、それは応援していた慧音としても喜ばしい限りであ

る。
「ま、何はともあれ影狼も助かって良かったじゃないか。横島もよくあの子を助けてくれたな」
「いやー、そんな!!　なははははっ!!」
　慧音の言葉に横島は後頭部を掻き、不自然な笑いを零す。照れているのだ。
「横島さん、あの時は本当にありがとうございました。貴方が身を挺して守ってくださらなかったら、私はあの場で死んでいたと思います……」
「い、いやあのちょっと、頭を上げてくれって!?」
　影狼は先ほどの慧音の言葉でまだちゃんとした礼を横島に言っていないのを思い出し、横島に対して深々と頭を下げる。それはほとんど土下座に近いものであり、横島はそれを見て慌てふためく。
　ぺこぺこと頭を下げる影狼に頭を上げるように頭を下げて頼み込む横島の姿は見ていて非常に面白い。だが、ここで慧音が横島の体の異変にようやく気が付いた。
「お、おい横島、その背中は……っ!?」
「うえっ？　……あっ、忘れてた」
　慧音が指摘した横島の背中。本人も忘れていたようだが、彼の背中は赤蛮奇の弾幕によって血に染まっているのである。当然先程の説明の時にもこの事に触れていなかっ

た。

あの時のことを思い出したのか、妹紅・美鈴・フランの体からちょっとだけ怒気が漏れた。

……ちなみにだが、当の赤蛮奇は美鈴とフランの間に座っており、もろに2人からの怒りの霊波を受けている。

赤蛮奇の脈拍と呼吸が浅くなってきた。本当にとんでもない連中の男にとんでもないことを仕出かしてしまったものである。

「……さすがにいつまでもそんな姿でいるわけにもいかないだろう。ちょっと待っててくれ。たしか男物の着物がどこかにあったはずだから――」

「あれ？　慧音って男の恋人いたっけ？」

「誤解を招きそうな言い方はやめないか」

たまたま貰っただけだ、と妹紅の言葉に返す。その送り主は一体何を思って慧音に男物の着物を渡したのか、気になるところである。

「そうそう、今はまだ使えないが、後で風呂に入ってからその着物に着替えてくれ」

「風呂っすか？　……あー、確かに。思い出すと何か気になってきましたよ」

横島は軽く笑いながら背中を掻く。彼は蓬莱人になったが故にその傷も既に塞がっているのだが、乾いた血が張り付き、気持ちの悪い感覚が背中に纏わり付いている。ど

うでもいいが血を見るフランの視線がどんどんととろんとしてきた。舌が怪しく唇を濡らしている。

　皆横島の傷が治ったと理解しているのでそれ以上触れることはないのだが、ここには横島が蓬莱人であるということを知らぬ者もいる。

　影狼は思わず立ち上がってしまった。

「……って、何で彼の治療をしないんですか!?　あんな、あんなに血が出てるんですよ!?」

　影狼は横島の背を指差してそう叫んだ。繰り返しになるが既に傷は塞がっているし、血も乾いている。だが、影狼はそれに気付けていない。彼女も横島があまりにも普通に過ごしていたので、治療という行為にまるで考えが及ばなかった。だからこそ彼女は今完全に取り乱しているわけなのだが……。

　赤蛮奇は猛る友人を見て胸を押さえ「ふぐぅっ」と呻いている。心が痛みを発したらしい。

「あ、いや俺は……」

「――そうだ、治療と言えば……!!」

「あれ、この子も話を聞かないタイプなのか？」

　影狼の脳裏に稲妻が走ったかのようにあの時の光景がフラッシュバックする。

謎の『男』に殺されそうになり、目の前の横島に助けられた。そしてその際、彼は左足に重傷を負った――!!

「あ、あの時……!! あの時、私の、私のせいで左足が……!!」

影狼は眼に涙を溜めて横島の顔を見る。横島はそんな影狼を見て「涙目の女の子も可愛いなぁ」などと戯けたことを考えていたのだが、一先ずは彼女を落ち着かせるのが第一と思い直し、何とか宥めようとする。

「いやほら、ここまで走ってきたことから分かる通り、あの時の怪我ももう治ってるから……」

「あんな大怪我がもう治ってるわけないじゃないですかぁっ!!」

ぶんぶんと大げさに手を振って否定する影狼の姿は、見た目よりも随分と幼い印象を抱かせる。

「第一今も血の臭いが――……?」

する、と言いかけて影狼の動きが止まる。

確かに血の臭いは今も漂っている。しかし、それはもう乾いている血の臭いだ。他にはまるで臭わない。

一体何故――? などと考えたときには既に行動に出ていた。影狼は横島が重傷を負った場所、即ち左足に顔を近づけて臭いを吸う。

「うおおおおおっ!!?　なななななな何じゃあああーーーーーーーー!!?」

――とんでもない絵面になった。

横島は現在胡坐を掻いて座っているのだが、そこに影狼が足の血の臭いを探ろうと顔を寄せたのだ。

傍から見れば、突然影狼が横島の股間に顔を押し付けたようにしか見えない。

「きっ、貴様横島あああっ!!　私の家で破廉恥な真似は許さんぞぉっ!!!　教育的指導ーーーーーーっっっ!!!」

瞬時に顔を真っ赤に沸騰させた慧音が、横島の顔面にスーパーな頭突きを叩き込む。

横島は涙と鼻血を撒き散らしながら、慧音共々吹っ飛んでしまった。

「何で俺えええぇっ!?」

「ひゃあぁっ!?」

横島は何とか影狼が巻き込まれないようにと彼女を突き飛ばし、安全なクッションへと着地させることに成功した。……そのクッションとは美鈴のことなのだが。

影狼は美鈴の持つ圧倒的なボリュームを誇る2つのクッションの谷間に顔から突っ込み、「むぎゅ」と潰れたような声を出した。何の怪我もなく喜ばしいことなのだが、影狼本人はどこか傷ついたような表情だ。きっと女のプライドやら何やらが傷ついたのだろう。

「大きい……じゃなくて、それより彼の治療を――」
「うん、私に任せて」
一瞬美鈴の巨大なクッションに意識を持っていかれた影狼だが、今はその時ではない。横島の治療が最優先だと様々な誘惑を断ち切って顔を上げる。
しかし眼前には小さな、そして綺麗に輝く翼が生えた少女の背中があった。彼女の声は比較的落ち着いて聞こえたが、その足取りはどこか覚束ない。……何だろう、何か不思議な予感がする。影狼は不安とも期待ともつかない感覚に戸惑いながらも、彼女の背を見送った。
「ううう……まさか慧音先生にこんな激しく押し倒されるなんて……」
「もう一発いっとくか？」
「ごめんなさい」
横島は鼻を押さえてだくだくと未だ流れ続ける鼻血を止めようとするのだが、思ったよりもイイ感じに頭突きが入ったらしく、止まる気配は今も見えない。
それを見た慧音は流石にやりすぎたか、と謝罪も兼ねて治療を施そうとするが、それよりも早く小柄な少女が横島の懐に潜り込んだ。フランである。
「あれ、フランちゃ――」
鼻を押さえていた手をどけられ、そっちに視線が行ってしまう。何を、と視線を戻す

と、舌を伸ばし、上気したフランの顔が、すぐそこまで迫ってきていた。
「……――っ!!?」
あまりの驚きに声も出ない。フランの小さな舌が、流れ出た血を舐め取っているのだ。
下から上へ、丹念に舐め取られ、啜られる鼻血。やがて舌は源流となる鼻へと辿り着き、その鼻孔へと舌先を潜らせる。
「ふが、フランちゃん何を……っ!?」
言い切る前にフランの小さな口で、鼻を咥えられた。かぷかぷと甘噛みされ、思わず変な声が出そうになる。その間にも彼女の舌は鼻孔の血をこそぐように蠢く。
いくらフランの舌が小さいとは言え、当然それは鼻孔程ではない。舌先すら入るか怪しいだろう。
そこでフランが取った行動は、舌に自らの唾液を溜め、それを横島の鼻孔に送り、更に吸い出すことで血を味わおうというもの。
結果は成功。フランは余す所無く横島の血を堪能することが出来た。
「……えへへ。鼻血、止まったね」
ようやくフランが口を離し、ペロリと自らの唇に残った血を舐める。その表情といい仕草といい、とても幼い少女には見えない。（実年齢４９５歳以上）

横島はそんなフランから眼を逸らし、鼻を押さえてぽつりと言葉を零す。
「フランちゃん……」
「うん」
「……流石の俺も鼻血とか鼻の穴とか舐められて喜ぶ趣味は持ってないんだけど……」
「あれぇーーー!?」
今回、横島はフランの行動にちょっと引いていた。「流石に鼻血はなぁ……」というのが偽らざる本心だ。
ちなみに余り関係は無いが、ケルト神話には自分の経血を混ぜた蜂蜜酒を飲ませる女王が存在していたりする。
「ううぅ、ただお兄様はこういうのが結構好きそうだって聞いたからやってみたのに……」
「何だその偏見!? 誰がそんなマニアックなことをフランちゃんに吹き込んだんだ!?」
「てゐ」
「あんにゃろう……!!」
この時、紅魔館に住むとある兎の背筋に悪寒が走ったらしい。
「……」
当たり前の話だが、フランの行動はその場の全員に見られている。皆が皆驚愕に身を

震わせていたのだが、特に顕著だったのが慧音だ。
「も……も、もも、もももももも妹紅!!　何だ、どういうことだ!?　横島の恋人はお前じゃなかったのか!!?　横島は蓬莱人になってお前とラインがどーのこーのじゃなかったのか!!!?」
　慧音は盛大にどもりながら妹紅の肩を掴んでがっくんがっくんと揺らす。その慌てっぷりは妹紅に冷静さを取り戻させ、穏やかに現在の人間関係を説明出来た。
「いやー。私もそうなんだけど、実はフランと美鈴も横島と好い仲になったんだよ」
「何いっ!!?」
　首をぐりんと動かして美鈴を見てみれば、彼女は照れ臭そうに頭を掻きながら「実はそうなんですよー」とふやけた笑顔で言ってくる。再びぐりんと首を動かして横島達を見れば、フランは横島と対面する形で膝の上に収まり、横島はそんなフランの鼻を抓まんで彼女に変な声を上げさせている。（性的な意味ではない）
　２人の様子は以前見た仲の良さと変わりないように見えるが、それでも何かが違って見えるようにも思える。２人の顔が近かったり、互いの空いている手が繋がっていたりするからだろうか。
　慧音は確かに何かが変わった２人を見て、何だかよく分からない感情から来る昂りをお祝いの言葉にして横島へとぶつけることにした。

「何だかよく分からないが、とにかくおめでとうと言っておく!!　妹紅のことをこれからも頼んだぞ!!」
「ありがとうございます――というか何でまた頭突きをぶぅっ!!?」
もっと妹紅を構え、ということらしかった。理不尽な仕打ちである。
「――何だか、随分と賑やかですね……？」
襖が開く音がして、そこから幼い少女特有の高い声が聞こえてくる。そこにいたのは阿求だった。
どうやら風呂上りらしく、濡れた髪を手拭で纏めてある。
「阿求ちゃん、久しぶりー」
「横島さん？　どうも、先日ぶりですね――それから皆さんも。どうもお見苦しいところを……」
阿求は少々恥ずかしがりながらも皆と挨拶を交わす。風呂上りで肌が赤く火照り、少しの水分や汗で体に張り付いた長襦袢がセクシーと言えばセクシーだが、色々と物足りないのもまた事実。
「とりあえず阿求はちゃんと服を着てきなさい。風邪など引かないようにしないとな」
「そうですね。それでは一旦失礼します」
阿求は頭を下げると、退室していった。相変わらず見た目からは想像が出来ないほど

に礼儀正しい。横島などとても真似出来ない。
「風呂使えないっていうのは阿求ちゃんが入ってたからなんすね。……で、何で阿求ちゃんが？」
横島は首を傾げる。
今の時刻は昼過ぎ。気温も涼しいもので、汗を掻くような暑さでもない。寒いから体を温める、というのは考えられるが、だからといって風呂を沸かす程でもないだろう。
別段気にするほどのことでもないのだが、声に出してしまった疑問に対して慧音はしっかりと答えてくれた。
「いや、なに。妹紅が横島に取られてしまったんでな。その寂しさを阿求に埋めてもらってたんだが……」
「ああ……やっぱり慧音先生ってそういう……」
途中で遮られてしまった。しかも何だか聞き捨てならない台詞が出てきたような気がする。
「ちょっと待て、お前何を――」
「いや、大丈夫っすよ。個人的には非生産的だし、だったら俺が!!　っていう思いもありますが――阿求ちゃんとの仲、俺は応援しますよ」
「ちょっと待てぃ!!　それは誤解だ!!」

やはり気のせいではなかったようだ。横島の中で、慧音はロリで百合という認識をされてしまっているらしい。これには慧音も慌ててしまう。

「いやいや待て!!　私はノーマルだ!!　私は男が好きなんだ!!」

「そんな!?　私のことは遊びだったんですか!?」

「こんな時に妙なノリを発揮するな阿求ううーーーーーっ!!」

少し遠くから阿求の声が響く。意外にもわりとお茶目な性格だったようだ。今も彼女の笑い声が抑えきれずに横島達まで聞こえている。

結局この話題は慧音が横島に3度めの頭突きをするまで続けられたのだった。

「――すっかり本題を忘れてましたけど、先日はご迷惑をお掛けしました。そのお詫びということで、これを受け取ってください。中身はケーキですんで、お2人でどうぞ」

横島は頭頂部に出来た立派なタンコブを揺らしながら、慧音と阿求に深々と頭を下げ、お土産の咲夜特製ケーキを渡す。ケーキの箱は随分と振り回されていたが、中身は咲夜が時間を止めてくれていたおかげで微動だにしていない。ちなみに箱が開くと時間が動き出す仕組みだ。

「おお、ありがとう。楽しみに食べさせてもらうよ」

「紅魔館のメイド長、十六夜咲夜さんのケーキですか！　今から楽しみですね……!!」

ケーキと聞いただけで2人のテンションが一気に高まる。やはり女の子は甘い物が好きなのだろう。阿求などはメモとペンを取り出し、何かを書いている。何らかの情報を書いているのだろうが、一体今ので何を得られたのだろうか。

「さて、風呂も空いたことだし入ってくるといい。とりあえず案内するが……使い方は分かるか？」

「まあ、多分。現代……っちゅーか、外の世界とあんまり変わらないんですよね？　それなら何とかなると思いますけど」

幻想郷の文明レベルは江戸時代末期から明治時代初期辺りとなっている。これは閉鎖的な環境故仕方のないことなのだが、実は幻想郷の管理人である紫の手によって外の世界の技術が使われている物もある。

その基準はまちまちで統一性があまり無く、言ってしまえば紫の趣味で選ばれているのだが……とにかく、その中には風呂があった。

紫は幻想郷に良い香りのする石鹸やシャンプー・コンディショナー、更には入浴剤やアヒルのおもちゃなど、風呂に関係する様々な物を取り入れている。

風呂そのものは昔そのままなので全自動で沸かすことは出来ないが、それでなくても突出して文明的な部分でもある。

だから横島の言葉に間違いはないのだ。

「それならいいが。じゃあ行こうか。シャンプーとリンスの容器なんだが……」

「あー、紛らわしいですよねー。俺も友達の家に泊まった時はよく間違えましたし……」

横島と慧音は連れ立って部屋を出て行った。お互い険悪なところはなく、横島も冷静ならば慧音と相性は悪くないのかもしれない。

2人が出て行ったあと、阿求は手に持ったペンとメモを前ににんまりとした笑みを浮かべる。

「さて……妹紅さ～ん？　それから美鈴さんとフランさん？　普段横島さんとどんな風に日常を過ごしているのか、教えてくださいよ～」

阿求の瞳は好奇心に輝いている。それは影狼と赤蛮奇も同じだった。フランが横島の鼻血を舐め始めてから固まっていた2人だったが、横島が蓬莱人だという言葉は聞こえており、さっきまでどういうことなんだろうと話し合っていたのだ。

曰く、蓬莱人とは不老不死である。

横島や周りの皆が横島の怪我を前にして落ち着いていたのはその為だったのだろう。だが、かと言って恋人である男の怪我に対して何の処置もしないというのには思うところがある。

鼻血についてもそうだが、舐め取るのではなく、もっとちゃんとした処置があったは

ずだ。

――影狼は横島を思う。このままで良いのだろうか、と。

それは純粋に横島を思ってのことなのだが、彼女は横島のことを知らない。全く知らないと言ってもいいだろう。

特に、蓬莱人になる前からギャグをしている時に負った傷は次のコマで完治していることとか。生身で音速の壁にぶつかっても生きてたとか。生身で大気圏に突入して記憶喪失になるだけで済んだこととか。

横島にとって、女の子からの激しいツッコミが、段々と快感に変わってきていることとか――――。

……これは横島自身も気付いていないことだった。

そして気付いていないこともある。否、気付けなかったのだろう。

横島が赤蛮奇の弾幕を受けた時、妹紅達がどれほどの怒りを顕にしていたのかを――――。

第四十七話

『彼を知りたい』
～了～

てゐ「ウサァッ!?」
鈴仙「ちょっ、どうしたの?」
てゐ「何か……何か嫌な予感のような、イイ予感のような複雑な悪寒が背筋を走って……!!」
鈴仙「嫌な予感はともかく、イイ予感……?」
てゐ「例えば……そう、例えば執事さんが私をネチネチとイジメてくるような、そんな感覚……?」
鈴仙「うわあ……」
てゐ「執事さんに……イイかも……」(恍惚)
鈴仙「うわあ……うわぁぁ……」(ドン引き)

第四十八話

「ふいー、いい湯だったなー」

慧音宅の風呂で血を流した横島は、さっぱりとした様子で皆のいる居間への廊下を歩いている。

現在彼が着用しているのは慧音から貸し与えられた浴衣。深い藍色をした無地の浴衣は横島に落ち着いた印象を与え、それがまた、彼の雰囲気にも合っていた。

白い手ぬぐいを首にかけ、悠々と歩く姿はどこか年齢不相応なイメージを見る者に与えるだろう。まるで休日のお父さんみたいだ、と。

「しっかし、汚れてたのは身体だけなんだから、髪を洗わなくてもよかったかな？」

横島は濡れた髪を撫で付けながら呟く。

横島は気付いていないが、彼の髪には彼が流した鼻血が付着していたのだ。なので結果的には良かったといえるだろう。

「……ん？」

居間の襖を開けようと手を掛けようとしたとき、中から楽しそうな笑い声が響いてき

た。横島が風呂に入っている間に随分と打ち解けたようで、大変結構である。ちゃんと影狼と一応赤蛮奇の声も聞こえるので、いつの間にか退治されてたとかそういうのも無いらしい。横島は胸に手を当て、そっと安堵の息を吐いた。

「戻りましたー。何か随分と楽しそうだけど、みんな仲良くなったんだなー」

「あ、横島。湯加減はどうだった？」

「いやー、いい湯だったっすよー」

居間に入り、「失礼します」と空いている場所に座りながら慧音と言葉を交わす。他の者達は何やらほうと息を吐き、感嘆している様子。

「……いいな、その浴衣。よく似合ってる」

「お兄様のユカタ？　姿って、すごい新鮮な感じー……」

「いいですねー、一気に大人っぽい感じが出てますよ！　格好良いです！」

「マジで？　マジで？　格好良い……!!　この俺が……!!　格好良い……!!」

3人の恋人達に褒められ、横島は舞い上がらんばかりに気を良くする。3人の感想には恋人としての欲目もあったのだろうが、それでも彼女達の言葉は真実である。慧音も妹紅達ほどではないにせよ今の横島を中々に格好良いと思っているし、阿求や影狼、赤蛮奇も横島の総髪（オールバック）姿に不思議な魅力を感じている。

ただ一点、顔が盛大に歪んでいなければそれを素直に言葉に出せたのだが……。

「いつも執事服とか洋服だし、横島はそういう和装ももっとした方がいいんじゃないか？」
「幻想郷では和服が多いもんね」
「私みたいな中華系の服も着てみましょうよー。格好良いとい思いますよー？」
「格好良いかなー、そういう服着たら格好良いって言われるかなー？　うは、うはははは!!」
まあ、本人は幸せそうなので何よりである。
それにしてもこういう風に恋人達と笑い合っている姿を見ると、以前に見た姿は幻だったのではないかと疑ってしまいたくなる。慧音は何の悩みも無さそうな横島に対し、知らず苦笑を浮かべる。
もし自分が彼と同じ立場だった場合、ああして笑うことが出来ただろうか？
慧音は自問する。自分が元々存在していた世界から外れ、全くの異世界――平行世界に投げ出され、元居た世界には戻ることは出来ないと告げられて。
友人や恋人を得たは良いが、自身はとある異変に巻き込まれ、蓬莱人という特殊な存在と化してしまう。
「……私では、無理かもしれんな」
慧音は誰にも聞かれないように口の中で呟いた。

人より何倍も長生きをしている慧音ではあるが、それでもこの短い期間にそれだけのことが起きれば毎日を楽しく笑って過ごすことなど出来ないだろう。

そう考えると、横島のメンタルの強靭さ、とりわけ正気を保っていられることが正直に言って信じられない。……彼の正気が常人の正気と同じ尺度で推し量れるかどうかは置いておくしかない。煩悩的に考えて。

ともかく、慧音はそういう面では横島のことを尊敬しているのだ。

だから、慧音は横島にそれを聞いてみた。いや、思わず口にしていたと言った方が近い。

「なあ、横島。お前は――――お前は、どうしてそんな風に笑えるんだ？」

しかしそれは、彼のある一面を浮き彫りにすることになる。

第四十八話

『無意識のズレ』

「えー……っと？　どういう意味です？」

慧音の突然の質問に、横島は首を傾げる。どうして笑えるのか、そんなことを聞かれても困ってしまう。

「ああ、すまん。つい、な。正直言い辛いことではあるのだが……お前は幻想郷に来てから随分な目に遭って来たからな。それでもそうやって笑うことが出来ているのが凄いと思って。……私にはとても真似出来ん」

慧音は少々早口ながらも理由を述べる。話の内容が内容だけに、場の空気は重いものとなっていく。特に、妹紅と影狼はは横島がそうなった原因の1つとも言え、2人は顔を俯かせ、瞳に涙を滲ませる。

影狼は自分のせいで横島の命を危機に追いやり、妹紅は横島を失いたくがない為に自らの生き肝を食べさせた。そんな分かりやすい地雷を思い切り踏み抜いてしまった慧音だが、だからこそ先程早口気味になっていたのだろう。

どうも最近口がよく滑る。異変が立て続けに起こり、里の住人達のケアに奔走し、寺子屋の教師として忙しい毎日を送り、更には親友とその想い人に起こった事件。

慧音の中に知らず知らずの内にストレスが溜まり、どんどんと余裕やゆとりを奪い去っていったのだろう。今現在の人里でも、彼女に掛かる負担は馬鹿に出来ないものが

ある。

自分の失敗を悟りながらも、今の慧音にはどうすることも出来ない。何故口に出してしまったのか……と、己を悔いるばかりだ。

「んー……」

だからこそ、横島が先の質問に答えてくれることが彼女達にとって何よりの救いとなる。

しかし、彼の答えは――――。

「いやー、やっぱり向こうにはもう戻れませんし、だったらこっちで幸せになれるようにしていかないとなー……なんて思いまして」

「――――な、に……？」

自分でもちゃんと言葉になったか不安を覚える程に、掠れた声が慧音の口から出る。今横島が言った答えは、彼の事情を知っている者からすれば、違和感を抱かずにはいられないものだ。

そもそも。そもそもだ。

横島は――――元の世界に帰りたがっていたはずだ。

横島を見る妹紅を初めとした恋人達の眼も、困惑を強く宿している。こちらの世界で横島と恋人関係になった3人だが、彼女達は横島をこの幻想郷に縛りつけようとは考え

ていなかった。

妹紅は横島が元の世界に帰ろうとも一緒についていくつもりであったし、美鈴もフランも似たような考えだ。まあ、その時にはレミリアという高過ぎる壁をどうにかしなければいけないし、レミリアは横島を紅魔館から出す気はなさそうなのだがそれはともかく。

横島は幻想郷に墜落し、紫から元の世界に帰ることが出来ないと聞かされた時も、文珠を精製出来た時も、元の世界に帰りたがっていた。

確かに「こちらの世界に骨を埋めるべきか」という考えに至っていた。だがそれはあくまでも本気ではなかったはずだ。無意識の領域だったはずなのだ。

だとすれば、いつからそれが表出した？　いつからそれが顕在化した？

今の横島は――――元の世界に帰りたくないと、本気でそう思っているのだろうか？

「……横し――」

「そういや、ケーキはもう食ったんすか？」

「え……いや、まだだが」

疑問を口にする前に、横島からの疑問に遮られる。本来ならば簡単に話を逸らされる慧音ではないのだが、その時ばかりは抗えなかった。そうした方がいいと感じたから

か、それとも何か別のものを感じたからか。他の皆も何かを言うことはない。妹紅達もそうだ。何となく、この話題には触れたくなかった。

「……やっぱり美味いな、咲夜が作るケーキは」

「本当ですね。甘さは控えめなのに、それを感じさせないというか……。それに、紅茶もとても良い香りです」

それから数分。慧音と阿求は横島達から受け取ったケーキを食べている。紅茶は横島が淹れ、その腕前に阿求も感心しきりだ。

「あのー……」

「ん？」

ケーキに舌鼓を打つ慧音と阿求に、おずおずと声が掛けられる。その声の主は影狼であり、彼女と赤蛮奇の前には慧音達と同じくケーキと紅茶が置かれていた。

先程までの話と雰囲気についてこれなかった2人であるが、これはこれでついていくことが出来ない。どこか緊迫した空気から脱却出来たのは嬉しいのだが、それでも横島達に迷惑を掛けた自分達にケーキを分けてくれるとは予想もつかなかった。

「本当に、私達もいただいてよろしいのでしょうか……？」

「ああ、構わないさ」

影狼の疑問に慧音が頷く。こうして会ったのも何かの縁。ケーキも同じものが2つ

ずつ入っていたのだし、皆で分け合ったほうがより美味しく食べられるだろう。
　赤蛮奇は慧音の言葉におろおろとするばかり。何せ彼女は横島に血を流させたのだ。そんな自分がケーキをご馳走してもらうなど、理解が追いつかない。
「わ、私はやはりその、ここまでしてもらうわけにはいかないのでは……」
「あー、まあその気持ちは分かるがな」
　最早泣きそうな赤蛮奇の様子に慧音は苦笑を零す。せっかく皆で美味しくケーキを食べようと思ったのだが、やはりそう上手くはいかないらしい。赤蛮奇は怯えながらも妹紅達に視線を寄越す。
　そんな彼女の様子に同情を抱くのは横島だ。これもある意味当然だろう。彼は美少女の泣き顔などは見たくない。……いや、美少女の泣き顔は好物の1つであるが、こういった怯えからくる泣き顔は駄目だ。美少女のナニかによる泣き顔なぞは大好物だが、これはいただけない。
　なので、横島は妹紅達に視線を送る。「もう許してやったら？」という意味合いを込めて。
「……いいから食べなよ。横島はもう気にしてないみたいだし、私達ももう怒ってないからさ。……むしろ私達の方がやりすぎちゃったというか……とにかく、悪かったよ」
　結果、妹紅は真っ先に折れることにした。彼女とて弱い者いじめは好きではない。横

島からの視線もあるし、何よりもこのままにしておくのは良心が咎める。頭をぽりぽりと掻きながらではあるが、それでも妹紅は赤蛮奇へと謝罪の言葉を口にした。

「あの、そんな私の方が……」

「……あの時は怖がらせちゃってごめんなさい。お姉さんは友達を守ろうとしてたのに」

「いや、そんな!!　あれは、ちゃんと確かめもせずに攻撃した私が悪いのだし……!!」

妹紅に続き、フランも赤蛮奇へと謝意を表す。そんな彼女達に赤蛮奇も慌ててしまう。混乱から言葉が上手く口から出ない。ただあわあわと焦るばかりの赤蛮奇に、美鈴も頭を下げる。

「確かに切っ掛けは貴女かも知れませんが、それでも私達がやりすぎたのも事実です。……すみませんでした」

「あ……う……!!」

3人から頭を下げられ、赤蛮奇の混乱は頂点を極める。何故こんな話になったのか。何故加害者である自分が被害者の恋人達に頭を下げられているのか。そもそも頭を下げるなら自分の方が――。

「……っ」

そこで、はたと気付いた。

はたして自分は、横島とその恋人達にちゃんと謝罪をしただろうか？

――――していない。友人の命の恩人に怪我を負わせたにも係わらず、自分は一切謝罪を口にせぬまま流されるばかり。影狼に頭を下げさせ、先程談笑していたときにも自分から行動せず、挙句の果てには被害者である彼女達に頭を下げさせている。

自分は一体何をしているのか。まず頭を下げるべきは自分だ。自分のあまりの情けなさに涙すら出てくる。

「……ーっ」

赤蛮奇は息を大きく吸い、そのまま勢い良く横島と、そして妹紅達に向けて頭を下げる。

「横島さん、私の勘違いで怪我をさせてしまい、申し訳ありませんでした。まず謝るべきは私だったというのに、妹紅さん達に頭を下げさせてしまいました。本当に、すみませんでした……!!」

それは赤蛮奇の心からの謝罪だった。あまり口が上手いとは言えない彼女の、拙いながらも心を込めた、精一杯の謝罪。それを受けた妹紅達3人は視線を交わし、それぞれが行動に出る。

「ああ、うん。私達はもう気にしてないからさ、頭を上げてくれよ」

「ほら、お兄様の紅茶を飲んでみて？　温かいお茶を飲んだら落ち着くと思うから」

「お互い様なんですから、これで終わりにしましょう？　横島さんももう気にしていませんし」

美鈴がちらりと視線をやれば、横島は鷹揚に頷いた。

「あんな場面を見たらしょうがないって。俺もみんなもその、あれだよ。えっと……大丈夫だから」

「何が大丈夫なんだ」

冷静なようで全然冷静でなかった横島の言葉に、慧音のツッコミが入る。

それは横島の照れ笑いに繋がり、やがて他の皆にも伝播し、一同は小さく、しかし確かな笑みを浮かべていた。

「赤蛮奇」

「あ……」

赤蛮奇に影狼は声を掛ける。赤蛮奇は当初気まずそうにしていたが、それでもちゃんと影狼へと向き合った。

「その、ごめん。影狼にまで頭を下げさせてしまって……」

それはあの時への謝罪。いくら自分が身動きの取れない状態だったとしても、その後も何もしないのでは問題がある。影狼は赤蛮奇からの謝罪をしっかりと受け止め、頷いた。

「あの時は赤蛮奇のピンチだったから。……この話はこれでおしまい。ほら、ケーキ食べよう？　あの紅魔館のメイド長の作ったケーキだから、きっとすっごく美味しいよ？」

笑顔を浮かべる影狼に、赤蛮奇は救われたような気持ちになる。「そういえば影狼も怖がらせちゃったよな……」と妹紅達に謝られて慌てる彼女を尻目に、赤蛮奇は自分の分のケーキを一口食べてみる。

「……美味しい」

それは、今まで食べたことがないほどに美味しく感じられた。何故かぺこぺこと妹紅達に頭を下げている影狼を見る。

きっと、ここまで美味しく感じられるのは彼女のお陰なのではないかと思う。影狼が友達で良かったと、心から思う。

赤蛮奇はようやく頭を上げてこちらに戻ってきた影狼に自分のケーキを一口分けてあげることにした。フォークに一口分のケーキのかけら。それを差し出す赤蛮奇。いわゆる「あーん」の状態だ。

「……あ、すっごい美味しい！」

「流石は紅魔館のメイド長。……影狼のも美味しそう」

「じゃあ、一口交換しよう。こっちのも美味しそうだよねー」

影狼が差し出したフォークを咥え、もう1つのケーキの味を堪能する。こちらの方も劣らず美味い。

「ん。どっちも美味しい」

「本当だね」

笑顔を浮かべながらケーキを食べる。時たまお互いに食べさせあい、2つの味を堪能しつつ紅茶を飲むのも忘れない。

慧音も影狼達と同様に、阿求と互いのケーキを食べさせあったりしている。ふた組の美少女達による「あーん」合戦は、それを見ている横島に一時の幸福感を与えていた。

「美少女達のあーん……良い。凄く良い」

横島の頬は緩み……というかにやけており、何やら邪なオーラを放っている。とても良い子のみんなにはお見せできない顔だ。

妹紅達は「あーん」を恍惚の表情で見つめる横島を見て、後で自分達も横島にやってあげようと画策する。フランなぞ「さっきお兄様の血を飲んだから、今度は私の血を飲んでもらおうかな?」というある意味とても危険な考えを巡らせる。

互いの血を吸いあう仲……。それはそれで淫靡な匂いが漂うが、横島がそれを歓迎するかは微妙である。

横島のにやけた笑みは変わらず、ケーキを食べる前のことを思い返す。

慧音からのあの質問。それに答えたあの時の言葉。
――――横島は考える。
「……そうだよな」
少しだけ深い息を吐き、一瞬だけ表情を戻す。
――――元の世界に帰ることが出来るのなら、帰らなくちゃいけないんだよな。
その心中の呟きは、誰にも気付かれていない。そして、その呟きが意味するものに、横島自身も気付いていないのだ。

第四十八話
『無意識のズレ』
～了～

第四十九話

夕方の赤い陽光が差し込むゲストルームにて、紫はその意識を自らのスキマの中へと移していた。

椅子の足の下にカーブ状の板が付いているタイプの安楽椅子に深く腰掛け、ゆらゆらと揺られながらお昼寝をするのが最近の紫のお気に入りだ。

その姿を見たレミリアからは「ババくさい」と言われて心に深い悲しみを背負ったものだが、横島には「紫さんの見た目と相まって、何かお人形さんみたいで可愛いっすよ！」と褒められ、機嫌はすぐさま回復した。その時の紫の様子は、外見年齢通りの可憐な少女のようであったという。

「……」

紫がスキマに意識を移してからどれだけの時間が経ったのだろうか。彼女が現在行っているのは、今朝に掴んだ横島の世界に繋がる糸を辿っていく作業である。

何分遠い遠い世界のことだ。距離も然る事ながら、横島の元々いた世界はこの世界よりも上位に位置する世界である。神魔の支配が強い世界というのはつまり、外界からの

接触にも強い世界ということでもある。だからこそ紫は慎重に、ゆっくりと糸を辿っていく。

　一定の距離を辿ってはそこに印を付け、それをずっと繰り返し。やがて陽も完全に落ちるだろう頃、傍らに佇む存在に気が付き、紫はその意識を身体へと戻した。

「……どうしたのかしら、永琳。じっと私の顔を見ていないで、声を掛けてくれれば良かったのに」

「いえ、邪魔するのもどうかと思ってね。一区切りが付くまで待ってようと思ってたの」

　紫の恥ずかしそうな台詞に永琳は苦笑を浮かべ、一応の言い訳を述べる。紫からすれば寝顔（のようなもの）を見られていたようなものなのだが、ここでそれを言うのも何だか恥ずかしい。結局、紫は小さく溜め息を吐くに終わり、永琳に用件を尋ねる。

「それで、一体どうしたの？　私に何か用なのかしら？」

　紫の疑問に永琳は答えない。いや、答えないというよりは口にするのを躊躇っているようにも見える。やがて永琳は心が決まったのか、ようやく口を開く。

「……今更でもあるし、言い方は悪いんだけど……随分と熱心に彼の世界を探しているな、と思ってね」

　その永琳の言葉に、紫は彼女が何を言わんとしているのかを理解した。確かに紫を知っている者からすれば、今の彼女は余程おかしく見えていることだろう。しかし、そ

れは永琳も承知している。紫が横島に親身に接する理由。そして、その理由は永琳も同じであるはずだ。

「……当然です。彼がこちらに墜落してしまったのは私のせいでもある。ならば、彼を元の世界に還すのは私の役目。幸い彼の世界への糸も掴んだことだし、少しでも早く彼の世界に辿り着こうとするのはおかしなことではないと思うのだけれど……」

永琳の疑問に対し、紫も彼女に違和感を抱えながらもそう返した。紫のその言葉に永琳は神妙に頷いている。その姿に紫は疑問が浮かぶ。先程の考えは勘違いだったのか、と。

「……横島君」

「……？」

不意に、永琳がぽつりと呟く。

「……横島君は、心に相当の闇を抱えている。けれど、彼はそれに負けることなく、逆に明るい姿を私達に見せている。……でも、だからこそ彼の中でその闇はどんどんと強くなっていっているのかも知れない」

「……急にどうしたの？」

突然話題を変える永琳に、紫は彼女を訝しく思う。意図は不明だが、それでも永琳の言葉の意味は分かる。あの時に見せた横島の表情は、確かに永琳の言う彼が抱える闇の

大きさを物語っていた。だからこそ、紫は横島の闇を少しでも払おうとしている。
紫も永琳も、横島の幸せを願っている。
紫にとって横島とは、歴代の博麗の巫女や古くからの友人である幽々子以外で彼女が関心を持った例外とも言える人間だ。色々と困った部分もある人物だが、それでも彼は紫の好意に値する少年でもある。
永琳にとってもそれは同様だ。紫と同じく横島が幻想郷に墜落した原因でもあるし、何よりあの『男』との一件で永琳の中で〝横島忠夫〟という少年への執心は一気に強まった。
紫は横島の幸せを願い、行動している。
永琳も紫と同じく横島の幸せを願い、彼のケアを行っている。
紫も永琳も、共に願う横島の幸せ。――――しかし。
紫が考える横島の幸せと、永琳の考える横島の幸せ。2人が考える彼の幸せには、決定的な違いが存在した――――。

第四十九話

慧音の家でまったりとした午後を過ごした横島達一行。一部険悪な時間も存在したが、今では蟠りも解け、皆で談笑している。

現在盛り上がっているのは〝赤蛮奇に何をやらせるか〟という議題だ。……本当に蟠りが解けて談笑していたのだろうか。疑問は尽きないが、一応内容は可愛いものだった。

「紅魔館でしばらくメイド生活というのはどうでしょうか？」

「寺子屋で赤蛮奇せんせーになるのはどうかな？」

「永琳の薬の臨床実験に協力するとかはどうだ？」

「勘弁してください……」

妹紅達の提案に赤蛮奇はげんなりとした様子で返答する。どれもこれも赤蛮奇には辛い提案だ。

赤蛮奇は頭が悪いわけではないが、それでも人に何かを教えられるだけの学は持っていないと自覚しているし、八意永琳という噂のマッドサイエンティストの実験台など

もってのほかだ。故に挙げられた案の中で一番マシなのは紅魔館でのメイド生活だが、聞けば自分が傷つけた相手はその紅魔館の執事だという。……正直色々と漏らしてしまいそうなほどに恐ろしい。

「……いや、待てよ？」

しかし、ここで赤蛮奇が自分で自分に待ったをかける。彼女は思い出したのだ。横島や妹紅達、そして影狼に対して謝罪をした時の気持ちを。

私は紅魔館の執事に怪我を負わせた。既に怪我は治っており、本人にもその恋人達にも許してもらえた（？）。……しかし、横島の雇い主であるレミリアに何の誠意も見せないのは問題がある。――ならば、メイドになるべきではないのか？

「――私はメイドになり、紅魔館の主、レミリアに誠意を示さなければならないのではないか……？」

「何か変な方向に考え過ぎてないかな？」

どこか遠くを見ながら決心を固めようとする赤蛮奇に、影狼のツッコミが入る。……その効果はあまり無かったが。

「んー……もうそろそろいい時間だし、赤蛮奇ちゃんがその気なら一緒に紅魔館に行くか？」

横島は時計を見ながら赤蛮奇に問い掛ける。時刻はそろそろ午後6時になろうかと

いったところ。今から帰れば夕飯の時間までには帰れるだろう。横島は「それともどこかで夕飯を食べてからがいいかな？」と追加で問うが、赤蛮奇としては悩むところだ。

出来るなら早めに紅魔館へと赴き、そしてレミリアにメイドになる旨を伝えたほうが良いのだろうが、この中途半端な時間がそれを躊躇わせる。紅魔館には数多くの者が住んでいる。今の時間帯から押しかけるのは色々と迷惑なのではないだろうか？　特に夕飯が近いとなればなおさらだ。

「そんな気にしなくてもいいと思うけどなー」

横島は呑気なことを言うが、赤蛮奇の認識ではそうもいかない。何せ相手はかつて幻想郷全域に異変を起こし、更にはその異変が外の世界にまで及びそうになった程の存在である。つまりは、それだけレミリアが一般の妖怪達に恐れられているということだ。

唸りながら悩みに悩む赤蛮奇をよそに、横島達は彼女のこれからの行動を勝手に決めることにする。

「どうする？　もう赤蛮奇ちゃん連れて帰っちゃうか？」

「あまり長居するのも悪いですしね。そうしましょうか」

「そういうのは気にしなくてもいいんだがなぁ」

独り身の慧音としては今のように賑やかな状態が恋しくなることもある。なので騒がしいのは嫌いでないし、他人に迷惑を掛けないのであれば大歓迎であるのだが、流石

に何の連絡も無しに押しかけてそのまま長居し続けるのは横島達の良心が痛む。横島達は慧音の言葉を嬉しく思うが、それでも今回は遠慮することにした。

「……あ、何なら慧音の方が紅魔館に来たらいいんじゃないか？　……阿求もどうだ？」

「ん、それは……」

「私もですか？」

妹紅からの提案に慧音達は悩む。赤蛮奇ではないが、今の時間に紅魔館に向かうのは中々に悩む所だ。

慧音はちらりと隣の阿求へと目線をやる。彼女も中途半端な時間に悩んでいるようだが、そわそわと身体を忙しなく動かしていることから行ってみたくはあるようだ。

阿求のそんな姿を見た慧音は軽く息を吐き、妹紅に了承の意を返す。またもアポ無しでの訪問となるが、レミリアは細かいことは気にしないタイプであるし、問題は無いだろう。レミリアの厚意に甘えるばかりになるのは問題だが。

「今の時間帯なら、泊りがけの方がいいんじゃないかな？」

「え、お、お泊りですか？　どうしましょう、家への言い訳は『友達の家に泊まる』で大丈夫でしょうか？　あながち間違ってるわけではありませんし……」

「……何か恋人との初エッチの言い訳みたいっすね」

「コラ」

阿求の言葉に何故か煩悩が湧いた横島は慧音に思いついた下ネタを慧音に小声で話す。当然慧音に頭突きをされたわけだが、横島の顔は安堵に緩んでいた。……煩悩の発散も兼ねていたのだろうか。

それから数十分後、家へと外泊の許可を取ってきた阿求を連れ、横島達は紅魔館への空を飛ぶ。その内訳は横島と恋人達で4人、そこに慧音・阿求・影狼・赤蛮奇が加わり、倍の8人に。ちなみに阿求は空を飛ぶことが出来ないので慧音が抱えている。慧音に抱えられているとはいえ、空を飛ぶという滅多に出来ない体験に阿求は眼をキラキラと輝かせ、しっかりとメモを取る。

「何か職業病みたいだな」

とは横島の談。

さて、時間は少々遡り、陽もそろそろ傾きだす紅魔館の中でチルノは暇を持て余していた。

大妖精にルーミア、リグルにミスティアもチルノの誘いに乗って紅魔館に遊びに来たのだが、相変わらずレミリアを前にすると彼女達が大変に萎縮してしまうので遊ぶに遊

べないのだ。
　他の者より多少仲が良いと言える文もはたてと一緒に妖精メイド達への取材に掛かりっきりであるし、レミリアも大妖精達の様子を見て愉悦の表情を浮かべているので話しかけ辛い。何とも大人げの無い姿だが、いつまでもレミリアに怯えて彼女を喜ばせる大妖精達が悪いのだ。（暴論）
「レミリアー、いつまでも大ちゃん達で遊ばないでよー」
「ふふふ、すまんな。私に怯える姿が余りに可愛らしくてなぁ……」
　このままでは面白くないと、不貞腐れたように唇を突き出しながらのチルノの言葉に、レミリアはとっても邪悪な笑みで答える。悪魔の本領発揮と言ったところだが、やっていることは余りにも小さい。
「大ちゃん達も、レミリアを怖がり過ぎだよ。あたいみたいにもっとどっしりと構えなくちゃ！」
「無茶言わないでよぉ……」
「というかどうしてチルノは対等に話せてるのさ……」
　チルノの指摘に大妖精は涙目になり、リグルは疲れたように溜め息と共に言葉を吐き出す。それに対してチルノはきょとんとした表情を浮かべている。
「どうしてって、何が？」

「……レミリアさんが怖くないの？」
「レミリアの魔力が凄くて、私はヒザをついてやり過ごす以外になかろうなのかー……」
　ミスティアは純粋にレミリアが怖く、ルーミアはレミリアの魔力に当てられてあまり動き回ることが出来ないようだ。その事実に困惑してか、ルーミアの台詞がよく分からないことになっている。
「つまり……みんなはレミリアが怖いの？」
　チルノは大妖精達の様子からそれを読み取り、本人の前でストレートに問い掛けた。これには皆大慌てだが、まあ元々レミリア本人が彼女達を率先して怖がらせているし、ミスティアも本人がいる前でチルノに「怖くないの？」と聞いているので今更ではあるのだが。
「ふむ……しかし私も気になるな。チルノは私が怖くないのか？」
「え？　全然」
　レミリアの問いにチルノはあっけらかんと返す。その答えに大妖精達は背筋が凍りつかんばかりの思いだが、レミリアは特に気にせず、胸中に浮かぶ疑問を解消するために更にチルノに問い掛ける。
「んー……何故怖くないんだ？」
　チルノの答えには純粋に興味がある。果たしてこのお馬鹿な妖精はどんな答えを返

してくれるのか。
　レミリアの期待も知らず、チルノはただ当たり前のようにその言葉を口にする。それは、チルノ以外のその場の誰もが想像もしていなかった答えだ。
「だってあたいとレミリアって友達でしょ？　友達を怖がるやつはいないよ」
「……ほう、なるほどな」
　チルノの言葉に、レミリアは眼をまん丸と開いて頷いた。チルノに自分を友達と呼ばれたのが意外だったのだろうが、レミリアよりも、大妖精達の方が受けた衝撃は大きかった。
　確かにレミリアに対するチルノの振る舞いは友人のそれと言えるだろう。互いを名前で呼び、対等に言葉を交わし、不満を漏らす。なるほど、確かに友達と言えるだろう。チルノの豪胆さに、大妖精は気が遠くなりそうだ。
「名前を呼び合ったら友達だって漫画に描いてあった!!」
「何でもかんでも漫画を鵜呑みにするんじゃない。……まあ、私は構わんがな」
　何とも頭の悪いことを仰るチルノの頭を、レミリアは苦笑しながらもわしわしと撫でる。その姿は友人というよりは姉貴分と呼んだ方が自然に思えてくる。しかし、どうやらレミリアもチルノも互いに満更でもない様子。そんなレミリアの姿に大妖精達はその表情に戸惑いを浮かべる。

「ふふ、お友達のチルノに遊べと言われれば遊んでやらんとな。どうする？　夕食までまだ時間もあるし、トランプでもするか？」
「するー!!」
　周りの困惑も知らず、２人は仲睦まじげにじゃれ合っている。いや、じゃれ合うと言うよりはチルノが一方的にじゃれついているようなものなのだが、それはともかく。この場にはそんなシーンを見せ付けられては黙っていられない者が存在する。
「……わ、私も混ぜてくださーい!!」
　大妖精だ。仲の良い２人の姿を見ていると、何故か胸がざわつき、苦しくなってくる。これは嫉妬心から来るものだということに気付いているが、彼女にはこの気持ちをどうやっても抑えることは出来ない。チルノの１番の友人――親友は自分なのだ。
　大妖精は負けてなるものかと、チルノとの仲を見せ付けるかのようにチルノの腕に抱きつき、トランプへの参加を表明する。
「いいだろう……。ふふふ、この私に勝てるかな……？」
「ま、負けませんからね……!!　絶対に負けませんからね……!!」
「その意気や良し!!　さあ大ちゃん、トランプタワーで勝負!!」
「うん、チルノちゃ――トランプタワー!?」
　チルノが指定したまさかの勝負内容に驚きを隠せない大妖精。細かいことを気にし

ないレミリアはそれを快く了承し、ついでとばかりにリグル達残りの3人も誘う。先程のショックが抜け切っていなかった3人であるが、チルノや大妖精の勢いに負け、戸惑いながらも参加した。

それは、非常に楽しい時間だったと言えるだろう。始めの頃は競い合っていたのだが、途中から大妖精がチルノのトランプタワー建設を手伝ったのを皮切りに、何故か皆で協力して大きなトランプタワーを作ることになった。

協力、失敗、挫折、叱咤、激励、再起、皆の心を1つにし、そしてやがて完成の時を迎える。

155枚のトランプを使ったタワー。それは10段のタワーでしかないのだが、彼女達は満足していた。何度も失敗し、時には泣きそうになりながらもやり遂げた作品だ。普段恐れていた相手と協力し、対等に語り合いながら作り上げたのだ。感慨も一入だろう。

気付けば作り始めてからかなりの時間が経っており、いつの間にか文にはたて、椛といった天狗の3人も妖精メイド達と共に集まってきていた。文とはたての2人は自前のカメラで写真を撮りまくっている。バシャバシャという音とフラッシュが少々鬱陶しい。

「いやー、中々立派なトランプタワーですねー!!　私はこういう細かい作業って苦手な

ので尊敬しちゃいますよー!!」
「ああ、ありがとう。だからあまりこっちに近付くな羽根を動かすな風を起こすな殺すぞ貴様ァッ!!」
大妖精達にとって「ぎゃおー!!」と文に威嚇するレミリアの姿は、今までならば恐怖の対象になっただろう。しかし、今は可愛らしいものに見える。タワーを崩さないように魔力も放出していないし、何とも単純なことだが、これもトランプタワーによって親交が深まったおかげだろう。
「ふう、まったく……それで、どうかしたのか？　私達に何か用でもあるのか？」
「ああ、そうでした。横島さん達がお帰りですよ。何やらお客さん達もいるようです」
「客……？」
文の言う客にレミリアは首を傾げる。横島が向かったのは人里の慧音の家だ。ならばその客とは慧音のことだろうが、お客さん〝達〟とはどういうことだろうか。人里で誰か拾ってきたのだろうか。
そうやってレミリアが考えていると、複数人の足音が近付いてくるのが聞こえた。これが横島達だとすれば、明らかに数が多い。倍の人数はいるだろう。パーティでもないのに紅魔館に来たがるような人物が多く存在するとは思えないが……。
やがて足音は部屋の前で止まり、ドアがノックされる。優しくも少々強いノックが4

回。これは横島のノックだ。
「入りなさい」
「失礼しまーす。お嬢様、ただいま帰りましたー」
ドアを開けながらの挨拶に執事らしさは皆無。だがレミリアは横島のこの奔放さを気に入っているので咎めることはない。代わりについてきた妖精メイドに「駄目なんですよー」と怒られているのだが。
「お兄さんだー！」
部屋に入ってきた横島に、いの一番にチルノが駆け寄っていく。チルノは横島によく懐いており、横島が帰ってきたときにはこうなることは皆も予想がついていた。しかし、彼が帰ってくるタイミングと、チルノの位置は予想しようもなかった。
チルノがいた位置はトランプタワーのすぐ隣。チルノが駆け出したことによって発生した振動が、トランプタワーを揺らす。他の皆が気付いた時にはもう遅い。哀れ、トランプタワーはバサバサと崩れていってしまったのだ。
「あああぁーーーーーー!?」
「た、タワーが!?」
絶望の叫びを上げる大妖精とリグル。その惨状を知り、ルーミアとミスティアも、そしてレミリアまでもが頭を抱えて叫びを上げる。

「ウェ!?　何!?　何がどうしたの!!?」
「え、あ、あーーっ!?　皆で作ったタワーが!!?」
　突然の事態に横島は当然ついていけず、皆の様子から何か尋常でない何かが起こったのだとしか判断することが出来ない。よく見れば、部屋の中央付近に大量のトランプが散らばっているのが見える。どうやらこれが関係しているようだ。
「チルノちゃん!!　せっかくみんなで作ったのに、どうして崩しちゃうのー!!?」
「ご、ごめんなさーい!!」
　大妖精がチルノに詰め寄り、涙目でポカポカとチルノを叩く。チルノにとって大妖精にそんなことをされても痛みはほとんどないのだが、それよりも心が痛かった。皆で頑張って、協力して作り上げたタワーを自分が崩してしまったのだ。チルノの胸が痛みを上げる。チルノはしょんぼりとした様子でリグル達の元へ行き、精一杯頭を下げる。そんなチルノに声を掛けるのはレミリアだ。
「……いや、これは仕方ないさ」
　見れば、レミリアは天井を見上げ、照明の眩い光を一心に見つめている。それに何の意味があるのかは不明だが、何となく口を出しにくい雰囲気だ。
「形有る物はいずれ壊れる……。こんな部屋の真ん中にトランプタワーを立てたのも原因の1つだし、そもそも後で崩さなければならなかったんだ。ただ、それが早まっただ

けのことなんだよ……」

　何だかとても深刻な雰囲気を撒き散らしているが、崩れたのはトランプタワーだ。確かに皆で作り上げたものが崩れたのだからレミリア達が真剣に話すのは分かるのだが、それを傍観している横島からすれば「何でこんなに真剣な雰囲気なんだろう」と戸惑ってしまう。

　横島は散らばっているトランプに眼をやり、よしと呟いた。

「レミリアさん……!!」

「レミリア……!!」

「お前達……!!」

　いい感じに盛り上がっているレミリアとチルノ達。今は皆がレミリアに抱きつき、まるで青春ドラマのワンシーンを髣髴とさせる場面を繰り広げている。文もはたて新たなネタとシャッターを切り、その美しくも熱い一瞬を切り取っている。

　そこに掛けられるのは、横島の声。

「お嬢様ー、チルノちゃーん?」

「ん、どうした横し――――ッ!?」

　横島の声に導かれ、視線を彼へと向ければあら不思議。彼の傍らには、先程崩れ去ったはずのトランプタワーの姿が!!　しかも、レミリア達が作ったものよりも数段綺麗に

なって!!

「いやー、何かよく分かんないすけど、トランプタワーが崩れたのがケンカの原因なんすよね？　とりあえず作り直してみたんすけど……」

横島の言葉にレミリア達は一言も発さない。それどころか膝を着き、打ちひしがれるように床に手を着く。

「私達の……数時間の結晶を……」

「ほんの数分で……」

「ありえない器用さなのかー……」

「ど、どうしたの!?　何で落ち込んでんの!?」

良かれと思って行動した結果、横島はみんなを落ち込ませてしまうことになったのでした。これにははたても苦笑いをし、椛は大きく溜め息を吐いて首を振る。文だけは変わらずにシャッターを切りまくり、この混沌とした空間を写真に収めまくるのだった。

「……もう入ってもいいのかな？」

「多分大丈夫だと思うけど……」

ちなみに、部屋の外では展開にまるでついていけていない妹紅達がずっと待機していた。1度入室するタイミングを失ってしまったせいか、未だに入る決心がつかない。今入っても、何だか面倒なことに巻き込まれてしまいそうだからだ。

夕飯まであと少し。それまでに皆が元気を取り戻すことを願う。

楽しかった夕飯も終わり、チルノ達は阿求やフランも誘い、揃って風呂へと突撃していった。その際にチルノが「お兄さんも一緒に入ろう!!」と言ったことでちょっとした騒ぎになったのだが、それは置いておく。

赤蛮奇はやたらと気合を入れて影狼と共にレミリアの元へと赴き、メイドとして働く旨を伝えに行っている。その際何としても生きるようにと「死ぬには良い日だ」と呟いていたのが印象的だ。死ぬには良い日など、死ぬまでない。これは必ず生き残るという気概を表した言葉なのだ。……だが傍から見ればそれはもうそのままの意味にしか聞こえない言葉であり、彼女が放つ悲壮感や気負いといったものが死を前に覚悟を決めた戦士のように見え、妖精メイド達は敬礼で赤蛮奇達を見送った。もしかしたら今頃夜空と流れ星を背景に、いい笑顔を浮かべているのかもしれない。

そんな賑やかな紅魔館の中で不意に1人になってしまった慧音は、丁度良いとばかりに紫と永琳がよくお茶をしているゲストルームを訪れた。彼女が妹紅の誘いに乗ったのも紫達と話すことが目的であり、その内容は横島についてだ。

あの時、元の世界に関する話が出た時の彼の様子はどことなくおかしかった。それに

ついての報告をする為に、慧音は紅魔館へと訪れたのだ。
ゲストルームの前に立った慧音は、ゆっくりとノックをする。ややあって中から返事があり、慧音は静かに部屋の中へと入る。
「失礼する……ん、紫だけか。永琳はいないのか？」
「別に彼女といつも一緒にいるわけではないのだけどね。……永琳に用なの？　呼んできましょうか？」
「いや、それには及ばないさ。確かに永琳にも聞いてほしいことではあるが、一先ずは大丈夫だと思う」
慧音の言葉に納得すると、紫は慧音にソファを勧め、スキマから紅茶のポットを取り出し、2人分のカップへと注ぐ。慧音は差し出されたカップを受け取り、一口飲んで気分を落ち着けてから本題へと入った。
「……本当に、横島君がそんなことを？」
「ああ。私も驚いたよ。以前は帰りたそうにしていたのに、あんなことを言い出したからな」
慧音は横島が言ったことをそのまま紫へと語った。〝向こうにはもう戻れない〟〝こっちで幸せになれるように〟……。
紫はそれを聞き、深く考え込む。横島は元の世界に帰りたがっていた。確かにこちら

の世界に来てかなりの時間が経過しているし、妹紅やフランという恋人達が出来た。それは確かに心変わりの理由になりえるだろうが、いくら何でも急過ぎる。何より、横島はつい先日まで元の世界に帰るという意思を持っていたのだ。

それは絶対に帰りたいというわけではなかった。帰ることに積極的でなかったことは確かだ。それでも、帰るという意思はずっと持っていたのだ。では、一体何故急に彼が心変わりを起こしたのか。

「……」

横島が心変わりをする理由を挙げては消し挙げては消し、何度もそれを繰り返し。いつしか彼女の脳裏にはあの時の横島の顔が浮かんでいた。

はたして、あれが今回の理由に繋がるのだろうか？　確かにあの時の表情にはそれだけの暗さが伴っていたのは確かだ。しかし、何かもっと別の事柄が係わっているようにも思える。

「横島君……」

紫は小さな唇を震わせ、幸せを願っている少年の名を呟いた。あの時の彼のことを、思い浮かべながら。

――蓬莱人は、子供を作れますか……？

その問いの答えは否だ。蓬莱人は子供を作ることは出来ない。その答えを聞いた横島の脇腹（トラウマ）の傷からは鮮血が溢れ、双眸からは涙が零れ落ちる。

静かに嗚咽する横島の姿に、紫も永琳も悲しげに顔を歪める。だが、それもほんの一瞬の間だけ。次の瞬間には、2人の顔は驚愕に染まった。

横島は泣いている。どうしようもない悲しみの中に沈み、止め処なく涙を流し続ける。

――自分では、ルシオラをどうやっても幸せにすることは出来ない。子供として愛してやることも出来ない。

その事実に、彼の心は軋みを上げる。それこそ、自分が死ぬまでルシオラを幸せにしてやることが出来ないのだ。

横島はどこまでも悲しくて悲しくて、涙を流す。どこまでも悲しそうに、苦しそうに……。

――――しかし、どこまでも嬉しそうに。
横島は心の底から悲しくて、嬉しくて、狂笑(わら)っていたのだ。
死が２人を別つまで、ルシオラは横島の中で共に生き続ける。
それは、永遠を生きる蓬莱人にとっては――――。

第四十九話
『笑顔』
～了～

第五十話

これは横島達が紅魔館に帰宅し、皆で夕飯を食べていた時の会話である。

「横島は明日はどうするんだ?」

それは横島の隣に座っている妹紅の質問だ。彼女は横島の服の裾を引き、上目遣いで横島を見ている。それは輝夜から教わった仕草であり、最近の妹紅は特に抵抗もなく教わった通りに実行している。

横島は妹紅の仕草に煩悩を刺激されながらも明日の予定について考えを巡らせる。

「明日かー……特に予定もないし、寝て過ごすとかだろうか。……じっとしてるのは苦手なんだけどなー」

こんなことを言っている横島だが、彼は永琳からなるべく安静にしているように言われている。だと言うのに彼は美鈴と中国拳法の鍛錬に勤しみ、妖夢に剣術を教わっている。最早永琳も溜め息と共に諦め気味だが、横島が蓬莱人と化しているため問題がないと言えばないのが悩みどころだろう。

「……幻想郷も知らないところが多いし、探検しに行くのも有りかな」

「探検？」

探検、というワードに横島の対面に座っているフランがぴくりと反応する。

「ほら、俺って基本紅魔館からあまり出ないし、知ってる場所も霧の湖と人里と迷いの竹林、それから博麗神社くらいだからさ。他の所にも行ってみたいんだよ」

横島の言葉にフランは納得する。言われてみればそうだった。彼はレミリアの執事であり、レミリアが外出をしないのであれば彼もまた外出することはない。外出したとしてもそれは買い物くらいのものだ。

最近は大規模な異変やごたごたが続いたせいでレミリアも引きこもり気味だ。そろそろ外に出たほうがいいだろう。

「ねえ、お兄様。私もついて行っちゃダメかなぁ？」

気が付けばフランはそう声に出していた。彼女は今まで何百年も引きこもっていた。当然幻想郷にどのような場所があるかなどまるで把握していない。人里や博麗神社などは知っているが、それでも精々が横島と同程度の知識だ。フランが幻想郷を探検したいと思っても不思議ではない。

何より一緒に出かければそれはデートとなるのだ。それを思ってかフランの眼はキラキラと輝いている。

「んじゃ一緒に行こうか？」

「うんっ！」

横島の言葉にフランは元気良く頷く。実に嬉しそうな笑顔だ。

「あ、でも私達だけじゃただ単に道に迷うだけかも……」

「あー、確かに……」

2人の表情は少々曇る。幻想郷は狭いようで広い。もう大結界の内部は空間が歪んでいるんじゃないかと思ってしまうくらい様々な場所が存在している。しかもそれぞれが結構な規模を有しているのだから驚きだ。もし道に迷ってしまったら1日で帰ってこれない可能性もある。……まあ、2人は空を飛べるので無用な心配なのかも知れないが。

「……それなら、あたいが色んな場所を案内しよっか？」

「え？」

「ん？」

横島達に掛けられた声の方を見れば、チルノがお箸を咥えながら2人を見ていた。隣に座っている大妖精から「お行儀が悪いよチルノちゃん」と怒られているのが苦笑を誘う。

「チルノって幻想郷に詳しいのか？」

「うん。しょっちゅう色んな所に遊びに行ってるし」

妖精とは好奇心が旺盛である。いつもふわふわと空を飛び、色々な場所へ顔を出しては悪戯をする。チルノもご多分に漏れず、様々な場所へと赴いている。

――そういえばあいつらも色んな場所に悪戯をしに行ってるって聞いたことがあるな。

横島が思い浮かべたのは過去に紅魔館に忍び込んで悪戯三昧をした妖精3人組だ。後で咲夜から聞いたことだが、彼女達は妖精の中では割と有名な存在であるそうで、〝三月精〟や〝光の三妖精〟というあだ名もついているらしい。

「元気にしてんのかなー、あいつら」

「あいつら？」

「ああ、いや。こっちの話。……んで、どうするフランちゃん？　俺としては案内してくれる子がいると頼もしいんだけど……」

フランに確認を取る横島は少々おどおどとしている。横島も今回のことをデートと認識しているのか、それに同行者を増やすことに躊躇いを感じているのかもしれない。

「うん。チルノがいてくれると私も頼もしいから、お願い出来るかな？」

フランはこれを笑顔で了承した。横島はほっと安堵の息を吐くが、フランは元々自分達だけでは道に迷うと考えていたので、同行者が増えることには忌避感はなかったようだ。

「……いいの、フラン？」
「うん。よろしくね、チルノ」
自分で言い出したことだが、チルノはフランに対して少々申し訳なさそうな表情をしていた。2人の関係を聞いていたチルノからすれば、自分はお邪魔虫であることは理解出来る。しかし、それでも彼女は自分から名乗りを上げたのだ。どうにも最近、チルノは横島に対する自分の行動を制御することが出来ていない。自分で言い出したことだが、それでもチルノはフランに対して罪悪感を抱いた。本人は、それが如何なる感情なのかを理解はしてはいないが。
「……」
「チルノちゃん……」
このままではいけないとチルノは雰囲気を変えようとする。暗い雰囲気は自分には似合わない。楽しいことを考え、そして楽しい場所に案内しようと考えを巡らせる。
大妖精は、そんなチルノの変化を見て心配になる。大妖精はチルノが抱いているであろう感情をそれとなく理解している。彼のために不安定になるチルノを見て歯がゆい思いを抱いているのも事実だが、それ以上に彼女の力になれない自分に対して無力感を抱いている。
一緒についていってチルノの傍に居たいのだが……しかし、大妖精は横島とフランの

邪魔をしていいものかと考える。大妖精もチルノやリグル達と共に横島とフラン達の関係を聞き及んでいる。始めに聞いた時は横島のどこに3人もの女の子を囲う甲斐性が存在するのかと思ったものだが、よくよく考えてみると甲斐性は充分と言えた。

毎日朝から晩まで働き、自己鍛錬を絶やさず、過酷な修行も諦めずに乗り越えていく。社交性も高いし収入もかなりのものだ。こうして考えると横島は中々の優良物件と言えるが、それでも大妖精は横島に対してあまり心を開けないでいる。

「……」

フランとチルノが案内してくれる場所について話し合っている横島を見て、大妖精は少し機嫌が悪くなる。

チルノを1番理解しているのは自分である。チルノの1番の親友は自分である。その自負が少々崩れてきている。横島と一緒にいるチルノを見ていると、何故か堪らなく不安になるのだ。

妖精は人の感情に敏感な者が多い。そして、大妖精は他の妖精達よりもその力が強かった。だからこそチルノが横島に抱いているとある感情に気付けたのだ。更に言えば、その力が横島をいまいち好意的に見れない原因でもある。

横島から感じる邪な感情……煩悩もそうであるが、何より彼はフラン達にも壁を作っているふしがある。それが大妖精には気がかりだった。

――フランちゃんの邪魔はしたくないけど……チルノちゃんを横島さんに任せるのも不安だし……。

やっぱり自分もついていこうかな？　と考える大妖精。

「それで、チルノはどんな所に案内してくれるんだ？」

「えっとね……」

横島とチルノの会話に耳を傾ける。

「――――お花畑!!」

――やっぱりチルノちゃんは横島さんにお任せしようっと！

大妖精は遠い眼差しでそう思った。

第五十話

『太陽の畑』

「んで？　その〝お花畑〟っていうのはどんな所なんだ？」
　翌日の朝、横島が日課の鍛錬を終えて汗を流した後、横島は朝食の席でチルノにそう尋ねた。
「んーと……綺麗なお花がいっぱい!!」
「うん、そうだな。何てったってお花畑だもんな。それで、他に何か特徴はないのか？」
「えーと……色んな種類のお花がいっぱい!!」
「うん、そうか。さすがお花畑ってだけのことはあるな。行ってからのお楽しみってことか？」
　チルノは何とか横島の質問に答えたかったのだが、どうにも上手くはいかなかった様子。時々鋭い指摘を行うチルノだが、こういった場面は妖精らしいと言える。
「それで……妹紅達は来ないのか？」
「私はそろそろ炭焼きの仕事をしないといけないんだよ。こう見えて私の炭って評判が良いからさ、今の時期からが稼ぎ時なんだよね」
「私も紅魔館の門番として遊んでばかりはいられませんし……」
　横島は妹紅達の言葉に納得する。確かに近頃は秋も深まってきて肌寒く感じる事が多くなってきた。紅魔館のように照明や冷暖房設備等が近代化されていない人里では炭は貴重な資源なのだろう。それにしても先程から視界の隅で赤い飛沫が飛んでいる

気がする。銀色のナイフが横島の愛する少女にブッ刺さっているような気がするが、そんなものは気のせいだ。彼の耳には美鈴の断末魔など聞こえていない。断じて聞こえていないのだ。

「……リグル達はどうする？」

「……勘弁してください」

一応リグル達にも確認を取ってみる。彼女達は何故かガタガタと震えており、ルーミアにいたっては白目を向いている。聞く所によると、以前彼女達は太陽の畑に棲んでいるとされる妖怪の機嫌を損ね、それはもう筆舌に尽くしがたい恐怖を味わったのだそうだ。リグルとミスティア、そして大妖精は直接的な被害に遭ってはいない様だが、チルノとルーミアに齎されたそれは傍から見ていても大分に怖かったらしい。……何故かチルノは大して懲りずに何度も遊びに行っているみたいだが。

「よしよし。……んじゃ、一緒に行くのはチルノと大妖精の2人か」

「ああ……癒されるのかー……」

「触角が痺れそう……」

「心が安らいでいきますー……」

横島は同行者の確認をしつつ、ルーミア達の頭を撫でる。毎度お馴染みのヒーリングなでなでだ。洗練されてきた彼のヒーリングは、妖精どころか妖怪までも虜にしてい

く。皆一様に蕩けたような表情だ。
「ふむ……――ッ!!」
　一連の流れを写真に収めていた文は数秒何か思考を巡らせると〝ピコン！〟と彼女の頭の上に電球が現れて光を放つ。何かを思いついたようだ。
「横島さん、はたても一緒につれていってください」
「ん、はたてちゃんも？」
「ちょっ、あ、文ッ!?」
「いやー、はたては引きこもりがちですし、幻想郷の事もあまり知りませんので彼女もついでに連れて行ってくだされば……」
　昨日も紅魔館に泊まった天狗3人の内、文がはたての背中をずいと押す。席は多少離れているのだが、それでも文の声はよく通るので、横島にも問題なく聞こえている。
　この突然の申し出に慌てたのははたてだ。文の真意を問うべく、ひそひそと小さな声で彼女を問いただす。
「ちょっと文、どういうつもりなの!?」
「どういうつもりも何も、これは貴女を思ってのことなの。いい？　横島さんの性格からしてさっきみたいなことを言っておけば断ることはまずないと言える。貴女が色んな場所に行けばそれだけ見識が広がるし、写真も撮っておけば撮影技術も良くなる。何

よりこうして私が無理にでも言い出さなきゃなきゃ貴女は行動しようとしないでしょう？」

「う、うう……？」

「いい、はたて。こう見えて私は貴女の恋路を応援しているの。何だかんだ言っても私達は友達だしね。だからこうやって少しずつでも距離を詰めていかないと。記念撮影って言えば横島さんとの写真だって撮れるしね」

「あ、文……!!」

はたては文の言葉に感動を表す。まさか彼女がそこまで自分のことを考えてくれているとは思っていなかったのだろう。感動のあまり涙さえ見せている。

「あ、あの……！　良ければ、私も連れて行ってほしいんですけど……!!」

文に背中を押されたはたては横島達に1歩踏み込んでいく。フランと横島は数瞬眼を合わせた後、同時に頷いた。それからのはたての浮かれっぷりは中々に可愛らしいものだった。美少女の同行者が増え、横島もご満悦である。

さて、そんな横島達を写真に収める文を半目で睨む者が1人。天狗3人娘の最後の1人、椛だ。

椛は熱いお茶を一啜りして一息吐くと、確信を持った声で文に問い掛けた。

「……それで、一体どういう魂胆なんですか、文さん？」

「フフフ……。こうやってはたてを横島さんに釘付けにしておけば、はたては記事を書くよりもまず横島さんに集中する。その間に私が今まで取材してきたとっておきのネタで新聞を書き、それを発行!!　私の新聞は部数が伸びて念願のランキングに入り、はたては男にかまけて新聞の部数削減!!　フフフ……!!　私の策略は完璧……!!　ざまあみなさいはたて……!!　女として負けたとしても、新聞記者としては負けないわ……!!」

椛は文の言葉を聞かなかったことにした。何だか文の目元が水滴で光っているような気がするし、何だかんだでやはりはたてのことを考えているような気がするからだ。

――まあ、出来るなら実ってほしいですしねぇ。

椛はお茶を啜りつつ、横島とはたてを見つめる。気のせいか、はたては椛が知っているよりも綺麗になっているような気がする。相手が横島というのが少々引っかかるが、それでもはたての恋は応援したい。友人の欲目もあるだろうが、はたては椛の眼からしても綺麗なのだ。どうか幸せになってもらいたい。

椛の眼は想像の未来を幻視する。横島と、それを囲む少女達。その中で幸せそうに笑っているはたての姿を。

故に気付けなかった。視界の中、どこか遠くを見るかのように虚ろな眼で横島とフラン、はたてを見る少女がいることに。

〝お花畑〟――太陽の畑を目指し、横島達は空を飛んでいる。先頭には案内役のチルノ、続いて大妖精、横島、フラン、はたての順だ。どうやら大妖精は保身よりもチルノを取ったらしい。

チルノは時折振り返ったりなどして横島達との会話を楽しみながら迷いなく空を行く。妖精は馬鹿であると言われているが、こうしている分にはそうは見えない。色々とややこしい幻想郷を案内出来る分、実は頭が良いのではないかとさえ思えてくる。

「フランちゃん、日差しは大丈夫か？」

「うん。大丈夫だよ、ただお兄様」

フランは吸血鬼であり、太陽の光には弱い。彼女は横島の身体の影に入り、その上で日傘を差してもらって太陽光を防いでいる。欲を言えば天候は曇りが良かったのだが、生憎とよく晴れている。快晴というほどでもないが、それでもその日差しは中々に強い。こうなってくると早く目的地に着きたいところだが、その目的地も太陽の畑というのは皮肉なものだ。

「……あたいの氷で冷やそうか？」

「うーん、フランちゃんの場合は暑がってるんじゃなくて日差しそのものが毒だからな。

身体を冷やすのはちょっと違うかな」

「……そっかー」

チルノが心配そうにフランを見る。フランは自分を心配してくれたことが嬉しかったのか、日差しも気にせずにチルノの元へと文字通り飛びついていく。突然のことにバランスを崩すチルノだが、「おりゃー！」と気合で体勢を立て直し、さりげなく自分を上にしてフランを太陽光からカバーする。

それを見た大妖精が「私もー！」と突っ込んでいくが、行動とは裏腹に頭の中では冷静に考え込んでいた。当然、チルノのことである。

――チルノちゃん……。

不安は消えない。フランとじゃれ合っているチルノは一見いつも通りの何でもないチルノのようなのだが、大妖精の勘は、何か違和感を訴えかけていた。それが何かは分からない。分からないのだが……このままでは、いけないような気がする。

「あ、もうすぐお花畑に到着だよー！」

チルノはいつの間にか自分達に日傘を差してくれていた横島と、写真を撮っていたはたてにそう告げる。一行は徐々に高度を下げていき、やがて地面に降り立ったときには眼前に視界一杯の花の絨毯が広がっていた。

「これは……」

「すごーいっ!!」
「うわー、実物は写真よりももっと綺麗……」
それは、太陽の畑という名に相応しい光景だった。視界に広がる花畑の大部分は向日葵で埋まっており、その力強い姿は地上に無数の太陽が輝いているかのような錯覚を齎す。
視界を下に向ければ、様々な彩を持った無数の花が咲き誇り、見る者を圧倒する。しかし、何よりも凄いのは花が持つ生命力だ。
「すげーな……。こうして見てるだけで、この花達の生命力が感じられる。強いっつーか、温かいっつーか……この土地だけ別の世界みたいだ」
「うん……。何か、お花畑に入るのを躊躇っちゃうくらい」
「えーと、パノラマパノラマ……」
「みんな入んないの？」
横島はしゃがんで花と、土地が持つ生命力の高さに驚き、フランは自分が入っていくとこの花畑を壊してしまいそうな感覚を抱いてしまい、触れることすらも躊躇してしまう。はたても生で見る太陽の畑に感動を覚えたのか、衝動のままに写真を撮る。チルノはそんな皆を不思議そうに眺めているが。
「――あらあら、随分と珍しいお客様達ね」

横島達の背後から涼やかな声が掛けられる。声の質からしてまだ大人になりきれていない少女のもののようだ。

横島達は背後を振り返り、声の主を視界に収める。

「おお……!!」

「あっ!!」

「ひっ……」

横島はその少女の容姿に感嘆の声を上げ、チルノは知り合いである少女の姿に声を上げ、大妖精は拭い去れない恐怖の具現を目の当たりにして小さな悲鳴を上げる。

「新顔が多いけれど、チルノのお友達かしら？　――――はじめまして。私は〝風見幽香（かざみゆうか）〟。……よろしくね？」

日傘を差した、少々癖のある緑のショートヘアに白いカッターシャツと赤いチェック柄のベスト、同じく赤いチェック柄のロングスカートを着用した、優しげな雰囲気の美少女がにっこりと微笑んでいた。

第五十話

『太陽の畑』

〉
了
〉

第五十一話

横島達の前に現れた風見幽香はにこやかに笑っている。
その綺麗な微笑みは彼女の実力を知っている大妖精やはたての警戒心すらも薄れさせるほどのものであり、彼女の恐怖に引きつっていた大妖精もその緊張を解していく。
……しかし、大妖精はそうなってしまうことに恐怖を感じた。
自らの感情を一瞬で変化させていくかのような幽香の放つ雰囲気に、大妖精はこれでもかと〝格〟の違いを見せ付けられる結果となったのだ。
「いやー、どーも。俺は横島忠夫。紅魔館で執事やってます。幽香さん、どうぞよろしく！」
「ええ、よろしく。……貴方が最近人里で噂になっている紅魔館の執事だったのね」
横島は大妖精が抱いている恐怖心に気付かず、幽香と握手などして挨拶を交わしている。幽香の力の程を察したのか、さん付けだ。幽香もそれに何か言うことはないようで、変わらずの笑顔だ。しかし、彼女の口からは少々……いや、かなり気になる単語が出てきた。

「え、噂……っすか？」

「あら、知らなかったのかしら？　人里では結構有名な話なのだけど……」

幽香は横島が噂の存在を知らなかったことが意外なようで、頬に手を当てて軽い驚きを顕にしている。

自分に関する噂。根がネガティブな横島は嫌な顔を浮かべてしまうが、一体どんな噂なのかと気になることもまた事実。恐る恐るではあるが、横島は幽香にどのような噂が広まっているのかを聞いてみることにする。

「……それで、一体どのような噂が広まっているので？」

「そうねぇ……。いくつかあるけれど、特に広まっているのが……」

腰が引け、何故か揉み手をしながら話を聞き出す横島に幽香は反応せず、ただ淡々と噂話を列挙していく。

曰く、紅魔館のメイド長の旦那さん。

曰く、メイド長との間に3人の子供がいる。

曰く、最近浮気現場を目撃した人がいる。

曰く、仲間と共に赤い髪の少女と黒髪の少女を誘拐した。

曰く、紅魔館は彼が支配するハーレムである……エトセトラエトセトラ。

「――こんな感じかしらね」

「なんてこったぁ……っ!!!」

これには横島も頭を抱えるしかない。

メイド長……咲夜の旦那様という噂は別に問題ない。（問題しかない）

咲夜との間に3人の子供……これは恐らく一号達のことだろう。買い物の時によく『親子みたいですね』と言われたことがある。これもそう大した問題ではない。（普通は大問題だと思われる）

問題は誘拐だとか紅魔館が自分のハーレムであるといった部分だ。

確かに赤蛮奇と影狼を紅魔館へと連れて行ったが、あれは本人達の意思だ。無理矢理など強制したわけではない。……慧音の家に連れて行く際、思い切り拉致と勘違いされるような状態だったことは覚えていない。

そして紅魔館について。確かに横島は紅魔館の主の妹、門番と恋仲になった。もう1人の恋人である妹紅も最近は紅魔館に入り浸っている。更に言えば輝夜ははっきりと横島に告げてはいないが嫁入りする気はあるようだし、てゐは言わずもがなだ。小悪魔は少々思い悩んでいるようだが横島への好意は消えていないし、付け加えれば彼を慕う妖精メイドはとても多い。ハーレムじゃないか。

「こんな噂が流れていると知られたら、俺はお嬢様とパチュリー様に殺されるのでは……!?」

「あら、それは大変ね」
　苦悩する横島を見る幽香の笑みは、先程よりもずっと深まっている。懊悩する彼の姿がお気に召したようだ。
「うわー、文に聞いてた通りの性格っぽいわね」
「ちょっと意地悪さんなのかな」
　２人の様子を眺めていたはたてとフランはそれぞれぽつりと感想を述べる。幽香のキャラクターを掴んできたようだ。
「あら、貴女達は……天狗と、フランちゃんね。久しぶり、フランちゃん」
「え!?」
　はたて達へと向き直った幽香が、親しげにフランへと声を掛ける。それはまるで旧知の間柄のようであり、フランは驚いてしまう。
「……あー、覚えてないかしら？　博麗神社での宴会で何回か顔を合わせてるはずなのだけれど」
「ご、ごごめんなさいっ!!　全然覚えてないですっ!!」
「あ、ああ、そう。そうなの……」
　ここに来て初めて幽香の笑顔が曇る。流石に全然覚えてないと言われるのはショックなようだ。謝るフランの頭を幽香は優しく撫でる。その時に浮かべた笑みはとても

慈愛に満ちており、それを見た横島は思わず見惚れてしまう。
「私は姫海棠はたて。あんたのことは文からあることないこと色々聞いてるわー。ま、文のことだからないことばっかなんでしょうけどね。……よろしく」
「ええ、よろしく。……あの天狗から何を聞いたのかは知らないけれど、もしかしたらないことばかりじゃないかもね……？」
「うわぁ……っ」
　中々にニコヤカに挨拶を交わすはたてと幽香だが、最後に見せた幽香の笑顔にはたては背筋をぶるりと震わせる。これは、確かにないことばかりではなさそうだ。
「あら……？」
「……っ!?」
　幽香が大人しく皆が挨拶を終えるのを待っていたチルノに眼を向けると、チルノの背後に隠れていた大妖精に気が付いた。彼女の表情は恐怖に歪んでおり、眼が合った瞬間更に身体を縮こまらせて必死に隠れようとする。その様子にチルノや横島達は何があったのかと首を傾げるばかりだが、思い当たる節がありまくる幽香は悲しげで、それでいて申し訳なさそうな表情を浮かべる。
「……何か、前にあったんすか、幽香さん？」
「……ええ。ちょっと、脅かしすぎたというか……」

大妖精の様子を見て、横島は非難がましい眼を向け、幽香はその視線から逃れるように眼を逸らす。

一体何があったのか。それは今からひと月以上前のこと――――。

第五十一話
『笑顔のままで』

「物凄く簡単に言えば、強く怒り過ぎちゃったのよ」

「ちゃんと説明してくださいよ」

どうにも幽香の歯切れが悪い。チラチラとチルノやフランを見ているし、もしかしたら嫌われたくないという思いがあるのかもしれない。……まあ、チルノは当事者であるので今更なのだが。

「……実は」

ようやく観念したのか、幽香は重い溜め息を吐いた後、ゆっくりと語りだした。

今からひと月以上前、この太陽の畑でチルノ・大妖精・ルーミア・リグル・ミスティアの5人は仲良く遊んでいた。この地は土や草花の生命力が強く、自然と関係の深い彼女達にとって、とても過ごしやすい土地でもある。この花畑は彼女達のお気に入りの場所だった。

この花畑の主であるという最強の妖怪、幽香も噂のように怖い人物ではなく、いつもにこにこと見守ってくれており、時々おやつとしてパンを焼いてくれていたりと、世話を焼いてくれていた。

しかし、事件が起こった。食いしん坊であるルーミアが、生命力に溢れる花……とりわけ〝太陽の畑〟の象徴である向日葵を摘み、食べだしたのだ。

これには大妖精達も、彼女達を眺めていた幽香も驚いたのだが、幽香はまだ怒らなかった。流石に何の許可もなく、新芽などの柔らかい時期ではなく、花や種子をつけた茎も葉も固くなった、食用に向かない時期の向日葵を食べ始めたのには眉を顰めたが、軽い注意で済ませるつもりだった。問題は、その後だ。

ルーミアは「不味い」と言い、花の半分程を失った向日葵をぽいと捨てたのだ。

全てを食べるのならば良い。幽香は花から採れる蜜や油など、それらが人間の生活に欠かせない物になってきていることを知っている。紫や永琳などから色々と花に関し

て聞いたこともある。植物から衣服を作れるとも聞いた。全てを使ってくれるのならと、幽香もそれについては割り切っているのだ。

しかし、花の半分程を食し、それを不味いからと捨てるのは見逃せなかった。

途端始まる恐怖劇場。ルーミアは地面から伸びた植物の蔦に拘束され、「ルーミアに何をするー!!」と突っかかったチルノは一瞬で蹴散らされ、暴力と言っても過言ではないほどの怒気を滲ませた幽香から、5人は説教を受けた。

幽香は優しいお姉さんである。しかし、普段優しい人を怒らせると、とても怖いのだ。

「……その後、チルノちゃんの頭が〝パァンッ〟ってなったり、ルーミアが捨てられた向日葵を残らず食べたりと、そんなことがありました……」

「おおう……」

ガタガタと震えながらの大妖精の補足に、何とも形容し難い空気が流れる。自業自得と言えることではあるが、流石に頭が〝パァンッ〟はやり過ぎだ。

「……何でチルノの頭を〝パァンッ〟させたんです?」

「……チルノが〝決闘だー!〟って向かってきて、それでイイのが入っちゃって……」

「あー……」

その時の光景が眼に浮かぶようだ。妖精は死んでも自然がある限りはすぐに復活出来るそうだ。恐らくだが、妖精という不滅の存在だったが故に、無意識に〝死んでも大

丈夫〃という認識を持っていたのかもしれない。
「まあ、チルノやルーミアも悪いっすけど、幽香さんもやりすぎは良くないっすね」
「ええ。反省しているわ……」
しょんぼりと項垂れる幽香を前に、横島は苦笑を浮かべる。段々と理解出来てきたが、どうやら幽香は子供好きらしい。それ故に大妖精やフランといった子達に怖がられるのはかなり堪えるようだ。ちらりと大妖精に眼を向ければ、幽香の落ち込む姿に驚いているのが見て取れる。
幽香は屈み、大妖精と視線を合わせる。大妖精は驚き身体を跳ねさせたものの、真っ直ぐに幽香の眼を見つめている。
「あの時は随分と怖がらせてしまって、ごめんなさいね。私も早くに謝りに行きたかったのだけど……貴女達の反応が、怖くて」
そう言って眼を伏せる幽香に、大妖精は〃自分達と同じだ〃と思う。
自分もルーミア達も、幽香にちゃんと謝ろうと思っていた。でも幽香のことを考えると怖くなり、ずるずると何も出来ないまま今まで時間が過ぎていったのだ。
お互いに足りなかったのは勇気ということだろう。幽香は勇気を出して歩み寄ってくれたのだ。ならば、次は自分の番だ。
「……いえ、私達も、あのまま謝りもせずに、すいませんでした。ずっと良くしてくれた

のに、1度怒られただけで幽香さんを避けるようになってしまって……今まで、ごめんなさい!!」

大妖精は幽香に頭を下げる。幽香は大妖精を抱き締め、「こちらこそ今までごめんなさい」と謝罪した。大妖精も強く幽香に抱きつく。ここに、2人の仲直りは成ったのである。

「……ちなみにだけど、チルノはそれからもここによく来てたんだっけ?」

「うん、そうだよ。幽香にあの時はごめんなさいってされた。幽香って優しいのに、変に怖がられるよねー」

チルノもチルノでどこかずれている。ちなみにだが、幻想郷の住人は妖精達の生死について、妖精自身も含めてとても無頓着だと言える。先も述べたが、自然がある限り不滅であるが故に、〝死んでも大丈夫〟という意識が根付いているのだ。

――ある意味妹紅や輝夜様と似たような考え方なのかね?

思いつくのは妹紅と輝夜の2人。今はもう見なくなっているが、2人は昔よく軽く殺し合ったりしていたらしい。今では想像もつかないが、自分達の生死感については似たようなものだろう。

――俺もいつか、そうなるのかな?

痛いのも苦しいのも大嫌いな横島。いつか、彼がそのような考えに至るのかは……あ

まり、想像は出来ない。
「今度はルーミア達とも仲直りしたいわね」
「はい。私もまたみんなと一緒にここに来たいです」
幽香達の方に視線を戻せば、そこには笑い合う2人の姿が。もう大丈夫だろう。横島としては機を見て仲直りのお手伝いをしたいところだ。
「変なことに巻き込んでごめんなさいね。お詫びと言ってはなんだけど……」
幽香はフランとはたてに対し、色とりどりの花で作り上げたネックレスをプレゼントした。フランには赤や黄色を中心に、はたてには青と紫を中心とした花輪は、色合いも鮮やかで2人をより可憐に綾なす。
「わあぁ……!!」
「い、良いの？　こんな綺麗なの貰っちゃってー……？」
フランは純粋に喜び、はたては遠慮しながらも花から眼を離そうとしない。2人に是と答える幽香の微笑みは初めて見た時よりもずっと魅力的だ。特に自分を怖がらないフランに対する幽香の安堵したような表情が、横島にとって1番魅力的だったのだが。
「フランとはたてだけずるいー!!　あたいにもー!!　大ちゃんにもー!!」
「ちょ、ちょっとチルノちゃん……!!」
「はいはい、分かってるわよ」

綺麗な花畑で戯れる美少女達。横島は思わずニヤニヤとしてしまう。それだけ眼前の光景が素晴らしいのだ。

やがてチルノがフランと大妖精を連れて花畑の奥へと突撃し、はたてがその様子を写真に収めるべく後を追う。幽香はそんな彼女達を柔らかな微笑みで見送り、横島と対面する。

「貴方もごめんなさいね。あの子達ばっかり構ってしまって」

「いやあ、そんな。お気になさらず。……子供、好きなんすね」

横島は幽香を見ていて思ったことをそのまま述べた。幽香は少々頬を赤らめさせたが、別に否定することでもない。ただ、初対面の人間に見抜かれたのは少しだけ恥ずかしいが。

「……丁度、あの子達ぐらいなのよ。純粋に、本当にただ純粋に花を綺麗だと思ってくれるのは。……勿論、例外もあるけれどね」

「あー、確かにそうっすね。俺も花は綺麗だと思いますけど、色々と余計なこと考えますしね」

特にナンパに使えるかな、とか。そう正直に述べる横島に幽香は苦笑を浮かべる。

「私は花が好きだから……純粋に花を好きでいてくれるあの子達が好きなのよ。繊維だ油だー……って、草花を必要としてくれるのもそれはそれで嬉しいのだけど……やっぱ

り、ね」

　そう言ってチルノ達を見つめる幽香の眼は、優しさに満ちている。横島にも彼女の言うことは理解出来る。純粋に、ただ純粋に花を好きでいられること。それは、簡単なことであるが、きっととても難しいことなのだ。特に、自分のような純粋とは言えないような男が思うには。

「……今度、紅魔館にも来てくださいよ」

「……紅魔館に？」

「ええ。美鈴……あ、紅魔館の門番をしている子なんですけど、その子が庭にある花畑の管理もしてましてね。そこがまた綺麗なんすよ。きっと、幽香さんも驚くと思いますよ？」

「へえ……それは楽しみね」

　横島の語りには、何か誇らしさが滲んでいるように思える。それほどまでに綺麗な花畑なのか、それとも何かしらの欲目があるのか。とにかく、花に関係することだ。幽香は俄然興味が湧いて来る。

「おーーーい!!　幽香ーーーー!!　お兄さーーーーん!!　2人もこっちで遊ぼうよーーーー!!」

　チルノが頭に花の冠を4つ程乗せて手を振っている。その微笑ましい様子に横島と

幽香は思わず顔を見合わせ、同時に噴き出した。

「おー、今行くよー！」

「ちょっと待ってなさい」

そうして2人は歩き出す。変わらず、笑顔を浮かべながら。

無意識なのだろう。チルノは以前よりもずっと強い冷気を放出している。その冷気から草花を守るため、幽香は絶えず自らの力を太陽の畑一帯に供給している。

それでも、変わらず。隣にいる男のように、気を張り続ける。変わらず、笑顔のままで。

第五十一話

『笑顔のままで』

～了～

第五十二話

さて、新たに幽香を含めた横島一行は現在珍しく徒歩で移動中である。理由はいたって簡単。場所が近いからだ。太陽の畑より更に東に行った場所にそれはある。

目的地目指し、一行はピクニック感覚で日差しの下を和やかに進む。

「それで、次の場所はどんなとこなんだ?」

自分よりも先を進む案内役のチルノに、横島はそう問い掛ける。それに対するチルノの答えはこうだ。

「えっとね、お花畑!」

「また?」

まさかの連続お花畑。確かに先程まで眺めていた太陽の畑は美しい場所だった。しかし、それは幽香が管理しているからであり、普通の〝お花畑〟ではどうしてもインパクトに欠けてしまう。それほどまでに美しい場所だったのだ。太陽の畑は。

「この方角で〝お花畑〟というと……あそこね」

日差し避けに差している傘をくるくると回しつつ、幽香はそう呟いた。それは横島の

耳にも当然届き、どんな場所なのかと問われる。何だかんだと言いつつも、やはり初めての場所は気になるもの。横島は意外と興味津々だった。

「教えてもいいのだけれど……やっぱり、実際に見てからじゃないとね。それまではおあずけ」

「ちぇー」

幽香の返しに横島は唇を尖らせて不満を顕にする。男がやっても可愛くも何ともない行為だが、はたてには効果があったようで、密かにカメラのシャッターを切っている。どうやら彼女はてゐと同じく盲目的な部分があるようで、横島の言動にはある特殊なフィルターが掛けられているらしい。恋する乙女視点（ビジョン）といったところか。

幽香はそんなはたての様子に苦笑を浮かべつつ、頭では別のことを考えている。

それは、チルノのことだ。ここ最近、チルノの力が日増しに強くなっている。最強を自称し、自分にすら突っかかってくるチルノを幽香は気に入っている。だからこそ、チルノの原因不明の急激なパワーアップに不安を抱いているのだ。

――――力を使いこなせていないっていうのが1番の問題よね。

チルノは自分のパワーアップに気付いていない。いや、もしかしたら気付いてはいるのかも知れないが、例えそうだったとしてもまるで意識をしていないかのように思える。はたして無自覚なのかどうか。これだけでも今後の対応は決まってくる。

これ以上干渉せずに放っておくのも限界があるだろう。今チルノの傍に居るのは幽香を含めて天狗に吸血鬼という大妖怪達。そして自然の力に強い大妖精と、異様に強大な力を持っている人間（？）横島だ。

もし横島が普通の人間だったならば、とうの昔に彼は酷い風邪を引いていただろう。チルノが放つ冷気は物理的にもそうだが、霊的にも作用する。今現在横島が平気なのは自らの身を強大な霊波で覆っているからであるし、チルノの力が霊的な方向へと集中し、尚且つ身体へと蓄えられていっているからだ。

そのエネルギーが解き放たれれば、ということを考えると、少々頭が痛くなってくる。それこそ本気の本気で対応せざるを得なくなるだろう。

――そういえば、あの異変辺りだったわね。チルノの力が強くなってきたのは。

幽香はその当時のことを思い起こす。始めは気のせいだと思っていた、チルノの力が増大していた時のことを。

それは近年でも稀に見る大異変、ゴキブリが大量に発生した異変と同時期だった――。

第五十二話
『名前の無い丘で』

「とうちゃーーーくっ!!」
その場に足を踏み入れたチルノが叫ぶ。その騒々しくも可愛らしい姿に皆の頬が緩むが、それも長くは続かない。〝お花畑〟の放つ雰囲気がそうさせるのだ。
「ここは……」
横島はそのお花畑に目を奪われる。一面を染める〝白〟と〝緑〟。咲いているのはどれも同じ花。――鈴蘭だ。
「この花は……確か、イヌノフグ――――」
「鈴蘭よ。……っていうか全然似てないでしょうが」
受けを狙ったのか、ちょっとしたボケをかまそうとする横島の肩を、幽香が『ガッ』と掴む。フラワーマスターとして草花の名前をネタにするのは許さないのだ。……寛容なのかそうじゃないのか、判断が難しい幽香さんなのであった。
「それにしても、このお花畑……何でしょう、何か、寂しい気がします」

ぽつりと、大妖精が感想を述べる。目の前に広がる一面の鈴蘭畑。それは目に賑やかさを齎してくれる――わけではなく。自然の化身であり、自然に対して鋭敏な感覚を持つ彼女の言葉は、この〝お花畑〟の特徴を見事に捉えていた。

「それは……そうでしょうね。何せここは、子供の間引きに使われていた所だもの」

「え……!?」

幽香が語る真実に、写真を撮っていたはたても視線を向ける。今、全員の注目は幽香に集まっていた。

この鈴蘭畑――名を〝無名の丘〟というのだが、この場所は博麗大結界が出来るよりも以前に、名付け前の名無しの幼子を鈴蘭の毒で安楽死させ、間引く場所だったのだ。地名の〝名無し〟とはそのことに因む。

幽香は不機嫌そうにこの名無しの丘の解説をする。彼女はこの場所に何とも言えない感情を抱いている。それもそうだろう。彼女の愛する花が、よりにもよって親が子を殺すことに使われているのだ。その家その家にはそれぞれの背景があるのだろうし、それほど興味を持っているとは言えないことでもあるのだが、せめて他の場所を使えというのが偽らざる本音である。

「……ただお兄様、間引きってなに?」

幽香が語った出来事に気持ちが沈む一行であるが、不意にフランが横島にそう質問し

た。最近は勉強も頑張っているフランだが、まだまだ彼女には知識が足りない。今回の質問もその為であるのだが、横島としては何とも答え辛いことだ。

「んー……元々は植物とかを育てるときに密集した状態から、ちょっとの苗だけを残して他のを全部抜いちまうことを言うんだ。それから、増えすぎた物を減らす意味で使われるようになって、んで生活苦から食い扶持を減らすために子供を殺したりと……そんなような意味だよ」

「……そう、なんだ」

横島の説明は決して上手いとは言えない。言えないのだが、フランには彼の言葉が嫌に心に響いた。傷を付けた、とも言える。

何も分からないような子供が、ここに連れてこられ、そして殺される。その子供は一体何を思ったのだろうか？　自分が何をされるか、気付いていたのだろうか？

……考え出すと恐ろしくなってくる。それでも、彼女の脳はそれを思考することを止めようとしない。自分とはまるで違う。境遇も何もかもがまるで合致しない。だというのに、フランは自分とその子供をどこか重ね合わせていた。

自らが望んだ事ではあるが、フランは強大過ぎる能力を持っていたために地下へと潜った。誰にも会わず、誰とも話さず、誰とも触れ合わず、そんな日々を何百年間も過ごし――――。

そんな半生を過ごしてきたからだろうか、フランは間引かれる子供にシンパシーを覚えたのだ。

フランは俯き、自らの身体を抱き締めるかのように身を竦ませる。胸に痛みが走り、目尻に雫が伝う。――だが、それもそこまで。

「――――ふえ？」

フランは横島に肩を抱かれ、その小さな身体をやや強引に引き寄せられた。横島は何でもないかのように澄ました顔をして鈴蘭を眺めているが、フランはただそれだけで心を暖かなもので満たされていくような心地よさを感じている。

いつもそうだ、とフランは思う。自分が沈み込みそうになる時、いつも大好きなお兄様が救い上げてくれる。自分を、真っ直ぐに見続けてくれる。

フランは横島の腰に甘えるように擦り寄り、きゅっと抱きついた。知らず頬が緩み、上気してくる。

そんな2人の様子をはたては羨ましがりつつ写真に収めて「いつか自分も……」などと妄想したり、大妖精が顔を真っ赤に染めて「ひゃ～～～」と妙な声を上げて食い入るように見つめ、幽香が微笑ましそうに見守りながらも「犯罪……？　犯罪なのかしら……？」と横島を疑惑の眼差しで見やる。

当の横島はフランを抱き寄せ、フランに抱きつかれたせいで日傘の露先の部分が身体

に刺さり、痛みやらむず痒さやらでどんどんと顔を歪めていっている。本当に締まらない男だ。

「……」

そんな中、チルノは横島とフランを静かに、ただじっと眺めていた。

ただ、じっと、眺めていた。

「――――ッ!?」

一瞬。ほんの一瞬だけ背筋に悪寒が走り、大妖精はチルノに振り返る。しかし、そこにいるのはいつも通りのチルノ。いや、いつも通りと言うわけではないのだ。何せチルノはフランを羨ましそうに眺めている。その拗ねたような目や尖らせた唇は、大妖精にチルノの新たな可愛らしさを発見させてくれた。

――――気のせい……だったのかな？

普段とそう変わらないチルノの様子に、大妖精はそう結論付ける。そうして、彼女はこの時のことをすぐに忘れてしまう。この時、大妖精がもう少しチルノに踏み込んでい

れば、もしかしたら後の異変は起こらなかったのかもしれないが……それは、もしもの話だ。

「それにしても、この鈴蘭畑の名前が名無しの丘で、その由来が子供の間引き……。それじゃあ駄目だ。そんなだからここの霊気が澱んでしまうんだ」

名前というのは大事なものである。狼を例に出すが、狼は大神に通じ、かつては日本人にとって畏敬の対象であった。そういった風に名は対象に意味を生じさせ、やがては意味に身を付けさせる。名も付けられていない子供を間引いたことから〝名無しの丘〟では、その土地が陰気を纏って当然だ。

「そんなわけで、この俺が名付け親（ゴッドファーザー）になってやろう」

「は……？」

いきなり何を言っているんだこの男は、という幽香の視線が横島を貫く。その視線に横島はちょっとだけ気持ち良くなりながらも、意気揚々と自らが考え出した名前を告げる。

「そうだな……。『まるで時が止まったかのように静かな丘！』という意味の……〝静寂の丘（サイレントヒル）〟はどう――――」

「止めなさい」
「えー？　でも名無しの丘よりは……」
「止めなさい」
「……はーい」

横島は幽香から発せられる強烈な威圧に負け、渋々ながらも承諾した。これでこの鈴蘭畑が血と錆の世界に変質することはなくなったのである。

「……なんか騒がしいわねー」

幽香がある意味幻想郷という世界を救った直後、鈴蘭畑に恐らくは幼い女の子と思しき声が響く。その声は何か不思議な力を持っているようで、鈴蘭の匂いが少し強くなったような気がしてくる。

周りには人の気配は無い。ガサガサと鈴蘭を掻き分けるような音はするが、その姿は見えない。一体何者の声なのか……。横島が念のためにより強大な霊力を練る中、幽香が皆よりも1歩前に踏み出し、その場にしゃがむ。

「久しぶりじゃないの、メディスン。元気にしてた？」
「あれ、幽香？　うわー、本当に久しぶりー！　私とスーさんは元気だよー！」

しゃがんだ幽香は誰か――メディスンという名の少女と思しき存在と会話を始める。しかし、横島達には一向にそのメディスンという少女の姿は見えない。一体どういうこ

となのか、と考えていると、幽香が何かを抱え、ゆっくりと立ち上がりながら横島達の方へと振り向いた。

「……それは……？」

幽香の腕の中、ウェーブのかかったショートボブの金の髪を持つ、人形と思われる人型が鎮座している。その人形は横島の言葉にむっとした表情を浮かべ、手を振り上げて抗議した。

「〝それ〟だなんて失礼しちゃう！　私はメディスン・メランコリー。こう見えても立派な妖怪なんだから！」

プンプン、とわざわざ口に出して怒り出すメディスンという名の妖怪。そう、彼女は人形の妖怪だったのだ。

「……付喪神か……！」

「え、つくもがみ……？」

横島は得心したように手を打ち鳴らし、フランは聞きなれない言葉に疑問符を浮かべる。こんな場合、すぐに始まるのは横島先生の授業である。

「簡単に言えば、物に魂が宿ったことで生まれた妖怪のことだな。元々物は１００年経てば命が宿るって言われてて、昔は９９年経ったら物を捨てることが多かったんだよ。それで『あと1年で命が得られたのに―！』って怒って妖怪化した……っていう昔話が

あるんだ。そっから物には色んな意思を込められ、その意思がこう……あれだな。何かいい感じに定着したら付喪神になるんだよ」

「……途中で説明が面倒臭くなったんだね」

「……帰ったらパチュリー様や永琳先生とかに詳しく聞いて」

もしかしたら面倒になったのではなく、どうしたら付喪神になるのかを知らないのかも知れない。

「それはまあ置いておいて。メディスン、か……そういえば聞いたことがある」

「何か知ってるの、お兄様？」

「ああ。確か永琳先生が言っていた。何かの花の毒素を得るために協力している妖怪がいるとか何とか……。そうか、それがメディスンで、花の毒素っていうのがこの鈴蘭の毒なわけか」

横島はうんうんと頷き、以前疑問に思っていた事柄の答えを得たことに謎の達成感を得る。メディスンは横島が出した名前に興味を引かれ、ずいと身を前に乗り出す。抱えてる幽香は大変だ。

「あなた、永琳の知り合いなの？」

「おう。永琳先生にはいつも世話になってなー」

共通する人物との交流があったせいか、２人の会話は予想以上に盛り上がった。永琳

との話だけでなく、お互いのこれまでの経緯を話し合った時には互いに同情の目で見たりもした。そして、最も予想外だったのはフランが積極的に会話に入っていることだった。

「メディスンはこの無名の丘からほとんど出たことがなかったんだよね？」

「うん、そうだよ。それで閻魔様に視野が狭過ぎるとか何も知らないとか言われちゃってねー。最近は見聞を広めるために色んな場所に遊びに行ったりしてるんだ」

「そうなんだー……」

フランがメディスンに抱いていた妙な親近感。その正体がそれだろう。自身もメディスンと同じように何も知らない。自分だけで完成された、自分以外の何も存在しない自分だけの世界。互いの背景は違うが、フランもそこに引きこもっていたのだ。

ここに来て、無名の丘という地名の由来を聞いて。間引きされた子供たちに抱いたシンパシー。そしてメディスンと出逢い、彼女に抱いたシンパシー。それは、もしかしたら違うものではなく、同種のものなのかもしれない。

メディスンはこの地で生まれた。この地に宿る意思が、この地に捨てられた人形に宿り、そして命を芽吹かせたのだ。それは、この地で死んだ子供たちの思いが1つとなり、人形に宿ったことで〝生きたい〟という当たり前の願いを叶えたのかもしれない。

メディスンへと抱く思いは、この地に眠る子供達へと向けた思いであり、そしてそれ

は自分にも向けた思いであるのだろう。おかしなことだが、フランはその滅茶苦茶な理論を正しいものなのだと確信している。

「えへへ。私とあなたって似てるのかも」

「んー？　まあ確かに似てるかもね。金髪だし、ちょっとウェーブもかかってるし」

「そういうことじゃないよー」

いつしかフランは自分から幽香の腕の中のメディスンの元へと歩み寄り、笑みを浮かべながら、楽しそうにおしゃべりをしていた。自分とよく似たお人形（の妖怪）と戯れるフランの姿は非常に絵になっており、これにははたても興奮しながらシャッターを切りまくる。メディスンを抱える幽香はまるで2人のお母さんだ。

「せめてお姉さんにしてくれないかしら？」

「何がっ？」

幽香の突然の奇行にフランとメディスンの2人はびくっと身体を震わせる。何でもない、と誤魔化す幽香の姿はある意味で微笑ましい。今まで抱いていた幽香のイメージとは異なる姿に、大妖精も何だか微笑みを浮かべてしまう。

「幽香さんもあんな風に慌てたりするんだねー」

「幽香にはあんまり似合わないかも……」

「そんなこと言っちゃ駄目だよ、チルノちゃん」

ちょっと失礼なことを言うチルノを窘め、大妖精はチルノも誘ってフラン達の輪の中に入っていく。チルノも人形サイズの妖怪は初めてなようで、珍しそうに色んな角度から観察を始める。おもむろにメディスンのスカートを捲った時には本人からわりと容赦の無いビンタを食らってしまったが、それ以外は特に何の問題も無く、和やかに時は過ぎていく。

「シャッターチャンスが一杯だわー……」

はたては写真を取りながら「はふぅ……」と何とも悩ましげな息を吐き、うっとりとシャッターを切り続ける。どうやら彼女は可愛い物好きのようで、小さな女の子がキャイキャイと戯れている姿に魅力を感じている。これではたてが男だったら通報ものだ。

「今日だけでアルバム1冊を埋めるような勢いだなー」

横島は写真を撮りまくるはたてに苦笑を浮かべ、彼女のすぐ隣へと移動する。

「おおー、よく撮れてるなー」

「ふぇっ!?」

はたてが気付けば横島の顔はすぐ隣。彼はカメラの画面を覗き込んでいるので、自然に顔同士が近くなるのだ。

「……あ、あぅ……!!」

途端、顔が真っ赤になるはたて。横島はそれに気付かず、思ったことをそのまま口に

する。
「後でみんなで記念写真でも撮ろうか」
「え……？」
「みんなで並んでさ、この無名の丘を背景に。なんかこう、賑やかな感じで。……あー、でも不謹慎かな。別の場所の方がいいか」
横島はそのまま「どこがいいかな？」と思案に耽る。なるほど。この地の背景を知った以上確かにここで写真を撮るのは些か不謹慎かもしれないが、記念写真というアイディアは良い。ここは名も無い子供達が眠る場所。これ以上騒がしくするのは可愛そうだろう。場所は追々決めるとして、記念写真は必ず撮ろう。
「……その時は」
その時は。自分が、この人の隣に立ってもいいよね……なんて。
はたてはその時を想像し、横島の横顔に見入る。フランや妹紅、美鈴がいる以上自分がどうなるかは分からない。それでも、そのくらいはしてもいいだろう。
彼のことをもっと知り、自分のことをもっと知ってもらって。それでも、自分の気持ちが変わらないのなら。その時こそは――。
そんな未来が、来るかもしれない。そんな未来を、生きていきたい。
「……ん？」

はたては横島の横顔を写真に撮る。いきなりのことに驚く横島だが、それでもはたてはもう一度シャッターを切る。

色んな表情を見せる彼。いつかはこんな風に写真だけでなく、ずっと隣で、自分の眼で見つめることが出来るようにと願いながら。

第五十二話
『名前の無い丘で』
～了～

第五十三話

メディスンと一緒に無名の丘から太陽の畑に帰って来た横島達一行は、横島の提案で記念写真を撮ることにした。メディスンは「ひまわりは嫌いなんだけどなー」と渋る様子を見せていたが、幽香に抱き上げられるとそんな事実は無かったかのように振舞いだす。

どうやら元が人形だったせいか、誰かに抱えられるのが好きなようだ。抱き上げたのが人間だったならば話は別だろうが、幽香は妖怪。その条件はクリアしている。

「はたてちゃんのカメラってセルフタイマーはついてたっけ?」

「え、えーっと、どうだったかなー?」

はたてはすぐ隣にいる横島を意識し過ぎており、自分のカメラの機能をちゃんと思い出せないでいる。ちなみにだが、はたてはセルフタイマーがどういった機能なのか理解していない。河童印のカメラなので一応搭載されてはいるのだが、彼女はそれを1度も起動させたことがないのである。

「仕方ないわね。私に任せなさいな」

幽香ははたての様子に苦笑を浮かべると、指をパチンと弾き、能力を行使する。幽香の能力は『花を操る程度の能力』である。地面から突如として何らかの植物の茎が伸び、はたてからカメラを拝借した。

「撮影はその子に任せるといいわ。私達は一箇所に集まりましょう」

「……何かすげえシュールな絵面だな」

はたてはいきなりカメラを奪われた驚きや植物がカメラを構えている姿に大口を開けて呆けており、その隣では横島がこちらに向かって手（？）を振る茎のシュールな姿に頬を引きつらせている。

横島とはたてはチルノやメディスンに急かされて急いで皆の所へと向かう。横島をセンターに隣にはフランとはたて、背にはチルノ、端に幽香と彼女に抱えられたメディスン、反対側に大妖精だ。

「しかし、写真を撮るタイミングはどうするんです？」

「そうね……こうしましょうか」

横島の問いに幽香は少々考えた後、茎を操作して空中に『3、2、1』と数字を書くことで解決した。……それは良かったのだが、やはりシュールな絵に変わりはなく、幽香とチルノ以外の皆の顔は引きつってしまい、何度も撮り直すことになった。他にも『1＋1＝？』や『はい、チーズ』などと書かれもしたのだが、最終的には横島が声を出

すことで決着したのだった。
「健気に動く茎が可愛かったのに……」
これは幽香の感想である。残念ながら賛同してくれる者は1人もいなかった。

「――さて、ここが太陽の畑で、ここが無名の丘、っと」
記念撮影の後、横島は〝妖精のメモ帳〟に何事かを書き始める。気になったチルノやフランが覗いてみれば、そこには横島が描く幻想郷の地図があった。記されているのは紅魔館に霧の湖、人里、迷いの竹林、そして太陽の畑と無名の丘だ。しかし地図と言ってもメモ帳のサイズがサイズなだけにごく簡単なものであったのだが、それでも2人には自分で地図を描ける横島が凄い技術を持っているという感想を抱いたようで、2人して凄い凄いと口々に横島を誉めそやす。
「あ、ここから北の方に行けば博麗神社があるよー」
「博麗神社……霊夢ちゃんのとこだな」
横島との会話にもようやく慣れてきたのか、はたては横から情報を提供する。はたてはフラン達よりは身長が高いとはいえ、それでもまだ背は低いほうだ。横島はそんな彼女にも地図を見やすいように腰を屈めている。こういう何気ない横島の優しさをはた

ては好ましく思う。
「そういえば、最近博麗神社が騒がしいって聞いたわね」
「そうなんすか？」
幽香がメディスンを抱えたまま話の輪に入る。どうやら人里で聞いた話のようだが、ここしばらくの間、博麗神社から爆音が響いたり、閃光が走ったりしているらしい。その様子から日々弾幕ごっこが行われているようなのだが、それを確かめに行った者は誰もいないそうだ。
ただでさえ博麗神社は妖怪の溜まり場と言われている。そんな場所に好き好んで赴く者はいないというわけだ。斯く言う幽香も「面倒」の一言で興味すら湧かなかったのだが。
「ふーん……行ってみるのもありかな？　霊夢ちゃんが何してるのか気になるし」
「そうだねー。またお腹空かせてなければいいけど……」
「私達は遠慮するけどね」
どうやらフランの中では霊夢＝空腹という図式が成り立っているらしい。博霊神社は色々な噂が蔓延っているせいで貧乏しているからあながち間違いなわけではないのだが、フランにまでもそう思われているとは何とも哀れなことである。
今回の移動に幽香とメディスンは参加せず、２人でのんびりと過ごすようだ。花畑の

中で戯れる少女と人形。何とも絵になりそうな組み合わせだ。
「うっし、次の目的地は決まったな！」
横島は地図に博麗神社を描き加え、北の空を見据える。チルノや他のメンバーにも異存は無く、各々が久しぶりに霊夢に会うことを楽しみにしている。
「んじゃ行くか――――人里へ!!」
「えええぇぇーーーーーーー!?!!」
横島はフェイントを披露した。一応ちゃんとした目的があるので問題は無いのだ。

第五十三話
『博麗神社で昼食を』

「――――ふっ!!」
眼前に広がる幾重もの弾幕。それらを紙一重で回避し、霊夢は萃香へと肉薄する。弾

幕による射撃戦とは思えないその距離、それは萃香の距離だ。
　萃香は霊夢の行動に獰猛な笑みを浮かべ、右拳を固く握り、音を置き去りにするかのような速度で繰り出した。真っ直ぐに突き出された拳から衝撃波が発生し、境内の木々を酷く揺らめかせる。しかし、それだけの一撃を放っていながら萃香の拳には何の手応えも無い。
「――――亜空穴!!」
「おおっとぉっ!!」
　萃香の直上から突如霊夢が急降下してくる。霊夢の必殺技の1つと言える、テレポートからの急降下キックだ。萃香はこの攻撃を読んでいたのか、余裕を持って受けきり、防御に使った腕を振るって霊夢を弾き飛ばし、距離を取る。
「ふう……最近は防がれてばかりね」
「そりゃあねぇ。毎日毎日こうして弾幕ごっこしてたら癖は覚えるよ。……近接戦はまだまだだしね」
　酒を呑みながらの萃香の言葉に、霊夢も否やはない。目の前の〝鬼〟は格闘のエキスパートと言える。力に頼った戦い方をしているように見えて、その実彼女は〝技〟に重きを置いているのだ。
「……それはそうと、今日はこれまでだね～」

「あー？　何でよ。私はまだまだ大丈夫だけど？」

本格的に酒を呑み始める萃香に霊夢は鼻息荒く抗議する。そろそろエンジンが温まってきたのだ。ここでお開きにされては堪ったものではない。

身体中から覇気を漲らせている霊夢だが、それも萃香が指差す方を見てしぼんでいってしまう。

「どうやら、お客さんみたいだしね」

萃香が指差す先の空、そこには大きな荷物を背負った少年と、幾人かの少女の姿があったからだ。

「あれ？　……横島さんとフランと……チルノに大妖精に……あと誰だっけ？」

「文の同僚のはたてだよ……」

接点が少ないとはいえ、完全に忘れ去られているとは可哀想なことだ。

霊夢と萃香がそのようなやり取りをしている間に横島達は博麗神社にまで辿り着き、その重そうな荷物とは対照的に軽やかに挨拶をする。

「おーっす、久しぶりー」

「おっすー」

右手を上げる横島に霊夢も右手を上げて返す。あまり会う機会がない２人であるが、こういう部分は似ているらしい。

それはともかく、霊夢は挨拶もそこそこに横島が背負っている荷物に眼が釘付けになる。以前横島達が博麗神社へとやって来た時は、それはもう大量の食料を持ってきてくれたものだ。萃香とも挨拶を交わしている横島をそわそわと身体を揺らしながら期待の眼差しで見つめてしまうのも致し方がない。

「霊夢が野獣の眼光をしてる……」

「何それかっこいい」

フランが霊夢をそう例えれば、チルノは霊夢をキラキラとした眼で見つめる。何とも平和な2人なのだが、そんな霊夢に見つめられるのは横島としても勘弁願いたいものだ。「大好き！　愛してる!!」というような視線ならばドンと来いと言えるが、「食い物(もん)だ！　食い物を寄越せ!!」という視線(ニラミ)では嬉しくも何ともない。

「アンタも大変だねえ」

呵呵と笑う萃香に文句を言いたくもなってくるが、何せ相手は酔っ払い。きっと箸が転んでもおかしいと笑うだろう。まともな返事など期待出来そうもない。

「なんだいなんだい。ちょっと見た目が幼いからって馬鹿にしてー。私の方がずっと年上のお姉さんなんだよー？」

「いや、そりゃそうなんだろーけどさー……」

「そんなことよりその大荷物は何なのかしら？」

互いに笑みを浮かべながらの軽口だったのだが、霊夢はいつまでも待っていられんと2人にずずいと迫りながらも横島に問う。その様子はさながら餌を前にお預けをされた犬が飼い主に迫る様に似ている。もし霊夢にしっぽが生えていれば、それはもうぶんぶんと振られていたことだろう。

「分かった分かった。……霊夢ちゃんの期待通り、食料だよ」

「横島さん大好き！　愛してる!!」

「なら食料が入ったリュックじゃなくて俺に抱きつくべきなんじゃないのか？」

霊夢は眼をキラキラと輝かせながら横島に愛を叫び、食料が入ったリュックに抱きつく。彼女の視界に入っているのはただただリュックのみ。横島など視界の隅にすら入っていない。アウトオブ眼中ここに極まれり。

「ん～、良いのかい？　聞いた所以前もいっぱい食料を持ってきてくれたみたいだけど、これだけの量だとお金もそれなりに使ってるんじゃ……？」

萃香はリュックに頬擦りしている霊夢をよそに、横島の裾を引きながら問い掛ける。萃香自身は困ったことはないのだが、人間には生活するに当たってどうしてもお金が必要である。巨大なリュックがいっぱいになるほどの食料を買い込めば、当然それなりの代金を支払わなければならない。

「ああ、いーのいーの。何かお店の人達が安くしてくれるんだよ。いつも人里で結構な

量を買ってるからだと思うけどな」

　紅魔館はいつも大量に物を買い、きちんと即金で払う。店側からしたら紅魔館はお得意様であり、かなりの上客だ。そんなこともあってか人里に存在する数々の商店は紅魔館関係者に感謝の念を抱いており、おまけとして色々と都合してくれたり、代金を安くしてくれたりするのだ。

「いや、そういうことじゃないんだけど……まあ、本人が良いって言ってるなら良いか……」

　しかし結局の所結構な額を支払っていることには変わりなく、そのお金に関する話を振った萃香としては苦笑いが浮かんでくる。最後には横島の言葉で一先ず納得しておく事にし、次の話題へと移す。

「それで、急にこんなとこまで何の用なの？　食料まで買い込んできて、何か霊夢に緊急の用事があったとか？」

　萃香は瓢箪を傾けながら質問をする。行儀はよろしくないが、彼女はわりといつもこんな感じだ。横島も以前のパーティで彼女のキャラクターは把握しているし、今更その程度のことでどうこう言うほど規律に正しくもない。

「うんにゃ。今チルノに幻想郷を案内してもらっててさ。そのついでに立ち寄っただけだよ。食料を買い込んだのは……この神社って貧乏してるしさ、買っといた方が良いだ

ろうと思って。あともうそろそろ昼も良い時間だし、こっちで昼食でも作らせてくれないかなーと思ってさ」

「誰が貧乏よ!!　……それはそうとお昼ごはんを作るなら私の分もよろしく!!」

貧乏呼ばわりを怒ったり昼食を要求したりと忙しいことだ。横島はそんな霊夢に苦笑を浮かべ、分かってると頷いた。横島は元よりそのつもりであり、頭の中では霊夢が好みそうな料理をいくつかピックアップしている。

「んじゃ、台所をお借りしますよっと……。ところで、霊夢ちゃんはさっぱりとこってり、どっちが好き?」

「こってり!!」

「んじゃ量は多め?　少なめ?」

「大盛りで!!」

「あいよー」

霊夢の脳内ではご馳走がいくつも舞っているのだろう。口端からよだれを垂らし、横島の質問に即答していく姿は中々に可愛い。意地汚いとも言えるが、食べたい盛りの貧乏少女にそれを言うのは酷だろう。

――霊夢ちゃんはがっつり派。運動の後というのも加わって、食欲は普段以上だろう。見た目にも実際にも満腹になるものと言えば、やはり肉。俺の好みもあるけど、

昼食は牛丼……それも焼肉牛丼で決まりだな。……俺は肉食わないけど!!!

横島は霊夢に台所まで案内された後すぐに調理を開始する。リュックから取り出したのは咲夜から貰った愛用の調理道具。そして巨大なブロック肉だ。これは決して高い肉ではない。だが、その威容を始めて見た霊夢には、その肉がとても高級な肉に見えた。

「……!!!」

それほどの肉を惜しげもなく使う横島の姿に、霊夢の中の横島の評価が急上昇していく。何とも現金な話だが、食べたい盛りの貧乏少女故仕方がないのである。

「ところで、人数分の丼ってある？」

「え？　え、ええ。そこの棚に入ってるわ。いつも宴会とかするから、お皿とかはいっぱいあるのよ」

どうやら皆が持ってきてそのまま置いていっているらしい。別に困りはしないが、正直な所持って帰るのが面倒なだけというのが本音であろう。中にはかなり高級そうな陶磁器もあり、もし売り払えば6桁は容易いだろう。霊夢がそれに気付かなくて幸いであった。

「どこで食べる？　やっぱ社務所の住居スペースとかそういうとこ？」

「あー、そうね。いっそのこと御座を敷いて外で食べるのもありだけど……」

「おお、それもいいな」

横島は手際良く肉を切り分けながら霊夢に問う。当の霊夢は肉に夢中であり、少々適当な返事をしてしまうのだが、横島はそれを気にすることはなく、好意的に受け取っている。

ちなみにだが博麗神社は拝殿、本殿、社務所が一体化した珍しい造りをしており、居住スペースも一緒になっている。敷地自体はかなり広いので、通常の神社建築のように分けて造った方が良いのだろうが、もしかしたら何か特別な理由でもあるのかもしれない。

「んじゃ外でみんなで食おうか？　とりあえずもう少し時間が掛かるから、みんなとお話しておいで」

「んん、何か手伝わなくてもいいの？　そりゃ楽が出来るし私としては助かるけど……」

「おお、大丈夫大丈夫。むしろこうやって料理してると異様に気分が高揚してきた。今の俺を止められる者は誰もいない……!!」

何故か異様に気合が入っている横島に霊夢は少々引いてしまう。これは何を言っても無駄だと悟り、料理が出来たら呼ぶようにだけ伝えて早々に皆の所へと戻る。この時の横島の様子をフランに問えば、「お兄様、何か〝わーかーほりっく〟っていうのになったんだって」という答えが帰って来た。

「……何か意外だね。横島さんがワーカーホリックって」
「そうなの？　お兄さんっていつも忙しそうにお仕事してたような気がするけど……」
「あれ、そういえばそうだね……？　何だろう。それでもイメージに合わないよ」
意外な話であるが、横島はワーカーホリックである。元々横島は痛い事も辛い事も嫌いな性質なので、楽して儲けたいと考えていたのだが。彼は紅魔館の生活によって変わってしまったのだ。
掃除を頑張る。美少女達に褒められる。洗濯を頑張る。美少女達に褒められる。料理を頑張る。美少女達に褒められる。そんな毎日を過ごす内、彼は褒められることへの快感に酔いしれることになった。
自分が頑張れば頑張るほど、仕事をすれば仕事をするほど美少女達に褒められる。横島はその快感の虜になったのだ。今では炊事洗濯掃除何でもござれと自信を持って言える。
何とも健全なようで色々な意味で不健全な状態なのだが、雇い主は適度に休みをくれる。上司は自分以上のワーカーホリックであるし、お互いの努力によって休憩時間は増え、同僚達も不器用ながらもきちんと仕事をこなしている。
ある意味、横島にとって天国とも言える職場だ。やはり彼にはこういった職が最も適

していたのかもしれない。
横島の意外な一面に驚きもしたが、昼食が出来るまでの時間をその話だけに費やすというのも癪だ。そういうわけで次の話題を提供したのははたてだ。次の話題は、何故霊夢は連日弾幕ごっこをしていたのか、である。
「ん……」
その話題が出ると、途端に渋い顔をする霊夢。何か言いにくい理由でもあるのかとはたては考えたが、霊夢はあっさりとその理由を白状する。
「……変な奴に負けちゃってね。それで、次に会った時にはそいつをとっちめてやろうと特訓してたのよ」
「霊夢が、負けた……!?」
思わず大きな声を出してしまうフラン。それほどまでに驚いたということだが、それは何もフランだけではない。言葉には出さないが、皆が同じ気持ちだ。〝博麗の巫女〟が負ける、というのはそれだけのインパクトがある。
「それでそいつが……その」
霊夢はまだ言いたいことがあるようだが、それも煮えきらず、もごもごと口を動かすだけに留まっている。皆は無言で霊夢の続きを待つ。その言い知れぬ雰囲気に圧されたのか、霊夢は大きな溜め息を吐いた後、小さな声でこう言った。

「……そいつ、横島さんによく似てたのよ」
「――――っ!!」
その言葉に、フランの脳内にあの時の光景がフラッシュバックする。知らず、拳を強く握り締める。
「つまり、お兄さんは霊夢よりも強かった!!?」
「あくまでもそっくりさんの話だからね、チルノちゃん!?」
チルノは話をよく聞いていなかったらしい。さっきの緊迫した表情はなんだったのか。「やべえ、あたい、何も聞いてなかった」ということなのだろうか。
大妖精に説明を受けるチルノ。だが、彼女の眼は大妖精ではなく、フランを捉えていた。何やら様子がおかしい。苦しげに眼を伏せ、唇を噛むその姿を見たチルノの胸に、何か重い物が宿る。
「……フラン、どうかしたの？　お腹痛いの？」
チルノは心配そうにフランへと近付く。フランは自分の状態を察して心配してくれたチルノに心が温かくなるが、その温もりもフランが抱く罪悪感の前には焼け石に水と言える。
「その、ただお兄様に似てた『男の人』なんだけど……」
フランは自ら事情を説明しようとする。『男』のこと、横島のこと、その顛末を。しか

し、そんなフランの肩を誰かの手が優しく触れて、それをやんわりと押しとどめた。
「私が説明するわ。多分、フランよりも詳しい話を聞いてるからさ」
「はたて……？」
視線をやれば、そこにいたのは優しく微笑んでいるはたてがいた。彼女の手から優しさが伝わってくる。気を遣ってくれているのだ。確かに客観的事実を話すのならば自分よりも優れているだろう。フランはその厚意に甘えることにした。俯きながらもはたてとチルノの手をきゅっと握る。チルノは不思議そうにしていたが、それでも嫌がる様な事もせずにそのままでいてくれる。はたても微笑みを深め、フランの為に日傘を差してやる。
2人の温かさと優しさに、フランの胸が少しだけ痛んだ。
「私も文から聞いたんだけどねー。実は――――」
そうして『男』を巡る紅魔館、永遠亭の因縁を語りだす。当然、その中には妹紅と横島のことも含まれており、全てを話し終えた後には誰もが言葉を発さず、沈痛な面持ちで佇んでいる。
「……そっか。そういうことだったんだ」
萃香は腕を組み、難しそうに唸りながら空を仰ぐ。自分が傷を癒している間にそんなことになっているとは思いもしなかった。既に異変が解決していたことは喜ばしいこ

とではあるが、その内容は手放しでは喜べない。
　未だ親交の浅い間柄ではあるが、それでも横島は友人である霊夢がいつも世話になっている人物だ。そんな彼を襲った出来事には胸が痛む。
「横島さんは……大丈夫なんですか？　えっと、その……色々と」
　大妖精がおずおずとはたてに問う。今日今まで見た限りではいつも通りの姿に思えた。しかし、もしかしたら自分が気付いていないだけで何か問題があるかもしれない。その問いにはたては首を横に振る。
「私も話を聞いた後レミリアとか永琳に色々問いただしてみたんだけど、特に変わりはないみたいなのよ。横島さん本人も肉が食えなくなったーって、そんな風なことしか言ってないし……まあ、多分本当は何かしらあるんだろうけど」
　それは記者としての勘か、はたては何かを確信しているようだった。蓬莱人になったことで顕在化した、横島の内面。彼女達がそれを知る時は、もしかしたら近いのかも知れない。
　はたては大きく息を吐いた後、萃香と同様に空を見上げる。皆もそれに倣って晴れ渡る空を仰いだ。今の心境とは裏腹に晴れている空に、理不尽な怒りが湧いて来るようだ。これで曇っていたり雨が降ってきても気になっただろうが、それでも晴れよりはマシだったかも知れない。

「……お兄さ――」

「おーーーーーーい!!　霊夢ちゃーーーーーーーん!!　肉だ!!　肉の丼が出来たぞーーーーーー!!」

チルノが何かを言おうとした瞬間、それを遮るように横島の声が響き渡った。彼の声は何の暗さもなく、能天気な、そして明るさと生気が漲ったものだった。

皆は眼をパチクリとさせて声の発信源を見た後、苦笑を浮かべつつも溜め息を吐いた。気が抜けたのか、先程までの暗い雰囲気は鳴りを潜め、変わりに気だるげな雰囲気が漂い始めた。

「何と言うか、心配するだけ無駄なのかしら?」

「横島さんは切り替えが早いとは美鈴さんに聞いてますけど……」

「私としては評価出来るけどねぇ。仮にあれが空元気でも、それが出来るのは大したもんだよ」

口々に感想を述べる少女達。概ね好意的なものが多いようだ。しかし、フランは先程までよりは持ち直したが、それでもまだ表情は暗い。すると、突然チルノに肩を抱き寄せられ、バランスを崩したフランはチルノに抱きつく形となった。

「……チルノ?」

いきなりのチルノの行動にフランは彼女の顔を見上げると、チルノは何故かふんすふ

んすと鼻息荒く空を見上げていた。このシチュエーションには覚えがある。太陽の畑での一幕だ。恐らく、これは横島の真似なのだろう。落ち込みゆくフランを元気付けるために、横島がフランにした行動を模倣しているのだ。

「……えへへ」

ふと、フランが笑う。何かがおかしかったわけではない。ただ、嬉しく思ったのだ。落ち込んだ時、横島は自分を引き上げてくれる。それと同じように、チルノも自分を引き上げてくれた。それに気付き、思わず笑みが零れたのだ。知らず、チルノに抱きつく力が強くなる。

はたてはそんな2人を早速写真に収める。シャッターチャンスは逃さない。これは後でレミリアと咲夜にも焼き増ししなければなるまい。

「霊夢ちゃーん、まだー？　このままだとせっかくの肉丼が冷めるぞー？」

「今すぐ行くわー!!」

霊夢は残像を残すほどのスピードで横島の元へと走る。気付けば皆の足元には既に御座が敷かれており、一体いつの間に用意していたのかと驚愕を誘う。

やがて戻ってきた2人の手にはお盆に乗せられた人数分の丼が載っていた。肉と野菜がバランス良く彩られた牛丼。1つだけ肉の無い丼があるが、それは気にしない。皆はほかほかと湯気を上げ、美味しそうな匂いを漂わせる牛丼に眼が釘付けだ。

皆は御座に座り、それぞれの前に丼と箸、お茶が置かれ、配膳を終えた横島も腰を下ろす。そしてぐるりと皆を見渡して、〝パンッ〟と小気味のいい音を鳴らして手を合わせる。皆もそれに倣って手を合わせ、タイミングを合わせて――――。

「それでは、いただきます！」

「いただきまーすっ!!」

横島の手作り料理による、昼食会が始まった。

皆が浮かべる笑顔には、もう先程までの暗さは無い。空気を変えたのはチルノなのか横島なのか、とにかく、この日食べた牛丼は、とても美味しかったということを皆は記憶に刻んだ。

第五十三話

『博麗神社で昼食を』

～了～

おまけ～紅魔館の面接風景～

レミリア「もう知っていると思うが、私が紅魔館の主、レミリア・スカーレットだ」
咲夜「私はメイド長の十六夜咲夜よ」
赤蛮奇「よ、よろしくお願いします。赤蛮奇です」
影狼「付き添いの今泉影狼です……」
レミリア「お前がウチのメイドになりたい理由は聞かせてもらった。正直横島が気にしていないのだからそこまで思いつめる必要は無いと思うが……まあ、お前がそうしたいと言うのならそれも良いだろう」
咲夜「では赤蛮奇さん。あなたの特技を教えていただけますか？」
赤蛮奇「は、はいっ！　私の特技はこうして首を飛ばせることで……!!」ふわーっ
レミリア「ほほう」
赤蛮奇「最大で9つまで分身出来て、更に視覚や聴覚を初めとした五感を共有でき、数キロ先の情報を得ることも出来ますっ」
咲夜「それは素晴らしいわねっ!!」ガタタッ
レミリア「落ち着きなさい。……それでは次に、お前は家事で得意なものはあるか？」
赤蛮奇「う……いえ、一応1人暮らしですのでそれなりにはこなせますが、どれも得

意と言う程では……」

レミリア「ふんふんなるほど。一号達の下で色々と学ばせた方が良いな」

赤蛮奇「……」

影狼「……」

レミリア「とりあえず担当はこっちが決めるから、契約内容を確認しておこうか。辞めるのは別にいつでも構わない。仕事に飽きたり横島への負債を返し終えたと思ったらそのまま辞めても大丈夫だ。逆に辞めた後も、また働きたくなったらいつでも来るといい。その時はまた雇ってやる」

影狼「……随分とおおらかと言うか、あんまり規約の意味がないような……」

レミリア「ウチは昔からそうだったからなぁ……。ま、それはともかく。給料についても話しておこうか。基本妖精メイド達は現金ではなく、自由と紅茶とケーキが与えられている。それからちょっとしたお小遣いだな。あいつらはお金はいいからご飯が欲しいとか言うような奴等なんだよなー……。ああ、勿論お前にはちゃんと現金を支給するから心配するな。ただし、それなりに安月給にさせてもらうがな」

赤蛮奇「は、はいっ」

レミリア「とりあえず研修期間は……1ヶ月でいいか。とりあえずその間は時給……１５００円かな」

赤蛮奇「ファッ!?」
影狼「ファッ!?」
レミリア「勤務時間はフレックスタイム制で8時間。休憩は1時間で良いな？　週休は2日。研修期間を過ぎれば時給は……考えるのが面倒だから倍の３０００円で。技能が上がれば昇給もしてやる。それから、働き続ければ当然有給も発生する。ボーナスも夏と冬の2回だな。頑張りに応じて弾んでやろう。そうそう、まだまだ部屋も余ってるし、何ならここに住んでも良いぞ?」
赤蛮奇「誠心誠意尽くさせていただきますレミリアお嬢様ーっ!!!」
レミリア「うむ、苦しゅうない」
影狼「こ、紅魔館なのにホワイト……!?　悪魔の館とは一体……!?」
レミリア「そうそう。影狼、お前も働きたくなったらいつでも言えよ？　紅魔館はいつでも歓迎しよう」
影狼「うえ!?　え、あ、は、はいっ!!」
レミリア「では一号二号三号、彼女達をお連れしろ。丁重にな」
一号「はーい!!」
二号「待ってましたー!!」
三号「……新たな新入りが入ってきた。……頭痛が痛い」

赤蛮奇「うわあああああ!?　妖精なのに力が強いいいいいい!?」
影狼「何で私までーーーーーー!?」
レミリア「ふふふふ……。念願の赤蛮奇を手に入れたぞ……〝赤〟蛮奇を手に入れたぞ……!!」
咲夜「とても良い買い物でしたね……。さて、他に誰か赤いのいたかしら……?」

おまけ～了～

第五十四話

博麗神社の境内に御座を敷き、暖かな陽の光を浴びながらの昼食。その文字だけならば大変情緒溢れる情景に思えるのだが、実際にその光景を見てみると、そういった風情やら何やらは完全に吹き飛んでしまう。

「美味しい……!!　肉……!!　私、生きてる……!!」

「……何も泣かなくても」

とある1人の少女が横島が作った牛丼を食べながら、感涙に咽び泣いているのだ。言わずもがな霊夢である。

霊夢は他の人と比べてやたらと分量が多い肉を、ほっぺたを膨らませつつ幸せそうに噛み締めて嚥下していく。横島のちょっとした計らいだ。ちなみに萃香の前には少しお高めのお酒、チルノには冷めても美味しく食べられるように味付けを変えたりもしている。

「たまらないわ……!!　肉、肉、油、肉、油……!!　いくら食べてもご飯が見えてこない圧倒的なボリューム!!　そして申し訳程度の野菜!!　うおォン　私はまるで人間火力

発電所だわ!!」

「もぐもぐ!!　もぐもぐ!!」

霊夢は圧倒的ボリュームの牛丼を何事か実況しながらも凄まじいスピードで食いつくしていき、チルノは一心不乱に……というよりは一生懸命に食べ進めていく。２人ともはや牛丼しか見えていないといった様相を呈しており、周囲はそんな２人を苦笑しつつも温かく見守っている。特に横島などはその食いっぷりに親近感を覚えているほどだ。

「いやしかし、本当に美味いね。このレシピは咲夜に教わったの？」

萃香は気分良く酒を呷りながら横島へと問い掛ける。返ってきたのは当然肯定だ。

「ふふふ、こう見えて今の俺はけっこう料理を作れるんだぜ？　今なら〝お料理タダちゃん〟と名乗れるぜー」

「真面目に仕事してるんだね～……でも、大丈夫なのかい？　この牛丼、ニンニクが使われてるみたいだけど？」

「えっ!?　こ、この牛丼、ニンニクが入ってるの!?」

萃香の指摘に真っ先に反応したのは当然フランだ。何せ彼女は吸血鬼。陽の光と同様、ニンニクは吸血鬼の弱点なのだから。現に横島とフランは隣り合って座っているが、２人の頭上には日傘が広がり、陽光を遮断している。横島が用意した日傘用のスタ

ンドが役に立っている。
　横島は慌てるフランの頭を1つ撫で、ニヤリと口角を上げて微笑む。
「ふふふ、今の俺がそんなミスを犯すわけないだろ？　フランちゃんのと俺の牛丼にニンニクは入ってないんだよ。ちゃんと別々に作ったからな」
「そっか、良かった……」
　ホッと安堵の息を吐くフランに、横島は「もう少し信じてくれても良いと思うんだがなー」といった感想を抱くが、一応言っておくとフランは横島のことをレミリアと同等に信じている。だがそれはそれ、これはこれというやつだ。むしろ横島はこういうものでうっかりと凡ミスをかましそうで少々恐ろしくもある。
「ふーん、色々と気を付けてるんだね。……でも、他の子達は臭いとか気になるんじゃないの？」
「その点も抜かりはねーぜ。今回使ったのは無臭ニンニクだからな」
　無臭ニンニクとは、その名の通り臭わないニンニクのことである。大きさは普通のニンニクの6倍以上、臭いはニンニクの14分の1というニンニクであり、しかも普通のニンニクと変わらない栄養分を含んでいる。
　これだけでも充分ではあるが、横島は更に臭いを抑える為に蒸してある。咲夜から教わった調理法だ。

「それでも気になるなら、食後にチルノに冷やしてもらってるリンゴジュースを飲んだらいいよ。リンゴに含まれるアップルフェノンっていう成分が臭いを抑えてくれるから」

「ほえー……それもあのメイドに？」

「いや、これは永琳先生に教わった」

萃香と横島の問答に皆は食べながらも感心している。ニンニクを食べて臭いがしないというのは中々に驚きだったようだ。……ただしニンニクの臭い成分は体内に残っているので、それが体臭として現れる。それの対策として水分を多く取り、入浴などで汗を掻くことでその臭い成分を体外に出すことが出来る。横島はそれを皆に教えた。幸い使用した無臭ニンニクは少量であるので、そこまで気にするほどでもないだろうが、乙女としてはその情報はありがたいだろう。

「……」

大妖精は横島の話を聞きつつ、何故フランだけでなく自分の分の丼にもニンニクを入れなかったのか、ふと気になった。単純に肉が入ってないから？　確かに肉がないのにニンニクを入れるのは少し妙な気もする。自分が知らないだけでそういう調理方法もあるのかも知れないが、この丼には合わないような気もする。

大妖精は何となく横島を見つめ、その隣に恋人であるフランが寄り添うように座って

いるのを見て――――。

「――――ッ!!?」

ボンッ、と一瞬で顔を真っ赤に染めた。

「も、もぐもぐ!?　もぐもぐもぐっ!?」

「何でもないっ、何でもないから!!　……あとお行儀が悪いよチルノちゃん!!」

一体ナニを想像したのか、大妖精は横島とフランを見て「お、大人……!!」という感想を漏らした。大妖精の隣に座っていたはたてはその言葉で大体の事を察し、生温かい眼差しで大妖精を見やった。外見年齢に似合わず、意外と耳年増なようだ。そして何気ない様子を装って密かに写真を撮っている。

「いや、実年齢からすると別におかしくないのかなー?」

大妖精の実年齢は知らないが、少なくとも見た目通りとは限らないだろう。

外見年齢とつりあわないと言えば、大妖精はその外見に比して胸が大きい。巨乳……というほどではないが、それでもそこそこの大きさだ。ややスレンダーな体型のはたては大妖精の胸に少々嫉妬を覚える。はたてがまだ大妖精ぐらいの外見年齢だった時、彼女の胸はフルフラットだったのだ。

「そういえばさー、アンタ達随分と仲良くなったみたいね」

「ん?」

「え？」

はたてがぱるぱると大人気なく嫉妬心を燃やしている間に、霊夢が横島とフランにそんな言葉を投げかけていた。

横島とフランは寄り添い合うように座っている。それはまるで兄妹（きょうだい）のようで――というには、少々距離が近過ぎるように思える。

「あー……そういや言ってなかったか。実は……」

「ふむふむ……」

横島はやや遠い目をしながら説明を始める。これから先の展開が分かるからこそそうなるのだが、案の定霊夢の横島を見る眼が犯罪者を見る眼へと変化していた。ちなみに萃香は感心したように頷いている。「女を3人も囲うとは中々やるじゃないか!!」とは酔っ払いの談。

「……妹紅に美鈴、そしてフラン……」

「……」

霊夢の鋭い視線を真っ直ぐに見返すことが出来ない。横島自身、今の状態が一般的にどのような目で見られるかは理解しているのだ。これから先、更に恋人が増えるかもしれないというのを霊夢が知れば、彼女はどのような反応を返すだろうか。

冷や汗をだらだらと流す横島をじーっと見つめていた霊夢だが、ふと微笑むと、今度

はフランへと視線をやる。
「まあ、何はともあれおめでとう。祝福はさせてもらうわ」
「えへへ、ありがとう霊夢」
にこやかにフランを祝福する霊夢だが、次に横島を見た彼女の眼は、何というか形容し難い生温かさがあった。犯罪者を見るような眼でなくなったのは嬉しいが、この眼も少々……というより全力で遠慮願いたい眼だ。
「アンタは……あの時、初めてここに来た時に言ってた言葉通りになったわね」
「……」
横島が初めて博麗神社に来た時に言い放った言葉。
――ワイがロリコンになってまうかも知れんやないかあああああーーー!!!!
霊夢は眼を閉じて空を仰ぎ、やがて柔らかく微笑みながら横島の眼を見つめる。
「横島さん……ついになったのね。――ロリコンに……!!」
「やめてくれ霊夢ちゃん。その言葉は俺に効く」
「……」
「……」
「ロリコ」
「やめてくれ」

第五十四話
『力の源』

「ごちそうさまでしたー……!!」
「あいよ、おそまつさーん」
霊夢が満足気に手を合わせ、幸せの溜め息を吐く。他の皆は既に食べ終えており、1番量の多かった霊夢が今食べ終わったのだ。あれ程のスピードで食べ進めながら、1番食べ終わるのが遅かった……一体、どれほどの量だったというのだろうか。
霊夢はチルノからリンゴジュースを受け取り、それを一気に呷る。
「っかぁー!!　キンキンに冷えてやがるっ……!!」
「随分と親父臭いな……」
流石はチルノと言うべきか。預けて十数分のリンゴジュースはかなり冷たくなって

いたらしい。当たり前だが果汁１００パーセントである。
「あ、キンキンに冷えてるので思い出したんだけど、今ウチにあれだけの食料を保管しておく場所がないのよ。冷蔵庫が故障中で、紫に預けてるのよね」
「そうなのか？　……っていうか、冷蔵庫あったのか」
「……アンタ、今回といい前回といい、知らずにあんな大量の食材を持ってきてたの？　ここは一応外の世界と繋がってるから、電気とか水道なんかは紫が何とかしてくれるのよ」
「ふーん……」
　横島は博麗神社が外と繋がっていることを改めて思い出した。確かに初めてここに来た時にそれを説明されていた。そういえば紅魔館も外の世界に繋がっていると聞いた事があるし、どのような力が働いているのかは分からないが、設備が近代化されている場所は例外なく外の世界と繋がっているのかもしれない。
「んー……じゃあ、氷室でも建てようか？」
「お、いいねぇ。丁度氷精もいるし、良いのが出来そうだよ」
　氷室とは雪や氷を貯蔵することで食材等を貯蔵する施設のことである。世界各地に存在し、日本では洞窟や地面に掘った穴に小屋を建てて保冷していたようだ。この氷室、何と冬に出来た自然の氷が夏場でも溶けずにそのまま保管することが出来たらし

い。

この氷室にチルノの氷を使えば、それはもう今までに存在したどんな氷室よりも素晴らしい性能を持った氷室が完成することだろう。

「というわけで」

「ああ。――――それじゃあ、行こうか」

「うん。――――氷室を、建設りにね」

横島と萃香は風に衣服を棚引かせ、力強い足取りで境内の空いたスペースへと歩き出した。

「……いや、何で意味もなくかっこつけてんのよ?」

それは本人達にも分からない。

そしてそれから数十分後、そこには立派な氷室の姿が!!

「おかしいでしょうが!! 何でたったの30分くらいでこんな立派なのが出来てんのよ!?」

「――――ふっ。どうやら本気を出し過ぎたようだな」

「――――ふっ。そうだね。また世界を縮めてしまったみたいだよ」

霊夢のツッコミに2人は髪をかきあげてよく分からないことを返す。凄い事をしてのけたのだが、何だか褒めるような気にさせてくれないのは2人の人柄故か。

「でもまあ、これで完成ってわけじゃないんだけどな」
「肝心の氷がまだだもんね～」
　横島と萃香はフランと大妖精の2人と雑談に興じているチルノの元へと向かう。横島達の背後にははたてがカメラを構えてついて来ており、パシャパシャと写真を撮っていた。労働の汗を流している横島の写真が欲しかったのだろう。
「おーいチルノー？　ちょっと頼みがあるんだけど」
「ん？　あたいに？」
「そうそう。ちょっとついて来ておくれ」
　横島達はチルノを伴って氷室の中へと入る。中はがらんとしており、備え付けられている棚には当たり前だがまだ何も置かれてはいない。今からこの氷室の中に、チルノの能力で以って氷を造り出してもらおう、というわけだ。
「そんなわけでいっちょよろしくお願いします!!」
「それはいいけど……どのくらいの大きさのがいるの？　〝ビキイイィンッ!!〟くらい？」
「いや、もう少し大き目の〝バキイイイィン……ッ!!〟くらいで」
「どういうことなの」
　どうやら横島とチルノの2人だけにしか伝わらない表現らしい。大妖精もチルノの

何でも擬音で表す癖は知っているが、ここまで正確に内容を把握することは不可能である。大妖精は不機嫌そうに唇を尖らせると、横島の背後からチルノのすぐ後ろに移動した。

「んー……とりあえずやってみようかな」

チルノは1枚のスペルカードを取り出すと、何か集中するかのように目を閉じ、何事かを呟き始めた。「想像（イメージ）するのは常に最強の自分（あたい）……!!」という言葉が聞こえてくる。氷の創造理念を鑑定したり基本骨子を想定したりするのだろうか。

チルノの様子に横島が苦笑を漏らし、霊夢が大丈夫なのかと心配に思った瞬間、それは起こった。

「……っ?」

横島はチルノに渦巻く力に違和感を抱く。何か、別の力がチルノに流れ込んだかのような、そんな違和感だ。だが、そんな違和感を覚えたのも束の間、チルノは眼をカッと見開いて、前方の空間にその力を解放する。

「凍符『マイナスK』――――!!」

「うぉわっ!?」

「きゃ――――っ!?」

チルノが翳した手から発せられた、今までまるで感じたことの無いほど圧倒的な冷

気。それは横島が思わず霊力を全力で稼働させ、左手で顔を防護しなければならないほどだ。それでもなおその身を刺す冷気に、横島は身体をぶるりと震わせる。

「んー……このくらいの冷たさなら大丈夫かな？　ねーねー、あたい上手く出来た？」

横島を振り返るチルノは屈託の無い笑顔を浮かべている。それこそ、チルノの背後の氷塊とは真逆の暖かな笑みだ。そのチルノの姿に、横島は心の底から「チルノって凄え……!!」と思ったそうな。

ちなみに横島は空いた右手で大妖精を咄嗟に抱き締める形で庇っており、彼女は突然の事態に眼を白黒させ、先程抱いた嫉妬だとかチルノから発せられた冷気だとか、そんなものは遠くの方へとうっちゃってしまった。もちろんはたてが（羨ましそうに）撮影済みである。

「……」

「……」

横島やはたてが驚愕し、チルノを誉めそやしたり写真を撮っている背後、霊夢と萃香は視線を交わしあい、互いに頷き合った。何か、今のチルノの力に覚えがあったらしい。

「さて、氷室の方はこれで完成したし、食材を運び込まねーとな。ああ、洗い物もあったな」

「いやいや、それなら私がやっておくよ。流石にお客さんにそこまでしてもらうのはね

～」

「ん、いいのか？　俺は別に気にしないけど……」

「流石にそこまで図々しくはないのよ、私は。色々と幻想郷を回ってるんでしょ？　あんまりここで時間を取り過ぎるのもどうかと思うわよ？」

まだまだ働く気満々だった横島を宥め、霊夢と萃香は博麗神社で無駄な時間を過ごさないように言い含める。それは横島達を思っての発言にも聞こえるし、何か意図的に横島達を博麗神社から遠ざけようとしているようにも聞こえる。

幸い横島はその発言の裏を疑うようなことはしなかった為に霊夢達の言葉に消極的ながらも頷いたが、これが他の人物だったならば言葉の裏を探られただろう。

「んじゃ、俺達はもう行くけど、偶には紅魔館にも遊びに来いよ？　お嬢様が霊夢ちゃんに会いたがってたし」

「レミリアが？　……分かったわ。近い内にそっちに行くから」

「それじゃーねー」

横島達が氷室を建てている間に食休みも済んでおり、皆は元気な様子で空を飛び、次の目的地へと進んでいく。チルノ曰く、「さっきが神社だったから、次はお寺に行こう！」だそうだ。その時霊夢の眉がぴくりと跳ね上がったが、それに気付いたのは萃香だけだ。

「……どう思う？」
「……どう、って言われてもねえ」
　萃香の問いに霊夢は難しそうに空を仰ぎ、腕を組む。そのままあらゆる思考を巡らせるが、明確な答えなど出てこない。つまりは全くもって分からない。
「そもそも、何でチルノがあの力を使えるのよ？」
「さあねえ……いくら妖精が自然の触覚っていっても、あれは使えないはずだし……」
　霊夢達は共に頭を捻る。扱ったことがあるからこそ、チルノがその力を振るうことが理解出来ない。そもそもあの力と関係があるのは霊夢と萃香、魔理沙とアリスにパチュリー、そして藍の6人だ。はっきりと言えばチルノは関係がない……はずである。
「……今度魔理沙とアリスを誘って、紅魔館に行ってみようかしら？」
「それがいいかもね」
　何となくだが、嫌な予感がする。霊夢の胸中に渦巻く不安は未だ小さなものだが、これから大きく渦を巻き、嵐となる可能性も否定出来ない。
「……特訓、無駄にならずに済みそうね」
　霊夢がぽつりと呟く。それは、断定にも似た言葉だった。否、あるいは確信しているのだろう。その時が、訪れることを。

「んで？　お寺ってことはこの人里の外れにある……命蓮寺（みょうれんじ）、だっけ？　そこのことでいいのか？」
「うん、そーだよー」
命蓮寺。幻想郷に最近建立された寺であるらしいが、その割には檀家や出家者もそれなりの数がいるようだ。博麗神社涙目である。
「寺かー……相性悪いんだよなー、俺……」
「そうなの？」
命蓮寺へと続く道を歩きながら、横島が憂鬱そうにこぼす。
「ああ。何せ俺の霊力源って煩悩だからさ、仏教って煩悩を祓うだろ？　俺煩悩が無くなったら何も出来なくなるんだよなー」
「煩悩が霊力源……なんですか」
横島の言葉に大妖精がやや引き気味に答える。先程チルノの冷気から庇ってくれた時は頼もしく思えたものだが、やはり早々見直すことは出来そうにない。
そうやって談笑しつつ道を進み、一行は長い石畳の階段に辿り着いた。命蓮寺はこの先にある。

「思ってたよりも長い階段だな。これを上るのも修行の内なのかね？」
「めんどっちいなー。あたいは飛んで行きたい」
「まあまあ、いいじゃないのー。周りの緑を楽しみながら階段を上るのもありじゃない？」
　はたての言にチルノは不満気だが、それでも以降は文句を言わずにその足で階段を上る。周囲に生えている木々や、それから顔を覗かせる鳥や昆虫といった小動物達。そしてその動物達の鳴き声による音楽など、確かに楽しめる材料は揃っている。
　はたても何枚も写真を撮りつつ自然を楽しみ、その写真で皆と会話を盛り上げる。特に横島が聞き上手なお陰か、2人の会話はよく弾み、笑顔も絶えない。はたてにとっては至福の時と言えるだろう。
　――だが、そんな横島達に迫る影があった。
　木の上から横島達がすぐ下を通るタイミングを計る、怪しげな人影が1つ。その手には、何やら古めかしい傘が握られている。
　横島達が真下にやって来るまで、あと3歩。2歩。1歩――。
「べろべろばーっ!!!」
「のひょーっ!?!!」
　横島の眼前にいきなり現れた、上下逆さまとなった少女。その手には一つ目と大きな

口がついた傘が握られており、中々にインパクトのある出で立ちをしている。傘の口からにゅるりと出ている巨大な舌がチャームポイントだろうか。どうやら枝に足を引っ掛けてこのようなことをしたようだ。

「やったー!!　驚いたー!!　あはは、私ったら天才ね!!」

「な、何だこの子……？」

どうやら驚かせるのが目的だったらしく、それが達成出来た為か無邪気に喜んでいる。どうやら妖怪のようだが、特に害意なども感じられない。いや、害といえば害はあったわけだが。

「あはは、ごめんねー。わた……わちきは〝多々良小傘（たたらこがさ）〟。最近人を驚かせてなくてねー、お腹が空いてたんだよ～。許してね♪」

ウインク、舌を出す、片手で頭をこつんと叩く仕草。所謂〝てへぺろ〟というやつだが、何故だか異様に様になっている。横島も思わず許してしまいそうになるほどだ。

「お腹が空いた……驚かせる……つまり、人を驚かせることで空腹を満たせるのか？」

「そうだよ～。お兄さん話が早いね。もっと驚いてくれてもいいんだよ～？」

「ああ、驚いてる。今も驚きっぱなしだ」

横島はうんうんと頷きながらも視線を小傘から離さない。……いや、小傘というよりは小傘のある一点に、なのだが。はたてもそこを写真に収めまくっているし、大妖精は

顔を赤くしている。
「……？　何か他の人の反応がおかしいね？　何に驚いてるのさ？」
「何って……驚きの白さにかな？」
「白……？　……――――ッ!!?」
　横島の言葉に首を傾げ、小傘は自らの身体に視線をやる。……今更だが、小傘は逆さまの体勢なのだ。そうなれば彼女が履いているスカートは重力に従ってずり下がり、本来隠さなければならない物を白日の下に晒している。つまり――――パンツ丸見え。
「キャアアアアッ!!?　ちょっ、撮らないで!!　撮らないでーっ!!?」
「いやー、ほんとビックリだわー。ビックリしすぎてこれはもう眼に焼き付けるしかないわー」
「やめてよー!!?」
　横島を驚かせた代償は大きかった。彼女のパンツは横島の記憶に刻み込まれてしまったのだった。
「ううう……何でこんなことに」
「自業自得でしょうが」
　それから木から下りた小傘は自らの不運を呪うが、それははたても言う通りの自業自得であり、横島もそれを可哀想だとは思わない。そもそも横島が驚かされた場所は階段

であり、下手をしたら足を踏み外して転げ落ちたのかも知れないのだ。その罰が当たったと思えば、このくらいで済んだのは幸運だったと思って欲しいものである。

「ううう……まあでもお腹も満たされたし、さっきみたいのは私も相手にも危険だって分かったから良しとするわ」

「案外前向きなんだね」

「それはそうと、吸血鬼に天狗に妖精に人間って、面白い組み合わせよね。命蓮寺に出家しに来たの？」

「いや、何つーか……見学？」

「そうなんだー。ちょっと残念かもね。でも、命蓮寺は見学も大歓迎だよー！　ゆっくりしていってね！」

小傘の大げさに身振り手振りを交えながらの説明は見た目にも可愛らしく、横島はおろかはたてやフランの頬も緩むほどだ。その際にも彼女が手に持つ傘――唐傘お化けは舌をでろんでろんと動かし、何とか横島を驚かそうとしている。正直驚きはないが不気味ではある。

「小傘ちゃんだっけ？　そんなにオススメしてくるってことは、小傘ちゃんも命蓮寺の信者なのか？」

「全然違うよ？」

「違うの!?」

小傘曰く、何回か遊びに行ったら向こうに信者認定された、とのこと。別に修行を強制されたりしているわけではないし、色々とお世話になっていることもあるので、布教活動のお手伝いをしているそうだ。困った所もある小傘だが、根は善良であるらしい。

「――――と、話し込んでる内に着いたね」

小傘が一足先に階段を上りきり、くるりと横島達を振り返る。

「ようこそ、命蓮寺へ！」

小傘は笑顔で横島達を歓迎する。命蓮寺が理想と掲げる〝人妖の平等〟――――。まるでそれを体現しているかのように。

第五十四話
『力の源』
～了～

第五十五話

命蓮寺の本堂へと続く石畳の道を横島達一行は歩く。
流石と言うべきか、命蓮寺の敷地内は清浄な霊気で満たされており、住職である聖白蓮の実力が窺い知れるというものだ。
「もっと居心地が悪い所だと思ってたけど、そんなことないんだね」
フランが物珍しそうに周囲を見回しながら呟く。確かにこういった寺院は吸血鬼であるフランには相性が悪いだろうが、この命蓮寺が掲げる目標は『人妖平等』である。人にも妖怪にも居心地が良いようにしてあるのだ。尤も、博麗神社という前例があるのであまり気にするようなものでもないような気もするが。

第五十五話
『不思議な感覚』

皆で談笑しつつ本堂へと入る。本堂前の階段に立てられた旗や外柱の設置された看板から、命蓮寺の本尊は毘沙門天であることが分かる。

横島達は律儀に正座をする。横島やはたては特に苦もなく出来ているが、フランにチルノ、大妖精といった子供組は少々辛そうな表情を浮かべている。外国人は正座が苦手な方が多いようだが、もしかしたらそれが関係しているのかも知れない。（チルノや大妖精が外国の妖精かは不明である）

「それじゃあ、わちきは白蓮さんを呼んでくるからね。横島さんは大人しく待ってるんだよ？」

「分かってるって」

どうも小傘に妙な印象を持たれたらしい。横島は小傘の言葉に苦笑しつつ頷くと、正面に安置されている本尊、毘沙門天像を懐かしそうに見やる。

「毘沙門天か……元の世界で会ったことあるんだよなー」

「え、そうなの？」

「ああ。毘沙門天だけじゃなくて、他の七福神にもな。それだけじゃなく宝船に乗った

り、弁天様のライブを見たり……」
「ら、ライブ!?」
　また思わぬところで横島の交友関係が知れた。彼の話によれば元の世界の宝船には『霊波動砲』なる超兵器が搭載されているらしい。横島の元の世界とは一体どのような世界だったのか興味が尽きないはたてであったが、今この場で取材を敢行するほど空気が読めないわけではない。時間はこれからもたっぷりとあるのだ。慌てず騒がず、じっくりとその機会を窺えばいい。そう、今この場で重要なことは、正座の辛さにぷるぷると震えて耐えるフラン達をどうにかすることなのだ。
「……フラン、チルノ、大妖精。無理せずに足を崩しても大丈夫よ?」
「それは、何か負けたような気分……！　あたいは最強……！　絶対、正座なんかに負けたりしない……!!」
「それはフラグだよチルノちゃん……！　ああ、足が……足がぁ……!?」
「あ、足が痺れるの……」
　はたての言葉にチルノは意地を張る。顔を赤くして耐えるその姿は立派だが、いかんせん状況が小さすぎるし台詞もフラグ過ぎた。大妖精はチルノにツッコミを入れつつも一人にはさせじと共に正座のままでい続け、必死に足の圧迫感と痺れに耐える。
　一方フランは横島の膝の上に座り、痺れを癒すように足を伸ばして揉み解していた。

「何か、最近性格変わってきたな」
「えへへ。そうかな？」
横島はそんなフランを背後からお腹に手を回して抱き締めつつ、彼女の頭に顎を乗せる。にわかに甘い雰囲気が漂ってきそうな体勢であるが、そんな空気にさせるものかというようなナイスなタイミングで小傘が一人の少女を連れて戻ってくる。
「お待たせー！……って、何か色々とどうしたの？」
「正座のせいでこんなことに」
「……ふーん？」
小傘はよく分からないといった風に首を傾げる。チルノと大妖精は「ふおおおお……!!」や「んんんん……!!」などといった珍妙な声を上げて身体を震わせているし、フランは横島の膝の上で幸せそうにとろけている。三人とも女の子が浮かべてはいけないような表情だ。……前者二人と後者一人ではその意味が違い過ぎるが。
「まあいいや。それはともかく、この人が命蓮寺の住職の――――」
「はじめまして。この命蓮寺の住職を務める、〝聖白蓮〟と申します」
「あ、えと、これはご丁寧にどうも。横島忠夫です。忙しい中、急に押しかけてすみません」
白蓮は横島達同様正座をし、手をついて挨拶をする。その洗練された動きに横島は一

瞬驚いたように呆けてしまうが、正気に戻るとフランを膝の上から下ろし、白蓮と同じく手をついて頭を下げる。

それは、横島らしくない行動と言える。何せ白蓮はかなりの美少女だ。外見の年齢は美鈴と同じほどであり、現在の横島のストライクゾーンのど真ん中。更には彼女のスタイルも非常に良く、美鈴には一歩劣るだろうが、それでも抜群のプロポーションを誇っている。はっきりと言ってしまえば横島が飛び掛らないのが不思議でしょうがないと言える程だ。実際はたては「どうして飛び掛らないんだろー？」なんて考えていたりする。

「いえ、気になさらないで下さい。貴方のような方が命蓮寺を訪ねて下さって、私としてもとても嬉しく思っていますから」

「いやー、なははははっ」

柔らかな雰囲気でころころと笑う白蓮に、横島は照れたような笑みを浮かべる。彼の声は若干上ずっており、どこか様子がおかしいのは確かなようだ。

――――んー。何だろうな、この感覚は。

横島は自分の中の感覚に戸惑いを覚える。

白蓮は美少女だ。普段の横島ならば、飛び掛ってもおかしくない程の美少女だ。……だが、横島は白蓮に飛び掛らない。何故か、飛び掛る気が起きない。それが普通で然る

べきなのだが、それはともかく。横島は白蓮に対し、普段からは考えられない程に煩悩が湧いてこないのだ。……視線は白蓮の大きな胸に釘付けになってはいるが。

「ふ、フランドール・スカーレットです。よろしくお願いします」

はたてが白蓮に「どうも」と頭を下げ、横島が未知の、あるいは既知の感覚に首を捻る中、フランが横島達の見よう見真似で白蓮に挨拶をしていた。こういったことはしたことがないせいか、深々と頭を下げるその姿はお辞儀というよりは土下座の体勢になっている。慣れない体勢のせいで少し突き出された格好のお尻がキュートだ。それが横島や白蓮の目には微笑ましく映り、二人は同時に噴き出してしまう。

「うふふ、ごめんなさいね。笑うつもりではなかったのだけど……」

「フランちゃん、変な体勢になってんぜ」

「……むぅ」

当然笑われてしまったフランの機嫌は悪くなる。ほっぺたを膨らませて怒りをアピールする姿は外見年齢相応の可愛らしさだが、それが逆に二人の笑みを更に深くすることになるとは気付けなかった。まあ、その笑みもすぐに消えてしまうことになるのだが。

「にゅうううう……!!　正座には……勝てなかったよ……ガクッ」

「チルノちゃんを……一人には……しな、い……ガクッ」

「うおーいっ!?　何で正座で死に掛けてんだーっ!!?」
「あ、あらあら……っ!?」
チルノと大妖精、正座にて死す。死因はエコノミークラス症候群だろうか。五分程度の正座で、いくら何でも早すぎるが。
結局チルノ達は横島とはたての膝を枕にしてだるーんと身体を横たわらせている。身体が少しでも動くと足の痺れが酷くなるようで、先ほどからぷるぷると震えてはびくびくと悶えている。ちなみに横島の担当がチルノ、はたての担当が大妖精だ。大妖精は「わ、私がチルノちゃんを膝枕するぅ……」などと言っている。「また死にたいのか」とは横島の弁。
「何つーか、すんません……」
「いえいえ、お気になさらず」
横島と白蓮が二人にヒーリングを施す。何でも白蓮は魔法使いでもあるらしく、その腕前は超人的なのだそうだ。
二人のヒーリングが効果を発揮したのか、チルノと大妖精は酷くゆっくりとではあるが身体を起こす。
「正座ってこんなにしんどいんだ……。お坊さんって凄い。あたいは改めてそう思った」

「多分、私達に耐性が無さ過ぎるだけだと思うよ、チルノちゃん」
　チルノは足をパタパタと大きく動かしながら、大妖精はフランと同じく足を揉み解しながら大きな溜め息を吐く。大妖精はともかく、チルノの行動は少々はしたない。横島はチルノの額をぺちっと叩き、注意を促す。
「こーら。女の子がそういう風に足を広げるのははしたねーぞ。下着が見えるかも知れないからやめとけ」
「んー？　……そういえばお兄さん、小傘のパンツもじっと見てたし、そーゆーのが好きなの？　あたいのパンツも見る？」
「あら」
「ななななな何を言っているのかなチルノさんっ!?」
　チルノの発言に横島の肩が跳ねる。ここはお寺。傍らには尼僧である白蓮。横島の頭には白蓮に驚異の魔力を振りかざされ、「誠に卑しく、意馬心猿であるッ!!」と言われて南無三される光景が目に浮かぶ。南無三の意味が違うし、何故そんな具体的な光景が浮かぶのかが果てしなく謎だが、それは些細なこと。問題はどうやってこの局面を乗り切るかだ。
「横島さんもお年頃の男の子ですからね。そういったことに興味があるのは仕方が無いこととは思いますが、程ほどにしておかないといけませんよ？　チルノさんも。未だ幼

いとはいえ、そういった言動は控えた方がいいですよ。例え発した言葉以上の意味を込めていなくとも、それを判断するのは受け取り手です。言葉以上の意味を誤解することなど、ままあることなのですから」

頬に手を当て、柔らかく微笑みながらやんわりと横島とチルノを窘める白蓮。思っていたよりも融通の利く人物であったらしい。横島はそっと息を吐いた。チルノは白蓮の言うことがあまり理解できなかったようで、首を傾げている。

「ん、んん……？」

「つまり、あんまり不用意なことを言っちゃ駄目だってこったな。どーせパンツを見せてくれるなら、もっと成長してから――――」

「横島さん――――？」

「はいっ!!　何でもありまっせん!!」

一瞬、白蓮の身体から凄まじいプレッシャーが放たれる。流石に先ほどのような発言は看過出来なかったらしい。当然大妖精からの視線もきつくなるが、横島はそれを気にしていられない。傍らで女の子座りをしていたフランが横島の目を上目遣いに覗き込んできたからだ。

「……ただお兄様、私のパンツも見てみる？」

特に何かを気にした様でもないフランの一言。横島が女の子のパンツを見て喜ぶの

なら、自分のパンツを見ても喜んでくれるのだろうか？　もし先程の言葉に意味が込められているとしたら、そんなところだろう。横島はフランの発言に若干頭痛がしたが、とりあえず頭を撫でる。

「あのなあ、フランちゃん。そういうのは後で二人っきりの時に――――ふんっ!!!」

「ひゃあぁっ!!?」

横島は拳を自らの顔面に叩き込む。顔が陥没……というより冗談のようにめり込んでいる様はまるで往年の漫画のようだ。間近でそんな衝撃の場面を見たフランをよそに横島はめり込んだ鼻を引っ張り、きゅぽっという音を立てながら顔を元に戻す。つくづく人間の芸当ではない。

「だ、大丈夫なの、ただお兄様……？」

「大丈夫だいじょーぶ。それよりも、チルノにも注意したけど、今後はあまり迂闊にああいうことを言わないほうがいいぞ？　でないと怖いお兄さんやらお姉さんやらに叱られちゃうからな」

「あー……」

怖いお姉さん、というフレーズでフランの脳裏に思い浮かぶのはレミリアと咲夜。レミリアは純粋に怒っている姿が怖く、咲夜は雰囲気が怖い。身の危険を感じるような、とまではいかないが、それでもフランの危機感に何かしらの圧を掛けてくるくらいには

怖い雰囲気を纏う。その怖さがどういった方向性の怖さかは定かではないが……もしかしたら、ろくでもない方の怖さなのかもしれない。

ついでにもう一人例を挙げるなら白蓮だろうか。横島が自戒したことで弱まったが、その直前には彼女のプレッシャーが強まっていたのだ。

白蓮は優しい人である。しかし、やはりと言うべきか普段優しい人が怒ると怖いということなのだろう。特に、幼い少女に煩悩を漲らせるような男に対しては――。

「俺は――違う。違う、はず……ぼくろりこんじゃない」

「……」

頭を抱えて喘ぐように呟く横島の姿に、白蓮は彼の心情を全てではないが察することとなる。横島の葛藤は中々に深い。白蓮も一度老いてから若返っているので、横島が葛藤している部分に察しがついたのだ。

白蓮は苦笑いを浮かべながらも心の中で横島にエールを送る。どうか煩悩に負けずに清い交際をしてほしいと。本当ならお説教も含めてもう少しお話をしていたいところなのだが、生憎と白蓮には用事があった。煩悩溢れる少年に〝煩悩即菩提〟について説法したいところだが、流石に約束を破るわけにはいかない。

「申し訳ないのですが――」

白蓮が両手を合わせて申し訳無さそうにこれから約束があることを切り出したのだ

が、ここで横島とチルノの二人の意識が白蓮から離れる。横島はこの命蓮寺に近付く異様な気配を察知し、チルノは先程の横島の言葉に思考を割いているからだ。

――――何だ……？　人間……にしては霊力が馬鹿みたいにでかいし……この感じ、何つーか、猿じじいに似てる……？

横島が察知した気配。それは、どうやら彼の師匠の一人である猿じじい――――〝斉天大聖孫悟空〟に似ているようだ。

横島が元居た世界では、孫悟空とはインド神話の猿神ハヌマーンであり、仏教に於いては闘仙勝仏という仏であり、道教に於ける神仙でもある。

横島がそれを知っているかは定かではないが、そんな孫悟空に似ている存在が、ここ命蓮寺に近付いてきているようだ。

彼女は悪しき存在というわけではない。足取りは軽く、その美しい表情には笑みさえ浮かんでいる。傍を歩くお付きと思われる少女にも同じく笑顔が浮かぶ。……とても自信に満ち溢れた、良い笑顔の持ち主だ。

「ふふ――――さあ、お楽しみの時間だ」

誰に聞かせるというわけでもなく、彼女は呟く。風にマントを棚引かせ、何故かやたらとキラキラと輝きながら彼女は本堂へと歩みを進める。

まるで、恋焦がれる相手との逢瀬を夢想するかのように、愛しげな笑みを浮かべなが

ら。

第五十五話
『不思議な感覚』
～了～

「……」
チルノは考える。先程の自分とフランに掛けられた言葉の違い、そのことについて。
『もっと成長してから』『後で二人っきりの時に』――――。
「……」
何が違うのだろうか。何故、違うのだろうか。それが、何故か無性に気になった。
「……」
チルノは考える。分からない。チルノはそれでも考える。しかし、それでもやはり分からない。

「……」

自分と、フランと。その違いは一体何なのだろうか？

どうしてそれが気になるのか、どうしてそんなに答えが知りたいのか、分からないままに彼女は思考を巡らせる。

チルノの視界には外を気にする横島と、そんな彼の腕を抱くフランの姿。きっと、彼女が抱く彼の腕は、温かいのだろう。

「……」

その温かさを。その温もりを。自分の物にしたいと思うのは、いけないことなのだろうか――――？

第五十六話

「それでは私は失礼いたしますね」
　白蓮は丁寧な仕草で暇乞いをし、ゆっくりと立ち上がる。その所作は正座が出来ないフラン達からは非常に美しく映ったようで、やけにキラキラと輝く瞳で白蓮を見つめている。
　白蓮はそんなフラン達を微笑ましく思い、薄く微笑んでいたのだが、その微笑みは野外から入り込んできた大声によってかき消されてしまう。

「白蓮さーん！　お客様ですよー！」
「ぬおわぁっ!?」
「ひゃあぁっ!?」
　突然の爆音。横島の耳がキーンと耳鳴りをしている。身体をよろめかせつつもその爆音の発生源に目をやれば、そこには慌てた様子の少女が立っていた。
「いけない、屋内では音が反響するから大きな声を出しちゃいけないんだったっ」

その慌てている少女は自分が未だ大きな声を出していることには気付いていない様子。彼女の様子から背後を気にしているようであり、あるいは背後にある何か、または背後にいる何者かが彼女の失敗の理由なのかもしれない。

「ははは。幽谷響子、もう少し声のボリュームを抑えた方がいいな。慣れているはずの聖白蓮でさえ耳を押さえているぞ」

「ええっ!?　ああっ！　す、すみません白蓮さんっ!!」

「いやだから声のボリュームを抑えろと」

未だに耳鳴りが酷い横島だが、辛うじて拾えた声は複数人のものだった。横島は突然の爆音に目を回してまいっているチルノと大妖精を庇いつつ、何とか無事だったフランとはたてを横に、白蓮に爆音……声の主の確認を取る。

「痛っつつ……何なんすか、あの声……？　白蓮さんのお弟子さんっすか？」

「……はい。申し訳ありません横島さん。彼女は〝山彦〟の幽谷響子と言いまして……。普段はここまで大声ではないのですが」

白蓮が耳の具合を確かめるように、耳の前で軽く指を擦り合わせながら説明をする。フランは耳珠という部分を何度も押さえて耳鳴りを何とかしようとしているが、その手をやんわりとはたてに抑えられる。二人は白蓮の説明を聞くよりも耳鳴りの方を何とかしたいようだ。

横島が件の響子の方を見やると、彼女は背後にいるだろう人物と何事か話したあと、脱兎の如き勢いで逃げ出した。響子がいなくなったことで、背後にいた人物の姿がよく見えるようになる。――と、思ったのだが。

「ん、んん……？　何か、妙な逆光が……？」

その人物の背後……というよりは、その人物そのものが光っていて、遠目にはどんな容姿をしているのかが分かり辛い。シルエットになるほど輝いてる、というわけではないが、それでもその人物は輝いていた。

「いや、相変わらずあの子はとても元気だね、聖白蓮」

「……ええ。元気なのは良いことなのですが、どうやら貴女にまで迷惑を掛けてしまったようで……」

「ははは。それはこちらに非があるのだが……それを説明する前に、少しいいかな？」

輝く人と白蓮の会話から、その人は女性であることが窺える。声の調子と体格から、白蓮と同年代くらいの少女だろう。口調は少々中性的なのが特徴のようだが、不思議と似合っている。

その少女は「失礼するよ」と一声掛けてから本堂へと入り、ゆっくりと歩み寄ってくる。そこで気付いたのだが、彼女は何かを背負っているようだ。

「……どうかしましたか？　――って、その子はどうしたんです、神子（みこ）さん？」

「……先程の大声にやられてしまって」
「……本当に私の不肖の弟子がご迷惑を……」
　ようやくまともに視認出来る距離まで来た輝く人――――名は神子というらしい。彼女は一人の少女を背負っている。烏帽子を被った、銀髪の女の子だ。その少女は目をぐるぐると回しており、「きゅう～」などと弱々しい奇声を発している。不謹慎ではあるが、横島の目にはその姿が可愛く映った。
「とりあえず場所を移しましょう。チルノちゃん達や布都さんを休ませなくてはなりませんし」
「そうだな。よろしく頼むよ」
「横島さん、そういうわけですのでここから移動しますね。申し訳ありませんが、ついて来て下さい」
「了解っす」
　横島は神子に目礼し、チルノを抱き上げて先導する白蓮の後に続く。はたては大妖精を抱えており、フランは浮かびつつ二人の顔を心配そうに覗き込んでいる。
「すみませんね、皆さん。あの子には私が後できっちりとお説教をしておきますから」
　白蓮は皆に振り返り、拳を握り締めてそう言った。その際に彼女の拳から「メキャア」という外見に似つかわしくないあまりにも力強過ぎる音が聞こえてきたが、それはきっ

と気のせいに違いない。横島の霊感が爆音の主――響子の危機を告げているが、彼も被害者側なのでお説教に否やはない。

ただ願うのは、あまりやりすぎないであげてほしいということだけだ――。

第五十六話

『賑やかな命蓮寺』

「はたてちゃん、みんなの首元、胸元を広げて呼吸をしやすくしておいて。それからスカートも緩めに」

「は、はーい」

「白蓮さん、この布団を借りてもいいっすか？」

「ええ、どうぞ」

現在位置は命蓮寺内にある庫裡という僧侶達が居住する建物の一室。横島はそこで

はたてに指示を出し、三人への応急処置を進めていた。永琳や鈴仙に色々と教わっていたのは伊達ではないらしく、テキパキとした動きで三人の脈や呼吸を計り、適切な処置を行っていく。

「よし、脈も呼吸も正常……あ、はたてちゃん、掛け布団は丸めて足の下に置いてくれ。足を高くすると脳に血が回るから意識も回復しやすいんだ」

「りょうかーい」

横島は三人の処置を終えて一息吐く。本当ははたてに手伝ってもらわずとも大丈夫だったのだが、流石にチルノ達や初対面の少女――布都の胸元やらスカートやらに触れるのは止めておいた。白蓮もいることだし、この場で煩悩を滾らせるのは危険である。

尤も、チルノと大妖精は現在の横島の守備範囲でも引っかからず、布都の場合はギリギリアウトだったので運が良かっただけなのだが。もしこれが神子や白蓮くらいの外見年齢だったならば確実に白蓮に南無三されていただろう。

「いや、中々大したものだね、彼は。流石は永遠亭の薬師の弟子だ」

「ええ、本当に。はたてさんに出す指示も的確ですし、あの若さでこれは素晴らしいですね」

美少女二人の話に聞き耳を立てていた横島の鼻がにょきにょきと伸びる。今日初め

て会った二人だが、だからこそその評価を信じることが出来るのだ。横島のコンプレックスは深い。

「それで、どういうことなんです？　響子さんのお様子がおかしかったのはそちらに非があるとのことですが」

「うん、実は……」

白蓮に問われた神子が理由を話す。それによると、布都が響子と声の大小で言い争いになり、頭に血が上った布都が「さっさと案内せぬと寺に火を放つぞ!!」と脅したらしい。その割には大声は本堂での時以外は聞こえてこなかったのだが、それは神子が仙術で何とかしていたようだ。その後怯えながらも案内されたので術を解いたのだが、その結果あんなことになってしまったようだ。

「見かけによらず、結構過激な子なんだな」

神子達の話を聞いた横島が眠る布都を見てそう漏らす。身体がもぞもぞと動いているので、もう少ししたら意識を取り戻すだろう。

「えっと、神子さん、でしたっけ？　チルノ達も、布都ちゃん？　も何とか大丈夫そうです」

「ああ、ありがとう。横島君、だったね。すまないね、こんなことに付き合わせてしまって」

「いやいや、そんな」

神子から礼を言われた横島は手を振って問題ない事を告げる。確かに厄介なことではあるが、神子は悪くないのだ。むしろこうして神子と布都という美少女に出会えたので横島的には損はなかったと言ってもいいだろう。

ちなみにフランはまだ調子が良くないので横島の膝枕で休んでいる。思っていたよりも心地よかったのか、すやすやと寝息を立てている。はたてはそんなフランを羨ましく思いながらもカメラのシャッターを切るのを忘れない。

「それにしても、今日はせっかくのあの日だったのについてないな」

「まあまあ。布都さんもチルノさん達も無事だったんですし、いいじゃありませんか」

あの日、の部分で横島の耳がピクリと反応する。別段横島にそういう趣味があるというわけではないのだが、〝あの日〟という言葉には女の子のあれやこれやな秘密が隠されていそうなので無意識に反応してしまったのだ。

「今日って何か特別な日なんすか？　何かこう、特別な修行の日とか」

「いえ、そういうわけではないのですが……」

横島は何となく気になったので、さりげない感じを装って探りを入れてみる。白蓮はそれに何か思うところもないようだが、言っていいものかどうか判断しかねているようだ。困ったように眉毛を〝八の字〟にしているのが可愛い。

「あー、別に隠すようなものでもないし……君にならいいだろう。そこの天狗も、口外しないのなら教えてやってもいいが?」
「はーい。こう見えて私は口が堅いからね。大丈夫よー」
「何かよく分かりませんが大丈夫っす」
神子は二人の答えを聞いて頷くと、懐から一冊のアルバムを取り出してみせた。はたてが「どこから!?」とツッコミを入れるが、彼女の周りには同じようなことが出来る者が大勢存在する。例えば隣に座っている煩悩少年とか。
「私と聖白蓮は月に何度か集まり、こうして写真を見せ合っているんだ」
「写真……っすか?」
神子が開いたアルバム。そこに収められていたのは、とある一人の少女の写真。そう、一冊丸々少女一人だけの写真が満載だった。
「OH……」
「これは……」
「まあ……♪」
二人が驚きから声を出す。横島は「どんだけ撮ってんだよ!?」という驚き、はたては「仲間を見つけた!!」という驚きの声だ。白蓮は先程までの落ち着いた様子からは想像出来ないほどに声が弾んでいる。

「この子は〝秦(はたの)こころ〟と言ってなー、私が作った面から生まれた面霊気……つまりは付喪神なんだが、これがもう可愛くて可愛くて」
「ええ、本当に。実はこころちゃんはうちで修行をしているのですが、とても真面目で、一生懸命に頑張っているんですよ。時々博麗神社で能を披露したりもしているのですが――」
　そこからの白蓮と神子の話は長かった。いかにこころは可愛いか、いかに頑張っているか、言葉を変えてはずっとそれらについてマシンガンのように話している。横島は二人に元の世界での上司である美神令子の母である美神美智恵、そして美神令子の友人である六道冥子の母親の姿を幻視する。
　――いや、ちょっと違うか？
　横島がそう思った理由は定かではない。強いて言えば、二人の雰囲気がそう思わせてしまったのだろう。彼女達――特に白蓮から漂う雰囲気は、若い女性のそれではない。横島は白蓮に、どこか年老いた雰囲気を見出していた。
「白蓮さんも長生きしてんのかな」
「……？　呼びましたか、横島さん？」
「ああ、いえ。何でも」
　ぽつりと呟いた横島の声に白蓮が反応する。内容が聞こえていたわけではないよう

だが、もし聞かれていたらと思うと。乾いた笑いが出てきてしまう。流石にそこまで失礼な真似を白蓮に働きたくはなかった。

横島は気分を変えるため、そして話の種にと改めてアルバムの写真を見させてもらう。すると、そこに映っている無表情の少女、こころの姿には見覚えがあった。

「……あ、この子って人里でたまに見かける子だ」

「おや、こころを知っているのかい？」

「ええ。……と言っても、話したこともないし、特徴的な格好をしているから覚えてたってだけで。……あと美少女だし」

なるほど、確かにこころの格好は特徴的だ。紫がかって見えるピンク色の髪、斜めにつけたお面、人の顔のようにも見える穴が空いたバルーンスカート、そしてとびきりの無表情だ。ついでとばかりに最後にぽそりと余計な一言をくっつける横島だが、今回はそれが良い方に働いた。

「分かるかい？　いやー、横島君、君は見る目があるようだね。こころが美少女とはよく分かってるよ。うん。よく分かってる」

「ふふふ、流石は紅魔館の執事ですね。あ、お煎餅食べます？　濡れ煎餅もありますよ？　瓦煎餅はどうでしょう？」

「それ関係ありますかね……？　あと、お気持ちだけで」

何だか面倒臭い感じの絡まれ方をしている横島。美少女に囲まれているのに、あまり嬉しくないと感じてしまうのはどうしてだろう。フランも騒がしいのが煩わしくなったのか、半分眠ったままの状態でのっそりと起き上がり、チルノ達の様子を見ているはたてのフトモモへとダイブした。寝起きは機嫌が悪いのか、はたまた横島の影響で図太くなったのか、我を出せるようになってきたのは喜ぶところではあるだろう。……多分。

「むー……ん、んん……？」

「おっ、と……大丈夫か？　俺の声が聞こえるか？」

隣で騒がしくしていたのが災いしたのか幸いだったのか、響子の大声で気絶していた少女の一人、布都が目を覚ます。しかし完全な覚醒には至っていないのか、状態を確認する横島の顔を見やり、そのまま一切目を離さずにゆっくりと起き上がってくる。ある種ホラーな光景だ。

布都はしばらく横島の顔を見ていたが、やはり体調は思わしくなく、頭がぐらぐらと揺れ始める。

「むむむ……何だか少し頭がくらくらするな……」

「さっきまで気絶してたから仕方ねーって。それよりどうだ？　気持ち悪いとかはないか？　頭痛は？」

「う、うむ？　いや、ちょっと身体がだるいだけでそういった症状は無いのじゃが……ところで、お主は一体……？　あとここどこ？」

布都は心配そうに顔を覗きこんでくる少年に少々顔を赤らめつつ、体の調子を確かめる。何故このような場所にいるのか記憶を辿るも、響子に本堂に案内させたところからプッツリと途切れている。恐らく、その時に何者かの手によって不意打ちを食らったのではなかろうか。布都はそう考えた。

何か情報はないかと眼前の少年に声を掛けつつ視線を巡らせてみれば、自らの主である神子がいた。

「太子様!!　……と聖白蓮!!」

「目が覚めたばかりで興奮するんじゃない。また倒れたらどうするんだ？」

「そうですよ。いくら仙人とはいえ今まで気絶していたんです。ゆっくり休まないと回復しませんよ？」

「え、あ、ごめんなさい」

神子を見て嬉しそうに、白蓮を見て威嚇するように表情をコロコロと変える布都は、その二人からの叱責に素直に謝った。二人とも自分の体調を慮ってくれているのが理解出来たからで、今は何だかんだ嬉しそうにしている。

「……で、我は何故気絶していたのです？　あとそこの彼は……？」

布都は目を大きく見開いて神子に問いを投げる。そのきょとんとした顔は中々に可愛らしく、横島も煩悩が揺さぶられたほどだ。

神子は布都の問いに簡単に答えていく。響子に案内された後、彼女の大声を至近距離で聞いて気絶してしまったこと。気絶した布都を休ませるためにこの部屋まで移動したこと。そして先程から所在なさげにしている少年――横島が適切な治療を施してくれたことなど。

事情を聞き終えた布都は横島に深々と頭を下げ、感謝を口にする。

「そうだったのですか……。横島殿、感謝いたします。我は尸解仙（しかいせん）の物部布都（ものべのふと）という。必ず、このご恩はお返しいたしますので……」

「ああ、いいよいいよそんな気にせずに。恩を返すー、とかじゃなくて、もっとこうラッキーだったなーくらいの感じで、普通にしてくれればいいよ」

「む、そうか？　ではそう思うことにしよう！　中々の謙遜っぷり！　我としては好ましいぞ!!」

下げた頭がもう反り返った。むふーと若干鼻息が荒い布都だが、どうやら既に体調は回復しつつあるらしい。彼女が現在浮かべている笑顔も段々と自信が深まって……というよりは傲岸不遜な面が滲み出てきており、やがて立派なドヤ顔になった。横島としてはその表情は可愛いし似合っていると思っているのだが、何故この状況でドヤ顔を浮

かべるのかは理解出来なかった。
「布都……もう少し真面目に感謝というものをだなぁ……」
「何というか、相変わらず残念な匂いがしますねえ……」
この布都の様子に神子と白蓮も呆れ気味だ。横島はあまり気にしていない様子だが、このままというわけにもいかないだろう。神子が布都に何事かを言おうと口を開くのだが、声を発する前に、横島が疑問を口にする。色々と気になっていたことがあったようで、視線は布都だけでなく神子にも向けられていた。
「ところで、神子さんってさっき布都ちゃんに〝太子様〟って呼ばれてましたけど、もしかして何か偉いさんだったりするんですか？」
「ん？　ああ、そういえばまだ言ってなかったね」
その質問が来るのは分かっていた……むしろ待っていたと言わんばかりに神子は立ち上がり、室内に入ってもずっと羽織っていたマントを翻し、キラキラと輝きながら名乗りを上げる。
「私は豊聡耳神子（とよさとみみのみこ）!!　人から尸解仙となった聖人であり、かつては聖徳太子と呼ばれていた者だ!!」
「――――な、なんだってええぇーーーーーっっっ!!!?」
聖徳太子。

飛鳥時代に存在した皇族であり、天皇を中心とした中央集権国家体制を確立させ、仏教を日本に広めた人物でもある。

横島が驚愕の叫びを上げる。それもそうだろう。歴史上に存在していた聖徳太子は男だったのだ。それが実は女の子、しかも美少女でしたなどと、簡単に信じられるものではない。

「……あ、でも日本って男尊女卑の傾向が強いし、もしかしたら記録を残す際に時の権力者とかが性別を変更させたのかな……？」

頭の中は驚愕に染まっているが、それでも思考は止めないらしい。神子の言葉には否定出来ないような説得力が感じられる。しかも彼女は美少女だ。美少女の言うことは正しいのかもしれない……。そんな思考が先程の回答に辿り着かせたらしい。

「ふふ。さあ、そこは私自身も関知していないから何とも。でも、私は確かに聖徳王。それは変わらないよ」

再び座り、微笑む神子の姿が輝いて見える。いや、実際に輝いているのだがそれは置いておいて。横島は神子の言葉を信じることにした。自分の元いた世界ではどうだったかは知らないが、この世界では聖徳太子は美少女だったのだ。その方が歴史の勉強をするときに楽しいし、何よりも嬉しい。もしかしたら他の歴史上の人物達も性別が違うのかもしれないのだ。

「聖徳太子がこんなに美少女だったなんて……これはきっと源頼光とか源義経、織田信長に宮本武蔵、沖田総司とかも美少女だったに違いない」
「やけに具体的ですね……？」
「はっはっは、もっと褒め称えてくれてもいいのだよ？」
どこか別の世界の電波を受信したのかもしれない。
「どうしよう……サインとか貰っても大丈夫なのかな……？」
「うむっ！　問題は無い!!　こうしてああして……ほら、我のサインだ!!」
「うん……うん……？　……あ、ありがとう、布都ちゃん……」
「気にするな！　治療の礼だからな!!」
聖徳太子のサインを欲しがった横島に、お礼とはいえ何故か自分のサインをプレゼントする布都。とっても微妙そうな顔をしている横島には一切気付く様子はない。むしろ横島に（一応）お礼を言われたことでドヤ顔に更に磨きが掛かっている。どうでもいいことだが、今までの布都のドヤ顔ははたてが漏れなく撮影済みだったりする。河童印のカメラの隠し機能、『無音シャッター』の力と、必死に空気になっているはたて自身の力だ。
横島は布都から貰ったサインを、一応劣化しないようにＵＶカットのフィルムに包んだりなどして念入りに包装した後、リュックに収める。昔からサインなどは大事にする

性質の横島なのだが、それが布都の虚栄心を大いに満足させることに繋がっている。ある意味相性の良いコンビなのかもしれない。

さて、と横島は一息入れ、もう一つ気になっていたことを尋ねる。聖徳太子だったという驚愕の事実が発覚したことにより忘れていたが、元々はこのもう一つの質問の方がより知りたかった事柄だったのだ。

「それで、〝しかいせん〟っていうのは何なんです？」

「うん。良い質問だ。簡単に言うとだね、尸解仙というのは一度死んで依代に肉体を託し不老不死となった者。つまりは仙人だ」

「仙人……!!　なるほど、それで俺の師匠に気配が似てたのか」

神子からの答えに横島は疑問が解けたのか、何度も頷く。その際に横島は小さな声で自らの師匠について呟いたのだが、それは神子にきっちりと聞こえていた。

「ほう？　もしや、横島君の師匠は仙人だったのかな？　そうならそうと言ってくれればいいのに」

「んー、まあ師匠っつっても向こうがそう言ってるだけって感じもあるんすけどね。有名なんだから弟子選びは慎重にしたらいいのに」

横島は嫌そうな顔で溜め息を吐く。本当は横島の方から修行を受けに行ったのであるが、それとこれとは話が別らしい。彼が美女だったならば喜んで師匠になってもらっ

たのだろうが、男、それも人間ですらないケダモノなのだから横島としては敬う理由が無さ過ぎる。あまりにも不敬極まりない。

「有名な仙人……？　それは私でも知っているようなお方なのだろうか？」

「え？　ええ、知ってると思いますよ。多分こっちの世界でも有名ですし」

「……？　して、横島殿の師匠という御仁は何という名前なのだ？」

横島の妙な言い回しに首を傾げる神子と布都の二人だが、それよりも好奇心が勝った。一体どのような人物が横島の師匠なのか、興味が尽きぬというものだ。

「確か、本人は〝天仙〟だか〝神仙〟だかって言ってたような。それはともかく、名前は〝孫悟空〟って言いまして、如意棒とかキン斗雲とかで有名な――――っ!!?」

――――瞬間、空気が変わった。

神子と白蓮がいつの間にか立ち上がっており、異様な迫力が込められた目で横島を見つめている。横島は二人の様子に戸惑い圧倒され、おろおろと二人に行ったり来たりと視線を彷徨わせることしか出来ない。

「神子さん……？」

「ああ……」

二人は視線を交わし、小さな声で言葉を交わす。白蓮の問いに対する神子の答えは首肯。嘘ではない、という意味だ。二人はぐわんっ、とおよそ人間とは思えないような動

きで横島の懐に入ってくる。「うひぃっ!?」という情けない叫び声が横島の口から漏れたが、それも仕方がない。今の二人は横島のミスで大損こいた美神並の怖さがある。常人に耐えられるものではない。

「君が……っ!!　君があの〝孫悟空〟の弟子だったとは……!!　やはり、やはり君は素晴らしいよ横島君!!」

「ああ……っ!!　あの〝闘戦勝仏〟のお弟子だなんて……!!　ありがたやありがたや……」

「白蓮さんが急にお婆ちゃんっぽくなったっ!?」

神子は横島の肩を掴み、やたらと熱っぽい目を向けたかと思えば、白蓮は手を合わせて横島を拝みだす。その仕草が妙にお婆ちゃんっぽいのが気になるところだ。ちなみに白蓮が信仰しているのは毘沙門天だが、実は神子もかつては毘沙門天を信仰していたことがある。

横島は二人の急激な変化についていけず、慌てるばかりなのだが、とりあえず孫悟空という名の猿爺がやっぱりとんでもない存在なのだということは再認識出来た。明らかに神魔に匹敵する二人がこれほどまでに崇めるのだ。彼の格というものがどれほどのものか、非常に分かりやすい。

「横島君……」

「は、はい……っ？」

柔らかに両手を包み、至近距離で目を覗き込んでくる神子に、横島はドキリとする。必死に空気に溶け込んでいるはたてがシャッターチャンス到来とばかりにカメラを構える。

神子は興奮を抑えられないとばかりに頬を紅潮させ、横島へと機関銃のように捲し立てる。

「素晴らしいな君は!!　本当に素晴らしい!!　君なら幻想郷の若者を導けるッ!!」

「いや……あの……え……？」

「どうかな横島君。――――組まないか私と!!」

「太子様っ!?」

これには横島だけでなく布都も驚いた。神子自ら、しかもこれほど熱烈に勧誘することなど、今までになかったのだろう。

「必要なんだ、君のような人材が。紅魔館の執事だって辞めなくていい。幻想郷にいる私の弟子二万四千人……共に育ててみないか？」

「二万四千人!?」

そんなバカなとツッコミを入れたいところだが、神子の雰囲気があまりにも本気過ぎた。何となく瞳がぐるぐると回っているような気がしなくもないが、その気の入りよう

は恐ろしいレベルである。
「そうだ！　もし私と共に来てくれるのなら、布都を技術指導員として二十四時間体制で君に付けよう!!」
「太子様っ!!?」
突然の飛び火に布都は狼狽する。火を放つのは得意だが、火を放たれるのは得意ではない。
布都は流石にそれは待ってくれと文句を言おうとしたのだが――――そこで、電流のように布都の頭を衝撃が走る。それは、天啓のような閃き。
――――待て……待つのだ我よ……!!　我は、どうしてここにいるのだ……!?
思えば不思議だった。いつもは屠自古の奴も一緒だったというのに、今日に限って我一人だけ。しかも計ったかのように命蓮寺に見慣れない客人がいる。――――これらは全て偶然なのか？
答えは全て偶然なのだが、布都はそうは思わなかったらしい。神子や白蓮は初対面であるはずの横島と随分仲が良さそうにしている。まるで、以前から知り合いだったかのようだ。
――――まさかっ!!?
ここで再び衝撃が走る。彼女はそれに思い至った。そう、神子と白蓮と親しい男性。

そして何故自分一人だけが連れてこられたのか、その理由に。

――――そう、これはつまり、太子様と聖白蓮がセッティングをした、我と横島殿との――――お見合いっっっ!!!

布都は真実（笑）へと辿り着いた。そう考えれば全ての辻褄が合うっ!!　などと考えている布都の頬は、どんどんと紅潮していっている。

――――横島殿が我の婿殿!?!!　い、いやいや待つのだ物部布都よ。一旦落ち着くのだ。例えこれがお見合いの席だとしても、必ず結ばれなければならないということはないはずだ。気に入らなければ断ってしまえば良いのだ。

よし、ならばまずは一つ一つ考えていこう。まずは横島殿の容姿だ。……平凡だな。うん、平凡だ。しかし、笑顔を浮かべている時は何とも言えぬ愛嬌がある。何と言うか、傍で見ていたくなるような、そんな暖かな笑顔。……お、おや？

では次に彼の肉体について。我としてはあまり筋肉が多いのは遠慮したいところじゃが……うん、いい感じだの。程好い筋肉の付き方である。足も長いし、これがいわゆる〝もてる体型〟ってやつなのかなー？

それと……うん。これは何となく我にも分かる。横島殿は恐らく――――精・力・絶・倫!!!　これは……あれかの？　道教には房中術があるから、それを期待してのことなのかなー？　こ、心の準備が……!!?

後は収入とかについてだけど……確か紅魔館の執事をやってるのだったか。ならば収入は高い方……のはず。

「……」

「布都、どうかした？」

急に顔を赤くして俯いた布都に、神子が声を掛ける。布都はその声に反応したのか、キッと横島を見据え、口を開く。

「あの……横島殿は、食べ物で好き嫌いや、趣味等はおありか……？」

「え……？　あーっと、イモリが嫌いかな？　前まではタマネギも食えなかったけど、今は何とか食えるようになったし。好きな食べ物はハンバーグとか……まあ、いっぱいかな」

「ほうほう……なるほど」

「趣味は……こっちでは特に無いんだけど、強いて言えば仕事が半ば趣味になってきてるかな？　あとは美鈴や妖夢ちゃんに習ってる中国拳法……特に太極拳や剣術が趣味とも言えるのか……」

「ふむふむ……!!」

横島の答えに布都の鼻息が荒くなる。神子は布都の質問の意図が理解でき、愕然とした表情を浮かべている。

布都の鼻息が荒い――彼女が喜んでいるのには理由がある。まず、道教では食事においても何かを禁止する律はなく、色々な食物を食べることで均衡が取れ、長生きが出来るとされている。

更に拳法を通じて気を整え精神の安定を図り、瞑想で無為を為すことも道教でいう〝道〟に達することに有効であるらしい。しかも太極拳は道教に由来する武術なのだ。

――張三豊。中国の伝説にも現れる仙人と同名であり、この彼こそが道教の陰陽五行思想や吐納法と呼ばれる呼吸法を取り入れて太極拳を編み出したのだ。

――こ、これは……これは、我にとって――理想のお婿さんなのではなかろうかっ!!?

「おーい、布都ちゃーん?」

横島が布都の目の前で手を振っても反応を返さない。布都は顔を真っ赤に染めながら、俯いて何事かを考えているようだ。

神子は布都の様子を見て、これは何が何でも横島を自陣に入れたいと考える。ちらりとライバルの白蓮を見てみれば、彼女も布都の様子から大体のことを察し、「あらあら」と呟きながら満面の笑みを浮かべている。とりあえず、今のところは見守るようだ。

「どうだろう横島君。そこの妖精達もまだ目を覚まさないことだし、もう少し君について色々と話を聞きたいのだが……」

「いや、まあ、構わないっすけど……」
　横島は神子にぐいぐいと押される形で答えてしまうが、それでも念のために視線ではたてに問う。はたては既にぐっすりと眠ってしまっているフランの頭を撫でながら、一つ頷きを返す。了承のサインだ。
「じゃあ、面白くないかもしんないっすけど。俺の話で良ければ」
「そうか！　いやーすまないね横島君。ほら、布都。いつまでもぼーっとしてないで、横島君に何か質問はないのか？」
「えっ!?　ええーっと、あのーっ……!!」
　咄嗟のことに布都は対応が出来ない。あわあわと慌てて質問を考える姿は、とても可愛らしかった。
　こうして、命蓮寺は寺院にあるまじき賑やかさを見せる。そこにあるのは笑顔。偶には、こんな日があってもいいだろう。

第五十六話
『賑やかな命蓮寺』

第五十七話

第五十七話
『横島君、師匠の物語を知る』

チルノ達が目覚めるまで、白蓮と神子は横島に斉天大聖が如何に凄い存在なのかを説明していた。

曰く、東海竜王から如意棒を奪った。

曰く、閻魔を散々に脅して閻魔帳から自らと仲間の名前を消し、不老不死となった。

曰く、蟠桃を盗み食いし、呼ばれてもいない宴会に強引に参加し、太上老君の金丹を食った。

曰く、天界で十万の神兵を相手に無双した。

曰く、八卦炉で焼かれても生きていた。……どころか目が燻されて赤くなっただけに留まった。

曰く、六人の光の巨人と協力し、仏像を盗んだ犯罪者とたまたまその場に出現したと思われる怪獣達を皆殺しにした。

曰く、五人の仮面を被ったバイク乗りと協力し、敵対組織を皆殺しにした――――などなど、自らの師匠のやりたい放題な話を臨場感たっぷりに聞かされた。

横島としては前半はともかく、後半の二つは「いや、それ本当に猿爺がやったの？」とツッコミたくて仕方がない。その後半のインパクトも凄かったのだが、特に横島が興味を惹かれたのは、師匠の使う武器のこととお仲間のこと。

さて、孫悟空の武器といえば如意棒――――如意金箍棒（にょいきんこぼう）であるが、これは元々武器ではなかったらしく、海と大河の深さを測定する際の重りだったのだそうだ。

如意とは自由自在という意味であり、その通りに自在に大きさを変えることが出来る。最大のサイズでは、何と天国と地獄を繋げてしまうほどにまで伸ばせるのだというのだから驚きだ。

悟空はその怪力から普通の武具では満足出来ず、桁外れの重量だった如意棒を武器として使用することにしたのである。

ちなみにその重さは一万三千五百斤。分かりやすく言えば、およそ八トンもの重さである。これには横島も大層驚いた。

――――そうかぁ……。ワイはそんな恐ろ（おっそ）しい棒でボコスカ殴られとったんやなぁ

……。よく生きとったなあ……よく生き残れたなあ……!!

「あ、あの……どうしたの、横島さん……？　すっごくガタガタ震えてるけど、何かあったの……？」

「何でもない……。何でもないんやはたてちゃん……」

知りたくなかった事実に、今更ながら極上の恐怖を味わってしまう。酷く怯えた様子の横島をはたては何とかしたかったのだが、フランを膝枕している彼女では微妙に動き辛い。しかし、それでもはたては何かをしてあげようと横島の恐怖が安らぐようにと、手を握る。

反対側では急に怯えだした横島に困惑しながらも、はたてと同じように横島の手を握る布都の姿があった。

「ふうぅ……何かごめんね、二人とも」

「こ、こんなことならいつでも私はその……」

「何にせよ、落ち着いたのなら良かったのである！」

二人は対照的な表情ではあるが、笑って許してくれた。頬を染め、照れくさそうなはたてに、天真爛漫な笑顔を見せる布都。横島の心の中の恐怖が見る見るうちに消え去っていくようだ。二人の柔らかな手は、それだけで癒しであった。

「んー……。しかし、俺って師匠のこと何も知らなかったんだな。三蔵法師に弟子入り

して天竺を目指す……っていうのは知ってたけど、弟子入り前の話とか仲間とかの詳しいことも全然知らなかったし」

はたて達のおかげで落ち着きを取り戻した横島は、改めて自分の師匠である斉天大聖孫悟空について考える。話を聞いてよく思い知ったが、本当にとんでもない存在だった。天界でも屈指の武神、というのは伊達ではなかったようである。

そもそも斉天大聖孫悟空が活躍する物語〝西遊記〟は名前を知らぬ者は存在しないくらいには有名であろう。特に調べてもいないのにいくつかのエピソードを知っていたくらいなのだから、その知名度や話題性、影響力といったものは桁違いだ。だからこそ、横島も自らの師匠であるのに知ろうとしなかったようなのだが……。もし仮に孫悟空が美人でナイスバディなお姉様だったら話は別だっただろう。

「それにお仲間もなぁ。猪八戒も沙悟浄も色んな意味でエグ過ぎる……」

元々孫悟空をメインに聞かせてくれた話だったので内容はさらりとしたものだったのだが、その実態はかなり衝撃的だった。

横島の認識ではこの二人は人間に友好的な妖怪で、善意から三蔵法師の手助けをしてくれている……くらいのものだったのだが、その考えは木っ端微塵に打ち砕かれた。

まず猪八戒だが、元々は天帝の水軍を指揮する天蓬元帥という提督であった。しかしこの天蓬元帥、横島と同じく恐ろしいまでの女好きという一面があったのだ。

この頃の彼は嫦娥という月の女神に夢中であり、蟠桃会という宴の際、強かに酒に酔った彼は嫦娥を見かけ、湧き上がる煩悩のままに強引に言い寄ってしまう。

天蓬元帥は天帝によって罰せられ、鎚で二千回打たれた後、身分を剥奪された上に地上に落とされてしまったのだ。

そして彼は人間として真っ当に生きていこうと思っていたのだが、どういうわけか人間ではなく妊娠していた雌豚の胎に宿ってしまい、豚の子として生まれ変わってしまうのである。

そうして彼は何やかんやあって人を食う妖怪となり、山に篭っては人間を襲っては食う生活を送るのだ。

横島はその〝何やかんや〟のことも知りたかったが、白蓮達は途中から目を覚ましていたチルノ達に配慮したのであろう。血生臭い部分は意図的にぼかされているようだった。

ちなみにその後観音菩薩とその弟子に「三蔵法師の供をして天竺まで行くなら罪は許され、来世では天界に住める」と言われ、罪を詫びた天蓬元帥は二度と人間は食べないと誓い、そんな彼に観音菩薩は〝猪悟能（ちょごのう）〟という法名を与え、三蔵を待つように言いつけた。

「猪八戒って三蔵法師が付けた名前だったんですね」

「俺も猪悟能って名前は知らなかったな」

所々かなり端折られているが、それでも白蓮達の説明は大妖精達にも分かりやすかったようだ。チルノは「何で名前が三つも四つもあるの……？」と、首を傾げているが。

「しかし、可哀想なのは沙悟浄だよな。後のはっちゃけっぷりもアレだけど」

「ふむ……酷い話であるの」

横島の呟きに布都も深く同意する。二人だけでなく、他の皆も沙悟浄には同情的であるようだ。

この沙悟浄、彼も元々は天帝の近衛大将である〝捲簾大将〟という存在であった。彼の運命は、蟠桃会で出会ったとある人物によって狂わされてしまう。

蟠桃会とは簡単に言ってしまえば天帝の母である聖王母の誕生会であるのだが、この宴会に呼ばれなかったことを恨んで大暴れし、食事や酒を食い荒らしまくる男がいたのだ。

そう。――――孫悟空である。

この時、捲簾大将は誤って天帝の宝である杯を割ってしまったのだ。これに天帝は激怒する。

哀れ捲簾大将は鞭で八百回打たれ、地上に落とされてしまう。しかもその場所は砂漠のど真ん中だ。

昼は飢えと渇き、夜は凍え、更には七日に一度、天帝は天から剣を飛ばし、捲簾大将の脇腹を抉る。

「猿爺も大概だけど、ここだけ聞くと天帝ってド畜生だよな」

「昔の鬼社会や、今の天狗社会も流石にそこまで酷くないのにねー」

理不尽な目に遭うことに定評のある横島は、遠い目をしながら溜め息を吐く。この後の展開も、「仕方ないんじゃないかなぁ」という同情心が湧き上がり、あまり非難出来ないのだ。

そんな過酷な日々を過ごした捲簾大将はどんどんと歪んでいき、砂漠に迷い込んできた人間を食らう妖怪へと変わっていった。

元は人と同じ姿をしていた彼は、異形の者へと成り果ててしまったのだ。

そうして荒んだ日々を過ごしていた彼の元に、二人の人物が現れる。観音菩薩とその弟子だ。彼等は天蓬元帥の時と同じように、三蔵法師の供をして天竺まで行けば、罪を許されて来世では天界に住めるようになると言う。

天界に戻りたい捲簾大将は罪を詫び、三蔵法師の供になると誓う。そんな彼に観音菩薩は〝沙悟浄〟という法名を与え、三蔵法師が来るまで待っているように命じたのだ。

「やっぱり天界には戻りたいんだな」

「あたいだったら……戻りたいかなー？」

「俺としては天帝が嫌だな。顔見たら絶対ブチ切れるわ」

チルノは何度も首を傾げながらうんうんと唸っている。あんな目に合わされた天界に戻りたいのか、と考えると、どうにも上手く纏まらないらしい。

さて、最後は三蔵法師であるが、彼についても衝撃は大きかった。何とこの三蔵法師、今までに九回も死に、その度に生まれ変わっているのだ。毎度天竺へと旅立つのだが、いつも同じ場所で立ち往生した挙句、同じ妖怪に食い殺される。

では、その妖怪とは何者なのか？　真実を知った横島達はそれはもう驚いた。何故ならその妖怪とは、沙悟浄だったのだから。

沙悟浄が首に巻いている九つの髑髏。あれは他でもない、三蔵法師の前世達の髑髏だったのだ。

「自分を食ってきた奴を仲間にするとか、三蔵法師マジパネェっすよ」

「本当よねー……」

自分を九回食い殺した相手を仲間にする三蔵法師には、横島達も感心するしかない。もし自分が同じ立場であったのなら、絶対に仲間にはしなかったであろう。三蔵法師はお人好しだったそうだが、そのレベルは遥かに超えていそうなエピソードだ。

「ちなみに三蔵法師様が乗っている白馬は玉龍といって、元々は龍だったんですよ」

「へー」

「他にも意外なエピソードといえば、男である猪八戒と三蔵法師が妊娠してしまった話などがあるな」

「どういうこと!?」

白蓮と神子が語る孫悟空とその仲間達の話は大変に面白かった。気付けばチルノや大妖精も夢中になって聞いており、昼寝から目覚めたフランも楽しそうに聞いている。

白蓮は時折説法というか、難しいお話を混ぜるのが玉に瑕であったが、それらも全てが為になる話であった。流石は僧であると言えるだろう。その点、神子は聞く者の好奇心を煽るような話し口調であり、物語を聞かせる話し手としては最高の部類だろう。いつの間にか布都もキラキラとした目で神子に話の続きをせがんでいる。

いつしか話も終わり、その場の皆にはまったりとした、しかし充実感に満ちた空気が漂い始める。面白かった。それが皆に共通する感想だろう。まさに一大スペクタクルと言えるだろう。

特にタイの巨大ロボットである青い猿神（ハヌマン）が日本の宇宙サイボーグと協力し、悪の組織を叩き潰す話はチルノ達にも好評であった。その話を聞いている横島は何故か白目を向いていたが、それは特にどうでもよい話なので置いておく。

時間を忘れて話し込んで数時間、すっかりと日も暮れてしまった。

「あっと、そろそろ帰らないといけないか。チルノ達も早めに休ませないといけないし」

「あら、私としたことが……。どうもすみません。ついつい話し込んでしまって……」
「いや、久々に子供に戻ったかのような時間を過ごせたよ。非常に有意義な時間だった」
一行の中でも見かけだけは年長者である横島が暇乞いをし、白蓮も顔を赤らめて自省する。神子は楽しげな笑みを浮かべ、どこか満足気に息を吐き、帰り支度を整える。といってもマントを羽織り、アルバムを仕舞うだけであるが。
「チルノ達はどうする？　念のために永琳先生に診てもらうか？」
「あ、お願いできますか……？」
「んー？　大ちゃんがそう言うならあたいもー」
今から紅魔館に戻り、診察を受ければ夜も遅くなるだろう。チルノは霧の湖に住んでいるらしいが、やはり安静にしておかなくてはならない。これで二人は紅魔館にお泊り決定だ。
「横島殿！　その、またお会いできますでしょうか……？」
「んー？　そりゃあまあいつでもって訳にはいかないけど、都合が合えばな。美女美少女との逢瀬とか大歓迎だし！」
「そ、そうであるか……!!」
最初はもじもじと恥ずかしそうに横島に話しかけていた布都だが、横島から美少女認定されたことで表情が明るくなる。まさに有頂天といった風情だ。

「ふふ。よほど横島君が気に入ったようだね」
「はい！　太子様がくれたこの好機、必ずや物にしてみせます!!」
「……。？　何だか分からんがその意気や良し!!」
　布都は今回の横島との出会いが神子と白蓮が準備したものだと考えている。神子には布都が何を言っているのかよく分からなかったが、とりあえず空気を読んで褒めておくことにする。河童製の新型ヘッドホンはとても高性能であり、彼女の能力を完璧に制御しているようだ。
「そんじゃ、白蓮さんに神子さんと布都ちゃん。俺達はこれで」
「我々も失礼するよ。白蓮、次は貴女がアルバムを用意する番だから、忘れないように。横島君も、元気で」
「うむ、世話になったの。横島殿、いずれ紅魔館に挨拶に向かわせていただきます」
　それぞれがそれぞれと挨拶を交わし、家路に着く。チルノと大妖精は念のために横島とはたてに抱えられている。本人達としては既にダメージは感じられないので辞退したかったのだが、心配性な横島がそれを許さなかった。ならば仕方ない、と大妖精が横島に、チルノがはたてに抱えられることになる。
　これは大妖精が横島とチルノの距離感に嫉妬した結果、これ以上チルノを横島に近づけさせてなるものかと動いた結果なのだが、現在大妖精は真っ赤に染まった顔を両手で

隠し、悶えながら横島の腕の中に収まっている。

横島の『抱っこ』はデフォルトでお姫様抱っこなのだ。彼の温もりやら力強さやら匂いやらで大妖精はいっぱいいっぱいになってしまった。それを羨ましそうに眺めるのはフランとはたて。チルノは悶えている大妖精に首を傾げながらも、「あたいも今度やってもらおう」と考えるのであった。

第五十七話
『横島君、師匠の物語を知る』
～了～

「――――何てことなのっ!? 私が、こんな簡単なことに今まで気付かなかったなんてっ!!」

ここは紅魔館の大図書館。その中央に存在する読書スペースにおいて、この空間の

主、パチュリーが悲鳴のような声を上げていた。
パチュリーは数枚の紙を取り出し、それに何事かを書き連ねると、それを魔法で鳥の形に折り曲げて、簡易的な使い魔とする。
「これを魔理沙とアリスの下へ……!!」
パチュリーは魔法を発動し、遠く見える窓から鳥となった手紙を魔法の森へと飛ばす。彼女達ならば、きっと翌日には来てくれるだろうことを信じて。
パチュリーは気付いてしまった。彼女にとって、とても看過出来ないことが起こっていると。
危機感を募らせる今のパチュリーを、親友のレミリアが見たらこう言うだろう。
――――まーたどうでもいいことでシリアスな空気を出して……。
今のパチュリーに普段の冷静さは存在しない。彼女の瞳は、どよどよと澱んでいた。

第五十八話

チルノ先導の幻想郷案内から一夜明けて、翌日の午後。
横島は新たに紅魔館のメイドとなった赤蛮奇と影狼と共に、おしゃべりをしながらお菓子作りに勤しんでいた。
影狼は長袖ロングスカートのヴィクトリアンメイド型。影狼は極端に肌の露出を嫌うので、シンプルなロングドレスタイプのものが選ばれた。影狼の雰囲気ともマッチしており、横島も「綺麗だ」と言ってご満悦である。
変わって赤蛮奇は長袖ではあるが、かなり短いミニスカートのフレンチメイド型。全体的にフリルが多く、更には普段着用しているマントの色違いのものも着けており、いつもと変わらず口元を隠している。
それは横島からすればおかしな組み合わせと言えたのだが、しかし、それ以上に何とも不思議な可愛らしさを表現している。「可愛い」と褒める横島の顔は美少女二人の前に歪んでいた。
さて、本来ならばまだいくつか存在する幻想郷の有名どころを案内していないのだ

し、本日も未知の場所へと繰り出す予定だったのだが、命蓮寺での一件があったため、念のために一日休みを挟むこととなった。

　いくら外見が幼いとはいえ、彼女達は妖精。体調は既にバッチリ快復しているのだが、永琳から「めっ」されてしまったので大人しく言うことを聞いている。その様子を間近で見てしまった鈴仙はとても遠い目をしていた。何やらトラウマを刺激されたようである。

　もっとも、チルノも永琳に相談したいことがあったようなので好都合といえば好都合であったのだが。

「……昨日は随分と大変な目に遭ったんですねー」

「ああ。俺やチルノ達はともかく、フランちゃんやはたてちゃんにまでダメージを与えられるとは思わなかった」

「流石は山彦の妖怪といったところか……」

　単なる大声とはいえ、弱小妖怪が大妖怪相手にダメージを負わせたと聞いて、赤蛮奇は感心しきりだ。惜しむらくは自らがそれを再現出来ないところだが、赤蛮奇とて長くを生きる妖怪だ。大きな力を持っていなくても、平穏に生きることが出来ればそれが最上だと理解している。

　ここ最近は異変が立て続けに起こったせいで忘れかけていたが、そも異変なぞそうそ

う連続して起こるものではない。そう、たとえ一年の間に二十回以上も異変が起こっていたとしても、それは連続して起こっているわけではないのだ。

「それはそうと……凄いですね、横島さん」

「んー？　何が？」

「いや、何がって……」

尊敬の目で横島を見る影狼に疑問符を浮かべる横島。彼は何も特別なことはしていない。紅魔館では……いや、他の者には異常なことでも、それが横島や咲夜にとっては当たり前のことだったからだ。

それに気付いていない横島に、赤蛮奇は苦笑とも呆れともつかない息を漏らしながらもそれを指摘する。

「横島さんは、一体何人前のクッキーを作る気なのさ？」

「あー？」

思わず、といった風に横島の手が止まる。

そう、彼等が作っていたのはオーソドックスなクッキー。現在の横島でも作れる数少ない菓子の一つであり、最も数を作れる菓子だ。

ちなみに他に作れるものはプリンにホットケーキ、クレープといったもの。とりあえずの目標は美味しいホールケーキを作ることである。

二人は横島に教えてもらいながら作っているのだが、目の前の光景に手が中々進まない。変わりに口が動いてしまうのであった。

「俺が休んでる分、妖精メイド達の負担が増えてるからな。そのみんなの分と、お嬢様達と永琳先生達の分。紫さんの分に文ちゃん達、チルノ達の分に、当然妹紅の分も。もちろん影狼ちゃん達の分もあるぜー？」

「あ、ありがとうございます……！」

「……一体何人分なんだろう。それはそうと、ありがとう」

横島は誰にあげるのかを確認しながらも動きを止めず、驚異的なスピードで生地を作っていく。流石に一人分の量は少なめだが、それでもとんでもない量であることに変わりはない。

赤蛮奇は横島の力量に舌を巻く。味は横島曰く「そこそこ」とのことだが、ここまで出来ればそれはもう充分に立派であろう。しかも、更に彼の上には咲夜というパーフェクトメイドが存在するというのだ。

横島よりも遥かに早く、横島よりも遥かに多く、横島よりも遥かに美味いクッキーを作る。それはまさに神業である。赤蛮奇は溜め息とともに「とんでもないメイドもいたもんだ」と呟いた。

「……あ、妖精メイドで思い出しましたけど、お昼ご飯の時は驚きましたよー。横島さん

の膝の上に妖精メイドが座って、〝あーん〟でご飯を食べさせてもらってるんですから」

「ああ、何か咲夜さんの言いつけでなー」

「それだけ妖精メイド達に好かれてるってことなんだろうけど……」

純粋に微笑ましいものを見た風に語る影狼と、若干冷ややかな目で横島を見る赤蛮奇。横島としては成り行きでそうなっただけに、やましいことなど何一つないのだと声を大にして主張したい。

「ぶっちゃけ面倒じゃないの？」

「面倒ってことはないけど……やっぱり、もうちょっとこう発育がだな……」

横島は両手で空中に理想の女性の身体のラインを描く。冷ややかだった赤蛮奇の視線が更に冷たくなっていくが、それでも横島は譲れない。妖精メイド達は可愛くはあるが、それでもやはり〝可愛いだけ〟なのだ。彼の煩悩を刺激するには色々と足りない。

「妖精メイド達のスタイルが良かったら、それはそれで苦しむんじゃあ……？」

「……」

横島は突っ込んできた影狼と視線を合わせようとしない。ただ冷や汗を流して虚空を見つめるのみだ。その様子から図星であることが容易に見て取れる。

横島は二人の生温かい視線から逃れる為に更に気合を入れてクッキー作りに専念す

るが、そこで、彼に突如として異変が訪れる。
「――――なっ!?」
何の前触れもなく横島の足元に浮かび上がる魔法陣。それは出現と同時に輝きを増していき、ついには目を開けていられないほどの輝度となる。しかし、その輝きも一瞬のこと。あまりの眩しさに目が眩んでいた影狼達が視力を取り戻した時には、そこに横島の姿はなかった。

第五十八話
『魔女のお茶会』

「さて、改めて今日は来てくれてありがとう、二人とも。それで、本題に入る前に聞きたいことがあるの」
紅魔館に存在する大図書館の中心部。そこには三人の少女達の姿があった。

まずは図書館の主ことパチュリー。彼女に呼び出された都会派魔法使いのアリス、そして同じく呼び出された普通の魔法使いの魔理沙だ。

三人はテーブルに着き、小悪魔が用意してくれた紅茶を楽しんでいる。一息ついたパチュリーは本題を切り出す前に、まず気になっていたことを聞いてみることにする。

「アリス……あなた、何でそんなにやつれてるの？」

「え……？」

パチュリーの指摘に、アリスは焦点の定まっていない目を向けながら、首を傾げる。その際に首から「ゴキィッ」という音がしたりしたが、アリス自身は気にしていないようだ。

ふらふら、ゆらゆらと揺れる頭は落ち着くことはなく、髪はボサボサ、肌も荒れ、目の下には濃い隈が出来ている。魔理沙とパチュリーが憧れた〝可憐な〟アリスの姿はどこにもない。

「聞いてくれよパチュリー。アリス、もう何週間もまともに寝ないで研究を続けてんだぜ？」

「何週間も!?」

アリスの状態から寝ていないのだろうとは思っていた。だが、まさかそれが何週間も続いているとは想像していなかった。魔理沙が自分も知らなかったここ最近のアリス

の近況を知っていたことに少々思うところがないではないが、今はそれを口に出している時ではない。

そう。今はアリスに何があったのか、何故そんなことになっているのか、それを解き明かす時だ。

「……で、一体何でこんなことに？」

パチュリーはごくりと唾を飲み込んで魔理沙の言葉を待つ。深刻な雰囲気を醸し出しているが、こういった場合真実は大したことではないのが世の常である。そして、それはやはり今回も当てはまった。

「いや、以前アリスが横島の毛髪と血液を手に入れたらしくてな？　自分の人形の研究の気分転換に色々と調べてみたらしいんだよ。そしたら、あいつの血液がかなり優秀な魔法の触媒として使えるらしいことが分かって、そこから色々と研究しているうちに止まらなくなったみたいでさ……」

「ああ……」

納得、とばかりにパチュリーは頷く。

そもそも横島は優秀な霊能力者であり、その身に多くの神魔族を宿し、その力を取り込んできたのだ。そんな彼の血液だ。なるほど、優秀な触媒となるのも頷ける。

それほどの触媒があるのだ。その研究とやらはさぞかし楽しかったのだろう。でな

ければここまで熱中するはずがない。
「何か、最近ではその血を培養して人形に組み込もうとしてるとか何とか……」
「ちょっとアリスッ!!　それは嫌な予感がするから止しなさい!!　絶対ろくな事にならないわよっ!!」
　魔理沙が教えてくれた情報に、パチュリーは顔を青くさせてアリスの肩を掴み、必死に揺らす。彼女の脳裏を過ぎるのは横島の煩悩を持った自立人形の群れ。想像するだに恐ろしい。
　そんな未来は許さないとばかりに、有らん限りの力でアリスを揺さぶるパチュリー。がっくんがっくんと盛大に揺れるアリスの頭は残像が出来そうな勢いだ。
「ちょっ……やめっ……出ちゃっ、出ちゃうからっ……!?」
　ただでさえ悪かったアリスの顔色が、更に悪くなる。わずかばかりに入っている胃の中のものが外へと飛び出してしまいそうだ。
　パチュリーはアリスの訴えにようやく正気を取り戻し、息を大きく乱しながらも謝罪をした。急な激しい運動はパチュリーの少ない体力を削り取っていく。
　今ではパチュリーもアリスも虫の息となってしまっていた。
「お前ら、もう少し体力つけようぜ……?」
「わ、私は……研究のしすぎなだけだから……っ」

「私は、喘息、持ちだから……っ」
「ああ、うん……」
とても生温かい視線を送る魔理沙に、二人はそっと視線を逸らした。

「で、結局パチュリーは何で私らを呼んだんだ？」
先程の騒ぎから一息つき、魔理沙がそう切り出した。
今回魔理沙達がこの図書館へとやって来たのは、パチュリーが呼び出したからだ。何でも、とある重大な真実に気が付いたとのことなのだが……何故だろう、絶対にそんな大層なものではないと二人の勘が告げている。
「そうね……これは、とても重要なことなの。それこそ、私の今後を左右するような……」
「……それは、一体？」
緊迫感を煽るパチュリーの言葉に、二人は先程の勘を横へと放る。
そうだ。親友であるパチュリーが何かに悩んでいるのだ。それの手助けくらいはしてやろう。魔理沙は軽く結論を出す。
魔理沙の腹が据わったのを察知したのかは定かではないが、パチュリーは重い口を開き、ついに二人を呼び出した理由を告げる。

そして、それは――――。

「私――――最近、出番が少ないのよ」

本当に、どうでもいいことだった――――。

「……」

「……」

沈黙。二人はそれを聞いても何も話さない。当然だ。むしろ何を話せと言うのか。

「私――――最近、出番が少ないのよ」

「一回聞けば分かるわよ」

「つーか、それを私らに言うのか？」

いかにも私困ってますという風に同じ言葉を繰り返すパチュリーに、流石のアリスも苛立ちが募る。

二人の感想は共通している。魔理沙とアリスに比べたら、パチュリーはむしろ出番は

多いほうだ。
「……分かっていないわね。あなた達は何も分かっていないわ」
「あー？」
やれやれとばかりに首を振るパチュリー。それは魔理沙達だけでなく、見る者全てに苛立ちを与えてくれそうな仕草だ。
「いい？　あなた達は横島と同居してないけど、私は同居しているの。しかも割かしフラグっぽいものが立ったりしていたのよ？　それなのに出番が減るってどういうことなの!?」
「あー、いや。それは……」
「横島の前で生チチ放り出してみたり、お姫様抱っこされてみたりと、王道的ＴＯＬＯＶＥるだって発生したのに!!」
「な、生チ……っ!!?」
「あ、あなた何やってるの……!!?」
パチュリーのまさかのカミングアウトに魔理沙達の頬が真っ赤に染まる。まさか、そこまでのラッキースケベが発生していたとは思ってもみなかった。
しかし、言われてみればパチュリーは年頃の男性と同居しているのだ。そういったハプニングが起こってもおかしくはない。

「しかも〝私も横島が好きになるかも～？〟みたいな発言だってあったのに、それからまるで進展なし!!　別に何かあってどうこうってわけじゃないけど、作者はそこらへんテキトー過ぎるのよ!!　もっとちゃんと話を練ってから投稿を――――!!」

「あ、おい馬鹿!?」

魔理沙が慌ててパチュリーの口を塞ぐも、時すでに遅し。

パチュリーの頭上には久々登場の天罰の雷雲がスタンバイしていた。ゴロゴロと重音を発し、瞳を灼く稲光が今にも迸らんとしている。

「……ふんっ」

しかし、パチュリーはそんな雷雲などまるで恐れず、手を掲げ、瞬時に宙に魔法陣を描いた。

途端、走る雷光。その稲妻はパチュリーの魔法陣に接触――――する前に、魔法陣から現れた何者かに殺到することとなる。

それは……横島だ。

「――――え？」

「――――え？」

「――――え？」

「――――横島、お願い」

天罰の雷、横島を直撃――――!!
「アバーーーーーーツッツ!!?」
「よ、横島ーーーーーー!?」
雷に打たれ、黒こげとなった横島が図書館の床に転がる。あまりにもあんまりな仕打ちに魔理沙とアリスはドン引きだ。
「何するんすかパチュリー様!?　人としてそーゆー避け方が許されると思ってんすか!?」
「うわっ、もう復活した!?」
横島を不憫に思ったのも束の間、当の本人が一瞬にして復活し、パチュリーへと抗議を始める。相変わらずの復活速度だ。
「むう……悪かったってば」
「そんなんで許してもらえるとお思いですかー!?　許して欲しいならもっとこう俺が嬉しくなるようなサービスを――――っ!!」
顔を背け、唇を尖らせて謝罪を口にするパチュリーだが、どう見ても悪びれた様子はない。当然横島は憤慨し、次いでとばかりに最低なことを要求しだすのだが、不意に彼の言葉は途中で途切れてしまう。
「……っ!?」

パチュリーが、しなだれかかるように横島に身体を預け、まるで何かを求めるかのように彼の首に自らの腕を回したのだ。

「ほ、ほあああああ……!?」

「……許して。ね、横島……」

「え……!? え、ええ……っ!!?」

「う、うわあ……うわあああ……っ!!?」

回された腕に導かれるように、横島の顔がパチュリーへと引き寄せられていく。今やパチュリーの唇は横島の耳に触れそうなまでに接近しており、彼女が口を開くたびに耳朶に彼女の吐息がかかり、甘い声が耳を、甘い匂いが鼻孔を擽る。

それほどの至近距離だ。当然彼女の豊満な胸が横島の胸板に押し付けられて面白いように形を変え、その柔らかな感触を余す所なく伝えている。

突然目の前で繰り広げられるアダルティな空間に、そういったことに慣れていない少女二人は驚きの声を上げるしか出来ない。魔理沙などは両手で目を塞いでいるのだが、バッチリと指の隙間から覗いている。

「あああ……!! あああああ……っ!?」

横島はもういっぱいいっぱいといった様子だ。あとほんの少しの刺激で煩悩が暴走してしまうだろう。横島はそれを想像し――――何故か、急速に煩悩が減衰していく。

どうしたのか、と疑問に思う暇もない。パチュリーは未だに密着中だ。再び〝むくむく〟と煩悩が膨れ上がってくる。それはもう〝むくむく〟と。しかし、それと同時に煩悩が〝しおしお〟と減衰する。

結局、横島は数分間煩悩の〝むくむく〟と〝しおしお〟を繰り返し、パチュリーの甘い拘束から開放されるまでの間、心をガリガリと削られるのであった。

「……」

「ど、どうしたんだ、あいつ……？」

現在、横島は真っ白になってイスへと座っている。白目を向き、何やら口から魂が抜けているかのようだ。美少女に密着されて消耗するなど、横島からは考えられない姿に魔理沙は困惑している。

「まあ、横島的には私達はロリの範疇だし、それなのに煩悩が反応したから心にダメージを負ったんじゃないの？」

「そうなのかしら……？」

アリスはパチュリーの仮説に首を傾げている。パチュリー自身も本気でそう思っているわけではないようで、怪訝な目を横島へと向けていた。

「……まあ、横島さんのことは今は置いておきましょう。それで、私達を呼び出した本当の理由は何なの？　流石に本当にさっきのが理由ってわけじゃないんでしょ？」

「む……あれもちゃんと理由の一つなのだけど……」
「マジかよお前……」
空気を変えるためか、アリスがパチュリーに自分達を呼び出した本当の理由を問いただす。パチュリーは「理由の一つ」だと言っているが、それならば他にも理由があるはずだ。恐らく、そちらの方が本当の理由なのだろうとアリスは考える。
「……えー、っと。あなた達を呼んだのは……」
魔理沙達の静かな視線がパチュリーを貫く。パチュリーは視線を彷徨わせ、両手の指を絡ませて小さく唸る。それは、まるで照れているような挙動だ。
「……最近、会ってなかったし、久しぶりにお茶会でも……って思って」
パチュリーの頬が真っ赤に染まっている。
観念したかのように告げた内容は、少女らしい可愛らしいものだった。
「……何よその顔は」
「いやぁ？　何でもないぜぇ？」
「ぐぬぬ」
にたにたとイヤラシイ笑みを浮かべる魔理沙。こいつでも寂しがったりするんだなあ、とは口が裂けても言えない。その代わり、微笑ましく見つめてやるくらいはいいだろう、と。魔理沙は笑みを絶やさないのだった。

「まあまあ、そこまでにしておきなさいよ。私もパチュリーには会いたかったから、こうしてお茶会が出来るのは嬉しいわよ」
「……なら、いいけど」
　くすくすと笑いながらのアリスの言葉に、パチュリーは拗ねたようにそっぽを向く。ああいった理由は自分には似合わないと思っているので、ばつが悪いようだ。
「悪かったって。けっこう意外だったからさー。……意外と言えば、さっきのパチュリーも意外だったな。横島にあんなくっつくとは」
「ああ、確かに。意外と大胆だったのね……」
　魔理沙もパチュリーの様子を見て、強引に話題を変える。気になっていたことではあるし、それはアリスも同様なのだが、どうやら魔理沙はまだまだパチュリーをからかうつもりのようだ。
　魔理沙もアリスも思春期（？）の少女。色恋沙汰は興味がないように見えて好物だったりする。それが親友の話ならば尚更だ。
「んで？　どうなんだよ、横島とは。あんなことしたんだし、何か特別な感情でも持ってんじゃないのかー？」
「それは……私も気になるわね！」
　二人の目が好奇に輝いている。その視線に晒されているパチュリーは勘弁してくれ

とばかりに顔を歪めるが、こういった風に横島との仲を疑われるのは想定内だ。からかわれるのは面白くないが、それもまた一興と考えることとする。
「……気を失っているとはいえ、隣に本人がいるのに話すようなことじゃないとは思うけど……まあ、横島のことは嫌いじゃないわよ。見てて飽きないし、一緒にいて楽しい人ではあるわね」
「へぇー！」
アリスからの好奇の視線がまた強まる。しばらく寝ていないのも相まって、ハイになっているようだ。
「嫌いじゃないとか言ってるけどさあ、本当のとこはどうなんだよー、んんー？　ほらほら、恥ずかしがらずに言ってみなってー」
「うっとおしい……!!」
相変わらずイヤラシイ笑みを浮かべて肘で脇腹をつついてくる魔理沙に、パチュリーは思わず毒づいてしまう。確かに今の魔理沙は相当にうっとおしいと言えるだろう。霊夢も助走をつけて殴りかかるレベルだ。
「いや、それ日常茶飯事じゃないか？」
「何がよ？」
「ああ、すまん。こっちの話だ。んなことより、横島が気になってんならツバつけとけよ

！　でないと他の奴に掻っ攫われるかもしれねーぜ？」

　それはある意味アドバイスだったのだろうが、あまり意味のないものだった。将来的にどうなるかはまだ分からないが、現在のパチュリーは横島に惚れているわけではないし、キープしておけ、という意味だったとしても同様だ。

「……二人とも知らなかったっけ？　横島、もう恋人がいるのよ？」

「嘘ぉっ!?」

「え、本当に!?」

　随分と失礼な反応をする二人である。確かに普段の言動が言動なので仕方のないことではあるのだが……パチュリーは横島に同情心を抱いた。

「ええ。しかも三人」

「三人……三に、三人っ!?」

「妹様に美鈴に妹紅の三人」

「えええぇぇっ!?」

　もはや二人の目に好奇の光はない。そこに浮かんでいるのは驚愕と疑心と否定だ。そうそう信じることは出来ないようである。

　一先ずパチュリーは開いた口が塞がらない二人に今までの経緯を伝える。フランの抱える悩みや不安、妹紅の死生観、美鈴との修行、とある『男』との戦いなど、横島と

恋人達に起こった様々な出来事を語っていく。

パチュリーが話し終えると、二人は難しい顔をしていた。やはり横島が蓬莱人になったことが理由だろう。特に魔理沙の場合は、自分と霊夢が『男』を仕留めそこなったせいで現状に繋がっているのだ。横島を見る瞳に罪悪感が宿る。

「……まあ、横島本人はそこまで気にしてないみたいだけどね。一人で突っ走った結果でもあるし、魔理沙が気に病むことでもないわよ」

「……ああ、うん。そうか……そう、かな」

すぐに納得は出来ないようだが、きっとその内飲み込むだろう。そうなってしまったのは偶然なのだ。魔理沙に責任があるわけではない。

――――だから、あなたもさっさと横島に気持ちを伝えればいいのに……。

パチュリーは視線を本棚の奥へと向ける。そこにはせっせと自分の仕事に励む小悪魔の姿があった。

「……でも、三人の恋人かぁ……。横島さんはロリコンじゃないって言ってたみたいだけど、どうしてフランを受け入れたのかしら？　単純に守備範囲が拡大したとか？」

アリスは重くなった空気を変えるため、横島がフランを受け入れた理由を推察する。何とも気を遣わねばならないお茶会になってしまい、パチュリーは申し訳無さそうにアリスに目礼を送る。

「以前レミィや紫、永琳と一緒にお酒の肴として色々と話し合ってみたんだけど……まあ、それっぽい予想はついたわね」
「そうなのか？」
「どんな理由なの？」
「えっと……」
パチュリーは横島を横目で見やり、意識を取り戻していないかを確認する。どうやら大丈夫なようだ。
「人が誰かを好きになるには充分な理由だけど……正直、ロマンチストの魔理沙はお気に召さないんじゃないかしら？」
「誰がロマンチストだ」
がるる、と魔理沙が唸る。以前「恋符」だとか「地獄極楽メルトダウン」についての感想でからかったことを覚えていたのだろう。もっとも、そういった仕草がパチュリーとアリスが魔理沙を可愛いと思う部分なのだが。
「それでそれで？　どんな理由なの？」
「はいはい。……まあ、簡単に言えば三人とも可愛いし、自分を必要としてくれるし、傍にいてくれるし――――自分を好きになってくれたし……といったところかしら」
唇に指をあて、空いた方の手で理由を指折り数えながら口にする。

思っていたよりも普通であり、拍子抜けといった表情で魔理沙はパチュリーを見る。なるほど、確かにどれも誰かを好きになるには充分な理由ではあるが、聞く側にとっては何とも物足りない理由である。

「本人にとっては凄く重要なことなんでしょうけどね。横島って、かなり優秀なのに劣等感の塊なのよ。誰かに認めてもらいたい、誰かに必要とされたいって承認欲求が異常に強いの。言わば、横島の煩悩は承認欲求の顕れであると言えるわね」

「そう、なのか」

意外、といえば意外だった。

横島は未だ修行中とはいえ、それでも優秀な人材といえるだろう。咲夜が様々な仕事を任せているし、何よりも一緒に住んでいるパチュリーが優秀と言うのだ。間違いはないだろう。

「んー……レミリアはともかく、お前や紫、永琳がそう言うんならそうなんだろうな。……しかし、恋人が三人か……。下世話な話になるけど、その、何だ。やっぱり、夜とか、凄かったりする……のか？」

「ちょっ、魔理沙っ」

急に声を潜めたかと思えば、魔理沙はそんなことを聞いてくる。アリスも咄嗟に止めようとしたのだが、彼女も彼女で興味があったのか、静止の声は弱い。

パチュリーは魔理沙の質問に対し、何を言っているのだろうと首を傾げる。
「凄い……って、何が？　夜がどうしたのよ？」
「ハァッ!?　い、いや、だから……！　その、声とか、音とかがだな……」
「声に、音？　夜なんでしょ？　夜にそんな騒がしくなるようなことをするの？　横島達が何をするのよ？」
「いや……だから、それは……その、セ……」
「どうしたの？　もっと大きく、はっきりとした声で言ってくれないかしら？」
「セ……セック……あうぅぅ……！」
「――――……っっっ!!!」
先程の仕返しだろう。パチュリーは魔理沙に恥ずかしいことを言わせようと画策する。
魔理沙はパチュリーの思惑通りに動き、とある単語を口にするかで葛藤し、頬を赤く染め、涙目となる。
魔理沙はその口調から誤解されがちだが、その心根は乙女なのだ。
恥ずかしがる魔理沙を眺めるパチュリーの背筋に、言いようのない快感が走る。それは、横島を泣かせた時に得られる快感と同じものだ。
もっと魔理沙を恥ずかしがらせたい。もっと魔理沙の涙目が見たい。パチュリーの

歪んだ欲求は膨れ上がるが……。
「妙な性癖に目覚めるんじゃないの」
「あいたっ」
それは、アリスに止められた。彼女の人形の一体、上海人形に頭をぽかりと叩かれる。痛みはほとんどなかったが、おかげで先程まで考えていた内容は綺麗さっぱりと頭の中から消え去った。ちょっとだけもったいないと思ったのは秘密である。

「横島さーーーーーーん!!」
「横島さん、どこだーーー!?」
「……あら、この声は……？」
今はまだ遠くの方から横島を呼ぶ声が聞こえる。声の主は影狼と赤蛮奇だ。横島が消えた原因である魔法陣から、ここに居ると当たりを付けたのだろう。
声はまだまだ遠い。ここに辿り着くには時間が掛かる。その間にパチュリーは横島を起こすべく、肩を揺する。
「横島、起きなさい。迎えが来てるわよ」
「う……うーん……」
横島の眉間がぴくぴくと反応する。覚醒は近そうだ。それを良いことにパチュリー

は揺する力を強める。だが、その力が強過ぎたせいか、横島の身体がパチュリーへと倒れ、彼の顔がその大きな胸にすっぽりと収まった。
「むにゃむにゃ、パチュリー様……」
「あっ、ちょ、ちょっとこら……っ!?」
心地よい感触に横島がもぞもぞと動き、顔をより胸へと押し付け、埋没させていく。パチュリーは慌てて横島を引き剥がそうとするが、意識が無いというのに力が強く、否、意識が無いからこそ力が強いのか、中々上手くいかないでいる。
周囲から横島の顔は見えないが、今の彼は安らぎに満ちた顔をしている。
とても柔らかく、良い匂いがする枕に顔を埋めているのだ。まさに夢心地と言えるだろう。
しかし、それもここまで。突如、幸せ一杯だった横島の脳天に、重い一撃が突き刺さる。それはパチュリーの本の角による一撃だ。
「痛〜〜〜〜〜っっっ!!?」
「……目は覚めたかしら?」
「うえ……?　あ、おはようございます……?」
横島はやけに痛む頭を押さえ、隣にいたパチュリーに挨拶をする。まだ覚醒しきっていないのか、気を失うまでのことを思い出せていない。更に言えば、目の前でパチュ

リーが頬を真っ赤に染めているのにも気付いていないのだ。
痛みによって溢れた涙を拭う。すりすりと痛む場所を撫で、何とか痛みを和らげようとするがあまり効果はない。そもそも何故こんなに頭が痛むのか、横島には皆目見当が付かない。
「……って、あれ？　魔理沙にアリスちゃん？　来てたんだ？」
「お、おう。久しぶり」
「こうして会うのはどれくらいぶりかしらね？」
久しぶりの再会に挨拶を交わすが、二人の頬もまた、赤く染まっている。無論先程の横島とパチュリーが原因だが、気絶中だった横島にそれを知る術はない。また、この三人も教えたりはしないだろう。ただ、意識が無かったとはいえ感触は身体が覚えていたようで、しきりに頬をさすっている。「何か……すげえ良い夢を見てたような……？」と首を傾げる横島に、パチュリーの頬の赤みは更に増した。
「横し――――あ、横島さんっ!!」
「ここにいたのか……」
「あれ、二人とも何でここに……というか、俺も何だってこんなとこに……？」
「あん？　お前らは……？」
ここで、ようやく影狼達が到着する。

魔理沙はやって来た二人の姿に驚きの声を上げる。影狼と赤蛮奇。この二人が紅魔館でメイドをやっているのだから、魔理沙の驚きも当然と言える。

一説によると人狼は吸血鬼の下僕らしく、種族だけを見るならば影狼が紅魔館にいてもそれほど違和感はない。しかし、赤蛮奇はどうだろう。

魔理沙は赤蛮奇のメイド姿を見て、「赤いからレミリアに勧誘されたのかな？」と推察する。間違ってはいない。

「お前らメイドになったのか？」

「ああ。横島さんに迷惑を掛けてしまったし、その償いにな。決して時給の高さとか三食おやつ付きとか待遇に釣られたわけではないのでそこは誤解しないでほしい」

「お、おう」

「ちなみに私は成り行きで……」

赤蛮奇としては本当に誤解が生まれないように注釈しただけなのだが、その説明の仕方により「待遇の良さに釣られたんだな」と魔理沙に誤解を与えることに成功していた。

魔理沙の視線が白い。

「んで、二人は何でここに？」

「そうそう、そうでした！　急に消えちゃうから心配したんですよ？」

「消える……？」

「何だ、覚えてないのか？　厨房でクッキーを作っていたら、急に地面が光って……」

影狼達の話を聞き、横島の頭にイメージが浮かんでくる。薄ぼんやりとしたそれは、やがて確かな映像として横島の脳裏に甦る。

「思い……出した！　パチュリー様っ!!　あれはやっぱり酷いと思うんすけど!?」

「……むう、折角誤魔化せたのに……」

全てを思い出した横島がパチュリーに猛然と抗議をする。

普段よりもしつこいのは、こうしてごねれば先程のように美味しい思いが出来ると考えたからだ。

「……はあ。仕方ない」

――――あの子も見ていることだし、さっさと奮起させるためにも……。

パチュリーは横目でとある一角をチラリと見やり、横島に身体を密着させ、その頬に軽く口付けをした。

「まったくもう……。これで満足かしら？」

「チュって……!!　俺のほっぺにチュって……!!」

周囲から悲鳴のような、歓声のような声が響く中、横島は感涙に咽んでいる。いい加減そのくらいのことには慣れてもよい頃のはずだが、それでもまだまだ新鮮な感動を味わえているようだ。

「これで明日も生きていける……!!」
「安過ぎでしょ……。それで、明日も出掛けるの？」
「ええ。チルノも案内する気満々っすから」
「案内って、どこか遊びにでも行くの？」
パチュリーとの会話の内容に疑問を持ったアリスが問う。横島はそれに頷き、チルノに幻想郷を案内してもらっていることを説明した。
「お？　それなら私も明日同行していいか？　いい所に案内してやるぜ？」
「いい所？　……まさか、綺麗なねーちゃんがエッチなサービスをしてくれるような……」
「そーいうとこじゃねーからっ!!　道具屋だよ道具屋!!」
「えぇ～？　つまんねーの」
「こんの野郎……!!」
魔理沙のこめかみに井桁が生まれる。アリスに「まーまー」と宥められ、深呼吸をして何とか気分を落ち着かせる。確かに横島からすれば退屈そうな店ではあるが、ある意味、あそこより面白い道具屋も存在しないだろう。
「それで、どんな店なんだ？」
「ああ、そこはこの幻想郷の道具だけでなく、外の世界、冥界、妖怪、そして魔法の道具

の全てを扱う店だ」
「それは……凄いな。で、その店の名前は？」
「ああ、その店は――――」

「――――〝香霖堂〟っていうんだ」

第五十八話
『魔女のお茶会』
～了～

横島「ところでパチュリー様」

パチェ「何よ?」
横島「以前、ノーブラ派だから胸が接触する様な事はしないみたいなこと言ってませんでしたっけ?」
パチェ「……」
魔理沙「……」
アリス「……」
影狼「……」
赤蛮奇「……」
横島「パ」
パチェ「アグニシャイン」
横島「何でぇっ!!?」
魔理沙「ニヤニヤ」
アリス「ニヤニヤ」
パチェ「ぐぬぬ」

小悪魔「いいなぁ……」

第五十九話

さて、今日も元気に「行って来ます！」と空へと飛立っていった横島一行を、部屋の窓から静かに見送った少女がいる。ふわふわの兎の耳を持つ少女、てゐだ。

てゐは横島達が見えなくなるまで眺め、やがて短く息を吐き出すと、とある人物の元へと向かう準備をする。と言っても、その準備というのは心の準備なのだが。

「どこにいるかなー？」

キョロキョロと周囲を見渡しながら進むのは紅魔館自慢の大図書館。そう、目的の人物というのは小悪魔だ。

なぜてゐが小悪魔を探しているのかと言えば、話は数日前にまで遡る。

横島への告白を決意し、色々とタイミングを見計らっていたてゐは、あることに気が付く。小悪魔が以前のように横島に近付こうとしていないことにだ。

一体何があったのか、と考えるてゐだが、その時は気にせず、告白の絶好のタイミングを探ることに集中した。やがて見つけた絶好の機会！　さあ、告白するぞと意気込んだてゐ……だったのだが、横島の顔を見て、ふいに小悪魔のことが頭をチラついたのだ。

頭を振り、そのことを忘れようと深呼吸。しかし、どうにも喉に刺さった小骨のように小悪魔のことが頭を離れないのだ。

一度気になってしまえば告白どころではなく、てゐは悶々としながらも一旦告白を延期し、今度は小悪魔に話を聞くことにしたのだ。

「先に告白しとけば良かったかなー」

何気なく口に出たのはそんな言葉。しかし、それが出来ないだろうことは彼女自身がよく分かっている。決心したと思っていても、少しでも何かがあると先延ばしにしてしまう。

達観している部分があるとはいえ、てゐもまだまだ一八〇万歳の女の子。何かと理由を付けて先送りにしてしまっても、仕方がないと言える。……まあ、一二〇〇歳や四九五歳の子達に先を越されているのだが、それだけ彼女達が早熟だということだ。

「うん、そう。だから私は悪くない。執事さんに告白しようと部屋の前に立っただけで足がガクブルと震えるのも仕方がないんだよ」

てゐにとっては、横島と一緒に風呂に入るよりも横島に告白するほうがより勇気が必要なようだ。永い時を生きるにつれ、男女の恋愛や性愛に対する価値観が歪んでしまったのかもしれない。身体の繋がりよりも、心の繋がりに臆病になってしまったのだ。

「……っと、見つけた」

視線の先、小さなテーブルに着いて本の修復に勤しむ小悪魔の姿を認める。出来れば以前のような関係に戻ってほしい。それはてゐが小悪魔のことを気に入っているのもあるが、何よりも彼女は自分と同じ男を好きになったのだから。

「だって、姉妹になるかもしれないんだからね。――――そう、竿姉まひぎぃっ!?」

「ああっ!?　ど、どうされたんですかてゐさん!?」

言わせねえよとばかりに偶然が働き、本棚からてゐの頭上に分厚い本が落ち、角が脳天に突き刺さった。

第五十九話
『現実（ゆめ）から幻想郷（こちら）に』

空を行く横島達。目指すは魔法の森の入り口に存在する道具屋〝香霖堂〟だ。しかし、横島はあまり興味を示していないというか、どうにもやる気が感じられない。

「おーい横島、何がそんなに気に入らないんだ？」
「んー、何がってなぁ……」
香霖堂について軽く説明を終えた魔理沙は困惑しきりだ。他の者は大体分かっているので苦笑気味だが、魔理沙にはとんと分からない。ついでに言えばチルノにも分からない。
「だーってさ、その〝こーりん〟って奴は男なんだろ？　ついでに言えば俺の勘がそいつは美形だと告げている。こんなんじゃあ関心が無くなっても仕方ないってもんだぜ」
「お前って奴は……」
魔理沙の呆れたような視線が突き刺さるが、横島はなんのその。まるで気にしない。更に魔理沙以外の者も呆れた視線を送っているのかと思えば、意外と皆気にしていないようで。
例えばはたてなどは横島のレアな表情にだらしなく相好を崩し、彼の顔を無数にパシャリ。横島に対して本格的に遠慮が無くなってきたの、はたして歓迎すべきかどうか。
フランも横島が拗ねたような表情を見せたことに逆に機嫌が良くなっている。普段自分には見せてくれない表情。それを知れて嬉しいのだ。
「お兄さんもまだまだ子供なのね。あたいみたいに大人にならなきゃダメだよ？」

逆に否定的なのはチルノだった。と言っても本格的に失望したでもなく、ただ単に彼女が大人ぶりたかっただけなのかもしれないが。

「――――っと、どーでもいいことに気を取られてたら、もう見えてきた」

「どーでもよくはねーし」

「分かった分かった。……ほれ、あれが目的の〝香霖堂〟だ」

魔法の森の入り口。そこに何かを主張するでもなく存在している、こじんまりとした店舗。それが香霖堂だ。

「なんか、想像してたのと違うな」

「あー？　どんなの想像してたんだ？」

「いや、外の世界とか冥界だの妖怪だの魔法の道具があるって聞いてたから、もっとでかい店なのかと」

「あー、なるほどな」

確かに魔理沙の説明を受ければ大きな店だと勘違いしても仕方がないだろう。予想を外した横島はやや落胆の表情を覗かせるが、ここで彼は元の世界のオカルトショップ〝厄珍堂〟を思い出す。

よくよく考えてみれば厄珍堂も名の知れた店であったはずだが、その店舗は目の前の香霖堂のようにこじんまりとしていた。もしかすれば、店舗の大きさに関して何かオカ

ルト的な要素が絡んでいるのかもしれない。

「ま、今はそれはどうでもいいだろう。それより入ろうぜ。そんで、出来ればなんか買ってやってくれ」

魔理沙が扉に手をかけ、そんなことを言う。何だかんだ言いつつ、彼女も香霖――森近霖之助（もりちかりんのすけ）のことを心配しているようだ。

そして開かれる扉。始めに目に入ってきたのは雑多に置かれた種々様々な道具達。一目でそれが何であるか分かるものもあれば、今まで見たことがないような道具も存在している。

そこから年甲斐もなく湧き上がるのは、子供の頃に還ったかのような高揚感に緊張感、そして好奇心。あるいは冒険心と言ってもいいかもしれない。

香霖堂とは、そんな不思議な魅力を放つ商品を扱っている店だった。

「――、……」

「……、……――」

と、商品に気を取られて気付かなかったが、どうやら先客がいたらしい。聞こえてくるのは理知的な響きを湛えた男性の声と、やや勝気な、あるいは少々高飛車な印象を与える、しかし可愛らしくもある少女の声。道具に隠れて見えないが、現在店内にはお客が一人のようだ。

店の奥のカウンターにまで行けば、そこにはとある道具について熱く、それでいて静かに語り合う二人の男女の姿があった。
「おっ？　聞いた声だと思ったが、またこっちに来てたんだな〝菫子（すみれこ）〟」
「だからこれは――――って、あれ？　魔理沙さん？」
魔理沙の声に振り向いたのは外の世界から来た女子高生である、宇佐見菫子。当然横島の視界に収まるのは彼女だけであり、霖之助など目に入らない。
――――黒い帽子に変な模様のマントに眼鏡。なんかマジシャンみたいだな。歳は中学生……いや、高校生くらいか？　美人ってわけじゃないけど、可愛い子だな。ちょっと幼い感じがするけど。ま、今はいいか。最近煩悩の調子が悪いし、魔理沙の顔を潰すのもなんだし。
「はじめまして、可愛らしいお嬢さん。僕は横島忠夫。もしよければ、君の名前を聞かせてくれないかな？」
「うえぇっ!?　なに、ナンパ!?　ナンパなの!?」
ここまで本能に忠実な男も珍しいだろう。頭では違うことを考えていても、彼の心と魂と精神は煩悩に忠実である。なんとも嘘の吐けない男だ。しかし、いつもより勢いがまるでないのもまた確かである。普段なら「ぐおーっ」と迫ってビンタがお約束だ。
「ふ、ふんっ！　私をそこらへんの軽い女と一緒にしないで!!　いくら可愛らしいとか

おだてても、別に嬉しくなんてないしっ!!」

　董子はつんと横島から顔を背けて拒絶するが、彼女の表情は今しがたの台詞と一致せず、頬がピクピクと動き、徐々に口角が上がっていく。本当は嬉しかったようだ。

「どんな時でもぶれないな、お前は。――ほれほれ、董子もそんな警戒すんなって。こいつは女を見ると口説かずにはいられないだけなんだからさ」

「充分に警戒すべき人じゃないですかっ!?」

　魔理沙が二人の間に入って横島のフォローをしてくれるのだが、それはフォローと呼ぶにはいささか言葉がまずかった。余計に警戒される横島だが、彼にとってそんなことは日常茶飯事。ダメージなんて「るー」と涙を流す程度のものだ。

「んなことより、だ。二人がいるんなら丁度いい。紹介するぜ、こいつが以前話した『別世界（パラレルワールド）の人間』だ」

「――っ!!」

「……え、なに？」

　魔理沙の言葉に霖之助と董子の目の色が変わる。それは思わず横島も身の危険を感じるほどであった。

「何か変な物が多いなー……お？　これはなんだー？」

「ちょ、ちょっとチルノちゃん！　もっと丁寧に扱わないと……!!」

「こういうお店の物って、ちょっとでも力加減を間違えたら壊しちゃいそうだなー……」
「落ち着いて、フランちゃん。落ち着いてその抱えてる壷を下ろすのよ」
……何だか背後から別の意味で身の危険を覚える会話が聞こえてくる。
「魔理沙さんから聞いていたけど、本当に普通の人間と変わりがない……？　あ、えっと、私は宇佐見菫子……です。よろしく……お願い、します」
興味深そうにじろじろと横島を観察しだした菫子は、その途中でまだ自分が名を名乗っていないことに気付き、慌てて名乗る。敬語になっているのは横島が年上の男だからか。
「君が横島君か。僕も、君のことは魔理沙から聞いているよ。僕は森近霖之助。君とは一度二人でゆっくりと話してみたかったんだ」
「……!?」
爽やかに笑みを浮かべ、涼やかな声でそう告げる霖之助に、横島は驚愕の表情を浮かべていた。頬に冷や汗が流れ、急激に喉が乾燥する。横島は、緊張のため生唾を飲み込んだ。
――――何だ、こいつは……!?　銀髪……銀髪の美形!!　いや、それはいい。全然良くはないがまぁいいだろう。銀髪の美形とかジークだってそうだし。問題はこいつの服だ……!!　一体なんだ、こいつのこの服は……。まるで着物と洋服を足したような、

なんか……なんかよく分からん格好いい服……!!　これを涼しい顔で着こなすとは……こいつ、只者じゃない!!

一体何に緊張しているというのか。確かに霖之助の服装は漫画やアニメなどに出てくるような、異常なまでに凝った造形をしている。そして、彼はその服の存在感にまるで負けず、まるで部屋着のようなリラックス具合を発揮している。

美形は何を着ても似合う、ということだろうか。横島の心に嫉妬の炎がメラメラと燃え盛り、横島は霖之助をキッと睨みつけ、何故かお尻を手で隠しながら、「すすす」と魔理沙の背後に避難する。

「……なんだよ?」

「いや、だって俺と二人っきりで話したいとか……」

「ああ、なるほどね。また厄介な勘違いをするものだ……」

溜め息を吐き、眼鏡を指でくいと持ち上げる仕草すら様になっている。これが美少女の仕草なら大歓迎なのだが、男のそんな仕草を見せ付けられても何とも思わない。むしろやっかみが増すだけだ。

「あ、あれ面白そう!　ビンにドクロマークの紙が貼ってあるやつ!」

「ちちちチルノちゃん、それはあからさまに怪しいからダメー!?」

しかし幸いかどうかは不明だが、背後からの声に横島の身勝手な怒りは鳴りを潜め、

逆に申し訳ない気持ちでいっぱいになる。
「……ちょっとすまん。――――こーらっ、さっきから何やってんだー？」
「うえっ？」
　一応断りを入れ、横島は背後のチルノ達の元に赴き、何やら怪しげな薬ビンを取ろうとしていたチルノを捕獲し、そのまま胸に抱える。まるで大型犬が持ち上げられているかのような姿だが、何らかの効果はあったようで、チルノは特に抵抗することもなく借りてきた猫のように大人しくなった。
「ああいう怪しい薬をいじって、もし落としてみろ。下にいた人造人間の女の子や古代中国の石像に中の薬品がかかったりしたら、頭を粉々にされそうな威力のキスをされそうになったり、胴体がぶっ千切られるような抱擁をされたりするかもしれないんだぞ？」
「なんですか、そのありえない例えは……」
　残念ながら本当にそうなりかけたことがある。そのせいか、横島は元の世界の人造人間の少女〝マリア〟が少しだけ苦手だったりするのだ。
　横島はチルノがこれ以上迂闊なことをしないように、彼女を抱えたまま菫子達の元へと戻る。一連の横島の行動を見ていたフランは横島の背中に負ぶさりかかり、横島の肩から覗くように菫子達を眺める。

「悪かったな、森近」
「ああ、気にしなくていいよ。妖精は好奇心旺盛だからね。万が一悪戯されてもいいような仕掛けは施してあるんだ。そういった意味ではそのままの方がいいかな？」
「なるほど。あれはトラップだったわけか」
うへえ、と横島は唸る。恐らく商品等には一切害を及ぼさないような仕掛けなのだろうが、それだけにどんな罠が仕掛けられていたのかが想像もつかない。何せここはあらゆる道具を扱っている店だ。それこそ妖精だけに効果のある薬品なども存在するのではないだろうか。
「はじめまして！　私はフランドール・スカーレット。よろしくね！」
横島が物騒な想像を働かせている内に、フランは菫子と霖之助に挨拶をしていた。にっこりと浮かべたその笑顔はとても作ったキャラとは思えないほどに自然である。これもレミリアや永琳、そして横島のおかげであろうか。
「うん、はじめまして。僕は森近霖之助だ」
「私は宇佐見菫子。よろしくね、フランちゃん」
にこやかに挨拶が交わされる。どうやら二人と初対面だったのは横島とフランだけだったようであり、魔理沙を除く他の三人は顔見知りであるようだった。
「それで横島君。君は別世界から来たそうなのだが、色々と話を聞かせてくれないかな

？　例えばどうやってこちらに来たのか、それから元いた世界はどのような世界だったのか」

「あ、私もそれ知りたいです！　特にオカルト関係についてとか！」

　互いの挨拶も終わり、少し間が空いてから霖之助がそう切り出した。冷静さを装っているが、彼の瞳は隠しきれない好奇心で輝いている。それに便乗してオカルトの話を聞きたがるのは、もちろん菫子だ。〝秘封倶楽部〟初代会長として、オカルト話……それも、別の世界のオカルトは何よりも聞きたいことだろう。

「いや、俺はいいんだけどさ……」

　菫子達の放つ熱気は相当なものだ。横島はそれに気圧されながらもはたてや魔理沙に視線を送る。

「私は大丈夫。もしかしたら何かお宝話を聞けるかもしれないしー」

「適当に話しとけよ。私はこっちでコーラ飲んどくから」

　はたてはメモ帳片手に聞きの体勢。魔理沙が勝手に用意したイスに座り、取材開始といったような雰囲気だ。さりげなく横島の隣に座っているのはご愛嬌。その隣に、申し訳無さそうに大妖精が席に着く。

　魔理沙は魔理沙でカウンターに置いてあった霖之助の読みかけの本を拝借し、商品であるコーラを勝手に飲み始める。

魔理沙の所業に霖之助は何も言わないが、代わりに深い深い溜め息を吐いた。いつものことではあるのだが、それがいつものことになってしまっているというのは非常に厄介である。

「……まあ、いいか。イス、借りるぞ？」

「ああ、ご自由に」

そうして皆が席に着く。チルノは横島の膝の上に収まり、フランは変わらず横島の背中にはりついている。イスに背もたれが無いタイプ……木製のスツールだったのが幸いした。ちなみにだが、このイスはレミリアの部屋にあった物と同一の物であるらしい。恐らく、この香霖堂で購入したのだろう。

「んー、どっから話せばいいのか……とりあえず、俺が元いた世界の話からかな？」

頭の中で情報を整理し、ゆっくりながら分かりやすく自分の世界について話をしていく。紫から幻想郷の外の世界についての話を聞いていたので、外の世界との違いを自分が知る範囲で何とか言葉にしていく。

幻想郷の外の世界は科学が発達し、オカルトが衰退している世界だという。しかし横島の世界はオカルトが色濃く残り、科学と共に発展してきた世界だ。

例えばゴーストスイーパーは国家資格であるし、ザンスという小さな島国は全ゴーストスイーパーの切り札である精霊石の八割を産出し、全世界のオカルト経済の中心と

なっている。他にも国際刑事警察機構（ICPO）に超常犯罪課、通称〝オカルトGメン〟というものが存在していたりなど。

　話を聞くにつれて、董子の目が輝きを増していき、どんどんと笑顔が深くなる。対する霖之助は眼鏡の輝きが強くなり、どんどんと相槌や質問が多くなる。その質問は国家資格とは具体的にどんなものか、ＩＣＰＯとは何か、といったものだが、それには董子が答えていく。彼女はオカルトだけでなく、様々な知識や雑学を有しているらしい。

「あああぁぁ、どうして私はそっちの世界で生まれなかったんだろう……!!　いや、でも待って!!　私は秘封倶楽部（ひみつをあばくもの）。オカルトが公に認められている世界だと逆に生き辛いんじゃないかな……!?」

「いや、んなこと俺に聞かれても……」

　何だか妙にエキサイトしている董子に横島は引き気味だ。ちらりと視線を霖之助へと向ければ、彼は「ふむ」と唸り、董子に声を掛ける。

「どちらの世界に生まれるべきだったか、というのは僕も分からないが。でも、董子君がこちらの世界に生まれてきてくれなければ、僕達はこうして会えなかったかもしれない。その点では、君がこの世界で生まれてくれたことに感謝をしなければならないね」

「……そ、そう、デスカ……？」

　霖之助の言葉に董子の顔が赤く染まり、語尾が片言になる。横島は二人の様子に頬を

ひくつかせ、魔理沙は大きく「ケッ」と吐き出した。
「ああ。それに……うん。オカルトについて考察しているときの君は、とても輝いているからね。恐らくだけど、横島君の世界に生まれていればその輝きはなかっただろう。どこの世界に生まれても菫子君は菫子君だとは思うけど、こうして今僕達と語り合う君は、全ての世界を合わせても――――やっぱり、この世界に一人だけの菫子君だからね」
「……」
もはや菫子は何も言えない。爽やかな笑みを浮かべている霖之助の顔も見れず、頬を染めて俯き身を縮こまらせるばかりだ。
横島は戦慄した。「これが……美形の力なのか……!?」と、畏敬にも似た念を抱く。そしてそれと同等の殺意と嫉妬も。
魔理沙はコーラのビンの口をガリガリと噛んでいる。彼女に渦巻く感情はどんな色をしているのか、それは自分でも分かっていないだろう。嫉妬であるのは確かだろうが……。何故か、無性にアリスとパチュリーに会いたくなる。
不機嫌そうな顔で菫子を見やる魔理沙。すると、妙なことに気付く。菫子の身体が徐々に透けてきているのだ。
「おい、菫子。お前……消えるのか？」
「は？　消えるって……うおぉっ!?　本当に消えそうになってるーっ!?」

魔理沙の言葉に疑問符を浮かべる横島だったが、董子を見てみれば、魔理沙の言う通り身体が消えかかっていた。董子の事情を知らない横島からすれば実にショッキングな光景であり、混乱してしまう。

「あ……外の世界の私が目覚めるみたい。まだまだ話し足りなかったのに……」

「外の世界の私が目覚める……!?　何だ、どういうことだ!?　大丈夫なのか!?」

横島、大混乱。董子の身体が消えていくのはトラウマを刺激されるのか、そのうろたえぶりは尋常ではなかった。事情を知らない魔理沙はそのことを怪訝に思いながらも、目の前で人が消滅しそうになればこうもなるかと納得する。

「心配すんな。董子は元々外の世界の人間でな。寝ている時だけ、夢の中でのみこの幻想郷に来ることが出来るんだ。」

「……えーっと。つまり、董子ちゃんは大丈夫なんだな?」

「そういうことだ」

魔理沙の説明を受けてもよく分かっていない横島だが、董子に問題は無いということが分かり、ほっと息を吐く。問題が無いわけではないのだが……それは、今の横島には教えないほうが良いだろう。魔理沙は一つ秘密にしておくことにした。

「ああ、そうだ。董子、お前に伝えなきゃいけないことがあったんだ」

「え、こんな時に?　何なの、魔理沙さん?」

董子の身体はもうほとんど透けてきている。そんな時に伝える内容とは一体どのようなものなのか。

「実はな……横島、何とあの妹紅の恋人なんだぜ」

「……本当に何でこんな時にそんな大事なことを言うのよー!!　私が妹紅としばらく会ってない間に何があったの!?　待って、待って待って!!　詳しく!!　詳しく話を聞かせ――――」

その言葉を最後に董子は消えた。現実で目が覚め、外の世界へと帰ったのだ。

魔理沙は悪戯が成功し、腹を抱えて笑い転げている。嫉妬心から来る八つ当たりもあったのだろうが、何とも意地の悪いことだ。

横島や霖之助、はたてやフランに大妖精はおろか、チルノですら非難がましい目で魔理沙を見つめている。

「本当に、君ってやつは……」

霖之助の呆れたような言葉が店内に浸透する。何だか微妙な空気になってしまった店内には魔理沙の楽しげな笑い声と、他の皆の溜め息が重なって響くのだった。

第五十九話

『現実（ゆめ）から幻想郷（こちら）に』

～了～

第六十話

魔法の森の入り口にある道具屋、〝香霖堂〟。

その店の中で、少女の笑い声が響く。それは女の子が上げるには少々品のない笑い声であり、その少女自身腹を抱えて床をバンバンと叩いているのだから、なお性質が悪い。

その少女の名を霧雨魔理沙というのだが、彼女が普段こうして馬鹿笑いをするというのも珍しいことだ。余程、友人である董子に仕掛けた悪戯が成功したのが痛快だったに違いない。何とも趣味の悪いことである。

「はあ、まったく……」

そんな魔理沙を見てやれやれと首を振り、溜め息を吐くのは彼女がまだまだ幼かった頃からの付き合いである霖之助。魔理沙の兄貴分である身からすれば、一体どこで育て方を間違ったのだろうかと考えずにはいられない。まあ、自分が育てた、と言えるほど四六時中一緒に過ごしたわけでもないのだが、それはそれだ。

霖之助は今更ながら横島が先ほどまで自分達の質問に答えるために喋り通しだったことを思い出し、席を立ってお茶を用意しに店の生活スペースへと戻る。

横島は霖之助に礼を言ったあと、抱きかかえていたチルノを下ろし、目線を合わせて改めて注意をする。

「いいか、店の商品を見たり触ったりすんなとは言わねーけど、あんまり乱暴に扱ったりはしないようにな。珍しい物が沢山あってテンションが上がるのは分かるけど、店の人……森近に迷惑を掛けないようにすること。いいな？」

「……はーい」

「ん。……んじゃ、今まで押さえてて悪かったな。色々と見てきていいぞ。ほら、フランちゃんも」

「はーいっ。えへへ、チルノ、いっしょに見よ？」

「うん！」

チルノは少々不貞腐れた様な顔をしていたが、横島に促され、フランとチルノは大妖精と合流し、商品を物色し始める。ただしこの香霖堂は非売品が多く、買い物の楽しさを学ぶには少々適さないかもしれない。

霖之助は元々道具の蒐集家であり、店もお金や生活の為に経営しているのではなく趣味で営んでいるのだ。とはいえ一応商売する気はあり、最近は菫子と出会った事によって商売人としての意気も取り戻したのだが……蒐集家が関係しているのか、断捨離の出来ない人間だったようだ。

第六十話
『胸を張って』

「待たせてしまってすまないね。魔理沙や霊夢はともかく、こうして普通のお客様にお茶を出す機会に恵まれていなくてね。湯飲みを探すのに少々手間取ってしまったよ」
「んな気にすることでもねーけど……お茶、サンキュ」
「あ、ど、どうもありがとうございます」
横島とはたて、二人分の温かいお茶を持ってきた霖之助の言葉に、横島は苦笑を浮かべる。本来なら人数分用意するべきなのだろうが、子供たちは商品を見て回るのに夢中だ。それを邪魔するのも悪いだろう。
横島は早速お茶を一口啜る。最近は気温も下がってきており、こうした温かいお茶は嬉しいものだ。腹の中からじんわりと熱が広がり、身体を温める。

「それにしても……さっきはありがとう。チルノ君を押さえてくれて」
「ああ、いいよ別に。気にしなくて。俺も商品を買うのならともかく、壊して弁償ってのは嫌だからな」
　改まって礼を言う霖之助に、横島は気にするなと手をひらひらと振る。お茶を啜りながらであるため行儀が悪いが、それは照れを隠しているようにも見え、次の瞬間にははたてがカメラのシャッターを切っていた。今回の案内ではたての撮影技術もどんどんと洗練されていっている。
「それもあるけど……本命はそっちではなく――――菫子君のためだったんだろう？」
「……」
　横島の態度を気にした様子もなく、霖之助は核心を突いた。横島が動きを止め、やや見開いた目で霖之助を見やる。それに対して、霖之助は微笑みを浮かべる。
「菫子……あの子がどうしたの？　チルノと何か関係が……？」
「そうだね。本当ならこういうことはしないけれど……今日は、特別かな」
「おいおい……」
　疑問に首を傾げるはたてに霖之助は上機嫌に返す。それを見る横島の頬は引きつっている。これから話されるだろう内容が嫌でも想像でき、何やら気恥ずかしくなってくる。

「彼女……董子君は超能力者でね。サイコキネシスやテレポートなど、様々な超能力を使えるんだが……それでも、身体は普通の人間なんだ。チルノ君の冷気に、彼女は耐えられないだろう」

「あ……」

霖之助の説明に、はたてはなるほどと得心する。確かにチルノの冷気は強烈だ。何の防寒もしていない人間が彼女に近寄れば、たちまち風邪を引いてしまうどころか、命の危機に直面しかねない。

「だから、横島君はチルノ君を押さえてくれたんだろう？　彼女の冷気が漏れないように、自らの霊波でチルノ君を包み込んで」

「そっか、だからチルノは大人しかったのね。横島さんの霊波は妖精には心地いいものだっていう話だし、チルノが不貞腐れたような顔をしてたのは怒られたからじゃなくて、自分を包んでいた横島さんの霊波が無くなったからなんだー」

「……別に、そう大したこっちゃねーだろ。相手が美女美少女ならなおさらだ」

眩しいものを見るかのような二人の視線に横島は居心地が悪くなる思いだ。まさか目の前で自分の行動の意味を説明されるとは思わなかった。何も悪いことをしていないのに理不尽な罰ゲームを受けたような、横島はそんな感想を抱く。

横島は自己顕示欲の強い人間だ。自らの善行を喧伝し、賞賛を受けたいとは何度とな

く思ったことではあるのだが、こういう彼自身にとって特に何でもない行動を褒められるのは、どうにも羞恥が強かった。身体のいたる所がむず痒くなってくる。

「君にとってはそうかもしれないね。でも、それを実行に移せる人がどれだけいるかというと、実際あまりいないものなんだ。たとえ下心があったのだとしても、それを実行出来るのなら、そしてそれを続けることが出来るのなら――――それは、本当に凄いことなんだよ」

「……」

柔らかな微笑みを浮かべ、まるで子守唄を歌うかのように優しい声音で霖之助は語る。それは彼の生きた永い時を連想させる程に深みを感じさせる。

これまでの会話で霖之助は横島が強いコンプレックスを抱えていることに気が付いた。横島の言葉から強い虚勢と自信の無さを感じ取ったのだ。

だからこそ、彼を認める。彼が自分を卑下するのなら、それは違うと言ってやる。それは小さなことかもしれない。小さなことかもしれないが――――積み重なれば、それは一つの山となるのだ。

積み重なった一つ一つが彼の血肉となり、自信に繋がれば――――彼は、より魅力的な存在となるだろう。その一助となれば……。そう思えるくらいには、霖之助は横島に好意を抱いていた。

霖之助は横島に手を伸ばし、その頭をくしゃりと撫でる。
「〝それ〟が出来るのはほんの一握りだけ。そして、君もその中の一人なんだ。もっと胸を張ってもいいんだよ」
「――――……っ」
真っ直ぐな霖之助の言葉が、ふわりと横島の胸に届く。
横島は目を見開き、動揺から目を泳がせ、やがて赤くなった顔を隠すかのように俯いて口元に手を翳す。
「……男に撫でられたって気持ち悪いだけだっつーの」
それはとてもか細い声だったが、霖之助にはしっかりと聞こえていた。霖之助は一瞬だけ、まるで子供のように笑みを深めると、「それは悪かったね」と言い、最後に乱暴に横島の頭を撫でる。
二人の様子は傍から見れば兄弟か、あるいは親子のやり取りに見えたかもしれない。長きを生きた者が年若い者を導く。彼等の場合は、そんな関係に見えてしまう何かがあったのだろう。
そして、そんな二人を間近で見ていたはたては何やらとても複雑な表情でカメラのシャッターを切りまくっている。
――――何だろう。何だろう何だろう何だろうこの胸の中に生まれてくる熱は……

!!　そう、これはまるで私の中で何かが誕生するような、新たな扉が開きそうな、そんな胸のざわめき――――っ!!?

それ以上いけない。

はたてが何やら新たなときめきに眩惑されている背後で、大妖精は顔を赤らめて横島達の様子を眺めていた。彼女の目は輝きに満ち、まさに喜色満面といったところ。どうやら彼女は少々お腐りなされているようである。

「それに比べて……」

と、ここで霖之助が再び溜め息を吐く。横島とはたては疑問符を浮かべるが、その溜め息の理由は簡単に判明する。

「へっくしっ！　んあ〜ー、ちょっと寒くなってきたな。火、火っと……」

いつの間にかチルノ達と共に商品を物色していた魔理沙が豪快にくしゃみをし、懐からミニ八卦炉を取り出して、その文様の上に小さな火を灯しだす。

「うわ、八卦炉から火が!?」

「ふいー、これこれ。そうだ、チルノも来いよ。どうだ温かくなったろう（笑）」

「熱っ！　あっつ!?　やめっ、やめろぉー!!?」

「チルノー!?」

「チルノちゃ―ん!?」

魔理沙はミニ八卦炉から出ている火をチルノへと翳す。氷精であるチルノにとって、火は天敵だ。流石に溶けたりだとかそういったことにはならないが、熱に対するダメージは他の妖精達よりも大きいのだ。

「それに比べて、魔理沙は本当にもう……!!」

「……ふぅー」

霖之助の嘆きの声が響く中、その光景を目撃した横島が深く長い息を吐き、ゆっくりと立ち上がる。そして楽しげにしている魔理沙に背後から近付き、強かに拳を振り下ろした。

「げ　ん　こ　つ　！　！」

「あ痛(だ)ーーーーーーーー!?!!」

流石に火遊びは許されない。横島のげんこつによって、魔理沙の頭にはとても大きなたんこぶが出来ました。

「ぐすん……」

「よしよし、もう大丈夫だからな……まったく、魔理沙のいじめっ子め」

「ごめんなさい……」

現在、魔理沙は涙目で床に正座をしている。彼女の頭部には大きなたんこぶと小さなたんこぶの二段こぶが出来上がっている。横島のげんこつを食らった後、霖之助からもお叱りを受けたのだ。何だかんだ魔理沙に甘い霖之助だが、流石の彼も店内での火の使用と、それを人に向けて遊んだのは看過出来なかった。珍しく本気での叱責である。

フランは魔理沙の正面に仁王立ちして「がるる」と威嚇し、大妖精は横島の腕の中にいるチルノを後ろから抱き締めている。丁度横島と大妖精でサンドするような形だ。

「まったく……あんなことをさせる為にこのミニ八卦炉を造ったわけじゃないんだがね」

「……あんたが製作者だったのか」

霖之助は魔理沙から没収したミニ八卦炉を手で弄びながら溜め息を吐く。今日だけで何回目の溜め息だろうか。一体どれだけの幸せが逃げていったのだろう。そう考えるとまた溜め息が出てきそうになってしまう。とんだ悪癖の出来上がりだ。

横島は腕の中でいじけているチルノを慰めながら、ミニ八卦炉を造ったという霖之助の言葉に驚きを隠せないでいた。

思い出されるのは先日の命蓮寺での白蓮と神子との談笑。西遊記に出てくる八卦炉は、本来ならば上手く煉ることさえ出来ればあの斉天大聖ですら焼き殺せるのだという。

魔理沙の持つ、霖之助が造ったというミニ八卦炉は恐らく贋作、あるいは模造品の様な物なのだろうが、それでもその最大火力は山を一つ消し飛ばすことが出来るほどのものらしい。

――――どうやってそんな物騒なもんを造ったんだ？　まさかこいつは天界の出身で、実物の八卦炉を見たことがあるとか……？

横島の中で霖之助の過去が捏造されていく。よくよく見れば彼の服装は中国っぽいと言えば中国っぽいと言えるような気がしないでもない。彼は中国出身だったのか……？　どんどんと新たな設定が組み込まれていくが、もちろん何の根拠も無いただの憶測である。

「明日の朝刊かなぁ……でも間に合うかなー？」

益体も無いことを考えている横島の隣では、はたてが魔理沙の様子を写真に収め、明日の新聞に載せようか迷っている。時間を考慮するならば、恐らく間に合わないだろう。何せ今日は夜も外で過ごすのだ。流石に深夜と呼ばれるような時間帯まで遊び呆けるわけではないが、それでも明日の新聞を作ることが出来るほどの時間は確保出来ないだろう。

「やれやれ、これじゃあミニ八卦炉が泣いているよ。子供に火を向けたり、地脈の力を撃ち出したり、やってられないとね」

「人に向けるのは弾幕ごっこの性質上仕方ないんじゃあ……？」
「それはそれ、これはこれだよ。もう何度目になるか分からないけど、無闇に人に対して使用しないこと。雑な扱いや無茶なことは控えること。いいね？」
「分かったぜ……」
霖之助からミニ八卦炉を返され、魔理沙は神妙に頷く。久しぶりに本気で叱られ、反省をしたのだろう。それがいつまで続くのかは分からないが、今後はこういったことが起こらないことを霖之助は願う。
「なんか物騒なことが聞こえたな、地脈の力を撃ち出すとかなんとか……」
「それって危ないことなんですか？」
「そりゃーな。地脈ってのは簡単に言えばこの大地を巡る〝気〟の通り道でな。そこに流れる力はとんでもないものなんだよ。それこそ人間がどーのこーの出来ないくらいには」
大妖精からの質問に、横島は簡潔に答える。かつて自分も師匠である美神に教えられた。香港での元始風水盤事件で興味を抱いた横島が、珍しく美神に教えを乞うたのだ。……風水を学べばモテるようになるのではとか、そんな下心は一切無かった。一切無かったのだ。
「まあ、地脈の力を操るってのは本来なら神魔族でも難しいはずなんだけど……なに、魔

理沙ってそんな凄い魔法使いだったのか？」
「いやぁそんな……うふ、うふふふ」
「魔理沙、キモい」
「流石にそれは酷いんだぜ」
　正確には何人もの〝神魔級〟の大妖怪達の力のおかげなのだが。その時のことを魔理沙が説明すると、横島は感心して何度も頷き、賞賛を送る。そして思った以上に凄い魔法使いであった魔理沙とパチュリー、アリスの三人、そして傾国の美女である藍と酒飲み妖怪萃香、貧乏でお肉大好きな霊夢に改めて尊敬の念を抱く。
「しっかし、幻想郷の地脈か。地脈の上にこの幻想郷を造ったくらいなんだから、きっととんでもなく上等な代物なんだろうな」
「ほう？　横島君、興味があるのかい？」
　ぽそりと呟いた横島に、霖之助が耳聡く反応する。見れば彼の眼鏡が光を放っており、なにやら妙な圧を感じる。その様子の変化に皆は首を傾げるが、魔理沙だけは「あちゃー」と天を仰いでいる。
「ふむ。さて、地脈……これには別名があってね。それを龍脈というんだが――実際には別物だという話だけどね――とにかく、この流れは僕達が住んでいるこの国、〝日本〟を縦断している。

さて、ここで問題だ。この日本という国の形……実は、ある生物に酷似している。それが何か分かるかい？」

やけに熱く、饒舌に語りだした霖之助。彼はどこからか取り出した日本の絵が描かれているフリップを取り出し、皆にクイズを出す。既に魔理沙はげんなりとした表情をしており、はたてや大妖精などは突然の展開について来れていないが、横島はその順応性から空気を読んで答えを考え始め、チルノとフランはクイズに目を輝かせて回答を捻り出そうとしている。

皆が考え始めて十数秒、チルノが元気よく手を上げた。

「はいっ！」

「はい、チルノ君」

「答えは〝ドラゴン〟ね!!」

「うん、正解だ」

「やったっ！　やっぱりあたいは天才ね!!」

見事チルノが正解を導き出す。

ドラゴン――――その答えに横島は首を捻るが、言われてみればそんな形をしているかもしれない。子供の頃、そんな漫画を読んだような気がする。ツンツン頭の少年侍が、伝説の玉を探す旅に出る……そういった内容だったはずだ。

「そう。この国の形はドラゴン……龍に酷似している。ここで思い出して欲しいのは、この国を流れている龍脈の存在と、この幻想郷における最高神のことだ。

横島君、君は幻想郷の最高神が何かは知っているかい？」

「……えーっと、確か龍神だったと思うけど。人里にでかい像があったし」

「そう、その通り。龍神様なんだ。龍の形をしたこの国、日本。そこを流れる強大な龍脈。そしてその上に造られ、龍神様を最高神としている幻想郷！

僕はここに何らかの関係性があると考えているんだ。龍神様は普段空の上に住んでおり、時折地上の様子を見に来られるというが、本当にそうなのだろうか？　実際に龍神様と相対したことがある者はあまりにも少なすぎる。それはこの幻想郷の創始者達である妖怪の賢者達だ。彼女達――例えば八雲紫だが、彼女に龍神様のことを聞いても何も教えてくれない。そして商品も買ってくれない。何か知られてはいけないような、そんな事実が眠っているのだろうか？　そして何故うちの商品を買ってくれないのだろうか？　非売品が多過ぎる？　いやいやそれは関係ないだろう。非売品を除いてもうちには素敵な商品がたくさんあるんだ。一つや二つくらいなら彼女のお眼鏡に適う物があるはず――なに、それが非売品だって？　それじゃあ仕方ないね。おっと、流石に話が脱線し過ぎていたね。どこまで話したか……そうそう、何か知られてはいけないような事実があるのかどうか、だったね。これは僕の考えなんだが、実は龍神

様は普段からこの幻想郷に――――」

実に、実に楽しそうに霖之助は熱弁をふるう。しかし、彼の周りはどうだろうか？誰も今の霖之助のテンションについてこれていない。

はたては最初興味深そうに霖之助の演説をメモに取っていたのだが、今ではその手も止まっている。彼女は普段あまり取材をしないので、彼の話すスピードについていけなくなったのだ。

チルノとフラン、大妖精は横島の元から離れ、先ほどまでのようにまた商品を物色している。可愛らしい髪留めを見付けたのか、皆でキャイキャイとはしゃいでいる。

「お？　なんか良いもんあったのか？」

「あ、ただお兄様。うん、この髪留めなんだけどね」

横島は霖之助が話に熱中している隙に、フラン達と合流することにした。流石にいつまでもあんな話を聞いていたくはなかったのか、彼の耳は既に霖之助の声を完全にシャットアウトしている。何とも器用な男だ。

フランが示す髪留め。それらはシンプルな作りであり、それぞれオレンジ色の三角形、赤い丸型、そしてひまわりの花の形をしている。他に種類はないのか探してみたが、どうやら現在店内にあるのはこの三つだけであるようだ。

値段も安く、どこか色あせている様子から新品ではないことが窺えるが、彼女達はそ

れを気にしておらず、どれが誰に似合うかを楽しそうに話している。
「……欲しいなら買ってあげようか？　このくらいなら全然大丈夫だし」
「え、あの。い、いいの……？」
「そりゃもちろん。チルノと大妖精もな」
「あたい達も……？」
「そんな、悪いですよっ」
　横島の言葉にフランは遠慮がちながらも嬉しそうに、チルノや大妖精は戸惑いや遠慮の方が大きいらしい。だが、ちらちらと視線を髪留めに向ける姿は微笑ましいものがある。
「ほれ、遠慮すんなって。大妖精には迷惑掛けてるし、チルノは俺達を案内してくれたし……まあ、これがお詫びとかお礼の品になるのかは分かんねーけど」
「い、いえっ、そんな！　……あの、ありがとうございます。お言葉に甘えさせていただきます」
「ははは、急に畏まったな」
「……むぅ」
「悪い悪い、冗談だって。……ほれ、チルノも」
「あ……うん。ありがとう、お兄さん」

どこかぼうっとした様子で横島に礼を言うチルノ。彼女の視線は横島を向いた後、すぐに髪留めへと移動した。そしてその髪留めを買ってもらえるのだと理解し、どんどんと口角が上がっていった。

「おうおう、さっきの泣き顔も個人的には好きだが、やっぱチルノはそういう風に笑ってんのが一番可愛いな」

「え……」

「んじゃ、俺は支払いしてくるからちょっと待っててな。……おーい、森近。精算頼むー」

――――」

最後にチルノの頭を一撫でし、横島は髪留めを持って未だ何かを語り続ける霖之助の下へと向かう。が、熱はまだ冷めていなかったのか、霖之助はまるで気付かず、代わりに魔理沙が非常に面倒臭そうな顔をしつつ業務を代行した。

三つ合わせても五百円もしないような安物だが、それでもそれが大切なものになるかは当人達が決めることだ。

「ふふ。可愛いだって、チルノ」

「……うん」

「むぅ……私の方がもっと早くチルノちゃんが可愛いって知ってたもん」

「ありがと、大ちゃん。大ちゃんも可愛いよ？」

「そ、そんなっ、私なんて……!?」

顔を赤くしたチルノ、笑みを深めたフラン、嫉妬にむくれる大妖精と、三者三様の様相を見せる彼女達。

普段と変わらぬ仲の良さだが、その内で、徐々に変わっていくものが存在している。

チルノの中で芽生えたもの。チルノの中で育つもの。それは、どんどん強く、大きくなっていく。

そう、どんどんと強く。どんどんと、大きくなっているのだ――――。

第六十話

『胸を張って』

～了～

第六十一話

香霖堂から離れてまたも空の旅。フラン・チルノ・大妖精の三人は顔いっぱいに笑顔を咲かせ、楽しそうにおしゃべりをしている。

互いに可愛い、似合っていると褒めあう姿は可愛らしく、はたてもパシャリとシャッターを切るほどだ。

何が似合っているのか。それは横島から贈られた髪留めだ。それぞれフランは赤い丸型、大妖精はオレンジ色の三角形、チルノはひまわりの形の髪留めをしている。

フランの金の髪に赤が映え、大妖精の穏やかな緑の髪に活発な印象を与えるオレンジがアクセントとなり、青く冷たいチルノの髪に暖かさの象徴とも言える太陽の花――――ひまわりが咲くことで、これまでのチルノとはまた違った雰囲気を醸し出している。

横島は当初、あまりに安っぽいその髪留めに「こんなのでいいのだろーか？」と疑問を持ったのだが……特にフランの衣服は最上級の布が使われており、髪留めのチープさと服の高級感の釣り合いがまるで取れていない。しかし、それでもと横島は考える。

フランは喜んでいる。大切な友達とお揃いの髪留め。形は違えど、それは初めて贈ら

れた、他の誰かと思いを共有出来る物である。友人がいなかったフランにとって、それは憧れの物だった。

フランの笑顔を見て、横島は考えを改める。確かにチープであるが……それでも、そこに込められた思いは何物にも変えがたい。フランが喜んでくれているのなら、それが一番なのだ、と。

「――――これから向かうのは妖怪の山……というか、守矢神社なんだよな？」

「うん、そうよー。やっぱり幻想郷の案内なんだから、あそこはおさえておかないとねー」

守矢神社――――。

幻想郷に突然神社と湖ごと外の世界からやって来た神様の一団。外の世界で信仰を得られなくなったのがその原因であるが、力を失っている状態でそんな荒業を実行出来るのだから恐ろしいものがある。

彼女達の計画性、決断力、そして実行力は驚異の一言であり、彼女達の行動は（色んな意味で）幻想郷の注目の的である。

例えば里の人間達から信仰を得るために索道――――つまりロープウェイを建設したり、次世代のクリーンなエネルギーの開発として核融合を提唱したりなどしている。

表向きの祭神であり、山の神である八坂神奈子、風祝にして現人神（あらひとがみ）である東風谷早苗、

そして真の祭神にして土着神の頂点であり、ミシャグジ様の統括官である洩矢諏訪子が守矢神社のメンバーだ。
　横島達はそんな神様である彼女達の住まう場所へと向かっているのである。

第六十一話
『とびだせ妖怪の山』

「あ、悪いんだけどみんなここで一旦地上に降りてくれるー？」
　言うが早いか、はたては地上……山の中腹辺りに下降していく。横島達もはたてに倣い地上へと降り立つが、そこは何の変哲もないただの山中。何か特別な結界があったり、何らかの意匠があったりなどもない、普通の場所だ。
「ここに何かあんのか？」
「んー、そういうわけじゃないんだけど……まあ、もう少ししたら分かるから」

はたては特に何をするでもなく、面倒そうに息を吐きながらも動こうとしない。皆はそんなはたてに疑問を持つが、とりあえずは彼女の言う通りに待つことにした。何があるのかは分からないが、そうそう危険なものではないだろう。

そして着陸してからわずか数十秒。横島が何者かが近づいてくる気配を捉える。

「これは……はたてちゃんや文ちゃんってよりも、椛ちゃんに近いか……？」

「……流石ね、横島さん。そう、こっちに向かってるのは――――」

はたてがその正体を明かす刹那、二つの影が頭上から落ちてくる。間違いなく森の中から気配が近付いていたというのに、頭上から現れるとはかなりの速度の持ち主のようだ。

「そこな人間と外部の妖怪共よ、これ以上妖怪の山を進行することは許されん!!」

「即刻立ち去るのならば手荒な真似はせん！　だが、手向かうならば容赦はせんぞ!!」

横島達の前に現れたのは白髪に犬の様な耳を生やした二人の青年。背が高く、顔が良く、凛々しい雰囲気の二人の登場に横島の額に井桁が浮かぶ。

彼等は妖怪の山の見回りをしている白狼天狗。横島が気付いた通り、椛と同種族の妖怪だ。

「我等流浪の見張り番!!　狗我兄弟が長男　〝一狼〟と!!」

「同じく次男　〝三四狼五六左衛門宗徳〟が!!」

「妖怪の山の恐ろしさを味わわせてくれる!!」

そうやって綺麗にハモった二人は背に抱えていた大剣を構え、威嚇をしてくる。二人にはツッコミ所が多数あったが……というかツッコミ所しかないが、それでも明確に敵対行動を取っている。その事実にチルノは怯み、大妖精は怯えを見せる。フランは自分の認識が甘かったことを理解し、自分達に剣を向ける二人に敵意を募らせるが……横島が、庇うかのように一歩前へと踏み出す。

「ふん、潔く立ち去る気になったか？」

「それとも我等に手向かうか？　……答えを聞こうではないか」

狗我兄弟は横島へと切っ先を向け、応否を問う。横島は歪(いびつ)に歪んだ笑みを浮かべ、全身から霊波を放出する。

「ぬうっ!?」

「何という禍々しい霊波……!!」

それは怒りに染まった霊波だ。自分達に剣を向け、害を及ぼそうとした。チルノや大妖精を怯えさせたこと。そして何よりも二人が美形であること――――……。

「ふふふふ……!!　俺達に剣を向ける美形は屠るべし。慈悲は無い」

横島の両腕が甲高い音を立て、霊波の鎧に包まれる。集束し切れなかった霊波が亀裂から靄のように立ち上るそれは、現在の横島の切り札、〝栄光の手(ハンズ・オブ・グローリー)・プラス〟。何

気に両腕に展開可能となっており、もう完膚なきまでに叩き潰す気満々である。
最早場の空気は一触即発。周りの者が固唾を呑んで見守る中、少しの刺激で戦いが始まろうとしている闘争の場に、一人の少女が踏み込んでくる。
「はいはい、ちょっとみんな落ち着いて。別にケンカをするためにここに来たわけじゃないんだからー」
「……なっ、貴女は……!?」
少女――――はたての登場に狗我兄弟の顔は驚愕に染まる。まるで見てはならない物を見てしまったかのようなその反応は、はたて本人にも疑問が浮かぶ。
「何をそんなに驚いて……」
「馬鹿なっ!! 引きこもりで有名な姫海棠はたてさんが外に出ているだと……っ!!?」
「――――は?」
はたての額に井桁が浮かぶ。自らの記憶が確かならば、この二人とはこれが初対面のはずだ。だというのに何故そんな失礼なことを言われなければならないのか。
「はたてさん! 何故貴女が人間と共にいるのです!? まさか、その男にかどわかされたのですか!?」
「いや、何でそうなるのよ。この人は……その、私の友人で、私が幻想郷の案内をしているだけで――――」

「何……だと……!?　あの引きこもりで有名なはたてさんに、人間とはいえ友人がいたというのか……!!?」

「なにアンタら、さっきからケンカ売ってんの?」

あまりにもあまりな狗我兄弟の言い様にはたての体から怒気混じりの霊波が溢れ出る。それは先程までの横島に勝るとも劣らぬ物であり、曲がりなりにも神魔に匹敵する霊力を誇る横島と並ぶとは幻想郷最強種族（自称）である天狗の面目躍如といったところか。

「申し訳御座いませんでした」

当然そんな天狗であるはたての威圧に彼等下っ端の白狼天狗が耐えられるわけもなく、狗我兄弟は綺麗な土下座を披露するのであった。

「なるほど、そういうことでしたか……」

「守矢神社に参りに行くと……そして、そのために妖怪の山に入ることへの許可を取ろうとしてくださっていたとは……」

はたては土下座をしている狗我兄弟に横島達が妖怪の山へと入った理由を語る。

妖怪の山は他の陣営と比べるとかなり排他的であり、外部の者がみだりに進入するこ

とを許さない。妖怪の山に入るには今回のような特別な伝手を頼るか、もしくは無断で進入するしかない。もっとも、無断で進入した場合にその命の保障は出来ないのだが。

最近では守矢神社が妖怪の山だけでなく、人里での信仰を集めるために索道を造ろうとしている。これには反対の者も多く、一応はトップの了承を得ることが出来たのだが、それに対し不満を持つ者も少なくない。形は出来てきているのだが……運行は、まだ先だろう。

「すまぬ、人間と外部の妖怪達よ。最近、妖怪の山に無断に入り、山の獣を食い荒らす得体の知れないモノが頻繁に現れていてな。我等の仲間も何人か犠牲になっていたのだ」

「それ故普段以上に警戒が強くなっていてな。いや、はたてさんのお客人に失礼をしてしまった」

狗我兄弟から剣を向けられた理由を聞き、横島達は顔を見合わせる。詳しく話を聞いてみると、被害に遭った者達は例外なく血と腸(はらわた)を刳り貫かれていたらしい。どうやら妖怪の山にも『男』は出現していたようだ。

思わぬ所で『男』の話を聞いた横島達はアイコンタクトを交わし、とりあえずは詳細を省き、その得体の知れないモノが退治されたという事実だけを伝えておく。どうやら積極的に外の情報を仕入れたりはしていないようである。はたては文が既に新聞にしていたと思っていたのだが、どうも文の遅筆癖のせいか、未だに記事は出来上がってい

ないらしい。
「……そう、でしたか。これで食われた者達も安心して旅立てるでしょう」
狗我兄弟の兄、一狼は黙祷するかのように目を閉じ、そう言った。次男の三四狼も胸に手を当て、目を閉じて空を仰いでいる。
「――――さて、はたてさんのご友人でいらっしゃるのなら、我等が止める理由もありません。紅白の巫女や黒白の魔法使いやナイフの召使や半霊を連れた少女剣士のように無断で進入してくるばかりか、何事も力で解決しようとはしていませんからな」
「……おかしいな、何か凄く俺の知ってる人達のような気がする……」
「残念ながら本人達でしょうね」
気分を切り替えようと、一狼はややおどけたように妖怪の山黒便覧（ブラックリスト）に載っている人物達の特徴を挙げるが、何の偶然か、それは全て横島の知人であった。しかも内二人は横島の師匠である。
「霊夢ちゃんと魔理沙はともかく、咲夜さんと妖夢ちゃんも何やってんのさ……」
はっきり言ってしまえば横島が言えたことでもないのだが。とりあえず原因は守矢神社にあったということは記しておこう。
「ふふ……彼女達のおかげで残業は増え、休日と給料は減り、頭には円形ハゲが……」
「ふふ……家のローン、まだ払い終わってないのに……」

「……あんたらも苦労してんだな」
「紅魔館はそういうの聞いたことないけど……」
「あそこは逆にホワイトだよね。あんなに赤いのに」
横島には狗我兄弟の苦労が身に沁みて理解出来た。横島も自業自得な場合がほとんどだが職場で苦労していた身。特にお金のない辛さに関して、狗我兄弟にシンパシーを感じるほどだ。
逆にフランやチルノは白狼天狗のブラックさ加減に驚いている様子。比較対象となっている紅魔館は悪魔の館と呼ばれる割にホワイトなので、そのギャップが凄まじいのだ。
「では、我々は詰め所へと戻ります。先の情報を皆にも知らせたいので」
狗我兄弟は横島達に一礼すると、そのまま振り返ることなく空を飛んでいった。何となくだが、現れた時よりも足取りが軽くなっているような気がする。
「しっかし、『ヤロー』が死んだっつーのはここのトップに伝わってないのか？　てっきり文ちゃんあたりが報告してると思ったんだが……」
横島は白狼天狗達に『男』に関する情報が行き渡っていないことに疑問を覚える。同じ疑問を抱いていたはたてはこくりと頷いた。はたては考える。もしかしたら……という可能性の一つに、わざと教えなかったというのがあるのかもしれない。

狗我兄弟が言っていたように、妖怪の山に力ずくで進入してくる者は多い。まあ相手が神様だったり博麗の巫女だったり大妖怪だったりと相手が悪い場合もあるが、それを除いても人間相手に簡単に倒されてしまっては見張り番の意味がない。そこで、あえて『男』が倒されたことを知らせず、危機感を煽り、白狼天狗達に極度の緊張感と使命感を持たせていたのだとしたら……。

「……やっぱり妖怪の山ってブラックよねー……」

ある意味鬼に支配されていた時より酷い、とはたての談。もちろんこれははたての想像であり、実際に天狗達の長、〝天魔〟が何を考えているのかは分からない。しかし、何を考えていたとしても、苦労を被るのはいつも下っ端なのだ。

「私は鴉天狗で良かったー」

天狗は種族によって役職が決められている。鴉天狗は広報担当だ。かつての鬼達や名代の天魔のように、力が強いほど理不尽なのは妖怪の常。はたても余計な苦労は背負い込みたくはないので、この件には関わらないことを心に決めた。

「さて、これで俺達は妖怪の山に入っても良くなった……んだよな？」

「うん、そうよ。詳しくは省くけど、妖怪の山の不思議なテクノロジーで横島さんやフランちゃん達は私のお客様って認められたからね。一々突っかかってくる見張りはいなくなったはずだよ」

妖怪の山は河童の技術により、外の世界に負けないほどの暮らしが出来るという。今回もその謎の技術が関わっているらしいが、やはり門外不出の技術なのだろう。はたてもどういったものかは説明せずにその話を打ち切った。あるいは全然詳しくないのかもしれない。

「さて、それじゃあ残りは一気に飛んでいきましょうか」

はたての言葉を合図に、皆は再び空を飛ぶ。思ったよりも時間を取られてしまったが、必要なことであったので文句はない。難しい話が続いたせいでチルノは眠たそうであったが、大妖精の尽力により何とか眠らずに済んでいた。ただし、半目に大口を空けて、女の子が誰かに見せてはいけない顔をしていたが……。

そんなチルノを引っ張りながら空を行き、数分後。ようやく守矢神社に辿り着いた。鳥居をくぐり、振り返ってみれば、そこに広がるのは真っ白い雲と、一面に広がる緑。遠くには人里が見え、掌にも簡単に収まるような大きさに見える。

「――――幻想郷が小さいってやっぱり嘘じゃん。山は雲より高いし森はどこまでも広がってるしここから見える湖はでっけーしそもそも土地が余りまくって」

それ以上いけない。

「――――あれ、お客さんですか？　珍しいですね、こんな時間に――――って、あなたは……!?」

「あん？」

　可愛らしい女子高生と思しき声に再度振り返れば、そこにはやや引きつった表情の少女、東風谷早苗がいた。

「おお、久しぶりー！　紅魔館でのパーティー以来だなー！」

「ひぃっ!?　……え、ええ。お久しぶりです横島さん……」

　早速人間の限界を無視したスピードで早苗の眼前まで移動し、挨拶をしつつも彼女の手を取る。早苗はそのアクションに一瞬怯えた表情を見せるが、何とか落ち着くと引きつった表情ながらも横島に挨拶を返す。どうやら早苗の中で横島の存在は何とも言えないことになっているようだ。……まあ、目の前でオンバシラに潰され、かと思えばすぐさま復活してきた様を見せられれば恐怖を抱いても仕方がないだろう。

　早苗は未だ外の世界の常識に囚われている。幻想郷では常識に囚われてはいけないのだ。横島は常識を超越する!!

「早苗の恐怖が伝わってきた!!　不埒者は死すべき慈悲は無い!!　〃神祭「エクスパンデッド・オンバシラ」〃――――!!!」

「おぎゅぶちぎゅ――――」

「ひいいいいいいいっ!!?」

　それは、一瞬だった。突如上空から横島を目掛けて二十二本ものオンバシラが殺到す

る。早苗は何らかの不思議な力により無事であったが、またも横島がオンバシラに潰される所を見てしまった。しかも、今回はぐっちゃぐちゃである。ぐっちゃぐちゃ。人を超えた現人神の動体視力は残酷な物を捉えてしまいました。猟奇殺人現場です。

「横島さーーーーーんっ!?」

「きききゅっとしてドカーンッ!!　きゅっとしてドカーンッ!!　きゅっとして――!!」

「よよよよ横島さんが潰れて、赤いのがビシャって、赤いのがビシャって……」

「早苗に手を出す悪い虫はこの私が許さな――――って、あれ？　この子、もしかして……」

はたては急な惨劇に叫ぶしか出来ず、フランは能力を使って横島を潰したオンバシラを破壊し、大妖精は目の当たりにしてしまったとってもグロテスクな光景に意識を失いかける。緑の髪の子は不憫な目に遭う運命なのだろうか？　ちなみに下手人である神奈子は何だか見覚えのある光景に冷や汗を流している。「前にもこんなことがあったなぁ」、と。

「お兄さぁーーーーーんっ!!　お兄さんお兄さんお兄さんお兄さんお兄さんっ!!?」

チルノは横島の名を叫びながらオンバシラによってボロボロになってしまった横島

に駆け寄る。普段のチルノの様子からは考えられないほどの取り乱しぶりに、フランとはたては一瞬呆気に取られてしまう。しかし、すぐさま正気に戻り、チルノと同じく横島へと駆け寄る。

　チルノは自分が血で汚れるのも構わずに横島を抱き起こそうとするのだが、ここで思い出して欲しい。横島は、はたしてオンバシラに全身をぐっちゃぐちゃにされたくらいでどうにかなってしまうような人物だっただろうか。

「いいいいいっってえなコンチクショーーーーーーッ!!!」

「お兄さ――――うそぉ……」

「ただお兄様大丈夫!?」

「横島さん、もう平気なの!?」

「ひいいいいっ!?」

　横島は普通に復活した。目の前で何事もなかったかのように復活して早苗が化け物を見るかのような目で見てしまうほどに普通に復活した。血の痕も衣服のほつれも何もなく、普段と変わりのない姿である。あれほど取り乱していたチルノも一瞬で正気に戻るほどの無茶苦茶ぶりだ。

「君は……やはり横島君！　私は……またも君にオンバシラを……!!」

「いやー、俺に激しいツッコミを入れるのは業界のお約束なんで大丈夫っすよ。でも他

の子に迷惑が掛かるのでもう少し攻撃範囲を狭く……」
「くうぅ……すまない……本当にすまない……!!　というか久しぶりに本編に登場したのに何でまたこんな役回りなんだ……!!　作者は私が嫌いなのか……!?」
「ま、まーまー元気出してくださいよ！　俺は神奈子様好きっすよ！　美人だし大人っぽいしチチでかいし!!　これでもう少し外見年齢が上だったらぼかーもう……!!」
「ん、んん……そうまで言われると、流石に照れるなぁ……あははは……」
　何だか問題はとんでもないスピードで解決に至ったらしい。それでいいのかと思わなくもないが、横島は一切気にしていない様子。神奈子の悔し涙や大きなチチに絆されたらしい。実にイヤラシイ目をしている。神奈子も神奈子で横島のセクハラを交えた褒め言葉を喜んでいるし、何やら残念な匂いが漂い始めている。
「それにしても本当に久しぶりっすね。あの時と変わらず……いや、神奈子様はあの時より、今の方が確実にお美しい……!!」
　そして媚を売るのも忘れない。置いてけぼりのチルノやフランは顔を見合わせ、はたては横島のバイタリティに改めて驚く。「これもナンパになるのでは?」という考えも頭にちらついたが、横島の守備範囲が下がるのは自分にとっても都合が良いため、口には出さない。どんどんと横島の影響を受けてきているようで、これには文もにっこりだろう。椛は……強く生きてほしい。

「む……ん。そんな風に褒められるのは最近はなかったな。そうか、美人か……ふふふ」
　神奈子も満更ではないようで、照れ臭そうに笑みを浮かべ、頬にかかる髪をいじる。その様はまさに美少女であり、横島もデレデレである。
　流石に〝横島をぐちゃぐちゃにした人物が横島に口説かれている〟という今の状況は面白くないのか、フランとチルノが「横島の仇」と神奈子にグルグルパンチをお見舞いする。見た目には可愛いそれだが、相手は並の妖怪をも越える氷精と吸血鬼だ。効果音のほうは「ボスボスボスッ!!」「ドゴドゴドゴッ!!」など、実に重々しい。
「ああ、本、当に、悪、いと、思っ、てい、る。だ、から、みぞ、鳩尾はやめげふぅっ」
　神奈子は負い目からか二人の拳を甘んじて受けているが、そろそろ本当に苦しそうだ。涙目になっている。結局二人は横島のとりなしにより落ち着いた。二人そろって頬を膨らませているのは可愛らしいのだが、容赦なく鳩尾を狙ったりするところは恐ろしい。
「はーっはっはっはっはっはっ!!　はぁーっはっはっはっはっはっはっはっはっ!!!」
「……!?　この笑い声は……!?」
「あの時と同じ無様を晒すとは……!!　修行が足らないよ、神奈子っ!!　だぁから神奈子はアホなのさぁっ!!」

神奈子が少々咳き込みながら腹を押さえ、早苗がそんな神奈子の背をさすっていると、どこからか幼い少女特有の甲高い笑い声が響く。驚いた横島達が辺りを見回すが、一行に謎の笑い声の主の姿は見えない。一体どこにいるというのか。

「どこを見ているのかなっ!?　私はここだよっ!!　ここにいるっ!!」

「――――!!　神社の屋根の上だ!!」

横島の指摘に、皆が一斉に視線を向ける。守矢神社の屋根の上、そこにいた人物は――

――市女笠に目玉を付け、青と白を基調とし、各所に鳥獣戯画の蛙の絵が描かれた壷装束を着た少女が腕を組み、仁王立ちをしていた。そう、彼女こそが守矢神社最後の神――。

「諏訪子様……!?　何でわざわざ高い所に!?」

「いやあ、こういう時のお約束だしねー」

早苗のツッコミに「たはは」と笑いながら答える諏訪子。高い場所にいるので、当然下の者達にはパンツ丸見えである。

諏訪子は「とうっ」と気合を入れてジャンプし、そのままくるくると抱え込みの宙返りをして地面に着地した。壷装束はスカート状になっているので、当然パンツ丸見えである。

「はしたないですよ諏訪子様!!」

「いやー、ごめんごめん。長らく男の子と絡んでないせいか、感覚が麻痺しちゃって」
　早苗の注意にも悪びれた様子のない諏訪子に、早苗は大きな溜め息を吐く。
「その気持ちも分からなくはありませんが、今はお客さん――――横島さん達がいらっしゃってるんですから、そういうのは止めてください」
「あはは、気を付けるよ。……それにしても久しぶりだね、横島君。元気してた？」
「はいっ！　お久しぶりでございます諏訪子様っ！　ご無沙汰してしまい申し訳ありません!!　諏訪子様もお元気なようで、胸の痞えが取れたような気分でゲスよ!!」
　横島は諏訪子の前に跪き、揉み手をしながら全力で媚を売り始めた。はたては「ええ……」と困惑し、神奈子は「仕方ないなぁ」と苦笑し、早苗は「……」と、無言で軽蔑の視線を送っている。
　諏訪子は土着神の頂点であり、祟り神として有名なミシャグジ様の統括官。信仰が神の物だった時代には、このような光景はありふれたものだったのだ。
「んんーふふふ。私の前に跪き、媚を売る少年……。イイねぇ、ゾクゾクしてきたよ……!!」
　諏訪子は跪く横島の頭を撫で、「ニタァ……」と笑みを浮かべる。それはまさに〝爬虫類のような笑顔〟という言葉が似合うものだった。それでも諏訪子の容姿からか、不気味でありながらも可愛らしいという印象を抱く不思議な笑顔である。

諏訪子が横島の頭をかいぐりかいぐりと撫で回していると、またも何者かの声が守矢神社に響き渡る。

「――――よくもアタイの前に姿をあらわした!!」

「むっ、この声は……」

「今度は何だ……!?」

辺りを見回してもやはり声の主の姿はない。もちろん神社の屋根の上にもだ。

「ここで会ったが百年目……!!」

響く声には何やら怒りや恨みといった感情が込められている。一体何者であるというのだろうか。

「……!! 鳥居の上です!!」

ついに大妖精が声の主を発見する。

その者は白と青を基調とした服に身を包み、青いリボン、ひまわりの髪留め、そして氷の羽根が特徴の妖精少女――――。

「アタイは、アンタに弾幕ファイトを申し込む!!」

「やっぱり君か――――チルノ!!」

「何でまたわざわざ高い所に!?」

それは⑨と煙は高い所が好きと申しますので……。

チルノと諏訪子、二人はじっとにらみ合い、互いに闘気を放出し始める。
「……あの二人って何か因縁あんの？」
「はい……。チルノちゃんは時々カエルを凍らせては水につけて生き返らせる……という遊びをしているんですけど、たまたま散歩をしていた諏訪子さんがチルノちゃんを叱って、それに反発したチルノちゃんが弾幕ごっこを吹っかけて……」
「百パーセント完全にチルノが悪いじゃねーか」
「そうなんです……。二人とも意外と気は合うみたいなんですけど……」
横島は大妖精の元へと歩み寄り、疑問を口にする。大妖精からの答えでは思ったよりも険悪ではないようであり、これも一種のじゃれあいなのだろうと解釈する。二人の表情を見れば、互いに小さくではあるが笑みを浮かべているのが分かる。
「いいだろう……ではここに、第十二回弾幕ファイトの開催を宣言しようじゃないか!!」
「……今までもあんな感じのテンションで十一回も？」
「……はい」
ツッコミ所だ。完全なるツッコミ所なのだが、どうもツッコむ気が起きない。これほどやる気の出ないツッコミ所も珍しいだろう。
「それじゃあ始めようか!!　弾幕ファイトォ……!!」
「レディー……!!」

二人の闘気が極限にまで高まり、周囲に塵の様な物が漂い始める。
緊迫した空気、高まる霊波。――――知らず、大妖精は唾を飲み込んだ。それが、合図となった。
「ゴオオォォーーーーーーッッッ!!」
二人は同時に叫び、猛然と相手に向かって突き進む。腕を振りかぶり、矢のように拳を放つ。響くは爆砕音だ。
――――ぶつかり合う拳と拳。衝撃は伝播し、周囲の空気を弾き、震わせる。二人は同時に弾かれたように飛びのき、空を飛び、空中で幾度も出会いと別れを繰り返す。
繰り出される拳と拳。交わされる蹴りと蹴り。二人の弾幕ファイトはまだ始まったばかりである――――。

「なに!?　弾幕ファイトとは弾幕ごっこのことではないのか!?」
今度こそ、横島のツッコミが守矢神社に響き渡った。
※弾幕ファイトは弾幕ごっこです※

第六十一話
『とびだせ妖怪の山』
～了～

第六十二話

「やあああああぁぁぁっ!!」
「とおおおおおぉぉぉっ!!」
繰り出される拳と拳。ぶつかり合う蹴りと蹴り。
容姿に似合わぬ雄叫びを上げ、落雷のような轟音を響かせ合い、二人の少女は空中で何度も出会いと別れを繰り返す。
「ふーむ……ちょっと見ない間に大分強くなったなぁ、チルノの奴」
「本当ですねぇ。まさか諏訪子様と真正面から拳を交えられるようになるとは……」
「いやいや、あの戦闘を見て感想がそれだけっておかしくないっすか?」
まるでどこかの少年漫画のような戦闘を繰り広げるチルノ達に対し、神奈子と早苗は呑気にもお茶を飲みながら観戦の態勢だ。横島のツッコミも物ともせず、二人はまったりとした空気を纏っている。
「チルノちゃーん!!　頑張ってー!!」
「うーん、良い記事になりそうな予感……!!」

「ほわー……何か手からビーム出しそうだねー」

戦闘が始まってから、大妖精はその前までの呆れたような空気を無かったことにしてチルノを応援し、はたてはやや興奮気味にカメラのシャッターを切っている。フランは感心しながらもどこかとぼけたようなことを口走っている。フランだって普段手から光弾を撃ち出しまくったり、炎の剣を振り回したりしているというのに、今更ビームでどうこうと言うことはないだろう。

横島は何故か自分だけ皆のノリについていけず、どこか冷めたような目で二人の戦いを見上げていた。

どうやら二人の肉弾戦のレベルは非常に近しいらしく、互いに有効打はまだ入っていない。「ちょんわー!!」という妙な叫びと共に諏訪子が蹴りを放つ。それはチルノに防がれてしまったが、横島が思わず目を見開いてしまう程のものがそこにはあった。

諏訪子は普段しゃがんだり、座った姿勢でいることが多い。そのため、彼女の下半身は外見の年齢の割にはむっちりとした肉感を有している。

尻、ふともも、ふくらはぎ、それらは全て柔らかそうな肉に覆われていながらもちゃんと張りがあり、太陽の光を反射して滑らかで鮮やかな肌の色を強調させていた。もし顔をうずめることが出来れば、極上の感触を得られたことだろう。

横島はそれを一通り眺め終えた後、神奈子に顔を向け、お願い事をする。

「神奈子様、よろしくお願いします」
「……君が望むのならあえて謝罪はすまい。ただ、君の期待に応えるのみだ――――オンバシラ!!」
「ありがとうございま〝す〟っ〝!!」
横島から何かを頼まれた神奈子は地面からオンバシラを出現させ、横島の鳩尾を強かに打ちつけた。突然の凶行に皆がまたも取り乱しかけるが、横島がお礼を言っているので「ああ、そういうことか」と瞬時に悟ることが出来た。おかげで早苗の視線は更に冷たくなってしまった。日頃の言動は大事だよね。
「……」
「……？　神奈子様、どうかしました？」
横島にオンバシラを打ち込んだ神奈子は、何かを深く考え込んでいる。横島に声を掛けられた彼女はそのまま横島の顔をじっと見つめ、小さく息を吐き、呟いた。
「……どうやら、君は変わってしまったようだね」
「……！　さすが、よく分かりましたね……」
「ああ。……まあ、今日は聞かないことにしておくよ。陽も大分傾いてきたし、そろそろ二人の決着も付くだろうしね」
「……あのー、お二人とも何の話を……？」

二人の深刻な雰囲気に圧され、話に割り込むことが出来ない早苗。
神奈子が言う〝変わった〟とは、もちろん横島が蓬莱人になってしまったことだ。神奈子は横島を見て変化に気付き、オンバシラで打ち据えたことによって確信を得た。
早苗は横島の変化には気付いていない。元々親交がほとんど無かったのと彼に対する悪感情、そして経験不足が原因である。
いくら幼き頃より修行を積んでいた現人神とはいえ、流石に人間と蓬莱人の差異には気付けなかったようだ。そのことを鑑みれば、横島が妹紅・輝夜・永琳が同種の存在――蓬莱人――であると気付いていたのは驚くべきことだろう。
これも毎日が命がけの実戦だった横島との経験の差であろうか。知識では早苗がはるかに勝っていても、経験から来る感覚的なものについては、横島に軍配が上がる。
「……むっ？　そろそろかな？」
神奈子の言葉に横島と、そして早苗もチルノ達へと意識を向ける。ついに膠着した戦いに変化がありそうだ。
「うむむむ!!」
チルノが悔しそうに唸る。自分はあの頃より強くなった。それは間違いない。しかし、拳での勝負では一向に決着が付きそうにない。弾幕はまだ温存しておきたかったようだが、これでは埒が開かない。

チルノは懐からスペルカードを取り出し、その名を宣言する。

「氷符『アイシクルフォール』!!」

それはチルノのスペルカードでは最も代表的な物であり、最も扱いやすい物だ。ある意味では、チルノの代名詞とも言えるスペルカードである。言い換えるならば、最も対策されているスペルカードというわけだ。――しかし。

「はーっはっは!! そのスペカで私を倒せるとは思わないことだねチルノ!! そのスペカは既に十一回も破っているんだ!! 今回だって簡単に攻略――出来そうにない!!?」

それは、今までの『アイシクルフォール』とは明らかに違っていた。

弾幕の数も、そこに込められた力も、作り出された氷も、全てが異なっている。そう、今までの物が簡単(イージー)な物だとしたら、今回のはそれこそ狂気的(ルナティック)。

細かな霰(アイシクルフォール)ではなく、まさに雹(ヘイルストーム)の嵐と呼べるほどだ。

完全に油断し、舐めきっていた諏訪子は驚きのあまり思考が停止してしまう。今からでは回避も間に合わない。だが、そのような状態でも諏訪子の身体は次の行動を選択している。

選択したのは回避でも防御でもない。――迎撃だ。

「鉄輪『ミシカルリング』!!」

諏訪子がそれを宣言した瞬間、彼女の両手に鉄の輪が出現した。諏訪子がその鉄輪を強く握り締めると輪はどんどんと小さくなっていき、やがて拳を保護するかのように装着された。

諏訪子は胸いっぱいに空気を吸い込み、拳を思い切り引いて――――。

「オラ!!!」

「うそぉおぉぉぉっ!!?」

「ええ……」

拳による突き(ラッシュ)で、迫り来る弾幕と氷を全て砕いていく。

横島は諏訪子の鉄の輪の使い方が「まるでメリケンサックみたいだな」と思っていたら本当にメリケンサックだったことに困惑を禁じえない。それはチルノも同じだったようで、目の前の非現実的な光景に冷静さを完全に失って叫んでしまう。……そして、それが敗因となった。

「バック取ったぁっ!!」

「は――――っ!?」

諏訪子はチルノが正気を取り戻す前に背後へと回りこみ、渾身の力を込めて右腕を引いている。固く握り締められた拳の破壊力は想像に難くない。しかも、今は神の鉄の輪

も装備しているのだ。それをまともに食らってしまっては、敗北は必定である。
「必殺『ケロちゃんパンチ』!!」
「――――ッ!?!!」
迫り来る神の拳。チルノは瞬時に氷の盾を作り出してみせるが、諏訪子はその防御をいとも容易く突き破り、拳をチルノの腹に向かって思い切り振りぬき、境内へと文字通り叩き落した。
チルノが墜落した場所にはクレーターが出来ており、激突の威力をこれでもかと誇示しているかのようだ。
「おいおい……チルノ、大丈夫かー!?」
「チルノちゃーん!!?」
「チルノーっ!?」
当然、そんなことになってしまえば横島達が心配しないわけが無く、クレーターの中心へと走り寄る。もうもうと立ち込める土煙ははたてが風を起こして散らし、ようやくチルノの姿を認めることが出来た。
「チルノちゃんっ!!」
「チルノ……!?」
はたして、そこにいたチルノは。

「きゅう～～～～～」
「……ほっ。大丈夫そうだね」
　目をぐるぐると回し、完全にノビていた。身体中に細かな傷はあるがどれも深刻なものは無く、命に別状は無い。いくら妖精が死んでも復活する存在だとはいえ、横島達としてはチルノが無事……とは言い難いが、それでも生きていたことにほっと胸を撫で下ろしている。
　チルノ、第十二回弾幕ファイト、ＫＯ負け。通算戦績、十二戦〇勝十二敗。

第六十二話
『ケンカ友達』

「いたたたたたたっ!!?」
「こーら、暴れんな。そんなに動かれたら傷の手当も出来ねーだろ？」

あれから数分後、横島は目を覚ましたチルノに手当てを施す。妖精であるからすぐに怪我は治るのだが、それでも気分の問題なのか、横島はポケットから救急箱を取り出し、治療を開始したのだ。早苗がどうやってポケットに救急箱を入れていたのかを尋ねたが、横島は「ああ……ちょっと、入れ方にコツがあって……」と言葉を濁すばかり。彼に常識を期待してはいけないのだ。

「ほれ、後はこれを貼ってろ」

「ふぎゅっ」

最後に鼻をちょんちょんと消毒し、絆創膏を貼る。絆創膏は小さめの物で、活発なチルノの雰囲気に良く似合っている。オシャレに使う物でもないので似合っているといっても、それは褒めているのかは微妙なところだろうが。

チルノは絆創膏が気になるのかしきりにカリカリと掻いている。あまり触らないようにと横島に言われたことで頻度は落ちたが、それでもやはり落ち着かず、絆創膏を触っている。

「うーん、流石に慣れたもんだね。八意永琳と一緒に住んでるだけはあるよ」

「あんまり関係ないような気はしますけど……それより、諏訪子様も手を出してください」

「んん？　何で？」

チルノの治療を終えた横島は、今度は諏訪子に手を出すように言う。諏訪子はとぼけたように首を傾げるが、そんなことでは横島の目は誤魔化せない。横島は諏訪子の腕を優しく握り、長く膨らんでいる袖をそっと引いて、その手指を露出させた。

「す、諏訪子様!?　大丈夫なんですか、その手!?」

「ん……流石にあの威力の弾幕と氷を砕いては無傷ではいられないか」

「いやー、はっはっは。随分と強くなってたからさー」

皆の前に晒された諏訪子の手は、皮がボロボロになり、血が滲んでいた。諏訪子としては早苗に心配を掛けたくなかったのだろうが、こういうものは隠されたほうが心配が募るというもの。横島は諏訪子の手を診察し、特に後遺症が残るような怪我ではないことを早苗に伝える。

横島に対して隔意を持っている早苗も永琳の教え子という彼の話は疑わず、ほっと安堵の息を吐いていた。

「んー、これでも神様だし、ほっとけばすぐに治るんだけどねー」

「そうは言っても、こんだけになってたら痛いでしょ?　ちゃんと治療したほうが傷の治りも早いでしょうし、それに神様とはいえ痛いのは我慢せずにちゃんと言わなきゃダメっすよ」

隠していたのがバレて気まずくなったのか、諏訪子が口をやや尖らせて拗ねたように

言い訳をする。横島はそれを軽く流し、テキパキとした動きで処置をする。数分後には治療も終わり、諏訪子の手にはきっちりと包帯が巻かれている。

「おお……包帯なんて初体験だよ。私の初めて、横島君に奪われちゃったね……」

「横島さんっ!!?」

「何で俺が怒られんのっ!?」

諏訪子のちょっとした悪ふざけで早苗が理不尽に怒る。両手で頬を押さえて意味深な発言をする諏訪子は可愛いが、何故か早苗に怒られている横島には憎たらしく見えてしまう。

横島達の背後ではフランと大妖精がチルノに怪我の具合を聞いており、オロオロと心配そうにしている。大妖精は泣きそうだ。チルノは心配を掛けないように「だいじょーぶだいじょーぶ!!」と言ってペチーンと自らの腹を叩いて見せるが、そこは諏訪子の『ケロちゃんパンチ』を食らったところ。チルノは「おおおぉ……」と呻きながら、膝を付いてしまうのだった。ちなみに打ち身である。

「チルノちゃーん!?」

「何やってんだあいつは……」

「あっはっは、あの子のお守は大変そうだね」

盛大に自爆をしたチルノに大妖精は叫び、横島は呆れ、諏訪子は大笑いだ。

空を見れば、綺麗な夕焼けが瞳を焼く。赤く、燃えるような日差しに、フランは傘をバリヤーのように向けて立っている。それを見てもう少し大きな日傘を用意したほうが良いのかと思案する横島だが、彼女達スカーレット姉妹が持っている日傘はどれも彼からすれば小さすぎる物。

オシャレを兼ねているとはいえ、小さいものしかないのはどうしたものか。

「んー、いっそ日焼け止めを塗ってみるとか……？」

とりあえずの思い付きを言葉に出し、思案する。元の世界でそのような映画を見たこともあるし、意外と良い案なのかもしれない。

「……日焼けといえば」

ここで何かに思い至ったのか、横島はチルノを見る。

――――最近、高空を飛んでばっかだったせいか、チルノも日焼けしてきてるっぽいんだよな。……日焼けって健康的でいいよなぁ。妹紅と美鈴も日焼けしないかな。

日焼けについてちょっと煩悩を滾らせる横島。日焼けした妹紅に美鈴。妹紅は白い髪に小麦色の肌が映えそうであり、美鈴は赤い髪小麦色の肌でより情熱的に見えるだろう。

これからの季節で日焼けを望むのは難しいかもしれないが、それとなく話をしてみるのもいいかもしれない。胸が高鳴り、夢が広がる。横島の顔はにやけだし、早苗の視線

は更に冷たくなった。その隣で横島の写真を撮っているはたてに対しては、ちょっと引いたような視線を送っている。

「さって、もうそろそろお暇しようかと思うんですけど……」

「ありゃ、もう帰るのかい？　せっかく久しぶりに会ったんだから夕飯でもご馳走しようかと思ってたんだけど……」

「そうだね。私も横島君をオンバシラでぐっちゃぐちゃにしちゃったし、そのお詫びも兼ねて」

「そう、ですね。諏訪子様を治療してくれたお礼もありますし」

陽も沈みそうな頃、横島達はそろそろ守矢神社を辞そうとするが、諏訪子はそれを止める。それは嬉しいことに神奈子と早苗も同様だったようで、諏訪子の援護をする。

しかし、今日は急な訪問だったこともあるし、やって来た時間も遅かった。更に言えば横島達一行は五人。流石に今から五人分の夕食を用意してもらうのは気が引ける。これは他の皆も同様であり、何より夕飯は別のところで取る予定なのだ。

「いえ、ありがたいことではあるんですけど、やっぱり今回は急なことでしたしね。もし今度誘っていただけるのなら、その時はお邪魔しようかと思いますけど……」

「うーん、そっか。そこまで気にしてくれなくてもいいんだけど……まあ、確かに今からじゃ大したものも用意できないからね。仕方ないか」

残念がる諏訪子に横島は嬉しくなる。見た目が幼い方であるとはいえ、やはり美少女に惜しまれるのは嬉しいものだ。

「それじゃあ、また今度」

「今度会う時は絶対に勝ってやるんだからなー!!　バーカバーカ!!　覚えてろ、カエルの神様!!」

「別にカエルの神様ってわけじゃないんだけどねー……ま、いいや。どーせ次も私の勝ちだし？　負け犬の遠吠えくらいいくらでも聞いてあげるよー？」

「むっきゃー!!　絶対に氷漬けにしてやるー!!」

「いつもうちのチルノちゃんがすみません……」

「いえ、うちの諏訪子様も似た様なものですので……」

帰り際にも随分と賑やかなことだ。大妖精と早苗は互いに頭を下げあい、その背中に苦労人オーラを背負っている。やはり緑の髪の子は不憫な目に遭うようだ。

彼女達の後ろでチルノと諏訪子は罵りあい、ついにはポカスカと殴り合いを始めてしまう。なるほど、確かに二人は気が合うのだろう。弾幕ファイト中ではないので見た目にも可愛らしいものだが、流石に怪我をした状態で殴りあうのは看過出来ず、それぞれチルノに横島が、諏訪子に神奈子がゲンコツを食らわし、大人しくさせた。

「これ以上怪我を増やす気か、お前は」

「諏訪子も、横島君の治療を無駄にするつもりなのか？」
「ごめんなさい……」
正座をするチルノと諏訪子、その前に立つ横島と神奈子。どこか親子を髣髴とさせる姿であり、これには大妖精と早苗も苦笑い。もちろんはたてはカメラのシャッターを切っている。横島と出会ってから、新聞のネタがまるで尽きない。
「それじゃ、今度こそ失礼します」
「またねー！」
「また今度取材させてね？」
「……次は勝つもん」
「チルノちゃん、ちゃんと挨拶しないと駄目だよ？」
こうして横島達は守矢神社から飛び立っていく。チルノと諏訪子がわちゃわちゃしていたせいか、やや時間が過ぎており、陽もすっかりと沈んでしまっていた。
横島達の姿が見えなくなるまで見送っていた諏訪子達だが、早苗は夕飯の支度に一足早く住居スペースへと戻る。諏訪子と神奈子は黒く染まっている空に散らばる小さな星を見ながら、今日のこと……横島について話していた。
「横島君……あの子、やっぱり変わってしまっていたよ」
「うん、そうみたいだね。あれは八意永琳と同じ……蓬莱人、か」

天魔から上がってきていた報告を思い出す。妖怪の山の生物を食い荒らしていた『何者か』について。それは鴉天狗の文から提出された報告書だ。横島の部分は濁されていたが、一目見て理解が出来た。

「早苗は気付いてないようだね」

「あの子にはまだ分からないだろうね。もうちょっと経験を積まないと」

早苗は横島の変化には気付いていない。彼女がこれを知ったとき、一体どのような表情を見せるだろうか。

「それはそうと、手の方は大丈夫かい？　まさかチルノの力があれだけ上がってるとは思わなかったけど……」

「ああ、確かにね。まさかチルノに手傷を負わされる日がこようとは……」

諏訪子は包帯の巻かれた両手を見て「むむむ」と唸る。あの弾幕の威力。それは規格外とは言え、決して妖精に出せるものではない。それはこの傷ついた手を見ても明らかだ。

諏訪子は両手を握り、開く動作を繰り返す。思っていたよりも強い痛みが彼女を刺す。

「……チルノ、大丈夫かな」

ぽつりと、諏訪子は呟く。過ぎたる力は身を滅ぼすもの。彼女はケンカ友達であるチ

ルノのことを心配していた。

神奈子は諏訪子の様子にふっと薄い笑みを浮かべ、彼女の帽子に手を置くと、元気付けるように声を掛けた。

「なに、そんなに気になるなら今度はこっちから会いに行けばいいんだ。その時に力を持て余しているようなら封印するなりすればいいしな……まあ、素直に力を封印させてはくれないだろうが」

神奈子の言葉に、諏訪子は小さく頷く。予感がするのだ。きっと、その時はすぐにやってくるだろう。神の力を全力で振るわなければいけないような時が、きっと。

諏訪子は両手をぎゅっと握り締める。その時は、今日のように全力でぶん殴ってやろう。手加減なしで、思い切り。

「さ、もう中に入ろう。早苗も心配する――――あ、忘れてた。諏訪子、お前は境内のクレーターを何とかしてから戻ってきなさい。流石にあのまま放置するわけにはいかんからな」

「……りょうかーい」

一先ず、諏訪子は神の力で境内のクレーターを何とかすることにした。

横島一行は人里を進む。目指すはミスティアが経営しているヤツメウナギの屋台だ。初めて会ってから大凡ふた月。今までは時間が合わなかったが、今日は違う。ちゃんと外で食べてくると言ってあるし、フランもミスティアの作る料理を食べたいとレミリアにおねだりしていた。これで全ての条件はクリアされた。

「……おっ、あれかな？」

横島は屋台の常連である文から聞いていた場所へと向かい、八目鰻と書かれた赤い提灯を発見。見れば既に何人かの客がいるようだ。しかも、その客はつい先日知り合った少女である。

「あれ、幽香さんとメディスンじゃないっすか？　それにリグルにルーミアも」

「横島さん？　チルノに大妖精にフランも」

「おー、昨日ぶりー。みんな元気にしてたー？」

「はたてちゃんもいるのよー？」

ミスティアの屋台にいたのは幽香とメディスン。それだけではない。幽香の周りには他にも二人の少女がいる。リグルにルーミアだ。この二人……そしてミスティアはとあることが切っ掛けで気まずい関係になっていたようだが、こうして皆そろって屋台

で食事をしているのを見ると、どうやら仲直りは出来たらしい。
フランはチルノ達と共に、早速リグル達友人達の元へと突撃している。キャイキャイと騒ぎ、笑顔を浮かべる様は周囲にも笑顔を伝播させ、はたてのカメラが唸りを上げる。
「おっす、ミスティア。第九話で初めて会ってから、ようやくこの屋台に来ることが出来たぜ。一体どんだけ掛かってんだって話だよな」
「あはは。いらっしゃい、横島さん。リアルで三年経ってるなんて、おかしな話ですよね。作中の時間は二ヶ月くらいですけど」
にこやかにとても危険な内容の挨拶を交わす二人。それ以上は天罰の雷が落ちてしまうぞ？
「それはそうと、幽香さんと仲直り出来たんだな」
「はい。ずっと気になってたんですけど、怒られてから会うのが怖くなっちゃって……でも、幽香さんが会いに来てくれて、しかも私達が悪いのに頭を下げてくれた幽香さんを見て、自分は何をやってるんだろうって思ったら涙が出てきちゃって。……それから大泣きしちゃいました」
「ミスティア、凄い大声で泣いてたよね」
「さすが、鳥獣伎楽やってるだけはある声量だった……」
「もう、止めてよぉ!!」

照れたように笑いながらその時のことを語るミスティアに、リグルとルーミアから茶々が入る。やはりその時のことが恥ずかしかったのか、ミスティアはからかってくる二人にお怒りだ。

「おっと、二人も幽香さんと仲直り出来て良かったな」

「はい。ありがとうございます」

「もうお残しは絶対にしない。幽香と約束した」

「お、おう。そうか」

にこやかに笑みを浮かべるリグルとは対照的に、ルーミアは何故か真剣な表情でそんなことを言う。意図は分からないが、とりあえず横島は頷いておく。

「こうしてみんなと仲直り出来たのも、横島さんが切っ掛けを与えてくれたから……せっかくだからご一緒しましょう？」

「ヨロコンデー!!」

横島が幽香程の美少女の頼みを断るわけがない。今宵は皆で宴である。

そして、この宴会の後にちょっとした問題が起こるのだが、それはこの場の誰にも予見することが出来なかった。

第六十二話
『ケンカ友達』
～了～

入れたかったけどボツにしたネタ
諏訪子「ねえねえ、横島君。私たちの中で誰が一番好み？」
横島「え？　それはもちろん……」チラッ
早苗「ひぃっ!?」
横島「……」がっくり
横島「そうっすね。神奈――――」
諏訪子「まだまだ未熟で半人前な早苗と!!」
横島「っ!!?」
諏訪子「立派な神様だけどオンバシラで横島君をぐっちゃぐちゃにした神奈子と!!」
横島「っ!!?」
諏訪子「祟り神として有名なミシャグジ様の統括官である、この私!!　洩矢諏訪子と

!!　この三人の中で、誰が一番好みなんだい!?」
横島「――――っ!!??」
横島「ぐ……っ!!　!!が……っ!!」ぐにゃ～
諏訪子「さあ、誰が好みなのかな？　遠慮せずに言っていいんだよ？　この私にさぁ？」
横島「うう……っ!!　す……で、す……!!」
諏訪子「なにぃ～？　聞こえんなぁ～っ!?」
横島「諏訪子様です!!　三人の中で一番の好みは、諏訪子様ですっ!!」
諏訪子「はぁーっはっはっは!!　聴いたかい早苗!?　神奈子!?　男の心変わりは恐ろしいねぇ!!」
神奈子「諏訪子……お前……」
早苗「諏訪子様……」

終わり

第六十三話

「みんなも食いたいもんはじゃんじゃん注文しろよ～？　とりあえず、みんなで食えるようにこれとこれとこれ、それから俺はこれとこれ、最後にビール」
「はい、かしこまりました」
ミスティアが経営する屋台。横島は皆で食べられるようにテーブルを用意してもらい、大皿料理を何品か、個人的に食べたいものを何品か注文する。
現在の横島は肉類を食べることが出来ない。それは牛・豚・鳥だけでなく、魚も含まれる。しかし横島が注文をしたのは肉類を主としたものばかり。これにフランは戸惑いを覚える。
「あの、ただお兄様。お肉頼んでるけど大丈夫なの？　お兄様って今お肉は……」
心配そうに尋ねるフランに、横島は彼女の頭を撫でて答える。
「まあ確かにまだキツイかもだけどさ、俺も育ち盛りだからさ……何つーのかな？　こう、食欲は湧かないんだけど、無性に肉を食べたいという欲求がだな」
「……ふーん？　お兄様が良いならいいんだけど……無理しちゃ駄目だよ？」

「おう、ありがと」

上目遣いで覗き込んでくるフランに少々照れつつ、横島はそれを誤魔化すためにフランの頭を撫でる強さをやや強めた。多少とはいえ頭を振られるフランは「ぅあー」といった声を上げつつも抵抗は見せず、髪が乱れるのも気にせずに身を委ねる。

二人の見事なイチャつきっぷりに幽香も苦笑いを浮かべる。微笑ましくはあるが、やはりと言うべきかどこか犯罪の匂いがする光景である。

ここで席の並びを見てみよう。テーブルは円卓であり、横島の右隣がフラン。そこからはたて・幽香&メディスン・リグル・ルーミア・大妖精・チルノの順だ。チルノは横島の左隣であり、正面にはリグルが座っている。

テーブルはあまり大きな物ではなく、それぞれ隣の者との間はそう離れていない。肩が触れ合うほど……というわけではないが、それでもやや狭苦しいことに変わりはなかった。なので、フランは横島にべったりとくっつくような形を取っている。安心しきったように弛緩した笑みを向けてくるフランに横島は苦笑を浮かべるが、それを見せ付けられる周囲は堪ったものではない。

特に真正面から見せ付けられている形のリグルなどは顔を真っ赤にしている。しかしその二人からは視線を外さず、もし自分も恋人が出来たらこのようなことをするのだろうかと、妄想の翼を広げ始める始末だ。

親友のルーミアはそんなリグルの頭の中が予想出来たのか呆れたような表情を浮かべており、リグルを肴に注文済みの日本酒をくぴりと呑んだ。

「はーい、失礼しますねー」

「お、きたきた」

空気を読んだのかそれとも偶然か、ここでミスティアが両手に全員分のビールを持ってくる。幽香達は既に乾杯を済ませて好きなように酒を呑んでいたのだが、折角横島達と合流をしたのだから、と用意してもらったのだ。

「んじゃ、ミスティアも一緒に」

「えへへ、本当はダメなんですけどね」

横島に誘われるままにミスティアは己の分のビールを用意する。本当はダメとは言っているが、彼女はとても嬉しそうにビールを持っている。実は、意外とこうした機会に恵まれていないのかもしれない。

「それじゃ、幻想郷の案内お疲れ様でしたと、幽香さん達の仲直りを祝して――乾杯!!」

「かんぱーいっ!!」

横島の音頭に合わせ、皆はグラスをぶつけ合った。

……実年齢的に横島はアウトであり、外見年齢で言えば全員がアウトという、それは

それは危険な光景であったという――――。

第六十三話
『小さな親切、大きなお世話』

「はい、串焼きの盛り合わせと串カツの盛り合わせですよー」
「うん、肉だ。肉以外の何物でもないというくらい、完全な肉だ」
「お兄様、無茶は……」
料理から上る強烈な肉の香りに横島の顔から若干血の気が引く。やはり未だトラウマは根強いらしい。……だからこそトラウマというのだが。
幽香は理由こそ分からないがそれでも横島が現在肉類を食べることが出来ず、それでもそれを克服しようとしていることは理解出来た。なので、ちょっとした荒療治を敢行する。

「何だか分からないけど、横島さんは苦手を克服しようとしているのね。そんな時はお酒の勢いを借りるのも一つの手よ?」
「酒かー……何か、オススメってあります?」
「ええ、もちろん。というわけで、ミスティアー? ごによごによ……」
「ふんふん……はい、かしこまりました」
幽香はミスティアを呼び寄せ、何故か内緒話をするように彼女の耳元で注文を囁く。ミスティアは幽香の言葉に何度か頷き、了承を返して一度屋台へと酒を用意しに戻る。数分が経ち、再び顔を見せた時には彼女はその手に赤いワインが入ったグラスを持っていた。
「これはここの名物の一つなの。さ、グイーッといっちゃいなさい」
「うーん、あんまり度数は高くなさそうだけど……ま、いいや」
グラスを受け取り、横島は幽香の言う通り、グラスを一気に呷る。その際、何か柔らかいものが口内に入り込んだ。くにゅくにゅとした食感。ワインの味が濃くて正体は分からなかったが、どこか果物のような印象を受ける。
「んー……何か入ってましたけど、これって何だったんです?」
「ふふ、それはね。ヤツメウナギの肝入りワインなの」
「んぐ……っ!?」

「お、お兄様!?」

予想だにしなかった答えに、横島は息を詰まらせる。肝入りのワイン。横島が肉類を食べられなくなった原因が原因だけに、彼を襲う衝撃は尋常ではない。先程飲んだ酒が逆流してきそうになるが、横島はそれを気合で耐える。胃酸が混じった独特の酸味が横島の口内に広がっていく。涙が溢れそうだ。フランが背中をさすってくれている。……力が強過ぎて背骨がぽっきりといってしまいそうなのが気になるところである。

「……その様子からすると、肉類が食べられないのは肉体的な理由ではなくて、精神的なものみたいね」

「……まあ、そうっすね」

「でも、あなたはさっきのお酒を呑んでも、何が使われていたかを知るまでは平気だったわよね？　それならそこのお肉だって食べられるんじゃないかしら？」

幽香が指差すのは皿に盛られた肉の串焼き。幽香の言葉は暴論ではあるが、ある意味で正当でもある。ちゃんと食べることが出来たのだ。ならば、あとは少しの勇気を振り絞れば……。

「……よしっ」

横島は静かに気合を入れて串を取る。芳しい香りを漂わせる串を前に数回深呼吸をし、気が変わらないうちに一気に肉へとかぶりついた。隣でフランの息を飲む声が聞こ

えてくる。だが、横島はそれに構うことは出来ず、ひたすらに自分の事に集中する。
何度も何度も咀嚼し、やがて肉の原型がなくなるまで繰り返し噛み締める。フランや幽香、はたてが見守る中、横島はついに肉を飲み込み、深く息を吐いた。
「……」
「……ただお兄様、大丈夫なの……？」
恐る恐るフランは横島に尋ねる。横島は十数秒間反応を返さなかったが、大きく息を吸うとフランの肩に手を置き、少々疲れたような笑顔を見せる。
「ふぅー……ん、思ったより大丈夫だな。久しぶりに食ったけど、やっぱ肉って美味いな」
「……良かったぁ……」
横島の言葉にフランの身体から力が抜け、横島にぺたりと身体を預けてしまう。彼のトラウマを知っている身からすれば、やはり心配の方が先に立つわけで。それでも横島が肉を食べられるようになったのは素直に喜ばしいことだ。これで、彼女も少しは心の荷が下りたことだろう。
「……妹紅のためなんでしょうけど、中々無茶してるね。これが愛ってやつなのかなー？　羨ましいなぁ……」
どうやらはたては横島の心情を正確に見抜いているようだ。今回横島が外で食事を

取ろうとしたのはミスティアの屋台に行くという約束を守るためだけではなく、トラウマの克服を狙ってのものでもあった。

横島が気にしていないとはいえ、妹紅は横島を蓬莱人にしたという負い目がある。さらにはそのせいで横島が肉類を食べることが出来なくなった。それは妹紅の心に深く、そして濃い影を落としている。

妹紅とラインが繋がっている横島はそれを何となく察知していた。その割りに自分から思い切り地雷を踏み抜いたこともあったが、それでも彼女は横島にとって何物にも変えがたき大事な恋人である。横島は、妹紅のためにも早くトラウマを克服しなければいけないと常々考えていたのだ。

「……ごめんなさいね。横島さんの顔色から結構なトラウマだと思っていたんだけど、解決させるなら早い方が良いと思って……」

「いえ、逆に助かりましたよ。あのままだったら多分、結局食わないまま終わりそうな感じでしたし。結果オーライってことで」

「……そう言ってもらえると助かるわ」

横島の言葉に幽香は救われたような気分になる。横島も当初は顔色が悪かったが、一度意を決して食べてみれば、あっさりと以前までのようにガツガツと肉を食べ始める。好物だったのもあるだろうが、横島の切り替えの早さ、適応の早さが関係しているのだ

ろう。

先程までの様子からは想像も出来ないほどの食べっぷりに、幽香は苦笑を浮かべる。まさか、これほどまでに容易く解決するとは思ってもみなかった。

肉を噛み締めて幸せそうな顔をしている横島を見て、幽香はどこか力が抜けてしまう。しかし、そんな横島の顔を眺めていたら、一つ悪戯を思いつく。

――――はたてから聞いたけど、横島さんってフランちゃんを含めて恋人が三人いるのよね。……フランちゃんはともかく、他の二人もお年頃の女の子（数百歳～一二〇〇歳）だし、これは必要なことよね？

頭の中でちゃんと正当な理由を用意するのも忘れない。それが正当かは甚だ疑問ではあるが、自己の正当化はばっちりだ。幽香はにんまりとした顔でまたもミスティアを呼び寄せる。

「注文なんだけど……ごにょごにょ……」

「ふんふん……えぇっ!?」

幽香の注文の内容に驚いたミスティアが大きな声を上げて驚く。周囲の注目を集めたことにも気付かず、顔を真っ赤にしてあわあわと慌てるばかりだ。

「そ、そうですよね……三人もいるんですもんね……」

小さな声でミスティアはよく分からないことを呟く。その後、ミスティアは屋台へと

引っ込み、気合を入れて何品もの料理を作り始める。やがて作られた料理は全て横島の前へと集められた。

「さあ、折角またお肉が食べられるようになったんですから、いっぱい食べてくださいね!!」

「おおっ!!　こらうまそーだ!!」

横島の前には種々様々な肉料理と魚料理の数々。見た目も匂いも、その全てが横島の空腹を刺激する。料理に目を輝かせていた横島はミスティアの言葉を受け、流し込むかのように料理を口に運ぶ。

「こらうまい!!　こらうまい!!」

「おおー……お兄さん、すごい……」

横島の食べっぷりにはチルノも唖然としている。その勢いはまさにバキュームカーといったところか。はたても写真を撮るのを思わず忘れてしまうような光景だが、本人としてはその自覚は無い。何せ彼は元の世界でも高級な食事の際には同じように「こらうまい」と叫びながら料理を掻き込んでいたのである。貧乏ゆえ仕方がないことといえば仕方がないと言えるのかもしれないが、傍から見れば卑しくも恥ずかしい光景と言えるだろう。

一人の料理人であるミスティアからすれば、横島の食べ方は嬉しくもあり悲しくもあ

り……といったところ。美味いと言ってくれるのは嬉しいが、やはりもっとちゃんと味わって欲しいというのが本音だろう。

「うんうん、良い食べっぷりね」

さて、横島の食事風景に皆が驚愕と呆れの視線を送る中、幽香は横島を見て一人頷いていた。

実は幽香がミスティアに注文した料理にはある共通点が存在するのだが、それを知るのは注文をした幽香と調理をしたミスティアのみ。もちろん幽香は善意という名の余計なお節介精神でこれらの料理を用意してもらったのだ。

現在の横島の状況は男として大変羨ましい状況であるのと同時に、大変辛い状況であるとも言える。だからこそのこれらの料理だ。

――――そして、この料理が文字通り横島に致命的なものになると、誰が予想出来ただろうか。

「ふいー、食った食った」

「物凄い勢いでしたね……見てるこっちが胸焼けしましたよ」

「私でもそんなに食べられない……のかー？」

「いや、私に聞かれても困るんだけど？」

満足そうに膨れた腹をさする横島に、リグルが水を飲みながら苦笑交じりに感想を述べる。ルーミアも自分と横島を比べ、なお横島が勝つであろうことをメディスンに尋ね、そのメディスンはルーミアの問いに戸惑いを返す。

横島が食べ終えて数分、皆が茶や酒を呑んで余韻に浸る。まったりとした空気の中、ついに最後の一人が酒を呑み終えた。

「……それじゃ、そろそろお開きにしましょうか」

「そうっすね。夜も大分更けてきましたし……女の子が夜遅くに歩き回るのは止したほうがいいっすからね」

「私達の方がずっと年上なんですけどね」

リグルが横島の言葉にそう返すが、横島からすれば皆は外見と同様に精神も比例して幼く見えている。正直な話、説得力はない。

「今日は私が支払いを持つわ。横島さんにはみんなと仲直りする切っ掛けをもらったしね」

「それを言うなら俺もトラウマ払拭の切っ掛けをもらいましたけど……」

「いいからいいから。ここはお姉さんに任せなさいな」

幽香は手に持っていた小さなバッグから小さな花をあしらった財布を取り出すと、全員分の会計を済ませる。それを見た横島も慌てて財布を出すが、幽香の優しい笑顔と言

葉に、結局は甘えることにした。固辞しては幽香に恥を掻かせてしまう。
「……うっす。ごちになります。このお返しはまた今度させてくださいね」
「ええ。それじゃあ、その時を楽しみにしているわ」
またいつかの約束を取り付ける二人。煩悩に走らず、互いににこやかに笑みを浮かべる姿は非常に珍しいものがある。
幽香の元に皆が食事のお礼を言いに集まる。チルノがきちんと頭を下げていたのが妙に気になる横島であったが、よく考えてみれば、チルノは意外と礼儀正しかったことに気が付いた。普段の言動から抱いていたイメージのせいか、もう少しやんちゃな子だと思い込んでいたのである。……まあ、やんちゃであることに違いはないのだが。
「んじゃ、みんな気を付けてなー！」
「ばいばーい!!」
「ちゃんと歯を磨いて寝るのよー？」
それぞれがそれぞれに別れを告げて、空へと飛び上がり帰路に着く。皆が皆一様に家路の空で先程までの小さな宴を思う。
ケンカをしてから疎遠になり、互いに謝りたいと思っていても一歩を踏み出せなかった。それを、偶然とはいえ解決への切っ掛けを齎してくれた者がいた。
自分を助ける為に、文字通りその身を犠牲にして助けてくれた。しかし、それがトラ

ウマとなって満足な食事が出来なくなっていたのだが、それを克服するための切っ掛けをくれた者がいた。

それぞれの胸に充足感、満足感といったものが押し寄せる。もし今目を閉じて夢の世界へと旅立てば、きっと世界中のテーマパークを合わせても勝てないような、そんな素敵な夢が見れるだろう。それほどまでに見も心も満ち足りていた。

笑顔で宴について話し合い、楽しくもどこか名残惜しそうに空間が形成されている中、ただ一人だけ、その空気の中に入り込めない者が存在した。

「……う、ん」

横島である。彼はその顔を僅かに歪ませ、身体を侵しつつある原因不明の熱と戦っていた。

「ただお兄様、どうしたの？　具合悪いの？」

「ん……何だろうな。もしかしたら食いすぎか飲みすぎかもしれん」

「そりゃまあ、あれだけ食べればねえ……」

横島の様子に気が付いたフランが心配そうに顔を覗き込んでくる。余計な心配を掛けまいと横島は無難な嘘を吐き、周囲にもそれを納得させる。元々食べ過ぎていただけに、説得力は抜群だ。

皆に気を遣われながらも空を飛び続け、ようやく紅魔館の正門前へと帰ってくる。そ

の時には既に横島の頭には強い痺れのような感覚と強い欲望とが襲い掛かってきており、ともすれば失ってしまいそうになる理性を必死に繋ぎとめていた。

「皆さーん、お帰りなさーい！」

「ただいま、めーりん！」

夜遅くもちゃんと門番をしていた美鈴が皆を出迎える。フランを始めとした皆は元気よく美鈴へと声を掛ける。酒が入っているせいか、少々皆のテンションが高い。

「美鈴美鈴、ただお兄様が食べ過ぎで具合が悪くなっちゃったみたいなの」

「え、横島さんがっ？」

フランの報告に美鈴は驚き、横島へと駆け寄る。横島は立ってはいるものの呼吸は浅く早いものとなっている。体温も普段より上がっており、脈もそれに応じて速くなっているのだが、横島はそれを皆に悟らせまいとする。

「大丈夫ですか横島さんっ!?　私が分かりますか!?」

「大げさに過ぎる。あんまり揺らすのとか大きな声とかは止めてくれ。頭に響く……」

「あ、ご、ごめんなさい……」

本当に調子の悪そうな横島に、美鈴は萎縮してしまう。蓬莱人である横島がここまで体調に変化をきたすのもおかしいと思ったのだが、何せ横島はもちろん妹紅や輝夜も時々調子が悪そうにしていることがある。ならば、こういったこともあるだろうか……

？

美鈴は疑問を抱えつつも横島の腰を支え、少しでも歩きやすいように補助をする。その際、耳元で横島に「ありがとう」と囁かれたのだが、彼女はそれだけで腰が砕けそうになった。

横島の言葉が、やたらと熱っぽかったのだ。熱を帯びて濡れた言葉。それは壊れてしまいそうな危うさを秘めながらも、溺れてしまいそうになるほどの色気が含まれていた。そんなものを恋人に、耳元で囁かれたら……。この晩、美鈴は少し悶々として眠るのが遅くなった。

「はぁ……はぁ……」

紅魔館へと帰ってきて、横島はレミリアに帰還の報告もしないまま部屋へと戻り、ベッドの上で臥せっていた。体調を崩していることから、フランや美鈴を始めとする皆が気を遣ってくれたのだ。横島もいい加減限界が近かったため、それに甘えることにする。今自らの中に渦巻く欲を、彼女達にぶつけるわけにはいかない。

横島の中に恐怖が宿る。もし、この胸中に存在するものを彼女達にぶつけてしまったら。

――――怖い。怖い。怖い。怖い。怖い。

――恐ろしい。恐ろしい。恐ろしい。恐ろしい。恐ろしい。

恐怖で身体が震える。もしこの身を焦がす欲を皆にぶつけてしまったら。この身を急かす欲が皆に知れたら。それを考えるだけで、怖くて堪らない。しかし、それでも己の中の欲望は未だ消えず。ほんの少しの刺激でどうにかなってしまいそうだ。

――ノックの音が響く。

「入るわよ」

止める間もなく、一人の少女が部屋へと入ってくる。その少女の名はレミリア。今現在、横島が最も会いたくない人物の一人だ。突然の来訪に半身を起こし、何故ここに来たのかを問う。

「お、お嬢様、どうして……!?」

「あー、フラン達からアンタが調子悪いって聞いてね。どうやらまたお肉を食べられるようになったらしいけど、それで調子に乗って食べ過ぎたんでしょう？　おバカなことをやってる我が執事の様子を見にね」

「う……」

レミリアの言葉に横島は呻く。レミリアの性格を考えれば、こうなることは簡単に予想がついた。レミリアとはそういう人物だ。

うろたえる横島の姿を見て、レミリアは小さく溜め息を吐く。やはり嘘だったか、と。

フランや美鈴から横島の話を聞き、心配してここまで来たというのは本当だ。しかし、調子の悪い理由に関しては違うだろうと当たりをつけていたのだ。

こうして直に顔を合わせてみれば、やはりそれが嘘だったのがよく分かる。横島は何かに怯えている。それが何かは分からないが、このままでは取り返しのつかないことが起こりそうだ。

「どうした？　何があったんだ？」

一歩一歩、ゆっくりと横島に近付いていくレミリアに、横島は何も言えない。心から敬愛する主を前に、横島は必死に耐える。

彼女の美しくも可愛らしい顔を。未成熟でありながら女性としての魅力を持った、その肢体を。その身から立ち上る、どこか甘さを含んだ匂いを。――穢してしまわぬように。

だが、そんな横島の魂を削るかのような戦いも空しく、気付いた時には既にレミリアが目の前に佇んでいた。

「本当に大丈夫か？　熱があるんじゃないのか？」

「――――……!!」

額に触れるレミリアの少し冷たい掌。それは、この火照った身体を冷ますには丁度良い。手を伸ばして引き寄せてみれば、心地よい冷たさと温かさ、柔らかな肌に、そこか

ら薫る匂いに包まれる。

「お、おい、横島……？」

突然の事態にレミリアは困惑を浮かべる。すっぽりと自分を抱きすくめる横島の顔を見上げれば、彼は自分のことを見ておらず、虚ろな眼で虚空を眺めている。どう見ても正気とは言い難い雰囲気だ。横島は今自分が何をしているかも理解出来ていないだろう。

「横島、一体どうし――――っ!?」

尋常ではない横島の様子に当惑していたが、更にそれを助長させるような出来事が起こる。

尾てい骨から背筋を断続的に走る、電流のように強く、そして甘い感覚。レミリアはその小ぶりな尻を、ドロワーズ越しに両の手で鷲掴みにされ、緩急をつけるように時に優しく、時に強く揉みしだかれていた。

「なっ、ちょ、よこし――――!?」

驚きに慌て、横島に声を掛けるも届かない。戸惑いと快感の狭間で身体を捩るが、横島の左手は太腿を優しくさすり、右手にいたってはドロワーズの中に進入を果たし、尻の谷間にまで指を這わせている。

レミリアは身体に走る甘い電流を上手く処理出来ず、されるがままになっていた。ぴ

くぴくと快感に小さく跳ねる身体を何とか抑え、乱れる息を整えようと唇を引き結びながらも鼻で大きく息を吸う。そして、ようやく気付くことが出来た。横島の衣服や身体に染み付いた料理の匂い、そして彼の汗の匂いから、現在横島がどういった状態なのかを正しく把握することが出来たのである。

――――風見幽香め!!　善意でのことだろうが余計なことを!!

幽香が注文し、横島が食べた料理は全て精がつくものだったのだ。そんなもので、と馬鹿にしてはいけない。ここは幻想郷。外の世界では失われた冗談のような効能の精力剤が普通に存在している様なところなのだ。ましてや妖怪に妖精、果てには神までもが存在する世界。その料理に使われた材料も、特別なものであった。

真相に気付いたレミリアは先程までのように快感に流されることなく、横島の両手を掴み、それ以上の狼藉を許さない。一刻も早く、横島の正気を取り戻さねばならないのだ。

――――このままでは精神の均衡が崩れ、横島の心が壊れてしまう!!

レミリアは横島を強引にベッドに押し倒し、彼の両手を片手でまとめて押さえつける。その衝撃のせいか、横島は小さく呻き、その瞳に小さくも理性の火を灯した。

「諸々の問題が解決していたのなら、あのままお前に抱かれるのも吝かではなかったが……残念だが、それはまだお預けだ」

「あ……れ……？　お嬢、様……？」

呻く様に名前を呼ぶ横島の頬に遊ばせていた方の手で触れる。そのまま優しく撫でるように指を唇に這わせ、そこから顎、喉元と移動させる。

レミリアは爪を横島のシャツの首元に引っ掛けると、そのまま力を込め、一直線に引き裂いた。露出した横島の胸に身を預けるようにしなだれかかり、首を甘噛みする。

「う……っ……？」

「苦しいか、横島？　もう少しだけ我慢しろ。強く吸ってやるからな……すぐに楽になる」

横島の耳元で囁いたレミリアは数度首筋を舐めると、そこに自らの牙を突きたてる。牙が肉を破り、鮮血が溢れる。レミリアはそれをいつものようにゆっくりと吸い上げるのではなく、強く、音を立てながら啜っていく。

「じゅるるる……、ずじゅっ、じゅずずず……っ」

「うあっ……、は、あぁ、あ……っ!?」

血を吸われる度に、喘ぎにも近い声が漏れてしまう。強く、下品に血を吸う光景。それは横島には信じられない光景であった。レミリアが横島の血を吸う時、彼女はこんな風に音を立てたりはしなかった。優雅で気品溢れる少女――――それが横島がレミリアに抱くイメージの一つである。そんなレミリアが、下品にも音を立て、口元を汚しな

がらも自分の血を吸っている。何故そんなことになっているのか、横島には分からなかった。

　未だ朦朧とした意識の中とはいえ、横島は確かに正気を取り戻している。横島が聞いた、レミリアの言葉。それが頭の中で何度もリフレインする。――――レミリアが、自分の為にしてくれているのだと。

　レミリアが喉を鳴らして血を飲む度に、横島を苛んでいた身体の熱が失せていく。あれほどまでに自らを追い込んでいた欲望も、今ではその片鱗もない。

「……う……っ……」

「ちゅるるる……ぷあっ――――眠ったか……？」

　横島はレミリアに血を吸われながら、緩やかに意識を失っていく。そこに恐怖は一片も見えず、どこか安堵したような表情であった。

　レミリアは首から口を離す。銀が混じった赤色の橋がぷつりと千切れ、それが最後に横島の身体を汚す。軽い寝息を立てる横島の顔を覗き込み、完全に睡眠へと入ったことを確認する。もしかしたら貧血による気絶かもしれないが、レミリアには判断のしようもないので気にしないことにした。顔色が白くなっているので、可能性としては後者の方が高いかもしれないが。

「ふう……何とかなった、か……」

レミリアは覆いかぶさっていた横島の身体から身を起こし、口をハンカチで拭う。小食のレミリアとしては些か辛い吸血であったが、これも全ては横島の為だ。彼女に否やはない。もしかしたら飲みすぎで体調を崩すかもしれないが、その時はその時だ。

ちらりと横島の顔をもう一度見やれば、彼の口端から少々涎が流れ出ている。恐らく、先程の吸血の時に出てしまったのだろう。レミリアは最後にそれをぺろりと舐め取ると、横島の頭を優しく撫で、部屋を後にした。横島の部屋に響くのは彼の寝息のみ。窓の外からは虫のさざめきが響く。

それは、まるで何もなかったかのように、静かな夜だった――――。

第六十三話

『小さな親切、大きなお世話』

～了～

「それじゃあ、話を聞かせてくれるかな。……小悪魔」

「はい……てゐさん」

そこは、大図書館に程近い、小悪魔の私室。ソファーに座り、対面しているのは小悪魔とてゐの二人。横島達が幻想郷の探検から帰ってきた、翌日のことである。

「私は――――」

言い辛そうに、それでも言わねばならないと、小悪魔は決意を胸に口を開く。それは、あの日に抱いた、罪深い感情の告白だ。

一方その頃紅魔館の正門前では――――!!

「な……ッ!!」

「なんという……ッッ!!」

「偶然!!」

その場に居たのは幻想郷の各派閥のトップとそのお付きの者達。

命蓮寺からは聖白蓮と幽谷響子。神霊廟からは豊聡耳神子と物部布都。守矢神社からは洩矢諏訪子と東風谷早苗。

「なるほど……こういう偶然もあるわけだ。我等三人がここに集った……理由は違えど、目的は一緒だろう？」

不敵に微笑む神子に、白蓮と諏訪子が頷きを返す。それを見た神子はより笑みを深め、こう切り出した。

「共に行かないか」

「私らは一向にかまわんッッ!!」

諏訪子が威勢よく答え、白蓮も静かに笑みを浮かべ、了承の意を返す。

多くの偶然が重なったこの日――それが、運命の日となるのだ。

第六十四話

横島の暴走も収まり、夜が明けて翌日。妹紅が朝から紅魔館を訪れていた。……と言っても皆の朝食が終わってから一時間～二時間後のことであり、それほど早い時間というわけでもないのだが。

妹紅は中庭で優雅にくつろいでいた永琳と合流し、雑談に興じている。

「昨夜遅くに、突然横島君に会いたくなった……ねえ」

「そうなんだよ。何か、自分でも驚くくらい横島のことが頭の中でぐるぐる回ってさ。それで、こう……なんだ。妙に目が冴えて全然眠れなくて……」

昨夜自身の身に起こった不可解な衝動を永琳に話し、何かの病気ではないのかと不安がる妹紅。永琳からすれば「付き合い始めなんだし、ただ単にイチャつきたくなっただけなんじゃないの？」という感想に尽きるのだが、実は真相は異なっている。

妹紅が横島に急に会いたくなった時間は横島が煩悩の昂りを抑えきれなくなっていた時間と一致しており、妹紅が横島に会いたくなったのは逆説的に言えば横島が妹紅を求めたから、と言える。経路（パス）が繋がっている二人だからこその現象と言えるだろう。

ちなみに今も横島は目を覚ましておらず、深い眠りについている。それを知った妹紅は「そうか……」と静かに落ち込み、そわそわと身体を揺らしたりし、永琳から生温かい視線を頂戴していた。

「あれ、妹紅だ！」

「いらっしゃいませ、妹紅さん」

と、そこに現れたのは日傘を差したフランを肩車している美鈴。フランは元気よく妹紅に手を振り、そのせいで少々日差しを浴びてしまったのか、羽や手から煙が上がる。自分の肩の上でフランが灰になりかけているなど、美鈴としては堪ったものではない。何とかフランを落ち着け、美鈴はフラン共々妹紅達と同じ席に着く。

どうでもいいが、今日の美鈴の仕事はお昼からだ。

「いやー、何かこうして私達三人が揃うのは随分と久しぶりな気がしますね」

「本当だねー。実際はほんの数日なのにね」

横島の恋人達三人が揃った。こうなると話題はもう一つしかない。今も眠る横島についてだ。

「そういえば何で横島は寝込んでるんだっけ？」

「えっとね、食べ過ぎと飲み過ぎかな？」

妹紅の疑問に答えるのはある意味当事者の一人であるフランだ。肉に対するトラウ

マを解消するためにミスティアの屋台に行き、そこでちゃんとトラウマを払拭したのだが、そのせいで食べ過ぎてしまい、体調を崩したのだ、と。

実際には精の付く物ばかりごちそうになったから煩悩が滾りに滾り、その後レミリアに失神するまで血を吸われたせいなのであるが……それを知るのはレミリアから事情を聞いた永琳のみである。

流石の永琳も空気を読み、真実を話さない。幽香は怒ると怖いが心優しい少女であり、彼女の実力やいじめっ子気質なところから誤解されることが多い。そのことを知っていたため、これ以上彼女のイメージを低下させないためにも秘密にしているのだ。

何よりも今回は幽香のうっかりが引き起こしたこと。永琳はうっかりには寛容なのだ。だって自分もうっかりさんだから。

「……そっか。肉、食えるようになったのか」

フランから話を聞き、ほっと安堵の息を吐く妹紅。それを見る皆の目は微妙ににやついている。

「な、何だよその目は……？」

「いえ、別に。ただ、随分と愛されてるなぁ……と、ね」

その永琳の言葉に、妹紅の頬が朱に染まる。

手段や行動の是非はともかくとして、横島は一刻も早くトラウマを解消したかったの

だ。本人は肉を食いたいからなどと言っているが、それが誰のためなのかは明白である。こうして皆の視線がにやついてしまうのも仕方がないことなのだ。

「やふー、妹紅。こっちに来てたんだ」

「お邪魔するわね」

「ん……？　輝夜に、パチュリー？　珍しい組み合わせだな」

皆にいじられる羽目に陥りそうな妹紅であったが、それを助けるかのように新たな客がやってくる。輝夜とパチュリーだ。

この二人、意外なことに読書仲間なのである。……といっても、輝夜が読むのはもっぱら漫画であり、パチュリーはそんな彼女からオススメを貸してもらうだけなのだが。どちらも引きこもっている時期が長いせいか、少々オタク気質なところがあるようで、それが仲良くなる切っ掛けだったのだろう。

さて、ここでこの二人が混ざることにより、話は妙な方向へと進み始めることになる。

何せパチュリーは横島を苛めて涙目にすることが好きなのであるし、輝夜は輝夜で横島を弄ることに楽しみを見出している人物である。

横島の涙目、何かに追い詰められた表情、ビクビクオドオドと震える姿……そんな横島の魅力について話し始めたのだ。正直どうかと思う。

この二人の話についてこれるのは永琳しかいない。妹紅は「駄目だこいつら……」と

ドン引きし、フランは頭に疑問符を浮かべつつも「そういうのはいけないと思う」と三人を窘め、美鈴は涙目の横島を想像し、「……可愛いかも」とちょっと洗脳されかけている。

何とも不憫なことであるが、横島には愛のある弄りであると納得をしてもらうほかない。事実、輝夜もパチュリーも横島に好意を抱いているのだ。それが恋愛的な意味か、それとも親愛的な意味かはまた話が別であるが。

「それにしても、横島さんって色んな意味で愛されてるのねー」

「あー、うん。お前がそれを言うのか」

自分の恋人を弄って楽しむ奴にそういうことを言われたくないのか、輝夜の言葉に対する妹紅の声は少々固かった。輝夜はごめんごめんと手をパタパタと振るが、ここでふと思いついた疑問を口にする。

「愛されてるといえば……横島さんは、みんなのどういうところを好きになったんだろうね？」

その疑問に、周囲は口を閉ざす。確かに気になるところである。横島は皆を「可愛い」と評し、真摯な好意と愛情を示してくれるが、一体どのようなところが彼の琴線に触れたのか、興味が湧いて来る。

「……まあ、美鈴はそのプロポーションかしらね。よく朝の鍛錬で薄着でくっついて

たって聞くし、横島ならイチコロでしょ」
「おおう……!!」
パチュリーの言葉に美鈴は顔を両手で覆って恥ずかしがる。非常に今更な話であるが、彼女も立派な乙女。そういうことをしていたという事実は彼女の羞恥心にそれなりの傷を付けていたのだ。
妹紅は美鈴の胸を見た後、自分の胸に目を落とす。彼女とは比べ物にならない。ちゃんと膨らみはある。あるのだが……その差は、あまりにも大き過ぎた。深い深い溜め息が自然と出てしまう。
フランは「やっぱりおっきいおっぱいが好きなんだー」と自分の胸をふにふにと揉んでいる。彼女は妹であるが、既に姉のレミリアよりも胸が大きい。将来性は中々のものであると言えよう。
「妹紅は……何だろうね。親しみやすさ？　横島さんと最初に仲良くなってたし、性格の相性が良かったとか？」
「むう……確かに初めての相手だったかもしれないけど……」
「もこたんのエッチ」
「何が!?　あともこたんは止めろ!!」
少々誤解を招きそうな発言をする輝夜に妹紅の容赦のないツッコミが入る。そして

じゃれあいの始まりだ。

「美鈴、妹紅ときて妹様だけど……何でかしら？　健気さに惹かれたとか……？」

「えーっと……何でだろうね？」

パチュリーの言葉に、皆の視線がフランへと集まる。フランはそれに気後れし、あまり気の聞いた言葉を返せない。そもそも横島も妹紅を始めとする三人のどこに惹かれたのか、曖昧な言葉でしか語っていない。直接聞いたフランでさえ「しっかりとした理由が出てこない」と言われているのだ。

暫くの間あーでもないこーでもないと話し合う五人。横島の恋人である三人も気分を害した様子もなく、むしろ積極的に自分の推測を語っていく。「自分達が可愛いからじゃないか」という自画自賛気味な推測も飛び出す。

しかし、結局推測は推測。真実ではなく、ちゃんとした理由を知っているのは横島ただ一人だけなのだ。いや、横島自身も理由を分かっていないそうなので、真実を知る者は誰一人としていないという状態なのであるが……輝夜は一人だけ会話に参加せず、静かに事の推移を観察していた永琳に話を振る。

「……永琳は何か心当たりとかある？」

「……そうねぇ」

ここで、ようやく永琳は会話の輪に入る。しかし、その表情は真剣そのものであり、他

の皆とは明確な温度差が生じていた。
「本来なら私が話すようなことでもないんだけど……横島君も自覚していないようだしね。話しても良いのだけれど」
「分かるのか？」
横島が妹紅達に惹かれた理由を知っているらしい永琳の口ぶりに期待が高まる。だが……。
「ただし」
「……ただし？」
「……あまり、気分の良いものではないかもしれないわよ？」
「え……？」
その言葉に、ドキリとさせられる。そこまで深刻な内容だというのだろうか。まず第一に、と永琳は人差し指を立て、横島の真実を語り始める。
「横島君はね。……はっきりと言ってしまえば、誰でも良かったのよ」
「え――――」
「と言っても、本当に誰でも良いわけではなくてね、昔はともかく今の横島君には明確な理由が存在しているわ」
「ええ……？」

何とも紛らわしい言い方をするものだ。美鈴などあからさまにほっと息を吐いている。横島からの愛情を感じてはいるが、それでも誰でも良かったと言われるのは辛いものがある。では彼の明確な理由とは、一体どのようなものなのか。

「そうね……それじゃ、フランちゃんから話していきましょうか」

「私から？」

「そう。そもそも、横島君はフランちゃんに対してお兄さんとして接してきてた。男としての部分を見せるでもなく、普通に年上のお兄さんとしてフランちゃんの傍にいた」

永琳はこれまでの横島とフランのやり取りを思い浮かべながらそう語る。皆も、フランもその言葉に頷く。永琳の言葉は正しい。だからこそ、横島がフランに惹かれていることが分かった時は皆が驚いたのだ。

では横島がフランに惹かれた理由とは一体何なのだろうか。

「――――フランちゃんが、横島君を本気で好きになったから」

「え……？」

「それが、理由の一つよ」

フランが横島を好きになったからこそ、横島はフランを好きになったのだという。

永琳の声に迷いはなく、完全に確信を得ているような断定具合だ。理由の一つと言うぐらいだから他にも何かしらの理由があるのだろうが、まず、一つ目からして理解が難

解なものである。
「フランちゃんみたいな可愛い子に、あれほど慕われたらね。横島君にもかなりの葛藤があったけれど……それでも尚、貴女と共に在りたいという気持ちがそれを上回ったの。だから受け入れた。自らの身を……命を懸けても仇を討とうとする、貴女の愛に応えたのよ」
「う……」
フランとしてはあまりほじくり返されたくない出来事ではあるが、それが現在に至る切っ掛けの一つとなっているというのなら、それも甘んじよう。
文字通りの命がけの愛――これが、横島がフランに惹かれた理由の一つであるのだ。
「それじゃあ次は美鈴ね」
「妹紅は最後のお楽しみかー。それにしても美鈴に身体以外で惹かれるところって何だろうね？　顔？」
「さっきから微妙に私への当たりが強くないですか……!?」
「まあその豊満な身体による誘惑も理由の一つだけれどね。やりたい盛りの男の子にあんなことしたら……ね？」
「いやあああああ!?　まるで私がいたいけな少年を堕落させる悪女みたいじゃないです

か――!!?」

やっていたことはそれに近いような気がするが、今は置いておこう。

横島が美鈴に惹かれていく切っ掛けとなったもの。それは毎朝欠かさず修行を続けている太極拳――拳法だ。

「え、あれがですか？」

「ええ。それが貴女と横島君の始まりだもの」

始めはただ気を紛らわせるためだった。次にはちっぽけな〝自己〟を保つためだった。美鈴の優しさから勧められたものであったが、次第に実力が付き、美鈴と時を過ごしていく内に、その認識は変わっていくことになる。

――期待に応えたくなったのだ。何事にも自信が持てず、自分を信用することさえも出来なかった己を、美鈴は褒めてくれた。認めてくれた。

それは、卑屈な横島に強烈な〝鍛錬の意義〟を与えてくれた。美鈴に褒められたい、美鈴に認められたい、それが、今の横島の原動力である。

「同じことは魂魄妖夢にも言えるけど……そこは、アプローチの差が物を言っているのかしらね？」

「はうぅっ!?」

オチをつけるのも忘れない永琳の勤勉さには頭が下がる思いだ。美鈴のアプローチ

も、こうして実を結んでいるのだから、その努力は報われるべきである。

「さて、それじゃあ最後に妹紅だけど……」

「う、うん……!?」

ごくり、と生唾を飲み込み、妹紅はずいと身を乗り出す。彼女が浮かべる表情は散々焦らされたせいか不安が浮かんでおり、それに加えて他の二人の話を聞いたせいか、頬を赤く染めてやや興奮状態といったところだ。相反する感情を同時に表出させているが、こうした精神状態は人間でもそう珍しいものではない。

例えば告白前の状態。例えばギャンブルをしている時の状態。期待と不安、興奮と焦燥が入り混じる感覚は、えも言われぬ精神状態を作り出す。

そんな妹紅の顔を見る永琳は紅茶を一口飲み、ゆっくりと息を吐く。タメを作って相手を焦らすのは永琳の得意技である。しかし、その隣を見ればこちらは期待に目を輝かせる輝夜の姿が。永琳は話を進めることにした。

「妹紅は友人関係から始まったのよね。話し、語らい、そうして日々を過ごしていって、徐々にお互いのことを理解していった」

「ふんふん」

「お互いの認識のズレもあったみたいだけれど……口紅を贈られてからが、転換期かしらね？」

「あああああああ……!!」

口紅の話題を出された瞬間、妹紅が顔を両手で覆って悶絶する。思えば人前でかなり恥ずかしいことをしていたように思える。

バーベキューの時には周囲のことなんて目に入らず、知らずに桃色な雰囲気を放っていたり、時計塔ではやはり周囲のことなんかこれっぽっちも気にせずに、大胆にも自分から唇を重ねた。

横島と出会い、初めて恋を知った彼女には、やはり恥ずかし過ぎる思い出である。もちろん、その分、大切な思い出とも言えるわけだが。

「そして、貴女の想いを決定付けたのは図書館でのことね。横島君は、貴女が思っていた以上に貴女のことを理解していた。余人からは歪んでいると断じられてしまう貴女の価値観を、彼は許容し、そして受け入れていた」

「……」

妹紅は未だ顔の大部分を隠しているが、それでも目を出し、永琳を見つめている。その様子は輝夜がちょっと興奮するくらいには愛らしかった。

「……貴女は毎日を懸命に生きているわ。他の誰よりも、ずっと楽しげに、感動し、感謝して、生と死の境界を往復して――――他の誰よりも、他の何よりも……懸命に生きている」

「……」

「横島君は、それに気付いたから貴女に惹かれたのね。その姿に、その心に魅せられて……」

「……そんな大層なもんじゃないと思うんだけど……」

今まで頬を赤くし、照れていた妹紅が戸惑ったような声を上げる。それは確かに横島にも（直接ではないが）言われたことだ。しかし、そういったものが本当に誰かを惹きつけるのか、妹紅には自信がない。何せ自分でも歪んでいると思っているのだ。そんな歪んだ己が、彼を魅せることが出来るのか――――？

――――出来る、と永琳は言う。しかし、だ。妹紅の歪みに惹かれた理由は他にある。しかし、それは横島のトラウマであり、決して軽々しく口にする事は出来ない聖域だ。流石の永琳もそこまではしない。

だから、今ここで永琳が語るのは他の理由。フランと少々被ってしまうが、己の命を懸けるほどの愛を示す行動だ。

「貴女は自らの生き肝を横島君に食べさせ、彼を蓬莱人にした。それがトドメになったのね」

「え……？」

それが昨日までの横島のトラウマならば、妹紅にとっては未だ残る傷跡。永遠を望ん

でいなかった男から死を奪い、永遠に縛り付けた行いだ。それがトドメになったとは、それが意味することはつまり――――。

「言っておくけど、諦観とかから来る感情じゃないからね？　貴女ならそれを理解しているでしょうに」

「……言われてみればそうだった」

そう。横島と妹紅は経路（パス）が繋がっている。そういった感情を持っていれば、多少なりともそれが妹紅にも伝わってしまうはずなのだ。

では、何故なのか。それは、求められたからだ。

「自分の身を裂くことも厭わず、ただ死んでほしくないから、生きていてほしいから……共に在りたいから。そのために貴女は横島君を蓬莱人にした。――――それこそ、彼の心を裏切ってまでね」

「それは――――！」

永琳の物言いにフランが反感を覚えるが、真剣な眼差しに射抜かれ、何も言い出せず、結局は口を噤んでしまう。それでもその瞳は永琳を睨んでいるが、あまり役に立っているとは言い難い。

確かに永琳の言葉は妹紅の心を抉っているが、重要なのはそこではない。これからなのだ。

「――――それほどまでに、自分は愛されてると知った。だからこそ、トドメなのよ」

「え……？」

それは、妹紅には理解することが出来なかった。

「彼はコンプレックスの塊。自信家に見えて自己評価は恐ろしく低い。……よほど愛される実感に飢えていたのでしょうね。妹紅の行動は――――横島君の心を、強烈に揺り動かした」

「……」

蓬莱人になったことにより、横島はいくつもの可能性、未来を奪われた。しかし、だとしても、横島は妹紅を愛しく思った。愛しているのだ。

蓬莱人である妹紅は死ぬことはない。身を裂かれても、病を得ても、決して死ぬことはない。故に、孤独となってしまう存在だ。人と交わることは出来ず、人と関わることも出来ず、やがて、幻想となってしまった少女。

命を繋ぎ止める為とはいえ、永遠の孤独を生きる彼女が、唯一、死なせたくないと、共に在り続けたいと願った。願ってしまった。

そんな彼女の想いを――――横島は、心の底から嬉しく思った。

「――――貴女達は、それまでの横島君の在り方を変えた存在なの」

永琳はフランを、美鈴を、妹紅を見やる。その視線に込められた思いは、感謝と期待

だ。

「フランは横島君の感性を変え、庇護の対象から恋愛の対象へ」

それは横島の今までの価値観では絶対に在り得なかったこと。フランは自らの命をも懸けた愛を以って、横島の愛を勝ち取った。

「美鈴は痛いのも苦しいのも嫌いで、努力をするのが大嫌いな横島君の思想を変えた」

自らを褒め、期待を寄せてくれた。愛を以って指導し、横島の愛を手に入れた。

「そして妹紅。永遠を厭う横島君が、永遠を生きる決断をした。貴女だからこそ、横島君を変えることが出来た」

定命の者が、望まぬ永遠を手にする。それは呪いと呼べるものだろう。だが、横島はそれを受け入れた。呪われることを良しとしたのだ。それほどまでに――――愛されていると知ったから。限りある命の尊さを知る彼女を、愛したのだ。

「貴女達の愛が横島君を変えたのよ。だから、貴女達は横島君に愛されてるの。貴女達の想いは、確かに彼の心に響いた」

「……」

目を見開いて互いの顔を見合わせる妹紅達を見ながら、永琳は紅茶を飲み、喉を潤す。

――――最も重要な要素は語らない。しかし、注意はしておくべきだろう。

「……でも、今のままでいては駄目よ」

「え？」

「確かに貴女達の想いは横島君に届いたわ。――――でも、彼の心には、大きな歪みが存在している。それこそ狂っていると断言してもいい程の歪みが、ね」

「……！」

それは、あの時の決断によって生まれた歪み。彼女達の想いは、期待は、愛は――――彼女のことを思い起こさせる。

妖怪、吸血鬼、蓬莱人――――永遠を生きる者達。彼女の対極である彼女達。

「横島君は強い……でもね、強いからと言って、決して傷つかないわけではないの。例え芯が丈夫でも、それを支える土台が崩れては意味がないわ」

「……」

「……だからこそ、貴女達には横島君を支えてほしいの。もしその土台が崩れるようなことがあったとしても、貴女達が寄り添い、支えてくれていたら――――横島君は、崩れ落ちずに済むかもしれないから」

永琳が彼女達に望み、期待すること。それが横島を支えることだ。それは他の誰にも出来ぬ、彼の恋人達だからこそ出来ること。ずっと一緒にいてほしいと言われた彼女達だからこそ出来ることだ。

「こんなことを私が言うのは本当におかしいのだけど――――横島君を、お願いね」

微笑みを浮かべ、横島のことを三人に託す永琳。そんな彼女の姿は、どこか母親を思わせるような、そんな慈愛に満ちていた。だから、三人は永琳を真っ直ぐに見つめ――

「――はいっ！」

――と、心から応えた。永琳はそれに満足そうに頷いている。全てを話すことは出来ないが、それでも今話せることは話すことが出来た。

彼女達の幸せな時が、永く永く、永遠に続くようにと願わずにはいられない。そんな永琳の隣から、疑問の声が上がる。

「ふむー、みんな凄いのねー。……でも、〝本気で愛されたから〟っていうのが理由の一つなら、これからも横島さんが誰かを新しく受け入れることもあったりするのかしら？」

その疑問は輝夜が出したものであり、またこの場の誰もが気になるものでもあった。皆の視線が永琳に集まる。永琳はその視線を全て受け止め、一つ息を吐くと。

「……まあ、ありえるわね。最初に言ったでしょう？　誰でも良かったって」

「……ああ、なるほどね。つまり――」

永琳の言葉にパチュリーが得心が行ったとばかりに手を鳴らす。つまり、本気ならば誰をも受け入れるのだ。

「そうね、それこそてゐや妖精もその範疇に入るでしょう。誰かに愛されるということは、それだけで横島君が誰かを愛する理由になる……節操がないと言えるけど、それでも彼はみんなを強く深く、平等に愛するでしょう。それこそ永遠にね」

その言葉は、確かな説得力を持って皆に届いた。横島ならば、という謎の説得力があったのである。

本気で愛するならば誰でも受け入れる……そのことを知ったフランは、一人の少女を思い浮かべる。それは、自分にとってレミリア以外のもう一人の〝お姉ちゃん〟――小悪魔だ。

――小悪魔お姉ちゃんも、ただお兄様と……。

かつて二人で共謀し、横島に〝長生き〟してもらおうと考えていた。それは横島が蓬莱人になったことによってある意味で叶えられたわけだが……同時に、二人の心に深い影を落とした事柄でもあった。

思い違いも甚だしいが、自分達がそんなことを考えたから横島があのような目に遭ったのではないか、と。自分はすぐに暗い闇から大好きなお姉様とお兄様が引き上げてくれた。……では、お姉ちゃんは？

小悪魔はばつが悪いのか、横島とあまり顔を合わそうとしない。『男』が倒れた後、横島が妹紅と恋人関係になった時のこと。小悪魔は妹紅がハーレム容認派と知り、てゐと

共に喜んでいたと後にフランは聞いた。その時には今のように横島を避ける兆候はなかったのだ。その後に、何かがあったのだろうか？

「――――お姉ちゃん……」

紅魔館を見つめながらのその呟きは誰にも聞かれぬまま、風と共に解けて消えた。小悪魔が再び横島を挟んでフランと共に笑い合える日は、来るのだろうか。

第六十四話

『初めて会った、あの日から』

「はー、やれやれ。こっちは忙しいっていうのに、美鈴は優雅にお茶なんかして」

紅魔館の数少ない窓から中庭を見やり、鈴仙が溜め息と共に言葉を吐き出す。現在鈴仙は三階の廊下の掃除中。ヒラヒラのメイド服に身を包み、掃除道具を両手に持って佇むその姿はもはや立派なメイドさんだ。

中庭で仲睦まじくお茶をする彼女達の姿には嫉妬を抱かずにはいられない。それと理不尽な怒りもだ。要は「私だってみんなとお茶がしたい」ということである。

鈴仙は紅魔館のメイドになったわけではない。なので自分から混ざりに行っても何も問題はないのだが、根が真面目な鈴仙は紅魔館に住まわせてもらっている礼として、お手伝いをすると言った。だからその手前、こうした掃除などを放棄して遊び呆けるのはどうも落ち着かない。彼女も立派にワーカーホリックの気があるようだ。

「……美鈴に妹紅、それにフラン……。それに姫様とパチュリーか。師匠を除けば、横島さんとかなり親密なメンバーよね」

何せその五人の内三人は恋人であり、一人は難題をクリアしたお婿さん候補、お姫様抱っこをする仲である。鈴仙の師匠である永琳も横島には何やら特別な思いを持っている様子。鈴仙としては横島の意外なモテっぷりには驚きを隠せない。

「横島さんといえば……またぞろ無茶をやらかしたみたいね」

横島が行った無茶なこと――言うまでもなく肉に対するトラウマの克服である。

鈴仙から見て、彼の肉に対するトラウマは決して軽いものではなかった。それも当然だろう。いくら意識がなかったとはいえ、彼が食した肉は〝蓬莱人の生き肝〟。簡単に言えば人肉であり、後の恋人の内臓だ。むしろトラウマにならないほうがおかしい。肉を見るのも触るのも、彼に相当なストレスを与えていたはずだ。

だというのに――――。

「……それでも真っ向から向かっていって、また食べられるようになったんだもんね。食べ過ぎで寝込むなんてオチがついちゃってるけど――――それが出来たのは、妹紅のことが本当に大切だから、か」

寝込んだ真実は伝わっていない様だが、それでも無茶の理由は同じである。それほどまでに誰かに思われる妹紅のことを、鈴仙は少々羨ましく思う。今まで、それほどまでに自分を愛してくれた者はいただろうか。

「……あ。でも横島さんなら私相手でもそのくらいはして――――」

頭にすっと浮かび上がるのは、横島の顔。その情けない、締まりのない、でも優しい彼の笑顔。

「――――いけないいけない、何を考えてるのよ私は」

しかし、鈴仙は頭に浮かんだ映像を振り払う。自分は彼と恋人同士ではない。ましてや自らの名前を呼ばせることすらしていないのだ。確かに横島のことを好ましく思う気持ちもあるが――――それが恋愛感情かどうかは、分からない。

「……でも、やっぱり凄いよね。横島さんは……」

ぽつり、と。憂いを言葉に乗せ、小さく呟く。

トラウマと向き合う……それが、今の彼女に出来ているかと言えば、判断は難しいと

ころである。

鈴仙は臆病だ。戦争が起きると聞き、その真偽も確かめず仲間を見捨てて地上へと逃げ出したのだ。月の使者――綿月姉妹から期待を向けられるほどの戦闘能力がありながら、心が伴わなかったのである。

それゆえか、鈴仙は自らの能力を用い、平常時と戦闘時の性格を変更することにした。自らの高い戦闘能力を遺憾なく発揮出来るように、挑発的で、好戦的で、高圧的なものに。しかしその弊害か、心に掛かる負担が強いのか、ストレスが耳に表れ、すぐにしおしおと萎れるようになってしまう。戦えるようになるだけマシではあるのだろうが、それでも辛いものは辛い。

しかし――しかし、だ。それは、トラウマと向き合っていると言えるのだろうか。

鈴仙は、近頃そう考えるようになった。

確かに対処は出来たと言える。能力は遺憾なく発揮出来る。だが……疑問は尽きない。

人は多くの仮面（ペルソナ）を持つ。それぞれその場に見合った仮面を付け、対応を決める。だが、鈴仙はそうではない。仮面をそのままに、付ける人物が変わっているのだ。

それは――やはり、逃げているのではないだろうか。

「……あれだけ美鈴を焚きつけておいて情けない。思えばあの時も狂気に頼ってたのよ

ねー。私に必要なのは狂気じゃなくて、勇気ってことかなー……」

思わず深い溜め息が出てしまう。今更な話ではあるが、告白の手助けをするのに狂気に陥らせてどうするんだと今は思う。上手くいったので結果オーライではあるが、これで失敗していれば目も当てられない。

ふと、自らの手指が視界に入る。綺麗に手入れがされたそれは、日々の弛まぬ努力のお陰かとても美しく整えられている。横島からの贈り物の効果もあり、その可憐さは以前よりも上を行っている。輝夜にも勝るとも劣らない……かもしれない可能性を秘めているような気がしないでもないと思い込みたい、自慢の手指だ。

「……昔は、肉刺もいっぱいあったんだけどねー。ま、やっぱり綺麗な手の方が好きなわけだけど」

昔のことを思い出すのも、随分と軽く行えるようになっている。逃げ出した当初等は月のことを考えるだけで胃の中の物を吐き出しそうになったものだが……長い年月が、彼女の心を多少なりとも癒してくれたのだろう。

「……少しは、向き合えてるといいんだけどね。意識しだしたのは最近だし、いきなり横島さんのようにっていうのも無理かな。……こんなんだから私はまったくもう」

あの日の夜のことを思い出し、溜め息を吐きつつも中庭のお茶会を眺める。何事かを話し、時には何やら呻き声が聞こえてくる。……主に妹紅の。話題はやはり横島なのか

な、などと考えつつ、ここで腐っていても仕方がないと仕事に戻ろうとした鈴仙であったが、とある一団を目にし、動きを止めた。

「……あれ？　あの人達って――――」

彼女の視界に入ったのは門番をしていたはずの二号。そしてその後ろをついてくる、幻想郷における数々の派閥のトップ達。

「……え、何あれ。何の用なの……？」

その疑問に答える者は、とりあえず鈴仙の近くにはいなかった。

「――――んあ？」

深い闇に沈んでいた意識が覚醒する。確か昨夜は何故か煩悩が高まりに高まって――――そこからが思い出せない。目を覚ました横島は少々ふらつく頭を振って無理矢理眠気を追い出す。はて、自分は何故自室にいるのか、何時ベッドで寝たのか……昨夜のことはよく思い出せない。

それでも横島には確かな確信がある。昨夜の自分は大変危険な状態であった。そして、そんな状態の自分を救ってくれた人がいる。そしてそれこそが――――レミリアお嬢様だ、と。

横島は自分でも何故そう思うのかが分からない。分からないが……そうだ、という確信だけは抱いていた。それによって横島の胸に、確かな感情が宿る。

その感情こそ、レミリアに対する崇拝にも近い心。もはや敬愛や尊敬のレベルを超えた何かになりつつあるようで、このままいけば崇拝どころか信仰心まで抱きそうなほどである。

日本人は昔から化け物や妖怪といった存在を崇め奉り、逆に神として祀ることが多い。代表されるのは狐や狸といったところだが、レミリアという吸血鬼に神格が与えられる可能性が顕れた。長い時間は掛かるだろうが……横島は永遠を生きる存在である。

「……何かよく分からんが、お嬢様に助けられた気がする……。でも、同時に何か顔を合わせ辛いような……？」

記憶ははっきりしなくとも、何か後ろめたいことをしてしまったことだけは覚えているらしい。横島は気分を変えるためにも、寝起きの頭をはっきりさせるためにも、とにかく部屋から出ることにした。

「つーか今何時だ？　時計は……げ」

時計を見れば昼はとうに過ぎ、窓から外を見やれば陽が傾き始めている。随分と長い時間眠っていたらしい。横島は少しの間絶句してしまったが、それも収まり、折角なのでこの時間帯に楽しめる場所に行くことに決めた。

ある意味この紅魔館でも一番思い出深く、印象的であり、お気に入りの場所――――時計塔の文字盤前だ。

「ふいー、何か誰にも会わなかったな。珍しいこともあるもんだ」

文字盤の前に腰を下ろし、一息つく。上手い具合に仕事の切れ間に廊下を通ったらしく、喧騒は聞こえても人に会うことはなかった。本当ならレミリアの元に向かうのが良いのだろうが、やはり何となく顔を合わせ辛かったのでこちらを優先したのだ。

眼前に広がるのは地平線に沈み行く真っ赤な太陽。その光は横島の目を優しく焼いていくが、それでも横島は目を細め、じっと夕焼けを見つめている。

「昔は太陽が地面に沈んでいってると思ってたんだよなー」

誰に言うともなしに独り言を呟く。季節は秋も終わりが近付き、そろそろ本格的に冬が到来しそうである。今も全身に感じる風は冷たくなってきている。冷たい、と言えば。

「チルノ……どんどん冷気が強くなっていってんな。やっぱり季節が秋から冬に変わるからか？」

思い浮かぶのは昨日もいっしょにいた妖精、チルノのこと。彼女が放つ冷気は強力に

なっていき、昨日の夜の時点でかなりのものだった。横島は自らの霊波でチルノを包むことで冷気の噴出を避けていたが……これ以上強くなれば、それも出来なくなるかもしれない。

「そーいや肌も黒くなってきてるんだよな。褐色……日焼け……いいなぁ、ぐふふ」

頭に浮かべるのはグラマラスに成長したチルノが健康的に日焼けした肌を惜しげもなく披露してくれる場面。本気の想いであればフランのような幼く見える少女にも応えるようになった横島であるが、それでも基本的な女性の好みは変わっていないらしく、最も煩悩を刺激するのはやはりチチシリフトモモが成熟したお姉さんタイプであるようだ。

「……はぁ。寝込んでるはずのお前がこんなとこにいるから何してるのかと思ったが、また妙な妄想をしてるんだな」

「うぇっ!?」

突然横合いから掛けられた声に、横島は驚いて思い切り身体を跳ねさせる。その方向を見れば、そこにはその顔に呆れを浮かべた妹紅がいた。

「も、妹紅!?　いつからそこに……!?」

「褐色、日焼け、の部分からだな。……隣、座っていい？」

「お、おう。もちろん」

「ん」

横島の了解を取った妹紅は横島のすぐ隣に腰を下ろす。肩が触れ合う距離……というより、妹紅が横島の腕を自らの肩に回し、すっぽりとその中へと収まった。横島は彼女の大胆な行動に面食らったが、なに、二人は恋人同士。横島は少々鼻息を荒くしつつも妹紅の肩を優しく抱き、より自分へと密着させる。妹紅もそれを望んでいたようで、その表情には穏やかながらも花のような笑顔が咲いていた。

「……」

「……」

しばらくそうやって二人で夕日を眺めていたが、妹紅は横島の顔を見上げると、おずおずと口を開く。

「……あの、昨日のこと」

「ん？」

「……肉、食べられるようになったって、聞いた」

「おう。食えるようになったぜ。いやー、俺も食いたい盛りだからさ。もう肉が食べたくて食べたくて。それでちょっと無理をして食ってみたら意外といけてさ、それで調子に乗って食いすぎちゃってさっきまで寝てたんだよなー！」

聞かれてもいないことをぺらぺらと捲し立てる横島。その顔、その声、妙な早口。横

島の真実はそうではない。妹紅もそれは分かった。よく理解出来た。やはりそれは――妹紅（じぶん）の為なのだ、と。

嘘が下手――というよりはすぐばれる嘘しか吐かない、と言える横島。今回のこともそれは当てはまる。妹紅は横島の肩に頭を置き、横島の空いている手を自らの頬に持ってくる。愛おしそうにその手に頬を擦り合わせ、柔らかな温もりを堪能し。

「……ありがと」

と、そっと呟いた。

やがて、自然と重なり合う二つの視線。潤んだ瞳で最愛の少年を見つめる妹紅。それを受け、少々緊張しながらも真っ直ぐに愛する少女を見つめ返す横島。

ごくり、と生唾を飲み込み、横島が動く。妹紅が頬に当てていた手で彼女の顔を上向きにし、ぐっと身を乗り出す。妹紅はそれで何をされるのかを察し、視線が少々彷徨うがそれでも最後にはまた横島を見つめなおし、やがてゆっくりと目を閉じた。それを見た横島は内心ボルテージが急上昇していくが、「ぐおおーっ!!」とは迫らない。女の子はムードとかシチュエーションなどを大事にする。それは散々身体に刻み込まれた。（病院に入院するレベルで）

しかもこの場所は東京タワーの展望台上よりも遥かに危険な場所である。「ぐおおーっ!!」と迫ってしまえば二人とも真っ逆さまだ。だからこそ横島は落ち着いて、

ゆっくりと妹紅に迫ることが出来る。
お互いの前髪が重なり合い、鼻先が触れる。ぴくりと身を捩る妹紅に胸を高鳴らせながら、横島はそこから唇を寄せる。
鼻孔をくすぐる妹紅の匂い。重なり合おうとする互いの唇。そんな二人のすぐ隣、興奮した様子でその光景を眺める輝夜――――。
「……え？」
「……あ、いっけない。ついつい美味しいシーンだったから」
「……ん？　え？　――――えぇっ!?」

少々お待ちください――――。

「あああああああ〝あ〟……!!」
「その呻き声は止めなさいって」
またも恥ずかしさから両手で顔を覆う妹紅。悶えるその様子は女の子らしさという言葉から遠く離れた姿である。
「いつからいたんすか、輝夜様……」
「えっとー……横島さんが褐色ー、日焼けー、って言ってた時からかな」

「私と同じ!?」

妙な偶然もあったものだ。どうやら輝夜は妹紅とは別の場所から横島を見つけ、二人にばれないようにこっそりと様子を窺っていたらしい。その目的はラブシーンのデバガメである。

「また随分と悪趣味な……！」

「あはは、ごめんごめん」

表面上謝ってはいるが、どうにも反省は見られない。こういうときの輝夜に何を言っても無駄なことを、妹紅は嫌というほど理解している。非常に遺憾ではあるが、妹紅は輝夜への説教を早々に諦め、ぐでっと横島の肩に背中を預ける。

輝夜は妹紅の隣に腰掛ける。――両手に花とはいかないようだ。

「……」

三人を沈黙が包む。何故か、話題が出てこなかった。三人はただ静かに消えゆく夕日を眺め続ける。そこに気まずさはなく、むしろ沈黙すら心地よいと言えるほどに三人の空気は落ち着いていた。

三人を包むもの。三人が共有しているもの。それは、〝復讐〟というシンパシー。それぞれが理由は違えど復讐を成し遂げ、今を生きている。その中でも一番の後輩である輝夜は、先達である二人に問い掛ける。

「……前にさ、復讐を終えて胸にぽっかりと穴が空いたみたいって言ったよね？　二人もそういう感覚に陥ったことはあるの？　もしそうなら、その穴はどんなもので埋めたの？」

今の輝夜が抱えているのは焦りである。何をしても熱が入らず、何をしても満たされない。自分を構成する何かが抜け落ち、機能不全を起こしているかのような嫌な感覚。復讐を成し遂げたことで確かに胸の痞えは取れた。大切な二人の仇を取り、今までの人生に決着を付けることが出来た。しかし……妙に、落ち着かない。

だが、それも仕方がないと言えるだろう。何せ〝あの日〟から数えて千年以上もの年月を共に生きてきた感情なのだ。それが無くなった今、早急に代わりのもので心の空隙を埋めたい衝動に駆られるのも無理はない。

「んー……胸の穴、か」

横島がぽつりと呟く。彼は気付いていない。妹紅も輝夜も、横島が何らかの復讐を終えていると気付いていることに。その復讐の根源があの夜に語っていた蛍の化身であると感付いていることに。そして、横島と蛍の化身の本当の関係を察していることに。

「正直な話し、そんなすぐに埋まるようなものでもないんだけどな。私だってそういう感覚は最近までずっと持ってたし」

「え、そうなの？」

「ああ」

妹紅の答えは、輝夜からすれば意外の一言に尽きた。妹紅が輝夜と出逢い、復讐を果たしてから百と数十年。それだけの間、妹紅は輝夜が抱いた焦燥感と付き合い続けたのだ。

「お前と本気の本気で殺し合ったのは最初の一回だけ。私はそれですっきりしたからな。それからは竹林の巡回や永遠亭への案内、竹炭を作ったり売ったり、慧音と遊んだり……輝夜とのじゃれあいとか、そういうので少しずつ埋まっていった感じかな。私の場合はけっこう時間が掛かったけど、最近はそういう感覚はもう全然ないよ」

「……そうなんだー。まあ、確かに初めて会ったときの妹紅って物凄く怖かったもんね」

過去を回想しながらの妹紅の言葉に輝夜は頷きを返すが、その視線は横島を向いていた。輝夜は思う。「……やっぱり男か」と。横島の存在が妹紅の心を埋めたのは間違いないだろう。よく見れば妹紅の髪は以前と比べるべくもないほどに艶やかな輝きを放ち、サラサラと風に揺られている。

――――好きな男の子のため。そのための努力が妹紅の今を、そしてこれからを充実したものに変えていく。それこそ、心に空隙など生じることがないほどに。

「うーん、羨ましい」

「何が？」

「こっちの話よ。……それで、横島さんは？」

次いで横島へと話を振る。横島は顎に手をあて、既に黒く染まりつつある空を見ながら「んー」と唸り、やがて答えを見つけたのか、輝夜と、いつの間にか肩から離れ、すぐ隣に座りなおしていた妹紅へと微笑みかける。

「確かに俺もその感覚には覚えがありますね。でも、俺の場合は――そんなの、考える必要はなかったんすよね」

彼の微笑みは――。

「だって、俺の心の穴は――アイツが埋めてくれてたんすから」

――二人の背筋に、どこか冷たいものを走らせた。

「……ど、どした？」

「……っ」

気付けば、妹紅は横島に抱きついていた。横島のあの顔を見て、あの言葉を聞いて、妹紅は〝そうしなければいけない〟、という衝動に駆られた。

永琳の言葉がようやく実感出来た。横島の中の歪み――それは、確かに狂気に匹敵するほどの何かなのだということが。そしてそれは、輝夜も同様に。

「横島さん……」
「ふおぉっ!!?　な、何事っ!!?　モテ期!!?　モテ期が来たんかーっ!!?」
妹紅が横島の身体を、輝夜が横島の頭を優しく抱き締める。何故かは分からないが……二人は、この行動を取った。自らの心がそう叫んだからだ。こうすることで癒されるかはまるで分からない。だが、それでもこうすることで何かが彼を支えると信じて。
――――二人は、やがて空が闇に覆われるまで横島を抱き締め続けた。

それを見たのは偶然だった。
傍にいると温かい気持ちになるお兄さんに会いたくて、館の中を散策していた。お兄さんが寝込んでいるという部屋にお見舞いに行ったとき、そこは既にもぬけの殻であり、どこかに遊びに行ったのだ、とアタイは結論付ける。
ゲストルーム、食堂、トイレ、お風呂場、中庭、洗濯場、キッチン、パーティーホール――――色んな場所を探しても、お兄さんの姿は見つからない。ぷくり、と。不満で頬が膨らんでしまう。
もう一度、お兄さんの部屋に戻ってみよう。そう考えて来た道を戻りはじめる。数少ない廊下の窓からは赤い陽射しが入り込み、ただでさえ赤い館の装飾を一層鮮やかな紅

に染める。何気なく時間が気になり、確か時計塔があったな、と窓から外を見やる。

――そして、それを見てしまった。

顔を寄せ合う二人の男女。白い……銀色の髪の、火を操る女の子……妹紅と、嫌われ者の自分の傍にいてくれる、自分に触れて温もりを与えてくれる〝お兄さん〟――横島の姿を。

「――――」

何故か、視界が揺れた気がした。何故か、急に寒くなった気がした。アタイが――――氷精である自分（チルノ）が、寒さを感じるはずがないというのに。

気付けばアタイは霧の湖の前にいた。頭の中はぐしゃぐしゃで、自分が何を考えているのかも分からない。ただ分かっていることがあるとすれば、今、アタイが寒さを感じているということぐらいだ。

何故こんなところにいるのか。あの場から逃げ出したのだろうか。では、何故逃げ出したのだろうか。自分は何がしたくてここにいるのだろうか。自分は何かがしたいのだろうか。

……分からない。心の中はぐしゃぐしゃで。自分が何をしたいのか、何を考えている

のかも分からない。

「――――自分が本当は何を考えているか、私がそれを引き出してあげよっか？」

その声は、不思議と心の奥にまで響いてきた。

「……そっか。それでここまで出てきちゃったんだね」

心の中の理解出来ないぐちゃぐちゃな感情を打ち明ける。それだけで少し楽になった気がするが、それでもやはり心は晴れない。何か、胸に大きな穴でも空いてしまったかのような気分だ。

「うんうん、大丈夫だよ。私の能力を応用すれば、あなたの無意識に抱いている感情を引き出して、素直な行動を取れるようになるから」

それが本当ならありがたいことだ。アタイが本当は何を思っているか、何を考えているか――――お兄さんへの気持ちは何なのか、分かるかもしれない。

ああ、そうだ。お礼をしなくちゃいけない。それにはまず、相手のことを知らないと。

「ねえねえ、アタイはチルノ。アンタはだぁれ？」

目の前の少女はにっこりとした笑みを浮かべ、アタイの額に人差し指を当ててきた。

「――――本能『イドの開放』」

え、という声も出せぬまま、アタイの目の前は真っ暗になる。でも、何故だろう。不思議と、心の穴が埋まったような気がして――――。

「……そろそろお嬢様に顔を見せんとなー。フランちゃんや美鈴にも会いたいし。部屋に居てくれてればいいんだけど」

横島はレミリアの部屋を目指し、一人寂しく歩いている。妹紅と輝夜は横島と別れ、永琳の元へと向かった。横島の精神状態を聞くためである。妹紅は横島との経路を通して何かしらの感情が流れ込んできてもいいはずなのだが、何故かその兆しがない。まるで、何かがせき止めているかのようだ。

「あー、横島さんだー」

「大丈夫なのー？」
「おー、大丈夫大丈夫。お前らも食いすぎには気を付けろよー」
妖精メイドとすれ違うのもこれで何回目だろうか。皆が自分の心配をしてくれることに、横島は快感を禁じえない。一つ皆に感謝の口付けを贈りたいような気分になる。まあそれをすると何か危ない未来が確定してしまいそうな気がするので本当にしはしないが。
そうして廊下を進んでいると、最近いつも一緒にいる……しかし見慣れない様相になっている妖精の少女が前方に佇んでいるのを発見する。
「……チルノ？」
自分の前方に存在する少女がチルノかどうか、横島は今一つ確信が持てなかった。服装は同じであるが、長く伸びたサラサラの髪、昨夜までとは違う、完全な褐色の肌。横島は「幻想郷に日焼けサロンなんてあったのか？」などというバカなことを考えているが、それを口に出すにはチルノの雰囲気がいつもと違い過ぎた。
「どうしたんだ、チルノ？　その髪と日焼けはイメチェンか？　似合ってて良いと思うぞ。うん、可愛い可愛い」
普段とはまったく違うチルノの姿に新鮮な可愛らしさを見つけ、横島は頷きながらチルノを褒める。褐色の肌になったことでより活発な印象を強調しているのだが、さらり

と流れる髪がそれを真逆のお淑やかな雰囲気に変化させている。こういうチルノもいいものだ、というのが横島の感想だ。

ただ、気になるところがあるとすれば、ずっと俯いていることと向日葵の髪留めを付けていないところか。いつも付けていてほしいというわけではないが、随分と気に入っていたようなので外していることが意外に思える。

チルノは俯いたまま横島に近付き、横島の手を取って、そこでようやく顔を上げた。横島をまっすぐに見つめるその視線には、何らかの熱が込められているようで、不意に――横島は、恐怖を覚えた。

「――凍符『パーフェクトフリーズ』」

「――なっ……!?」

ビキリ、と。チルノに掴まれた手から全身が凍り付いていく。それは周囲の水分を纏め上げ、横島を包む氷の牢を形成するかのように。

「う、あああぁぁぁっ!?　なに、チルノッ、何を――!?」

「お兄さん……」

氷に包まれ、また自らも凍っていく横島の頬を、チルノが両手で優しく包む。そしてゆっくりと息を吸い、氷の力を蓄えて――チルノは、横島の唇に自らの唇を重ね合わせ、絶対零度の呼気を吹き入れた。

「……っっっ――――――!!?　……――――――」

身体の芯から完全に凍らされ、横島は氷の彫像と化した。横島を包む牢もついに完成を見せ、それは、一つの芸術作品のようにも見える。

「……あ、はははは。あはははははははははは。――――あはははははははははははははははっ!!!」

哄笑が響き渡る。アタイから吐き出される凍気は廊下を凍りつかせ、容易く壁を破壊する。深く、暗い闇が支配する幻想郷の空を、アタイは愛する少年を抱えて空に舞う。

やっと。そう、やっとだ。ついに目覚めた。アタイはついに表に出ることが出来た。この気持ちを我慢せず、抑え付けず、あるがまま、思うままに表現する。

アタイは氷像のお兄さんに頬を擦り付ける。あの時の温もりが自分のものとなったのだ。ずっと焦がれていた、あの温もりが。

そうだ。アタイは、私は（アタイ）――――。

――――幻想郷（アタイ）は、あの日からお兄さんに恋していたのだ。

第六十四話

『初めて会った、あの日から』

～了～

第六十五話

それが形作られたとき、既にそれには意識があった。
己がどういったものか、何者なのか、それらは漠然と理解出来ていた。
自らの身体――その上で生きる、数多の生命の息吹を感じながら、それは永きに渡るまどろみの中を揺蕩い続ける。
己の身体は自由に動かせぬ。それはそうだ。それにはそういったことが出来るような部位など存在しない。そこで、それは考えた。
自らの分身を創ろう。このような不自由な身体ではなく、自由に大空を駆ける分身を創ろう。
それは己を模して創られた。長い身体をくねらせ、大空を駆ける異形の存在。
大いなる力を秘めたそれが創り出した、大いなる分御霊。
雨・風・雷を操り、空からそれの上に住まうあらゆる生命を見守る、大いなる存在。
――産み出されたのは大いなる神。その名を、〝龍神〟といった。

第六十五話
『自然の触覚』

その日の紅魔館の中庭には、錚々たる顔ぶれが一堂に会していた。
守矢神社からは真の祭神である洩矢諏訪子と現人神である東風谷早苗。
命蓮寺からは住職である聖白蓮と門前の妖怪小娘こと幽谷響子。
神霊廟からは聖人の豊聡耳神子と尸解仙の物部布都。
永遠亭（紅魔館の居候組）からは月の頭脳こと八意永琳と永遠のお姫様である蓬莱山輝夜。
そして紅魔館からは引きこもりのパチュリー・ノーレッジとお昼寝大好き紅美鈴、キャラ作りのフランドール・スカーレット。
あとついでに焼き鳥屋の藤原妹紅。
――――幻想郷を代表する各派閥のトップ達が、ここに集っているのだ。

「って待て!!　何か私の説明だけ雑過ぎるんじゃないか!?　あとついでってなんだ、ついでって!!」

「引きこもりとかキャラ作りとか、私達のもひどい……」

突如として虚空にツッコミを入れる妹紅とフラン。皆からは何かおかしなものを見るような目で見られ、ツッコミに参加しなかった美鈴は居心地の悪さを感じている。パチュリーは我関せずといった具合に優雅に紅茶を楽しむだけの余裕を持っているようだ。彼女にとってメタ的なツッコミは今更の話である。

新たにこの中庭に訪れた六人は妖精メイドが運んできてくれた椅子に着き、同じく妖精メイド達が用意してくれたお茶菓子と紅茶をそれぞれ口に運ぶ。

「あ、このクッキー美味しいですね」

「本当だね。昔に早苗がデパートで買ってきてくれたクッキーとちょっと似てる感じがする」

どうやら早苗と諏訪子はクッキーが気に入ったようで、サクサクと美味しそうに頬張っていく。その様子を眺めている二号はどこか得意気な表情を浮かべている。

「……？　どうかしたの、二号？」

どこかそわそわとしている二号の様子に気付いた美鈴はその理由を尋ねる。二号はその言葉に待ってましたと言わんばかりの笑顔を浮かべ、何故か平坦な胸を張って真相

を語る。
「実はですねー。なんとなんと、そのクッキーを作ったのは横島さんなんですよー！」
「えっ」
「おや、そうなのかい？」
「ふむぐっ!?」
ぴしり、と固まって驚愕の声を漏らす早苗。神子は目を見開き、手に持ったクッキーをためつすがめつ眺める。布都は頬が膨らむほど詰め込んでいたクッキーの製作者が横島と知り、彼が料理も出来ることに驚きと尊敬に目を輝かせ、その直後にその横島が作ったクッキーをちゃんと味わわずに食していたことに後悔と罪悪感に暗む。
「横島さんはお菓子作りも得意だったのですか？」
「あー、まあ咲夜から色々と教わってるしね。このクッキーも元々はあいつがみんなに食べてもらおうと大量生産してたやつなのよ。咲夜はまだまだ人に出す領域ではないって言ってたけど。」
「美味しいと思うんだけどなー」
「咲夜さんは厳しいですからね。でもそれも期待している証拠ですよきっと」
白蓮の問いに答えるのはパチュリーだ。咲夜が真剣な顔で横島が作ったクッキーを分析していた時のことを思い出し、少し表情を曇らせる。「お嬢様に食べていただくに

は砂糖が～」などと言っていたが、まさかグラム単位で指摘するとは思わなかった。美鈴もその完璧メイドっぷりをこれでもかと知っているため、遠い目をしながらやや不満気なフランを諭す。

「最近はお料理も頑張ってるみたいだし、将来性はバッチリよねー。もうちょっと和食を作ってくれたら嬉しいんだけど」

「それはしょうがないだろ。いくらレミリアが納豆好きだからって、元々あいつが好むのは西洋料理だし」

「り、料理まで……？」

輝夜と妹紅の会話に早苗がショックを受けたかのような声を出す。早苗の中の横島のイメージと、輝夜達が語る横島の話が全く一致しないのだ。

「横島君は普段が普段だからね。貴女の気持ちも理解出来るわ」

そんな早苗に微笑みかけるのは横島の最大の理解者の一人でもある永琳。横島の言動のギャップの激しさは永琳にとっても驚きに値するものである。

「でも、横島君だって毎日をただ無為に過ごしているわけではないのよ？　例えばさっきも聞いた通り咲夜に料理を始めとした家事を習い、毎朝早く起きて美鈴と魂魄妖夢から拳法と剣術を学び、私と鈴仙からは医療技術まで教わってるんだから」

「え……？」

それは驚きの言葉であった。早苗の横島に対するイメージははっきりと言って悪い。女性に対してだらしなく、自分や大事な家族にまで邪な視線を向けてくる。人里では横島に対する噂も良く聞き、尾鰭や背鰭が付きまくった良く分からない話も聞く。そのような人物が毎日真面目に仕事と修行をこなしているなど、誰が思おうか。

あとついでにオンバシラによってぐちゃぐちゃに潰された状態から一瞬で復活したあの光景は時々夢に見る。立派なトラウマとなってしまったらしい。横島に対する苦手感情はそこから来ているものも多いだろう。

「あの、横島さんってどんな人なんですか？」

ここでおずおずと質問を投げかけるのは、この中で唯一横島とほとんど何のかかわりもない響子である。彼女は横島やフランに謝罪をするために白蓮に連れて来られたのだが、フランは全く気にしている様子もなく、肝心の横島は食べ過ぎで体調を崩して今だベッドの上であると聞いた。

迷惑をかけてしまった人がどのような人となりなのか気になるのは仕方のないことだろう。この質問にピクリと反応を返したのは当然横島の恋人達三人と、現在横島のことが凄く気になっている布都だ。

「何というか、一言で表すのは難しい奴だからなー」

「確かにそうですよね。優しくて父性に溢れた一面もあれば卑屈で泣き虫な部分もあり

ますし。まあそういうところも可愛いんですが」
「えっとねー、ただお兄様はねー、優しくて強くて温かいの！」
「お、おおう……？」
「ふむふむ……！」
　急にイキイキと語りだす三人の勢いに呑まれたのか、響子は目をぱちくりとさせて引いてしまう。反面、真剣な表情で話しに聞き入るのは布都だ。早苗は妹紅達三人と布都の様子を見て、とある可能性に行き着いたのか、その顔に驚愕を貼り付けている。
「え……え、ちょ、ちょっと待ってください。もしかして四人とも横島さんのこと……？」
　途中で途切れてしまったその問いに、四人はそれぞれ違った顔を――――しかし、それでもある一点だけは同じである表情を浮かべる。
「……実は、私と美鈴とフランは横島の恋人なんだよ」
「うむっ！　我は横島殿に対して好意を――――って何だとおおおおおっ!!?」
「こっ、恋び……!?　えええええぇぇっ!!?」
　照れ臭そうにしながらも妹紅が代表し、その告白をした。それを受けた布都は自らも横島への想いを明確にしておこうと顔を真っ赤にして好意を示そうと思ったのだが、知らされた驚愕の事実に逆に顔を青ざめるはめになってしまう。可愛らしいドヤ顔から

の驚き顔へのシフトは見事だと言わざるを得なかった。早苗にいたっては口を金魚よろしくパクパクとさせ、まるで酸素が尽きたかのような喘ぎを漏らし、小さな声で「ありえない……ありえない……」と呟いている。

「……物部とやらはともかく、早苗は失礼すぎやしないかい？」

隣に座っていた諏訪子は早苗のあんまりな態度に呆れ顔だ。確かに早苗の態度は失礼にあたるだろう。しかし、しかしだ。これは仕方がないものと言えるだろう。

「だって……だって、三人ですよ!?　恋人が三人ですよ!?　そんなのおかしいじゃないですか!?」

「いやでも幻想郷にそういう法律とかってないし、そもそも妖怪はそういうことをそこまで気にしないし」

「妹紅さんは人間じゃないですか!?」

「おう、ナチュラルに横島を妖怪扱いするのはやめろ」

早苗は外の世界からこの幻想郷へと移住してきた人間だ。やはりまだまだ外の世界の常識が抜けていないこともあり、横島が複数の女の子と付き合っていることに憤慨する。早苗としてはお互いに一人だけ、そういった恋愛観を持っている。やはり愛し愛されるのならば一人の男性が良いのだ。それこそ、人が行うべき恋愛であると言える。せっかく上がりかけた横島の評価も据え置きだ。

――――しかし、それも常識が違えば意味のないものとなってしまう。

「くうぅっ！　まさかこれほどに先を越されていようとは……!!　しかしまだ慌てる時間ではない。先ほどの言葉から皆と横島殿はまだ婚姻は結んでいないはず。……であるならば、我こそが横島殿のこなみとなり、他の皆をうわなりとしてしまえば良いのだ!!　うむっ!!　我が最初に横島殿のお嫁さんに――――……お嫁さんかぁ……えへへ」

「布都さんっ!!?」

一人で盛り上がり、一人で照れ始める布都に早苗は目を剥いた。何か裏切られたような気分になったらしい。

余談であるが、布都が生きていた飛鳥時代は貴族間で一夫多妻の習慣があり、正妻を〝こなみ〟と呼び、後妻を〝うわなり〟と称した。斯く言う布都も貴族（豪族）のお姫様。当然一夫多妻には理解があった。

「私が……!?　私がおかしいんですか……!?」

周りに味方が誰一人いない状況に早苗は頭を抱える。唯一何か言ってくれそうな白蓮も仏教徒ではない彼女達に仏教の戒律を説くことはせず、困ったように微笑むばかりである。彼女の知り合いの妖怪の中に、多くの女性、あるいは男性を囲っている者がいたこともその要因の一つだろう。

「東風谷早苗」
「……何ですか、輝夜さん」
事態を静かに見守っていた輝夜が、早苗に対して声を掛ける。輝夜はどこから取り出したのか扇子を持っており、それをパッと開くと、早苗に対してこう言った。
「この幻想郷では常識に囚われてはいけないのですね！」
「何で貴女がその言葉を知ってるんですかーーーーーー!!」
思い切り楽しげな笑顔を浮かべ、同じく何やらデフォルメされた何者かのドヤ顔が描かれた扇子を見せ付けてくる輝夜に、早苗は「うわーん!!」と泣き出してしまう。泣き付かれた諏訪子は早苗の頭をよしよしと撫でて慰めているが、早苗の意見に同調しているかと言えばそれははっきりとＮＯである。
「しかし、そうか……。横島君は凄く頑張ってるんだねぇ」
「……？　諏訪子様……？」
感慨深げに呟いた諏訪子の声に、早苗は少々違和感を覚えた。それは普段の諏訪子の声ではなく、どちらかといえば神寄りの、本性が顕れた声に聞こえたからだ。
「んん～、やっぱり良いねえ、横島君。うちにほしいよ」
「ええっ!?」
それは本心からの言葉だったのだろう。早苗が驚いて顔を上げる。そして視界に

入った諏訪子の顔は、まさしく神の顔だった。
「霊力がとても強く、文武両道で家事も出来ておまけに精力絶倫。――――良いねえ、横島君。食べちゃいたいくらいだよ」
その笑みはまるで亀裂のようで。口端から覗く諏訪子の舌は細く長く、まるで爬虫類のようでさえあった。久方ぶりに見せる諏訪子の神としての一面を見た早苗は、その背筋に走る悪寒に身を震わせる。
「早苗や神奈子にあげるのはもったいない。私がじっくりたっぷりねっとりと搾り尽くしていただいちゃわなきゃ!!」
「諏訪子様ぁっ!?」
しかしその目は何だか残念な輝きを放っており、その口から漏れたのは何というかとても邪なものであった。諏訪子の言っている「食べる」という言葉の意味が理解出来た早苗はその顔を真っ赤に染める。
「な、何を言ってるんですか諏訪子様!?　た、食べるってそういうことはもっとこう親交というか交際を深めてからですね……!!」
「ははは、神話の存在に今更そんなことを言われてもね。私が統括するミシャグジ様は子孫繁栄の神でもあるんだよ?」
ついでに言えばミシャグジ様の人身御供に選ばれるのは未成年の少年である。未成

年の少年である。その点も加味すると、横島はまさに諏訪子にとってドストライクな存在なのだ。……欲を言えば、もう少し幼い外見の方が良かったらしいが。

「ふふふ。では、貴女にとって有益な情報を与えましょう」

「お、なんだい？」

「ちょ、もうそういう話は――――」

ぐふふ、とイヤらしい笑みを浮かべる諏訪子に、永琳は何故か柔らかな笑顔を浮かべながら話しかける。諏訪子は永琳から齎される情報にワクワクとした様子だが、早苗は逆に嫌な予感がビンビンだ。これ以上話をややこしくしないでもらいたいと遮ろうとするのだが、それも一歩届かなかった。

「横島君の最大戦闘力は恐らく……２０ｃｍを越えるわ……!!」

「ちょっとマジで本当に是非ともうちに来てほしいっっっ!!」

「にじゅ……っ!?」

永琳から明かされた情報は……非常にアレだった。本当に必死な感じで横島を欲しがる諏訪子もアレだ。話に参加していなかった布都は両手の親指と人差し指で大体の長さを計測し、頬を赤く染め、目をぐるぐるさせて「ひゃー……わ、我に収まるのかな……」などとちょっと危険な呟きを漏らしている。

周囲の皆は突如始まった下ネタトークに参加することはせず、とりあえず嵐が過ぎ去

るのを待った。全く意味を理解出来ていなかった妹紅とフランを除き、皆頬を赤く染めてはいたが。

「……何だか、話が妙な方向に進んでしまいましたね」

「ああ、まったく。横島君が欲しいのは私達もそうだが、まさか洩矢諏訪子はそちらの意味で横島君を欲しがるとは」

そう、今回彼女達がこの紅魔館に集まったのは横島の勧誘のためだったのだ。と言ってもそれはついでの話。それぞれがそれぞれに別の理由が存在した。

白蓮の場合は響子の大声によって迷惑を掛けてしまったことに対して改めて謝罪をするため。そのために響子を連れて来ていたのだ。

神子は布都と横島の仲を深めるため。以前命蓮寺で布都が横島に好意を抱いた様子だったので、神子はお節介を焼くことにしたのだ。布都が自分のために横島とのお見合いをセッティングしたと勘違いしていることにはまだ気付いていない。

諏訪子は横島を苦手としている早苗の意識を変えるため。悪い部分だけを見ず、良い所も見つけさせるという視野を広げるための措置でもある。ちなみに神奈子ではなく諏訪子が引率役なのは神奈子が辞退したからだ。「私が行くと……ほら、また横島君にオンバシラしちゃいそうだから」と語ったという。それが完全に裏目に出てしまった。

皆横島の事は来てくれればいいな、くらいの気持ちだったのだが、まさかこんな理由

で本気になる人物がいるとは思わなかったろう。このままの流れでずっとそちら方面の話を展開されるのも困りもの。神子は手をパンパンと叩き、皆の注目を集めると何とか話を別の方向へと持っていく。

「はいはい、そういった話はまた今度にしよう。折角こうして我々が集ったんだ。今後の幻想郷、ひいてはそこに生きる若者達をどのようにして導いていくかの話を――――」

「そういうのは今回なしにしようよ」

「――――じゃあ横島君の恋人達から色々と話を聞こうか」

折角の提案を速攻で却下された神子は投げやり気味に恋バナへと繋げることにした。布都のサポートにも繋がるので間違った選択ではない。ただ、独り身の状態で他人の惚気話を聞かなければならないのが問題と言えば問題か。

妹紅達に集まる視線。何だかんだ言っても皆はまだまだ女の子。そういった話は大好物だ。熱を伴った視線に撃ち抜かれる三人は少したじろいでしまうが、横島の話ならば望むところ。三人は我先にと横島との日々について語り始める。

――――それが、夕刻近くまで続いた。皆こういう話に飢えていたらしく、終始盛り上がったままだったという。その際にパチュリーから「夕食でもいかがかな?」とお誘いがあり、皆も少しだけ期待していたのかすぐさま了承を返した。白蓮と響子は精進料

理となるだろうが、そこはそれ。咲夜ならばどんな料理でも完璧に仕上げてくれる。
皆は笑い合いながら妖精メイドを先頭にゲストルームへと移動する。布都や諏訪子が横島の見舞いに行きたがったが、そこは皆で止めた。特に諏訪子は全力で。

やがて陽も落ち、月が空に顔を覗かせる頃。紫は自宅でスキマの中に潜り、横島の世界への〝糸〟を辿っていた。初めの頃はか細く、今にも千切れてしまいそうだったその糸も、根気良く辿り続けることでその太さはいや増し、終点が見えてきていた。
「……」
紫の小さな唇が弧を描く。〝あの日〟からふた月程。ようやく横島の世界へと辿り着こうとしていた。糸を辿り、切りの良い場所でスキマを固定し、次回からの出発点とする。そんな作業を幾度と無くこなしてきた。このスキマの空間を支配出来るはずの彼女がこれ程までに長い時間を取られてしまうほどに遠い遠い、横島の世界。彼の世界が近付くにつれて、紫は糸から発せられる超常の力が更に強まってくるのを感じる。
「……次元が違う、というのはこういうのを言うのでしょうね」
それは、大妖怪であり賢者でもある自分よりも、遥かに強い〝力〟。神や悪魔、妖怪といった超自然的な存在がその信仰を失っていない世界。――――その存在力に大き

な隔たりがあるのは当然と言えた。

「横島君の世界で私達が信仰を得ることが出来れば、力が増したりするのかしら……？」

それは流石の妖怪の賢者も分からぬこと。何せ前例が無いのだから仕方がない。これで横島の世界へと渡りを着け、横島を元の世界に還すことが出来るのであれば……その時に色々と試してみようか。

紫は糸の力に圧倒されながらも横島の世界に思いを馳せる。洩矢諏訪子や八坂神奈子、それに豊聡耳神子などは向こうの世界でも広く信仰されているだろうし、劇的なパワーアップを遂げるのかも？　と、可愛らしく小首を傾げながら夢想する。そんな風に気分良く、楽観的とも言える思考を巡らせるのは、糸から発せられる力に感覚が麻痺し、ある種酔っていたからだろう。

――――だから、気付くのが遅くなった。

「――――ッ!!?」

紫は鬼気迫る勢いで振り返る。自らが住む世界、幻想郷にて揮われてはいけないはず

の力が揮われているのを感じ取った。
「これは……まさか、そんな……っ!!」
紫は固定されたスキマを通り、大急ぎで幻想郷へと帰還する。目指すは霧の湖に程近い、魔法の森。最後のスキマを通り、その身を外界に晒した紫が目にしたもの。それは――。
「……っ！　何てこと……っ!!」
それは宙に浮かぶ、その姿を変貌させた氷の妖精〝チルノ〟。彼女の背後には全身を凍らされ、また氷の檻に囚われた横島の姿がある。そして、それだけではない。チルノの視線の先には、多くの人影が存在した。
地に倒れ伏す、幾人かの人影。それは神子、布都、白蓮、早苗、美鈴、咲夜、パチュリー。辛うじて立つことが出来ているのが諏訪子、妹紅、輝夜、鈴仙、レミリア。苦々しく顔を歪めながらもチルノを見つめ、しっかりと両の足で立っているのは永琳とフランの二人だけだ。
「チルノ……！　どうしてただお兄様やみんなに酷いことするの……!?」
それは何度目かの問いかけ。フランは月を背景に自分達を冷たく見下ろすチルノにきつく問いただす。今までチルノはそれに答えなかった。だが、今回は違うようだ。
「……私（アタイ）は……ずっと、寂しかった」

チルノの手が、背後に浮かぶ横島を撫でる。
「お兄さんは、それを私に自覚させた」
チルノは、愛おしそうに横島を見つめる。
「――――だから、幻想郷はお兄さんに傍にいてほしいの」
小首を傾げ、にっこりと笑うチルノの姿に、フランの背筋に言いようのない悪寒が走る。知らず一歩後ずさったフランはしかし、何かにぶつかりそれ以上下がることはなかった。
「あ……、ゆかり？」
「……」
フランの背後に居たのは紫であった。紫は痛ましげな、あるいは悲しそうな複雑な表情でチルノを見つめる。
「……そう。理由は分からないけれど、チルノと繋がってしまったのね」
「ゆかり……？」
小さく疑問の声を上げるフランに答えぬまま、紫はフランと永琳の前へとゆっくりと歩を進める。
「何だ……随分と遅い到着だな、八雲紫」
「ごめんなさいね、レミリア。少し立て込んでいたの」

「そんなことより、今のチルノはどうなってるのさ？　……まあ、大体のことは何となく理解出来てるけど」

身体の大部分を凍らされているレミリアと諏訪子の氷をスキマを使って剥がし、紫は皆に聞こえるようによく通る声でその答えを告げる。

「みんな……今のチルノは、チルノであってチルノじゃないわ」

皆の視線が紫に集まる。

――――大空を舞う龍神は、ある時数人の妖怪からとある提案を受ける。それは、妖怪を守るために力を貸してほしいというもの。龍神はそれを快く受け入れた。

確かに大空を舞うのは素晴らしいことだ。自らの本体に住まう多くの生命を見守るのも有意義なことだ。だが、龍神はずっと独りであったのだ。

孤独――――漠然と心の中に住み着いていたもの。これを払拭するためにも、龍神はこの妖怪達と共に妖怪の理想郷を造り、皆と共に生きていこうと決めたのだ。

しかし、龍神はあくまでもその土地の最高神。色々と役割を持たなければならない。そこで考えたのが、更なる分身を生み出すことだ。龍神の代わりに多くの者と係わり合

い、計算よりも直感的に物事を判断し、より生の感情を表現する存在。
それが龍神の――大自然（かみ）の触覚たる存在――〝妖精〟。

「今のチルノは――龍神様よ」

第六十五話
『自然の触覚』
～了～

第六十六話

龍神（チルノ）の身体から圧倒的な神気と凍気が放たれる。それは瞬く間に大地を覆い尽くし、溶ける事のない氷の神域を作り出す。

倒れた者達、ただ傍観するしかない者達、戦いを挑む者達、例外なくその力を叩きつけられるが、身体が凍りつくということはないようだ。それが何を意図するのかはまだ計りかねるが、それでもその力にはただ圧倒される。

「く……っ!?　何て力だよ、まったく!!　私だって神様なんだぞー!?」

諏訪子のぼやきを背景に、ついにチルノから無差別な軌道で弾幕が放たれた。優雅さも美しさもない、ただの弾幕。それだけに避けやすいとも言えるが、威力はただごとではなかった。一発一発に驚異的なまでの神気が込められている。それは同じ神族であっても、今の諏訪子では対抗出来ない程のものである。

そも、この幻想郷で神や妖怪が力を発揮するには何が必要か？　答えは信仰と畏れである。

諏訪子達は外の世界で信仰を得られなくなったからこの幻想郷へとやって来た。妖

怪達は畏れられなければ存在することが出来ない。

――では、この幻想郷において最も信仰を集めている存在は何か？

博麗の巫女が祀る神？　――否。

妖怪の山に住む二柱の神？　――否。

人里に建立された寺の本尊？　――否。

幻想郷とは別の異空間に住む仙人達？　――それも否。

この幻想郷において最も多くの者達から信仰される存在。それこそはこの幻想郷の最高神――龍神である。

幻想郷に住むほぼ全ての人間達が信仰する神。それは意識的にせよ無意識的にせよ、龍神の力を遥か高みへと導いている。龍神の加護があるからこそこの幻想郷は存在出来ているのだと、それが信仰の証となる。

――では、この幻想郷において最も畏れられている存在は何か？

霧の湖にある紅い館の主？　――否。

太陽の花畑に住むという妖怪？　――否。

妖怪の山を支配する幻想郷最強種族の天狗？　――否。

旧地獄に居を構える相手の心を見透かす妖怪？　――それも否。

この幻想郷において最も多くの者達から畏れられる存在。それこそはこの幻想郷の

最高神――龍神である。

神の力。それは様々な形を持って人々の前に顕れるものだ。

落雷、地震、水害、台風、火山の噴火――それらはいとも容易く人の居場所を奪い、生命をも奪い取る。

特に、龍神の大本である日本列島はそれらの災害が一年の内に何度も襲い来るのだ。

そしてそれは幻想郷でも例外ではない。

幻想郷に住む妖怪達はそういった自然災害から人間達を守らなければならない。それが幻想郷のルールの一つだからだ。

台風も水害も、それは下手をすれば妖怪の命すらも絶ってしまうことがある。人も妖怪も、災害の恐ろしさを知っている。それが何度も自分達を脅かすことを知っている。

だからこそ、自然を司る神――龍神を畏れるのだ。それが、龍神の力を絶望的なまでに底上げしている。

「……」

だからこそ、紫は違和感を覚えた。龍神の力はこんなものではないはずなのだ。幻想郷中の信仰と畏れを得た神の力が、この程度であるはずがない。考えられる可能性は――。

紫はちらりと倒れ伏す神子達を見やる。そして、確信を得た。

「……もう少しだけ、頑張りなさい。――――チルノ」

第六十六話
『頂点たる存在』

絶え間なく降り注ぐ弾幕。それを何とか避けていくレミリア達は、思うように動かない自身の身体に苛立ちを覚える。
「チィッ！　龍神の能力とやらは本当にやっかいだな!!」
「流石は幻想郷の最高神って感じー!?」
レミリアの叫びにも似た言葉に返すのは輝夜。おどけたようなその台詞は余裕を感じさせるものだが、その声音は決して余裕を湛えたものではなかった。必死に、ひたすらに攻撃を受けるまいと避け続ける。

現在の彼女達は本来の実力を発揮できていない。それは彼女達の周囲に張られている十重二十重の結界に秘密があった。

ありとあらゆる位相を異にする多重結界。結界同士の反発作用によって行動を制限され、その度合いが強い者は動くことも叶わない。現状最強戦力である永琳が何も行動を起こさないのはそれが原因であった。

「くっそ、まさか咲夜の能力まで封じられるとは……!!」

妹紅が輝夜に迫った弾幕を炎でかき消しながらも毒づく。

多重結界に閉じ込められた状態で能力を使用しても、それは結界外に効果を示さなかった。それでも皆のサポートに回ってチルノにナイフを投げ続けていたのだが、喘息がたたって立つことすらままならなくなったパチュリーを美鈴と二人で庇い、撃墜されてしまったのだ。――――そしてその際、龍神が僅かに動揺したのは誰も気付かなかった。

咲夜の時を止める能力が通じなかった以上、輝夜の能力も意味を成さないだろう。結界を破壊出来そうなフランは永琳同様に念入りに結界に閉じ込められ、もう一人結界をどうにか出来そうな者もチルノの圧倒的な強さに怯えてまともな戦闘行動を取れていない。

多重結界を構成する物の一つに博麗大結界の術式が応用されているのを感じ取った

紫は冷や汗を流す。まさかとは思うが、未だにかつてのことを根に持っているのではないのかと疑ってしまったほどだ。実際紫に対する多重結界の縛りはどんどんと重くなっている。もうそろそろ、危ないかもしれない。

全てにおいて八方塞となりそうなこの状況。しかし、それでもまだ希望は残っている。

「……」

紫は倒れ伏す神子達を見やる。彼女達は確かに傷つき倒れているが、それでも死んだわけではない。チルノの強力な弾幕に身を晒されているかと言えば、そうではないのだ。

多重結界が彼女達を守っている。徐々にではあるが、傷も治ってきているほどだ。更に周囲に目を配る。結界の縛りが緩い者。最も強力な結界に守られている者。それはチルノの――龍神に呑まれたはずの、彼女の意思の表れだ。

正気を取り戻させねばならない。強まる神気。変質していく肉体。このままでは、チルノは本当に龍神と成ってしまう。

「チルノ……!!」

フランの声が響く。それが聞こえたチルノ――龍神は眉をピクリと上げる。

「……、……っ?」

だが、反応を返すことはなかった。頭痛がしたかのように一瞬眉を顰め、何事もなかったかのように変わらず弾幕を放ち続ける。

妙な反応だ。今までのチルノならばフランの声に応えていたはず。紫は何かの前兆であるかと身構え、そして、いくらか遅れて、チルノは口を開いた。

「フラン……フランはいいよね。お兄さんといつも一緒にいられて」

「え……？」

チルノは無表情だ。だが、それとは裏腹に、その言葉には隠しきれない感情がこもっている。嫉妬や羨望――そういった類のものだ。

「アタイは違う。アタイは、いつも一人ぼっち。頭を撫でてくれるおっきな手も、私を包んでくれるあったかい腕も、名前を呼んでくれる優しい声も、アタイの傍にはない。……傍にいてくれない」

「チルノ……？」

それは、今までの言葉とはどこか違った。先のフランの問い掛けに答えた際の茫洋とした言葉ではない。そこには、確固たる意思が込められていたのだ。

「アタイに触れると人は凍っちゃう。……冷気を好む動植物はいない。――どこに行っても、アタイは嫌われ者」

「チル、ノ……」

それはチルノの言葉というには違和感があった。いつか、どこかで誰かに言われた言葉なのかもしれない。その言葉は、確かにチルノの心に刻み込まれていた。

龍神を介して告げられたその言葉はしかし、確かにチルノの心からの嘆きでもあった。

「……」

チルノにまともに触れられる者など存在していなかった。チルノの冷気は妖怪をも凍えさせる。ある程度は冷気を操作できた。そうして友人も出来た。しかし、それでもわざわざ自分から触れてくれる者は一人もいなかった。――――あの少年を除いては。

「アタイはお兄さんともっと一緒にいたかった。お兄さんに触れられたかった。でも、アタイが近くにいたらお兄さんの負担になる……」

最早弾幕は撃たず、ただただじっと己の掌を見つめるチルノ。彼女の言葉は、どれもフランの心に突き刺さる。――――それは、かつての自分も同じであったから。

「お兄さんに傍にいてほしい。お兄さんに触れてほしい。お兄さんに、お兄さんに、お兄さんに……!!　そう思うのは、いけないことなの？」

「チルノ……!!」

チルノは泣いている。泣きながら笑っている。様々な感情が複雑に混ざり合い、ただ一言では表せられないような感情を形成している。

「……私が言えることではないが、少なくとも力尽くで誰かを手にしようとするのはいけないことだな」

「本当に他人のこと言えないけど、まあレミリアの言う通りよね。そもそも横島さんは今のところ妹紅とフランちゃんと美鈴のものなんだけど？」

「いや、別に横島は私達のものってわけじゃ……」

傷を負いながらも気丈に反論するレミリア、それを茶化す輝夜、そして照れて指をつつき合わせる妹紅。

チルノの言い分は理解した。だが、だからと言ってそれを通すほど彼女達はお人好しではないし、何よりも龍神が気に入らない。

チルノと繋がったと言うからにはチルノと相性が良かったのだろう。それはいい。だが勝手に表に出てきて、勝手にチルノの身体を奪って、勝手にチルノの内心を語って、横島を氷の彫像にしたことは我慢ならない。或いは何かしらの切っ掛けがあったのだろうが――そんなものは関係ない。

奪われたものは取り返す。敵を打ち負かし、我を通す。それも今の幻想郷のルールの一つだ。

「……なるべく急ぎなさい。もう変質は始まっている。今の私は何も出来ないけれど……あの子を、助けてあげて」

「永琳……？」

多重結界に封じ込まれている永琳が、レミリア達に願いを託す。永琳にここまでさせるほど、二人は親交が深かったのか、と輝夜は意外そうに目を見開く。

紫は唇を引き結んで見つめてくる永琳にゆっくりと頷き返すと、きっとチルノを見据えた。

「あなたの意識が何故チルノに顕れたのかは分かりませんが……チルノは私達の友人です。横島君とチルノ……二人を、返してもらいますわ」

チルノと紫の視線が絡み合う。既に先程までのチルノとしての言葉はなく、あるのは増大していく神気の波動。チルノは何事か呟くと、天を指差し、くるりと回す。龍神の能力〝天候操作〟。

チルノ――龍神は黒雲を呼び、やがて雨と風を齎す。落ち来る雨は水の雫と、冷気によって凍りつき氷雨となるものに分かれている。

「ぬぐ……っ！」

「お姉様……!?」

雨に濡れ、レミリアの身体から煙が吹き上がる。普段であればこのくらいの雨ならば魔力を以ってガード出来るが、現在の状態ではそれも難しい。逆に、フランは過剰なまでの結界により雨の影響を受けていない。

戦況はどんどんと不利になっていく鈴仙はどうしようもないこの戦いに身体を震わせるばかりだ。彼女の好戦的なはずの仮面（ペルソナ）も、圧倒的な神気に当てられて役立ちそうにない。

「どうしよう……どうしたら……!?」

震えは止まらず、目には涙がこみ上げてくる。自分ではどうしようもない。何も出来ない。圧し掛かる重圧は増大を続け、今にも膝から崩れ落ちてしまいそうだ。

「――――仙!!」

「あう、う……っ、ああぁ……!?」

「――――鈴仙!!」

「――――はっ、はいっ!!」

遠くから響いてきた声に鈴仙は背筋を伸ばす。声の方に目を向ければ、それは数歩も離れていない場所に立っている永琳がいた。近くの声を遠くからと錯覚するほどに精神は混乱していたらしい。

そして、永琳から聞かされる言葉により、鈴仙はより深い混乱へと陥っていくことになる。

「いい、鈴仙？　よく聞きなさい――――」

「……どうなってんのよ、これは」

空から幻想郷を一望する霊夢は、その目に映る幻想郷の様子に呆然と呟いた。

いたる所に張り巡らされた多重の結界。妖怪の山、迷いの竹林、魔法の森、太陽の花畑――特に人里など、数えるのも馬鹿らしくなるほどの数の結界で覆われている。

霊夢の住む博麗神社も同様に結界が張られていたのだが、霊夢は自らの能力の特異性から何とか結界を抜け出すことが出来た。たまたま一緒にいた萃香も身体を疎にして抜け出そうとしたのだが、見事に弾かれてしまう。改めて霊夢の能力は反則であると萃香は思い知らされる。

「萃香の奴はお酒呑んで待ってるとか言って不貞腐れるし……。こんなとんでもない規模の結界、どこの誰が作ったのよ」

結界、という時点で既に嫌な予感をひしひしと感じる霊夢。正直な所萃香と一緒に寝てしまいたい衝動に駆られているのだが、異変が起こってしまっては仕方がない。彼女は博麗の巫女。その自覚が薄いとはいえ、幻想郷への愛は本物なのだ。

「誰か――はともかく、発生源は丸分かりよね」

霊夢が視線を向ける先。そこは霧の湖の程近い魔法の森。そこから圧倒的な神気が放たれている。

霊夢はあまりの強さの神気に怖気づきながらも、どこか覚えのあるその波動に首を傾げる。しかし、そのままではいられないと気合を入れなおし、霊夢は現場へ向かって空を翔け出した。

時は少々遡る。それは幻想郷中に結界が張られる数分前。大妖精は不意に胸に湧き上がった不安を抱え、霧の湖をなんとなしに見回っていた。

どうにもおかしい。いつもは夜でもその存在を感じ取れる他の妖精達の気配が一切感じられない。あのどうにも騒がしい妖精達が、いくら夜とはいえこうにも大人しくしているというのは考えにくい。

「どうしちゃったんだろ、みんな。チルノちゃんも帰ってないみたいだし、このままっていうのもなんか怖いし……」

湖の畔をとぼとぼと一人歩く姿はどこか物悲しい雰囲気だ。いつも隣にいるチルノがいないのもそれに拍車をかけている。

「むう……」

何となく満たされない思いを抱えたまま、大妖精は髪を飾るオレンジ色の三角形に触れる。それは横島から贈られた髪留めだ。

「……むぅ」

ぷくり、と頬を膨らませる。髪留めに不満があるのではない。髪留めを意識すると、ついつい横島を思い浮かべてしまうからだ。と言っても、横島一人だけが連想されるのならばこうはならない。

大妖精が横島の姿を思い浮かべる。その時の映像は決まってチルノが横島にくっついている時の姿なのだ。チルノの第一の親友と自負する大妖精にとって、これは由々しき問題であった。

チルノの隣にはいつも自分がおり、それが当たり前であった。他の誰も割り込んではこないし、周囲もチルノと大妖精はそういうものだと認識していた。

しかし、そこに割り込む者が現れた。それが紅魔館の執事、横島である。

横島は今まで大妖精が見たことがなかったなかったチルノの表情を引き出し、彼女に慕われ、懐かれている。大妖精はそんな横島に対して不満を持っているのだ。

――――大妖精は客観的かつ論理的に分析出来る。自分は横島に嫉妬しているのだ、と。

今まで自分こそがチルノの一番だと思っていた。しかし、どうやらその地位が脅かさ

れてきている。心中穏やかでいろというのは大妖精には無理な話であった。

「そりゃ横島さんはいい人だけど……チルノちゃん、横島さんのこと好きなのかなぁ？」

親友としては応援すべきなのかもしれない。しかし、それ以上にチルノを渡したくないと思う自分が存在している。

大妖精はチルノに恋慕の情を抱いているのか、それは定かではない。ただ単純に横島にチルノを任せるのは不安であるという意識があるのかもしれない。

一つ確かだと言えることは、大妖精はチルノが横島と結ばれるのは気に食わないということ。

「何か堂々巡りになっちゃいそう――――ん？」

抜け出せない思考のループに陥りそうになったとき、足に何かを蹴った感覚が走った。チャリ、という軽い音が鳴り、大妖精が蹴飛ばしてしまった何かが地面を滑る。

「……何だろ、コインかな？」

その正体が妙に気になった大妖精は蹴り飛ばしたものを拾うために、屈んで手を伸ばす。草に隠れて正体はつかめないが、拾い上げればそれも分かる。しかし、指先が触れたそれは――――。

「冷たっ!?」

思わず指を引っ込める。指に触れたそれは、まるで氷のように冷たかった。

――何故か、嫌な予感が胸に走る。ごくりと唾を飲み込み、手で草を分ける。そして、大妖精の目に映ったものは。

「――――これ、チルノちゃんの……」

それは、半ば凍りつき、急激な温度変化に耐えられず罅割れてしまったひまわりの形をした髪留め。

「――――っ!?!」

瞬間、幻想郷中に強烈な神気が満ちた。

それは大妖精は知らないはずの力。しかし、その初めて感じるはずの力を、大妖精はよく知っている気がした。

「これは……!?　っ、頭が……っ？」

神気を浴び、大妖精に軽い頭痛が走る。しかし大妖精は頭を軽く振ると、罅割れた髪留めを手に魔法の森へと走り出す。それは彼女の内に発生した、強迫観念にも似た直感故に。

――――現在、幻想郷のほぼ全ての妖精達は眠りに就いている。それは妖精達の大元たる存在の龍神が自らの行いの邪魔をされないようにするため。幻想郷中に張られた

いくつもの結界も、元をただせばそれが目的だ。
しかし、大妖精はこうして意識を保ち、龍神の邪魔となる行動を取ろうとしている。
先程大妖精を襲った頭痛。それこそが龍神の干渉だ。龍神の干渉を受けた妖精達は一切の抵抗を封じられる。それは現在の龍神の依り代である氷精でも、光を操る三妖精でも、あらゆることを器用にこなす紅魔館の妖精メイド三人組でも例外ではない。
龍神の干渉を撥ね退ける。それは知性と知恵と知識を持ち、そこから確固たる自我を形成しきった妖精が行えること。
大妖怪に匹敵する力の強さでも、自然を騙す能力でもそれは成し得ない。
――故に、彼女こそが大妖精。妖精を越えた妖精であり、幻想郷の妖精達の頂点たる存在なのだ。
大妖精は森を走る。何かに巻き込まれたであろうチルノを助ける為の協力者を探しに。
霊夢は空を翔る。幻想郷を襲う異変、その原因を排除する為に。

「く――――っ、ぅあああぁぁぁ!!?」

凍り付いていく半身。目の前には強大な力を宿した拳を振りかぶる龍神（チルノ）。周りの助けも間に合わない。

「チル、ノ……!!」

「やめろおおおぉぉーーーーーーっ!!」

凍りついた半身に、拳が突き刺さり、そして――――。

その半身は、砕かれた。

「紫いいいいぃーーーーーーっ!!!」

第六十六話
『頂点たる存在』
～了～

第六十七話

「はっ、はっ、はっ、はっ……!!」

暗い闇に覆われた魔法の森を大妖精はひた走る。

今、大妖精の胸中に渦巻くのは焦燥だ。それがどこから来るのかは自身にも分からない。だが、確信にも似た予感のままに、大妖精は走る。

「誰か……誰か……!!」

〝チルノが大変な目に遭っている〟。大妖精はそれを感じていた。なぜそれが分かるのか、彼女にも不明である。妖精の上位種である大妖精だからそれが分かるのか、それともチルノの親友だからそれを感じ取ったのか。大妖精には分からない。

しかし、分かることもある。誰か、助けが必要なのだ。

大妖精は弱い。妖精の中ではそれこそトップクラスであると言えるが、それもあくまで妖精の中でしかない。チルノのように規格外と言えるほどの力も有していない。

だから助けが必要なのだ。今現在幻想郷各地を覆う結界の力の主は、自分と同じく魔法の森の中にいる。その力はとてもではないが自分の及ぶ所ではないだろう。感覚が

麻痺してしまうほどに力の差がありすぎる。

「……っ」

何とも情けない話だ。自分一人では親友の助けになることも出来ない。――――だから大妖精は走るのだ。

空を行けば〝何者か〟に見つかってしまうかもしれない。そうなれば全ては終わってしまうかもしれない。単なる可能性の話だが、大妖精はそうなってしまうだろうと思い込んでしまう。恐怖から来る思考の単純化が原因だ。

身体が震える。呼吸が乱れる。それが切っ掛けとなったのか、脳裏には様々な考えが浮かんでは消えて行き、単純さは一転して複雑に置き換わった。

纏まらない思考、乱れる呼吸に身体の震え。それらは大妖精を侵し、その脚をもつれさせた。

「あ……っ!?」

走る勢いのまま、思い切り転んでしまう。幸い足首を捻ることはなかったが、膝や腕、顔を少々擦りむいてしまう。そして、転んだ衝撃で手に握っていたチルノの髪留めを放してしまう。

「チルノちゃんの髪留め……っ！」

割れた髪留めをすぐに拾う。幸いさらに壊れてしまうといったこともなく、罅割れて

いることを除けば綺麗だと言える。

大妖精は髪留めを手にし、なぜチルノが横島から贈られた髪留めを身につけていないのかを考える。誰かに襲われたのか……自分から捨てたのか。

後者はありえないと大妖精は断じる。では、誰かに襲われたのか。この胸を侵す焦燥、予感。それが真実なのかと考える。

では、この圧倒的な力の主がそうなのか？　大妖精には分からない。もっと分からないのは、この幻想郷に充満する力には覚えがある。それはいつも隣にいた者の力の波動。規模も、強さも、性質さえも違うその力。それでも大妖精は似ていると思うのだ。

「……チルノちゃん、なの……？」

この力の主がチルノであるのならば、チルノはどのようにしてこれほどの力を得たのか。また、幻想郷で何をしているのか。なぜ髪留めを放してしまったのか。色々な疑問が湧いてくる。

「ううん。今は考えるよりも行動しなきゃ」

大妖精は深く沈み込みそうになる思考を無理矢理放り出し、助けを募るべく立ち上がる。遠くから地響きと共に聞こえてくる弾幕の炸裂音。少なくとも、自分ではどうしようもない。現場に向かうのならば、相応に強い人物の力が必要となるだろう。

「……と言っても、そんな都合良く誰か強い人が通りがかってくれるわけが――――

ヒィッ!?」

　キョロキョロと辺りを見回しながら独り言を呟いていると、近くの藪がガサガサと大きな音を立てた。思わず身を跳ねさせてしまう大妖精であるが、次の瞬間には珍妙ではあるが格闘のためと思しき構えを取る。目に涙を浮かべてはいるが、同時に決意もその瞳に宿っている。

「ち、チルノちゃんを助けるまでは一人でも頑張らなきゃ……!!　わ、私だってやる時はやるんだから……!!」

　身体は絶えず震える。それは恐怖から来るものか、それとも随分と冷え込んできたからか。ともかく、今の大妖精にそれを確かめることは出来ない。

　やがて大きくなる音。それは何者かが大妖精の元に近付いてきていることを意味している。震えも緊張も恐怖も、どれもが最高潮。ごくりと唾を飲み込んだ音がやけに耳に付く。それが切っ掛けとなったわけではないだろうが、一際大きな音と共に、何者かが藪を抜けて大妖精の前へと躍り出た。

「あなたは――――!!」

　大妖精の前へと現れた少女は、大妖精の無事を確認してほっと溜め息を吐く。それは少女にとっても僥倖だったのだが、大妖精にとってはそれ以上だ。

　とても頼もしい人物が、更に友人達を引き連れて来てくれたのだから。

――――何とかなるかもしれない。
大妖精の胸の内に、希望が芽生えた。

第六十七話
『友達の為に』

「……やはりこちらの呼びかけに応えない」
戦闘を諏訪子、レミリア、妹紅に任せ、結界による重圧の強くなった紫は自らの式である藍とコンタクトを取ろうと試みる。二人は主従の関係であり、特別なパスが形成されている。それはどんな状況でも通じるはずの連絡手段でもあったのだが、現在は龍神（ナルノ）の結界の影響か、妨害されているようである。
きっと今頃は突然紫と連絡がつかなくなり、更にはスキマによる移動も出来なくなってしまったのでまたぞろ盛大に取り乱しているのだろうと紫は溜め息を吐く。

藍の過保護は橙だけでなく、時として紫にも発動する。それが紫としては少々迷惑な所でもあるのだが、今の状況ではその過保護っぷりを酷く待ち遠しく感じてしまう。

何度も上空で響く爆音。身体に叩きつけられる不可視の衝撃波。見上げれば、降りしきる雨を覆うような規模の煙――水蒸気が立ち込めている。

妹紅の炎と龍神の水と氷がぶつかり合った結果だ。弱体化していても、妹紅の炎は神が生成した氷を容易く蒸発させるほどの威力がある。……それが災いした。

「だーっ、くそ!!　失敗した!!」

もうもうと立ち込める水蒸気によって完全に視界を塞がれてしまう。妹紅もレミリアも諏訪子も永きを生きた存在であり、その永い生を戦いで彩ってきた。当然視界を潰される様な事だって何度もあり、その対処法も用意してある。

しかし、この地を龍神の気が満たす場ではそれも難しい。

結界によって弱体化した能力、感覚。その上更に視界まで潰されてはどうしようもない。人間は情報の八割を視覚から得るという。レミリアも諏訪子も人間ではないが、それでも視覚情報は重要だ。

「……ぐおうっ!?」

水蒸気を抜けた拳がレミリアの腹に叩き込まれ、地面まで吹き飛ばされる。蓄積された傷と雨による継続的な痛み、それらも合わさり、遂には立ち上がることも難しくなる

ほどのダメージを受けてしまったのだ。
「お姉様ぁっ!!」
敬愛する姉の惨状にフランは悲鳴を上げる。結界によって動けない身が恨めしい。キッと龍神を睨みつけるフラン……だが、目に映った龍神の表情に、フランも疑問を抱く。
龍神は、苦しげな表情を浮かべていた。まるで、傷付けてしまったことを後悔しているような、苦々しげな色を湛えている。
「くっそ……!!」
妹紅はすぐにレミリアの元へ着地し、巨大な炎を作り出して気圧に大きな差を発生させ、水蒸気を吹き飛ばす。その間に諏訪子が自らの能力でレミリアを雨から守る土の壁と屋根を形成。簡易的ではあるが、堅さは中々だ。
「悪いレミリア。私のせいで……」
「ぐ……っ、いや、気にするな。どの道、私が真っ先に倒れていただろうからな。……お前達の足を引っ張るような形じゃないだけ、上出来と言える」
「その中から出ないほうがいいよ。チルノ……龍神は戦闘不能になった奴に攻撃はしてこないみたいだけど、雨はどうしようもないからね」
「……ああ、そうさせてもらう」

反発せず、意地も張らずに諏訪子の言葉に従うレミリア。冷静に自らの状態を完全に把握し、二人の邪魔をしないための判断だ。自らのプライドよりも優先すべきことは、龍神を倒し、横島とチルノを取り戻すこと。

レミリアは唇を噛み切りながらも後を二人に託す。

「横島……!!　チルノ……!!」

「まったく……。相性的には私の方が有利なはずなんだけど。神奈子に負けた私へのあてつけかな？」

龍神とは水神。司る力もそのままずばり〝水〟である。

五行で例えるならば水は火を消し、土は水を吸収する。つまり相性で言えば妹紅は龍神に弱く、諏訪子は龍神に強いということになる。

もちろん単純な相性等覆すことも出来るには出来る。先程の妹紅が引き起こした水蒸気爆発……つまりは蒸発、気化によって火が水を消すことも可能だ。

現在の龍神の能力。それを同じ神たる諏訪子と神奈子に倣って名付けるならば、『坎（かん）を創造する程度の能力』といったところか。

坎は五行での性質は水であり、やはり諏訪子とは相性が悪い。しかし、龍神が操るのは水だけではないのだ。

――――天候操作。雨だけではなく、風、雷をも操る。龍神としてチルノを介して顕

現した現在の状態だからこそ水の性質が色濃く出ているのだ。
もし大元の龍神本体が力を揮えば、それは今の能力の規模を大きく超える、『八卦を創造する程度の能力』となるだろう。
とはいえ、龍神が水神という側面を持つことに変わりはなく、龍神が大地であるという事実も変わらない。最も強い力を発揮出来るのは水の力と――――地の力だ。
故に、龍神は相性の不利を跳ね除け、諏訪子を圧倒することが出来るのだ。
「あーうー。いやんなっちゃうね、ほんと。遠距離では分が悪いし……やっぱ、直接身体に叩き込まないとダメなのかなー？」
諏訪子はぼやきながらもミシカルリングを拳に装着し、「ケロちゃんパンチッ、ケロちゃんパンチッ」と軽く拳を振るう。風を切る音は鋭く、龍神もチルノと記憶を共有しているのか、それともチルノの意識が強まったのか、さりげなくお腹のガードを固める。大妖精曰くぷにぷにの腹筋では諏訪子の神の拳は防げないだろう。
「そーなると私はサポートに回った方がいいか。炎が有効打にならないのなら、陰陽術くらいしかダメージが通らなさそうだし」
妹紅はもんぺのポケットから何枚もの符を取り出し、その全てに霊気を込める。それは横島もよく知る破魔札だ。そのどれもが妹紅お手製の物であり、威力もそこらの量産品とは比べ物にならない。

「……最近放置しっぱなしだったし、雨で湿気てるからまともに使えるかは分かんないけど……」
「そーいう不安を煽るようなことは言わないでよー!?」
「いやでも、得意気な顔で札をぶつけたら不発でした、みたいなことになったら恥ずかしいし……そもそもここ百年くらい陰陽術使ってないから色々と忘れてるかも……」
「だからそれをやめろってーーーーーー!!?」
　戦う覚悟を決めた瞬間に始まるコント。今まで静かに諏訪子達の動向を窺っていた龍神も、これには肩の力が抜けてしまう。……諏訪子と妹紅の目が光る。
「隙ありーーーーーっ!!」
「卑怯とは言うまいねぇぇぇぇっ!!」
　そして投げられる破魔札と鉄の輪。それは龍神にヒットし、猛烈な爆発を巻き起こした。龍神の背後の横島を封じた氷も完全に巻き込まれているが、なに。そんな程度で横島がどうにかなるわけがないので問題はないのだ。
「やったか!?」
「あれほどの威力の爆発……!!　たとえ神でもひとたまりもないよ!!」
　格下が格上相手に勝つにはどうすればいいか。単純で分かりやすく、効果が高いのは不意打ちをすることだ。妹紅は正々堂々とした勝負にこだわりを持つ武人ではないし、

諏訪子も潔い決着を望むが、その過程はあまり重視しないタイプである。
負けてはいけない戦いと、勝たなければいけない戦い。それに勝つためならば、手段を選んでいる場合ではないのだ。
――――尤も、それは。
「……ありゃりゃ」
「マジかぁ……」
――――相手に通じなければ意味がないのだが。
「……チルノ（アタイ）は知ってるよ。諏訪子がそーいうことする奴だってこと」
不意打ちが成功したかに見えたが、その実体は龍神の前面に展開された氷の盾によって防がれていた。氷盾に皹が入り、龍神の身体からも煙が上がっていることから、まったくの無傷ということはなかったのが救いか。
いや、龍神のこめかみがひくひくと動いている。もしかしなくても、相当お冠かもしれない。
「……悪いカエルには、お仕置きだ」
不思議と龍神だけでなく、チルノの怒りも込められてそうな声音で龍神は宣言する。
「――――『氷符』
「……なにっ!?」

龍神を中心に形成、展開されていく氷の槍。それは、誰もが見慣れた少女の代名詞。

「――――『アイシクルフォール』……!!」

解き放たれる氷槍。撃ち出される無数の弾幕。それは不揃いのようで、確かに均整の取れた軌道を描き、空気を裂いて進みゆく。

貫くために。抉るために。氷の悪意は諏訪子と妹紅に牙を剥く。

「うおぉっ!?　これは……!!」

「チルノのアイシクルフォール!!　これは余計なことしちゃったかなぁ!?」

今までただ単純に弾幕をばらまいていただけの龍神が、チルノのスペルカードを使用した。これは先程の不意打ちによって龍神どころかチルノの怒りさえも買ってしまい、二者の意識をよりシンクロさせてしまったのが原因だ。

チルノは正々堂々、真正面からの勝負を好み、不正行為は一切しない。その真っ直ぐな所が今回は裏目と出てしまった。

「何か私らさっきから余計なことばっかしてないか!?」

「紫に永琳にレミリアっていうブレイン役がことごとく戦闘不能だからね!!　あーもう、私の神様としての威厳がぁー!?」

威力、弾速共にオリジナル（チルノ）のアイシクルフォールを超えているのだが、軽口を叩いて避けられるぐらいには二人とも余裕がある。これは二人が何度もチルノと弾幕勝負を

し、そのパターンを覚えているからだ。
「っていうか月のお姫様はどこ行ったのさ!?　いつの間にかいなくなってるんだけど!!」
「あいつなら永琳に知恵を借りに行ったよ！　結界の圧も強まってきたから戦闘では役に立たないかもとか言ってたしな！」
「それってむこうで動けなくなってたら意味なくない!?」
「……」
「目を逸らすな。こっちを見ろ」
「……」
「コッチヲ見ロッ！　コッチヲ見ロォッ!!」
「スイませェん――――なんてやってる場合か!!　なんかキツくなってきたんだけど!?」
　随分と余裕のある二人に龍神は苛立ちが募るばかりだ。その怒り故か、弾幕はより速く、より鋭く、より強くなっていく。
　だんだんと苛烈さを増していく弾幕に二人が龍神を振り返れば、龍神の周囲には黄色い球体がいくつも浮かんでいた。
「――――『雹符』……」

「げぇっ!?　あれはあの時の――――!?」

諏訪子の悲鳴にも似た叫びが響く。その弾幕はあの時と同じもの。ミシカルリングを装着した諏訪子の拳をも容易く傷付けた、驚異の弾幕。

「――――『ヘイルストーム』!!」

それはまさしく雹の嵐。迫り来る弾幕はあらゆる物を削り、砕き、撃ち抜きながら諏訪子達へと切迫する。巻き込まれた木が、岩が、容易く粉微塵と化すほどの威力。跳びぬけた実力の持ち主である諏訪子と妹紅であろうと、雹の嵐に飲み込まれればひとたまりもないだろう。

「くっそ、速……っ!?」

「ちょ、これは無理――――っ!!」

あまりにも濃密な弾幕の渦。炎の壁も地の壁も、霊符すらも全てを打ち崩す氷の弾は、ついに諏訪子達を捉える。

迫り来る弾幕になす術もなく、自らを貫くだろう氷弾をただ見ることしか出来ない。

――――しかし。

妹紅の視界の隅に光が走る。やがてそれは轟音を立てながら諏訪子達の眼前の空間

を焼き焦がしながら横断し、二人に迫っていた氷弾の全てを消滅させた。
――それは青き極光。暗い夜の闇を切り裂く、一筋の閃光である。
「今の極太レーザーは……!?」
「魔理沙の『マスタースパーク』……!?」
閃光の出所。諏訪子と妹紅、そして龍神もそこを注視する。動くは人影。響くは静かに土を踏みしめ歩く足音。
「……ちょっと見ない間に、随分と印象が変わったわね、チルノ」
一歩一歩、ゆっくりとだが確実に近付くその人影は、すらりとしたシルエットを描き、そこから紡がれる声は柔らかさの中に、しっかりとした強さが込められている。――――魔理沙ではない。
その手に持つは石突きから煙を発する日傘。その身に纏うはチェックのベストにロングスカート。やや癖のあるショートヘアが雨に濡れたことによって、ストレートになっている緑の髪。
「お前は……!!」
「お久しぶり。……危ないところだったわね。何とか間に合って良かったわ、藤原妹紅」
Ｏｒｉｅｎｔａｉ　ｄｅｍｏｎ。宵闇小町。四季のフラワーマスター。幻想郷最強の妖怪。

「――風見、幽香……!?」

幽香は妹紅と諏訪子に一つ微笑むと、すっと視線を動かし、チルノ――龍神を見つめる。龍神はそれに過剰に反応し、じわりと後ずさった。

「チルノ……ではないみたいね。それよりもずっと強いなにか。……でも、どこか知っているような……?」

「龍神だよ。今のチルノは龍神なんだ」

「洩矢諏訪子……?　龍神……。よく分からないけれど、それがチルノを操っている……或いは乗っ取った、のかしら?」

「流石だね。概ねその通りだよ」

諏訪子は幽香の察しの良さに苦笑を浮かべる。以前、諏訪子はチルノから幽香の話を何度も聞いていた。怖いところもあるが、強くて優しいお姉さん、なのだという。

ケンカ友達である諏訪子とはまた違った、姉妹のような絆を結んだ友人である。

「幽……香……?　っ、……!」

幽香の名前を呟く龍神。その頭に鋭い痛みが走る。思考が鈍り、能力の行使が上手くいかない。

「ちなみにだけど……ここに来たのは、私だけじゃないわよ?」

「え……」

龍神に微笑みかける幽香。その優しげな笑みに一瞬呆けた表情を見せる龍神だが、上空から鋭い敵意を感じ取り、弾幕を放とうと両手に神気を込めるが……それは攻撃ではなく、防御へと使われる。

「リグル・キイィーーーーーック!!」

「ぐぅっ!?」

上空からの奇襲攻撃。それを仕掛けたのは技名からも分かる通り、蛍の妖怪であるリグル・ナイトバグ。蹴りの威力は中々のものであったらしく、龍神がガードの上から衝撃を受けきれず、呻き声を出す。――龍神に触れている靴が凍り始めるが、龍神は両手を思い切り払うことでリグルを引き離した。

「リグルまで……!?」

「えへへ、どうも。……まあ、私だけでもないんですけどね」

「え……」

そう。この場に駆けつけたのはこれで全員ではない。

「なんだー？　チルノ、なんか黒くなってるのかー？」

宵闇の妖怪、ルーミア。

「髪も長くなってるし、雰囲気も全然違う……本当にチルノなの……？」

夜雀の妖怪、ミスティア。

「う、うぅ……っ！　よく分かんないけど……よく分かんないし怖いけどミスティアが戦うなら私も……!!」

山彦の妖怪、響子。

「――――チルノちゃん……!!」

「――――っ!!」

チルノの親友――――大妖精。

大妖精の見つめる先……驚きと、喜びと、恐怖と、悲しみと、様々な感情が渦巻く表情に、涙を載せた龍神（チルノ）がいる。

大妖精の中の何かが訴えかけてくる。あれはチルノであってチルノではない。自分達の根源たる存在であると。――――しかし、そんなことは大妖精には関係がない。

「チルノちゃんを……」

「……っ」

強まる視線と敵意。大妖精に睨まれると、怒気を孕んだ声を向けられると、龍神はどうしようもなく胸が痛んだ。

「チルノちゃんを、横島さんを返して……!!」

「――――っ!!」

「みんな……」

フランが今立っている場所は、幽香達が現れた所より随分と遠くにある。妹紅達が自分達を龍神の弾幕から遠ざけようと、骨を折ってくれたおかげだ。それでも、吸血鬼であるフランには幽香達のことがよく見えている。

――皆、チルノという大切な友達の為に戦う覚悟を決めている。

初めて会った時は、皆自分よりもずっと弱かった。

レミリアに脅かされ、随分と怯えていたのをよく覚えている。

……だから、自分が彼女達を守るのだと決めた。自分は強いからだ。

「……っ」

自分が強い？　思い上がりも甚だしい。

今の自分の姿は何だ？　ただ立っているだけではないか。結界に守ってもらって、ただ皆が倒れるのを見ていただけではないか。

身体が動かない？　否、動かさないだけだ。その気になれば、こんな結界など、とうに壊している。何もしなかったのは、ただ自分が傷付くのが恐ろしいだけ――。

「私だって……」

フランの眼が金色の光を帯びる。彼女の眼には、彼女の身を守る結界の〝目〟が見えている。過剰なまでの量だ。どうやら本当に、結界の主はフランの身を守るためにこうした構築をしたらしい。

「私だって……!!」

切っ掛けはおかしなものだった。いきなり胸を揉まれたのだから、おかしなもの以外のなにものでもない。チルノにとっては深い意味は無かったのかもしれない。それでも、その後に掛けられた言葉は、心の底から嬉しかったのだ。

――――アタイ達は親友だよ、フラン！

「私だって……チルノの親友なんだからあぁぁーーーっ!!!」

フランは両手に〝目〟を集め、それらを一気に握りつぶした。バリン、とガラスが割れるような大きな音が響く。

「うぁぁ……っ!?　いったぁ……っ!!」

フランはその身を守るための……体内にまで及んでいた結界の全てを破壊した。その反動か、全身に引き裂かれるかのような痛みが走る。だが、こんなことで倒れ伏すわけにはいかない。チルノが、そして横島が待っているのだ。

フランは痛む身体を……未だ降り続ける雨に身を焼かれながらも、懸命に前を見つめ、幽香達と合流しようとする。しかし、それに待ったをかける声があった。
「……少し待ちなさい、フラン」
「……お姉様？」
声のした方を向けば、そこにはまだ鈍痛が止まないのだろう、片手で腹を押さえたレミリアの姿があった。土の壁から出てきたせいか、フランと同様に雨にその身を焼かれている。
フランはレミリアの痛々しい姿に駆け寄ろうとしたが、レミリアの強い力を宿す瞳に縫いとめられ、動くことが出来なかった。
レミリアは億劫そうに、しかし力強い動きで腕を持ち上げ、フランに差し出す。
「私の血を吸っていきなさい」
「え……？」
レミリアの申し出に、フランは困惑する。
「その状態じゃろくに動くことも出来ないでしょう？　だから、私の血をあげる。同じ吸血鬼の、しかも血を分けた姉妹の血だもの。一気に体力回復と魔力の強化がなされるわ」
「え、で、でも……」

肉親に牙を突きたてるのに抵抗があるのか、フランは決心が突かず、ただまごつくばかり。レミリアはそんなフランの優しさを嬉しく思うが、今は一刻も早く戦えるようにならねばならない。

「……二人を助けたいんでしょう？」

「……っ！」

「悔しい話だが、今の私じゃどうしようもない。でも、あなたなら可能性がある。……私じゃ、あの二人を助けられない」

「お姉様……」

レミリアの瞳に、初めて弱さが映る。それは、フランが今まで見たことがないものだ。だからこそ、その強さをフランに託す。

……これは儀式だ。レミリアの強さを受け継ぐ儀式。血を吸うとは、そういうことだ。

「言って聞かないなら殴るしかない。……何とも野蛮な話だが、真理でもある。――――私の分も、あの大馬鹿爬虫類を殴ってきなさい」

「……お姉様って、けっこう脳筋だよね」

「失礼な」

始めに苦笑を浮かべたのは、どちらだったか。

「……うん。私、お姉様の分も頑張るね」
「ええ。頑張ってきなさい、フラン」
フランはレミリアの手を取り、噛み付いて血を吸う――――ようなことはせず、手を引いて自らへと抱き寄せた。
「え」
フランはレミリアの衣服の襟元を破り、首から肩までを露出させる。
「ふ」
フランは白く、華奢なレミリアの首元に少々躊躇したが、やがて思い切り牙を突きたて、ちゅーちゅーと血を吸い始めた。
「いっっったぁっ!!? ちょっ!? 腕!! 腕を差し出してたでしょうが!! 何でわざわざ首に噛み付いてってアンタちょっと吸い過ぎ強過ぎ待って待って待ってちょっと待って死ぬ死ぬ死んじゃう死んじゃうってこれちょっとこれマジで失血死するからぁっ!!?」
これは儀式なのだ。レミリアの強さを分けてもらう、神聖な儀式。悪魔である二人の儀式に神聖さもクソもないと思うがそれはそれ、神聖だと思えば何でも神聖に映るのだ。
「――――それじゃあ行ってくるね、お姉様!!」
「……がん、ば……なさ……い……」

フランは漲る力をそのまま推進力へと変えて、猛烈なスピードで空を翔る。ちなみにレミリアはフランの手によってちゃんと土の壁の所にまで戻されている。……何だか埋葬のように見えたのは気のせいだろう。

「ふ、ふふ……吸血鬼が失血死だなんて、笑えないわね……」

冗談ではない。

貧血に霞む目の前に、二つの腕が差し出される。

「……ん？　あれ、アンタら――――」

そこにいたのは、二人の少女。

幽香達――――リグル、ルーミア、ミスティア、響子、そして大妖精が龍神に立ち向かっているのを見たのは、フランだけではない。

「……あの子達……」

彼女達は、自分よりもずっと弱い。間違いなく、そう断言出来る。

そう、自分は強いのだ。彼女達よりも、ずっと強い。――――本当に？

こうして、ただ震えているだけの自分が？

そう、本当は自分なんかより、彼女達の方がずっと強い。肉体ではなく、それに宿る

心が強いのだ。
怖いはずだ。逃げたいはずだ。戦いたくないはずだ。弱いはずだ。それでも、彼女達は戦うのだ。
それはただ、友達の為に。
身体は震えている。心は萎縮している。
――――それでも。それでも彼女達を見つめる瞳には、強さが宿っている。

――――私は、貴方みたいに、なれるかしら……。

かつて抱いた想いが脳裏を過ぎる。弱いはずなのに懸命に友の為に戦う少女達を、赤い瞳が見つめている――――。

第六十七話
『友達の為に』
～了～

第六十八話

夜の帳が降りた魔法の森に、戦いの音が響く。

唸りを上げて吹き荒れる風。ざわめき、へし折られる木々。地を揺らす轟音――

それらから少し離れた場所に、三人の少女がいた。

二人は一人の少女に自分の腕を差し出し、一人は二人の腕に噛みつき、必死にその血を嚥下する。

そう、血を飲んでいる少女はレミリア。そして彼女に自らの血を捧げているのはてゐと小悪魔の二人である。

ゆっくりと、しかし大量の血液を吸われている二人の顔色はやや青白くなっているが、二人は人間ではないので行動に然したる問題はない。

「……っぷはー！　いやー、生き返ったわー。フランに限界まで血を吸われて色々とヤバかったのよ」

「貧血が吸血で回復する……吸血鬼って変な種族だね」

レミリア――吸血鬼は体内に取り込んだ血液を自らの血液に変換することが出来る。それだけでなく、大抵の傷は血を吸えば治るという強力な治癒能力を有してい

る。最強種族の名は伊達ではない。
「充分な回復は出来ましたか？」
「んー……いや、傷は治せたけど回復には程遠いな。けど、私の力はフランに託してある。私はここでリタイアだ」
身体の傷は癒せても、愛する妹に譲渡した魔力は完全回復にはいたらなかった。以前の調子を取り戻すには数日ほど掛かってしまうだろう。
それでもレミリアに後悔はない。心配ではあるが……それでも、後のことはフランに任せたのだ。フランが横島とチルノを取り戻すのを信じて、待っているしかない。
「……で、二人はこれからどうするんだ？　大まかな事情は理解しているみたいだが、まさかとは思うが……戦うつもりじゃないだろうな？」
「……」
レミリアの問いに二人は答えない。その沈黙は、『肯定』と同義なのだ。
小悪魔の目に迷いはない。てゐも同様であり、二人とも対龍神戦に参加する気満々である。
レミリアはそのあまりにも無謀な決意を固めている様子に溜め息が出る。
「……まあ、チルノが龍神を抑えてくれてるからこっちも死人は出ていないが、いつその均衡が崩れるかは分からんぞ？　お前達が向かった時にはもう龍神に呑み込ま

れているかもしれない」
「はい。……それでも、それでも私は横島さんを助けに行きたいんです」
「……」
言葉少なに自らの決意を語る小悪魔は、レミリアの言葉を聞いても言うことを聞かないだろう。以前より生じていた迷いは完全に吹っ切れたようだ。……それが良いか悪いかは置いておいて。
「大丈夫。何も直接ぶん殴るだけが戦いじゃないよ。私達は自分に出来ることをやりに行くだけだからね」
「……分かった。行ってこい」
結局、レミリアは折れた。無理無茶無謀は理解している。それでも、ああまで強い瞳を見せられたら送り出したくなってくる。
「これが結果的に良い方向に向かってくれたらいいんだけど……」
呟いたところでどうにかなるものではないことも承知しているが、それでも口に出したいものもある。
とにかく、レミリアも覚悟を決めた。小悪魔の肩に手を置き、なけなしの魔力を注ぐ。
「お、お嬢様……？」
「フランに託した分に比べたら雀の涙程だけど、それでもまだマシでしょ。この私が魔

力を分けてやったんだ。……必ず、戻ってくるように」

「……!!　　はい!!　　絶対に横島さんと戻ってきますね!!」

レミリアの両手を握り、決意を新たにする。レミリアはそれを受けて頷き、てゐに目を向ける。てゐもその視線を受け、ゆっくりと頷いた。『小悪魔は任せろ』、そう目で語っている。

そうして二人は走り出す。全ては愛する男の子を助けるために。神様に囚われた女の子を助けるために。

第六十八話

『奇跡の具現』

時は少々遡り、夕刻の大図書館の司書室。そこでは二人の少女――てゐと小悪魔が対面していた。

どこかそわそわと所在なさげにしている小悪魔と、それを見て苦笑を浮かべているてゐ。どうやら、これから展開されるであろう話の内容に、小悪魔は察しがついているらしい。

「んー、そんなにビクビクしないでほしいんだけどな。何か苛めてるみたいで申し訳なくなっちゃうね」

「す、すいません……」

選んだ言葉が不味かったのか、より恐縮してしまう小悪魔に、てゐは天井を仰ぐ。他人を騙すことに関してはいくらでも舌が動いてくれるというのに、こういった場合にはまるで思い通りに動いてくれない。

こうなってしまってはいたしかたなしと、てゐは直球で勝負に出る。

「うん、もうストレートに聞いちゃうけど……どうして、最近執事さんを避けてるんだい？」

「……」

てゐの真っ直ぐな視線と言葉。それに対し、小悪魔が取った行動は沈黙。そして目を逸らすこと。

どうやら小悪魔は横島に対して何らかの後ろめたさを感じているらしいことが分かった。

しかし……どうやら小悪魔はおずおずとだが、ゆっくりとてゐと視線を合わせる。躊躇いながらも話すことを選択したようだ。

小悪魔も自らの感情の行く先が見えず、誰かに相談する機会を待っていたのかもしれない。

「切っ掛けはやっぱり……執事さんが蓬莱人になったこと？」

「……そう、ですね。それも一つです」

この時てゐの脳裏を掠めたのは、『自分が横島に永い時を生きるように望んだから』という考えを小悪魔が持っているのではないか、ということ。

横島が『男』との戦いを経て蓬莱人になった時、小悪魔は特にショックを受けたようだった。

もし本当にそう考えているのならば、それは思い違いに他ならないのだが……小悪魔の真実は別にある。

「私は――――喜んでしまったんです」

「――――それは、どういう……？」

小悪魔は苦々しげに顔を歪める。

横島が『男』に腸を食われ、妹紅によって蓬莱人の生き肝を食わされてその身体を蓬莱人と変えた日。

あの日、あの時、あの瞬間。小悪魔は確かに巨大な悲しみと罪悪感に襲われた。
それは思い違いも甚だしい感情であり、自身もまたそれを自覚していたが、小悪魔はそのあまりにも苦い想いを抱え込んだ。
小悪魔はそれが思い違いと理解している。それでも、彼女は大いに悲しみ、苦しんだ。
――――問題は、その後だ。
横島が復活し、妹紅と結ばれ、その妹紅が一夫多妻に理解があると知って――――小悪魔は、喜んだ。
横島が復活し、妹紅と結ばれ、その妹紅が一夫多妻に理解があると知って――――そこで、はたと気が付いた。
――――「なぜ、自分は喜んでいるのだろう?」……と。
横島が復活したのは正直に嬉しい。何せ自分が恋する少年なのだ。
妹紅と結ばれたのも歓迎すべきことだ。彼女の外見年齢は自分と同程度。自分も選ばれる可能性が上がるのだから。
……そうして、小悪魔は思い至った。自らの考え方が、自己中心的な物でしかないのだということに。
それから小悪魔は変わってしまった。必要以上に横島とは接触せず、ただ黙々と仕事に打ち込む毎日。

パチュリーやメイド妖精にどうしたのか理由を聞かれても、やんわりと話を逸らし、煙に巻く。

小悪魔は、自分が許せなかったのだ。自らの想いが、これ程に汚れたものだったことが。

それは、とても純粋で潔癖な想い。自らの種族の多淫的倫理観と、他人ではなく自己へと向けられた潔癖な恋愛観による板挟みによって生じた、歪な感情。

――――小悪魔は、自分には横島に愛し愛される資格はないのだと思い込むようになってしまった。

「な……？」

てゐは呆然と口を開き、二の句が継げなかった。

小悪魔が横島を避ける理由は理解出来た。……正直あまり理解出来ていないが、それでもまあ、何となく理解はした。

しかし、どうしてその結論に辿り着くのかは分からなかった。

小悪魔は自分の想いを汚れていると言った。しかし、てゐはそうは思わない。むしろ、小悪魔が抱いた感情は当たり前のものだとすら思っている。

てゐが見付けた小悪魔の思い違い、ちょっとした勘違いを正そうと、改めて口を開いたその時――――。

「……ん？」

てゐのふわふわの耳がぴくりと反応する。何か、大きな破壊音が聞こえた。

「……どうかしたんですか、てゐさ――――!?」

「小悪魔っ!?」

どこか壁の方を見ながら耳をぴくぴくと動かすてゐの様子に何かあったのかと問い掛けた小悪魔の頭に、鋭い痛みが走る。

それはパチュリーからの念話であったのだが、出力の調整を誤ってしまったようである。――――つまりは、それほどの緊急事態という訳だ。

「う……っ、パチュリー様……？　妖精メイド……安否の確認……？」

「妖精メイドの、安否……？」

てゐの中で情報が組合わさっていく。先程の破壊音、切羽詰まった様子が窺われるパチュリーからの念話、妖精メイド達の安否の確認……。

「……何かあったんだね。とにかく、現場に行ってみよう」

「はい」

そうして、二人はその場所へと辿り着く。混乱している様子の妖精メイド数人が佇む、大きな穴が空き、周囲が凍り付いた、惨憺たる有り様の廊下に。

「これは……!?」

「何これ……パチュリーが魔法ミスったのかな……？」
「いえ、流石にそれは……」
てゐの笑えないジョークに苦笑すらも返せず、小悪魔はこめかみに浮かんだ冷や汗を拭う。
この状況がパチュリーのせいかどうかは今は置いておこう。優先すべきはパチュリーからの念話にもあった、妖精メイド達の安否だ。
小悪魔は廊下の先で目を回していた妖精メイドや、破壊音を聞いて駆け付けた妖精メイド、野次馬の妖精メイド達を集め、話を聞いていく。
「何があったのか、知ってる妖精はいないか」
「知ってる可能性のある妖精メイドはまだ失神してますからね……」
小悪魔は他の妖精メイドに膝枕されている失神中の妖精メイドを心配そうに見やる。
てゐの診察で深刻な状態でもなく、外傷もないことからすぐに目覚めるだろうと予想がされたが、それでもあまり無理はさせたくないものなのだが……。
そう考えていた小悪魔に応えたのか、失神していた妖精メイドが小さな呻きと共に、ゆっくりと目を開く。
「……ん、んうぅー……？」
「あ、おきた」

ふらふらと揺れる頭を抑えながら、妖精メイドは上体を起こす。キョロキョロと辺りを見回し、自分がどこにいるのかを理解すると……素早い動作で立ち上がり、視界に映った小悪魔に思い切り抱き付いてきた。

「こ、ここっ小悪魔さんっ!!　　大変なんです大変なんです大変なんです!!!」

「おおお落ち着いてくださーいっ!?」

がっくんがっくんと意外とパワフルに身体を揺らしてくる妖精メイドに、小悪魔が悲鳴をあげる。

見ている分には非常に面白い光景ではあるのだが、生憎と今はそんな事をしている暇はないのである。

――――嫌な予感がする。てゐはいつものお気楽思考を一旦放り投げ、小悪魔を揺らす妖精メイドに話を聞く。

「ほらほら落ち着いて。一体何があったんだい？　　何が大変なのさ？」

てゐに宥められた妖精メイドはようやく落ち着きを取り戻し、息を切らせつつも小悪魔に謝罪した。

そしてその口から語られたのは――――まさに、衝撃の一言であった。

「えっと……そう、チルノちゃんと横島さんがろうかにいたんですけど……チルノちゃんの様子がおかしくて」

「チルノが……？」
「かみの毛が長くなってて……日焼け？　してて……」
「……どういうことなんでしょう」
てゐも小悪魔も、チルノの変容に驚きを隠せない。
そして、次の言葉。それが、二人に齎したものは――。
「それで……チルノちゃんが、横島さんを凍らせて連れ去って……」
「……――」
――目の前の景色が流れていく。
空に浮かぶは尾を引く星の輝き。地にあるのは星の光を反射する暗い湖。眼前に浮かぶのは、先を見通すことが出来ない分厚い霧だ。
――何故、いきなり景色が変わってしまったのだろう。
確かに、自分はあの廊下に立っていたはずだった。しかし、今の自分は両足で立つことをしていない。それどころか宙に浮き、自分が出せる限界のスピードで空を駆けている。
――何故、自分は空を飛んでいるのだろうか。
そんなことは判りきっている。――横島を助ける為だ。
それに気付いた小悪魔は、自嘲の笑みを浮かべる。

愛される資格はない？　　では何故今自分は必死に空を駆けているのか。
愛される資格はないと嘯いておきながら、それでも愛されたいと思っているからだ。
「……っ」
小悪魔は自らの身勝手な感情に吐き気を催す。あまりに身勝手で、あまりに自分勝手で、あまりに独善的だ。
いつからこんな風になってしまったのか。
当初抱いた想いはどこまでも透き通り、キラキラと輝いていたはずなのに。
今の自分が抱く想いはこんなにも薄汚れている。
それがどうしようもなく腹立たしく、そして悲しい。
小悪魔の視界が歪み、滲む。涙が溢れてきたのだ。
自らに対する怒りか、悲しみか。あるいはその両方からくる感情の昂りは奔流となって小悪魔の心を掻き乱す。
自分の想いは、間違っていたのか。
何故、何で、どうして――――答えの出ない迷路に迷いこんだ小悪魔に、その言葉が掛けられる。
「――――間違いなんかじゃないよ」
「……え」

それは小悪魔を追い掛けてきたてゐからの言葉。

自分の気持ちは、想いは間違いではないと。

「確かにね。誰かに恋をするのはキラキラして綺麗なものだよ。でもね、人の感情の絡むもの……取り分けこういった恋愛ごとは綺麗なだけじゃ済まされないのさ」

「てゐさん……？」

小悪魔は徐々に空を飛ぶスピードを落とし、やがて空中に静止する。てゐの言葉に集中するためだ。

「小悪魔は種族的に分かりにくいだろうけど……嫉妬心だとか独占欲だとか、普通はそういったドロドロとした物を抱くものなんだ」

小悪魔が属する低級魔族は種としての弱さを繁殖で補う生態を持つ。それから来る小悪魔の倫理観は独特のものであり、小悪魔も横島が複数の女性と関係を持つのは特に問題としてはいない。

しかし、小悪魔は些か特殊な精神性を有していた。それは〝他〟ではなく〝己〟に向けられる潔癖な価値観である。

横島は永遠の命を欲してはいなかった。しかし自分はそれを望み、またそれは叶えられてしまった。

妹紅は横島が複数の女性を囲うことを是としており、それを知って喜んだ。横島の意

思は関係なく、そうあるべきだと考えた。
「小悪魔は自分の想いが汚れてるって言ったね。でも、それは汚れてるんじゃないんだよ。透き通って綺麗なものっていうのは、言い換えれば特徴のないもの……まだまだ子供だったってことさ」
――それでも、自ら汚れていると断じたこの想いを。
「ドロドロっとした感情が顕れたのは、成長の証なんだ。恋に恋する女の子から、誰かを愛する女の子への、ね」
――彼女は、肯定してくれた。
「どうして、小悪魔は飛び出したんだい？」
「え？」
不意に、てゐは小悪魔へと問い掛ける。
どうしてここにいるのか。何故、あの場から飛び出してきたのか。
「……横島さんを、助ける為、です」
「うん」
横島が連れ去られたと聞き、小悪魔は頭の中が真っ白になった。気付けば空を駆け、横島の救出に飛び出していた。
「小悪魔もさ、色々と考えて執事さんを避けてたんだろうけど……やっぱりさ、これが答

えなんだよ」
「……？」
「――――好きなんでしょ？　　執事さんのこと」
「――――」
それは、乱れた心にすっと入り込んできた。
「だからあれこれ考えてたことを全部放り投げて、一心に執事さんを助ける為に飛び出したんだ」
「……」
「好きな人の為だもん。好きな人を助けたいって思うのは当然のことだよ」
胸の澱みが洗われるような、そんな感覚を小悪魔は味わっていた。自分の想いは間違いではないと、誰かが肯定してくれる。それだけで、力が湧いてくるようだ。
「妖精メイドから聞いたところによると、どうやらチルノも正気じゃないらしいね。果たして何かに取り付かれたのか……ま、これは現場で確かめるしかないか」
「そう……ですね。横島さんだけじゃなく、チルノちゃんも助けましょう」
「そうだね……じゃあ、急ごう」
「はいっ」
二人は並んで空を駆ける。

全ての蟠りが解けたわけではない。それでも、小悪魔の心は晴れ渡っていた。
愛される資格などと、それこそおかしな話だったのだ。
誰かを愛し、愛される。そこに必要なのは資格なのではない。むしろそのままの物――愛し、愛されたいと思う気持ちなのだ。
「そうそう、ドロっとした気持ちなんだけどね。これもこれで必要なものだよ。それがあるからより綺麗になろうと思ったり、振り向かせてやろうと思ったり――つまり向上心に繋がるのさ」
「向上心……」
「と言っても、それも行きすぎるとろくなことにならないけどね。折り合いはどこかで付けなきゃいけないんだ。……でもまあ、小悪魔は大丈夫かな？」
「……どうしてです？　さっきまでのことを考えると……」
「種族的なこともあるけど……小悪魔は内罰的だからね。ストレスの発散にさえ気を付ければ自分を律するのは得意だろうし」
「……なる、ほど？」
少し懐疑的だが、それでもある程度は納得出来る考察だった。確かに自分は内に溜め込むタイプであるし、ストレスさえどうにか出来れば――。
「まあストレスは執事さんと〇〇〇（ピーー）しまくれば溜まらないよね」

小悪魔、魔法の森に墜落!!

「こ、小悪魔ーーー!?」

「いっくぞぉーっ!!」

龍神（チルノ）を中心に、空間を暗闇が支配する。

ルーミアの能力、『闇を操る程度の能力』だ。

闇が球形となって広がり続け、今やその大きさは半径数十メートルにもなろうとしている。

ルーミアの操る闇は魔法の闇であり、その中で松明などの明かりを灯しても周囲が照らされることはない。……だがそれだけだ。

対処法としては魔法の光を操るか、闇の範囲から抜け出せばよいのだ。

闇の広がるスピードは速くはない。龍神ならばすぐにでも抜けられるだろう。

龍神はその場から斜め上方へと向かって移動を開始する。その速度は闇が広がるよりも速く、最早抜け出るまでに十秒と掛からないだろう。

「……闇から抜け――――ッ!?」

闇の先、光が見える。月明かりだ。闇から抜けることが出来たのである。だが――何も見えない。否、見えている。だが、視界全ての輪郭がぼやけ、網膜が捉える全ての映像が曖昧となっている。

「これは……っ!!」

夜目が利いていない。闇から抜けた先、そこは月明かりを認識出来ても視界が利かぬ新たな闇の世界。

こんなことが出来るのは、ただ一人。

「――っ!!」

「――っ!!」

龍神の左右、誰かが思い切り息を吸い込んでいるような音が聞こえる。

夜目を利かなくする――対象を鳥目にし、音で龍神の移動箇所を感知する。

それが出来るのは、この場に二人――!!

「声符『木菟咆哮』――!!」

「山彦『アンプリファイエロー』――!!」

「――っっっ!!??」

それは、左右から発せられる可聴域をとうに通り越した超・爆音。

龍神は咄嗟に耳を塞ぐのが間に合ったが、最早それになんの意味もなく。

視覚に続き、龍神は一時的とはいえ聴覚も封じられることとなった。

「うあ〟……あ〟……っ!?」

これには流石の龍神も堪り兼ね、苦悶の表情を浮かべ、その身体を丸める。――――大きな隙だ。

「横島さあああぁぁんっ!!」

その隙を狙い、リグルが上空から猛スピードで降下し、龍神の背後に浮かぶ横島が捕らわれている氷牢に蹴りを叩き込む。

これは横島に対し含む物があるわけではなく、リグル・キックの勢いで横島を龍神から離そうとしたのだ。幽香を含む、仲間内で一番の突貫力を持つリグルだからこその役目である。

これこそが大妖精が即興で考えた横島救出の為の作戦。それぞれの特性を活かした策である。

「……なっ!?」

しかし、だ。

「うわっ、氷が……っ!?」

横島を封じた氷牢は微動だにせず、逆にリグルまでも凍結せんとその脚にも氷が侵食していく。

「く……っ、お兄さんに触れるなぁっ!!」
「きゃあぁっ!?」
リグルの脚が本格的に凍る前に、龍神はリグルを吹き飛ばす。未だ視覚も聴覚も回復していないが、氷牢を覆う多重結界にセンサーの役割を持つ物が存在しているのだ。
視覚はともかく、聴覚すら役に立たないのは龍神としても辛いものがある。結界から得られる情報にも限度があるのだ。
出来ることならばどこかで回復に専念したいところだが、龍神に休む暇は与えられなかった。
「龍神から横島さんを離すのは難しいようね。……なら、こうするしかない」
「目を覚まして!!」
「くうぅ……っ!!」
地から迫る青き極光。天から迫る紅き炎剣。幽香の極大砲撃とフランのレーヴァテインである。龍神も妖力感知は阻害されておらず、こちらは何とか防ぎきれた。
横島を救出するのが難しい場合、狙いは龍神へと移す。これは幽香の案である。
本来ならば慎重に事を運びたい所なのだが、事態は急を要する段階へと至っている。
言うことを聞かないのであれば、力ずくというわけだ。
フランも大妖精も、出来ればチルノを傷付けたくはない。だが、二人とも――――否、

龍神と相対するチルノの友人達は皆悲愴とも言える覚悟を決めている。
助ける為に――――チルノを、傷付けることを。
回復のためにルーミア達の立ち回りを静観していた妹紅は、彼女達の善戦ぶりに驚きを隠せない。
「幻想郷最強クラスの連中が悉くやられたのに……あいつら、凄いな」
白蓮、神子、レミリア……幻想郷でも最強を誇る実力者達。それを容易く打ち破ったのがあの龍神だ。それを相手に互角に……いや、むしろ押している。幽香とフランがいるとはいえ、これ程までに龍神を追い詰めるとは思いもしなかった。
「……いや、そうか。そういうことか」
「ん……？　どうかした、諏訪子？」
妹紅の隣で一言も発さずに龍神の様子を観察していた諏訪子が、ようやく得心がいったとばかりに呟く。
「龍神だよ。……どうやら、幽香達は私達のように結界による行動の阻害を受けていないみたいだ」
「え……そうなのか？」
諏訪子の言葉に妹紅は改めて幽香達に視線を移す。自分達は時間が経つごとに徐々に力を封じられていったが、確かに幽香達はその傾向が見られない。

「いや、でもフランは？　　フランは永琳と一緒で最初からガチガチに封じられてたけど……」

「うん。それについても分かってる。色々と法則は見つけられたよ」

諏訪子は、龍神の謎を一つ解き明かしたようだ。

まず、龍神に倒された者達。白蓮、神子、布都、早苗、レミリア、咲夜、パチュリー、美鈴。この内、龍神が積極的に打ち倒したのが白蓮、神子、布都、早苗の四人。

咲夜、パチュリー、美鈴は事故の様なものだった。パチュリーが喘息によって行動不能になり、パチュリーを庇って咲夜と美鈴の二人が被弾。

レミリアは水蒸気爆発によって生じた水煙の中で繰り出された攻撃がレミリアに命中した。

……龍神は、横島と仲の良い紅魔館のメンバーを狙っていなかったのだ。

「横島君の恋人であり、自身の親友であるフランは過剰なまでの結界で閉じ込められて、冷気からも弾幕からも守られてた。紫や永琳についてはまだ分からないけど、紅魔館組が狙われていなかったのも、幽香達の力が封じられてないのも、チルノの意識がそうさせてるんだと思う」

龍神に飲み込まれたと思われたチルノの意識。それは、未だ抵抗を続けている。

親友である大妖精やルーミア達、幽香には結界を使用させず、初めは結界で守ってい

たフランも今は結界に封じていない。
「チルノは必死に抗ってるんだ。友達を傷付けないように、自分を止めてもらうために……」
妹紅は諏訪子の言葉を聞き、龍神という幻想郷の最高神を宿しながらも歯を食い縛って耐えるチルノに、尊敬の念を抱いた。
「チルノ……」
チルノは友達を守るため、友達に止めてもらうために頑張っている。ならば、自分も頑張らねばなるまい。
美鈴は倒れてしまったが、横島の恋人の一人たるフランだって頑張っているのだ。自分もただ膝をついて待っているだけではいけない。
「……あれ？」
と、ここで妹紅は疑問を抱く。
「諏訪子ってチルノと結構仲が良かったよな？　それなのにフランみたいに結界で守られることなく弱らされて、躊躇なく攻撃されてるけど……」
「妹紅だって紅魔館組と違って普通に攻撃されてるし、そもそも横島君の恋人なのに他の二人と違って特に気にもされてないし……」
「……」

「……」
「この話題はやめよう」
「そうだね」
妹紅と諏訪子は大人しくフラン達の奮戦を見守ることにした。今自分達が割り込んでいっても邪魔になるだけであるし、決して心に傷を負ったからというわけでは断じてない。
龍神との戦いは膠着状態へと陥った。
チルノの抵抗によって力を発揮できない龍神と、龍神の防御を抜くことが出来ず、横島を奪い返せない幽香達。
この状況を変えるには、一手が足りない。
「――――思った通り、面倒なことになってるわねぇ」
「――――っ!?」
それは、唐突に開かれた。空間に発生した亀裂……それはスキマだ。
スキマから現れたのは赤と白を基調とした和装に身を包んだ少女。
「宝具『陰陽鬼神玉』――――!!」
「っ!?　うあああぁぁぁぁぁ!!?」
博麗の巫女、博麗霊夢である――――!!

「れ、れーむ!?」

霊夢のスキマ移動にフランはギョッと目をむいた。

霊夢はとある異変でオカルト・都市伝説の力を手に入れた。

彼女が関連したオカルトは〝隙間女〟。その力を行使すれば、この程度のことは造作もない。

霊夢はスキマから出現すると同時に超巨大霊気弾を龍神に叩き込み、初めて防御を抜いてダメージを負わせることに成功した。

「取り敢えず何かチルノが悪堕ちしてるっぽいからぶっ飛ばしたんだけど……どういう状況なの?」

「とりあえずでぶっ飛ばさないでよ!?」

異変の原因は問答無用でぶっ飛ばす。近頃は萃香と特訓に明け暮れていたためか、思考が鬼より（脳みそ筋肉）な感じになっているようだ。

素敵な思考回路となってしまった霊夢にフランが文句を言うが、それもどれだけ通じているのか。

霊夢の一撃を受けた龍神は横島の氷牢ごと十数メートル程吹き飛ばされる。

その思考は様々な所に飛散するが、それはやがて一つへと収束していく。

夜目が利かずともその姿を見た。耳が聞こえずともその声を聞いた。

かつて、どこかで言われた言葉が脳裏にまざまざと甦る。

――冷気を好む動植物は居ないわ。

「……」

龍神とチルノの意識が更に同調していく。燃えるような激情と、凍えるような怒りが混ざり合う。

――何処に行ってもあんたは嫌われ者。

無意識の内に仕舞い込まれていた言葉が再生される。

そして――チルノの意識は、今度こそ完全に途切れた。

「……？　動きが止まった？」

「ならチャンスってことね。横島さんのこととか、言い訳は後で聞いてあげるわ!!」

霊夢から強大な霊波が放たれる。それは霊夢が切り札（ジョーカー）を切る前兆。

「ちょっと待っ――」

「神霊『夢想封印』――!!」

妖怪を封じ込める、複数の強大な霊気の光弾が龍神へと殺到する。

それに対し、龍神は何もしない。迫り来る光弾に視線を合わせることもなく、ただただ無防備にそれを身体に受けた。

爆光と爆音が響き、爆煙が龍神の身体を覆い隠す。

幽香はその威力を肌で感じ、これならば龍神も大きなダメージを負っただろうと考えた。

「霊夢!!　あそこにはお兄様もいたのに……!!　チルノだって!!」

「別に問題はないでしょ?　横島さんはあの氷と多重の結界で空間から隔離されてたみたいだし、チルノだって力が随分と上がってたみたいだから傷を負っても致命傷にはなってないはずよ」

「だからって……!!」

霊夢の言葉に、幽香は複雑な思いを抱きながらも合理的だと判断した。

霊夢も幻想郷全土にわたる異変を解決するために、私情を殺して解決へ導こうとしているのだ。

横島もチルノも、今や霊夢にとっては恩人である。その恩を仇で返すことになったのは心苦しい。

しかし、だからといってこの異変を放置するのではそれこそ本末転倒だ。

だからこそ、霊夢は本気で異変を解決しようとしているのである。

「フラン、そこまでに――――っ!?」

険悪となる霊夢とフランの間の空気。二人を仲裁しようと幽香が声を掛けたその時

――――幽香の背筋に、怖気が走った。

幽香だけではない。その場にいた全ての者がそれを感じ、それの発生源へと目を向ける。

爆煙の先。今までよりも遥かに強い神気が迸る。

真っ先に目についたのは――――角。

煙が晴れた先にいた龍神（チルノ）の姿は、またも変貌していた。

爪が伸び、鱗と思しきものが生えた両腕。

両のこめかみの辺りから生える、木の幹のような角。

――――閉じられていた両目がゆっくりと開かれる。黄金に輝き、まるで蛇のように縦に長い瞳孔を持った瞳が覗く。

それは、最早妖精ではなく龍人と呼んだ方が自然な姿である。

龍神とチルノの融合は――――第二段階へと進行してしまった。

「――――凍らせてあげる」

龍神が口を開く。それだけでとてつもない重圧が霊夢や幽香達に圧し掛かる。

龍神が開いた掌。そこに、莫大な神気が収束していく。

――龍神の手には、宝玉が握られている。
それは龍神の能力、〝八卦を創造する程度の能力〟の象徴。
――龍玉、如意宝珠……。それには様々な呼び方があり、その中にこんなものがあった。
やがて神気は物質化し、球状の殻を創りあげ、その中に無色の神気が注がれる。
――文珠。それこそが龍神の奇跡の形であり、森羅万象を司る神の力の具現。
それに刻まれた文字は〝凍〟。たとえ対象がどのような状態であっても必ず凍る。
全ては、龍神の意のままだ。
「く……っ」
「霊夢!?」
龍神の狙いは自分である。それを察した霊夢は全速でフラン達の側から離れる。
距離が遠い内に何とか迎撃をしたいところだが……それは叶わない。
龍神は、ただただ早かった。レミリアや文の最高速……それに匹敵するほどの速度で霊夢に肉薄する。
龍神の拳が霊夢に迫る。霊夢は咄嗟に霊力を全開にして防御結界を張るが、それは容易く蹴散らされた。
冷たい瞳が霊夢を射抜く。既に間合いは詰まり、霊夢は次の手を打つことも出来な

い。

龍神の拳に触れれば、そこで霊夢の命は尽きるだろう。それほどまでに、龍神の文珠（チカラ）は強大だ。

しかし――――。

「――――え？」

霊夢の目の前に、金の髪が踊る。自分の代わりに、その少女は龍神の一撃を受け止めた。

凍っていく。少女の半身が、瞬く間に凍り付いていく。

「――――紫っ!?」

「く――――っ、ぅあああぁぁぁ!!?」

紫は霊夢を庇い、文珠の力をその身に受けた。その奇跡の具現に抗えるはずもない。

それは紫も過去に一度しか見たことがない。それほどまでに希少で――――強大すぎる力なのだ。

半身が凍る激痛に紫は苦悶の叫びを上げるが、それでも霊夢の前から動かず、龍神に立ち塞がる。

龍神はそれを意に介さない。強大な力を宿した拳を振りかぶり、躊躇なく紫へと繰り

出した。

「チル、ノ……!!」

紫はチルノの名を呼ぶ。しかし、チルノの意識は既に暗い闇に取り込まれてしまった。

「やめろおおぉぉぉーーーーーっ!!」

結末を幻視した妹紅の叫びが響く。だが、それで龍神が拳を止めるはずもなく。凍りついた半身に拳が突き刺さり、そして――――。

その半身は、砕かれた。

「――――紫いいいいいいっ!!!」

霊夢の叫びが幻想郷に木霊する。

第六十八話

『奇跡の具現』

～了～

ピシリ、ピシリと小さく乾いた音がする。
それは氷から。龍神の背後の氷牢から。
ピクリ、ピクリと指が動く。
――――また、失ってしまうのか？

第六十九話

「紫いいいいいいっ!!!」

悲鳴にも似た霊夢の声が聞こえる。

目まぐるしく回転する霞んだ視界の中、泣きそうな顔の霊夢が必死に手を伸ばしていた。

薄らいだ意識の中、何故そんな顔を、と考える。……自らの身体が視界に入り、「ああ、そうか」と納得できた。

半身が、砕かれた。

龍神に殺されそうになった霊夢を庇い、半身を凍らされ、それを砕かれた。その時のショック故か頭が働かなかったが、自覚すればそれを認識できる。あるいは、認識できなかった方が良かったのかもしれないが。

――――これは……ダメね。

紫は自らの死を悟った。如何な大妖怪と言えど、弱体化状態で何の対策もなしに半身を奪われればその生命（いのち）など保てるはずもない。

既に力を入れるべき身体はなく、その力すらも零れて消えていく。それは生命の消失だ。

せっかく戻った意識もどんどんと薄れていく。脳裏を過ぎるのは自らの生命で存在を維持している式――藍と、その式である橙。自分が死ねば、この二人も存在を保てずに死んでしまうだろう。

次に霊夢。彼女の泣きそうな表情というのは、素直に意外だった。普段はうっとおしそうにぞんざいに扱ってくるくせに、そんな顔をするのかと、どこか可笑しく思ってしまった。

幽々子のこと。自分が死ねば彼女と同じような存在になるのだろうか。それを喜ぶのか、それとも悲しんでくれるのか。以前に冗談で尋ねた時には笑って「あなたも亡霊になりなさ～い」などと言っていたが……。

「……――、……」

意識は薄れていくくせに、思考だけは高速で回転していく。なるほど、こうしたものを人は走馬灯と呼ぶのかもしれない。

視界の奥、霊夢よりも龍神よりも遠くにいるその男の子。全身を凍らされ、龍神に囚われている男の子。自分では助けることが出来ない男の子。

紫が死ねば、彼は元の世界に帰ることが出来なくなってしまう。

――横島君……!!

それは駄目だ、と思うがしかし。もはや紫には何もできない。このまま死すのみだ。もうほとんど意識がない。思考も保てず、千々に千切れる。冷たい海に沈んだように、意識も思考も身体も凍える。

そして、意識が完全に消えるその瞬間――紫は、翡翠の輝きに包まれた。

第六十九話

『赤と翡翠』

「チルノちゃん、何を――!?」

「チルノ!?」

龍神(チルノ)の凶行を目の当たりにした大妖精やリグル達が龍神へと迫る。

龍神は自らに向かってくる者たちを何の感情も読み取れない瞳で一瞥し、やがて怒り

に顔を歪ませる。

「……邪魔をするなあああぁぁぁーーーーーー!!」

不味い、と思考するよりも早く幽香は能力を使い、植物の蔦で大妖精達を引き寄せる。それでは足りないと日傘から砲撃を行い、龍神を牽制する。

龍神が放った圧倒的な冷気。それから何とか大妖精達を守ることには成功したが、その代わりに自らの砲撃が凍らされ、散らされるという冗談のような光景を見せつけられた。

「……マイナスK、かしら」

冷汗が流れて落ちる。龍神から放たれたそれは、絶対零度を下回る低温。もはやチルノの意識はなく、完全に龍神に呑み込まれてしまったのだろう。

「貴方達は下がっていなさい」

「幽香さん……」

先の攻撃に当てられたのか、大妖精達の身体は震えが止まらないようだ。友人の姿をした者からの本気の殺意をぶつけられたということも関係があるだろう。

「チルノ……」

幽香は意識を切り替える。こうなってはもうどうしようもない。殺してでも止める。そうしなければ、幻想郷は終わってしまうだろう。それを、チルノにさせるわけにはい

かない。
「私も行くよ」
「フランちゃん……ええ、分かったわ」
戦える力を持つのは僅か二人。友人達を代表し、チルノと横島を取り戻さんと力を振るう。

「チルノの奴、まさか……!?」
先ほどまでとはまるで違う、龍神の攻撃。紫が吹き飛ばされたのを見て妹紅は咄嗟に飛び出そうとするが、ほんの一瞬胸に強烈な痛みが走り、膝を着いた。
「ぐっ、今のは……？」
「ねえ、妹紅？」
「ん、ああ、何だ諏訪――――」
妹紅の視線の先、そこにあったのは紛れもない〝神〟の姿。
あらん限りの怒りを湛えた、畏るべき神である。
「妹紅の残りの霊力、全部私にくれないかな」
「……分かった。その代わり、横島とチルノを頼む」

「ん」

妹紅は諏訪子の肩に手を置き、自らの霊力を限界まで流し込む。

龍神の属性は水。対して妹紅が最も得意とする属性は火である。相性が悪いことは理解していた。だが、愛する男を自らの手で取り戻すのだと必死に意地を張っていた。

……それもここまで。

完全に覚醒しつつある龍神に、自分では対応することが出来ないだろう。

諏訪子の有無を言わさぬ言葉に、妹紅は自らの役割を理解した。

悔しさが募る。悲しみが溢れる。だからこそ、託すのだ。自らの想いを霊力に乗せて、妹紅は諏訪子に全てを託す。

水が火を克すならば、火は土を生む。――――五行相生・火生土。

大いなる神に、畏るべき神が挑む。

「紫っ!?」

翡翠の光に包まれた紫を、霊夢は何とか抱え、地面へと降り立つ。その際にバランスを崩して紫共々倒れこんでしまったが、それでも自分を下にすることで紫に更なる怪我を負わせることだけは阻止できた。

「紫!!　ゆか――――っ!!?」

翡翠の光が消え、紫の全身が露になる。思わず、霊夢は絶句した。それはあり得ない光景であったからだ。

砕かれたはずの紫の半身。それは、確かにそこに存在していた。傷がない……どころか、傷跡すらも残っていない。まるで幻でも見ていたのではないかと思ってしまうような状態ではあるが、それは確かに現実のことであったのだと、大半が消失した衣服が証明している。

「これは、どういう――――っ」

考える暇など霊夢にはなかった。

「紫、ごめん!!」

霊夢は紫を地面に寝かせ、大急ぎでその場から離れた。背後から迫る強烈な圧。幽香やフランを無視し、龍神が迫って来ているのだ。

龍神の様子が変わったことに霊夢は気付いていない。しかし、自分に執着しているのは理解できた。

何故自分を狙うのか。それはもうどうでもいい。

――――霊夢の周囲に七つの陰陽玉が現れ、光を放つ。

自分を庇うという状況ではあるが、紫はその半身を凍らされ、ましてやそれを砕かれ

た。

凍らせるだけでよかったはずだ。砕かずともよかったはずだ。

一体どういった理由かは皆目見当もつかないが、それでも奇跡的に紫は助かったらしい。

しかし、それは本来あり得ないことである。例え紫でもあのような状態になってしまえば確実に死ぬ。

つまり、龍神（アレ）はそれを承知で紫を砕いたのだ。

――ならば遠慮も情けも容赦も無用。ここで確実に仕留める。

龍神から放たれる弾幕、その全てが霊夢へと殺到するが――霊夢はそれらからも浮かび上がり、すり抜ける。

それは物理的なものだけではなく、ありとあらゆるものから浮かび上がり、霊夢の意識も、人間から上の段階へと浮かび上がった。

「――――『夢想天生』――――」

自らの能力によって攻撃を回避し、自動展開弾幕によって相手を追い詰める。瞳を閉じ、無意識に相手を打ち倒す霊夢究極の奥義――それが『夢想天生』である。

如何な龍神と言えど、攻撃が当たらないのであれば霊夢を倒すことなど出来はしない。……かと思われた。

「……」

迫りくる弾幕に、霊夢は手をかざして陰陽玉を割り込ませる。陰陽玉も『夢想天生』の一部であり、攻撃が当たることはない。しかし、龍神の弾幕は確かに陰陽玉に直撃し、僅かではあるが傷を付ける。

どうということはない。ただ、龍神は自らの能力を以って攻撃が『命』『中』するようにしただけだ。

「――……」

霊夢は円を描くように腕を動かし、やがて龍神に向ける。気付けば、龍神の周囲には夥しい程の霊符が檻のような形を作っていた。

「一気に行こうか」

「どうにかして止めないとね」

「チルノ……ただお兄様……！」

いつの間にか霊夢の隣には諏訪子達三人の姿があった。龍神から大切な者を取り戻す。そのために集った少女達。

各々から発せられる力の波動は先程までと比べるべくもなく、龍神も忌々しそうに顔

を歪めながらも不用意に突っ込んでは来ない。
一触即発の空気が周囲の空間を軋ませる。
――――同じ頃、上空の龍神達を気にしながらもてゐと小悪魔は自分達に出来ることを行っていた。
彼女達の戦闘力は低い。霊夢達のように正面切って戦うことはできないが、それでも出来ることはある。
「パチュリー様……!!　咲夜さん、美鈴さん……!!」
「ほら、あんた達！　ぼーっとしてないでこっち手伝って！」
「あ……っ、は、はい！」
それは、怪我人達の保護だ。
心配そうに霊夢達を見上げていた大妖精達も動員し、パチュリー達や早苗達など、龍神に倒された者達を比較的安全な所まで運んでいく。
彼女達のほとんどは妖怪であるので、人を一人二人抱えて行動するのは問題ない。いくら弱小と呼ばれていても、基本的な肉体のスペックは人間よりも妖怪の方が上なのだ。
さらにそこに妹紅が合流し、何とか一人ずつ抱えていけるようになった。
ひとまず目指すは大きな力が集まっている場所。永琳達のいるところだ。

妹紅に抱えられた紫の懐から、ガラス玉の様な物が二つ零れ落ちた。弱々しく翡翠に輝くその珠に誰も気付くことなく、皆は急ぎ足でその場を後にする。
やがて輝きを失った珠はその役目を終え、静かに世界に満ちる霊気へと還った。
その正体は、横島が紫に預けていた二つの文珠。刻まれた文字は『復』『活』の二文字。
未だ凍り付いたままの横島が、それでもその力を振り絞ったのだ。

上空の龍神との戦い。地上での怪我人の保護という名の戦い。赤い瞳は、その全てを見ていた。
傷を負い、身体のいたるところが凍らされながらも必死に龍神へと食らい付き、奪われた者達を解放しようと戦っている者達。
戦力外となった後も、自分に出来ることを行う者達。
そして何より――――氷牢に囚われながらも、紫を救った横島のことを。
狂気を操るのではない、真の能力の力で以ってそれを目の当たりにした。
鈴仙の真の能力、それこそが『波長を操る程度の能力』だ。音や光、電磁波、物質や精神の波動というあらゆる波長、位相、振幅、方向を操る。
狂気を操るのはこの能力のほんの一端に過ぎない。

この能力を解放した眼で鈴仙はそれを見た。紫の身体が砕かれた刹那、凍り付いたはずの横島から鋭い意志の波長が矢の如き速度で紫へと向かい、何らかの力を発動させて助けた場面を。

敵わない。本心からそう思った。

横島と鈴仙は似ている。二人は臆病であるし、調子に乗りやすいし、上司に苦労しているし、本来の自分とは違った仮面（ペルソナ）を持っている。

しかし、決定的な違いがあるとすれば――――最初の一歩を踏み出せるかどうか、と言ったところか。

それは自分が追い詰められた時に勇気を持って前に進めるか否かだ。と言っても二人にそれほどの差は存在しない。要するに開き直れるかどうかの違いでしかない。

そして、鈴仙は開き直るという行為が出来ない性質だ。本来の彼女は悲観的で自虐的で……つまりはネガティブな性格だ。

ちらりと、強力すぎる結界によって時間軸すらずれてしまい動きがなくなった永琳を見やる。永琳は鈴仙にこう言った。

「龍神に対抗出来るのはあなたしかいない」

――――そんなわけがない!!

鈴仙は声を大にしてそう叫びたかった。だってそうだ。神子も、白蓮も、レミリアも、

諏訪子も、幽香も、霊夢も、紫も、妹紅も、輝夜も――そして永琳すらも龍神には敵わなかったのだ。

幻想郷が誇る最強格達。そんな彼女達が太刀打ちできない相手に自分が何を出来るというのか。

「相変わらずネガティブなことで悩んでそうね、鈴仙」

「姫様!?　姫様、一体どこに……姫様、何て格好してるんですか」

ぐるぐると思考の迷路に入り込んでいた鈴仙に正気を取り戻させたのは輝夜の言葉であった。当の輝夜は鈴仙のすぐ足元でうつ伏せの大の字で転がっている。少し大げさなまでに広げられた脚は、いやらしさというよりも滑稽さを高めている。

「……いや、こっちに来たのはいいけど走ってる途中で身体が動かなくなって、それで転んじゃって……」

どうやら鈴仙が考え事をしていた時には既に倒れこんでいたらしい。地面に色々と擦れた跡があるのを鑑みるに、相当な勢いでこけたようであるが、鈴仙はそれに気付かなかったほどに追い詰められていたようだ。

「色々と悪く考えすぎるのが鈴仙の悪い癖……もっと自信を持ちなさい鈴仙。あなたは強いのよ?」

その言葉は普段なら喜ばしいものであったが、今だけは聞きたくない言葉であった。

「……どこがですか。今だって結界に阻まれて行動できませんし。……普段だって私は私じゃなく、別の私に頼ってるんです。そんな私が強いわけがないじゃないですか」

「あなたの仮面のことは私も知ってる。けど、それだってあなたの力でしょう？　別の人格とかじゃなくて、あなたは一人。鈴仙は鈴仙でしかないんだから」

　忘れられがちではあるが、元々の二人の関係は月の姫とただの兵士である。月の兎……玉兎にとって輝夜の言葉は玉音に等しい。ましてやそれがただ一人の玉兎に掛けられるなど、本来ならばあり得ない話だ。もし今も月にいる玉兎達に同じことをすれば、たちまちの内に鼻息荒く龍神に突撃していっただろう。……それはそれで問題だが。

「……無理ですよ。師匠にも私しか龍神に対抗出来ないって言われましたけど、そんなわけがないんです。身体が震えて、竦んで、今も一歩だって踏み出せない……！」

　しかし、それも今の鈴仙には届かなかった。確かに罪人と言えど月の姫たる輝夜は玉兎達にとって雲の上の存在。身命を賭して忠を尽くす相手だ。しかし、鈴仙は一度それから逃げ出している。

　地上と戦争になると噂で聞き、恐ろしくなった鈴仙は月から逃げた。輝夜と同じ月の姫にして、当時の鈴仙の飼い主であった綿月姉妹の期待を裏切ったのだ。

　鈴仙は未だ自責の念に囚われている。そしてそれから目を逸らし、ただ一人地上で平

和な日々を過ごしてきた。本当の自分を、仮面で覆い隠して。

「鈴仙……」

輝夜は名前を呼ぶしか出来ない。自分の言葉では鈴仙の心を動かすことが出来ないと痛感したからだ。鈴仙を動かすには月の民では駄目だ。もっと、鈴仙の心に切り込んでいけるような、そんな相手でないと――――。

「……ん？」

思い悩む輝夜の耳に、何者かの足音が聞こえる。足音の強さ、間隔からしてかなりの速度で走っているらしい。龍神の結界に縛られていないかのようなその速度に輝夜は一体誰がこの場へ近付いて来ているのか疑問に思ったが、それはすぐに氷解した。

「鈴仙のおおぉ……スカポンターーーーーーン!!」

「きゃあああぁぁーーーーーー!?」

「ふぎゃあ!?」

「みぎゃあ!?」

猛スピードで走り寄ってきたてゐが、そのままの勢いで鈴仙にドロップキックを叩きこんだのだ！

何の抵抗も出来ずに吹っ飛ぶ鈴仙、荒い息を吐いて着地するてゐ、てゐに背負われていたのにドロップキックなんかかまされたせいで宙に放り上げられ、挙句頭から輝夜の

背中に墜落した布都。遠くの方から「えええーーーーーー!?」と何人かの驚愕の叫びが響いた。
「いたたた……い、いきなり何を……!!」
「うっさい!!　このヘタレ兎!!　みんな必死になって頑張ってんのになーにやってんのさ!!」
「うっ……」
てゐの糾弾に鈴仙は言葉に詰まる。その通りだ。申し開きのしようもない。自分よりも弱く、小さな者達ですら必死にあの恐ろしい龍神と戦っているというのに、自分はこうしてただ震えているだけなのだから。
「お師匠様にあんたしか龍神と対抗出来ないって言われてんでしょ!?　少しは根性見せなさいよ!!」
「……!!　てゐ、何でそれを……」
「てゐちゃんイヤーは地獄耳!!　このふさふさな耳を嘗めるんじゃないよ!!」
自慢の耳をぴこぴこと揺らしつつ、てゐは倒れた鈴仙を抱き起こして地べたに座らせる。じっと鈴仙を見つめるてゐに鈴仙は視線を合わせることが出来ず、俯いてしまう。
こうなることは分かっていた。しかし、それでもてゐは鈴仙に動いてもらうしかない。それしか希望がない。だから、てゐは本当ならば使いたくなかった手段に出るしか

ない。

「お願いだ……お願いだよ鈴仙。鈴仙しか出来ないことなんだよ……！」

「ちょっ、てゐ……!?」

てゐは鈴仙に頭を下げる。地面に膝を着き、手を着き、額を擦り付けて懇願する。土下座の体勢だ。

「私じゃダメなんだ。私じゃ龍神相手に何も出来ずに凍らされて終わっちゃう。私の能力だって執事さんに加護を与えている存在の規模を考えたら何の役にも立ってない！　私じゃあ執事さんを助けることが出来ないんだよぉ……！」

てゐに出来ること。それは希望に縋るだけだった。自分の力は好きな男を助けるのに何一つ役に立たない。ただ永い時を生きただけの、ひ弱な兎でしかない。

けれど、鈴仙は違う。鈴仙は地上の兎ではなく月の兎。そもそも生物としての性能（スペック）も段違いであり、戦闘に関する知識だって鈴仙の方がずっと上だろう。

「お願いだよ……お願いします……!!　執事さんを、助けてください……!!」

「……やめて……やめてよ……」

鈴仙からは見えないが、てゐの双眸には止めどなく涙が溢れていた。あまりにも、あまりにも自分が情けなくて。

こうすることで鈴仙が精神的に追いつめられると分かっていて、それでもてゐはこう

するしかなかった。横島を助けるためには、鈴仙の心の弱さにつけ込むしかなかったのだ。

てゐの必死の懇願に鈴仙はいやいやをするように首を振る。歯の根が合わず、カチカチと音が立ち、鈴仙は自分が震えていることに気が付いた。

「わた、しは……わたしは……!!」

あの時のことがフラッシュバックする。兵士として、戦力として期待され、戦争の噂を聞きつけ地上に逃げて、夜ごと月を見上げては後悔と罪悪感と自責の念に圧し潰されそうになっていたあの時。

自分を見つけてくれた恩人。自分を安住の地に案内してくれた恩人。文句を言いつつもずっと世話を焼いてくれていた恩人。その恩人であるてゐが、土下座をしてまで自分に懇願しているのだ。

応えたいという思いがある。助けたいという思いがある。それでもこの身は動いてはくれない。

ぐるぐると、今まで以上に思考が高速で巡る。その全てが自虐に染まり、自分から心を傷付けていく。

「……っっ!!」

ついに鈴仙は頭を抱え、地面に這い蹲ってしまう。心臓は自らの鼓動の強さで破裂し

てしまいそうになるほどに早鐘を打つ。

走馬灯のように過去の映像が脳裏を過ぎる。皆自分に期待してくれた。幻想郷の皆はこんな自分を好いてくれた。そのことを認識した瞬間――――とある言葉を思い出した。

「――――……」

――――俺は、皆の見る目が確かだったって事を、証明したかったんだ。こんな俺を傍に置いてくれる、こんな俺を思ってくれる……!!　こんな俺を、好きだって言ってくれる、皆の……!!

それは横島が『男』との戦いに赴く際に発した言葉だ。自らの身を文字通り食らった化け物、それと戦う決意の籠った力ある言葉だ。

今改めて思い知る。横島は、あの時にこれほどの重圧を背負っていたのかと。

――――女の子の前ではさ、カッコいいところを見せたいじゃんか。

ふと、横島の言葉の続きが頭に浮かんだ。そんなことで命を懸ける。いつ聞いても頭

がおかしいとしか思わない言葉だ。しかし、鈴仙の頭の中で色んな人物の顔が浮かんでは消えていく。

そして一人、自らの名前を呼ばせていない人物の顔が浮かんだ時に、何かが、胸にすとんと落ちた。

――――イナバちゃん。

彼は朗らかに笑い、自分を呼ぶ。あの顔が見れなくなる。あの声を聴けなくなる。それは――――絶対に、嫌だった。

「……う、うう……っ！　う、うううぅぅぅ……っ!!」

「鈴仙……？」

苦し気に唸る鈴仙に、てゐは思わず顔を上げた涙に濡れた顔はぐちゃぐちゃになっていたが、今更気にすることではない。問題は鈴仙の方だ。

地に這い蹲っている身体ががくがくと大きく震え、荒々しい息遣いと共に唸りも大きくなる。

「お、おい鈴仙どうした!?」

「鈴仙さん!?」

ようやくてゐに追いついた妹紅達も鈴仙の異常に慌てる。てゐとの会話は大凡の部分は聞こえていたが、それでどうしてこうなっているのかは理解が追い付かなかった。

てゐは鈴仙の様子に心臓を潰されたかのような痛みを感じる。まさか……そう不安が過ぎった瞬間、鈴仙はがばりと身体を起こし――――。

「う……あああああああぁぁぁっっっ!!」

裂帛の気合と共に、両手で自分の顔面を張った。

空気を引き裂くような音が鳴り響き、後に残ったのは鈴仙の先程とはまた少し違った荒い息遣い。相当痛かったのか、ちょっと涙目でぐすぐすと鼻を鳴らしている。

いきなりの鈴仙の奇行に皆は言葉を忘れたかのように呆然と様子を見守る。

「つよ、く……」

「え……」

鈴仙はゆっくりと立ち上がる。

そうだ。自分は立ち上がれる。借り物に等しいものであっても、鈴仙は横島と同じ覚悟を得たのだ。そして、それを成すためには今のままでは不可能である。

「前へ……踏み出す……」

恐る恐る、ゆっくりと。だが、鈴仙は確かにその一歩を踏み出した。

鈴仙はてゐの想いに応えたいと思った。横島のことが頭に思い浮かんだ時、失いたく

ないと思った。形はどうあれ、一緒にいたいと思った。
　そのためには強くなくては駄目だ。強くあらねば駄目なのだ。だからこそ、まずはその一歩を。
「私は……ここで前へ進んで、強くなる……!!」
　刹那、鈴仙の身体から溢れるのは強力な霊波。それは龍神の結界の波長を完全に乱し、鈴仙は結界を置き去りに前へと歩き出した。
「鈴、仙……」
　土下座を止め、女の子座りをしたてゐが未だ溢れる涙を拭いもせずに、不安げな表情で見つめてくる。悲壮な表情だというのにどこか呆然としたように大口を開けているのが少しおかしかった。
「……待ってて、てゐ」
　鈴仙は恐怖で頬が引きつりつつも、それでも確かに宣言する。そこには、確かな感謝が込められていた。
「約束する……横島さんは、絶対に私が助けるから」
「鈴仙……!!」
　てゐの返事も待たず、鈴仙は跳ねるように地を駆け、あっという間に皆の視界から消えた。残ったのは話についていけなかった妹紅達と、戦いに赴いた鈴仙を思って胸を押

さえるてゐ。

てゐは今、己のやったことに必死に吐き気を堪えていた。発破を掛けたと言えば聞こえはいいが、てゐの行ったことは簡単に言えば友人を言い包めて死地に追いやっただけである。

確かに鈴仙しか龍神に対抗出来ない。確かにてゐの力では何の役にも立たない。てゐの行動は確かに最善である。しかし、それが正しいとはどうしても思えなかった。

罪悪感に苛まれるてゐの身体を、小悪魔が優しく抱きしめる。

「大丈夫ですよ、てゐさん」

「……」

そっと語り掛けるも言葉は返ってこない。それでも静かに、小悪魔は言葉を続ける。

「鈴仙さんはとっても強い人です。私達は鈴仙さんを信じて待ちましょう」

「……うん」

小悪魔の言葉にてゐは頷いた。心からの納得など出来はしない。それでも小悪魔の言葉にてゐは感謝を示す。

信じて待つ。今の自分が出来ること、今の自分にしか出来ないこと。てゐは軋む心を抱え、じっと鈴仙が走り去った方向を見つめる。

鈴仙は走りながら懐から三つの小瓶を取り出し服用する。それは永琳印の強壮薬である『国士無双の薬』。一本飲むたびに攻撃力と防御力が上がっていくという非常に強力な薬なのだが、使いすぎるとアレなことになる代物でもある。鈴仙が耐えられるのは三本まで。龍神を相手にするのに出し惜しみなど以っての外だ。

「……ふふっ」

不意に笑いが込み上げてくる。先程まであれほど戦うことを恐れていたというのに、この落ち着きようは何なのだろうか。

鈴仙は元々情緒不安定で感情の波が激しく、多面的な性格の持ち主であった。そんな彼女の持つ能力は波長の操作だ。いつの間にか自分の狂気の波長を増幅していた可能性も否定出来ない。

彼女が持つ仮面は多種多様。普段時でも戦闘時でも、あらゆる使い分けが可能である。しかし今の鈴仙はそれに頼ろうとは思わなかった。

自分でも不思議なほどの自然体。恐怖はある。しかし、それでも身体は動く。自分を動かすためにあのような行動を取らせてしまったてゐの苦しみを考えれば、どれほどのものだというのか。

そして、てゐの言葉で一つの答えに辿り着いたからだろう。自分は、龍神と戦うので

はない。

「……見えたっ！」

宙で激しくぶつかり合う龍神と霊夢達。激しい弾幕が森の一角を吹き飛ばし、極光が雨や氷を蒸発させながら空に上っていく。

恐ろしい光景だ。しかしそれでも前へ。もはや何も考えない。臆病な自分は目の前の光景に恐怖する。足が竦む。身が震える。ならばいっそ――――何も考えない。

ただ、心の中に決意と覚悟を抱えるのみだ。

「私は――――必ず!!　証明してみせる!!」

赤眼の兎は地を蹴り、宙に跳ねた。――――さあ、ここからは兎の一人舞台だ。

「っ!!」

霊夢達四人の弾幕が途絶えた刹那、龍神の眼前に鈴仙が躍り出る。

「れーせん!?」

「あの子、いつの間に!?」

龍神との戦いに集中していた四人は鈴仙の接近に気付いていなかったようであり、彼女の出現に虚を突かれたようだった。それは龍神も同じであるが、彼女は咄嗟に右腕を振るい、鈴仙に突き出す。

触れれば凍結必至の拳だ。しかし、鈴仙は知らぬとばかりに左手で拳を弾き、そのま

ま同じ左手で龍神の頬を打つ。
「……っ!?」
　龍神の頭は混乱に支配される。負けじと突き出した左手は鈴仙に絡め取られ、そのまま関節を極めると同時に投げられた。体勢を立て直した時には膝で鳩尾を打ち抜かれる、
　それはいい。相手が格闘術の達人ならばこういった光景も見られるだろう。しかし、龍神が理不尽に感じたのはそれではない。
「……何で、何で凍らないっ!?」
　鈴仙の能力はおよそあらゆる物に作用する。当然、熱にもだ。鈴仙は龍神の放つ冷気の波長をずらし、干渉を防いでいるのだ。
「波符『赤眼催眠（マインドシェイカー）』!!」
　鈴仙の眼から放たれる波長が龍神の心身を乱す。今龍神の眼には複数人の鈴仙の姿が見えているはずだ。
　闇雲に放たれる弾幕、冷気、拳に蹴り。今の鈴仙にそれは通じない。能力を最大限に活用することによって、確実に龍神を削っていく。
「すごい、れーせんってこんなに強かったんだ……」
　初めて見る鈴仙の本気の戦いぶりにフランは開いた口が塞がらない。自分達の苦労

が何だったのかと言いたくなるような翻弄っぷりだ。

「あの子、ここまで正面切って戦うような子だったかしら……？」

博麗神社の宴会などで鈴仙のことを多少は知っている幽香が疑問を浮かべる。確かに弾幕ごっこなどでは調子に乗っているところを見たことはあったが、明確に自分より強い相手にはさっさと逃げ出していたことから臆病な性格なのだと考えていたのだ。

しかし今の鈴仙に臆病な所は見られない。何か、強烈に心を揺さぶられる出来事でもあったのだろうか。

「……何にせよ、少しは休憩出来そうね」

そう呟くのは霊夢だ。口では余裕そうなところを見せているが、彼女はもう限界を迎えつつあった。

夢想天生の防御を抜けてくる龍神の強烈な攻撃。龍神の文珠（もんじゅ）が使用されているせいか、それとも何か別の理由でもあるのか、霊夢への攻撃だけは他の者とは別次元の領域にあった。

今まで皆が龍神と戦えていたのは攻撃のほとんどが霊夢に向いていたからであり、その攻撃が他の者に向かえば、たちまち戦線は瓦解していただろう。

そして、霊夢は戦いのさなかだったからこそ動けていたのだ。夢想天生による無意識戦闘は自らの身体の限界を考慮しない。相手が倒れるまで行使される。

しかし、それが何故か解除された。そして、意識していなかった今までの全ての負担が一気に襲い掛かって来ているのだ。既に霊夢に戦う力は残っていない。

「……軽く思考が誘導されてる？　これも鈴仙の能力かな」

諏訪子は頭を軽く押さえ、鈴仙の援護をしようと思わない自分への違和感に気付く。とにかく、少しでも休憩を取るように……そんな考えが強くなっていく。

絶えず龍神と近距離で戦う鈴仙の姿に諏訪子は不安を覚えるが、諏訪子は鈴仙のしたいようにさせることにした。何の狙いがあるのかは分からないが、きっとこちらが不利になるようなことはないだろう。そう信じることにしたのだ。

「――――はっ、はっ、はっ……！」

龍神との戦闘が始まって数分。鈴仙の息が早くも乱れてくる。

強大な力を揮う龍神の懐に飛び込み、全力で能力を行使しながらの近接戦闘。極度の緊張状態の連続に心も身体も限界が近付いていく。

――――まだ……まだ……!!

まだ自分の能力が届いていない。もっと強く。もっと強く！　ズキズキと痛む頭と眼を無視し、鈴仙は必死に動く。

龍神の爪を避け、飛来した氷柱を避け、鈴仙は懐から四本目の『国士無双の薬』を取り出す。それを察知した龍神は更に苛烈に鈴仙を攻め立てるが、それでもなおその攻撃

は当たらない。

鈴仙は『国士無双の薬』を呷る。瞬間、心臓が動く速度が尋常ではなく上昇しだした。自らの限界を超えた薬の服用、そして限界以上の能力行使。

鈴仙の視界が赤く滲んでいく。両の眼から零れるのは涙ではなく赤い血だ。

動けなくなるのも近い。ならば、後は全力の一撃を以って事に当たるのみ。

「あああああっ!!」

都合良く龍神が両手の爪を振るう。鈴仙は龍神の腕の付け根を押さえて攻撃を防ぐと、赤く光る眼を一度閉じ、力を溜める。

「私の全部をあげる。だから――――帰って来なさい!! 『幻朧月睨(ルナティックレッドアイズ)』!!」

「……うあああぁぁぁぁっ!!?」

鈴仙が出せる最大出力。爆発的な閃光が迸り、暗い夜を赤く染め上げる。

龍神を中心に全方位へ余波が広がり、様々な物が波長を乱して存在が移ろっていく。幻のように増えたり消えたりする木々。突然浮かび上がったと思ったら真横に吹き飛ぶ石。風が吹き荒れているのに、まるで無風であるかのように静かな空気。

余波だけでこれだけの影響だ。中心部にいる龍神にどれだけの負荷が掛かっていることか。

「ぐうぅっ、うううぅぅぅ……!!」

だが、龍神は苦し気な声をあげるだけで耐えて見せている。それどころか押さえられている腕を逆に押し返していく。

「残念……だったね……!!　今の私とチルノは半ば同期している……!!　いくらその力でもチルノを起こすのは難しいよ……!!」

「……っ!!」

龍神とチルノ。この二人の波長はとある切っ掛けによって半ば以上にシンクロしてしまっている。そして鈴仙の能力の一端を理解した龍神は文珠を使って自身の波長の乱れを無理やり整えてしまった。

「くうぅっ、ぅぅぅぅうあああああーーーーーーー!!!」

最後の最後、全ての力を振り絞った閃光。それはまさに爆発であり、龍神と鈴仙の二人を容易く呑み込んだ。

光が消え、夜の闇が世界を再び支配する。爆光に目を焼かれた霊夢達が目撃したのは、完全に脱力しきった状態で龍神に捕まってしまっている鈴仙の姿だった。

「れーせんっ!?」

「……う、く……っ」

胸倉を掴まれ、そこを支点に吊り上げられている鈴仙は苦し気に息を漏らす。

鈴仙の両眼からは血が溢れ出し、更には夥しい量の鼻血も流れ出ている。限界以上の

能力行使と服薬の代償だ。今、鈴仙には絶え間なく激しい頭痛が襲い掛かっており、更にはその瞳に一片の光も浮かんでいない。鈴仙の眼は今や何も映さない。

「はー……はー……!!　惜しかったね……でも、私(あたい)の勝ちだよ……!!」

荒い息を吐きながらも、龍神は己の勝利を確信する。チルノと同期したことで能力を使用できるようになったのだが、その弊害か勝ち負けに拘る部分も出てしまったらしい。

龍神からすればそれは本来邪魔な機能であるはずなのだが、理由と目的はともかく誰かと何かを競い合い、それに勝利するというのは彼女に新鮮な喜びを与えてくれた。

胸に宿る喜び、満足感、優越感の味ときたらどうだ！　今までこれほどまでに甘美な物を得たことは一度もなかっただろう。それほどまでに勝利の美酒というものは蠱惑的であった。しかし――――。

「……めん、ね」

「ん……？」

余韻に浸っていた龍神の耳に鈴仙の呟きが聞こえた。それは誰かに対する謝罪のようである。

このような状態では仕方がないだろう。、自分に対する命乞いか、それとも誰かに宛てた最期の言葉か。ちゃんと聞いてやらねばならない。

龍神は鈴仙の言葉を待った。そして、彼女の耳に飛び込んできた言葉は――――。

「ごめんね、チルノ――――あなたは、最初から私の眼中になかったの」

――――耳を疑う言葉だった。

「人質を取った犯人が、一番嫌がること……それは、人質が人質でなくなること……」

ビシリ、と――――。何かがひび割れる大きく乾いた音が龍神の背後で響いた。

「私が今まで能力で干渉していたのは、あなたじゃない。あなたの、背後（うしろ）」

音は断続的に響き、やがてひときわ大きな音が鳴ると、龍神の肩に誰かの大きな手が置かれた。

それは、龍神が同期しているチルノが求めてやまなかった――――大きくて優しい、お兄さんの手だ。

龍神は、ゆっくりと背後を振り返る。

「てゐ――――約束、守ったよ」

肩に置かれた手に万力の様に力が込められた瞬間――――龍神が守っていた氷牢が爆ぜ、囚われていた男が復活した。

――――勝利したのは龍神ではない。

そう、鈴仙にとって今回の戦いとは龍神を倒すことが目的ではなかった。横島を助けることこそが目的だったのだ。勝利したのは鈴仙の方である。

「――――うあああああああぁぁぁぁっっっ!!!」

裂帛の気合で氷牢を砕き、横島が神魔に匹敵する超常の霊力を放出する。超至近距離からその煽りを受けた龍神は手を緩めてしまい、鈴仙を手放してしまう。

瞬間、刹那の速度で横島の腕が翡翠の鎧に覆われ、人外染みた膂力で以って龍神を投げ飛ばす。

地に向かって吹き飛ばされた龍神は驚愕の表情を浮かべたまま何の反応も見せず、そのまま森に突っ込み、木々をなぎ倒しながら数十メートルもの距離を転がっていく。

「……イナバちゃん」

意識が朦朧としてきた鈴仙の耳に、横島の弱々しい声が届く。泣きそうなその声は本当に近くから聞こえてきており、どうやら自分は横島に抱きかかえられているのだろうと察する。

ほんの数時間ほど聞いていなかっただけなのに、それは随分と久しぶりに聞いたような声だった。第一声がそんな情けない声だというのは横島らしいと言えばいいのか、不思議と鈴仙の頬は緩み、笑みが浮かんでしまう。

今、横島は一体どのような表情を浮かべているのだろうか。

会いたいと思ったその少年。一緒にいたいと感じたその少年。

横島に抱くその気持ちが何なのか鈴仙は分からない。しかし、横島の顔を見ることが出来ない今の状態を、鈴仙は酷く残念に思うのだった。

第六十九話

『赤と翡翠』

～了～

第七十話

深い深い水底の様に、一切の光も差し込まない世界。それは深淵の闇。横島の意識は、その闇の中を漂っていた。

――――お前なら大丈夫よ、ヨコシマ。

声が聞こえる。

それは横島がかつて愛した、今もなお愛し続けている女性の声。

死にゆく横島の為に、自らの存在を保てなくなるほどに霊基構造を分け与えた……壮絶なまでの愛に生きた彼女の声だ。

――――お前なら、あの子達を救うことが出来るわ。

そんな彼女が、今も己に励ましの声を掛けてくれることに、横島は喜びを覚える。

「ああ、大丈夫。やってやる。今の俺は無敵だぜ!!」

高揚した気分の中、気付けばそんなことを口走っていた。くすくすと、彼女の笑い声が聞こえてくる。

少し気恥しくなった横島であるが、その万能感はあながち間違いでもない。何故なら

彼の手の中には、不可能を可能にするための力が握られているのだ。
――――いってらっしゃい、ヨコシマ。
「――――ああ、いってくる。……ルシオラ」
闇の世界に差す、一筋の光。
横島は迷いなくその光を目指し、闇の中を進んでいく。光に近づくほど、意識は覚醒していく。
さあ、その眼を開け。前を見据えろ。その瞳の先に、救うべき者達が待っている――――。

第七十話
『子供の我が儘』

「イナバちゃん……」

横島は腕の中の鈴仙に声を掛ける。鈴仙は両目と鼻から夥しい程の血を流しており、今も耐え難い苦痛に身を捩じらせている。しかし、それでも鈴仙は横島の声が聞こえたことによって微笑んだのだ。

何も映していない眼を丸くし、そして心から安堵したように目を閉じて。

横島は鈴仙を抱く腕に力を込める。痛みを与えずに、安らぎを与えるように。

「ただお兄様!!」

「横島君!!」

横島の復活に、瞳を涙で濡らしたフランと諏訪子が真っ先に空を駆け寄って来るが、横島はそれに付き合うことはなかった。

「ごめん二人とも!!　今はまず一時撤退だ!!」

復活を喜び合う前に、今は鈴仙をどうにかしなければならない。度重なる薬の服用に能力の使用過多。もしかすれば、脳に損傷がないとも限らない。現に鈴仙は既に気を失っていた。

故に横島は急いで空を掛けるのだ。目指す場所は多くの霊気が集まる場所。怪我人が集まっているところだ。

フラン達は横島の様子から鈴仙の容体がそれほど深刻なものであると察し、何も言わずに後をついていく。彼女の怪我は自分達が不甲斐ないせいで負ったようなもの。幾

許かの責任感が、彼女達の胸を突き刺している。
「……悪いわね、幽香。運んでもらっちゃって」
「そんなこと一々気にしないの。あなたはかなり疲弊してるんだから」
フラン達の更に後方、霊夢は幽香に抱きかかえられた状態にあった。夢想天生の過剰使用による反動で、今の霊夢はただ宙に浮くことすらままならないほどにまで体力を消耗してしまったのだ。
霊夢は現状を歯がゆく思う。霊夢が現れた途端、龍神はその力を更に増大させ、皆に防戦を強いてしまった。特訓で鍛えた戦闘力も役に立ったとは言えず、結局はこうして足手纏いと化している。
博麗の巫女たる己の敗北は、巨大な意味を持っている。以前の『男』といい今回の龍神といい、相手が悪かったと言えばそれまでだが、霊夢はここにきて胸の内の何かを揺さぶられた。
「……また、鍛えてもらわないと」
それは声には出さぬ霊夢の声。また以前の様に、紫に鍛えてもらおうと決心したのだ。
しかし、それもこの一件が片付いてから。この戦いの先に望む未来があり、それを何としてもつかみ取らねばその未来は永遠に失われるのだから。

「横島さん!!」

鈴仙に負担を掛けまいと優しく着地する横島の元に、大妖精達が集まってくる。やや離れたところにはてゐと小悪魔が倒れた者達の治療をしており、遅れながらも向かって来ているのが見える。

横島は腕の中の鈴仙をそっと地面に寝かせる。彼女の尋常ではないその状態に、皆は息を呑んだ。

「良かった、執事さ――――鈴仙ッ!!?」

「そんな、鈴仙さん……っ!!」

目に涙を浮かべ、喜びを露に駆けつけた二人であったが、血にまみれた鈴仙を見て、その表情は絶望に染まる。

「う、嘘だこんな……鈴仙っ、鈴せ――――」

半狂乱のように狼狽えるてゐを小悪魔が抱きとめる。自分が鈴仙を向かわせたせいで……てゐの心が自責の念に圧し潰されそうになった時、横島がてゐに語り掛けた。

「大丈夫だてゐちゃん。もう治したから」

「――――え……?」

横島の言葉にてゐは呆けた表情を浮かべる。横島は鈴仙の名を呼びながら、その身体を優しく揺する。

「イナバちゃん、イナバちゃん」
「……ん、……うぅ、ん――――……？」
　薄っすらと開かれる鈴仙の眼。自分を覗き込んでいる男の顔に焦点を合わせ、それが自分が助け出せた人物だと理解し、鈴仙は心から安堵したように微笑む。
「良かった……夢じゃなかった」
　寝惚けたようなことを言う鈴仙に横島は苦笑を浮かべる。その何とも言い難い表情を眺めていた鈴仙は何やら急に思考が覚醒したのか、がばりと身体を起こし、全身の具合を確かめるかのように手を当てていく。
　最後に顔――――両目が見えていることをようやく理解できた鈴仙が今度は呆然と横島に視線を送る。
「私、何で……眼も見えるし、頭痛も……」
「ああ、それは――――」
　先ほどまで満身創痍であった己が、いつの間にか完全健康体となっていることに困惑を隠せない鈴仙。横島はその疑問に答えようとするのだが……。
「良〝か〝っ〝た〝よ〝ー〝ー〝ー〝!!　鈴〝仙〝ー〝ー〝ー〝!!!」
「キャアアァァッ!?!!」
　横合いから、最高のタイミングでてゐが突っ込んできたのであった。

「鈴仙ーーーーーー!!　死ん、死んじゃったかと思ったよーーーーーー!!」
「や、やめ……っ!?　離し……!!　し、死ぬ……っ!!?」
死に瀕しながらも横島の能力によって存えた鈴仙は、今まさに首元に強烈に抱き着いているてゐの手によって、その命を散らそうとしていた。
瀕死から生還、そしてまた瀕死に。何とも忙しないことである。まるで横島のようだ。
「横島さん、一体どうやって……?」
追いついた諏訪子や幽香が戸惑いを含んだ疑問を呈する。彼女達は横島が霊的治療（ヒーリング）が出来るとは聞いていた。しかし、あれほどの傷を一瞬で治すほどにまで強力なものだとは聞いていない。詳しく聞いてみたいところであるが……今の横島には憚られた。
「……」
多くの者が集まっているこの場。神子、白蓮、早苗、美鈴、パチュリー、咲夜。皆が傷つき、意識を失っている。
諏訪子や幽香、霊夢にフランもそうだ。少し離れた木の根本には紫と、その看病をしている妹紅もいる。
「……っ」
ぎしりと奥歯が鳴る。身体から漏れ出る霊波が渦を巻き、周囲に風を吹かせる。

時が凍り付いたかのように固まってしまっている永琳、その足元で倒れ伏した輝夜と、その上に重なるように気絶している布都。霊気を探れば、少し離れた所に随分と消耗しているレミリアの存在も感じることが出来た。

諏訪子も幽香も、その場の誰もが一気に冷静さを取り戻す。それは、その場の誰よりも激しい憤怒を感じたため。

「龍神……っ!!」

叫んだわけでもないその声が、やけに皆の耳に響いた。本気の怒りからくる、本気の敵意の籠った言霊にも近い〝声〟。耳の良い者達にはそれはかなりの恐怖を以って伝わってしまったことだろう。

しかし、怒りによって我を忘れようとしている横島を引き留めたのは、一人の少女の声であった。

「……横島、くん」

かすかに聞こえた、そのか細い声。横島が聞き間違えるはずがない。その声の主は一番の重傷を負った少女。怪我は既に癒えているが、それでもその身に受けたダメージは計り知れない。しかし、それでもなお紫は横島を止める。

――――そしてその声は、横島の頭を冷やすことに成功した。

「横島」

「妹紅……紫さん」

横島は妹紅と紫の元へと駆け寄り、自らを呼んだ紫の前に膝を着く。半身が砕かれた紫……それを直接見たわけではないが、その服の状態からどのような目に遭ったのかが理解できる。

「紫さん……何て……何てエロい格好してるんすか……!!」

「それには触れないでくださらない？」

そう、紫は半身を砕かれた。その半身とはつまり下半身のことであり、ちょうどお腹から下の衣服は下着を含めて全て粉々になってしまっている。

現在の紫は下半身を簡素なタオルを掛けて隠しているだけであり、雨に濡れたタオルが腰からフトモモのラインに沿って張り付き、艶めかしい姿を晒している。

更にはタオルとフトモモによって形作られた三角形の影の奥には何があるのかと、妄想を掻きたてずにはいられない状態だ。

横島はそんな半裸状態になってしまっている紫にちょっと危険な視線を送っている。

どうやら冷静さを取り戻した弊害で煩悩も湧き上がってきたようだ。どうにも度し難い思考形態であるが、これこそが横島が横島たる所以である。妹紅からの真面目にやれという視線が痛い。

「横島君……分かってるわね？」

「あー……はい、承知してます」

それはどうしてもしておかなければならない確認だった。横島が真に冷静であるか。この戦いをどう収めるか。

横島は紫の言葉に頷き、その手にある物を握らせる。横島の力の結晶、神の奇跡の具現である。

「文字はもう入れてあります。どう使うかは……分かりますよね？」

「ええ、大丈夫。……お願いね、横島君」

一連のやり取りに一切の澱みはなく、二人は互いにやるべき事を理解していた。その様子を傍で見ていた妹紅は二人の会話にまるでついて行けず、ただ首を傾げるばかりだ。

「妹紅」

「ん？　あ、ああ、はい。何だ？」

突然横島に呼ばれた妹紅はどもりつつも返事をする。横島は妹紅に申し訳なさそうな視線を向けると、とある方角を指さした。

「向こうの方にレミリアお嬢様がいるみたいだ。けっこう消耗しているみたいだし、悪いけど保護しに行ってくれないか？」

「ああ、そういうことね。了解、任されました」

横島の頼みとはレミリアの保護であった。この雨の中、消耗した状態ではいくらレミリアと言えども移動することすら困難だろう。流水――――雨は吸血鬼の弱点の一つ。魔力溢れるフランならば無効化も出来ようが、妹に力を託したレミリアでは自殺行為である。

「頼んだぞ」

そう言って、横島は森の奥……龍神が吹き飛んだ方角を睨む。身体に満ちる濃密な霊気――――戦闘態勢だ。

「手伝うよ、横島君」

「……」

気付けば横島の両隣りには諏訪子と幽香の姿があった。

諏訪子は横島の腰をポンと叩き、微笑みを湛えて横島を見上げ。幽香は無言ながらも絶対に曲げることのない意志を瞳に乗せて、真っ直ぐに横島を見やる。

そんな二人に対し、横島は数秒ずつ視線を合わせると、ゆっくりと、確かに頷いた。

「お兄様、私も一緒に……!!」

横島の手を取り、フランは自分もついていくのだと主張した。

先程の横島の怒りの波動を受けて委縮していたのか、行動は二人よりも遅かった。それでもフランの気持ちはこの場の誰にも劣るものではない。

チルノはフランにとって、初めての親友である。そんな彼女を助けるのに、この場でぐずぐずしてはいられない。

「フランちゃん……」

フランの決意、覚悟は本物である。それを受けた横島の返答は――――。

「……フランちゃんは、ここに残ってくれ」

――――〝否〟であった。

「……!!」

その言葉を受けたフランの心境は、如何ばかりか。到底納得できるものではない。

驚愕は失意に、失意は絶望に、そして絶望は怒りに変わる。いくら横島と言えども、その言葉にフランが是を返すはずがないのだ。

「お兄さ――――!!」

初めてフランの怒りが横島へと向かいそうになった瞬間、横島がフランに手を向けた。話を聞いてほしい、というジェスチャーである。

気勢を制されたフランは言葉に詰まると、ありありと不満を読み取れる表情で横島を睨む。眉が吊り上がり、唇がへの字に曲がっているのが愛らしくもある。

「フランちゃん……それから大妖精、ルーミア、リグル、ミスティア」

チルノの親友達の名を呼び、横島は手の中の宝珠を一つ取り出して見せる。

「みんなには……やってもらいたいことがある――――これは、チルノ(あの子)を助けるのに最も重要なことなんだ」

フラン、そして大妖精達は互いに顔を見合わせ……やがて強く頷きあうと、決意の籠った眼差しで横島を見る。

「何をすれば、チルノちゃんを助けることが出来ますか？」

「あ……う、うぅ……」

横島に吹き飛ばされ、森の中を強かに転がり込んだ龍神は身体を震わせ、小さく喘ぐ。

震えの止まらぬ小さな身体を抱き、呼吸を整えようとするも何故だか上手くはいかない。

身体を激痛が襲っている？　否。怒りに身体を震わせている？　当然否だ。

「はぁ……!!　はぁ……!!」

それは初めての感情。横島へと抱いていた想いが強いからこそ、今味わっている感情も比例して強くなっているのだ。

龍神の心を支配している感情――――それは恐怖である。

龍神には格上と呼べる者が存在しなかった。当然対等な者も存在しない。
あまりにも規格外な神性。巨大すぎる存在。強すぎる力。比類なきその存在――――
――それが龍神である。
しかし、その龍神も今はただ恐怖に怯え、身体を震わせるか弱い少女に過ぎない。
龍神が変わってしまった原因。それはチルノとの同期にある。如何に端末の中でも規格外の力を誇るチルノとはいえ、所詮はただの妖精に過ぎない。
確かに龍神と同期したチルノは今までにない程の力を見せつけているが……それでも、龍神本来の力とはかけ離れてしまっている。
龍神はチルノと同期することで様々な情報を得た。誰かと競うこと、誰かを超えること、誰かを想うこと。確かにそれは龍神という存在に新たな力を授けたが――――同時に、枠にはめられたことによって、龍神という存在は矮小化してしまったのだ。
そして、何よりも――――。
「……ひっ!?」
遠くより迫りくる青き極光。木々を呑み込み進んでくるそれは、幽香の放った砲撃である。
今までの龍神ならば避けるまでもない攻撃に過ぎない。しかし、今の龍神にはその砲撃が恐ろしかった。

きっと、この砲撃の先にはあの人がいる。そう考えると、恐怖でどうにかなってしまいそうなのだ。

砲撃を空へと逃れて躱し、視線を砲撃が迫ってきた方へと向ければ。

「……!!」

そこにはやはりと言うべきか、幽香と諏訪子と、横島がいる。横島を視界に入れた瞬間、龍神（チルノ）の心臓が激しく跳ね、内臓が凍ってしまったのではないかと錯覚するほどに冷たい感覚が過ぎる。

今の龍神は、横島が怖いのだ。龍神が抱く恐怖。それは、まるで親に叱られようとしている幼子の心理に近い。

チルノは横島に惹かれている。横島の手は暖かく、優しく、時には力強く自分を包んでくれる。それは、まるで父や兄に抱く安心感にも似ていた。

父――――親、兄弟……チルノはそれを知らない。ただ、もし自分にそれらがいるとしたら、それは横島のような人がいい。

父母、兄弟姉妹に向ける信頼と親愛――――そして淡い恋慕の情。それがチルノが横島へと向ける想いだ。

では、そんなチルノと同期した龍神が横島へと向ける想いとは何なのか。チルノを通して横島を感じていた龍神もチルノと想いを同じくしている。しかし、決定的に違うと

ころがあるとすれば、龍神には学ぶ機会がまるでなかったのだ。
チルノはバカである。しかし、チルノは友人に恵まれた。
自らと同じ妖精であるのに明晰な頭脳を持っている大妖精が親友となってくれた。
寒さに弱い虫の妖怪であるのに嫌な顔を見せず、傍にいてくれるリグルが親友となってくれた。
自分の近くにいれば獲物が寄ってこなくなるというのに、一緒にバカをやってくれるルーミアが親友となってくれた。
辛いことがあった時、寂しくなった時、優しい歌を歌ってくれるミスティアが親友になってくれた。
一歩引いたところから自分達を見てくれて、氷の妖精である自分にも草花を愛でさせてくれる幽香が姉代わりになってくれた。
バカをやれば叱ってくれて、時には一緒に喧嘩（バカ）をやって。そんなカエルの神様と喧嘩友達になった。
――永い間孤独を味わった。誰も触れることはなかった。そして、自分で自分を偽り、閉じ込めた。同じような傷を持つフランと親友になった。
そして――。
「チルノーーーーーーー!!」

名前を呼んでくれる。触れてくれる。温かいなにかで――――心と、身体を包んでくれる。そんな男の人を好きになった。

「サイキック・ソーサー・プラス!!」

力強い叫びと共に翡翠の円盤が飛来する。龍神はそれを回避するが、ソーサーは遠隔操作が可能な霊能である。すぐさま軌道が修正され、背後より迫りくる。

逃げ切れない……逸る思考の中でそう判断した龍神は弾幕を放ち、撃墜を試みる。当てずっぽうで乱れに乱れた弾幕であったが、いくつかの弾がソーサーに命中し、爆発する。

「――――ッ!!?」

瞬間、激しい光が龍神の眼を灼く。横島の更なる霊能、サイキック猫だましだ。名前は間抜けだがその効果は強力であり、視覚だけではなく聴覚、そして霊感にも影響を及ぼすのだ。

強烈な光を浴びた龍神は身体を竦ませ、動揺から思考を千々に乱れさせる。瞬間、龍神の身体を何かが絡め取る。それは植物の蔦であった。

「……やっぱり相性は悪いわね。触れた先から凍り付いていく……」

龍神を蔦が絡め取り、次の瞬間には凍り付き、ひび割れて霧散していく。龍神の動きを封じる為に、それを何度も何度も繰り返す。幽香としては見ていたくない光景だ。し

かし、これは植物たちの意志でもある。
植物たちは理解している。あの存在を止めねば自分達は滅んでしまうと。
だからこうして戦っている。幽香の力を借り、幽香の力となるために。
「……」
幽香はちらりと背後に浮かぶ横島を見やる。彼の顔色はすこぶる悪い。当然だ、何せ今の今まで龍神に氷漬けにされていたのだから。むしろ今こうやって生きていることこそが奇跡と言っても良いぐらいなのである。
いくら回復力が高い蓬莱人とはいえ、ほんの数分では回復など出来るわけもなかった。彼の切り札も自分の回復ではなく、他のことに使用しなければならない。――――もって数分だ。
龍神との最後の戦い。その数分で、けりを付けなければならない。
――――勝算は、文字通り横島が握っている。それを確実なものにするためにも、渾身の力を右手に込めて、〝カエルの神様〟が突貫する。
「てえぇりゃあああぁぁぁっ!!!」
その手に漲るのは手加減なしの本気の神気。今この時に洩矢諏訪子が出せる全力の一撃だ。
「必殺『真・ケロちゃんパンチ』!!!」

「がっっっ!!?」

諏訪子の拳は、深々と龍神の腹に突き刺さった。

勢いよく吹き飛んでいく龍神に、諏訪子は複雑な表情を見せる。弾幕ではなく拳。それを選んだのは弾幕よりも拳の方がより想いを伝えやすいからだ。

諏訪子とチルノはよく弾幕ファイトと称しては拳をぶつけあっている。その時その時の想いを込めて、互いに譲れぬモノを拳に握りしめながらぶつけ合ってきたのだ。

一体どこの格闘家達なのかと懐疑的な視線を送ってしまうが、本当なのだから仕方がない。とにかく、諏訪子はチルノに対し、本気で想いをぶつけたのだ。

「チルノーーーーーー!!」

諏訪子の叫びが空に響く。表面が凍ってしまった腕を押さえ、それでも諏訪子は諦めない。戻ってこいと、帰って来いと、溢れる想いを伝える。

「……っ!!」

吹き飛び行く龍神が苦し気に胸を押さえる。どくん、どくんと高鳴る鼓動が抑えられない。……それは肉体的なものではなく、精神的なもの。幽香の、諏訪子の想いにチルノの抑え込まれたはずの心が感応しだしたのだ。

「う、ううぅぅ……!!　私(あたい)は……わたし、は……!!」

――――まどろみの中で見る夢の登場人物達が羨ましかった。

みんなが笑っている。みんなが楽しそうに〝私〟と話している。みんなが楽しそうに〝私〟と遊んでいる。

時にはケンカをすることもあった。時には辛い別れをしたこともあった。それでもみんな、〝私〟を見てくれていた。

――――でもそれは本当の〝わたし〟じゃない。

本当の〝わたし〟はそこにはいない。本当の〝わたし〟を誰も見てはいない。

「わたしは……〝わたし〟は……!!」

いつしか、夢の中の〝わたし〟はとある一人の妖精に固定されるようになった。多くの友達がいるのに、どうしてか孤独感を味わっている妖精。

妖精とは自分の端末だ。独立した自我と個性を持っているとはいえ、それらは全て同一のはずの存在だ。なのに、その妖精の考えを龍神（わたし）は理解が出来なかった。

みんなが見てくれている。みんなが話しかけてきてくれている。みんなが触れてきてくれる。みんなが一緒に遊んでくれる。みんなが傍にいてくれる。

みんなが、みんなが、みんなが、みんなが、みんなが、みんなが、みんなが――――。

――――本当に、本当に、羨ましかった。

「〝わたし〟は――――『わたし』が――――!!」

自分の中の鼓動を無理やり抑えつける。同期したこの身は既に我が身。脳裏に過ぎる、大きな手の温もりと、優しい笑顔――――。

「私が――――私がチルノなんだあああぁぁぁーーーーーーーー!!!」

それはどこまでも自分勝手な感情の爆発だった。

誰も自分を見ようとしない。誰も自分に気付こうとしない。全ては自分の行いの結果なのに、それを見て見ぬふりをして他の誰かを羨む。

そうして誰それは恵まれているのにそれに気付かない。ならば、自分がそれに成り代わる。

龍神の物言いに諏訪子と幽香の怒りが限界を迎える。しかし、二人よりも早く、強く、横島の怒りが沸騰していた。

「勝手なことぬかしてんじゃ……ねえええぇぇーーーーーーー!!」

「――――ッ!!?」

龍神の頭頂部に走る、稲妻に打たれたかのような痛みと衝撃。それの正体は横島が龍神の頭上から思い切り叩き込んだ拳であった。

「誰かが誰かを乗っ取って、成り代わる……!?　そんなことが……そんなことが許され

るわけねぇだろうがぁ!!」

　横島は胸の奥より湧き上がる感情のままに吼え立てた。横島自身にもその感情が何なのかは理解できていない。しかし、龍神の言葉は彼の中のなにかを、強く強く刺激したのだった。

「龍神!!　オメーがチルノになることは出来ないってこと、この一発で分からせてやるっ!!」

　瞬間、横島の右手に膨大な霊気が集中する。神魔に匹敵するそれは一点に集束し、やがて神の奇跡を創り出す。

「それは……っ!!」

　龍神は横島が創り出した奇跡（モノ）を見て驚きに眼を見開く。それは自らの力の結晶と同じモノ。森羅万象、この世の総てを支配する能力――――文珠である。

　――――龍神が横島に惹かれた理由に、あるいはこの文珠が関わっているのかもしれない。自らと同じ万能の使い手。その同類としての匂いを感じ取っていたのではないか。しかし、今となってはそれはどうでもよいことである。既にこの二人は、敵対してしまったのだ――――。

　その文珠に刻まれた文字は『伝』。およそ攻撃には使えそうにない文字だ。だが龍神は識っている。文珠とは何も単一でしか使用できないものというわけではない。複数

の文字を繋げることにより、その威力を増幅させていくのだ。
「く――――っ!?」
文珠が発動してしまえばどのような事態が引き起こされるか分かったものではない。当然龍神は横島の元から離れようとするが、刹那、植物の蔦と金属の輪がその身体を拘束する。諏訪子と、幽香だ。
「横島さん!!」
「ガツンとやっちゃいな!!」
二人からの援護に横島は頭が下がる思いだ。実際に拘束できる時間は数秒とないだろう。だが、それで充分。横島は二人に対して「あいよぉ!!」と叫ぶと、右手の文珠を龍神に思い切り叩きつけた。
「……う、ああ、あ……!? あああぁぁぁ――――!!?」
発動される『伝』の文珠。それと同時に、大妖精達に託した文珠もその効果を発揮していた。
大妖精、リグル、ルーミア、ミスティア、そしてフラン――――。彼女達に託された文珠に刻まれた文字は『心』。
今、龍神には大妖精達のチルノを想う『心』が直に『伝』わっているのである。

――チルノ……!!　負けないで!!
――私たちのところに帰ってきてよ……!!
――まだまだチルノとは遊び足りないんだから!!
――私の料理、もっともっとチルノに食べてもらいたい!!
「あああ、あああぁぁぁ……!!　うううぅぁぁあああああ――――!!?」
フランの、リグルの、ルーミアの、ミスティアの心が龍神の心を千々に乱れさせる。自分ではなく、チルノを想う皆の心の強さが龍神を苛んでいるのだ。
――チルノちゃんと、もっと、ずっと一緒に……!!　離れたくない!!　傍にいてほしい!!
伝わってくる心の声の一つ一つに打ちのめされる。自分には、こうまで想ってくれる相手はいないだろう。大妖精の心が伝わってきた時、今の龍神を構成している要素に亀裂が走った。チルノとの同期状態に歪みが発生したのだ。
「……それでも――それでもぉ!!」
龍神はぎちぎちと歯を食いしばる。諦めたくない。その一心が龍神をチルノの中に留めていた。
自分が間違っていると理解した。自分の行いが悪しきことであるとも思い知った。それでも、なお諦めたくはなかった。

間違っていても、悪いことでも、それでも自分の意見を通したい。それはまさに、子供の我が儘であると言える。

「こいつ……!!」

さしもの横島も龍神の意固地ぶりには驚きを隠せない。決して止まろうとしないその様はさながら暴走する機関車のようである。

このままでは最後の詰めとして残しておいた文珠を使わざるを得なくなってくる。そうすると心身共に限界が近い横島が潰れかねない。

だがこのまま抵抗されるよりは、と横島が新たに文珠を精製しようとしたその時、思わぬ援軍がやって来たのだ。

「――――チルノちゃーーーーーーんっ!!」

龍神と相対する横島を追い越し、龍神に組み付いた小さな人影。大妖精だ。

「だ、大妖精!?　何でここに――――」

横島が驚くのもつかの間、更に一人、また一人と龍神に組み付いていく者達。

言わずもがな、リグル、ルーミア、ミスティア、フランの四人だ。皆が皆、必死になって龍神の身体に組み付いて……否、抱き着いている。

「何やってんだお前ら!?　中身が違ってもその身体はチルノなんだぞ!!　そんなことしたら……!!」

横島の忠告は少々遅かった。皆の身体は龍神に触れた瞬間から少しずつ凍り始めている。それは圧倒的な力を持つはずの吸血鬼であるフランや、自然の触覚――龍神の端末――である大妖精も例外ではない。

「言わんこっちゃない!!　今すぐ離れろ!!　でないと――――」

「絶対に嫌ですっ!!」

「……っ!?」

皆を引きはがそうとする横島の言葉を、大妖精は即座に却下した。そしてその意志は大妖精だけでなく、チルノの親友達全員が持っているものだった。

「チルノは……やっとできた、私の友達なんだもん!!」

「横島さんや幽香さんだけに任せるなんて、出来ません……!!」

「さっさと起きろぉー、チルノーーー!!」

「チルノは……絶対に……!!」

びしり、びしり、と乾いた音を立てて身体が凍っていく。それでも五人は決して離れようとしない。むしろ強く強く、互いの隙間を埋めるようにきつく力を込めていく。

「バカ……お前ら、やめろ!!　そのままじゃお前らが……!!」

「いや、です……!!　絶対に、いやです……!!」

大妖精が叫ぶ。眦から流れ落ちる涙すら瞬時に凍るような冷気を直に受けて、それで

もチルノの傍にいたいのだ。

きっと間違ったことをしているのだろう。きっと事態が悪化するのだろう。それでも、五人は自らの心の命じるままに動いた。

これはそう、他人を、そして自分をも顧みない勝手なふるまい。――――子供の、我が儘である。

「――――……みん、な」

龍神は愕然とした。大妖精達の行動が予想の埒外であったからだ。

友達の為に、他人の為に、自らの命をも投げ捨てるかのような行いをしてのける彼女達の姿に、心にどうしようもないほどの痛みを覚えた。

――――叶わない。きっと、自分の思いは叶うことはない。心の底からそう痛感した。

龍神の心を諦観が支配する。瞬間、ついに龍神とチルノの同期が解除された。

「――――チルノ!!」

「――――チルノちゃん!!」

横島と、諏訪子と、幽香の声が重なる。大妖精、リグル、ルーミア、ミスティア、フランの声も同時に。皆に共通するのは、チルノを本当に大切に想っていること。皆は、チルノのことが――――大好きなのだ、ということ。

そうして――チルノの身体から光が爆発し、超大な力が離れていった。光はやがて線となり、天を衝いて雨雲を吹き飛ばす。幻想郷の空にその姿を現出させる巨大な存在。本体ではないが……龍神が現れたのだ。

「こいつが……と、その前に」

横島はチルノから分離した龍神に鋭い視線を放るが、ふいと視線を外し、精製した『癒』の文珠をチルノ達に発動した。

「……あれ？」

呆けたような声を上げたのは誰だったか。チルノを含めた六人は凍り付いていた身体がすっかりと癒されており、むしろ活力に満ちた己に戸惑いを隠せずにいる。

チルノに意識はなく、大妖精とフランに身を預けるように気を失っており、それに気が付いた大妖精が涙を流して強く強く抱きしめていた。

「お前らはほんっとにもう……」

「あ、た、ただお兄様……」

溜め息を吐きつつの横島の言葉にフランを始め、リグル達が身を縮こまらせる。何せ横島の声を無視して龍神（チルノ）に向かっていったのだ。怒られるのを恐れ、びくびくと震えている姿は先程までの姿とは程遠い。

横島は完全に委縮してしまっている四人――大妖精はチルノに夢中だ――に苦笑を

浮かべると、一人ひとりの頭を軽く撫でる。
「俺から言うことはたった一つだ。……まあ、本来ならダメなんだろーけど」
「……？」
皆は撫でられた頭を押さえ、きょとんとした眼を横島に向けている。それを見て、横島はこう言って、皆の労をねぎらった。
「チルノの為によく頑張ってくれた。――――かっこよかったぜ、みんな」
「……!!」
横島から掛けられた予想外の言葉に皆はしばし固まった後、嬉しそうに顔をほころばせた。中には涙を浮かべている者もいるが、場は朗らかな雰囲気に包まれている。
「お説教なんかはここにいる二人の怖いお姉さんが担当するからな」
「あなたたち」
「後で覚えてなさい」
「ヒェッ」
まあ、そんな雰囲気など一瞬で吹き飛んでしまうのだが。
幽香も諏訪子もにっこりとした笑顔を浮かべている。しかし、笑顔であるからこそ恐ろしいわけで。せっかく龍神の冷気が無くなったというのにまた身も心も凍えそうになる。

「……さて」

横島は怯えるフラン達から視線を外し、龍神へと戻す。龍神は変わらずその場に佇んでおり、逃げるそぶりも見せようとしない。何をされるのかは分からないが、それでも何かしらの罰を受けようと決めているようだ。

「……本当なら、さっきの文珠はこっちに使いたかったんだけどな」

深く深く息を吐き、横島はまた文珠を精製する。ただし、今度は先程までの様に一瞬でとはいかない。横島はここに来て既に限界を迎えようとしているのだ。それから更に霊力を絞り出して文珠を精製するなど、無茶もいいところである。

しかし、それでもやらなければならない。これをお見舞いしなければ、ここまで頑張った意味がないのだ。

「……っ!!　――――ふうぅ……」

横島の視界が一瞬白く染まる。だが、何とか持ちこたえて文珠の精製は完了した。既に、文字は刻まれている。

「これが、俺の最後の文珠だ。大人しく食らってくれ」

『――――』

龍神は横島の言葉に何も応えず、ただ眼を閉じて待っている。横島は眼を閉じ、軽く文珠を放り投げた。

発動される文珠。輝きに包まれる龍神。そして、龍神は――――。

第七十話
『子供の我が儘』
～了～

第七十一話

龍神との戦いが終わってから三日後の午後、横島は魔法の森に向けて空を飛んでいた。手に持った小さなバッグの中には手土産として咲夜が作ったケーキと魔法瓶に紅茶が入っており、目的地でちょっとしたお茶会でも開けそうな内容だ。

問題は目的の人物が洋菓子を好むのかどうかであるが、その人物は新し物好きであるし、咲夜の手作りケーキにはたとえ和菓子好きだったとしても「美味い」と唸らせることが出来るほどの力がある。問題はないだろう。

「……っと、あったあった」

目的の店を視界に収めた横島は徐々に高度を下げ、ゆっくりと入り口に前に着地する。

見る限り損傷もなく、以前見た時のままそこに建っている。どうやらここも龍神に守られていたようだ。

「おいーっす。森近、居るか―？」

がらり、と戸を開けて声を掛ければ。

「やあ、いらっしゃい横島君。四日ぶりだね、今日はどうしたんだい？」
穏やかな声で返事をする霖之助が迎えてくれた。
横島の目的地はここ、『香霖堂』。珍しいことに。本当に珍しいことに、横島は美男子である霖之助に会いに来たのだ。
……恋愛的な意味は一切ない。ちょっとした、用事のためだ。

第七十一話
『名前を呼んで』

横島が土産のケーキを渡すと、霖之助は嬉しそうに皿とカップの準備をする。半妖である霖之助は生きる為に食事を必要としない。しかし、だからといって全く食べないわけではない。気が向けば食事をするし、酒だって嗜む。
目の前にご馳走を出されたのなら、ありがたくいただくのが霖之助という男だ。しか

し霖之助は喧騒を嫌うので、滅多なことで宴会などには顔を出さないのであるが。

「うーん、これが紅魔館メイド長の手作りケーキか……。僕もこう見えて長生きしているんだけど、これほど美味しい洋菓子は初めてだね。」

一口食べては感嘆の息を漏らす霖之助を見ながら、横島は内心で溜め息を吐く。何が悲しくて男二人が顔を突き合わしてケーキを食さねばならんのか、と。

咲夜のケーキと紅茶が美味いのが救いか。霖之助は紅茶を一口含み、「ふむう」などと満足げに息を吐いた。

「それで、今日はどうしたんだい？　僕とお茶会をする……というのが目的ではないんだろう？」

「当たり前だろ気持ち悪い」

「中々に辛辣だね。まあ、僕も〝それが目的です〟何て言われたらお引き取り願っただろうけど」

横島も霖之助も男色の気は全くない。霖之助にだって会うのが楽しみな少女が居たりする。

では、目的は何か？　霖之助が問えば、横島は報告に来たのだと答えた。

「あーっとな、数日前に幻想郷内にいくつもの強力な結界が張られたんだが……気付いてたか？」

「そりゃあね。あれだけ強力な結界なら嫌でも気付くさ。それより……あんなにも強力な結界が、いくつも存在していたのかい？」

「ああ。俺が聞いた話だと人里に魔法の森、紅魔館に妖怪の山、博麗神社に命蓮寺に天界や旧地獄……だっけ？　そこら辺も結界に覆われてたらしいぜ」

横島の言葉を聞き、霖之助は考え込む。それほどの力を行使できる存在など幻想郷でも数少ない。

候補として挙がるのは毎度おなじみ守矢神社の神々、永遠亭の薬師、境界を操る紫など。だが、どれもしっくりとこない。

霖之助は紅茶を飲んで気分を変える。目の前の少年はその答えを知っているのだ。何故それを報告しに来たのかは定かではないが、きっとその答えも教えてくれるのだろう。

「……それで、それを行ったのは誰なんだい？　一体何が目的で？」

霖之助の問いに横島はすぐには答えない。同じように紅茶を飲み、ゆっくりと息を吐いて間を開ける。この引っ張りよう、よほどの答えが返ってくるに違いない……！　霖之助は好奇心を抑えながらもごくりと唾を飲んだ。

「――――龍神だ」

「……何だって？」

事実、その答えは霖之助の期待を大きく上回って。
「龍神が――――チルノになって俺を手籠めにするために暴れまわってたんだ」
「――――L≠ゐしよtよし二をし、っ〒ゐωT＝〝し、？」
霖之助のキャラがおかしくなるほどの破壊力を秘めていたのだった。ギャル文字で言葉を発するとは恐れ入る。一体誰に教わったのだろうか。
「……ふう。すまないね、ちょっと気が動転してしまって」
「いや、まあ。気持ちは分かる……つーか今のどうやって発音したんだよ」
お互いに紅茶を飲み干して一息つき、話を再開した。とりあえず横島はチルノ、紫、永琳の三人から聞いた話を元に、霖之助に事の顛末を説明していく。
チルノのこと、龍神のこと、横島が意識を失うその時までのことを話していった。

――――あの夜、横島が龍神に最後の文珠を使った時のこと。
「これが、俺の最後の文珠だ。大人しく食らってくれ」
横島が文珠を放り、龍神へと発動させる。それに刻まれた文字は以前と同じく『心』。
それの発動と同時に、紫が横島から預かった文珠を発動させる。
まずは自らの力を文珠で『増』強し、更に『伝』の文珠を使う。
紫の能力によって、ある者達の心が龍神へと『伝』わっていく。

『――――龍神様、いつもありがとうございます』

「――――――」

伝わってきた内容に、龍神は閉じていた眼を見開き、大きく狼狽えだした。

『こうして毎日を変わりなく過ごせるのは、龍神様のおかげです』

『日々の加護をありがとうございます、龍神様』

『少しでも龍神様のお力になりますように』

『我らが信仰を龍神様に……』

『またその御姿をお見せください』

「――――……、……!?」

流れ込んでくる心の声は止まることはない。その声は真に龍神を想った声達だ。

龍神が声無き声で呻く。疑問、戸惑い、そういったものが強く表れている。その様子を見て、やはり彼女は気付いていないのだと横島は呆れにも似た感情を持った。

「……アンタはさ、この幻想郷で一番の信仰を得ている存在なんだ。博麗神社の神様でも、守矢神社の神様達でも、命蓮寺の仏様でも、神霊廟の仙人達でもない。アンタ自身が、この幻想郷で最も親しまれている存在なんだ」

紫が能力を以って開いたのは人里の結界。そこに住む者達の『心』を龍神へと『伝』えたのだ。

龍神はいつも孤独感に苛まれていた。誰も自分を見てくれないと。誰も自分に気付いてくれないと。横島は氷漬けにされながらも、そんな龍神の波動を受け、その感情を読み取った。

だからこそ横島は龍神に気付かせたかった。その存在を想う者達がいるのだと、共に在りたいと願う者達がいるのだと。

『いつか龍神様とお話がしたいなぁ』
『僕は龍神様の背中に乗ってみたい』
『やっぱりカッコいいんだろうな、龍神様って』

伝わってくる子供達の心の声。どこまでも純粋に響いてくるその声は、龍神の心を強く強く揺さぶった。

かの者の力は強く、かの者の存在は遥かに高い次元にある。故に、かの者にはその足元が見えていなかった。自らが見ていたものは景色のほんの一部に過ぎないというのに、本当に大切な部分に視線を合わせることもなかったのだ。

かの者――――龍神には寄り添う者達がいた。そのことにようやく気付けたのだ。

「――――」

龍神の身体が光り輝き、徐々にその輪郭を失っていく。その口から上げられる叫びには強い謝意が込められていた。

「……消えた、か」

ほんの一瞬、夜空が真昼の様に輝いた後、龍神の姿は跡形なく消え去っていた。消えたのは龍神の姿だけではなく、彼女が張っていた全ての結界も同時に消失している。

――――こうして、長い夜は終わりを告げたのだ。

横島は龍神が消えたのを確認し、糸が切れたかのように意識を失い地上へと落下してしまう。――――横島が覚えているのはここまでである。

「……それにしても、まさか龍神がそういった存在だったとはね。いや、良く知らせてくれたね横島君」

「ああ、お前が前にいやに熱く龍神について語ってたからな。買い物ついでに報告くらいは、ってな」

横島は以前香霖堂に来た時に、霖之助が龍神についてそれはもう熱く語っていたのを覚えていた。なので自分でもあまりらしくはないと自覚しながらも、わざわざ霖之助と

いう男の為にやって来たのだ。
　横島にとって霖之助という男は、数少ないあまり嫌悪を抱かない美男子である。女子高生と親密な関係でありそうな部分は気に食わないが、それでも終生の敵（笑）である西条と比ぶべくもない程に友好的だ。
「なるほど。なるほどなるほど。龍神とはつまり日本という国……というより、日本列島そのものが意志を持った存在だということだね。何かしら関係があるだろうとは考えていたんだけれど、まさかそのものだとは思わなかったよ。しかし、考えてみればこの国には八百万の神が存在するから今更と言われればそうかもしれない。ちなみに八百万の神というのは古代日本における神への考え方で、森羅万象あらゆる物に神が宿るという考え方なんだけれども、列島そのものが神とは。そうすると龍神は伊邪那岐命と伊邪那美命による国産みで誕生したのだろうか？　しかし神という存在であるのならばその後の神産み？　まさかそれよりも前ということは……いや。いやいやいやその可能性もあるだろう。そも神話と大地というのは切っても切れない関係であるし、まず龍神があってそこからさまざまな神が――――」
　だって霖之助にはこういう残念な部分があることだし。
　横島は霖之助の暴走が始まったので、代り映えしない品ぞろえの商品を眺める。あれやこれやと考えながら、目についたのは安価な髪留め。

横島はその中の一つを手に取り、矯めつ眇めつ眺める。現在修復中の髪留めと似たデザインであり、これは気に入るのではないかと霊感も告げている。

「料金置いとくぞー」

横島は未だぶつぶつと語り続けている霖之助に一応声を掛け、値段分の小銭を置く。用も済んだしさっさと帰るかと出入り口に視線を向けると、何やら地鳴りのような音が横島の耳に届いた。

「……何だ？　地震か？」

地震にしては地面は揺れていない。出入口を開けて外の様子を見てみれば、遠くの方から何者かが猛スピードで迫って来ていた。

「よ～こ～し～ま～さ～ん～……!!」

「は？」

自らを呼ぶ何者か。段々と輪郭がはっきりとしてきたその人物は、以前この香霖堂で出会った少女であった。

「やっと見つけたーーーーーーー!!」

「のわーーーーーーー!?」

必死な形相で迫り、遂にはタックルまでしてきたその少女、外の世界から夢を通じて幻想郷に入り込む女子高生〝宇佐見董子〟である。

　董子の強烈なタックルによって店の中に戻された横島に馬乗りになり、胸倉を掴んでガックンガックンと揺する。
「さあ妹紅との関係を一から十まで全部教えてください!!　前回の帰り際に魔理沙さんから教えられてから今までほとんど眠れなかったんですからーーーーーー!!」
「ちょ……!!　やめ……!!」
　見ようによってはかなりいかがわしい体勢であるが、流石の横島も突然の事態に反応が出来なかった。……かと思えばしっかりと霊力が増大していた。
　このまま董子が横島を失神するまで揺さぶられてしまうのか、それとも横島の煩悩が溢れてしまうのか、答えはそのどちらでもなかった。
「おや、董子君じゃないか。こちら側に来ていたんだね」
「あ、霖之助さん。お邪魔してます」
「ぎゃひんっ!?」
　暴走から復帰した霖之助が顔を出したことにより、董子が横島の胸倉を放し、横島が頭を床に強かに打ち付けることによって終息したのであった。どちらにしろ横島が不憫な目に遭うことは決定していたらしい。
　さて、横島と董子のいざこざも終わったので、今度は董子を含めた三人でまたお茶を飲む。次なる話題は横島と妹紅の関係についてだ。

「ふむ。実は僕も少し興味があったんだよ。まさか、あの妹紅君が誰かと恋愛関係になるとは思っていなかったからね」

「私もー」

眼鏡を上げつつの霖之助の言葉に董子も頷く。横島は二人が持つ妹紅のイメージを聞いていたかったが、正直横島自身も何となく分かる話であったので黙っておくことにした。こう言っては何だが、妹紅は誰かと一緒にいるより一人でいる方が似合っているようにも思えるからだ。

――――そんな妹紅と恋人になった俺って凄い。凄くない？

何やら自画自賛な考えを浮かべつつ、横島は妹紅との馴れ初めや今までにあった代表的なイベントなどを話していった。

口紅を贈ったことや、その後のバーベキューでのやり取り、時計塔での一幕など、語るたびに董子のボルテージが上がっていき、横島の口から〝妹紅からキスをされた〟と聞いた時には思わず「ひゃあぁぁーーーー！」と叫んだくらいだ。

霖之助は普段大人ぶっている董子が年相応の反応をしているのをいとおしむような、慈しむような眼で見やる。そして霖之助も妹紅の方から迫ったと聞いた時にはお茶を噴き出していた。

「まさか妹紅がそんなことを……！　それにしても普段学校の連中とかが恋バナとかで

盛り上がる理由が分かったわ。今すっごい楽しい……！」

どうやら菫子も潜在的には恋愛話が好きだったらしく、その眼はきらきらと輝いている。内面では次に妹紅に会ったらからかってやろうと考えているのだが。

横島はこんなに喜んでくれて良かったと思う。しかし、これから彼女の顔は曇るだろう。横島と妹紅、二人を繋ぐ最も大事な部分が語られるのだ。

「んで、だ。とある異変が絡んできてな」

語られる異変。正体不明の『男』との戦い。それによって横島は殺されかけ、妹紅は横島を死なせないために自らの生き胆を食わせ、蓬莱人へと変えてしまった。

しかし、それでも二人の関係は終わらず。より強固な絆となって二人を結びつけたのだ。

一連の話を聞いた菫子は驚愕し、妹紅のことを想って顔を青くする。しかし、最終的に収まるところに収まったことが分かって涙を流して喜んだのであった。

「うう……！　こんなん一生もんやん……！　まさに永遠の愛やでぇ……!!」

「何で急に関西弁……」

ハンカチで涙を拭う菫子が何故か関西弁で二人の愛を称える。親友に相応しいと言える恋人が出来たことに心の底から祝福をしているのだ。

「そんで俺にはまだ恋人が数人いるんだけど……」

「赤が好き？　青が好き？　血まみれになって死ぬのと血を抜かれて死ぬのとどっちが好き？」

董子のマント姿のモデルは怪人赤マントである。横島が妹紅の他にも恋人がいると聞いて「こいつだけは生かしておけぬ」と決意したのだ。

「実は妹紅自身が割とノリノリでな……何でも男は何人の女性を養えるのかが重要だとか」

「ど、どーいうこと!?」

「ああ、確か彼女は平安の生まれだったね。平安時代は一夫多妻制だったし、そういう価値観を持っていても不思議じゃないか」

董子が抱いた疑問に霖之助が答える。ついでに言えば他の二人の恋人、フランと美鈴もハーレム容認派であるので今のところ問題は発生していない。

「うむむむ……!!」

董子は何だかんだ言っても現代日本の価値観に染まっている。唯一と言ってもいい親友である妹紅の恋人が他にも女を作っていることに嫌悪感が湧いてくるのは致し方ないところだ。

うんうんと唸っていた顔を上げ、董子は横島をキッと睨みつける。何せ横島は妹紅と恋人関係であったというのに自分にもナンパを仕掛けてきた程には節操のない男だ。

横島が妹紅のことを、そして他の恋人達のことを真剣に考えているのか知っておく必要がある。

「……それで、横島さんは妹紅達のことをどう考えてるんですか？　ちゃんと真剣に将来のこととか考えてるんですか？」

じとっとした眼で横島を見やる菫子。霖之助も何も言わない。しかし、彼の眼も真剣な光を湛えて横島を見つめている。横島はお茶で口を濡らし、徐に口を開いた。

「俺はさ、煩悩が霊力源で色んな女の子に声を掛けるようなどーしようもない男なんだ。妹紅の前で他の子に飛び掛かったりもした」

〝飛び掛かったり〟の部分でちょっと思っていたよりもやべー奴だったのではないのかとツッコミが迸りそうになった菫子であったが、横島は自分達の気持ちに応えて真剣に語ってくれている。霖之助だって我慢しているのだ、ここは大人しくしている場面である。

「そんな俺を見てるのに、それでも俺のことが好きだって言ってくれたんだ。こんな俺を、永遠に縛り付けてでも求めてくれた。他の子だってそうだ。俺の傍にいてくれる。ずっと一緒にいてくれるんだ。だから俺はあいつらを裏切らない。ずっと、ずっと、ずっと……愛している」

「……っ？」

董子は横島の言葉に、彼の放つ雰囲気が変化したような気がして違和感を覚える。横島の言葉はとても真摯な響きを湛えている。だというのに、どこか歪さを孕んでいるかのような怪しい響きも内包している。どこか不安を誘うような、それでいて彼の言葉に嘘はないと断言出来るような、不思議な気分だ。

「……」

話を聞き終えた霖之助は視線を鋭くし、横島を静かに見つめる。その様子に董子は言い知れぬプレッシャーのような物を感じてしまう。

どことなく気まずい空気が流れる中、霖之助が深く息を吐き、お茶を一口啜った。

「……うん。君が妹紅君達のことを本気で考えていることはよく分かったよ」

その言葉は董子も頷くことが出来た。そこに含まれる何か怪しげな気配も、女好きな彼のことだ。いつより深い仲になるのかと画策しているだけかもしれない。……それはそれで問題かもしれないが。

「ふ、ふーん。それにしても一夫多妻……ハーレムかぁー。霖之助さんはそういうの興味あったりする?」

少し悪くなった空気を換えようと、何となく浮かんだ質問を霖之助にぶつける董子。霖之助は溜め息を吐いて呆れ顔だ。

「君も分かってるだろう? 僕はそんなに器用な男じゃないよ」

「あはは、そうですよねー。商品について話してもそんな感じだし」

霖之助はハーレムを築こうなどとは考えていない。それは横島にとって何よりの朗報だった。何せ霖之助は美男子だ。クール系のイケメンだ。この甘いマスクと理知的な話口調で落とされる女性は数知れないだろう。

自分の女達にコナを掛けてくるということもないだろうし、横島はほっと息を吐いた。

そして、そんな横島の眼前で――――。

「僕は自分の隣にいてくれるただ一人の女性と静かに過ごせたらそれでいいよ。……例えば、こんな僕に外の世界の物を見せに来てくれるような子とか、ね」

「へー……え？　……え、それって、ええ……っ!?」

「おや、どうしたんだい董子君？」

「え、いや、どうしたって、今……!?」

「ははは、分からないなあ。一体どうしたんだい、董子君」

「あ、あうあう……!?」

なんか突然ラブコメ始まった。それが横島の最初の感想である。何なの？　森近死にたいの？　それが次の感想だ。

余談であるが、外の世界の物を見せに来てくれる女の子の中に紫がいるのだが、霖之

助は紫のことを不気味に思っているので恋愛感情などは全くない。

八雲紫。現在彼女に心の底から信を置いてくれているのは、身内以外では横島だけである。

目の前で繰り広げられる森近劇場に、横島は藁人形に釘を十本から～二十本程打ち付けたいところであったが、昔はともかく今の横島は好き合っている者同士の仲を引き裂こうとは思っていない。

「どうやらおれはお邪魔虫のようだぜ！　ここは後日あらためて出なおすとすっか！」

横島忠夫はクールに去るぜ」

そう言って横島は静かに店を去った。その双眸から熱い血液を滴らせ、握りしめた拳からは血を流しながら。ちなみにこの後霖之助と菫子の仲がどうなったのかは誰にも知られていない。

「――――♪　――♪　――――♪」

香霖堂から帰ってきた横島は霧の湖の畔で大きな石に座りながら、手の中の髪留めを弄っている。口笛も軽やかに、横島はこの場所でとある人物を待っている。

「おにーさーーーーーーん！」

「お？」

自らを呼ぶ声に視線を向ければ、そこには元の姿に戻り、すっかりと元気になったチルノと、そんな彼女に手を引かれるもう一人の姿があった。

それはチルノによく似た少女であったが、様々な差異が存在していた。長い髪、日焼けした肌、こめかみから生えた角、鱗のような物に覆われた腕、そして鋭い爪。

その少女の姿はチルノと同調した龍神の姿に酷似していた。

「おっす、チルノ。――それに、龍神も」

そう、チルノに似た少女は龍神が新たに生み出した写し身なのだ。その外見は最も自らに近い存在となったチルノの影響を受けており、二人が並べば角などの龍的特徴を除けば双子のようにも見える。

チルノは龍神と共に横島の前で止まる。それに首を傾げた横島であったが、チルノと龍神の二人は横島に勢いよく頭を下げた。

「迷惑をかけてごめんなさい!!」

「……ん？」

きょとんと眼を見開き、横島は疑問符を浮かべた。

話を聞くとこの二人、自分達が迷惑を掛けた者達に謝罪をして周っているのだという。本当は真っ先に横島に謝りたかったそうなのだが、外出していたので最後になって

しまったのだ。
始め龍神はチルノの前に現れ、その身を乗っ取ろうとしたことを謝罪した。しかし、チルノはその謝罪を受け入れつつも切っ掛けは己に合ったのだと頭を下げた。
悪いのは自分だ、いや自分が悪い、私の方が、いやいや私の方が……。
「だったらどっちが悪かったのか弾幕ファイトで決着を付ける!! 行くぞおおおおおおおお!!」
そうして弾幕ファイトが始まり、混乱した龍神がちょっと待ってと突き出した手にチルノが思い切り吹き飛ばされ、チルノは敗北したのだった……。
「バカなのかお前は」
「アタイはバカじゃないよ!!」
やっぱりバカなんじゃないかなぁ、と思う横島であるが、ここでチルノの機嫌を損ねても仕方がない。横島はチルノの頭を撫で、龍神と向き直る。
「……正直、何とも思ってないって言ったら嘘になる。みんなにしたこと、特に紫さんのことは……絶対に許せない」
「……」
「お兄さん……」
きつく睨みつけてくる横島に龍神は何も言えず、チルノもおろおろと狼狽えるばかり

だ。

　何も龍神は幻想郷を滅ぼそうとしていたわけではない。事実龍神は己の力で害が及ばないように人里や各種拠点となるような場所には結界を張って守っていたし、チルノが表層に出ていた時には追いすがってきたフランを強力な結界で守っていた。横島の恋人達も傷付けないように気を配っていたのだ。……事故もあって成功はしなかったが。

「……みんなは何て言ってたんだ？」

「え？」

「俺以外のみんなは何て言ってたんだ？」

　龍神と、そしてチルノに横島は問う。

「え、っと。一応みんな許してくれた。今度お寺でぼらんていあとか、森のしょくせーのお手伝いとか……。色々お手伝いすることでチャラにしてあげるって言ってた」

「……紫さんは？」

　チルノから話を聞き、目をつむって空を仰ぐ横島。今回一番の被害を被った紫は何を言ったのか、横島はそれを一番知りたい。

「ん～と、ちょっと難しかったんだけど……」

　チルノにとって紫の言葉は難しいものが多い。大事な者を殺されかけ、半身を砕かれ

た紫は龍神達にこう言ったのだ。

――――この幻想郷を守るはずの貴方が、このような異変を引き起こしたことは大変に遺憾に思います。しかし、私は今回のことで貴方をどうこうしようなどとは思ってはいません。

思い返してみれば、不自然な部分が多々存在します。貴方を引きずり出したのは誰なのか。それも分からないのでしょう？

……霊夢に苛烈な攻撃を加えようとしたのは、ある意味あの子の自業自得な部分もあります。霊夢もそれは認めていますわ。チルノに強烈なトラウマを植え付けた。そのことに対して珍しく反省していましたから。

貴方の力は特に強力です。その使い方を間違わぬよう、周りの方達から学んでください。

「……要するに今度からは気を付けてくれってことか」

横島は大きく息を吐き、がっくりと項垂れる。紫の言葉は横島にとって予想通りだ。龍神とは幻想郷にとってなくてはならない存在だ。その龍神を失うようなことがあれば、それこそ幻想郷崩壊の危機である。

それでなくても紫のことだ。龍神の内面を知れば、今回のように理由を付けて許すのだろう。他の皆の処置もそれを考慮してのことであると推察出来る。それで味を占め

て傍若無人に振る舞われたら流石にそんなことも言っていられないが、本人は考えていたよりもまともな精神性を有していたらしい。
「……はあ。これじゃ、俺が大人げない奴みたいだな」
「え？」
横島は弄っていた髪留め――――修復が完了したひまわりの髪留めをチルノに渡し、ポケットから取り出した色違いのひまわりの髪留めを龍神へとひょいと投げ渡した。
「……？」
いきなり髪留めを渡された龍神は不思議そうな表情で髪留めと横島の顔を交互に見やる。横島はやや照れ臭そうに頭を掻き、柔らかな笑みを浮かべる。
「みんなが許してんのに、俺だけが文句言ってもなぁ。ま、紫さんと被っちまうけど今度から気を付けてくれたらいいよ」
それはチルノも、当然龍神も想像だにしない言葉であった。
結局横島は非情になり切れない。皆が許し、本人も反省の意志を見せているのならば許さない理由はない。
「……つっても、完全に許したわけじゃねーからな。許していこうってだけだかんな。そこ勘違いすんなよ？」
「……」

「……」

チルノも龍神も開いた口が塞がらなかった。あれだけのことを仕出かした者を許そうというのだ。目の前の男だけではない。あの時、自分達が傷付けた者達が自分を許すのだと。

改めて、龍神は自らが行ったことの怖さを思い知った。自分は、自らを想ってくれる者達を永遠に失ってしまっていたかもしれないのである。

「んで、二人とも今夜の宴会に参加すんだろ？」

「え？　……ゆかりに誘われてはいるけど、本当にアタイ達も参加していいの……？」

不安気に顔を見合わせ、その後上目遣いに見つめてくるチルノと龍神の頭を乱暴に撫で、横島は快活な笑みを浮かべた。

「当然だろ。前に紫さんに聞いたけど、異変の後は必ず宴会をするんだってよ。それで異変の黒幕と酒飲んで騒いで、それで和解するんだと。逆に言えば宴会に参加しなけりゃ総スカンだからな。覚悟して宴会に参加しろ」

強く、大きく、そして優しい手。自分を――――自分達を優しく包んでくれる温かな手。

ようやく気付いた。これは奪うことでは味わえない。何かを傷付けては手に入らない。ただ素直に、傍にいてほしいと願いを告げていれば手に入ったのかもしれない。

だが、それは遅すぎた。自らの心に宿る想いは、目の前の男性に告げることはない。

――――今はまだ。

いつか時が流れて、許しを得ることが出来たのならば、その時にこそ伝えよう。

龍神は自分の罪に付き合わなくてもいいとチルノに言った。しかし、チルノは自分も龍神と同じ思いだと言った。二人の気持ちが同期したからあの異変が起こったのだと。

だから、それまで気持ちを伝えることはない。もう少しの間、横島のことを〝お兄さん〟と呼ばせてもらうのだ。チルノにとって横島は好きな男の子であると同時に、大好きな兄でもあるのだから。

「……ねえ、お兄さん。わがまま言ってもいいかな？」

「んー？　何だよ、あんまり無茶はきかねーぞ？」

あっさりと自分のお願いを聞いてくれそうな横島に、チルノは感謝と申し訳なさを抱いた。今から頼むことは簡単なようであり、その実とても大変なことだ。妖精（おバカ）である自分にだってそれが分かる程に。

チルノは龍神を見やる。首を傾げる龍神ににかっと笑いかけ、横島に我が儘の内容を告げた。

「あのね、龍神に――――名前を付けてあげてほしいんだ」

「名前？」

「……っ!?」

龍神はチルノの我が儘の内容に驚く。龍神は己を指し示す名を持ってはいない。生まれが生まれであるし、そもそも〝龍神〟という呼び名も自分から名乗ったわけではなく、周囲が勝手にそう呼んでいるだけなのだ。

龍神の心の底にある誰も自分を見てくれないという思いは、己を含む誰もが自分の名を知らない。誰も自分という確固たる存在を認識してくれないという考えへと通じてしまっているのだ。

チルノは龍神と同期した際にその思いを感じ取った。だったら名前を付ければいいじゃない！　と一瞬で正解を導き出したのだ。しかし自分ではよい名前など微塵も思いつかない。ならばお兄さんに付けてもらおう！　と一瞬で丸投げを決めた。

「名前……名前ねぇ……」

チルノのお願いに横島は困ったように頭を掻く。こういった高次の存在に名を付けることへのリスクを考慮しているのだ。

力有る者が名を付ける、ということは主従契約にも等しい行為である。……まあ、今回の場合は彼我の力の差が大きすぎて考えるだけ無駄なのだが。

「んー……それじゃあ俺が名付け親（ゴッドファーザー）になってやるか」

龍神は横島とチルノを交互に見やるが、やがて期待するかのように横島の顔をじっと

見上げる。横島は己のネーミングセンスに自信を持っている。それが悲しい勘違いなのかどうかは〝サイキック・ソーサー〟、〝栄光の手（ハンズ・オブ・グローリー）〟という二つの霊能から判断してほしい。

やがて考えが纏まったのか、横島はよし、と一言呟き、龍神の前に屈み込んで視線の高さを合わせる。

「それじゃあ、いいか？　お前の名前は――――」

優しく響くその声に、龍神は胸を高鳴らせる。

ああ、どうかその声で呼んで欲しい。誰もが知らない龍神（わたし）の名前を。龍神（わたし）だけの、私の名前を。

龍神（わたし）の名前を、呼んでください――――。

第七十一話

『名前を呼んで』

～了～

少し強い西日に照らされ、私は目を覚ます。どうやら随分と長く昼寝をしてしまっていたらしい。

師匠に言われてお仕事はお休みしているけれど、どうにも身体が落ち着かず、そんな自分に苦笑を零して折角ならばとお昼寝をしたのだった。

どうも働いていないとむず痒い気分になってくる。これじゃあ横島さんをどうこう言うことは出来ないね。私も立派なワーカーホリックというわけだ。

……横島さんと言えば、彼の文殊……文珠？　という能力は本当に凄い。見えなくなっていた眼もばっちりと見えるし、あれだけ痛かった頭もスッキリ爽快だ。……まあ、今お昼寝から目覚めたからそこは当然かもだけど。

師匠も「これじゃあ商売あがったりね」と言って横島さんの能力を手放しで褒めていたっけ。……その後「残念だわ」とか言って大量の薬とかを〝ごそっと〟片づけていたのが物凄く気になるけど……。

ま、それはともかく。私は久しぶりに自分の私服へと袖を通す。ここ最近はいっつもメイド服だったから何か新鮮な感じ。師匠が色々と新作を持ってくるからメイド服も捨てがたいんだけど、やっぱり着慣れたこの服が一番落ち着くのよね。

「和メイドっていいわよね……」「ゴスロリメイド服も作っちゃおうかしら……」なんて言ってたから楽しみではあるけど。

……さて、これからどうしよう。

今まではお仕事でやることが色々とあったから暇したことがないんだけど、急にぽっかりと休みが来てしまうと何をしていいのか分からない。本格的に仕事中毒だなぁ。とりあえず部屋を出てみたのはいいけど何にも思いつかない。

簡単な手伝いくらいならしようかな？　でも横島さんみたいに自分から苦労を背負いこんでいくのも……なんて考えていたら前方に横島さんを発見。噂をすれば何とやら、ってね。何やら真剣な様子で窓の外を眺めてるみたいだけど、何かあったのかしら？

「あれ、イナバちゃん？　身体はもう大丈夫なのか？」

それ何回も聞いたー。というか横島さんが文珠で治してくれたんでしょうに、何回も聞いたら不安になっちゃうじゃない。

そんなことよりどうかしたの？　なんか真剣な顔してたけど。

「あー、いや実は……」

……てゐと小悪魔に呼び出された？　その時の様子から色々と予想出来て……？

あー、なるほどね。

そっか、ようやくか。美鈴もそうだったけど決心するのに大分かかっちゃったみたいね。

それで？　横島さんはどうするの？

「ああ。もし本当にそうなら――――」

……ん。てゐは横島さんにぞっこんだからさ、色々と迷惑掛けちゃうだろうけど、それこそ末永くお願いね。

――――チクリ。

？　……でもそうかー、てゐが遂にね。あの子がそうなったのは横島さんがこっちに来てちょっと経ってからだから、もうすぐ三か月くらい……だったかな。

「あー、そうだったのか……。流石によく見てるんだな、イナバちゃんは」

――――チクリ。

……？　あー、そういえばさ。そんなに経つのにまだ〝イナバ〟って呼ばせてたんだっけ。……『あの時』からこっち、色々とカッコいいとこも見せてもらったし、そろ

そろ名前呼びを解禁しちゃおうかな？

「名前呼び……？　つまり今度から〝優曇華院〟って呼べばいいのか？　うどんげちゃん？　うどんちゃん？」

何でそっちなのよ。この場合ふつーは〝鈴仙〟でしょーが。

「……鈴仙ちゃん？」

妹紅といい横島さんといい、やたらとちゃん付けしてくるのは何でなのかしら。呼び捨てでいいよ、呼び捨てで。

「……じゃあ、これからは鈴仙って呼ばせてもらうな」

――――チクリ。

……うーん、こういう時の笑顔って何か反則臭いわね。でも……うん。悪くはない、かな。

――――チクリ。

それじゃ、もう行くんでしょ？　繰り返しになるけど、あの子のことよろしくね？

「ああ、それじゃ」

夕陽に照らされる男の背中……って書くと結構カッコいい感じね。対象が横島さんだから微妙だけど。

……行っちゃったか。これであの子も落ち着いてくれるかしら？　……。

それにしても。

それにしても、何でこのタイミングであんなこと言っちゃったのかしら。名前呼び、なんて……。

――――チクリ。チクリ。

……ちょっと、胸が痛い。

さっきから頭の中で横島さんが私の名前を呼んだシーンがぐるぐる回ってる。

私も……横島さんを？　――――あはは、まさかね。

私の胸は少し痛くて、少し高鳴ってて。それも悪くないんじゃないかな、なんて。そんなこと考えちゃった。

☆おまけ☆

横島「命名――――〝千龍乃(チルノ)〟……というのはどうだろう？」

龍神「……」

チルノ「……いや、それはちょっと」

紫「ふふふ、千龍乃だなんて贅沢な名前ですわね。今から貴方の名前は〝千(せん)〟ですわ。いいですわね、〝千〟です」

横島「紫婆(ゆばーば)様……！」

紫「……」

横島「……」

紫「……ごふぅっ!?」（吐血）

横島「ああっ!?　紫さん!!?」

紫「横島君に……横島君に婆扱いされるのがこんなにも辛いなんて……！」

横島「ああ、ネタに乗っかったとはいえ俺は紫さんになんてことを!!　紫さんはこんなにも可愛い女の子なのに……!!」

紫「あ、ああ……!!　横島君……!!」
横島「紫さん……!!」
龍神「……」
チルノ「なにこれ」
八雲紫。自分を若く可愛く美しい女の子として扱ってくれるのは、幻想郷では横島ただ一人だけである。
※龍神の名前は千龍乃ではありません※
☆おまけ☆
～了～

第七十二話

時は横島が龍神と決着を付けたあと。龍神が消え去り、横島が意識を失ってからのこと。

気絶し、空から落ち行く横島を受け止めたのは諏訪子と幽香の二人であった。生きているのが不思議なほどに冷たくなっている身体を抱きしめ、諏訪子は横島の顔を眺めて感心したように笑みを浮かべる。

「とっくに限界ギリギリだっただろうに、最後までやりきるとは……大したもんだよ、横島君」

「ええ。それに、龍神に似た能力も持っていたようだし……つくづく飽きさせないわね、この子は」

龍神が去ったことで雨も止み、穏やかな空の上で二人は暫し横島の労をねぎらった。だが、いつまでもこうしてはいられない。忘れてしまいそうになるが、横島はつい先程まで氷漬けにされていたのだ。それこそ前述したように、今こうして生きているのが不思議に思えるほどに身体が冷たくなっている。

「おっと、流石にこのままじゃいけないね。いくら蓬莱人だからってそのまま死なせればいいってわけじゃないし、なるべくなら死んでほしくないしね」
「ええ。八意永琳の元まで急ぎましょう」
二人は横島を抱え、永琳がいるであろう場所まで空を駆ける。ほどなくして着いたその場所では、永琳と鈴仙、てゐが怪我人達の手当てをしていた。
「おーい、横島君のことも頼むよ」
「執事さんっ!?」
諏訪子の声に真っ先に反応したのはてゐであった。数分前までは鈴仙にくっつき、先程までは治療の為に怪我人達にひっつき、そして今は横島へとかぶりついている。
てゐは横島の身体に触れると一瞬でその顔を青くし、急いで永琳を呼びに行った。死体の様に、あるいはそれ以上に冷たい身体となっているのだ。その判断は流石と言える。
「横島君……!!」
やがててゐに連れられてやって来たのは永琳と妹紅、フランの三人。本来ならば美鈴も連れてきたかったのだが、未だに意識が回復していなかったので断念したのだ。
永琳は横島の脈を測ったりなどてきぱきと動く。妹紅とフランはそんな永琳の邪魔をしないようにただ見守るばかりだ。

横島のことが心配だからと居てもたってもいられずに行動に移したのだが、自分達に出来ることは何もないという現実に胸を痛めている。
「……なるほどね」
ほどなくして永琳は診察を終えた。
「どうなんだ、永琳？」
「ただお兄様、大丈夫なの？」
永琳の元に駆け寄る二人。そんな二人に落ち着くように促し、永琳は横島の状態を簡単に説明する。
「全身が凍傷に掛かってるわね。とにかく、すぐに身体を温めないといけないわ」
「分かった。――燃やせばいいんだな？」
「お待ちなさい」
背中より紅蓮の炎翼を生み出し、妹紅は横島に火炎(ぬくもり)を届けようとするが、それは永琳に遮られた。
「燃やさなくていいの。温めるだけでいいから」
「でも、こんなに冷たくなってるんだぞ!?　だったらこっちもそれ相応に火力を高めないと……!!」
「高めすぎだから!!　横島君が消し炭になっちゃうから!!」

どうも妹紅は横島の生命の危機にポンコツと化してしまったらしく、思考が短絡的かつ直接的なものへと変化してしまったらしい。

とにもかくにも永琳は何とか妹紅の説得に成功し、応急手当のやり方を教える。永琳は他にも治療をしなければならない者達が大勢存在する。少し不安はあるが、横島のことは妹紅とフランに任せようというのだ。

「いい、まずはこうして横島君の氷で濡れた服を脱がして……」

永琳が物凄く手慣れた様子で横島の衣服を剥ぎ、上半身を露出させる。服の上からではあまり想像がつかない意外にもかなり引き締まった肉体は、妹紅とフランの頬を赤く染めるには十分な破壊力を持っていた。

「そ、それでどうするんだ？　……燃やしちゃダメなんだろ？」

「何でそう頑なに燃やしたがるの……。まあ、あとの処置は簡単よ。さっきも言った通り、横島君の身体を温めてあげるの。そこで……」

「そこで……？」

もったいぶるようにタメを作り、永琳は妹紅の肩へと手を置き、爽やかに笑顔を浮かべてこう宣った。

「――――脱ぎなさい」

「……へ？」

「――――脱ぎなさい。脱いで横島君と肌を合わせなさい」
「……は？　……は？？？」
　理解が追い付かない妹紅であった。ようするに、お約束と言うやつだ。
「雪山で遭難した時のあれよ。互いに肌を合わせて寒さをしのぐってやつ。幸い妹紅の体温は結構高い方だし、横島君の回復も早くなるでしょうね」
「え、いや、でもそれは……」
　もごもごと口ごもり、ちらちらと横島の身体を見やる妹紅。横島を助けるためだと理解しているが、乙女の純情が彼女の行動を阻害している。のっぴきならない状況だと分かっているが、妹紅の乙女心ものっぴきならない状態なのである。
「ほら、ぼやぼやしない！　横島君だって脱いでるんだからおあいこよおあいこ！　むしろ横島君は気絶してるからあなたの方が得してるわよ！」
「え、ええ……？」
　永琳の勢いに呑まれ、妹紅はあれよあれよという内に普段から愛用しているシャツの前を解放させられ、その小さいながらもちゃんと女の子らしい丸みを帯びた胸を曝け出されてしまっていた。
「ほら、早くくっついて！　まずは正面からそっと寄り添うように！」
「ん……っ！」

羞恥に悶える暇もなく、妹紅は永琳の指示通りに動かされる。それだけの有無を言わさないだけの勢いが永琳にはあった。

敏感な胸の先に横島の冷たい身体が触れ、思わず全身が跳ね、声が漏れてしまう。しかし、これは横島のためなのだ。妹紅はそこで止まらず、先端だけでなく胸全体、そして全身で横島に密着してその身体に熱を贈る。

冷たい横島の身体に触れているというのに、妹紅の身体は熱くなる一方であった。むしろ、触れた部分が熱くなってくるような、そんな感覚さえ覚えてしまう始末だ。

胸の先端が痛い程の熱を帯びている。だが、痛みだけでなく、どこか心地よさ――――ささやかな快感すらも感じ始めていた。

「いいわ！　いいわよ妹紅！　もっと密着して!!　横島君の首筋に顔を埋めたりとかしてごらんなさい!!」

どこか興奮しているかのような声で永琳は妹紅に指示を与える。気のせいでなければ妹紅の耳にはバシャバシャとカメラのシャッターを切る音も届いている。

しかし、今の妹紅にはそんなことはどうでもよいことであった。こうして横島と肌を合わせる――――それがどこか途方もない程に大切なことなのだと思い始めていたからだ。

自らの体温が横島に伝わり、その熱が彼を温める。それの何と素晴らしいことか。互

いの体温の交換。妹紅はこの行為に、確かな〝何か〟を感じたのだ。
「あ、あの……私も何か出来ることはないかな……？」
「フランちゃん……」
おずおずと永琳に話しかけたのはフランだ。妹紅達の姿を見て顔を真っ赤に染めており、それでも己も何かをしなければという決意を持っているのである。そこにはどこか妹紅に対する対抗心もあったかもしれないが、フランは基本的に己よりも他人を見て行動する少女だ。横島の――――愛する男の為に何かをしたいというのは当然であろう。
「フランちゃん……分かったわ。――――あなたも脱いで、今度は背中にくっつきましょう！　フランちゃんも体温は（吸血鬼にしては）高い方だし、これで治療は盤石だわ!!」
そして、そんな健気な少女相手にこういうことをやってくれるのが月の頭脳改め月の煩悩である八意永琳様である。
フランはいつの間にか服の前をはだけさせられ、永琳の導くままに横島の背中に張り付いた。フランは敏感な部分が触れてもそれだけでそういう感覚を得られるほどに身体が成長してはいないが、それでも大好きな人と肌を重ねることには心地よさを覚えていた。

その感覚をフランは不謹慎であると感じているが、それでもその感覚には抗えず、少々の自己嫌悪が混ざったある種の快感を享受する。

「いいわよ二人とも!!　もっと……もっとくっついて!!　横島君の足を自分の足で挟み込んだりして!!　それから……そう!!　肌を擦り合わせるの!!　摩擦でより高い熱を生み出すのよ!!」

事ここに至って妹紅もフランも永琳の言葉には逆らわない。否、逆らえない、と言った方がより適切か。永琳の言葉通りに動けば、二人は気持ちよくなれるのだ。その快感の誘惑に二人は抗うことすら考えない。

触れ合う肌が熱い。自然と息が上がってくる。横島も意識は無いのに何をされているのか身体が理解しているのか、彼の男の象徴たる部分が強烈にその存在をアピールし、ラインが繋がっている妹紅に更なる興奮を呼び起こしている。

周囲の者達……意識のある少女達はその桃色空間を興味深そうに眺めている。大妖精はもじもじとしながらチルノを抱きしめる力を強めているし、霊夢は紫の面倒を見ながらも両の眼を見開いて観察し、ついさっき目が覚めたパチュリーは「むきゅー」と鼻息を荒くしながら後で永琳に写真の焼き増しを頼もうと決意している。写真をネタに横島をいじめるつもりらしい。

「いい……!!　いい表情よ妹紅!!　素晴らしいわね!!　若い子達の肌と肌とのぶつかり

合い!!　んっんーんっんーんっんー!!」

　くねくねと身体を揺らしながら、それでいて手に持ったカメラは一切揺らさずに姿勢を低くしてシャッターを切り続ける姿は正に変態であり、変質者そのものであった。

　このまま永琳の蛮行を止める者は現れず、永琳の欲望のままに最後の一線を越えてしまうのか？

「――――おい」

「ひょ？」

　当然そんなわけはなく、永琳は小さな手で背後から頭を掴まれ、万力の如き強烈な握力で頭蓋を砕かれんばかりに締め付けられる。

「人の妹達に何をやらせているんだ、お前は……？」

「あ、あば、あばばばばば……!!？」

　永琳を以ってしても逆らえないほどの強靭な腕力で無理やり首を後ろに向けさせられる。果たして、そこにいたのは〝闇〟であった。

　獲物の返り血で染まり、その身をどす黒く彩る、闇よりも尚禍々しい紅い月。その者を形容するならば、そんな言葉が似合いそうだ。

　最愛の妹と、未来の妹（倍以上年上）に対する狼藉に、レミリアは怒りからそれはもう先程までの消耗など考えられないくらいに魔力を溢れさせている。その強さ、普段の

十倍……否、五十倍はあろうか。今ならば単身月に乗り込んでもレミリア無双が出来てしまう程に魔力が充実している。

「Ｔｈｉｓ（こっち）　ｗａｙ（だ）……Ｆｏｌｌｏｗ（ついて）　ｍｅ（来い）」

「つ、ついて来いも何も頭ぁーーーーーー!?」

永琳はレミリアに頭を掴まれたまま、森の奥へと連れ去られてしまう。他の者達はもちろん、妹紅達もそんな永琳を無言で見送った。妹紅もフランも未だ眼がとろんと緩んでおり、一体何が起きたのかまでは分かってはいないが、流石に至近距離であれ程までに強烈な魔力が渦巻いていてはそちらに注目せざるを得なかったのだ。

横島と肌を合わせた状態で放置された妹紅達二人はこれからどうすればいいのかが分からない。とりあえず横島への治療を最優先で行いたいのだが、永琳は連れ去られてしまったし、同じく頼りになりそうな鈴仙は妹紅達に視線を合わせないようにしながら動き回っている。てゐは鈴仙に何故か拘束されていた。

「妹紅妹紅」

「……ん？　あ、輝夜」

途方に暮れていた妹紅の前に現れたのは輝夜であった。

「どうやら横島さんは回復してきたみたいよ」

「……そうなのか？」

ぴったりとくっついていた上半身を離し、妹紅は横島の裸体を見やる。先程までの行為を思い出して顔がまたも赤く染まるが、それを抑えて注視してみれば、なるほど、確かに横島の血色は良くなっていた。

「横島さんは元々回復力が凄く高かったし、それが蓬莱人になって更に強化されたみたいね」

「そっか……良かった」

そう、永琳が全身凍傷の横島にあのような措置をとったのは、実は横島を診た時点で既に回復していたからなのだ。後は冷えた身体を温めるだけ……。ならば、ここは恋人達にひと肌脱いでもらいましょうか、と欲望の囁くままに暴走してしまったのが真相だ。活躍の機会がなく、鬱憤が溜まっていたらしい。

横島とラインが繋がっている妹紅がそれに気付かなかったのは、元々二者間に繋がっているラインは精神的なものであり、肉体的なものではないからである。特に蓬莱人は肉体を魂の付属物としてしまっているので、余計に感知することが難しくなっているのだ。

「それはともかく、妹紅？　あなた、こう、身体が熱くなって胸や下腹の辺りがキュンとして疼いてるような感覚はない？」

「え？　……っと、ある、けど」

妹紅は乱れた服を直しつつ、輝夜の問いに答える。それは今まさに妹紅の身体を襲っている、やり場のない焦燥にも近い感覚を指していた。もどかしそうに身をよじるその姿は、少女然とした妹紅の容姿に似合わぬむっとした色気を醸し出している。

「それの解消法を私は知っている……さ、ついて来て。早くスッキリしたいでしょ？」

「え？　いやでも横島とフランを置いていくわけには……」

「いーからいーから！　フランちゃん、ちょっと妹紅借りるからねー！」

「お、おいちょっと!?　――あれ？　何か前にもこんなことがあったような……？」

永琳、更には妹紅まで連れ去られて、フランはただただポカンと口を開けて呆けるしか出来なかった。これから私にどうしろと……？　そんな言葉が頭をぐるぐると回るが、周囲を見ても誰も自分を助けてくれそうにない。そのことにフランは少しだけ頬を膨らませるが、なに、物は考えようだ。

「……ただお兄様」

自分を守ってくれた人。自分を救い上げてくれた人。そんな人が、今は自分の腕の中で眠っている。安らか……とまではいかないのが残念ではあるが、それでも今の現実に比べれば大したことではない、と思ってしまう。そんな自分をどうかと思うが、彼はこんな自分を好きになってくれたのだ。遠慮なく、今はこの温もりと重みを堪能させてもらうとしよう。

「……ふふふ」

胸いっぱいに横島の匂いを吸い、ほうと息を吐く。フランは一人、幸せに包まれていた。

……ちなみに横島の前面を覆い隠していた妹紅がいなくなったことにより、横島の男の象徴がズボン越しに屹立しているのを多数の少女が目撃している。

ある少女はそれを見てよだれを垂らし、ある少女は興味のないふりをしながらもチラチラと視線を送り、ある少女はその規格外っぷりに顔を真っ赤に染めながらも恐怖に慄いている。

その後、同時に二つの場所から超巨大な真紅の十字架と火柱が出現したりしたが、そんなことはその場の皆からすればどうでもよいことであった。ただ、夜空に二人の蓬莱人の爽やかな笑顔が浮かんだ気はしたが……完全に無視されたのでした。

第七十二話

『ずっと前から』

さて、そんなこんながあった夜から数日後の夜。紅魔館の中庭では今回の龍神による異変解決の宴会が開かれていた。椅子とテーブルを用意したりシートを敷いたり、皆が思い思いの形で宴会を楽しんでいる。

妖精メイド達が騒々しく叫びながら配膳したりする姿をしり目に、招待された者達は酒に食事に大忙しだ。

中にはチルノ・龍神と一緒に酒を呑む霊夢・紫といった静かな組もあるが、多くは普段通りの騒がしさである。

「いやー、正直どうなることかと思ったが、何とか丸く収まって良かったな」

「そうですね。龍神様が張っていた結界で被害が最小限に済んだおかげですね」

「……まあ、発端もあっちだから何か微妙な感じだが……」

「あはは……」

横島は紅魔館の執事であるが、ここ数週間で大怪我を何度も負っていたために準備やら何やらを免れていた。本人は嬉々として準備に参加しようとしていたのだが、これを紅魔館、永遠亭総員で説得。横島は渋々それを受け入れるのであった。横島は女の子達への承認欲求からワーカーホリックになったタイプの人間なので、何もせずに休んでい

るのは逆に精神的に辛いことになってしまっている。
　ちなみに咲夜も横島同様にレミリア直々に休むように言われているため、給仕はしていない。彼女は完璧主義プラスレミリアへの忠義からワーカーホリックになったので、妖精メイド達の仕事の出来に、胃が破れる思いである。……二人とも体調が悪化するのでは？
「それにしても……」
　横島はちらりと己の胸を見やる。現在、横島と席を共にしているのは二人の少女。シートの上で背中合わせに座り、地に着いた手を重ね合わせている小悪魔。これは彼女が憧れていた座り方の一つであるらしく、終始ニコニコと笑顔を絶やさないでいる。
　そしてもう一人なのだが、その少女は横島の前面に抱き着く……と言うよりは張り付いており、その姿勢、格好からも抱っこちゃん人形を彷彿とさせる。横島の胸に顔を擦り付け、匂いを堪能するのはてゐだ。彼女の表情はとても幸せそうに緩んでおり、餅や饅頭で出来ていると言われてもついつい納得してしまいそうになるほどのとろけぶりだ。
「普段からはあまり想像出来ない……いえ、そうでもありませんね」
「そうか？」
　小悪魔もてゐの様子が気になったのか、いったん姿勢を崩し、片方の手を繋いだまま

横島の隣へと移動する。横島は空いた手をてゐの頭に置く。するとてゐはその手に自らの頭部を擦り付けるように動き、ぐいぐいとその内側へ入り、今度は掌に頬を擦り付けた。その小動物が甘えてくるような仕草に興が乗った横島は小悪魔に断って繋いでいた手を離し、てゐの両頬を挟むように弄り始めた。

「うりうり」

「んんー……♪」

「てゐさん可愛い……！」

横島に続き、小悪魔もてゐの頬を指でつっつく。二人から責められる（語弊）てゐは、それでも幸せそうに微笑むのだ。

さて、この二人と横島の距離が以前よりも遥かに近くなっているのには当然理由がある。もうお分かりであろうが、二人の告白を横島が受け入れたためだ。

三人の雰囲気が変わったことに、皆はすぐに気が付いた。新たな恋人達の誕生に、宴会の熱は更に上がっていく。中には横島に対して「ロリコン」と言って一瞬で横島の胃に穴を開けた紅白の少女がいたり、「……」と無言で祝福するべきか罵るべきか迷っている複雑な視線で横島を睨みつける現人神がいたり、うずうずとお説教をしたそうに横島を眺める僧侶がいたり。

「……幸せそうにしちゃって。ま、念願叶ったんだから当然だろうけど」

そして、ここにも小悪魔と……そして、てゐに祝福の視線を送る少女が一人。一号特製ローストビーフを食べている鈴仙だ。互いに見つめ合い笑みを浮かべる三人に対し、鈴仙も知らず微笑みを浮かべる。美鈴の時と同じく彼女達の想いを知っており、そして何よりもずっと長い時間を共有してきたてゐの恋が成就したのだ。その感動も一入だろう。更に加えればもう一つ、鈴仙の視線が強くなる理由が存在する。

「やふー、うどんげ。ちゃんと食べてるー？」

「ひ、姫様？　どうしてここに……というか食べ歩きはお行儀悪いですよ」

てゐ達を見つめていた鈴仙の元に輝夜が訪ねてくる。彼女は皿の上に盛った和食達を食べながらの登場であり、お姫様であるのにその行儀の悪さは鈴仙として看過出来ないものであるのだが、輝夜はそれを気にしない。例えそういった行為でも輝夜が行えば気品溢れる姿として映え、万人が羨む芸術となるのだ。

「まあまあそんなことより。遠くから見つめてないで、あの中に入れてもらったらどう？」

「いやいや、流石にあの中に入るのは出来ませんよ。ＫＹなんてレベルじゃないですし」

恋人達の語らいの中に部外者が入る。これほど無粋なこともないだろう。妹紅達だって新しく自分達と同じ恋人という輪の中に入ってきた二人の為に空気を読んで遠慮しているのだ。鈴仙はそう言って断りを入れるのだが、輝夜は鈴仙の中に存在するほ

んのわずかな感情のゆらぎを見逃さなかった。
「ふーん……？　そのわりには随分と眼に力が入ってたけど」
「え？」
「イナバ……てゐを取られたことでそうなるわけじゃなし、あの眼の理由はむしろ……てゐが羨ましかったのかしら？」
　鈴仙は輝夜の言葉を聞き、大きく眼を見開いた。自らの心の中に芽生えつつある、とある感情。その萌芽に目の前の少女は気が付いているというのだ。それを知り、そして己の中の淡い感情を改めて自覚したことによって鈴仙の頬は赤みを帯びる。その様子に輝夜は満足そうに頷き、更なる言葉を掛けるのだ。
「何年あなたと同じ時間を過ごしてきたと思ってるのかしら？　こう見えてあなたのことはけっこう気にかけてるの」
「あ……うぅ……」
「別に気にしなくてもいいと思うけどね。てゐも小悪魔もそういったことを気にするような性格じゃないし、むしろあなたもそうだと知ったら喜びそうなものだけど」
　輝夜の言に鈴仙は躊躇いながらも首肯を返す。確かにてゐ達二人は喜びを以って迎えてくれるだろう。しかし、自分が胸に抱く感情を自覚したからと言って、それを今すぐどうこうしようとは鈴仙は考えていなかった。

鈴仙が横島へと抱く想いは、確かに恋や愛と呼べるものだろう。しかし、それはちょっとしたことで変化が起きそうな本当に淡いものでもある。これから時を過ごし、その想いが自分にとって確固たる自信を持ち、本当に確かな恋愛感情なのだと言えるような時が来るまで、鈴仙はその想いを告げようとは思わない。

「うーん、こういうのも頑固と言うのか……まあ、鈴仙がそれで納得出来るならそれが一番だけど」

「ど、どうも……」

別に恐縮する必要はないのだが、輝夜という自らの主君とも呼べる存在に対して鈴仙はどうにも緊張が勝る。地上に逃げてきた時から比べれば随分とフランクになったものであるが、それでも無意識的に肩に力が入ってしまう。輝夜もそのことは理解しているのでそれ以上は追及せず、代わりに鈴仙への余計なお世話とも言える援護射撃を行う。

「横島さん達、おしゃべりに夢中になって新しい料理を取ってないから、持って行ってやんなさい」

「え、いやでもそれは妖精メイド達が気付くでしょうし、さっきもそういうことはしないって……」

「大丈夫、妖精メイド達には手を回してあるから」

「何やってんですか姫様!?」

一体何が大丈夫なのか、ドヤ顔でサムズアップを決める輝夜に鈴仙も今回は遠慮なくツッコんだ。そして輝夜はそんなツッコミなど意にも介さず、いいから料理を持って行けとワガママプリンセスモードに移行するのであった。こうなると輝夜は面倒くさいことこの上ない。このまま固辞し続ければ更に厄介なことをさせられかねない。大きく溜め息を吐いた鈴仙はついに折れ、様々な料理をお盆に乗せて横島達への元へと向かった。

「むふふ、これから更に面白くなりそうね……ところで永琳、何で鈴仙をけしかけなかったの？　あなたなら率先して場を引っ掻き回そうとすると思ってたんだけど……」

「……流石の私もそんなことはしないわよ……？」

いつの間にか隣に立っていた永琳に、輝夜はとても失礼な言葉を以って話しかける。永琳もその言葉はちょっとショックだったのか、いつもの軽妙な返しが出来ない。ごほん、と一つ咳ばらいをし、永琳は輝夜に逆に問いを投げる。

「輝夜こそ、あの輪の中に入らなくてもいいの？　癪ではあるけど横島君はあなたのお気に入りでしょう？　それこそ鈴仙に言ったことがそのまま当てはまると思うのだけど」

「分かってそんなこと聞くんだ？　確かに横島さんはお気に入りだけど……そういう

関係になるのなら、もう一皮剥けてもらわないと」
　輝夜の返答に永琳は沈黙する。輝夜の言葉の意味、それが持つ意味を理解したが故だ。
「……私が思っていたよりも、彼のことをよく見ているのね」
「そりゃー妹紅の未来の旦那様になる人だもの。よーーーーーく見極めないとじゃない？」
　中々に歪んだ言葉に、永琳は苦笑を浮かべてしまう。妹紅との関係も、随分と変化したものだ。歪な関係が余計に歪な形になったとも言えるが、当初よりは歓迎出来るものである……と永琳は思い込む。輝夜と妹紅、二人の間にある感情が何なのか、それが今後どういった形になるのか、それは永琳にも分からない。というか分かりたくない。よもや横島を挟んでトライアングルなラブ？　三人それぞれ愛し合ってるとか永琳そんなの認めたくない。
「一皮むけると言えば……あっちの方はずる剥けだったけどねー」
　ばふうっ、と噴き出す輝夜に永琳は慈愛の眼差しを向け、そのまま横島達に視線を戻す。すると、鈴仙に加え、いつの間にか妹紅達横島の恋人達が輪に加わっていた。美少女達の中に冴えない少年が一人。しかしその実、美少女達はその少年の恋人達なのだ。
　傍から見れば理解不能・意味不明な光景なのだろう。しかし、横島という少年に深く

関わってしまった人外の者達ならば、この光景は自然に見えるだろう。……人間？　マニアックな趣味をお持ちならば可能性はあるかもしれないネ。

「……一皮剥ける。そうね、横島君にはいつか乗り越えてもらわないと」

ぽつりと永琳が言葉を零す。横島を見つめるその眼は、どこか憂いを帯びていた。幸せに映るその光景、しかし下手をすれば何もかもを失ってしまう。横島が抱える〝闇〟とはそういうものだ。

願わくば、平和な未来を。永琳は祈らずにはいられない。見上げた月は半ば以上が雲に隠れ、その様子がやがて訪れる未来を暗示しているように感じられ、永琳は人知れず溜め息を吐いた。

静かに酒を呑む四人。霊夢と紫、チルノと龍神。既に龍神からの謝罪は受け入れており、そこにわだかまりはない。しかし、ただ一つあるとすれば、それは霊夢とチルノにこそある。

チルノは皿に盛られた料理を元気よく頬張り、龍神も慣れない食事という行為に悪戦苦闘しながらもそれぞれ楽しんでいた。対する霊夢はと言うと、チラチラとチルノを気にしながら、普段の姿からは考えられないくらいにちまちまと料理をつまんでいる。そ

れも、肉類はほぼ控えて、だ。
　紫は横目で霊夢の様子を見やり、苦笑を浮かべつつ肩を竦め、肘で霊夢をつつき、行動を促した。
「あー、っと。その……チルノ？」
「ん？　ふぁに？」
　まるでハムスターの様に頬をパンパンに膨らませたチルノは、遠慮しがちに声を掛けてきた霊夢のことを気にせず、普通に応える。何も気負った様子の無いチルノに霊夢はどこか気圧されるように呻き、それでもちゃんと正面から向き合い、チルノに頭を下げた。
「今更だけど、あの時の言葉のことを謝らせてほしいの。……ひどいこと言って、ごめん。ごめんなさい」
「……」
　チルノは突然の謝罪に眼を見開き、咀嚼を止める。霊夢は紫と龍神から事の顛末を聞いていた。霊夢が現れた瞬間、どうしてチルノの意識が龍神に呑み込まれたのかもその時に聞いたのだ。
　霊夢としては特に悪気無く言った言葉であった。ああいった悪態は常であったし、弾幕ごっこの際には挑発といった煽り行為は茶飯事である。そして、〝その言葉〟もそう

いった中の一つだと思っていた。

――冷気を好む動植物はいないわ。何処に行ってもあんたは嫌われ者。

それは紛うことなき真実であり、残酷なまでに現実であり、だからこそチルノの心に深い傷として残った。何事もないように振る舞っても、その心には蟠りが残り続けていたのだ。

「……」

チルノは口内の食物を飲みこむ。霊夢の謝罪についてどう返すか、言葉を探しているのだ。沈黙したまま数十秒が過ぎ、やがて数分が経つ。チルノは霊夢を真っ直ぐに見つめ、ようやく口を開いた。

「……アタイは霊夢の言葉はウソだって思ってた。だって大ちゃんがそばにいてくれたし、リグルやルーミア、みすちーも一緒だったから。でも、霊夢に言われてみんなをよく見たら……霊夢の言うとおりだった」

チルノは誰かと触れ合うという経験がほとんどない。保護者役の幽香はチルノから漏れる冷気から植物を守るために気を張っているし、喧嘩友達である諏訪子はチルノと肉弾戦をする時以外は触れてこない。冷気の影響が少ない龍神の触覚である大妖精でさえ、近くにいることは出来ても無意識的に過度の接触は避けていたほどだ。

真実を前に打ちのめされそうになるも、それでもチルノは気丈に振る舞ってきた。己

は最強なのだから誰もついてこれないのは仕方がないのだと。そうやって己を誤魔化してきたのだ。

そして、燻った日々の中で出会ったのが横島であり、繋がったのが龍神であったのだ。

「龍神と合体したおかげでアタイは少し変わったみたい。前は周りが勝手に凍っていってたけど、今は凍らせるぞって思わないと凍らなくなった」

チルノの言葉に霊夢はそういえば、と思考を巡らせる。チルノから漏れていた強烈な冷気が、今はまるで感じられないではないか。紫に眼を向けると、彼女はこくりと頷いた。どうやらチルノは龍神と同期したことにより、力のコントロール法を身に着けたようだ。

「今のアタイならみんなに嫌われないと思う。もっと、色んな人と遊べると思う」

自分の両手を見つめ、ぎゅっと握り込む。開いた手には、綺麗な氷の結晶が収まっていた。透明な、ひまわりの形をした結晶。氷であるのに冷気を伴わず、それでいて確かな冷たさを感じる不思議な結晶体だ。チルノはそれを霊夢に投げ渡すと、屈託のない笑顔を浮かべた。

「だからさ、今度アタイといっぱい遊んでよ。それでよかったら――アタイと、友達になってほしい」

「……!!」

霊夢の謝罪を受け、チルノが求めたほんのわずかな望み。それは、霊夢と友達になりたいという思いだった。あれほど深く傷つけた。あれほど心を痛め付けた。それでもなお、チルノは霊夢との繋がりを求めたのだ。

じわりと霊夢の視界が歪む。今の気持ちをどう言葉で表そう？　上手く口が動かない。途切れ途切れの息を吸う音と吐く音が断続的に響くだけだ。ただ、その手に持つ結晶、その冷たさだけが鮮烈に感じられて。――――気付けば、霊夢はチルノを抱きしめていた。力をコントロール出来るようになったと言ってもその身体はまだ冷たかったが、それでも、命あるものとしての温もりを充分に感じることが出来た。そしてそれは、きっと初めからそうであったのだ。ただ、自分が気付かなかっただけで。

「うおぉーーー!?　何だ弾幕ファイトか!?　やってやんよこんにゃろー!!」

何を勘違いしたのか、チルノが素早く戦闘態勢を整えようとするが、首筋に温かい雫が落ちてきたのを感じ、動きを止めた。自分を抱きしめる力は強く、チルノは少しだけ息が詰まる。

「……れーむ、いたい」

「……ごめん」

また少し、力が強くなった。離しはしないと必死にしがみつく姿はまるで幼子のようであり、チルノは無理に振り払おうとは思えなかった。

「……だから」
「……ん？」
「私とあんたは――――ずっと前から、友達だったから……!!」
「……そっか」
胸に充ちる、温かな想い。〝お兄さん〟に感じていたものとは異なるが、きっと、これもずっと求め続けていたものの一つだ。
「ありがと、霊夢」
「バカ――――お礼を言うのは、こっちよ」
強く抱きしめ合う少女達を、紫と龍神が見つめる。紫は龍神の杯に酒を注ぎ、己の酒器にも酒を満たす。二人は同時に酒器を掲げ、一息に呷る。紫は安堵を込めて、龍神は決心を固めて。
その日呑んだ酒は、龍神にとって生涯忘れられない味となったのだ。

「――――みんな集まったわね」
宴会から夜が明け、陽も登り切った午後のこと。レミリアは横島以外の紅魔館と永遠

亭の主要メンバーを図書館に集めていた。レミリアはテーブルの上で手を組み、どこか不穏な空気を発している。せっかく横島と恋人になった次の日に呼び出されたてゐは不満を顔に滲ませているが、永琳から直々に顔を出すように言われては逆らいようがない。ちなみに妹紅も出席している。

ごくり、と誰かが唾を飲みこむ音が響いた。空気が変わったのを察したのだろう、レミリアはその音を切っ掛けに、口を開く。

「……ただいまより、第十三回紅魔館家族会議を始めます」

――――思い切り気構えていた妹紅と鈴仙は椅子から転げ落ちた。

第七十二話

『ずっと前から』

～了～

☆龍神戦後の会話☆

白蓮「……」
神子「……」
白蓮「また……活躍出来ませんでしたね」
神子「ああ……」
白蓮「戦闘の描写すらも……」
神子「さては作者め……私達を持て余しているな？」
布都「う、うう……」
神子「どうした？」
布都「太子様……今の我では横島殿を受け入れることが出来ませぬ……!!　太子様……!!　我を導いてくだされ……!!」
神子「受け入れ……？　あっ（察し）」（横島を見て）
白蓮「あらあらまあまあ」
※横島は現在臨戦態勢である。

☆とある謝罪の時☆
大妖精「つーん」
龍神「……」

リグル「まあまあ、大妖精」
るみゃ「そんな膨れてないで」
みすちー「その、龍神様も反省なさってるみたいで……」
大妖精「ふーんだ。いくら龍神様でもやっていいことと悪いことがあるもん。チルノちゃんの身体を乗っ取って暴れまわるなんて」
龍神「……」
大妖精「大体、何で新しい身体がそんなにチルノちゃんにそっくりなの？　角が生えてたり鱗があったり褐色肌になってる以外はチルノちゃんに瓜二つ……」
龍神「……」
大妖精「チルノちゃんに……瓜二つ……？」
龍神「……？」
大妖精「……ちょっと向こうの人気のない森の奥に行きましょう。大丈夫、怖いことなんて何もありませんから。私に身を任せてくれれば大丈夫ですから」
龍神「……？　……っ？」
リグル「待て待て待て待て」
るみゃ「何をする気なのかー!?」
みすちー「大ちゃん正気に戻ってー!?」

☆おしまい☆

第七十三話

暗い暗い、水底のような世界。それは横島の中枢たる深層心理の世界である。

たった一筋だけ差す光に向かい、横島が歩いていく。それは幾度も繰り返された光景。こちらの世界でも、あちらの世界でも、横島が命の危機に瀕した時には必ずこの場所に彼は訪れていた。……そのことを覚えていないにせよ、確かに彼はこの場所にやって来るのである。

――――……、……。

「……、……。……!!」

また、こうして会話を重ねている。横島を送り出すために、彼女は彼の背中を押すのだ。

もう現実では逢えない女性（ヒト）。横島の為に全てを擲った女性（ヒト）。――――ルシオラ。

――――いってらっしゃい、ヨコシマ。

「――――ああ、いってくる。……ルシオラ」

また、こうして別れを告げる。現実ではもう二度と逢えぬ女性（ヒト）。横島忠夫という存在

が変質したがために過去に存在した可能性は消失し、生まれ変わることが出来なくなった女性（ヒト）。

だからこそ二人は笑顔を浮かべる。二人の思い出が悲しいものにならぬように、精一杯の笑みを。

――こうして、束の間の夢のような逢瀬が終了し、横島は光を駆ける。その眼が見据える先には救うべき者がいる。そのために前へと進み続けるのだ。

そうして横島が光へと消え、意識を取り戻した瞬間、この〝場所〟には何も存在しなくなる。

ここは暗い暗い、水底のような世界。深淵の闇が支配する、横島の深層心理。

――この場所に、他の何かなど存在しないのである。

第七十三話

『頼むから休め』

「……ただいまより、第十三回紅魔館家族会議を始めます――――って、どうした妹紅に鈴仙。椅子から転げ落ちたりして……？」

「いや、だってめちゃくちゃ深刻そうな顔してたからどんな問題が発生したのかと思ったら……」

椅子を支えに立ち上がる妹紅に鈴仙。二人の顔に浮かぶ表情は呆れであった。まさか二つの派閥の中枢を集めて行われるのが家族会議だなどと、誰が思えようか。

しかし、妹紅の言葉に対してレミリアは未だ深刻な表情を崩していない。

「あー、うん。気持ちは分かるんだが……仕方がないんだ。何せ今回の議題が議題だからな」

「……で、何だよその今回の議題って？　というか本当に何で私まで……？」

椅子に座りなおした妹紅は浮かんできた疑問に首を傾げる。紅魔館に永遠亭、そのどちらにも属していない妹紅は何故自分が呼ばれたのかについてとんと見当が付かない。しかし、共に椅子から転げ落ちた仲の鈴仙は妹紅より察しが良かったのか、今回の議題について思い当たるものがあった。

「ああ、今回の議題は――――横島についてだ」

「……くわしく」

第十三回紅魔館家族会議。その議題に選ばれたのは何と横島。妹紅もようやく事情を呑み込めたのか、やや前のめりになって続きを催促する。自分の恋人に関する家族会議とは、一体どんな話し合いが行われるのか不安が過ぎる。

「うむ。横島……あいつ、私や永琳が休めと言っても全然休もうとしないんだ。内臓ほぼ全損したり全身氷漬けになったり……いくら蓬莱人だからといっても無茶が過ぎる。メンタルケアも兼ねてゆっくりと過ごしてほしいものなのだが――――咲夜」

「はい。横島さんはお嬢様の言いつけで表向き仕事を休んではいますが、私達の見ていないところで妖精メイド達の仕事を手伝っているようです。簡単なものでは洗濯物の回収、部屋の掃除、ゴミ出し。……中にはパチュリー様の要請で大図書館の本の整理なども」

レミリアの言葉を引き継いだ咲夜が明かす、横島の調査報告。そこでぽろっと出てきたパチュリーの失態に、皆が非難の眼を集中させる。パチュリー自体はさっと首ごと視線を逸らして知らぬふりをしているが、周囲からの圧力が予想以上に強いのか、冷汗をかいている。隣の席の小悪魔が少々恐ろしい目つきをしているぞ。

「……そして現在、横島さんは遊びにやって来た妖夢と剣術の修行に勤しんでいます。彼女のことなので無茶はさせないでしょうが……一度その気になるとどこまでも突っ走る子ですから……」

深い溜め息を吐きながらの咲夜の言葉に、皆は納得を示す。魂魄妖夢、彼女は真面目と言えば聞こえは良いが、それはつまり頭が固く、猪突猛進な性格の持ち主であるということでもあるのだ。そんな彼女がもし修行に熱が入ってしまえば、中々に身体に負担を掛けるようなことをしでかすかもしれない。

修行とはそういうものでもあるのだが、だからと言って今の横島にそれをさせるのは流石に憚られた。既に完治しているとはいえ横島は瀕死の重傷を負った身。それはきっと、心にも大きな傷を負っているはずなのである。せめてその傷を放置することのないようにしたいというのがレミリアや永琳の考えだ。

「なので、横島にどうやって休んでもらうかを考えたいのだが……私では良いアイディアが浮かばん。そこで、こうやって皆に集まってもらったんだ」

「ああ、それで家族会議……」

レミリアの疲れたような言葉に、幾人かの生暖かい視線が集中する。何でもない風にしているが、こうして会議を開くということはそれだけ横島を心配している証である。横島はフランの恋人。交際が順調に進めばいずれは義弟になるかもしれない、そんな存在だ。レミリア自身も横島を気に入っていることもあり、少々過保護な部分が見えている。

加えて永琳も横島には甘い部分が目立つ。自らの失態のせいで横島がこの世界に

やって来たり、かつての想い人と瓜二つなのもあってどうにも甘やかしてしまうのだ。……とはいえ、医師としても現在の横島には休んでいてもらいたいのであるが。

「――――というわけで、何か意見はないか？」

しん、と静まり返る図書館。皆が一様に一人の男の為に真剣に考えを巡らせているのだ。外からかすかに響く妖精メイド達の清掃の雄叫び。もうすっかりと慣習化してしまった、横島が考案した掃除の作法。初めの頃はただ騒がしかったが、今となっては紅魔館の日常に欠かせないものとなっている。……まあ、うるさいのはうるさいのであるが。

「はい」

「はい、輝夜」

「睡眠薬を使って強制的に休ませる」

「却下だ馬鹿者」

輝夜の素敵な意見は即座に却下されました。当然ではあるがもう少しノッてほしいというのが輝夜の偽らざる本音であった。だがそもそもの話、横島は蓬莱人となっているのでそういった薬の効果はあまり期待が出来ない。色々と異端の蓬莱人である横島であるが、基本的な部分は輝夜達とそう変わらないのである。

「はい」

「はい、てゐ」
「私が執事さんをホテルに連れ込んで――――」
「それ以上口を開けば末端からじわじわと削っていくことになるぞ？」
「……ごめんなさい」
てゐのシモな意見はレミリアの本気（マジ）の殺気に充てられて発せなくなる。だってせっかく恋人が出来たのだ。ならばそういうことをしたくなるのが男と女というものだろう。てゐはそんなヤりたい盛りの中高生のような思考を以って提案したのだった。しかしここにはフランと妹紅というおぼこがいる。あまりそういった話を聞かせないようにした方が情操教育に良いだろう。
「あ、でも……」
「ん？　パチェ、何か良い案でも浮かんだ？」
「良い案かは分からないけれど――――ホテルに連れ込むっていうのは悪くないんじゃない？」
「あー？　どういうことよ」
何かを思いついたかのようなパチュリーにレミリアは意見を求め、そしてその口から飛び出した言葉にじろりとした眼を向ける。先ほどのてゐの意見と何が違うのか、レミリアはやや不機嫌になりながらもパチュリーに続きを促した。

「つまり、気分転換も兼ねて旅行にでも行ってもらえば、ってことよ。……まあ、幻想郷内限定だから旅行って程でもないけど」

「――なるほど、その手があったか」

このパチュリーの意見にはレミリアも素直に感心を示した。目から鱗が落ちるとはこういうことを言うのか。なまじ幻想郷を知っている分、慰安に使おうなどという発想はまるでなかったのだ。幻想郷は狭いようで広い。幻想郷内に散る各派閥の者の中にも横島を気に入っている者は意外と多い。守矢神社の諏訪子などが良い例だ。（反面、早苗は横島を苦手としているが）

他にも横島の師匠関連で命蓮寺の白蓮や神霊廟の神子も横島に対して関心を持っている。こうして考えると横島は各派閥に多大な影響力を持っていると言える。もし仮に横島を二日～三日預かってくれないかと頼めば二つ返事で了承してくれるどころか、直接迎えに来るかもしれない。

「――でも、少し不味いわね」

各派閥の横島への入れ込みを確認したところ、このままではちょっとした紛争が起きるかもしれないことが懸念された。永琳は横島の周囲からの評価を色々と聞いている。もし、例えば守矢神社に横島を預かってくれと要請を出せば、即座に命蓮寺と神霊廟が異議を申し立てるだろう。以前のお茶会の様子から、特に神霊廟は熱烈に横島を勧誘し

てくるはずだ。何せ幹部の一人が横島に惹かれているのだ。こういった機会に仲を取り持とうとするのは目に見えている。

「うーん、横島さんのことだから嫌がるってことはないだろうけどねー……？」

腕を組み、うんうんと首をひねりながらも鈴仙は消極的ながらも否定的であるようだ。美少女、それも自分に好意を持ってくれている者と過ごせるのだから横島に不満はないだろう。だが、鈴仙はそれを何となく嫌がった。そこに何かしらの感情が作用したのは確かであるが、それが何なのかは本人にも分かっていない。

「となると、それ以外の派閥……？　いや、それ以前に慰安旅行をするにしても何をメインに据えるか……」

どうやら皆の中では横島を慰安旅行させるのは決定事項らしい。本人を抜きに話がぽんぽんと進んでいるが、皆はそれを一切気にしている様子はない。横島のことだから遠慮して断るのが目に見えているからである。それでもここまで強引なのは、横島にあることを自覚してもらいたいからでもある。

「ん～……ベタなのは、やっぱり温泉旅行ですかね？」

「おー、いいなぁ温泉」

「そうだねー、執事さん氷漬けだったわけだしいいかもね」

頤（おとがい）に指を当てつつ温泉旅行と呟いたのは美鈴だ。ベタ、すなわち王道。使い古されて

はいるが、良いものだからこそ皆が使うもの。王の道にして央の道、というわけだ。

「あ、でも温泉なんて幻想郷だと博麗神社くらいしかないんじゃないか？」

そう、実は博麗神社の敷地内には温泉が湧いているのである。これは過去に起きた異変が関わっており、突如地底から間欠泉が噴き出して出来たものだ。ただし、この温泉には問題もある。というのも、噴き出ているのはお湯だけではなく怨霊もなのだ。

――――旧地獄。それが幻想郷の地下に広がる巨大空間である。元々旧地獄は本当の地獄だったのであるが、閻魔による地獄のスリム化によってこの場所は地獄から切り離され、〝地獄〟は別の場所に移転した。やがて廃墟となったこの土地を〝旧地獄〟と呼ぶようになったのである。

さて、問題はこの旧地獄には未だに地獄に堕とされた浮かばれない怨霊達が残されていることなのだ。地底から地上へと噴き出す間欠泉、それに怨霊が便乗して地上へと流出するという異変があった。既にその異変は解決されているが、博麗神社の温泉には怨霊が残ってしまい、人にも妖怪にも危険な場所と化してしまっている。まあ横島程の実力があれば怨霊達など祓うのは容易いことであるし、それすらも煩わしいというのならば文珠で結界を張っても良いだろう。しかし、ここでも問題は立ちふさがる。

横島と霊夢はそれなりに親交があるし、食料の件もあって霊夢自体も横島に好意的だ。だが、博麗神社は妖怪達が集まりやすい場所である。横島が博麗神社に逗留するこ

とが知られれば、多くの者が神社に集うだろう。そして現在の横島はとある理由によりワーカーホリックとなっており、自らの身体を休めるという目的も頭から抹消して皆の世話を焼くことになる。そんな未来が見えるようだ。

「そう、だからおいそれと人が集まらないようなところで、且つ身体を休める温泉、ないしはそれに準ずる物があるところ……となると」

レミリアの言葉に、皆は三つの候補地を思い浮かべた。

「ふっ……ふっ……」

紅魔館の中庭、その片隅に重りを付けた木刀を振る横島と、それを監督する妖夢の姿があった。黙々と木刀を振り続ける横島の姿に頷きつつ、妖夢は横島の身体について考えを巡らせる。当然いやらしい意味などではなく、正しくは〝蓬莱人の身体〟についてだ。

蓬莱人とは魂を主に肉体を従とした存在。一切の変化を拒絶し、不老不死を体現した存在。より純粋なる人間であるらしい。妖夢が最も疑問に思ったのは、〝一切の変化を拒絶する〟、という部分。本当に一切の変化を拒絶するというのなら、何故横島はこう

して剣術や武術を修めることが出来るのだろう。一切の変化を拒絶するのであれば、何かを身に着けることなど出来るはずもなく、何よりも新たに覚えることも出来ないはずなのだ。

何かを覚える、何かを記憶する、何かを忘れる――それら全ては変化であり、蓬莱人が真に変化を拒絶するというのなら、蓬莱人になった瞬間から記憶は増えず、何かを覚えることも忘れることも出来ない状態でなければおかしいのである。しかし実際には横島は日々新たに物事を記憶していくし、どうでもよいことならば忘却の彼方に追いやっているだろう。それは永琳も輝夜も、そして妹紅も同じことだ。

なので妖夢は蓬莱人は変化を拒絶するのではないと考えている。では一体何なのかと問われれば、妖夢は答えに窮して何も告げることは出来なくなるだろう。現実に蓬莱人である彼等彼女等は不自然ではない程度に外見が変化したり、体重が増減などしている。

妖夢は難しいことを考えるのは苦手だ。「斬れば分かる」なんてことを大真面目に口にしたこともある。なので、妖夢は都合の良い部分にのみ考えを集中することにする。

「ふっ……ふっ……」

もうそろそろ既定の回数に到達する横島の振り棒。剣を振るうための身体作りや、姿勢の矯正を行うための鍛錬法である。妖夢は横島の振り棒を見て、己の考えが正しいの

ではないかと期待を露にする。

横島の身体、特に筋肉は蓬莱人になってからそれほど増えてはいない。むしろ蓬莱人になってから少しだけ増えてはいるのだが、妹紅達のことを鑑みれば今この状態が外見の変化の限界と見ても良いだろう。幻想郷に来た当初より少し逞しくなった彼の身体はしかし、その実とんでもない進歩を遂げている。

魂を――煩悩を削るほどの鍛錬の先、横島の筋力は飛躍的に上昇している。その一見細い身体からは到底想像出来ないほどのパワーが宿っているのだ。

蓬莱人の特性はここにある、と妖夢は見ている。神魔や妖怪達のように人の信仰や畏れを糧にして霊的に強くなるのではなく、ひたすらに鍛錬を重ねて肉体的に強くなること。人は老いることで力を弱め、経験から技術が発達する。――では、蓬莱人ならば？

若いまま筋力も衰えず、技術も磨かれ続け、鍛え続け、鍛え続け鍛え続け鍛え続け……その先に待つのは進化なのではないだろうか。肉と、骨の。

「……っ」

己の妄想染みた考えに、妖夢は背中が震えた。決してあり得ないとは言い切れない、ただそれだけの極小の可能性でしかない故にそれを否定しきれず、期待してしまう。

魂魄妖夢。彼女は真面目と言えば聞こえは良いが、それはつまり頭が固く、猪突猛進

な性格の持ち主であるということでもあるのだ。加えて周りに流されやすく、天然で思い込みが激しい。彼女の中で、未来の横島は一体どのような存在と化しているのか興味が尽きないところである。

「おーい、しっつじさーん！」

「ん？」

「おや、彼女は……？」

振り棒を終えて一息つき、何故かニヤニヤと笑みを浮かべて空想に耽っている妖夢を訝しんでいた横島は、遠くから自分に声を掛ける一人の少女の声に意識を割いた。つい先日想いを受け入れた少女、てゐがやって来たのだ。

「執事さんも妖夢もお疲れ様ー。ちょっと今お師匠様とレミリアが呼んでるから大図書館に来てほしいんだけどいいかな？」

「先生とお嬢様が？」

「なんでしょうね？」

二人して首を傾げるが、ここでこうしていても答えは出ない。てゐも疑問に答える気はないのか、口を開こうとはしなかった。とりあえず横島は汗を拭い、水に浸したタオルで身体を拭いてから言われた通りに大図書館に向かう。本当ならシャワーでも浴びたいところであるが、流石にそこまで時間を掛けたくはない。念のため最近使用出来る

ようになった文珠で『消』『臭』をすることにより、汗のにおいを消しておく。それをするなら『清』『潔』とでも使えばいいのに、変な所で抜けている横島であった。

ちなみに妖夢も横島とてゐの後に続いているのだが、二人の醸し出す雰囲気や、当たり前のように手を繋いだこと、距離の近さなどから、二人の関係の進展を察知した。

――――よ、四人目……!?　す、すごいなあ横島さん。恋人が四人も……。美鈴さんに妹紅さん、フランにてゐさん……。横島さんの女性の好みって一体……？

顔を赤くして、妖夢は横島とその恋人達について考える。実際は小悪魔を含めて恋人は五人なのであるが、現状では気付きようもないので誤解は仕方がない。彼の女性の好みについては複雑な事情が絡んでくるので、美女美少女、というのが一番的確であろう。

自分もいつか恋人が出来たらこのように手を繋いだりするのか、などと想像の羽を広げつつ、その想像が過激な所に行って首をぶんぶんと振って正気を取り戻すこと三回、ようやく一行は大図書館に到着した。不審な動きをしていた妖夢を横島達がしきりに気にしていたが、そのことに妖夢が気付くことはなかったのであった。

大図書館に入り、てゐの先導の元歩き進めて数分、一行はお目当ての場所に到着した。

「すんません、お待たせしちゃったみたいで」

「いや、気にするな。呼び出したのはこちらだからな」

自分達の姿を認め、すぐさま頭を下げる横島にレミリアは苦笑と共にそう返した。フ

ランや小悪魔が小さく手を振って来るのに手を振り返し、快活な笑みを浮かべる。立っているのもなんだから、とレミリアは三人に席を勧め、早速とばかりに本題を切り出した。

「ちょっとお前に聞きたいことがあってな」

「はあ、聞きたいこと……っすか」

咲夜が淹れてくれた紅茶を一口含み、横島は少々不安げに返す。主に呼び出され、聞きたいことがあると言われる。このシチュエーションから横島が連想するのはもはや説教だけであった。「やっぱり仕事を休みすぎなのか……」などともう救えない領域に入っているのではないかと思われても仕方のないことを考えている辺り、彼の仕事中毒っぷりは本物だ。

「お前は旅行とか好きか？」

「……旅行、っすか。まあ人並みには好きだと思いますけど……？」

レミリアの質問の意図が読めず、横島は首を傾げることしか出来ない。普段のどうでもよい時や、誰かが本当に困っている時に発揮される察しの良さを自分のため発揮されないのはどうしてだろうか。

ちらり、と永琳や咲夜と視線を合わせ、レミリアはおもむろに横島へと提案する。

「お前は休めと言っても全然休もうとしないのでな。いっそのこと慰安旅行にでも行っ

てもらおうと思ったんだよ」

「え」

その言葉は横島にとってあまりにも意外な言葉であった。本人的には充分休んでいたつもりだったのであるが、それでもまだ働きすぎだったこと。そして慰安旅行に連れて行ってもらえるということだ。

「申し訳ないが行先はこっちでいくつかに絞らせてもらったがな。後はお前の希望に任せようというわけだ」

「え、でも、いいんすか？　旅行なんてそんな……」

横島の胸中に戸惑いと疑問が渦を巻く。彼はこうして紅魔館に置いてもらっているだけでもありがたいと思っているのに、周りの者達はそれ以上のことを横島に与えてくれる。そういった環境に横島は一切の免疫を持っておらず、そのままありがたく頂戴するということが出来なかった。

「変なところで遠慮をするな。私も、他の皆も、お前には助けられているからな。お前はここ数週間で瀕死の重傷を何度も負っているんだ。身体の傷は完治していようが、心に負った傷はまだ疼いているだろう？　せめて、それが癒えるように……とな」

「お、お嬢様……!!」

思わず胸が熱くなる。レミリアの言葉に嘘はなく、真っ直ぐに横島の心に沁み込んで

いく。他の皆も横島のことを想っていることが分かるような、そんな温かい目で彼を見つめている。皆の気持ちに、横島の双眸からは熱い雫が零れ落ちる。今まで味わったことのない、幸せに過ぎる充足感が彼の全身を満たしていく。

「ふふ……それで候補地なんだが」

「っ……はい」

皆の微笑ましいものを見るような目に恥ずかしさが出てきたのか、横島は涙を拭い返事をする。レミリアは横島が落ち着くのを待って、候補地を明らかにした。

「天界と冥界と旧地獄……どこに行きたい？」

「はい、天界と冥界と、旧地獄――――」

その地名を口に出し、それが意味する場所を思い浮かべ、それを理解出来た瞬間――――。

「ふぎゃあっ!!?」

!?」

妹紅が胸を押さえて苦痛の叫びを上げて椅子から転げ落ち。

「アアーーーーーッ!?　眼がぁっ!?　眼があああぁぁぁーーーーーーーー!!?」

!?」

鈴仙が両目を押さえて床に倒れ、もがき苦しみ。

「うおおぉ……っ!!?」
「う、ぐうぅぅ……っ!!?」
「!?」
美鈴と妖夢がまるでいきなり高重力に曝されたかのように床に打ち付けられ。
「ひぎぃっ!!?」
「!?」
てゐがまるで落雷に撃たれたかのように身体をびくりと跳ねさせ、そのまま倒れ伏し。
「ぐえー!!」
「ぐ、ぐえー!!」
「急にわざとらしすぎる!?」
フランと小悪魔は瞬時にアイコンタクトを交わし、空気を読んで仲良く床にダイブした。
「何なの……!?　いきなり何なのこの状況……!!?」
さしもの輝夜と言えど、この急激な混沌具合には思考も理解も追いつかず、おろおろと狼狽えるばかりであった。唯一全ての事情を察した永琳は両目を押さえて天井を仰ぎ、「言い方を考えなさいな……」と呟くのであった。

「えーと、つまり私の言葉を誤解した横島の精神的なショックが皆に伝播したってことでいいのか？」
「ええ、その通り」
　こういうことである。横島はレミリアの「天界と冥界と旧地獄……どこに行きたい？」という言葉が死刑宣告に聞こえてしまったのである。まあ地名が地名だけにこの誤解は仕方がないと言える。そして「死ね」と言われたと勘違いした横島はあまりにも大きな精神的なショックを受けた。
　そのあおりでパスが繋がっている妹紅は心臓が止まりかけ、鈴仙は急激に輝きと激しさが増した横島の波長をもろに見てしまったことによって眼を焼かれ、美鈴は『気を遣う程度の能力』、妖夢は半霊の存在がそれぞれ横島から放たれた圧倒的な陰の気に影響されて圧し潰されそうになり、てゐは『人間を幸運にする程度の能力』が横島の不幸指数が一瞬で限界以上に振り切れてしまったのをもろに感知してしまい意識を刈り取られ、フランと小悪魔は仲間外れが嫌だったのでとりあえず倒れたのだ。
「横島の中でレミィはどんな存在になってるのかしら……」
「以前諏訪子に聞いたところによると、横島君が幻想郷内で一番信仰を捧げてる存在ら

しいわよ」
「流石はお嬢様ですね。私も信仰しております」
「ああ、うん。そう……」
横島が信仰を捧げている存在は全部で五人。諏訪子、神奈子、早苗、龍神、そしてレミリアである。割合が多い順だとレミリア、諏訪子、神奈子、早苗、龍神といった順になる。ある意味親しい順でもあるので、特に早苗と龍神の信仰具合が逆転する可能性もあったりする。ちなみに横島は仙人に信仰が必要だと理解していないので神子達のことは仲の良いお友達感覚である。
「本当に死ぬかと思った」
「ごめん、妹紅」
未だに息が荒い妹紅を、横島は優しく抱きしめながら背中をさする。他にも鈴仙の眼にヒーリングを施したり、美鈴と妖夢には霊気を送り、てゐは抱えてあやす。フランと小悪魔はただの演技だったので何もなしだ。不満そうに口を突き出してブーイングする様は二人ともが遠慮というものを良い意味でなくしてきていることの証拠と言えよう。
「……それで、その三つの候補地はどんなとこなんです？」
混沌も一通りおさまりが付いたので、横島は話を進めるためにそう聞いた。レミリア

は渡りに船と頷き、まず一つの注意を促す。
「うん、そのことなんだが。多分概要を聞いたら実質一択になる」
「ええ……？」
レミリアは永琳と共にそれぞれの候補地の特徴を挙げていく。
まずは天界。そこは天人の住む異界の理想郷である。天人とは修行の果てに悟りを開いた者であったり、功績が認められて神霊化した者が成る存在であり、そういった者達が住まう場所なのだ。一切の危険がなく、歌って踊って遊んで暮らす。それだけの場所。なので現代っ子である横島ではあまりに刺激が少なく、退屈に感じてしまうだろう事は想像に容易い。本当にただ静養するだけならこれ以上の場所はないのだが、横島はあまり乗り気にななならなかった様子。
続いて冥界。ここは罪のない死者が転生するか成仏するまでの間を幽霊として過ごす世界である。静かだが四季が存在し、春は桜、秋は紅葉が美しく、現在では行き来が容易になっているのもあって花見の名所となっているらしい。そして冥界には妖夢が庭師兼警護として仕えている主、西行寺幽々子が住む〝白玉楼〟が存在する。こちらの方も自然くらいしか見る物がなく、そういったものにあまり関心を寄せない横島では退屈だろう。白玉楼でお世話になるという手もあるが、やはりここでも何だかんだ妖夢を言い包めて仕事を手伝ったり幽々子のお世話をしたりと、働き詰めになりそうである。

では最後に旧地獄。これは前述の通りに幻想郷の地下に広がる大空間だ。そこには数多くの妖怪達が住まい、独自の生活を送っている。一部の区画では地上の人里の域を超え、外の世界にも劣らないほどのビルが何棟も建設されてビル街を構築し、その中にはなんと温泉街すら存在するのだ。更には旧地獄の中心には横島とも知り合いである古明地さとりの住む〝地霊殿〟がある。もし地霊殿に横島がやっかいになれば、世話したがりで甘やかしたがりのさとりのことだ、横島に何もさせず存分にお世話するに違いない。

「なるほど、だから実質一択ってわけっすか」

「そういうことだ。お前もただ何もせずぼーっとしてるよりは少しくらい遊びたいだろう？　旧地獄なら歓楽街もあったはずだから、他の二つよりは楽しめるだろう」

「むむむ、言い返したくはありますが事実だけに何も言い返せませんね……」

妖夢は自分の住む冥界や幽々子に軽く批判を食らったわけだが、それも間違いであるとは到底言えず歯噛みする。精々が冥界にも幽々子にも良いところはちゃんとあるのだ、と主張するくらいだが、それだけならば何も言わないでいたほうがマシなので何も言えない。

「それに地霊殿にはペットがたくさんいたはずだ。犬猫に牛、馬、ライオン……」

「ライオン!?」

「あと、何だったかな……？　くちばしの大きい……そうそう、ハシビロコウとか」
「え……ハシビロコウさんが……!?」
「さん？」
　もはや誘導と言っても差し支えないほどの旧地獄のアピール。ちょっとしたオマケ程度の考えで口に出した動物の要素に、横島が食いつく。元の世界で見たテレビ番組の中にハシビロコウの特集があり、いつか実際に見に行ってみようと思えるくらいには興味を惹かれていたらしい。
「犬もいるんだよな……シロタマの二人は元気かな……」
　動物に食いついたのはもう一つ理由があったようだ。人里や妖怪の山に行けば犬も珍しくはないだろう。何なら紅魔館にも一人働いている。しかし普段は意識せずとも、不意に元の世界を思い出した時に否応なく連想され、郷愁に駆られることがある。もちろん遠くの方から聞こえてくる「犬じゃないもん！」「何で私まで犬呼ばわりなの!?」「あのー、狼なんですけど……」「私は白狼天狗！　確かに元は狼ですが今は天狗です！」という叫びは完全に無視だ。
「それでどうする？　地霊殿には後で八雲藍にスキマを通して話をつけてもらえるし、私としては旧地獄がおすすめなんだけど」
　それはもはや完全な事後承諾でありながら決定事項であり、他の選択肢はないようで

あった。お互いにある程度の我が儘ならすんなり通るくらいの友好関係をさとりとは結んでいる。しかし実際に決めるのは横島であり、レミリアは横島がどこを選ぼうとも藍を通して先方に要請するつもりである。現在紫は休養中……主の名代として、藍は今も頑張っているのだ。

「そう……っすね。俺は――――」

悩むのもほんの数秒。横島が選んだ旅行先は――――。

第七十三話

『頼むから休め』

～了～

治療中の鈴仙

横島「ちょっと顔に触れるぞ」右手で鈴仙の両目に触れてヒーリング

鈴仙「あああああ～～～～～～、じんわりとしみるぅ～～～～～」

治療後の鈴仙

横島「鈴仙ってめっちゃ小顔だな……」自分の右手を見ながら

鈴仙「気にならない気にならない気にならない気にならない横島さんの手の感触とか手の匂いとか手の硬さとか優しい感じの霊力とか気にならない気にならない気にならない気にな――――るに決まってんでしょうがもおおおおお……!!」じたばた

第七十四話

その日、紅魔館と永遠亭の主要メンバーは玄関ホールに集まっていた。今日は横島が地底へと旅行に行く日。要はお見送りというわけである。時刻はちょうど十時頃だ。

「ティッシュとハンカチは持った？　着替えは充分？　さとりへのお土産は？」

「そんな母親みたいな……大丈夫ですって、ちゃんと用意出来てますから」

まるでお出かけ前の子供に対する母親のような咲夜の言葉に横島は苦笑する。咲夜の方が横島よりも年下であるのだが、何故だかその光景には違和感がない。最近は上司と部下というよりは友人、あるいは姉弟といった関係性へと変化してきたようである。

「横島君、これも持っていきなさい。きっと必要になるから」

「何すか、これ？」

永琳が横島へと渡したのは何本かのビンが入った袋。その中身と用途を説明され、横島は納得すると懐へとしまい込んだ。さっそく物理法則を無視しだす横島にパチュリーは溜め息を吐く。息をするように常識から外れるのは勘弁願いたいようだ。

「準備は整ったようですね、横島様。それでは参りましょうか」

「……やっぱ様付けは慣れねーな」

諸々の確認を終えた横島に声を掛けたのは八雲藍。紫から横島を地底へと送り届ける役目を仰せつかっているのだ。紫は半身を失った後すぐさま横島の文珠によって回復しているが、現在は念のために休眠を行って心身の回復に努めている。元々紫は横島の元の世界の捜索を寝る間も惜しんで続けていたのだが、長期の休眠は紫にとっても必要な行為であり、ちょうど捜索も一段落ついているので少しの間休むことにしたようだ。

藍は以前と違い、横島を敬称で呼んでいる。これは龍神との戦いの際に、自らが氷漬けにされていながらも紫の命を救ったことから来ているようだ。宴会の時にはぐしゃぐしゃに泣きじゃくりながら紫と橙を抱きしめつつ横島に土下座して感謝を表す藍の姿があったそうで、以来、藍と橙は横島を様付けで呼ぶようになったのである。

「一先ずは地底の入り口である縦穴前までスキマで移動しましょうか。古明地さとりにも到着は夕方ごろと連絡も入れてありますし、地底の街を観光してから向かいましょう」

「了解っす」

藍の提案に横島は頷く。ちなみに横島は微妙に視線をずらして藍を直視しないようにしている。これは近くに輝夜もいるため、いつぞやの宴会の時の様に煩悩が暴走しないようにしているためだ。しかし、そうは言っても当たり前であるが今この場には輝夜

もいる。なので実は徐々に煩悩が高まってきているのだが、その感情はラインを通じて妹紅にも伝わってしまっている。

妹紅は隣に立っている輝夜を何故だか直視出来ないくらいに意識してしまっている自分に困惑していた。それでいてチラチラと輝夜を盗み見ては視線を外すという行動もとっている。頬が熱い。そして輝夜は輝夜で挙動不審気味な妹紅を見てどこか気まずさを覚えている。何となく初々しいカップルのような雰囲気の二人に、永琳のカメラのシャッターを切る手は止まらない。

「そんじゃ、みんな。行ってきます」

「こちらに戻る際も私がスキマを開くので」

横島は皆に手を振りながら藍が開いたスキマに入ろうとする。皆も思い思いの声を掛けて横島を送り出すのだが、レミリアがそれに少し待ったをかけた。レミリアが掛ける言葉は一つ。

「横島――――私の顔に泥を塗るような真似はするなよ？」

「――――勿論です。勿論です、レミリアお嬢様」

レミリアの言葉に、横島は家族と別れて戦場に向かう兵士のような表情で答えた。以前人里に出かけた時に咲夜から言われた時とは明らかに違うその姿。横島のレミリアへの信仰心は馬鹿に出来ないレベルに到達しているようである。

そうして、今度こそ横島は藍と共にスキマの中に入っていった。その先は地底へと繋がる縦穴。ある意味での地獄門だ。
そして、これが横島が見せた最後の姿となったのだった――――。

第七十四話
『いざ、地底へ』

「そして、これが横島が見せた最後の姿となったのだった――――」
「不穏なモノローグを流すな輝夜ぁっ！」
割とシャレにならない冗談をぶちかます輝夜に妹紅の容赦のないツッコミチョップが入る。輝夜は大きなたんこぶが出来た頭を押さえて玄関ホールの床を転がっている。
そして冗談の内容が内容だけに誰も彼女の心配などしないのであった。
「行っちゃったねー」

「行っちゃいましたねー」
「私も行きたかったなー」
「私もですよー」
　間延びした口調でフランと美鈴が顔を見合わせて不満を口にする。二人とも口を挟まずに大人しくしていたのだが、やはり納得はしていなかった。それは妹紅や小悪魔もおなじである。そして不満があるわけではないが、それを疑問に思う者も当然存在する。
「でも真面目な話、何で横島さんだけ旅行に行かせたんです？　正直てゐや妹紅達恋人と出かけたほうが癒されると思うんですけど……？」
　それを口に出したのは鈴仙だ。その疑問は妹紅達も抱いていたものであり、皆の視線は自然と永琳へと集中する。
「んー、そうね……。横島君は女性からの承認欲求でワーカーホリックになったんだけど、ここまではいい？」
　永琳の確認に皆は首肯を返す。それは今回の旅行が決定された時に皆に説明されていたことだ。
「簡単に言えば、みんながいると横島君が頑張りすぎちゃうの」
「え……っと？　それは、どういう……？」

返ってきた答えの意味がよく分からず、妹紅達は首を傾げる。ただ、横島の恋人達の中でもてゐだけは頷いていた。

「どういうことなんです、てゐさん？」

小悪魔はてゐのふかふかの耳をいじりながら問う。てゐが小悪魔の相談に乗って以来、二人は一緒に行動することが増えた。可愛いものが好きな小悪魔はよくてゐを抱きしめたり耳やしっぽをいじくりまわしている。時折やきもちを焼いたフランも参戦しているが、その感触に骨抜きになっている模様。

「簡単なことだよ」

ふふーんと得意げな笑みを浮かべながら、てゐは胸を張る。その答えに気をよくしているのだ。

「男の子はね、好きな女の子の前では格好つけたくなるものなのさ」

そうして、てゐは真理の一つを説いた。

横島は褒められるということに慣れていない。幼少の頃からそうだった。かけっこで一番になっても、テストで百点を取っても、両親からは「俺達の息子なんだから当然だな」と、努力とその成果を認めてもらうことは稀であった。真正面から褒められたのは初めて女の子にスカートめくりをした時に、父親の大樹から「それでこそ俺の息子！よくやったぞ！」と頭を撫でられた時だろうか。当然大樹は妻の百合子の手によって

血の海に沈んだのだが。そうした経験もあり、横島の褒められたい、認められたいという承認欲求は煩悩へと繋がっていったのかもしれない。

そういった少年時代から十年ほど、横島は元居た世界から外れて別の世界へと墜落した。この世界での横島の生活は元の世界と比べて順風満帆と言っても良いだろう。ここでは頑張ればその分褒めてくれる。認めてくれる。期待を掛けてくれるのだ。だからこそ、横島は皆の期待に応えようと仕事に修行に打ち込んでいる。

横島の欲求を甘えだと言う人もいるだろう。大人になれていないと言う人もいるだろう。そのせいで無理と無茶を重ねてしまうのだと。しかし、言い換えればそれほどまでに横島は飢えていたのだ。ただただ愚かなほどに〝愛〟を求めているのである。

「みんなも気付いてると思うけど、執事さんと付き合う前より付き合ってからの方が一緒の時間が短いよね？」

「……言われてみれば、確かに」

てゐの問いに、妹紅は横島のことを思い浮かべながら頷く。その際に手がてゐの耳に伸びており、ふと感じた寂しさから小悪魔がいじり倒していたふかふかの耳に触りたくなったのかもしれない。

「あれはね、執事さんが私達に〝頑張ってる俺はどないや〟アピールをしているんだよ。離れてほしくない、もっと好きになってほしいって考えからそういう風にいっちゃった

んだろーね。……可愛いなあ執事さんは!!」
「な、なるほどー」
　よだれを垂らしつつのてゐの推察にフランは少々戸惑いながらも納得を示す。しかしフランの手は妹紅達と同様てゐの耳に触れており、手触りを楽しむように蠢いている。
「でも、横島さんならもっと〝ぐお―っ！〟って迫って来そうなものですけど……？」
「確かにその方が横島さんらしいね」
　せっかくだからと自分もてゐの耳に触れる美鈴がそう疑問を投げると、耳ではなくてゐの赤ちゃんのような手触りの頬に触れていた鈴仙がそれを支持した。折角恋人という関係になったのだから色々と出来ることも増えているだろう。だというのに横島が単なるアピールだけで済ませているというのが二人には引っかかった。
　その後もあーでもない、こーでもないと話し合う横島の恋人達（鈴仙を除く）を、レミリアと永琳は沈み込んでしまう感情を抑えながら眺める。この二人は横島の状態を知っている。彼のちぐはぐな言動の理由も思い知っている。
「……どうしたの、二人とも？」
　パチュリーはレミリア達が何かを隠していることに勘付いている。一体何故話さないのか、それとも話せないのかは分からないが、パチュリーとて横島のことは気に入っ

ている。出来ることならその何かを教えてほしいと考えているが、どうにもその機会を得られそうにない。

「……いいえ、何でもないわ」

その一言でパチュリーは追及を止めた。レミリアは話したそうにしているが、それでも視線を逸らしてその小さな口を引き結ぶ。迷いはあるが話さない、という表れだ。どうやら余程に深刻な内容らしい。あるいはパチュリーでは何も出来ないから話せないのか。

――――まさか、私がその〝何か〟で横島をイジメるとか思われてるんじゃ……？

「……」

うん。ないない。絶対にない。そんなことしない。

自らの心に言い聞かせるかのようにイジメないと念じるパチュリー。そんな親友の思考を読んだのか、レミリアは溜め息を吐く。

「出来れば時間を掛けてゆっくりと治していきたいけれど……」

「荒療治は危険だものね」

それこそ、横島の心を粉々に砕きかねない。妹紅達横島の恋人の幸せの為にも失敗は許されないのだ。

「ここが地底に繋がる縦穴っすか……」

スキマを抜けた横島の眼前に広がるのは底が見えない巨大な穴。地底へと続く入り口は他にもあるらしいが、この場所こそ最初期から存在した最も有名な場所だ。この穴から地底へと向かう人間もそれなりに存在するらしいのだが、普通の方法ではどうやっても降りられそうにない。

「どっかにエレベーターでもあんのかな……？」

横島の疑問はともかく、せっかくなので二人は穴に飛び込んだ。横島は思い切り腰が引けていたが、藍に空を飛べることを指摘されて「そーいえばそーだった!!」と手を打ち鳴らし、藍を苦笑させた。落ちていく速度は比較的早いが、地底に近づくほどに周囲から光が消えていき、目で確認することが困難になってくる。横島の心臓の鼓動が恐怖で速度をどんどんと上げていく中、藍が口を開く。

「もうすぐですよ。光が見えてきました――――あれが旧都です」

底に見えた小さな光。それがどんどんと大きくなり、やがて眩い輝きへと変じる。暗闇に慣れ切っていた横島の目はそこで眩んでしまったが、やがてその光にも慣れると旧都の景観が目に入ってくる。

「おお――――おおおぉぉ……!!」

それは感嘆の呻き。紛れもなく地底であるというのに暗さを感じない街。大小様々な家屋が立ち並び、遠くに見える街並みには巨大なビル街の様なものまで存在している。地上を追われた妖怪達が住まい、元は地獄だったとは到底思えない、地上の人里よりも発展しているその街に、横島は感動すら覚えた。藍はそんな横島に笑みを浮かべつつ、着地の用意を促した。と言ってもゆっくりと降り立つだけなのであるが、何せ横島のことだ。地底の街並みに感動したまま結構な速度で地面へと突っ込むことだって考えられる。だって出会いがそうだったし。

やがてゆっくりと地面に降り立つ二人。その目の前には木造の大きな橋が存在している。縦穴と旧都を繋ぐ、入り口の様なものだ。

「この橋には番人というか守護神のような者がいましてね、これが中々厄介な性格をしているのです。今回は私もいますし観光なので橋を渡りますが、次に地底に来る時には空を飛んで行くことをお勧めします」

「うーん、普段温厚で優しい藍さんがそこまで言うとは……」

そんなに厄介な人物がいるのなら今回も無理に渡らなくてもいいのでは？　と考える横島だが、藍は実際に会ってみてどれだけ厄介な人物なのかを知ってもらおうと考えたのだろう。藍もその人物のことを心から嫌っているわけではない。だが、横島は紫の恩人であり、自らにとっても大事な存在と化した。藍は身内に甘い。地底を訪れる度に

橋を渡り、癖が強すぎる彼女に横島が不快な思いをしないようにと考えてのことだった。

「――――あら、随分と珍しいお客さんね？」

不意に横島達二人に掛けられた涼やかな声。横島が地底なのに明るい天井や橋の下などに向けていた視線を前に向けると、そこには金髪碧眼の美少女が佇んでいた。初めて見る顔なのに、横島はどこか親近感を覚える。

「あの九尾の狐が男連れで地底を訪れるだなんて、妬ましいったら――――？」

少女が藍に向けていた視線を横島に向ける。何故か強烈な視線を感じたからだ。それはほんの一瞬の出来事。しかし、当事者の二人にはそれが数分にも感じられるような時間であった。

「――――ッ!!?」
「――――ッ!!?」

二人の視線が絡み合う。瞬間、互いの身体に電流にも似た衝撃が走り抜ける。それは驚愕。そして共感。それは生き別れた家族が偶然再会出来たかのような、そんな心の奥底をざわめかせるような感覚を伴った出逢い。

横島が一歩踏み出せば少女もまた一歩を踏み出す。そうして一歩、また一歩と近付き、二人の距離はやがて恋人同士の様に近くなる。

「え？　え……？」

藍は二人の放つ雰囲気に戸惑うばかり。もしかして二人は知り合いであり、実は深い仲であったとか？　などと想像してしまう。そんな藍を置き去りに、横島と少女は同時に右手を差し出し、固い握手を交わしていた。更に左手も重ね合わせ、まるで親密な仲の男女のような雰囲気すら漂っている。

「俺は横島忠夫。……君の名は？」

「私は水橋パルスィ。……よろしくね、横島さん」

二人の眼に、言葉に宿るのは親愛、友愛、親近感、様々な感情。そう、横島とパルスィはほんの一瞬で互いのことを深く理解しあったのだ。二人に共通する理不尽な力、その類稀なる〝嫉妬力（しっとちから）〟によって――――。

「んで、今回は地底に観光に来てて――――」

「それなら向こうの区画が温泉街になってて――――」

すっかりと意気投合した二人は藍をそっちのけでにこやかに会話を交わしている。いや、見る者が見ればパルスィの心の裡に嫉妬が渦巻いているのが分かるだろう。自ら

と同等の嫉妬心を抱ける者が存在したことを妬ましく思っているのだ。
　水橋パルスィ。彼女は橋姫という妖怪であり、非常に嫉妬深い性格をしている。それは聊か常軌を逸しており、自分よりも幸福な者を見た時はもちろん、不幸な者を見た時ですら嫉妬心を抱くほどだ。そういった性格から彼女は周囲から嫌厭されており、友人も多くはない。しかし、彼女のことを理解してくれる者はちゃんと存在している。
「それで俺の目の前で西条っていう中年貴族が美神さんに――――」
「くぅっ、妬ましい妬ましい妬ましい――――」
　今も話が盛り上がっている横島もそんな存在の一人だ。横島はパルスィの嫉妬心の裏に隠れた憧れや羨望といった感情を見抜いている。普段の鈍さからは想像がつかない鋭さであるが、どうしたわけかパルスィの複雑な性格を深くまで理解出来ているようである。あるいは、これこそが二人が似た者同士であるということの証左なのであろうか。
「……あの、横島様？」
「え？　あ……っと、すんません藍さん。ついつい盛り上がっちゃって」
「いえ、それは別に……」
　まさかここまで意気投合するとは思っていなかった藍は戸惑った様子で横島に声を掛けるが、逆に横島に恐縮されてしまう。藍の思惑と違って二人の仲が良くなってし

まった。とんだ誤算ではあるが、誰かを嫌うよりも誰かを好く方が良いというのは藍も承知している。なので、藍は横島が気に入るであろう情報を開示することにした。

「じつは水橋パルスィなのですが、何とあの〝丑の刻参り〟を開発した方でもあるのです」

「何ですとっ!?」

横島は背後の藍と向き直っていたのだが、藍の言葉に首だけを〝ぐりん〟と回し、再びパルスィに向き直る。その姿はホラーそのものなのであるが、藍もパルスィも特に反応はない。二人とも妖怪であるし、そんな程度で驚くような精神は持ち合わせていないのだ。なので二人の眼に浮かぶ涙や引きつった口許に震える身体などは全て目の錯覚である。

「パルスィが、丑の刻参りを……!?」

「え、ええ……。そうだけど……」

パルスィは嫉妬の化身。そもそも丑の刻参りはこの世界では呪術効果というものはほとんど存在せず、むしろ嫉妬に駆られて行う者にこそ大きな負担を強いる行為である。これは人間の嫉妬の力を取り込み、自らの糧とするためだ。横島はそんな裏の背景を知らない。ただ彼の中に浮かぶ感情は、感謝の気持ち。横島は再度パルスィの手を握り、真っ直ぐに彼女の緑の眼を見つめる。

「――ありがとう。パルスィのおかげで、今の俺があるんだ……!!」
「……ど、どういたしまして……？」
真剣な表情の時はそこそこ格好が良い横島にパルスィの頬が淡い朱に染まる。珍しいものを見た藍は微笑みを浮かべるが、それはパルスィから見れば嘲笑にも等しい笑みである。
横島は今まで数々の呪いで使用してきた藁人形を思い出し、少しだけ誇らしい気持ちになった。これほどの美少女が生み出した呪いを己は使い続けてきたのだ。自分の嫉妬は間違っていなかったのだと。
こうして、パルスィは横島内信仰対象ランキング（幻想郷限定）の第二位に躍り出た。ちなみに一位はレミリア、三位は諏訪子である。
「それじゃ、また今度な。今度来た時には俺が作った藁人形の出来を見てくれ」
「ええ、妬ましい程に楽しみに待ってるから」
「では失礼するよ」
思わぬ時間を取ってしまったが、時刻は未だ正午前。観光に使える時間はまだまだ残っている。これから次に向かうところについて話しながら去り行く二人の背中を見送り、パルスィは妬み気に深い息を吐く。
「妬ましい。妬ましいったらないわ。本当に、本当に――羨ましい」

緑の眼が見つめる先には一人の少年の背中が映っている。その嫉妬は何なのか。その羨望はどこから来るのか。それを朧げに理解しながらも少女はただ妬むだけ。胸に宿る痛みは大きな力を与えてくれるが、それに虚しさを覚えたのは随分と久しぶりのことだった。

それからしばらく、横島と藍の二人は昼食をとる店を探しながら地底の街を巡る。やはり地底でも藍は目立つようで、二人の周囲には常に多くの者が付いて回っていた。周りを囲む者達は二人の容姿について嫉妬や優越感から陰口を叩いており、特に横島は普段は貧弱なぼーやにしか見えないことから多くの者達に嘲弄される。その度に藍が怒りの妖気を振りまいてその者達を追い払うのだが、また数分と経たぬ内に人だかりが出来る。中には藍を口説こうとする者も存在したが、藍の眼光に耐えられずその全てが逃げていった。

「……これではおちおち観光も出来ませんね」

「まあ藍さんは俺と違って超絶美人だからしゃーねーって。いよっ流石は傾国の美女！」

「やめてくださいよ、もう……」

自分の容姿にコンプレックスを持つ横島がややヤケクソ気味にやんややんやと囃し立てるが、横島の抱える劣等感について紫からある程度聞き及んでいるので、苦笑を浮かべるにとどまった。しかし、このままでは少し面白くない。なので、藍はちょっとした意趣返しをすることにした。横島の手を藍がそっと握る。

「……っ!?」

「その〝傾国の美女〟を、横島様はこうして侍らせているんですよ？　もう少し自信を持ってください」

「ほ、ほあああああ……!?　細くしなやかな指が、温もりがあああぁ……!?」

また珍妙な反応をするものだ、と藍は微笑む。余程横島の反応がツボを突いたのか、もはや藍は周囲の視線など意に介さない。そのまま食事が出来る店を探そうと手を引いて歩こうとするが、そこに一人の少女が待ったをかける。

「おやおや、真実味のない噂を聞きつけてやって来てみれば、まさか本当に九尾の狐が男連れで地底に降りて来ていたとはね。珍しいこともあったもんだ」

そう言って手に持った盃を呷るのは、金の長髪、星の印がついた赤い角を持つ少女。地底温泉街の元締めである鬼、〝星熊勇儀〟だ。勇儀の額から生える派手な模様をした角に、横島がぴくりと反応する。

「星熊勇儀……」

「藍さん、知り合いっすか？」
「ええ。紫様の親友である萃香様の友人です。彼女と同じく、〝鬼の四天王〟の一人です」
顔を寄せ合って小声で話す藍達の様子を見て、勇儀はニヤニヤといやらしい笑みを浮かべた。その表情を見た横島は背筋に少し嫌な予感が過ぎるが、それでも何とか顔に出すようなことはせず、まずは挨拶を交わそうとする。
「えっと、俺は横島忠夫。よろしく」
「ああ。私は星熊勇儀だ」
言って勇儀は右手を差し出し、横島と握手を交わす。その瞬間、勇儀の直感に反応した。……強い。鬼として戦乱をまき散らしていた勇儀の戦士としての勘が、横島の潜在能力を感知したのである。
「へえ……お前さん、相当強いね」
「……そ、そうか？」
自分の手をにぎにぎと何度も握ってくる勇儀に煩悩が反応してしまうも、彼女の発するとある特徴的な匂いのせいで湧き上がってきた煩悩も瞬時に萎えていく。これは横島の自称ライバル、伊達雪之丞が持つ匂い――――バトルジャンキーの匂いである。
「なあ、横島殿。もし時間があるなら――――」

「申し訳ありませんが、私達はこれから昼食をとる予定でして」
　危険な雰囲気を放ち始めた勇儀の言葉を遮るように、藍がやんわりと勇儀の手と横島の手を解いた。藍は勇儀の性格を知っている。せっかく身体を休める為に観光に来たというのに、戦闘行為などしていられない。それならば危険がいっぱいな地底に行くなというのはもっともであるが、藍も紫の影響を受けてうっかりが発動していたのかもしれない。
「そうなのかい？　何なら私が美味しい店を紹介しようじゃないか。飯も酒も、女だって極上だよ？　ま、流石にあんたにゃ劣るけど……具合の良さで評判の娘を何人か呼んでやろうじゃないか」
「いえいえ、お気になさらず。私達は観光でこちらに来ていますから。旅先での食事は自分の目や耳、鼻で探すのも旅情かと。あとナチュラルに色町に誘うのはやめてください」
「……」
　勇儀と藍。一見にこやかに会話をしているように見えるのだが、二人の視線の間には火花が散っていた。二人の妖気にも剣呑な色が混ざっていき、肌をピリピリと刺す。間に挟まれている横島の顔色はどんどんと悪くなっていった。
「……じゃあ単刀直入に言うけど、横島殿と一発戦らせてくんない？」

「……さては面倒くさくなりましたね？　却下です」
「ああ、やっぱりそーいう……」
　台詞だけ聞けば色事の誘いかと思える言葉であるが、勇儀の表情や身体から溢れ出る強大な妖気から『戦いたい』という欲望が漏れ出している。別の意味でヤらせてくれるのなら横島は飛びついただろうが、戦いとなれば話は別である。ちなみに勇儀の外見年齢は咲夜と同程度か少し下くらい。もはや二歳～三歳程の外見年齢差ならば普通に受け入れられるようになってしまった横島なのであった。
「別にあんたでもいいよ？　とにかく今は身体が疼いちゃってねぇ……」
「お断りします。私達は観光に来ているのです。何故そんなことをしなければ――――」
「心配しなくてもちゃんとハンデはあげるよ？　私がこの盃の酒を一滴でも零してしまえばそれであんたの勝ちさ」
「――――は？」
　びきり、と藍のこめかみに井桁が浮かぶ。普段から穏やかで優しい藍ではあるが、実はこう見えてプライドが高い。己が軽んじられるということはつまり、主である紫を軽んじられているということである。そして、心から尊敬し敬愛する主を侮辱されて笑っていられるほど、藍は穏やかでも優しくもなかった。

「……いいだろう、肉の一片までも余さずズタズタにしてやろうじゃないか、小鬼」
「へえ。そいつは楽しみだよ、野狐」
　爆発的に膨れ上がる両者の妖気。周囲で事の成り行きを眺めていた野次馬達も、遂に一人残らず逃げだしていく。それも当然だ。藍にしろ勇儀にしろ、地底の街を破壊し尽くすなど簡単に出来る程の強さを誇る。そんな二人の間に割って入り、衝突を止める者など、その場にはたった一人しか存在しなかった。
「ストップ!!　スト――――ップ!!　美人は仲良く!!　ねっ!!?」
　泣きそうな顔でありながら、それでもなけなしの勇気を振り絞った横島が二人の間に両手を広げて立ち、二人を引き離した。
「しかし、横島様……!!」
「藍さんの怒る気持ちも分かりますけど、ちょっと待ってくださいって!!」
　どうどうと藍を宥めながら、横島は藍の肩を押さえて勇儀から距離を取る。藍は横島に文句を言うが、横島はそれでも藍を抑える。何故ならば、横島も怒っていたからだ。
「星熊勇儀！　お前の挑戦、受けてやる!!」
「――――へぇ？」
「ちょ、横島様!?」
　横島は何故藍が激怒しているのかを正しく理解している。横島にとって紫は大切な

女性である。この世界に墜落する原因となった彼女であるが、横島は紫に幾度も助けられてきた。自分らしくないことは重々承知だが、今後のためにもそれでもやらねばならない時がある。

「任せてくださいって、藍さん。すぐに終わらせますから」

「横島様……？」

やや引きつってはいるが、それでも笑顔を見せ、勇儀の前に立つ。腰が引けているのはご愛敬だ。その少々情けない姿に自分の見立てが間違っていたのかと、勇儀は苦笑を浮かべてしまう。

「……そんなへっぴり腰でよくもまあ……」

「うるへーバーカ！　お前はそのへっぴり腰に負けるんだよバーカ！」

「子供ですか……」

バーカバーカと勇儀を罵る横島の姿はまさしくお子様。これには勇儀も藍も毒気を抜かれてしまい、高まっていた戦意も沈静していく。

「……ま、いいや。いいかい、横島殿。さっき八雲殿に言った通り、私が盃から一滴でも酒を零したらあんたの勝ちだ。私の勝利条件は……どうしようかね？」

「盃から酒を……ね。それならそっちの勝利条件は……」

腕を組んでうーむと唸り、やがて横島はポンと手を叩く。

「勇儀の勝利条件は――――勇儀が一発でも俺に攻撃を命中させること……で、どうだ？」

「……」

「横島様!?」

その条件に、勇儀の眼が細くなる。侮られている、と感じた。互いの勝利条件としては釣り合っているだろう。否、種族の差を考えればそれは誤りか。意識が先鋭化され、妖気が洗練されていく。思考が、身体がここ数十年はなかった純粋な戦闘状態にシフトしていく。

「……ああ、それでいいよ」

「よし。それじゃ始めるか――――」

瞬間、既に勇儀は横島の間合いに入っていた。固く握られ、引き絞られた拳。込められた妖気は人間一人吹き飛ばすには十分に過ぎる。目の前の男……横島は確かに強いだろう。見た目以上に鍛えこんでいるし、感じられる霊力も規格外だ。だが、それでも勇儀は自分の方が上だと確信している。そして、それは紛れもなく事実なのだ。横島もそれは重々承知している。

圧倒的な威力を湛えた拳が繰り出される。もはや避けようがない距離。藍も勇儀も当たる、と。そう確信した。しかし、その拳は――――。

「――――っ!!?　よ、横島様……!!」

吹き荒れる突風、巻き起こる砂ぼこり。しかし、そんなものが気にならなくなるほどのものが藍の眼には映っていた。

「な……あ……っ!?　まさか……そんな……!!?」

「くくくくくく……」

勇儀が拳を止めている。拳を……否、全身を震わせ、信じられないものを見るかのように瞳を見開いている。そして、勇儀の眼前にはそれはもう邪悪な笑みを浮かべ、自分の懐に手を突っ込んで何かをチラチラと見せている横島がいる。

「よ、横島様……？　一体何が……」

混乱する藍は二人に近付き、何がどうなったのかを確認する。どうやら横島は懐からビンを取り出したようであり、勇儀はそのビンを見て衝撃を受けているようだ。

「実在……していたのか……!!」

「その通り……。コレはこの幻想郷が出来る数百年前から数十年に数本だけが市場に出たという、幻の純米大吟醸酒――――その名を〝月の頭脳〟!!」

「――――っ!!!」

「……え」

横島が取り出したのは〝酒瓶〟。それも何やらとても貴重なお酒であるらしい。

「実はこの酒はとある人からの預かり物でな……。地底には酒好きのハイカラな角を持った鬼がいて、俺は必ず絡まれるだろう、と言われてな。友好を築けるようにって渡されたんだよ」

「な、何だってっ!!?」

横島の言葉に勇儀の眼が光り輝いた。横島が〝月の頭脳〟を右にやればそちらに顔ごと向き、左やれば同じく顔ごと向ける。しまいには口から涎を垂らして物欲しそうに見つめる始末だ。横島の口許が更に邪悪に歪む。

「くくくくく……。この酒を呑むのに、下手な酒器は使えないよなぁ……？」

「……っ!?」

「ああ、その盃。けっこうな力を感じるな。多分、かなりの逸品なんだろうなぁ……それこそ、この酒を呑むのに相応しいくらいによぉ……!!」

「く……っ!?　ううう……!!」

勇儀は追い詰められていた。こんなことで、ここ数百年は無かったほどに彼女は精神的に追いつめられていた。まさかこんなことでこれほどまでに追いつめられるとは誰も思わなかっただろう。勇儀本人や藍だってそうだ。これを見通せた者がいたとすれば、それはただ一人。この〝月の頭脳〟の生産者、八意永琳のみ――――!!

「さあ、どうする星熊勇儀!!　この酒をーーーー!!　そこらの酒器で味わうのかーーーっ

!?」

「……っ!!」

ぎりり、と勇儀の歯が鳴る。彼女は大きく息を吐き、盃を持っていない手で自分の頬を叩き――――。

「あ……!!」

ぐい、と。盃の中の酒を呑みほした。盃の中にはもう酒は一滴も残っていない。勇儀の出した横島の勝利条件は〝盃から一滴でも酒を零させる〟こと。ここに、その条件は果たされた。

「――――俺の、勝ちだ」

真っ直ぐに勇儀の眼を見据える横島。勇儀の胸に去来する感情は何か。悔しさはある。蟠りも、怒りも、情けなさもある。だが、ここに勝敗は決したのである。はっきりと言って気に食わない。気に食わないが……それでも、負けは負けだ。

「ああ。――――そして、私の敗北だ」

それは儀式だった。勝者と敗者を決定する、神聖な儀式。決して呑兵衛がお酒呑みたさに勝負をほっぽり出したわけではない。例え勇儀のお尻に犬のしっぽが生えてぶんぶん振られているような幻影が見えていたとしても、これは神聖な儀式なのだ。そこは誤解のないように。いいね？

「……えぇー」

ただ一人の見届け人となった藍は、そう口にするしかなかった。色々と衝撃すぎて上手く言葉にすることが出来ない。二人に怪我がなくて良かったが、後に遺恨が残るのではなかろうか……？

そう思う藍であったが、目の前の光景を見て考えを改める。既に横島と勇儀がおかしそうに笑みを浮かべ合っているのだ。勇儀は横島の背をバシバシと叩いているが、そこに陰湿な雰囲気は見られない。どうやら、横島の何かを気に入ったようである。

「……ふう」

こうなってしまえば勇儀もしばらくは横島を離しはしないだろう。先程は断ってしまったが、勇儀も一緒に昼食に誘ってしまおうか。二人の発する雰囲気に、藍は苦笑を零す。一体彼の何がどう気に入ったのか、酒の肴にするのも悪くはないだろう。藍は笑い合う二人の間に入っていった。

第七十四話
『いざ、地底へ』
～了～

第七十五話

横島と勇儀の勝負が終わり、彼らは場所を移して勇儀行きつけの大衆食堂にて昼食会――という名の宴会――を行っていた。

その店は大衆食堂でありながら味は絶品であり、また量も多く、そして安い。旧地獄では珍しい人間の店主兼料理人が趣味で開いている店らしく、利益などは度外視で経営しているようだ。

ただし、大半の客が客だけに酒に関しては別である。いわゆる〝どぶろく〟のような安酒もあるにはあるが、酒のメニュー表はほとんどが高級酒で埋め尽くされている。日本酒やワインにビール、ウイスキーにブランデー、リキュール、更には注文すればカクテルなども作ってくれる。その知識や腕前の出所が気になる謎の人物だ。

「さて、私に勝ったご褒美だ。ここは私が奢るよ」

「お、いいのか？　いやー悪いなー！　ゴチになりまーす！」

「一切の躊躇も遠慮もありませんね」

嬉々としてメニュー表をめくる横島に藍はここ数時間だけで何度となく浮かべた苦

笑を見せる。勇儀は横から「これとかおすすめだぞー」などと特にお気に入りの料理を紹介している。

遠慮することなく、素直に厚意を受け取る横島を勇儀は気に入ったようだ。自分に臆せず気軽に接するところも理由の一つだろう。

何せ勇儀は鬼の四天王にして旧地獄の名士の一人。かつての支配を覚えている者が大半の旧地獄では尊敬の対象であり、また畏怖の対象でもある。

横島の様にごく自然に対等に振る舞う者など本当に久しぶりに出会ったのだ。

ちなみに藍は自分の分は支払うと断りを入れたのだが、勇儀には「一人奢るのも二人奢るのも一緒だよ、喧嘩売った詫びさ」とカラカラ笑われてしまった。豪快ながら気配りも出来るらしい。

ちなみにであるが、他の席の妖怪達は勇儀たちを遠巻きに見るだけで近寄っては来ない。勇儀が己に勝ったと認めた男の存在に加え、この世のものとは思えないほどに美しい容姿の妖怪に大いに興味はあるが、店に入るなり勇儀が「私らのことは気にしないでくれ」と言ったからだ。その言葉に逆らうほどに肝の据わったものは残念ながらこの日は来店していなかった。

勇儀は周りを気にせず、楽しみで仕方がないといった風情で横島から受け取った〝月の頭脳〟をテーブルに置き、蓋を親指で軽く弾いて開栓する。勇儀は店の上得意なので

こういった持ち込みに関して融通が利くのだ。
「さて、それじゃ早速月の頭脳を……」
「あれ、今呑むのか？　かなりのレアもんだろ？」
「何言ってんだ。酒ってのは呑むためにあるんだ。後生大事に置いといたって、呑む前に死んじまったら意味がないだろう？　旨い酒ってのはパッと飲んじまうのが良いんだよ。こうして新たな友も出来たことだし、それを祝してな」
　そう言って勇儀は男らしい笑みを浮かべる。不覚にも胸がときめき、横島は勇儀のことを「姐さん」と呼びそうになる。そういうことなら、と横島は月の頭脳を星熊杯に注ごうとするが、まずは普通にと店のぐい呑みに注がせる。勇儀も横島と藍のぐい呑みに注いだ。
　横島との勝負はわざと負けたのか、と言えばそうではない。このぐい呑み、どうやら相当な価値のある物らしく、陶器の収集家が一目見て「この陶器全部と交換してくれ！」とアタッシュケースいっぱいの陶器を見せて申し出たほどらしい。店主は「ほほ、ダーメ」と断っていたが、かなりしつこく付きまとわれた。しかしそれも「このぐい呑みは勇儀さんのお気に入りなんです」と店主が告げてからはピタッと収まったようだが。
「んじゃ、今日の出会いに乾杯！」
「カンパーイ！」

「乾杯」
三人はぐい呑みを掲げ、同時に呷った。
「……っかーーー!!　こりゃあ旨い!!」
第一声を放ったのは勇儀だ。何ともオヤジ臭いことだが、それが似合っているのは彼女にとって喜ばしいことなのかは定かではない。しかし、純粋に酒の旨さをありのままに表現する彼女には余人にはない魅力があった。しかしあまりに旨かったせいか、星熊杯を使うかどうか逡巡している。ひとたび使えば、もう以前の生活には戻れないかもしれない……それほどに暴力的な旨味である。
「確かにうめーな、これ……」
深い息と共にそう言葉を零したのは横島だ。彼は元の世界にいた時に美神との付き合いで様々な高級酒の相伴にあずかっており、高校生ながらに酒の味というものを知っていた。しかし、それでもこれほどまでに強烈な旨味を持った酒というものには出逢わなかった。余程強烈だったのか、横島は知らず目じりに涙を湛えている。
「……本当に美味しい。けど、これは……」
藍は〝月の頭脳〟のあまりの旨さに驚愕と共に恐怖も感じている。紫や幽々子、萃香などから極上の酒を呑ませてもらったこともある彼女であるが、この天上と称するに値する酒の前にはそれらの酒も劣ると感じずにはいられない。むしろ藍ですら解析でき

ない未知の旨味成分が気になって仕方がない。

――――これ、中毒になったりとかはしない……よね？

少々永琳が怖くなった藍であった。

「……あ、そうだ。実はもう一本預かってた酒があってさ」

三人で〝月の頭脳〟を堪能し、その余韻に浸っていた時、横島がある人物から預かっていた酒のことを思い出す。どうやら〝月の頭脳〟の強烈なインパクトのせいで頭の隅に追いやられていたらしい。

そして横島はにゅるんと胸元から一本の酒瓶を取り出す。その様に勇儀も身体をびくっと震わせており、鬼から見ても人間（？）である横島が行うには不条理なスキルであるようだ。

「これこれ、輝夜様からの贈り物で〝竹取の娘〟っていう酒らしい」

「へー……もしかしてあの月のお姫様が作ったのかい？」

「ああ、何か竹を使った酒とか何とか」

先ほどと同様、勇儀が栓を抜き、皆に酒を注ぐ。漂ってくる香りはやや癖があるものの、どこか清冽な印象を抱かせる。一口含めば、香りとは正反対に癖がなく呑みやすい、やや甘めの風味が感じられる。

「うん、呑みやすくていいね。月の頭脳みたいに強烈な旨味はないけど、これはこれで十

分に旨い。どこかほっとする味だね」
「あー、確かになー。何となく懐かしい感じの味だわ」
「……正直こちらの方が好みですね」
藍は月の頭脳よりも竹取の娘の方が気に入ったらしい。こちらは普通に解析が出来たようで、味も好みのものだったようだ。
そうして宴会は続き、地霊殿へと向かう時間もそろそろ迫って来ている。場の雰囲気に流されてけっこうな量の酒を呑んでしまっていたが、藍は妖怪であるし横島はこう見えて意外と酒豪だ。そう簡単に酔うことはない。
「そろそろ私達はお暇を――――」
「なーに言ってんだよまだ呑みたりないだろぉー？　ほらじゃんじゃん呑めじゃんじゃん」
「ちょ、もういいって言って……あああ力が強い力が強いい……!?」
勇儀はかなり気持ちよくなっているらしく、何とか逃げ出そうとする藍を掴んで離さなかった。その様はまさに絡み酒であり、横島も美人二人が絡み合っている姿を目と心に焼き付けるのに必死で地霊殿のことは頭からスポーンと抜けていた。
二人の姿に「間に挟まりてぇ～～～」などと考えているのがバレれば一部過激派にボコボコにされるかもしれない。

「いやだから私達には約束が……」
「んー？　それなら……」
　勇儀は藍の言葉を聞き、店員に墨と筆、紙を持ってこさせ、さらさらと何事かをしたためて近くにいた鬼の男にそれを渡す。
「それを地霊殿に届けてきてくれ」
「お、俺がっすか!?」
「ん？　私の頼みが聞けないのかい？」
「お任せください!!　すぐに届けてまいりますっっっ!!」
　ニッコリ笑顔の勇儀を見た鬼の男は猛スピードで駆けて行った。気のいいところを見せても勇儀は鬼のトップの一人。こういう時には権力（暴力）の行使を一切躊躇わないのだ。
「お、横暴……!!　でも何か懐かしい……」
　こき使われる鬼の男にシンパシーを感じる横島であった。
「まったく……何て書いたんです？　ちゃんと事情を書いてくれたんですよね？」
「あー？　ちゃんと書いたよ。こっちでもてなしてるから迎えを寄越してほしいってサラサラっと簡単に」

さて、鬼の男が向かうのは地霊殿。旧地獄の中枢たる場所であると同時に、最も忌み嫌われている場所だ。それだけ旧地獄の住人が地霊殿を、古明地さとりを恐れているのである。

やがて男は地霊殿へと辿り着き、門番をしているゾンビフェアリーという死した妖精へと手紙を渡す。男はこのゾンビフェアリーが苦手であり、ヤンチャしていた頃は地霊殿へと喧嘩を売ろうと赴いたのだが、ゾンビフェアリーの姿を見て「キャアアアアア!!」とまるで絹を割くような悲鳴を上げて逃げ出したのである。

……ちなみにゾンビフェアリーは単にゾンビの真似をしているノリがいいだけの普通の妖精であるという話もあり、事の真偽は不明である。

「さとり様ー、勇儀さんからお手紙が来てますよー」

地霊殿内部、自らの主人であるさとりの執務室の扉をノックしながら、猫の耳が生えた赤毛のおさげ少女『火焔猫燐』――通称〝お燐〟が声を掛ける。さとりから入室の許可を得たお燐は「失礼しまーす」と気軽に部屋に入り、さとりに手紙を手渡した。

「何か急ぎのようだったみたいですけど、何の用なんでしょうね？」

「さあ……それは分からないけれど、今日から横島さんが滞在することになるから正直

無視したいんだけどね……」

「けっこう薄情なとこありますよね、さとり様って」

心底面倒くさそうに手紙を開けるさとりにお燐は苦笑を禁じ得ない。勇儀は旧地獄の住民たちをまとめ上げてくれる稀有な存在であるが、ごくたまにとんでもないことをやらかしてくれるはた迷惑な存在でもある。鬼としては間違っていないが、さとりからすれば頭の痛い問題だ。

「……っ!?」

「さとり様？　……え、ちょっ、さとり様!?」

「あなたはお留守番していなさい！」

そして、どうやら今回もとんでもないやらかしをしてしまったようである。

血相を変えて椅子から立ち上がり、お燐の制止の声も聞かずに走り出した。しかしお燐に留守番を言い渡すことは忘れない。目指すは横島達のいる大衆食堂である。

さとりの机に残された手紙には、こう書かれていた。

『客人は預かった。返してほしくば○○通りにある大衆食堂〝地獄に仏〟まで来られたし。――――星熊勇儀』

――――酔った勢いとは恐ろしいものである。

第七十五話
『到着、地霊殿』

「鬼の酒を呑んでみたい？」
勇儀の言葉に横島は頷いた。
「鬼の酒は強くて旨いって聞いたことがあるからさ、一回呑んでみたいんだよ。前に萃香に頼んだ時は人間にゃキツイからやめときなーって断られてさ」
「まあ確かに人間が呑むにはねぇ」
「横島様は蓬莱人ですから、大丈夫だとは思いますが……」
ぐい呑みの中の酒を揺らし、勇儀は考える。藍もああ言っているし、自分はこれだけ旨い酒を貰ったのだから、相手にも旨い酒を振る舞うべきなのでは？　勇儀の思考は十

秒で終了した。即断即決、難しいことは考えないのが勇儀である。しかし役職的に色々と難しいことも考えなくてはいけなくてストレスが溜まっているせいか、思考力が大幅に削られているようである。

「ま、いいか。あまり上等な物じゃないけど、そこらの酒よりは旨いと思うよ」

「おほー!」

店員を呼び、一般的な鬼の酒を持ってこさせ、横島の新しいグラスに注ぐ。見た目は人間の物と特に変わらず、言ってしまえば普通だ。匂いはやや甘く、日本酒とそう変わらない印象を受ける。

「では……」

くっ、とグラスを傾け、一口含む。口中に広がる味はキリっと引き締まっており、滑らかに喉を通り過ぎてゆく。鼻から抜ける匂いは甘くはあるが絡みつくことなくすっきりとしたものだ。――確かに旨い。

味の余韻に浸るほんの数秒、異変は唐突に訪れた。

「う……お、おお……っ!?」

「横島様……!?」

ぐらり、と視線が揺れる。一瞬で呼吸が乱れ、浅く早いものとなる。テーブルに手をついて身体を支えようにもその腕がガクガクと震えて力が入らない。思わず倒れそう

になる身体を藍が支えた。
「おいおい、大丈夫かい？」
「そんな、蓬莱人にこれほどの影響を与えるなど……」
「おおお、にゃんら、こえぁ……」
既に呂律すら回らなくなったのか、横島の言葉は解読が困難なものになってしまっている。たったの一口で泥酔してしまったのだ。
横島もこうなることは予想できなかった。前述の通り横島は美神と共に様々な高級酒を呑んだことがあり、その中にはアルコール度数九〇度越えというとんでもない酒もあった――横島は一瞬でダウンしたが美神は「あまり好みじゃないわね」で済ませていた――。
その経験からか横島はいくら強い酒と言ってもあれを超える程ではないだろうとたかをくくっていた。確かに度数はその酒よりも低かった。――しかし、〝鬼の酒は強い〟というのは長い歴史が紡いできた概念なのである。
さて、ここで横島忠夫という蓬莱人の特性について解説しておこう。
横島は蓬莱の薬を飲んだ純粋な蓬莱人ではなく、蓬莱人の生き胆を喰らったことによって蓬莱人となった存在だ。魂が主軸となり、肉体は存在の核足りえないのは同じであるが、横島と妹紅達では耐性や傷の治癒の速度など、色々と違いがある。

妹紅や輝夜などは病気に対する耐性も高く、病めることはないほどだ。しかし横島にはそれほどの耐性を有しておらず、普通の人間と同様に病に罹る。

妹紅達は怪我の回復速度なども尋常ではなく早いが、横島は普通の人間と同程度――ギャグシーンでは一瞬で修復するが――である。しかし、こと命に係わる程の大怪我を負った時にだけ妹紅達をも超える回復力を発揮するのだ。

一例を挙げるならば、横島が蓬莱人となる切っ掛けになった、『男』に主要内臓器官を食い尽くされた事件。いくら蓬莱人になったからと言って、これほど肉体が損傷すれば妹紅達蓬莱人でも肉体の死は免れない。

しかし、横島は永琳が治療を施したとはいえ、その状態から〝再生（リザレクション）〟することなく自然に回復して見せた。

横島は蓬莱人としての基本的な性能は妹紅達よりも遥かに劣るが、こと命の危機に瀕した場合にのみ妹紅達を超える再生力を見せるようである。

つまり今回の場合、妹紅達ならば鬼の酒が持つ概念を寄せ付けずに酔うことはない、あるいはほろ酔い気分を味わえるくらいの結果で終わったかもしれないが、横島の場合は耐性の違いから一瞬で泥酔状態に陥ってしまったというわけだ。

「うーん、こりゃ失敗だったか。とりあえず水を飲ませりゃいいのかな？」

「そうですね、あとはこんなこともあろうかと八意永琳に持たされた〝酔っ払いが一瞬

でシラフになる薬〟も飲ませましょう」
「あからさまに怪しい薬だなそれ……」
　酔って意識が混濁している横島の介抱を始める二人。周囲の妖怪たちはそんな横島を羨ましそうに眺めているが、ヤジを飛ばしたり絡んだりすることはない。勇儀の機嫌を損ねるような真似はしないのだ。
　しかし、この場にいなくても他の場所からやって来る、ということはある。何やら外が騒がしい。悲鳴や怒号、意味の分からない言葉などが聞こえてくる。しかも、それは明らかに近付いて来ている。
　何だ、と店の出入り口に目を向けたその瞬間、引き戸になっている出入口が思い切り開かれた。
「無事ですか横島さんっ!!」
　開口一番、突如現れた人物は横島の安否を確認すべく珍しく大声を上げる。その人物……この旧地獄のトップが声を張り上げる姿に、店内は静寂に包まれる。驚きと、そして恐怖と嫌悪感によってだ。
　さまよう視線がある一画に止まる。そこは横島達の席。現れた人物とは――――言わずもがな、さとりである。
「――――ふ、ふふふふふ……」

さとりから漏れる昏い笑い声、そしていつもは半目の状態の目が見開かれている姿に客達の背筋に怖気が走る。外見の不気味さもあるが、ゆっくり、少しずつ心が悲鳴を上げていく。さとりの能力が暴発し、周囲の者達のトラウマを徐々に蘇らせているからだ。

「星熊勇儀……私の大切な客人である横島さんに何をしているのです……？」

「い、いや、何をしてるって……ただ酒を呑ませただけで……」

あまりにも普段の姿から想像もできないさとりの様子に、さしもの勇儀もひるんでしまう。

「あっ、ほら！　私の心を読めば全部分かるだろ!?　私は別に何も――――」

「ええ、分かっています。心を読むまでもありません。この状況が既に証拠です」

「どうしてこういう時に限って心を読まないんだお前はぁ!?」

理不尽な断罪に勇儀は抗議の声を上げる。冷静沈着なさとりらしくない感情的な姿は傍から見れば面白いものなのであろうが、当事者になってしまっては半減どころかマイナスである。

どうにも信じてもらえないことに嘆く勇儀の姿は不謹慎ながらどこか可愛らしい。

藍は先程絡まれた仕返しなのか特に助け舟を出そうとはしていない。自らの矮小な心に自己嫌悪を抱きつつも勇儀が慌てふためく姿には愉悦を感じてしまう。

そんな混沌とした場の雰囲気に待ったをかけたのは未だ酔いの醒めぬ横島だった。
「さとりちゃ……」
「横島さん？」
ぐったりとした状態から顔を上げ、かすれた声でさとりの名を呼ぶ。それに瞬時に反応し、さとりは藍が支えている横島を預かり、途切れ途切れの言葉を聞く。その際に能力の暴発も収まったのか、トラウマを揺り動かされた周りの者達は深い息を吐いていた。そして、好奇の視線が横島達に降り注ぐ。
「結局何者なんだあの男……」
「覚妖怪（さとり）とはいったいどういう関係なんだ……？」
ぼそぼそと交わされる会話に答えは出ず、それは店全体へと広がっていく。さとりは横島から全ての話を聞き、そしてそれが真実であるかどうかを心を読んで確かめ、横島の額をぺちっと叩いた。
「鬼のお酒を呑むのはいくら何でも無茶をしすぎですよ。あなたの体質が変わったのはレミリアさんから手紙で知らされましたが、それでも限度はあるんですよ？」
「あ〜、もうしわけにゃい……」
横島はさとりの言葉に呂律の回らない言葉で謝罪をすると、藍が差し出した薬を水で嚥下した。途端、酔いが一気に醒め、晴れ晴れとした爽快な気分に包まれる。それと同

時に恐怖も感じたのだが、それは置いておこう。
「怖いくらいに一気に酔いが醒めた。怖いくらいに」
「本当に怖いくらい効きますね、この薬……」
本当に一瞬で回復した横島を再び藍に任せ、さとりは勇儀の下に歩み寄り、頭を下げる。
「疑ってすみませんでした」
「あー、いいよいいよ。私も迂闊だったし」
謝罪は受け入れられ、さとりは周囲の様子を確認すると、勇儀に暇乞いをする。
「それでは私はこの辺で失礼しますね。横島さんもお連れしたいのですが、かまいませんか？」
ちらりと視線を寄越すさとりに横島と藍の二人は首肯する。横島はすっかりと忘れていたが、もう約束の時間となっていたのだ。
さとりが素早くこの場を離れようとするのにはもう一つ理由がある。先程から皆の自分に対する恐怖や嫌悪の心の声が暴風の様に叩きつけられているのだ。さとりの読心能力は読まないようにしても対象が強い念を放っていれば自動的に読み取ってしまう。永い時を生きることによってそれらに折り合いをつけてはいるが、鬱陶しいものは鬱陶しく、悲しいものは悲しく、辛いものは辛い。

以前見たさとりよりもどこか元気のないさとりを見て一瞬疑問符を浮かべる横島であったが、すぐに理由に思い至り、手を打ち鳴らした。
「そういやさとりちゃんは心を読むんだった。すっかり忘れてた」
「ええ……？」
信じられないことを呟く横島に藍は呆れた視線を向ける。非常に重要な情報をどうして簡単に忘れられるのか。
横島は徐に立ち上がり、さとりへと歩み寄る。肩をポンと叩き、声を掛けた。
「さとりちゃん」
「はい、横島さ――――」
さとりの言葉は途中で遮られた。横島が言葉を被せたのではなく、彼の心を読み取り、その内容に思考が止まってしまったのだ。
「俺だけを見ていればいい」
「……ふえ？」
意味をなさない言葉が漏れる。
「俺の心に集中してりゃ余計なもんは見なくて済むだろ？」
明るい笑みを浮かべ、普段と何ら変わらぬ様子でそう告げる横島。その言葉を受け、徐々に顔を赤くしていくさとりはややうつむき気味で何事かを呟いた後、ゆっくりと頷

き、横島の心にのみ能力を集中させる。
普段の様々な心の声が雑多に流れ込んでくるのではなく、それらは抑えられ、よりクリアになった横島の心の声がひときわ大きく聞こえてくるようになった。中々に堪らないものがあるのか、さとりの頬の赤みがいや増した。
「それでは古明地殿、横島様を頼みます」
「え、ええ。はい。お任せください」
「今度は萃香とかも呼んで一緒に呑もうじゃないか」
「アル中にはなりたかねーんだけどなぁ」
藍と勇儀は会計を済ませて店を出、スキマで横島とさとりを地霊殿へと移動させる。
二人を見送った後、再び歓楽街へと戻ってきた二人はコリをほぐすように首や肩を回す。
「さて、何か中途半端になったし……別のとこで呑みなおそうか！」
「私は遠慮しま――」
「いいじゃないか今日は私が奢ってやるから！」
「ちょ、放してくださ……だから力が強いぃ……!!」
結局藍は勇儀に押し切られてその日一日は浴びるように酒を呑んだ。最終的には主である紫への愚痴を勇儀に聞かせていたので良い息抜きになっただろう。

ちなみに、横島はさとりとのやりとりから「彼は覚妖怪（さとり）の良い人なのではないか？」という噂が旧地獄を駆け巡ることとなる。咲夜に続きさとりも噂の被害者となるのであるが、そのことをどう思うのかは本人次第である。

「これが地霊殿かー。紅魔館よりもでかいんだな。でも、紅さが足りない」
「紅いのは紅魔館だけで十分ですよ」
地霊殿の外観を見た横島はよく分からない寸評を述べる。さとりもレミリアの〝紅〟に対するこだわりは知っているので、横島も彼女の影響を受けているのだろうとスルーすることにした。
ゾンビフェアリーが守る門を超えて正面玄関へ。ゾンビフェアリーを見て首を傾げていた横島をさとりは微笑みを浮かべて眺める。彼女達の紹介はペットにしてもらおうと考えたのだ。
「お燐、今戻ったわ」
「あ、お帰りなさいさとり様」
「お帰りなさーい」
自らドアを開けるさとりを、二人の美少女が出迎える。

一人は赤いおさげ髪に猫の耳と人の耳、計四つの耳を持ち、黒の下地に緑の模様が入ったいわゆるゴスロリのような服を着た豊かな胸の美少女。

もう一人は黒の長髪に緑のリボンを着け、大きな黒い鳥のような羽を生やした美少女。彼女は右足が鉄の様な物で覆われており、左足には何やら小さな光球がくるくるとまとわりついている。更には大きな白いマントを羽織り、内側の柄は宇宙の様になっている斬新なものだ。

胸元には大きな赤い目のような装飾品と思われるものを着けており、ついでに言えばとても豊かな胸をお持ちである。身長も高い方なので全体的なボディバランスは鈴仙にも劣らない。

「あれ。さとり様、そちらの方が……？」

何やら黒髪の美少女の羽を弄っていた赤毛の美少女が横島に目を向ける。猫の様に大きな瞳は横島の姿を捉えて放さない。

「ええ。こちらの方がお客様の横島さん。失礼のないようにしてね」

「あ、どうも。しばらくお世話になる横島忠夫です」

「やー、こちらこそどうも。あたいは〝火焔猫燐〟。名前が長いから〝お燐〟って呼んでね」

お互いに挨拶を交わす。その様をどこかうずうずとした調子で見ていた黒髪の美少

女が、次は自分の番だと満面の笑みで躍り出た。
「私は〝霊烏路空〟！　〝お空〟って呼んでね！」
「お、おう。よろしくー」
外見にやや似合わない天真爛漫な幼子の様な調子のお空に、横島は「元気がいいなあ」と押され気味だ。身長もおよそ一〇センチ程しか変わらず、横島の下がってしまった守備範囲にばっちり入ってしまっている。そして元気がいいお空が動くたびに揺れたり弾んだりする大きなお胸に目が吸い寄せられる。心なしか横島を見るさとりの目がきつくなった。
「うにゅ？　横島さんどうかしたの？」
じろじろとぶしつけな視線に晒され、しかし特に嫌悪を抱かずに純粋に疑問符を浮かべるお空。横島を観察していたお燐が横島の視線に気付き、お空の背後からチェシャ猫の様な笑みを浮かべてからかいだす。
「ふふふ、分かるよ。お空っておっきいもんね」
「うん！　毎日牛乳飲んでるからね！」
お燐の言葉にお空は得意そうな顔で右手を頭の上に置く。どうやら身長の話と勘違いしたらしい。
「でも横島さん私のおっぱい見てなかった？」

しかしお空は横島が自分のどこを見ていたのかをちゃんと理解していたらしく、何でもないようにそう疑問を口にした。突然指摘された横島は慌てて言い訳をする。
「い、いやーお空ちゃんの胸元の赤い目みたいなものは何なのかなーって思ってな！別にお空ちゃんのチチに夢中になってたわけじゃないんやー！」
「そうなんだ。これはねー、私の身体の一部で体内に収納出来たりするんだ」
「あ、ああ……そうなの」
どう考えても浅はかな嘘をあっさりと信じたお空の様子に横島が拍子抜けする。あまりに純粋なお空に少し心配になる。そんな横島を気にするでもなく、お空は胸元の赤い目を体内へと完全に収納した。
「ほら、ちゃんと身体の中に入ってるでしょ」
そういってお空は勢いよく着ているシャツの前を全開にした。確認の為に見せてくれるらしい。ボタンが弾け飛んでいるが、そんなことはどうでもよい。問題は開かれたシャツからお空の大きな胸がまろび出ていることだ。
お椀型の乳房が飛び出た勢いのまま縦横に跳ねる。やや赤みの強い先端は流麗な円に近い軌跡を描いている。
ばるんばるん、と胸が跳ね、ぐりんぐりん、と横島の目が同じように動く。いきなりのことだというのに、その超人的な動体視力で以って、彼の目はお空の胸を堪能してい

た。
「何やってんのさお空ーーーーーーー!!?」
「うにゅっ!?　お燐!?」
お空の背後にいたお燐は最初何が起こったのか理解出来なかったが、思考が追い付いた瞬間、お燐はお空の丸出しになっている乳房を隠した。背後から、鷲掴みすることによって。
「ほら、こっち！　着替えに行くよ、もぉー！」
「ちょ、痛い！　痛いよお燐ー!?」
お燐の長く、しなやかで細い指が沈み、胸の形を歪ませる。だがそこにあるのは歪さではなく淫靡さである。大きく柔らかな肉が形を変えながら、横島の視界から消えていく。
横島は片手で顔を押さえ、天井を見上げた。
――俺、あの子達に手を出さないでいられるんだろーか……？
非常に危険なことを考えながら、横島はずっと天井を見つめ続ける。全ては鼻血を零さないために。
どうやら、地霊殿での生活も横島にはかなり大変なことになりそうである。
ちなみにさとりはお空の何も考えない行動に対処が全く間に合わず、自分よりも遥か

に大きいお胸が暴れまわる姿を見たせいで精神に大ダメージを負っていた。

第七十五話
『到着、地霊殿』
～了～

妹紅「よッ……横島ッッッ」
美鈴「なっ…なんで……」
パチュリー「……」（回想）

横島『百合カップルの間にはさまりてぇ～～～～』

第七十六話

ちょっとしたハプニングもあったが、横島はさとりの案内の元、地霊殿の客室へと辿り着いた。

そこは紅魔館の自室をも超える、立派な部屋。客の身でありながらこれほど大きな部屋を使わせてもらうことに、横島は恐縮してしまう。

「いえ、お客さんなんですから気にしないでいいのでは？」

「何つーか、こういう賓客みたいな扱いは慣れてなくて……」

大きく深呼吸をして高鳴る鼓動を抑えようと努める横島に、さとりは苦笑を浮かべる。紅魔館での生活で大分マシになってはいるのだろうが、横島の根底にこびりついているコンプレックスは未だ解消されていない。横島がそれらを超えるには、何かしらの切っ掛けが必要となるだろう。

「では、これから地霊殿を案内していきますね。うちは多くのペットを飼っていますので……ええ、はい。ハシビロコウも飼ってますよ。それではまずハシビロコウに……なるほど、楽しみは最後に取っておくのですね。ではまず無難に犬や猫といったところか

ら見ていきましょうか。ええ、毛がもふもふの子もいますよ。毛が無い子も可愛いのですが……そういう子は苦手、ですか。残念です。……はい、子犬や子猫だって当然います。……ああ、いいですよね。ちっちゃな子達が身体の上に乗って甘えてくるのって。時々お燐やお空も混ざってきて――――すみません、横島さんの厚意に甘えすぎました。先日お会いした時にも礼を失していたというのに、また今回もこのようなことを……」

「あー……いや、まあ、その。別に気にしなくても大丈夫だって。俺だってあん時はともかく今は何とも思ってないし」

さとりは横島の言葉を聞くことなく、一人で言葉を重ねていく。これは横島の心を読んでいるからであり、彼女にしては珍しく饒舌に、弾むような調子で声を出していた。しかし途中で自分の非に気付き、横島に向き直って頭を下げる。柄になく、さとりは浮かれていたのだ。

己の能力を気にすることなく接してくれる、横島という新たな友人との（一方的な）語らい。心を読まれているというのに、相手を思いやる優しい心。そして本人も気付いていないだろうが、先程大衆食堂でかけられたあの言葉。それらの要因がさとりの心に妙な焦燥感にも似た感覚を与えているのだ。

それはどこか気恥しく、何か多くを語らないといけないような焦りを生み出し、横島

の感情の動きに敏感になる。
　自分のことを知ってもらいたい。でも、それ以上に横島のことを知りたい。そういった感情がさとりの中で知らずに膨れ上がり、先の様な行動へと繋がっていたのだ。
「……ありがとうございます。みっともなくはしゃいでしまって、ちょっと恥ずかしいですね」
「んなこたーねーと思うけど」
　横島はさとりと同じく心を読むことが出来る能力の持ち主であるヒャクメのことを思い浮かべる。彼女に比べれば、さとりはまだまだ大人しい部類だと考える。もっとも、横島がそう思うのはヒャクメと小竜姫のやり取りからであり、横島自身はこれと言ってヒャクメに何か酷いことをされたわけではないのであるが。……時間移動に巻き込まれた？　ははは。
「こほん。ともあれ、横島さんはお客様なんですから遠慮せずに何でも言ってくださいね。しっかりとお世話させていただきますから」
「さとりちゃんのよーな美少女に、この俺がお世話をされる……!!　ここは地獄のはずなのに実は天国なのでは……!?」
「……またあなたはそういうことを」
　少々落ち着かなくなった雰囲気を変える為に出した話は、横島の手によって再び同じ

……否、より妙な雰囲気へと変じられてしまう。〝ペット〟ではない相手に褒められることに慣れていないさとりは頬を赤く染め、やや俯きながら上目遣いに横島を軽く睨みつける。その視線は照れや羞恥といった感情が多分に込められている。ここまで思考と言動が一致しているのも珍しい。まるで飼っている動物たちの様な単純明快さだ。

さとりは不意を突かれて高鳴っている鼓動を感じながら、これからの数日間に期待と不安を抱く。こんな調子で日々を過ごしていけば、色んな意味で心臓が持たなくなるのではないか、と。

第七十六話
『地霊殿動物ふれあいパーク』

さて、そんなこんながあって次に横島が案内されたのは犬の部屋である。地霊殿では基本ペットは放し飼いであるのだが、そのペットを妖怪化したペットが育てるというこ

とになっている。

　ここ、旧地獄は怨霊が渦巻いている。地霊殿に棲む動物たちは普通の餌の他にこの怨霊達をも食べることで強力な妖怪となるのだ。そのペット妖怪はさとりに懐いており、他のまだ妖怪化していない動物たちの面倒を買って出る。それがいつの間にか習慣化したのである。

　やはり最初は古くからの人間の相棒である犬から、というわけで横島を連れて来たのであるが――――。

「横島さん……羨ましいことになってますね」

「……いや、助けてほしいんだけど」

　部屋に入った途端、横島は大量の犬に飛び掛かられた。そして多くの犬が横島に積み重なり、幻想郷名物の毛玉のような姿になってしまっている。もっふもふだ。横島も迷惑そうな口調ではあるが、その実眦が下がり、口角が上向いているので満更でもなさそうである。

「ここの子らってこんな人懐っこいの？」

「いえ、私でもここまで甘えられたことはないですね……羨ましい」

　さとりですら羨むこの状況。さとりですら体験したことがないもふもふ状態なのであるが、これには一応理由が存在している。そう、最近めっきり言及されることのな

かった横島の霊波だ。

横島の霊波は紅魔館の妖精メイド達が骨抜きになる程リラクゼーション効果が高い。人間よりも遥かに鋭敏な霊感を持つ犬、しかも地霊殿での生活で半ば妖怪化している彼等は横島の霊波が齎す癒しに目ざとく気が付いたのだ。

さとりは動物たちの心から流れ込んでくる本能的な声を捉え、危機感を持つ。

「……横島さん、私以上にペットたちに懐かれる気分はどうですか……？」

「そんな目で見んといて!?」

飼い主としてのプライド故か、さとりは横島に物凄くじっとりとした目を向ける。横島からすれば何もしていないのに理不尽であるが、それはさとりとしても同じこと。

とりあえず横島は霊波の質を意識して調節する。攻撃的になりすぎないよう注意しながら、何とか幻想郷に来る以前に近い質へと変えることに成功した。……もっとも、横島は幻想郷に来る前から人外の存在に好かれていたので、効果はあまり望めなかったのであるが。精々が数匹ほど離れたくらいである。

「むう……。では次に行きましょうか。犬の次はやはり猫。気まぐれなあの子達です。きっとこの子たちの様に一瞬で陥落することなどないでしょう」

横島から離れた数匹の子犬たちをひとしきり撫で、さとりは今度は猫の部屋へと向かう。

「ワンちゃんたちはともかく、にゃんこたちなら一瞬で陥落はしない。そう思っていた時期が私にもありました……」

　案の定、横島は部屋に入った瞬間に大量の猫たちに飛びつかれた。今の姿は新種の毛玉マーク2である。こちらも同様にもっふもふだ。

「くうっ、妬ましいですね。これがぱるぱるしいという感情ですか……」

「何だよその新しい感情は。……ほーらお前ら、さとりちゃんが寂しがってるぞー?」

「にゃー?」

　影を背負って爪を噛む姿はつい先ほど知り合ったパルスィの姿を幻視させる。なるほど、妬ましいとはつまりパルスィということなのか。横島は自分でも意味が分からないことを考えながら、猫たちにさとりを構うように声を掛ける。猫たちはさとりをじっと見つめ、そして一斉に〝ぷいっ〟と顔を背けた。気まぐれの発動である。

「そ、そんな……っ!!　これがネトラレというものなのですね……っ!!」

「大げさだし人聞きの悪いことを言うなー!?」

　猫たちの様子にショックを受けるさとりは涙目で頽れる。床に手を付いて悲嘆にくれる姿は哀愁を誘うが、理由が理由だけに滑稽に映ってしまう。しかも、そんなさとりを前にしても猫たちは横島から離れず、ずっとくっついたままだ。その中の一匹など顔や体を擦り付けたり、ぺろぺろと頬を舐めたりしてくる。その猫の尻尾は二又にわかれ

ており、耳元にはリボンが付けられていた。
「おー、なんだなんだ？　随分と甘えんぼがいるな。うりうり」
「にゃーん」
「……あら？　あなたは……」
　他の猫に比べ、積極的に甘えてくる猫を左腕一本で横抱きにし、顎や腹を優しく撫でる横島。彼のテクニックにその猫もご満悦なのか、すっかりととろけた声で鳴き、腕の中でぐでぐでの姿を晒す。どことなく息も荒くなっているのが不思議だ。しかしこの猫のおかげなのか、横島の体からは他の猫たちが離れていっている。ボス猫か何かだろうと横島は当たりをつける。
　さとりは横島の腕の中で甘えている猫を見て驚いた後、大きく溜め息を吐く。まさかこの子がこのようなことをするとは思わなかったからだ。
「わざわざその姿にまでなって、何をしているの、お燐」
「え？　お燐ちゃ――――おわぁ!?」
　さとりの言葉に呆けたような声を出した横島だが、次の瞬間には驚きの声を出さざるを得なかった。ぽんっ、という軽快な音と共に煙が発生し、腕の中の猫が姿と重さを変えて正体を現したからだ。
　咄嗟のことにも関わらず横島の腕はそれを腕一本で支えている。それは人型だ。赤

いおさげの髪に猫耳を生やした少女。さとりの言葉通り、お燐である。
　横島は腕の中にいるお燐とばっちりと目が合う。お燐は恥ずかしそうに視線を彷徨わせた後、そのまま頬を赤く染めて俯いた。確かにこの状況は恥ずかしいだろう。横島もお燐という美少女を横抱きにしているのだから照れがある。同時に特大の歓喜もあるが……お燐が顔を赤くしているのには他に理由があった。
「横島さん、そろそろお燐を下ろしてあげてください。でないとお燐のお尻が歪んでしまいます」
「さ、さとり様……っ！」
「おし……おわーーーーーっ!?　か、堪忍やー!!」
　横島は指摘された内容を理解し、お燐をさっと床に座らせて土下座へと移行する。横島は突然体積と重量が増した猫を支える為に、その体をがっしりと支えたのだ。そう、お燐のお尻の片側をがっしりと掴むことによって。小振りながらも指を跳ね返す弾力に富んだお尻だった、とは横島の心の声。さとりは椅子に座っていることが多いのでお尻が大きく、お燐の小さなお尻を羨ましく思ってたりするのはどうでもよいことである。
「いやー、横島さんが猫の部屋に行くって聞いたから、とりあえずドッキリを仕掛けようと思ったんですけどねー」

「何で初対面の人にそんなことをしようとするの……」
「まあ、びっくりはしたけど……」
照れ笑いを浮かべながら釈明するお燐にさとりは呆れたように叱り、横島は正座をしながら一応の感想を述べる。ちなみに心の中ではお燐のお尻の感触を反芻しており、それを読んださとりから頭をぺちぺちと叩かれた。
どうも地霊殿に漂う怨霊から猫の部屋に行くと話を聞き、驚かせてやろうという考えに至ったようだ。よく分からない結論である。
「まったく……とにかく、あなたは戻りなさい。横島さんの案内は私だけで大丈夫よ」
「はーい。……それじゃあ横島さん、あたいはこれで失礼するよ」
「おう、そんじゃあまた後でな」
ばいばーい、と手を振って去っていくお燐。と、不意にお燐は振り返り、最後に爆弾を残していく。
「お燐、待ちな――――」
「今晩、横島さんの部屋に行くからね！」
「っ!!?」
「優しくしてね？」
「っ!!!??」

爆弾発言の後、今度こそ去っていくお隣。残された二人の周囲の空気は何やら異様なものとなっている。

「……今のってつまり」

横島が生唾を呑み込みつつ核心に触れようとする。しかし、さとりは軽い溜め息を吐くだけだ。

「いえ、そう深い意味があるわけではなく、単純に先程の撫で方が少々強すぎたので、今度は優しく撫でてほしい、といった感じのようですね」

勘違いしてはいけませんよ、とさとりは流し目で言う。その視線は横島を震え上がらせるに十分な威力を持っていた。

「いやー、別に俺もそーゆーことは別に期待なんかしてなかったしなー！　残念だなーとかも思ってねーし―!?　……っていうかお隣ちゃんくらいの外見年齢の子に期待だとか残念だとかワイは何を考えとるんやー!!?　ワイはまだロリコンに堕ち切っていないはずなのにー!!」

「もう手遅れなのではないですか？」

「いやーーーーーー!?　さとりちゃんが言うとシャレにならないーーーーーー!!?」

頭を抱え、ＯＨ　ＮＯ！　と懊悩する横島をしり目に、さとりは赤くなった頬を押さえる。

「お燐ったら……」

その呟きと、先程読んだお燐の心。咄嗟に誤魔化しはしたが、お燐の言葉の意味はそれとは別であった。では、どういう意味だったのか……それは、言うまでもないだろう。付け加えておくならば、お燐が猫状態だった時、横島の指が尻尾の付け根に当たっていたのだ。

さて、ドキドキなハプニングも乗り越えて横島達は数々のペットたちの部屋を見て回った。ウサギやハムスターといったメジャーなペットたち。牛や豚、馬に鶏といったどちらかと言うと家畜の部屋。中にはライオンや熊といったペットと呼ぶには少しワイルド過ぎる動物たちもいたが、精々が横島が頭を噛まれるぐらいの被害で済んだのでこれといった問題は無かったと言えるだろう。むしろ、問題は今発生している。

「……」

「……さとりちゃーん……？」

さとりは廊下の壁に額を付け、そこを支点にもたれかかっている。何とも不思議な姿だが、彼女がこの体勢を取っているのにはちゃんとした理由があるのだ。

「私は……飼い主失格です……」

そう、見て回った全てのペットたちが横島の虜になっていたのだ。恐るべきは横島が

無意識に発する霊波。考えてみれば、幻想郷の各派閥のトップたちが横島と友好的なのもこの霊波が関係しているのではないだろうか。そう思えてしまう程のあり得ないほどの効果である。

「私なんて……動物を飼うだけ飼って放し飼いにして、お世話なんかを他のペットたちに押し付けるような、ダメ飼い主なんです……」

「……そこだけ聞くと否定し辛いな」

どう考えてもダメ飼い主でしかないさとりの自嘲に、流石の横島も咄嗟に慰めの言葉が出てこない。さてどうしたものか、と考えあぐねていたところ、廊下の先から一人の少女が近付いてきた。

「あれ？　さとり様と横島さんだ」

黒髪の少女、お空である。お空は不思議な姿を晒しているさとりに「さとり様ー」と名を呼びながらハグを求める。これまでのことで心に傷を負っていたさとりはそんなお空の純粋な甘えに感動し、ハグ・頬ずり・なでなでの三点セットをお見舞いする。くすぐったそうに「うにゅ～」と声を上げるお空はそれでも嬉しそうだ。

「良かった良かった。……ところで、ずっと気になってたんだけど、窓の外に見えるあのでっかい塔は何なんだ？　何か地上にまで通じてそうな感じがするけど……」

今なら色々と誤魔化せる！　と踏んだのかは定かではないが、横島はこれ幸いにとか

ねてから気になっていたことについて問うてみた。窓から見える、この旧地獄の天井にまで到達している巨大な塔。恐らくは地上にまで続いていそうなそれが、一体何のために存在しているのかが気になっていたのだ。

「ああ、あれは〝間欠泉地下センター〟と言いまして、妖怪の山の神様達と河童が開発した研究施設です」

「神様……諏訪子様たちが？」

神である二柱と研究施設の繋がりがいまいちよく分からない。そもそも一体何を研究しているというのか。それは、お空の口から語られた。

「うん。あの場所では核融合の研究をしてて、最下層では私の仕事場でもある核融合炉があるの」

「か、核融合!?」

お空から語られた衝撃の事実に、横島は驚愕せざるを得ない。核融合炉など外世界でも実現していない、言ってしまえば未だＳＦ映画や漫画アニメの中の存在と言っても過言ではないものだからだ。

「え……だ、大丈夫なのか？　放射能とか、そーゆーのは……？」

「んーとね、神様達が言ってた外の世界での核融合炉とかだと、有害な放射線が出てきちゃったりするんだけど――――」

核融合はクリーンなエネルギーである。とは言っても、現在研究・実現を目指している核融合炉に関して言えば、放射線、放射性廃棄物が生成され、燃料として放射性物質を使うものも多い。ただ核分裂によるものと比べ、核融合で造られた放射性物質は半減期が短く、無害化に時間は掛からない。……数十年から数百年を短いとするならば、だが。

このため、核融合は完全にクリーンか、というと実際はそうでもないのである。しかし、半減期が何億年ともなる放射性廃棄物を多く排出する核分裂反応との違いは大きいと言える。

さて、ではこの間欠泉地下センターで研究されている核融合炉はどういったものなのか。そも、この自然界では核融合は普通に行われている。遥か空の向こう、暗黒の宇宙にて自ら輝きを放つ恒星――――最も身近な物を言えば、太陽がそれである。

恒星の輝き、それは核融合によって発せられているのだ。

太陽は『陽子―陽子連鎖反応』によって核融合を起こしている。この反応は反応の過程で放射線を一切出さず、生成物もただのヘリウムであり、この反応ならば完全にクリーンなエネルギーと言ってしまっても構わないだろう。核融合炉の研究を『地上に太陽を作る』と例えられているのはそのためだ。……しかし、この反応を地球上で再現するのは不可能であると言われている。

だが、ここでその前提が覆る。お空の身体に宿っているのは〝太陽の化身〟である八咫烏。そう、上記の問題点を河童の超技術と八咫烏の不思議な神様パワーで超・強引に解決してしまったのだ!!

「――――とは言っても、まだまだ研究段階なので出力はまだまだ低いんだけど……」

「はー……言ってることがなんだか分からんけど……なんだか分からんけど分かったぜ！」

「それ全然分かってないじゃないですか」

専門的なことを言われてちんぷんかんぷんな横島は、とりあえず勢いだけで分かったことにした。さとりにも突っ込まれてしまうが、それでも一つだけ、本当に一つだけ横島にも分かったことがある。

「とりあえず俺達が放射能を浴びて緑色の泡になって消滅することはないんだな」

「……横島さん、放射能を何だと思ってるの……？」

意味の分からないことを宣う横島に、困惑を隠せないお空であった。

その後、横島は最後に取っておいた鳥の部屋へと案内される。お空も鳥の部屋に用があるらしいのでそのまま同行し、遂に念願のハシビロコウとの面会を果たす。

「おお……!!」

部屋にいくつも設置された止まり木、その中でも部屋の最奥に位置する止まり木に、

ハシビロコウは鎮座していた。射貫かれるような視線、とはこのことを言うのだろう。彼が送る余りにも鋭い視線は、否が応でも緊張を強いられる。

ごくり、と。知らず横島は唾を飲み込む。お互いに視線を離さず、横島がハシビロコウに歩み寄ることによって彼我の距離は縮まっていく。横島は何故かハシビロコウの横に並び――――彼と共に、とてもキリっとした目でさとりたちを見つめだした。

「ぷふっ!?」

「あはははははははははっ!!」

何とこの行動、まるで何も考えずに行っているのでさとりにも何をするのかが読めず、結果彼女の笑いを誘うことに成功した。止まり木の補強に来ていたお空もハシビロコウそっくりの横島を見て大笑いだ。

二人の笑いを取ったことで横島とハシビロコウも満足したのか、お互い頷いている。と、ここで横島はあることに気付いた。

「んー、ハシビロコウさんって横から見るとけっこうひょうきんな顔してんだな」

「……」

「……」

横島は立っている向きを変え、今度は彼の横顔を再現しだす。

「……っ!!?」

「あはははははははははっ!!」

さとり、今度はツボにはまり過ぎて最早声も出せなくなり、床に膝を着く。お空は横島たちに指をさし、涙目でまたも大笑い。横島の再現度は異常であったことだけは伝えておこう。

ちなみにこのハシビロコウ、実はお空を除くさとりに飼われている鳥たちのボスであり、客人の目的の一つが自分に会うことだと聞いた時からずっと緊張していた。しかし今はこうして横島と友誼を結んだことによってその緊張は解かれた。張り詰めた空気が弛緩したその瞬間、部屋中の鳥たちが横島に殺到し、またも新種の毛玉が誕生することになったのだった。

夕食の時間。この時ばかりは特に何事もなくゆったりとした時間が流れていった。夕飯の話が出た瞬間、横島が献立を確認して厨房に立とうとするというハプニングもあるにはあったが、これは今までの物と比べるとただ微笑ましいだけである。旅行先で仕事をしようとするのはいただけないが。

食事を共にしたのはさとりだけであり、会話もほとんどなかったのだが、さとりの持つ雰囲気がそうさせるのかほとんど気にならなかった。食後に出されたのは、紅魔館御用達の茶葉を使った紅茶。淹れた者の違いもあるだろうが、同じ茶葉を使用しているというのに全くと言っていい程違う味わいに横島も驚く。こちらの方がより濃く、甘い。

横島には少し甘すぎたが、これはこれで満足いくものがある。
「この紅茶に合わせるならどんなお茶菓子がいいか……甘さを控えたものの方が……」
「……いい加減仕事から離れません……？」
本当は旅行じゃなくて研修に来たのでは？　という疑念がさとりの中に生まれ始めた。
「……カレーライス！」
「何を言ってるんです？」
どうやら甘いものにはカレーだ！　という結論が出たようだ。実際インドやスリランカではカレーを食べる際に紅茶を飲むことが多いようなので、気になった方は試してみよう。

「あ〜〜〜〜〜……紅魔館の風呂じゃこの感覚は味わえねーよなー……！」
地霊殿の一角にある大浴場。十人以上が楽に入れそうな湯船が複数ある内の一つに、横島は一人浸かっている。縁に頭を乗せ、手足をだらしなく伸ばしてリラックスするのは、紅魔館では出来ないことだ。
この浴場、実はもっと小規模なものだったのだが、ペットが増えてきた際にさとりが「ペットたちがのんびり入れるように広くしよう」と鬼たちに頼んでリフォームを慣行。

しかしペットたちは風呂嫌い……というよりは水嫌いが多く、結局この浴場はあまり使われることのないまま放置されることになったのだった。それでもきちんと管理されており、今回こうして日の目を見ることが出来たので、無駄ではなかったと言えるだろう。

『お空！　ここは横島さんが使ってるから入っちゃダメってさっき言ったでしょう!!』

『うにゅ、そうでしたっけ？』

「……」

脱衣所から聞こえてくるさとりとお空の声に、横島の煩悩が反応した。脳裏に先の光景が蘇る。あどけない表情に似合わぬ肉感的な胸が弾む様。思い出すだけで鼻血が噴き出しそうである。……脱衣所のさとりから殺気が飛んできた気がするので、横島はあらゆる思考を放棄して温泉に身を委ねた。決して現実逃避ではない。

温泉を堪能し、心身ともにリラックスした後、待っているのは就寝である。鬼の酒を呑んだり、新種の毛玉になったりで意外と疲れが溜まっていたのか、少々瞼が重くなっている。もっと構いたそうにしていたさとりだが、彼女は我を押し通そうとするタイプではなく、むしろ相手に気を遣うタイプである。横島を部屋へと連れていき、ゆっくりと休むように言って彼女は自らの執務室へと向かう。今回の経験を活かし、〝古明地観

光〃（仮）という旧地獄の旅行ツアー事業を展開しようと思いついたのだ。

「勇儀さんに相談して……ヤマメさんにも話を通してみようかしら……」

かつての不可侵条約もかなり緩和されており、これならば旧地獄に今以上の発展を齎せるだろう。とは言え、今はまだ構想段階。ちょうど横島という旅行者も来ているのだ。横島からも話を聞き、どういったところをツアーに組み込むか意見を聞いてみてもいいだろう。

「んー……」

さとりが部屋を出て数十分、横島は眠気があるのに眠れない状態が続いていた。神経が過敏になっていると言えばいいのか、少しの物音が気になり、その度に少しずつ眠気も薄れてきている。

この名状しがたい状態に辟易していたが、不意に一日であったことが頭を過ぎる。こうなってくるともう止められない。様々な出来事が浮かんでは消え、それらに意識を割いてしまう。結果、あれほど強烈だった眠気はすっかりと無くなってしまった。

「……」

良い一日だった。勇儀と藍の間にいざこざが発生した時はどうなることかと思ったが、新たな知己も得ることが出来たし、あの鬼の酒を堪能することが出来た。温泉も素晴らしく、料理も美味しくてベッドもふかふか。以前から興味のあったハシビロコウに

も会うことが出来、更にはいろいろな動物たちとの触れ合いで癒されもした。……新種の毛玉になってしまったが。

「動物たちと言やあ、お燐ちゃんが猫の姿に――――」

腕の中の猫がお燐に変わった時の光景が浮かび上がる。そして、そこから続く記憶の中である場面に行きついたその瞬間――――。

『今晩、横島さんの部屋に行くからね！』

――――どくん、と。横島の心が脈打った。

「……く、来るのか!?　来ちゃうのか!?　さとりちゃんはああ言っとったが、実は本当にそーゆー意味だったのでは!?」

途端、高まる煩悩。溢れる妄想。期待と不安が入り混じった、思春期ハートが暴走する。

来るか来ないか、来てしまうのか、それとも来はしないのか。思考があちらこちらに飛び、心臓の鼓動も際限なく速度を上げていく。やがて横島の煩悩が『お燐が来るか来ないか』の段階から、『お燐とするかしないか』の段階へとシフトしていた。

いつしか横島は自らの震える体を抱き締め、恐怖に喘ぐ。しかし横島はそれに気付か

ない。高速化した思考の根源にある恐怖にまるで気付かず、横島の心は軋みを上げていた。

「――――大丈夫ですよ」

「え……？」

不意に、温かな何かに包まれるような感覚を覚えた。いつからだったのだろうか、横島はさとりに抱き締められていた。さとりが部屋に入って来たのも、こうして抱き締められていたのも、全く気が付かなかった。それだけ横島の心に余裕が存在していなかったのである。

さとりは、そんな横島の心が上げる悲鳴を聞き届け、こうして駆けつけたのだ。

「怖がる必要はありません。不安に思うこともありません。怯えることなど何もないのです」

頭を優しく撫でながら、囁くような声音で語り掛ける。それだけで横島の心に存在した得体の知れない恐怖や不安といった感情が消えていくような安心感に包まれる。

さとりは横島を寝かせ、やや強張っていた横島の手を握り、頬に手を添える。

「あなたが眠るまで、こうして手を繋いでいますから」

繋がれた手から、頬から、さとりの柔らかな温もりを感じる。それは横島がフランやチルノ、妖精メイド達に与える温もりとは似て非なる温かさ。

横島はさとりの言っていることの意味がよく分からなかった。だが急速に遠のいていく意識の中で、微笑むさとりの発する雰囲気に、誰かの面影を見たような気がした。それが誰なのかに思い当たる前に、横島は今度こそ眠りに就く。先程までの恐怖や不安に歪んだ表情ではなく、安らいだ寝顔にさとりは更に笑みを深め、横島の額に口づけをする。

繋いだ手は未だ離さず、そのままで。さとりは、良い夢を見れますようにと、横島の傍に在り続けるのだった。

第七十六話
『地霊殿動物ふれあいパーク』
～了～

横島の部屋の前、お燐はドアを見て固まっていた。ドアには張り紙がしてあり、それにはデフォルメされたさとりの絵が描いてあって、その彼女から出ている吹き出しにはこんなセリフが。

「部屋に入ったら『恐怖催眠術』の刑」

結局お燐はすごすごと自分の部屋に戻る。室内ではさとりがどこかに向かってピースサインを向けていたのだった。

第七十七話

横島が地霊殿へと赴いた日から二日が経った。
その日の午前、紅魔館の主であるレミリアはもはや日課となりつつある永琳とのお茶会のために、彼女のゲストルームを訪れていた。
「……」
二人で紅茶を飲み、歓談する。穏やかで静かなひと時。それはここ最近の紅魔館からは想像が出来ないような静けさであった。
ふと、永琳は耳を澄ませる。かすかに聞こえてくるのは賑やかだった頃の紅魔館の名残の様なものである。
「――――とりゃー……」
「――――てりゃー……」
かつての面影など微塵もなく、妖精メイド達の掃除の掛け声は小声とも溜め息とも区別がつかなくなってしまっている。永琳の口に苦笑が浮かぶが、レミリアの口許はむっすりとまっすぐに引き結ばれてしまう。明らかに機嫌を悪くしている。

「横島君が出掛けてから、妖精メイド達の元気が見る間になくなったわね」
「……この館の主である私が居るというのにこの勤務態度……全員おやつ抜きにしてやろうかしら」
「妖精達にはキツイ罰でしょうね」
レミリアの不貞腐れた態度が面白かったのか、それとも可愛らしかったのか、永琳は口許に手を当ててくすくすと笑いを零す。
「何がおかしいのかしら、永琳？」
「強いて言うなら唇を尖らせて不貞腐れてる可愛い女の子が居ることかしら」
「む」
永琳からの指摘に再び口を結ぶレミリア。可愛い女の子扱いされるのは嬉しくはあるが、どうせなら綺麗な女性扱いの方が嬉しいのがレミリアである。
「……それはどうでもいいでしょ。今重要なのは妖精メイド達のことよ」
「ふふふ、そうね」
「……むぅ」
少しからかい過ぎたのか、遂にはレミリアにジト目で睨まれてしまう永琳。両手を挙げて降参をアピールし、現在の妖精メイド達の状態について意見を述べる。
「まあ、あの子達の憧れである横島君が居ないんだから気が抜けちゃっても仕方ないん

じゃない？」

そう言って永琳は紅茶を一口含む。予想していた通りの答えだ。何せ横島は妖精メイド達が普段遊んでいるヨーヨーやベーゴマといった玩具の大会で頂点を極めた男である。思わずレミリアは溜め息を吐いてしまう。

「まったく……憧れるならもっと相応しい存在がここにいるでしょうが」

誤解の無いように表しておくが、妖精メイド達はレミリアに憧れを抱いている。憧れを抱いてはいるが、それは彼女の圧倒的な力にだ。横島に対して抱いているような身近なものではなく、少々近寄りがたいのだ。

「……それにしても、こいつらもあいつらと同じか……」

「あいつら？」

レミリアの言葉に永琳が頤に指を当てながら首を傾げる。そのわざとらしい仕草にレミリアは冷たい視線をプレゼントする。

「……分かってて言ってんでしょ」

「ええ、もちろん」

「……はぁ」

今度の溜め息は深く、重く。レミリアは図書館にいるであろう自分の妹の姿を思い浮かべ、肩を落として紅茶を飲み干した。

第七十七話
『横島の居ない紅魔館』

「うばー……」
「むあー……」
「……」

紅魔館内の図書館、その読書スペースの片隅に、不思議な生物達の鳴き声が響く。その生物とはレミリアの妹であるフランドール、もう一体はてゐだ。二人は小悪魔の胸とお腹に顔を埋め、床に折り重なるようにして寝転んでいる。カーペットが敷いてあるとはいえ、淑女が取って良い行動ではない。

一番下で圧し潰されるような形となっている小悪魔は、パチュリーに視線で助けを求める。しかしパチュリーはそれを知らないふりをし、優雅に紅茶を飲んでいる。いや、

見る者が見れば、少々退屈そうにしているのが見て取れるだろう。
「あのー、お二人とも……？　もうそろそろ仕事に戻りたいのですがー……」
「うばー……」
「むあー……」
「……パチュリー様ぁ……」
話しかけても先程と同じ鳴き声を返す二人に、小悪魔は涙目で今度は声を出してパチュリーに助けを訴える。パチュリーはちらりと小悪魔を見やり。
「……もう少しそのままでいてやりなさい」
と、返すのであった。
パチュリーには二人の気持ちが理解できる。二人とも付き合い始めであるし、何よりまだ四九五歳に一八〇万歳と幼いのだ。まだまだ甘えたい盛りなのだろう。……何もおかしくはない。
――――横島と一緒の時間はちょっと減ってたみたいだけど、その分べったりくっついてたし、そのせいで人肌恋しくなっちゃってるみたいね。
紅茶を飲みつつ、パチュリーは二人の状態を分析する。斯く言うパチュリーもちょっとした寂しさを感じているのだ。横島をねちねちとイジメて泣き顔を見たい……。そんな可愛らしい思いを抱いている。

「ふふ、ふふふふふふ……」

横島が戻ったら何をするかを思い描き、パチュリーの顔に笑みが浮かぶ。笑い声を聞いた小悪魔が「ひぃっ!?」と怯えずにはいれないほどに、それは邪悪なものだったという。

「……」

紅魔館正門前、門番である美鈴は門柱に背を預け、イメージトレーニングを行っていた。彼女はただ静かにそこに立っているだけに見えるが、脳内ではあまりにも激しい戦闘が繰り広げられている。

時折美鈴の身体がぴくぴくと動いており、リアルに思い描いている戦闘に身体が反射運動を起こしているようだ。

「……う、ん」

美鈴の眉間にしわが寄り、こめかみから一筋の汗が流れ落ちる。イメージによる戦闘もとうとう佳境に入ったようだ。

「……横島さぁん、激しすぎますよぉ～……ふへ、ふへへへへ」

口端から涎を垂らし、美鈴は甘えたような声を出した。……そう、彼女の脳内戦闘と

はつまり、横島との濃厚な夜の戦闘だったのである。
いつかは本当にそういう時を迎えるだろうし、その際に慌てて迂闊な言動をしないように備えておくことは重要なのだ。
「……」
「むふふふ、むふふふふ……」
そして、そんな美鈴を近くで見守る少女が一人。
「ふはぁっ!?　もっ、もももも妹紅さんっ!?　い、いつからそこに!!?」
「あ、やっと気付いたか」
妹紅が美鈴の隣に立って見守ること五分ほど、美鈴は隣人の存在にようやく気付いた。脳内で思い描いていたモノがモノなので、美鈴の頬は瞬時に赤く染まる。妹紅は様子がおかしな美鈴に首を傾げるが、原因がよく分かっていないので特に気にしないことにした。
「横島の名前を口に出してたけど、横島との模擬戦でもイメージしてたのか？」
「……ッ!?　え、ええっ、そうなんですよ！　いやーっ、イメージの横島さんは強敵でしたねーっ!!」
「ふーん、やっぱ達人は違うなぁ」
妹紅の言葉から咄嗟に言い訳を思いついた美鈴は、わざとらしく大きな声で横島との

脳内戦闘（意味深）の様子をぼかしつつ口にする。妹紅はその内容に踏み込むことなく、純粋に「そこまでリアルなイメージトレーニングが出来るとか達人って凄いなぁ」という感想を抱くのみであった。

「そ、それで今日はどうしたんですか妹紅さんっ？　ご存じの通り、横島さんはまだ帰ってきてませんよ？」

「あー、それなんだけどさ」

妹紅は視線を彷徨わせ、照れ臭そうに赤みを帯びた頬を掻く。やがて意を決したように顔を上げ、何事かを告げようとしたその瞬間、妹紅は突然の衝撃に吹き飛ばされる。

「もーーーーーーこーーーーーーーーおーーーーーーっ!!」

「ぷろっ!?」

それは飛び蹴りだ。猛スピードで飛んできた何者かが妹紅の名を叫びながら蹴り飛ばしたのである。ちなみに美鈴は薄情にもその攻撃を防ぐでもなく、普通に避けている。相手の正体も妹紅との関係も知っているからだ。

「だ、誰だ!?　いきなりこんなことすんのは――――って、お前は……」

「ひっさしぶりー！　元気してたー？」

「董子……！」

何の罪悪感も抱いていないような笑顔で小さく手を振り、吹き飛んだ妹紅に駆け寄る

のは宇佐見董子。妹紅の親友の一人である。
「迷いの竹林に行っても全然会えないしけっこう探したんだから」
「あ、ああ。悪い……いや、だからって何で蹴られなきゃならないんだよ」
「いやー、何かテンション上がっちゃって」
「ふざっけんなこのやろー！」
「むぁーっ!?」
董子は妹紅の手を引っ張って立たせ、服に付いた砂埃をはたいて取る。妹紅は蹴られた腹いせに董子の頬を引っ張ったりと、久々の再会を荒っぽくであるが楽しんでいた。
ひとしきりじゃれついた後、二人は連れ立って紅魔館に入ることとなる。妹紅の相談事というのは、多くの者に聞いた方が確実であるからだ。
二人を招き入れ、再び一人となった美鈴は目を閉じ、全身に気を巡らせる。脳裏に展開するのは先と同じ、しかし決定的に違うイメージだ。
「……ふふふふふ、どうしたんですか横島さん。これくらいでへばっちゃダメですよ……」
今度のイメージは自分が攻めるもの。守勢に回る横島を巧みに攻め立てるイメージだ。
「ふふふ、うふふふふふふふふふふふふ……」

その日一日、何とも怪しげで不気味な笑い声が、紅魔館の門の前で響き続けたという。

妹紅と董子はレミリアと永琳のゲストルームへと案内される。今の妹紅にとってこの二人は非常に頼りになる存在だ。片や貴族、片や月の頭脳と、妹紅が求める条件を有している。

「で、妹紅の相談事って何なの？」

「んー？」

レミリア達と同じテーブルを囲い、紅茶を一口飲んで董子は切り出した。興味深そうに声を出したのはレミリア。元々横島の居ない紅魔館に妹紅が訪ねてくるとは思っていなかったのもあり、少々ぶしつけな視線を送っている。

皆の視線を受けたじろぐ妹紅であるが、何もおかしなことを相談しに来たわけではない。照れはあるが、今更このメンバーにそれを気にしても仕方がないだろう。まごつくだけ無駄である。

妹紅も紅茶を一口含み、緊張で乾いた喉を潤してから口を開いた。

「実は……ちょっと、いめちぇん？　とかいうのしてみたいんだよ」

「いめちぇ……あ、イメチェンか。イメージチェンジね？」

「そうそう、それ」
「ふむ？」
妹紅の相談事、それはイメージチェンジをしたいとのことだった。もっと言えば、『オシャレをしたい』、ということだろう。
「何で急に？」
「いや、大した理由はないんだけど……」
董子の純粋な疑問に妹紅は顔を赤くして紅茶をティースプーンでかき混ぜる。明らかに羞恥からくるその動きにますます意味が分からなくなる董子であるが、永琳は既に全てを悟ったらしく、ニヤニヤといやらしい笑みを浮かべて妹紅を見やる。レミリアはそんな永琳に少々引き気味だが、彼女も妹紅の意図は察することが出来た。しかしレミリアは何も言わない。妹紅の口から直接語られるのを待つのみである。
「……今、横島が地底に旅行に行ってな。それであいつが帰ってきた時に普段とは違う服とかそんなんで驚かせたいというか、何というか……ほら、私って普段もんぺばっかりだし、スカートとか穿いたら横島も……可愛いとか言ってくれるんじゃないかと……」
「……」
最後の方はほとんど声になってはいなかったが、それでも董子に内容は伝わった。普

段の彼女から聞くことのない話であるからか、しばらくは言葉を発することが出来なくなった。そうしてやっと絞り出すことが出来たのは。

「……妹紅もしっかり女の子してるのね」

　という、感心しているのか馬鹿にしているのか判断に迷う言葉であった。

「どーゆー意味だこの野郎」

「ごめんごめん。……それにしても妹紅がそういうことを言い出すとは……男が出来るとここまで変わるのねー」

「むぐっ……今までが今までだったから何も言い返せない……！」

　失礼な物言いであるが、董子に妹紅を貶めるつもりはなく、純粋に驚いているだけである。

　何せ妹紅は袖がびりびりに破けたシャツを普段使いにして、竹林のみならず人里に現れたこともある。そんなオシャレに何の興味も持ってないような妹紅がそんな事を言い出したのだ。驚くなという方が無理というもの。

「――――ハッ!?　そういえば、今まで気付かなかったけど妹紅の髪が凄いサラサラになってる！」

「あ、ああ。これは横島が櫛と香油をくれて、それで……」

「カーッ！　嬉しそうな顔しちゃって！　カーッ！」

顔を赤らめて髪をつまむ妹紅に、董子は額に手を当てる。からかいも含まれているが、現役女子高生とは思えないようなオヤジ臭い所作での言葉のため、滑稽に見えるところが何とも若い。

レミリアはきゃいきゃいとはしゃぐ董子に視線をやり、こんな奴だったか？　と疑問を浮かべるがそれを口に出しはしなかった。レミリアは董子との付き合いが浅い。ある異変の話を聞き、そこから構築された偏見から未だ人物像を測りかねている。話題も自分が得意でないものに移ろいつつあることだし、ここは静観を決め込むこととした。

「ふーん、そっか。妹紅もそういうのに興味を持ちだしたかー。変わった……というか、成長したのねー」

「お前は私の母親か何か？」

とりあえず満足するまで妹紅を弄り倒した董子は満足そうに息を吐き、少々ぬるくなった紅茶を飲み干す。咲夜におかわりを要求し、美味しい紅茶に舌鼓を打つ。妹紅から送られてくるじっとりとした視線は完全無視だ。

「……ふぅ。――――変化、成長ね。……してるのかな、私」

それは自嘲を帯びた自問だった。

自分は変化を拒絶する不老不死。決して変わることのない蓬莱人。周囲から簡単に

見て取れる自分の変化を、己だけは信じられずにいる。
「――――当然。してるわよ、あなたは」
誰ともなく発せられた妹紅の問いに答えたのは永琳だった。
「簡単なことよ、妹紅。受け入れるか拒絶するか。たったそれだけのことなのよ」
「ん……？」
皆の視線が永琳に集まる。
「確かにこの身は変化を拒絶する不老不死。変わることのない蓬莱人。でもね、絶対に変わらないものなんて存在しないのよ」
それは矛盾である。蓬莱人は永遠の命を持つ。決して老いず、決して死なず。だが、それでも。
「あなたが横島君と出逢い、友情を育み、恋を知り、想いを交わし合った。……〝想い〟とは魂から生ずるエネルギー。私たちの存在そのもの。心からの、魂からの想いをきちんと受け入れることが出来れば、人は変わっていく」
永琳は紅茶を含んで唇を濡らす。
「――――というか横島君と出逢う前のあなたと今のあなたでどんだけキャラが違うと思ってるの？　輝夜と殺し合ってた時と横島君と時計塔にいた時のことを考えれば分かるでしょ」

「言われてみればそうだけどそれを言うのはやめろおおおおおおおお!!」
「私も聞かせてもらったんだよね。夕暮れ……時計塔……横島さんを押し倒し……」
「あああああああああーーーーーーーー!!?」（高音）
妹紅は羞恥のあまり顔を両手で覆って椅子ごと床に倒れ込んだ。元気はなくともちゃんと掃除は為されていたのか、それでも埃が立つことはなかったが、足元で呻き声をあげながら蠢かれるのは勘弁してもらいたいものである。
「……」
永琳の見つめる先、小さな窓の外、青く広がる大きな空。しかし、彼女が見ているのは空ではない。
レミリアは永琳を見やる。彼女が見ているもの、それが彼女には分かる。
「――――受け入れるか、拒絶するか……か」
紅茶を飲み干し、ぽつりとレミリアは呟く。その声は誰にも聞こえることはなかった。
横島が居る紅魔館。横島の居ない紅魔館。小さいようで大きな変化。それは紅魔館だけでなく、人里でも起こっていた。

「……次で最後だったっけ」

まるで行者のような服を着て、人里で薬を売り歩く者がいた。笠を被り、能力で波長を狂わせていることから容姿が分かりにくいが、その者は少女であり、また人間ではなかった。

彼女は鈴仙。ようやく薬の再生産が可能となったので、今まで中止していた薬の訪問販売を再開したのである。紅魔館でのお手伝いメイドも続けているので更に忙しくなるが、それでもこうして本業を再開できるのは嬉しいものだ。

余談であるが、迷いの竹林の入り口には『永遠亭再建中。御用の方は紅魔館まで』と書かれた看板が立てられている。色々と難易度が高いので紅魔館まで実際に訪れた者は未だおらず、訪問販売が再開されたのは喜びを以って迎えられた。

「……ん？」

お得意様の家を周ること数時間、遂に最後の一軒というところで、鈴仙はとある大きな家の前に人だかりが出来ていることに気が付いた。大勢の人が祝福の言葉を投げかけているのが分かる。何となく気になった鈴仙は、野次馬の一人に何があったのかを聞くことにした。

「あのー、この家で何があったんです？　何かお祝い事ですか？」

「ん？　ああ、祝言だよ祝言。ここに居候してる坊ちゃんがここの娘さんと結婚するん

だってさ」

「結婚……!!」

野次馬からの情報に興味を引かれた鈴仙は何とか中の様子を窺おうとするが、残念ながら彼女の身長では中を見ることは叶わなかった。空を飛べばよい話であるのだが、流石にこういうめでたい日に他の騒ぎを持ち込むわけにはいかない。少々残念ではあるが、お嫁さんを見るのは諦めることとする。

「それにしても急な話しだったよな。二人は許嫁だったとはいえさ」

「本当になぁ。『可愛くねえ色気がねえ』『あんたなんかこっちから願い下げよ』って事あるごとにケンカしてたのにな」

「ああ。それなんだがちょっと小耳にはさんだんだが……」

他の野次馬達が話している内容が鈴仙の耳に届く。どうやら今日夫婦になる二人はあまり仲が良くなかったようだ。しかし、その二人の会話に混ざった人物が言うには、また何か違った要因があったらしい。

「何でも、二人とも心の内では互いにぞっこんだったらしくてな。ある日急に坊ちゃんがその思いの丈を娘さんにぶつけたんだそうだ。娘さんの方も普段表に出さなかった気持ちを打ち明けて、あとはとんとん拍子に話が進んでいったみたいだぜ」

「へー、そんなこともあるんだな」

聞こえてくる話に鈴仙は思いを馳せる。ある日突然、好いていた男性に告白される。中々良いシチュエーションではないだろうか。

鈴仙は何故か頭に浮かんでくる横島の顔を振り払いつつ、その場から立ち去った。頬が熱を持っている。最後の一軒を周り、寄り道せずに紅魔館に帰った方がよさそうだ。

足早にその場から離れる鈴仙を、野次馬は不思議そうな顔で見送った。

「――――でな、坊ちゃんから聞いたんだが告白する前の記憶がぽっかりと抜け落ちてるらしいんだわ。何をしてて、何で告白しようと思ったのかさっぱり分からんらしい」

「何だそりゃ」

「なんかホラーっぽくね？」

「オメーはまたこういうめでたい時にそういうことを……」

喧騒に包まれる人里。大勢の人が溢れかえる大家の門から、一人の少女が難なく抜けてくる。その顔には満足そうな笑みが浮かんでいた。祝言を挙げる二人にお祝いの言葉を贈って来たのだ。

――――だが、それに気付いた者は誰もいないだろう。

黒い帽子、緑色の髪、黄色い服、薄い花柄の緑のスカートと、目立つ格好をしている

はずの少女は、鼻歌を歌いながら誰にも見咎められずにその場を後にした。
誰の耳にも留まっているはずの歌が、誰の耳にも残らない――無意識の中を歩きながら。

第七十七話
『横島の居ない紅魔館』
～了～

その頃の小悪魔たちは――!!
てゐ「……ぐー……」
フラン「……すー……」
小悪魔「……りー……」
三人そろってお昼寝モードになっていた――!!
パチェ「……妹様もてゐも体温高いものね」
パチュリーは魔法で三人に毛布を掛けてやるのであった。ちなみに小悪魔は仕事中

に昼寝をしたのでパチュリーからお仕置きを受ける運命が待っている。

☆没ネタ☆

咲夜「変化……成長……」

咲夜「そうね。私も今に甘んじるのではなく、常に新しいものを取り込んでいかないと」

咲夜「そうと決まれば……」

咲夜「皆さま、お待たせいたしました」

レミィ「……これが」

咲夜「はい。これが私の新作――――〝タピオカミルクティー〟でございます」

董子「待ってましたー！」

妹紅「……なあ、これって見た目カエルの……」

永琳「それ以上はいけないわ」

☆おわり☆

第七十八話

横島の旧地獄旅行四日目の朝。
地霊殿の中庭にて、横島は振り棒を行っていた。
「……」
この数日間、お燐とお空によって横島に降りかかったＴＯ　ＬＯＶＥるは数知れないが、こうして木刀を振っている時は無心になれる。
お燐は初日に横島に撫でまわされてぐでんぐでんにされてしまったのが余程気に入ったのか、隙あらば横島に近付いてもう一度撫でまわされようとする。それも猫形態であれば特に問題は無いのだが、横島の煩悩を見抜いたお燐は人型の状態で横島にすり寄っていく。
お燐はお胸が大きい。すり寄ると自然にお胸が触れてしまう。その度に横島が壮絶な顔芸を披露するのが面白いようだ。
近頃は横島の発情した匂いを何度も嗅いでいることで色々と持て余しており、だからこそ横島を狙っているのかもしれない。

お空の場合は打算も何もなく、単純に横島の放つ霊波動に惹かれているようだ。よく横島にくっついている姿が地霊殿のそこかしこで目撃されている。

お空はお胸がとても大きい。くっつくと当然ながらとても大きなお胸が触れてしまう。その度に横島は鼻血を噴いたり奇声をあげたり壮絶な顔芸をしたりと大忙しだ。そんな横島を楽しい人物と慕い、無邪気に追いつめる天然さんである。

暑いからと無防備にも横島の前で服を脱ぎだしたり、暑いからとスカートを手ではためかせたり、暑いと言っているのに横島にくっついたりしている。

どうもお空は誰かにくっつくのが好きなようで、普段はさとりやお燐によくくっついていたようだ。

「……」

骨休めに来ているはずなのに余計な血を流し過ぎているような気がするが、それでも横島にとっては心安らかに過ごせている。

ひたすらに木刀を振るう。振るう。振るう。振り棒が終われば次は最近ようやく教えてもらえるようになった型の稽古だ。本来型稽古は二人で行うものだが、今は横島一人しかいないので想像で補う。

「……むー」

目を瞑って妖夢の姿を脳裏に浮かべ、それから繰り出される攻撃を防ぐ。それを繰り

返し、最後に横島が反撃を繰り出し、そこで型の一つが終了。
　妖夢の扱う剣術は大雑把に言えば一刀で三十手、二刀で十八手の計四十八手の型が存在する。しかしこれは元々妖夢のような半人半霊の者が扱う剣術であるようで、横島の様に一般の人間（？）が完全に習得するのは不可能であるらしい。
　そこで妖夢は人間でも習得できる型を選別し、横島に教え込むことにした。そのとりあえずの型の一つが横島が行った型稽古である。
「すーーー、ふーーーーーー」
　呼吸を整え、もう一度。型稽古は反射の域に至るまで続けなければ意味がない。横島がその域に至るのは、一体どれほど先の話になるのか。
「……」
　脳内の妖夢の姿がより鮮明になっていく。妖夢の攻撃は激しくなり、横島は必死にその攻撃を防ぐ。
　妖夢の身体が汗できらめく。シャツがめくれ、おへそが見える。スカートが翻って中のパンツがちらりと見えた。何故か妖夢の後ろにお燐が妖艶な笑みを浮かべてスカートをたくし上げ、その反対側には何故かお空が何もわかってなさそうな顔で大きなお胸を露出していた。
「……やっぱり妖夢ちゃんは健康的な色気があるというか、そーゆーのにけっこう気を

付けてそうなのに不思議と無防備な瞬間があってけしからんというかありがとうございますというか……お燐ちゃんはけっこう露骨な誘惑とかしてくるタイプだったのは意外だったな。やっぱり猫だからだろうか……いや意味が分からん。でもやっぱり可愛いしチチも大きいし。お空ちゃんは何であんなに純粋なんだ。男は常に切羽詰まってるよーなもんなのにあんなにぽんぽんぽんぽんチチを見せられたら暴走してしまうやないか……でも毎回チチを見せてくれてありがとう。これからも純粋にチチを見せてくれるお空ちゃんであってくれ……」

振り棒の時は無心になっていた横島であるが、脳裏に妖夢を思い浮かべたことが影響したのか、ぶつぶつと煩悩にまみれた呟きを放っていく。型稽古を行いながらのその姿はまさに異様であり、そして不気味であった。

最後、反撃を加えて稽古を終了し、大きく息を吐く。じわりと身体に熱以外の何かが広がっていく感覚。最近、横島はこの感覚を心地よく思うようになってきた。

「……ふう」

身体から力を抜き、眼を開く。その視線の先にはきょとんとした顔で首を傾げるお空と、にやにやとした笑みを浮かべるお燐、そしてとてつもなく冷たい目をしたさとりが立っていた。

「――――ほわぁっ!!?」

第七十八話
『家族』

「さ、三人ともいつからそこに!?」
「えー?　横島さんが〝やっぱり妖夢ちゃんは～〟って言ってたところからだけどー?」
「い、いやーーーーー!?　声に出してたーーーーー!?」
正直な話しいつものことなのではあるが、それでもやっぱり三人もの美少女に己の薄汚い欲望を表白したことに項垂れてしまう。
「なになにー?　横島さん、欲求不満なの?　あたいが解消してあげよっかー?」
「横島さん、私のおっぱい見たいの?　別に見てもいいけど……?」
「あーっ!?　やめてーっ!!　俺を傍に近寄らないでーっ!!?」

胸の下で腕を組み、その大きなお胸を更に強調させながら迫ってくるお燐と、横島の言葉の意味をまるで理解しておらず、とりあえずおっぱいが見たいのなら見せてあげようとシャツのボタンを外しながら近付いてくるお空の二人に、横島は頭を抱えながら鼻血を噴き出しつつ両目を見開いて二人のお胸を凝視するという器用さを見せる。

そしてお燐のお胸が横島に触れ、お空がシャツのボタンを外し切る前に、背後から二人の肩にさとりが手を置いた。それだけで二人は動きを止め、ささっと迅速な動きで道を開ける。

「さ、さとりちゃん……」

「……」

横島の前に立つさとりの目は横島の恐怖を駆り立てる。まるで変態を見るかのような冷たい目だ……残酷な目だ……。「かわいそうだけどあしたの朝には留置場の牢屋に入れられる運命なのね」って感じの！

「……いいんですよ、横島さん。年頃の男の子なんですから、そういった欲を持つのはごく普通のことです」

「うわあああああああっ!!?　そんな目で俺を見ながら優しい言葉を掛けないでえええええっ!!?」

冷たい目をしながらも、優しい笑みを浮かべて優しい言葉を掛けるさとりに横島の良

心が悲鳴を上げる。背伸びをしてよしよしと頭を撫でてくるさとりの手を、いやいやとむずがるように泣きながら避ける。横島の精神的なダメージが存外高いのは、さとりやお空が〝セクハラをしたら悪者になるタイプ〟（個人の感想です）の女の子であるからだ。……お燐はノリが軽い（個人の感想です）ので除外されている。何とも失礼な話だ。

「ああ……っ!!　でも……この視線は癖になるぅ……っ!?」

しかし横島、根っこの部分はやはり被虐嗜好なのか、さとりの冷たい視線に快感を覚え始める。その様は紛うことなき変態そのものであるが、さとりは横島の歪んだ性癖に理解がある。

承認欲求が強い横島は視線――つまり見られることに飢えており、〝己を見てくれる〟〝己を認識してくれる〟ことにも快感を覚えるのだ。

横島の深層心理まで読み取ったさとりはこういった性癖を持つに至った理由（過去）も熟知しており、それを否定することなど欠片も思いつきはしなかった。その思いには覚えがあるからだ。

では、何故今こうして横島をいじめているのか……。それは単純であり、要はちょっと意地悪したくなった、というもの。何となくそうしたくなっただけであり、特にこれといった理由は存在しないのだ。

別にお燐やお空が〝そういう対象〟として見られているのに自分はそうと見られて

いないとか、妖夢がいいのなら自分も対象になるはずなのでは？　だとか、そんなことは一切考えてはいない。一切考えてはいないのだ。

「……ふふふ」

やがてさとりの目は冷たいものから温かなものに変わる。元々さとりは嗜虐趣味ではないし、〝覚妖怪〟としては穏やかで優しい性格をしていると言える。横島をこんな風にいじめるのは今回が初めてであり、普段は世話を焼いていることがほとんどだ。例えば昨日にはこんなことがあった。

「……あら？」

昨日の午後四時ごろ。さとりは廊下に備え付けてあるソファーで昼寝をする横島を見つけた。その姿は常ならぬものであり、思わずさとりも笑みをこぼしてしまうほど。

大型の犬が枕変わりとなって横島の頭の下で丸まり、その横島の身体の上には猫や鼠、うさぎやフクロウ、そしてハシビロコウさんがそれぞれ乗っかり、眠っている。文やはたて、永琳が見ればカメラのシャッターを切りまくるでだろう可愛らしい状態だ。

犬がさとりに気付く。彼はさとりの顔をじっと見、さとりは頷いた。どうやら彼は身体を動かしたいらしく、さとりに助けを求めたのだ。それを読んださとりはすぐさま了

承、横島の頭を少し持ち上げ、犬を脱出させる。……そしてさとりは犬が寝ていた場所に腰を落ち着け、自らの膝の上に横島の頭を乗せる。

「……意外と起きないものですね」

かなり大きく身体を動かしたはずだが、それでも横島に起きる様子はない。余程深く眠っているのだろう。のんきに寝ている横島の頭を撫で、さとりは柔らかく笑った。――どうでもいいが横島に乗っている動物たちも微動だにせず乗っかったままである。

「……ん」

およそ十数分後。横島の目がわずかに開かれる。廊下の明かりを遮る何かの影。ぼやけた視界の焦点が合わさり、その正体がはっきりと目に映った。それはまっすぐに自分を見つめているさとりの顔だった。

「あ、起きましたか」

「……さとりちゃんっ!!?」

「はい、さとりお姉ちゃんです」

己の視界に広がるさとりの顔に驚き、思わず身体が跳ねる横島。この時には既に横島覚醒を感じ取っていたのか、動物たちは横島の身体から下り、それぞれ思い思いに散っている。

「なっ、なん……何っ!?」
「膝枕です。横島さんが起きるまで暇だったので寝顔を眺めてました」
横島の顔をじっと見つめながら何でもないように言うが、その頬は若干の赤みを帯びている。お燐やお空、動物たちによくしてやっているが、男性に膝枕をするのはこれが初めてで少々感覚が違ったらしく、その違いが妙に気恥しかったのだ。さとりはその気恥ずかしさを紛らわせるために横島の髪を撫でる。驚きに身を硬直させていた横島もそのむず痒いような感触に身を捩じらせ、やがてこんな機会は滅多にないと考えて身体から力を抜き、身を委ねる。
静かな時間が流れる……が、そんな優しい時間は調子に乗った横島が「今なら偶然を装ってさとりちゃんのお腹に顔を埋めることが出来るのでは?」と考えたことによって終了してしまったが。
「あああああ俺はさとりちゃんになんてことをぉ……!!」
「堕ちてきてますねぇ」
この日心に負ったダメージも中々に大きかった。

さて、新たな扉を開きかけている横島をこのままにしておくのは少々まずい。さとり

は皆の注目を集める為にぱんと手を打ち鳴らし、朝食を促す。
「さ、冗談はここまでにして朝ごはんにしましょう。横島さんも早く正気に戻ってください」
「はーい」
「おおおお……!!　そのジト目が俺の心を狂わせ……え、朝飯？　しまった、早く準備しねーと！」
「横島さん、ここは紅魔館じゃないよー？」
　咄嗟のことになると相変わらず働こうとする横島に、お燐のツッコミが入る。そのままお燐とお空に連れられ、横島は「あああ両腕に二人のおっぱいがあああ……!!」と悶えながら食堂へと消えていく。自分のペットである二人が横島によく懐いている姿には素直に嫉妬を覚えてしまう。その嫉妬が果たしてどちらに向けられたものかはさとり自身にも定かではない。しかし、さとりにとって横島は既に大切な存在であることは確かである。
　さとりは三人の後を追い、中庭を後にする。この日の朝食も、ここ数日と変わらぬ騒がしさであり、さとりはその騒々しさに呆れつつもどこか楽しんでいた。

　時は午後の三時過ぎ。さとりは自らの書斎で趣味の小説の執筆に勤しんでいた。昼

食を終えて数時間が経ち、何となく口寂しくなったさとりは休憩に入っていた。今日のおやつはどら焼き。普段は洋菓子を好んでいるが、時折和菓子を食べたくなるのである。

横島が来てからの数日間で、さとりは大幅に筆が進んでいた。横島との触れ合いが良い刺激になり、次々に新たなアイディアが湧き出て止まらないのである。そのおかげか執筆中のさとりの機嫌は良く、時折鼻歌も口ずさむほど。

「……ふむ」

ここで、さとりに悪戯心がむくむくと膨れる。横島のことを思い浮かべたせいか、現在横島が何をしているのか気になってしまったのだ。

「……ちょっとくらいなら良いですよね」

結果、さとりは特に迷うでもなく横島の心を読むことにした。出会った当初はともかく、現在の横島はさとりに心を読まれることに忌避感を抱いていないので、ついつい遠慮を忘れてしまう。横島の厚意に甘えていると言えるのだが、その久しく忘れていた感覚に抗うことは難しかった。

「……む。距離があるせいか鮮明には聞き取れませんね」

横島の心を読もうと意識を向けるが、横島の位置が書斎から離れているせいでほとんど聞こえない。そこで諦めればいいのだが、さとりはここで止めるのは何か負けた気が

してしまい、全意識を読心に傾ける。少し意固地になってしまったようだ。

――――さ……や……――――

「捉えました。後は集中すれば……」

ノイズの様な雑音交じりに横島の声が聞こえてくる。より精度を上げるため、さとりは妖力を高めて集中する。本気になり過ぎな気がするが、今のさとりにその自覚はない。やがて途切れ途切れではあるが、横島の声が先程よりも鮮明に聞こえるようになった。

――――さとりちゃ……。

「私……？　な、何か横島さんの気に障るようなことでもしてしま――――」

――――さとりちゃん……すき……――――

「……」

「～～～♪　～～～～♪」

書斎前の廊下を口笛を吹きつつお燐が通る。最近は灼熱地獄の熱も安定しており暇な時間が多い。そんな時は地上に上がって死体漁りをするのが常なのだが、ここ数日……横島が地霊殿に来てからは地上に上がっていない。横島への興味が趣味を押しのけているからだ。

横島の霊力は心地よく、また猫の扱い（意味深）も上手い。将来的にかなり上質な死

体になりそうであるし、お燐の興味を惹くのは当然だった。何よりさとりが心を許しているというのが大きい。

こう見えてお燐は色々なことに鼻が利く。さとりが横島に対して何やら特別な気持ちを抱いているのも薄々勘付いている。それが男女間の思いであるかまでは分からないが、あのさとりが好意を持つ人間を嫌いになどなれない。

「ふんふふ～んふんふ～ん♪」

次はどんなことをして横島を誘おうか、と考えていたお燐の耳に。

ズダダダダダンッ!!　という轟音が届いた。

「にゃあああああああんっ!?」

まるで本棚が倒れたかのような音に、お燐は驚きで飛び上がる。音がしたのはさとりの書斎。まさかさとりの身に何かが？　そう考えたお燐は慌てて書斎に向かう。

「さ、さとり様ーっ！　大丈夫ですかー!?」

扉をあけ放ったお燐が見たものは、床に散らばった何冊もの本と、その横で何故か顔を押さえて悶えるさとりの姿であった。

「な、何があったんですかさとり様!?」

「何でもない……何でもないのよ……」

お燐はさとりに駆け寄って事情を聞くが、さとりは何でもないと言うばかりで決して

話そうとしない。幸い本人は怪我などもなく、挙動不審な所を除けば問題が無いように思える。

今は何を聞いても答えてくれそうにないことが分かり、お燐は散らかった部屋の掃除を手伝い、部屋を後にした。心配そうな顔で何度も振り返るお燐を見てさとりの心が痛くなるが、今のさとりにそれを気にするだけの余裕がなかった。

「さ、ささささっきの横島さんの声は一体どういう……レミリアさんの手紙によれば横島さんは何人か恋人が出来たはず……まさか私もその一人に……？　ここここ告白とかされたらどうしましょう心の準備が……」

割座で赤くなった頬を押さえるさとりは意味もなく部屋中に視線を彷徨わせる。自分以外この部屋の中に誰もいないというのに、何故か誰かの視線を気にしてしまう。

「落ち着きなさい。……そう、落ち着くのよさとり。まずは深呼吸をして――――もう一度横島さんの心を読むの」

座ったまま深呼吸し、もう一度横島の心に集中するさとり。もう横島の心が気になって気になって仕方がないという状態だ。横島に対して恋愛感情は抱いてはいないが、それでも憎からず思っている男性に好意を抱かれていたと分かればそれはそれで嬉しいもの。

「そ、それでは……！」

緊張からごくりと喉を鳴らし、どうしてか高鳴り続ける胸を押さえ、さとりは横島の心を読む。自分のことを嫌っていないでほしい。好きでいてほしい。

さとりは自分を女の子として見てくれる横島に、我知らぬ執着を持っている。それに気付いた時、さとりは己の心とどう向き合うのか。ひとまず、今横島の心の声に期待しているさとりの心は――――。

――――さとりちゃんって髪ボッサボサだからな……。梳きたいんだけどお願いしたらやらせてくれっかな……。でもそれも失礼な気がするしな……――――

「……」

「うーにゅにゅっうにゅ～♪」

書斎前の廊下をお空が鼻歌交じりに通る。お空はここ最近妙に機嫌が良い。それは横島が来たからだ。

お空は間欠泉地下センターの最下層である核融合炉で働いており、それだけの知識と技術を持つ才媛――神由来ではあるが――なのだが、彼女は非常に短絡的で調子に乗りやすい性格であり、少々天然の気がある。そんなお空が横島のことをどう思っているかと言うと、ずばり〝好き〟の二文字である。恋愛感情はともかく、お空は横島のことが好きなのだ。

何せさとりが心を許している相手だ。それに加えて横島の発する心地よい霊波。こ

れだけでもお空が横島を嫌いになるはずがないのである。さとりとしてはもう少し警戒心を持てと言いたいところであるのだが、それほどまでに自分を慕ってくれているのは素直に嬉しかった。

さて、そんなお空が上機嫌で吹けない口笛を吹こうと頑張りながら歩いていると。

ズダダダダダンッ!!　という轟音がお空の耳に届いた。

「うにゅうううぅっ!?」

いきなりの騒音に驚いて尻もちをついてしまったお空は、その音の出元がさとりの書斎だと気付くと大慌てでさとりの安否を確認しに向かった。

「さ、さとり様ー!!　大丈夫ー!?」

己の主の危機に半泣きになりながら書斎に飛び込んだお空が目にしたのは、床に散らばった何冊もの本と、その傍らにうつ伏せで倒れ込むさとりの姿であった。

「さとり様ー!?」

「う、うう……」

慌ててさとりを抱き起こすお空の耳に、さとりの小さな呻きが聞こえる。

「い、今の時代になんて古典的な……!　もはやベタを通り越してる……!　まさか私の能力を逆手にとってるんじゃ……!?」

「さ、さとり様……?　なに言ってるの……?」

妙なことを口走りながら誰かに向かってぶつぶつと非難を口にするさとりに、お空は戸惑い気味だ。さとりの期待は裏切られた……しかしある意味ではお約束通りである。お空にはどういった展開があったのかは分からないが、とにかくさとりは何かをして何かにショックを受けたらしい。それが分かったお空は、とりあえずさとりをあやすべく身体を軽く揺すったり、頭を撫でたりと手を尽くす。

「……子供じゃないんだからそういうことはしないように」

「ごめんなさい、さとり様……」

「あ、いや怒ってるわけじゃなくて……」

さとりの言葉にしょんぼりと落ち込んでしまったお空を慰めるのには、少々時間が掛かるのだった。その後お空に部屋の片づけを手伝ってもらい、さとりはお空に一つ質問をする。

「ねえ、お空。私の髪ってボサボサかしら？」

「？　うん、ボッサボサだよ？」

「……そう」

何ら悪意のない純粋な心からの即答をするお空に、さとりの心は少し傷ついた。

「いいでしょう、横島さん。あなたの望み、叶えてあげましょう。ふふ……ふふふ……ふふふふふ……」

「今日のさとり様、なんか変だね」
お空のツッコミが胸に刺さる。

「……ふう」
夕食を終え、現在は食休みの時間。さとり、お空、お燐、そして横島の四人は一緒のテーブルを囲み、食後のお茶を堪能していた。
お茶を飲んで一息吐くさとりは、お燐とお空に絡まれている横島に目をやり、小さな笑みを一つ浮かべる。
今日の様に激しく心を動かされたのは一体いつぶりであろうか？　期待と不安、そして裏切り（笑）。まるで普通の女の子の様に色々な感情が揺り動かされた一日だった。
目を瞑って朝のひと時を、午後の出来事を反芻する。途端、湧き上がってくる想い。それは決して受け入れられることはない。しかし、それでも期待せずにはいられない。
自らの傍らに。一度想像してしまえば、抗うことはもう出来なかった。――――想いが溢れ、口から零れ出てしまう。
「……横島さん。少し、大切な……大切な、お話があります」
「……ん？」

さとりの真剣な声音を聞き、お燐とお空に抱き着かれて鼻の下を十センチほど伸ばしていた横島は瞬時に顔を引き締める。お燐たちも空気を読み、自分達の椅子に戻っていく。それを目で追う横島は少し残念そうな顔をするが、それも一瞬。横島はさとりの話を黙って待つ。

「横島さんが地霊殿に来て、もう四日。旅行の日程は五泊六日ですので、明後日には紅魔館に戻るんですよね？」

「ああ、うん。そうだけど……？」

それは初日に確認済みのこと。さとりの意図が読めず、横島は首を傾げる。

「お空もお燐も、それだけでなく地霊殿のペットたちみんなが横島さんに懐いています。勿論妖精たちも。みんな安らいでいる……癒されています」

見れば、横島の周囲には何匹かの動物が集まっていた。頭の上には「ここは自分の場所である」と言わんばかりにハシビロコウさんが止まっている。

「そして、それは動物（ペット）たちだけでなく――――私も、なんです」

「え……」

目を伏せ、頬を赤く染めたさとりの言葉に、横島の胸が高鳴る。初対面の時こそ色々あったが、横島はさとりのことを嫌っていない。それどころか好意を抱いていると言ってもいいだろう。そんな少女にこんなことを言われたのだ。横島が思わずときめいて

しまっても仕方がないだろう。

「突然こんな事を言われて、戸惑いもあるでしょう。でも、あなたの答えを聞かせてほしいんです」

「……！」

さとりは大きく息を吸い、そして、真っ直ぐに横島の目を見て自らの想いを告げる。

「横島さん……。あなたは、地霊殿に必要な方なんです。私の――――私の、家族（ペット）になってくれませんか？」

「――――――!!」

さとりは、横島と過ごして抱くようになった想いを告白する。この告白劇にお燐とお空は「キャーツ！」と顔を赤らめ、はしゃいでいる。横島はと言えば、さとりの言葉を聞き、それを受け入れた際の未来を思い浮かべる。

きっと楽しい日々になるはずだ。時々事件が起きたりと騒々しい日々ながらも、皆で笑い合えるような、そんな毎日が続くはずだ。……しかし。

「……」

きっとさとりは既に横島の心を読んでいるだろう。だが、言葉にしなければならない。さとりは〝答えを聞かせてほしい〟と言った。心を読むことの出来るさとりが、聞かせてほしいと望む。それには、大きな意味がある。

横島は大きく息を吸い、さとりの目を真っ直ぐに見つめ返す。例え既に心を知られていても、言葉にして返す。それが礼儀と思ったから。

「……その、ありがとう。さとりちゃんにそーゆー風に言ってもらえるのは正直嬉しい」

「はい」

「……でも、今の俺には紅魔館が――――レミリアお嬢様がいるから」

「……はい」

二人の会話をお燐たち、そして動物たちが固唾を飲んで見守る。彼女たちも、横島が言わんとしていることが理解出来た。

「きっと、お嬢様に出会う前の俺だったらここでさとりちゃんの家族（ペット）になっていたと思う。……でも、そうはならなかった。俺は――――俺は、レミリアお嬢様の執事（いぬ）だから」

「……」

それは最早、横島の誇りとまで言えるものに昇華されていた。尊敬し、敬愛し、崇拝するレミリアの執事（いぬ）であること。それは横島のアイデンティティーとなっている。

さとりは横島の言葉を聞き、眼を閉じて想いの籠った言葉を反芻すると、柔らかく微笑んで横島を見つめ返す。

「……レミリアさんが羨ましいです」

「あー、何つーか……ありがとうな、さとりちゃん。俺を誘ってくれて」

申し訳なさそうにそう言う横島に、さとりは気にしていないと首を振る。地霊殿での二人の関係は、さながら手の掛かる弟とそれを甘やかす姉といった風情である。それは先程の問答を経ても変わることはない。

二人のやり取りを見て、ゾンビフェアリーはこう思う。――――「ひょっとして、この人たちってとんでもないアホなのでは？」――――と。

「さとり様からのお誘いを断るなんて、横島さんのくせに生意気だ――！」

「生意気だー！」

「あっ!?　ちょっ、やめーーーーーっ!!?」

横島は誘いを断ったことにより、お燐とお空にぽかぽかと叩かれることになる。お燐は色々と情報を持っているので冗談交じりに軽く叩いているだけであるが、お空はその辺りのことをまるで分っていないのでわりと本気で殴っている。そろそろ肋骨が悲鳴を上げているぞ。

「ふふふ、ざまぁないですね。もっとやってあげて」

「ちょっ、さとりちゃげふうっ!?」

「乙女心を弄んだ横島さんが悪いんです」

「何の話っ!?」

ちゃっかりと昼間の仕返しをするさとりであった。人それを逆恨みと言う。

「ぶぇー……ひどい目に遭った……」

あれから二人に解放された横島は客室に戻り、ベッドの上に身体を放り出している。二人に、特にお空に殴られたところが鈍い痛みを発している。お空はあの後色々と横島の事情を聞かされ、すぐさま頭を下げて謝った。お燐から教わった通り、目に涙を溜め、上目遣いで胸を押し付けるようにして誠心誠意謝った。当然横島はデレデレになり、一秒でお空を許す。

動物たちはお燐たちとは逆に静かなものだった。ただ、横島が帰ると知り、悲しそうに泣き声を上げていたのが少し嬉しかった。

この後の横島の予定は特にない。精々が風呂に入るくらいのものだ。動物たちが居れば構ってやったりで時間も潰せるのだが、あいにく今は一匹もいない。パチュリーによく読書を勧められるが、こういう空白の時間が出来ると、何かお勧めの本でも貸してもらえばよかったと思ってしまう。まあ、横島の性格的に大人しく読書が出来るのかは別問題であるが。

とにかく何かをしたくなった横島は、いっそのこと鍛錬でもしてやろうかと考え始める。痛いのも辛いのも嫌いな横島がこうも変わるとは、元の世界の仲間たちでも予想出

来ないだろう。
　鍛錬のことを考え始めると、何だか身体がむずむずしてきた横島は、ひと汗掻いた方が風呂も気持ちがいいだろうと身体を起こす。そして何気なく部屋の扉の方に目をやると――――。
「お姉ちゃんの誘いを断るなんて、人間のくせに生意気だ―」
「――――っ!?!!」
　自分の視界いっぱいに広がる少女の顔。一体いつからそこにいたのか、横島は声にならない声を上げて、座ったままの姿勢で壁まで飛びのいた。
「あはは、すごいすごーい！」
「え……な、なん……!?　誰だお前は!?」
　横島は驚きすぎてキャラがおかしくなっている。もしこれが小傘の仕掛けた悪戯であれば、さぞ空腹は満たされただろう。
　けたけたと笑っていた少女は横島の誰何に首を傾げ、そのまま笑顔で名を告げる。
「私は〝古明地こいし〟。さとりお姉ちゃんの妹だよ」
「い、妹……？　あ、そういやいるって言ってたっけ」
　横島はさとりとの語らいを思い出し、納得。にこにこと笑顔を浮かべるこいしの見ていると、どこかで見たことがあるような気がしてくる。果たしてそれはどこだったか。

「……おかしい、俺がこいしちゃんみたいな美少女を覚えていないはずが……」

「？」

突然ぶつぶつと呟き始める横島にこいしは疑問符を浮かべる。こいしは横島をじっと見つめると、かなり余っている袖で横島を指した。

「それで、お兄さんのお名前は？　人に名前を聞くときは自分から名乗るものだって聞いたよ？」

「あ、っと。悪い悪い、俺は横島忠夫。地底には旅行に来ててな、さとりちゃんの厚意で地霊殿に泊まらせてもらってるんだよ」

「おお、そうだったんだ……！」

何が珍しいのか、こいしは横島の言葉に大きなリアクションを返す。藍から聞かされていたが、さとりは地底では嫌われているらしく、それが関係しているのだろう。

横島は改めてこいしを見る。緑の髪に黄色い服、花柄のスカートと、もし本当に以前会っていたというなら、横島でなくてもそうそう忘れることはないだろう出で立ちだ。更に付け加えるならば頗る付きの美少女でもある。これほどの美少女ならば、横島は決して忘れないだろう。だというのに、会ったことはある、という認識が存在し、その記憶は残っていない奇妙な感覚だけが残っている。こいしの能力か何かなのか。横島の思考は回り始める。

だが、そんな横島の考察をよそに、こいしは横島をつつき、意識を己に向けさせる。
「ねね、色々とお話を聞かせてほしいんだけど、いいかな？」
「あー……いいぜ。何を聞きたいんだ？」
「えっとねー、えっとねー」
手をパタパタと振り、こいしは横島から話をねだる。横島もちょうど暇を持て余していたのだ。遠慮なく自分の話し相手になってもらう。どうやらこいしは聞き上手だったらしく、横島の話が止まることはなかった。こいしは相変わらずオーバーリアクション的な身振りで楽しそうに話を聞いている。
「――――そして俺はこう言ったんだ。〝ゴーストスイーパーは悪魔の言いなりにはならない……!!〟」
「わー、お兄さんかっこいいー!!」
自分の活躍を盛りに盛り、気持ちよく語る横島。こいしからの称賛もそれに拍車をかける。
今横島が話しているのは元の世界の話だ。こいしに自分の身の上を話し、それならと元の世界の話をねだられたのだ。
やがて話にもひと段落付き、横島は満足そうに息を吐く。何せとことんにまで自分を美化した話を聞かせたのだ。それはもう満足だろう。この話を萃香や勇儀が聞いてい

たら、それぞれが三歩ほど助走をつけてぶん殴ってくるかもしれないが。

こいしもこいしで何度も頷き、満足そうにしている。やはり自分が知る世界とは大きく違う世界の話は、それだけ面白かったのだろう。と、こいしはここで大きく首を傾げる。それは全身で疑問を表しているようで、可愛らしくもあるが少々滑稽な姿に見える。

「ねえ、お兄さん。元の世界に帰りたいとは思わないの？」

「え……」

それは誰もが思いながら、しかし誰も聞くことがなかった問いだった。横島の事情を共有した紫たちによって、一先ず先送りにされた疑問。優先すべきは横島の心のケアであると考えたからだ。

横島の心……精神は大きく傷ついており、一見安定しているのだが、その実いつ綻びが生じてもおかしくはない状態なのだ。

ぎしり、と横島は己の内で何かが軋む音が聞こえた気がした。横島の脳裏に元の世界の様々な思い出がフラッシュバックする。

「……、……。……っ、……、……」

先程まで自分は得意げに前の世界での活躍を話していた。その時は平気だった。なのに、何故今の自分はこれほどまでに胸を締め付けられているのだろう。どうしてうま

く呼吸をすることが出来なくなっているのだろう。どうして身体が震えてくるのだろう。

「……分か、らない」

そうして、何とか絞り出せたのはその一言だった。今の横島の目には現実は映っていない。今の彼は、既に幻となった過去を見ている。そう、それは二人でのあの日々――。

「そっか。それじゃあ本当はどうしたいのか、その本心を私の能力で引き出してあげるね」

「え……？」

こいしはにっこりとした笑みを浮かべ、横島の額に右手人差し指を付ける。その感触に正気を取り戻した横島は、何をされるのか理解出来ずにただこいしの顔を見つめるだけだ。

「本能『イドの解放』――」

こいしの指先から何らかの〝力〟が横島に流れ。

「……あ。――ああ、ぁ？」

結果、横島は自らの裏切りを思い切り突き付けられた。

「――――――――――――――――――――――あ」

そして、横島は地霊殿から姿を消した。

第七十八話

『家族』

～了～

第七十九話

古明地こいし。覚妖怪であり、古明地さとりの妹。彼女は悩んでいた。

「ん～むむむ……」

こいしはある出来事を切っ掛けに、命蓮寺の在家の信者となっている。白蓮からのお説教に、「徳を積みなさい」という一語があった。

何をすれば徳を積むことになるのか、それがこいしのは分からなかった。なので、素直に白蓮に質問をしてみた。返ってきた言葉が「善行――――そのまま善い行いを重ねなさい」というものだった。

では、善い行いとは?

「それを考えるのも修行かー。難しいなー」

夜の人里を歩くこいしは意外と多い人の姿を視界に収めながら、人に気にされることもなく歩を進める。目的地はないのだが、せっかくだから人の多い場所に。

珍妙な鼻歌を歌いながら歩いていると、とある居酒屋から出てきた酔っ払いの青年二人の話が耳に飛び込んできた。

「うう……どうして僕はいつもこうなんだぁ……。僕はぁ……あの子にいいぃ……」
「分かったから自分で歩け……っ。重いんだよ、まったく」
詳細は分からないが、会話の内容からどうやら男の一人が誰かとケンカか何かをしたらしいことが窺える。どこにでもある、面白くもない日常の悩みの一つだ。だからこそ、こいしは興味を惹かれた。
気付かれぬよう後をつける。零れる言葉の端々から、大凡の内容を把握することが出来た。
青年には気になる女の子がおり、その子の前だと上手く話をすることが出来なくなる。そして焦りから咄嗟に出した言葉でその子の不興を買ってしまったとのことだ。
「あああぁぁ……どうしてすぐに謝れなかったんだぁ……」
「お前は口下手だからなあ。今なら酒の勢いもあるしいけそうなもんだが」
「無理だよぉ……。素面でも余計なこと言っちゃったんだから。酔ってると何を言うか分かったもんじゃない」
こいしは青年の言葉に同意する。変なこと口走っちゃうよね、と笑顔で頷く。そして、一つ思いついたことがあった。
――――翌日。青年は女の子の下へと謝罪をしに行くために人里を歩いていた。手にはお詫びの品のお菓子を持ち、頭の中で謝罪の言葉を何度も確認する。

そんな青年の前に、一人の少女が立っていた。
「……うわっ!?　ご、ごめん。気付かなくって」
「ううん、大丈夫だよ。それより、ちょっとだけ話を聞いてほしいなー」
青年に笑顔で話しかけるのはこいしである。彼女は昨夜の青年の話を聞き、手助けが出来るのではないかと考えていた。自分ならば、人と話をしやすくなるおまじないを掛けることが出来る、と。
「……何で、そんなことを？」
「え？　だってそーゆーことをぶつぶつ呟きながら歩いてたから」
「……何で僕は普段口下手なのに余計な時にぃ……!!」
青年は頭の中で反芻していたことを呟きながら歩いていた。その様がどうにも不気味だったので周囲から怪しげな眼で見られていたのである。
青年は羞恥から早くこの場を去りたくなり、つい咄嗟に「出来るものならそうしてほしい」とこいしに言った。
「――――うん。任せて」
こいしは人差し指を青年の額に付けた。
数十分後、青年は女の子に謝罪を済ませ、そればかりか今までの仲から一歩前進して見せた。まずはお友達から、という状態ではあるが、交際を始めるに至ったのだ。

こいしはその様子を一部始終眺めていた。青年にも女の子にも、誰にも知られず、二人の傍で。

「……」

これだ、と思った。胸には不思議な充足感が宿る。青年と女の子の笑顔を見ると、喜び、興奮、達成感が湧いてくる。

こいしは自分の能力を応用し、青年が言いたくても言えなかった言葉を紡ぎだしやすくなるようにしたのだ。ただ、これはあくまでも手助け程度の効果でしかない。謝罪、そして告白が成功したのは青年の想いがそれだけ強く真剣だったからに他ならない。

幸せそうに笑う二人を見届け、こいしはその場を後にした。こいしの能力の性質上、青年の記憶にこいしの姿が残ることはないだろう。誰かがおまじないを掛けてくれたという記憶は残るかもしれないが、それだけだ。

しかし、こいしはそれでよいと考える。自分がいたから何とかなったのだ、と喧伝するのは何か違う気がするし、何よりその方が格好良いと思ったからだ。

誰かを助け、助けられた人は助けてくれた人を思い出せない。昔のこいしならばそこに何かを思うこともなかっただろうが、今の彼女はそれを少し寂しいと思う。だが、それでもこいしはそれを良しとした。その方が徳を積んでいるっぽく感じるからだ。

「誰か、困ってる人はいないかなー？」

こうして、こいしは自らの能力で困っている人の手助けをしていく。少しずつ、僅かながらでも、困っている人の手助けをするために。それはたとえ考えが足りず、独りよがりな行いであっても、確かに善行に間違いはなかった。

こいしは失敗をしなかった。運が良かったのか、彼女が手を差し伸べる人間は皆善良であったのだ。ただ一人、結末がどうなったのか分からない者がいた。

霧の湖に住む氷精である。彼の妖精はとある少年に淡い恋心を抱いているようだったが、それに気付いていない様子だった。だからまずはその想いを自覚させ、そこからどうするのかの相談にのるつもりだったのだが……気が付いた時には、目の前には誰もおらず、周囲は凍り付いていた。何があったのかはまるで分からない。まるで狐か狸につままれたような気分だった。

それからその氷精とはまだ会えていない。まるで避けられているかのようにまったく会うことが出来ないでいる。何か失敗をしてしまったのだろうか？　もしまた氷精に会うことが出来たならば、話を聞かせてもらいたいとこいしは思っている。

そして、久しぶりの里帰り。久々の地霊殿には一人の人間の少年が遊びに来ていた。あのお姉ちゃんから直々にペットに誘われる人間。俄然、興味が湧いた。

どうやら少年の名は横島というらしく、何と平行世界からやって来たというのだから驚きだ。彼の元の世界の話はどれも興味深く、そして面白かった。意外に多い語彙から

表現される数々の物語は、それだけで脳内に詳細な映像を浮かび上がらせるほどであった。

楽しそうに、嬉しそうに元の世界の思い出を語る少年に、こいしは一つ疑問を持つ。

「ねえ、お兄さん。元の世界に帰りたいとは思わないの？」

――――返ってきた答えは「分からない」だった。

平行世界からの漂流者。横島はこの世界に大切な人がいる。さとりとの話を聞いた限り、あのレミリアがそうだという。なるほど、そういうものが出来てしまったのならば、どうすればよいのか分からないのも納得だ。

こいしは思う。こういった問題だからこそ、はっきりと答えを出した方が良いのではないのか、と。

こいしはレミリアとは違う。紫とは違う。永琳とは違う。横島の恋人達とも違う。そして、さとりとも違う。出会ったばかりの、他人である。

こいしの考えは正しい。残酷なまでの正しさだ。そして、必ずしも正しいことが成功に繋がっているわけではなく、これは、初めての失敗に繋がってしまった。

そしてそれは――――致命的な失敗だった。

第七十九話
『喪失』

「違う――――違う違う違う違う違う違う違う違う違う違うっ!!!」
「え……？　え……!?」
頭を抱え、違う、違うと叫び、全身から強烈な霊波を放出する横島の姿に、こいしは理解が追い付かなかった。今まで自分の能力を行使したことでこのような状態になった者など、ただの一人として存在しなかった。だからどうすればいいか分からない。苦しげに呻く横島を前におろおろと狼狽えることしか出来ない。
横島が膝を着く。暴風のような霊波で近付くことが難しいが、こいしは横島を支えようと奮起する。そして、自らの能力を使えば横島を苦しめる原因を打ち消せるのではないかと思いついた。
こいしは横島の〝無意識〟を引き出すことで彼の本心を自覚してもらおうとした。ならば、その無意識に働きかける力を抑制すればいいのである。
それを、もう少し早く発動出来ていれば良かったのだが。

深い深い水底の様に、一切の光も差し込まない世界。それは深淵の闇。横島の意識はその闇の中で悶え、苦しみ、喘いでいた。

「違う……違う……っ!!　俺は……俺はぁ……っ!!」

横島は否定する。己の中にある答えを。こいしの能力によって自覚させられた真実を、必死になって否定する。

それを認めれば壊れてしまう。横島忠夫を支えていたものが崩れてしまう。だから、否定する。見ないようにする。

しかし、それも。

「――――ヨコシマ」

背後から声が聞こえた。

愛する者の声。愛した者の声。もう、聞くことの出来ない声。

振り向いてはいけない。振り向けば壊れてしまう。だが、今の横島には縋るものが必要だった。極小の可能性に飛びつきたかった。何より、その声を無視することは出来なかった。

「――――ルシオラ!!」

だから、振り向いた。

「――――――あ」

振り向いた、その先。そこにいた者。横島は、己の裏切りを思い切り突き付けられた。

「うあああああああああああああああああああああああ――――――!!!!!!!!!」

「うあああああああああああああああああああああああ――――――!!!!!!!!!」

「っ!!?」

魂が砕けたかのような、様々な感情が混ざり、それら全てが互いを殺し合わせたような悲鳴が横島から発せられた。心を読むことが出来なくなったこいしですら背筋に怖気が走るような、心からの悲鳴。横島の身体に、今までにない霊力の高まりが感じられる。

不意に、バタンと部屋の扉が力任せに開かれた。

「横島さん、一体何が――――!?」

さとりである。強烈な頭痛に耐えるかのように頭を押さえ、顔を青くしたさとりが駆けつけてきたのだ。

膨大な霊力の高まり、そして横島の心が悲鳴を上げたことにより、横島の身に何かが起こったのを察したのだ。さとりの背後にはお空とお燐もいるが、この場においては最早関係がなかった。

さとりが来たことが切っ掛けになったのではないだろうが、横島の霊力の高まりが臨界を迎えた。

「――――――――――!!!!」

声にならない叫び。横島が放った霊波は物理的な衝撃を齎し、爆発という形でその威力を発揮した。神魔級の霊力を誇る横島の霊力が爆発すれば本来ならばさとり達もただでは済まなかったであろうが、横島の最後の意識がそうさせたのか、霊波のほとんどは指向性を持っており、部屋の壁を内から外へと打ち抜くにとどまった。

壁に大穴は空いてしまったが、幸いにも動物達もゾンビフェアリーにも大した被害はなかったようだ。

ただし横島と同じ場にいたさとり達はそうもいかず、爆発の余波を受けてしまったさとりとこいしは吹き飛ばされ、気を失ってしまう。お空とお燐もそれに巻き込まれたが、何とか無事だった。

「さ、さとり様……!?　こいし様!!」

お燐とお空は倒れている二人に駆け寄り、助け起こす。気を失ってるようだが怪我は

無く、じきに目を覚ますだろう。問題は……。
「横島さん……？　横島さんは……」
周りを見回すが、どこにもいない。壁の大穴から外に飛ばされてしまったのだろうかと、穴の下を見ても、瓦礫が落ちているだけだ。
「横島さん……どこに行っちゃったの……？」
お燐の呟きは誰にも届かずに消える。どたばたと大勢が走る音、自分達の名を叫ぶ声が聞こえてくる。正気に戻ったお燐は駆けつけてきたゾンビフェアリー達に指示を出し、混乱を治めることに尽力する。
まずはさとりとこいしの治療、そして横島の捜索だ。地霊殿の敷地内にいない以上、横島は旧地獄の街のどこかにいると思われるが、旧地獄は狭いようで広い。直前の横島の様子からそこまで遠くに移動することは出来ないはずであるが、相手はあの横島だ。
「紅魔館にも知らせないと……!!　とにかく無事でいて、横島さん……!!」

同時刻、紅魔館の客室にて。
「うあ〃ぁ、くうぅ……っ!?　あああぁ〃ぁぁぁ……!!」
妹紅は胸を押さえ、床に倒れ伏し、魂を抉るような強烈な痛みに喘いでいた。直感で

理解出来た。横島に何かあったのだと。

パスを通して伝わってくる痛みは、横島が感じている痛みなのだろうか。だとすれば、自分はこのまま倒れているわけにはいかない。横島の下に向かわなければ――――!!

「――――――え？」

不意に、胸の痛みが消えた。何も感じない。先程までの強烈な痛みは、何の痕跡も残さず唐突に、完全に消え去った。

がばりと身体を起こす。何も感じない。感じられない。まるで心に……魂に、大きな穴が空いてしまったかのような喪失感。

「よこ……しま……？」

横島の存在を感じない。感じられない。

「……ふぅ」

私は一体何をやっているのだろうか。頭の中で何度もそんな声が聞こえてくる。そんな言葉と同じくらい繰り返されるのは重く深い溜め息だ。

地霊殿で爆発があったと聞いたのは昨日の夜。家に帰ろうと街を歩いていると、爆発

音が聞こえてきたのだ。自分は危ない場所には近付かないようにしている。興味がないわけではないが……わざわざ危険なことに首を突っ込みたくはない。

それから翌日、つまり今日。何でも深夜過ぎにとある組（ヤクザ）が何十人も大挙して地霊殿に向かっていったそうだが、鬼の星熊勇儀に一瞬で蹴散らされたとお隣さんに聞いた。この件は自分が預かると言ったらしい。

あの勇儀が絡むとなれば、結構な大事になっているのだろう。

「だっていうのに、なんで私は……」

自分で自分の行動がまったくもって理解出来ない。自分はこんな考えなしだっただろうか？　……考えなしだったかもしれない。

また、溜め息。客人用の布団で寝ている少年の顔を見る。安らかな寝顔だ。昨晩の様子が嘘のように思えてしまう。

意識が朦朧としているのか、ふらふらとした足取りでどこかへと向かっているその姿は、何かから……どこかから逃げてきたようにも見えた。そんな様子に驚き、声を掛け……そして、私にもたれかかるようにして気を失った。

何があったのかは分からない。だが少年が旧地獄、正確には地霊殿に来た目的は知っていたし、本当ならばすぐに地霊殿に知らせなければいけないことも理解している。だが、何故か私は彼を自宅に運び込み、こうして寝かせてしまっている。

……本当に自分の行動が理解出来ない。私は何をやっているんだ？

ぐるぐると何度も同じ疑問が頭を過ぎる。そうしていると、不意にお腹が空腹を訴えかけてきた。そういえば朝起きてから何も食べていない。時刻は昼過ぎ……何かを食べて頭を働かせよう。

「ん……」

眠っていた少年から呻くような声が聞こえてくる。覚醒が近いのだろうか、手足も大きく動く。やがて動きが収まると、ゆっくりと眼が開かれた。明かりが眩しいのか、何度も目を瞬かせている。

「……ここは」

手を使ってゆっくりと起き上がる少年――――横島忠夫。私が思っていたよりも元気そうで何よりだ。

「ようやく起きたのね。どう、横島さん？　身体におかしなところはない？」

「え……？　……っと、ない、と思う……ます。多分」

「何よその口調」

寝惚けているのか、横島さんのおかしな口調に思わず笑ってしまった。……笑った私も失礼だったがしかし、キョロキョロと部屋を見回すのはいただけない。こんなでもここは乙女の部屋なのだ。

「えっと……何で僕はここに？」
「……僕？　昨夜のこと覚えてないの？」
「昨夜……？　……っ!?」
はて？　横島さんの様子がおかしい。数秒の間を置いて顔が赤くなって驚いて……？　……はっ！　このシチュエーションは……!!
「そーゆーことじゃなくて！　真面目に考えなさい真面目に!!」
「す、すみません！　でも……その……」
どうにも調子が狂う。口調といい仕草といい、まるであの時の横島さんとは別人みたいだ。今も何かを言い出そうとしてるけど、言いにくいことみたいだし。
……何か、嫌な予感がする。何だ？　何がおかしい？
「あの、さっきの……」
「え、ええ。何かしら」
横島さんは不安そうな顔で私を見つめてくる。どんどんと胸が高鳴る。別にときめいているわけじゃない。……不安で、だ。
「その、横島って……僕の名前なんですよね……？」
「……っ」
その問いに、答えを返せなかった。ただ肺から空気が漏れるような音がしただけだっ

た。横島さんは力のない笑みを浮かべている。引きつったそれは、様々な感情が交じり合って、笑うしかないという表情に見える。

そして、続けざまの言葉に、それを認めざるを得なくなってしまった。

「僕は――――誰なんでしょう?」

「――――は」

まともな声など出るはずもなく。私は壁にもたれかかり、脚から力が抜け、そのままずるずると座り込んでしまう。まったくもって嬉しくないことに、私の嫌な予感は当たってしまった。

「なんて……」

思考が高速でぐるぐると回る。どうしてこうなったのか、まるで分からない。横島さんの身に何があった? これからどうすればいい? 地霊殿に伝えるべきか? でも横島さんは地霊殿から逃げてきたように見えた。あそこで何かあったのか? ……知らせていいのか? 黙っているべきなのか?

意味のある思考が出来ているのか分からない。不意に口から零れたその言葉は、思考とはまるで直結していない、私の口癖だった。

「なんて――――妬ましい……」

第七十九話
『喪失』
～了～

パルスィ「なんて――――妬ましい……」
横島（……パンツ見えてる）

第八十話

金髪碧眼の少女――パルスィは混乱の中にいた。

先日新たに友人になった少年、横島忠夫が酷く憔悴した様子で現れたかと思えば目の前で気を失い、翌日に目を覚ませば記憶を失っているのだという。

理解の追い付かない展開に足からは力が抜け、パルスィはへたり込んでしまった。対面にいる横島からは下着が丸見えであろうが、今の彼女がそんなことに意識が行きようはずもなく。

数分の間、パルスィはその場に座り込んだままだった。

「……ごめんなさい。情けないところを見せて」

「いや、そんなこと」

ようやくショックから抜け出したパルスィは、横島から詳しい話を聞くべく彼の布団――正しくはパルスィの物だが――の隣に座り、柔らかく話しかける。

その際に温かいお茶も用意し、横島に渡してある。自分もそうであるが、お茶で気分をリラックスさせ、話しやすくするためだ。

「……えっと。それで、その。本当に、何も思い出せないの？」

「……はい」

何をどう聞けばいいのか。パルスィはあまり会話に慣れていない。口を開けば出てくるのは嫉妬の言葉がほとんどであるからだ。

なのでパルスィは率直に聞くことにした。もしかしたらこういう風な対応は間違っているのかもしれないが、パルスィは医者ではなく、当然そういった知識を持ち合わせていない

パルスィに出来るのは、せめて最大限に相手を気に掛けつつストレートに聞き出すことくらいだ。

「……何か、漠然とした記憶はあるのかもしれません。誰かと、何かを話してるような……何かをしてるような、そんな……覚えがある……ような……」

「あ、無理して思い出そうとしないでいいからね」

パルスィからの問いに申し訳なさそうに答えた横島は、こめかみに指を当て、頭に蘇る体験した覚えのない漠然とした記憶のイメージを見る。

なるほど、記憶を失うとはこういった不可解な気分を味わうものなのかと、どこか他

人事のように感じる。

「とにかく、あなたの名前は横島忠夫。で、あなたはここ、地底の〝旧地獄〟に旅行に来たの」

パルスィは横島を気遣うようにこめかみに当てた手を握り、本人も覚えていない名前と目的を教える。握られた手の小ささと温かさに一瞬胸が高鳴る横島だが、彼女から告げられた名と目的に、また不思議な感覚に襲われる。

「横島……忠夫……旧、地獄……確かに、何か覚えがあるような……」

「そうなの？」

覚えていないのに覚えがある。相反する感覚が気持ち悪く感じる横島であるが、流石にパルスィにその感覚が伝わるはずもなく、彼女は横島の言葉から彼の記憶障害は比較的軽い症状なのではないかと考えた。

「……横島さんはこの旧地獄の中心にある地霊殿にお世話になってたんだけど……どうかしら？　これも覚えがある？」

「……地霊、殿」

何かが、頭を過ぎる。

「そう。覚妖怪が主の大きなお屋敷で、動物がいっぱいの。あ、覚妖怪っていうのは、こう、このくらいの大きさの〝第三の目〟を持つ女の子で――」

「第……三の……」

脳裏に光が走る。

小柄な少女。華奢な体躯。額に当てられた指。薄っすらと弧を描いた唇。紡がれる言葉。暗い世界。声。振り向いて。振り向いて。振り向いて――――見た。

「え……っと。とりあえず、横島さんはそこから逃げて、きた？　みたいなんだけど……。その、どうしよっか。私から横島さんのことを伝えに行っても――――いたっ!?」

「――――やめて……くだ、さい……」

横島の手を握っていた手が、強く握り返される。妖怪であるパルスィが痛みを感じる程、強く。強く。

「ちょ、横島さん、痛い。いた、離して……！　……？」

痛みに抵抗するように手を引くパルスィだが、横島の手はびくともしない。痛みに耐えかね、咄嗟に思い切り引こうとした瞬間、パルスィはそれに気付いた。

――――横島の手が震えている。否、手だけではなく、全身がガタガタと震えている。見れば横島は全身から尋常ではない量の冷汗を流していた。歯の根もかみ合ってお

らず、カチカチと硬質な音を鳴らしている。
明らかにただ事ではない様子に、手の痛みも忘れて呆然としてしまう。
横島はうわごとの様に「やめてください」と呟き続けている。何かを、心底恐れているようだ。
「やめて……やめ――――うぶっ!?」
やがて精神に一定の限界が訪れたのか、横島の胃の中の物が逆流してくる。無意識に握り締めていたパルスィの手を離し、口を押え、必死に嘔吐するのを我慢する。
「横島さん!?　大丈夫!?　ちょ、ちょっと待って！　桶を持ってくるから！」
先程まで横島の様子を呆然と見ていたパルスィも正気を取り戻し、急いで桶を取りに走る。
何とか桶も間に合い、横島は胃の中の物をそこにぶちまけた。背中を擦るパルスィの手は優しく、温かく、少しずつではあるが今の最悪な気分を癒してくれる。
そうして全てを吐き出し、荒い息を吐く横島の背中を優しく撫でつつ、パルスィは先程の考えを撤回する。
軽い症状などとんでもない。あまりにも楽観視が過ぎた。……いや、軽い症状だと思い込もうとしたのか。
そもそもの話だ。地霊殿で横島は記憶を失うほどの目にあった。その認識を忘れて

はいけないのだ。

「……ごめん、なさい、パルスィさん。こんな、いきなり吐いちゃって。ごめんなさい……」

「……横島さん」

涙と涎と胃液とで汚れた横島の顔を拭うと、彼は荒く息を乱しながらもそう言って頭を下げた。情けないと思っているのか、彼の目からはまた涙が滲んでいる。

その様子を見て、パルスィは嫉妬の思いに駆られてしまう。自分は、明らかに目の前の弱った少年を心の底から心配している。

この嫉妬の化身である自分が、先日会ったばかりの少年を、これほどまでに。

「……気にしないで。謝ることなんか何一つないから」

嫉妬の念に駆られ、パルスィは横島に手を伸ばし――その頭を、自分の胸に優しく抱きしめた。

「落ち着いて、大丈夫だから」

妬ましい。あまりにも妬ましい。己の身を焼き尽くしてしまわんばかりに妬ましい。

――この少年が、妬ましくてたまらない。

「頼りないだろうけど、私が守ってあげる。……だから、安心して」

その言葉を皮切りに、強張っていた横島の身体から徐々に力が抜けていく。乱れてい

た呼吸も落ち着いていき、やがてそれは規則正しいものとなった。
パルスィの言葉と、温かさ、優しさに緊張がほぐれ、この数分間で負った精神的・肉体的疲労から眠りの世界に旅立ってしまったのだ。
眠る横島を抱き締め、パルスィはぽつりと呟く。
「ああ――なんて、妬ましい」
嫉妬の熱が籠ったそれは、誰の耳にも残らず消えていく。
そして、我知らず籠められた嫉妬と同等の強さの感情も、同様に。

第八十話
『〝考える〟』

「……それで、妹紅はどうしてる？」
とあるゲストルームにて、紅魔館、永遠亭の主要人物が集まっていた。皆一様に険しい表情をしており、ピリピリとした空気が漂っている。
「今は隣の部屋で眠ってる。昨夜はかなり取り乱してたから……」

レミリアの問いに答えたのは輝夜だ。正気を失った妹紅の下に誰よりも早く駆け付け、喚きたてる妹紅を落ち着かせたのも彼女だ。

妹紅の取り乱しようは尋常ではなく、輝夜をしてそのような姿は初めて見た。

ひとまず輝夜は妹紅を落ち着かせようとしたのだが、妹紅は無理矢理地底へと向かおうとしていたので、やむなく攻撃をした。その際に良い所に入ったのか、妹紅はその場で気絶。現在も意識を取り戻していない。

「それで、妹紅から聞いた話だと……」

滅茶苦茶に喚いていた妹紅であったが、それでも聞き取れた部分から推察し、内容を補填して輝夜は語る。

妹紅と横島とを繋ぐパスから、突然死んでしまいそうなほどの痛みが伝わってきた。その後、横島とのパスが消失したという。

「……そうか」

パスの消失。それを聞いた皆……特に横島の恋人であるフラン達は心臓が止まってしまったかのようなショックを受けた。目の前がグラグラと揺れ、自分が今どこにいるのかさえ認識出来ず、身体には震えが走る。

立とうとしても身体に力が全く入らない。声すらまともに出すことが出来ない。

「……よくよくあいつは厄介ごとに巻き込まれるわね」

呆れたような口調でレミリアが言葉を零す。何をのんきなことを、と皆はレミリアを見やる……が、そこで、皆は虚を突かれる。そして理解した。

レミリアは親指の爪を噛んでいる。普段の彼女からは想像も出来ない姿だ。爪は割れ、鮮血が滴り、手を伝う。

のんきなど、とんでもない。レミリアも相当に焦っているのだ。

かろうじて冷静さを保っているのはフランの存在だろう。妹の前で取り乱すわけにはいかない。何せ、妹の恋人の危機なのだ。自分は冷静でいなければならない。

「……横島君は成り方が異なるとはいえ、私達と同じ蓬莱人。例え一度死んだとしてもパスに影響があるとは考え難い……」

静かに考えを巡らせるのは永琳だ。横島と妹紅のパスは魂同士で繋がっている。それ故に肉体が死を迎えてもパスが消失することはありえない。

つまり、考えられる可能性は横島の魂に何かがあったということ。

永琳は横島に何があったのか推理する。数分を掛けて導き出した推測は、おおよそ真実に近いものだった。

「地霊殿には同種よりも耳も鼻も利く犬や猫がいるし、他にも反響定位（エコーロケーション）によって周囲の状況を知ることが出来るコウモリ達だっている。これらを掻い潜って横島君に接触するなんて、河童の光学迷彩でも不可能……。とくれば、候補は私の知る限りでは数人に

絞られる。そしてその中で最も可能性が高いのは……」

誰かが、ごくりと喉を鳴らす。

「――――無意識を操る覚妖怪、〝古明地こいし〟……。彼女でしょうね」

「――――!!」

皆の背に、稲妻が走ったかのような衝撃が襲った。誰もこいしのことを思い出せなかった。永琳以外の、この場にいる全員がだ。

「そうか、あの子の能力なら動物達に覚られずに横島さんに接触出来る！」

「しかし何で？　……さとりが人間と仲良くしてるから……？」

「意外とお姉ちゃんっ子っぽかったし、ありえなくはないかも……？」

こいしのことを皆が一斉に思い出したためか、怒濤の勢いで会話が交わされる。あるいは、犯人……〝悪者〟が欲しかったのかもしれない。

一種危険な空気が広がりだし、永琳が止めに入ろうとした中、三人の妖精メイドがノックもそこそこに入室してきた。

「あなた達、一号二号三号!?　私の代わりに門番をしてくれてるはずじゃあ……？」

美鈴の言葉通り、やって来たのは妖精メイドの筆頭、一号達である。息が上がっているところから、相当に急いできたことが窺える。妖精であるとはいえ、優秀な彼女達からは考えられない行為に、レミリアが不審気な視線を送る。

「も、申し訳ありません。レミリアお嬢さまにお客さまが……」
「客……？　悪いけど今はそんな暇はないの。後日に――――」
「でもでも、横島さんに関して緊急のお話があるって……！」
「……何ですって？」
恐縮しきりの一号達が話す内容は、何ともタイミングが良い話であった。来客が誰なのか、想像に難くない。
「……もう、扉の前で待ってもらってます。……ごめんなさい。色々と、規則を無視しました」
最後にどこかしょんぼりとした様子の三号が締めくくり、レミリアの返答を待つ。レミリアは数瞬思考を巡らせるが、すぐに一号達に声を掛ける。少し、笑っていた。
「いえ、よくやったわ。とりあえずお客を中に入れてちょうだい。……緊急を要するの」
「はいっ」
ほっと息を吐いた三人は急いで扉を開き、客人を室内へと招いた。入室したのは地霊殿に棲む妖怪の一人、火焔猫燐。
皆の視線がお燐一人に集中する。フランなどは明らかに敵意を含んだ目で睨みつける。
お燐はスカートの裾をぎゅっと握り、唇を引き結んでいる。その表情、仕草、身に纏

う妖気からも、彼女が抱いている様々な感情を推し量ることが出来た。
「……お前が来たか」
「……はい」
「……まあ、いい。じゃあ聞かせてもらおうか？　――――お前達は横島に何をした？」
「――――っ!!」
お隣に掛かるプレッシャーが一気に増大した。
皆はあくまで冷静に努めている。努めているがしかし、それでも抑えつけている感情が漏れ出してしまっている。
流石のお隣も、この状況に生きた心地が全くしない。それ故か、身体にも震えが走ってしまう。
何も言い出せないまま、数分が過ぎてしまった。我慢の効かないフランやてゐは今にも飛び掛からんばかりであり、美鈴と小悪魔に抱えられている。
そうして停滞した空気が流れる中、突然に長い長い溜め息を零す者がいた。
レミリアである。
「……ごめん。あんたを責めたところでどうにかなる話じゃないのは分かってるんだけどね。……何があったのか、詳しく話してくれるかしら？」
先ほどまで剣呑な空気を噴出させていたレミリアが緊張を解き、お隣に穏やかに言葉

を掛ける。
お燐はレミリアのその姿を見て心を決めたのか、数度深呼吸をしてゆっくりと詳細を語りだした。

「……そう。そういうことだったの」
「……うん」
お燐が紅魔館を訪れる数時間前。意識を取り戻したさとりは、同じく覚醒したこいしから何があったのかを詳しく問い質していた。
さとりの背後にはお燐とお空も居り、はらはらとした様子で二人を見守っている。
「こいし、あなたに善行を積むように言った聖白蓮は、他に何か言っていなかった？」
「え……？」
予想をしていなかった言葉に、こいしは戸惑う。もっと他に聞くべきことがあると思うからだ。だが、さとりの目は静かにこいしの瞳を見据え、問いに答えるように促している。
こいしは、何故かその視線に耐えられず、俯き加減に答えた。
「えっと……善行を考えるのも修行。何が善行なのか、よく考えて行動するようにって」

「……」

沈黙が怖い。緊張からか、こいしの心臓が痛い程に激しく跳ねまわる。

さとりはこいしの言葉を聞き、すっと目を閉じた。そうして十数秒、再び目を開いたさとりはこいしにゆっくりと語り掛ける。

「こいし。あなたが誰かを思いやって、自分なりに善い行いを重ねようと行動してきたのは分かるわ。それは確実にあなたの成長に繋がっているし、私も嬉しく思う」

「……」

さとりの口から出たのはこいしを褒める言葉だった。それはさとりとしても本心からの言葉だろう。これが平時ならばこいしも両手をぶんぶんと振って喜びを露にしたのだろうが、今の心持ちでは喜ぶ気になどなれはしない。

「……だからこそ、私はあなたに言わなければいけない」

こいしを貫く視線が、強くなる。

「あなたは考えて行動したつもりだろうけど、その実、まるで何も考えてはいないわ」

「……！」

さとりの言葉は、こいしに鋭い痛みを与える。感情が昂る。反発したくなる。だが、口は上手く動いてくれないし、身体も全然動いてはくれない。それは何故か？

――――そのことに、自覚があったからではないだろうか。

「善行……いえ、全ての行いは時と場合によって何が正しくて何が悪いのかが移ろっていくもの。〝今、これをしたらどうなるのか？〟……そういった物事の続き・裏を予想して、その時々に最善の行動をする。それが、よく考えて行動するということよ」

「――――!!」

ぐうの音も出なかった。自分は正しいと思うことを行ってきた。だが、本当に考えて行動したのか？　それは本当に当人にとって正しいことだったのか？

さとりの言葉を聞く前ならば自信を持って「よく考えて行動した」と言ってのけただろう。だが、今はもう無理だ。こいしは、自分が如何に考えなしに動いていたのかを理解したから。

「……まあ、今の私はあなたに偉そうに言える立場じゃないんだけどね」

「え……？」

自分の浅はかさに打ちのめされていたこいしの耳に届いたのは、力なく笑みを浮かべたさとりの悔恨に充ちた声だった。

「お燐」

「は、はいっ！」

さとりは背後のお燐に声を掛ける。やはりその声に力はなく、どこか震えているように感じる。こいしには、それが不思議に思えた。

「私はゾンビフェアリーに指示を出さないといけないし、それに勇儀さんとも話をしないといけないの。……悪いのだけれど、紅魔館に事情を伝えに言ってくれないかしら？」

「……了解です、さとり様」

お燐はさとりの言葉に頷くと、そのまま駆け足で退室し、地上へと向かう。お燐の目に映るさとりは今にも消えてしまいそうなほどに弱っているようにも見え、本当は自分こそが地上へと赴きたいのだろうが……これ以上、地底に騒動の種を蒔くわけにはいかない。それが分かるからこそ、お燐は急いで地上へと向かったのだ。

お燐を見送ったさとりは、今ほど〝地霊殿の主〟という肩書を恨めしく思うことはなかった。

そして、数時間後。さとり達の眼前には紅魔館の面々がいる。

さとりはこいしの前に立ち、皆に頭を下げた。その姿は、こいしの心に耐えがたい痛みを齎した――――。

第八十話

『〝考える〟』

～了～

第八十一話

こいしは目の前の光景に理解が追い付かなかった。
自らの姉であるさとりが、地上から来た客人達に頭を下げている。
悪いのは自分だ。彼に……横島忠夫に余計な茶々を入れて問題を引き起こしたのは自分なのだ。
なのに、どうして。どうして、自分の代わりにお姉ちゃん（さとり）が頭を下げるのか――――？

「本当に申し訳ありません。全ては、私の責任です」
「さとり……」
さとりは誠心誠意頭を下げる。彼女は自分の情けなさに涙が出る思いだ。
レミリア達に信頼されて横島を地霊殿で静養させてたというのに、彼の身に重大な何かを起こし、あまつさえその行方も見失ってしまった。

全ては自分のせいである。妹の精神に問題が発生していることを把握しながらも、時間が解決してくれると、いずれ理解してくれる日が来ると楽観視し、具体的な解決を図ろうとしてこなかった己の因果が巡って来たのだ。

何もせずに解決することなど何もないと、当の昔に思い知っていたというのに。

拳をきつく握りしめ、身体を震わせて頭を下げるさとりを見るレミリアの瞳は、意外にも同情的な色を帯びていた。

レミリアとさとりの立場はよく似ている。理由は違えど最愛の妹の精神に異常が発生してしまい、その治療を施してきた。

幸い……と言えば語弊があるだろうが、レミリアの妹であるフランは自らの特異性を理解し、自分から地下へと引きこもることによって他人を巻き込まぬように己の心を閉じ込めた。

こいしは地底を飛び出し、あらゆる場所に自由気ままに繰り出した。彼女の能力もあってか、捜索はほぼ不可能だと言っても過言ではない。こいしの無意識のよる行動は、こいし本人でさえ考えが及ばないことをしでかすことがままあり、その事後の顛末が唯一の手掛かりになっていたのだ。

レミリアはさとりに怒りを抱いている。だがそれと同時に既に許そうという思いも持っている。今回の発端は自分であるとも言えるし、何より事が事なのだ。今は責任の

追及などしている場合ではなく、協力して一刻も早く横島を見つけるべきである。
　レミリアの心が読めるさとりは彼女の心を知り、その深く大きな器に畏敬の念を抱く。そして、レミリアの内心を知って心の片隅で安堵を覚えた自分に巨大な嫌悪感を。
「さと――――」
「違うのっ!!」
　さとりに声を掛けようとしたレミリアの前に、こいしが躍り出る。
「ちがっ、違うの！　お姉ちゃ、お姉ちゃんは悪くな、いの……！　わ、私が……！　私がっ、悪くて……!!」
　視線は泳ぎ、声は震え、全身からは冷汗が噴き出している。自分に集中するいくつもの眼、その責め立てるような視線の圧に、こいしの緊張は極限まで高まり、精神は限界にまで達する。
「ご……、ごめ……!!」
　視界が滲む。呼吸が上手く出来ない。やがて、ついに――――。
「……ごめんなさいいいいいーーーーーっ!!!」
――――こいしの心は、決壊した。

第八十一話
『暴走する心と感情』

「……」

皆は何も言うことが出来なかった。

地面にぺたりと座り込み、わんわんと大泣きするこいしの姿に呆気にとられたのだ。

こいしがその〝眼〟を閉ざして以来、これ程までに大きく感情を露にするところなどさとりですら見たことがなかった。

自らの行いの是非、さとりの言葉、周囲の視線……そして罪悪感。それらが余程堪えたのか、こいしの幼く未熟な精神は悲鳴を上げ、ついには大泣きという形でその感情を爆発させた。

「こいし……」

湧き上がる大量の感情を処理しきれず、ただどうすることも出来ずに泣くこいしの姿に、かつての自分の姿を重ねる少女が居た。フランである。

フランの姉であるレミリアとさとりの立場が似ているように、フランとこいしの立場もまたよく似ている。

自らの特異な能力のせいで精神を病み、己を閉じ込めることを選んだ。フランは自らが誰も傷付けないように、地下深くに自分自身を。こいしは己が誰かに傷付けられぬように、自らの心を閉じ込めた。

肉体と精神、他人と自分。それらに違いはあれど、フランがシンパシーを覚えるには十分だった。

もし自分がこいしと同じ能力を持っていたら、同じように心を閉ざしたかもしれない。いや、もっと酷いことになっていたかもしれない。

フランは己の中に潜む凶暴性を知っており、それによって引き起こされるかもしれない〝もしも〟を想像し、背筋を震わせる。

フランには暗い闇から引き上げてくれる人達がいた。こいしにも当然それをしてくれる人はいるだろう。だが、未だその時は訪れていなかった。

こいしとフランの決定的な違いはそこだった。

「……こいし」

フランは歩を進め、泣き続けるこいしの肩に手を添える。

「こいし……こいし」

自分の存在に気付かないこいしにそれでも声を掛け続け、自分のことを認識してもらうまで、根気よく名前を呼び続ける。

フランの行動は皆も予想外であり、誰もがフランの行動に注視した。何をするのかは分からないが、邪魔だけはしてはならない。それが皆の頭に浮かんだ共通事項。真っ先に飛び出そうとして鈴仙にその身を抑えられたてゐも、何も言わず大人しく見守る程にその認識は強く固いものだった。

「……っ、……っ、……ひっ、……う」

時間にして数分も掛かっていないだろうが、ようやくこいしはフランの呼びかけに気付き、しゃくりあげながらも顔を向ける。こいしの目には恐怖が宿っていたが、それでも目を逸らさずにフランと視線を交わす。

こいしの心は未体験の痛みに悲鳴を上げ軋んでいる。しかし、こいしは誰からの、どんな罵倒でも身に受けなければいけないと考えていた。そして、そんなこいしにかけられたフランの言葉は想像の埒外のものであった。

「ねえ、こいしはどうしてお兄様に能力を使ったの？」

「え……？」

フランからの問い掛け。さとりから事態の説明を聞き、その理由を知っているはずの彼女から、その問いは投げられた。

「それ、は……」
「……それは？」
　大きく呼吸を繰り返しながら、こいしは何とか声を絞り出す。どうして能力を使ったのか。震える身体を抑えつけ、こいしはそれでも必死に言葉を紡ぎだす。
「それは……その時、は……それが、正しいことだと思ってた、から。本当の、心の声を浮かび上がらせれば……それが、答えになるって思ってたから……！」
　再び、こいしの目に大粒の涙が滲み、ぽろぽろと零れだす。
「でも、私は間違ってたんだ……！　心の声を浮かび上がらせて、それが、真実だなんて……!!　私は、誰よりもその怖さを知っていたはずなのに……っ!!」
　こいしはかつて姉であるさとりと同じ能力を持っていた。だが、その能力のせいで他者から嫌われ、その瞳を閉じた。そうして新たに手に入れたのが〝無意識を操る程度の能力〟だ。
　そう、こいしは誰よりも知っていた。誰かの心の声を知ることの怖さを。本人も気付いていない本当の心を知った時の恐れを。
　――――全て、忘れてしまっていた。嫌なことから逃げ出した末の結果がこれだったのだ。
　こいしの悲鳴にも近い叫びに誰も声を出すことが出来ない。こいしの中の後悔や絶

望の感情を感じ取ったからだ。しかし、誰もが動けない中で、ただ一人だけ動く者がいた。

「間違ってた……か。私もね、ずっとそうだった」

そう、フランである。

「私もずっとずっと間違ってきた。今までみんなの声を聞かないふりして、ずっと嘘の自分で過ごしてきて……それで、もっと酷い間違いもしたんだ……」

フランの脳裏に浮かぶ、数百年にも及ぶ間違いの歴史。自分の為を思う姉の心を、周囲の声を知らぬ、聞かぬと地下に籠り続け。本来の自分を隠し、偽りの自分を創り出した。そして、あの『男』との戦い。それらの全てが間違っているわけではないが、〝今〟のフランはそれを正しくはないと感じている。

「でも、そんな私を引き上げてくれた人がいるの。お姉様みたいに助けてくれたの」

こいしの目が、大きく開かれる。それが誰の事か理解したからだろう。

「……私はまだただお兄様に何も返せてない。ずっと助けられてばかりで、甘えてばかりで……！」

フランの胸中に蘇る横島との様々な思い出。

手を繋いでくれた。頭を撫でてくれた。抱きしめてくれた。誰かを好きになること、誰かを愛することを教えてくれた。心を満たしてくれた――――救ってくれたのだ。

「私はお兄様を助けたい……間違ったままで終わらせたくない……！」

こいしの肩に置かれたフランの手が、いや、全身が震える。俯いたフランの顔から雫が零れ、こいしの膝を濡らした。再び上げたその顔、涙で滲んだ瞳は、それでもこいしの目を真っ直ぐに見つめている。

「こいしは……こいしはどうしたい？」

「え……」

その問いかけに言葉が詰まる。正直なことを言ってしまえば、その言葉の意味が分からなかったと言ってもいいだろう。フランはこいしが己の言葉の意味を飲み込むのを待つように、じっと目を見つめて口を閉ざす。その強い意志の宿る眼に、こいしは強く惹き付けられる。

自分はどうしたいか。誤った形で能力を使い、多くの人の人生に干渉してきた……そして、大きな過ちを繰り返した自分が何をしたいか……何をするべきなのか。

「私、は……」

俯いている場合ではない。己が今すべきことはそんなことではない。

前を見る。己のしてきたことと向き合い、その結末の責を負う。そして、今の自分がしなければいけないこと――――。

「私は……お兄さんに、横島さんに、謝りたい……」

震えながら、つっかえながら……弱々しく、しかしはっきりとこいしはそう口にした。

「私のせいで横島さんにも、他の人達にもすごい迷惑を掛けて……！　だから、謝りたい……横島さんに、みんなにちゃんと謝りたい……！」

またぼろぼろと涙を流しながら、こいしは必死に自分の心情を吐露する。

自分は許されないことをしてしまった。取り返しのつかないことをしでかした。今己が考えていることは許されることではない。望むべきことではない。それでも、もし許されるのならば――――共に、横島を見つけたい。そして、心からの謝罪を。

「……そっか」

己の心と向き合い、自分がすべきことの答えを絞り出したこいしに、フランは笑い掛ける。こいしの肩から手を離し、今度は固く握られているこいしの手を優しく包んだ。

「……？」

優しく、温かで柔らかな感触に、こいしは疑問を浮かべる。自分を見つめるフランの眼差しは、柔らかなものに変わっていた。

「お兄様を一緒に探してほしいの。私じゃあどうすることも出来ないから……こいしも、一緒に」

「……!!　で、でもっ、私は……!?」

フランの言葉にこいしは面食らう。自分は横島が消えた原因である。その自分に共

に横島を探してほしいと頼むフランに、こいしはただ驚くばかりだ。
だが、同時にフランの願いはこいしにとっても望ましいものだった。許されるのならば自分も横島を探したいと、そう思っていたことは紛れもない事実である。
「……いいの？」
震えた声で、こいしは問う。
「……いいの？　私も、横島さんを探しても……？」
震え、怯えを帯びた声。その問いかけに、フランは。
「うん。一緒にお兄様を探して」
一切の躊躇いもなく即答した。
「……っ」
ふにゃり、とこいしの表情が歪む。また涙が滲んできた。そうして何度目かも分からぬ涙を零し始めると、フランではない誰かがこいしの頭を優しく撫でる。
涙で歪む視界のままに、その人物を見上げる。優しい手の主はフランの姉であるレミリアのものだった。
「アンタの気持ちは分かったわ。……フランもこう言っていることだし、アンタにも横島の捜索に全力を注いでもらうわよ」
その言葉、そして自分を撫でている手に、こいしはきょとんとした表情でレミリアを

見つめる。その間の抜けた表情にレミリアは思わず噴き出してしまう。
「え……っと、その」
「あー、言わんとしてることは分かるわ。けど、フランがこうしてアンタを許してるんだ。私からは何も言わない。……ついでに言えば、他の誰にも文句を言わせないさ」
そう言うと、レミリアは視線を皆に向ける。その視線を受け、皆は一様に頷いた。フランに免じて、ということである。
レミリアはフランの言葉を聞き、その成長を嬉しく思っていた。以前のフランならばさとりやこいしの言葉を聞いた瞬間に暴走し、今頃は血みどろの戦闘が始まっていたことだろう。
だが、フランは思うところはあるだろうが、それでもこいしを許し、彼女の思いを受け入れた。
――本当に、涙が出る思いだ。
だから、フランの望む通りにする。
なに、もし何かがあったとしても……自分が、その責を負おう。何せ自分は、フランの姉なのだから。
さとりは、こいしの言葉、その思いに彼女の成長を見た。

人は何かを間違えた時、その次の行動によって真価を問われる。
以前のこいしならば何も気にせず、記憶にも残さず、また気ままに無意識に遊び回っていただろう。だが、今のこいしは確かに以前のこいしとは違っていた。
今回失敗したのは確かであるが、それでも良き師との出会いがあったのだろうと推測出来る。
成長を促したのが自分でないことは残念であるが、それはそれだ。
今、この場において問題があるとすれば――――。
さとりは、ちらりと彼女を見やる。
「……」
その少女は俯き、自らの身体をその両腕で抱き締めるようにしてじっと耐えている。
時折身体は震え、息は浅く、早い。
「……大丈夫、妹紅？」
隣に立っていた輝夜がその少女、妹紅に声を掛ける。
「……ああ。大丈夫。私は大丈夫だ。……大丈夫」
少しの間を置き、妹紅は力のない微笑みを浮かべながら、そう答えた。それはまるで己に言い聞かせるような言葉だ。
そう、今この場において最も精神的に危うい状態なのは妹紅なのである。今の彼女の

心はとてつもない不安と恐怖に圧し潰されそうになっている。

かつて、妹紅が輝夜に復讐を果たそうと死を失ってからの日々は、輝夜への復讐心がある種の支えとなって千を超える年月を超えさせた。

それを果たしてからの日々は新たに支えとなるものを探し、燻りを抱えた日々となった。そこで出逢ったのが横島だったのである。

横島と過ごす日々は彼女の失った支え……心の穴を埋めていた。それだけでなく、彼女は知らず、横島に依存するようになっていたのである。

今の妹紅は己を支える愛しき人、己の半身を失った状態と言える。

フランと妹紅。人は愛を知ることで強くなり、そして弱くもなるのだ。

「……」

さとりは唇を噛む。今の妹紅に何を言っても慰めにもならない。彼女を癒せるのは横島のみ。一刻も早く、見つけなければならない。

……だが。さとりの決意を嘲笑うかのように、数日が経っても横島は見つからなかった――――。

時は遡り、横島が気絶するかのように眠りに就いた直後。パルスィは横島を再び布団に寝かせ、彼の吐瀉物を処理すると、一人思案に暮れていた。

「守るとは言ったけど……一体何をどうすればいいの……？」

どうやらパルスィは何も考えていなかったらしい。

そも、守るとは何なのか。横島を守るのならば、彼が住んでいる紅魔館に連絡を入れるのが一番だ。話によれば横島はレミリア・スカーレット、八意永琳、そして八雲紫の庇護下にあるという。この面子を相手にバカをする者など、そうそういるわけがない。

確実を取るならそうするべきだ。そうするべきなのだが……。

「……」

パルスィは横島の寝顔を見やる。我知らず、手が横島の頬に伸び、そっと触れた。

――――何故か。そう、何故か。紅魔館に伝える気にはなれなかった。それが、一番良い選択であると分かっているにも拘わらず。伝えないことによって、自分に……ひいては地底にどのような不都合が生じるかも分からないというのに。

「……あるいは、私が地底を滅ぼすことになったりしてね……？」

おどけたような口調で最悪の未来を口にする。しかし、彼女の背にはそれこそ言葉にすることも出来ないような〝何か〟が圧し掛かってきていた。

口内は乾き、呼吸は出来ず、脳裏には少ない友人達の顔が浮かんでは消える。内臓は凍ってしまったかのように冷たく感じられ、今にも千切れてしまいそうなほどの痛みを覚える。

腹から何かが込み上げる。だが、パルスィはそれを無理やり飲み込んだ。

「……構うものか」

全てを振り切り、呟く。

「……たとえ、どんな手を使っても……!!」

――――我は嫉妬の化身、水橋パルスィ。地底に充ちる妬心を束ね、我が力の糧とせん……!!

地底の片隅で、誰に知られることなく一人の少女がその心を暴走させる。横島との出会いがそうさせたのか、彼に降りかかった事態が切っ掛けだったのか。……あるいは、そもそも関係などなかったのか。ともかく、パルスィは目の前の総てを失った少年を守ると、心に強く強く刻み込む。

それは、彼女にとって初めての……そう、初めての嫉妬以外の感情から生じた想いだった――――。

第八十一話
『暴走する心と感情』
～了～

第八十二話

紅魔館が誇る図書館にて、一人の少女が静かに本を読んでいた。
机に山積みにされた様々な本に埋まっているようにも見えるその様は、現在の彼女の心の内にある不安を誤魔化すための物にも見える。
ふと、少女がその顔を上げる。自らの隣に突然一つの気配が現れたからだ。
「お茶が入りました、パチュリー様」
「ありがとう、咲夜」
読書をしていた少女、パチュリーに紅茶を持ってきたのは、紅魔館のメイド長である咲夜だ。
パチュリーは咲夜から紅茶を受け取ると、読書を一時中断し、ティータイムへと洒落込むことにする。まずは紅茶の色、次いで香り。そして熱と共にその味を堪能する。
熱い紅茶を一口啜り、一つ深呼吸。ややささくれ立っていた心が、落ち着いていくのを感じる。
「良かったのですか、こちらに残って」

「そういう咲夜こそ」

咲夜からの確認の言葉に、パチュリーは同じ問いを返す。

横島が地底で行方不明となった。その報せを聞いた紅魔館・永遠亭の主要メンバーはすぐさま地底へと向かった。この二人は、そんな彼女らを見送り、ここ紅魔館へと残ったのである。

咲夜は主であるレミリアの留守を守るために、己の不安と心配を押し殺して職務を全うしている。落ち込み、不安がる妖精メイド達を叱咤して元気づけるのも彼女の仕事だ。

パチュリーは、そもそも心配などしていないと言う。横島のことだからすぐに見つかり、ひょっこりと帰ってくるに決まっている。だから自分はここで待っているのだと、親友達を送り出したのだ。強がりを言っているという自覚はある。しかし、どれだけの不安があろうとも、横島が帰ってくるということだけは疑っていない。

だから、自分は待つだけでいい。きっとすぐに皆が横島を連れて帰ってくるだろうから。

「……あの二人は？」

自分達のことはもういいだろうと、パチュリーは話題を変える。あの二人、とは紅魔館の新人メイドである影狼と赤蛮奇のことだ。この二人は横島との関わりも深く、それ

だけにどのような状態であるか気にかかっていたのである。
「影狼は過去のトラウマからか一時かなり取り乱しましたが、赤蛮奇のおかげで今は持ち直し、一号と共に職務に励んでいます。赤蛮奇の方もショックは大きかったようですが、先の通り影狼を慰撫し、現在は二号と共に美鈴の代わりに門番を務めています」
「……そう」
どちらも大きな問題は無かったようで、そっと息を吐く。尤も、影狼の取り乱し様は中々に酷かったのであるが、今この場において問題が無ければ構わないというのがパチュリーの考えである。
「……大丈夫でしょうか」
ふと、咲夜が呟く。誰に聞かせるでもない独り言のようではあったが、隣にいるパチュリーには聞こえてしまった。どうやらパチュリーと横島について話したせいで、不安がぶり返したようだ。
パチュリーは表情に影を差す咲夜を見て苦笑を浮かべる。あの咲夜が随分と変わったものだ、と。
自分を見て笑みを浮かべるパチュリーに、咲夜は怪訝な顔をする。パチュリーはそんな咲夜の背をポンと叩き、今自分達がするべきことを言い聞かせる。
「横島のことをレミィ達に任せてここに残った以上、私達が出来ることはたった一つだ

けよ。――――信じなさい。横島は、レミィ達が必ず連れて帰って来るわ」
「パチュリー様……」
　咲夜にとって、最も信に値する人物は言わずもがなレミリアだ。咲夜はそのレミリアに横島のことを託し、自分は紅魔館に残った。では、そのレミリアのことを自分が今ここで信じなくてどうするというのか。
　パチュリーの言葉は咲夜の胸に強い衝撃を齎し、自分の主の親友であり、誰よりもレミリアを信頼しているその姿に感動すら覚えたのだった。

「……私、今ものすごくカッコいいこと言わなかった？」
「そうですね。……それがなければ完璧でしたね」

第八十二話
『来訪者』

地霊殿のとある一室。現在、さとり達地底組とレミリア達地上組は同じテーブルに着き、情報の交換を行っていた。

それぞれが地底を調べて回り、その結果を報告しようというのだが……。

「……一体どういうことだ……!?」

募る苛立ちから、レミリアの組んだ両手に力がこもる。ミシミシと音を立てるその手は、レミリアの感情の強さをそのまま物語っている。

「横島さんが地霊殿を出てもう三日……。地底をくまなく探しているというのに、何も情報が出てこないなんて……」

こめかみをガリガリと掻きながらそう呟いたさとりは、普段よりも更に目の隈が濃く、憔悴している。

さとりは横島の失踪に責任を感じ、自分から地底を探し回っている。自分の負担を度外視して能力を駆使して聞き込みを行っているというのに、横島の情報は一切入ってこないのだ。焦りや不安が表出してしまっても仕方がない。

「もう、地上に出てる……ってことはないんだよね?」

てゐの確認にさとりは力なく頷く。地上と出入りが可能な場所は真っ先に調べた。その際に同じく横島を探しているパルスィと接触し、軽く情報の交換も行っている。横島が地上に出たとは考えにくい状況だ。

無論全て調べ尽くしたとはとても言えないが、それでも現在のところ何の情報も入ってきていないのには疑問が残る。

「……パルスィさんとは軽い情報交換しかしていないんですよね？　やっぱりもう少し話を聞いた方が……」

「必要ありません」

レミリアの背後に立ち、考えを纏めていた美鈴がそう進言するが、さとりに切って捨てられる。美鈴もそれ以上何も言わず、その言葉を受け入れる。いや、美鈴だけではない。その場の全員が、それを当たり前の様に受け止めているのだ。

「彼女（パルスィ）を頼る必要などありません。私達で横島さんを見つけましょう」

皆はさとりの言葉に頷く。誰も反対しない。誰も異を唱えない。

明らかにおかしな感情の変化に誰一人気が付かない。

――――否。

一人。ただ一人だけ、現在の状況に違和感を覚えている少女が存在する。

「……あ、れ……？」

今回の騒動の元凶とも言うべき少女は、脳裏に走った微かな揺らぎに目を細める。

どこもおかしくはないと認識している。しかし何らかの違和感が拭えない。

こいしの無意識の能力が、何かに反応を示している。

「……こいし、どうかしたの？」
「あ、ううん。何でもないよ、お姉ちゃん」
さとりに話しかけられ、こいしは先程まで巡らせていた思考を隅に置く。今は考えていても仕方がない。一刻も早く横島を見つけなければいけないのだ。

――――彼女達の中で、とある感情が膨らんでいく。それが何であるかも、質量と熱量が上がっていくのも覚らせないままに。

「……今日も良く寝てるわね」
目が覚めてから約三時間。パルスィは側臥位の体勢で隣の布団で眠っている横島の寝顔を何とはなしに眺めていた。
横島がパルスィの家に厄介になってから三日が経つが、横島は一日の内、およそ十五時間程を睡眠で過ごしている。まるで疲れ切った心と身体を癒すために魂が強制的に眠りに就かせているようにも見えるが、余りに深く静かに眠り続けるさまは、まるでもう目が覚めないのではないかという不安を毎度抱かせるには十分なほどだ。

だからパルスィは横島の寝顔を見つめている。その目を開き、朝の挨拶を交わすまでは彼女の不安が取り除かれることはない。

何となく、パルスィは手を伸ばし、横島の頬に触れる。そっと頬を摘まみ、軽く横に引っ張る。少しだけ横島の眉が顰められた。それに安心と、少しの嫉妬を覚える。

「……まったく、この私にこんなにも心配を掛けさせるなんて」

この三日の内に、何度この言葉を口にしただろうか。自分の中で、日に日に存在感を増していく目の前の少年に、パルスィは強い嫉妬を抱く。

「私にこんな苦労をさせて……気付いてないのかしらね」

少し頬を摘まむ力が強くなった。いやいやとむずがるように首を振る横島の姿に、パルスィの溜飲が少し下がる。

横島を住まわせて以来、パルスィは一切外出をしておらず、誰とも会っていない。今のパルスィにとって、横島から目を離すことは考えられない。いつまたあのような発作が起こるか分からないからだ。

横島もあの発作のことは気に病んでおり、苦労と迷惑を掛けたことを詫びている。しかし、パルスィはそれを苦労とは思っていない。

現在、パルスィは二つの能力を行使している。コンプレックスの塊である横島、そして孤独な存在であった龍神のおかげでパルスィの力は飛躍的に向上していた。

だからこそこんな無茶が出来る。

しかしその力も無限ではない。力の源の一つである横島は記憶を失い、そのコンプレックスから来る強烈なまでの嫉妬心を持っておらず、龍神は横島と妖精達との触れ合いで孤独から解放され、〝共に在る者達〟への嫉妬心を失くしつつある。

力の供給源が断たれた今、パルスィは無茶だと分かっていても〝無理をして〟能力の行使を続けている。

それ故に今のパルスィは立ち上がることが出来ない。

「んう……」

横島の口から呻きが漏れる。そろそろ、目が覚める頃合いだろう。

パルスィは能力を解除し、一つ息を吐く。幸い、能力を行使しなければパルスィは回復する。横島が起きるまでの数分間、目を閉じて一時の倦怠に微睡む。

そうして次に目を開けた時。

「……おはよう、ございます。パルスィさん」

どこか照れくさそうな、横島の笑顔が目に入る。その締まりのないふにゃりとした笑顔を見て、またパルスィもくすりと笑い。

「ええ、おはよう。横島さん」

こうして、挨拶を交わすのだ。

それは幸せな一時と言えた。あまりに脆く、あまりに儚い幻が如き幸せ。
パルスィは分かっている。充分に理解している。こんな幸せは、すぐに消える。風に吹かれる蠟燭の火の様に、決して長くは保たない類のものだ。
だが、それでもパルスィはこの時間を失いたくはなかった。
自分が望んでいたこととは違っていても、パルスィは目の前の少年を手放したくはなかったのだ。

「――――っ、う、あ……っ！」

ここは幻想郷のどこかにあると言われている八雲紫の屋敷、その一室。
部屋の中央に敷かれた布団の中で、紫は固く目を閉じ、喘ぐように荒い息を吐いていた。
左右には藍と橙が紫を挟むように座り、意識を共有して解析の術を数日間全力で行使している。既に彼女達から時間の感覚など完全に消失しており、二人の全身は汗でぐっしょりと濡れている。
何故紫がこうなってしまったのか、ことは数日前まで遡ることとなる。
「……っ!?
!!」

その日、紫のスキマの中に何者かが突如出現したのだ。

変化は劇的だった。他の者達もそうであるが、特に紫とスキマの能力は強く結びついている。それがスキマ内に出現した瞬間から、紫は最早まともに動くことさえ叶わないほどの影響を受けた。

そのスキマ内に現れた何者かがあまりに強い力を持っていたから……というわけではない。むしろその者の力は紫よりも遥かに弱く。下手をすれば橙にも劣るかもしれない、そんな程度の力しか有していない。

しかし。しかしだ。その者が持つ格……存在の規模とでもいうのか。それがケタ違いに巨大だったのだ。まさに次元が、世界が違う程の規格外。幻想郷の最高神である龍神をしてやっと同じ土俵に立てるかどうかという超規格外だ。

――そう。そのケタ外れに巨大な存在規模の理由は信仰にある。

それはより信仰篤き世界より降り来たる存在。人類の生活基盤はあくまでも科学が中心。だというのにその実在を疑われず、常に人の傍らに在り続ける超自然的な存在。神と悪魔が当たり前に存在する世界から訪れた超存在。それが、ただスキマの中に在るというだけで紫を苦しめることになってしまっている。

既にスキマの中では空間の繋がりも時間の流れすらも正常に働いてはいない。何者かが真っ直ぐに進んでいるように見えても、実際は滅茶苦茶なルートを超高速で、ある

いは超低速で進んでいる――あるいは戻っている――のだ。

しかし、その何者かは迷うことなくスキマを進む。目的地までのルートが見えているのか、躊躇う様子も見られず、狼狽えることもない。ただ一直線にそこを目指して愚直に進む。

「く……っ」

藍の口から呻きが漏れる。どうやってスキマに入り込んだのか。一体何が目的なのか。何一つ分からない。ただ、一つだけ分かるものがあるとすれば、それはこの何者かが敵意・悪意といったものを一切持ち合わせていないことだ。むしろそれとは正反対の、何か大切なものを探しているかのような、そんな必死さ、真摯さを感じ取ることが出来る。

――――本当は分かっている。その何者かが目指す場所も、目的も。本当は既に分かっているのだ。だからこそ、こうしてここに辿り着けるようにするために今もスキマの解析を行っているのだ。

「……え?」

と、急に藍と橙の負担が軽くなる。ハッと集中の為にずっと瞑っていた目を開けば、意識を取り戻した紫が二人に弱々しくも確かに微笑みかけていた。

「紫様！　意識が戻られたのですね！」

「ゆ、紫様！　大丈夫ですか～!?」
「ちょ、二人とも落ち着い……むぎゅっ!?」
二人は紫に殺到し、その身体を圧し潰してしまう。直後、我に返った二人に土下座で謝り、紫はそれを受け入れる。単に怒るだけの気力がなかったとも言う。後日、二人は大変な目に遭うだろうが……それも仕方のないことである。
「こほん。……心配をかけてしまったわね。でも、もう大丈夫よ。貴方たちの演算経過を読み取って、何とか最適化することが出来そうだわ」
「ほ、本当ですか!?」
「さすが紫様!!　すごーい!!」
紫はゆっくりと身を起こし、自分の前で正座でいる藍達に信じがたいことを口にする。
そう、紫は〝何者か〟の影響に苦しみ、意識を失いながらも、藍をも超越した規格外の頭脳により無意識下で演算処理を行っていたのだ。
自らの演算と藍達の演算を合わせ、スキマを〝何者か〟に最適化し、一気に〝こちら〟に引き寄せることが可能となっていた。最適化のお陰か、身に掛かる負担も大幅に減少しており、これならば回復を待たずともスキマを開くことが出来そうである。
「……まあ、引き寄せることが出来るだけで他は何も出来ないんですけれど」

「……？　何か仰いましたか？」
「いえ、何でも」
ぼそっと何事かを呟き、藍の問いを流して紫は静かに気合を入れる。
スキマを開き、〝何者か〟を幻想郷に招き入れるというのはつまり、横島の世界の神を降臨させるということである。その結果、幻想郷にどのような影響が顕れるかは予想がつかない。下手をすれば幻と実体の境界、そして博麗大結界が崩壊してしまうことも考えられる。
だが、紫は〝何者か〟を招くことに躊躇いはなかった。
紫がどれだけ幻想郷を愛しているかを知っている者がそれを聞けば、恐らくは紫の正気を疑うだろう。それでも、紫はそれを実行する。紫には確信があった。否、それを確信というには根拠があまりにも無さすぎる。
何せ、紫が〝何者か〟を招こうというのは、自らの勘に従っての行動なのだから――。
「……さぁ、いくわよ」
「はいっ！」
「にゃっ！」
紫の号令に合わせて藍と橙はそれぞれ気合の声を上げる。紫はそんな二人に苦笑を

浮かべる。もし何かがあった場合、主である紫だけは何としても守ろうとする気概を感じ取ったためだ。二人の気遣いを嬉しく感じるが、同時にそれは無駄な気負いであるとも考えてしまう。

紫の勘が告げている。きっと、それは穏やかな出逢いになるのだと。

――――スキマが開く。と、次の瞬間。

「え？」

という声が聞こえたかと思えば。

「キャアアアァ――――ッ!!?」

スキマから物凄いスピードで飛び出してきた〝何者か〟が壁を突き破り、家具をぶっ壊し、最終的に屋敷の外まで吹き飛んで地面をガリガリと削って倒れ伏した。

……そう。〝何者か〟はずっと猛スピードでスキマ内を進んでいたのだ。それこそ、数か月前に幻想郷に墜落した横島に近い速度で。

「……予想外ですわぁ」

己の勘に従った結果がこれであった。

十数秒間呆然としていた紫達であるが、ハッと正気に戻ると倒れている〝何者か〟に急ぎ駆け寄る。意識の有無や怪我の具合なども含め、確認しなければいけないことは山ほどあるのだ。

〝何者か〟の着地点（？）に到着した三人は、その〝何者か〟の容貌に驚くことになる。

両側が上を向いた赤と緑の髪に、同じく赤と緑の肌にぴっちりと張り付くボディスーツと、特殊なケープのようなもの。中でも特異なのは、全身に存在する〝目玉〟にも見える感覚器。イヤリングやケープの留め金もそれなのだから、あまりにも徹底している。

そんな異様な風貌の女性は、両目をぐるぐると回して気絶していた。幸い怪我は無いようである。傍らにはアタッシュケースのような大型の鞄も転がっており、どうやらそちらも傷はないようだ。

「……っ、この方は一体……？」

こちらの世界とは在り方そのものが違うように見えるその女性。紫は横島から元の世界の話を聞いていたので、すぐにその正体を察することが出来た。

「――――ヒャクメ様。そう、貴女がこちらに来て下さったのですね」

紫が小さく呟く。

ヒャクメ。横島の元の世界における神族の調査官。

横島の精神的問題を解決に導くことが出来るかもしれない、ただ一人の存在――――。

第八十二話
『来訪者』
～了～

第八十三話

頬に走る違和感に意識が覚醒へと向かう。
優しさと温もりと、少しの痛み。頬を摘まれている。
「ん……」
薄っすらと眼を開ければ、目の前には少し意地悪そうに微笑んでいる少女の顔。
緩やかにウェーブが掛かった金の髪に、翡翠のように綺麗な瞳。髪から覗く尖った耳。
僕を助けてくれた、女の子。
「……おはよう、ございます。パルスィさん」
あの日から毎日、パルスィさんは僕の寝顔を眺めているらしい。正直恥ずかしいので止めてほしいのだが、どうしても止めてはくれないのだ。
照れくささやら何やらを込めた朝の挨拶も、パルスィさんは分かっているのかいないのか、「ええ。おはよう、横島さん」なんて微笑んで返してくる。
――――僕は、その微笑みを見るのが辛い。

だって僕は。
僕は、そのパルスィさんの微笑みが――――嫌いなのだから。

第八十三話
『三界一の調査官』

……いや、嫌いは言い過ぎだな。だってパルスィさん凄く可愛いし。凄く可愛いし。当然笑顔だって物凄く可愛いし。
……うん。むしろ好きだね。僕はパルスィさんの笑顔が大好きだ。だって本当に可愛いんだ。
でも、だからこそ笑顔を見るのが辛いのは本当だ。
だって、パルスィさんは僕を通して別の僕に微笑んでいる。
――――記憶を失う前の僕。一度会って、少し話をしただけだというのにパルスィさ

んの心に強く残った、本物の僕。

パルスィさんが見ているのは、そっちの僕の方だ。

その笑顔を見る度に胸が痛くなる。僕は笑えているだろうか？　自然に振る舞えているだろうか？　パルスィさんの望む『僕』に、少しずつでも近付けているだろうか？

胸に湧き上がってくる様々な想い。それはパルスィさんへの物でもあるし、以前の僕に対しての物でもある。この思いの名は何というのだろう？

パルスィさんには僕を見てほしい。『僕』じゃない、僕だけを見てほしい。『本物の僕』じゃない、例え偽物なのだとしても、この僕だけを見てほしいのだ。

――ああ、そうか。ようやく合点がいった。思えば簡単なことだった。いつもパルスィさんが口にしているじゃないか。

僕は、『僕』に。『本物の僕』に対して――嫉妬、しているのだ。

だってそうだろう？　僕はパルスィさん以外の誰かを知らない。僕にとってパルスィさんは〝全て〟なのだ。パルスィさん以上に優しく、温かく、綺麗で可愛い女の子を知らない。

これで好きにならないなんて嘘だ。だから、僕はパルスィさんに対して酷く利己的な想いを抱いてしまっている。

パルスィさんとずっと一緒にいたい。パルスィさんを僕だけのものにしたい。

この〝初恋〟を――――実らせたいのだ。

横島が行方不明となってまた一日が過ぎた。既にレミリアの機嫌は最悪と言っても良い程に悪く、朝から言葉一つ発さない。

だが、彼女はその怒りを抑えつけ、その身からほんの一滴たりとも激情の雫を零さない。

地霊殿には多くのペット達が存在している。いくら旧地獄で生まれ育ち、通常の動物達より心身共に強靭であるとはいえ、至近からレミリアの怒気を当てられればショック死は免れない。

それを分かっているからこそレミリアは今にも噴火しそうな感情に蓋をし、厳しく己を律しているのである。

同じく機嫌が最悪と言っていいのは妹紅だ。彼女もレミリアと同様に一言も発さず、ただじっと自分の腕を抱いて静かに横島発見の報を待っている。

ただ、一つ付け加えるとするならば。妹紅の服には血が滲んでいた。腕を強く握り締

めすぎ、爪が服と肉を突き破っているのだ。
傷の治りが速い蓬莱人であるが、妹紅の傷は一向に癒えない。否、治った端から傷ついていっているのだ。
皮膚を食い破る爪をそのままに、ずっと、ずっと、ただ静かに佇んでいる。
妹紅は己のことを理解している。今ここで動き出そうものなら、彼女は旧地獄を更地にしてでも横島を探そうとするだろう。
だからこそ、妹紅は動かない。動けない。激情に走ろうとする身体を、痛みで以って押さえつけているのだ。
「……」
そんな妹紅の様子に、輝夜や横島の恋人達も当然気付いている。フランも、美鈴も、小悪魔も、てゐも、それぞれが今にも爆発しそうな激情を秘めている。しかし、レミリアと妹紅の二人の様子に冷静さを取り戻した。取り戻さざるを得なかったのだ。
正直に言ってしまえば、彼女達はレミリアと妹紅に恐怖を抱いている。二人の内に秘めたる感情の強さ、重さを察し、本能的な恐怖を感じてしまっているのだ。
故に頭を冷やすことが出来た。そして自分達がするべきは横島を求めて土地勘の全く無い旧地獄を当てもなく探し回るのではなく、〝もしも〟の際にレミリアと妹紅を抑えることだと結論付けた。

これは四人の心に己に対する情けなさと悔しさを抱かせるに十分だった。本音を言えばすぐにでも横島を探しに行きたい。しかし、旧地獄に於いて自分達に出来ることは余りにも少ない。何より地上と地底の関係やさとりの面子のこともある。

様々な事情が絡み、横島の恋人達は横島を探すことすら出来ない状態に陥ってしまっているのだ。

「妹紅……」

妹紅の隣に佇み、心配そうに名を呼ぶのは輝夜だ。これほどまでに追いつめられた姿を輝夜は見たことがない。あの時から千と数百年。妹紅にとってはただ失い続ける日々だっただろう。その果てに辿り着いた、幸せな時間。今までの人生を塗り替えるような、奇跡を妹紅は手に入れることが出来た。

だからこそ、なのだろう。妹紅は再び失ってしまうことに心が軋みを上げている。ようやく見つかった幸せをまたも奪われようとしているのだ。本当にそうなってしまった場合、妹紅の心にはいったいどれほどの傷が出来てしまうのか、まるで予想がつかない。

妹紅は幸せを手に入れ、その分脆くなってしまっていた。それは決して悪いことではない。幸せを手に入れたからこそ、人はそれを失わないように努力し、強くなっていくのだから。

だが、今回はそれを待つ時間すらなかった。

輝夜は妹紅から視線を外し、ある人物に向ける。その人物は目を閉じ、顎に手を当ててじっと何事かを考え込んでいる。彼女は輝夜が最も信頼する人物であり、今回の事件の真相にもとっくに辿り着いていると確信出来る程の頭脳の持ち主。

――永琳、どうして何の行動も起こさないの？　……何か、特別な理由があるの？

有事の際には永琳の判断を第一に置いている輝夜はそれを口に出して言うことはない。だが、永琳に対する疑心を募らせ、不審を抱く。しかし永琳は横島を絶対に見捨てないことだけは自信を持って言える。

故に輝夜は動かない。結果的にそれが横島を助ける最善の手になるのだと信じて。

さとりはこの場の全員の胸中に渦巻く様々な想念を受け、胸と胃を痛める。悲痛なまでのその思いに、圧し潰されてしまいそうだ。

かつてこいしが『瞳』を閉じて地霊殿から出ていったときに、この場の皆ほど心を痛めていたのかという自傷染みた考えも浮かんでくる。それほどまでに皆は横島を心から心配していたのだ。

その中で、一人異様な者が存在する。何十、何百にも思考が分けられ、その奥の真実

を見通すことが出来ない。心の奥底で一体何を考えているのか、さとりは不安に思う。

更にもう一つ心配なことがある。こいしがお燐をお目付け役に横島を探しに出ているのだ。

ぐるぐるとネガティブな感情が渦巻き、胃に更なる痛みが走ったその時、さとりの感覚が空間の歪みのような物を捉えた。

「……？」

視線をそちらに向ければ他の皆も同じくそこに注目している。やがてその空間に亀裂が生じ、〝スキマ〟が開いた。中から現れるのは紫と藍、橙の三人……そして、見慣れない奇抜な格好をした女性が一人。

「――――っ!?」

その場の誰もが、強い圧迫感を覚えた。彼の龍神にも匹敵する巨大な存在感。それを女性から感じ取ったのだ。

その女性の名は〝ヒャクメ〟。横島と同じ世界から来訪した、神の一柱である。

瞬間、レミリアや美鈴、鈴仙など、数人が警戒から戦闘態勢を取る。場に緊張感が満ちる――――その前に、紫が大きく手を広げてヒャクメの前に立った。

「警戒する気持ちは分かりますが、まずは私の話を聞きなさい。この方が誰で、目的は何か。全て説明します」

「……分かった。ごめん、どうも殺気立っちゃって」

紫の言葉に臨戦態勢を解き、頭を下げる。そんなレミリアに紫は微笑みを浮かべ、皆に席に着くよう促す。部屋の中央には全員が座れるような長方形の大きなテーブルがある。皆もそれぞれ思うところはあるようだが、逆らわずに席に着く。何か、決定的な何かが起ころうとしている。そんな予感に動かされた。

余談だがヒャクメはレミリア達の迫力に圧されて藍の尻尾に隠れ、「ひーん、怖かったのねー」と涙目になっている。橙に頭を撫でられているその姿からは、ただそこに在るだけで圧し潰されそうな存在感が性質の悪い冗談の様に見える。

皆が席に着き、紫がまず大きく深呼吸。そしてまずは頭を下げた。

「ごめんなさい、みんな。横島君が大変な目に遭っている時にすぐに駆けつけられないで」

「いや、あんたの事情は藍から聞いてたから問題ないよ。こっちに来れたってことはもう大丈夫なんでしょ？」

紫の謝罪にレミリアが代表で答える。横島が行方不明になってすぐ、レミリア達は紫に応援を頼もうとしたのだが、その時に藍から紫が昏倒し、意識が戻らないと伝えに来たのだ。考えられる可能性はスキマの中に入り込んだ〝何者か〟によるものである、と。

「……で、そっちの何か目がいっぱいある奴が……？」

懐疑的、というよりは困惑が籠った視線をヒャクメに寄越す。格は圧倒的だが、それに見合う力は感じられない変な格好の女。正直な話、紫が庇わなければ即殲滅に移行してもおかしくない程度には怪しい存在だ。今も皆がヒャクメを警戒した目で見つめている。

紫もレミリア達の気持ちは理解出来るので、簡潔に事実を話す。

「この方は〝ヒャクメ〟様。横島君が元居た世界から来訪された、神族の調査官なのです」

その効果は絶大だった。

「よ、横島さんの世界から……!?」

「どうやってこっちに!?」

ざわめきが場を支配する。それを紫が手を打ち鳴らし、制止する。ちらりと視線を送られ、ヒャクメはこくりと頷き、咳ばらいを一つしてから口を開いた。

「えっと、紫さんから紹介にあったように、私は横島さんが元々居た世界の神族である〝ヒャクメ〟なのね。私達の世界から横島さんが消えた日から、〝私達〟は横島さんを探し続けていたの」

ヒャクメは余計なことは語らず、皆にとって重要な部分のみを語っていく。

自分達の世界には土偶羅魔具羅（ドグラマグラ）というとんでもない演算能力を持った兵鬼が存在しており、そのバックアップを受けたヒャクメが横島の墜落した世界を特定したこと。
その際に自分達の世界では既に痕跡が消滅してしまっていたのだが、とある異空間（スキマ）に自分達の世界に向かって伸びる〝糸〟のような物を発見したこと。
そしてその異空間に、横島の霊気の残滓を感知したこと。
それを辿ってこの幻想郷（せかい）に墜落したことを説明した。途中までは尊敬の目で見られていたが、最後の部分で「大丈夫かこいつ」みたいな目で見られるようになってしまったのは内緒だ。
「こほん。そんなわけで、今横島さんがどんな状況にあるのかは紫さんから聞いているし、ちゃっちゃと横島さんを見つけちゃうのねー。とりあえずはさと――――」
取り繕うようにそう告げるヒャクメだが、全てを言い切る前に椅子から立ち上がる音によって言葉を遮られた。妹紅が勢いよく立ち上がったのだ。
妹紅のヒャクメを見つめる瞳は凄絶なまでに激しい色彩を放っている。それでいて弱々しい、縋るものを探している幼子のような力の無さが同時に感じられた。
「本当に、見つかるのか……？　あんたなら、横島を見つけてくれるのか……？」
覇気の無い、弱々しい声だ。それでも、その声には今までにはない力が籠っていた。
ヒャクメの言葉に希望を見出したのだろう。だが、ヒャクメの言動にはいささか不安が

募る。有り体に言えばポンコツの気配がするのだ。しかし、それも――――。

「まーかせて！　探ることと探すことにかけては私の右に出る者はいないのね！　すぐに見つけちゃうんだから！」

己に胸を叩いてのその台詞に、妹紅はヒャクメを信じると決めた。その〝格〟に見合うだけの自信とプライドを感じ取り、不安が払拭されたのだ。

事実、ヒャクメは土偶羅のサポートがあるとはいえ、無限の平行世界から僅か数ヶ月で横島が墜落した世界を特定し、自らも訪れる事に成功している。

更にはこの場の誰も知らぬことだが、神魔の最高指導者の密会を盗み見ることもしてのけた。（そして本人達にバレ、小竜姫にものすごいおしおきをされた）

最早ヒャクメの『視る』事に関する力量は神魔に並ぶ者無しである程に高まっている。

それは、ヒャクメが自らの能力を鍛え抜いたからだ。

あのアシュタロスとの戦いの折、ヒャクメは絶対の自信を持っていた己の『眼』を、いとも容易く欺かれた。それも、取るに足らないはずの人間の手によって、である。

しかもそれを指摘し、あまつさえ助言を寄越したのが敵であるアシュタロスだったのだ。

全ての戦いが終わり、慌ただしくも日常が戻ってきたわけではあるが、ヒャクメのいつもの軽い笑顔の裏に潜む感情は、一体どのような色をしていたのだろう。

元々能力は高かった。才能も十分にあった。そこに、欠けていた努力が加わったのが今のヒャクメだ。

神、魔、そして人間界。三界一の調査官の名に恥じぬ実力を持った、女神の一柱である。

ヒャクメは少し落ち着いた様子の妹紅に微笑みかけると着席を促した。どこか呆気に取られた様な表情をしていた妹紅も素直に席に着く。

妹紅だけではない。この場の誰ものヒャクメを見る目が変わっていた。最初の頼りない雰囲気はどこへやら。今のヒャクメから感じられる覇気は、本物のそれである。

「さて、それじゃあさとりちゃんの心を見せてもらうけど、いいかしら？」

「え？」

ヒャクメの言葉にさとりが少々驚いた。ヒャクメは読心に対して何らかの対策を施してあるのか、その内を読むことが出来ない。

それに調査をするのだから地底の都市へ繰り出すのだと思っていたため、自分の心を読む、という行為に何の意味があるのかが分からなかったのだ。

「ダメ？」

「え、いえ……はい。大丈夫です」

何の意味があるのかは分からないが、それでもさとりは頷いた。

元々横島を見付ける為なら何でもすると決めている。それに心を読まれるなど、さとりにとって何の痛痒にもならない。むしろ懐かしいという気持ちすらある。

かつて〝瞳〟を閉じる前のこいしとは、当たり前であるが互いに心を読み合って日常を過ごしていたのだ。己の能力を最高の能力だと思っているさとりにしてみれば、ヒャクメの存在は持論の確信を更に深める相手でもある。

「それじゃ、失礼するのねー。私が『視る』のは横島さんが消えてから、さとりちゃんが都市を探し回った時の記憶。そこに手掛かりが潜んでいるはずなのねー」

「……？」

さとりにはよく分からなかった。当時の記憶を読み取ったとしても、手掛かりなど何も得られていなかったのだ。もちろん主観、客観両方の視点から己の記憶を精査したことなど何度となくある。

永琳からも間違っていないだろうと一応の確認をしてもらった。ならば、そこに間違いは無いはずである。

さとりにも分からない以上、他の者もヒャクメの意図が分かるはずもない。

だが、一部の者にとってはその限りではなかった。紫、藍、そして永琳がヒャクメのやろうとしていることに気が付き、畏れにも似た感情を懐いたのだ。

さとりは三人のその感情に気付き、そちらに意識を割きそうになるが、瞬間、ヒャク

メの全身に存在する『眼』の様な器官が輝きを放ち、途切れそうになった集中を再びヒャクメへと戻した。
「ふむ……何人か不審な男性を目撃した人がいるみたいね」
「――――え？」
それは、ありえないはずの情報だった。
「う～～～ん、流石に断片的すぎるけど、要点だけ抜き取ると……〝若い男の人間だった〟〝ふらついていた〟〝怯えていたように見えた〟〝逃げているように見えた〟――――ってところかしら。
時間は夜遅く。あー、当人が酔ってたのか、曖昧な情報しかないかー。でも、橋に向かっていったのは確かみた――――」
「ちょ、ちょっと待って!!　待って下さい!!」
まるで、洪水の様に溢れ出るありえない情報の波に、思わずさとりは制止の声を上げる。
ありえないことだ。さとりはそんな心の声を聞いていない。自分が知りえないことを、他人が読み取れるわけがないのだ。
さとりは誓って情報を隠していたわけではない。レミリアに、永琳に、そして皆に己が持つ全ての情報を伝えたのだ。これはさとりの意向もあり、吸血鬼（レミリア）の魅了の魔眼を用

いてまで知る限りの全てを開示した。
　では、ヒャクメが今口にした情報は一体何だというのか。その答えは、やはりヒャクメの口から明かされる。
「うん。まずさとりちゃんの能力なんだけど、これはオンオフの切り替えが出来ず、効果範囲の心は勝手に見えるし聞こえちゃう……で、合ってるよね？」
「は、はい」
「でも、強い感情を伴う心と、そうじゃない心とでは、どうしても前者の方が優先されてしまう」
「……はい」
　ここでさとりの声に翳りが見えた。そして、決してありえるはずがない一つの予想が脳裏を過ぎり、とある感情がどんどんと膨れ上がっていく。
「これは仕方のないことなんだけど、さとりちゃんは自分に向けられた悪意を広く感知してしまうみたいなのねー。同じく、他者への悪意も。これまでの人生でそういう風に能力が安定しちゃったみたいなのね。
　……だから、敵意も悪意もない心は、敵意や悪意ある心に塗り潰されて、さとりちゃんに届かない」
「……」

「でも、能力の感知範囲に触れている」
「――――!!!」
――――これまでの永き生で感じたことがない程の怖気が背筋を駆け抜ける。
「たとえ他の心に塗り潰されても、能力に触れたのは変わらない。私はその塗り潰された心を読んだの」
「……」
さとりは何も発することが出来ない。何なのだ、それは。心を読む、などというレベルの話ではない。これでは心を、精神を、魂を、〝古明地さとり〟という存在そのものを解析されたようなものではないか。
他の者も、よく分かっていないようではあるが、とにかく凄いということは伝わったらしく、ポカンと大きく口を開いていた。
紫や藍、永琳に至っては冷汗を流している程だ。それほど、ヒャクメが行った読心は凄まじいのである。何せ、本人の認識など度外視し、能力に触れたというだけで情報を引き出したのだ。今のヒャクメには如何なる手段を用いても隠し事は出来ないだろう。
そう、ヒャクメに隠し事は通じない。永琳は人知れず、大きく息を吐くのであった。
「話を戻すけど、どうやらその不審な男性は地上との出入口の一つである橋に向かっていたみたいなのねー」

「橋、ですか？　……いえ、でも」
「橋に居る、パルスィ、だっけ。その人もただお兄様を見ていない……っていうか、パルスィもお兄様を探してたんじゃなかったっけ？」
　さとりが挙げようとした内容を継ぐ形で声にしたのはフランだ。彼女はヒャクメの凄まじさが伝わり切っておらず、動揺が少なかったらしい。
「え、ええ。その通り」
　フランの言葉にさとりは頷いた。確かにあのパルスィは横島について何も知らなかった。心の奥まで読んだのだ、そこに間違いは無い。
「それなんだけど、そのパルスィって子の方が一枚上手だったみたい」
「……え」
「あなたと会った水橋パルスィは本人じゃないのねー」
「な――――っ!!?」
　ありえない。それこそ本当にありえない!!
　さとりは確かに心を読んだ。確かに横島の事を知らなかった。だからパルスィとは情報交換の約束をして早々に別れたのだ。しかし――――。
「うん。さとりちゃんもそうだけど、他のみんなも水橋パルスィの罠にはまってる。だから簡単な思考の矛盾に気付かないのね」

「な、何を……!?」

　揺らぐ。ヒャクメの言葉に、彼女の『眼』に、己の全てが揺らいでいく。誰も声を出すことすら出来ない。

「パルスィとは情報交換の約束をしたんでしょ？　だったら何で会おうとしないの？」

「――――っ!!?」

　まるで、心臓が凍りついたかのようだ。

「それに、このパルスィの心は横島さんを知らないという部分のみが殊更に強調されているのね。まるで、他の事なんて何も考えていないかのように」

「……ぁ、あ。まさ、か……分、身……!?」

　眩暈がする。ともすれば気を失ってしまいそうだ。それほどに、さとりを襲った衝撃は凄まじい。

　己の馬鹿さ加減に頭に血が上り、血管が、神経が焼き切れてしまいそうだ。視界が滲み、唇を血が伝う。激情のままに唇を噛み切ったのだ。

　――――全て、何も気付けなかった自分のせいだ。心が黒く染まっていく。そんな時、さとりの耳にレミリアの声が聞こえた。

「さとりだけの責任じゃないでしょうに」

「……レミリアさん？」

レミリアが席を立ち、さとりの横に立つ。労わる様に肩に置かれたレミリアの手は、さとりの心を柔らかく解きほぐしていく。

「ヒャクメが言うには私達全員がアイツにはめられたってんでしょ？　私にはどういうことかよく分かんないけど、それはこれからヒャクメが説明するんだろうし……そうだな、ヒャクメ？」

「も、もちろんそうなのねー」

噛み付かんばかりのレミリアの迫力に、ヒャクメが怯えてしまう。

どうやらレミリアにはさとりが虐められているように見えたらしい。ヒャクメからすれば堪ったものではない。ガクブルと震える己の心を叱咤し、ヒャクメは口許を拭うさとりへと向き直る。

「えっと、さっきも言ったけど、みんなはパルスィの張った罠に掛かってるのね。考えてもみて？　どうして約束したのにパルスィと会いたくないのか。どうして心を読んだのにおかしなところに気付けなかったのか。そもそも――――パルスィの能力は、何だったのか」

「――――っ!!」

さとりの脳裏に、閃光が迸った。

「そう、か。あの子の能力は、嫉妬心を操ること……!!」

「……なるほど。私達の嫉妬心を操作・増幅して視野を狭くしていたのか」

　分身を生み出した理由。分身の偏った思考の理由。パルスィの能力使用の理由。誰かを匿っているとしたら、状況証拠としては固い。

「ただ、みんなは変わらずパルスィの能力の影響下にあるのね。私もその状態を解除出来るけど、そういうのは専門とは言えないから一人一人時間が掛かっちゃうの」

　と、ヒャクメは鈴仙を見やる。

「でも、それを一度に解除する能力がある」

「――――っ！　そうか！　みんな、こっちを見て!!」

　ヒャクメの言葉を受け、鈴仙が皆の視線を集める。赤く光る眼で視れば、なるほど、確かにこの場の多くに糸の様な何らかの能力的な繋がりが視える。これを伝い、皆の嫉妬心を操っていたのだろうと鈴仙は当たりをつける。

　視えてしまえば、理解してしまえば問題は無い。一方向に向かわせるその能力の波長、完全に、完膚なきまでに乱(なお)してみせよう――――!!

「散符『真実の月(インビジブルフルムーン)』――――!!」

　パルスィの能力を受け、嫉妬心を増幅された感情の波長と逆位相の波長をぶつけ、能力の影響を消滅させる。増幅された嫉妬心という名の偽りの月を砕き、真実の月(おもい)を取り戻す。

「いっ」
「つっ」
パチッとした痛みが皆の頭に走る。強引な能力解除の代償にしては安いものだ。
「……さて、話を聞きに行こうか」
頭を軽く振れば、今までの苛立ちが嘘の様に気分が落ち着きを見せている。レミリアの言葉を皮切りに皆は立ち上がり、各々気合を入れている。
パルスィの元へ向かう為に。大切な人を取り戻す為に。
だが、その中で一人席に座ったまま俯いている者がいる。フランだ。フランは己の掌を見つめ、何事かを深く考え込んでいる。
「フラン……？　どうかした？」
レミリアが問う。
「……嫉妬って、すごく怖い感情だったんだね」
返ってきた言葉は、怯え、震えていた。
「私、前は色んな人が羨ましかった。いっぱい嫉妬してた。私はこんななのに、なんでみんなはって」
「フラン……」
「でも、さっきまでみたいにずっと怖い感じじゃなかった。受け入れることが出来てた。

だけど、だけど……」

今は本人やレミリア達の努力もあって治まりつつあるが、元々フランの心は不安定だ。その能力故に、破壊衝動が高まっていた時期も確かに存在する。

もし、その時に先の様な嫉妬心に囚われていたら。自分は、目に映る全てを破壊していたかもしれない。

それが、たまらなく怖い。

思えばあの龍神が異変を起こしたのもその原因は嫉妬故だ。

人も、妖怪も、そして神も――――。その全てを狂わせる、巨大で、強大な感情。それが、嫉妬である。

「……フランさん」

さとりはフランの心を知り、我が事の様に胸を痛める。そう、嫉妬は怖い。さとりはその能力故にそれを嫌というほどに思い知っている。

だが、それだけではないのだ。

確かに嫉妬は己の心を灼き、その炎は他者をも焼き尽くす程の大火となりえる。だが、何も嫉妬とは悪性だけの感情ではないのである。

そのことを伝えようとさとりは一歩を踏み出し――――。

「キャーーーーーーー!?　ヒャクメ様ーーーーーーー!?」

盛大に、蹲いた。

振り返ればヒャクメが仰向けに倒れ、全身の目（のような器官）をぐるぐると回してビクンビクンと痙攣をしている。

どうやら鈴仙の狂気の瞳を全身の目（のような器官）でまともに視てしまったらしく、その影響をモロに受けてしまったのだ。

これには紫も大慌て。鈴仙に能力の解除を急かし、彼女の背中をペシペシと叩いている。

さっきまですごく有能だったのに。何故おまえはいつもそうなのだヒャクメ。

「うあ〟うっ!?!!」

バヂンッ！　と脳内で激しく火花が散る音がした。地底に訪れた横島の関係者に掛けていた能力が、一斉に壊滅（かいじょ）されたのだ。

パルスィは痛みの衝撃のままに仰向けの姿勢から弓なりに仰け反り、びくびくと痛みに悶える。呼吸が出来ない程の激しい痛み。数秒、或いは数十秒だろうか。ようやく呼吸が出来るようになったかと思えば、今度は口内に粘ついた血が流れ込んできた。

「うえっ!?　げほっ！　げほっ！」

血を吐き出しながら、何とか身を起こすとぼたぼたと夥しい程に大量の血が鼻から流れ出てくる。能力が強制解除された影響か、脳に莫大な負担が掛かったらしい。

視界が安定しない。形状を変えることがないはずの畳や壁が、ぐねぐねとその姿を波立たせる。激しい耳鳴りが起こり、周囲の音など何も聞こえない。

視界も利かない、聴覚も同様。しかし、それでもパルスィは彼の姿を認識出来たし、その声も聞き取ることが出来た。

「パルスィさん!?　どうしたんですか、パルスィさんっ!!?」

「よ、ごじ、まざ、ん……?」

声が出ない。否、声は出ているが、それを言葉とするには聊か濁り過ぎていた。

横島はつい先ほどまで熟睡していた。だが、不意に意識が浮かび上がった。それはパルスィの身に異変が生じたのとほぼ同じタイミングだ。今は記憶を失っているが、霊能力者としての彼の霊感が働いてくれたのだ。

「パルスィさん……!!」

目も虚ろで夥しく鼻血を流すパルスィの肩を抱き、どうすればいいかを必死に考える。いや、考えるまでもない。自分ではどうすることも出来ない。ならば助けを呼びに行くしかない。

「待っててください！　すぐに誰か連れて来ます！」

「ま〟……、だ、め〟……!!　ぞど、にで、だら……!!」

力無く、本当に力無く、それでも必死に自分の服を掴んで引き留めようとするパルスィの姿に、横島の胸は極大の痛みを訴える。

パルスィは己の身に甚大な危機が迫っているというのに、それでもなお横島の心配をしているのだ。

横島はパルスィの手を優しく包み、そっと引きはがす。パルスィの心配を裏切るのは心苦しいが、彼女の命が脅かされている現状を思えばそんなことを言っていられない。

すぐに立ち上がり、玄関へと向かう。時刻は午前十時を過ぎた所。人通りは多い。きっとすぐに助けを呼べることだろう。

「――――あの、大丈夫ですか!?　何かあったんですか!?」

都合の良い事に、先程の横島の声を聞きつけたのか、玄関の戸の向こうから誰かの声が聞こえてきた。大人ではなくまだ子供と思しき声であったが、今は藁にも縋りたい気分である。大人を呼んできてもらう事だって出来る。

そうして横島は激しく脈打つ胸を押さえ、戸を開いた。パルスィも安否、訪れた者の協力の有無、様々な不安。しかし全てはパルスィの為に。

「――――――――――」

「……っ!!」

目を、見開いた。

戸を開けた先には少女が居た。緑の髪、黄色い服、花柄のスカート。それらを纏った少女も、驚いたように目を見開いている。

「横島さんっ!?　こんなところに居たんだ!!」

少女の背後から驚きと歓喜が混じった叫びが聞こえる。赤い髪をおさげにし、猫の耳と人の耳を持った少女がそこに居た。

緑髪の少女の表情が歓喜に染まっていく。それは、探し人に会えた喜びからだ。

「――――横島さん!!」

その少女が、その口を開き、その名前を呼んだ。

「――――――――――ひゅっ」

小さく、息を吸う音が、横島の喉から聞こえた。

地底のある一画にスキマが開く。中から現れたのはさとり、紅魔館一行、そして紫達三人とヒャクメだ。

「こちらです！」

スキマから出ると、さとりが先導し、パルスィの住処へと走り出す。直接移動しなかったのは、横島の恋人達が即時殲滅行動に移らないようにワンクッション置くためだ。

地上の者と地底の者が表立って諍いを起こすのは非常によろしくない。以前異変が起こり、それを解決したことが地上と地底の友好の切っ掛けにもなったわけだが、だからといってここでまた似たようなことが起きればその友好も白紙に戻りかねない。

だから頭を冷やす為に、地底の住人達の事を認識してもらう為に離れた場所にスキマを開いたのだ。警戒のし過ぎと言えるかもしれないが、それをせざるを得ないほどの爆弾を抱えた者がいる。下手をすれば地底が燃やし尽くされてしまうかも知れないのだ。

「永琳さん」

皆がパルスィの住居へと急ぐその最後尾。ヒャクメと永琳が並んで走っている。

ヒャクメは永琳へと話しかけ、永琳は黙って話の続きを促す。

「永琳さんの心は読ませてもらったのねー。貴方が考えていることも、横島さんをどう

しようとしているかも」

「……」

永琳は応えない。ただ真っ直ぐに前を見つめ、ヒャクメの言葉を聞くのみだ。

「横島さんに対する、私達神魔の決定を伝えておくのね。それは――――……」

「……え？」

それは、永琳をしても予想外……いや、確率は低いだろうと予測していたものだった。

思わずヒャクメに視線を移すと、彼女の表情はやや憮然としたものになっていた。

「……ヒャクメさ――――」

永琳が何事か声を掛けようとした瞬間、前方より、爆光が瞬いた。

「――――なっ!!?」

高まった霊的な力による爆発。爆音が地に響き、爆光が地を照らし、爆風が地を揺らす。爆心地は、パルスィの住居であった。

そして一度の爆発では収まらない。幾度も幾度も、霊的な爆発が巻き起こる。

「……ちっ！　急ぐぞ!!」

一行のリーダー的存在であるレミリアが声を上げ、速度を全開にした。嫌な予感がする。

今もなお起こり続けている爆発は霊力に因るものではなく、妖力に因るものだ。

「横島さん……パルスィ……!!」

二人を心から案じる声が、さとりの口から零れた。

第八十三話

『三界一の調査官』

～了～

第八十四話

――――声が聞こえた。
機能していないはずの耳がその悲鳴を捉えた。
悲鳴の方へ目を向ける。
歪み切った視界の向こう、頭を押さえ、膝を着く横島の姿がはっきりと見えた。
そして、そのさらに奥。怯え、竦み、這い蹲る横島に、必死に呼び掛ける二人の少女の姿を認める。
――――ああ、そうか。お前達が……!!
閃光の如き直感が走る。それに思い至った瞬間、ぼろぼろの身体から鬼神が如き妖力が溢れ出た。
「ア――――アアアァ⊠ア⊠ァ⊠ッ!!」
獣の様な雄叫びと共にパルスィは吹き飛ぶように飛び出した。
緑の目は稲光の様な残光を走らせ、立ち上る妖気は烈火の如く棚引き、揺らめいている。

ようやくパルスィの存在に少女達――こいしとお燐が気付いた。だが、気付いたところでもう遅い。引き絞られたパルスィの腕には妖力が込められ、今にも爆発しそうなほどにまで凝縮されていた。

こいしはそれに反応出来ない。

横島の発見、横島の異変。それらに気を取られていたこいしでは気付くのが致命的に遅れてしまったのだ。

「――――あ……」

叩きつけられる重い衝撃。吹き飛ぶ身体。

護るべき者を抱え、支え、パルスィは吹き飛んだこいし達を睨み、何とか声を絞り出した。

「……お☒前、だ、ぢの、ぜいで……!!」

まさに、血を吐くかの様な声。

パルスィの瞳は普段の嫉妬ではなく、完全なる憎悪と怒りに染まっていた。

第八十四話

『今の僕を』

「……ぅ、ん……！」

痛む身体を起こす。ふらつく頭を振り、混濁する意識を何とか繋ぎ止める。

こいしには何が起こったのか分からなかった。

横島を見付ける事が出来たかと思えば、彼は自分を見て絶叫し、地に這い蹲ってしまう。

苦しみに喘ぐ横島に呼び掛け続けたが、今度は突然の衝撃に吹き飛ばされた。まるで、あの夜の再現である。

しかし妙だ。襲い掛かってきた衝撃に比べ、痛みがやけに弱い。

あの瞬間に感じた妖力の強さ。あれを喰らったのならもっと大きな怪我をしていてもおかしくないはずだ。

「……お燐!?」

一気に意識が覚醒する。一緒に吹き飛んだはずのお燐はどうしたのか。

「おり……!?」

どうして気付かなかったのだろう。こいしの膝の上、覆いかぶさる様にお燐が倒れ伏している。

「お燐っ!?　お燐っ!!」

こいしは理解した。お燐が自分を護ってくれたから大した怪我もなく済んだのだ。

お燐の名を呼び身体を揺する。

「あだだだだっ!?　ちょっ、痛いですってこいし様!!」

気絶していたわけでもなく、痛みに涙目になりながらもこいしの呼びかけにすぐさま身を起こし、そのせいで身体に走った更なる痛みに悶えるお燐。

「良かった……無事だったんだ……」

「無事じゃありませんよ……」

こいしの言葉に応えるお燐は確かに無事と言うには聊か怪我が重い。だが、致命的かと問われれば否と言えるくらいには軽い怪我だ。

身体を強く打ったせいか手足には強い痺れがあり、しばらくはまともに動くことも叶わないだろう。

「今はあたいのことより、横島さんの方を」

「……うん」

視線を、自分達を吹き飛ばした相手――――パルスィに向ける。パルスィは力なくもたれかかる横島を支えながら、強い敵意の籠った目でこいし達を睨みつけていた。

「……っ」

その〝瞳〟に、恐怖を覚える。吹き飛ばされながら微かに聞こえてきた、パルスィの声。あの時、彼女は何と言っていたのか。

「あいつ……さっき、あたい達のせいでって……」

「私達の……？」

お燐は猫でもある故か耳も良い。こいしを庇い、傷を負いながらもその声を確かに聞いたのだ。

パルスィの言う『お前達のせい』……当然、思い当たるものがある。横島だ。

パルスィは明らかに横島の為に怒っている。憎んでいる。彼女本来の力の源である嫉妬心を打ち消す程に。

朦朧とする意識の中、自分を護り、支えてくれている少女の顔を見やる。

――――いけない、と思った。

今のパルスィは嫉妬の感情ではなく、怒り、そして憎悪にその表情を歪ませている。

パルスィは横島を離し、ゆっくりと立ち上がる。

そんな力は無いはずなのに。出来るはずがないというのに。上体は揺れ、千鳥足になりながらも一歩また一歩と踏み締める足取りは強く。

「おいおい、何やってんだあいつら……!?」

「ケンカ……にしちゃあ、いやに物々しいが」

その声にこいし達はハッとした。今になって周囲が騒がしいことに気付く。

当然だ。今の時間帯にあれだけのことが起きれば野次馬がどこからでもいくらでも湧いてくる。

――――だが、今のパルスィには彼等が見えていない。

「野次馬連中!!　逃げろーーーーーー!!」

お燐が叫ぶ。それが切っ掛けではないのだろうが、パルスィから弾幕が放たれた。

「うわわわっ!?」

狙われたのは当然こいし達。だが視力がほぼ機能していないせいか、お世辞にも狙いが良いとは言い難く、むしろ滅茶苦茶な軌道を描き、一発も当たることはなく終わってしまう。

だがその分ばらけた弾が野次馬の方に流れていき、付近に着弾、爆発を起こす。

「うおぉっ!?　やべぇ、逃げろーーー!?」

「橋姫がご乱心だーーーっ!?

　蜘蛛の子を散らす様に逃げ出す野次馬達。だが、これで物的被害はともかく人的被害は抑えられそうだ。

「く……っ！」

「あっ、こいし様!?」

　こいしは動くことが出来ないお燐から離れ、何とかパルスィの注意を引こうと問いを投げかける。

「パルスィ！　その血はどうしたの!?　何があったの!?」

　その答えは返ってこない。ただ弾幕が返ってくるのみだ。ならば、とこいしは絶対に答えを返さざるを得ない問いを投げつけた。

「じゃあ――――横島さんに何があったの!?　私達が何をしたっていうの!?」

　その問いには、『バキンッ』という音が返ってきた。パルスィが奥歯を噛み砕いた音である。

「何、を☒……じだ、か……？」

「……っ!?　わぁっ!!?」

　不意に、こいしに弾幕が命中する。先までの滅茶苦茶な軌道とは違う、正確な狙いだ。

「何を、じ、だが、も、理がい☒、じでい、ない、の☒が……!!!!」

「うあっ、くううぅ……!?」

避けられない。躱し切れない。今まで以上に弾幕の狙いが鋭くなる。

「お☒前、だちのぜい、で……横島ざん☒は、ぎおぐを、失ぐじたんだ……!!」

「――――!?」

およそ想像し得ない答えに、こいしの身体が硬直する。

「あ☒の夜、横島ざんは、震、えでい☒だ！　お☒び、えでいだ！　何かに、責め立でら☒れるように、逃げる☒ように、私、のも☒どまで、来だん、だ!!」

動けぬ……動かぬこいしにパルスィの弾幕が次々と着弾する。

「な☒にか、を思い☒、出じぞう、になる、度に、泣いで、ふる☒え☒て、怯え☒で、吐いで……!!　ぞれ☒だけのごどを……お☒前達があ☒あ☒ぁぁあ☒っ!!!」

もうこいしは動かない。頭の中でぐるぐるとパルスィの言葉が巡る。あの時の行いによって、今のこの結果が生まれたのだ。

――――ああ、きっと、これが罰なんだ。人の心を暴いて、操作して、それを善い行いだなんて思い込んで。

いつか白蓮が言っていた事を思い出す。

「善い事をすれば善い事が、悪い事をすれば悪い事がいずれ返ってくる。――――これを〝因果応報〟と言います」

自分にも分かる様に簡略化して教えてくれた、一つの真理。それが今この時に実現している。ならば受け入れよう。

今まで積み重ねてきた悪行の報いを。それが、今まで人生を狂わせてきた人達へのせめてもの罪滅ぼし……善行になると信じて。

「こいし様ぁーーーーーーっ!!?」

お燐の悲痛な叫びが響く。それはこいしの耳にも届いたが、こいしは動かない。もう身体が動かない。

パルスィから放たれるだろう弾幕の痛みに耐えられるよう、ギュッと目を瞑る。『ドンッ』という鈍い音が響き、身体に強い衝撃が走る。

それは想像していた冷たく恐ろしい痛みではなく、温かく、そして柔らかい痛みであった。

混乱の中でそっと目を開けば、そこにあったのは翼を広げ、パルスィを弾き飛ばすレミリアの背中。そして視界の端に映り込む、特徴的な癖の桃色の髪。

「こいし……!!」

「お、お姉、ちゃん……?」

涙混じりの声。それを認識する間もなく、二人は地面へと着地し、そのまま尻餅をつくように座り込んだ。

「お、お姉ちゃ……」

ぎゅっと、ぎゅっと。大粒の涙を流しながら抱き締めてくる姉の姿に、こいしは巨大な罪悪感を抱く。これ程になるまで心配を掛けてしまった事に今更ながらに気が付いた。

そして、これ程自分を心配してくれた事に喜びと嬉しさを感じてしまい、色々な感情が高まってこいしの目から涙が溢れてしまう。

「ご、ごめ……」

「ごい☒じ様☒ーーー!!　ざどり☒様☒ーーーーーーー!!!」

「キャーッ!?」

泣きながら抱き合う姉妹に、更に大泣きしながらお燐とお空が倒れ込む。身体が麻痺して動けないお燐を、お空がここまで運んだのだ。

「まったく……。何を考えて無防備に弾幕を受けてたのかは知らないけど、後でみっちりと叱られなさいよ?」

もつれる様に倒れた四人の傍にレミリアが降り立つ。言葉はこいしに向けられているが、視線は地面に墜落したパルスィから離していない。

レミリアはパルスィを睨み付けながらも、かなり複雑な表情をしている。そしてそれはレミリアだけでなく、その場に駆け付けた全員が、だ。

「あー、パルスィ（アイツ）の話、みんなは聞こえた？」
「……」
ぽりぽりと頭を掻きながらの言葉に、皆は一様に頷いた。血を吐く様なパルスィの叫び。皆もそれを聞いていた。
パルスィの行動原理を知り、怒るに怒れなくなったというか、振り上げた拳をどう下ろせばいいのか分からなくなったのだ。
横島の近くに墜落したパルスィは激情のままに身を起こし、立ち上がろうとする――
――が、それは出来なかった。
足に力が入らず、今までの比ではないほどに視界が揺れる。
「う……ぶっ」
脳から、内臓から齎される圧倒的な不快感に耐え切れず、パルスィは激しく嘔吐した。
先までの強大な妖力も完全に霧散し、もはや意識を保つ事で精一杯になってしまう。
「あ☒……う」
「パルスィさんっ！」
ぐらり、と倒れる寸前、這う様にパルスィの元へと移動していた横島がパルスィの身体を支える。
血と吐瀉物で汚れる事も気にせず、横島はパルスィを優しく抱き締める。小さく軽い

その身体。これ以上無理をすれば、例え妖怪と言えど本当に死んでしまう。そんな事はさせられない。そんな事は絶対に許さない。

そう思った時――身体の中から、不思議な力が漲ってきた。

「ねえ、永琳。妹紅と横島さんのパスが切れたのって……」

「ええ。横島さんが記憶を失ったのが原因と考えて良さそうね。蓬莱人は魂が主、肉体が従の関係にあるから、人格を形成するのに重要な記憶が欠落したせいで機能不全に陥ったのでしょう」

輝夜の問いに永琳は自らの見解を述べる。

蓬莱人の肝を食して蓬莱人になったのも、当人同士でパスが繋がったのも前例のない事ではあるが、間違ってはいないだろうと当たりをつける。

二人の会話を聞いていた妹紅が、一歩一歩地面の存在を確かめる様に、ゆっくりと前へと歩み出る。

これ以上二人の繋がりが零れ落ちぬ様に、強く強く胸を押さえながら、ただ、横島の元へ。

皆はそれを見守る。

フランも、美鈴も、小悪魔も、てゐも。横島の元へ駆け寄りたいのは一緒だ。

だけど、一番は。最初に横島の元へと向かうのは妹紅だと、誰も、何も言わずともそ

う考えていた。

「――――横島……？」

身体から知らない力が溢れ出る。だが、記憶を失う前の使っていたものなのか、何となくその力の使い方が分かる。

この力があればパルスィを傷付ける者を排除する事が出来る。パルスィの惨状を見た横島の心に、凶悪な思考が過ぎる……と、その時。

「――――横島……？」

「え……？」

いつの間にか、ほんの数メートル前にまで一人の少女が近付いて来ている。銀に近い白い長髪の、悲しげな、不安げな表情の少女。

――――誰だ、この子？

当然今の横島は目の前の少女の事は何も知らない。何せ記憶喪失なのだ。憶えているはずがない。

だから、つい。ぽろっと。横島はその言葉を口に出してしまった。

「――――も、こう……？」

目の前と、腕の中と。息を呑む音がした。

妹紅は口許を押さえ、驚きに目を見開いた。そしてその瞳からぽろぽろと涙を零す。

記憶を失ってしまっているのに自分の名を呼んでくれた。忘れているはずなのに、自分の事を憶えてくれていたのだ。

――――これほどまでに、幸せなことがあるだろうか。

パルスィはぽかんと口を開き、驚きに目を剥いた。そしてその瞳からぼろぼろと涙を流す。記憶を失っているのにその名を呼んだ。忘れているはずなのに、彼女の事を憶えていたのだ。

私の事など忘れ去ってしまっていたのに。

――――これほどまでに、妬ましいことがあるだろうか。

「――――ぁづっ!!?」

「うぐっ!?」

突然、横島と妹紅が苦痛の呻きを上げる。再びパスが通り始めたのだ。

それが切っ掛けとなったのか、横島の頭に自身の中にある不思議な力――霊力の使い方が浮かび上がってくる。

そして、それと同時に今にも気を失ってしまいそうな程に激しい頭痛も襲い掛かってきた。それは浮かんできた知識のままに霊力を使おうとすれば、より激しい痛みとなって横島を苛む。

「ぎ……あ、が……ぁああ☒……っ!?」

一体なんだというのだろうか、この痛みは。まるで霊力を使わせたくない――――いや、もし痛みの原因が霊力の使い方を思い出した事ならば。身体が、否、本能や魂といった部分が記憶を取り戻させまいとしているようではないか。

「横島!!」

「よ☒ご、じまざん☒……!!」

余りの痛みに叫ぶことも出来ず、ただ呻き声を上げるしかない横島に妹紅が駆け寄る。妹紅だけではない、今まで成り行きを見守ってきたレミリア達も横島の元へ走る。

今にも頭が割れてしまいそうな痛みに苛まれながらも、横島はパルスィを離さない。薄っすらと目を開く。腕の中のパルスィと目が合った。

――――ああ、そうだ。

腕の中の女の子はボロボロで。まともに立つ事も話す事も出来ないくらいボロボロで。

でも、そんなにボロボロなのに、自分よりも僕の事を心配してくれているのだ。

「ぐ――――う、あああああああああっ!!!」

横島の掌中に莫大な霊力が集中する。それは形を成していき、やがて球形のシルエットを構築する。

「ぎぃっ、いい……いい、ぁぁぁああ……!!」

「横し――――」

「よご――――」

痛い。痛い。痛い。

目の前の妹紅の声も、腕の中のパルスィの声も聞こえない。駆け寄ってきたレミリア達の声など以ての外だ。このままこの力を使えば死んでしまうかもしれない。

――――それが、どうした!!

本気で死を身近に感じる程の痛みに曝されて尚、横島は奇跡をその手に具現化せんと力を揮う。その手から迸る強い輝きに、皆は視界を白く焼かれる。

――――脳裏に浮かびあがる、ノイズ混じりの光景。力無く壁にもたれかかり座り込んでいる女性。

その女性に背を向け、どこかへと急ぐ自分。

そうだ。あの時。あの時にもっと俺がアイツを見ていてやれれば――――。

その瞬間、神の奇跡の具現――――文珠は完成した。
目が眩んでいる皆に、文珠に刻まれた文字は読み取れない。その中で、さとりは横島の心の声を聞いた。とても、とても強い、絶対の意思。
――――パルスィさんは……パルスィさんは、僕が護るんだ!!
その声に、さとりは反射的に叫ぶ。
「駄目ですっ！　横島さんっ!!」
だが、その叫び(こえ)は届かない。文珠は発動し、爆発的な光が周囲を包み込んだ。そして――――。

「……え？」
がばりと身を起こす。
あれほど身体を苛んでいた痛みが、きれいさっぱりと消えている。
何が起こったのかまるで分からず、パルスィは先程まで己を抱いていた横島に目をやった。
そこには精気が抜け落ち、ただかろうじて呼吸をしているだけの横島が横たわっていた。

「よ――――横島さんっ!!?」
「横島ぁ!?」
「横島!!」
「お兄様!!?」

誰彼の区別なく、皆が横島に殺到する。今の横島は蓬莱人だ。例え死んだとしても復活する事が出来る。だが、彼は蓬莱人の中でもイレギュラーな存在だ。

その身は蓬莱人の肝を食して変じたものであり、純正の蓬莱人とはまた別の存在である。

また、現在の横島は記憶を失っている状態だ。それが復活にどのような影響を与えるか分からない。

――――と、後付けの建前はここまで。

この場の誰もがそんなことは考えていない。

横島は蓬莱人だ。／だから何だ。

死んでも復活出来る。／それがどうした。

今この場において、皆の心を支配するのはただ一つ。

――――大切な人に死んでほしくない。それだけだ。

蓬莱人だとしても、生き返ると分かっていても、そう簡単に割り切れない想いも当然

存在している。
　皆が横島の元に集い、何とか治療を始めようとしたその時、皆を一喝する声が響く。
「みんな、場所を空けて!!」
　その言葉には力が宿っていた。そう、ヒャクメの声だ。
「私が横島さんに神気を流して治療するのね!!　だから私を通してほしいの!!」
　呆けること数秒。皆はハッと我に返り、すぐさま場所を空ける。
「……ん！　やっぱり！」
　空いた場所に身体を滑り込ませ、ヒャクメは横島にヒーリングを施す。
「……す、すごい……!!」
　永琳の下で医療を学んでいるてゐと鈴仙が思わず息を呑む。永琳でさえも目を見開き、驚きを示していた。
　先ほどまで死人と間違えてもおかしくない程に精気が抜け落ちていた身体が、見る見るうちに回復していっているのだ。
「私のヒーリングは肉体というより魂に作用するの。魂を活性化させて本人の治癒能力を高める……。本来ならこういった重症には気休め程度にしかならないんだけど、今の横島さんは肉体ではなく魂が主軸になっているからこれだけの効果が出ているのねー」
　ヒャクメの解説に皆がほっと息を吐く。

更に付け加えるとすれば、ヒャクメの〝格〟が関係している。
ヒャクメは幻想郷に来たことによって、強制的に神格が上がった。現在最高の神格を持つ神族が術を行使すれば、その術の威力は上がった神格の分だけ上昇する。
「う……ん……」
横島が目を開く。半ば夢を見ている様にぼやけた目だ。
「横島さん……何で、私に……」
あれ程の力を、何故自分に使わなかったのか。パルスィにはそれがどうしても分からなかった。だから素直に問うたのだ。
「……だって」
横島が口を開く。ヒャクメも、さとりも、それを止めなかった。もしかしたら、これが今の横島の最後の言葉になるかもしれないからだ。
「だって――――パルスィさんは、僕を護ってくれたから。だから、今度は僕がパルスィさんを助けないと……」
「……っ」
思いがけない言葉にパルスィの……皆の息が詰まる。
横島が浮かべるその表情、その声音。……皆は、横島が抱く想いに気が付いた。
「そうすれば――――パルスィさんに、僕を見てもらえるから」

「――――え……？」

その想いに。

「他の僕じゃない……以前の僕じゃない……」

横島の気持ちに。

「今の僕を見てほしかったから」

今更になって、気が付いた。

「――――あ……」

喉が震えて声が出ない。歯の根が合わず、がちがちと音が鳴る。

「……ぼ、くは……パル……スィ、さん、が……」

再び横島の目が閉じられ、そのまま気を失った。体力の限界が訪れたのだ。

結局、横島はその言葉を最後まで口にすることは出来なかった。だが、その想いはパルスィに伝わった。伝わってしまった。

「――――あ、あぁぁ……」

今の横島は、パルスィが誰に惹かれているかを理解していた。その人物に近付こうとしていた。だが、その本心は異なる。好きな人に自分を見てもらいたいというのは、当

然の感情だ。

「あああ……あああああああああ……!?」

――――では、水橋パルスィが今までしてきたことは……!!

それに思い至り、パルスィの目からは涙が溢れる。ぶるぶると震える手で横島に触れようとするが、それは出来なかった。

横島を想いながら、横島を護っているのだと思い込みながら、その実裏切り続けていた自分にそんな資格はないと、そう思ってしまったから。

「あああああああぁ……っ!!　ぁあああぁあぁあぁあぁ……っ!!」

パルスィは天を仰ぎ、両手で顔を覆い、哭いた。子供の様に大声を上げて、悲鳴の様な痛切さで。響き渡る泣き声に皆は目を伏せる。

「――――ごめ□、んなざい……っ!!　ごめ□んな□ざいぃぃ□いぃ□……っ!!」

そして――――これが、パルスィが横島と交わした最後の言葉となった。

第八十四話
『今の僕を』
～了～

第八十五話

星熊勇儀が現場に辿り着いた時には、全てが終わっていた。
見覚えのない女性の前に横たわっている、行方不明だったはずの横島。
その傍に座り込み、両手で顔を覆っているパルスィ。ひどく項垂れた様子であり、幾度もしゃくり上げていることから泣いているのだと分かる。
周りに居るのは地上の妖怪達だ。皆一様に沈痛そうな表情を浮かべている。
ここまで来れば流石の勇儀も状況を察する事が出来た。
勇儀は他の者達から少し離れた場所で佇んでいる紫を見付け、近付いていく。
「八雲紫」
「星熊勇儀」
互いに名を呼び、目礼を交わす。勇儀は懐から酒を取り出そうと手を入れるが、首を振り、止める。その代わり、と言うのもおかしいが、視線を横島達から離さず、ゆっくりと口を開いた。
「横島の奴、見つかったんだね」

こくり、と紫は頷く。
「でも……まさか、こんなことになるとは」
紫はまたこくりと頷いた。
「横島とはもっと盃を交わしたかったけど、これも運命ってやつなのかね」
紫は頷こうとして途中で「ん?」と首を傾げる。
「でもま、こんだけのキレイどころに看取ってもらえたんだ。きっと、アイツも本望だったろうな」
ああ、なるほど。紫は大きく頷き、勇儀の肩に手を置いた。
「星熊勇儀」
「ん?」
「滅多なことを言わないで下さる?」
「……え? あ、あれ?」
肩に置かれた手は万力の如き力で握り締められ、さしもの勇儀の骨も砕かれてしまいそうだ。
紫は勇儀に最上級のエガオを向けている。向けているのだが、笑顔のはずなのにとっても怖い。
何せあの勇儀が冷汗をだらだらと流すくらいだ。そこら辺の妖怪や人間なら一瞬で

ショック死してしまっているだろう。それくらい怒っている。
「やはり貴様とは一度決着を付けねばならんようだな、鬼」
「うおぉ、八雲藍!?」
勇儀の傍ら、紫と挟む様に出現した巨大な妖力。紫の式、藍が現れたのだ。その目はまるで狐の様に細められ、やはりこちらも怒っている。
「い、いや、あの状況なら勘違いしても仕方ないだろ!?　悪かったって！　謝るから改めて説明してくれ!!」
流石の勇儀でも今の二人は怖かったらしい。
二人の大妖怪に挟まれてたじたじになる勇儀を、橙は憐れみを以って眺める。でも助けはしない。橙も大恩人たる横島を勝手に死んだことにされて怒っているのだ。南無南無と両手を合わせた後、橙は横島へと視線を戻す。
一連の出来事がどういった結末に行き着くかはまだ分からない。誰も傷付かず、全てが丸く収まるような、そんな優しい結末。
無理だと分かっていても、橙はそんな結末を望まずにはいられなかった。

第八十五話
『始まりはあの日から』

横島の顔色も大分良くなってきた。ヒャクメは神気を送るのを止め、彼の体調を『診』る。……記憶意外に問題は無いようだ。
「ふう……。これで身体の方は大丈夫なのねー」
額の汗を拭い、ヒャクメは一先ずの治療を終えた。彼女の言葉に周囲で眺めている事しか出来なかった横島の恋人達やレミリアから安堵の息が漏れる。
永琳と輝夜も緊張を解き、ほっと息を吐く。と、輝夜はじっと永琳の顔を凝視する。その視線は「聞きたいことがある」と如実に告げていた。
「……何かしら」
輝夜の視線の圧力に耐え切れなくなったのか、永琳は先程とはまた違った意味で息を吐き、輝夜に問う。
「さっき、ヒャクメさんと何か話していたみたいだったけど……」
「ああ、そのことね」

先の移動中、ヒャクメに告げられた横島への神魔の決定。ヒャクメは永琳の心を完璧に読み切った。だからこそ何か余計な事を仕出かさないように先に教えてくれたのだ。

「……横島君に関する事よ。後でヒャクメ様が話して下さるわ」

「……そっか」

それ以降、輝夜は永琳に何かを聞く事はなかった。あの永琳が純粋に話しにくそうにしている。ここまで露骨なのは、それこそ千年ぶりだ。

故に、輝夜は大体の察しが付いた。複雑そうに顔を歪め、重く、深く溜め息を吐く。

「――――そっか……」

輝夜の見つめる先には妹紅がいる。それを聞いた時、妹紅はどのような顔をするだろうか。

ヒャクメがパルスィを『視』る。彼女の心は横島への深い罪の意識で埋め尽くされている。

そんなパルスィに、ヒャクメは更に残酷な事を告げねばならない。

「水橋パルスィ」

「……」

ヒャクメが名を呼んでも反応はない。ただ俯き、己の行為を悔いるのみだ。
だが、次の言葉。
「……私は、横島さんの治療をする――――その意味が、分かるわよね？」
「……!!」
パルスィはがばりと顔を上げた。その表情には様々な感情の色が浮かび上がり、また、その感情の波が奔流の様にヒャクメへと流れ込んでいく。
「……」
だが、ヒャクメは動じない。ただまっすぐにパルスィの目を見つめる。
「……っ」
パルスィは横島に視線をやり、無意識なのだろう、その身に触れようと手を伸ばす。
しかし横島に触れる直前、その手は止まり、大きく震えだす。
「……ふっ……ううぅ……っ、ううぅぅ……っ」
震える手をもう片方の手で押さえ、自らの胸へと引き寄せる。
ぼろぼろと零れる大粒の涙もそのままに、パルスィは今にも消え入りそうな声で、しかしはっきりと。
「――――はい」
と、頷いた。

その返答にどれだけの葛藤があったのかを正確に理解出来ているのはヒャクメだけだろう。

故に、ヒャクメはその想いに報いる為に声を上げる。

「横島さんを治療するのに安全な場所に移動するのね！　さとりちゃん、場所は地霊殿を借りていいかしら？」

「あ……は、はいっ」

ヒャクメの確認にさとりは頷く。

今の地霊殿はゾンビフェアリーに加え、勇儀の部下も警備に就いてくれている。優秀な彼らのおかげで今の旧地獄で地霊殿以上に安全な場所は存在しないだろう。

「星熊勇儀！　ここの対応は任せてもいい？」

「うえっ!?　あ、ああ。任せてくれ！」

紫と藍に挟まれていた勇儀だが、ヒャクメに声を掛けられ、これ幸いと離れていく。

自分の部下へと使いを出し、周囲の被害の調査などの指揮を執る為だ。

「紫さん！　スキマ、お願いね」

「ええ。地霊殿へのスキマを開きます」

こちらは最初から分かっていたのか、既に準備は終わっており、言葉と同時にスキマを開く。それはその場にいる関係者全員の眼前に。

「さあ、みんな。その中に入って」
そう言うと紫は自らもスキマに入る。紫の入ったスキマは閉じ、その空間には何の跡も残らない。
皆は目を見合わせると、軽く頷き合う。
「横島さんは私が抱えますね」
「お願い、めーりん」
美鈴が横島に負担を掛けぬよう、静かに横抱きに抱え上げ、すぐに隙間の中へと入っていく。フランやてゐ達、横島の恋人達もそれに続いた。
妹紅はちらりとパルスィに視線をやり、何事かを言おうとする。だが、それを口にするのは憚られた。
結局、何も声を掛けることが出来ぬままにスキマの中へと消えていった。しかし、これで良かったのだろう。妹紅の言いたかった言葉は、きっとパルスィを傷付けてしまっていただろうから。
だから、いつの日か。
今日の事を笑って話せる様になったら、改めてその言葉を掛けようと思う。
その日まで、この胸に抱いた思いは心に留めておくことにした。

皆がスキマに消えていく中、ただ一人パルスィは動けなかった。
スキマに入るどころか、立ち上がる気力さえ湧いてこない。よしんば立ち上がることが出来たとして、自分が妹紅達と同じくスキマに入り、横島の傍に居る事が許されるというのか？
――――許されるはずがない。自分にその資格はない。
すぐに勇儀が戻ってくるだろう。その時は大人しく拘束されよう。そう考え、一度目を閉じ、開く。
そうして目に映ったのは地面の冷たい色ではなく、鮮やかな色彩の絨毯だった。
「……？　……っ!?」
驚き顔を上げれば、周囲には横島を床に寝かせ、何やら複雑な魔方陣を敷いているレミリア達の姿。
そう、ここは地霊殿の一室だ。
「……なん、で」
「そりゃあのまま放っておくわけにはいかないからねー」
パルスィの呆然とした呟きに答えたのはヒャクメだった。
ヒャクメはパルスィと同じく床に座り込み、自らの隣に出現したパルスィをじっと見

つめている。
「あなたは、さっきの……」
「改めて自己紹介するのね。私はヒャクメ。横島さんが元居た世界の神族で、調査官をやってるの。……横島さんの友人でもあるのね」
「横島さんの……」
パルスィの驚きは小さかった。大きく驚くだけの気力が無かったのもあるが、先の横島の治療の際に二人がそれなりに近しい間柄だと何となく気付いていたからだ。
――――嫉妬心が湧き上がってくる。もはやそんな資格はないというのに。
「……」
ヒャクメは片目を閉じる。最近になって出来た、ちょっとした癖だ。
「……あまり思い詰めない方が良いのね。それはあなたの生態と相まって、よろしくない結果に行き着く可能性が高いから」
「……？」
「あなたの想いも行動も、私は納得したし共感もした。だからその部分についてはあまり考えすぎない方が良いのね」
「あなたに……ッ」
何が分かる、と沸騰しかけたその刹那、パルスィはヒャクメの額の目、そして全身に

存在する目に気が付いた。
「気付いたのね。私は心を読むことが出来るの。その気になれば前世も見えちゃうくらいに強力にね。……身体の目はあくまでも目のように見えるってだけなんだけどね」
なるほど、と。怒る気力も失せてしまった。何せ相手は自分以上に自分の心を把握しているのだ。ならばきっとそうなのだろうと思考が投げやりになる。
仕方のない事だが、情緒が不安定になっているらしく、パルスィの思考は様々な思い、感情とちぐはぐな繋がり方をしている。
「……どうして私をここに？」
パルスィの冷静な部分がヒャクメにそう問いかける。
「あのまま放っておいたらややこしいことになってたかもしれないからねー。ちゃんと書置きは残してあるから大丈夫！」
「……」
そういう問題ではない。とは思うが、それを口にする気力もない。
何故自分がここに居なければいけないのか。
ヒャクメは横島の治療を行う――――すなわち、記憶を取り戻させるという事。
「……」
パルスィは、一つ気付いたことがあった。

あの日の出逢いが横島に惹かれる切っ掛けとなったのは間違いない。
では、その想いが確かなものへと変わったのはいつだったか。
横島の事を愛おしいと感じる様になったのは、いつだったのか。
それは、過去の横島と過ごした時ではない。
現在の横島と共有した時間の中で育まれてきたものだ。
横島のあの言葉を聞き、パルスィはそれに気が付いた。
好きだから護っていたのではない。護るうちに愛する様になり、共に過ごしたいと思うようになったのだ。
「私は……」
そして、今まさに愛する男が記憶を取り戻そうとしている。
記憶を失っていた者が記憶を取り戻した場合、記憶を失っていた時の記憶を失っている。
「わたし、は……」
その場に自分が居て、次に横島さんが目を覚ました時に、以前の様に――――出逢った時と同じ様に名前を呼ばれて。
――――今までの私達は、全て無かった事になっている。
「それ、は……それは……」

それは、なんて、とても残酷な――――。

「パルスィさん」

「え……」

ヒャクメがパルスィの手をそっと握り、名前を呼ぶ。

名を呼ばれ顔を上げれば、真剣な表情をしたヒャクメがその眼に真摯な光を湛え、真っ直ぐに己を見つめている。

「私がどれだけ酷いことをしてるのかは分かってるつもりなのね。でも、これだけはお願いしたいの。どうか、どうか――――信じてほしい」

「……そんなこと、言われても……っ」

誰かが誰かを信じる事。それは存外難しいものだ。

ただ「信じる」と口にして、言い聞かせるのではない。信じるとは、その誰かに心を預けるという事。

今のパルスィにヒャクメを信じる事は出来ない。――――だが。

「違うのね」

「え……？」

パルスィが信じる……心を預けるのはヒャクメではない。

「私じゃない。――――横島さんを信じてほしいのね」

「……！」

パルスィの目が大きく見開かれる。

「横島さんは記憶を失っていても愛する人の名前を呼んだわ。

だから、横島さんの記憶が戻って、それまでの記憶を失くしていても――あなたとの日々を、あなたへの想いを忘れないって。

信じてほしいのね」

「……」

どこか呆然とした表情を浮かべ、パルスィは横島を見る。

あの時の情景がありありと思い出される。

本当に、心の底から愛しているのだろう。例え記憶を失っても、その名を口に出来る程までに。

――では、私は？

私との日々は、それほどに彼の心に刻まれているだろうか。

私への想いを、それほどに強く抱いてくれているだろうか。

それに、何より――。

「横島さんを、信じられない？」

その問いには強く首を振って否定する。

「うん。……信じられないのは、自分の気持ちなのね」
その問い……否、断定には弱々しく頷いて肯定する。
そう、パルスィは何より自分の想いに自信が持てない。
もし自分が同じ状況に陥った時、自分は愛する者……横島の名を口にするだろうか。
当然、そんな事が分かる訳がない。誰もが同じ事を言うだろう。
だが、パルスィにとって「出来る」と断言する事が出来ない事が、何よりも怖かった。
パルスィとて千年以上を生きる妖怪だ。その永き生で恋をする事など何度もあった。
しかし、それはパルスィの前を通り過ぎていく。
パルスィの性質は他人と情を交わすには苛烈過ぎたのだ。
そうした中で出逢ったのが横島だ。
初めてだった。見ただけで嫉妬心と劣等感の塊だと気付いたのは。
だというのに横島は明るく社交的で、あけすけで、ネチネチと嫌味を言うのにさっぱりとしていて、スケベなのにあっさりとしていて。
かと思えば変な所で悩んで、葛藤して踏み込めない。そんな臆病な少年。
自分に近しいのに、まるで違うその存在。惹かれるには充分だった。
だから横島の恋人達には嫉妬したし、羨ましいと思った。
そんな横島が記憶を失って、ほんの数日だが生活を共にして。

記憶を失った横島も、変わらず嫉妬心と劣等感の塊だった。今思えば、それは以前の自分に対するものだったのだろう。

それに気付かず、現在の横島に過去の横島を求めた。

今に懐いた想いを、過去に懐いたものだと勘違いした。

最後の最後にようやく間違いに気付いた。何もかも全てがもう遅く、先の様な事が無ければ、きっと自分はいつまでも間違いに気付かなかっただろう。

そんな自分が、横島の事を愛していると言えるのだろうか。

「……っ」

パルスィは今まで、これ程誰かに強い想いを懐いた事はなかった。

いや、パルスィがパルスィとして発生した時にあったかも知れないが、それは最早本人ですらも定かではない。

故にパルスィは怯えてしまう。

初めての恋に戸惑う少女の様に、自らの想いに自信が持てないのだ。

「パルスィさん」

「……」

パルスィは応えない。誰かに想いを否定されるのが怖い。

「大丈夫なのね。パルスィさんの気持ちは間違ってなんかいないのね」

ヒャクメはそれを否定しない。否定など出来るはずがないのだ。
「忘れちゃダメなのね。あなたも、横島さんも。互いの為にその身を擲つ事が出来る。……それが一概に良い事なのかはこの際置いておくけど、あなた達二人はそれぐらい強くお互いを想い合っているの」
ヒャクメはパルスィの想いを知っている。
それがどれだけ強く真っ直ぐで純粋か、その眼で全てを見た。
その想いは間違いではない。否定されてはいけない。
だから、ヒャクメはパルスィにこう言うのだ。
「あなたが自分の気持ちを疑ったら、横島さんの気持ちまで疑っちゃうことになるのね。だから、まずは自分の想いを否定せずに受け止めてあげて。あなたは確かに、横島さんを愛しているんだから」
「――――……っ!!」
その言葉は、パルスィにとってどれほどの救いになっただろう。
その〝眼〟で以ってあらゆる物事を見通すであろう神が、最高の証明をしてくれたのだ。
今日だけでどれほど涙を流した事か。
パルスィの目からは雫が零れ、その頬を濡らしている。

ヒャクメに握られた手をぎゅっと握り返し、何度も頷いた。
横島が元居た世界から訪れた神。
横島の命を救い、そして今、自分の心さえも救ったヒャクメと言う女神。
その言葉を信じよう、とパルスィは思う。
横島を――――その想いを信じる様に、自らの想いを肯定する。
横島を治療したその先にどのような未来が訪れるのかは分からない。
だが、パルスィはその想いをずっと憶えている。そう信じるのだ。
どのような結末になったとしても、パルスィが横島を愛している事に変わりはないのだから。

「……あー、やっと終わった。
フラン、アンタも魔法使いなんだから私一人にやらせないで手伝ってくれても良かったんじゃないの？」
「う……。でも私が得意な魔法は攻撃とか破壊とかだし、こういうのはちょっと……」
「こういう方面も勉強しなさいって言ってたでしょうが」
肩や首を回しながら、レミリアがフランにぼやく。ボキボキと関節を鳴らしていく姿

は少々はしたない。
「永琳や輝夜もこういうのは得意でしょ？」
「それはそうだけど」
「あなたが止める間もなく動き出したからね。
私達の方法とじゃ系統が違い過ぎるし、術式が競合しておかしなことになっても困るしね」
「むう……」
それでも手伝う事くらい出来るでしょうに、と呟き、ちらりとパルスィとヒャクメを見やる。
「……どうなるかと思ったけど、上手いこと落ち着かせたみたいね」
「そのようですね。……まだどうなるかは分かりませんが、それでも……」
常人では聞き取れない程に小さな声で美鈴と言葉を交わす。
「さすがにあのままでは悲しすぎますものね……」
「今も状況が変わったわけではないけど……それでも、心の持ちようによっては色々と違ってくるさ」
「……」
同じ様に話す小悪魔とてゐも、今回の件について思うところがあり、複雑な表情をし

ていながらも、どこか胸の痞えが取れた様に感じる。
　ずっとてゐの傍に居た鈴仙は先のてゐの言葉にかつて言われたある言葉を思い出し、深く考え込んでいる。
　ちなみにレミリア達はヒャクメ達の話が終わるまでずっと息を潜めていた。要するに、おしゃべりをするタイミングを窺っていたのである。
「ふう」
　ほっと息を吐くレミリア。
　実はスキマ空間の中で、ヒャクメに「パルスィは自分に任せてほしい」と頼まれていたのだ。
　正直な事を言えばどうしたらいいのか見当もつかなかった為、ありがたい申し出だった。
　ヒャクメの言葉を聞き、任せて正解だったと改めて思う。
「……あの、お姉ちゃん」
「ダメ」
「……離してほしいなって」
「ダメ」
「……お燐とお空も」

「ダメです」
「ダメですよ」
どうしたら見当もつかないのはもう一組あったが、そっちは放っておき。
レミリアはまた何かを考えて暗くなっている妹に目を向ける。
「……で、今度はどんなおバカなことを考えてるの？」
「……真剣なことだもん」
フランは頬を膨らませ、そっぽを向いた。……が、それもすぐに止め、言いにくそうに口をもごもごと動かし、それでも吐き出してしまいたかったのか、その内容を口にする。
「……あの時、ただお兄様の前に行ったのが妹紅じゃなくて私だったとしても……ただお兄様は名前を呼んでくれたのかなって」
そうして吐き出した想いは美鈴、てゐ、小悪魔も気になっていた事であった。「いや……私は別に……」と言いつつかなり横島を気にしているうさぎさんも居るが、それは置いておいて。
「フラン……」
最愛の妹の想いを受け、レミリアは名前を呼び、肩に手を置く。
互いの視線が交わるとゆっくりと口を開き――――。

「やっぱりバカなことじゃないの」
　思いっ切り鼻で笑った。
「思いっ切り真剣なんだけど!?」
「お嬢様！　流石にそれは酷いですよ！」
「妹が悩んでんだからもっとマジメに聞いてやんなよ！」
「あわわ、み、皆さん落ち着いてー!?」
　レミリアの余りにもあんまりな物言いにフランだけでなく美鈴やてゐも憤慨する。
　唯一小悪魔だけは皆を宥めようと努めているが、それでもレミリアに非難するような目を向ける。
「はぁ……アンタ達は揃いも揃ってまったくもう……」
「っ……？」
　レミリアは呆れた様に溜め息を吐き、こめかみを押さえて頭を振る。
　フラン達は何故レミリアがそのような態度を取るのかが分からず、怒りよりも戸惑いの方が勝ってしまう。
「そもそも、そんなことで真剣に悩む方がおかしいって気付きなさい」
「……それは、一体どういう……？」
　戸惑い、口を開く事が出来なかったフラン達に代わり、鈴仙がレミリアの真意を問う。

それに対して「優曇華院、お前もか」という視線を向けるレミリア。
鈴仙は何故か後ろめたくなり、目を逸らす。
レミリアはまた溜め息を一つ零し、横島を指差す。
「あのね。こいつは横島なのよ？
だったらアンタ達の誰が行ったってその子の名前を呼ぶに決まってんでしょうが」
「――――……」
その言葉に、皆は口をぽかんと開けた。まさしく開いた口が塞がらないといった状態だ。
「確かに記憶は失ってるけどね、そんな程度でこいつがアンタ達への想いを失いはしない。
それだけアンタ達はこいつに愛されてんのよ？　そこら辺、もうちょっと自覚しておきなさい」
そう堂々と言い切るレミリアに、皆は衝撃を受ける。
レミリアは自分達より、横島の恋人である自分達よりも余程横島の事を理解し、信頼している。
どうしてそこまで、と疑問が口を突こうとした時、ヒャクメから声が掛かる。
「そっちの準備は終わったのねー？」

立ち上がりながらの問いに、レミリアは「ああ」と一つ頷いた。
ちらりと横島を見やる。複雑な魔方陣の上に横たわるその姿は、まるで死んでしまっているかのように静かな眠りに就いている。
妹紅はそんな横島の傍らにぺたんと座り込み、その手をそっと胸に抱きかかえている。
その温もりを確かめる様に、温もりを与えるかの様に。ただ目を閉じ、横島を感じ続けていた。
パスが切れてしまってからというもの、妹紅の精神は急速に乱れていった。
妹紅の服の袖を赤黒く染め上げている液体の跡が何よりの証拠である。
そうまでしなければどうにかなってしまいそうな程、妹紅は横島に依存してしまっている。
こちらもいずれ何とかしなければならないが……今は横島の方が優先である。
「お前の言う通りに結界を敷いたが、これでどうするんだ？」
対物結界に精神干渉補助の結界。
紫達は何をするか知っているみたいだが……」
魔法陣の端、紫は自らの式達と同調し、魔法陣に何らかの調整を施している。
自分が敷いた魔法陣が少しずつ別の物に書き換えられていく様を見て「最初っからア

ンタ達がやればいいのに……」と呟かずにはいられない。
紫曰く「アナタのものでなければダメ」とのことだが……
「説明するのね。私達はこれから横島さんの深層心理に入り込むの」
「……!!」
「そして、横島さんの記憶を目覚めさせる。それが治療の方法よ」
開示された治療法に皆は驚く。治療法もそうだが、そのような手段をヒャクメが選ぶ事にも驚いたのだ。
「……何故そんなやり方を?」
横島からお前についての話を聞いたことがあるが、お前ならそんな手を使わなくても……」
「……ううん、ダメなのね」
訝る様に問うレミリアにヒャクメは首を振る。
その悔しげな、悲しげな表情に二の句が継げなくなる。
「私はあの戦いの後、横島さんの定期検診をしていたのね。
あの戦いで横島さんは肉体的にも……精神的にも、酷い傷を負ったから」
「……っ!」
この時、皆は横島がかつて語った話を思い出した。紅魔館での宴会の後に聞き出し

た、蛍の化身を失った時の話を。
「……その戦いで、横島さんは神魔族（わたしたち）に強い不信感を持ったの。
……最後の最後まで、私達は何の役にも立たなかった」
「……」
ヒャクメの眼が横島を見る。
「……でもね。それなのに横島さんは私達を心の底から信頼してくれていたの。……それが不味かったのね」
「え……？」
不信感を懐いたのに、それでも信頼してくれている。それは喜ばしい事なのだろうが、当時の横島にはそれが毒となってしまっていたのだ。
「魂と肉体への影響ね」
「やっぱりそれか……」
「え……？　え……？」
どうやら永琳とレミリアは理解出来たらしい。
他にも紫、藍、さとりの三人も答えに辿り着いている。
だがそれ以外の者はまるで理解が追い付いておらず、ただ困惑するだけだ。
「実は私、向こうで一度この方法を試しているのね」

「え？」
「そのせいで、横島さんの精神が崩壊しかけたの」
「え……!?」
今横島を治療しようとしているその方法は、以前に失敗したのだという。そのことについて永琳、レミリア、紫、藍、さとりはやはりと納得している。
なぜ失敗したのか。そして何故また同じ方法を使うというのか。それがヒャクメの口から語られる。
「最初私が横島さんの心の中に入った時は何も問題が無かったの。
横島さんの精神（こころ）は私を完全に受け入れてくれた。
でも、横島さんの無意識の部分はそうもいかなかった」
「……」
ぴくり、とお燐とお空に包帯で起き上がり小法師（こぼし）の様にされてしまったこいしが反応する。
「横島さんは無意識に私を拒絶していたの。
結果、二つの意識がぶつかり合って、霊基構造にまで影響を及ぼし始めた」
「……当時の横島の霊基構造は……」
「うん。一度崩壊・消滅しかけたものをルシオラさんの霊基構造で補ってる状態。

……割れた花瓶を接着剤で無理矢理にくっつけた様な歪で、今にもまた崩れてしまいそうな……そんな状態」

「……」

そうしなければ横島は死んでいた。だからルシオラはそれを実行したのだ。

それに横島と結び付いたルシオラの霊基構造はやがてその姿を変え、完全に横島の霊基構造と同一化する。

その時に歪な霊基構造も元の形に戻るはずだったのだ。

だが、横島はそれを無意識に拒んでいた。

横島はかねてより無意識状態の方がより強い力を発揮する傾向がある。

横島の中で、じわりじわりと霊基構造が変容し、歪なままに安定してしまう。

そして、歪な霊基構造は精神にも影響を及ぼした。無意識による精神の浸食が始まったのだ。

「今や横島さんは私達を受け入れることはない。神魔族だけでなく、人間も。

私達の世界に横島さんを癒せる者は存在しないのね」

「――――!!」

ヒャクメの言葉に皆は絶句する。横島にとって、元居た世界がどういったものなのか、その一端を知る事が出来た。

だがその内容は横島にとってあまりに残酷に過ぎた。

横島は変わらず元の世界の家族、友人、知人を愛しているだろう。信頼しているだろう。

しかし、彼の心の底。無意識に懐いてしまっている不信感は、その愛し、信頼する者達へも例外なく紐付けされてしまった。

本人はそれに気付くことなく、ただ日常を過ごすだけで昏い炎が心を蝕んでいくのだ。

ヒャクメはそれを見た。己の能力によって、それを〝視て〟しまったのだ。

あの心優しい横島が、知らずの内に愛する者達を――――世界そのものを疎んでいく様を……見せつけられてしまった。

「……なるほどね」

永琳、紫、レミリア、そしてさとり。横島が元の世界で精神的なケアをされていないと気付いていた彼女達は、ついにその理由を知る事が出来た。

なるほど、ケアが出来ない訳である。横島の精神をケアしようとすること自体が、横島の精神への甚大なる負担となってしまうのだ。

――――しかし、彼女達には希望が見えた。

「そんな……そんなことって……」

小悪魔が呆然と呟く。

愛する者達、信頼する者達と共に過ごせば過ごす程、その者達を愛せなくなり、信じられなくなる。それも本人の知らない内にだ。

それは最早呪いと言えるだろう。

思い返せば横島は幻想郷に墜落した当初、元の世界に帰りたがっていた。しかしいつからかそういったそぶりを見せなくなり、横島は不自然なまでにあっさりとこの幻想郷に骨を埋める覚悟を決めていた。

その転機となったのは？　何が切っ掛けとなったのか？

「……」

永琳はやはりと心の中で呟く。何も不思議なことはない。いきなり変わったのではない。そう、全てはあの日からだ。

横島が幻想郷に墜落した日。あの日から解放は始まっていたのだ。

スキマを通り、誰かを愛すれば愛する程に愛を失い、信頼すれば信頼する程に不信を募らせる世界から解放され。

『男』の手によって内臓を喰われ、妹紅に蓬莱人の生き胆を喰わされたことによって蓬

菜人と化し、魂が主軸の存在と化したことで肉体という枷から半ば解放され。

結果的に生きてはいたが、その心身に強烈な〝死〟を体感することでほんの瞬きの間〝生〟から解放され。

あの日から横島は変わっていった。徐々に、だが急速に――――変わってしまったのだ。

「……どうやって、横島さんを治すんです？　そんな状態の横島さんを何とかすることなんて、出来るんですか……？」

美鈴の言葉は一部を除き、その場の誰もが思っているものであった。特に横島の恋人達は特にそれが顕著だった。動揺から視線が一定せず、悲痛な表情を浮かべている。

愛すれば愛する程、信頼すれば信頼する程それを失っていく横島に自分達が出来る事などあるのだろうか？

そもそも、その話が本当であれば自分達もそれの対象となっているのでは――――？

「いや、そうじゃない。これは私達にしか出来ないことなんだ」

「え……」

美鈴達の耳に入る力強い声。絶対の確信を以って紡がれた、レミリアの声だ。

「ど、どういうことなの？」

フランがレミリアに問う。目には力がなく、声も弱々しい。横島からの愛と信頼が今

も失われていっていると思っているその姿に、思わず苦笑が浮かぶ。
「いいか？　そもそもの話、前提が違うんだ。
ヒャクメが言っていただろう。自分達の世界に横島を癒せる者は存在しない、と。
裏を返せば、それは自分達の世界以外の者ならば癒せる者が存在するということだ」
「……」
確かにそう言われればそうかも知れない。だが、それだけではあまりにも確証がない。
皆もそう考えているのだろう。その事に気付いたレミリアは、未だ困惑した表情を浮かべている妹に、自分達がどういった存在なのかを思い出させてやる事にする。
「まったく……いい、フラン？　あなたは横島の恋人なの。頑なに自分はロリコンじゃない、なんて言ってたアイツの心を射止めた女の子なのよ？」
「あ……」
その言葉に目の前が拓ける様な感覚がした。そう、それは表現こそ異なるが以前にも言われた言葉だ。
「痛いのも苦しいのも嫌だと言っていた横島君ですが、あなたの期待に応えたくて毎日魂を削る程の努力を惜しまなかった」
紫が美鈴に。

「恐ろしく自己評価の低い横島さんが、あなた達に心から愛されていると自覚し、その想いを受け入れた。

横島さんにとってあなた達の存在はそれだけ特別なものであるのです」

さとりがてゐと小悪魔に。

「永遠を厭う彼が、永遠を受け入れた。永遠の愛を誓ったのよ」

そして永琳が妹紅に。

彼女達だからこそ出来る事。彼女達にしか出来ない事。

「私達ではどうしようもなかった。でも、あなた達ならそれが出来るのね」

ヒャクメは横島の恋人達に向き直り、その頭を下げる。

「どうか、私に手を貸してほしい。横島さんを助けてほしいのね……!!」

その声は涙に濡れている。今まで本当に様々な検査・調査をしたのだろう。しかし実行に移せるものが存在せず、ただ手を拱いているしか出来なかった。

本来ならば自分達で解決したかった。自分達で横島の心を癒したかった。だが、それは不可能だった。

だからヒャクメは縋るしかない。目の前の横島の恋人達に助けを求めるしかないのだ。

「……」

目の前で頭を下げるヒャクメ。今までじっと横島の手を握っていた妹紅がその手を離し、ヒャクメの肩に優しく触れる。
顔を上げたヒャクメが見たものは、その瞳に強い輝きを宿した妹紅だ。
「分かってる。……分かってるんだ」
妹紅は自分の周囲に目を向ける。
フランが、美鈴が、てゐが、小悪魔が。強く強く頷いてくれた。
「私は……私達は、横島を助けたい。私達に、力を貸してくれ……!!」
それは叫びだ。切実なる、魂からの叫び。
もはやその心に迷いはない。ならば、一刻でも早く治療を開始する――――！
「みんな、心を落ち着けてほしいのね。私がみんなを繋いで横島さんの心の中に案内するわ」
ヒャクメは愛用のアタッシュケースに搭載されたパソコンの様な機械に追加の吸盤型アタッチメントを複数付け、それを妹紅達の額に取り付けていく。
一つ一つに綿密な設定を施し、超スピードで最適化を行う。
「でも私が出来るのはそこまで。横島さんの深層心理にはみんなだけで向かってもらうことになる」
ヒャクメの眼が忙しなく動き、タイピングする指もぶれて見える程に縦横無尽に動い

ている。

真剣な目でヒャクメの作業を眺めていたレミリアに、ヒャクメが吸盤を差し出した。

「わ、私もか？」

「そうなのね。あなたも必要なの」

「……分かった。負担を掛けるがよろしく頼む」

きゅぽ、と気の抜ける音がする。何か妙な気分だ。傍から見ればシュール極まりない格好を進んで受け入れている自分に、知らず苦笑が浮かぶ。

美鈴や小悪魔、てゐもそうだった様で、妙なシンパシーを懐いてしまう。

フランは気を落ち着ける為に何度も何度も深呼吸を繰り返し、妹紅は妹紅で目を閉じて、まるで祈る様に胸の前で指を組んでいる。

「……みんな、準備は良いのね？」

数分の間鳴り続けていたタイピング音が止み、長く深い息を吐いたヒャクメが皆に問う。

誰もが頷き、その身を床に横たわらせる。

――――さあ、横島を救いに行こう。

「行くのね……！」

ヒャクメがエンターキーを押した音が聞こえた瞬間、妹紅達の意識は闇に呑まれて

いった。

深い深い水底の様に、一切の光も差し込まない世界。それは深淵の闇。妹紅達の意識は、その闇の中を漂っていた。

「ここは……？」

妹紅が困惑の声を上げる。

周囲は一切何も見えず、だというのに自分やレミリア達の姿を認識することが出来る、不思議な空間。

「なるほど。これが横島の心の中か」

レミリアは腕を組み、明かりのない天をじっと眺めている。何か、見えたような気がしたからだ。

「そんな、こんなにも真っ暗な世界が横島さんの……？」

小悪魔が信じられないとばかりに声を出す。

確かにいつも明るい横島を見ていたからか、この世界が横島の心の中とは思えないのだろう。

「この世界の暗さは横島さんの心や性格とは直接関わりはないのね。心の世界は人に

よって千差万別。正直重要なことではないのね」
「そ、そうなんだー」
ヒャクメの言葉に納得し、てゐがキョロキョロと周囲を見回す。
しかし本当に何もない。これでは横島を治療するにも何をどうすればいいのかがまったくもって分からないではないか。
「あの、それでこれからどうすればいいの?」
フランがヒャクメにこれからの指示を仰ぐ。するとヒャクメの身体が所々ぶれはじめ、ノイズが混じったようなものへと変貌する。
「ちょ、どうしたの!?」
思わず大きな声を出してしまうが、ヒャクメは手を広げて問題ないと言った。
「この私はヒャクメ本人じゃなくて、ヒャクメの意識を分割して作られた言わば分霊みたいなものなの。
だから本体が複雑な作業をしたりすると少し不安定になっちゃうのね」
「ほ、ほんとに大丈夫……?」
見た目がかなりショッキングである為、皆の目には心配や不安が浮かぶ。
それに対してヒャクメはにっこりと笑い、その姿も安定を取り戻した。
「ちょうど本体の作業も終了したみたいね。

本体が行っていた作業は横島さんの精神構造のイメージ化。
横島さんの精神を解析して、形にする……。例えば迷宮とか、お城みたいにね」
「……そんなことまで出来るのか……」
ヒャクメの説明に妹紅が感嘆の息を吐く。
改めてヒャクメの能力の凄さを知った妹紅であるが、それを感覚で行える某式神使いが横島が元居た世界に存在していたりする。
きっと今日もどこかでプッツンしているのであろう。
「さ、すぐに横島さんの精神を具現化した建物が顕れるのね。
その中を進んで、横島さんの記憶を取り戻し、傷を癒してあげるのね」
笑顔で意気込むヒャクメの言葉に皆で頷き、決意を新たにした瞬間、皆の背後から光が走り、その存在を現した物があった。
「……!!」
「これが……横島さんの……!!」
振り返り、その威容を目にした皆は息を呑む。圧倒的な存在感に気圧されそうだ。
こじんまりとした、だが充分に大きいと言えるいくつかの尖塔が飛び出した外観!
派手派手しい色合いの装飾に、ケバケバしい光を放つ照明!!
門柱にて存在を主張している『休憩：〇〇円　宿泊：〇〇円』と書かれた看板!!!

そう、それは昨今ではめっきり見なくなった、お城型ラブホテルそのもの――――!!!

第八十五話
『始まりはあの日から』
～了～

「……」
横島さんと、その周囲で眠りに就いた横島さんの恋人達を見る。
胸に渦巻く激情を何と名付ければいいだろう。
怖い。信じると決めた。だが、それでも怖い。
自分の手が震える。呼吸が荒くなる。そんな自分に、紫と呼ばれた少女が背中を押してくれた。
手はまだ震えたままだ。その震える手で、横島さんの手を握る。それだけで震えは止まった。
祈る様に、求む様に、その手を額に当てる。

「……妬ましいわ」
パルスィは小さくそう呟いた。

妹紅の頭を撫で、そっと自分の膝の上に乗せる。
先までの弱り切った姿を見るのはライバルとしても、友達としても辛かった。
「……頑張ってね。戻ってきたら、また遊んであげるから」
発破を掛ける様に、挑発めいた事を口にしてみる。
この声が届いていれば、きっと妹紅は怒るだろう。でも、それが妹紅の助けにもなると信じて。

少女達は、ただ帰りを待つ。

第八十六話

目の前の建造物を見て、ヒャクメ――分霊体――は改めて苦笑を浮かべる。
これを目にしたのは二度目であり、もう二度と目にする事は無いと思っていた横島の精神構造のイメージだ。
心の形というものは千差万別。人によって構築されるイメージ像は様々だ。
例えば城塞。例えば迷宮。例えば職場。例えば自宅。
その中でも横島のイメージ像は最後の自宅に近い。というのも――――。
「うーん、お城にしてはちっちゃいね」
「お城そのものというより、出城みたいなものでしょうか？」
「あ、それっぽいかも」
デザインだけを見れば自分達と程近い文化様式なので、それが二人の心の琴線に触れたのだろう。フランと小悪魔は少し嬉しそうにその城について語り合っていた。
尤も、実情を知るヒャクメからすればやはり苦笑を浮かべるしかないのだが。
何せ実際のデザイン元はお城型ラブホテルだ。見る者が見れば「どんな精神構造をし

ているんだ」とツッコミを入れる事だろう。
「……なるほど。これほど横島の精神構造に相応しい建物も無いだろう」
「レミリアさん？」
　独り言であろうレミリアの声は皆にも聞こえ、「まさか知っているのか？」と驚愕したヒャクメだけでなくその場の全員の注目を集めた。
「どういうことです、お嬢様？」
「ん？　あー、いや……」
　美鈴に理由を問われ、一瞬話すかどうか迷ったレミリアであるが、皆も気になっている様であるし、まあいいかと説明する事にする。
「普段の横島を見てれば分かるけど、アイツは臆病で小心者でしょ？
　だからこんな風に小さくて簡単に逃げ出せそうな外観をしてる」
「あー」
　レミリアの言葉に皆はなるほどと頷いた。皆に嫌悪感は無く、横島のそういった部分も普通に受け入れられている事にヒャクメは嬉しくもあり、何だか少し情けなくもあり。
「それにほら、そんな風な性格してるくせに変に頑固で、誰かの為に自分が傷付いていく」

レミリアは城（ホテル）の壁を見やる。
「ぱっと見では分からないけど、随分と細かな傷が多いみたいね。これはアイツが今まで心に負った傷を表してるんでしょう。
でもこれは心の表面。多分それほど深刻なものじゃなくて、普段の生活でのちょっとしたストレスとか不満だと思う」
言われてみれば、確かに壁には細かな傷が多い。だがどれも小さく浅く、城（ホテル）の中には何の影響も感じさせない。
「次にこのケバケバしい色合いと派手な照明だけど……」
蛍光色――特にピンク――が多く使われた目が痛くなってくる様な装飾の数々と、それらを照らすいくつものスポットライト。
小心者である横島にはあまり似合わない様に思える。
「横島は承認欲求の塊でしょ？　特に女からの。
これは少しでも自分を良い風に見てほしいっていう欲求が形になったんでしょうね。
……まあ、これでそういう風に見てもらえるかは置いておいて」
改めて装飾を見る。一つ一つは確かに可愛らしく、色合いも鮮やかで女性受けしそうではあるが、それらが一つに密集することで可愛らしさは毒々しさに変わり、どうしても一般受けしそうにない。

「それから……ほら、門柱のとこのこれ」
レミリアは休憩・宿泊に金銭が必要である事を示す看板を指差す。
「ここの料金の部分だけど、〇〇円ってなってて具体的な値段は書いてないでしょ？
これはアイツの懐の深さを示していると私は思う」
「……何で？」
妹紅は首を傾げた。料金を取るのなら逆ではないのかと言いたいのだろう。
ヒャクメが視線をやれば、他の皆も分からないという表情をしている。
本当なら理解出来ている事が理解出来ていないようだ。
「ま、こんな風に料金表があるせいでしょうけど……。
アイツは自分の内側に誰かを招くのに対価を要求しない。
そりゃ何でもかんでも信用する訳じゃないだろうし、拒絶する事もあるだろうけど
……それでも、アイツは受け入れる。
例え敵対していた相手でも、そこに何かの理由があれば、その手を取るでしょうね」
「……」
そう言って笑うレミリアの顔には、どこか苦い物が含まれている様に見えた。
妹紅、美鈴、てゐにはその理由が理解出来る。
横島の性質上、一度受け入れた者は絶対に見捨てないだろう。

例え自分に不利益、不都合であったとしても、その手を離す事は絶対にない。
そう、例えそれが世界を滅ぼさんとする魔神の娘達であったとしても――――。
「つまりこの看板は横島の懐の深さ、優しさの象徴にして……〝甘さ〟の象徴でもある」
「む……」
レミリアの言葉に恋人達が眉を顰める。それを見て一つ溜め息を吐くと、レミリアは言いにくそうに口を開いた。
「あんまり言いたくないんだけどね……自分達が横島にした事、見せた物を思い出してみなさいよ」
その言葉に恋人達五人は胸を押さえて膝から崩れ落ちた。
「だだ甘でしょ？」
「……」
誰も言葉を返す事は出来なかった。
横島の恋人達五人はそれぞれが横島に対して強い罪悪感を持っている。
横島を蓬莱人にした事。
横島が幻想郷に墜落する原因の一つである事。
己の心の弱さによって、横島の心を傷付けた事。
永遠の命を得た横島に対し、喜びを見出した事。

狂喜に囚われて横島と決闘し、愛の告白と共に顔面に拳をぶち込んだ事。
……一人だけベクトルがおかしな方向に向いているがそれはともかく。
そういった事があってもなお自分達を受け入れ、愛してくれる事に五人は改めて気付かされた。
横島自身は最早気にしていないのだが、本人達がどう思うかはまた別問題だ。
ヒャクメは這い蹲る五人に苦笑を浮かべる。分霊である彼女は心眼の能力に著しい制限が掛けられている。
だが、目の前の五人の心は能力を使うまでもなく手に取るように分かる。
そう、今この場でヒャクメが心を読み切れないのは一人だけ。誰あろうレミリアだ。
さしものヒャクメも永琳の心を読むのは容易ではなく、常に全力に近い能力行使を以って何とか読み切ったのだ。
世界の違いによる『格』の向上が無ければ読み切れなかったであろう、異常なまでの思考数であった。
おかげでその他の者の心を読むのにも時間が掛かってしまう。その場に紫が居た事も要因の一つだ。
故にレミリアの心の全てを読み切った訳ではなかった。自分に対して妙に当たりが強かったのでついつい後回しにしたのが悪かったのか。

とにかく、この場の誰よりも――ヒャクメ本体よりも――横島の事を理解しているレミリアの心に、今更ながら興味が湧いてきたのだ。

――うーん、精神構造のイメージを見て、一瞬であそこまで横島さんの心を把握しちゃうとは……。

ヒャクメの見解もまたレミリアと同様であった。

ヒャクメはその能力で以ってあらかじめ横島の心を見ていたから納得は出来た。

しかしレミリアは一度見ただけで的確に横島の心を把握した。

はたしてレミリアは横島に対し、どのような感情を懐いているのか。

――八雲藍さんや橙ちゃんみたいに分かりやすい……というより、理路整然とした思考なら分霊の私でも何とか読めそうなんだけど……。

式神という性質上、藍と橙の思考はコンピューターのそれに近い。一見複雑そうに思えるが、見る者が見れば非常に読みやすい部類と言える。

「おいヒャクメ」

「ひ、ひゃいっ！　な、何なのねー、レミリアさん？」

レミリアの心を読もうと集中していた時に声を掛けられた為、ヒャクメの声は思わず上ずってしまう。

それを不審な目で見やるレミリアだが、「まあいいか」と気にしない事にし、背後の城（ホテル）

を指差す。
「で、どうやって中に入るんだ？　門も扉も開けられないみたいだが」
「あ、あー……」
レミリアの言葉に城（ホテル）を見やれば、てゐと小悪魔が門を開けようと押したり引いたり四苦八苦している。
他の四人では力が強すぎる為に二人が担当したのであろうが、ここはそもそも心の中。
力で門を開けようとする事自体が間違いなのだ。
「うーん、そうね。この中の誰かが声に霊波を乗せて開けてって言ったらすぐに開くと思うのねー」
「……本当か？」
レミリアを始め、全員が今の言葉を疑っている。その懐疑的な視線にヒャクメは泣きたくなってくるが、疑う気持ちも理解出来る為、文句は言わない。
「さっきレミリアさんが言っていたように、みんなの事は横島さんの魂に刻み込まれているのね。だから声を掛けるだけで大丈夫」
「そ、そっか……」
横島の恋人達が照れる。先のレミリアもそうであるが、改めてヒャクメに同じ事を言

われて実感が湧いて来たらしい。
ヒャクメは「照れる暇があるならさっさと声を掛けなさい」とフラン達を呆れた目で眺めているレミリアに視線を向け、口を開く。
「……レミリアさんでも開くと思うけど」
「え、私でも？」
きょとんとした顔で驚くレミリアにヒャクメは頷く。
「だって横島さんからレミリアさんにかなり強い信仰が流れていった形跡が残ってるし、この感じからかなり崇拝してたみたいなのねー」
「信仰って……あれマジだったの!?」
冗談だと思ってたんだけど!?　と狼狽えるレミリアの姿は、ヒャクメにとって初めて可愛い女の子として映った。
「それで、誰が声を掛けるのねー？」
急かすようなヒャクメの声に、皆は目を見合わせ、やがて一人へと集中した。
そう、レミリアである。
「いや、何でよ。恋人であるアンタらの誰かが声掛けなさいよ」
尤もなツッコミである。だが、彼女達にも言い分があるのだ。
「いや、だって信仰って聞いたら……」

「やっぱりお姉様に声を掛けてもらった方がって思っちゃって」
「お嬢様を差し置いて自分達が声を掛けるというのもちょっと……」
「あはは……ですよねぇ」
「一回レミリアで門が開くか試してみてほしい」
五人共目を逸らしてそう答えた。つまりこういう事である。
「……自分が声を掛けて開かなかったらどうしようって怖がってるのねー」
「――――この……ヘタレ共ッ!!」
ごめんなさーい!!　と謝る姿にヒャクメもレミリアも溜め息が出る。
心情的にそういった事態を怖がるのは理解出来るが、横島を助ける為にここまで来たというのにこんな事で尻込みされてはどうしようもない。
「あーもう……！　それじゃ、全員せーので一緒に声を掛けるわよ。文句を言ったらぶっ殺すけど、それでいいわね？」
「はい」
ちょっと本気の殺意が漏れ出てしまったレミリアの心からの説得に、皆は頷くしかない。
それほど誠意が込められた言葉だったのだ。皆の後ろで城（ホテル）が及び腰になってガタガタと震えている様な幻覚が見える。

「ほら、全員覚悟を決めなさい」
「わ、分かってるよ」
気合いを入れる為か、頬を叩いたり深呼吸をしたりしている五人に発破を掛け、タイミングを計る。
レミリアはどうして自分が、とついつい考えてしまうが、ここまで来ればもうヤケクソだ。
「……せーのっ！」

「――――開ーーーけーーーてーーーっ!!!!

レミリアのおかげで全員の声が綺麗に揃った。と、次の瞬間。
「……おおっ!?」
門が中央から割れて左右にスライドして開き、その奥の扉からが勢い良く開くと、中からレッドカーペットがころころと転がりながら敷かれていき、ちょうどレミリアの前で完了する。
カーペットから視線を上げて扉の方を見れば、少し上方に「おいでませ！」と書かれた看板が新たに設置されており、どこからか飾り付けられたクラッカーがパンパンと乾

いた破裂音を鳴らしている。
ちなみに門柱にはいつの間にかくす玉が用意されており、中からはカラフルな紙吹雪と「いらっしゃ～い」と書かれた垂れ幕が下りていた。
「……どうなっているんだ、コイツの精神は」
そのレミリアの呟きは、皆の心の声とピタリ一致していたのであった。

第八十六話
『記憶を求めて』

「……ま、まあまあ。扉も開いたんだし、早く入るのね」
「あ、ああ。そうだな」
流石のレミリアも動揺が抜けておらず、どこかおっかなびっくりとした様子で城（ホテル）内部へと入っていく。
城（ホテル）の中は暗かった。だが、全員が中へ入ると扉がひとりでに閉まり、灯りが点いた。強い光に目が少々焼けるが、それも気にならない程に予想外な光景が目に飛び込んでき

た。

「これは――――紅魔館のエントランス……？」

そう、そこは城の中にも拘わらず、内装は紅魔館のエントランスに酷似していたのだ。

しかし、この場のほとんどの者は紅魔館の住人。すぐに本物との差異に気が付いた。

「いえ……ところどころ装飾が違いますね」

「んー……まるで他の家の一部をムリヤリくっつけたみたいだね」

全体的な装飾は洋風で統一されていると言える。だが紅魔館のそれとそれ以外とでは、そもそもの規模がまるで違っていた。

そしてその装飾はヒャクメにとって、馴染み深い物となっている。

「……これは、まさか」

他の者が内装の違いに疑問を抱く中、レミリアはある事に気付き、愕然とした声が出る。

「……？　どうしたの、お姉様？」

その声が聞こえたフランがレミリアに声を掛けるが、レミリアはそれに取り合わず、ヒャクメへと向き直る。

「ヒャクメ……この内装は……」

「……レミリアさんが考えている通りなのね」

「……やっぱり、か」

ヒャクメに問い掛け、自らの考えが正しかった事を確信したレミリアはそれきり黙り込んでしまう。

放置された形のフランも、ヒャクメとのやり取りでレミリアの様子に気付いた他の者達も、レミリアが何に気付いたのかが分からずに困惑する。

皆の目はヒャクメに集まり、それを受けたヒャクメがレミリアに代わって一体どういう事なのかを説明する。

「ここはね、私が以前来た時と内装が全然異なっているのね」

「そうなの？」

「ええ。この場所は横島さんが自分の帰るべき場所と認識している場所が反映されているの」

「それって……」

「うん。横島さんは紅魔館が自分の帰るべき場所と思っているみたいね」

「そうなんだ……！」

ヒャクメの言葉にフランと小悪魔は嬉しそうに相好を崩す。紅魔館は自分達の家だ。愛する人も己と同じ認識であるというのは確かに喜ばしい事である。

しかし、他の三人……妹紅、美鈴、そしてゐはヒャクメの言葉にどこか違和感を覚

えていた。
「紅魔館が……横島の……」
小さく呟く妹紅。一体どこに違和感を覚えたのか。
「横島……紅魔館……内装……？」
何かが引っ掛かり、やや俯きながらぶつぶつと呟く。美鈴とてゐは声こそ出さないが、同じ様に考え込んでいる。
「紅魔館……帰るべき場所……以前とは内装が……――――っ!?」
それを口にした瞬間、三人は同時に顔を上げた。
「ヒャクメ！　……さん。ちょっと聞いてもいいかな？」
「何なのね？」
「も、妹紅……？」
勢い込んでヒャクメに詰め寄る妹紅。後に続くのは当然美鈴とてゐの二人だ。フランと小悪魔の二人は三人の様子に戸惑ってしまう。
詰め寄られた当のヒャクメは……どこまでも冷静だ。
「前の時も今回と同じ方法で治療しようとしたんだよな？」
「そうなのね」
「その時は今と内装が全然違ってたんだよな？」

「そうなのね」
　妹紅の問いにただ淡々と答えるヒャクメ。その姿に妹紅達三人は確信を深め、フラン達二人はようやく違和感を覚える。
「……じゃあ以前の」
　やけに乾燥する喉を潤す為、妹紅は唾を飲みこむ。ほとんど効果を成すことのない行為であったが、それでもそれを口にする為の心の準備は整える事が出来た。
「以前の、横島が帰るべき場所と思っていたのはどこなんだ？」
「――――あ……」
　そう。皆は気付いた。気付いてしまったのだ。
　横島の帰るべき場所が紅魔館であるという認識、その異常性に。
「以前私が来た時の内装は、横島さんの元の世界での職場、『美神除霊事務所』だったのね」
「……っ！」
　横島が自分の帰るべき場所……自分の居場所と認識していたのは住んでいるアパートでも、かつて両親と暮らしていた家でもなく――――美神と、おキヌと、シロと、タマモと、人工幽霊一号と多くの時間を共にした、事務所だった。
　ヒャクメは知っている。横島が事務所の皆を異性として意識しながら、それと同じく

らいに家族の様に思っていた事を。

だからこそ、美神除霊事務所が横島にとって帰るべき場所だった。心休まる〝家〟だったのだ。

だというのに、それが今や完全に紅魔館に置き換わろうとしている。

それは横島が元の世界への未練を、想いを捨て去る事と等しい。

今、横島は元の世界を――――美神達への想いをすら、失いかけているのだ。

「それ、は……」

ヒャクメから聞かされた内装の変化が示す横島の思考の置き換えにてゐは愕然とし、ふらりとよろめく。小悪魔が背後から支えたおかげで倒れる事は無かったが、てゐの身体は震えている。てゐを支える小悪魔も同様だ。そして、それはこの二人だけでは収まらない。

妹紅も、フランも、美鈴も。心の奥底より来たる恐怖にも似た感情により身体が震えてしまっていた。

横島の恋人達五人は思い至ったのだ。横島が幻想郷に墜落してから今まで、自分達の言葉が、行動が、想いが――――。

横島の無意識の侵食を助長していたのではないかと、そう思い至ってしまったのだ。

「……お前は随分と冷静なんだな、ヒャクメ」

青を通り越して白い顔となっている五人を横目に、レミリアはヒャクメに声を掛ける。

ヒャクメが横島とそれなりに親しい間柄――――おそらく友人関係である事は皆もその言動から理解している。

しかし、それにしては余りにも妙だ。いくら何でも冷静過ぎる。

ヒャクメは横島の心に入る前、横島を助けてほしいと涙を流して妹紅達に頼み込んだ。

感情が表に出やすいタイプなのだろう。今までの言動を鑑みても、努めて冷静に……感情を押し殺している様にも見えない。どちらかと言えば、むしろ今のヒャクメは感情そのものが存在していない様にも見える。

「それは、今の私は本体との接続が一時的に切れている状態にあるからなのね」

「……と言うと？」

分霊のヒャクメは表情を全く変えず、身振り手振りを交えつつ説明を始めた。

こちらの世界に来てから、ヒャクメは横島の心を深く探ってはいなかった。読み取ったのは精々表層程度。今の人格が有するパルスィとの生活、パルスィへの想い……その程度の情報だけだ。

永琳や紫などの心を読み続ける事に力を割いていたというのもあるが、それを行わな

かった理由はもっとちっぽけで、しかし重大なものだった。

――――怖かったのだ。

あちらの世界からこちらの世界へ来た事で、横島の心がどのように変化したか――――変化してしまったのか。それを『視る』事が恐ろしかったのだ。

そして何よりも自分が視ていると知られた場合、横島の心がどうなってしまうのかが分からない。あの時の再現などごめんだ。

分霊の目を通して横島の心を『視た』ヒャクメが受けた衝撃は如何ばかりか。

それを頭で認識してしまう前に分霊を独立化させなければ今頃分霊は消え、イメージ化した城（ホテル）も維持出来ずに妹紅達は一時の間横島の心に取り残される事となってしまっただろう。

それほどまでにヒャクメにとって受け入れがたい現実であったのだ。事実、本体のヒャクメは今床に這い蹲り、嗚咽を漏らしている。そのせいで場は一時騒然となったが、それは紫と永琳が治めてみせた。

二人にはヒャクメが取り乱した理由が瞬時に理解出来た。ヒャクメがこうまで心を乱す理由など、一つしか考えられない。それは決して他人事ではなく、もしかすればいつか自分達にも訪れてしまう未来なのかもしれない。

それを考えれば、ヒャクメを支える事は当然だ。

改めて紫達は妹紅達横島の恋人と、主君たるレミリアに希望を託す。どうか横島と――

――そして、パルスィとヒャクメを救ってほしいと。

「本体との接続は切れちゃってるけど、これからみんなにしてほしい事は指示できるのねー」

分霊（ヒャクメ）は全く変わらない表情で全員を見やる。感情表現豊かな本体とは違い、どこまでも平坦な感情にどこか不気味さを覚える。

「これからみんなには横島さんの深層意識に潜ってもらうわ。……残念だけど私はこれ以上横島さんの心に足を踏み入れる事が出来ないのね。

だから、ここから先はみんなだけで頑張ってもらわないといけないの」

ヒャクメの言葉に皆が頷く。以前ヒャクメが横島の深層意識に潜った際、自我と無意識が反発し合い、精神が崩壊しかけたという。

ならば分霊と言えどヒャクメが今こうしてこの場に居れる事自体が奇跡にも等しい。

本当ならば自分の手で救いたい。しかしそれは出来ない。だからこうして妹紅達に望みを託し、任せるのだ。

横島の為、自分達の為――そしてパルスィとヒャクメの為にも、必ずやり遂げてみせる。そう決意を新たにし、妹紅達はヒャクメの指示を頭に刻み込んでいく。

「初めにこの城（ホテル）――――ううん、紅魔館はこのエントランスを除いて完全な別物である事を認識しておいてね。

あなた達がまずすることは、横島さんの記憶を呼び起こすこと。その為には紅魔館内にある『記憶の部屋』を開放していかなくちゃいけないのね」

「記憶の部屋？」

聞きなれない言葉に妹紅はつい聞き返してしまう。

「うん。この紅魔館の全ての部屋には横島さんの全ての記憶が封印されているの。

それらを開放していくことで横島さんの記憶は徐々に取り戻されていくわ」

「……」

「特に重要な記憶――――横島さんにとって何か大きな出来事に関わる部屋を開放すれば、連鎖的に多くの記憶が蘇ることになる。

それだけ情報量が多い……心に焼き付いた記憶ってことだからね」

皆はなるほどと頷いた。

記憶が鮮明であれば鮮明であるほど情報量が多いのは当然の話だ。それを思い出せば、関連する記憶、類似した記憶も一気に蘇る。

妹紅達にも似た様な経験があり、記憶を取り戻す為の方法として有効であると納得した。

「問題はその重要な記憶とやらをどうやって見付けるか、か。
手当たり次第に開放していってもいいけど、それだとかなり時間が掛かるし……」
横島の記憶に興味はあるが、だからと言ってその全てを覗きたい訳ではないし、何よりそんな事をしている時間は無い。
いくら横島とてレミリアやフランといった強力な吸血鬼を長時間精神に受け入れられるとは思えない。
先程は変な所で時間を取られてしまったが、この治療法はもっと効率良くスピーディーに執り行わなければならないのだ。
「その辺は大丈夫なのね。みんなが横島さんの精神に入る前に、本体の私が横島さんに暗示をかけたのね。
だから重要な記憶の部屋にはそれと分かるような変化があるはずよ」
「暗示……？　そんなのでどうにかなるもんなの？」
首を傾げて問うてゐにヒャクメは首肯を返す。
「本体（わたし）はそういうの得意なのね。
それに横島さんは臆病で警戒心が強いのに心は霊的に無防備……というか、抵抗力があんまり無いの。
話によれば敵の死霊術師（ネクロマンサー）に簡単に操られちゃったこともあるみたいなのねー」

「そ、それはまた……」

基本的に横島の精神防壁は弱い。これは基礎を学ぶ前に一足飛びで高難度の技術ばかり体得していった弊害である。それでも元の世界で美神が改善させようと頑張っていたのだが、どうもそういった体質であるらしく、あまり上手くいってはいなかったのだ。

ゴーストスイーパーとしては余りにも巨大な弱点であるが、一応メリットも存在している。

「ああ、なるほど。それでですか」

「……？　何がですか？」

美鈴には心当たりがあるのか、一人納得していた。隣の小悪魔がそれを尋ねると、美鈴はいつかの修行風景を語る。

「以前横島さんが〝小竜姫〟様という武神の剣筋を再現した事がありまして。

今思えばあれは自己暗示だったのかなー、と」

「あ、なるほど。そういうことですか」

横島の想像力はある種異様なまでに高い。それは彼の奥義である『煩悩全開』にも活かされている。

その想像力を以って自らの中に特定の人物（美女・美少女限定）を創造し、その動き

は自分も出来ると自己暗示する事で実際に再現してみせるのだ。
　そしてその状態の横島の精神は完全にその一点にのみ集中しており、疑似的な無意識状態となっている。
「ま、そういうことだから重要な記憶を探すのは問題ないと思うの。
　ある程度の数を開放したら深層意識に繋がる〝穴〟のようなものが顕れるはずなのねー」
　少し本題から外れた話をヒャクメが修正する。美鈴は申し訳なさそうに頭を下げると、一歩後ろに下がった。これ以上話の腰を折らないという意思表示だ。
「そして、記憶の部屋を開放するにあたってみんなに気を付けてほしいことがあるの」
　一つ指を立て、皆を見回してヒャクメはそう告げる。
　その声音は何の感情も有していない平坦なもののはずなのに、どこか真剣みを帯びている様に聞こえた。
「重要な記憶の部屋を開放した場合、その時の感情や思いがみんなに流れ込んでくる場合があるの。
　それだけ強く心に焼き付いてるってことだからね。
　……そして、今のみんなは精神体。そういった物の影響を受けやすい状態にあるの」
「……それ、は」

驚きに目を丸くし、恋人達は目を見合わせる。
そしてそんな彼女達をレミリアは苦虫を噛み潰した様な表情で見つめていた。
「……」
あの記憶は、間違いなく横島にとって最も重要な記憶の一つだ。あの記憶の部屋を開放し、もしその時の想いが、感情が流れ込んだら……。
フラン達は、正気でいられるだろうか――――？
「……」
頭を振って弱気になる自分を外に追い出す。ここまで来たのだ。後は信じて行動するのみである。
「……他に注意点は？」
「あなた達の行動によっては心の防衛機構が働くかもしれないのね。
横島さんのそれがどういったものになるかは……ごめんなさい。分からないのね」
「そうか……」
横島の心を探索するにあたっての注意事項の最終確認を済ませる。
ここに来て懸念事項も増えてしまったが、これでヒャクメを責めるのは酷というものだ。
レミリアは横島の恋人達を見やる。

妹紅、フラン、美鈴、小悪魔、てゐ――――。皆、覚悟を持った目をしている。次にヒャクメと視線を交わし合い、互いに頷いた。

「今回の横島さんの一連の出来事は、本を正せば全て私達が蒔いた種。

それなのに、あなた達に全てを託し、私は見ていることしか出来ないのね。……本当に、ごめんなさい」

本体との接続が切れているはずの分霊（ヒャクメ）が、まるで本人であるかの様に沈痛そうな表情で頭を下げる。

分霊を作った際の本体の精神状態が反映されているのか、それともまた本体と繋がったのか、その判断はレミリア達にはつかない。

だが、どちらでも彼女達には構わない。ヒャクメはヒャクメだ。ならば、ヒャクメに掛ける言葉も決まっている。

「気にするな。横島は既に私達の家族の様なものだ。なら、助けるのは当たり前だろう？」

まずはレミリアが応える。次いで恋人達だ。

「横島は私の半身だ。……いや、それがなくても私は横島を助けるさ。横島はみんなの――――私の、大切な人だから」

胸に手を当て、そこに在ったはずの何かを感じながら。

「ただお兄様はいつも私を助けてくれた。今度は私が大好きなお兄様を助ける番だもん」

物を壊す為でなく、護るために両の手をぎゅっと握り締めながら。

「横島さんを助けるのは師匠として、そして恋人として当然のことです。あなたが気に病むことではありませんよ」

自然体でありながら、その総身に気と、そして想いを漲らせながら。

「私にとって横島さんは憧れの人でもあります。私は横島さんの傍に居られるような、そんな自分でありたいと思っています。

……横島さんの為にも、自分の為にも、私は愛する人を助けます」

かつての様に己の願望を押し付けるのではなく、共に想いを分かち合う為に。祈る様に両手を胸の前で組みながら。

「……執事さんがこっちの世界に墜ちた原因の一つは私なんだ。それなのに執事さんは私の気持ちを受け入れてくれた。私のことを好きになってくれたんだ。だから、私は執事さんの心に報いたい。

――――ううん、違う。……そんな気持ちじゃない。好きだから。大好きだから助けたいんだ」

些細な悪戯のつもりだった。笑い話で済むはずだった。だが、結果としてそうはなら

なかった。
それを成した己の掌を見つめ……ぎゅっと、握りこんだ。この手は、愛する人を助ける為にある。
言葉も理由もそれぞれ違う。しかし、根底にある想いは誰もが同じ。
――ただ、愛する者を救いたい。それだけだ。
妹紅達の言葉、想い。それを受け、ヒャクメは深く頷いた。
最後にレミリアを見つめ――言葉に込められた言外の意図も察し――再び、ヒャクメは頭を下げる。
「それじゃあみんな――よろしくお願いします……!!」
「――はいっ!!」
ヒャクメの想いに応え、少女達は横島の心へとその一歩を踏み出した。

変わらぬ景色の中を歩き続ける事、体感時間にしておよそ十分。
「……重要な記憶の部屋は見れば分かる様になってるって言ってたけど、今の所それらしいのは見えないね」
「そうですね……」

横島の心の中――――紅魔館のエントランスから中に踏み込めば、眼前に広がっていたのはどこまでも続く長い廊下だ。

十メートル、あるいは十数メートル間隔で廊下の両側に配置されている部屋は、どれも変わり映えせず、とても重要な記憶が封印されている様には見えない。

恐らくは日常の何でもない記憶なのだろう。

「この廊下、どこまで続いてるのかな……？」

「うーん、何でか遠くの方は良く見えないんだよな」

フランと妹紅の視線の先、数十メートルから先の廊下は陽炎の様に景色が揺らいでおり、全容を窺い知る事が出来ない。

ヒャクメならばまた違った世界が見え、自分達を導いてくれたかも知れないが、それも叶わぬ事。今はただ真っ直ぐに進んでいくしかない。

そしてそれから五分ほど。

「……ん？　どうやらようやく変化が訪れるみたいよ」

「あ。本当ですね、お嬢様」

レミリアが指差す先、そこに陽炎は無く、存在したのはいくつもの分かれ道。一つが二つに、二つが四つに、四つが八つにと、さながらアリの巣……否、これは最早迷宮と言ってもいいだろう。

「ふむ……流石に手分けして探索……というのはしたくないんだけどね」
「そうですね。現実世界ならともかく、ここは精神世界ですから。なるべく一塊で行動するべきでしょう」
「どうする？　端っこから虱潰しに探索する？」
レミリア、美鈴、フランがどう探索するかを話し合う。他の三人は道の先を注視し、何か変化がないかを確認している。
「……ん？　んんー……あ！　み、みんな！　アレ見てアレ!!」
そんな中、てゐが何かに気付き、皆を呼び寄せた。てゐが指差す道の先。そこは今までの廊下と比べて薄ぼんやりと光っている。
「もしかしてあれが……!?」
「と、とにかく行ってみよう！」
妹紅の言葉を合図に皆が走る。ようやく見つけた一つ目の重要な記憶の部屋。横島を救う、最初の一歩だ。
「これが、重要な記憶の部屋……」
特に何らかの妨害に合う事もなく、皆はその部屋にまで辿り着いた。
装飾などは他の部屋と変わりはないが、部屋の扉が光を放っている。
「……よし。みんな、覚悟は良いわね？」

一度大きく息を吸ったレミリアが扉のレバーに手を掛け、皆に振り返り是非を問う。しかし、答えなど分かり切っている。

「行こう」

皆を代表し、妹紅がただ一言そう告げた。皆の強い意志の籠った視線がレミリアに覚悟を伝える。レミリアは一つ頷き、扉を開いた。

この先にどのような記憶が待っていようと、やるべきことは一つだけ。ここから全てが始まるのだ。

「……っ!!」

強い光が部屋から迸り、思わず目を閉じてしまう。塞がれた視界の中、肌で感じる。明らかに空気が変わった。

「な、ん……何だ――――っ!」

ぎゅっと閉じられた目を意志の力で無理矢理にこじ開ける。何があるか分からないのだ。少しでも情報は手に入れたい。

そうした六人が何とか目を開いて最初に飛び込んできた光景。それは――――。

「のっぴょっぴょーーーーーーん!!!!!!」

「うわーーーーーーー!!?」

鬼気迫る……というか、何と言うかこう……とにかく凄まじい表情で意味の分からないことを叫ぶ横島のドアップだった。

第八十六話

『記憶を求めて』

～了～

第八十七話

「のっぴょっぴょーーーーーーんっ!!!」
「うわーーーーーー!?!!」
横島の鬼気迫る物凄い表情と意味の分からない雄叫びに、妹紅達五人の恋人とレミリアは心の底から大いに驚いた。
愛する者を救う為、その精神世界へと侵入した妹紅達であるが、まさかその愛する者――――横島にドッキリを仕掛けられるとは思ってもいなかった。（ドッキリではない）
妹紅は今も暴れ回る心臓を押さえながら、状況を確かめようと周囲を見回す。
まず自分の足下に、驚きすぎたのか涙目になってへたり込んでいるフランと小悪魔の姿。フランはまだ余裕がありそうだが、小悪魔に至ってはどうやら腰が抜けてしまっている様だ。
そのまま視線を上げれば物凄い形相でまた意味の分からない事を叫んでいる横島と、その隣には妙齢で己とは正反対のプロポーション――いわゆるボンキュッボン――の、

赤みがかった長髪の美女。
更には恐らく外見年齢は自分と同じくらいに見える幽霊と思しき少女の姿も見える。
妹紅は二人の女性を見て、以前横島から聞いた話を思い出した。
そう、彼女達こそが横島の雇い主にして師匠一人でもある『世界最高のゴーストスイーパー』〝美神令子〟と、同僚の『死霊術師（ネクロマンサ）』〝氷室キヌ〟である。
横島達三人は皆険しい表情で妹紅達を――――否、その背後を睨んでいる。
妹紅達はその視線の先に何があるのかを確かめるべく後ろを振り返る。
果たして、その先に存在したのはラッパを持ったピエロを身体から生やした巨大な鼠と、そのピエロをデフォルメして三頭身にした小さなピエロ達であった。
「……状況から考えると、このでかい鼠と戦ってるのか」
両社に挟まれたままでは詳細が分かりづらい為、その場から少々離れた場所へと移動する。
周囲に目をやれば、不思議な形状をした建物がそこかしこに屹立している。
多くの作り物の白馬と馬車が環状に配置された施設。巨大なティーカップがいくつも置かれている場所。
トロッコと思しき物が何個も連なったまま停止している長大で立体的な軌跡を描く線路。他にも様々な建造物があるが、中でも一際目を引くのは妖怪の山にある索道（ロープウェイ）の

〝ゴンドラ〟が超巨大な輪にいくつも吊るされている構造物だ。
余りにも見慣れない光景に、横島達の戦いを見ながらもついチラチラと目をやってしまう。
「……ああ、ここは遊園地か」
「遊園地？」
ぽつりと呟いたレミリアに妹紅が反応する。
「簡単かつ大雑把に説明すると、ここは娯楽施設ね。周りの建物は全部遊びの為の物なの」
「……ふーん？」
娯楽施設と言われてもまるで実感が湧いてこない妹紅は首を傾げるばかりだ。
「あ、そろそろ決着が付きそうですよ」
「ん？」
美鈴の言葉に横島達の方へと視線を戻してみれば、鼠が右腕を切断され、ピエロが本体と思しき鼠から分離して巨大な輪――観覧車――へと向かっていったところだった。
「死ね!!」
そのままピエロは輪の軸の部分を破壊したが、次の瞬間、本体である鼠が美神に討ち滅ぼされ、断末魔の悲鳴を上げて消滅した。

よく分からないがとりあえず横島達が勝った事でフランと小悪魔が歓声を上げるが、当然このままでは終わらない。

大きく、重く、鈍い音を立てて巨大な輪がゆっくりとこちらへ向けて倒れ込んでくる。

「うえぇぇえっ!?」

思わずてゐは叫んでしまう。

これは記憶の映像。自分達に何ら影響を与える物ではない事は分かり切っている。

だからこそ、その叫びは自分達の為に上げたものではない。

かつての記憶の映像であったとしても――――その声は、愛する横島の為に上げたものなのだ。

「しまった!?　もっと可愛らしい悲鳴を上げればよかった!!」

「そんな事気にしてる場合ですかっ!?」

余裕があるのかないのか、素っ頓狂な事を言い出すてゐに小悪魔がツッコミを入れる。

そんな事をしている間に巨大な輪が轟音を立てて地面へと覆い被さり、横島達の姿をも飲み込んでいった。

「よ、横島ーーーーーっ!!　……――――っ!?」

大丈夫であると分かっていても、横島の窮地に妹紅は叫ぶ。

――――その時、その場の全員に知らない記憶が流れ込んできた。

第八十七話
『その記憶は誰のものか』

あまりの質量に大地が揺らぎ、あまりの轟音に大気が揺らぐ。
周囲一帯を埋め尽くすのはその衝撃によって発生した大量の土煙だ。
「くっ……！　これじゃあ何も見えない……っ!!」
これが現実世界であるならば土煙など簡単に吹き飛ばせるが、記憶の映像に干渉する事など出来はしない。無事な事は分かっているが、それでも安否を気にしてしまうのが人情というもの。
レミリア達のその気持ちに応えた訳ではないが、一陣の風吹き、土煙を流し去ってくれた。
取り戻された視界の中、何と横島達は無傷であった。
ちょうど鉄材の間に収まる形で事なきを得たのである。

「よ、よかった～……」

てゐと小悪魔がへなへなと地面に座り込む。敵を倒し、横島も無事であった事から気が抜けたのだ。これでようやく一安心と言ったところだろう。……先はまだまだ長いのであるが。

「ふぅ……まったく心臓に悪い。それにしても……」

レミリアは自分が生きている事に喜び、またも「のっぴょっぴょーん」と叫んでいる横島を横目に、先程味わった妙な感覚を反芻する。

突然頭の中に浮かんできた、覚えのない記憶。

「美鈴」

「はい。私も知らない記憶が浮かんできました。これがヒャクメさんが言っていた事なのでしょうね」

意を読み取って答えた美鈴にレミリアは頷く。

視線を横島から外し、フランを見やる。フランは浮かんできた記憶の存在に少々混乱しているのか頭を押さえてしゃがみ込んでおり、それを妹紅が介抱している。

落ち着きを取り戻したてゐと小悪魔も知らない記憶に戸惑いを覚え、二人して頭を振っている。

レミリアと美鈴も冷静ではあるが普段通りとはいかない。そんな中、妹紅は既に普段

の調子を取り戻している。横島と妹紅はラインが繋がっている為、突然何かが流れ込んでくる感覚には耐性があるのかも知れない。

「……ん？」

ふと太陽が雲に遮られたかのように視界に影が差す。次の瞬間には記憶の再生が終わり、レミリア達は紅魔館のゲストルームに酷似した部屋に立っていた。

戸惑うのも束の間、部屋の外からいくつもの扉が開いていく音が聞こえてくる。

「これは……いや、そうか。そういうことね」

ヒャクメは言った。重要な記憶を呼び起こせば、多くの記憶が蘇ると。ならばこれがそうなのだろう。

「こうやって横島さんの記憶を取り戻していくわけですね」

レミリアと同じく答えに辿り着いた美鈴はしきりに頷く。

とにかくこれでやる事ははっきりした。ならば、後は突き進むのみである。

「お姉様」

自分を呼ぶ声にレミリアが振り返れば、そこにはフランを始め皆が揃っていた。

「よく分かんないけど、これを続けていけばいいんだよね？」

「……まあ、うん。そういうこと」

妹の『ややこしい事は他の人に考えてもらう』といった風な表情を見たレミリアは、

帰ってからフランの勉強の時間を増やす事に決めた。ついでに妹に影響を与えたであろう人物、妖夢も巻き込むつもりである。

「それじゃあみんな。行きましょうか」

レミリアの言葉に、皆は力強く頷いた。

それから皆は光を放つ扉を目印に、次々と横島の重要な記憶を取り戻していく。少し不思議だったのは、必ずしも記憶が時系列順ではなかったところだ。

とある戦闘狂の少年と共闘した記憶を見た後に、その少年との出会いの記憶が再生されたのだ。

扉が放つ光の強さも一定ではないようで、恐らくではあるが本人にとって印象深い記憶であればある程光も強くなるのだろう。

そうしていくつもの記憶を蘇らせてきた一行だが、とある記憶を見た事によって精神に大きなダメージを負ってしまった者がいる。誰あろうレミリアだ。

「何でやねんな……何であないな事になっとるんや……」

「お、お姉様しっかりーっ!?」

「おいたわしや……お嬢様……」

レミリアはうつ伏せに倒れ伏し、フランが必死の呼び掛けを行うも効果は薄い。美鈴

はレミリアが心に負った傷の深さを思い、涙を流しており、残りの三人は苦笑を浮かべてそれを見守っている。……妹紅はあまりよく分かっていなかったりするのだが。

さて、今回レミリア達が蘇らせたのは最強の吸血鬼、〝真祖〟ブラド―伯爵との戦いの記憶である。

神魔の支配力がこちらよりも遥かに強いあちらの世界で最強を誇ったという吸血鬼であり、彼の行った悪逆非道――中世ヨーロッパで流行したペストによる人口激減。その内少なくとも二回はブラド―伯爵の仕業だと言われている。

それを知り、レミリアの期待はそれはもう高まりに高まった。その姿はまるで遊園地に遊びに行く前日のお子ちゃまの様ですらあった。

そんなレミリアにお出しされたのが三分割された中世の世界地図――ＴＯ図――を背に世界征服宣言をするブラド―伯爵の雄々しいまでの勇姿。

更には普通に戦えばいいのにわざわざ息子のピートと噛み付き合戦を行い、無様にも敗北して息子の支配下に収まってしまうというお粗末な結果である。

ブラド―伯爵の基本スペックは非常に高い。魔力、眷属、使い魔――質・量共にレミリアですら未だ到達していない高みにあると言っていい。

惜しむらくはそれを十全に活かす為の頭がなかった。

――ブラド―伯爵はアホだったのだ。

自らの生き写しである息子を装って敵――美神一行――の数を減らしたのは良い。そこから更に横島が吸血鬼にされたのには少々複雑な感情が過ぎったが、まあそれも良い。むしろ手放しで褒め称えても良いだろう。

吸血鬼化した横島のスペックが非常に高かったのも素晴らしい。（小笠原エミはレミリアの眼中になかった）

何せ当時はただの一般人（？）に過ぎない横島が世界最高峰のゴーストスイーパーと真っ向から戦える程の超強化を施されたのだ。しかも自分が直接血を吸っていないにも拘らず、だ。

もっと言えば、吸血鬼となって一日と経っていないのにこの破格の強さなのである。大元の〝親〟であるブラド―伯爵が如何に頭抜けた吸血鬼であったか窺い知れるというものだ。

……故にレミリアの精神ダメージは極大だったのである。

「何で息子のピートと真っ向から噛み付きあっとんねん……しばき倒してから血ぃ吸えばええやんけ……普通に戦っとったら楽勝やったやろがい……」

「あ、あはははは……」

流石の美鈴も今のレミリアはどうする事も出来なかった。美鈴とてあれだけの戦力差がありながらあのような負け方をするとは思っていなかった。

「それにしても……何か今回の記憶は特に曖昧というか、ぼやけた感じの映像が多かったですね」
「あー、確かに。何だろう、結構前の記憶っぽいし、忘れかけてるのかな？」
「ブラドーとピートが噛み付き合ってる部分が特にぼやけてたな……って、あれ？　横島って別の場所に居たはずだよな……？」
「……そういえば」
　とりあえずレミリアは置いておいて、気になった部分を話し合う妹紅達。もしかしたらこの話題で復活するかも、という期待も込められている。
「……記憶の映像があって、それを見たから知ってるとかじゃない？　もしくは他の誰か……例えばカラスとかいう神父の記憶を見たか、それこそヒャクメが横島の頭に何かしたとか」
「あ、復活した」
　期待通りレミリアは妹紅達の話に食いついて復活を果たした。しかし鈍重な動きで「どっこらしょ」と起き上がるその様は、未だにダメージが抜けきっていない事を表している。
　さて、記憶の映像が曖昧でぼやけている事、本当は知りもしないはずの出来事の記憶を持っている事。これには一応理由がある。

まず一部曖昧でぼやけている部分であるが、これはてゐの予想通り忘れかけているのと、他に強く印象に残った記憶があるせいだ。

それは自分が吸血鬼化してしまった事、美神と戦った事、ブラド―がアホだった事など色々と挙げられる。

では、何故横島が見ていないはずのブラド―とピートの戦いの記憶を持っているがだが……こんな経験はないだろうか？

他人から聞いた出来事を頭に思い描くうち、いつしか自分が体験した出来事であると思い込んでしまった事が。

この記憶が横島にとってのそれである。

横島から見て当時のピートはいけ好かないスカした美形だ。その出自、バンパイア・ハーフである事を知ってもそれはマイナスではなく、女を落とすのに有効な設定であるなどと、とんでもない感想を抱いた。

そんなピートが全身ズタボロの歯形だらけ――もちろん顔面も――という姿を晒したのだ。横島は心の底から「ざまぁｗｗｗ」と思っただろう。

以降、ピートのこの醜態を思い返し、一人不気味にほくそ笑む事もあったほどだ。（そして警察に通報された）

横島の想像力は規格外である。ピートが無残な姿となる様を何度も思い描いた。自

分が美神と戦闘中――美化1，000パーセント――に、ピートは親父と噛み付き合戦――醜悪度1，000パーセント――に耽る、そんな光景を。頭に焼き付いてしまう程に何度も思い描いてきた。

――そんな横島が知ってしまった情報。

――『吸血とはセックスの隠喩である』――。

自分が思い描いていたあの光景は。何度も悦に浸ったあの光景は――親子の、超濃厚なホモセックスだった……？

結果、精神崩壊が起こる前に横島の防衛本能が働いた。

そう、ブラド―対ピートの戦いは忘れかけていたのではない。実際はその場に居なかったから曖昧だった訳でもない。

そう、あれは――アダルトビデオの様にボカシが入っていたのだ!!　それもギリギリモザイク級の!!

……頭から綺麗さっぱり消し去る事が出来れば、どれほど幸せであっただろうか。だが、それが出来る程横島は人間が出来ていなかった。過去の栄光（錯覚）を捨てる事が出来なかったのだ……!!

……それ故のボカシである。とりあえずピートは横島を殴っても許されるだろう。

「そんなことより、早く次の記憶の部屋を探しましょう。私のせいで余計な時間を使わ

せちゃったし」
「いえ、そんな。あれは仕方ないですよ」
横島にとっては重要な事なのであるが、他人からすれば〝そんなこと〟である。
誰しもが持っているはずだ。当人にとっては大切でも、他の人から見ればその理由が分からないもの。
他の誰でもない、自分自身にとって何よりも――――何よりも、裏切りたくない大切なもの。

「……けっこう記憶の部屋を見付けて来たけど、ヒャクメの言う〝穴〟は出て来ないな」
「そうだねー。まだ足りないのかな？」
それからも多くの記憶の部屋を辿った妹紅達だが、深層意識へ続く穴は未だに現れない。
現在一行は廊下を猛スピードで飛行している。現実世界と精神世界で時間の流れに違いがあるのかは分からないが、体感では既に数時間が経過している。
重要な記憶もその全てが再生される訳ではなく、特に印象深かったであろう一部分だけが再生されるのだ。
ほんの数分、あるいは十数分だろうか。それも降り積もれば山となる。更にはその記

憶に対して先のレミリアの様に無駄な時間を使ってしまう事もあった。
例えば斉天大聖孫悟空との修行の記憶。これには美鈴が未だかつて見た事のないテンションで大はしゃぎした。鈴仙の能力によって狂気に陥った時よりもハジケていた……と言えば、どれだけテンションが上がっていたか伝わるだろうか。
次に月での戦い。これは妹紅の反応が大きかった。
「うおぉっ!?　な、何だあの世界観がまるで違う様に見える美人は!?　……は？　かぐや？　かぐ、輝夜!?　あれが!!!?　ど、どうしたんだ輝夜!?　何でそんな思い切ったイメチェンを!!??」
「いやあの人は横島さんの世界の迦具夜姫ですってば!!」
「すっごい混乱してるね」
横島の記憶映像に現れた異世界の迦具夜姫の姿に妹紅は驚きの余り混乱してしまう。世界が違っても〝かぐや姫〟が絶世の美女である事を思い知ったせいもあるだろう。妹紅にとってかぐや姫――――輝夜の容姿は憧れであり、コンプレックスの象徴でもあるのだ。
「うーん、ジャンルは違うけどこっちの姫様もどえらい美人だなー。それにしてもこっちにはお師匠様はいないのかな？」
初めは迦具夜姫の美しさに目を奪われていたてゐであったが、その興味はすぐに別の

ものへと移り変わった。かぐや姫がいるのだから、永琳と同じ立ち位置の者もいるだろうと考えたのだ。

「それっぽいのは見当たらないけど……どことなく綿月姉妹っぽいのはいるみたいね」

てゐの言葉に応えたのはレミリアだ。彼女は迦具夜の傍に仕えている双子の姉妹――〝朧〟と〝神無〟に注目している。

容姿が似ている訳ではないが、二人の発する雰囲気がどことなく綿月姉妹を彷彿とさせる。

「そういえばここ暫く顔を見せないね、あの二人。色々と話を聞きたい事があるんだけど、また何か月でゴタゴタがあったのかな？」

「以前遊びに来た時に玉兎達を徹底的に鍛え直すって言ってたし、それじゃない？」

「あー」

月出の一件以来、綿月姉妹――綿月豊姫・綿月依姫――は時々地上へと遊びに来ている。

それは永琳と会う為であったり、鈴仙と会う為であったり、レミリアとのお茶会の為であったりと様々だ。

個人の私人としての付き合い、更には月と幻想郷の賢人同士、月の都と幻想郷の今後について賢者である紫達と話し合ったりと、意外と良好な関係を築いている。

時には「よっちゃん！　手合わせしましょう！」「誰がよっちゃんですか！」とレミリアと依姫が弾幕ごっこに興じたりもする。

しかし、ここ数か月間姉妹は地上に降りて来ていない。レミリアの言う通り玉兎達を鍛えているのか、それともまたぞろ月で異変でも起こってしまったのか。

少なくとも鈴仙は胃が痛くならないので大助かりだ。最近は横島との関係も微妙であるし、かつての飼い主にそういったところを見られたら色々な意味でたまったものではない。

レミリアはフッと短く息を吐き、記憶映像の方へと目を向ける。分からない事をいつまでも考えていても仕方がない。今は横島の記憶に集中する時だ。何せちょうど横島が活躍している。

横島と蛇女が熱いディープキスを――――。

「――――って、何でキス!?!」

全員の叫びが木霊した。

「……いやー、一大スペクタクルだったね」

「これが〝えすえふ〟ってやつなのかな」

「まさか宇宙から地上へ墜ちていくとは……いや、どこかで聞いた様な……？」

記憶映像が終了し、皆は疲れた様に息を吐き出した。大気圏でのメドーサとの最後の戦い。生身での大気圏突入。そして地表へと大激突。そこから映像が一瞬途切れてしまったが、次に映った時には何故か横島が縛られ、意味の分からない事を延々と喚いていた。内容から察するに、どうやら記憶を失っていたらしい。

「何で記憶を失うだけで済んでるんでしょうね？」

「それは……まあ、横島だし」

「横島さんですものねぇ……」

果たしてその返しは信頼の表れなのかどうか。何とも言い難い感覚を抱く。

「ただお兄様、前にも記憶喪失になってたんだね」

「ええ、今回みたいに深刻なものではなかったみたいだけど……本当に波乱万丈な人生を歩んでるわね、アイツ」

レミリアの言葉に皆が頷いた。

次に南部グループという企業との戦い。

いつの間にか生き返っていたおキヌと良い雰囲気になり、直後にその空気をぶっ壊した横島の言動、更には食人鬼女（グーラー）に『恋』の文珠を飲ませて自分に惚れさせたのには美鈴、小悪魔、フランの三人が怒った。

「流石に今のは酷いですね。ギルティです」
「そうですね。ギルティですよギルティ」
「後でお兄様にはお仕置きしないとだよね」
古代の神々、貴族・豪族のあれやこれやを知るてゐ、レミリア、妹紅は横島の言動に特に思う所はない。……レミリアの場合、フランが同じような目に遭えば横島を殺ってしまうかもしれないが。
この三人の場合、注目したのは文珠の効果である。
「なるほど……こういう使い方も出来るのね……」
「敵対組織のそれなりの立場の相手に使えばスパイ活動も破壊工作もやり放題。いやー、とんでもないねー。流石私の執事さん」
「効果範囲や時間制限はどんなもんなんだろうな？　……一回早苗に使ってみてほしい」
「いくら何でもそれはかわいそうでしょ。それに八坂神奈子がいる。またアイツに横島がミンチにされかねない」
「面白そうではあるけどねー」
やはり人を束ねる立場であるレミリアとてゐからすれば、こういった人心を操る能力は欲しいものである。

二人が浮かべている表情は笑顔であるのだが、その笑みの〝色〟はとっても黒く、そして邪悪である。

妹紅は妹紅で二人とは別の意味で黒い事を言う。別に早苗を苦しめようだとか嫌がらせしようだとか、そういった意図がある訳ではなく、単純に自分の好きな人が嫌われている（怯えられている）のが嫌なのだ。

なので手っ取り早く仲良くなってもらおうと提案した次第なのである。

「……効果はすぐに切れるんじゃないですか？」

話を聞いていたのか、小悪魔が妹紅に私見を述べる。

「ふむ。その心は？」

確かに、如何に文珠が強力とはいえ永遠に相手を縛り付ける事は不可能だろう。しかし文珠の強力さは小悪魔も知っている。それでなお効果はすぐに切れる言ったその理由とは、いったい何なのか。

「いくら文珠が凄いと言っても、グーラーさんが抱いたのは偽りの想い。私達の胸に宿る本当の愛とは強さも、熱さも、そして重さも違いますから!!」

小悪魔はキラキラと純粋に輝く瞳でとても恥ずかしい事を言った。

何故か天より降りかかりたる光を浴び、胸で手を組んで空を見上げる小悪魔の姿は魔族なのに聖女そのものである。

レミリアはあまりにもあまりなその内容に開いた口が塞がらなかったのだが、どうやら他の者には好評だったようだ。

「おぉーー！」

「そっかー……そういうものなんだなぁ……」

「うーん……嘘ばっかりの私が抱いた、ただ一つ本当の想い……いやー、いいねぇ。ロマンチックだねぇ」

「マジかこいつら……」

特に盛り上がっているのはフランだ。両手を上げてハイテンションで小悪魔と絡んでいる。

妹紅は色恋沙汰の経験が無かったせいか、小悪魔の言葉に感動を覚えた様だ。

てゐは逆に今までの自分を省みて、他者を、そして自分を偽った過去を思い出し、自らの想いを反芻している。

美鈴は特に何かある訳ではない。ただ目を瞑ってだらしのない笑みを浮かべ、涎を垂らしながらぐふぐふ言っているだけだ。極力視界には入れたくない。

「あー……うん、そうね。――――ん？　映像に動きがあるわよ」

考えるのも馬鹿らしいと適当に相槌を打っていたら、いつの間にか映像の中で横島達は強力な魔族〝ガルーダ〟と対峙していた。

隙の無い構え、無駄の無い体捌き……美鈴の目がキラリと光る。
「むむっ、截拳道（ジークンドー）ですか。これは中々の功夫（クンフー）……いや、でも……う～ん……？」
「どうしたの、そんなに唸っちゃって？」
映像の中のガルーダを見やり、美鈴はその違和感に首を傾げる。てゐはそんな美鈴に何が気になるのかを問うた。
「いえ、あのガルーダなのですが……かなりの功夫の持ち主なのですが、どうもチグハグというか……」
「チグハグ？」
「はい。頭と身体が一致していないというか……んー、何と言えばいいでしょうか……」
どうも言葉にするのが難しいらしく、美鈴は必死に言葉を探している。
「頭と身体が、ねぇ。達人によくある本能だけでとか、反射に任せてとか……要するに考える前に身体が動いてる状態じゃないの？」
「いえ、というよりは功夫のわりに慣れていないような……――――あ、グーラーさんが」
「え？」
美鈴に視線が集まっていたが、その美鈴の言葉に釣られるままに映像に目をやると、グーラーがガルーダにその身を吹き飛ばされた場面であった。

そこからはまるでジェットコースターの様に展開が進む。

皆が「あ」と言った次の瞬間、横島がグーラーを即座に治療。身体もろとも霊基構造を吹き飛ばされた為か、文珠と南部グループの精神支配から抜け出したグーラーは横島達にガルーダをけしかけていた男女――妹紅達は名前を憶えていない――へと攻撃。

グーラーの攻撃はシールドによって阻まれるが、それはガルーダを誘導する為の罠だった。ガルーダがグーラーへと仕掛けた攻撃は躱されシールドへと命中し、そのまま突き破る。

その衝撃によりガルーダを制御していたコンピューターが破損。それによりガルーダは暴走してしまう。

狂乱したガルーダに男が殺されてしまうも、グーラーやガルーダのヒヨコ達と力を合わせ、遂にガルーダを討ち滅ぼした。

「あの小さい鳥さん可愛いね！　紅魔館でも飼えないかな!?　大きくなってもスタイリッシュでカッコいいし!!」

「うーん、まず見付けるところから始めないとだから難しいんじゃないかな。……それにしても〝人造魔族〟かぁ……。あっちはあっちで色々あるんだねぇ」

横島達とガルーダの戦い、そしてガルーダのヒヨコの可愛さに注目していたフランは興奮した様子で感想を述べる。どうもガルーダをペットとして飼いたくなった様だ。

一方フランと話すてゐの顔は複雑そうに歪んでいる。
神魔や妖怪といった存在が当たり前に人々に認知されている世界でも、一部の者達はその存在を〝こちら〟の世界以上に変質・利用されている。否、この場合は認知されているが故か。だからこそこの様に秘密裏ながらも大規模に研究されているのである。
「ふむ。ガルーダの動きに違和感があったのはこの為ですか。恐らくは生み出された際に武術の動きを刷り込まれたのでしょう。
時を費やし、己の力で積み上げた功夫ではなく、いきなり入力された技術だった。だからチグハグだったのですね」
「んー、そういうのが分かるってやっぱ達人は凄いな。私は全然分からなかった」
美鈴は違和感の正体が分かってスッキリしたのか、満足そうな笑みを浮かべて頻りに頷いている。隣で解説を聞いていた妹紅は美鈴の達人としての目に感心しきりだ。
「……しかし、凄いと言えばやっぱり横島の文珠は反則だよな。紫を治した時もそうだけど、あれだけの傷を一瞬で治すなんて」
「確かに。流石は龍神の能力と同一の力といったところね」
妹紅の言葉にレミリアが頷いた。肉体の破損だけでなく、霊基の破損すらも一瞬で回復させた。
あまりにも強力で、あまりにも万能な力、〝文珠〟。あちらの世界でさえ希少なその

奇跡。もし横島の能力が多くの人々に知れ渡りでもすれば……。

嫌な想像にレミリアは眉間に皺を寄せる。

――――この敵対組織……南部グループとか言ったっけ。こいつらは文珠の事を知っていたのかしら。横島への対応からして知らなかったみたいだけど……もし知ってあの対応なら余程文珠の力を軽視していたか、それとも自分達の商品にそれだけの自信があったのか……。

「……ふん」

どちらにせよ、お粗末なものだ。レミリアは嘲笑う。

あまりにも無様が過ぎる。人質に取ったとはいえ、横島に何の制限も設けないなど愚の骨頂だ。例え文珠が使えないとしても、最も警戒すべきは横島だというのに――――。

「……いや、いくら何でも身内贔屓が過ぎるわね」

「ん？　贔屓がどうしたって？」

「いえ、何でも。それにしてもグーラーは意外とあっさり正気に戻ったわね。……いや、身体も霊基も吹き飛んだわけだからあっさりじゃないか」

自らの思考の偏り具合を自覚したレミリアは苦笑を浮かべる。妹紅に独り言を聞かれていたが、それを誤魔化す様に別の話を切り出した。

「ああ、確かに。強いショックを受けたから、とかかな？」
「叩けば治る！　って感じですか。……横島さんもそうであればどれだけ良かったでしょうか」
「まあ蓬莱人なわけだしいくらでも強いショックは与え放題よね。すぐに生き返るんだし」
「待て待て待て待て」
照れ隠しでもある為か、レミリアの発言は過激だ。下手をすれば死んでしまう様な強いショックを与え続けるなどただの拷問である。流石にそれは看過出来ないと、皆はレミリアにツッコミを入れる。
その横で何やら難しい顔をしていた小悪魔がぼそりと呟いた。
「うーん、どうせ洗脳が解けるなら、前後にもうちょっとこう恋愛漫画みたいなドラマチック且つロマンチックな展開があれば良かったんですけど……」
「洗脳って言っちゃったよ」
紅魔館の恋愛脳（スイーツ）の一人である小悪魔。どうやら彼女は現実にも漫画の様な展開を求める漫画脳でもあったらしい。例え目の前の現実がどれだけ漫画的であったとしても、漫画の様な日常を送っている幻想郷の住人である小悪魔からすれば、少々物足りないのだ。

「――――ん。映像も終わったか。次の部屋を探しましょう」
「はい」
記憶の再生が終了し、皆は部屋を後にする。多くの記憶の部屋を発見してきたが、一向に深層意識への穴は出現しない。恋人達の顔に少々焦りが滲みだした。
レミリアはそんな彼女達を横目に一人考えを巡らせる。
――――何だろう。何か、違和感がある様な……。
今まで目にしてきた横島の記憶達。確かにそれは彼にとって重要な、横島を横島たらしめる多くの要素が存在していた。
だが、何かが足りない様にも思える。
それは当たり前のものであり、そしてとても大切なもの。横島が横島であるならば、絶対になくてはならないもの。
その答えにレミリアが行き着いた瞬間、全員が飛行を止め、床に降りた。
「……何だ？」
妹紅が目を瞬かせ、辺りをキョロキョロと見やる。
突如全員に走った奇妙な感覚。胸がざわつく様な、チリチリと焦がれる様な。その感覚には皆覚えがあった。
「あ、あそこ」

フランが指を差す。廊下の先、二つに分かれた向こう側。片方には今まで見付けてきた記憶の部屋と同じく横島の霊力光と同色の翡翠の光を放つ扉が。

そしてもう一方には今までの記憶の部屋と比べても酷く弱々しい――――まるで蛍火の様に青白く儚い光を放つ扉があった。

皆は目を見合わせる。少しの間無言で視線を交わし合うとゆっくりと頷き合い、一つの扉を目指す。

――――淡い、蛍火の扉を。

扉の前に立つ。どこかおかしな印象を受ける。扉が放つ光だけではない。言わばこの部屋、この一画の雰囲気が今までとまるで違う。

ここは横島の精神世界だというのに、まるで別人の精神世界に入り込んでしまったかの様な違和感。

よくよく見れば壁紙の模様も扉の色、形、装飾も違う。

「――――……」

レミリアには心当たりがあった。

「……開けるぞ？」

妹紅がドアノブを掴み、皆に確認を取る。フランが、美鈴が、小悪魔が、てゐが頷く。

そしてレミリアは――――。

「全員、気を引き締めなさい」

レミリアは静かにそう告げ、注意を促す。

「お姉様？」

皆の目がレミリアに集まる。

「ヒャクメの言ってたこと、憶えてるでしょう？」

横島の記憶を取り戻す際、その時の横島の思い、感情が流れ込んでくる事があるとヒャクメは言った。だが、今現在まで流れ込んで来たものは精神体のレミリア達に害を及ぼさないであろう記憶、そしてその時の横島が感じた興奮、高揚感といったものばかりだ。そのせいで次の行動に移るのに時間が掛かったりもした訳であるが、それは今は関係が無い。

『その時』に自分は『こう思った』という記憶が流れ込んで来ても、その時々に懐いた激しい負の感情が流れ込んで来た事は一度もなかった。

小心者の横島は記憶の中でも何度も死への恐怖を感じている。それは生物が持つ感情の中でも最も強い感情の一つだろう。それすらも流れない。

ヒャクメが大袈裟に言ったのか、横島が無意識に守ってくれているのか、はたまた別の要因か。それは分からない。

しかし、もしこの部屋がレミリアの予想通りの部屋ならば、今までとは違い強烈な感情が流れてくる可能性がある。
「あくまで予想だけど……心を強く持ちなさい」
「……」
レミリアの言葉に皆は声が出なかった。その内容に納得する一方で、同時に疑問も浮かんできたのである。
「その……レミリアは……」
躊躇いがちに妹紅が問う。
「レミリアは知ってるのか？　横島の……その、何か……を？」
その問いにレミリアは目を伏せて答える。
「ええ。以前、ちょっとした機会があってね。……それを、あなた達もこれから知る事になるでしょうけど」
「……」
皆は一言も発さない。緊張からか生唾を飲み込み、視線を交わし合う。しかし目を閉じ、大きく息を吸い、そして吐く。次に目を開いた時、その目に宿っていたのは決意と覚悟だ。
「今こうしてても仕方がない。横島を助ける為にここまで来たんだ。どんな事が待ち受

けてようと、私達なら大丈夫さ」

皆を代表し、妹紅がそう言い切る。ここに横島を助ける為の何かがあるのかもしれない。ならば迷う事など何もないのだ。

「……そうだったわね。ごめん、私の方が怖がってたみたい」

レミリアは短く息を吐き、皆に軽く頭を下げる。それを皆は笑って許した。レミリアは己が可愛いのではなく自分達を思いやってくれていたが為に慎重になっている。それを理解しているからだ。

「……じゃあ、行こう」

妹紅が宣言し、皆は頷く。ゆっくりと、扉は開かれた。

「……何もない？」

果たして、中の部屋には家具も調度品も何もない、ただ空白が広がっていた。ただ室内であると認識は出来る、そんな空っぽの部屋。

皆は部屋の中央に集まり、思い思いに室内を見やる。何もない。それは変わりようがなかったが。

背後で扉が閉まる音がする。その瞬間、記憶の再生が始まった。

「……？　何だ、これ……？」

夜、なのだろう。空の暗さからそれは分かる。しかし映像が酷く乱れている。所々で

ノイズが走り、音すらもまともに聞こえてはこない。時折響く大きな音。それは爆音だ。小さく、遠くから多くの人の悲鳴のようなものも聞こえてくる。

暗い夜空、地に走る爆炎、大気に響く爆音。そしてじわじわと立ち昇る人々の悲鳴。それらがノイズ越しに繰り広げられている。

――――それは、地上に現われた地獄だった。

「……」

皆、声も出ない。本当にこれは横島の記憶なのか。そのような思いが場を支配する。

「……これが、魔神アシュタロスとの……」

レミリアが誰に聞かせるでもなく呟いた。横島から聞いた話の一つ、アシュタロスとの戦い。この地獄こそがそうなのだろう。

『――――、……。――……――……』

何かが聞こえてくる。酷いノイズに阻まれたそれは、横島ではない他の誰かの想いである。

『一緒――こで夕陽――たね、ヨコ――……。昼と夜――瞬――――ま――――短――間しか――れな――ら……きれ――……』

ぶつん、と。そこで映像は終わった。誰かの声が聞こえてきたが、それまでだった。何の想いも、感情も、記憶すらも妹紅達には流れ込んではこなかった。

そして再び空っぽの部屋に戻る。否、先程までとは違うものがそこにはあった。

「……予想は外れたか。でも、ここまで外れるとはね」

呟くレミリアの視線の先。皆も目が釘付けになっているその存在。皆の目の前には、横島の深層意識へと繋がる穴が出現していた――――。

第八十七話

『その記憶は誰のものか』

～了～

☆おまけ☆

横島と恋人になった事により生じた皆の変化

妹紅　横島を全肯定する様になってきている。かつては輝夜の存在に依存心を抱いていたが、今はそれもやや薄れ、その分横島に強烈な依存心を抱きつつある。

ヤンデレとはまた違うジャンル……のはず。

まだ潜伏期間……？

フラン　今までの孤独を埋める様に、横島に対してかなりの甘えん坊と化す。とにかくくっつきたがり、よく背中に抱き着いている。
レミリアに対しても甘える様になるが、横島と比べて遠慮しがち。
美鈴　露出が減り、接触も減る。しかし修行中に「ご褒美です♪」などと言って胸の谷間を至近から見せつけたり、下着をちらりするようになる。
むっつりからオープンに変化しつつある。（今更感が強い）
てゐ　フランと同様によく横島にくっついている。横島とヤるぞ！　と意気込んでも最近は少し触れ合ったり言葉を交わしたりで満足感を得る様になってきた。
もし横島に抱かれたら心臓が破裂してしまうかも知れない。（ある意味弱体化？）
小悪魔　横島に対して個人的にしたためてきた『恋人にしたい・されたい１００の触れ合い』を実践していく。
皆より一歩引いた距離を取っており、傍目には今までとそれほど違いは見られない。
しかし小悪魔が感じる高揚感・充足感・幸福感等が今までとは比較にならないレベルに高まっている。

第八十八話

目の前に突如として空いた、横島の深層意識へと通じる穴。
何故今までと毛色が違い過ぎるこの部屋にこれがあるのか、レミリア達には分からない。
しかし、目的の物が見つかったのならばやる事は一つ。皆は目を見合わせ頷き合うと、その穴に飛び込んでいく。
まるで水の中に入るかの様な感覚。六人は横島の意識の中へ沈んでいく。
六人が穴の中に入り終わると同時、その穴は消えた。
――――否。部屋そのものが消失した。まるでそこには初めから何も無かったかの様に、何の痕跡も残さずにその部屋は消えた。
深い深い水底の様に、一切の光も差し込まない世界。それは深淵の闇。
まるで深海の様に暗く、静かなその世界に六人はゆっくりと沈んでいく。
底の無い奈落の穴に落ちていくかの様な感覚。しかし、それにも終わりは存在してい

た。最深部に到達したのだ。
「ここが……横島の深層意識、か」
何も無い。辺り一面真っ暗闇だ。
「……ふむ」
皆も何か無いか周囲を見回し、レミリアは何となしに上部に視線を向けてみた。そこに何かが見えた気がした。
それを形容するならば『つぎはぎの空』とでも言えばいいだろうか。
レミリアの見つめる先、心の外殻とも言えるそれ。まるで割れたガラスを接着剤で無理に修復したかの様な歪さを感じる。
――――いえ、そもそも……。
その『つぎはぎ』は本当に外殻だけのものなのか。もしかしたら目の前の闇、否、それどころか今まで見て来たものすべてにそれはあったのかもしれない。
ちらり、とレミリアは横を見る。その視線の先には妹紅がいる。それが見えているのか、それとも何かを感じただけなのか。妹紅はじっと空を見上げている。不安に揺れる心を守る様に、胸元に手を当てながら。
「それにしても……本当に何も見えませんね」
「うん。でも真っ暗なのに私達はお互いに見えてるんだよね。何か不思議」

「おお、言われてみれば確かに」
「私達の身体が光ってるわけでもありませんしね」
キョロキョロと頻りに辺りを見回す小悪魔にフランが疑問を呈した。その疑問にてゐがポンと手を打つと、小悪魔やフランの周りをくるくると回りだす。何かを検証している様だが二人には何がしたいのかよく分からず、頭に疑問符を浮かべるしかない。
一方美鈴も自分の手や身体を見たり触ったりと、色々と確認をしていく。こちらは大変分かりやすい。
「……ふーん？」
そういった四人の話を聞き、レミリアの頭に一つの閃きが走った。
その内容は『実はこの場所は暗いわけではないのではないか』というものだ。
この場所にも光が降り注いでおり、様々な物を照らし出しているのだが、この場に存在する色は眼前の黒というか闇というか、その一色だけしか無いのである。
そんな場所にそれ以外の色を持った自分達が現れた。だから自分達には闇の中にいる様に見える。そんな益体の無い想像だ。
「……だからどうしたって話よね」
レミリアは短く息を吐いた。
「どうかしたの、お姉様？」

その小さな溜め息を耳ざとく聞きつけたのか、フランがレミリアに近付く。何となく先程の想像を知られる事が気恥ずかしく、レミリアは何でもない様に手を振った。
「ああ、いや。別に何でもな――――」
その瞬間、フランの背後に小さな灯りが現れた。
「フラン、後ろ」
「え？」
レミリアに指摘され、フランは後ろを振り返る。その灯火――――淡い蛍火はどんどんと数を増やし、やがて人の形を作りだした。
それは女性の姿をしている。黒いショートボブの髪。儚げながらも整った美しい顔立ち。ただ、その女性は少々奇抜な格好をしていた。
何らかの機能を有しているだろう機械のバイザーを額に装着しており、身に纏うのは身体のラインが浮かぶぴっちりとしたボディスーツ。装飾なのか腰元には蛍の羽の様な形状のマントが付いている。
「お前は……」
レミリア達の前に現われたその女性は、まるで眠っているかの様に目を閉じている。
今まで見た事も会った事も話した事もないその女性を、しかし、レミリアは確かに知っていた。

以前さとりが紅魔館に訪れた際に聞いた、とある女性の話。横島を愛し、横島を守る為にその命を散らした女性。

「そうか、お前が――――ルシオラか……」

そう、その蛍火の女性の名は〝ルシオラ〟。かつて、横島の恋人だった女性である。

第八十八話

『抱える闇』

レミリアの言葉に応える様にルシオラは目を開ける。レミリア達を見つめるその瞳には、何も映していない様に思える程、静かな所作。

あまりにも静かなその雰囲気に、自我や自意識といったものが存在していないのではないかとすら思える。

「……」

皆は動かず、ルシオラの動きに注視する。自分達の前に現われたのならば、当然それには何らかの意味があるはずだ。

「……」

ふと、ルシオラは皆から視線を外し、背中を向けてどこかへと歩き始める。かと思えば数歩進んだだけで止まり、振り返って再び皆に視線を向ける。

ルシオラはそれを二回、三回と続けた。ここまで来ればその意図も理解出来る。

「ついて来い……って事でしょうね」

美鈴の言葉に皆は頷く。自分達をどこに連れて行こうとしているのか。良き未来に繋がるのか、それとも悪しき未来に繋がるか。

それを確かめる為にも、今は前に進む時である。皆はルシオラに続き、歩き始めた。

「……ねえ、お姉様」

「んー？」

ルシオラの後ろについて行くこと数分、フランがレミリアに声を掛けた。

「さっきは聞ける雰囲気じゃなかったから黙ってたけど……ルシオラっていうのはあの人の名前なんだよね？　どんな人……っていうか、何でお姉様が知ってるの？　あと何でここに居るの？」

「……あー、そういえばアンタらはアイツを知らないんだっけ？」

ポリポリと頭を掻きつつレミリアが皆に目を向ければ、全員が頷いた。尤も、美鈴や

てゐといった聡い者達は大体の予想が付いている様ではあるが。

「んー、どう説明したらいいのか……。とりあえずアイツの名前は〝ルシオラ〟。向こうの世界で横島の恋人だった女よ」

「え……っ!?」

ルシオラの背中を指差しながら、レミリアは答えた。フランと小悪魔はかなり驚いた様であるが、美鈴とてゐは「やはり」と頷いている。

「ほら、例のパーティーの後で横島から色々と話を聞いた事があったでしょう？　あの時に話してくれた蛍の化身ってのがあのルシオラなの」

「そうだったんだ……」

目を真ん丸と見開き、フランはルシオラを見つめる。横島からあの話を聞いた時は思わず泣いてしまったものだが、その本人が目の前に居る、と言われても実感が余り湧いてこない。

「それで何でここに居るのかだけど……正直、私にもはっきりとした事は何も言えない。思い当たるものはいくつかあるけど……どれもしっくり来ないというか何というか……」

腕を組み、レミリアは唸る。ちらりと空を見上げると、そこには変わらずつぎはぎが見える。

そのつぎはぎの接着面――――線に見えるその場所とルシオラを形作った蛍火の色は同じものに見えた。

さとりから横島とルシオラについて詳しく聞いているレミリアはいくつかの推測を立てる事は出来る。だが、どれも何となくしっくりと来ない。

安楽椅子探偵を自称する程度には洞察力、推理力に自信のあるレミリアであるが、流石に今の状況でまるで確信の無い推理を披露する気にはなれなかった。

何より横島の恋人達は直情的な者が多い。永遠亭に於いても裏で色々と暗躍している節のあるてゐですら横島が絡むとポンコツになるのだ。

ここで余計な事を言い、それが正しいと思い込まれてしまうのは非常にまずい。それに囚われて咄嗟に動く事が出来なくなっても困る。

皆には考える事を止めないでもらいたいのだ。

「……」

ちらりとレミリアは妹紅を見やる。

考える、という事については今この場で最も頭を働かせているのはレミリアと妹紅だろう。

妹紅は先程から一言も声を発していない。ただルシオラの背中をじっと見つめている。横島とのラインはまだ復活していないはずだが、それでも何かを感じ取っているの

か。

「……ん？」

ルシオラが歩みを止める。当然皆も止まり、そして気付く。ルシオラの目の前の空間には、何か壁の様な物がある事に。

「見えない壁……？　いえ、違いますね。壁というよりは何か膜の様な……？」

「結界みたいな物でしょうか……？」

美鈴は目を凝らしてそれの正体を探り、小悪魔はその知識から類似する物を挙げる。少なくとも二人はそれを『行く手を阻む物である』と認識した様だ。

「もしかしたらこの中に執事さんを元に戻す為の何かがあるのかも……!?」

「じゃあこれはそれを守る為の物って可能性もあるんだね」

一方でてゐとフランはこれを何かを隠す、あるいは守る為の物だと感じた様だ。

「……」

ルシオラが壁の様な物にそっと手を翳す。すると、まるで弁が開くかの様に通り穴が出来、それを悠々と通っていった。

「おお……！」

驚きの声が上がる。ルシオラは数歩程進むと足を止め、また皆を振り返る。来い、という意思表示だ。

皆は警戒しながらも通り穴を抜ける。始めに美鈴と小悪魔、次にてゐとフラン、そして最後に妹紅とレミリアだ。
穴を抜けた先も同じく闇の世界。レミリアの背後で穴が閉じる気配がした。――――
――瞬間。
「……っ!?」
この暗闇の世界が突如として色彩を放ったのだ。
――――それは記憶。
横島の記憶がまるで曼荼羅の様に、万華鏡の様に映し出されている。
その圧倒的な光景に皆は驚き、足を止めて見入ってしまう。見れば見るほど、そして知れば知るほど皆の胸にある想いがどんどんと湧き上がってくる。
「……みんな、分かってるわね？」
固く拳を握りながら、レミリアが問う。
「ああ――――必ず、横島を連れて帰ろう」
問いには妹紅が皆を代表して答えた。レミリアは妹紅、そしてフラン達を見やる。
皆の目から伝わってくる。どうやら思いは一つの様だ。
「それじゃあ行きましょうか。きっとこの先に」
「ああ。この先に――――横島が、居る」

理由は定かではない。だが、確かにそう感じた。この場所、恐らくは中心点。そこに横島が居る。

一行は横島の記憶を心に刻みながら歩を進める。そして、やがて辿り着いた場所にそれはあった。

どこかで見覚えがある場所。それは当然だろう。そこはこの深層意識へと通じる穴が出現した部屋で見た場所だ。

あの部屋の記憶で見た、何らかの施設と思しき場所。そこに背を預けて座り込む、執事服を着た横島の姿があった。

「横島……！」

「ただお兄様！」

「執事さん！」

横島の姿を見た瞬間、フランとてゐが飛び出し、ここまで案内をしてくれたルシオラを追い抜いて駆ける。その後ろに小悪魔と美鈴、そして妹紅とレミリアが続く。

六人が駆け寄っても横島は反応を示さない。そのあまりにも静かな様子は嫌な想像を掻き立てられるには充分だ。

「お、お兄様……？」

フランが恐る恐る横島の肩を揺する。横島はそれでも動かず――――否、揺すられた

が故に壁に沿ってゆっくりとその身体を横たわらせていく。
「横島さん!!」
倒れゆく横島の身体を小悪魔が受け止め、自らの膝に横島の頭を置く。
背筋が凍る様な感覚に、皆は横島に殺到する。この精神世界がどの様にして成り立っているのかは分からないが、それでも主たる者がこの場に居り、もしその者が生きていなかったら――それは、精神の死である。
「……横島、さん……？」
美鈴が震える手で横島の口許に触れる。もし息をしていなかったら――。
「――ＺＺＺｚｚｚ……」
「……」
ちゃんと呼吸をしている。というか大きくはないがいびきをかいている。どうやら横島の精神は眠りに就いているだけの様だ。
「……よ、良かったぁ……」
フランの言葉を皮切りに皆が大きく息を吐く。とりあえずは一安心といったところか。
「とはいえ、厄介な情態なのは変わらないか。多分この横島を起こせばいいと思うんだけど……普通にやって起きる……の、かな？」

腕を組み、レミリアが疑問を呈した。
「どう……なんでしょうね？　今も少し騒がしくしてますけど起きる様子はありませんし」
小悪魔の膝上の横島の顔を覗き込むが、変わらず寝息を立て続けている。頬をムニムニと触っても効果はない。
「……殴れば起きるかしら？」
「それは最終手段でお願いします」
とりあえず、といった感じで暴力的な提案をするレミリアを、美鈴が宥める。
「もっといい方法があります。横島さんも大喜び間違いなし、かつ私達も大満足なロマンチックな方法が……！」
と、ここで小悪魔が自信満々に声を上げる。
その言葉、このシチュエーション。答えに行き着いた皆がハッと息を呑む。
「そう――――王子様ならぬ、『お姫様の目覚めのキス』、です！」
「おお……!!」
皆が感嘆の息を上げる。
「た、確かにその方法なら横島さんも起きてくれそうですね……！」
「定番中の定番……！　ダメなパターンも多いけど執事さんなら……！」

小悪魔、そして美鈴とてゐの三人は成功を確信した。何せ横島は煩悩の塊の様な男だ。これで目覚めないならそれは最早横島ではない別の何かなのではないだろうか。そう思わせる程の男なのである。

「……では、誰がするかですけど」

「私っ!!　……と、言いたいところだけどねー」

小悪魔の言葉にてゐが真っ先に手を上げる……が、すぐにその手を下ろし、とある人物に視線を送る。

それはてゐ一人ではなく、その人物以外の全員だ。

「……私？」

皆に注目され、少したじろぎながら己を指差すのは妹紅だ。

「やっぱり本命はパスが繋がってる妹紅だからね」

代表して答えるてゐに皆が頷く。誰も異論は無い様だ。

「……」

皆からの視線を受け、妹紅は改めて横島を見やる。

小悪魔の膝の上の彼は相変わらず安らかな寝息を立てている。こうして近くにいても断絶しているパスに変化はない。

もし口付けを交わして何も変化が無かったら……そう考えると恐怖が鎌首をもたげ、

身体の自由を奪ってくる。――――しかし。

「横島……」

そんな程度では妹紅は止まらなかった。妹紅は小悪魔の――――横島の膝を着き、身を乗り出す。

まだ少年らしいあどけなさを残す寝顔。その頬に触れる。

早く起きて、その目で自分を見てほしい。その声で名前を呼んでほしい。その手で触れてほしい。その腕で抱き締めてほしい。

頭に思い浮かぶのは自分の事ばかりでどうにも自己嫌悪が尽きない。しかしこうも思う。それはお互い様なのだ、と。

横島という男は妹紅(じぶん)のこの思いを当然の様に受け入れるだろう。そして自分もそうであると言い、同じ事をしてあげればそれこそ妹紅(じぶん)よりもずっと喜びを露にするだろう。

それを互いに嬉しく思える。だから妹紅(わたし)は――――私達は、横島と恋人になれたのだ。

「……」

自分と、そして皆の想いも伝える様に、妹紅は覆い被さる様にして横島と唇を重ねる。

鼻先がくっついてしまいそうな、自分達らしい不器用な形で。

口付けを交わすこと数秒。まるで時間が止まったと錯覚してしまうほどに長く感じた数秒間が終わる。

妹紅が唇を離す。と、胸に何か温かな火が灯った様な感覚を得た。思わず力が抜けて座り込む。

「……妹紅？」

周りの声にも反応出来ない。今、妹紅の胸中には激しい歓喜が湧き上がっていた。

――――知らず、涙が零れる。

「……また、繋がった」

「それって……！」

「また、横島とパスが繋がった……！」

ぼろぼろと涙を流し、顔をくしゃくしゃに歪めながらも妹紅はそう言った。瞬間、恋人達から歓声が上がる。皆自分の事の様に喜び、妹紅に祝いの言葉を掛けていく。

「やりましたね妹紅さん！」

「良がっだでずねぇ……！」

「おめでとぉー！」

「うわぁっ!?」

美鈴は妹紅の手を取り、小悪魔は涙を流し、そしてフランは横から妹紅にダイブした。

地面（の様な何か）に座り込み、美鈴に手を取られていた妹紅にそれを避ける事は出来ず、フランの強烈なタックルを脇腹に受けて倒れてしまう。
ちなみに美鈴はさっさと退避している。
「痛ってて……何すんだよフラ――――」
たまらず文句を言う妹紅だが、それも途中で止まってしまう。
「……うぅ～」
自分に抱き着いているフランが震えているからだ。震えながらも自分に強くしがみつき、何か言葉とも嗚咽ともつかない声を発して胸に頭を擦り付けてくる。どうにも感情を処理し切れていないらしい。
妹紅はフランの頭を優しく撫で、落ち着きを取り戻すまで待つ事にする。
「……ふぅー」
妹紅達の様子を確認し、レミリアは長く深い息を吐く。
「まずは一安心といったところかな？」
「そうね。……一先ず、ね」
横島の元から離れ、隣に座り込むてゐからの問いに答えつつ、レミリアはてゐに訝しげな目を向ける。
「……で、アンタは何してんの？　何でこっちに来たのよ？」

「いやぁ。安心したら腰が抜けちゃってさ。今骨盤の仙骨の位置調整を頑張ってるところ」
「私、そっちの意味で腰を抜かした奴を見るのは初めてだわ」
もちろん冗談である。てゐは直情的で暴走しやすい横島の恋人達の中で『最も理性的な者』であると自認している。（笑いどころ）
皆が喜びに沸いている今こそ冷静であるべきなのだ。
「妹紅と執事さんのパスが復活したのは喜ばしいんだけど」
「ええ。――――どうして目を覚まさないのかしら」
問題はそこだ。
レミリア達は横島の記憶を取り戻す為に精神世界の記憶の部屋を開放してきた。そうして今はこの深層意識にまで来る事に成功している。
その中で恐らくは主人格と思しき横島を見付け、妹紅とのパスも復活した。だが、まだ横島は目覚めない。
「……何かが足りないのかしら？」
だとすればそれは何か。レミリアは思考を巡らせる。と、そうしていると隣のてゐが徐に立ち上がり、真剣な表情でこう言った。
「きっとエッチな刺激が足りないんだよ」

「はぁ？」

レミリアの底冷えするような声も無視してておは続ける。

「だって執事さんだよ？　このまま寝たふりを続ければもといっぱいエッチな事をしてもらえるかもとか考えてそうじゃんか」

「それは……まあ、うん」

レミリアは賃上げで横島が心肺停止状態に陥った時の事を思い出し、その妄言を咄嗟に否定する事が出来なかった。

あの時は自分（レミリア）と咲夜であったからキス待ちをしていたが、現在彼の周囲には恋人達が居る。あの時以上のものを待ち望んで寝たふりをしている、と言われたら納得せざるを得ない。

「そんなわけで今から私がめっちゃディープなちゅーをしてあげるからねー！」

「そこでディープキスどまりなのか」

微妙にヘタレつつ、てゐが小走りで横島に覆い被さろうと――――した、瞬間。

「っ!?」

てゐ目掛け、強力な霊気の塊が撃ち出された。

「美鈴!!」

鋭い声でレミリアが叫ぶ。その時既に美鈴はてゐを庇う為に立ち、構えを取ってい

た。
　突き出していた左手に霊気塊が触れる。勢いをそのままに、威力をそのままに、ただ流れを変える。受け流された霊気塊はあらぬ方向へと飛んで行く。
　左手を頭上に、右手を前に。それは先の構えと対照的なものだった。
　霊気塊が遠くの地面に着弾し、同時に爆発。すると、横島の身体がびくんと跳ね、苦しげな声を漏らした。
「横島さん!?」
「そうか、ここは横島の精神世界！　それに傷が付くという事は……!!」
　今この場において、横島を害そうとする者は一人もいない。誰もが皆横島を想っている。
「……一体何のつもりだ?」
　レミリアは先の攻撃の主を睨む。その者は答えない。表情を変えず、ただじっとレミリアと妹紅達横島の恋人達を見つめている。
「何のつもりかと聞いているんだ……」
　じわり、とレミリアの身体から魔力が漏れ出す。レミリアだけではない。妹紅達からも力が放出されていく。
「さっさと答えろ――――ルシオラァッ!!!」

ルシオラは答えない。レミリア達からは視線を外し、ただじっと横たわる横島を見つめている。

それに対し、即座に行動に移ったのは二人。レミリアと美鈴がルシオラと相対する様に前に出る。

ここに来てルシオラがようやく反応を示す。その身から霊力が滲みだしたのだ。――瞬間、美鈴は活歩によってルシオラの懐に飛び込んでいた。

繰り出すは崩拳。外しようのないタイミング。絶対に当たると確信したその拳はしかし、躱された。否、防がれたのだ。

「――――っ」

突き出された右の拳を左手で外から内に逸らし、その勢いを利用して回転、美鈴の顔面目掛けて強烈な裏拳を放つ。

「な……っ!?」

何とか拳を引き戻してガードに成功したが、美鈴の心には強い動揺が走る。それを振り払うかの様に拳を、蹴りを放つが、その悉くが躱され、受けられ、逸らされた。

「美鈴、何をやって――――っ?」

今の美鈴の動きは明らかに精彩を欠いている。その様子に苛立ちを抑えられないレミリアは美鈴を叱責しようと声を上げるが、すぐに美鈴の様子が尋常でない事に気が付

いた。
　顔だ。目まぐるしく立ち位置の変わる攻防、それが続く中で、どんどん、どんどんと美鈴の表情が歪んでいく。
　それは不安や絶望に近い色をしていた。
「めーりん……？」
「ちょ、ちょっとヤバくないかなこれ」
　フランやてゐも美鈴の様子に気付いたらしく加勢に行こうとするが、レミリアが腕を広げ、それ以上前に出られずに抑えられた。
「お姉様……!?」
「レミリア、何を……!?」
　二人から抗議の声が出るが、レミリアはそれを完全に無視する。あと少しで何かが分かりそうなのだ。
「……っ！」
　ギシギシと奥歯が音を立てる。美鈴の心は目の前の現実を受け止める事が出来ず、否定の言葉ばかりに埋め尽くされていた。
　そんなはずはない。こんな事はありえない。あってはならない。……大凡はそういった内容だ。

だがそれらも時が経つにつれてその数を減らし、遂には底を突いてしまう。
カチカチと音がする。それが自分の歯が鳴らしている音だと気付いた時には、もう遅かった。
「――――がっ!?!!」
胸部から腹部に掛けて爆発が起きたかの様な衝撃。ルシオラによる八極拳・貼山靠を受けたのだ。
美鈴の身体は軽々と吹き飛ばされ、猛烈な勢いでレミリア達の元へと迫る。それを、レミリアは受け止めた。
相応の衝撃があるはずだが、それを感じさせない軽さで。
「……ハッ、……ハッ」
美鈴は信じられない……信じたくないといった表情でルシオラを見る。何度も何度も「何で」「どうして」と呟きながら。
――――そこに、ピシ、という音が鳴った。美鈴に意識を割いていたレミリアもその音の発生源――――ルシオラを見る。
美鈴が吹き飛ばされる直前、偶然にも拳が当たっていたのか、ルシオラの顔に罅が入っている。
ピシリ、ピシリと罅が広がり、やがて顔全体を覆いつくす。

そして、ガラスが割れる様な音が響き――――仮面は失われた。

「――――え？」

それは誰が発した言葉なのだろうか。

その場の誰もが〝それ〟を理解出来ないでいた。眼前に存在していたはずのルシオラ。その姿が消えてしまった。

――――否。消えたのではない。姿が変わったのだ。

「え、そんな、うそ」

少しくたびれた白のワイシャツ。随分と履いてきたのか、少し色が落ちているジーンズ。袖や裾に少々のほつれが見て取れるジージャン。

「なん、なんで……なんで、なんで」

そして、額に巻かれた赤いバンダナ。

そこに居たのはルシオラという女性ではなく、妹紅達が愛する少年だった。横島忠夫がそこに居たのだ。

「なん……だと……!?」

レミリアから驚愕の声が漏れる。この場において、最も横島の心情に詳しいのはレミリアである。それは以前さとりから横島の過去とその当時の感情を聞いていたからだ。その彼女でさえ、こんな事は予想出来なかった。

ルシオラ――――横島が残心を解き、ゆっくりと姿勢を正す。その立ち姿は皆の記憶の中にある横島と完全に一致している。偽物ではない。こちらの横島も本物の横島なのだ。

「……」

誰も声を出す事が出来ない。呼吸も忘れている者もいるだろう。誰もが何も考えられない様な衝撃を受けている中、それでもレミリアの脳は今までに類を見ない程に高速で回転していた。

さとりから聞いた横島の過去、その当時の感情、今まで見てきた横島の記憶、深層意識で垣間見た更なる記憶、普段の横島の言動、時折見せた異質な表情と感情――――。

「……まさか」

掠れた様な声がレミリアの喉から漏れる。視線は目の前の横島から、ゆっくりと小悪魔の膝で眠る横島へと移っていく。

「まさか……まさか、お前は……」

横島を見つめるレミリアの表情は歪んでいる。信じられない様な、困惑している様

な、憐れむような、いくつもの感情がごちゃ混ぜになる。レミリアはそれに思い至った。
その思考の流れを、感情の変遷を理解出来ぬままに理解した。

敵の美女美少女三姉妹に攫われてペットにされた。その後一度皆の元に帰る事が出来たが、スパイとして再度潜り込む事になった。いつ殺されるかも知れない恐怖を抑え込んでスパイ活動をするが、世界中の人達からは裏切り者として酷い罵詈雑言を浴びせられてしまう。でもまあそれはどうでもいい。
スパイ生活の中で俺の家族や友人達を人質に取られ、あやうく敵だった頃のルシオラ達ごと殺されそうになった。何とか助かったが、本当にあともう少しで死ぬところだった。でもまあそれはどうでもいい。
ルシオラを好きになった。その為にアシュタロスと戦うと決めた。そして皆の元に戻り、本気で戦う決意を表明した。結果、偽物と判断されて釜茹でにされそうになった。でもまあそれはどうでもいい。
南極でアシュタロスを倒して日常に戻った。俺の活躍も色々と報道された様だけど

世間の目はそれほど変わりはしない。未だに俺の事を裏切り者と蔑む奴だって居る。でもまあそれはどうでもいい。

実はアシュタロスは生きていた。いや流石にふざけんな。

ルシオラを庇って死に掛けた。でもルシオラが逆に俺を助けてくれた。そのせいでルシオラが死んでしまった。

宇宙処理装置（コスモ・プロセッサ）を使えばルシオラを生き返らせる事が出来る。でも、状況はそれを許しちゃくれなかった。俺は世界かルシオラかの選択を強いられる事になった。

何で俺が選ばなくちゃなんねーんだ？　ルシオラか世界かって、何で選ばなくちゃなんねーんだよ。ルシオラを取るならみんな死んで、世界を取ったらルシオラを殺す事になる。ふざけんなよ。やめてくれよ。

宇宙処理装置もぶっ壊れてアシュタロスも死んだ。と思ったら生きてて究極の魔体だとかいうのになって世界を滅ぼそうとしだした。いい加減にしろよ。ルシオラが守った世界なんだぞ？　本当に勘弁してくれ。

ルシオラ復活の目は残っていた。散らばった霊基構造をかき集めれば、時間は掛かるが復活する事が出来るらしい。でも復活に必要な量の霊基構造はまだ集まり切っていないようだ。頑張ってくれ。

とりあえずアシュタロスのヤローは何とかなった。でもルシオラの霊基構造は集まらなかった。本当にあと少しだって……俺の中には大量にあいつの霊基構造があるってのに、俺が人間だからそれを少しでも取り除いたら死んでしまうらしい。また俺のせいじゃねーか。

何でだよ。ラスボスをぶっ倒してヒロインも復活してハッピーエンドでいいじゃねーかよ。何でルシオラ達だけがこんな目に遭わなきゃなんねーんだよ。ルシオラもベスパもパピリオも失くしてばっかじゃねーか。ちょっとくらい見返りがあったっていいじゃんか。

隊長が過去の時代に帰る日が来た。最後の時間移動で帰ったと思ったら現在の隊長が入れ替わりで姿を現した。何か色々と丸くなってたっつーか、張り詰めたものが無くなったような感じだった。……いや、お腹が張り詰めてたし物理的に丸く大きくなってた。

どうやらお腹に赤ちゃんがいるらしい。まんまると大きなお腹だ。旦那さんと仲良くやってたんだろう。

俺はルシオラを喪った。俺が殺したんだ。そんな俺の前に幸せそうな隊長が居る。恋人を喪った俺の前に、愛する人との愛の結晶をお腹に宿した隊長が居る。

でもまあそれはどうでもいい。

美神さんがその隊長を見て、俺に可能性を見出してくれたんだ。俺の子供ならルシオラは転生する事が出来るかもしれないそうだ。最初聞いた時は戸惑ったけど、形は違えど俺はルシオラを幸せにする事が出来るかもしれない。またベスパとパピリオを、ルシオラに会わせてやる事が出来るかもしれない。

隊長は俺にそれを教えてくれたんだ。流石隊長だ。やっぱり亀の甲より年の……いえ何でもありません。

俺はルシオラを幸せに出来る。それが分かったんだ。悲しんでいる暇なんてない。悲しんだってルシオラは喜んでくれないだろう。だから俺がするべきはなるべく早く子供を作る事。そう、これはルシオラの為なのだ。そんな訳で美神さん、俺と一発!!

ぶん殴られた。当たり前だよな。

時折俺の中のルシオラと会話することが出来た。会話って言ってもほんの一言二言くらいのもんだけど。一時期全然あいつの声が聞こえなくなったから焦ったけど、また会話が出来るようになった。

今まで見たいに頭に響いてくるような感じじゃなくて、例えば夢を見てる時とか、俺の意識がちょっと薄らいだ？　時に色々と話が出来る。多分心の奥の方で存在が安定化されたんだろう。一心同体って言うのはこういうのを言うのか？

――――ん？　何か違和感があるな。まあ気のせいか。気のせいだな。だってルシ

オラはここにいるって言ってくれたし。

小さな指が額に触れる。

何か蓬莱人ってのになった。永琳先生や輝夜様、そして妹紅と同じ不老不死の存在だ。魂が存在の主で肉体が従になるらしい。全然分からん。先生から色々と話を聞いたが、一番衝撃を受けたのはやっぱりアレだな。

……蓬莱人は子供を作れないそうだ。

いやいや待て待ていくら何でもそれはないだろう。またか？　また俺はあいつらからルシオラを奪うってのか？　勘弁してくれよ、何でなんだよ。あいつらから父親を奪って、姉を奪って、今度は転生の可能性まで奪うってのか？　俺は何なんだ？　俺が居なけりゃあいつらも幸せだったんじゃないのか？

――――お前は喜んでくれるのか？　俺とずっと一緒なのが嬉しい？　……そうか。俺も嬉しい。俺だってお前とずっと一緒に永遠を生きられるのは嬉しい。あ、でも妹紅は分かってくれるかな？　俺とお前の関係について詳しく話してねーし……出来る事

なら飲み込んでほしいけど。

小さな唇が意味ある言葉を紡ぎ、その能力を開放する。

ルシオラにはいつも助けてもらってるなぁ。俺のせいで死んじまったのに、俺の中に居てくれて、俺を愛してくれて。いつも励ましてくれてありがとうな。お前が居てくれるから今の俺があるんだ。俺の傍にお前が居てくれると安心するよ。

しかし妹紅達にはどう説明しようか。そのまま普通に話せばいいんだろうか。受け入れてくれるかな？　……そうだな、受け入れてくれるよな。妹紅も、フランちゃんも、美鈴も、小悪魔も、てゐちゃんも。みんなお前を受け入れてくれるよな。

ああ、そうだ。俺とお前はずっと一緒だ。この永遠をずっと一緒に生きていくんだ。

この永遠の生を。

死がふたりを分かつまで――――。

「本能『イドの解放』――――」
「……あ。――――ああ、ぁ？」

違う。違う違う違う。こんな事があるはずがない。こんなの嘘に決まってる。そうとしか考えられない。だってそうだ。ルシオラはいつも俺の傍に居てくれる。いつだって俺の傍に居てくれたんだ。だからこれは間違ってる。正しくなんかない。ありえない。信じられない。信じたくない。本当じゃない。真実じゃない。嘘だ。これは嘘だ。違うんだ。現実じゃない。違う。嘘だ。違う。嘘だ。違う。違う。違う。違う。違う。違う。違う。違う。違う違う違う違う――――。

「――――ヨコシマ」

声が聞こえた。俺が好きな、ルシオラの声だ。本当なら、もう聞く事の出来ない声。
振り向くな。／何でだよ。
振り向けば壊れてしまう。／何がだよ。
振り向いたら。／俺には縋るものが必要なんだ。
／俺がルシオラの声を無視するなんて出来るはずがない。

「――ルシオラ!!」

だから、振り向いた。

「――――――――あ」

振り向いたその先。ルシオラが居るはずのそこに。ルシオラは居なかった。

その代わりに――――俺が、佇んでいた。

「……」

〝俺〟は何も語ることなく俺をじっと見つめている。ああそうか。そういうことか、と。俺は理解した。理解してしまった。

まるで深海の様な意識の底に佇むルシオラ。俺と永遠を共に生きるルシオラ。

――そのルシオラは決して横島を否定せず。／肯定する。

――そのルシオラは横島を罵倒せず。／称賛する。

――そのルシオラは横島を疑わず。／信じ込む。

――そのルシオラは横島を叱咤せず。／激励する。

――そのルシオラは横島を愛している。／愛している。

――そのルシオラは横島を愛している。／愛している。

――そのルシオラは横島を愛している。／愛している。
――そのルシオラは横島を愛している。／愛している。
――そのルシオラは横島を愛している。／愛している。

――そのルシオラは横島（おれ）にとってルシオラである。／ルシオラではない。

そう。そのルシオラは――横島忠夫だったのだ。
それを理解した瞬間、横島の心は悲鳴を上げた。彼が今まで信じて来たもの、生きる支えにしてきたもの、それらが根底から覆された。
そもそもの話、ルシオラの意識はとうの昔に消滅している。今まで横島がルシオラだと思って会話してきた存在は、横島が生み出した、都合のいい偽者だった。

「横島……お前が、抱えていた闇（もの）は……」
横島は一連の事件で自分が受けた被害などどうでもよかった。ルシオラが居てくれればそれでよかったのだ。
ただ、横島が絶対に許せなかったのは自らのルシオラへの仕打ちだったのだ。
横島忠夫は愛するルシオラを殺し、転生の未来を奪っただけでなく。自らの中に完全

なる味方として都合のいい偽物を生み出し――彼女（ルシオラ）の命を、想いを、存在そのものを侮辱したと、そう思い知らされた。

――これが、横島忠夫が抱えている闇である。

第八十八話
「抱える闇」
～了～

第八十九話『目的』

誰もがその場を動けないでいた。目の前の光景に理解が追い付いていないのだ。
総身から霊力を立ち昇らせ、レミリア達の前に立っているのは『横島忠夫』だ。
その顔に表情と呼べる物はなく、その目にも感情の色は宿っていない。
――だが敵対している。
あの『横島』はてゐに攻撃を仕掛け、迎撃に出た美鈴をも打ち破っている。
理由は全くもって不明だが、明確に敵対の姿勢を取っているのだ。
レミリアですら混乱し、動くに動けない中で、妹紅は。妹紅はただ、じっと。じっと、
その『横島』を見つめていた。

第八十九話
『目的』

一歩、『横島』が動いた。瞬間、何とか意識を切り替え、レミリアが美鈴をその場に『横島』へと駆ける。

同じタイミングで飛び出したのか、『横島』との距離は一瞬にも満たない内にゼロとなった。

レミリアも『横島』も、共に右腕を繰り出す。ただし、その目的は正反対のものだ。

『横島』の右腕は攻撃の為に。対してレミリアの右腕は防御の為に振るわれた。

「……っ!!」

ドゴン、と。素手同士のぶつかり合いとは思えない衝撃音が響く。互いの右腕に伝わる衝撃もその音に負けてはいない。

ギシギシと自らの骨が軋む音を聞き、レミリアは顔をしかめ、舌打ちをする。

「――――ちっ！」

「……」

この程度で『横島』は動きを止めない。そのまま次の攻撃、そのまた次の攻撃と身体を駆動させる。

「う、お、おおぉ……!?」

その流れる様な套路、まるで舞の様に一つ一つの動作が繋がっている体捌き、虚実が

入り混じった複雑極まる拳撃、蹴撃の嵐。翡翠に輝くグローブ状の籠手が光の線を描く。

その悉くを持ち前の動体視力、身体能力、反射神経、そして勘で躱し、防いでいくレミリア。

――――だが、その内心は驚愕と焦りで満たされようとしていた。

――――この動き、この速さ、この重さ……!!　まさか、これは美鈴の……!?

「――――でぇいっ！」

「……」

レミリアは『横島』の腕を大きく弾き、仕切り直しをすべく大きく後退する。

ちら、と眠っている横島、それを守るフラン達の様子を横目で探る。目まぐるしい攻防で立ち位置も大きく変化したが、未だ距離が離れている事を確認する。

その確認が終わり、視線を『横島』へと戻すまでにおおよそ一秒程度。その時には既に『横島』はレミリアとの間合いを詰めつつあった。

「……っ！」

驚きに目を見開くが、レミリアにはまだ少し余裕があった。僅かであるが、先程までより間合いが遠い。誤差とも言えるわずかな距離だが、その違いが命運を分けるのだ。

――――そう、このように。

「……!?」

先の攻防よりわずかに開いた距離。当然超接近戦闘で狭まっていた視界も相応に広くなる。

故に、レミリアは気付く事が出来た。

拳が届かぬ距離、高く振り上げられた右腕、それに添えられた左腕――――。

レミリアの危機感知能力が全力で警鐘を鳴らす。

「――――ちいいっ!!」

爪を長く展開し、盾の様に掲げ、身をよじる。次の瞬間には『横島』の腕は振り抜かれ、それと同時にレミリアの爪は半ばから両断されて宙を舞う。

咄嗟に身をよじらなければその肉体をも斬られていただろう。それを目の当たりにした驚愕よりも先に、レミリアの戦闘本能は自らの魔力を前方に〝圧〟として放射する事で『横島』を吹き飛ばす事に成功した。

「……今のは」

レミリアのこめかみに冷汗が浮かぶ。

翡翠に輝くグローブは光の剣へと変化していた。間合いが変わって当然だ。拳と剣では明らかに異なる。

「……さっきの事を考えると、今のは妖夢の剣術かしら。向こうの世界の小竜姫の剣術

は今の横島でも負担が大きいみたいだし……いや、精神世界だし考えるだけ無駄かな？」

目の前の『横島（アイツ）』に負担（それ）が適用されてるのかは分からないけど、と心の中でごちる。

分かっているのは『横島』が厄介な相手だという事だけだ。

「お姉様、大丈夫!?」

「さっきはダメだったけど、今度こそ援護を――――」

フランとてゐがその場からレミリアに声を掛ける。ダメージを負った美鈴、横島を抱えている小悪魔と比べれば、この二人の参戦はありがたい事ではある。

「やめなさい」

――――だが、それを許す訳にはいかない。

「な、なんでさ!?」

「お姉様!?」

またも出鼻をくじかれたてゐは叫ぶ。フランも同様に声を荒げ、その理由を目で問うた。

「単純にアンタ達じゃ『横島（アレ）』の動きについていけないでしょ。それに動きも合わせられないし、そんなんじゃ各個撃破されて終わっちゃう」

「むむむ……！」

てゐもフランも何も言い返せない。確かに二人は永くを生きる妖怪――――神格すら獲得した因幡の素兎と、強大無比なる破壊の力を持つ吸血鬼であるのだが、その実、この二人は戦闘が苦手なのである。

てゐは神格と信仰から木っ端妖怪よりは強い力を持つが、それでもその程度でしかなく、永きに渡る経験から独自の戦闘術を有しているが、基本的には敵から逃げる為の技術であると言ってもいい。

対するフランは大妖怪にも匹敵する強大な魔力と、あらゆる物を破壊出来る能力から戦闘が得手だと思われがちであるが、実際はその永い生で戦いに身を置いた事はほとんど無いのである。

数百年規模の引きこもりは伊達ではないのだ。

――――それに。何よりもあの子達を横島（こいづと）と戦わせたくない。

それがレミリアの偽らざる本心だ。

眼前の『横島』は姿が似ていただけの『男』とは違う。正真正銘、『横島忠夫』本人なのだ。

だからこそレミリアは戦っている。横島の主として、フランの姉として、両者の心を守る為に力を振るうのだ。

「――――さて、横島。お前が私の知っている横島なのか、それとも心の奥底で抑圧され

てきた本心だか何だかは知らないが……」
　拳と拳がぶつかり合い、その反動で互いに間合いから大きく弾かれたところでレミリアが口を開く。
「一体何が目的なんだ？」
　『横島』の一挙手一投足を見逃さぬ様に気を張りながらもレミリアは問う。
「お前はルシオラの姿を取り、私達の前に現われた。その姿を取っていた理由は何となく予想が付いてるからいいとして……問題はその後の行動だ」
　何故か『横島』は動こうとしない。静かにレミリアの言葉に耳を傾けている。
「何故、私達をあの横島の元へ案内した？」
「え？」
　今まで状況の推移について来れなかった小悪魔が思わず声を出してしまう。
「考えてもみなさい。私達を騙し討ちするならもっと良いタイミングなんていくらでもあったでしょう。確かに横島を発見して気が緩んでいたのはある。でも、わざわざ妹紅がまた横島とパスを繋ぎ直すまで待つ必要がある？」
「……」
　そう言葉を返され、小悪魔は咄嗟に反論が出来なかった。言われてみれば、馬鹿正直に横島の元まで案内しなくても良いし、指摘通りパスを繋ぎ直すまで待つ必要はない。

むしろ繋ぎ直している途中の方が効果的なのではないかと思える。
「そもそも私達を害そうってんなら姿を現す必要もないしね」
「……そっか、ここは執事さんの精神世界。この世界の支配者なんだからこうして姿を現さなくても色々と私達に攻撃出来るのか」
「まあ、本当はそんな事出来ないかもしれないけどね」
「私が肯定したそばから自分で否定すんのやめてくんない？」
それはまぁ置いといて、とレミリアはてゐを無視して思考に入る。横島が自分達を本気で害そうというのなら、わざわざサイキック・ソーサーや栄光の手（ハンズ・オブ・グローリー）を使わずとも、龍神の能力の系譜である文珠を使えばそれでいいはずだ。万能に近いかの能力を使われれば、さしものレミリアも咄嗟の対応は難しい。
だというのにそれをしないのは何故か。必殺のタイミングを窺っている？　ならば最初に使えばそれでよかったはず。
レミリアは口元に手を当てて考えを口に出す。
「……私達を殺す気はない。しかし、ある程度痛めつけはする」
横島の指がぴくりと動く。
「横島にとって私達が邪魔である……という事はなさそうね。あるいは、その逆……？むしろこの状況が必要である、とか……？」

ず……、と。横島からの圧力が強くなる。

「んー？」

どういう反応だろうか、とレミリアは首を傾げる。先の自分の発言が図星であったのだろうか。それともお喋りの時間は終了になったのだろうか。

どちらにせよ、最初に感じた様な無意識無感情な姿とは些か印象が違って見える。

「……最初は以前パチュリーから聞いた事のある特殊な霊体みたいな奴かと思えば、それともまた違う、か。何だっけね、自分の意思も感情も全てを失ったって奴。確か……力と技術の化け物だっけ」

人の無意識には恐ろしい力が宿る。何らかの行動を起こすにしても、意識的に思考を挟んだ結果としての行動と無意識による行動とでは特に速さが段違いだ。更には自意識が働いていない分、手加減というものがかかりにくい状態でもある。

魂にまで刻み込まれた技術と、それを繰り出す為の力。余計な思考に労力を割かず、最短最速でただ結果だけを抽出する。

――即ち、〝イドの怪物〟である。当初はそれが眼前の『横島』の正体であると踏んだのだが……どうやら、違っているようだ。

「ま、アンタの目的が何かは知らないけど……こっちはアンタの企みに乗ってやる理由は今の所ないのよね。そもそもこっちと会話をしようともしないし」

横島からの圧に押されていたレミリアの魔力が、徐々にその勢いを増していく。どこか金属が擦れ合うような音を響かせながら、二人の身体から発せられる霊力と魔力は拮抗する。

レミリアは両手に魔力球を作りだし、それを握り潰す。右の手には強大にして長大な赤い槍が握られ、左の手からは禍々しい紅色の十字架型の光が迸る。

「とりあえず、その顔で私達の前に立ちはだかるのは気分が悪い。あの時の事を思い出すからな」

レミリアの脳裏に過ぎるのは、横島とよく似た外見の『男』の姿。怒りという燃料がくべられ、レミリアの魔力がその勢いを増した。彼女の怒りは当然の物。何せ、妹のフランは横島とよく似たその『男』に殺されかけたのだ。その時の事をフランが思い出し、その顔が恐怖に染まってしまったとしたら……。

「懺悔する時間くらいはくれてやる。――――紅き十字をその身に刻み、赤の槍にて貫かれるがいい」

激情を露にし、レミリアは『横島』へと襲い掛かる。表面上は正反対の二人の激突。激情と、無情と。真紅と翡翠の軌跡は幾度も交わり、闇の世界に絢爛たる火花を散らす。

「お姉様……ただお兄様……」

フランは自分の為に戦うレミリアの姿を眺める事しか出来ない。そしてそれはフラ

ンだけでなく、てゐも小悪魔も、美鈴とて同じだった。
　例え何があろうとも横島を助ける覚悟を決めていた。しかし、その為に横島と戦う覚悟は持ち合わせていなかった。肌で感じる。あの『横島』は本気で自分達を害そうとしているのだ。
　殺気や殺意といったものは感じない。しかし、〝横島〟が〝自分達〟を〝攻撃する〟。その事実に心が追い付かない。何故そんな事をするのか。何か理由があるのか。いくつもの『なぜ』が頭を巡り、思考を停滞させる。
　ここで止まっている場合ではない。動かなければならない。それでも自らの身体は動いてはくれない。先のレミリアの言葉に甘え切ってしまっている。そんな事が許されていいはずがないのは分かり切っているというのに。
　それでも、フランは動けなかった。
「く……っ」
　美鈴が悔し気に呻きを漏らす。自分が上手く立ち回れなかったせいで主たるレミリアに辛い役目を押し付けている。その事実に胸が張り裂けそうなほどに痛む。
「……っ」
　小悪魔は横島を抱えつつ、何も出来ない自分に歯噛みするばかり。つい先日、似た様な思いを味わったばかりだというのに、また同じ事の繰り返しだ。ならばまた同じ事を

繰り返すまで。

自分は弱い。弱者には弱者に相応しい戦い方がある。まずは、頭を働かせる。深呼吸を一つ、二つ。レミリアと『横島』の戦いに意識を割きつつも、自分が、そして自分達がどう動くべきなのかを必死に考える。膝の上に感じる横島の重さ、温かさを心の支えにして。

「……？」

違和感を覚えた。てゐは目の前で繰り広げられる『横島』とレミリアの戦いを見ながら、その違和感の正体を探ろうと、ぐちゃぐちゃに乱れゆく頭で考える。

まず、違和感を覚えたのはレミリアではない。自分にとって、もっと近い存在に対する違和感がその正体だろう。

次に『横島』でもない。いや、『横島』にも大きな違和感を抱いてはいるが、自分が感じた違和感とは種別が違う。もっと身近で、昔から当たり前の様に存在した何かなのだ。

ふと、そこを見やる。そして違和感の正体に気が付いた。まったくもって動きが無いのだ。今のこの状況に対して、何も言わず、何の行動も起こさない。

彼女はただ『横島』をじっと見つめるだけ。まるで呼吸すら忘れてしまっているかのように静かに、ただ『横島』を見つめている。

「――――妹紅……？」

妹紅は動かない。じっと、ただじっと、『横島』を見つめている。――――いや？

妹紅が見つめているのは、本当に『横島』なのか――――？

流れ込んでくる。彼女と交わした言葉が、彼女と過ごした時間が、彼女を想う気持ちが、彼女と交わした温もりが、圧倒的なリアルを伴って心に直接流れ込んでくる。

――――うぅぅぅぅぁあああぁあああぁ!!?　あああああぁぁあああぁあああぁあああぁ!!?

それはまるで洪水の様に、ちっぽけな己の心を蹂躙し、遥か彼方へと押し流そうとする。

それは、〝記憶〟だ。横島とルシオラと。二人が過ごしたほんの僅かな蜜月の記憶。

もしかしたら、自分と横島が過ごした日々の方がまだ多いと言えるようなそれに、妹紅は打ちのめされていた。

いつまでも続くと思われたその小さくも幸せな日々。やがて訪れるだろう幸福な未来。それを奪われた。無慈悲に、理不尽に、奪われてしまった。

形は違えど幸せに出来る可能性は残っていた。しかし、それも奪われてしまった。自分が奪ってしまったのだ。無慈悲に、理不尽に、そして完膚なきまでに。可能性を完全に奪い尽くしてしまったのだ。

どれだけ自分が酷い事をしてしまったのかまざまざと見せつけられ、妹紅の心は砕け散りそうになる程の衝撃を受ける。

かつては蓬莱の薬を奪い、自らが得るはずの幸せな未来を棒に振り。今回は愛する人が手に出来る未来を奪い尽くした。

自分は奪うだけの存在である。かつての自分と愛する人と、幸せな未来の可能性を根こそぎ奪い尽くし、完全に消滅させるだけの醜悪な悪魔だったのだ。

ここは妹紅の精神世界。横島とのパスが再び繋がった為、とある存在からの干渉を受けてしまったのだ。

頭を抱え、地面をのた打ち回り、時には頭を何度も地面に叩き付け、血を吐く様な絶叫を繰り返す妹紅の傍らに、ゆらりと小さな光の粒が舞い降りた。それは少しずつ大きくなり、やがて蛍火となって数を増やしていく。

一つ、また一つと蛍火が交わり、遂には人型のシルエットを作りだす。

「――――」

それは、女性の姿をしていた。儚げな雰囲気の、蛍火の女性。

――――『ルシオラ』が、冷たい瞳で妹紅を見下ろしていた。

第八十九話
『目的』
～了～

第九十話『それはとても我が儘で、利己的で、自己中心的で、残酷で、醜悪で、最低で、最悪な』

頭を抱え、胸を掻き毟り、叫びとも呻きともつかない声を発しながらのたうち回る妹紅を、『ルシオラ』は冷めた目で見下ろしている。

その目に宿るのは妹紅に対する侮蔑の感情なのか、それとも何の感慨も抱いていないからこそ冷たく見えてしまうのか。それすらも傍目には判別することが出来ない。

ただ、何らかの理由があって、妹紅の前に姿を現したのは想像に難くない。

では、その目的とは一体何だと言うのだろうか。一歩、『ルシオラ』はその足を妹紅の下へと踏み出した。

第九十話

『それはとても我が儘で、利己的で、自己中心的で、残酷で、醜悪で、最低で、最悪な』

カツカツと『ルシオラ』が一つ歩く度に甲高い音が響く。胸を衝く罪悪感、自己嫌悪に苛まれている妹紅にその音は届いていないのか、反応を示すことなく苦しみ、もがく。だが、あまりにも明瞭にある音が妹紅の鼓膜を確かに震わせた。

「――――藤原妹紅」

「――――!?」

それが聞こえた瞬間、妹紅は思わずその身を起こした。

目の前にはすらりと伸びる長い脚。視線を上げていけば、スレンダーながらも大人の女性であると分かる肢体が目に入る。

それは、先程自分達を横島の下に案内した女性の姿である。

「……ルシ、オラ」

「……」

息も絶え絶えに妹紅が名を呟いても、『ルシオラ』は何の反応も示さない。

互いに互いを見つめ合うこの状況において、妹紅の脳内は混乱の極みにあった。

横島はどこに行ったのか。先のルシオラと目の前の『ルシオラ』は同一人物なのか。

他の者はどうなったのか。先程まで見ていた光景、感じ取った想い……。

それら以外にもどうでもいいような思考も含め、全てが同時に頭を巡る。

思考しているようで何も考えることが出来ていない状態。――――故に、反射的に身体が動いたのは運が良かったと言えるだろう。

「……」

『ルシオラ』が妹紅に手を翳す。――――瞬間、眩い光が妹紅を襲った。

妹紅は後ろに飛び退いてから驚愕を覚える。

「――――、な、ぁ……!?」

よろけながらもなんとか着地する妹紅に、幾筋もの光が殺到する。『ルシオラ』の魔力砲だ。

「……う、く……っ!?」

混乱をしていても、妹紅は千年という時を戦って生き抜いた歴戦の猛者だ。考えるよりも先に身体が反応し、やがて身体の方に精神が追い付いてくる。避けられる物は全て避け、躱し切れない物は両の手で弾いた。

「つ……っ」

ビリビリとした痛みが手に走る。見れば、皮膚が少し焼け爛れていた。が、すぐにそれを意識から外す。この程度の傷は蓬莱人の特性により、すぐに治るからだ。

「……」

妹紅へと降り注ぐ光はその数を減らしていき、やがて消え去った。『ルシオラ』は妹紅

へと向けていた手を下ろし、またも無言で妹紅を見つめ続ける。
「……ルシオラ」
妹紅は『ルシオラ』の名を呟き、複雑そうに顔を歪めて視線を返す。反撃はしない。
ルシオラにとって、自分は許し難い存在であろうから。
「……」
しかし、このままでいるわけにもいかない。自分たちは横島を助けに来たのだ。たとえ相手がルシオラであったとしても――否、ルシオラであればこそ、横島を救う為に力を借りねばならぬ存在なのだ。
「ルシオラ！　アンタは横島の中で生きていたんだろう!?　だったら今の横島の状態も知っているはずだ!!」
「……」
『ルシオラ』は応えない。
「……横島はとある事が切っ掛けで精神が崩壊しかけて、それを防ぐ為に記憶を失った！　私達はそれを何とかする為にここに来たんだ！」
「……」
ほんの僅か。ほんの僅かだが、『ルシオラ』の意識と呼べるものが己へと向けられた事を妹紅は感じ取る。

「私達は横島を助けたいんだ！　……でも、肝心の横島の意識は目覚めてくれない……！」

『ルシオラ』を説得するのは今しかないと、妹紅は言葉を重ねていく。

「だからお願いだ！　私を許せないのは百も承知だ！　それでも……それでも、横島を助けるのに協力してほしいんだ!!」

妹紅は膝を着き、痛む手を地面に付け、土下座にも近い形で頭を下げる。

相変わらず『ルシオラ』からの動きはないが、それでも妹紅は頭を下げ続ける。

そうしたまま何秒が経っただろうか。ついにそれは妹紅の耳に飛び込んできた。

「――――ヨコシマを、助ける……？」

「……!!」

それは『ルシオラ』の発した声だ。がばりと頭を上げた妹紅の目に映るのは、自分の姿を見つめる『ルシオラ』だ。『ルシオラ』の目はしっかりと妹紅を捉え、その瞳に何らかの感情の色が宿っているように見える。

「お前達が……ヨコシマを……」

「……！　そうだ、だから、アンタに手を貸してほしいんだ。どうすれば横島を目覚めさせる事が出来るのか、アンタなら何か知って――――」

す、と。妹紅の言葉を遮るように『ルシオラ』が手を差し出してくる。

「……！」

その手を見て思わず硬直してしまう妹紅。『ルシオラ』の顔を見ても、表情に一切の変わりはないが、それでも自分の説得を聞き入れてくれたのかと嬉しくなる。

妹紅は差し出された『ルシオラ』の手を取ろうと同じく手を伸ばし――――。

「――――無理よ、お前達には」

「え――――」

『ルシオラ』の手から放たれた魔力砲よる爆発によって吹き飛ばされた。

「うあああああっ!!?」

威力はそこまででもなかったが、それでも妹紅の身体は何度も地面を跳ね、勢いよく転がっていく。

ようやく止まった時には全身に大小様々な擦過傷が出来、いたる所から血が滲んでいた。

「う……っ、く――――!?」

何とか起き上がり、『ルシオラ』に目をやれば、『ルシオラ』はまるで機関砲のように魔力砲を連射してくる。

「そもそもお前達には迷いがありすぎる」

「……!?」

あまり狙いは良くないのか、大半が見当違いの場所を通り過ぎる光の弾丸。それを躱していく妹紅の耳に、連続する発射音をすり抜けてきたが如く、『ルシオラ』の言葉が届いた。

「お前達は覚悟があると嘯くけれど、ヨコシマの記憶を見て何度迷ったの？　何度気を入れ直したのかしら？」

「……っ」

攻撃の範囲が狭まってくる。先程まで大量にあった逃げ道はその多くが塞がれてしまった。

「それに」

『ルシオラ』の掌より、今までとは比較にならない程に鋭い砲撃が放たれる。

既に逃げ道は塞がれ、完全に直撃するであろうその一撃。妹紅は霊力を込めた拳で弾き返そうと両の手に力を込め――――。

「――――痛っ!?」

それは完全に予想外の痛みだった。電気の様に速く鋭く、そして全身を侵す毒の様にじくじくと広がる痛みだ。

その痛みを感じた瞬間、身体はほんの一瞬だけ硬直する。それは人間の生理的な反応だ。――――そして、それが命取りになる。

「うあ――――っ!!?」

右肩に突き刺さる魔力砲。その強烈な威力に逆らえず、踏ん張ることも出来ずに妹紅は吹き飛ばされた。

先のように地面を跳ね、転がり、さらに傷を増やしてようやく止まる。

「……く……そ……っ」

思わず悪態をついてしまう。何度も吹き飛ばされたせいか、視界がぐらついて定まらない。それでもこのまま伏していればいいように嬲られるだけだ。

妹紅は痛む身体に鞭を打ち、左手を支えに身体を起こそうとしたのだが――――。

「――――え……あ……?」

べちゃ、と。力なく地に倒れ込んでしまう。まるで痺れたように身体が動かない。

そうして倒れ伏す妹紅の下に、『ルシオラ』がゆっくりと近付いてくる。

「私は蛍の化身。光を操り、獲物に麻酔する」

「……っ！　麻酔……だと……!?」

先程右肩を貫いた魔力砲。あれには『ルシオラ』の能力の一つである〝麻酔〟の力が込められていた。それ故に妹紅の身体は言うことを聞かなくなっている。だが、解せない。

「私は〝蓬莱人〟だぞ……!?　麻酔、なんて……効くはずが……!!」

そう、妹紅は蓬莱人だ。あらゆる毒も薬も効果がない、不死身の存在。少しずつ、少しずつ薄れていく意識を奮い立たせ、麻酔に抗おうと全身に力を籠め――――そこで、ようやく気が付いた。

「……え？」

それはたまたま視界に入った左手の甲。『ルシオラ』の魔力砲を弾いた際に負った、痛々しい傷跡が目についた。

普段ならば既に塞がりつつあるだろうその傷。だが、その傷は未だ塞がっておらず――――それどころか、徐々に広がりつつあった。

「……」

頭が真っ白になる。どっと冷汗が噴き出る。心臓が早鐘を打つ。呼吸が早く、浅くなる。

――――それは、何百年も前に忘れ去ったと思っていた感情だ。

「その手の傷は治らない。それどころか、お前を侵し、殺し尽くす」

「……」

妹紅の全身が震えだす。果たしてそれはいかなる感情によるものだろうか。

「それは私が再現した妹の能力。妖蜂が持つ霊基構造を侵食し、破壊する妖毒――――!!」

空っぽの頭に『ルシオラ』の言葉が染み込んでくる。
脳裏に浮かぶのはいつかの夜、蛍の化身――ルシオラが自分の命を賭して己を助けてくれたのだと横島が話してくれた時のこと。
「アシュ様の知識を元に私の麻酔と混合させた毒よ――とは言え、本当ならこんな程度の毒でお前が本当の死を迎えるはずがないんだけど」
「……え？」
『ルシオラ』のその言葉には呆れとも侮蔑とも取れる響きが込められていた。
「運が悪かった……いえ、良かったのかしら。ヨコシマとパスを繋いだお前が肉体を置き去りに、魂だけでヨコシマの精神世界に入ってきた。だからこうなった」
妹紅にはそれがどのように作用して今に至るのか、まるで分からない。ただ『ルシオラ』の言葉を待つしかない。そして『ルシオラ』は今までの沈黙が嘘のように、饒舌に語りだす。
「いくら不滅の蓬莱人と言っても、魂だけの状態ではその性能を十全に発揮することは出来ない。当然肉体もまた同じ。魂と魄、二つが揃って不死足りえる存在」
だが、ここは横島の精神世界。ここに入る為には当然肉体を持ち込むことなど不可能だ。故に肉体から離れ、生きたまま魂だけの状態にならなければいけない。――これが要因の一つ。

次に『ルシオラ』の攻撃に妖毒が込められていたこと。ベスパの妖毒は霊基構造――つまり魂を破壊する性質を持つ。

かつて横島はその毒を受け、霊基構造が連鎖崩壊していき、すんでの所でルシオラに大量の霊基構造を分けてもらうことで一命を取り留めた。

『ルシオラ』が再現した妖毒はそれと比べるまでもなく弱い毒であったが、その毒の効果は魂を侵食し、崩壊させることである。つまり、今の妹紅にとっては絶対に受けてはならないまさに致命の一撃だったのだ。――これが要因の二つ目。

そして、何よりも。

「お前は――ヨコシマの精神に入ってしまった」

「……!?」

何よりもそれが――最大の、要因なのである。

「ヨコシマとお前の間にはパスが通っている。互いの感情や、大雑把な思考の方向性……〝痛み〟すらある程度伝わってくる」

「……」

どんどん、どんどんと鼓動が、呼吸が早くなる。妹紅はその答えに行き着いた。

――なぜか、気が昂っている。正体不明の感覚とは裏腹に集中していく意識の中で、妹紅は『ルシオラ』から〝答え〟を聞かされる。

「お前の魂がヨコシマの精神で死んでも、お前の肉体はそれに気付かない。だってパスが繋がっているヨコシマが生きているのだもの。お前の肉体は、魂亡きままそこに残り続けるだけになる」

――それは、本来ならば有り得ないことのはずだった。天文学的確率の、決して起こり得ないはずのきせき。

蓬莱人の中でただ一人、妹紅にのみ許された不死からの解放。

――そのきせきが、妹紅の眼前に突き付けられた。

「そう。お前は今、この場でなら永遠の安らぎを手に入れることが出来る。……かつて失ったはずの、当たり前の死を取り戻すことが出来る」

「……っ!!」

その言葉は妹紅の心に沁み込んでいく。それは甘い毒だ。

「蓬莱の薬を飲んで、千と数百年……。その間に何度死んだのかしら？　何度殺されたのかしら？

……その度に生き返り、死にそびれ、ただ生きるしかなくなった……。それを、今、この場でなら――終わらせることが出来る」

ただ優しく。『ルシオラ』は優しく優しく囁きかける。霊基構造を侵食していく妖毒のように、『ルシオラ』の言葉は妹紅の心を蝕んでいく。

「――――っ!?」

ドン、と。強い衝撃に妹紅は吹き飛ばされる。『ルシオラ』の魔力砲だ。

見えていたそれを、何とか避けられたはずのそれを、妹紅は躱すことが出来なかった。

「げほっ……！　な、なん……っ、なん、で……」

なぜ避けられなかったのか。妹紅は朦朧としつつある頭で考える。『ルシオラ』の攻撃を受けすぎた？　妖毒によって身体が完全に動かなくなった？

――――否、だ。

「お前は死を望んでいる――――それが答えよ」

「――――!!　……っ」

咄嗟の反論も出来なかった。確かにそれはあの日以来、ずっと抱えていた望み……願いだ。

あの日から三百年、自らの選択を悔やみ、死を望んだ。妖怪と戦う術を身に着け三百年、妖怪の不可思議な〝能力〟による死を願った。

戦いの日々に飽き、人々と寄り添い、または離れて生きる三百年。訪れることの無い死を待った。

そして、それからの三百年――――。幻想郷に流れ着き、親友と呼べる者と出逢い、復讐の相手を見付け、殺し合い、それでも互いに絆を深めていき――――その果てに、妹

紅は自らの死について考えるのを止めた。諦めたのだ。
それからは楽になった。ただ目の前の、日々の出来事を楽しむことが出来た。
今までにない、千年を超える人生で、ようやく思い出した幸せな生。
「……」
それが、終わる。ようやく生を終えられる。
目の前の『ルシオラ』が終わらせてくれる。
「お前の今までの人生はきっと辛いものだったのね。私は創られてすぐに死んでしまったから、長い生は羨ましくもある――――まあ、これは体験していないからこそ言えるセリフだけど」
そう。その生に何を想うのかはその本人にしか分からない。
「……」
本人にすら分かっていない時もある。妹紅は今終焉を迎えようとしている己の生をどう想うのか。
「……」
思考が乱れる。思考が連続せず、千々に細切れていく。何を考えているのか、何を想っているのか、自分ですら把握出来ない。
ただ一つだけ理解出来ることがあるとすれば、それは今から自分が死ぬということ。

永遠の安らぎを取り戻すということだ。

乱れに乱れた思考の中でそれが共通しているということは、やはりそれを無意識下で望んでいたということだろう。

身体から力が抜けていく。既に目は閉じられている。もはや音もまともに聞こえない。

――――妹紅は、死を受け入れた。

「――――」

『ルシオラ』が何かを言っているが、それももう認識することが出来ない。

――――だというのに、その言葉は雷光のような閃きを以って妹紅の心に突き刺さった。

「愛するヨコシマの中で――――死になさい」

そして――――。

爆炎が、『ルシオラ』を飲み込んだ。

「――――っ!!?」

声にならない叫び。炎にまかれた『ルシオラ』は吹き飛ぶかのように後方へと跳躍し、その身を焼く炎を地に転がることで鎮火した。

「あ……っ、ぅ……！」

喘ぐようにか細く、頼りない呼吸しか出来ないのが苦しくもどかしい。

震える身体に鞭を打ち、睨むように妹紅へ視線をやると。

「……」

妹紅は立ち上がっていた。その身からゆらゆらと炎を靡かせ、暗い罅割れた空を見上げていた。

「私は、本当に、大馬鹿だ」

心の底から絞り出すように、妹紅はそう呟いた。

確かにかつては死を望んでいた。だが、今ではそうではないはずだ。

自分は何をしにここまで来たのか。何の為にここまで来たのか。――――当然、自分が死ぬ為では断じてない。

「……だっていうのに、目の前の餌に動揺して、飛び付いて……」

自らの心を、想いを欺き、誤魔化し、そうであれと思い込んで。

「私は……」

妹紅は俯き、両の掌を見詰め、ぎゅっと握り締める。
「私は――――死にたくない」
そう呟き――――すぐに、頭を振った。
「……違う。〝死にたくない〟んじゃない。私は――――私は、〝生きていきたい〟んだ」
その身に纏う炎が勢いを増していく。
「変わらないと思ってた。見飽きたと思ってた。でも、違ったんだ。色んな物が色付いて見えた。目に映るもの、みんな輝いて見えたんだ……!!」
今までのことが嘘のように思考がクリアになっていく。心が晴れ渡っていく。
身体に染み込んだ毒も、心を蝕んだ毒も、まるでその炎が浄化しているかのように消え去っていく。
「みんなが私を変えてくれたんだ。心の中では死を望んで、表面を取り繕ってただ流されるままに生きてきた私を、みんなが変えてくれたんだ……!」
視線を上げ、『ルシオラ』を見やる。それなりに苦しそうに荒い息を吐いているが、それでも既に立ち上がっている。ただ俯いている為にその表情を見ることが出来ない。
「私はみんなと生きていきたい！　慧音と、輝夜と、永琳と……！　フランと美鈴、小悪魔とてゐ！　鈴仙とレミリアもそうだ!!」

炎は既に業火となり、妹紅を包み込む。
「パチュリーも、紫も、藍も、橙も……！　それだけじゃない、私が出逢った、私を受け入れてくれた幻想郷のみんなと……!!」
――やがて、それは現れる。妹紅が生み出したその爆炎は形を変え、背より噴き出し、安定化する。
そう、その威容は――正しく、不死鳥である。
「そして何よりも――誰よりも!!」
思い浮かぶのはあの時の言葉。彼に心を奪われた、始まりの言葉だ。
――些細なことでも笑って、喜んで。食事を抜いたり寝なかったりもしてたりしますけど、妹紅はそれも全部ひっくるめて今を楽しく生きてると思うんすよ。
――アシュタロスみたいに死にたいなんて思ってたら、あんなに生き生きと笑えないんじゃないっすかね？
「横島と一緒にこの永遠の命を生きていきたいんだ!!」
妹紅は叫ぶ。嘘偽りのない、心からの想いを。
『ルシオラ』はそれを聞き――当然のように感情を爆発させた。
「ヨコシマを永遠の呪いに閉じ込めたお前の言えることかあああぁぁぁーーーーーっ!!!」

『ルシオラ』の身体から魔力が暴風の如く吹き荒れる。まるで嵐のように噴出する魔力は翼にも見え、妹紅と『ルシオラ』の姿はまるで鏡合わせのようである。

二人は同時に飛び出し、真っ向からぶつかり合う。炎と魔力は鬩ぎ合い、打ち消し合い、喰らい合い、？み込み合い――――。

「お前はそれがどれだけ残酷なのか……！　どれだけ苦しむのかを知っているのに……!!　それをヨコシマに押し付けて……!!　ただ自分の為だけに……!!」

『ルシオラ』の言葉が妹紅の心に深く突き刺さる。その通りだ。反論なんて出来るはずもなく、どれだけ横島の命と心を踏み躙っているのかも理解しているつもりだ。

しかし、それでも、言いたいことは一つだけ存在した。

「……仕方ないだろ」

「……!?」

炎の出力が増していく。その強さ、その輝きはもはや今までの比ではなく。

「だって、私は――――」

それはとても我が儘で、利己的で、自己中心的で、残酷で、醜悪で、最低で、最悪な――――。

「私はそれだけ――――横島のことが好きなんだからあああぁぁぁーーーーーっ!!!」

――――愛の、告白であった。

感情の昂りと共に妹紅の霊力が爆発的に出力を増す。それを受けた『ルシオラ』は。

「――――ふふっ」

「――――え？」

「それを言えるようになったのなら……認めてあげる」

すべての魔力を消し去り――――業火の中へと？み込まれていった。

「ル――――」

その身を焼かれ、吹き飛ぶ『ルシオラ』。しかし、その顔に浮かぶのは苦痛ではなく。

「ルシオラぁーーーーーーー!!」

儚くも優し気な、微笑みであった。

「ルシオラ……お前、何で」

地に落ち、倒れ伏す『ルシオラ』に駆け寄り、上半身を抱えるように助け起こす。不思議なことに『ルシオラ』の身体は傷一つなく、綺麗なままだ。気が付けば妹紅も傷が完全に塞がっており、もはや妖毒の影響は感じられない。

『ルシオラ』は閉じていた目を開け、妹紅の目をまっすぐに見詰める。

「……私が知っている強い女達は、みんな強烈なエゴを持っていたわ。溢れんばかりの魂の輝き。……あの人達の強さを支えるもの」

「お、おい……何の話を……？」

「ヨコシマは煩悩が強いわ。誰かを思い浮かべることで、自らを高める。でも、そこに自分は含まれない」

「……」

『ルシオラ』は妹紅の静止を意図的に無視し、語り続ける。必要なことなのだと、伝えねばならないのだと、そんな意志を感じた妹紅は口を噤み、真剣に耳を傾ける。

「ヨコシマが強くなるのはいつだって誰かの為だった。いつかの事件で誰かを見返してやりたい、なんて理由で自分から修行することもあった。でもね、根底にあるのは誰かの役に立ちたいって、そんな思いからだったの」

確かに、それは横島の記憶で見た覚えがある。文珠に覚醒した切っ掛けの事件だった

はずだ。
「誰かの為に強くなる。それはとても立派なことよ。……でもね、それでヨコシマは傷付いてしまう。死地に向かってしまう」
……確かにそうだ。それにも覚えがある。
「う○こ食べれば助かるなら食べちゃうかもしれない、なんて言いながら、結局ヨコシマは自分から危機に立ち向かってしまう」
「お、おう」
今の空気でそれを言ってほしくはなかったが、それ程までに臆病だと公言している男の言動の矛盾を表しているのだといえば、これほど的確なものもないだろう。多分。
「……そうして、ヨコシマはルシオラを助ける為にその身を投げ出した。結果、本当に死ぬところだった」
「……」
「……だから」
ここで『ルシオラ』は妹紅の胸に手を添える。それは心臓の位置。〝心〟があるとされるところ。妹紅と横島が繋がっているところ。
「お前が……お前達が、ヨコシマを守ってあげて。私と違って、お前達ならそれが出来る」

「……それは。それは、アンタが……アンタだって……!!　今までずっとルシオラが横島を……!!」

　横島を守ってきただろう――――それを口にすることは出来なかった。『ルシオラ』が妹紅の唇に指を添えたからだ。

「私はヨコシマの無意識が生み出した、ルシオラのふりをする存在……自らの心を守る為の、仮面（ペルソナ）の一つ。ヨコシマの自己防衛機能」

「……!!」

「私はヨコシマの為になることなら何だってする。たとえどんな手を使ってでも……」

「そんな……そんな、それじゃあアンタは……」

　己の言葉に愕然とする妹紅を見て、『ルシオラ』はくすりと笑みをこぼす。

「お前のすること。お前達がしなければならないこと。それは簡単なこと」

『ルシオラ』は自らの胸に触れる。それは先と同じ、心のありか。

「伝えてあげて。私にしたみたいに。お前の――――お前達の、想いを」

「……」

　何を言うでもなく、妹紅は頷いた。何を言えばいいのかまるで分らない。ただ、『ルシオラ』を思えば思うほどに胸が痛くなる。この痛みは――――。

「今のヨコシマは自分を今まで支えてきた土台が崩れそうになっている状態なの。何せ

自分の中にいたルシオラが本物のルシオラではなく、自分が生み出した偽物の『ルシオラ』だったんだもの。当然と言えば当然だわ。だから、お前達には――――」

「横島を支える。横島を形成する土台が崩れそうだっていうなら、それを支えてあげればいいんだろう？」

「……ええ、その通り」

「……大丈夫。分かってる。分かっていたんだ。分かっていたのに……！」

それはいつかのお茶会で永琳に言われた言葉だ。あの時既に永琳は横島に……自分達に必要なものを示唆してくれていた。流石にこのようなことになるのは想定していなかっただろうが、きっと似たような未来を想定し、自分達にそれとなく教えてくれていたのだろう。

今更悔やんでもどうしようもない。行動で示すしかない。だから、妹紅は改めて宣言する。

「横島のことは私達に任せてくれ。必ず助ける」

想いを受け取った。やるべきことが分かった。ならばやろう。自分達にはそれが出来るのだから。

「……お願いね」

『ルシオラ』が笑みを浮かべ、そう言った。瞬間、『ルシオラ』が、この空間が光を発

しだす。徐々に光は強くなり、じきに目を開けていられなくなる。

……まるで、消えてしまう前の、最後の輝きのように。否、事実そうなのだ。

「行きなさい。ヨコシマはお前達を待っているわ――――ヨコシマと、幸せにね」

その言葉を最後に、光が爆発した。妹紅の意識が薄れていく。と同時に、目が覚めるかのような感覚もある。

――――なあ、ルシオラ。やっぱりアンタは本物のルシオラだよ。

言葉になっているかは分からない。既にこの空間は消えているのかもしれない。それでも、妹紅はそれを言わずにはいられなかった。

――――横島の想いがアンタを生み出したんだろう？　今でもずっと、ずっとアンタを想ってる横島が。

――――だって横島だぞ？　なら、アンタは本物のルシオラと何も違わないじゃないか……!!

その言葉が『ルシオラ』に届いたのかは分からない。でも言わずにはいられない。同じ男を愛した女性に、ただそれだけは伝えたかったのだ。

拳と槍、蹴りと十字架が幾度もぶつかり合う。小悪魔やてゐでは既に目で追うことさ

えも出来なくなった戦闘は今も続いている。
現状は互角。必殺の武器を振るうレミリアであるが、やはり心理的なブレーキが掛かっているのか、その動きは防御や回避に寄っている。
その一方で『横島』は遠慮というものが存在しない。振るわれる拳も蹴りも、その全てが容赦なくレミリアの急所を穿とうと繰り出されていた。
「くっそ……！　何がどうなってんだか分かりゃしない……！」
レミリアに助太刀を制限されたてゐではあったが、本当にレミリアが窮地に追い込まれた時にはその言葉を無視して助けに入るつもりであった。それはてゐだけでなく、その場の全員がそうである。
しかし、レミリアと『横島』の戦闘は既にてゐ達が介在出来る領域を遥かに超えてしまった。誰も割って入れない。唯一対応出来るのは美鈴であるのだが、彼女が受けた一撃は外よりも内に作用するものであり、そのダメージは外見よりもずっと重いものだ。
だが、美鈴は二人の戦闘を目で追えている。いざという時にはその身を擲ってでも割り込むつもりであり、その為にも気力を溜めている。
「――――わっ!?」
「も、妹紅さん!?」
と、今まで沈黙を保っていた妹紅が急に立ち上がった。キョロキョロと辺りを見回

し、レミリアと『横島』が戦っているのを確認すると少し驚いた顔を見せる。その行動はてゐ達からすれば意味が分からない行動だ。まるで今の今まで眠っていたかのようにも見える。

「い、いきなりどうしたのさ妹紅？」

「……」

「も、妹紅……？」

てゐの言葉に答えず、妹紅は横島の恋人達の顔をじっと見つめる。次にまたレミリア達の方へと視線を動かし、うんと一つ頷いた。

「もこ――――ぅわあっ!?!!」

「ちょ――――!?」

そして妹紅は掌をレミリア達に向け――――強力な炎を撃ち出した。

「――――っ!?」

「――――あっつ!?」

炎はちょうど二人の間に撃ち込まれ、分断することに成功する。二人は互いに後方へと跳躍し、妹紅へと顔を向ける。

「あっぶないわね！　いきなり何すんのよ!!」

「あー、悪い。でも私は足が遅いからめちゃくちゃ素早いお前を止めるにはこうするし

かなくてさ」

レミリアの文句に頭を掻いて謝罪する妹紅。今までの緊迫した空気が霧散していくような、どこか気楽な雰囲気を纏っている。

当然いきなりのんきなことを言い出した妹紅に戸惑いの視線が集中する。だが、これから妹紅が起こす行動に、先程のような空気は似合わない。……適度な緊張は必要ではあるのだが、何となくこんな空気こそが相応しいのかもしれない。

「……で、何をする気？　私を止めたってことは打開策があるってことなんでしょ？」

「ああ、話が早いなレミリア。流石は私のお姉ちゃんだ」

「……まさかあの時の冗談を聞いてたの？」

恥ずかしい独り言を聞かれていたと知り、レミリアの頬が赤くなる。ちなみにだが妹紅はそれを聞いていたわけではなく、横島と自分達恋人はやがて結婚する＝フランと同じレミリアの妹になるという認識を持っているのだ。

妹紅はレミリアの前に立ち、『横島』と対峙する。『横島』は襲ってこない。最初と同様、妹紅達の様子を観察している。動きがないのは好都合。妹紅は気合一閃、両頬をパチンと叩く。

「みんな、少しの間だけ、私のことを見ていてほしい」

「何をする気なの……？」

フランが妹紅に問い掛けるが、妹紅はただ微笑むのみ。
――さあ、始めよう。これから行われるのは馬鹿なことだ。
それはとても我が儘で、利己的で、自己中心的で、残酷で、醜悪で、最低で、最悪な――。
――けれど。とても、とても大切な。
――愛の、告白だ。

第九十話
『それはとても我が儘で、利己的で、自己中心的で、残酷で、醜悪で、最低で、最悪な』
～了～

第九十一話『男の子なら』

しっかりと前を見据える。

『あいつ』も同様に私を見つめ返してくる。無表情にも見えるが、何となく身に纏う雰囲気が変化したようにも思える。

私を見る……と言えば、当然だが他の皆もそうだ。レミリアはもちろんフラン達も「何をする気なのか」という目で見てくる。大したことではないし、誰もがやっていることだ。

……とは言え、皆に見られながら、というのは流石に恥ずかしい。鏡を見なくても顔が赤らんでいるだろうことが分かる。

だが今更だ。何せ私は横島とのキスを大勢に見られてしまっている。それに比べたら全然大したことなどいや嘘吐いたどうしようすごいはずかしい。

と、横島が凄いスピードで私に突っ込んでくる。……なるほどなるほど。待ち切れないんだな？　そんなにも私を求めてくれるなんて女冥利に尽きるなあ。（やけっぱちの思考）

横島が右手を突き出してくるのを、私は左手で受け止める。……指が絡んだこの状態、いわゆる恋人繋ぎか!?（違います）

今度は左手が突き出され、それを右手で受け止める。がっぷりよつ、だったかな？あんまり可愛くない名前と体勢だ。それに力比べなんて私じゃ数秒も保たないだろう。

「横島ぁ!!」

だから、私がするのは別のこと。

拳で語り合うなんて出来ないし、言わなくても伝わる……なんていうのは怠慢だろう。

私達のようにパスが繋がっていても、さとりのように心を読めても、それを怠っちゃ駄目だったんだ。

「私は――――」

今からでもきっと遅くない。すべての霊力を……想いを言葉に込めて、声にして届ける。

私の想いを、横島の心へと。

「お前が――――横島のことが、好きだ!!」

――――一瞬、周囲の時が止まったように感じられた。

……みんなが「はぁ？」って顔をしているのが目に浮かぶようだよ……。

第九十一話
『男の子なら』

「横島のことが、好きだ!!!」
　突然の妹紅の告白に、皆は唖然とする。
『横島』は妹紅の手を振りほどき、今度は拳を突き出した。しかしその速度は美鈴やレミリアと戦った時と比べてあまりに遅く、妹紅は余裕を持って回避する。
「初めて会った時から気になってた！　スキマから墜落してきて博麗神社の境内に頭から突き刺さって生きてたり！　全身に負った真新しい傷も既に塞がり始めてたみたいだし！　私や輝夜達と同じ蓬莱人かと思った！」
　大声で出逢った……目撃した？　あの日のことを妹紅は語る。その間も『横島』は休まずに攻撃を繰り出し続けている。だが、やはり遅い。先程までと比ぶべくもなく拙

い。

あまりにも大振りな拳。腰が全く入っていない蹴り。鋭さの欠片も無い肘、膝、手刀。

その動きはまるで――――そう、まるで相手を止める気がないのに、形だけ止めようと下手な茶番を演じているようにも見えた。

ここまでくれば皆も気付く。『横島』には妹紅を止める気が無いのだということに。

「別の世界から来たことを知って！　元の世界に帰れないかもって知って！　それで女の名前ばっか出した時は何だこいつって思っちゃったけど！」

何故かは分からない。だが、妹紅のそれは、『横島』の目的と合致するのであろうことは理解出来た。

そして――――。

「元の世界の話を聞いて！　家族の話を聞いて！　……お前と話してて、一緒に居て！　私は――――私は、楽しかった！　もっと話していたいと思った！

きっと私は、あの頃からお前に惹かれ始めていたんだと思う!!」

――――ようやく、『答え』に辿り着いた者が居た。

「私だって！　私だって執事さんのことが……！　――――横島さんのことが！　大・好き・だーーーーーっ!!」

てゐが立ち上がり、そして叫んだ。その瞳には涙さえ浮かんでいる。どうしてこんな

簡単なことが分からなかったのか。それを悔やんでの涙だ。
「私の悪戯のせいで横島さんはこっちに墜落しちゃって、帰られなくなって！　私に言いたいことだっていっぱいあったはずなのに、それを全部飲み込んで……！　そのうえ私に優しくしてくれて……!!
　私は、横島さんが大好きになったんだ!!」
　涙で視界が滲むも、大声を張り上げ、必死に想いを口にする。その様を見て、聞いて、妹紅の口元に思わず笑みが浮かんだ。嬉しさからだろうか、涙もこぼれそうになってしまう。
　そして、ようやく。――――ようやく、気付くことが出来た。
「わ、私だって……ただお兄様のことが大好きだもん！」
　今度はフランが立ち上がり、そう叫んだ。
「私は……！　ずっと地下に引きこもってたし……！　せ、性格だってみんなみたいに良くないし、ホントの私は、す、すっごく暗い子だけど……！」
　涙を堪えながら、言葉に詰まりながら、それでもフランは胸の内を曝け出していく。
「ずっと、ずっと嘘吐きだった私に……！　壊すしか出来ない私に……！　わ、私にも、何かを、つくれる……創れるんだって教えてくれて……！　それで……す、好きになってぇ……!!」

もはや涙を堪えられず、しゃくり上げて言葉もまともに紡げない。それでも想いを言葉に変えて伝え、届ける。

「フラン様……」

小悪魔はしゃくり上げるフランを見て、その小さな背を支えてあげたいという思いを抱いた。しかし、小悪魔の膝には横島がその身を任せている。

そうして少々まごついていると、横から小さな手が、見た目よりも遥かに力強い動きで横島の身体をその矮躯に引き寄せた。

「レミリアお嬢様……！」

そう。その手の持ち主はいつの間にか小悪魔の隣に腰を下ろしていたレミリアだ。

レミリアはその膝の上に横島の頭を置くと、小悪魔の瞳を見つめ、一つ頷いた。それだけで小悪魔には充分に伝わった。

「フラン様」

小悪魔は立ち上がり、フランを後ろから優しく抱き締める。驚きにその身を一瞬固くするも、すぐにその温もりに身を委ねる。

何せ相手は大好きなもう一人のお姉ちゃんだ。その柔らかな温もりと優しさに、次第に涙も止まる。

「横島さん、私は最初あなたに憧れていました。ほんの僅かな時間でお嬢様に気に入ら

れ、咲夜さんに認められて、あの警戒心の強いパチュリー様がすぐに心を開いたなんて、信じられなかったくらいです」

今までと違い、穏やかに胸の内を語る小悪魔。だが、その言葉に込められた熱は、想いは、誰に勝るとも劣らない。

「いつからか憧れは別の気持ちに……横島さんのことが好きなんだって気持ちに変わりました」

その当時の事を思い返しているのか、小悪魔はほんの少しの間目を瞑る。

「一時は的外れなことも考えました。でも、その時だって、私の気持ちは変わらなかった。そして今も変わらず……いえ。どんどん、どんどんと想いは強くなっています」

小悪魔は息を大きく吸い込む。そしてありったけの想いと魔力を言葉に乗せて、大きな声で叫ぶように告白する。

「私は……私も横島さんが好きです!!　ずっと一緒に居たいです!!」

小悪魔の言葉に触発されたかのように、ついに最後の一人が立ち上がる。

霊的中枢（チャクラ）を全力で回し、まだ震えが来る足に喝を入れ、しっかりと前を見据え、他の三人と並び立ち――――やがて、美鈴は口を開いた。

「正直に言うと、私はいつ・なぜ横島さんに惹かれるようになったのか、全然覚えてないんですよね」

己の未熟によって受けたダメージとは、また別の意味で身体に震えが走る。上手く頭が回らない。それでも自分の想いを口にしていく。

「初めて会った時に優しくしてくれて、それが何か気になって。妖精メイドのみんなと一緒に働いてるのを見て、過去の話を聞いて、それからちょっと無理矢理でしたけど太極拳を一緒にやることになって」

胸に手を当て、出逢いからの出来事を大切そうに話していく。

「模擬戦をしたり、その後妖夢さんの下で剣術を習うことになって、パーティーをしたり、バーベキューをしたり、『あの事件』があって――――えー、っと……あー……」

と、ここで雲行きが怪しくなる。想いの強さに言葉が完全に追い付いていない。

フラン達から心配そうに横目でチラチラと見守られる中、しばらく「あーうー」と唸っていた美鈴は一つ深呼吸をし、「――――せいっ！」と気合一閃、両手で己の頬を強かに張った。

「……あまり長々と難しいことを話すのは私らしくありませんね」

両頬に立派な紅葉を貼り付けた美鈴が、少々涙目になりながらもそう呟く。そして大きく息を吸い――――。

「私は横島さんが好きですっ!!　横島さんが欲しいんですっ!!!」

――――と、そう叫んだ。

その大声に込められた想いと妖力によって空気がビリビリと震える。
心配そうに見ていた皆も今は笑っている。皆、今はそれだけの余裕があった。
何故ならば『横島』がその動きを止めているからだ。妹紅の時点で既に動きが大幅に鈍っていた『横島』であったが、てゐがその胸の内を明かす頃には完全に動きを止めており、皆の思いの丈を聞く態勢になっていたと言っても過言ではない。
故に妹紅も『横島』に手を出さなかった。今も『横島』は俯いて沈黙している。他の皆も、誰も何も話さない。
やがて、『横島』はその身体から力を抜いた。すぐ近くでそれを見た妹紅の顔に喜色が浮かぶ。
「よこ――――」
――――と、名前を口にしようとしたその時、『横島』は妹紅の間合いの中へ深く踏み込んでいた。
「――――!?」
妹紅は反射的に半歩下がって腕を突き出すが、『横島』はその腕を絡め捕り、ハンマー投げよろしく回転して妹紅を投げ飛ばす。
「うわあっ!?」
空中へと放り投げられた妹紅は上手く姿勢を立て直すと衝撃も何もないかのように

静かに着地する。
遠く離れた『横島』を気にしつつ、先程極められた腕の調子を確認する。……特に問題はない。
「妹紅、大丈夫？」
「ん？　……ああ。大丈夫だよ、てゐ」
すぐ隣から掛けられた声に一瞬驚くが、何のことはない。ちょうどてゐ達の所まで投げられただけだ。
五人並んで『横島』を見やる。妹紅を投げ飛ばしてから動きはない。――――否、それもここまでだ。
流れるような動作で構えに入り、気合を入れる為か力強く地を踏みつけた瞬間、「ズンッ」と身体を地に圧し潰さんばかりの重圧が五人を襲う。
「……!!」
幻想郷に墜落することによって手に入れた横島の神魔級の霊力、その完全解放だ。
それを受け、特に魔力・妖力の低い小悪魔とてゐは圧倒的な力の差にその身を圧し潰されようとするが、それでも何とか踏み止まり、無理矢理に戦闘態勢に入る。
例え腰が引けていても、身体が小刻みに震えていても、もはや屈することはない。
それを見た妹紅達三人は笑みを浮かべ、少しでも二人の負担が減るようにと己が力を

全力で解放する。

『横島』とその恋人達五人が睨み合う中で、レミリアとその膝の上で眠り続ける横島は、まるで別の世界に居るかのように静かな時が流れていた。

眠っている横島の顔を見つめるレミリアの目には、慈愛が宿っているように優しい光を湛えている。

「……本当に、どうしてすぐに気付かなかったのかしらね」

横島のやや硬い髪を撫で、レミリアは呟く。

「ここは横島の精神世界、その最奥。……アンタの中心とも言える場所だって分かってたのにね」

レミリアからこぼれる言葉にはとある感情が彩られている。自嘲と、後悔と、反省だ。

「心からの気持ちを、想いを、言葉に乗せてただ伝える。……それだけのこと。ただそれだけのことだったのに、私達は気付かなかった。

――――アンタは、あんなにも簡単に心を開いてくれたっていうのにね」

思い出されるのはこの精神世界の外郭、あのこじんまりとした城（ホテル）のことだ。

ただ呼びかけただけで心の扉を開いた。心を許してくれたのだ。表現方法がいささか特異であったが、もしかしたらそれのせいで気付けなかったのかもしれない。

「あの子たちは、本当にアンタのことが好きなんだって……それは、今ので伝わったは

ず」

レミリアは横島に語り掛けながら、その両頬に手を添える。背を丸めて顔を近付ける。レミリアの視界には眠る横島の顔だけが映っている。

「――――次はアンタの番よ」

頬に添えられた手に少しだけ力が入る。

「あの子たちの気持ちを聞いて、想いを受け取って。それで、アンタはどうするの？　このまま何もしないで終わる？」

そこで一呼吸空ける。

「そんなわけないでしょう？」

――――そんなことは、分かり切っていることだ。レミリアは横島の額に優しく口付ける。

「男の子なら――――格好良く、決めてきなさい」

高まりゆく霊力と緊張。互いに互いの一挙手一投足を見逃すまいと集中を深めていく。

そして、まるでコマ送り映像のように、『横島』が皆の間合いに踏み込んでいた。

八極拳の歩法の一つ、活歩。ヨコシマが好んで多用する歩法であり、それ故即座に対応出来るのはただ一人。

「……っ!!」

痛む身体を押して、美鈴が一歩前に出る。受けるにせよ流すにせよ、今の状態ではそれを完全にこなすのは少々難しい。だが、隙を作る程度は何とか可能だろう。

そう考えた美鈴が更にもう一歩を踏み出さんとしたその時――――一陣の風が吹いた。

「え――――？」

誰かがこぼした言葉の欠片。否、誰もがこぼしたのだろう。『横島』の繰り出した拳は、がっしりと掌で受け止められている。

他の誰でもない――――横島自身の手によって。

誰もが呆けたその一瞬。

「破っ!!」

横島は受け止めた『横島』の手を思い切り引き、バランスを崩して前のめりになった『横島』の腹へ交叉法を乗せた崩拳を裂帛の気合と共に叩き込んだ。

「――――っ!!?」

踏ん張ることも出来ず、『横島』は地をスライドするかのように吹き飛んだ。

それを呆然と見つめる恋人達。と、残心を解いた横島がゆっくりと振り返る。
「みんなの声、ちゃんと届いたから」
そう言い、横島は自らの愛する恋人たちの顔を見つめていく。
「妹紅」
「……うん」
まずは妹紅。
「フランちゃん。美鈴」
「うん……うん……っ！」
「はい……！」
次にフランと美鈴。
「小悪魔。てゐちゃん」
「はい……っ」
「しつじざ……!!　よ〝こ〝し〝ま〝さ〝ん〝……!!」
最後に、小悪魔とてゐ。皆一様に目に涙を溜め、てゐなどはもはや号泣寸前だ。
横島は五人を愛おしそうに目を細めて見つめ――――そのまま流れるような動きで地に膝を突き、両手を突き、思い切り頭を下げた。
「……え？」

誰かがこぼした言葉の欠片。否、誰もがこぼしたのだろう。
それはとても見事な――――とても美事な、土下座である。とても美事な土下座である!!（大事なことなので二回言いました）
「堪忍やー!!　仕方なかったんやー!!　ワイも色々といっぱいいっぱいやったんやー!!」
そしてコメツキバッタのように高速で頭を上下に上げ下げアップダウン。脳がとろけてバターになるんじゃないかという勢いだ。
「堪忍やー!!　ほんまはええやつなんやー!!」
「分かった!!　分かったからもう止めろー!!」
「せっかくいい感じのシーンだったのにー!?」
「でもそんな執事さんも良い……!!　守護ってあげたくなっちゃう!!」
「さすがにそれは理解できませんよ!?」
「ふぐぅ……っ!?　き、気が抜けたからか全身に激痛が……っ!?」
「め、めーりーんっ!!?」
横島を中心にシリアスな空気などどこかに吹き飛ばしてワチャワチャと騒ぎ始める六人。
その喧騒を聞きながら、『横島』はゆっくりと倒れていた身を起こす。

横島から拳を受けたさする。『横島』の色の無い表情が、一つの形に彩られる。

「……」

俯いているせいか、誰にも見えないその表情。しかし、『彼』の顔には、確かに優しげな微笑みが浮かんでいるのだ。

第九十一話

『男の子なら』

～了～